日本戯曲全集
第四十三巻

中村吉藏
島村抱月
秋田雨雀
坪内士行

島村民藏
藤井眞澄

現代篇第十一輯

東京
春陽堂版

「獅子に喰はれる女」初瀬浪子・森律子

「大鹽平八郎」舞臺面（築地小劇場）

「星亭」舞臺面（澤田一座）

「井伊大老の死」　澤田正二郎

「手投彈」の舞臺面

「ムッソリーニ」古川利隆

「山法師」の舞臺面

「女郎蜘蛛」の舞臺面

「霧川」の舞臺面

「城」　藤村秀夫　喜多村緑郎

「孤獨の底の日蓮」の舞臺面

中村吉藏

秋田雨雀

島村抱月

坪内士行

藤井眞澄

島村民藏

日本戯曲全集　第四十三巻　目次

中村吉藏篇

島村抱月篇

坪内士行篇

中村吉藏篇

史劇

井伊大老の死

（五幕十場）

登場人物

井伊掃部頭　大老
菊千代君
徳川齊昭　前中納言
同　慶篤　中納言
同　慶勝　大納言
間部下總守　老中
久世大和守　同
太田備中守　同
松平和泉守　同
安藤對馬守　同
松平慶永　越前守
長野主膳　大老御用人
宇津木六之丞　大老御用人
田中雄助　同
小河原秀之丞　近習
松平信茂　左兵衛督
板倉周防守　寺社奉行
石谷因幡守　町奉行
頼三樹三郎
吉田寅次郎
梅田源次郎
金子孫二郎
有村次左衛門
關鐵之介
齋藤監物
佐野竹之介
左官屋利八
丁字屋吟三
仙英和尚
昌子の方　井伊正室
靜子の方　側室
耀鏡院　大老義母
俊操院　同　姉
お瀧　遊女
お朝　同

其他、井伊家々臣、侍女、能樂師、水戸浪士、手代、お茶坊主、妓樓主人、樓婢等大勢

場所

江　戸
時　代
安政五年六月より萬延元年三月まで

序　幕

押掛登場

時は安政五年六月廿四日、江戸城内大廊下、上の間、一方には大きな床の間が附いて、いぶし銀のやうに古寂びた襖の大襖には、臥龍の松が墨痕鮮やかにくねつてゐる、欄間、敷居、葵の紋散らしの大衝立で隔てられた長廊下には、備後表の薄縁が敷かれて、そこから突當りの曲り角は、繪具の剝げ落ちた極彩色の密畫が時代の附いた神代杉の板戸の木理の現はな上に、浮上つて見えてゐる。

○城内が何んとなくザワ／＼して、詰番の侍、茶坊主などが、周章てたやうに廊下を往來してゐる。

茶坊主甲　何事でせう？　お目附衆が顔色を變へて、出たり入つたり、周章て込んでらつしやるではありませんか？　マサカ、オロシヤやイギリスの黒船が、戸迷ひしてお濠端へ乘り上げたつて譯でもありますまいな。

茶坊主乙　さればさ、あまり御營中が騒々しいので、私も一寸と様子を伺ひに行きましたが、黒船の持込んだ大津浪かと思つたら今日のは水戸、尾張から揺れッ返しの大地震ぢや、イヤ、これぢや内も外も今にひつくり返つて了はなけや、治りは附きますまい、大變な時勢になりました。

茶坊主甲　何に？　ぢやア水戸、尾張から向不見な浪人組でも押駈けて來ましたか？　一つ橋様の西の丸入がツイになつたのを無念にでも思つて？

茶坊主乙　浪人組どころか、親玉ぢや……水戸前中納言様御親子と、尾張大納言様と、御三方打揃うて不意の御登城です、しかも水戸前中納言様は餘ッ程の御逆上せ方で、あの異人嫌ひが、お白髪はまるで洋銀を逆さに吊つたやうにそゝけ立つてゐる、御顔の色は舶來の猩々緋とでも申上げたい、お眼はビードロのやうにピカ／＼光つて「今日こそ掃部頭に腹を切らせずには置かぬ」とそこら中破れ返るやうな雷聲で喚き立てなされるので、皆は耳に蓋をしてブル／＼慄へてゐますよ。

茶坊主甲　イヤ、ハヤ、それは／＼、地震と雷と親爺さんが一緒に殿中へ轉がり込んだ譯ですな、一體何うなる事だらう？

茶坊主乙　例の假條約御調印で、御大老様が御生命の縮むほど胸をお痛めなされた處へ公方様はあの御容體、そこ

へ持て來て「詰腹切らせる」と凄まじい權幕で、御三家方から御難題を持ち込まれちや、何んな豪傑でも堪つたもんぢやありますまい……世も末ぢやな。

茶坊主甲　全く然うぢや……世も末ぢやな。

お目付駒井右京　……(出て來り) コレ、皆、さう暢氣さうに立談してられる場合ぢやない、今こゝへ水戸、尾張の御三家方が御越しになる、お待遇の用意に手ぬかりのないやうにするが善いぞ。

茶坊主甲、乙　ハ畏りました。

右京　前中納言様はお氣六ツかしい方だから、そこらに塵つぱ一つ落ちて居ても、目附役の粗匆になる……お掃除は隅々までよく行屆いてゐるかな?

茶坊主甲　御覧の通り、疊表は宛で鏡のやうでございます、その邊は御心配なされますな。

茶坊主乙　イヤ、これは〳〵、何時の間にか蜘蛛めが、その隅へ網を張りよつた、チヨツと箒の先ではたき落して置きませう。

右京　何に、蜘蛛の網?……あそこまではお眼も屆くまい、それにもう此處へお越しになる矢先、箒など持ち歩いては却つてお目障りだ、そのまゝにして置け、私は御案內に立つて、それから御用部屋へこの事を申上げねばならぬ。(出て行く)

茶坊主甲　さア愈々大事だ、お城に血の雨でも降らねば善いがな……。

茶坊主乙　空には毎夜、箒星の現れるこの節の事だから、血の雨も降りや血の風も吹くか知れませぬ、唯神風丈は京都から何度お祈りの使が立つても、モノにならぬと來てますから、最早世も末ぢや。

茶坊主甲　眞實に、又しても口癖のやうぢやが、世も末ぢや、それもその筈でせうかい、もう神代からは何千年も隔つてゐますものな。

「假條約へ調印したのは正に違勅ぢや、今日こそ掃部頭に切腹させでは退出せぬぞ」(と大聲に怒鳴りながら興奮の色見ゆる水戸前中納言齊昭を先頭に、尾張大納言慶勝、水戸中納言慶篤、麻裃姿で、駒井右京に案內されて登場。)

水戸前中納言　掃部頭に詰腹を切らせずには置かぬ、不屆至極だ。(罵りつゝ上座に就く、尾張大納言、水戸中納言はその左右に着座)

尾張大納言　今日は假條約調印の儀で、至急に老職共へ尋ねたい仔細があつて、例外れの登城をしたのだ、御用部屋へ左樣申し通じてくれ。

右京　ハツ、畏りました。

水戸前中納言　天朝のお許しもないのに、大老職たる掃部

頭が周章てくさつて專斷な振舞ひをするとは言語道斷ぢや、黒船が左程恐いのか、夷狄等がそれ程怖しいのか？　さて／＼徳川幕府も末ぢや、三河武士の子孫も今はもう腰抜け揃ひの癖に、何時まで天下の重い政道を脊負つて立たれると思うてゐるのだらう？　掃部頭に予が面前へ出て、潔く腹切れと云へ、赤い血が出るか、それとも鋸屑が飛び出すか、斉昭が検分してやらう。

中納言　右京、父上は酷くお憤りなさつてる上に、この頃お耳が少し遠いので、邊り憚らぬ御高聲ぢや、汝等も嘸聞辛らいであらうが早速老職共が此處へ來てくれるやう、萬事よろしく取計うてくれい。

右京　ハッ、委細畏りました、御免蒙ります。

（退出。）

（お茶坊主等、恐る／＼茶を捧げて行く。）

水戸前中納言　汝等は殿中へ御奉公してゐるのぢやから、夷狄に脅かされて港を開くといふ腰抜役人等のかげ口も利けぬであらうが何うぢや？　内々は、攘夷を至極尤もぢやと考へてゐるやうな、攘夷論の味方であらうな、民の聲に天の聲が聞えるのぢや、遠慮なく云つて見い。

茶坊主甲　（廊下へ下つて一禮）ハッ、……お言葉下されて忝うございますが、私共には一向分りませぬ事で……。

同乙　私共は、唯お茶を立てゝ居りましたら、それでお役目が濟むのでございますから。

水戸前中納言　（耳へ手を當てゝ）何んと云つてゐる？……勿論、攘夷でなければならぬと云ふのであらう、さうでなくてはならぬ、苟も日本の國に產れて、日本の國の粟を食んでゐる者が、禽獸のやうな夷狄の奴等に媚び諂らうて、その言ふがまゝに港は開く、土地は貸す、今に邪宗門をひろめられて、この神國を彼等が奸計の罠にかけて引浚らつて行かうとするのを、黙つておめ／＼見てゐられよう筈はない、汝等に限らず、上は大朝を始め、天下の萬民は悉くこの斉昭と同意見ぢや、それが當前だ、唯、幕府の要路に當る愚かな役人共、——殊にあの掃部頭の了見が底抜けに間違つてゐる、彼は日本といふ大船を、危い暗礁に乗上げさせる大それた謀反の發頭人ぢや……國賊ぢや、……亂臣ぢや、今日こそ腹を切らせいで置くものか？

尾張大納言　イヤ、日本といふ大船を暗礁に乗上げさせる計りではない、天朝のお許しも待たず、假條約に調印したのは、やがて東照權現以來三代の祖法を破り、幕府の礎を搖かせた天地も容れざる大罪人でございます、祖先、直政、直孝が幕府無二の忠臣であつた昔を忘れて、その子孫は幕府を賣り、剰へ國を賣る、このまゝにして置いては不祥事ながら、今にこのお廊下にも、草が生え

ませう。

水戸前中納言　私の老眼で善くは見えぬが、あそこに蜘蛛の網がかゝつて居るではないか、中納言さうではないか？

（茶坊主はブルブル慄へてゐる。）

水戸中納言（さあらぬ體に）イヤ、蜘蛛の網ではございませぬ、雨もりの跡と見えます。

水戸前中納言　蜘蛛の網ではない、雨もりの痕？　雨もりなら猶惡い、早速普請奉行へ云附けて修覆させるが善い、今の老職共は、內も外も手ぬかり許りで、一向に眼はしが利いて居らぬ、自分等の威勢さへ振へたら、外の事は何うなつても善いと思つてゐるのか？……それもその筈かも知れぬ、掃部頭は根が禪坊主になり損ねた男だからのハヽヽ。

尾張大納言　ハヽヽ、佛をいぢる了見で、國家をいぢられては堪りませぬな。

水戸前中納言　私は國家の爲めに、片ツ端からその佛を毀したのぢや、寺々の釣鐘まで鑄潰して大砲を造へたのぢや、お庇で一旦重い咎は蒙つたが、私が心の誠は天朝にまで通じてゐる、イヤ掃部頭と、私とは、萬事そりが合はぬのもその筈かハヽヽヽ。（苦笑）

右　京（出で來り）御用部屋では只今、少々御取込中でございますが、程なくこれへお見えになるでございませうから、今、暫らく御猶豫を……。

尾張大納言　取込中とは何うしたのぢや。

右　京　ハ、何事か御會議の最中でございます。

水戸前中納言　會議中ぢや？……フン、老職共は臆病風に誘はれてゐるのではないかい？　何んなら彼等は相手にせぬ、直々、將軍家御前へ出て我々の意見を申上げる。

右　京　イヤ、唯今、御目通りをなさるでございませうから、何卒、……今暫の御猶豫を願ひます。

（午の刻の太鼓がドン〳〵鳴りひゞく。）

（お茶坊主等は、右京に眼配せで、片隅へ招き。）

あの、御三家樣方へ午の御膳を差上げるお支度をせねばなりますまいか？

右　京　されば、それも一つ、御用部屋へ伺つて見よう。

茶坊主丙　……、松平越前守樣御登城、下の間にお控へになつて居らせられます。

水戸中納言　越前どのが御登城なされました。

水戸前中納言　何に、越前が？……（大聲に）越前！、越前！……。

松平越前守（出で來る）一足御遲れしました、實は今朝六つ時、櫻田の邸へ出かけまして、容易ならぬ違勅の一件、又さし迫つた西の丸の一件を、嚴びしく詰問しまし

たが、相手は例の悪度胸で、何處までも剛情を張通しまして、此方の言分はいつかな、耳にもかけませぬ、登城時刻が來たといふのをきつかけに、私が引留める袖を振り切つて、奥へ逃げ込んで了ひました、殘念ながらつぎ穂もなく輿を引返へさせる途中で、お揃ひの御登城と聞きまして、私も直ぐさま、參上した次第で、早朝から汗の流し通しでございます。

尾張大納言　それは〳〵御大儀でした、……また殘暑もきびしい時節柄、彼と云ひ、此と云ひ、端から國難が湧き上つて、行末何うなる事かと案じつゞけますと、此頃は夜も落々寢られませぬ、昨夜なんか、一睡もせんで、氣計り嵩ぶらせて、たうとう一番鶏を聞きました、お互に一刻も安閑としては居られませぬ。

松平越前　左様でございますとも、幕府が起きるか、倒れるかは、唯、この一刻の瀬戸際に迫つてゐます、身命を拋つても、この難所を乘切らねばなりませぬ。

水戸前中納言　ヤ、越前が見えて、大きう心丈夫ぢや、聞けば西の丸の一件も、一つ橋慶喜を差措いて、紀州の菊千代に定めたとやら、悧發かは知らぬが、漸つと十二の子供に、この凄ましい颶風にぐら〳〵搖れ返つてゐる徳川の天下が何んで治まるものか？　畢竟、大奥の女中どもと、井伊とが内通して、國家の政道を彼等の自由勝手に弄ばう下心ぢや、外からは虎狼のやうな夷狄が爪を磨いで隙を窺うてゐる、内では女子供と腰拔武士とがままごと政治でのらくら日を暮らしてゐる、これで幕府が滅びんで何うする、イヤ、この日本が滅びんで何うするか？　（激昂して聲が次第に高まる）

水戸中納言　父上……父上……（袖を引張つて注意する）お聲が高うござります……御用部屋へ筒拔でございます。

水戸前中納言　何に、御用部屋へ筒拔ぢや？　聞えたがよい……聞くがよい……聞かせる爲に云ふのぢや、國家を何んと思ひ居る？　天朝を何んと思ひ居る？　徳川幕府を何んと思ひ居る？

松平越前　老職共は何うしました？　御目通りをするでございませうな？

尾張大納言　老職共が出て參らねば、直々公方家へ面謁えして、御趣意を伺ふ外はありませぬ、今日こそ一同、決心の臍を固めて居ります。

松平越前　然うあるべき事だと存じます。

右京　（立出でゝ）ハ、御用部屋からは、もう追つ付御越しになりますから、今暫らく御猶豫を願へとの事でござります。

水戸前中納言　（語氣鋭く）何を愚圖々々して居るのか？

腰抜共が、……定めて臆病風に取附かれて、クドクド小田原評定許りやつてゐるのであらう。彼等に構はず、公方家の御前へ出ようか？

右京　イヤ、もう只今、これへ御越しになる筈でございます、何卒、今暫らく御容赦願ひます。

水戸前中納言　天下國家の一大事ぢや、何時まで猶豫してゐられると思ふか？……それともあの掃部頭が切腹の身支度にでも手間取つてゐるのかい、ハヽヽヽ、別に念の入つた身支度も入らん筈ぢやが……。

水戸中納言　父上……父上……。（と制する）

尾張大納言　越前、まア、此方へ……申談じて置く事もあらう。

松平越前　では御免蒙つて……。（進み寄つて、密議する）

（茶坊主、右京の袖を引いて、片隅へ行く。）

茶坊主甲　御晝飯の用意は何う成りましたか？

同乙　私共、あまり氣が利かぬやうで、後でお咎を蒙つては困りますが……。

右京　（耳語く如く）イヤ、御大老は持つての外の御氣色で、不意に登城せられた方々へ、晝飯の用意など御無用と仰るのぢや、皆様は引留めてゐられた様ぢやが、それを振り切つて、御自分で今、此所へ御出でになる樣子ぢや、あの御氣象だから、ナカナカ六ツかしい、何うなる事かと、私はハラハラしてゐる。

（お茶坊主等も慄へてゐる。

（井伊掃部頭を先頭に、間部下總守、久世大和守、太田備中守、松平和泉守、列を正してそこへ出て來る、會釋。）

井伊　御三家方お揃ひで、不意の御登城と承り何か火急の御用かとは存じましたが、御用部屋取込中、御待たせして失禮いたしました。

水戸前中納言　（威猛高に）火急の用事は云はずとも知れて居らう、勅許をも待たず、何故一存を以て假條約に調印したか、東照權現以來御代々、天朝御尊崇の深い思召を掃部頭は足蹴にかけたのぢや、それが爲めに將軍家は御忠孝の道に悖られ、天下の人心も穏でない、このまゝでは國家も幕府も何時滅びるやら知れぬ、此の恐ろしい災の火源は皆、掃部頭始め老職等の專斷から出たのぢや、斯程な大罪を犯しながら一刻半時でも平氣でその職に居すわる事が出來ると思うて居るのか？　何うして申開きする？　さア、言譯があれば聞かう？

井伊　（冷靜に、ヂロリと見て）その御申開もいたしませうが、松平越前守どのは御一族とは申せ、御三家方と御同席は格式に背きまする、下の間へ御入りなさるのが至當でございませう。

尾張大納言　今日は格別の場合だから、三家たる我々が同席を頼んでゐるのぢや、差支は無い。

井伊　憚乍ら、此處は公方家の大城でございます、御三家方が御差支はなくとも・大城の掟は掟でございます、越前守殿、何卒定まつた御席へお就き下さい、お目附番、御案内を……。

水戸前中納言　三家が差支ないと云へば、差支無いではないか？

井伊　左様には參りませぬ……では久世大和守殿、越前守殿と御應對を願ひます。

久世大和守　ハ……承知いたしました、では越前守殿、何卒下の間へ御通り下さい、私が御應對申しませう。

松平越前　（止むなき體）……では御免蒙ります。（退場）

水戸前中納言　（一層焦き込んで）掃部頭、違勅の罪は何うして申開きをするか？　唯謝罪つた丈では相濟まんぞ？　さア聞かう？

井伊　（落着いた調子で）掃部頭は決して違勅とは心得て居りませぬ、成る程、假條約調印の儀はまだ勅許を得た次第ではございませぬが、天朝の御主意は已に先年阿部閣老の時代に、下田條約を結びました砌にも、お示しなされた通り、元々、御國體に疵の附かぬ樣にとの事でございます、今更、申すまでもなく我國は寛永以來、切支丹邪宗門の一件から多年鎖國で押通しては來ましたが、その以前は現に幕府御公許の御朱印船が、萬里の波濤を乘越えて南蠻諸國へ交易に通うてゐた例もございます、抑も有無相通ずるは天地の大道で、天地の間に在つて天地の道に違ふはつく〴〵考へれば空恐ろしい事ではございませんか？　世界の地圖を披いて見れば日本の外に幾つも國があります、その國々が若し理不盡に、我國へ戰を仕掛けに來たのなら、勿論、不倶戴天の敵に相違ございませんが、さうではなく、わが國にあり餘る物産を積んで行き、ないものを向から運んで來て、互に貿易を開かうと云ふのでございますから、所謂、一天四海皆兄弟の途が始まる譯ではございませんか？　これも移りゆく時勢の潮先で、最早それに逆うて世界の田舍者になつて居る事は出來ませぬ．又何時迄も田舍者であつてはならぬのでございます……。

水戸前中納言　（焦々しく遮つて）イヤ、私はそんな紋切形の閉港論など聞いてゐるのではない？　違勅は何うぢや？　違勅の申開は何うするのぢや？

井伊　イヤ、只今、それを申してゐるのでございます、それも是までのやうにその日・その日の風次第で吹流されてゐた帆前船許りの時世なら兎も角も、今日蒸氣船が發明せられて、人の力が天の力に打勝つ不思議な世界にな

りましてからは、今までは十重廿重に我國の四方に穿り廻らせた要害無比の外濠のやうに賴み切つてゐた荒海の波濤が、却つて四方の異國と我國との間を繋ぎ合せるに此上もない便利な、交通自在な大道路と化りました、斯樣な時勢に國體に疵の附かぬ樣にする唯一つの手段は、今、天下の浪人等が悲憤慷慨して前後も辨へず、口にしてゐる鎖港攘夷の空論などに耳を藉す事ではございませぬ、斷じて開港の二字に在ると信じます。

水戸前中納言　（耳を傾け）　何に、鎖港攘夷が老人共の空論ぢやと？

松平和泉守　浪人と申されたのでございます。

水戸前中納言　浪人等許りの空論ではない、この老人も、鎖港攘夷こそ國體に疵の附かぬ唯一つの途だと思つてゐる、その事は已に書面でも一應示して置いた通り、行々は開港も餘儀無い勢かは知らぬが、こゝ十年と二十年は、まだ／＼然うした早まつた事をすべき時ではない、第一、天下の人心が落着かぬ、加之夷狄等に迫られて、蒸氣船や大砲が恐さに周章てゝ港を開くとあつては國辱ぢや、三代將軍以來の祖法を革めるには、それ相當に幕府の面目の立つ理由が無うてはならぬから、內は永年の太平に慣れて惰弱になり切つた武士共の眠氣を醒ましてやる爲めに、外は元寇以來一度も外夷の侵入を受けた例のない我神國の威光を輝かさう爲めに、こゝで一度戰を開いて、夷狄を打攘つて了ひ彼等が力と賴む蒸氣船を燒盡し、大砲を奪ひ取つてその心膽を寒からしめてやるのぢや、時宗程大膽で、斷じて行ふ者さへあつたら、伊勢の神風は今でも吹かう、それを危がる腰拔武士共には臆病風が附いて廻る、そんな輩は早々退身するのが、幕府の爲めでもあり、又國家の爲めでもある、さうして一旦夷狄を擊ち退けて、我神國の恐るべき事を彼等の生身に刻み込んでやつた上で、時宜に適つた政道を行ふのが國體に疵を附けるなといふ御主意を立てるといふものぢや。

井伊　憚りながら時宗の時代と、今日の時勢とは一つ口には申されますまい、假令時宗を黃泉から呼返しましても、昔ながらの伊勢の神風を賴むか何うか存じませぬが、已に京都からの御內諭に隨ひまして、全國の大小名に和議か、戰か、それ／＼意見を尋ねました節にも、進んで戰を主張する者は唯の一人も居りませぬ、將軍家も素より血を見る事は好んでゐられませぬ、イヤ、本來、人間は血を見る事を好むものではございますまい、……尤も在國の大小名の中にまだ十に一二は意見書を差出さぬ向もありますから、それを取纏めて天朝へ上奏せうと思うてゐる矢先に、英佛の軍艦數十艘、淸國へ攻め寄せ

て、天津を燒拂ひ、北京城下の盟までさせたといふ火急の報知がありまして、ハルリスの所說が至極道理と思はれますので、隣國との戰に勝つた英佛が、勢に乘じていろんな難題を持込んで來る日をあつけらかんと待つて居ずに、先つアメリカと對等の立場で假條約に調印した次第でございます、十年、二十年は愚か、最早一日も延ばす事の出來ぬ、又一日も早める事の出來ぬ、云はゞ我國の運命と天から定まつた日に、掃部頭が責を一身に負うて調印したのでございます。

尾張大納言　その英佛の軍艦數十艘といふのはかけ聲ばかりで、形は愚かまだ煙さへ見えぬではないか？　かけ聲や影法師位に脅かされてハルリスの口車に乘せられて了ひ、勅許のない調印をしたのは、何んとしても申開きは立つまい。

水戸前中納言　英佛の軍艦數十艘が攻め寄せて來たら、それでこの神國が滅ぶとでも思つてゐるのか？

井伊　勿論、卽座に國が滅びもいたしますまい、併し、淸國のやうに或は要所々々の土地を割いたり、或は償金の抵當にいろんな難題を持かけられましては、長い病の根を國の臟腑の中に植ゑ付けるのも同前で、後日の災が測り知られませぬ、御三家方は先刻御承知でもございませうが、文化文政以後、國費は唯もう嵩張る許りで、御金藏の錠は錆付いて了ひました、殊に蝦夷地の一件この方は、諸國の大小名も俄かに海防の費用に追ひまくられて、隨つて人民等も疲弊し盡して居ります、現に江戸灣の入口の要害、房州の海岸すら十里の間に僅か四十挺の大砲しか配つてありませぬ、品川の臺場等は最早雀の案山子にもなりますまい、斯樣な手薄な防禦の有樣で、この儘若し外國と戰を開いたら敵は飛鳥のやうに出沒自在の蒸氣船を操つて、何處の濱邊へでも、何處の灣端へでも翔け込みませう、全國は瞬く間に黑焦げの燒土になつて了ひ、萬民の血は無益に流され、婦女子は辱められ、幼子供までむざんに殺されませう、加之、不祥ながら江戸の大城まで火焰の中に燃え崩れるかも知れませぬ、恐れ多いが九重の宮居ですら、夷狄の大砲の彈は眼を持つては居りませぬから、避けては通りますまい、素より我我日本男子は、刀と刀との搏合なら我の一人で、彼の十人に敵しもしませう、一騎打の戰なら勝つても負けは致しませぬ、乍併、敵が器械の力で向つて來る戰に、わが同胞を素裸體で、その前に曝し物同樣にするのはあまりに不仁無慈悲だとしか思はれませぬ、敵の軍艦の煙が見えてからではもう遲うございます、その影も形も見えない中に、私は早く血を見ぬ覺悟を定めました、拔かぬ太刀の功名が眞の武士道かと心得ます、そして之が又、大

朝の民を慈み給ふ御精神かと存じます。

水戸前中納言　天朝の御意は、假令、即刻攘夷と仰せ出でが無くとも、開港は御許しなされぬかも知れぬ、開港が御許しないとすれば夷狄は矢張、亂暴を働かう、さすれは所詮戰を開かねばならぬ事になる、掃部頭は開港の責を一身に負ふとの云條ぢやが、では開戰の責も亦一身に負はねばならぬ筈ではないか、何うぢや？

井伊　天意を推し測るは恐れ多うございますが、神武天皇以來、凡て下萬民を慈み給ふ大御心こそ我國の政道の流れ出る源で、萬代不易と心得ます、現に御存知の通り、神皇正統記、嵯峨帝の條にも「君は尊くましませど、一人を樂ましめ、萬民を苦むる事は天も許さず、神も幸せぬ謂れなれば、政の可否に從ひ、御運に通塞あるべしとぞ覺えぬる」とございます、萬民を苦める鎖港論など何うして御勅許がありませうか？　若し左様の事があつたら、それは君側の奸臣輩、天日の光を遮るものでございます、左様な奸臣輩は國家の爲め、又天朝の爲めに、掃部頭は容赦いたしませぬ。

水戸前中納言　何に？　若し左様な事があつたら何うするといふのぢや？

尾張大納言　天朝に向つて、まさか刀は拔けまい？　それとも左様な悪逆まで働く氣か？

井伊　君側を淨める爲めには萬止むを得ません、場合によれば奸臣輩を斬つて捨てねばならぬかも知れませぬ。

水戸前中納言　何に、奸臣輩を斬つて捨てる？……でも掃部頭は、先刻血を見るのを好まぬと云つたではないか？　夷狄の血を見るは好まぬか、我同胞の血を流すのは忌はぬといふのか？

井伊　大の蟲を助ける爲めには、小の蟲を殺さねばならぬ場合も出來しませう、血を見ぬ爲めに血を見なければならんのならそれも萬止むを得ませぬ。

（一座、シンとして暫らく言葉もない）

水戸前中納言（思ひ出したやうに、大聲で）越前を此席へ呼ばう……越前！……越前！……越前！……。

井伊　越前守は家柄の者ではございますが此席へ呼び入れる事は成りませぬ、それは先刻御斷り申しました、久世大和守が其爲めに彼方へ參つて居ります。

（松平越前守、廊下へ出て來る。）

松平和泉守　矢ツ張御別席で……。

（越前守は悄々と下つて行く。）

尾張大納言　さて西の丸の一件ぢやが、將軍家にお世嗣がない以上、同じ事なら年長者の、而も賢明の聞えの高い一橋慶喜殿を西の丸へ入れるのが、天下の爲めでもあり、又朝廷の御意とも覺える、一橋殿を立てた事を奏上

して、天意を慰め奉つたら、條約調印の勅許も存外滯りなく下さるかも知れぬ、然う取計うては何うぢや？

水戸前中納言　（微笑）一橋慶喜は私の息子ぢやから、親の口から云ふのも異なものぢやが、彼は確かに天下を治める器ぢや、今の幕府を救ふものは、彼の外には無い、これ丈けは、誰の前でも斷言が出來る。

井伊　西の丸の事は、將軍家の御一存で決せられるのが至當の儀で、下より上を選ぶ事は成りませぬ、それは支那風と申すもので、我國風に合ひませぬ、若し一橋殿が年長賢明の君であるから、西の丸へ御入りとなりましたら、恐れながら當將軍家は自然御隱居遊ばさねば成りますまい、幕府の老職たる者が、左樣の事を取計らふ譯には參りませぬ。

尾張大納言　（激しき色）では直々、將軍家の御前へ出て申上げるまでぢや。（立かゝる）

間部下總守　暫らく御待ち下されませ……將軍家は此程から御中りの氣味にあらせられて、御臥せり遊ばしてゐられます、不意にお驚かせ申しては相濟まない事と存じます。

井伊　押しての御目通りはお控へなされて然るべき事と存じます、殊に西の丸の儀は已に京都から勅定も屆きまして、紀州菊千代君と定まりました、明日は公沙汰になされる手筈になつてゐる矢先、今更異議を申立てられるのは甚だ畏り多い事と思ひます、よく御勘考下されい。

水戸前中納言　（語氣荒く）假條約調印はまた勅許も下つてゐない、その勅許の下るまで、西の丸の件も今暫らく表沙汰にするのは猶豫して、幕府は叡慮の意を奉ずるが善からう、それが當然ぢや。

井伊　條約調印の事は已に申述べた通りの次第でございますから、勅許の下るのは少しも疑ひを容れませぬ、それまで西の丸の件を伏せて置いては、それこそ却つて天意に悖きまする、明日の公表は最早一日も延ばす事は出來ませぬ。

水戸前中納言　では早速、上使を出して假條約の事を上奏するが善い、何ぜ愚圖々々してゐる。

井伊　イヤ、その儀は已に宿次奉書を以て、上奏の手續をいたして居ります。

水戸前中納言　宿次奉書では寛怠だ、大老、老中の中、誰か上京して然るべきではないか。

井伊　その儀も、間部下總守、遣はさるべき御内定で、明日にも仰せ付けられる御含みでございます。

（一座暫し沈默。）

水戸前中納言　越前は人望もある事だから、大老職に申付けられるやう取計うては何うぢや？　天下國家の爲めお

や。

井伊　（冷笑）その儀は私の同役の事でございますから、私からは何んとも御答は致しかねます。

太田備中守　掃部頭殿、大老職として日夜、肝膽を砕いて忠勤を勵んで居られます矢先に、左様の計らひは御無用かと心得ます。

水戸前中納言　それもさうぢやが、今、日本國中は鼎の沸き返るやうな騷ぎの最中ぢや、幕府の礎も何う動かうやら分らぬ、掃部頭が一人でこの難局を支へるより、二人で寄合つて、力持した方がまだ安心がならうではないか。

間下部總守　御尤のやうでもございますが、東照權現に深い御思召があつて、大老、老中の制限をお立て置なされた事かと存じます、時勢に從うて祖法の變革も已むを得ない事もございませうが、假令御連枝御一門に賢明の方が出られたと申して、御三家を御四家にも、御五家にも成される事は以つての外かと思ひます、大老、老中もその通り、御譜代始めお旗本八萬騎が賢明のお揃ひで、我も我もと大老、老中の御推薦ごつこでもやり出されましては始末が附きますまい。

（一座、不思大笑する。）

水戸前中納言　（又思ひ出したやうに）越前！……越前！……。

久世大和守　（出て來り）越前守殿は最早御退出なされました。

水戸前中納言　然うか？（と顏を見合せる）

水戸中納言　（囁く如く）御退出なされては……？

水戸前中納言　ウム……尾張殿は最早御申分は……？

尾張大納言　いづれ又改めて……今日は退出する事にしませう。

水戸前中納言　然うか……何しろ安政と年號が變つて以來、大地震やら大火事やら、大津浪やら疫病やら、不祥事ばかり續いてゐる、この頃は夜な夜な彗星まで出てゐるではないか、上を見ても下を見ても天變地妖で身の毛が竦立つ許りぢや、これも畢竟政道を預る者が惡いから、神々がお怒りなさつてるのぢや、皆謹んだが善からう、將軍家へもさう申上げろ。

水戸中納言　いづれも御大儀であつたな、御前へはよろしく申上げてくれ。

（會釋して三人退出、一同は廊下先まで見送る。）

間部下總守　（座に返つて）さて〳〵何うなる事かと酷く心配しましたが、掃部頭殿の天晴れの御見識と、水も溜まらぬ御雄辯で、折角勢込んで押駈けられた前中納言もスッカリ氣を吞まれて、議論の陣立もしどろもどろに崩

れて了ひ、大敗軍の總退却といふ僞體でございましたな、一まづ胸を撫で下しました。

太田備中守　大老が國家を思ひ、又幕府を思はれる誠心の前には、刃向ふ敵がございませうか？　前中納言始め御三家方は振り上げた刀で却つて、御自分の體を傷けて、むざ／＼下城なされた譯でございます。

井伊（思案深い顏色で）　イヤ、前中納言殿仰せの通り、私一人が腹を切つて、それで濟む事なら却つて氣安うございますが、今の場合はさうした機會も失ひました、御三家方は何のお土産もなく、手持無沙汰で歸られたが、あのまゝでは濟みますまい、此から掃部頭は一思ひに腹を切るよりも苦しい目を見なければなりますまい、かげ腹を切つて、生きながら苦しい長の月日を送らねばならぬ事になりませう。

間部下總守　掃部頭殿御一人に、さうした苦しい目は見せますまい、我々御用部屋の者一同は心を一つにして、及ばずながら御手助けをいたしませう。

松平和泉守　いかにも、下總守殿の仰る通り、一同、如何なる苦みをも共に致しませう。

太田備中守　勿論の事でございます。

駒井右京（進み出でゝ）　大老樣、今日の御問答は恐れながら東照權現の御再來かと計り御見上げ申しました。御顏色は輝き、御辯舌は鋭く、誠に御威光が邊を拂うて傍で聞いてゐる者は自づと頭が下りました、幕府の礎も動ぎない兆と、御慶び申上げます。

井伊（笑顏で）　難有う……東照權現は恐れ多いが、祖先、直政、直孝の神靈は、時々憑り移られるかも知れぬなハヽヽヽ。

（殿中騷々しい。）

間部下總守　何事であらう。

右京　奧のお廊下先と思はれます、見て參りませう。

（茶坊主等もつゞいて起つて行く。）

太田備中守　まさか、今度は大奧の方から拔駈けの推參登城をする者もありますまいが……？

間部下總守　そんな不埒者があつたら、今度こそ引縛つて牢舍へ入れませう……イヤ、さう云へば、あの御三家方も、あのまゝでは濟まされますまいな？

久世大和守　あの越前守も、西の丸の問題へまで立入つて喙を容れ、菊千代君の事を彼此と申立てまして、甚だ怪しからぬ譯と存じます。

間部下總守　菊千代君、西の丸へお入りの發表が明日と定まつてゐる鼻先へ、厚顏ましく一橋殿を持込まうたとこは、唯蟲がよ過ると丈け云つてはゐられませぬ、上へ對して無禮に當ります、前中納言が條約調印へケチを附け

られるのも、底を割つたら我子を將軍家に推立てたさが腹一ぱいだとは如何なうつけ者にも察しられます、これは輕くてお謹み位は仰せ付けられて然るべき事かと思ひます。

太田備中守　一橋殿が將軍家で、前中納言が大御所へ入られた日には、江戸の大城は油釜の底が沸き立つたやうな大騷ぎになるのは眼に見えてゐます。

松平和泉守　大奧の女中等も、それを思へば恐ろしくて、夜の目もねむられぬと云ひ合つてゐます。

間部下總守　ハ、、、まるで狒々公に宿を貸したやうなものでございませうからな、イヤ、一日も早く檻へ入れて了ふのが上分別、掃部頭殿には如何思はれますか？

井伊　いづれ將軍家の御思召を伺うてからの事でございます、唯あのまゝには濟まされませぬ、そこは皆樣と同意見でございます。

（「前へ進め……オイ」と掛け聲、廊下にバタ／＼と足音。）

右京（驅け戻り）　菊千代君がこれへお成りでございます、近習の小姓衆をお相手に異國の調練ぶりぢやと仰せられまして、大廊下をバタ／＼御驅け遊ばして……御老職樣方がお在なさるから御叱言が出ますと申上げますと、皆は家來じややから怖くはないと仰せられます、お遊びはお庭先でと申上げますと、鎖國論は申すな、老職始め開港論ではないかと斯樣にやり込められまして……。

（一同眼を見合せる處へ、十三歲の菊千代、同じ年輩の小姓數名に緋ぶさの附いた根鞭を鐵砲代りに肩へ擔はせ、自分も鞭を振つて「前へオイ、一二三四……」と活潑に號令をかけながら入つて來る。）

菊千代（微笑）　ア、皆、頂貫に居た、掃部頭もゐたのね、……大奧で女中等とばかりグヅ／＼して遊んでゐるのは飽いちやつたから、此方の廣い處へ出て見たくなつたの、女中なんか夷人の眞似をしてはいけないつて頑固な事を云ふからうるさくて仕樣がない、これからは洋式調練でなくては戰爭しても勝てないんだらう？　時勢が異つて來たからね。

（云ひ／＼掃部頭の傍近く寄る。）

井伊（笑顔で見上げて）　菊千代君はいつも御活潑で、ナカナカ大奧の女中どもの手にはあひかねるでございませう、併し、さし迫つた明日、西の丸へ御入りの表立つた儀式が濟みます迄は、可成大人にしてお在遊ばすが善うございませう。

菊千代（頷いて）　ア、明日、儀式があるさうだね、大小名が又うよ／＼めだかのやうに集つて來るのかい。

間部下總守　大小名もめだか扱ひにされましては遣りま

すまい、菊千代君にお逢申しては敵ひませんな、、、ハ。

菊千代　それぢや一橋でも西の丸へ入れてやりや善かつたのにね、私は將軍家なんか面倒臭くつてつまらないと思ふよ。右へお向き遊ばすな、左へお向き遊ばすななんて、今から奧女中なんかゞ人を木偶のやうにしたがつてゐるものな。

非伊　菊千代君を勿體なくも人形のやうにお仕附け申さうとする者がお居りましても、掃部頭始め一同がお附添ひいたして居りますから御安心遊ばせ、君はやがて天下を治むる御主人であらせられますれば、その御主人らしく御成長遊ばさねばなりませぬ、三千萬の國民の苦を苦とし、樂を樂とし、それが爲めに日夜御懈怠なく御心遣ひを遊ばし通される御一人であらせられねばなりませぬ。

菊千代　ぢやア何方にしても樂ではないな。

非伊　樂ではございませんとも、萬人の上に立つ者は、始めから樂をせうと思ふのが間違ひでございます、苦を樂とせねばなりませぬ。

菊千代　皆は私に飴ばかりしやぶらせるが、掃部頭許りは何時も眉間に短刀を突付けるやうな事を云うてくれる、私はそれで掃部頭が好きなのぢや、掃部頭、もつと話しをして聞かせてくれい。（とせがむ）

掃部頭　また御用部屋の御用が濟みませぬから只今はそれも成り兼ねます、こゝはお遊びに入らつしやる場所ではございませぬから一應大奧へお歸り遊ばせ。

菊千代　ア、、ぢやア歸るよ、だがチヨツと一つ聞き度い事がある、下總守等は私に構はず、御用部屋の方へ行くが善いよ。

間部下總守　ハ、では御免蒙ります。（一同退く）

菊千代　あのね、今、お庭の方で、黑鍬の者が酒に醉うて、可笑（をかし）な歌を歌うてゐた、小姓がそれを覺えて來た……チヨツと歌うて見い。

（小姓等躊躇する、「歌へッ」と促す。）

（小姓等、始めはしぶり〳〵、しまひには聲を合せて。）

「菊は二度咲く、葵は枯れる、西にくつわの音がする……」

（右京は周章てゝ、中途で「シッ〳〵」と制する、小姓等は構はず歌ひ了る。）

非伊　（驚愕の色）エ……それを黑鍬の者が？……菊千代君、それは先年から京都の方で流行つた歌で、それが今、處もあらうに江戸の大城のお庭先で歌はれますとは……餘つ程不祥な歌でござりますぞ。

菊千代　（憂はしげな顔）　不祥な歌？……葵が枯れるといふから、私も餘つ程不祥の歌と思うてはゐた、では矢ッ張、さうかい？

井伊　（思案の顔色）　菊が二度咲くは目出度いが、葵が枯れては大不祥でございます……はやり歌は天下の人民等の、心の流れの響く音でございますから、つい聞き捨てにはなりませぬ、形の現れる前に影法師が映るのとも見られます、天の口とも申されませう、やがて君の御治世は容易ならぬ事と思はれます。

右京　恐れながら、左樣の歌を歌うた黒鍬の者を早速召捕へては如何でございませう？

井伊　イヤ、それには及ぶまい、唯二度と歌はせぬやう氣を附けるが善うございませう、實は江戸の市中にも大分流行つてゐるさうだや、一々召捕へた日には罪人は盡きまい、お小姓衆、もう二度と歌ふ事はなりませぬぞ。

小姓等　ハッ……（と平伏する）

菊千代　私ももう二度と歌へとは云ふまい、安心してくれ。

側衆　（奥から駈來り）　ハッ……只今、御大老のお計ひにより、破格を以て召出されました蘭方醫伊藤玄朴、漢方醫遠田長庵、出仕いたしましてござりまするが、上樣の御容體も何うやら御急變のやうに見上げると申して居ります。

井伊　（驚いて）　何に、御急變？

菊千代　御急變？……では私は早速歸る、掃部頭も來い、皆も來い。（と駈入る、小姓衆も右京も茶坊主等もつゞいて行く）

井伊　（深い憂愁の顔色、腕を叉んで、溜息をつきながら起上り、獨語）ア、葵は枯れる？……

――幕――

第二幕

井伊邸居室

十二疊敷の居室、廻り椽、黒柿の柱の床の間には、夢窓國師の「一切法性無所得」と書した古めかしい一軸、次の室との間は寂びの附いた芭蕉布張りの襖で割られ、一方に丸窓、凡てが茶がかつた構へである、椽先の沓脱石から少し隔つた庭先に黄菊白菊の鉢植が列べてある、下手寄りには、わくら葉の散りかけた楊柳の古木、破れ芭蕉、上手は屋根附の橋廊下が、向ふの奥殿の棟へつゞいてゐる、そこらの植ゑ込には紅葉も混つて、その間から奥深い廣庭の一部がのぞかれる。

○

奥方昌子方、まだ二十四五歳の若い、美しい容貌であるが何處か淋しみの勝つた婦人、後から三十歳を越した中年增の、色盛りのお部屋、お靜の方が、話しかけながら下手の奥の方から出て來る。

昌子　奥庭の菊は今が恰度見頃のやうだね、ア、今日は御庭で、よい氣晴らしをしました。

お靜　私も、奥方樣とお久しぶりで、打解けたお話しが出來まして、近頃こんな嬉しい事はございません、慾を云へば限りがありませんが、この上、若しお殿樣が御一緒にお居で遊ばしたのなら、それこそ何んなに面白うございましたらう、眞實にお殿樣もお役目は大切でございますが、偶にはお暇を取つて御休憩遊ばさなければ、あれでは御體がつゞくまいと案じられてなりませぬ。

昌子　（憂愁の色）それは私も心配でなりませんから、それとなく申上げては見るのだけれども何分にもあの御氣象だからね……でもお忙しい中にもお心には餘裕のある方だから、何日もお出入(でいり)には、こゝの黄菊白菊をチツとお眺めなさつて御賞翫遊ばしてゐらつしやる樣子で、先頃も、奥庭の菊畑が今眞盛りでございますと申上げると、何に、これ丈け見てゐれば善いと仰つた、さう云へば菊は矢ツ張、これが上品だね。

お靜　私共は、あの猩々緋や、紫の絞りに咲いたのが好きでございますが、矢張り下品に產れ附いたのでございませうね。

昌子　イヤ、それも唯、好々と云ふものでせう……オヽ、日も暮れかゝつた、殿樣が早くお歸りなされば善いがね。

お靜　眞實に、早くお歸り遊せば善うございますが……奥方樣もお聞き遊ばしたでございませうが、何んでも敵方は殿中へまで手を廻して公方樣始め、お殿樣を毒害せうとしてゐるさうではございませんか？　恐ろしい世の中でございます。

昌子　私も聞いてゐます……眞實にそれを思へば、此方等が安閑と菊見などとするのも勿體ないやうな氣がするのね、女が口出してはならん事だが、條約調印の御一條から世間が又急に騷がしくなつた處へ、前公方樣の俄かの御かくれやら、水戸樣、尾張樣、越前樣のお謹み沙汰やらで、江戸中が今にも引つくり返るかと思はれるやうな物騷な噂が絶えませぬ、それをこゝの殿樣がお一人でヂツト踏堪へてゐらつしやるのだものね、敵方は嘸ぞ憎いとも思ひませう、殿樣御自身は、何んなにお心苦しいか、私等には何んにも仰らぬが、この頃は、お寢み遊ばすとよく夢にお魘なされなさる、さうかと思ふと、夜通し座

禪遊ばしてまんじりともなさらない、眞實にお身代りに立てるものなら立つてお上げしたいと思ひますよ。

お靜　奥方樣はさうして始終、殿樣のお側へお附ききりで御心配遊ばすのだから遊ばし甲斐がございます、私なんかは、この頃は御殿でチラとお顔を拜む許りでございますものネ、、、（云ひ消すやうに）……でも御殿樣は内でも外でもお忙しいお體でいらつしやりますから、何卒御障りのないやうにと遠くから蔭ながらお案じ申上げてゐる許りでございます。

昌子　（チヨッと照れた顏なしながら）お傍にはゐても此頃はあんまりお口もお利きなさらないのだからね、私なんか唯、氣をもむ許りで、口不調法ではあるし、お慰めする事も出來ませんのよ、女といふものは甲斐性の無いものね。

お靜　それは然うでございますとも、斯うした時節には、御城の中へまで、殿樣のお供をして行ける御家來衆か、いつそ羨ましうなります。

昌子　お留守をしてゐても、お歸りの聲を聞くまでは、チツとも安心がならないのだものね、さう云へば江州から誰かお客があるとか云ふでないかね？

お靜　それは、あの御菩提所、清凉寺の仙英禪師どのの事でございませう、奥方樣も一度御目にかゝられた事がある筈でございます、あの禪師どのが見えてゐるとか聞きました。

昌子　仙英禪師どのが？　では私もお目にかゝりたいものね。

（お附の女中二三人小足早に入つて來る。）

女中　あのお部屋樣、丁字屋の悴、吟三があそこに控へて居りますが？

お靜　（眼まぜて）ア、これへ……。

昌子　汝に誰か用事がありますのか？　では私は室へ歸りませう。

お靜　チヨッとお待ち遊ばせ……御邸へお出入のあの滯留の丁字屋吟右衛門の三男でございますが、殿樣へお願ひの筋があるとかで、何卒奥方樣からお取次下さるやうにと申して居ります、一寸と遠くからでも、逢つておやり下さいましたら？

昌子　イヤ／＼……私はそのやうな事は……。

お靜　何卒、私からお願ひ申ます。

（丁字屋吟三、二十七八歳の若者そこへ現れて、庭の片隅に平伏してゐる、女中、紫縮緬の包みを携へて進み寄る。）

昌子　（チラと尻眼にかけて）殿樣へのお取次は、私は一切斷る事にしてゐます……もうお歸りの刻限にもなら

うお靜どの、御免。（と駈入る）

お靜　（睨むやうに後影を見送り）どの附けも揉つたいが、眞實に、世間不見の殿様にも困つたものね……吟三、心配せんがいゝ、私からでも取次いで上げるからね。

吟三　何分よろしくお殿様へ……若し家督相續が出來ませねば、せめて財産を二つに割つて分家させるやうに、親爺へ申付けて下さいますやうお願ひいたします。

お靜　（頷いて）ア、分つてゐますよ……チヤンと心得てゐますからね。

吟三　何分にも親爺が頑固で、物の分つた親戚の云ふ事も一切受附けませんから困つて了ひました、今はもう他に取る途もないのでございますから。

お靜　ハア……それもよく吞み込んでゐます。

吟三　では萬事よろしくお願申上げます。

お靜　出來る丈け骨折つて見ませう、私も丁字屋とは萬更因縁がないでもないしね……ア、、それはあの小娃衆に私がさう云つたと云うて、預けて置いておくれ。

（女中等頷く、此時「お歸り」の聲、遙かにひゞく。）

お靜　ア、殿様のお歸りぢや、吟三は早く彼方へ……。

（一同周章てゝ退場。）

（宇津木六之丞入來る、五十四五歳の年配、健康かな體付、眼を鋭く働かせて居室を檢める、小姓小河原秀之丞刀を捧げて入り、刀架にかけ、襖を直す、井伊大老、衣服を更めて入坐。）

井伊　（くつろいだやうに）六之丞、今日も生きて歸つた……ア、あの菊が見られる、見事に咲いてゐるな。

宇津木　ハツ、無事にお歸り遊ばしてホツと致しました、每日、每日、お顏を見るまでは、胸が板のやうに硬張つて居ります。

井伊　ウム……家にも何も異つた事はなかつたか？

宇津木　ハツ、何の異變もございませぬ、

井伊　京都の主膳からは、その後、飛脚はよこさないか？

宇津木　昨夜の書狀が着きましてから後は、まだ別に何の沙汰もございませぬ。

井伊　然うか？（と云つて、秀之丞の捧ぐる茶を吞む）イヤ旨い、殿中では、お茶一つウツカリ吞めないからの。

宇津木　お大抵ではございませぬ、殿には御空腹かと存じ上げますが、例の通り、お膳部をさし出させませうか？

井伊　イヤ、今日は家から持參した例の餠の分量が多かつた、おかちん腹……イヤ餠腹だから持がいゝよハ、、、膳部はもつと後でよろしい。

宇津木　お疲れの處へ早速申上るも如何かと存じますが、江州清涼寺の仙英禪師殿が、祖師の御年忌とやらで、急に思ひ立つて江戸へ上られましたので、チヨツと御目通

りが願ひたいといふ事で、彼方に控へて居られますが、如何取計らひませうか。

井伊（嬉しげに）なに仙英和尚が？……それは〳〵御珍客ぢや、何日迄でも當邸にお泊め申して御款待せい、早速御目にかゝらう。

宇津木　ハ……實は明日、中仙道から御歸山のやうなお話しでございました……では書院へ御出でなされますか？

井伊　明朝お歸り？……それはあんまりお名殘惜しいな………禪師と予とは師弟の交りぢや、書院への出開帳には及ぶまい、此處が却つて心安くてよからう、御通し申せ。

宇津木　ハ、畏りました。（退場）

井伊　師の御坊に、居ながらお目にかゝれようとは思ひもよらなかつた、これも不思議な佛縁であらう……暗くなつた、秀之丞、燈明を點けい。

（仙英和尚、清癯、鶴のやうな老禪師、秀之丞に案内されて入來る。）

井伊（恭々しく一禮）これは〳〵善うこそ……思ひがけない事で地獄で佛といふのはこの事で厶いませう、相不變御健やかで結構でございます。

仙英（一揖）私もひよつこり江戸へ出て來ましたのぢやが、つい貴方の顏が見度うなつてな。

（云ひ〳〵ヂッと大老の顏を見すゑて言葉を切る。）

井伊　何卒、暫らく當邸へ御逗留なされては？

仙英（默つて、暫らく見すゑてゐたが）井伊公、貴方は日本の爲めに、今、大難に出逢つてゐられるな。

井伊　ハ、いかにも、大難に出逢つてゐます。

仙英　然うぢやらう、右へ向いても、左へ向いても、上を見ても下を見ても、白刃の劍で八方塞がりぢや、劍の山のまん中につゝ立つてゐられるのぢやな。

井伊　ハ、如何にも仰る通りでございます。

仙英　貴方の顏には、劍難の相があり〳〵と出てゐますぞ。

（井伊、默す。）

宇津木　エッ、あの劍難の御相が？

（仙英、默つて頷く。）

井伊　ハ、實は、かげ腹を切つて、生き存へてゐる氣で居りましたが、今の御一言で、私の行くべき途がハッキリ見えました。難有う存じます。

仙英　イヤ、さすがは井伊公……須らく千仭の嶮崖に手を撒して、絶後に再び蘇られい。

井伊　此生に非らず、死に非らず、唯、一箇の無の字あるのみ……覺悟は定めて居ります。

仙英　それで先づ安心しました……時に、私に一人お供がある、身分違ひぢやから大老樣の御前へは出られぬ、御

多忙の折柄、正式でない、ホンのお茶一服立てゝ戴いて、このお室をそのまゝ昔の埋木の舍の樹露軒にしたら仔細なからうと思ふが何うでございませうな?

井伊　委細心得ました、お供は誰でございませう、一寸と見當が附きかねますが、逢へば分りますな、秀之丞、薄茶を立てい、お供は何卒此方へ、六之丞、御案内せい。

宇津木　ハ……。（六之丞と秀之丞は立つて行く）

仙英　はア、昔ながらに、楊柳の樹が御寵愛と見えて、この樹はいつも井伊公の影身に添うて植ゑられてゐますな。

井伊　それも秋に逢うては葉が散り散りで、あゝして骨許りになつて、勃然と立つて居ります、だが、例令骨が舍利になつても楊柳は矢ッ張楊柳に相違ありませんでな。

仙英　御尤でござる。

（六之丞、粗末な衣裳の老人、左官屋利八を連れて入來る。）

宇津木　お連れ申しましてございます。

利八　殿様…… 左官屋利八めでござります。

井伊　（膝を拍つて）ア、誰かと思つたら昔の茶友達、左官屋利八か、よく來てくれた、よく來た、禪師と同道で江戸へ出たのか?

仙英　一生に一度、江戸が見て死に度いといふ事で一緒に來ましたぢや。

利八　お庇で江戸も見物しますし、大老様にもお目にかゝれまして、もう心置なく成佛が出來ます、ハイ……大した御出世でござりますな。

井伊　イヤ、汝と逢へば、昔ながらの部屋住の鐵之介に戻つたやうな氣持がするよ、何うぢや、近頃、世間の景氣は?

利八　あきまへんな、黒船が來よつて、愈々貿易が開けると、何んでも異人が金銀を皆浚つて行くのや云ひましてな、米の値がドン〳〵上りますのや、皆、難儀しとりますさかい。

六之丞　コレ、コレ、御前でそのやうな事を……。

井伊　イヤ、構はぬ、ありのまゝを聞かせてくれるから善いのぢや… 成る程な、あの近江の湖水の井堰を急に切つて落したら川下の小魚は一時、皆脾腹を返さうも知れぬ、開港が凡ての國民に智慧と富とを貢いでくれるまでには長の月日がかゝらう、それまでは井堰の口を切つた者は皆に呪はれよう。

仙英　（頷いて）御意の通りぢや。

（この間に秀之丞が御茶を運んで來る。）

秀之丞　奥方様、御部屋様が、禪師様へ御目にかゝりたいと仰つしやります、伺うて見てくれとのお事でございま

す。

井伊　ア、皆、禪師には、國で御目にかゝつた事があらう、遠慮なく、この室へ參つて、一緒にお茶を召上れと云へ。

井伊　イヤ、利八、決して遠慮はいらん、そのまゝ〱……それから何か他に汝の耳に入つた面白い世間話しでもないかな？

利八　別に面白い事もおまへんな、東海道中何處へ行きましても、ヤレ大砲を製へるの、ヤレ兵隊を調練するのと、運上ばかり高う取られて閉口やいふけつたい糞の惡い話し許り聞かされましてな、一體この先、日本は何うなりますのやろ？

仙英　成るやうに成るのぢやハツ、、、。

（昌子の方と、お靜の方と入來る、和尚へ挨拶。）

仙英　イヤ、その後は……ハイ、一寸とお江戸へ上りましたで……まづ御健勝で何より……。

井伊　あのお客は、左官屋利八、私の昔の茶友達ぢや。

昌子　ハ……左様でございますか？

利八　ハツ……高上りいたしまして……お茶を戴きに參りまして……。

井伊　お靜は利八をよく知つてゐるな。

お靜　ハイ、存じて居りますとも……。

仙英　ドレ、戴かう。

（一座、茶碗を傾ける。）

利八　お服加減、結構に頂戴いたしました。

仙英　では、これで御免蒙ります。

お靜　あの、只今御會席を……。

仙英　イヤ、御用多の處、長座は無用、これで失禮いたします。

昌子　折角、お目にかゝれましたから、御法話を承れる事と樂しみにして居たのでございます。

お靜　あの私も、久し振で難有いお話しを聞かれる事と思うたのでございます。

仙英　別に難有いお話しも難有くないお話しも持合せませんぢや、茶の湯も一期一會なら、お互さまも一期一會、逢へば別れる、別れゝば逢ふ、この後生の一大事さへよく分つて居れば、人間成佛しますぢや……井伊公、左様なら。

井伊　左様なら、禪師……これがお別れぢや。

仙英　いかにも、お別れぢや……。

（暫らくヂツと顔を見合せてゐたが、和尚、消えるやうに入る、利八も挨拶そこ〱につゞく、六之丞、秀之丞送つて行く。）

昌子　今、御別れぢやと仰つた御一言が、何んだか氣にか

かつてなりません、總身に水でも浴びたやうに、ゾーッといたしました、何うしたのでございませう？

(井伊沈默。)

お靜　私はハッと思ひました、差出がましうはございますが、あの禪師樣が容易ならぬ事を申されたとか云ふではございませんか、眞實でございますか？

井伊　容易ならぬ事とは？

昌子　殿樣のお生命にかゝはるやうな、恐ろしい事を申されましたとか？

井伊　六之丞がもう喋舌つたか、劍難の相が現れてゐると云はれたが、別に氣にかける程の事ではない。

お靜　エ、矢ッ張、劍難の御相？……これが氣にかけずにゐられる事でございませうか？……まア何うしたら善うございませう、何うしたらその御相が無くなるのでございませう。

昌子　殿樣の御體は、御自分のお體であつて御自分のお體ではございませぬ、何卒その劍難をお避けなさるやうに　御思案遊ばして下さいませ、何んとかしてさうした敵に附覘はれぬやうに、大切なお生命に別條のないやうに、今の中に充分御用心遊ばして下さいませ、お願ひでございます。

お靜　眞實に奥方樣の仰る通り、お生命がなくては折角の御立身、御出世も、果敢い夢のやうなものでございます、聞くのも恐ろしい劍難などにおかゝりなさらぬ中に、何卒一日も早くお職務など御斷り遊ばして御身體を大切になさつて下さるやう、靜からお願ひ申上げます。

井伊　(笑つて)　劍難などがさう恐くては、大小さす武士は一日も勤まるまい、奥も云ふ通り、私の體は私の體ではない、今は徳川幕府へ捧げてあるのぢや、唯、氣遣ひなのは、私の體にその劍を突刺す者が、若し外國人であつたら、外國と我國との戰ひが避けられなかつた折であらうから、私は犬死も同前ぢや、併し、一旦開港も濟んだから、最早その氣遣ひはあるまい、日本人同士に殺されるのなら、それは構はぬ、イヤ、見事笑つて死ぬる、心配する事はない。

昌子　ぢやと申しましても、若し萬一、そんな不祥な事がございましたら、彦根藩は何うなります？

お靜　三十五萬石のお家が潰れては、それこそ一大事ではございませぬか？　それにお世嗣の愛麿樣、直憲樣の事もチト御考へ遊ばして下さいませ。

井伊　(微笑)　あの子供等はお靜が腹を痛めたのだから成る程氣がかりも尤ぢやが、今は天下國家の一大事で、妻子の事などは云つてゐられぬ、御先祖より傳へられた三十五萬石も、場合によつては潰れて了ふかも知れぬが、

三千萬の國民の身上を思へば我一藩の興敗など彼是云つてはゐられぬ、私が今、火責め、水責めの心の苦を受けてゐるのも、何んの爲めだと思つてゐるか？　イヤ汝等には分るまい、やがてそれが分るまで默つて居れ……控へて居れッ。

お靜　私がお腹を痛めましたからと云うて、若樣等の事を申上げるのではございませぬ、あゝして奥方樣によく馴ついてゐられますし、奥方樣もよくお可愛がり遊ばして、實のお母子も及ばぬやうにお見上げ申ます、そのお世嗣の行末の事をお案じなされて、奥方樣も殿樣へ押切つて申上げてゐられるのでございます。

井伊　くどい……もう云ふな。

宇津木　（入來り）　ハ、只今、間部下總守樣、御越でございます、殿へ御内談の筋があるとか申されまして。

井伊　ア、間部公か、これへお通しせい、その間に一寸と御膳を食べよう、餅腹も減つて來た……六之丞、暫時、間部公のお相手になつて居てくれ。（退場、昌子の方、お靜の方、つゞいて行く。）

（秀之丞は座敷を整へてゐる、間部下總守、六之丞の案内にて入來る。）

間部　井伊公も嘸ぞ御疲れであらうな？　御來客つゞきでは？　汝等も迷惑であらうのハヽヽ。

宇津木　ハ、手前等は一向何んでもございませんが、殿樣は御食事の隙もあらせられぬやうな次第でございます。

間部　ウム、然うであらう……さう云へば今、御門前で老僧と、お附きのお供らしい者をチラと見かけたが、あれも矢張井伊公のお手先とでもいふ譯かの？

宇津木　イヤ、あの老僧は仙英禪師と申されまして、近江の御菩提寺の方丈でございます、今一人は左官の利八と申しまして、矢張、國の者でございます。

間部　ハア、然うか……併し、その左官といふのは何うしたのか？

宇津木　殿樣の昔のお茶の友達でございました、それが今度、江戸見物に上りました序、御目通りを願ひましたのでございます。

間部　（不思議さうに）　ヘヱー……左官がお茶のお友達……
……それで御目通りを許されたのか。

宇津木　左樣でございます……此お居室で奥樣御一座で、お茶を召上られましてございます。

間部　ヘヱー……さすが茶人は異つたもんぢやの。

宇津木　手前のは耳學問でございますが、主君が日常仰つしやりますには、狗子有佛性、人間は本來平等ぢや、貴賤尊卑の差別などあるべき筈のものではない、それが今日のやうに、君臣の格式が定り過ぎて窮屈な世界になつ

た爲めに、お互が心と心とで眞實に打解け合ふ機が無くなつた、唯、茶室へ入ると、そこは自ら別天地で、一切そんな僞りの殼が取れ、産れたまゝの素直な心で皆が自由に話し、自由に樂しめる、こゝが茶道の極意だと、斯う承つて居ります、お茶にかけては主君は、左官も大工も、身分など一切お眼には無いものと相見えする。

間部　（しきりに頷いて）　成る程……　成る程……そこが極意かも知れぬな。

井伊　（出て來る）　イヤ、何うもお待たせ申して相濟まぬ、何か極意を御發明でございましたかな？

間部　イヤ、井伊公の茶道の極意を唯今、宇津木から盜聞きいたしました、今一つ、井伊公の居合の新流の極意をも伺うて置き度いものでございますな、京都への土産にもなりませう。

井伊　ハヽヽ、六之丞も茶は皆傳でございますから、確かでございます、居合新流の極意もお望みなら追て御口傳申ませう。

間部　立際のお驪に是非御口傳を願ひませう……時に水戸尾張一味の蟄居お愼みが、御他界遊ばされた前將軍家のお遺命ではない、老職等の專斷だと申觸らして歩くものは京都表許りではなく、この江戸中にもさうした風聞が一ぱいに擴ろかりましたやうで、今日、下城するとそんな狂歌を瓦版に作つて、賣り歩く者があると、家來共から申聞かされました、容易ならぬ次第でございます。

井伊　イヤ、あゝして現に、京都から御三家方の蟄居を許し、大小名と共に更に再評定を開いて、國家の大事を決せよといふ容易ならぬ密勅が、お愼み中の水戸家へ下るやうな、公家法度も武家法度もあるも無いも同様な亂脈沙汰に陷つた當世ではありませんか？　この上、如何樣な蜚語流言があらうと聊かも驚くには足りませぬ。唯、その災の火元の、京都へ飛び込んで行かれる間部公は敵方の爲めに、假令焦熱地獄へ突落されようとも燒けず、爛れぬ石心鐵腸を以て萬事にお當り下さるやうくれぐ〵もお願ひ申ます。

間部　その儀はよく心得て居ります、水戸家へ下されたのが假令勅書とは申せ、九條關白の副署のないのは、陰謀方の巧みだといふ事が明らかに見え透いて居ります、こゝを手がかりに探索したら、蜘蛛の吐いた網を引いて蜘蛛を捕へるやうに、この巧みの糸を操つる主は片つ端から一々取押へられませう、そして災の根を斷ち切つて了ひ、諸國から吹き寄せられた木ッ葉浪人共を、掃きに掃き捨てゝのけましたら堂上方も自と鳴を靜められて、大朝から條約調印の勅許の下るのも仔細はない筈と考へます。

井伊　尊公は、是非然ういふ覺悟で御働き下さい、この度の勅書も畢竟は水戸老公から京都へ御手入があつて、御三家の隱居を併かせ、再應の大評定を機會に、自分が御城へ入つて我々老職を斥ける――イヤ、現に取押へた密書の中にも、赤鬼方へも一發打込めとの文句も見えますから、先づ私を殪す計略でせう、さうして邪魔物を除いた上で、あはよくば幼年の將軍家をあの一橋卿に代へて、思ふまゝに天下の政治を切盛する下心だとは、苟も眼あるものには分ります、それで天下が治まればよろしい、幕府が安泰なれば我々は假令殺されても、退けられても忌ひませぬ、併し老公は行掛り上、攘夷を斷行されねばなりますまい、日本一國で、萬國を敵手に無謀の戰を始められねばなりますまい、その成行は眼の前に見えてゐます、斯うなつては振り上げられた白刃の下に、我我が頭をつき出す前に、腰の刀に手をかけねばなりませぬ。

宇津木　いかにも我君の仰る通り、罠と知つて罠にかゝるのは白痴でございます、罠をかけた者をあべこべに罠にかけてやらねば成りませぬ。

間部　勿論の事ぢや、間部はその爲めにこれから京都へ向ひます、井伊公は江戸表で、水戸を始め、陰謀の徒黨を唯一網で獲盡してお了ひなされませい、イヤ、江戸の表穴と京都の裏穴と、兩方から一時に燻べ立てゝ一味を根絶やしにするのでございますから、まア大仕掛な狸狩でございますなハ、、、。

井伊　先づ京都では、密勅を傳達した水戸家の家來鵜飼吉左衛門親子、その陰謀に加擔した浪人、梁川星巖、梅田源二郎、頼三樹三郎始め、鷹司家の家來小林民部、金田伊織、青蓮院宮の家來山田勘解由、儒者醫師の池内大學、その他の重立つた徒黨の一味の者等、攘夷を口にして天朝を迷はし奉り、幕府を苦めて二進も三進もゆかぬ羽目に陥れて了ひ、天下の騷動に口火を切つて、己が心の不平の喙げ場を求めようと企てゐる輩は容赦も會釋もいらぬ、決して、お遁しなさるな。

間部　大丈夫でございます、井伊公にも水戸老公に對して御會釋はいりませぬ、謹愼中の身で、而も幕府の大法を破り、公卿堂上方へ手入をせられた罪を糺され、場合によつては登場を命じて殿中で捕へられるか、切腹を申付けられるか、現に奥醫に賂を遣つて、前將軍家を毒害されたといふ噂さへ立つてゐる御人でございますから、充分におやりなされい。

井伊　萬事は私の胸にあります、いづれにしても條約調印の勅許を得られるのが眼目でございますぞ。

間部　それは大丈夫でございます、それにしても公卿堂上

方へは、穏便な仕向をしませうな？　罪はすべて公卿堂上方の家來衆へ背負はせる事にしませうな？

井伊　それもよろしうございませう。

田中雄助　（入來る）京都表よりのお飛脚でございます。

井伊　然うか、長野主膳からぢやな、六之丞？

宇津木　（文函を受取り）これ丈けでございますな。

田中　左樣でございます。（一禮して退く）

井伊　（書狀を取上げ）六之丞、燈明を。

六之丞　ハッ……。

（井伊、披げて讀む、讀む中に息遣ひが苦しげになる、皆その顏に注意する。）

宇津木　何か御異變でも？

間部　その後の暴模樣は？

井伊　（ため息）九條關白、御辭職との事でございます……これは一大事が出來しました、幕府と天朝との間の、唯つた一つの架け橋が落ちては……まアお聞きなされい……。

去る二日、二條殿は關白殿へ被參、無理無體に御押付、是非なく御辭職御願被成候由、察する處、所司代京着以前に關白殿を押のけ不申ては奸黨の邪魔に相成候故、右樣無體の儀出來候事と存じ候、關白殿下を以て關東の御處置方明らかに申上候樣、前將軍の御趣意も御座候事に付、右一條是非御取扱御座候やう相成不申ては、何分前將軍の思召も相立不申、折角御國體を思召候難有叡慮も却て爭論の基と可相成に付、かねて御承知の奸賊手先の者ども一々御召捕・嚴敷御吟味被下候はゞ、奸謀相顯れ、君側の惡人御除きの手段も付可申……

猶又、下總守上京するとも將軍家忌中は參內も許されぬ故、その心得で居れとの達しが幕府へ行くが、關白殿下は是非下總守と一日も早く會議したいお旨であると書いてあります、御覽なされい、波頭は見る間にふくれ上つて大山のやうな怒濤が打つて來ましたぞ、主膳も嘸ぞ氣をもんでゐるであらう、關白殿も嘸ぞ御心痛であらう、斯うなつては進んでも活きられぬ、退いても死なねばならぬ。

宇津木　最早絶體絶命の場合になりましてございますな。

間部　（手紙を見ながら）成る程、關白御辭職とは、愈々火事は母家に燃え移りました、京都の空は眞赤な[illegible]の焰が打上げたも同じでございますな。

井伊　長野主膳の歌が書添へてあります。

むら雲のかゝるまでとは思ひきや
くもゐの月はあきらけき世に

しばしこそ光りをおほふ雲もあらめ
はれずやむべき日の御かげかは

眞に、はれずやむべき日の御影かはでございます、斯うむら雲が掩ひ重つては、日の光を拜む爲めには、そのむら雲を切拂はねばなりますまい、間部公、雲の上人とても、最早容赦はいりませぬぞ、公卿堂上方をも恐れ憚るには及びませぬ。

間部　エ……では公卿堂上方へも手をかけよと仰るのか？

井伊　左樣ぢや、その雲上人が邪魔をして、萬民が日の光を仰ぐ事が出來ませぬ、日本の國の爲めに港を開いた條約に、勅許の下るを妨げてゐる彼等には、時勢が分らない、國民を思ふ誠心がない、唯官位に誇り、身分を鼻にかけ、いゝ氣になつて浪人等の御輿にかつがれて、幕府を苦めようと許りかゝつてゐる、こんな冠を着た藝無し猿等は念珠繋にして、片ッ端から京都を放逐しませう、それも面倒なら寧ろ血祭にして了つた方が却つて、後々の爲めかとも思はれます。

宇津木　我君の御果斷御尤かと存じます、そして再び九條關白殿に、眞實の天意を傳へられるやう取計ふ外はございますまい。

間部　公卿堂上方の侍に手をかけるのは何んでもございませんが、公卿堂上方となると、何んだか天朝の御つゞき合ひのやうで……イヤ、臣下は臣下に相違ありませんが、大切な桐の箱詰めの眞綿をちぎつてのけるはずみに、中に包んだ夜光の玉へ若し爪痕が附きはせぬかと空恐ろしうございます、昔、承久の時も、錦の御旗が出たら、弓づるを外せと、さすがの義時すら申したさうではございませんか、何んとか別にお考へはございませんか？

井伊　間部公、その大切な夜光の玉の曇らぬやうにする爲めに、永年詰め込んで汚れくさつた眞綿なんかちぎつて捨てねばならぬ時が來ましたのぢや、承久の事とはまるで場合が違つてゐます、臆されるな、幕府を倒してもよいか？　日本の國土を外國人の大砲の彈丸に荒らさせてもよいと思はれますか？

間部　イヤ決して左樣な儀では……一體井伊公は禪宗御固まりで、御藩内では牛馬の血も流すなと御布令を出されたやうに聞き及びましたが、その御方が天下の一大事とは云へ、隨分思ひ切つた事をなさる氣でございますな？

井伊　（半ば瞑目）佛の慈悲心は、地藏の攝受にも、不動の折伏にも現れます、降魔の利劍で殺すのも、亦活かすが爲めでございます、ア、今こそお贐に、居合新流の祕傳、御目にかけませう。（六之丞に目配せする）

宇津木　ハ……。（床の間の革人形を座敷へ立てる）

間部　拜見いたしませう。

（井伊、起上つて刀を取り、居合腰、人形を睨んで氣合。）

井伊　エイヤツ……（一喝、人形倒れる）……これは第一の保劍、劍は人を討つのみが勝ではございませぬ、劍を全く保つ事が至極の勝で、これが一大事でございます。

井伊　エイヤツ……エイ（一刀閃いて人形を斬る）……これは破劍、天の七星、貪、巨、祿、文、廉、武、破に象ります、一刀動かすべき時に動かすは利、天道破道に逆ふ者は天之を許しません、とく破劍に貫れます、これは破鍛の德でございます。

エイヤツ……エイツ……（一刀閃いて人形倒る）……これは神劍、實を避け、虚を打つ、兵無常勢、水無常形、能く敵の變化に因つて勝を取る、之を神といふ……略御會得がゆきましたか？

間部　（頷いて）ハ、成る程、保劍、破劍、神劍、……及ばずながら京都へ參ります上は臨機應變、如何樣の處置もいたしませう、假令五年、十年、二十年待ちますとも、條約勅許を得ぬ上は東へ歸りますまい。

井伊　安心しました、では鹿島立を祝うて一獻いたしませう……六之丞。

宇津木　ハ……。

間部　條約勅許が首尾よく下りましたら、猶その御思案がございませうな？

井伊　それには公武御一和の爲めに、先づ宮樣の當將軍家へ御降嫁の儀を願うて見ませう……それにつけて先年大奧に仕へた姉小路局をこの度京都へ上せる手筈になつてゐます、今夜にも見える筈でございます。

間部　何卒御計畫が圖に當つて、お互に再び天下太平の日を樂しみたいものでございます。

（宇津木、秀之丞を指圖して、酒を運ぶ、獻酬が始まる。）

井伊　さア明日の門出のお祝ひぢや……前將軍家御忌中滯りは多うございますが、幕府の榮えを祈り、又間部公の御一身の幸を祝ひませう。

〽ともなひかたらふ諸人に、御酒（みき）をすゝめて盃を、とり〳〵なれや梓弓、やたけごゝろの一つなる、つはものゝまじはり、頼みある中の酒宴かな……」

田中　（入來り）姉小路のお局樣、御越しにございます。

井伊　然うか、幸、間部公にも御引合せせう、こゝへ。

田中　ハ……。

間部　それは恰當よい處でございました。
宇津木　私等は引下つて居ませうか？
井伊　イヤ、まだ善い、姉小路局とのお話しは至極内密にしたいから、唯二人限りのさし向ひとするが今は構はぬ。
（姉小路局、四十歳あまりの、上品な老女、しとやかに入來る。）
井伊（挨拶）御苦勞でございました……局の大奥にゐられた頃は、間部公はまだ御出仕がなかつたからお目にかゝられる折もなかつたでせう、間部下總守殿。
間部　始めまして……何卒よろしく。
姉小路局　何分よろしく願ひます……いづれ京都表ではいろいろ御指圖を受けねばなりますまい。
間部　イヤ、私こそ……公卿堂上方とは至つて御懇意が薄うございまして、先年京都所司代は致して居ましたが九重雲深うして、あまり手蔓が附いて居ませぬ、宮家の方は萬事よろしく御配慮を願ひます。
姉小路局　私こそ、分に過ぎた大きなお役目を付けられまして、心元なく思うて居ります、何卒何分にもお助けを願ひます。
井伊　まづ一獻さし上げませう。
姉小路局　不調法でございまして……何卒、眞の少し……。

間部　私の鹿島立ちをお祝ひ下さいませ。
姉小路局　最早お上りでございますか？　私もほんの一足お後から、お追驅け申すやうな事になるでございませう。
井伊　顏さへ御知合になられたら、後は又、ゆつくり京都で御談合を……萬事の手筈は私から又飛脚を立てませう、彼方には長野も居りますから、彼が又御相談相手になりませう。
姉小路局（杯を傾け）……難有うございました。
井伊　間部殿、今御一獻……。
間部　ではこれで御納めとしませう……イヤ、何うも難有う、早速ながらこれで御免蒙ります、いろ〳〵準備もございますから……ヤ、撃劍の音が、お邸の御道場でございますか？
井伊　若侍等が火の出るやうな稽古を勵んで居ります、油斷がなりませんでな。
間部　心丈夫でございますな、では何卒御氣を附けなされませ。
井伊　間部公こそ……。
間部　お互に、これが顏の見納めかも知れませんな。
井伊　然うでございますとも……まアよくこの生顏を見て置いて下さい、やがて晒し首にならうも知れません。

姉小路局　マア御不祥な。

（三人「ハヽヽヽ」「ホヽヽヽ」と笑ふ。）

間部　では御免。（六之丞、秀之丞見送る、井伊は室の入口まで出て、引返す）

井伊　和の宮の御一條は、筆談といたしませう。

姉小路局　ハ……。

（井伊、用紙に字を書く、姉小路局も書く、示し合うて、互に頷き合ひ、それを燈火に燒いて、火鉢へ落す、書いては燒き、書いては燒く、火鉢ではしきりに火が燃え立つ、この時お靜の方が、奥方昌子の袖を引くやうにして、橋廊下へ出て、それを窺うてゐる。）

お靜　まアお二人限りさし向ひで、字を書いては燒き、字を書いては燒き、何んな内證事か知りませんが、氣になるではございませんか？

昌子　何か餘つ程大切な御用でせうよ。

お靜　そんなにしてよく濟ましてゐられますのね？　大奥に居たお女中などは、眞實に油斷も隙もなつたものでないと聞いて居りますが、中でもあの姉小路局は、したゝか物で何か浮いた沙汰でお暇が出たのを、こゝの殿樣が御贔屓で、御取立てといふ事でございますから、ウッカリはしてゐられません。

昌子　殿樣はそんな方ではありません、この騷がしい世の中に、何うしてそんな忌らしい、浮いた眞似などが出來ませう。

お靜　奥方樣は何んにも御存じないのでございます、お若い中は殿樣もあれでナカ〳〵油斷はならなかつたと申しますもの……御覽なさいまし、あのお局は年増でも矢ッ張何處か垢拔けがして、上品で、綺麗ではございませんか？　そしてチョイ〳〵色眼なんかつかつてゐますもの、堪りませんわ……アレ、嬉しさうに笑つたり、耳端へ口を附けたり、眞實にマア、忌らしい、何うかしてやりたい。

昌子　端したないのぞき見などして、殿樣に見られたら何んなにお叱りを受けるか知れぬ、私はもう歸ります。（と小足早に駈入る）

お靜　お上品ぶつて仕樣がないのね、歸るのなら勝手に歸るが善い、眞實に雛風樣だよ、心の中では妬いてる癖に、知らん顏をして濟ましてゐて……ヱ、彼方も此方も皆憎らしい、何うしてくれよう。（焦焦する）

（その中、井伊と姉小路局とは頷き合つて。）

姉小路局　ではこれで御免蒙ります。

井伊　そこまで御送りしませう。

姉小路局　何卒もう。

井伊　御遠慮はいりません。（入る）

お靜（庭先から居室へ上つて來て）何事もう、御遠慮はいりませぬ（と口眞似）……何を書いたのか知ら（火鉢をさがす）灰になつて何んにも分らぬ……色も戀も內證事も何も彼も灰になつたら跡方もない、一頃、あんなに私を可愛がつて下さつた殿樣が十八も年下の若い奥方樣をお貰ひなさつてから、私の事はあんまりお構ひ附もなさらぬ、ヱ、口惜しい。（さめ〴〵泣く）

井伊（入來つて）お靜か……何うしたのぢや？

お靜　何うもいたしません……。（淚を拭く）

井伊　泣いてゐるではないか？　何か悲しい事かあるのか？

お靜　然う仰れば何も彼も悲しい事だらけでございます……私程不幸な者は此世には居りません、寧そ死んで仕まひたうございます。（と、又さめ〴〵と泣く）

井伊　ウム……でも泣きたければ淚を出して手放しで泣ける人間はまだ幸やぞ、私のやうに萬民を治める地位に立つて、萬民に自分の顏色一つを見つめられてゐる者は、自分で泣き度い時にもメッタに泣けぬ、笑ひ度い時にもウッカリ笑へぬ、イヤそれ位の心の苦を忍ぶのはまだしもだが、牛馬の血も流すなと、現に彥根の一藩內に殺生を戒めた私が、今は幕府の爲めに、イヤ國家萬年の爲めには、同じ人間を縛れの、殺せのと、むごたらしい指圖までせたければならぬ……地藏の慈悲も不動の利劍も本來無二と經文では讀んでゐるが、又、然う悟つた氣でもゐたが、何んだか佛心の私と、羅刹の私と、自分が眞二つに割れて行くやうな、あさましい迷ひが又しても胸の底から湧き上つて來てならぬ……イヤ、これは慥かに迷ひぢや、迷ひに相違ない、暗さがあつて明るさがある、濁つてゐるからこそ澄んだものが見える、生死苦樂も正邪善惡も一切を超越せれば、寂光淨土に眞如の月は見られない……さう覺悟は定めてゐながら、矢ッ張私も凡夫ぢや……矢ッ張凡夫ぢや……。

お靜（つく〴〵顏を見て）この頃、容易ならぬ御心配を遊ばす事は、蔭ながらお察ししては居りますけれども、お慰め申さうにも、もう二月餘りも、私の處へは少つともお渡りさへないではございませんか？　奧方樣はお若くもありますし、御悧發でもゐらつしやいますから、御寵愛なさるのは御尤もでございますが、偶には私の事も御思ひ出し下さつてもよかりさうなものと思ひます。

井伊（苦笑）女心にさう思ふのは無理とは思はぬが、今は國家の一大事、日本が倒れろか、起きろか、二つに一つの危急存亡の場合に迫つてゐるのぢや、こんな時には奧の事も汝の事も構つてる隙はないのぢや。

お靜　でも殿方はお忙しい中にも矢ッ張お閑があるとか云

ふではございませんか？　私なんかお相手にはなさらなくつても、あの姉小路局とやらいふお方……あゝした悧發な方とは外目にも嬉しさうに笑つたり、頷いたりなさつて……餘つ程お大切な內證事でございませう……御手紙を火で燒いたりなんかなさつて、眞實に靜もあゝしたお身分の方に產れて來度うございました。

井伊　（稍强い口調）……では汝はのぞき見をしたのか？

お靜　（少し周章てゝ）イヤ、然ういふ譯ではございませんか、こゝのお火鉢を掃除せうと思ひますと、文殼の燒いたのが、目に附きましたので……。

井伊　汝にはゝ云うても分るまいが、姉小路局は將軍家の爲に、內々容易ならぬ重い御用を承つて京都へ行かれるのぢや……誰にも聞かれてはならぬ事だから、筆談して、それも形を殘さぬやうに一々火中した、イヤ、かういふ事さへ一切口外はならぬ、確かと云ひ付けたぞ。

お靜　ハツ……殿の仰せなら何の樣な內證事でも他人へ洩らすやうな私ではございませぬ、でございますから私を不憫と思召して、何卒折々はお渡り遊ばして下さいますやうにお願ひ申上ます。

井伊　（憐れむやうに見て）ハヽヽヽ子供のやうなだゞをこねてゐるの……。

お靜　若樣等は奥方樣に馴いてゐられますし、殿樣は姿も形もお見せなされず……私は眞實に每日、淋しくて、淋しくて、何んだか一人、尼寺へでもやられてゐるやうな心細い氣がいたしますもの。

井伊　汝も淋しいか？……汝のは閑過ぎて淋しいのぢや、私はあまり用事が多過ぎて、手と心とが離れ離れになるやうで、それが云ふに云はれぬ淋しい氣持にさせる、……まア暫く辛抱せい、今に汝とゆつくり話せる時も來ようから。

お靜　殿樣はめつたに煙を御のまぬ方だから、私は今のお言葉を樂しみにお待ち申します……それからあの……これは丁字屋の三男が、殿樣へさし上げてくれと申しまして。（紫縮緬の包み物を出す）

井伊　丁字屋の三男？……あの吟三か……何んぢやそれは、開けて見い。

お靜　餅すしでございます、近江から屆いたものと見えます……。（片手でさし上げる途端、箱が傾いて、小判、小粒がバラ〳〵と落ちる）

井伊　（冷笑）とんだ餅すしだの……近頃は堂內の稻荷樣より門前の白狐の方が、上り物が多いといふ噂ぢや、持つて來る所を間違へたのであらう。

お靜　あの慥かに、お殿樣へと申しました。

井伊　（頷いて）三男の身で家督を繼ぎ度いからその取持

をせいといふのぢやらう、いかに長男が白痴でも、さうは行くまい、あんなうるさい事に口出しが出來るか？そんなものは下げい。

お靜　でも折角私が頼まれましたから。

井伊　頼まれても忌と云へばよいのぢや……眼障になる、下げい。

お靜　何うしてもお受けはなされませぬか？

井伊　下げい……汝も下がつて居れ。

（お靜、悄々として下つて行く。）

井伊　怪しからぬ奴ぢや……三男坊で家督をつがせるか、分家をさせろ、私にその口を利けとは……身の程を知らぬ奴ぢや……。

宇津木　（出て來り）　お靜樣が大さう泣いてゐられますが、何かお叱りの筋でも……。

井伊　ハヽヽ、打捨つておけ、私の處へ持込むべきではないものを持込んだのぢや、六之丞、あゝした風儀を流行らせるのはあまりよろしくない事ぢやの？

宇津木　ハッ……よろしい事とは思ひませぬが、方々から、手をかへ、品をかへて持込まれますので、お靜の方もついお斷り遊はし難かつたのかと存じます。

井伊　汝等もチと氣を附けい……併し考へて見ると、丁字屋の三男があゝした氣を起すのも、萬更無理と許りはいへぬ筋もある、（ヂッと考へ込みながら）……さうぢや、わが身にも覺えのない事ではない。

宇津木　ハ……。（と顏を見る）

井伊　（起上つて柱にもたれる）　私は井伊家の十四男に產れて、三百俵の宛飼扶持で素より家督を嗣げる身分ではなく、養子口も一々的が外づれ、世の中へ顏の出せる希望もなくなつてあのまゝ彥根の片隅の埋木の舍に、一生埋れ木となり果てるのかと思うた時は、眼前が暗うなつた、イヤ此世界が呪ひたい氣持さへしたのだ、大通寺へ入つて頭を丸めかけたのも、矢ッ張焦々した心の火宅から逃れたかつたからだ、……さう思へば今、尊王攘夷を口にして、天下を亂さうと企んでゐる浪人輩も、多くは二男三男の部屋住か、或は身内にはり切れる程力は滿ち溢れてゐても手足を伸ばす機會のない輕輩の家に產れた者等が、只管、風雲の變に乘ぜんと焦々してあせつてゐるのぢや、幸か不幸か私は長兄の死なれた爲めに思ひもかけず、天運にめぐり合せて、彥根三十五萬石の主人となり、やがて大老職とまで昇進したが、振り返つて見ると何んだか夢のやうな氣もする、さうしたのこり籤を引當てる者はめつたにあるものでは無い、彼等の心の底がよく分つてゐる、その私が、彼等浪人輩を向ふへ廻して、生命のやり取りまでせねばならぬ役廻りとは、情な

い氣持がする。

宇津木　德川幕府の爲めには、已むを得ぬ事かと存じます。

井伊　幕府……然うぢや、家督をつぐのは、馬鹿者でも愚か者でも、長男に產れた者と定り切つた封建の制度が今、呪はれてゐるのぢや、それが天下の浪人等の目の敵ぢや、イヤ、昔かあの丁字屋の三男なのぢや、昔の私もその仲間でなかつたとは云へぬ、さう思へば何んだか空恐ろしくなる。……港を開くのも國家の爲め、幕府の爲めと許り一圖に思うてゐたが、國內に三百の大小名が、互に石垣や土塀を結び廻らして睨み合つてゐながら、今後も果して一致して外國に當つて行けるだらうか？　港を開いて封建の制度が、このまゝ無事に持ち續けられようか？　ア、葵が枯れるといふ歌も氣になる……私は國家の爲めを思うて却つて幕府の罪人……謀叛人になつたのではないか？……柱からわいた蟲が、柱の心をかみ破るやうに、幕府無二の忠臣の家から、何時の間にか幕府を倒す謀叛人の頭が出たのではないかな？　唯時勢に丈け罪を塗り付けてそれでよいのかな？……。（よろめいて坐る）

宇津木　殿、あまり御思ひ過しなされますな、お體に障つて、萬一の事でもありましたら、それこそ幕府は忽ち瓦解でございませう。

井伊　あまり物を見つめるのは恐ろしい事ぢや、底の底まで考へぬくのは恐ろしい事に違ひない、けれども私は茶道にせよ、居合にせよ、又禪道にせよ、生命かけて底の底まで入らねば何うしても我慢出來なかつたのだ、又そこで眞實のものにぶつつかつた氣がするのだ、けれども今度ばかりはそれが酷く恐ろしい……死ぬよりももつともつと、恐ろしい。（とうつとり考へ込む）

（俄かに邸內が騷々しい。）

宇津木　何事が起つたのでございませう？

田中　（出て來り）道場へ參りました一人の武士の、擧動が少し不審にございましたので、引捕へてだんだん糺明いたしました處、何うも水戶方の廻し者のやうでございます、早速、奉行所へ引渡さうと存じますがチヨッと上意を伺ひに參りました。

井伊　何に？……水戶方の廻し者？　こゝへ連れて來い。庭先へ廻せ。

宇津木　御面前へは憚り多うございます、直さま奉行所へお渡しなされては？

井伊　イヤ、是非、私の面前へ連れて來い、何んな男子か見てやらう。

田中　ハッ、畏りました。（退く）

宇津木　何のやうな巧を持つてゐるか分りませぬ、御用心遊ばしませ、お大切な御身體でございます。

井伊　ウム、心配するな。

（河西忠左衛門其他五六人の家來、浪人風の男を縛つて庭前へ引すゑる。）

河西　ハ……いか程責め問ひましても、白狀いたしませぬが、水戶なまりのある男子で、道場の中から邸内の御様子をじろ／＼覗ひ、隙を見て奥庭へまで入込まうとしました擧動が不審で、慥かに、怪しい者に相違ございません。

井伊　ウム……よく氣が附いた……面を上げい。

宇津木　面體を上げい。（燭をさしつける）

浪人　ウム、汝さまが井伊大老か？　私は水戶藩の者ではない、天下の浪人ぢや、天下の浪人共は勅旨に忤うて夷敵に膝を屈め、條約に調印した大老を國賊だと信じてゐる、國賊の首を斬つて攘夷の血祭にせうとしてゐる、それ丈はよく心得られい、

宇津木　默れッ……無禮者。

井伊　（微笑）井伊は生命を惜むものではない、併し今暫らくは死ねぬ、私の生命は暫時、私が預つて置く、その事を天下の浪人等へも、又水戶家の人々へも申傳へてくれ。

浪人　私は水戶の者ではない、天下の浪人ぢや、さア斬るなり突くなり勝手にしろ。

井伊　折があつたら水戶の知合の者へでも私の言葉を傳へてくれ……よろしい、この者を門外へ追放せい。

宇津木　エ、御追放でございますか？

井伊　許してやれ……奉行所へ引渡すにも及ばぬ、追放せい。

河西　恐れながら、殿を附け覘ふ奸賊の一人でございます、此儘お許しなされましては？

浪人　さア殺せ……殺せ……井伊の憐愍などは受け度うない、

井伊　この者一人縛らうと、殺さうと、私の生命が危くもならねば又安らかにもならぬ、門前から追放せい。

河西　ハ……生命冥加な奴だ、さア立て。

（引つれゆく。）

（奥方昌子の方、静子の方、長刀追取り、侍女にも武裝させて手に手に雪洞をさげて出て來る。）

井伊　仰々しい……控へい……控へい。

昌子　賊が入りましたと聞きましたから。

お静　殿様の御身が案じられまして、

井伊　もう逃げた……よろしい。

（一同會釋して退場。）

井伊　(庭前へ出て)　ア、楊柳の木の眞上に今宵も箒星か……何んだか血のやうに眞赤に光る……六七条、天の顔にはあの箒星が現れてゐる、私の顔には劒難の相が現れてゐる、何方が先へ倒れるのか？　天と地との戰ひのやうなものぢやのうハヽヽヽ。(淋しい笑)

—— 幕 ——

第三幕

第一場　京囚江戸送

品川の宿外れ、一面に黒幕を張り詰めたやうな空に星影が寒く慄へてゐる、土手の松並木が夜風にざわめいてゐる、海の遠鳴りも聞える、覆面した怪しい風體の武士が五六人、そこへ來かゝつて、互に囁き合ひながら、腰の刀に手をかけて、彼方此方見廻はし、何物かを、待構へる様子。

甲　アレ、アレ、あの提灯の火がそれらしい、ぬかつてはならんぞ。

乙　イヤ、あれは唯の通行人かも知れぬ、過まつて誤をしてはならんが、それにしてももうやがてこゝへ來かゝる刻限には相違ない。

丙　網乗物が先きて、鶴丸籠が後から來るのだらうな、此方はその鶴丸籠の梅田源二郎先生、頼三樹三郎先生、吉田松陰先生丈でもお救ひする事が出來れば、せめてもの本望ぢや。

丁　イヤ、網乗物にも大切な方々がゐられる、なかなか有髯男子も及はぬ近衛家の老女村岡刀自を見殺しには出來ぬ、それに鵜飼吉左衛門父子は是非共救ひ出さねば濟まないのぢや、京都からの勅書を水戸家へ持込んだ手柄のある大忠臣ではないか？

戊　イヤ小林民部、金田伊織、池田大學、澄田一叢その他の方々も皆京都表で、尊王攘夷の爲めに水火を踏んで身命を惜まず働かれた御人等ぢや、それが奸賊のために念珠つなぎにされて、屠所の羊のやうに江戸表へ引出されるる今日のみじめな淺ましい生葬ひの行列を、おめおめ見過しに出來ようか？　警固の武士を片ッ端から切り捨てて殘らず助け出さねば我々の面目は立たん。

甲　イヤ、御尤千萬なお言葉ぢや、こゝで梅田、頼、吉田諸先生方を始め一同をお助けしてその上、江戸表で召捕になつた橋本左内先生を我黨の手に奪ひ返したら、尊王攘夷の旗風は再び天下を吹靡かさう、その機會を外さず、赤鬼方へ一發打込んで、首を上げて了へばもう占めたものぢや、我國土を汚す豚同前な夷敵は不殘、血祭にしてのけ、世を天朝の御代にするのぢや……提灯の火が

だん／＼近寄つて來るぞ。

乙　ではこゝらで待伏の用意をせうか？　我々の刀の切れ味一つが、我日本國を生すか殺すか、大切なドタン場ぢや、仕損せぬやうに、覺悟をきめてかゝらねばならぬ。

丙　萬一武運拙く仕損じたら潔く切死するか、自殺するか、後に生證據を殘さぬといふ約束は堅く守らねばなるまい。

一同　それは一同、百も承知ぢや。

（皆々拔刀する。）

（編笠に小提灯の武士、忙しく駈け來る）正か？

一同　誰？

金子　ア、、よく間に逢つた、金子ぢや、孫二郎ぢや、あれ丈逸まつてはならぬ、今輕々しく手出しする時ではないと、制つ、諍いつ、云つたのを君方は表面で承知したと見せかけながら、ソツと拔け出して來られたな、武士に二言は無い筈ぢやが、こゝではまア何も云ふまい、唯引返されい、默つて、このまゝ引返しなされい、孫二郎が頼むのぢや。

甲　いかにも、我々一黨がぬけ出して參りましたのは重々惡うございますが、何う考へ直しましても尊王攘夷の爲めに、あれ丈粉骨碎身した天下の志士等を、おめ／＼奸黨の役人達の汚れた手に渡すのは殘念千萬で、我々若い者の體中の血は沸き立ちます、意氣地なく見殺しには出來ません、何うしてもこゝで奪ひ取るより他に途も法もありませんから、何卒このまゝ御見のがし下さいませ。

一同　何卒、このまゝ御見のがしを願ひます。

金子　君方は、小事のために、大事を破つても差支ないと思はれますか？　この金子が薩摩の西郷や大久保と諜し合せてゐる一大事が、こんな輕々しい一擧のために、覆される破目に陷つてもお構ひない氣か？　いかに警固の武士が、うつけでも五人や七人で切り倒される程腑甲斐ない者の揃ひとも思はれますまい？　さすれば君方は皆好んで、犬死をせられるのぢや、犬死をするのは、今の若い武士の面目かな？　さうではあるまい、さア、この金子に默つて蹤いて來られい、捨て度い生命を暫時預けられい、何うぢや？

（一同モヂ／＼する。）

（紅提灯を點けた男女の子供、六七人出て來る。）

男の子・甲　早く行つて寒餅を食べて來べいよ、まだ他にも招ばれてるだから、大急ぎで廻らねえと今夜中に食べ切れねえぞ。

女の子・甲　そんなにどつさり食べて歩いたら、お腹の皮がふくれて終には動けなくなるべえよ。

男の子・甲　動けなかつたら己が背負してやらア。

女の子・乙　汝に背負して貰つたら皆が笑はア。
（男の子、女の子「ハヽヽヽ」「ホヽヽヽ」「そいつア可笑いやアなア」。
男の子・乙　何んだかそこに黒い影法師が立つてゐるでねえか？
（一同、松並木の蔭に身を寄せる。）
女の子・乙　エ、何處に？　何處に？……何もゐやしねえ。
男の子・甲　ア、後から、澤山提灯が來らア、泥棒かゐたつて怖くはねえや。
女の子・乙　ア、眞實に提灯が幾つも／＼來る、……でも何んだか淋しい、皆であの歌でも歌つて行きますべえか？
子供等　ア、、さうすべえ。
（聲を揃へて「菊は二度咲く葵は枯れる、西にくつわの音がする」元氣よく歌ひながら走つて行く。）
（浪人等はそれを聞いて、互に頷き合ひ、向ふから近づく提灯の火影に眼をとめて、直ぐ隠れて了ふ。）
（「排雲手欲拂妖熒、失脚落來江戸城、井底痴蛙過憂慮、天邊大月欠高明……」詩吟の聲聞ゆ、鶏丸籠が先に、網乘物が後から、幾つも／＼つゞく、警固の武士數十人、御用提灯をふりかざし、武器を手にして、前後左右を固めてゐる。）
（詩吟の聲の聞えてゐた鶏丸籠の、五寸の窓から、頼三樹三郎が顔を出す。）
頼　役人、一寸と待て、……一寸と待つてくれ。
役人　何用でせう？
頼　もう江戸も直ぐぢやな、愈々江戸へ入るのぢやな？
役人　左樣、もう直ぐだから、何卒詩吟などは止めて下さい、道中は萬事、大目に見て居りましたが、もうお膝元も間近になつたから、これからは、式の通、嚴重にしないと我々の役目の落度になります、何卒左樣、心得て下さい。
頼　然うか、もう江戸が近いから今迄通り寛大の處置は出來んといふのか？　それも尤もぢやが、先刻からしきりに喉がかわくから、頼三樹三郎にもう一杯、末期の酒を飲ませてくれ、もうこれ限りぢや、末期の酒を飲ませてくれ。
役人　貴君は一日に三升もお飲がりです、今日はもつと多量に入つてゐませう、それでもまだ欲しいのですか？
頼　この頼は酒に量無しぢや、三升でも五升でも構はぬやアないか？　もつと持つて來てくれ。
役人　チョッと上役に伺ひます。（上役人の所へ走つて行く）
頼　勘定を拂はない振舞酒に有附くのは、得のやうで、矢ツ張損か、向ふは掛代金を直で取ろていふのだからなハ

ハヽヽヽ。

役人（戻つて）では道中はこれ限りといふお許しが出ました。（駕籠側に附けた樽を卸ろして、飲ませる）

頼　フム……實藤、實藤……時に、この上にも一つ願ひがある、隣りの籠の梅田源二郎殿、その先の吉田寅二郎殿へ、頼が訣別の杯がしたい、老女村岡刀自始め、一人一人、さしたいのぢやが、酒が足るまい、でせめて梅田、吉田の兩所へ丈でもさうしたい、何卒それを取計らうてくれ、頼が一生の頼みぢや。

役人　それは御無用です。

頼　私が其方に頭を下げて頼むのぢや。

役人　いくらお頼みになつても、いけません。

頼　（怒つた聲）上役を呼べ。

上役人　何卒、お靜かに願ひます、もう江戸城も間近になりました、我々、役目の手前お咎めを受けるやうな事があつてはなりませぬ。

頼　さうでもあらうが、五十三次を一緒に、道連れで長の旅をして來ながら、ゆつくり話しも出來ず、顔も見られぬ、生死を一時にと誓つた友達同士が、これではあまり情ないではないか？　せめて訣別の杯位させてくれても善い筈ぢや、汝等もマサカ涙のない鬼畜ではあるまい。

上役人　公儀の御沙汰でございます、御定法を枉げる事は成りませぬ。

頼　訣別の杯もさせない……それが公儀の沙汰ぢやと、定法ぢやと？……フン、今に見ろ、その公儀の沙汰が、鐚一文にも適用しなくならう、幕府も滅びる時が來てゐるのぢや、我々が皆自由に思ふ所を言ひ、自由に欲する所を行はうとするのを、權威を笠に、力づくで搦め取つて繩をかけて仕置場へ引ずつて行く、豚羊同前の夷敵の奴輩には、祟りを恐れて、さはらぬ神樣扱ひにしながら、同じ日本に産れた同胞を、逆さまに豚羊扱ひにするこの亂暴狼藉が、人を怒らせ、天を怒らせずに濟むものか？　今日江戸へ送られて行く天下の志士の、一人一人の首が飛んだらその一々の疵口から血の洪水が全國に流れ出すと思へ、今に見て居れ、この獄卒め等が……。

（松並木の蔭より跳り出でんと逸る人々を金子が制してゐる。）

梅田　暇乞の杯はいらぬ、梅田はまだ生きてゐる。

吉田　寅二郎も無事ぢや。

役人　シッ……シッ御話しはなりませぬ。

上役人　さア、行かう。

頼　私もまだ生きてゐる、聲がかれたゞけぢや。

村岡　（エヽン……エヘンと咳く）

（前後の籠から「エヘン……エヘン……」と咳が起る。）

頼　アヽ、皆御無事か、……私はもう今から辭世の詩を作つて置く……今の後を唄ふぞ……身臨湯鑊家無信、夢斬鯨鯢劍有聲、風雨多年苔石表、誰題日本古狂生。

（一列はやがて入つて行く。）

（松並木から一同出て來る。）

金子　（眼を拭いて）我々が此處に忍んでゐるとは夢にも思はれなかつたであらうか、聲を聞いたのがせめてものかたみぢや……あれ丈け、國を憂ひ、君を思ふ志士の面々の首が飛んだら、眞實にその切り口から血の洪水が溢れて出て、今、幕府に蔓つてゐる奸賊等も、我國を窺ふ夷敵の奴等も、一度に溺れ死せずには置くまい、アヽ、皆樣の御苦勞の程は、金子孫二郎、お察し申上る。（と後影に一禮する）

一同　お助けせぬのは、いかにも殘念に思ひますが、大事の前の小事と聞いては止むを得ません、何卒御許し下さい、今に皆樣の仇は屹度取ります。（と遙かに禮拜する）

第二場　井伊家書院

上手も下手も定紋の丸に橘の紋散らしの銀襖、床の間には大幅の古畫の達磨の一軸が掛つてゐる、正面は黒塗縁の腰高障子、室内には銀の燭臺が輝いて、奧深く稽古鼓の音がひゞいて來る。

○

幕開くと、麻裃の、松平左兵衞督、まだ若盛りの、血氣に滿ちた容貌の中に、何處か底の据つた人柄が見える、靜かに褥の上に坐つて、扇子を膝に立て、主人の出座を待構へてゐる體、宇津木六之丞、障子を滑らせて入つて來る。

宇津木　お待たせ申上げて相濟みませぬ、主君には只今、これへお出でゝございます。

松平　いや、大老職には内も外も定めて御忙しい事で、片時もゆつくり御休息の隙はあるまいな、先刻御城内で御目にかゝつて御用の趣は一應承つたのだが、一寸御念を押して置き度い事をふと思ひ浮んだので、斯うして御後を追駈けて御邸へ伺つたのぢや、別に大した事ではないが、唯一言丈け自分の考へを申上げて御意見を聞いたら、それで事が濟むのぢや。

宇津木　ハ……チラと承はりますれば、愈々此度の大獄時も略々段落が附きかけさうにございますが、その中でも一番の御難題、水戸家への御處分の申渡し方の大役は、御前が御引受けなされましたさうで御心勞の程、察したてら御察し申上げて居ります。

松平　ハヽヽ、私のやうな若輩の小身者が、大老のお目がねで召出されて此度の大役を仰せ付かつたのは、左兵衞

督の身にあまる面目ぢや、一命を抛つても、屹度お使者の役目を仕遂せねばならぬと覺悟の臍は固めて居るよ。

宇津木　ハ……恐れながら御前樣なら、大切な御使者の役目は滯りなく御仕果せ遊ばすに相違ございませぬ、唯、噂に聞きますれば、水戸藩の血氣盛りの若侍、何百人かが、怒り立つて小石川の館へ入り、手ぐすね引いて待構へて居りますとやら、何んだか槍刀が林のやうに突立つてゐる敵の陣中へ、唯お一人、無腰で裸馬をお乘入なされるやうに思はれまして、六之丞、御氣遣かはしく存じ上げます。

松平　（ため息）　世が世なら切つても切れぬ將軍家と、御三家の中でも一番重立つた水戸家、お祝ひか、お慶びか、それでなければ御見舞ひのお使者に立つより外に、御用はない筈ぢやが、今宵はその御本家から御分家へ、血で血を洗ふやうな忌まはしいお沙汰を傳へに行かねばならぬ左兵衞督ぢや、東照權現の御威光も最早末か、私は生きて歸りたくも思はぬのぢや。

宇津木　誠に早、淺ましい次第でございます、これも畢竟は、水戸前中納言樣が、御實子一橋卿を將軍に立てたいといふ一圖な御我執から、降つて湧いた災難でございます、その間の板挾みになつて主君、掃部頭樣が幕府大切、國家大切と、血を吐くやうなお苦しみを遊ばすのを、臣下の我々は、唯々御いたはしう存じ上げて居ります。

松平　（頷いて）　フム、それは尤ぢや……並大抵の者なら斯うした難局には一刻半晌も立てた者ではない。兄弟墻に鬩ぐとも、外その侮を禦ぐといふに、門口へは後から後から異國人が押寄せて來る、家の内では無鐵砲な兄弟喧嘩ぢや、誰が辛らいと云つて、今の世に、大老程辛らい目を見てゐられる人があらうか？　左兵衞督が快く此度のお使者をお引受けしたのも、大老の御胸中をお察ししてぢや。

宇津木　……忝う存じます。

（井伊、出で來る。）

井伊　左兵衞督、御待せしました、これから水戸家へお出で下さるのか？　何うも御苦勞千萬、何分にもよろしく頼みますぞ。

松平　ハ……それに就いても一度、御念を押して置きたい事がございます、今日、水戸家への御上使は、中納言家、並に、前中納言家へ直々御傳へしないで、水戸家家老へ申聞けよとの御差圖でございましたが、そこを直々にお傳へしますやう、御變更下さる譯には參りますまいか？

井伊　成る程、前中納言家は改めて水戸へ御蟄居、中納言家は今暫らくお謹みのやう將軍家の命令をお傳へするの

であるから、家老へ申聞けるより、直々御傳へするのが道理のやうではあるが、折角ア、して御用部屋で評議して一決した事を今更急に變更も成りますまい。

松平　押して申上るのは憚多うございますが、若し水戸家で素直に台命をお受けなさればよろしい、何も申分はありませんが、萬一お受けせられぬ場合、家老共を刺殺しても犬死同前になります、又その儘容しく立歸れば公儀の御威光は勿論、私、武道の一分が相立ちませぬ、死ぬに死なれず、生きるに生きられずとはこのやうな羽目を申すのでございませう、お察しを願ひます。

井伊　では若し、前中納言父子の方々へ、直々御傳へして、御受けなされぬ場合は？

松平　（決心の顔色）萬一の場合には恐れながら天下には替へられませぬ、御生命を縮め奉る覺悟でございます。

井伊　フム……さすがに左兵衛督、それでこそ此度の役目は貴殿にお願ひしましたのぢや。

松平　では直々お傳へするやう御變更下さいますか？

井伊　イヤ、それには及びますまい。

松平　それは何うした譯でございませう？　此度の大獄の御吟味は、聊かも御容赦なく、京都表では青蓮院宮を始め奉り、鷹司太閤、近衛内大臣、三條右大臣その他の公卿堂上方、凡て水戸家へ内勅降下に就いて關係のある方方は一々官職を解かれ、お頭髪まで落される程の、重いお咎めがあると聞きました、又諸國の浪士、徒黨の面々も、嚴罰に處せられるやうに承つて居ります、それに萬一、今、水戸家への御台命が反古にでもなれば、折角、力を込めて打下された天の網がその一つの綻目から網が切れて、呑舟の魚が却つて逃げ、殺生用捨のない小魚丈が捕へられる依怙ヒイキの沙汰にもなりませう、その時こそ、幕府の御威光全く地に落ちるのでございませんか？　大老は水戸家を恐れられる譯はございますまいが？

井伊　イヤ、何うして水戸家を恐れませう、私は何物も恐れはしませぬ、私の恐れるのは唯、内亂ぢや、兄弟喧嘩ぢや、その兄弟喧嘩が嵩じて、内輪から蜂の巣を毀すやうな騒ぎを持上げたら、その隙につけ込んで、横合から外國人が我日本の國土を乘取らぬとも限らん、そこで内亂の起るのを防ぐ爲めに萬止むを得なければ、水戸前中納言御父子の御生命を取つても構はぬ、それはこの井伊が首を取られても構はぬのと同じぢや、東照權現御在世の頃には、御實子岡崎信康公も一命を召された、三代將軍御威光の時には、肉親の御兄弟駿河大納言も御切腹なされた、これが昔なら、今の水戸前中納言もさうしたお仕置に逢はれるのが當然であらうが、唯、時勢が時勢ぢ

や、それで蟄居御謹み位で此場合は一先づ我慢せねばならぬ、藤田東湖は死んでも、水戸家の家臣にもまだ人はあらう、前中納言へ直々お傳へするより、却つて家老共に申聞けたら、御受けせぬ事もありますまい。

松平　（頷いて）成る程、さうした御深慮があつての事でございますか……併し萬一、家臣にも人がなく、お受けしませぬ節には？

井伊　一先づ立返つて、その旨を復命せられい、一旦は御威光も立たぬ様であるか、又後々の御處置で何とでもなりませう。

松平　ハ、左樣でございますか？　では私もお庇で一日でも、一命を延ばしました。

井伊　（微笑）　腹は一度しか切れませぬ、決して御逸まりなさるな。

松平　ハ、承知いたしました。

宇津木　チと立入つてお伺ひするやうでございますが、水戸家への内勅を返上させるやう御評議に決したと承りましたが、その御使者の役は何誰樣でございますか？

井伊　これは又一層の難題ぢや、重荷に小附では左兵衞督殿も御迷惑千萬であらう、いづれ二番手が立たねばなるまい。

松平　一つ濟んでも又一つ、御大老の御心中察し入ります。

井伊　生命あらん限りは、屈たくはしませぬ。

松平　何分にも御身大切に……ではこれで失禮いたします。

井伊　何分よろしく？

（左兵衞督入る、宇津木見送る。）

井伊　水戸家の處分……京都表の處置……それから鎖港攘夷を唱へて上下を騷がせた武士、浪人の一味徒黨の仕置をして、この大獄を治めたら、それで天下の風波は一まづ靜まるであらう、……だがその後が恐ろしい、その後が何んだか一層恐ろしい、大じけが來さうな氣がするぞ。（瞑目沈思する）

田中　（入來り）　唯今、長野主膳、京都表より立歸りましてございます。

井伊　（歡喜の色）　何に、長野が歸つた……主膳が歸つた……早速これへ呼べ。

田中　只今、漸つと草鞋を脫ぎかけた處でございます。

井伊　然うか……構はす、これへ呼べ、早く呼べ。

田中　畏りました。（去る）

井伊　（不思、起上つて）　心待ちに待つてはゐたが、存外早かつた、長野が歸れば、私も片腕を返して貰つたやうなものだ。

長野（入來り）ハ……主膳、只今歸りましてございます。

井伊　オ、、主膳か……構はぬ、ズッと此方へ寄れ、此方へ寄れ、よく歸つた。

長野（近寄つて）我君のお健やかなお顏が拜めましてこのやうな嬉しい事はございませぬ。

井伊　オ、、汝もよく生きて歸つた……よく生きて歸つた……私も幸、生命のある中に再び汝の顏を見る事が出來て心から嬉しいぞ。（ヂッと見る）

長野　ハ……恐れながら、私も斯うして御再會の出來ましたのが、何んだか夢のやうに思はれます。

井伊　ウム、私も夢のやうぢや……構はず、私の顏を見い、よく見ておけ、私はまだ生きてゐるのぢや。

長野　ハ……（ヂッと見上る、井伊の瞳にも自づと涙が湊む、長野も鼻汁をかんでゐる）

井伊　窶れたのう。

長野　ハ……憚りながら我君にも、急にお老け遊ばしたやうにお見上げ申ます。

井伊　ウム、汝と別れてから彼是一年ぢやが、私は一時に十位、歳を取つたやうに思ふぞ……だがまだ白髮は生えぬよ。（微笑）

長野　私の小鬢には、二筋三筋見えて來ましたので、拔取つて了ひましてございます、……何にしても容易ならぬ御心勞の程は御察し申上げて居ます。

井伊　汝も餘つ程苦勞したのう……せめて骨丈でも拾つてやらうと思つたが、さうして生首がついたまゝ歸つて來たのは、まア七不思議の一つぢや……之も神佛の御加護であらうな。

長野　私の一身よりも、我君が御安泰であらせられたのがもつと不思議でございます、東照權現の御冥加でござりませう。

井伊　イヤ、マア／＼御互に目出度いのう……併し目出度さには裏が來易い、歡びは悲みの前ぶれぢや、今は斯うして汝と私とが互に生顏を見合せて喜んでゐるが、この次は經帷子で、地獄の底でめぐり合ふ日が思ひやられるではないか、凡てが幻の中で見る幻ぢや、人間程もろいものはないのうハ、、、、、。

（淋しい笑。）

長野（勵ますやうに）あれほど悟り切つてゐられる我君も、矢ッ張また迷ひはお持ちなされると見えますな？

井伊　私は私が矢ッ張、凡夫だと悟つた丈ぢや、嬉しい時には嬉しい、悲しい時には悲しいぞ。

長野　併し、我君は、嬉しい時にも容易に笑顏は見せられぬ、悲しい時にもめつたに瞬もなさらない、イヤ、此世

の悲喜哀歡を超越して、常住坐臥、禪三昧に入つてゐられるやうに、主膳は餘所ながらお見受申して居りましたが、この一年來、前代未聞の內憂外患がわき立つて、一時に荒れ狂ふ大津浪と大暴風の矢面にお立ちなされた所以で、さすが剛毅の御心にもチトお弛みが出來たのではございませんか？

井伊 （微笑）イヤ弛みはせぬ、弓弦なら、切れる程張りつめてゐる、それ丈け泣き度くても泣けぬ事が多くなつた、笑ひ度くても素直に笑へぬのぢや、天下國家の難局に立つた一身の苦しみよりも、自分が眞實の自分でない、この本來の無垢の心に我不知斑點の出來てゆくのをヂッと見つめてゐる苦しみの方が、何れ程辛いか分らぬぞ……久しぶりで汝に逢つたこの刹那に、私は却つて自分で自分の家へでも歸つたやうに、心の垢が落ちてホッとしたのぢや。

長野 それ程までに、私の事をお思ひ下さいますか？……有難うございます。（暗涙を拭ふ）

宇津木 （出て來り）長野主膳無事に立歸りまして、我君にも嘸ぞ御滿足でございませう。

井伊 ウム、六之丞、主膳も生きて歸つた、マア／＼善かつたのう、汝も主膳とは久しぶりだ、さアズッと此方へ來い、一緒に京都の話しでも聞かう。

宇津木 （進み寄り）イヤ、主膳殿、この一年は地獄の上の一足飛びで、定めて危い目許り見つゞけられた事だらうな、それが無事で歸られたのは、眞實に命冥加だつたな。

主膳 イヤ、お互さまだ、お膝元も足元から地獄の口の開きさうなあの騷動の中を、今日まで我君が御安泰であらせられたのは、お側近く御守護なされた貴殿方の御骨折ぢや。

井伊 何よりも先に聞きたいのは九條關白殿下の事ぢや、御變りはないか？

長野 ハ、御無事でゐらせられます、御託づかり物もございます。

井伊 フム、然うか……九條關白が幕府と天朝との間に立つて、公武一和のために一方ならぬ御心勞をして下さつたのは、御禮の言葉もないのぢや、幸に攘夷猶豫の御勅命が下つたのも、間部下總守及び主膳等の、骨折も容易ではなかつたらうが、一つは九條關白の御內奏も亦預つて力があつたのに相違ない、公卿堂上方が、水戶を始め薩州、長州の藩士や浪人等のために御輿に擔ぎ上げられて、一致して幕府を苦しめにかゝつてゐる中に、唯一本立で、あの大暴風に揉まれ通してヂッとそれを踏堪へてゐる健げなお姿を思ひやるさへ、御いたはしかつたの

おや。

長野　お言葉の通り、九條關白殿が若しあのまゝ御辭職遊ばされて、宮中へ御出仕がなかつたら、公卿堂上方と浪人輩との孵しかけた陰謀の卵子が巣立をして、今頃は、青空も眞黒になるやうな恐しい大事が持上つてゐたか知れませぬ、イヤハヤ、馬鹿正直に鎖國攘夷が實行出來ると思うてゐる明めくらやら、橫着にも口先で勤王のお題目を唱へて、腹では自分が天下を取りたさに、幕府顚覆の地雷火を埋めにかゝつてゐる謀叛人やら、我子を將軍家に押立てゝ、自分で大御所の權威を揮ひたさに、京都へ手を入れて尊王攘夷の太鼓をたゝき廻る獅子身中の蟲やら、それが四方八方から寄つて集つて、洛中洛外はまるで百鬼夜行の活きた圖をそのまゝでございました、幸に此方で先手を打つて、梅田源二郎を始め一味の者を引捕へましたからこそ、鎖港猶豫の勅命まで下されましたが、若し一刻愚圖々々してゐて、後手に出たら今頃は、恐れながら主君の御一命は愚か、遮二無二、外國と戰を開いて、天下は大動亂の最中でございませう。

宇津木　イヤ、嘘ではありませぬ、今頃は黒船の打出す大砲で、江戸の市中は燒かれてゐるか分りませぬ、思へば千鈞の錘を唯一筋の髮の毛で釣つてゐるやうな危い事でございましたな。

井伊　（太息）まづ〳〵一息は吐けた譯ぢやが、この先が安心ならぬ、折角京都表であれ程働いてくれられた間部下總守、江戸へ歸つてから鎖港猶豫の勅を諸侯へ内達すると云ひ張られる、開港の勅許ではないから、あれは内達すべき筋合のものではない、そのまゝに伏せて置かうといふ私の云ひ分が腑に落ちぬと云つて、此頃ではあまり出仕もせられぬ、その上老中の太田備後守、堂上方へまで罪を被せるのは憚り多いといふ腰弱な議論で、これも當節は引込勝、九條關白ではないが、私も何うやら野中の孤松のやうに一本立ぢや、併し一本立ぢやと思へば愈々氣が張りつめて來る、息苦しい程張つめて來る、でも私が若し碎けたら、國の柱が碎けるのぢや……さう信ずるより外に途はないやうぢやの。

長野　イヤ、それでこそ日常の我君でござります、味方と頼んだ間部、太田の老中は愚か、天下悉く我君を敵といたさうとも、何の恐れる事がございませう、躊躇ふ事がございませう、港を開いて、外人と和を結び、謀叛人一黨の罪を糺して内亂を未發に禦かれた、我君が國家萬年の行末をお謀りなさる誠心は神ぞ御照覽遊ばします、かかりかけたら中途半端でやめぬといふかねての御精神を飽くまで御貫き遊ばしませ。

井伊　ウム、主膳、天下が悉く予の敵となつても汝丈は味

方ぢやな、心強く思ふぞ、六之丞も矢張り同意見か？
宇津木　仰やるまでもなく、左様に心得ては居りますが……
……。（言葉を切る）
井伊　かといふ言葉は氣かかりぢやの、……が何うしたと
いふのぢや？
宇津木　ハ……いづれ又後刻、ゆつくり申上げます。
井伊　（不審さうに）後刻？……それよりか即刻云つて見
い、云へッ。
宇津木　仰せではございますか？
井伊　（強い口調）云へと云ふのぢや。
田中　（入り來り）唯今、町奉行、石谷因幡守樣、寺社奉
行、板倉周防守樣、お揃ひで、大獄のお捌きに就いて至
急御目にかゝりたいと申してゐられますが、如何取計ひ
ませうか？
井伊　ウム……では大獄のお仕置方の評定書でも持參した
のであらう、これへ。
宇津木　私が御迎へに出ませう。
井伊　主膳も嘸ぞ旅疲れであらう、下つて休め。
主膳　イヤ、疲れたと申して、下つてゐられませぬ、お差
支なければ、お側で御聞き申し度うございます。
井伊　然うか、では殘つて居れ。
（町奉行石谷因幡守、寺社奉行板倉周防守、裃姿で登
場。）
石谷　夜中、推參して甚だ恐入ますが、かねてからの五手
掛りの大獄吟味の儀も一先づ落着いたしまして、それぞ
れお仕置方を相定めましたで御裁許を願ひに、周防守と
同道で伺つた次第でございます。
井伊　イヤ、それはお大儀であつた、五手掛りでは何うい
ふお仕置に定められたか、聞かせて貰ひませうか？
板倉　ハ……一件の書類はこれに持參いたしました……。
（取出して長野の方を見る）
井伊　これは家來、長野主膳、何卒御心置ないやうに……
御兩所にも御見知置き下さい。
長野　（一禮）主君より御許を受け、席末を汚して居りま
す、何分にもよろしく。
板倉　（會釋）ア、長野氏か、それは／＼……では一寸と
此處で讀み上げる事にしませうか？
石谷　それがよございませう。
井伊　（容を改め）では陰謀の發頭人の主立つたものゝお
仕置から聞きませう。
板倉　（書類を展げ）ハ……陰謀の發頭の隨一人、梅田源
二郎は御存知の通り、獄死いたしましたから、致方もな
い儀でございますが、御法度を破つて水戸家へ内勅を傳
へた輕からぬ罪人鵜飼吉左衛門は流罪、倅孝吉は死罪、

又京浪人賴三樹三郎は流罪、江戸表で召捕つた一味徒黨の頭、松平越前守の家來橋本左內も同じく流罪、長州藩の吉田寅次郎も同じく流罪……。

井伊（首を傾け）流罪……その主立つた發頭人共を殘らず流罪で處置せられるといふのか？

板倉　ハ、左樣にございます、追放或は所拂ひ位で、出來る丈け穩便にといふ議論も出ましたが、それではあまり手ぬるいといふ說もありますし、御老職から嚴科に處せよとの、かねての內々の御沙汰も承はつて居りますので。

石谷　上は青蓮院宮を始め、鷹司太閤以下、藩士浪人の末末まで合せて凡そ百餘人に上る前代未聞の大獄でございますから、一同が吟味に吟味を重ねました揚句、彼是釣合の取れますやうに、又御沙汰により、輕きに流れて幕府の御威光を落さぬやう、出來る丈は、手重なお仕置をと心がけたつもりでございます。

井伊　その書類を此方へ見せて下さい。

（板倉周防守が書類を手渡する。）

井伊（つくづく披見して、眉をひそめ）重きは水戸家老安島帶刀の切腹、その他は流罪、追放、所拂、押込、手錠……成る程……。

板倉（大老の顏を見て）安島帶刀の儀も切腹はチと嚴し過ぎるかと存じますが、石谷殿が是非さうせねば相濟むまいとのお說でございまして。

石谷　何しろ水戸家の內勅の一件に關係がありますから、唯、流罪や押込位では、連との釣合が取れまいかと存じます。

井伊（凛とした口調で）長野……秀之丞に朱筆を持たせい。

長野　ハ……秀之丞殿……秀之丞殿……。

（秀之丞出で來る、長野囁く。）

板倉　五手掛りの吟味方が萬一嚴し過ぎるとの御思召でもございますれば、何卒、御目がねにより、出來る丈け輕い御處置にして下されましたら、天下の人心も自ら安まり、我々までも安堵いたす事でございませう。

石谷（不安さうに）嚴科にとの御內沙汰で、私共は、出來る丈け後々の者を懲らしめ、再びかゝる陰謀を企む者を根絶しにするやうに、處置したつもりでございますが、大老の御仁政が此等の罪人共の上に雨露の潤となつて降ります事なら、天下の爲めに至極喜ばしう存じます。

（井伊、緊張した顏色で、默つて、朱筆を加へる。）

井伊　これ位でよろしからう。

板倉　ハ……。（と書類を受取り、石谷と見てゐる、見る中

に、その顔色が變つて來る）……一同の罪科を輕くせられたかと思ひの外、悉く一二等重くなつてゐるではございませんか？……鵜飼は獄門でございますか？

井伊　（頷き）然うぢや、晒し首にするのぢや。

板倉　親は死罪でございますか？

井伊　（鋭く）然うぢや、斬つて了へッ。

板倉　（少し慄へ聲で）あの、吉田寅二郎も死罪でございますか？　間違ではございませんか？

井伊　然うぢや、斬つて了へッ。

板倉　あの、橋本左内も死罪でございますか？

井伊　（冷やかに）然うぢや、斬つて了ふのぢや。

板倉　あの、御言葉を返すやうではございますが、何かの御間違ではございますまいか？

井伊　（嚴しい口調で）手ぬるいのが間違つてゐる、それが相當の仕置ぢや、その罪人等は天朝を蓋に着て、幕府を顚覆せんと企て、或は無謀の攘夷を行うて、日本の國土を外人に蹂躙させる口火を切らうとした謀叛人、黨の大將株ぢや、此方で一歩先んじたればこそ、よく彼等を制して禍を未然に防ぎはしたが、若し一歩彼等に先んせられたら、お互の生命は無かつたのぢや、イヤ幕府の礎が動いてゐたかも知れぬ、わが國家にも國體にも疵が附かぬとも限らぬのぢや、兎に角彼等は何の容赦會釋もなく、先づ我々を殺す氣であつたのに、此方では煮え切らぬ、生ぬるい處置をして、彼等の一命を助けるとは何事ぢや？……（少し考へながら）……井伊も唯、無役の身なら、慈悲善根を植ゑたい心は人一倍ぢやが、天下の大老として、政道の責を一身に擔うてゐる以上は、一歩も假借する事は出來ぬ、謀叛人の大將等は一思ひに留を刺さずには置かれぬ、左様心得られい。

石谷　（低頭）ハ……御英斷、御尤千萬の次第と存じます、實は私一人の考へとしては、五手掛りの御仕置が、何んだか中途半端なやうな氣持もいたしました、只今、大老の御意見を承つて、胸に蟠つた雲が一時に晴れたやうでございます。

板倉　（屹とした顔色で）憚りながら之まで御老職が吟味書類を御一覽なされました節は、罪は一二等輕くこそなれ、重くなつた例はまだ嘗て聞きませぬ、今度が始めかと心得ます、一體此度の囚徒から沒收しました書類など調べて見ましても皆、明主を戴いて、外夷を打攘はうといふ主旨許りで、畢竟は國家の爲めに盡さうとする赤心に外ならぬやうに存じます、天朝へも憚りがございますから、そこを酌取つて、可成寛典に處せられるのが、却つて德川家の爲めかとも存じますが如何でございませうか？

井伊　寛典に處して、それで德川幕府が末長く榮えるものならそれもよからう、併し天下の人々の顏色を見て、謀叛人の大將等を見す〳〵手ぬるい處置しか出來かねるやうな幕府の壽命が、唯の三日でも持つとお思ひか？　お互は幕府の祿を食んでゐる者だといふ事を夢にも忘れてはなりませんぞ。

長野　恐れながら、天朝と幕府との、この度の行きさつで皆樣が迷うてゐられるやうでございますが、抑々德川の治世となりましたのも、皆神意の然らしめる處で、今日、幕府の命令は卽ち朝廷の命令、幕府への忠義は卽ち朝廷への忠義と心得たら、間違ひはないかと存じます。

石谷　イヤ、御說、御尤ぢや。

板倉　大老へ伺ひますが、假令人間の體は刀で斬れましても、魂までは斬れぬものではございますまいか？

井伊　（頷いて）御意見の通り、眼に見えぬ魂は誰も殺せません、唯、武士が刀を拔く以上は斬るべきものは斬らねばなりませぬ。

板倉　（考へて）私はまだ腑に落ちかねます、……大老の御命令通り、重い仕置は致しかねますから、一應歸りまして、改めて役儀御免を願ひ出る考へでございます。

長野　この場合に、左樣な事を仰るのは、幕府へ對して不忠ではございませんか？

井伊　イヤ、板倉殿は板倉殿の思ふやうにせられるのもよいのぢや。

板倉　では御免蒙ります。（會釋して、退場）

石谷　イヤ、なか〳〵一酷な方で、云ひ出したら容易に後へは引かれぬ御人でございます、では私は大老の御命令通り、執行いたしますやう、皆樣へも申傳へる事に致しませう。

井伊　何卒左樣して下さい、これが皆の、德川家へ對して御奉公の、最後の一戰になるかも知れません。

石谷　エ……最後の御奉公で？

井伊　イヤ、お互に最後まで御奉公をせねばなりません、仕掛けた上は中途半端で止めるのは禁物でございます。

石谷　ハ、畏りました、……では失禮いたします。

井伊　何分よろしく、……イヤ、玄關まで御送りしませう……長野は休憩せい。

（井伊、長野、石谷因幡守を送つて行く。）

（昌子の方、愛麿、直麿の二人を連れ、後からお靜の方、宇津木、田中が出て來る。）

お靜　まア〳〵大變な事になりました、役人方が生命を助けようとなさる人等まで、こゝの殿樣が首を斬れと仰るぢやアありませんか？　そんなに大勢の人等の首を斬つてまア何うなるのでございませう、ア考へても恐ろし

い、そこら中、ドロ〳〵赤い生血が流れて、此世ながらの血の池地獄が出來るぢやありませんか？　アッ、何んだか眼前に、その血の池地獄が見えて來ます。（身悸する）

宇津木　お靜さま、まア〳〵落着いてゐらつしやらんといけません、……では奥方樣が一番手の御諫言を遊ばして、それから次がこの宇津木と田中、後詰はお靜さま、貴方にお願ひします。

田中　斯うなつては、もう默つてゐるのは不忠でございます、今日こそ思ひ切つて殿樣に御諫言申し上ましして、御聽入がなければ、此皺腹を切る覺悟でございます、奥方樣にも何卒よろしくお願ひ申ます。

昌子　あゝした御氣象の殿樣だから却つて御叱を受けるかと思ひますが、今日は何うしても申上げねばなりません、愛麿、直麿、汝等も私がよく云つて聞かせたやうに云ふのですよ。

愛麿　ハ……畏りました。

直麿　父上がお殺されなさつては大變だもの、坊も云ふよ。

お靜　よく云つてお聞かせしましたやうに仰るのでございますよ……私が一番後で云ふ番だから、唯ではおうろさがりなされるかも知れませんものね、何か趣向が入ると思つて、無い知慧をいろ〳〵に絞りました、奥方樣、あの赤い帷はお倉庫から出させて置いて下さいましたね？

昌子　侍女にさう云ひ付けて置きました、それから他の御註文の品々も皆お部屋の方へ届けさせましたよ、併しあれは一體何うするつもりなの？

お靜　（笑つて）それはこゝでは云へません、私が一念力で、殿樣のお心を飜へす値言秘密の法でございますもの。

昌子　でも何も彼も、赤いものづくめの御道具立のやうでしたね、井伊家の赤備へで、殿樣を御諫言のつもりなのかね。

お靜　赤備へ？……まアさうでございます、血の池地獄へ殿樣を一度、お逆落しにして上げたいと思ひます、けれども奥方樣や宇津木、田中の方々の御言葉で殿樣が御納得なされましたら、私はまア用無しのやうなものでございますね。

宇津木　貴方が用無しになられたらそれこそ結構ではございませんか？　皆が殿樣の御爲めよかれと思ふ一心でございますもの。

田中　かういふ事に功名爭ひはいりませぬ、殿樣さへ御安泰な事にならせられたら、それで奥方樣始め皆の思ひが屆いたのでございます。

お靜　それはまア、然うだね……だからあの長野がお側に附いてゐては何彼の邪魔になります、彼は何處迄も殿樣を煽てにかゝつてる不忠者だから。

宇津木　イヤ不忠者ではございません、彼も殿樣の御爲めよかれと考へてゐるには相違ありませんが、唯我々と違つて、氣が强いのでございます。

田中　氣の强い處が殿樣のお氣に入つて居るのでございませう、併し今夜は京都から歸つた許りで疲れて居りますから、もう下つて休むでございませう。

昌子　何卒さうしてくれゝば善いがね。

田中　ア……殿樣が、御歸りのやうでございます、私共は次の室に控へて居ります。

お靜　では私も、かくれて居ります、奧樣方何卒しつかりお賴み申します、若樣もしつかり……。

宇津木　では暫時御免蒙ります。

（お靜の方等は次の室へ退く。）

井伊　（入來る）奧か、若等をつれてそこへ坐つて、一體何うしたのぢや？

昌子　ハ、一寸御願ひがございまして。

愛麿　父上、お願ひでございます。

直麿　お願ひでございます。

井伊　願ひ……何の願ひぢや？

昌子　何卒、私等を御手打になさつて下さいませ。

井伊　手打にせい？……突如に何うしたのぢや。

昌子　女子供が、さし出た事を申ますのが、御耳障りでございますなら、默つて御手打になさつて下さいませ。

井伊　フム、女子供が天下のお政治向に喙を容れるのは幕府の法度ぢや、事と品に依つたら手打にするかも知れんが、まア云つて見い、聞かう。

昌子　難有うございます、さし出た口を利くやうでございますが、チラと承りますれば、今度の大獄のお仕置では何十人かゞ首を斬られ、或は重い責苦を受けますとか、それも殿樣の御心一つで、さう定まつたとか申ますが、人を斬つたものは自分も斬られ、人を苦しめたものは自分も苦しみに逢ふとやら、承つて居ります。斯ういふ事を申上げるのは釋迦に說法ではございますが、因果の道理が空恐ろしくてなりません、それも天下の爲めになさる事で、殿樣御自身は、御一命を惜まれぬ御覺悟ではございませうが、何百、何十といふ人々の生靈や死靈の怨みや呪ひは、唯、殿樣御一人、御一代では濟みませぬ、やがて若等の身上にも屹度祟うて參ります、それ處ではない、彥根一藩の者にも祟つて參ります、イヤ恐れ多いが將軍家の上にもかゝつて來ようかと存じます、若等がお可愛いなら、彥根の御先祖が御大切なら、又東照

權現の御末裔の爲めを御思ひなされますなら、何卒罪人へ慈愛をかけて、手輕な御仕置になさつて下さいまし、これがお願ひでございます。

愛麿　父上、何卒皆の生命丈は助けてやつて下さいませ。

直麿　坊が殺されては忌だから、皆を殺さぬやうにしてやつて下さい。

井伊　(思ひ入つたやうに)　さて／＼女子供は羨ましい、……私も一日丈でいゝから、汝等のやうな心になつて見たい。

昌子　(熱心に)　足らはぬ者ではございますが、御家が大切、殿が大切と思ふ一心からでございます。差出口ではございますが、かゝりのお役人方が、助けやうと申される者の生命まで、殿がワザ／＼御取りなさるにも及ぶまいかと思はれます、蟲けらの生命を取るのさへ罪でございますもの、イヤ彦根の藩内では、殿は現に牛馬の生命を取る事もお許しなさいませんでした、日輪は中空に高くさし昇れば昇る程、暖かな光を萬物に惠まれます、天下の御大老にまで御出世なされました殿が、牛馬と比べものにはならぬ偉い人間の生血を流すやうにと、むごたらしい事を仰るのは何か魔がさしたのではないかと、思ふのでございます。

愛麿　父上、何卒人を殺すのはお止めなさつて下さい、父上が又、人に殺されるやうな事があつては悲しうございます。

直麿　坊も悲しい……父上がお殺されなされては。

井伊　(沁々した口調)　武士といふものは辛いものぢや、一旦刀を拔いた以上、敵を殺すか、敵に殺されるか、二つに一つの途しか撰ぶ事は出來ぬ、相手が善人でも惡人でもそんな事は問ふ遑がない、相手も亦此方の善惡は問はぬ、唯敵と味方とに別れる丈ぢや、私は本來、戰は好かぬ、血を見るのは忌ぢやが、それでも自分が已に戰場に立つてゐるのなら一歩退きたい時にも一歩踏み込まねば一分が廢る、昔の戰場で先祖直政直孝の胸に、高鳴した血は矢張、私の體の何處かにも流れめぐつてゐると見える、私は元來、三河武士の裔なのぢやからな、折角拔刀を手に持ちながら、後で敵の復仇を恐れて、背打を喰はして濟ませるやうな生ぬるい、中途半端な眞似をするのは、腰拔武士といふものぢや、私は假令、惡鬼羅刹と云はれても、腰拔武士に丈はなりたくない、腰拔武士になる程ならスッパリ武士を止める。

愛麿　では武士をお止めなされては？

直麿　それがいゝ／＼、武士をお止めなされ、父上様。

井伊　オヽ……止められるものなら寧て武士が止めたいのぢや。(俯いて暗涙を抑へる)

呂子　（畏つた聲で）　武士をお止めなされとは申上げられませぬ、唯、大老職を御辭退遊ばして、彦根の城へ御歸りなされるやうお願ひ申します。

井伊　彦根へ歸れる程なら、一思ひに武士を止めて、今度こそ私は禪寺へ入るのぢや……併し井伊家は徳川幕府と生死を共にせねばならぬ譜代の家柄ぢや、部屋住の十四男が、不圖も三十五萬石の大藩の主人となつた時、私は奈落の底から救ひ上げられたやうにも思つたが、その時の浮世の果報が、今日の拔差ならぬ手枷足枷を私の體に嵌めて了つたのだ、もう斯うなつてはのつぴきならぬ、譜代大名始め旗本八萬騎が、假令、一人不殘腰拔武士にならうとも、私の一家一門丈は最後の三河武士として、死花を咲かせねばならぬ、僅か二代の豐臣氏が大阪城で亡んだ時にも、集まつたのは烏合の兵ながら何十萬の徳川勢を腦惱まして花々しい最期の一戰をした、三百年の徳川幕府の末が、敵の大將首一つも見ずに、誰にでも侮るやうに愚闇々々倒れて了つては萬代までの恥辱ではないか？　與もよく心得て置け、若等もよく聽いておけ。

呂子　ハ……。

愛鷹　畏りました。

（次の室から、宇津木、田中、入來る。）

宇津木　恐れながら不計、襖越しに、殿の御述懐を承りまして、最早何も申上げる勇氣もございませんが、大獄の段落も付きましたし、攘夷猶豫の勅命も下りましたし、殿のお役はさし當り濟みましたやうにございます、この上、御一身を好んで危い場處にお曝らしなさるにも及びますまい、後は相當な方にお讓りなされまして、一旦高踏勇退遊ばすのがよい潮時かと考へられます、何卒御聽納の程を押して願ひ上げます。

田中　宇津木の申します通り、殿様が幕府への忠誠、國家への御奉公も、最早十分にお盡しなされた次第でございますから何卒、此際大老職を御辭退遊ばして、その後は蔭ながら將軍家の御爲めを計られますのが、萬全の策かと存ぜられます、何卒御聽容れ下さいますやう、……萬一御聽容れがない時は、田中雄助、一命を以て御諫言の覺悟で、まかり出ましてございます。

井伊　（二人を見て）　イヤ、汝等の忠義の程も疎そかには思はぬ、成程、今身を退けば一家も安らかで此一身も潔いには相違ない、併し、故將軍家が、今の幼少な上樣の事をくれ〴〵も頼むとの御遺命を忘れる事は出來ぬ、私が大老職に就いた日に、私の一身も一家も悉く公儀のために捧げる覺悟を定めたのぢや、世間では私が權勢の地位に戀々としてゐるやうに思ふものもあらうが、それは全然私の本心を知らぬものぢや、汝等が私のために一

命を拋たうとまで思つてくれるのも、私が又將軍家の爲めに此一命を拋たうと思ふのもつまりは皆一つ心ぢや、察してくれい。

（宇津木、田中「ハ……」と云つて平伏する。）

井伊　料紙があるか？……。（文臺から短册を取上げて、歌を認め）兩人、これを讀んで見てくれ。

宇津木　ハ……。（短册を受取って讀む）

春淺み野中の清水氷り居て
　底の心をくむ人ぞなき

（井伊、それを繰返して誦し、そつと眼を拭ふ。）

（田中、宇津木、ハッとばかり、聲を忍んで泣伏す、昌子の方も叫び入る、暫しシンとする、次の室からお靜の方が駈込んで、ヮッと聲高に泣く、後から長野主膳も眼を拭き〳〵入つて、低頭する。）

井伊　長野もまだ居たのか？　定めて疲れたであらう、下つて休めばよいに。

長野　ハ……不圖、宇津木、田中等の諫言を聞きまして、この大切の場合、殿のお心が動いてはと、祕かに心配して居りましたが、殿の御覺悟を承つて却つて宇津木、田中と共に、御諫言を申上げたくなりました。

井伊　イヤ、もう云ふな、皆も下れ、お靜、さう泣くではない。

お靜　ハ、もう泣きませぬ……今宵は私の部屋へお迎へする晝間の御約束でございましたから、何卒入らしつて下さいませ。

井伊　ウム、今に行かう、憂さ晴らしに琴でも聞かせい、支度はよいのか？

お靜　では早速、侍女をお迎へにさし出します……一寸とお先へ參つて、用意が出來ましたか見屆けませう。

井伊　オヽ、さうせい、皆も下れ……ア、長野は一寸と待て。

昌子　では御免蒙ります。（一同會釋、退場）

井伊　長野、疲れてる處を呼び留めて氣の毒ぢやが汝は先刻、幕府への忠義は即ち天朝への忠義ぢやと云うたな、眞實に然う思つてゐるのか？

長野　殿にも左樣な御考へのやうに心得て居ましたが？

井伊　ウム、私も元はさうだつた、併し此頃、少しづつ疑の蟲がかぶり始めたのぢや。

長野　（膝を進めて）それは何ういふ譯でございませう？

井伊　外でもない、私は國家の爲めに、外國と和睦して、港を開いた、これが幕府の爲めで、即ち天朝の爲めだと許り思つてゐた、處が開港の御勅許は下らない、却つて

違勅の罪を云ひ立てられて、公卿堂上方を始め、諸國の浪士浪人の輩が、それを潮に幕府を倒さうと企らんでゐる。幕府は進むにも進まれぬ、退くにも退かれぬ四苦八苦の羽目に陷つたが、私の頭に蔽ひかゝつた黒雲からふと一筋の稻妻が閃めき渡つた時、私の眼は、その靑凄い光の中で今この天下を動亂させてゐる魔物の正體を透かして見たのだ、そして慄へ上つて了つたのだ、それは悲しいかな、幕府封建の制度が、大地震に逢つた城の石垣のやうに根からぐらつき出してゐるのだつた。又それを機會に、誰も彼もが手ん手にそのぐらつく石垣を大地の上へ跡形もなく突きくづして了はうとかゝつてゐるのぢや、港を開いたのは、國家萬年の爲めではあらうが、それが却つて閘門を上げて幕府の礎を腐らせる時勢の急潮を誘ひ込んだのではないかと、私は何んだか空恐ろしくなつてゐる、天朝の爲めになる事が、幕府の爲めにならぬ事がある、主膳、何う思ふか?

長野　それは僭越ながら主君の御考へ違かと思ひます、開港の勅許こそはまだ下りませんが、已に鎖港猶豫の內勅も出ましたし、大獄もこれで首尾よく治まりが附きませうから、幕府は末永く榮えるに相違ございません、幕府への忠義は、やがて天朝への忠義と相成りませう。

井伊　汝は矢張さう信じてゐるのか？　汝は頼もしい、併し、蛇の道は蛇といふ諺もある、私にはくづれかゝつた封建世襲の制度を、一氣に突きくづさうとかゝつてゐる天下の浪人輩の氣持がよく分る、私が若し德川譜代の家に生れず、しかもまだ部屋住の身のまゝでゐたら、今頃は浪人組の仲間に入つてゐたかも知れぬからぢや、我々始め幕府の開港論者は、云はゞ釜のこはれた蒸汽船に乘合せて、逆潮に押流されてゐるのぢや、眼前に陸は見えてもそこへ着ける望はない、攘夷論者は頑くなに帆前船を操つてゐるやうなものぢやが、順風に吹かれて時勢の潮先に乘つてゐる、やがて我々の運びかけた積荷まで奪ひ取つて何時の間にか港へ入らう、彼等は勝つ、我々は負ける、これも底から動いて來る時の運ぢや、……世の成行ぢや。

長野　（憂はしげに）殿……殿……あまり御心勞つゞきで何うかなされたのではございませんか？　幕府を倒して、取つて代らうとするのは、薩州長州の諸藩、それが天朝の御名を騙つて、天下の動亂を企んでゐるのでございます、和宮の一條も、それを未前に禦ぐ爲ではございませんか？

井伊　フム、德川幕府の後に、薩州長州の幕府を立てようとする計略もあるには相違ない、それを押へる爲めに姉小路局を京都へ逗留させて公武・和のかけ橋に、和の宮

の御降嫁を内々斡旋させてゐるのぢやが、併し今後は如何なる幕府が現れようとも永くは持つまい、貴賤上下の隔てを取つた四疊半の茶室の世界がやがてそのまゝ天下に擴がつて行かねばなるまい……時勢が變つた……時勢は變る……。

長野　殿、左樣の事を仰りましては德川家は何うなります？

井伊　私の體は二つあつても足りないのぢや、德川家へ對しても死なねばならぬ、又德川家の爲めにも死なねばならぬ。

長野　弱い氣を御出しなされず、何故、飽くまで幕府萬年の爲めにお生きなさらうとは仰りませぬか？

侍女　（入來る）殿樣、お部屋樣からのお使ひで、お迎に上りましてございます。

井伊　ウム、今に行く……今に行く……先へ歸つて居れ…………。

長野　何卒、チトお心の休まるやうに御遊びでもなさつて、御勇氣百倍するやう、幕府の爲めにも、又殿のためにも、お願ひ申ます。

井伊　汝は何迄幕府の永い行末を信じてゐる、信ずる者は幸ぢや、長野、私は汝になりたいぞ。

第三場　お靜の方部屋

二重屋臺、お靜の方の部屋、廻り緣の下手は長廊下、庭先には植込の萩の花が眞盛りで、上手の蔀門の方へつゞく飛石を吹き埋める許りに見えてゐる、青い月光が靜かに、その上にさしかゝつてゐる、蟲の音が聞える。

○侍女、二人、近江八景を描いた金屛風を座敷へ立て廻らしてゐる、お靜の方はそれを差圖してゐる。

お靜　ア、もうそれで善からう、さうして置けば後のものは大丈夫、隱れて見えはしない、いくら殿樣のお眼が光つても、ギヤマンの屛風でゝもなければ、その後に何があるか、お見拔きなさる事は出來ますまい、それからあのお銚子の仕度も善いね、私が云ひ附けた通り、手筈を間違へてはいけませんよ、始めは黃色な、普通のお酒、後のは赤いのだよ、それからあの香を焚くのと、燈火をつけ替へるのと、皆、私の云ひ附け通り間違へないでおくれ、いゝかい。

侍女甲　ハイ、委細畏りました、お差圖通りにいたします。

侍女乙　萬事手筈を間違へませぬやう氣を附けてはいたしますが、ひよつと殿樣がお怒りなされて、私共がお咎を

受けるやうな事はございますまいか？　それが氣がかり
でなりませんが。
お靜　（微笑）そんな事があるものかね、此頃殿樣があま
り御心勞なさり過ぎてあのまゝでは今に御病氣を出さう
なので、お憂晴らしの爲めに、私が一趣向したのだから
ね、何、唯、殿樣をアッと云はせて、それで一時でも御
氣持をかへさせたら、それで私の願も適ひますし、殿樣
も御滿足なさるのだよ。萬一お咎を受けるやうな事があ
つたら、その時は皆、私が身一つに引受るから、汝等、
少つとも心配する事なんかありませんよ。
侍女甲　否え、私はもうお咎を受けても受けませいでも、
殿樣のお憂晴らしになります事なら何のやうな事でもい
たします。此頃、世の中が騷がしくて、殿樣も並々なら
ぬ御心配をなさつてゐやうに承つて居りますが、永らく
此のお部屋へはお足踏もなさらないので、私等までそれ
をチッとお怨みにも存じて居りました、お部屋樣のお胸
の中も、蔭ながらお察し申上げて居りましたのに、今宵
ふと御越なされると聞いて、嬉しうもございますし、口
惜くもございますしホヽヽ、お免遊ばせ、このやうな
事を私等風情が申上げるのではございませんが、つい口
がすべりました、まア何方にしましても、少しは殿樣を
何うかしてお上げ申さねば、胸が晴れぬやうでございま
すものホヽヽ。
お靜　（笑顔）汝等も然う思ふかい、私も今夜の寄合を取
逃してはならないと思ふから、もう一生懸命なんだよ、
それに皆がぬかつてくれては困りますから、よく氣を附
けてね。
侍女乙　さう承りましては、私も引けは取りません、この
上、何のやうな役目でも仰り付け下さいませ。
お靜　イヤ、この上、別に云ひ付ける事もないが、汝は床
の間へ御燈明を附ける役目だつたね、あれを忘れぬやう
に。
侍女乙　ハ、心得て居ります、あの地獄の繪圖は晝間見ま
しても、ゾッとするやうに恐うございましたが、お燈明
の火で見ましたら何んなにか凄い事でございませう
侍女甲　御寶藏の中から出して戴いて、持つて歸りました
時も何んだか氣味が惡くて、擴げて見るのが怖かつたの
でございますが、二人で漸つと床の間にかけて、一目、
見るとこの人が、ワッと聲を立てたのでございますよ、
後から可笑うもなりました。
お靜　誰にも云つてはいけないんだよ、云ひはしなかつた
ね？
侍女甲　大丈夫でございます、……あの赤い幟は貴方樣の
侍女衆が、そつと屆けてくれたのでございますが、あの

方等も、お殿様ゝは内證だと申して居た位でございますから

侍女乙　あの赤い帷は何うしたのでございませう？何にお使ひなさつたのでございませう？

お靜　あれは、井伊家の赤備への一つなんだよ、昔、陣幕に用ひられたので、あの布地には斬られた人間の血がかかつてゐるさうなの。

侍女乙　アラ、まア、血で染めたのでございますか？

お靜　さうさね、……然う云つても善いだらうよ。

侍女甲　御當家は名だたる武勇の御家でございますもの、別に不思議はございません。

お靜　けれども血の祟りといふものは恐いもんだからね……
……その爲めにお家が絶え、お胤が絶えて了つては大變ぢやないか？　私はそれが恐ろしいのだよ。

侍女乙　御尤もでございますとも、そんな事があつては大變でございます。

お靜　だから皆、私を助けると思つて、差圖通りにしておくれ……お膳もよし、御酒肴の用意もいゝね。

侍女甲　ハ、整うて居ります。

侍女丙　（入來る）　殿様がお越しでございます。

お靜　さうか……ではお迎へしませう。（廊下へ行く）

井伊　（入來る）　ア、大分、待たせたな……　秀之丞は退つて居れ。

秀之丞　ハ……。（退場）

お靜　何卒あれへ……　御馳走の用意も出來て居ります。

井伊　然うか……（侍女等を見て）皆も御苦勞ぢやの。

お靜　皆の顔もお見忘れなさらないで、忝うございます。

井伊　（微笑）　チと耳が痛いな、……だが私は一度見たものはメツタに忘れはせぬ、唯この頃は半時も天下國家の事が忘られないので、傍の事は忘れたやうに思はれるのぢや、イヤ、今夜は久しぶりぢや、何も彼も忘れて、くつろぎたいものぢやの。

お靜　何卒、然うなされませ、お庭の萩の花も、もう色はさめましたが、月の光で眺めますと、又何んとも云はれぬ風情がございます、私は毎晩、煢然と一人で眺めまして、鹿の音が聞きたいやうな氣持許りいたしました。

井伊　さうか？　さうでもあらうの……オ、この屏風は文晁の近江八景か……石山寺の月、堅田の落鴈、三井の鐘……さゞ波の音も聞えさうぢや、彦根の城は霧にかくれて見えないが、なつかしい……なつかしい……私が矢ツ張、唯の彦根の藩主でゐて、こんな夜は湖水に舟を浮べ、心靜かに月でも眺めて暮らす身分でゐたかつたた、……イヤ、私は一體、湖水の傍で産れて、湖水の傍で育つたのだから、さゞ波も立たぬ、ヒツソリした湖水の心

をヂッと見つめて、そこに映る天地の祕密、三界の不思議を考へながら一生暮らすのが、自分の本性には合つてゐたのだらう、幸か不幸か、氣まぐれな運といふ奴が、不計も私をその靜かな湖水の傍から、大海の眞ン中へつれ出して、天も覆り、地も傾きかける、怒濤狂瀾の荒れ狂ふ急潮の流れに、國家といふ大船をあやつらせて、生きるか死ぬか、絶體絶命の難處に立たせた……ア、、私は再びこの眼で琵琶の湖は見られまい、せめてこの屏風の繪でも、飽るほど眺めてゐたい。（見入る）

お靜　左樣な事を仰つては氣にかゝります、歸れますとも……歸れますとも、お近い中に彦根のお城へお歸りなされて、琵琶の湖でお舟遊をなされる時が參りませう、是非ともさうなさるがよろしうございませう。

井伊　フム、體が二つあつたらそれも出來ようが、今となつてはさうした夢も見てはゐられない、ア、久しぶりで琴でも聞かせい。

お靜　ハ、折角、御慰みに、お耳に入れようと思つて居りました、……（侍女へ）琴を……それから御銚子を……。

（二人の侍女、起つて行く。）

井伊　萩の花にはもう白露が降つてゐるやうぢやの、蟲の音もする、……今、天下の人心は亂れ騷いでゐるが、天地は何時もヒツソリして、寂びしいものぢや、そこへ眞如の月影がさしかゝつてゐる、私は矢ツ張心の故郷へ歸つて來たやうな氣持がする。

お靜　（笑顏）左樣でございますか？　何んだか斷うして見上げますと、殿樣のお顏色も、日頃とは變つて、落着いた柔和な御相になつてゐらつしやるやうでございます、假令一時でも近江の國へお歸りなされた氣で、打くつろいで下されましたら、このやうな嬉しい事はございません。（侍女杯盤を運び、琴を運ぶ）……汝等はお次へ下つておいで……いゝかい（眼配をする、二人の侍女退く）さア、まア、一つお酌をいたしませう、この朱塗りのお杯の中にも、近江八景が浮んで參ります、さア、お手にお取りなされませい。

井伊　オ、然うか……成程……八景の景色を眺め、八景の景色を吸ふのか？……心の故郷へ歸つた許りではない、一時でも產れ故郷の人になつたやうな、なつかしい氣持に醉ふも一興ぢやの、……酌をしてくれ。

お靜　さア、なみ〳〵酌ぎませう……それから琴も序に、故郷の唄をお聞かせ申上げます。

井伊　（微笑）ウム……それも又面白からう……彈け。

お靜　……（唄ひ出す）

　鳰の海面見渡せば、たゞひ浪間にありあけの、月

影さへて白妙の、雪をかけたる勢多の橋。

井伊　アヽ、何んだか絲の音色に引入られて、琵琶湖の傍へ歸つたやうな、幻が眼前にさして來る。まア一つ、ささう。

お靜　難有うございますが、ついでに私の胸……私の心を殿樣に聞いて戴きまして、それからお杯を頂戴しませう。

井伊　さうか……それもよからう……では聞かせて貰はうか？

お靜　……。

薄き情をそりはへて、いとはかなくも泣きくらし、包むにあまる胸の火に、よすから身をやこがすらん。

年ごとに逢ふとても、ぬる夜すくなき契りかな、歎けどやはりてりそふる、影にぞ千々のかなしさ。

（彈き了りてワッと泣く。）

井伊　これは何うしたのぢや？　何うしたのぢや？　靜は兎角癇が高ぶり過ぎる、今笑うてゐるかと思へばもう泣いてゐるし、喜んでるかと思ふと怒つてゐる、矢張これも一つの病氣ぢやらう、今宵は私が折角來たのぢやから、泣顏なんか見せず、機嫌よく相手をして貰ひたいな？

お靜　（涙を拭いて）御免遊ばせ……これも私の病氣でございませう、けれども私をこのやうな病氣におさせなさつたのは、殿樣、貴方のせゐでございますよ。

井伊　（笑顏）私のせゐぢや……馬鹿な事を、それは汝の勘違ひぢや、女の廻り氣といふものぢや、汝は相不變、奧の事を氣にしてゐるな？

お靜　奧方さまは、お若い方でございますもの、殿樣より十八もお年がお若いのでございますもの、世間の親等が娘御をいたはるやうな氣で、心から心から可愛がつてゐらつしやるのでございませう、それはもうお察ししちやゐますが、それにしましても、あんまりな御見限りやうぢやアございませんか？　斯うして此部屋へ入らつしやるお廊下をお忘れなさらなかつたのが、不思議な位でございますもの……。

井伊　今宵はそのやうな愚痴を聞かせる約束ではなかつたではないか？　天下の一大事が起つてから私はまるで禪坊主のやうな氣で暮しつゞけて來たのぢや……（考へて）禪坊主らしくもないと云はれりや、武士が戰場へ出た氣だと云つてもよい、奧とは一つ屋根の下へ起臥して

も、私は彼女が傍にゐるのも忘れてゐる、寢ても醒めても氣にかゝるのは天下の事ぢや、幕府の行末ぢや、思へば女の身でたよりなくもあらう、怨みでもあらう、奥も可哀さうぢや、汝も氣の毒ぢやが、まアこれも致方がない、折角の事だから、今宵は汝も何も云はず、一刻千金の、貴い時を面白可笑しう過さうではないか？　まア一つ飮め。

お靜　ハイ……では、つい出たがる愚痴も怨みも胸一つにをさめまして、お杯を頂戴しませう。（つと寄添うて）あの殿樣、お酌をして下さいますか？

井伊　（頷いて）ウム……してやるぞ、さア注がう。

お靜　（なみ／＼と受けて）難有うございます……何んだか勿體ないやうでもございますが、いかに大老樣でも御老職樣でも、靜の眼には矢ッ張貴方でございますものね……彥根の、埋木の舍で三百俵のお部屋住ひの時から、始終お側にお附添申してゐた私でございますものね、靜や、灘の銘酒を貰つたから鯛のあらひが欲しい、お鳥目は持つてゐないかと仰る、ハイ、こゝに私の內職の繭代の殘りが一分ございますから、買はせにやりませうと申上げる、喜んで莞爾御笑ひなさる、……あの頃が一番嬉しうございましたけ、奥方樣なんか殿樣の御難儀なさつてた昔の事は御存じない、お姫樣育ちだから矢ッ張り話せませんわ、それに殿樣は奥方樣許りお可愛がりなさつて。

井伊　コレ／＼もうそんな事は云はぬ約束だつたぢやアないか？……イヤ・私も寧ろ昔がなつかしうなることがある……あの頃はよかつた。

お靜　何故私を奥方にして下さらなかつたのでございます？……身分が違ふからで、若樣まで產んだものを、あんまりぢやアございませんか？　一體身分が違へば、奥方になれぬといふのは、あんまり無理な御規則ではありませんか？　あの時、殿樣は何うお考へでございました？

井伊　（考へて）ウム、……汝も矢ッ張、丁字屋の……男だつたのぢやな？……道理ぢやが、私一人で何う思つても仕樣がなかつたのだ、イヤ、今から思へば、辛い、情ない氣がしてゐたあの頃の暮らしの方が、却つて、自分の本心を僞りもせず、傷けもしないで、產れたまゝの姿で活きてゐたのだらう……杯を返せ、私は今宵は飮むぞ、何も彼も一切を忘れるまで飮みたいのぢや。

お靜　（杯をさし）さア、お酌いたしませう、御存分に召上りませ……天下の事も幕府の事も、それからあの奥方樣の事も、スッカリお忘れ遊ばして、唯、この靜許りを御相手に……よろしうございますか。

井伊（苦笑）その序に、汝の事も忘れ、自分の事も忘れて了ふまで飲みたいのぢや。
お靜　眼の前に坐つてゐる私の事までお忘れなさるのでは何んだか心細うございますわ。
井伊　さういふ間に酌をせい……オヽ、何か變つた憂さ晴らしの趣向があると云つたな？　醉ひ切らぬ中に、それも見せてくれ。
お靜　もつとお醉ひ遊ばしてからお目にかけませう……さ、一息にお干し遊ばせ。
井伊　汝にも一つさゝう。
お靜（照つた顏を見せて）難有うございます……もう私は眼中が熱うなりました。
井伊　汝も相當にいける口ではないか……構はず飲め……ア、月はいよ／＼冴えて來た、蟲の音が澄んで聞える、……これで天下の人心が亂れ騷いでゐるといふのは何んだか不思議だ、嘘のやうだ。
お靜（媚びた眼色で）アレ、又してもその樣な事を仰つてはいけません、そんな事は一切お忘れなさる筈ではございませんか？
井伊（少し醉の廻つた體で）ア、さう／＼……酌をせい、酌をせい……大分體が熱つて來たやうだ、……屏風の琵琶湖の浪がうねうね動き出してるやうだハヽヽ、。（笑ふ）
お靜　靜も大さうよい心持になりました、殿樣のお顏もつやつやして光つて參りました、お年齡よりもお若くなられたやうに見えまして、嬉しうございます。
井伊（顏を撫でて）さうか？　さうか……
「この菊、水に落ちそひて、不死の藥となりしより、流を汲んで齡を延ぶ、されば誰とても飲めば壽も活藥、靈山の妙法、酈縣の菊に止まり、不老の藥となるとかや、君菊水を聞召し、天下を治め給へや……。
お靜　眞實に殿樣も不老不死の藥でも召上つて御壽命長遠にゐらせられるやう、そればかりを靜は祈つて居ります。
井伊（少し體をくづして）不老不死の藥はこの酒ぢや、酒に醉うて、うつゝ心で、涅槃の境に入つた時が、即ち人間の不老不死ぢや、老るやうに、死ぬやうに出來てゐる人間に、天はこの慰めの小さい杯を與へた、つげ……つげ、なみ／＼とつげ。
お靜（酌をして）……殿樣の仰る通、人間は老るもの、死ぬものと定つては居りますが、他人の刃にかゝつて非業

の最期を遂げるやうな事がありましては、死んでも浮ばれませぬ……劒難の御相のあるといふ殿樣は、今の中に、何んとか御思案遊ばすのが、肝心でございます。

井伊　今宵はもうそんな事は云ふな……折角不老不死の藥が利きかゝつて來てゐるのに。

お靜　私はもう醉が廻りかけましたが、それでも矢ッ張若樣等の事は、一刻も忘られませぬ、イヤ、醉へば醉ふ程、若樣等のお身上が、氣がかりになつて來ます。

井伊　何が氣がかりぢや？　彼等も子供のない奧に可愛がられて、機嫌よく育つてゐるではないか？

お靜　（ヒステリカルな調子で）殿樣……その若樣等の身の上にも、やがて人の怨みが報うて參ります、因果がめぐつて參ります、前生で嘘を吐いてさへ此世では啞に產れ、盜みをしたら、手無い坊に產れるとさへ云ふではございませんか？　イヤ、後の世まで待ちません、人を殺したら乾度人に殺されます、斬つた者は斬られる順番が廻つて來ませう、あの子等……若樣等も今にそんな慘らしい目に逢はれませう、ア、さう思ふと堪りません……一刻もヂッとしてゐられません。（身悶えする）

井伊　何を云ひ出すんだ？……又汝の病氣が出たのか？……今夜はもうそんな事は一切云はぬ聞かぬ約束ではなかつたか？……さア、憂さ晴しの趣向でも見ようかの？

お靜　よろしうございます、お目にかけます。（手を拍つ、侍女、銀色の銚子を運ぶ、お靜囁く）……さアも一つ、お酌をいたします。

井伊　フム、つげ……何處かで香を焚いてゐる、……抹香臭くなつて來た……（云ひ〳〵醉眼で見て）何んだ？　この酒は眞赤な色をしてゐるではないか？

お靜　（凄く笑つて）人間の生血でございます……あの血の池地獄の底から酌んで來た酒でございます……侍女衆、燈火を。

（侍女、甲乙、緋絹で張つた行燈を持運んで、燭臺と取かへる。）

お靜　屛風をお取りよ。

（屛風を疊むと、室内は紅い帷を張詰め、床の間には、赤い燈火に照らされた八大地獄の一幅、香の煙が濛々と立上る。）

お靜　（呪ふやうな聲で）殿樣、貴方は何十人といふ罪もない人等の首を斬つたり、重い責苦に逢はせたりするやうに仰り付けなさいました、責苦に逢ふ人等の怨みも恐しいが、それよりも生命を取られる者の怨み、憎しみは何十層倍か分りませぬ、その報いで、貴方は今、生ながら、八大地獄の底へ落ちて、血の池地獄の眞ン中に沈てゐなさるのでございますよ、さアよく〳〵四邊を御覽じませ、

貴方は今の世でも、後の世でもかうした血だらけの、恐ろしい處で、苛責をお受けなさらねばなりませんぞ。

井伊　（室中を見廻はして）　ハ、ア、これが憂さ晴らしの趣向と云ふのか？　惠心僧都の地獄の繪圖を寶藏から持出して來たな、成程、私は今、その地獄の繪圖のかゝつた眞赤な室の中で、眞赤な酒を飮んでゐるな、だがこれは血の池地獄ではない、酒地獄ぢや、イヤ、私は何んだか井伊の一家の赤備への陣中で軍の門出の祝酒でも振舞はれてゐるやうで、武者振ひでもしたいやうな氣持がするのぢや…… この酒はフランスの舶來品を丁字屋からでも取寄せたのであらうな、……よい香ぢや、……よい味ぢや。

お靜　（慄へた聲で）　殿樣、貴方は恐ろしくはございませんか？　下役人が生命丈は助けようとする者を、上役の身で斬つて了へとお云ひ付なさるなんて、それでは罪も報も皆殿樣の御身一つにふりかゝつて參ります、御一家御一門に、その怨みも呪ひも皆落ちかゝらずには置きません、……ア、首を切られた人等の屍體からドロ／＼流れる生血…… 首のつけ根からパッと噴き出す血沫が眼の先に見えます…… ア、此世ながらの血の池地獄へ斬られた人も、斬つた人も、逆落しに落されます……あの八大地獄の繪圖を、一目御覽じませい、閻魔大王の眼はギロギロ光つて私等を睨み付けてゐます、馬頭、牛頭の惡鬼羅刹が、火焰のやうな舌を吐いて、銀の牙をむき出して……ア、私は恐ろしい……恐ろしい……殿樣、まだ遲うはございませぬ、一家一門の爲め、御身の爲め又若樣等のために、あの命令とやらを取返して、皆の生命丈は助けてやつて下さいませ、情は人の爲めではございません、何卒お願ひします…… 靜が生命にかけてお願ひ申上げます。

井伊　コレ、靜、汝は氣が變になつたやうではないか？…………私を脅かさうとした趣向で、却つて自分で慄えて了つてゐる、……氣を落付けい、……氣を落付けい。

お靜　（泣い叫りながら）　私は氣が狂ひさうでございます…… 自分で血の池地獄へ落ちたやうでございます……若樣等を　……若樣等を……（侍女を呼んで）　若樣等をお迎へしてくれ…… 若樣等をお迎へしてくれ。

侍女甲　ハ…… 若若樣は、先刻からお廊下までお越になつて居られます。

お靜　早くお連れ申せ……そして汝等は下つて居れ。

侍女乙　ハ、畏りました……若若樣、何卒こちらへ御入り遊ばせ。

直麿　……父上、暗うございますね。

愛麿　……ア、怖い、地獄の繪圖がかゝつてゐる。

お靜　ア、若樣等、よく入らつしやいました、奥方樣がお約束通り、およこし下さつたのでございますね、……よ

く入らつしやいました、お父上樣へお願ひなさつて下さい、お家の行末が案じられます、御二人樣のお行末が案じられます、人を呪はゞ穴二つとやら、助けてよい人の生命は助けて上げて下さるやう、お父上樣へ……殿樣へお願ひ下さいませ、貴方樣が眞實にお可愛いければ、父上樣も……お殿樣も乾度御思案をしかへて下されませう、お願ひ下さいませ。

直麿　父上樣…… 助けてよい人の生命は助けてやつて下さいませ、お願ひ申ます。

愛麿　お願ひ申ます。

お靜　（地獄の繪圖を指し） 御覽じませ、……罪もない人等の首を斬つたり、生命を取つたりすれば、未來ではこのやうな血の池地獄へ落ちて了ひます、何方も此方も皆眞赤な、生血に塗れた恐ろしい處で、生變り、死變りも生までも苦しまねはなりませぬ、牛頭馬頭の苛責を受けねばなりませぬ、此世では人の怨みやら、呪ひやらで、身も家も、子々孫々までも皆滅びて了ひます、若君樣、貴方々もあの繪圖にあるやうな、みじめな目にお逢ひなされてもよいのでございますか、……イヤ、やがて此世で、下人の手にかゝつて首を斬られるやうな、慘い目にお逢ひなされるより、いつそ、靜が手にかけて、樂にお死なされるやうにして上げます…… その方がすつとましではございませんか？

直麿　父上樣、何卒、靜の申す事をお聽入れ下さいませ、罪のない人を斬るのはおやめ下さいませ。

愛麿　父上、何卒、皆の生命丈は助けてやつて下さいませ、お願ひでございます。

非伊　（諭すやうに） オゝ、私も罪のない人等を殺さうとは思はぬ、イヤ、假令直惡重罪の人等でも助けてやりたいのが本心ぢや、汝等にはよく分るまいが先刻も云つた通り、父が德川幕府の祿を食ます、又三河武士の家にも產れなんだら、假令、人の首を斬れと云ひ付ける者があつても斬りはせぬ、殺さねばならぬ程の罪人でも殺しはすまい、けれども父は今、天朝の爲めには罪人とは云へない者、イヤ、生かして置いたら、却つて我日本の行末の爲めにもならうと思ふ人等でも、德川家へ對し幕府へ對して、武邊の意地で、助けては相濟まぬ、斬らねばならぬ苦しい地位に立つてゐるのぢや、假令、生たから血の池地獄へ落ちようとも、武士としてすべき事はせねばならぬ、先祖の魂が私の魂の中に生返つて來てゐる、私自身は、したくない事でも、しろと云ひ付ける、私は苦しみ悶えながらも、笑つてそれをせねばならぬ、私は三河武士の最後の一人になる運を負つて產れたのぢや、もう何んにも云つてはならぬ。

お靜　何うあつても？……何うあつても？……エ、ではもう御家の運もこれで定りました、彦根の藩も天下の憎みを受けて、燒滅されるか、打滅されるか？……　殿樣は自業自得の御覺悟でも、若樣等がお惜しい、……若樣等を人手にかけては慘らしい……では恐れながら靜が……（やにはに短刀を拔いて二人の子供に擬す）……殿樣、恐れながら、靜がこのお二人の若樣等の御生命をお斷ち申まする、生きてのお苦しみを見せるより、生みの母が手にかけて、お瞑目なさるのを待つて、靜もお供を致しまする。

直慶　サ、殺してくれい。

愛麿　お靜の思ふ通りにしてくれい。

お靜　（泣ながら）……殿樣、若樣等がお可愛くはございませんか？

井伊　（落着いた調子で）我家は今の中に、寧そ斷絶させて了つた方が潔いかも知れぬ……罪無い人の殺される前に、二人の我子を殺すのは、せめてもの、我罪滅しの種にもならう、……立派に殺してくれい。

お靜　エ……。（短刀を投げ出し、ワツと許りに泣伏す）

愛麿　靜、殺さねば自害せうか？

直慶　父上が死ねと仰つたから、坊も死ぬぞ。

お靜　（さめ／″＼泣いて）……矢ッ張……矢ッ張、若樣等に刃は當てられませぬ……何うしても刃は當てられませぬ……何處までも剛情な殿樣、お氣の強い殿樣……ア、ア、生き存へて、殿樣始め御一門が此世ながらの血の池地獄へお落ち遊ばすのを見てはゐられませぬ、そんな苦しい目を見るより、私が一思ひに、お先へ死んでのけます。（短刀を逆さに持つ）

井伊　エーイ（と一喝、短刀落ちる）汝が死ぬのは無用ぢや。

お靜　ぢやと申しましても……生きてはゐられませぬ。（再び短刀を拾ひにかゝる）

田中　（萩の花の蔭から躍り出でて）お待遊ばせ。（短刀を奪ひ取る）……ハ、不意にお座敷を驚かせて恐れ入りますが、實はお邸内とはいへ、時節柄、蔭ながら我君の御守護をもと思ひまして、先刻からあれに控へて居たのでございますが、お靜の方は、何んだか、又病氣が出ましたやうに思はれまして、ハラ／＼して居りました、そしてつい我を忘れて飛び出しましてございます。

井伊　雄助か……靜は病氣ぢや……可愛さうにのう

田中　お靜の方、何卒御氣を確かにお持ち遊ばせ、

お靜　（半狂亂のやうに）殺してくれ……殺してくれ、生きながら血の池地獄へ落ちるより、先へ死んで了ひたい……死んだがましぢや。

田中　何卒、御氣を落着けなされませ、御前でございます。

お靜　刃物を貸せ……刃物を貸せ……私は死ぬ……死に度い……。

田中　燈火が暗うございます……侍女衆、燭臺を……燭臺を……。

（侍女、燭臺を持來る。）

侍女甲　若君樣御迎へに、奧方樣がワザ〳〵お越しでございます。

井伊　これへ通せ。

お靜　ア、奧方にお目にかゝるのも恥かしい……殺してくれ……死なせてくれ。

田中　何卒、氣をお落着けなされませ。

昌子　（入來る）若等のお迎へに上りました……お靜どのは何うかなされたのでございますか。

お靜　（身悶えして）ア、奧方さま……面目なうございます……死損ひました……殺して下さいまし、殺して下さいまし。

昌子　何卒、氣を落着けなさつて……。

宇津木　（出て來る）若君樣御迎へに、奧方樣のお供をして參りました……お靜さまは、お癇が高ぶりましたやうでございますな。

井伊　ウム、例の病氣が出たのぢや……宿へ下つて靜かに養生させい。

宇津木　ハ……畏りました。

井伊　小林吟右衛門が彼女の宿元になつてゐるから、六之丞、よろしく取計つてくれ。

宇津木　ハ……ではお靜樣、彼方へ參りませう、宿へ下つて靜かにお養生なされませい。

お靜　エ、宿へ下つて？……忌ぢや〳〵、生きても死んでも、こゝのお邸内は動きません。

昌子　お靜どの…殿の仰せぢや、宿へ下つてゆつくり御養生なされい。

お靜　エ、殿の仰せ！……奧方に謀られたのぢや、策に乘つたのぢや……口惜しい……口惜しい。（ともがく）

宇津木　さア、參りませう。

昌子　氣が變になつたやうでございますね。

お靜　（眼尻を吊上げ）エ、謀られた、……騙られた……年の若いくせに油斷のならぬ腹黑ぢや。

宇津木　さアお越しなされませい……さア……。（力づくでつれて入る）

井伊　（ため息）不憫なもんぢや……八大地獄の繪圖などかけて、私を脅さうとて、却つて自分で嚇かされて了つた、女は矢張淺はかぢやな。（昌子の方を見る）

昌子　ハ……でも殿様を思ふ一心からでございますもの…
……女は皆さうでございます。

井伊　愛するにつけ、憎むにつけ、女は皆眼先許りぢや、世の中の事が萬事それで濟むものなら、男子は皆苦しみはしない……ア、奥は若等をつれて行け、もう諫言は一切無用ぢや。

昌子　……何も申しますまい……若様、さア一緒に行きませう。おやすみ遊ばせを仰い。

愛麿。直麿　父上様、おやすみ遊ばせ。（二人を連れて入る、

井伊　雄助、そこの屏風を引き廻せ……オヽ、これで元の近江八景ぢや……血の池地獄とは紙一重ぢやのハヽヽ、ヽ、

田中　成程、八景の縮屏風……故郷なつかしく存じます。

井伊（頷いて）ウム、……汝も里心がついたか？……アア武士といふものは情ないものぢやの……誰がこんな商賣を始めたんだらうな？

（半鐘の音、邊りが騒がしくなる。

秀之丞（かけ來る）申上げます將軍家大城、御失火にございます。

井伊（驚いて起上り）何に、大城失火？……慥かと見屆けて來い。

秀之丞　ハ……。（と退く）

田中　御失火とは、大事でございます……ア、空が赤くなつて參りました。（庭へ出て見る）

井伊（庭へ下り）ア、成る程、空の雲が眞赤になつた……折角箒星が影を消したかと思ふと、又火の雲が、月夜の空に流れる、ア、御失火の場所は何處だ？　分らぬか？　早く聞いて來い。

（田中が驅け行かうとする處へ、宇津木、河西、その他の家臣、提灯を手にして庭先へ入り込む。）

宇津木　御本丸失火にございます。御出馬遊ばしますか？

井伊　フム、幼い將軍家のお身の上が氣にかゝる。

田中　お供揃ひいたさせませうか？

井伊　ア、將軍家にさへお怪我誤ちがなければ善いが……。

長野（かけ來る）御本丸、御炎上、誠にとんだ事でございます、併しこのどさくさまぎれ、御出馬なされて萬一の事があつては成りませぬ、誰かに、出仕を仰付け下さるやうお願ひします。

井伊（頷き）ウム、では長野、行け……代つて行け、皆も急げ……。

長野　ハ、畏りました……一同急ぎませう、

（皆々出て行く。）

井伊　アヽ、たうとう打上げたやうだ……火の粉がくつれて飛んでゐる……焔の舌がチラ〳〵見える……ア、將軍家の御本丸に火が移るとは……、德川家の本丸に、火の手が上るとは。

（嘆息、憂悶の表情で空を見上げる。）

第四幕

第一場　品川妓樓

安政七年が萬延と改まつた年の三月二日の夕である、品川妓樓、相模屋の二階の大廣間、正面は障子、上手は雛壇を飾つて床の間につゞく違ひ棚、きらびやかな模樣の書襖、下手は一面に同じ模樣の書襖、前へ寄つて、段階子の上り口が見える。

踊つたり、歌つたり三味線の音の響いてゐる中に幕が開く。

「アメリカのごしゆ國は、交易れがひにきんたのハルリがつかひにきたら、浦賀もいそいでおひ〳〵御注進、江戸も諸國も大騷ぎ、鐵砲鍛冶やは穴をほる、馬具やは皮はる、鎧のなどしする、俄かに砲術軍學それから稽古する、そこで神佛祈りたゝ、程なく神風吹くであろ、日本呆れる、アメリカは怨をうけて流れます。

幇間が踊つてゐる、醉つぶれた丁字屋吟三、正面に、手代長助、忠藏左右に居流れて、遊女お瀧、お朝、その他藝者、新造、大勢の一座である。

吟三　ヤ、御苦勞々々、この大津繪節はなか〳〵面白い、踊りも旨いもんだが、あの結末の文句、アメリカは怨をうけて流れます――あれがいけない、あれはお先眞暗な攘夷黨の浪人等の氣に入るかも知らんが、貿易の開けたお庇で金儲のたんと出來る此方等のやうな商人には禁句だ、何んとか變へたら善いなア。

長助　左樣でございますな、港の開けたお庇で、商人には世界が取引先になつた譯でございますし、日本の國だつて、追々金持になれませうからアメリカ樣とでも云ひたい位でございますア、ね、若旦那。

忠藏　長助さんの云ふ通り、これから日本が段々開けて行つて、皆の懷都合がよくなつたら、それこそアメリカ大明神樣々なんて、手を拍いて拜むやうな時節が來るかも知れませんぜ。

幇間甲　ヱ、御尤さまでございますか、手前等はアメリカから金が降つて來ても、來なくつても一向その自分等の懷合に關係ございません、唯旦那樣のお懷都合さへよく

なれば、それが即、自分等のお懐都合だと斯う考へてゐるのでございます、まアさう太平樂をきめ込んで置かないと、商賈冥利に盡きようていふものでございますからね、へ、、、。

幇間乙　イヤ、左様々々、世間では貿易が始つて、金銀が流れ出すの、諸式が上つたのと、何の彼の苦情を申しますが、此方共は、鼻の下を旦那へお任せしてありますから、一切そんな御心配なし、まア百萬石の御殿様と同格だと、斯ういふ大風な事を考へて居ります、これで長生をしなけりや、閻魔さんの方で戸迷をする奴でございますアハ、、、。

吟三　ウム、さう聞きやアお幇間つてものは呑氣千萬な商賣だなア、お客に世間の金を喰へ込ませて、それを自分等が喰へ込まうてんだから何んの事はない、お客は鵜の鳥で、君等は鵜使ひ見てえなもんだなハ、、、、。

幇間甲　處が旦那、有様うを申ますと、この節ではさうしたお大盡様にはメッタにめぐり逢ひませんな、矢ッ張景氣の善い所はウント善い代りに、悪い所はドカ落と見えまして、此方等は込で行つても、まアおあまりもの丶お宛飼といふ居候格に直りさうになつて來たんでございますよへ、、、。

幇間乙　百萬石のお大名が、急に居候格に下つちや何が何やらこの頃の金銀相場のやうに、狂ひ方がチと酷うございますが、一體世間の調子もチと狂つてるやうに思はれますなへ、、、斯う話しが理に落ちちや相すみません、ア、コリヤコリヤ〳〵又踊らうか？

吟三（懐から取出した金を盆に盛つて）チッとでも景氣の悪い事を云ひ出されちや酒が醒めるよ、さア世直し、世直し……アメリカ舶來のアルヘイ糖だ、この盆を片つ端から廻して、皆に要る程摘んで貰はうぢやねえか？

（忠藏が盆を持つて廻る。）

幇間甲　ひやーア、コリヤ何うも恐れ入りました、御遠慮なしに。（と戴く）

幇間乙　アメリカ大明神々々々。（拍手を打つ）

（新造、藝者もそれ〴〵に戴いて取る。）

吟三　お瀧、お朝、汝さん等にはアルヘイ糖のお裾分するより古い小判餅の方がよからうな、この頃のお吹替への一兩金や二朱金と來ては眞實にアルヘイ糖より目方が輕いから、大一座への引出物にしか使へんでな。

幇間甲　ヘイ、ヤもう手前等には、そのアルヘイ糖で結構でございますとも、南無アルヘイ糖の大盡様々々々。

お朝　まア、この人達の口の悪い、そのアルヘイ糖の引出物でも、大一座へ振舞うて下さらうといふ氣前の善いお大盡様は、私はこの節始めて拜みました、仇おろそかに

思うては罰が當りますぞえ。
幇間甲　だから拜んでゐるのでございますよ、仇おろそかに思ひますもんかな。
忠藏　いつもは北へ許りお繰込みぢやが、今日はチト氣をかへて、南へお供をして來た奴さ、斯う見えても御年のお若いのに似合はず、眼から鼻へ拔ける程お商賣上手でな、アメリカ、オロシヤ、フランスの毛唐人許り相手に日本の小判を向ふへ賣込んで、一時に何千兩といふシコタマ儲けをなさつてるんだ、馬鹿遊をするからつて、馬鹿にしちやいけねえぜ。
吟三　コラ〱、餘計な事を喋舌るぢやない、さア〱酒をつげ〱。
長助　眞實に、かう見えても若旦那はエラ物だぜ、馬鹿遊をなさつてるのも、生憎と三男坊では、ノロマな兄貴かあるのをさし措いて家督かつげない、おまけに分家もさせてくれない、それが癪でとう〱一本立でやり出しなさつて、この頃はうさ晴らしをなさつてるんだ。
吟三　もう云ふなつてことよ、……いくら云つたつて、三男坊が急に長男坊に生れ變りやしねえ、家督の株は腕では買へねえと來てらア、何アに、今に、身すがらの一本立でも本家よりぐつと大きくなつて見せてやらア、サアお朝、一つささう。

お朝　頂戴します、……まア旦那はさうしたはずみでお遊びなさるのでござんすか？　でもさういふお腕のあるお方は頼もしうござんすわ、アメリカやオロシヤを相手に御商買をなさるといふのは、眞實に當世でござんすわねえ。
吟三　お朝、汝は話せるな、ヤレ尊王だの、攘夷だの、腐れ儒者の寢言を眞に受けて、血眼になつて騷いでる浪人等に比べりや、汝の方が餘つ程當世だ、矢ツ張汝等は、よく廣い世間を見てゐるんだな……オイ、そこのお瀧太夫、汝はイヤにおとなしく默込んでゐるやうだが、矢ツ張開港貿易が日本の爲めだて位の事は分つてようなア。
お瀧　いゝえ、私には分りません……イヤ、日本の金銀をアメリカや、オロシヤの毛唐人に賣込むなんて、仲買商人は儲かるか知りませんが、それぢや日本の大切な金銀は減る一方ぢやアござんせんか、こんな處でチト色消ではござんすが諸式が高くなつて萬人が難儀するのも、その爲めかと思ひます、私はアメリカが憎らしい。
お朝　ホヽヽ、お瀧さんは相不變の、頑固な攘夷黨でござんすのね。
お瀧　ハイ、私は頑固な攘夷黨に情郞があるのでござんすもの、オヤ、憚りさまホヽヽヽ。
幇間甲　オヤ、お手放しかね、誠にハヤ恐れ入り奉る、太

夫、おのろけ貸は？

（手を出す。）

（お瀧、ピシヤリとその手を打つ。）

幇間甲　これはまア何んといふ事かいな？

お瀧　手は見せぬぞ。

幇間甲　ひやーヤ、怖やの、怖やの、そこで此方は手がつけられませんなへ、、、。

幇間乙　そこで達磨大師はお足か無いは、チト洒落が酷過ぎますかなハ、、、。

吟三　（グツと杯を傾け、眞赤に照つた顏色で）何に？

攘夷黨　……攘夷黨に情郎がある？　洒落臭エ事を云ひやがるな、汝等にや云つて聞かせても分るまいが、日本一國で、世界を相手に戰爭が出來るかい、見事攘夷が出來ると思つてるのかい？　役に立つ大砲一挺も持合せないで、何が攘夷だ？　そこの品川沖の臺場はありや今に魚釣臺になるんだ？　木葉船で黑船を燒打せられるやうに、太平樂な夢を見てる白痴共が、空ら威張りに威張つたつて何んになるものか？　己は斯う見えても井伊樣へお出入の家に蓬れたものだ、だから萬人に勝れて目端の利く御大老が、日本の爲めを思つて港を開く條約に調印なされた御苦しい胸の中は薄々でも聞いて知つてゐる、いかにも御尤だと思つてる、乾度今に攘夷黨の奴等も眼がさめて來るに違ひないんだ、お瀧、汝なんかも出來もしない攘夷なんか小生意氣に口眞似するのはサツパリ止めて了ひな、それでなけりや爲めにならんぜ。

お瀧　ホ、、、爲めになつてもならなくても、私の思わくは思わくでござんすもの、それよりか日本の大切な金銀を夷狄に盜らせるやうな、御國の爲めにならん商賣は、今の中にサラリとお止しなさんしたがよいではござんせんか？

お朝　（宥めるやうに）お瀧さん、お客樣へあんまりな言分ではござんせんか？　イヤ、汝さんはもう大分醉つてゐなさる、醉ふと汝さんは見境がなくなるお人だから、誰かに介抱させて……

幇間甲　オツト承知之介、私が彼方へ御連れしやせう。

お瀧　イヤ、醉つて云つてるのではござんせん、私は當り前の事を云つてるのでござんすよ。

幇間甲　マ……マ……下の御座敷へ……旦那、まア御免遊ばせ。

吟三　イヤ、待て、こゝへ上つてりや私はお客だ、こゝの女は賣り物、私は買手、買つてる中は何んでも私の自由になる筈だ、私が何商賣してゐようと、そんな事は大きにお世話ぢやないか？　それよりか下られえ攘夷なんていふ事は、おくびにも出す事はならないと私が云ひ附け

たら、ハイ〳〵と大人しく聽いてりや善いんだ、さうぢやアないか？

長助　旦那の仰る通り、女郎がお客の商賣を善いの、悪いのつて、口を利くつて法はなからう、イヤこんな事は開闢以來、まだ聞いた例がない。

忠藏　これはあんまり當世向き過ぎてらアなハ、、、。

吟三　處で私もお客々々と、それを振り廻したかアない、さア約束通り、まア先へ口利賃を出して置かア。

（小判を紙に包んで、お朝とお瀧の前へ出す、お朝はチヨッと禮をする。）

お瀧　（見向きもせず）私は何んだか胸がむかついて來ました……一寸と御免蒙ります。

吟三　（襤褸の裾を摑み）私に恥をかゝせる氣か？

お瀧　私はそんなお金なんか貰ひたくはござんせん、私が貰はんでも、他の欲しい人にやつたらよござんせう、私は一寸と用事があります、放して下さい。

吟三　放してやるから此を持つて行け。

お朝　瀧さん、戴いて行つたらよござんせう。

吟三　出したものを取らんて法はない、是が非でも持つて行け。

（お瀧、拾ひ上げ、やにはにそれを吟三の面に打つけて階段をかけ下る。）

吟三　（怒つて）待てッ？（と追かけ、階子段の下り口へ行く、一座どよめく、時計が鳴る。）

下から亭主の聲　エ、誠に相濟みませんが、もう御約束の時刻が來ましたから、そこのお座敷をあちらへ御かへ下さいますやうに願ひます。

吟三　（階子段で）そこを除け……今の女をこゝへ連れて上れ。

亭主　ハッ、何んな不調法をいたしましたか存じませんが、何卒御勘辨を、……私が詫ります……それから甚だ申兼ねますが、何卒お座敷をおかへ下さいますやうお願ひします。

吟三　（焦立つて）今の女を連れて來い……無禮な奴だ…連れて來い。

有村次左衛門　（階子段の下から）オイ、コヤ、そこの座敷は、暮六つから、己どんが借切の先約になつちよるんおや……かへてくれんか？　何？　かへてくれん？　よし……かへてくれんちやア、己どんが皆、引ずり下ろしてやる。

（吟三がその見脈に恐れて座へ歸る、つゞいて有村次左衛門が氣色ばんで駈上つて來る。）

有村　（薩摩絣に短袴、朱鞘の一刀を横たへてゐる、眼を瞋せて）こゝの座敷は暮六つから己どんが借り切つちよ

るんだ、皆、下へ下りろ、下りろ。

吟三　今、女が私に無禮をした、彼女をこゝへ連れて上るまでは動く事はなりません。

有村　そんな事ア己どんの知つちよる事ぢやない、下りてくれ……下りてくれ……下りてくれちゆうても下りよらんか？……此方や先約しちよるんぢやが……何うあつてもドりんちう事なら、つき落してやるぞ。（と睨み付ける）

吟三　そんな無法た事が出來ますものか？　いかに武士だからつて？

有村　武士だから約束通りにしろちゆうんぢや……まだ下りよらんか……下りよらんな……ちやアよか、……己どんが下ろしてやる、斯うして下ろしてやる。（吟三を抱へて、階子段口から抛り落す、一座ワッと騒ぎ立て、周章てゝ皆が轉がり落ちる）

有村　コヤ、女ども、早くこゝを片附けよらんか？　今に皆の衆が見える筈ぢや……何處の野郎か知らんがかういふ時節に晝間から馬鹿騒ぎしよつて、遊び浮かれてるちゆうのは怪しからんわい。（階子段口を覗いて）何うしよつた？　今の野郎、頭の皿でも割りよつたかい、それ位な事アよか、天罰ちゆうもんぢやがハヽヽヽ。

亭主（上つて來て）ヘイ、何うも相濟みません、七つまで、此座敷をお貸するが、それから先は先約がございますからと、よく申して置いたのでございますが、つい御酒がはずみまして、斯ういふ始末になりました、早速取り片附けさせます。（手を拍つ）

有村　ウム……早うしてくれ……手が足らんなら己どんが手傳うてやつてもよか……。

亭主　イエ、何ういたしまして……オイ、皆で早くこゝを片附けてお掃除をしてくれ……旦那樣ア下座敷で一服遊ばしては？

有村　何アに、構ふ事アない、こゝにゐるぞ……今の野郎、怪我でもしはせよらんか？

亭主　イヤ、別條ございません、裏の離座敷の方でお休みになつてゐます、お馴染のお客樣でもございませんから、先樣でお氣に障つたらお斷りするまででございます。

（この間に女中等座敷を取り片附ける。）

有村（障子を開けて）こゝからは品川灣が一目に見えよるの……七砲臺邊波萬疊か？　今にこのまゝにしちよつたら、黑船がドン／＼入込みよつて、この二階へまで大砲の彈を打放されるんぢやぞ、亭主、そしたら汝も困るぢやらうがハヽヽヽ。

亭主　そんな騷になりましては、堪りませんねハヽヽヽ。

（關鐵之助を始め、佐野竹之助、黑澤忠三郎が上つて

來る。）

關　ヤ、有村君、お早かつたね。

有村　ヤ、已どんが先鋒ぢやつた、この座敷で馬鹿騒ぎしちよつた先客を追つ拂うて、城を明渡させる役までやりよつた、まア幸先はよかゝ？

佐野　ヤ、それは何うも御苦勞かけました、こん度の先鋒はこの竹之助だと早くから決めてかゝつてゐるのだが、事によると、有村君にしてやられるかな、今日の幸先が善いと云はれて一寸と氣に掛り出した。

關　イヤ、先鋒爭ひはいらぬ事だ、誰でも善い、目的さへ遂げたら、それで皆の役目は濟むのぢや……ア、黑澤君は欄檣を見つめて、何か考へ込んでゐるやうぢやアないか？　何うしたんだ。

黑澤　（手にせる餅花をそこらの框にさして）イヤ、小娘の事をチヨツと思ひ出したんだ、親つて奴は馬鹿なもんさ　妻子を持たぬ者には、この味はまだ分るまいがハ、、、。

關　そりや然うさな、子供つて奴は可愛いものに違ひないが已のは生憎、鯉幟の方さ、君が途中で見附けた餅花をワザ〳〵買つて來るなんざしをらしい親心だ、愛くるしい娘さんの顏が眼に見えるやうだ、でも折角買つた土產を故國へ送り屆けてやる傳手がないのは黑澤君にはお氣の毒だな。

黑澤　何アに、この餅花に、賣つてるのを見るとつい思ひ出してふら〳〵と買つて來た丈さ、送つてやる氣ぢやないんだ。

有村　成る程、然う聞くちゆうと辯簡何か？　道理で濃を飾つちよるんだな。

關　有村君は今、氣が附いたのか？　さすがノン氣だハ、、、、、。

（金子孫二郞、齋藤監物を始め十餘人ドヤ〳〵と階子段を上つて來る、それ〴〵に會釋を交はす。）

關　（燭臺を持つて案内の女中に向ひ）手を拍つまで誰もこゝへ上つて來る事はならんぞ、いゝかい、堅く云ひ附けておくぞ。

（女中領いて退く。）

金子　（正座を占めて、一同を見廻はし）齋藤君、これで皆の顏が揃つてゐますな。

齋藤　ハイ、金子先生共に皆で十九人、總勢揃つてゐます……障子を閉めませう、ア、夕照が品川灣一ぱいに映つて、實に善い景色だ……金色の鷗が飛んでゐる。

關　空の雲が眞赤になつて、天も地もまるで生血を流しかけたやうに見えるではありませんか？

佐野　明日の前兆ぢや、天地も我々に感應してゐると見え

る、大丈夫、勝利ぢや。

有村　幸先がよか、よか、ハヽヽヽ。

金子　もう櫻の花の咲きかける時候にしては少し寒いやうだ、……障子を閉め切りませう。

（二三人起つて、閉め切る。）

（やにはに階子段から「關の旦那さま……關の旦那さま」と呼びながらお瀧が駈上る。）

有村　上る事ならんちゆうに。（眼を瞋らして起上る）

關　（駈出して）誰だ？　…ア、汝か…何うしたんだ、こゝへ上る事はならんと堅く云ひ附けて置いたんぢや。

お瀧　ハイ、それは承つては居りますが、お氣を附けなさらぬといけませんよ。

關　探偵（いぬ）でも來たのか？

お瀧　否え、……今までこゝで騒いでゐて、有村の旦那樣に階子段から突落されたお客は、ありや何でも井伊家の出入の町人の悴だといふ事でござんすから、皆さんのお集りの事を萬一、氣取られては大變ではございませんか？

關　何んだと？

（一同、不思、刀の柄に手をかける。）

佐野　ぢやアその町人の小悴とやらを門出の血祭に切つて捨てよう、何處にゐる？　案内せい。

（勢込んで立ちかゝる。）

有村　よか、よか、己どんも行かう、さうと知つちよつたら、先刻ぶつ斬つてやつたんぢやが…。

金子　まア待たつしやい、荒立てゝは却つて事の破れる基だ、上使松平左兵衞督をも斬つて捨てようとした佐野君だから、町人風情の命を何んとも思はれぬであらうが、まア焦（せ）いては行かぬ。

佐野　でも萬一…。

金子　マア、待たつしやい……その町人の悴とやらは何處の座敷にゐるのか？　何か此方の樣子を探るやうな氣ぶりでも見えるのか？

お瀧　二階から突落されて、何處か打つたものと見えまして、今は裏の離座敷でウン／＼唸つて居りますが、御油斷があつてはと案じられまして？

關　それは善うこそ知らせてくれた、その男はいつもこの樓へ上つてゐる者か？　汝の馴染客でゞもあるのか？

お瀧　（不平さうに）まア忌らしい……私がそんなうさん臭いお客を馴染に持つとお思ひなさんすか？　度々上るお客なら今までに貴方にお知らせせずにおきませうか？　水臭い事を云つて下さんすな。

關　コレ……コレ……何もさうムツからないでも善い……では今日、始めて上つた客ぢやな？

お瀧　然うでござんすとも、内所で聞くとお午過に、ふいと入つて來たさうで、今し方迄飲みつゞけて太平樂許り云つてゐたのでござんすよ。

關　然うか？……金子先生、如何いたしたものでございませう？　見張でも附けて置いた方がよくはないかと思ひますが。

お瀧　あの私が、此の階子段の上り口で、見張番をいたして居りませうか？　皆様が御相談事をなさる間、立聞でもされては大變でござんすから。

金子　では汝、御苦勞だが、その男の室へ行つて介抱に事よせて確かり見張つてゐてくれ、こゝの階子段の上り口には、佐野竹之助君に張番を頼みませうか？

佐野　ハッ、心得ました。（と起上つて行く）

お瀧　あの私は、こゝにゐては惡いのでござんすか？

關　その男子の室へ行つてゐてくれ、頼む。

お瀧　もう貴方のお顔も長うは見られますまいに……此時でも此處に居度うござんす。

關　汝も矢張、唯の遊女か？……尊王攘夷を口眞似にでも云つてゐる者が、假にも女々しい振舞を見せては、よい笑草ではないか？

お瀧　ハ……參ります……皆さま、では私はあの男子の見張をいたして居りますから、何卒御安心なさつて下さんせ。

金子　よろしく頼むぞ。……ア、こゝの押入なとは大丈夫かな？

（お瀧は下りて行く、二三人で押入なさがし、異狀のないと確める。）

齋藤　關君は天下の色男ぢや、とんだ處で惚氣場を見せ附けられたぞ、恐れ〳〵ハヽヽヽ。

（一同「ハヽヽヽ」）

關　イヤ、これも一世一代ぢや、首でも奢らうハヽヽヽ。

金子　では、これから密議に移りませう、……何時か品川宿の外づれの縄手途で、梅田、頼、始め京都で囚縛れた同志の一行を刀にかけて奪ひ返さうとする諸君を私が宥めて、思ひ止まらせた事があつたが、天運はめぐつて來て、あの時、預つた生命を愈々明日は天下の爲めに奸賊の首と賭けかへにして貰ふのぢや、かの奸賊は夷敵の恐喝に怯えて、勅許も俟たず、條約調印といふ大不埒を働いた、それが爲めに、神州の國土を夷敵の泥靴で踏にじらせた許りでない、彼等豚犬同様な者を恐れ多くも征夷大將軍の御居城へ登場までさせたは愚か、さま〴〵の饗應さへして已に春秋城下の盟をやつたも同前ぢや、大義名分が何處に立たう。東照權現の神靈に對し奉つても恐れ入つた事ではないか？　主人水戸前中納言様が、國家

を思ひ、又將軍家を思うていろ〳〵御配慮遊ばされたのも至極勿體ない次第ぢや、それに何んぞや、自分が一人大老の權威を揮ひたさに、無實の罪をお被せ申して押込隱居にして了ひ、年少な將軍家を押立てゝ我意一圖に天下を引搔き廻し、剩へ尊王攘夷の朝意に忤うて、却つて三公を始め憂國の志士を片ッ端から罪に陷れ、あの前代未聞の大獄を起したのぢや、若し此のまゝ見過しにしてゐてはこの神國も一二年を出でない中に、内地の愚民共は切支丹の邪敎に迷はされて了ひ、彼等が勢に附いて平身低頭、夷狄の命令を奉ずるやうになつて來る、それは鏡にかけて見るやうなものぢや、併し周の衰ふる、婦人すらその緯を恤へず、周室の亡ぶるを憂へた、まして二千餘年、天恩を戴き、三百年來東照宮の御恩澤に沐浴した我々に、義勇奉公の念がなくて何うする、今日までは遺恨を含んで堪へ忍んでゐたが、今度は又水戸家へ下つたあの詔勅まで返上させようとしてゐる、罪惡滔天、彼は唯、德川家の罪人のみではない、實に神州の逆賊の魁ぢや、天變地妖がしきりに起つて、西城は遂に江戸城の御本丸まで燒落ちて了つたのは、全く天地神人共に憤るの徴ぢや、此時を外さず、天下諸侯の同志と力を合せて、この國賊を誅伐し、神罰を蒙らせねばならぬ……諸君も御同意であらう？

有村　御尤千萬、もう一刻も半時も猶豫しちよられませんわい、一日延びたら、それ丈神州の生命も縮めよるちゆうもんでごわす。

金子　有村氏が、此度の義擧に加はつて下さるのは千萬忝い、それでなけりや水戸の者が、私の怨でやつた事のやうな下らん誤解を受けますでな。

有村　イヤ、薩州からもつと多人數出るちゆう約束ぢやつたのが、何や彼や行違ひよつて、皆國許へ引上げたんは心外でごわす、己どんは面目ないやうに思つちよりますぢや。

金子　イヤ、人數の多少は問ひません、此方は有村氏一人で千人力ぢや……さて、今私の一通り云つた主旨で、ここに斬奸狀を認めてある、これへ御署名を願ひませう。

（一通をさし出し、皆々の間へ廻す）

金子　さて、これから一般の方略ぢやが、第一各自、武鑑を携へ、諸侯の道具見物の體をされい、それから第二に、五六人づつ組合になつて、路の兩側へ立ち、互に應援する事、第三に、一人最初に先棒に取かゝり、駕籠脇の狼狽する機につけ込み、元兇を打取る事、第四に元兇を十分討とめたと認めても、必ず首級を上る事、第五は、負傷せるものは自殺、又は閣老に到つて自訴し、創傷を受けぬ者は大阪へ上つて義兵に加はる事、……不肯金子

孫二郎は諸君の義擧の報告を聞いたら、早速大阪へ上つて、そこで薩州から繰出しの義兵へ加はつて京都へ行き、尊王攘夷の旗擧をする手筈である……遲かれ早かれ冥途で又逢ひませうハヽヽヽヽ。

齋藤　それで先づ大體の手筈は定りましたが、組の立て方は？

金子　ア……その總司令は齋藤監物君、參謀長が關鐵之助君、それで佐野竹之助君が第一の組頭、これには大關、廣岡、森山、海後、稻田の諸君が附く、黑澤忠三郎が第二の組頭、これには有村、山口、增子、杉山の諸君、後手が齋藤君の組で鯉淵、蓮田、廣木、岡部、杉山の諸君として置いたら善からうではないか？　そして明朝は芝、愛宕山で諸君が勢揃ひをせられるのぢや。

一同　委細承知いたしました。

金子　ア、佐野君、もうこれで大體は濟んだ、君、張番はもうよからうから、こゝへ來て、署名し給へ。

佐野　ハ……（駈來り）イヤ、張番はしながら、體中、耳にして委細は聞取りました……猫の子一疋、段梯子の下へは寄附いても來ませんで、まづ大丈夫、大安心でございます。

金子　何うも御苦勞でした。

關　では、もう手を拍きませうか？

齋藤　（笑つて）まア、然うせくな、これから辭世の寄書ぢや。

關　ア、然うか……唐紙は稻田君に頼んで置いた筈ぢやが？

稻田　ハ、こゝに持つて來てゐます、墨を磨りませう（進み出る）

金子　先般も云つた通り、君子見機而作、不俟終日ぢや：……私はあの文句を諸君へ贐の詞にせう、此擧が萬一にも失敗したら、尊王攘夷の一大事まで瓦解する緒になりませう、イヤ水戸藩へまで何んな難儀がかゝつて來るか知れませぬ、成敗は諸君の精神一つにある、頼みますぞ。

有村　大丈夫でごわす、精神一到何事か成らざらんぢやごわせんか？

佐野　誓つてやつゝけます、水戸家へは脱藩屆も一同さし出してゐますから、その方の御心配も御無用です。

齋藤　君子見機而作、不俟終日……御見事でございます。

（金子、筆を揮ふ。）

關　僕も一寸……、先生の傍へ一首書かう。

齋藤　二三人づつ一時に書かなけや、埒が明かんぞ、

佐野　關君の歌を拜見せう……（讀誦）いつもかく嬉しきものかあづまてる、神のみやゐの曉のかね……成る程、…

：有村君の御辭世も拜見したいものぢやが？…。
一同　さうぢや／＼「有村君是非一首御書きなされい」拜見いたしたい。
有村　書いちよきませう……お恥かしい腰折ぢやが……。
（書く）
齋藤　（讀誦）岩がねもくだけざらめや武士の、國の爲めにと思ひきる太刀……。
（一同拍手する。）
お瀧　（駈上つて）もう濟んだのでござんすか？
佐野　呼んだのではない、拍手喝采したのぢや。
お瀧　でも手を拍つといふお約束でござんしたもの、もう皆、くり込んで參りませうよ、……大切な御相談さへ濟んだら、一つ大陽氣にお騷ぎなさるが善いではござんせんか？　もう今宵がお名殘りで、二度と騷げはしませんでせうに。
關　あの、町人といふのは何うしたのぢや？
お瀧　それはもう御安心なさんせ、先刻此家から町駕籠を傭うて貰つて、青息をついて歸つて行きました、もうここらでウロ／＼してる氣遣ひはござんせんから。
（後から用意の杯盤が運ばれる、遊女、藝妓、幇間末社、ゾロ／＼繰込んで來て、それ／＼挨拶する、齋藤監物は寄せ書をまいて、床の雛壇の中へ隱す、一同は押付けられて早、杯を手にする。）
金子　ではこれから無禮講ぢや……思ひ切つてはしやぎませう、この老人が若返るから、若い諸君は猶更、子供になつた氣で存分あばれ倒すが善い、ハ、、、。
有村　皆、腕白小僧が揃つちよるから、大丈夫、あばれ倒す事でごわせう。
佐野　（大聲に）さア彈け、唄へ……飲め……踊れ……今夜は夜明かしだぞ。
有村　夜明かしで飲みよつたら明日の先鋒が出來ませんわい、九つの鐘の鳴るまでやつゝけませう。
關　何か景氣よく踊つてくれ。
お瀧　私がちやんと心得てゐますよ、今、下から踊り子が上つて來ますから……早くしなさらんか？
（聲に應じて、踊り子が七八人、ゾロ／＼上つて來る、三絃が鳴る、鼓がひゞく。）

「菊は二度咲く、葵は枯れる、
西に、くつわの音がする、
「海は黑船、空はうき星、
陸もとゞろく國くづし、
「日本魂、刀は鳴るに、
伊勢の神風なぜ吹かぬ、

（一同喝采）

金子　（笑顔）イヤ萬事幸先がよいやうぢや……併し何うも寒い、老年（としより）で、かんじるのか知らんが、雪でも降つて來さうな陽氣ではないか？

齋藤　（障子をあけて）　成る程、さう云へば星がイヤに光つてゐます、でも櫻の咲く時節に、マサカ雪も來ますまい、イヤ雪でも降つてくれたら、我々はさしづめ何處かの二代目になりませうな……まアチツと酒をお飲んなさい、そしたら暖かくなりませう。

金子　飲みませう、飲みませう、くつろいでやりませう。

（杯がしきりに廻る。）

關　（お瀧に酌をさせながら）　佐野君の琵琶を一つ、お名殘りに聞かせて貰ひたいもんぢやな。

有村　コリヤ是非聞かせて欲しいもんでごわすな。

齋藤　琵琶は有村君が、御本家の筈ぢやありませんか？　今宵は皆、一生のかくし藝を殘らずさらけ出す事とせうぢやアありませんか？　西國へ下つたらもう二度と出來ない事ですから。

金子　左樣、左樣。　有村君の薩摩琵琶は是非拜聽せなければなりますまい？　その次が佐野君の番としては何うだらう？

有村　處が己どんは、至てぶきつちよで、とても諸君の前でやれるやうな藝道の持合せはごわせん、まア、後で舞でもやつつけませう、佐野君のが拜聽したうごわすな。

お瀧　ハイ、こゝに琵琶はちやんと持つて來てござんす……

……佐野の旦那、何卒。

齋藤　ナカ〱氣が利いてるな、一體誰のお仕込みだ？

お瀧　分つてるぢやござんせんか？　こゝの人よ。

齋藤　こいつは手きびしいな。

（一同笑ふ。）

お瀧　（齋藤に媚び笑して）　今宵は天下晴れてのろけたつていゝでせう、明朝は西國へお旅立ちだから、これがおのろけ了ひなんですもの（關の膝にもたれかゝりつゝ）貴方。

關　嘘もないの。（とヂツと顏を見る）

齋藤　さア、佐野君。

佐野　名殘の一曲か？……よし一寸と一節やらう。

一同　謹聽々々。

齋藤　（口上）　東西々々、佐野竹之助作「大和錦」の一曲始まり〱。

佐野　……天照らす神の宮居は神さびて、伊勢津に引けるいと車、大和錦に織りなせる、その古の御旗をば、五月

蠅なす心も黒き夷らを、なで近けて汚しつゝ、皇御國の雲井まで、己がまに〳〵踏あらし、眞こゝろふかき人々を、罪なき罪につみなひて、親のつみとてうま子まで、遠き島根にながしける、なほ春雨にそぼぬろゝ、うぐひすならで我袖に、落つるなみだはかわかねど、つゆ打拂ひ大丈夫が、心のたけを取直し、大浦浪と生じける、八重の葎を薙ぎつくし、錦の御旗春風に、吹なびかして梓弓、ひきしぼりつゝ夷らを、千里の海にしりぞけて、猶日の本に千萬の夷の國をなびかせむ。

しきしまの錦の御旗さゝげもち
皇いくさの魁やせむ

（一同喝采。）

お瀧（眸を拭うて）まア嬉しかつたこと、涙が出ましたわ……此所にゐる者は皆攘夷黨になつて了はなけやならん筈でござんすわ……お朝さん、汝さん默つてるのね、……汝さん、先刻、開港論だなんて云つてましたが、矢張さうなんかね？

お朝　そんな事は私、知りませんよ。

お瀧　攘夷黨に降參しなさんしたかえ？

お朝　降參なんかしますものか？

有村（嘲つた口調で）何んだ？　この女が開港論ちゆうのか？……そんな不埒な事を云つちよる奴は斬つてやる。

お朝（ムッとして）斬られたからて、私、自分の思つてる事は思つてる事ぢやござんせんか？

有村　何ぬかしよる？……斬つてくれて奴ア斬つてやろ。

（刀を拔いて起ち上る、お朝「アレー」と叫んで逃げ出す。）

金子（笑つて）ヤ、薩摩隼人はさすがにお氣が早いが、まだ刀を拔くにはチト早いでせう、それとも劍の舞が始まりますかな？

有村　よか、よか、拔いたものはそのまゝ鞘に納められませんぢや、……舞はう、舞はう……誰か一つ吟じて下さい。

稻田　僕が吟じませう、梅田源二郎先生の詩をふと思ひ出しましたから……。

有村　賴みますわい。

稻田　妻臥病床子泣飢、挺身直欲拂洋夷、今朝死別與生別、唯皇天后土有知。

一同　ヤンヤ〳〵

有村　諸君、皆、刀を拔いてくれ給へ、一緒に劍舞をやらう

佐野　よし……、さア抜くぞ。
齋藤　己れも抜かう、金子先生もお抜き下さい。
金子　さうかよし、よし、抜かう。
（一同刀を抜く。）
（女等は「アレー」と慄へて逃げ下りる、劍の林が燭光にきらめく。）
金子　（笑つて）皆、鈍刀は持合せてゐないのぢや、これなら明日の戰は大丈夫、大勝利。
有村　序に何か打斬つて見たうなりよつた、門出の血祭をしたいぢやアごわせんか、……あそこの雛壇の人形の首でも片つ端から打斬ろか？
お瀧　（身を投げ出して）イヤ、雛樣は可愛い、……ぢやア寧そ私を斬つて下さい、私を血祭に斬つて下さい。
關　コレ、汝、氣が狂つたか？　下へ行つて居れ。
お瀧　イヽヱ、私はもう生きてゐたつてつまらない、此世に望みはござんせんから、貴方等の門出の血祭りにして貰ひます、さア斬つて下さい、皆さま、そして私の仇も序に取つて下さい。
金子　ウム、よい覺悟ぢや、今に斬つてやらう……（莞爾）諸君まづ、この光の强過ぎる大らふから斬らう。（と眼配せ、齋藤、關、金子の三人は、眼の前の燭臺の蠟燭を斬る）

（室内暗黒、暗黒の中でトキの聲がドッと上る。）

第二場　井伊邸青節句

前場と同日同夜、井伊家書院の屋體、庭先に杏樹有、上手、春日燈籠の傍に緋桃白桃の花が眞盛りに咲いてゐる、下手は植込、芽出し柳がもう青々としてゐる、そこらに建仁寺垣があつて衡門が開いてゐる、座敷の床の間には緋毛氈の上に、内裏雛一對、柳と桃の花を活け、三寶に白酒が備へられてある、欄間には「至誠」の字額、廿疊の廣間の、中央にも緋毛氈が敷かれ、下手は曲り廊下、青節句の氣分が見える。

○

侍女が雛壇に備へる燈火を掲げて入つて來る、井伊大老は從四位少將の束帶姿、恭しく雛壇の前へ坐して一揖す。
井伊　臣、直弼、親しく内裏へ參上する機會を得る事も出來ませず、今宵、遙に九重の空を伏拜んで、こゝに御酒をも、又お暇乞をも言上いたします、わが井伊家の遠い先祖は南朝の爲めに、延元元年、宗良親王を奉じて遠州井伊谷の孤城に栖籠り、義兵を擧げて奉公の誠心を盡したものでございます、不幸にして南風競はず、代は足利の代となりまして後も、始終一貫その志を渝へないで、

足利家の祿は食まなかつたのでございます、かくて廿代直平の時、徳川家と因緣を生じまして、直政、直孝相次いで家康公の股肱の臣となり、井伊家は幕府の柱石と相成つたのでございます、直弼は遠い祖先の奕々の志を承けついで、京都へ獻芹の微衷は忘れませぬ、又直政直孝の血を繼いだ子孫としては、素より徳川家への御奉公の心がけは聊かも疎そかに致しませぬ、東照權現以來、一國の政治は京都より徳川家へお委任の事と相成りましてからは、徳川家への忠節は卽ち京都への忠節、幕府の爲めに計るのは卽ち、天下國家の爲めに計るので一義不二と心得て居たのでございますが、不圖も黑船渡來、しきりに開港條約の儀を迫られまして、茲に國家の大難は降つて湧いて參りました、折角彼等のさし出す手をむげに斥ければ、忽ち大砲の火蓋は切つて放されて全國は血煙に叫びませう、果てはそれが國家滅亡の導火とならうも知れません、されど、容易にお降のない勅許を俟たず、調印を斷行すれば忽ち國論が沸き返つて忌むべき內亂沙汰とならうも計られませぬ、直弼は進むに進まれず、退くに退かれぬ絕體絕命の窮地に陷りましたのでございますが、萬一、このまゝで國家が滅亡すれば、幕府もなく、又恐れ乍ら寶祚も保たれぬ譯でございますから、一切の責を一身に擔ひ、條約調印を斷行した次第でございます、果して沸上つた國論は、直弼を不臣不忠と譏り、國賊とまで罵ります、自ら信じ、自ら斷じて行つた事でございますから、直弼は何んと呼ばれても、聊かも臆する者ではございませんが、そのまゝ打捨てゝ置けば、容易ならぬ內亂の萌が見え、國家破滅の基ともなりさうな形勢が必迫しましたので、此方から機先を制して遂にあの大獄を起し、同胞の血をも流さねばならぬ餘儀ない次第と相成りました、唯、それが爲めに君側を驚かし奉り、叡慮安からず思召された廉々も不少事と恐察いたして居ります、その段は幾重にもお詫び申上げねばなりませんが、不肖直弼が天下萬民の行末の安泰を思ひ、又一つには幕府への最後の御奉公を竭したいと思ふ苦しい微衷の程は御酌取り下さるやう只管お願ひ申上げます、その他はすべて何事も時が來れば分明すると存じて居ります、今、一死、我身の宿業を果す時節も漸く到來したやうでございますから、こゝに謹んでお暇乞を申上げる次第でございます。

井伊　秀之丞……秀之丞。

秀之丞　（入來る）ハツ……。

井伊　先刻、狩野永岳の持參した私の畫像は？

秀之丞　ハ……こゝに持參いたしました。

井伊　ウム……こちらへ貸せ……硯を持つて參つたか？

秀之丞　ハ、持參いたしました。

井伊　（ひろげて見て）この束帶姿はよく似てるやうぢやの。

秀之丞　ハ……恐れながら御殿樣に生寫しでございます。

井伊　（微笑）フム、さすがは狩野永岳ぢや……これで私の姿も末代までも殘るであらう……讃を書いて近江の清涼寺へ納めて貰へば、それで心殘りはたい、オヽ、清涼寺へ下つて行く寺の使の者はもう來てゐるか、六之丞にさう云つて、その者が來て居れば、連れて出いと云へ。

（秀之丞退く。）

（井伊、繪像に讃をする。）

（宇津木、廊下から入り來る、切り髮姿の、黑紋付のお靜は庭口から現れる。）

宇津木　ハ……近江の清涼寺へ下つて行く尼僧志願の者を召連れましてございます。

井伊　然うか？……（と云つて、ヂット見る、お靜は、默つて緣先へ平伏する。）

井伊　六之丞……お靜は變つた姿になつたな？　お靜の病氣はもう平癒したのか？

宇津木　宿元へ下つて、療養いたして居ます中に、病氣も漸く平癒いたしたさうでございますが、この度發心しまして惜氣もたく黑髮を切り、江州へ下つて清涼寺の仙英禪師殿に參禪いたしたいといふ願ひださうにございます。この事は一應お耳にも入れ、殿のお許しも出ましたのではございますが、あまり自儘な事をして、お叱を受けはすまいかと、お靜どのもそれを氣にしてゐられるやうでございます。

お靜　お許しも受けませぬ中に、こんな姿になりまして、恐れ入つた事だと思うて居ります。

井伊　（微笑）イヤ、よい心掛ぢや、叱る處か私は見上げたものぢやと思うてゐるぞよ、或は一時取逆上せて髮を切つたのかとも氣遣うてゐたが、見れば眼の中も澄み、顏色も落着いてゐる、深い佛緣にあやかつたのであらう、精々參禪して、唯心不退の修行を積むが善い、私の繪像を清涼寺へ納める使者に汝が立つてくれるといふのも、難有不思議な因緣ぢや。

お靜　私こそ冥加にあまる御使者だと、忝う存じて居ります。

井伊　（もの靜かに）汝とは俗緣も法緣も兩つながら深くつながつてゐたのぢや、已に菩提の心を起して出家遁世すれば、濁世の有爲轉變は一切忘れて了はねばならぬ、幻の世に幻の身の、私も汝も今日あつて、明日は知れぬ生命ぢや、若しも汝が私よりも長く生殘れば、私が此世に殘す假の繪像に、一片の回向を頼むぞ。

お靜（涙ぐんだ聲）……仰せまでもございません……思へば長い間、君の一方ならぬ御恩を受けながら、女心の淺果敢さにいろ〳〵の愚痴やら迷執やら、御心を惱ませた愚かさを今更恥入りましてございます、天下國家の爲めに、一圖に思ひ立たれましては御生命を賭けて一歩も後へは退き給はぬ君の御氣象を存じながら、唯御身大切、御家大切と、女だてら、一時でも御逆らひ立てをしましたり、お年若な奧方樣へも、嫉みがましい事を申しましたり、眞實に面目ない事許りでございます、御恩報じやら、自分の罪亡しやら、首尾よく御讃像をお寺へ納めましたら、一生御守りをいたしたい心得でございます。

井伊　過ぎ去つた事はもう云ふまい、聽くまい、後世よろしく頼むぞ……六之丞、讃をした。

宇津木　ハ……拜誦いたします……。

　近江の海いそ打つ浪のいく度も
　　み代に心を碎きぬるかな

井伊（讀誦）……ではそれを靜へ……。

　（宇津木、お靜へ渡す、お靜は、それを卷納めながら涙をかくしてゐる。）

宇津木　殿の御心中、恐れながらこの御一首によく現れてゐるやうに存せられます。

　（井伊輕く頷く。）

宇津木　ア、お序でと申上げては甚だ失禮でございますが、かねてお願ひして置きました、武田家の侍大將土屋總藏の畫像への御讃を御染筆下さいますまいか、こゝに持參して居りますが？

井伊　ア、あの總藏の子孫に當る紺屋頭の土屋からの依頼であつたな、かねて承知してゐる、軸が有ればこれへ出せ、讃を書かう。

宇津木　難有うございます。（一軸をさし出す）

井伊（筆を執つて、讃を了へ）さアそれで約束を果したぞ。

宇津木（戴いて受取り）

　さきがけしたけき心の花ぶさは
　　ちりてぞいとど香に匂ひぬる

　（井伊、瞑目、繰返して讀誦する。）

　（宇津木とお靜は顏を見合せ、やがて三人の眼がハッと合ふ、瞬時沈默。）

秀之丞（入來る）申上げます……松平左兵衞督樣、御越しにございます。

井伊　直ぐ茶室の方へ御案内せい。
秀之丞　殿に、御內談したい事があると申されますが……
……。
井伊　何に、內談？……ではこれへ通せ。
お靜（涙を抑へ）私はこれでお暇乞申上げます。
井伊　然うか……仙英禪師殿へもよろしく申してくれ……
汝も隨分、信心堅固に佛に仕へい。
お靜　ハ……これがお顏のお見納めでございませう。
井伊（嚴かに）汝の顏もよく見て置かう……私の顏もよ
く見ておけ。
（お靜不堪、次第に啜り上げる。）
宇津木　お靜どの……お靜どの……不吉な事を云ふもので
はありません、生命さへあれば又何度でも御目にかゝれ
ます。
お靜（涙を拂ひ）又しても女の愚痴に返りまして……で
はお暇乞申上げます。（猶豫しながら懐から小い包を取出
して）あの、これは中山の法華寺から御受けしました劍
難除けのお守でございます、私の志と思つて、お受け下
さいますまいか？
井伊　フム、折角の志だから貰つて置かう（受取つて）……
彼方で奥にも逢へ、若等にも逢つて行け。
お靜　難有う存じます。

宇津木　では私が彼方へ御案內申しませう。
（お靜は、後ろ髪引かれるやうにして、宇津木の後か
ら庭の衡門の方へ入つて行く。）
（入代つて秀之丞が松平左兵衛督を案內して入つて來
る。）
松平　今日は寄節句の御禮しに、御案內を受けて難有うご
ざいます、直ぐ御茶室へとの事でしたが、チト御內談を
申したい仔細があつて、押して此方へ通りました、御來
客の御邪魔でもした譯ではありませんでしたか？
井伊　イヤ、今日は善うこそ來て下さつた、只今のは、別
に來客といふ譯ではありません、かねて狩野永岳へ賴ん
で置いた私の壽像が出來上りましたので、それを國元の
清涼寺へ納める爲めに、使者へ託したのでございます。
松平　ではあの御壽像が愈々出來いたしましたかな？　そ
れは拜見いたしたかつた……併しその壽姿より、斯うし
て東帶の正のお姿が拜まれたのは、珍らしい事と思ひま
すが、畫工にお寫させなさる爲めでございましたか？
井伊（微笑）イヤ、今日は一寸と參內しましたのぢや。
松平（訝かしさうに）エ？……。
井伊　內裡へな。
松平（頷き）成る程……御心中察し入ります。
井伊　掃部頭、存生中は最早京都へ參朝する時節も來まい

と思ひましてな。

松平　一應は御尤とも思ひますが、併し人間生命さへあれば又何のやうな風が吹いて來るか、分つたものではございませぬ、已におめがねに依り、不肖、大任を承はつて、水戸家へ御上使に立ちました夜は、もう必死の覺悟で、二度と御目には竟れぬものと思ひ詰めて居りました、案の定、血氣に逸る水戸武士の爲めに危く一命を失ひかけましたが、同家の家老等に支へられて、首尾よく大任を果たし復命に及びました節は、ホッとして再生の思ひをしました、お庇で今年も斯うして又麗らかな春にめぐり逢ひ、雛節句の御招ぎに預る事が出來ました、下世話にも申通り、生命あつての物種でございます。

井伊　御尤の次第ぢやが、その生命といふ奴が有るやうで無いもの、無いやうで有るもの、かげろふの如く、又電の如く、眼には見えても確と摑へ樣のないものでございますから、それに執着するのは、迷ひの因でございませうでな。

松平　（膝を進め）イヤ、實はその事で、御内談がしたいと思つたのでございます、大老のお生命は今こそ最も大切になさらなければならぬ時でございますぞ、御自分の御生命であつて御自分のお生命でない、天下の爲め、又幕府の爲めに、預り物のやうな大切なお生命ではございませんか？　近頃水戸家へ御達しなされた例の別勅返上の御上意から、水戸藩の荒氣な向不見の武士等大勢長岡驛に屯して、容易ならぬ形勢になつてゐました處、已に御聞及びでもございませうが、其中の誰彼は祕かに脫走して、江戸城下へ入り込みました樣子でございます、元來、水戸家の隱謀を覆し、前中納言家を蟄居させ、又此度、別勅返上の上意を傳へられる事になつたのは、皆、大老のお腹一つから出た事と、彼等は一圖に大老を怨み、首を獲て甘心せんとまで、逸りに逸つてゐるのは、鏡にかけて見るやうなものでございます、大老の御生命は、誠に風前の燈とも、草頭の露とも申すべきものでございませう、この際、一時、御職務を辭退せられ、彼等の無謀の刃を避されて、天下の爲めに、又幕府の爲めに、無くてはならぬかけがへのない大切な御生命を行末永く取留める策を取られるのが、眞の忠節の道かと信じます、そして世間の物議の自ら鎭まる日を見計らひ、再び出仕せられるのが善からうかと思ひます、日常の御交誼甲斐に、左兵衞督が赤心を打割つた御忠言を申します、枉げて御聽入れ下さい。

井伊　御深切は忝い……御好意の程は何んとも御禮の申上げ樣もありませんが、私は、先將軍の遺命を奉じて、幼

君を輔佐する大任に當つて居るのでございますから、一身が危いからと云つてその職を去る事は出來難うございます、まア見られい、あの額の「至誠」の二字も近頃、幼君が自ら御筆を取つて、書いて下し置かれたもので、今與、生命惜しさに、逃げも隠れも出來ますまい、萬々御察し下さい。

松平　（顏を見上げ、沈思）……御胸の中の苦しさは萬々御察し申して居りますが、今一應、篤と國許へ直しを願へますまいか？　御一生、御隱退なされいと云ふのではありませぬ、こゝ一時の事でございます、その方が却つて……。

井伊　（遮つて）イヤ、御注意はよく分つて居ります、今日まで一家一門のものも、さま／＼に諫言はしてくれましたが、私は一旦、自分の心で斯うと定めた事は、誰方が何んと云はれても枉げませぬ、枉げては自分でなくなります、唯、御厚意は決して忘れませぬ。

松平　（ホッと嘆息をついて）……その御氣象は善く存込んで居りますが、今日の形勢を見ては何うも默つては居れませんので、御忠言を申しました……何うしてもお聽入れがなければ、致方もございませんが、では、せめて今後は御供廻りの人數を増して、十分に警固させ、聊かも手ぬかりのないやうに御用心の上にも御用心をせらるゝやうにお願ひします。

井伊　左兵衛督、生死禍福は一に天命によるものでございませんか？　刺客が若し私を殺さうとしても、天命が來なければ殺す事は出來ますまいが、若しそれが果して天命なら如何に用心しても逃げる事は成りますまい、その上、供廻の人數にも自ら一定の格式がありますから、自分が大老の職に在つて、自分でそれを破つては、三百の大小名を取締る事は出來かねませう　折角の御忠告ながらそれも何卒御察し下さい、

松平　（熱心に）御説一應は御尤もでございますが、私は大老伯一人の爲に申しては居りませぬ、東照宮以來、今日まで二百五十年、天下御威光に服して、三百の大小名一人として台命に悖くものはなかつたのでございます、それが黒船渡來一件からは兎角、世の中の大綱が弛んで何うなる事かと危ぶまれましたのに、それを二度、グッと引緊められて、今權威赫々たる幕府の大老たるお身が萬一、刺客の手に罹られるやうな不祥事でも出來しましたら、それこそ天下の御威光も忽ち地に墜ちて、國家の礎は覆るか知れませぬ、さすれば貴殿は假令職務の爲めに御斃れなされても、天下の御爲めにはなりませぬ、イヤ却つて敵方には、己が威福を縦にした爲めに、天罰が下つたのだやと嘲られ、味方の爲めには犬死同前と申す

ものでございませんか？

井伊　……左程まで私の一身を思うてくれられ、又天下の爲めを憂ひてゐられる貴殿の誠心は、私の胸に徹へ、ます、決して疎かに聞き流したくはございませんが、實は私も夜半に、人が寢靜まつた頃、唯獨りでつく〴〵自分の胸に問ひ、胸に答へて見ますと、敵方の所謂、己が威福を縱にするといふ譏りも悉く中傷許りではないやうに思ひ當る節がございます、イヤ、自分では強ち然う氣附いてした事でなうても、一旦斯うと信じたら何處々々までもそれをやり通さうとするのは、已に自分の我執とも云へませう。自分の我執と他人の我執とが、衝ち合つて、世の中には爭ひも起り鬪も始まる。それも達觀すれば、苟も生を享けた者が、此娑婆世界の濁つた塵の底から明かるい瑠璃光の空を慕うて浮び上らう〳〵と左にもがき、あがく阿吽の息吹き、機根のはずみで、唯一圖にその爭ひが醜いとも、その鬪ひが呪はしいとも云ひ切れませぬ、泥土の底をくぐつて來たければ、清淨無垢の蓮華は咲かない、砂礫の中からも塵泥の寶珠が拾はれぬものでもない、世に常住の善もなく、不斷の惡もなく、凡てが裁かれるのは唯、盡未來際限の彌勒の出世を待たねばなりますまい、……イヤ、大分御法談めいて來ましたが、まアこれで自分の我執は已に通してゐます、自分のしたい事、すべき事と思ひ詰めたものは、先づ形が附きました、唯一つ、姉小路局が京都での折角の骨折り甲斐が、漸く見えかゝつて來たのを、最後まで見ないで死ぬのは心殘りでもございますが、これとても先づ見込は十分立つてゐます、薪盡きて火は滅する、幕府への御奉公も、もう仕納めの時節が到來したかと思ひますから、この上は、私が刺客の手にかゝるのが寧ろ本望で、それで他人の我執が通り、今まで鬱忿を重ねた水戶の君臣等の幕府に對する怨みも解けませうから、却つて天下の爲めかと思ひます。

松平　（少し鋭い口調）天下に、幕府を怨んでゐる者は、水戶許りだと思はれますか？

井伊　イヤ水戶許りではありますまい、イヤ、幕府も私も天下の諸藩に怨まれてゐませう、斬つたものは斬られ、殺した者は殺されるのが、因果の道理で、私はあの大獄を起す時、始めからその覺悟を定めてかゝりました、私の一命は何んでもないが、實はそれよりも恐ろしいのは封建世襲の制度が、今天下萬民の心に呪はれてゐる事で、あの黑船の渡來はその封建制度瓦解の警鐘を打鳴らしたものでありました、これも時勢ぢやが、去年の暮に御本丸の燒落ちたのを見た掃部頭は、この黑い眼でもう一度幕府の瓦解をまで見度くは思ひませぬ、……又、度

と再び同胞の血を見てはなりませぬ。

松平　（眼を瞬つて）ヱ、では幕府は瓦解との御見込みでございますか？

井伊　イヤ、これは唯、私の不吉な夢物語だから、決して御他言は下さるな。

松平　不吉な夢物語？……然うでございませうとも……そんな筈はありません、イヤ大老の御存命中は決して左様な事はありますまい、是非とも御生命を大切になさるやう、折入つてお願ひ申上げます。

宇津木　（出て来り）お客様方、お揃ひにございますが。

井伊　さうか……では服を改めよう。

松平　今暫らく、……暫らくの間……。

井伊　もう御説は充分承りました……御免。（起かゝる）

松平　マ……マ……暫らく。（袖を捉へる）

井伊　御放しなされい。（振り切つて這入る）

松平　（後を見送つて）アヽ、大老の御大運は最早旦夕に迫つてゐる、日頃別懇に願つてゐる私が、それをお救ひする事が出来ないのは残念至極ぢや。

宇津木　主君のお身上をいろ／＼御心配下されまして誠に忝う存じまする、何を申しましても一旦斯うと御定め遊ばした事は、枉げる事も撓める事もフッフッ御嫌ひなあの御氣象で、生死の海を一足飛びに飛越さうとなさつて居りますので、傍からは唯、手をあげてはら／＼する許りでございます、御深切の程は、一同忘れはいたしませぬ。

松平　日頃は誠におもの優しい、女子供もなつく御方だが、イザとなつたら假令泰山、眼前にくづるゝとも、ビクともせぬ膽の据わつたお人ぢや、死を恐れぬ御覺悟が出來てゐるから、我等が千言萬語も遂に何んの役にも立ちさうにもない、ひよつとすると、今宵はお別れの御酒宴の、おつもりではないかな……

宇津木　（考へながら）イヤ、左様な事はございますまい……左様な不吉な御酒宴ではございますまい、御節句をお祝ひなさるのは毎年の御嘉例になつて居りますから。

松平　フム……何にしてもまだ四十六七のお働盛りを、今死なしては惜しいものぢや、右から見れば何物も恐れぬ勇武果斷の三河武士の標本で、左から見ると、一切に悟入して生死の淵を飛越えた禪僧の俤がある、斯ういふお人には、信長、生涯にもう二度とは逢へまい、幕府の爲めにも、又天下の爲めにも、大老の御一身に誤のないやう、此上は其方等家臣一同が、皆一つ心になつて、氣を附ける事より外は途はない、私からも頼む。

宇津木　ハ……此上とも、少つとも油斷せぬやうに、一同とも申合せて、氣を附けるでございませう。

松平　何卒、さうして貰ひたい、……長野主膳にもさう傳へてくれ、主膳は今日は何うした？

宇津木　茶室の方に控へてゐる筈でございます、もう時刻も少々遲れました、何卒、殿にも茶室の方へ御越し下さいませ、御案内申上げます。

松平　……兎に角、大老のお手前、一服頂戴しませうか？

（連立つて入る。）

（侍女等入來る、毛氈をいぢつたり、燭臺を配つたりなどする。）

侍女甲　彼方のお茶席が濟んだら、こゝでお能が始まるのだね、忙がしい事、今晩は何んでも夜明かしとか云ふ事ではないかえ？

同乙　イヤ、明日は殿樣が節句の御祝儀に、早朝御登城なさるのだから、夜明かしといふのは嘘であらう、忙しうても、も少し辛抱したら、今に皆が白酒のお振舞に有附きますよ。

同丙　今夜の御客樣は皆、殿樣の御親戚の方許りといふではないかね？　あの年の老つた切髮の御方がこゝの殿樣の母御前に當らしやると聞きましたが、それにしては、チト御若過ぎるやうに見えるではないかえ？

同丁　汝さまはまだ御存じないんだね、こゝの殿樣は、お兄樣に當らせられる前殿樣の後へ、御据わりなされたのだから、あの母御前の耀鏡院樣は、眞實は御姉に當らせられるのだが、それを殿樣は眞實の母御前のやうに、それは〳〵大切に遊ばす、家來衆はそれを見て皆、淚をこぼしてゐられますよ、眞實に此所の殿樣のやうに、何も彼も行屆いて豪いお方は、日本廣しと雖も、他にはないといふ御家中の噂は嘘ではありますまいよ。

侍女甲　それは然うでせうとも、御兄妹樣方との御中も眞實におよろしくて、あのお姉樣に當らせられる俊操院樣へ、殿樣のおやさしくなさる事、それは〳〵勿體ない位に見えますものね。

同乙　イヤ、それよりか、こゝの御殿樣が若しお在なされなかつたら、今頃は水戶前中納言が、御城へ乘込んで、外國と戰を始めて黑船から打出す大砲の彈が、もう江戶市中を黑焦げにしてる筈だといふ話しを聞きました、お殿樣のお庇で、まア〳〵お互に生命拾ひをしたやうなものだから、手を合せて拜んでも罰は當りますまいよ。

侍女丙　水戶前中納言樣といふのは、何んでも腹黑の謀叛人で、今の將軍家の代りに、自分の御子息樣をお城へ入れようといふ、悪企みをしたといふではないかえ？

同丁　それをこゝのお殿樣が御見拔きなさつてあべこべに、向を押込隱居にしてお了ひなされたので、水戶の家中の者が、こゝのお殿樣を怨んで、今にもお邸へ斬込ん

で來るかも知れないといふ噂が立つてゐますから、うつかりしてはゐられません、皆、用心をしませうよ。

（互に頷く。）

（能樂師、狂言師、地方、囃の一連が太鼓、鼓、笛など持込んで來る。）

能樂師　もう、此方でお準備にかゝつてもよろしいのでございますな？

侍女甲　ハイ、ハイ……何卒……もう徐々始まりますのでございますか？

能樂師　ハイ……一應御座敷の下檢分をして置きたいと存じまして。

侍女乙　此方は御命令通りしてあるつもりでございますが、これでおよろしいでせうか？　まア一應御覽なさつて下さい。

能樂師　ハイ……ハイ……イヤ、これで結構でございます、ア、お庭先には緋桃白桃が見事に咲いてゐるやうでございますね、まことにお目出度い御節句でございます。

狂言師　イヤ、今も御當家の、御門口をくゞりますと、何んだか御武運長久といふやうな、難有い氣持になりました、御當家へ御奉公の皆樣方は眞實にお幸でございますよ。

侍女甲乙　ホヽヽヽ、まアお世辭がようございます事、今に白酒でも進上しませう。

（侍女等笑ひさゞめいて退く、後で能樂師等は鼓、太鼓の小手調べをしながら話し始める。）

能樂師　今日は殿樣御自作の狂言「鬼ケ笛」が出て、殿樣がシテ役といふ御達しでありましたが、それが濟んで後が「竹生島」の番囃子、鼓は殿樣が御自身でお打ちになるといふのでございますな？

狂言師　左樣々々、……私も慥かに承りました、イヤ例も申す事だが、こゝの殿樣のお怜悧は何うも恐れ入つたものだね。御茶道始め、和歌、居合、能狂言まで、皆一流の御達人で、その上、禪學の方でも印可を受けてお居なさるさうだし、又天下の御政道にかけては、今、他に追附ける人物がないと云ふ事だからな。

能樂師　イヤ、眞實に、こゝの御殿樣の事を少しでも知つてゐる者は、皆感服し奉つてゐるさうだが、知らぬ者は、何んの彼のと、勿體ない事許り云ひふらすから怪しからんぢやないか？

狂言師　そこがそれ、盲目千人の世の中だね。

能樂師　それもさうだ、盲目にはお太陽樣が分らないからな。

狂言師　御念の入つた明盲目つて奴までゐるしさ。

能樂師　さう云へば自分の手で自分の眼へ蓋をして、白晝間、暗闇だ、暗闇だつて騒ぎ立てる鼻曲りも隨分居やうていふもんだしねハ、、、。
狂言師　ハ、、、さうなつちや太陽樣も嘸御困りだらう。
能樂師　つまりは天の岩戸へでも御隱れなさる事になつて了ふんだねハ、、、。
秀之丞　（入來る）皆樣がこれへ御出でになります。
（能狂言師等、皆低頭してゐる。）
昌子　（先へ立つて）さア／＼、何卒此方へ御通りなされませ、……若等、早く祖母上樣、伯母上樣を御案内なさい。
愛麿　さア、參りませう／＼。
直麿　さア、參りませう／＼。
耀鏡院　（五十左右の氣品のある切髮姿）松平樣、何卒、お先へ。
俊操院　（四十七八歲の、矢張、切髮姿）何卒、御正客樣から。
松平　イヤ、今日の御正客は、貴方方でゐらつしやいます、私はお後から……さア、さア何卒御通りなされませ。
（耀鏡院、俊操院は二人の若等の手を引き、松平左兵衞督、井伊奥方昌子の方につゞいて、宇津木、田中、日下部、河西、その他の諸士が座敷口から緣側へまで居流れる。）
（狂言「鬼が宿」始まる、シテは井伊大老、ワキは長野主膳。）
「是はこのあたりに聞えたる太郎と申者でござる、それがしいつぞや片ほとりなる安達ヶ原と申す處に住居いたす女に、ふと心易くなりてござるが、いかにも心ノワわしい女で御座て、それがし申す事を一つも用ゐませぬほどに、その後はふつつりと音信もいたさねども、何とやら殘念にも存ずる程に、今一度參り、きつとせつかんの加へて見ようと存ずる、漸う時期もよろしう御座るによつて、そろり／＼と參らう、いつも此道の物淋しさ、たとへやうがござらぬ、梟松桂に鳴き、狐蘭菊に住といへるも、げにか樣の處でかな御ざらう（橋がかり）何んと申うちに是は參りついた、寂寞柴門人到らず、此門にはひかかりたる眞紅葉の、たそがれどきにほのめきたるは、いとこゝろありげな、たゞむかし源氏の君とやら、忍びありきの時、五條あたりのあばら家にて、おのれと夕顏のはひかゝりたるを御覧じ、惟光めされ、あの花折てまゐらせよとのたまひしに、惟光立より、此花を乞ければ、みめよき上﨟の出たゝれて、白き扇子のつまいとうこがした

るに、此花を折つてまゐらせしとやか、總じてきらびやかなる宮殿に、雜立たる上﨟の立ちふるまひはさしもあれ、荒たる田舍屋に、みめかたちらうたき女の住わびたるは、いとはしたなく、哀れもまさるものでござる、いはれざる獨言を申した、さらば門をたゝかう、とん〳〵、明けてくれさしめ、「あの聲はたしか太郎が聲でござる、さても〳〵、うるさい事かな、風とこゝろやすう〳〵はなつてござれど、あのやうな男は、わらはゝいやでござる、けふは何んとしてかやいたもので御座らう、いやいたしやうがござる、さんざんになぶつてかへさうとおもひまする、「こゝをあけてくれさしめ、「さらば明てしんぜませう、さら〳〵〳〵(扇をヒロゲ戸をアケル)、さらばこちらへはいらしめ、「ずつと通らうか、「やれ〳〵なつかしや、けふはどち風がふいて、來さしましたぞ、「みどもゝ今日は參らう、明日は參らうとはぞんじたれど、なりはひにいとまなく、心よりほかの不沙汰いたいた事ぢや、其上いつ參つても、みどもがいふ事は、とやかくとおしやるによつてナ、「いやいかな事、何しにそなたのおしやる事を、わらはがいなと申しませう、是迄氣にさはつた事もあらば、堪忍のして、末ながく來て下されい、「ハヽ、わごりよが心がなをつたれば、みどもが心もはればれ(扇ツカヒ)といたいた、「わらはも堪忍のして下されて、嬉しう御座らう、かやうのときは、いはひの一獻とも申さう所でござる、猶更夜寒なにもあり、一ツ出さしめ、「わらはももとより左様にはぞんじたれど、侘びずまゐの恥かしさは、一滴も有合せませぬ、夫には何とぞ御大儀ながら、酒をとりにいて被下い、「いやこゝの者が、此やみの夜に、酒をとりにいかれるものか、「この安達が原を通りぬけると、里ばなに酒屋が御座る、それまでは程も近う御座るほどに、ひらにとりに行てくれさしめ、「いかにも、その酒屋までは、程もないが、酒はのみたし、是非におよばぬ、いざいてこよう、「夫はかたじけなう御座る、わらはゝ其内けはひけしやうをいたいて、まツて居ませう、はやく歸らしめ、「さらばいてゝるぞ、「ア、もし〳〵、「何事おや、「此ころ里人の申には、此原の黒塚より夜な〳〵いか目の鬼がいづるやら申ほどに、よく〳〵氣づかうて行かしめ、「ヤア……(驚く體)……何がいづるとも、かう行かゝつては、ゆかねばならぬ、やがて歸るぞ、(女、立上り彼へて見て)「まんまとたらいて御座る、扨鬼の出づると申したも、下心あつての事で御座る、太郎は至ての臆病者で、物事におそれますによつて、こゝに童ンべたちのあそびの面が御座る、是をかけ、再

び參らぬやうに、おどいてやらうと思ひまする（女皆座へ行キ、鬼面ナカケ背織ナカブリ、元ノ座へツク）仕舞、（樽ヲ背ニ負フ）「世にはなさけ深い人もあるもので御座る、夜道をたどり、酒屋へやう／＼と參り、酒をもとめて御座れば、亭主が申には、ア、夜ぶかにも來り給ふもの哉、山里のけしき安達ヶ原こそ猶も思ひやれ、しばしはとて、引とめて、あたゝめ酒を平らに強ひられ、フシ）盃つ貳つとうし三つの、闇の夜道の鬼一口、おそろしきをも、わすれるばかりに成にけり、情は人の爲ならず、誠によい心持になつて、さぞ女共が待つてをるであらう、急いでもどらう、酒を取つてかへつたぞ、是は何とおもうてか、並ゐた出立でをりやるは、「わらはにかことは扨おき、そなたには、殊ない樽げんでかへられたは、何んぞ仔細はし御座るか、「是はづと仔細のある事ぢや、追付云うてきけよう、先つ樽をば此あたりに置くによつて、そなた口を切つて、直に酌にたゝしめ、「心得ました、（樽ナアケ扇ニテ波上ゲ、酌ナイタス）「扨もよい匂ひがいた事ぢや、さらば參れ、ヲ、甜度ある、「波々とござる、「ウ、是はうまい酒ぢや、今一つついで奥れ、「直に酔はめされまいか、「ハ、、、酔てこそ面白けれ、平につがしめ、そりやつきますぞ、「ヲ、又甜度ある、「又波々とござる、さらばたべるぞ、ウ、、扨ても／＼、たべるほどにうまい酒ぢや、酒屋の亭主が情ふかい事を聞ておくりやれ、「何んといたしました、「いかにいそぎの事なればとて、此しん夜にひとり、酒をとりにくるといふものか、歸路を思ひやるとて、大盃にて、一ツ二ツ三ツハ、、、あのやうな深切か、わごりよにもすこしあやからしたいものぢやハ、、、「是はいかな事、はや大に醉はれたと見える、扨わらはも一つたべたう思ひますか、何とぞそなた酌をしてくださされまいかの、「心得た、さらば酌に立たう、ちとうたはうか、「一だんとで御座る、謠一向うにんやかに成つた、「殊の外にんやかになりました、お樽にうけ持ました、何んぞ一さし舞せられい、「久しう立た事もなりないか、舞うて見ようか、うたうてくれさしめ、「心得ました、（七ツ子戀しき人は見たいものと脇座ノ方へ廻リ、女ナ一寸ノゾキ、鬱キテ橋懸リヘハシル、謠ハヤメ鬼面ヲトル）是はて合點のゆかぬ、女共の顔をのぞいて御座れば、何か眞黒に見えたが、合點のゆかぬ事ぢや、夫々思ひあたる事が御座る、酒屋へ行くとき、黒塚のあたりに、いか目の鬼がいづるといふたが、道々何か氣味わる／＼、えり筋より摑み立られるやうに覺えたが、其時のこはい／＼と思ふこゝろより、ふと眞黒におそろしげに見たもの

であらう、今一度見たいものぢやが、ちとこはものでおざる。「もし／＼舞をまひさして、どこへゆかしめだぞ、ことに面白う成た所で御座るに、早う跡を舞せられい／＼」ア、つひ人が逢に参りはいたさぬか、表にちと用事があつて「吉野竜田の花より……戀しき人はト又踊へ廻り、コハコハノゾキ、常ノ顔ニテ安心シテ女ノ前ヲ通リテ、アトナ舞ニ仕舞フ女ハ又鬼ノ面ヲカブリナル)えんぶ／＼誠に面白う御座つた、ト酒ノム面ヲアゲテ)やれ／＼よいきめをつぶいた、先々ぶなんに舞をまひしまうた安心に、今一つたべたう成つた、酌をたのむぞ。「又諸ひきせう(放下僧小うた、女酌ニタチ、太郎ハツギテ本座へカヘル、太郎は直ニ酒ヲノミテ小うたニウカレ、謡ナガラ嵯峨の御寺アタリヨリカツキヲトランドスル、女ハトラレジト争ヒ、ツイニトーデ、太郎アトヨリ／＼と引サガリダルトキ、女アガリ、イデクラハウト云ふ所作)「いで喰はう／＼、「南無三 矢張鬼であつたは、ゆるしてくれゆるしてくれ」「いで喰はう」(太郎逃アルキ持タルカツギカブリテ逃込ム)「ゆるせ／＼」「いで喰はう喰はう／＼」

仕手、懸素袍、色段熨斗目、狂言袴、腰帯、扇

女、美顔かつら、赤縫箔帯、扇

作り物、武悪面、萬楠青紐付、上の唐織

○

松平　イヤ、御手に入つたものぢや。

耀鏡院　あのまじめな方に能うあんな事が出来ます。

俊操院　鐡之介殿の昔から、何んでもやりこなせる方でございます、同胞ながら眞實に奥底の知れぬ人としか思へませぬ。

昌子　御一心が強いからでございませう、何事も遊び半分にはなされぬあの御氣象が、何事もやり通さずには居られませんでございませう。

直廣　取つて喰はう／＼。

愛麿　ゆるせ／＼。

松平　(笑つて)イヤ、これも御上手御上手、さう云へば御父上にあやかられる御子息等は幸せものぢや、奥方も御心丈夫でございますな。

昌子　ハ、有難うございます、若等も成人して、御父上にあやかられるやうに、それ計り祈つて居ります。

（井伊、服を改めて出て来り、鼓の座に就く。「竹生島」の謡曲が始まる。）

「處は海の上、／＼、國は近江の江に近き、山々の春なれや、花はさながら白雪の、ふるか残るか時しらぬ、山は都の富士なれや、なほさえかへる春の日に、比良の嶺おろし吹くとても、沖こぐ船はよも盡きじ、

旅のならひの思はずも、雲井のよそに見し人も、同じ船に馴衣、浦をへだてゝ行くほどに、竹生島も見えたりや、

シテ「綠樹かけ沈んで、

地「魚樹にのぼるけしきあり、月海上に浮んでは、兎も波を走るか、おもしろの島のけしきや、

（井伊の鼓、ハタと止む）

松平　如何いたされました？

長野（出て來て、已に座に就いてゐる）お鼓が、何うかいたしましたか？

井伊　鼓の皮が破れた……。

（一座、色めく）

耀鏡院　マ、皮が破れたとは不吉な事ぢやな……何んだか胸さわぎがします……彼方の邸の事が急に氣がかりになつて來ました。

俊操院　太鼓なら撥を當てるから破れても不思議とは云へませんが、鼓の皮が破れるとは？

松平（不安さうに）御邸内の御警固は善く行屆いて居るかな？　今宵など油斷があると思うて、狼藉者が入り込まぬとも限りませんぞ

宇津木　その手配りは嚴重にいたして居ります。

田中　表門も裏門も、番人がそれ〴〵見張つて居りますから、手ぬかりは無い筈でございますが、此上とも氣を附けねば成りますまい。

耀鏡院　私は肩先が何んだかゾク〳〵して來ました。

直麿（庭先を見て）アレ、雪が降つて來た。

愛麿　ア、雪だ、雪が降つて來た。

昌子　桃の花が咲いてゐるのに、雪が降つて來よう筈はありません、如何な子供でもあんまり。

長野　イヤ、雪でございます……はアこれは不思議な事ぢや。

松平　成る程、雪ぢや……これは不思議……。

耀鏡院　ア、成る程……道理で、私は先刻から急に寒氣がして來ました。

井伊　お母上は御老體でもあるし、御風邪でも召しては惡い、では今宵の催しは、これ限りとせう。

長野　もう彼是八つ時にもなりませうから、左樣なされたがよろしうございませう、能狂言の御係りは今宵はこれで退出して下さい。

能狂言等　ハツ、……畏りました、では御免蒙ります。

井伊　御苦勞であつたな、彼方でゆつくり休息して行つたが善い……御客人始め、皆もこれで一先づ御開きとしませう、

耀鏡院　折角のお催しが、中止では殘念ぢやが留守の事も

何んだか氣にかゝりますから、これで御免蒙ります。

俊操院　私もこれで御免蒙ります、いろ／＼御手厚い款待(おもてなし)に預つて有難うございました。

井伊　（會釋……）では途中、御氣をつけなされて……御母上、お風邪を召しますな。何卒御體をお大切に……お姉上も……。

耀鏡院　御前さまこそ何卒御大切に。

俊操院　ではおやすみ遊ばせ。

井伊　貴方等も……。

松平　私もこれで御免蒙りませう。

井伊　マ、暫らく……貴殿はもつとゆつくりして貰ひたい。

松平　（顏を見て）　左樣でございますか？

日下部　恐れながら、私等もこれで退出いたしますが、一同に代つて御禮を申上げます。

井伊　ア、、御苦勞であつたの。

昌子　お母上樣お姉上樣に、私が玄關先まで御送り申しませう。

（昌子の方は、若君等と、耀鏡院、俊操院を送つて行く、井伊はその後影をヂツと見つめる、座には長野、宇津木、田中が居殘り、日下部始めその他の家臣は退出する。）

松平　イヤ、彌生の桃節句に雪が降るとは珍らしい……この頃は天と天の調子までも狂つたものか……世の泰平の破れたのも不思議ぢやが……。

井伊　（淋しげに笑つて）　貴殿は左樣云ふが、雪の降るのも不思議はないが、雪は今に珍らしい、それなら何に、今一獻酌まう、長野、宇津木、田中、汝等もこゝへ來い、無禮講で一緒に飲まう。

一同　ハ、……。（と叩頭して近寄つて行く、侍女等が杯盤を運んで來る）

長野　ナカ／＼降る……盛んに降つて居る……。

宇津木　緋桃の花まで見る間に、積つた綿帽子を着て了つた、折角咲いたものが、明日の朝までには萎んで了ひませう、花時の雪とは前代未聞の事でございますが。

松平　（眉を顰めて）　全く、狂ひ雪ぢやのう。

田中　（氣遣はしげに）　こんな事は年代記にもないことでございませう、これも矢ツ張大變地妖の一つに相違ございません。

井伊　（落着いた顏色で）　昔、釋尊、弘道の爲めに、御遊行の節、外道惡魔が汚穢を途上に撒き散らしてお悩し申さうとしたら、梵天帝釋、雪を降らして忽ち大地の上を淨め給ふたといふ事ぢや、この樣子では、明朝までに

は積らう、雪に淨められた道を登城するのも、よい氣持ぢや。

松平　イヤ、斯うした際には、愈々御油斷がなりませんぞ、さうのん氣な事を云つてゐられる場合ではございますまい。

井伊　（微笑）マア、お飲んなさい……雪見酒も一興ぢや、しかも、桃の節句に雪までが一緒に見られるといふのは面白い事ではないか……汝等も飲め、飲め、充分に飲んでくれ。

昌子　（若君等を連れて入り來り）御二方樣を御見送り申しました、若等はもう半分眠つて居ますから、お先へ眠ませませう。

直麿　（眼をこすりながら）……あの……靜はもう鄕にはゐませんの？

愛麿　……靜はもう歸つては來ませんの？

昌子　彼はもう近江へ歸ると云つて、お暇乞をしたのではありませんか……もうお眠みなさい……ソラ、半分眠つてゐるではありませんか？

井伊　與にもまア一つ獻さう……若等にも甘酒なりと飲ませてやらう。

昌子　（怪む顔色で）エ……若等へまでお杯を？

井伊　オヽ、もう眠がつてゐるのか？　ではよい、……二人ともお眠み。

直麿。愛麿　お眠み遊ばせ……お眠み遊ばせ。

（侍女に連れられて退場。）

昌子　矢ツ張、靜の事が思ひ出されると見えまして、ア、して眠りかけてゐても、まだ云ひ出します……不憫でございます。

井伊　（頷いて）ウム、不憫は不憫ぢやが、致方もない事ぢや……サ、一つ獻さう。

昌子　ハ……頂戴いたします。

井伊　汝にもいろ／＼世話になつたな……まア若等の事はよろしく頼むぞ。

昌子　（ハツと頑な貌して）今更改まつて、何うしてそ樣な事を仰やるのでございませう。

井伊　（微笑）イヤ、改まつて云ふのではない、人間はその時その時に云ふ事、爲す事が、すべて遺言ぢや、然うであらうハヽヽヽ。

松平　（強い語氣で）私にも何か遺言はありませんかな？

井伊　（しんみりした調子で）萬事よろしく頼みます、貴殿は掃部頭が最後までの、唯つた一人の友達だつた。

長野　（勵ますやうに）大さう氣の滅入る樣な事を仰るではございませんか？　我君、姉小路局の近頃のお便りでも、和の宮御降嫁の事も何うやら、眼鼻が附きさうでご

ざいますし、公武一和の目途も立ちかけましたから、これからが愈々我君の乗出される本舞臺と申すものではございませんか？

宇津木　長野の云ふ通り、これからが我君の本當の御働き時かと心得ます、もう強ひて御退身はお勸め申しますまいから、何にせよ、徳川家萬年の爲に、又国家安泰の爲めに、我君は百歳までも、御長生なされねばなりませぬ。

田中　それ〳〵、何れにしても、百年までも御長生なされますやうお願ひ申上げます。

井伊　（淋しい笑）長生も結構だが、百年と云ひ、二百年と云つても、經つて見たら昔噺をする間と同じ事だ、人間の生身程頼まれるやうで頼まれぬものはない、その生身のまゝで細う長う活きる算段をするより一生に唯の一度でも魂の切先で、虚空に金剛不壊の像を彫り附けるやうな生き方をしたら、それこそ男子の本望ではないか？……イヤ話しがつい理に落ちたが、長野、和の宮様の事は、兎に角、老中安藤對馬守が後を引受けてやられうから、汝も蔭日向になつて、力添をして上げてくれ、所謂大厦の覆るのに生かな支柱は何んの役にも立たぬか知れんが、まアやる丈はやる事だ、米国への使者には新見豐前守を出發させたし、彼も此も一埒ついた、云はゞ私はもう御用済の人間ぢや、イヤ、長居をしては却つて世間の邪魔にもなる、思ひ残す事は更にない……さア、さアくつろいで飲まう、大に飲まう……奥、何を泣く……泣いてゐる時ではないぞ？

昌子　（涙を拭いて）ハイ……否え……泣きはいたしません……。

井伊　ア、松平、貴公もふさいでゐる、これでは宛でお通夜のやうではないか？　ハヽヽヽ、私が悪かつた……サ、景氣直しだ、飲んでくれ〳〵。

松平　（元氣を粧つて）飲みますとも……飲みますとも……。……大に飲みませうぞ。

井伊　宇津木……田中……長野までが風邪をひいたのか、鼻汁が垂れてゐるやうだな。見つともない、景氣よく謡はう、……鉢の木でも謡はう。

シテ「仙人に仕へし雪山の薪、ツレ「かくこそあらめ

シテ「我も身を　地「捨人の爲の鉢の木、切るとてもよしや惜からじと、雪打ち拂ひて見れば面白やいかにせん、先冬木より咲きそむる……。

（一同謡ふ、雪は盛んに降る。）

―幕―

第五幕

第一場　井伊邸玄關先

萬延元年三月三日の朝である、井伊家大玄關先、屋臺は稍斜面向、敷臺の直ぐ上の大玄關は杉戶が左右に開かれ、次の室から、長廊下へ通る口には、墨繪の龍虎の衝立が立つてある、壁には赤い鞘付の槍、刺叉、伊賀棒などを列べかけた架棚が見える、下手には赤塗の大門が左右に押開けてある、四五寸許りの深さの雪が庭に降り積つて、まだしきりに風に巴と舞ひながら降つて來るのを、小人頭の指圖で、仲間三人が、かきのけてゐる。

仲間甲　何うも上巳の節句に、こんな大雪が降るなんて、前代未聞の事つたな、毛唐人めが切支丹の魔法でも使つて、日本の人間を凍死させやうとでも思つてやつてやがるんぢやアねえだらうか？

同乙　マサカ、切支丹でもあるまいが、碌な事でねえにや定つてるサ、地震、疫病、津浪、箒星、それから黑船が來てドタバタ騷ぎが始まつて、去年の暮には御本丸が燒ける、今度はお節句の雪と來たんだから、世の中は物騷つゞきだアな、大抵高い米の價値がまだ上るだらうよ。この次には人間の乾物市が立たうてもんだハヽヽ。

同丙　嘘もねえな、斯うなつちや世の中に生きてるのが恐くならうてもんだ。

小人頭　コレ／＼假にも御當家に御奉公してるものが、世間の尻馬に乘つて、そのやうな物騷談をするではない、雪は豐年の貢とも云つてる位だから今に米の價段も下る、世の中はよくなると思つて喜んだが善い。

仲間甲　でございませうかな？……さうなれはこの上もない結構な事だが、もうポツ／＼櫻の花も咲かうて時節に、この大雪と來ちや、何んだかあんまり豐年の貢とも云へないやうで、薄ツ氣味が惡うたりますかな？

仲間乙　頭はあの、昨日の御噺しを御存じでげせう？　御當家の小荷駄馬が何んでも京橋邊で喰合を始めて、赤馬一匹、白馬に喰殺されたと云ふぢやアありませんか？

小人頭　畜類の事だ、喰合もやらうぢやアないか？

仲間乙　處が御當家の事を世間で赤鬼々々と云つてますから、赤馬の喰殺されたのはあんまり縁喜でもないと、御家中では大さうかつぐ者も居りますぜ。

小人頭　氣にすれば何んでも氣になる、まア御互に、怪我過ちのないやうに、氣を附けりや善いんだよ。

仲間甲　イヤ、然う云へばこの雪で、お城內の紅葉山の楠の大木が折れたといふ噂を先刻聞いた、何事かなけれは善いがな？

仲間丙　イヤ、何うせ唯ぢや濟むまいよ、今に何か大變な事がオッ始まるに違ひねえさ。

（丁字屋吟三、ふら〳〵と門口へ入つて、周章だしく封書をそこへ投込んで又ふら〳〵と姿をかくす。）

小人頭　何者だらう？（駈寄つて、封書を拾上げ）……ヤ、殿樣へ直訴の封書だ、今のは何奴か知らぬ……門外へ追駈けて出る。）

仲間甲　殿樣へ直訴の封書を投込んだとよ、何事だらうな？

同乙　ソラ、愈々、本事になつて來さうだな、又例の攘夷論の手先ぢやアないかな？

同丙　コリヤウカ〳〵してると、己等まで今に亂暴者に斬殺されるかも知れぬ、イヤ、物騷々々、こんな御家からは早くお暇を貰ふんだな。

小人頭　（駈け戻り）御門番と一緒に探したが、何處へ行つたのか、投込んだ者の後姿も見えぬ……兎に角、私から御用人へ申上げよう、……また、そこらに泥雪が殘つてゐるやうだやな、御駕籠の通る處は、敷石のスッカリ見えるまで、氣を附けて掃除してくれ。

（宇津木と田中、話しながら衝立の蔭から出て來る。）

田中　何うも心懸りでなりません、秀之丞が殿のお髮を上げてゐると、何うしてもお髷がくづれて纏らないから、不思議だ不思議だと云つてゐる、と殿は、乾度御城内に異變のある前兆であらう、早々登城するぞと仰る、お止めする事も出來ませんでな。

宇津木　お止めしたらお叱を蒙る許りだ、御供の人數をそつと增して置かう。

田中　では私から御供の人數の中へ加はる事にしませう。

小人頭　御用人樣へ申上げます、只今御邸内の中へ斯樣な封書を投込んだものがござります、殿樣へお直の名宛でございますが……。

宇津木　（封書を受取り）何、投込封書？……その投込んだ者は見かけなかつたか？

小人頭　御門番と一緒にそこら中を見廻りましたが、影も形も見えなかつたのでござります。

宇津木　（思案顏）フム……何事であらう？……兎に角、殿樣へ差上げやう。（急いで臨入る）

田中　御供揃ひ〳〵（と呼ぶ）

（「ハアー！」と答へて、お供頭日下部三郎右衞門、お供目付河西忠左衞門始め、身支度凜々しく、大勢がそこへ現れる、御駕籠が玄關先へ据ゑられる、槍、挾箱が、門口に列を作る。）

田中　日下部殿、川西殿、今日はこの雪でもありますし、御登城御下城の御途中、少つとも油斷はならんと思ひま

す、この田中もお供の末に加へて戴きませう、それから
あの御人數は、増してありませうな？
日下部　萬事、手配りはしてあります、我々共も一切、雨
具を用ゐぬ事に申合せました。
川西　御登城の折は兎に角、御下城が暮方にでもなります
と、餘つ程、用心せねばなりません、そこは諸士にもよ
く心得させて居ります。
（登城の時刻を報らせる五つの太鼓が城内から鳴りひ
びく。）
（井伊、熨斗目の裃にて出で來る、奥方、若君、宇津
木、長野等が送つて出る。）
井伊　用意は善いかな……ナカ〳〵の大雪ぢや、でも斯う
見渡した所天地一白、何んだか寂光淨土の風光が私の眼
前に展けてゐるやうぢやぞ。（とヂッと見入る）
田中　ハ……恐れながら、唯今の封書は御覽遊ばしてござ
いますか？　何か異變の報知でも書いてあつたのではご
ざいますまいか？
井伊　（無雜作に）あれは丁字屋の三男が投込んだのだ、
……何んでもない……何んでもない……氣にかけるには
及ばぬ事ぢや。（云ひ〳〵敷臺口へ立出る）皆、雨具も
用ゐてゐないではないか？　この吹雪に何うしたのぢ
や？

田中　油斷があつてはなりませんから、お供頭始め皆、ス
ハと云はゞ戰の用意をいたして居るのでございます。
井伊　（凛とした口調）無用ぢや……彦根藩士が左程ビク
ついてゐるやうに思はれては世上の物笑ひぢや、雨具を
附けい、こんな時に刀の鞘を剝き出しにして輕々しい風
俗などしてゐてはそれこそ浪人者と間違へられやうぞ：
……それから供廻りも格式通りで、一切人數は増すなと
堅く觸れて置いた、私の命に悖く事はならんぞ。
田中　御一身がお大切でございます、お供廻の事は、何卒
諸士の心にお任せ置き下さいますやうお願ひ申上げま
す。
井伊　（靜かに）雪の降る時は、雪の降る中を歩くやうた
身支度をせい……人數を増す事は堅く相成らん。
昌子　（訴へるやうに）折角、御家來衆の心遣ひでござい
ますから、何卒皆の氣の濟みますやうに、萬事大目に見
てお遣り下さいませ。
宇津木　私からも、平にお願ひ申上げます。
井伊　雨具をつけい……増供はならん、私は人々の標本に
ならねばならぬ身分ぢや。
昌子　……あのお髷が少しくづれてゐるやうでございます
か？
井伊　イヤ、構はん、形が出來てさへゐればよいのぢや。

直麿　（日下部の差圖に、皆々雨具をつけ、刀の柄を卷く。）
坊もお父上と一緒にお城へ行つて見たいな。

愛麿　將軍家と雪投でもして、お遊びしたら面白からう。

井伊　（微笑）もつと大人になつたら登城も出來ませう、よく母上の云はれる事や皆の云ふ事を聞いて、大人しくお留守居をなさい、よいか、分つたか？

（二人は頷く。）

井伊　與、若等に風邪をひかすな、留守にはよく氣を附けるがよいぞ、

昌子　ハ……（としみ〴〵と見上げて）貴方樣も何卒御氣をおつけ遊ばして……御大切なお體でございます。

井伊　（頷いて）ウム……長野始め、一同、氣を附けて留守をせい。

長野　委細畏りました、……無事の御下城をお待ち申して居ります。

井伊　（和いだ調子で）フム……では登城する……（後を振返つて）……皆、大儀であつた……大儀であつたな。

（井伊、式臺へ下りる。）

愛麿　（急に追駈けて）お父上、坊も行きたい、連れて行つて下さい。

直麿　では坊も行く……お父上、坊も行き度い。

（袂にすがるのを振切つて。）

井伊　何時にない頑是ない事を云ふものではない……母上の傍へ。

愛麿　何んだかお父上と一緒に行き度くて仕樣がなくなりました……御城の御門まで御一緒に連れて行つて下され……。（鼻汁をすゝる）

（井伊、無言で振切る、宇津木、田中等が若君を支へる。）

井伊　（笑を含んで）直ぐに歸つて來る……大人しく待つて居るのぢや、皆も氣を附けてやつてくれ……。

（井伊、一瞬時立留まつて、奧方昌子の方始め、皆の顏にチラと一瞥を與へ、それから小急いで駕籠に入る。）

（「御出門」と呼ぶ聲、列は早、作られて居る。）

井伊　（駕籠の中から外をのぞいて）大變な降りだ、吹雪になつたな、でも春の雪ぢや、直ぐに消えよう……さらばぢや。（と、も一度振返つて、直ぐに駕籠の戸を鎖させる）

（奧方等は式臺へ出る、長野等は庭へ下りて、見送る、行列は、かけ聲で、徐々に門を出る、吹雪は激しく門内へ舞ひ込む。）

昌子　（憂はしげな顏色）若等があんたに、お後をお慕ひするといふのはめつたにない事……何うも胸さわぎがし

てならぬ。

長野　（慰めるやうにと）イヤ、御案じ過しなされますな、御下城が夜分にでもなりますやうなら、ソッと增供で御迎ひに上ります。

昌子　……何卒、何事もなければよいが？……、

（と、後影を見送るやうに、式臺へ立つてゐる、吹雪は一しきり盛んになる、田中、宇津木も思案顏に暫らくそこらに立盡す。）

（舞臺廻る）

第二場　櫻田門外

濠を隔てゝ、上手寄りに、瓦の白くなつた櫻田門が見える、下手寄りに、葭簀張の小さい夜臺店、路は一面に白く綿のやうな雪がポタ／＼と降りしきつてゐる。

○

茶店には、雨合羽の、侍風の五六人、腰をかけて、燗酒を飲んでゐる。水戶浪人の一組である。

稻田　何しろ、寒くて仕方がないな。

佐野　お濠へもうソロ／＼鴨が降りて來さうなもんだな。

大關　（武鑑片手に見張しながら）もう直だ、門が明いてゐる。

亭主　ヘイ、お熱燗……武鑑を御調べになつてるのでございますか？　今に諸大名のお行列が見られます。

大關　オヽ、こゝは行列拜見にいゝ場處だな。

亭主　左樣でございますとも……斯う云つては失禮でございますが、御江戶へは始めてお上りでございますか？

大關　ア、田舍武士がお初に江戶へ上つて來たのさ、ハヽヽ、

亭主　左樣でございますか？　何しろ上巳のお節句に、この大雪は、江戶でも珍らしい事でございます。

大關　イヤ、何も彼も珍らしいものばかりだて、ハヽヽ、

（有村次左衞門等五六人、雨合羽で、雨傘をさし、茶店の諸士に目禮しながら向ふの方へ入る、つゞいて齋藤監物の一手、五六人が現れて降る雪の中をウロ／＼歩いてゐる。）

大關　ア、出た……、出た、出た……。

佐野　出たか……出たか？……。

亭主　お行列でございますか？……ア、あれは御大老井伊掃部頭樣でございます、何しろえらい御威勢でございますよ。

（「下に／＼」の聲が、吹雪の中を近づいて來る、やがて先供が見える。）

（茶店の先に、佐野竹之助が立出でて、羽織の紐を解

かうとすると。）

大關　まだ〳〵……まだゞ。（と制する）

先供が進んで、やがて、駕籠が茶店の前まで來かゝつた時、笠を着た森五六郎、つか〳〵と進んで出て。）

森　差上げます。

（井伊家の供頭、日下部三郎右衛門「何者ぢや」と咎める。）

（此時、早くも森は笠を投捨て、羽織を脫ぐ、下には白鉢卷に、襷を十字に綾取つてゐる、刀を拔いて斬附る。）

日下部　狼藉者ッ。

（刀の鞘のまゝで防いだが、額を切られて倒る、槍持は驚いて逃げようとするを、奪ひかける、忽ち短銃の音が一發、それを相圖に、左翼の黑澤、有村等浪人の一隊が斬かける、井伊家の供廻りは、「狼藉者々々々」と口々に呼び合ひながら一旦タジ〳〵退いたが、直ぐ盛返して斬り結ぶ、戰ひが前列に始まつて、駕籠脇の者まで、その方へかけ附けた時、左翼の後隊、鯉淵、蓮田、廣木等が現れて斬り込んで來る、供廻りが又それを防戰する處へ、右翼の佐野の一隊、茶店から飛出して、打かゝる、暫らく亂戰になる、雪は烈しく降りしきる、浪人等は「正」「堂」とかけ言葉して戰つてゐる、見る間に井伊家の供廻りには、負傷者が多く出る、六尺は逃げ出して、駕籠は雪の中に据ゑられてゐる。）

井伊　（駕籠の中から）駕籠脇を離れるな、……駕籠脇を離れるな、……防げる丈は防げ。（と呼ぶ）

（浪人と、供廻の侍とは、追つ、追はれつ、上手下手で火花を散らして戰つてゐる、川西忠左衛門は兩刀を使ひ、小河原秀之丞も駕籠脇を離れず、寄り來る浪人を防いで　川西は稻田重藏を傷ける、重藏は傷きながら一刺し駕籠を刺す、駕籠の中からは「ウーム」といふ呻き聲が聞える、此時、竹胴に白鉢卷の、有村次左衛門が飛んで來て、又一刺、駕籠を刺す、佐野竹之助も馳寄つて、一刺する、川西、小河原は、稻田を斬伏せ、自分等も雪の上に斬伏せられる。）

有村　よか、よか、よか、よか（と叫んで、駕籠の戶を開き、井伊大老の首を上げ）天に代つて國賊井伊掃部頭を打取つたぞ……。「仕留めたッ。」（浪人等は、彼方、此方で戰ひながら一齊に叫ぶ）

齋藤　此までぢや、退散せい〳〵。

（その聲を聞いて、井伊方の供侍は、負傷して倒れた者まで起上つて、再び斬つてかゝる、浪人等はそれを斬り仆す。）

齋藤　首尾よく本望を遂げたから、傷つかぬ者は早く退散せい、傷を受けた者はかねての約束通り、それぞれ自訴するとせう。

有村　よか、よか、よか。

佐野　愉快、愉快、愉快、……少し負傷はしたが、何んでもない。

（浪人等はちり〳〵に落ちて行く。）

有村　（首を刀の先に刺し）國賊の首をさらして行かうハ、、、。

（小河原秀之丞、ハッと起上り「汝れッ主君の仇」と蹌めきながら駈寄つて、有村を一太刀斬る。）

有村　ア……小癪な。（振返つて、秀之丞を斬り倒す）

（井伊家の供廻りは、此時、駕籠脇へ集つて來る、雪は又しきりに降つて來る。）

第三場　再、井伊家玄關先

第一場と同じ場面、雪はまだ降りしきつてゐる。

田中　（衝立の蔭から出て來る）何んだか胸騷ぎがして、ヂッとしてゐられない、御城内で何事か起つたのでなければ善いが、御用もおち〳〵手に附かない。（敷臺へ下りかける）

宇津木　（書狀を手に、忙しく駈け出る）これは何うも容易ならぬ投込封書だつた。

田中　（振返つて）エ？　何うしましたと？

宇津木　只今、殿の御居室へ入つて見ると先刻の投込封書の封を切つたまゝ打捨ててあります、披見すると昨夜、品川の妓樓へ怪しい浪人體のものが多勢寄集つて、何か密議をしてゐたが、それが長岡驛から脱走した水戸の藩士らしい、その座敷へ出た遊女から話を聞いて、心がかりでならんから殿樣へ御知らせ申上げるとしてある、投込んだものはあの丁字屋の三男吟三らしい、「吟」と書いてあります、かねての噂と云ひ、このまゝ打捨つては置けますまい。

田中　エ……それは一大事だ、主君も御披見なされたまま、何事も仰らず、增供までならぬと嚴しい御云ひ付けで、御登城なされるとは、あんまり御緩怠過ぎる、もう一刻もぢつとしてはゐられませんから、早速諸士を連れて、御下城の途中を固めませう。

宇津木　この封書を見ては、無事に御登城遊ばしたか、それさへ何んだか氣がかりでならん、見屆けて來ませう。

田中　御尤……見屆けませう。（下りかゝる）

（突如に門口から）タ、タ、大變だ〳〵、殿樣がお斬られ遊ばした〳〵。（大聲で、叫んで、血に塗れた六尺が駈込んで來る）と……と……殿樣がお斬られ遊ばし

ました、々、々、大變々々（と手でさす。）
田中　エツ……。（顏色をかへ、足袋跣足で驅出す。）
宇津木　殿樣が御斬られ遊ばした？
六尺　あそこで……櫻田門の外で……大勢の狼藉者にお斬られ遊ばしました？
宇津木　何に、狼藉者に？……しまつた……（驅出さうとして、ふり返り）一大事が出來しました、御出合なされ、御出合なされ。（と大聲に叫ぶ）
（諸士がその聲を聞附けて、奧から、庭口から、追取刀で驅けつけて來る。）
侍　何うしたのでございます？　何事が起りましたか？（口々に叫ぶ）
六尺　殿樣が御斬られ遊ばした。
宇津木　狼藉者が殿樣へ亂暴を働いたといふ事だ、一刻も猶豫はなりません、さア續かれい。（と庭へ飛び下りる、諸士も顏色をかへて、驅出さうとする）
（此時、門口から駕籠が舁き込まれる、田中が興奮し切つた顏色で附添うてゐる、負傷した侍が、亂れがちに前後に附いて來る。）
宇津木　殿樣は如何なされました？
田中　殘念だツ……殘念だツ……。（男泣に泣く）
宇津木　エツ……もう遲かつたか？（悲痛の色）……兎も角お玄關へ。（駕籠は舁き上げられる）
長野　（身支度して出て來る）狼藉者は追拂つたのか？殿は？
田中　殘念至極ぢや。
長野　エツ……。
（駕籠の戸を開いて、長野、宇津木、田中が覗き込む、ヂツと見て三人とも無言、自づと顏を俯向けて拜むやうな態度、諸士も、そこらを遠卷にしてのぞき込む。）
昌子　（忙しくかけ來る）殿樣は何う遊ばされたか？　御負傷は何うぢや？
（長野、宇津木は、ハッと平伏する、昌子の方は駕籠の中を覗いて見てハッと驚く體、やつと制して、無言で涙を拭く。）
宇津木　殘念至極でございます。
長野　殿は天下の爲めに、犧牲（いけにへ）とならせられたのでございます。
昌子　お首（しるし）まで上げられなされたとは、天下の爲めでもあんまり慘過ぎる……私もお供をする。
（やにはに、懷劍を拔いて、自害せんとする、左右から留める。）
長野　奧方樣、お大切な處でございまするぞ……御心をお

落着け下さいませ。

昌子　自害はすまい、……髪を切る……放せ……。（自ら髪を切る）

愛麿　（かけ來り）お父上は？……。

直麿　（のぞいて見て）ア、お父上が……。（と泣く）

昌子　（元氣らしい調子で）こゝで泣くのではありません……さア、このまゝ奥へ。

長野　ア、御駕籠はこのまゝ奥御殿へ、我々が舁いで參りませう……狼藉の仔細が聞き度いから、供廻の侍を二三人彼方へ寄越して下さい。

（長野、宇津木始め皆で、寄集つて、駕籠を舁ぎ込む、昌子の方も若君等も、ついて入る。）

（負傷した槍持、挾箱かつぎなどが、門内へ歸つて來る、供侍が三人五人宛、興奮し切つた體で、よろけよろけ歸る、田中始め諸士は門の中に立つて見張つてゐる。）

田中　（運び込まれる屍體を見て）その屍體は？

供侍の甲　お供頭、日下部三郎右衞門どのでございます。

田中　ア、主君に殉死されたか？……生殘つた我々よりまだお幸だ。（と合掌して見送る）

（屍體が次々と持込まれる。）

田中　誰方だ？

供侍の乙　お供目附、川西忠左衞門どのでございます。

田中　ア、矢ッ張斬死されたか？……餘つ程のお働きであつたらうの？（と合掌する、次の屍體を見て）……それは？……ア、小河原秀之丞どのか、君の御先途を見屆けて、天晴れの殉死を遂げられたな？……。（と鼻汁をかむ）

供侍の丙　何しろ不意の出來事でございました。櫻田御門の前へ來かゝると、駕訴らしいものが現れまして、アッと思ふ間に日下部樣を斬倒しました、その時相圖の短銃を鳴らして、前後左右から狼藉者がお供へ斬つてかゝります、我々共もかねて覺悟はして居りましたが、何しろあの吹雪で一間先はよく見えませんので、聊か不意を打たれて、殘念千萬ながら不覺を取りましてございます、その隙にお駕籠へ刀を刺し通したのでございます……。

田中　（切齒）お首まで上げられたのは、無念至極ぢや、……せめてお首を取返して來ねば一分が立たん……ア、君方は、奥御殿へ出て、委細の事を申上げて來て下さい。

（供侍等は、「畏りました」と云つて入る。）

（留守居の諸士、異口同音に「お首を取返した上、主君の御無念を晴らす爲めに、小石川水戸の邸へ亂入して潔く斬死いたしませう」「即刻出かけませう」「猶豫

「はなりませぬ」と叫び合ふ。）

田中　（頷いて）ではつゞかれい、私が眞先に立つて斬死するから、皆で私の屍體を乗越えて進まれい。

諸士　委細心得ました、さア。（口々に云つて駈出ようとする）

宇津木　（奥から走り出る）皆々は、血相をかへて何處へ行かれる？

田中　狼藉者を鏖にして、主君の仇を討たねば武士の一分は相立ちますまい。

宇津木　狼藉者は最早何處かへ迯込んだといふではないか？　後を追駈けるにしても、お城間近く多人數の者が一團になつて駈出しては、後日のお咎も受けねばなりますまい、先づ控へられい。

田中　この場合御留立ては無用ぢや、小石川の邸へ斬入つて、亡君の御怨みを晴らさいでは申譯が立たん、お首も彼方へ持返つてゐるに相違ない、それも奪ひ返さねばならん。

諸士　今更問答をしてはゐられぬ、さア出かけませう、一さんに切込みませう。

宇津木　マア、マア、暫らく待つて貰ひたい（駈下りて、支へ）お首を小石川の邸へ持返つてゐようとも思はれんが、それを引取る掛合には田中氏か、二三人のお供を連れて行かれゝばよい、事を荒立てゝはお家の大事ぢや。

田中　（焦れ立つて）この上の大事が起りようはあるまい、そこを退かれい。

宇津木　イヤ、退かぬ。

諸士　刀にかけても通りますぞ、留立てする者は味方でも仇の片われぢや。

宇津木　強つて行かれるなら、先づ宇津木の首を刎ねてからにせられい。

（頷いて諸士は勢込んで刀を抜くもあり、どよめき渡る。）

長野　（駈け出てゝ）暫く待たれい、うろたへる處ではない、主君がお悼はしくも屍を途上に横たへられたからには、幕法の表通りならお家は斷絶する、それが或は主君の御本望かと思ひ當る節もありますが、併し直政直孝公以來、御當家は幕府無二の柱石であるから如何やうな御憐愍の思召が下からうも知れませぬ、暫らく御沙汰を待つて見た上で、萬一何の御思召もなく、御法の表通りに行はれる事と定まつたら、主君の御本意は兎も角も、その時こそ一家一門を擧げてこの仇討に出かけねば我々の一分が立ちません、こゝはまア暫らく忍耐する處だ、……無念至極はお互だか、こゝは大切な場合ぢや、暫らく待たれい。

宇津木　長野氏の云はれる通、こゝはお家の浮沈の定まる瀬戸際だから、暫らく潮合を見て、進退を決するのが、當然ではあるまいか？

長野　進る時ではない、それ程、物の分らぬお方はかりでもあるまいに。

田中（頷き）イヤ、さう聞けばお尤、年甲斐もなくチと血が頭へ上つたらしい、この上は兎も角も御沙汰を待つとしませう。

（諸士も頷く。）

田中　では私はお首を探かしに行から（涙を拭うて）……二三人のお方、一緒に來て下さい。

長野　狼藉者が何處へ隱したやら？……打捨てたやら？勿體ない、お悼はしい限りぢやが、ともかく手配して探し出して下さい。

田中　では、早速行つて參ります。

（二三人の侍と共に出て行く。）

長野　イヤ、皆もよく私の云ふ事を聞分けて下さつた、怨を晴らす時が來たら、御一緒に死にゝ行きませう、ともかく奥御殿の御亡體へ御燒香をせられい……何んだか夢のやうぢやが、矢ッ張夢ではなかつたのぢやな。

宇津木　昨夜の狂言の御姿が、また眼先にちらついてゐるのぢやが……私は何うもまた、嘘のやうな氣がする。

（諸士、列を解いて、玄關脇から上りかける。）

一人の徒侍（門口から入來る）只今、火急の御見舞として御老中、安藤對馬守樣かこれへお越でございます。

長野　ハ……この事を奥へ御取次下さい。

（侍一人奥へ入る。）

（宇津木、長野等始め諸士は敷臺で迎へる、昌子の方、愛麿、直麿等も出迎へる。）

安藤老中（用人を連れて入つて來る）御混雜中、御出迎ひは恐入る。

昌子　何卒、ズツと御通り下さいませ……。

（安藤、會釋、奥へ通る、昌子の方等つゞく。）

長野　御見舞とは云へ、何か內々の御沙汰があるのかも知れぬ、お次の室で承つて來よう、何卒皆靜肅にして待つて居て下さい。

宇津木　私が、皆へ御報せをします。

（二人中へ入る。）

侍甲　唯の御見舞でもあるまい、凶か、吉か？

侍乙　御不覺とあつて、三十五萬石御召上げの御沙汰かも知れぬ、……寧そ御法通りに行はれた方が善い、前中納言の皺ッ首を切つて來ねば、何うも腹の蟲が治まらぬ。

侍丙　天下國家の爲めに御一命をお差出しになつた主君の御家名も相立たぬとあつたら、世の中は闇ぢや、德川家

も潰れよう。

侍丁　イヤ、不祥な事を申す様ぢやが、主君が大黒柱で、今まで徳川の大屋臺も支へられてゐたのぢや、その大黒柱が切倒された後は、もう瓦解ぢやが。

侍戊　御近習の噂に聞けば、主君はその瓦解を御見抜きなされて、寧そ誰かに早く殺されたいといふ御思召が疾うからあつたさうぢや、それが眞實なら、猶更御悼はしうてならん。

侍甲　イヤ、それは眞の噂ぢや、それよりも尊王攘夷の名を騙つて、私の意趣を晴らしに國家の柱石たる主君を暗討にした奴は、骨を舐ぶつても飽足らん、早く御沙汰が聞きたい。

（田中等歸つて來る、布呂敷包の首を捧げてゐる。）

田中　（涙を拭き〳〵）櫻田門の外には眞赤な血の雪が降つてゐる、お悼はしい事ぢや……狼藉者の加擔人、有村次左衞門といふ薩摩の奴めが、辰の口の粥川の邸の前で、重傷の爲めに自殺してゐたが、そ奴めがこのお首を……やつと取返しては來たが、殘念で〳〵……。

侍甲　エ……ぢやアお首が戻りましたか？……せめてもの幸だ。

侍乙　ア、まア、まア、よかつた、まだ御武運は盡きん。

侍丙　他の狼藉者の行衞は分りますまいな？

田中　何んでも細川家脇坂家へと駈込訴訟したといふ話を聞いて來ました、これからそ奴等を引渡して貰ふ掛合をせねばなりません。

侍甲　然うとも〳〵、此方へ引渡して貰つて、存分腹癒をせずには居られません、只今、安藤老中が御登になつて居りますから、御内沙汰を聞いた上で、場合によつたら、力づくでそ奴等をしよつ引いて來ませう。

田中　安藤樣が？……さうか？　内々の御沙汰があるのだらうな、早くそれを知りたいものぢや。

宇津木　（出て來る）ア、、お首が戻つたか？

田中　何んとも申上げやうもない事だ。（涙を拭く）

宇津木　（首を受取り、押戴きながら）何うも御骨折だつたらう、まア、まアお話は後から聞きませう：皆も安心せられたが善い、只今、安藤樣が、内々御傳へ下さつたお上の思召は誠に難有い、大老は飽くまで御負傷の體にして、跡目相續を届け出たら、本領御安堵の御沙汰が下りるらしい、不幸中の幸ではありませんか？

諸士　ハ……左樣で……。（互に顏を見合せて唾を呑込んでゐる、異樣な感情が動く）

宇津木　兎に角、お首は奥御殿へ持つて參りませう。

田中　御負傷の體といふ事なら、御老中のお眼にかゝらぬやうにしませう。（二人奥へ入る

侍丙　でも何んだか力抜けがした。

同丁　然うぢやとも、一度は水戸の邸へ切込まねば、何うもこの胸のムシヤクシヤの遣場がないに。

（皆、無念の切齒をする、安藤老中の退邸を報ずる聲が聞える。）

安藤老中　（奥方昌子の方始め、一同に見送られて出る）まア、まア御氣を附けられい、御氣を附けられい……皆もさぞ心痛であつたらうな？

（諸士、敬禮をする。）

昌子　何から何まで行屆いた御配慮を戴きまして忝う存じます、掃部頭も末永く生存らへまして何處までも御奉公を申上げる事でござませう。

安藤老中　掃部頭殿は、不死身ぢやから斬つても、突いても、死なれるやうな御方ではありません、萬代不滅の御生命の持主ぢや、若等もお父上にあやかられい、イヤ、我も人も皆あやかりたいものぢや、すべて今日の爲に、今日の事を行ふものは一時、世俗から喜ばれもせうが、明日の爲に今日の事を慮るものは、兎角憎まれたり、譏られたり、果ては殺されまでもしませう、併し、愈々その明日が來て見たら、今日の事が眞實に分つて來るものぢや、私も及ばずながら井伊公のお後を追ひたいと思つてゐます。

（昌子の方默つて恭しく一禮する、長野始め諸士一同も頭を下げる。）

安藤老中　ア、雪が晴れて來た、大地も見え出した、……さすが春めいた青空には大日輪が眩いやうに光つてゐられる……ウム、やがて迷妄の雲も晴れ上つて、掃部頭殿が天下の行末、國家の前途を慮つて生命がけで盡された尊い赤心が、あの大日輪と共に永く我國民の頭上を照らされる前兆であらうな。

長野　ハ……恐れながら、私の眼には、あの大日輪の中に、我主君の御滿足さうな御笑顏が幻のやうに拜まれまする、魂は天に歸つてそこから永へに地上を遍照し給ふ我主君は、何時迄も生きてお居でなされます　刀で斬られた位で決して死にはなされませぬ。（合掌、天を拜す）

（安藤老中も不思、頭を下げる、一同皆、空に向つて合掌する、沈默。）

――幕――

（一九二〇、二、一九）

史劇

大鹽平八郎（五幕）

登場人物

大鹽平八郎　儒者、中齋
同　格之助　養子、與力
小泉淵次郎　與力
瀨田濟之助　同
庄司儀左衛門　同心
渡邊良左衛門　同
近藤梶五郎　同　作
平山助次郎　同
宇津木矩之允　中齋門人
大井正一郎　同
安井圖書　同
梅田源右衛門　浪人
橋本忠兵衛　百姓
白井孝右衛門　同
美吉屋五郎兵衛　染物屋
岩　藏　大鹽家若黨

作兵衛　大工
河内屋喜兵衛　本屋
跡部山城守　東町奉行
鴻池屋善右衛門　豪商
天王寺屋五兵衛　同
加島屋久右衛門　同
内田屋惣兵衛　同
大米屋平右衛門　同
篠崎小竹　儒者
德兵衛　鴻の池大番頭
おゆう　中齋妾
おみね　格之助妻
お利江　鴻池屋娘
おつね　美吉屋女房
其他、與力同心、用人、塾生、手代、丁稚、人足、窮民、群衆等大勢

場所　大　阪

時　天保七年、八年

序幕

（一）洗心洞講堂

可也廣い講堂、上手には王陽明が龍場の諸生に示せる立志、勤學、改過、責善の四篇、向の壁側には呂新吾の學に關する語十七條を掲示してある、そしてそこらには幾千卷の書籍で充された書棚がある、壁と隣合つて一方に出入口、他の一方には腰障子が五六枚入れてある。それを明けると、廊下越しに、中庭が見える樣になつてゐる。

大鹽平八郎は四十四五歳の年配、額がぬけ上つて、眉は少し吊上り、眼に鋭い光があるが、眼尻は眉程には吊つてゐない、顳顬の邊りに青い筋が出てゐて、青白い顏色であるが、若々しい元氣は體中に充ち溢れてゐる樣子である、書見臺に「大學」を擴げて、その章句を講義するといふより自分の意見――殊に今の時世を憤り窮民を憫む熱情から、不知不識、舌端が激しく動いてゐるやうに見える、門下生の東組與力、瀬田濟之助、同同心、庄司儀左衛門、渡邊良左衛門、平山助次郎、同心伴近藤梶五郎及び般若寺村名主橋本忠兵衛、守口村百姓質屋の白井孝右衛門、及び門人安田圖書等を始め、多くの年少の塾生等も交つて、皆書物を繙げながら熱心に聽耳を立てゝゐる、そして時折は門下生からの質問も出る。

大鹽　……治國平天下の道は、詮り王陽明先生の所謂、人は天地の心、天地萬物は皆我と一體であるといふ眞の理を知つて、そして直にそれを行ふ事た、天地萬物、已に我と一體であれば、天下の人民の苦み惱みは卽、我が身内の疾た、痛みた、我が身の疾や痛みを知らんのは、是非の心の無い者、良知の無い者と云はねばならぬ、本來、人間に良知の無い者はない筈だ、そこには聖人も愚人も差別のあるべきものではない、恰も大虚は彼の蒼々とした天に在る許りではない、唾壺竹の中の空洞も亦同じ大虚だ、凡人の胸三寸の虚は、又聖人の胸三寸の虚と同一の虚である、唯凡人には私慾があつて、その心の虚を塞ぐから、折角の良知が昏まされる、そこに諸の災禍が群り集つて來る、今の時世がそれだ、民の休戚を見る事、我が身の休戚を見ると同一でなければならぬ筈の、當路の役人たるものが、私慾に心を昏まされて、内では互に譏り合ひ、嫉み合ひ、賢を憎み、能を忌んで醜い爭ひ許りやつてゐる、そして外では利慾に渇いてゐる町人共から賄賂を貪つて彼等が私曲を縦まゝにするのを見逃がし、正直な民百姓の苦み、惱みは何處を風が吹くかといふ顏色をしてゐる、近年打續いてゐる天災は矢張、天か

らの深い誠であるのに、役人共は少しも心の眼を醒まさない、到頭今年のやうな前代未聞の大飢饉となつて昨今は餓孚、道に横はる無慘極る有樣と成つたのを、彼等は一體何う思つてゐるのか？（語氣は次第に緊張して、胸が詰まつたやうに言葉が切れる）

瀨田　伺ひます、先生、この「洗心洞」の學風は「狂人」を作るのだと、かげ口を利く者も以前から非常にありましたが、この頃もそれがチョイ〱私等の耳へ入ります、王陽明先生も曾てさうした誹謗を受けられたやうでございます、斯ういふ時には「狂人」になるのが却つて聖賢の道に適ふものかと思ひますが、それに就いて御敎へを願へれば有難うございます。

大鹽　（高笑ひ）　狂人か？……王陽明先生が良知の學に依つて天下泰平の道を開き、民の塗炭に苦めるものを救はうとせられた時、皆は「狂氣だ、正氣を喪つたものだ」と口々に譏つたではないか？　誰でもその父母兄弟が、深い井戸の中へ陥つたら、叫び聲を上げて、領裸になつて救ひに行くだらう、それを見て、氣が狂つた、正氣を喪つたと云つて笑ふのは、路傍のアカの他人に相違ない、骨肉の情愛のないものがさう云ふのだ、天下に氣狂があれば私も氣が狂ひたい、天下に正氣が無くなる者があれば私も正氣を無くしたい、所謂天下萬物一體の仁の極意はこゝだ、そこまで行かなければ嘘だ、王陽明先生の心は卽、私の心であり、又諸君の心でなければならぬ、「狂人」と譏られるのは寧ろ喜ばしい事ではないか？　唯私はまだ〱その「狂人」になり切れんのが竊かに恥かしいと思つてゐる、だが「洗心洞」の學風が「狂人」を作るのなら、それはやがて聖人の志に適ふといふものである、是非、左樣ありたいものだ「致良知在格物也」とは卽これだ。

庄司　……伺ひます……先生の洗心洞劄記の中に「姑息因循煦々の小愛を施し、以て民を溺し、物を潤す、漢唐の人爲は三五の天德に及ばず」とございます、これは今日のやうな大飢饉の場合には、何う解いたらよろしうございませうか？

大鹽　フム……それはかねて諭聽かせてゐる通り、「一利を興すは一害を除くに如かない、……政之道は、その害を除くといふ事に盡きるので、それは大慮の眞の仁から來てゐるのだ、今日の大飢饉の場合、窮民に金や米を施してやるのは煦々たる小仁のやうに見えるかも知れぬ、もつと他に除くべき害が無いとは決して申さぬ……だが現在食ふものがなければ、人民は餓死して了ふ、これから助けるのか、道理は唯是、眼前の道理、道の外に事はなく、事の外に道は無いと申すのだ。

白井　伺ひます……これは少し餘談に亙るかも知れませんが、先年、高井山城守様が東町奉行御在職の砌は、何から何まで先生の御意見が行はれまして、切支丹婆豐田貢のお召捕と云ひ、賄賂を貪り、良民を掠めた奸吏の切腹と云ひ　又風俗を紊る賣僧等の御仕置と云ひ、一害又一害が片つ端から除かれて行つて、大阪近郷の民百姓は一同、難有い御政治向を謳歌しました、高井山城守様、御辭職と共に、先生も自分で御隱居なされたとは云へ、矢部駿河守様が西町奉行職に御就きなされてから、御隱居の先生の御意見を强ひて聽かうとなさる、先生も亦知己の情に酬いずには居られず、いろ／＼御獻策をなされたので、あの通り、天保四年の飢饉にも大阪近郷の窮民は幸ひに餓死もせんで濟みました、百姓の分際で今日のお政治向を兎や角云ふのは憚り多うございますが、席末に列つて聖賢の道を聽いてゐる私には、何うも齒痒うてなりませぬ……先生のやうなお方が、若し廟堂にでも立つてゐられたら、萬民は何んなに幸福かとそんな事許り思つて居ますが？

大鹽　イヤ、權力を持過ぎると人は誠を害するやうになる、功を好む者は義を害ふやうになる、名を取る者は心を賊うて了ふものだ、私は先年、職を辭して隱居した時に、ふッつり官途は斷念した、そりや廟堂に立つて、及ばずながら聖賢の志を天下に行うて見るのも、男子一生の本懐には相違ない、私もさう思つた事がないとは云はぬが、德よりも格式のやかましい今日では、そんな事は見ぬ世の夢だ……今の役人等は假令小人でも、矢張良知は持合せてゐる筈だ、唯、その良知を磨いてやれば善い、私が格之助の手から、窮民を救ふ意見書をさし出してゐるのも、彼等の良知を磨く手段だ、何ァに、眼前の道が行はれゝば、私は何も好んで出しやばつた眞似はせんでも善い、斯うして、諸君と學堂で道を講じて、靜かに餘生を終るのが、大虚卽無極に歸する所以だ。

瀨田　伺ひます……先生の御獻策が若し行はれず、小人共が良知を磨く事も知らないで、却つて愈々それを昏まさうとした場合は如何でございませう、講堂で書物を讀んで許り居て、それで知行合一でございませうか？

庄司　私も伺ひます、今度の奉行は、聖賢の道など頭から分つてゐる人とも覺えませぬ、イヤ、聖賢の道を講じてゐる我々の事を生意氣だと内々罵つて居られるさうで、既に東組與力を西組へ組かへるといふ目論見をして居られるのも、矢張そこらが一つの原因らしうございます……。

大鹽　（急に言葉を遮つて）イヤ、私事は一切この席で口へ出してはならん……併し瀨田君も庄司君も、さすが血氣盛んな青年丈、忌憚らず時務を云つて居るのは聞いて

ゐても氣持が善い、イヤ、私の講ずる學問がそれ程、諸君の肉となり血となつて居るかと思へば私も滿足だ、だが、良知は燧石の中に罩つて居る火のやうなもので、それが顯れて用をなさなくつても、常に内に失はぬ覺悟が肝要だ、唯、焦立つて外に馳せたら、原ッぱを燬く火になつて、その本體を失うて了ふのだ。

庄司（大分昂奮した口調で）重ねて伺ひます……先生の御說御尤ではございますが、人間がこの儘、夢生醉死に了るのは歎かはしい、先覺者があつて萬死を犯して疾苦せんければならぬ、後世の先覺者には誰がなるといふ御言葉を劄記の中で私は拜讀して居ます、私にはあの章句が、眞實に私の心の中へ燒鐵を當てられるやうに、ヂリヂリと燒き附きます、あれは先生が特に心あつて御書きになつたのではございますまいか？

大鹽（靜に勵まして）勿論、私の知る處は私の行ふ處と一つだ、私は二六時中怠らずそれを心がけてゐる、一體、この一身を安きに置きたいのは人情だが、その人情のままに任せて了つたら到底道に入る事は出來ない、今の人間は少しの利害に遇つても、忽ち卽いたり離れたり、算盤珠を彈く算段許りして居る、古人は假令刀鋸前に在り、鼎鑊後に在つても物無きがやうであつた、これは唯、道理を見て、刀鋸鼎鑊を見ないからだ、この中齋も亦敢て古人の心を以て心とする事は何人にも劣らん覺悟だ、……だがまた希望が無いとは云へぬ、小人の心にも良知はある、私慾の曇を磨いてやつたら鏡の本體は自つと光つて來なければならぬ、私は唯それを信じて居るのだ……。

（大井正一郎、骨格の逞しい二十二歲の青年、醉うてゐる樣子で、ヒヨロヒヨロした足取で講堂へ入つて來て片隅の方へぺつたりと坐る。）

大鹽（ヂットそれを見てゐたが、忽ち爆發しさうな大聲で）大井正一郎……チヨット此方へ出い……こゝへ。（と指さす）

大井　はツ……。（云つて、惡怯れず、前方へ進み出る）

大鹽（叱附るやうに）唯今はまだ定課中である、無斷でこの席へ出入する事はならんといふのはかねて心得て居る筈だ：見れば醉うて居るやうだが、酒氣を帶びて講堂へ來るとは一體何事だ、「洗心洞」の學則は死んだ文字の行列ではないぞッ。

大井（低頭して）ハ、いかにも恐れ入りました……謹んで先生の御懲罰を受けます。

橋本　さし出口は恐れ入りますが、先生の日頃の御薫陶で、近頃では宛で人物が變られたやうに行狀の正しくなられた大井君が、何時に似氣なく酒氣を帶びて講堂へ入られたのには、何か深い仔細のある事でございませう、顏を

御富てなさる前に、一應篤と御聞訳しなされては何うでございませう?

平山　大井君、何か仔細があれば、早速先生へ申上げられては何うだ?

大鹽　眉を動かしながら起上つて、鞭を手にする）イヤ取成などは一切無用だ、いかに世間がざわついて、街頭を歩く人々の足並が亂れ出してゐようと、この洗心洞の學則は毛筋程も亂しては相成らぬ、暗闇の中でこそ、學問の光は愈々輝かねばならぬのだ、今多くの窮民は饑ゑて野仆死して居るのに、塾の者が白晝酒氣を帶びて講堂を汚すとは不埒千萬、心から醒めい。（鞭を上げて五六回強打する）

大井　（歯を喰縛つて身體の苦痛を堪へ、涙を拭きながら）……誠に相濟みませぬ……イヤ、もつと酷く打たれても……打殺されても私が氣が濟まないやうに思ひます……重々惡うございました。

白井　（傍へ膝行り寄るやうにして）今日に限つて大井さんは何うせられました? 貴方が酒を飲んで來るなんて合點がゆきませんな。

瀬田　昔の亂暴者の大井君なら兎も角も、この二三年來、先生のお庇で心が入れ替つた、——氣質が變化したと塾で評判の君が、一體何うしたのだ?

大井　先生の前に懺悔します……こゝら界隈の窮民の模樣を見廻はつて置かうと思ひまして、川崎の外づれまで、ふら〳〵歩いて行く途中、色は蒼ざめ、手足は芋殼のやうに痩せ細つて亡者のやうな女や子供の群が、途を歩く人影さへ見れば、蹌踉した足取で我がちに袖へ縋り附きます。私も初めの中は、懷中の僅かの金を施行しながら歩きましたが、直ぐ底をはたきさうなので、急に思附いて店先で薯屑を買うて、それを時いて行きました、すると、母子らしいのが、その一つの薯屑で、忽ち摑み合喧嘩を始めました、三十歲餘りの母親と、十一二歲の息子とで、恥も外聞もなく、路の上へ轉り合つて、蹴たり踏んだり、かき搖つたりして……それを見ると私はもう堪らなくなつて、眼を瞑つて引返しましたが、この胸一杯に泥でも詰まつたやうで、何うにも斯うにも仕樣がないので、つい居酒屋へ驅け込みました……永い間の禁酒も破つて了ひました……先生、誠に相濟みません。（一同、顏を見合せて歎息を吐く）

大鹽　（靜かに）人の心よりも口や禮を愛するのは凡愚の情だ、大井も矢張、書物許り讀んでゐて、自分の心を讀んで居らん。

瀬田　先生に伺ひますが、大井君が施しをしたのは間違ひでございませうか? 此も所謂、赤子の心から出た事だ

と、私は考へて居りますか?

大鹽　施しをしたのが間違ひだとは決して云はぬ、併し施しを受ける者の間に醜い爭を起させるやうな施しならせぬが善い、それは人の爲めにするのではなく、自分の氣安めにするのだ、それこそ煦々たる小さな愛だ、だからその氣安めが氣安めにならぬ場合には居酒屋へでも飛込んで、良知を昏ます工夫をせねばならなくなる、大虚から出る眞の仁はそんなものではない、眞の仁は身を殺す覺悟から出て來るものだ。

（中庭の方から）「お願ひでございます」「大鹽先生何卒助けておくんなさい」「旦那樣、何卒お助けを……」（多くの人聲がする。）（一同障子の方を見る。）

大井　又例の渡邊村の窮民共が、先生へお願ひに出たのでございませう、あの聲には慥かに聞覺えがあります。

（外から「お助けを願ひます」「外では相手にしてくれまへん、私共を助けて下はるのは、こゝの旦那樣でおます」「皆が餓死しかゝつて居ります、何卒、助けておくんなはい」。）

大鹽　（叱るやうに）まだ講筵中である、……妨げをする者は追拂つて了へ。

大井　先生　窮民共を追拂ふのでございますか?

大鹽　（柔いだ口調で）講筵が閉ぢたら、會つてやると云つてくれい。

大井　はッ……。

大鹽　イヤ待てッ……今日の講筵はこれで閉ぢる事にする……塾生は皆退つて定課を勉強するが善い。

（年若の塾生等は一禮して靜かに退散する、後には中年組の人々が殘る。）

（大鹽、大井に眼配せする、大井、起上つてそこの腰障子を開ける、みぞれの降つてる中に十數人の身すぼらしい乞食のやうな姿をした渡邊村の窮民共が慄へながら立つてゐる。）

大鹽　ア、少し寒いと思つたら又霙だ……皆をこちらへ上げた方が善い。

大井　さア、皆、こちらへ上り給へ、先生がお會ひなさるから。

窮民甲　へい〱、誠に何うも有難うおますな、皆、人交りの出來ん者許りでおますよつて、こゝで御免蒙ります、へい。

同乙　斯うして旦那樣の處へ押かけまして、誠にあつかましい事だとは思ひますが、他では誰も相手にしてくれまへん、旦那樣、何卒助けておくんなはい。

同丙　先生樣、何卒助けておくんなはい。

同丁　先生樣許り、私共に構ふて居ります、えらい濟

まん事を申しやすが……。

大鹽　大井、孰の方に湯が沸いてるだらう、岩藏か三平に然う云つて、盥を出させい。

大井　はツ、畏りました。（孰の方へ行く）

平山　先生、甚だ失禮でございますが、私は少し家事が取込んで居ますので……。

大鹽　さア、さア、何卒、こゝに、お構ひなく……皆も御遠慮なく引取つて下さい。

近藤　イヤ、私共は居らせて戴きます。

渡邊　平山君も家に用事さへなければ、歸りたくはないのでございませう。

（平山、退場する。）

窮民の老婆　旦那様、私はこの三日許り、御飯一粒も戴きまへん……斯うして寒い所へ立つて居ると、眼まひがして倒れさうでおます。

窮民の老人　何しろ先生様、一升二百文でおますさかい、私共の口へはめつたに入りまへん、元は十五文もしやしまへんぜ、私共は今、年老つてこのやうな餓鬼道の苦みを見るより、早く極樂往生した方が、何んぼ優しだか知れまへん。

大鹽　さア、そこへ湯が來た、足を洗つてずつと此方へ上つたが善い……構はずづん／＼上つてくれ。

橋本　先生があゝ仰るから、遠慮せず、上つたが善い、……そして障子を閉め切らう、何しろ寒いからな。

窮民甲　でも、座敷へ上つたりなどしては、罰が當らう……何んだか足が痺れさうでおますよつて。

窮民乙　何うも勿體ないさかいな。

大鹽　上れと云へば素直に上つたが善い、穢多も非人も人間に變りはない、私が許すといふに。

白井　先生があゝ仰るのに、遠慮したら却つて惡い、先生の御機嫌を損ずる許りだ、さア早く足を洗つて上つた、上つた。

（窮民等は足を洗ひ、恐る／＼そこへ上りかける。）

近藤　先生の仰せだから、ずつと奥の方へ通つたが善い。

渡邊　さア、遠慮なく上つた、上つた。

安田　廊下は後で拭かせるから構ふ事はない、さアもつと寄るんだ。

大井　障子を閉めるからもつとずつと前の方へ……。

（窮民等はそこに車座を作る。）

大鹽　（憫むやうな眼で窮民等を眺めて）皆も嘸ぞ困つてゐよう、況して渡邊村の者といへば世間が人外扱にしてゐるから、困り方も酷かろ、察して居る……何しろこの四五年來は氣候が不順つゞきで、奥州には前代未聞の大洪水が出る、甲斐國始め諸々方々で百姓一揆が起る、世

間が物騒な處へ又今年の夏は、土用中に眞綿を着るやうな冷え方だつたから米は皆目不作、値段は日に増しに上る、そこへ不慣れな役人共が來て、皆の爲めを計るやうな政道を行つてくれない、餓死するものがこの市中丈で何千何百人といふ事を聞いても、私は空恐ろしうてならんのだ、決して他事と思うては居らんぞ。

窮民甲　……先生樣、市中では米がもう切れるとか申しましてな、蕨餅を賣る辻店へ大勢集つて來ますよつて、その蕨餅まで値段が、日に〱高うなつて、貧乏人の口へは入りまへんのや、それに私共の村では　犬も猫も一匹不殘皆喰ひ盡しまして、もう喰べる物がおまへん、察しておくんなはい。

窮民丙　在方から市中へ米を買ひに出た者は、御法度破りとか云うて、今も三人程捕まつて、天滿橋の上をゾロ〱引かれて行きましたのや、手前共はその米を買ふお錢がありまへんし、又あつたかて、人外者や云うて米屋の方で相手にしてくれまへん、情けない事つておます、何卒助けておくんなはい。

皆　何卒、助けておくんなはい。

大鹽　（興奮した調子）　勿論、あの樣な法度を作るといふのは間違ひ切つた沙汰だ、江戸表へはドシ〱米を廻しながら、天子御在所の京都へは一俵も送り出す世話をせぬといふやうな本末を顚倒した處置をして、それで天下の役人が勤まると思うて居るらしいのはいかにも情無い、……併しこゝで憤つて見ても仕方が無い事だ、私は已に再三、意見書を奉行所へさし出して、皆の難儀を救ふ方策をしてゐる、穢多でも非人でも同じ人間に變りはないから、その方策さへ行はれたら皆、洩れなく救はれよう、實は今日こそ倅格之助が奉行所から確かりした返事を聞いて來る筈だ、いかな奉行所でも何んとかするだらう、天下の民百姓の飢に泣いて居ん時には、石でも耳を立てるだらう、木でも涙を流すだらう、今の役人等も、まさか石や木に劣りはすまいからな。

橋本　先生も容易ならぬ御心配をしてゐらつしやる、今に政府の米倉の扉も開かうから、氣遣せずに待たつしやれ。

庄司　萬一、米倉の扉を明けなかつたら、私達の力でも屹と明けて見せる……武士に二言は無いからな。

大鹽　（窘めて）　庄司君、めつたな事は云ふまい。

窮民甲　お志は難有うおますが、私共はもう一日も半日も待たれまへん、えらう濟みまへんが、何か食物をおくんなはい、何んでもよろしうおます、……恥も外聞もあらしまへん。

同乙　此方樣では、先日もお施しをして戴きましたに、又出かけたのはえらうあつかましうおますが、背に腹はか

へられません、何卒助けておくんなはい。
皆々 何卒助けておくんなはい……食べ物を少し……何んでもよろしうおます。
窮民甲 もう一度、坐りましたら、起上る元氣がおまへん、お腹には勢も張もありまへんでな。
（一同、沈默。）
大鹽 （大井に眼配して） 奥の者を一寸と呼んで來てくれ。（大井、起上つて、奥へ入る）
白井 こゝに持合せが少しございますから、これを施しては何うでございませうか？
橋本 私もこゝに少々持合せて居ります、これを先生へさし出して、皆の衆へ分けて貰ふ事にしませう。
（懐中を取出す。）
瀬田 私は僅の小遣しかありませんが、兎に角さし出します。
（門下生は皆財布を取出す。）
大鹽 まあ待つてくれ……今におゆうが來る。
おゆう （四十歳許りの、色の青白い婦人、質素な服裝なしてゐる、廊下口に手を支へて） 私をお召しでございましたか？
大鹽 （頷いて） アゝ、こちらへ入つたが善い。
おゆう 講堂へ入つてもよろしうございますか？

大鹽 ウム、今は非常の場合だ、構はず入つたが善い。
（おゆう。講堂へ入り、皆へ一禮して、窮民の姿を見ながら、可哀想なといふ表情をする。）
大鹽 （低聲に） 夕御飯は焚けたか？
おゆう ハイ、唯今、釜を下ろした處でございます。
大鹽 ではそれを、皆、むすびにして、この衆へやつてくれ。
おゆう あの、皆、おむすびにするのでございますか？
大鹽 さうだ、皆……釜の底の焦げまで取つてさうせい。
おゆう 格之助さんももう大方お歸りでございませうが……あの人の丈は取つて置いてもよろしうございますか？
大鹽 家の者は又焚けるではないか？ 一時や二時、待つても餓死はせぬ、皆の衆はさうは行かない、永い間穀氣を食はぬ人も居るらしい、早くむすびを拵へて持つて來い……女中丈では手が足りまいおみねにも手傳はせい。
おゆう ハ……畏りました。（と退場）
窮民甲 先生様、難有うおます……皆助かりやす。
同乙 もう三四日も、穀氣といふものは喉へ通しまへん。有難うおます。
一同 お庇を蒙りやす。
大鹽 （喟然として） イヤ、お庇を蒙るだの、有難いのなどとは云うて貰ふまい、さういふ辭を聞くと、私は何だ

か自分を罰せられて居るやうだ、嘲けられて居るやうにも思ふ、……この大飢饉は矢張天が我々を警めて居るのだ、古聖賢の道が上下に遍く行はれて居たら、一方に金持の町人共が、贅澤三昧に暮らして居る傍で、多くの民百姓が、斯うしてその日の糧に苦んで居よう筈はない、政道を司る役人等も勿論間違つて居るが、一つは古聖賢の道を講ずる儒者に力が無いのだ、私もその一人だ、昔の前に愧づかしい。

白井　然う仰やれば、私共のやうな多少財産のある者が、一番先にそれを投げ出さねばなりません、先生に朝夕、道を聽いて居ながら、今日まで思切つてそれをやり遂げないのが、本當に恥かしうございます。

橋本　そりやおなさまだ……。（と腕組する）

大鹽　イヤ、決して諸君を責める譯ではない、自分が持つて居る物を皆投げ出すとなつたら、私が一番先にそれを實行して、諸君に範を見せるのが順序だ、實は私もそれを心附かんではない、私の財産といへばこゝにある萬卷の書物だ、倉庫には一切經もある、それでこの頃、本屋を呼んで一應評價までさせて見たが、書物を賣つて了ふのは、何んだか魂まで賣るやうな迷ひ氣が出てな、まだ愚圖々々して居るのだ。（と考へ込む）

瀨田　聖賢の書物は云はゞ儒者の魂でございます、先生、そんな氣短かな事をおやりなさるのは、まだ早うございませう。

おゆう　（襷掛けで笊に茶飯のむすびを入れて持つて出る）さア、さア、出來た丈持つて來ました、配つて上げませう。

窮民等　何うも有難うおます、奧さま助かりやす、（争うて手を出す）

大鹽　云つてくれるな……有難うは云つてくれるな、

窮民等　有難うおます、旦那樣、この御恩は忘れやしまへん。

おみね　（廿歳許りの、愛らしい女、襷がけで甲斐々々しい樣子をしてゐるが、姫樣で、何處か起居が艶さうである。女中のりつが附添うてゐる）さあ〱又出來ましたよ……（皆へ挨拶して）……さア、あなたの方、上げますよ。（窮民等は互に奪ひ合ふやうにして、むすびを取つてむしやむしや食ふ、瞬く間に笊は空になる、おゆうは二三度臺所の方へ往き返りする、この間に、白井、橋本等は額を鳩めて相談して、他の門下生からも小金を集め、大鹽の處へ持つて行き）

橋本　先生、何卒これを皆の處に分けてやつて下さいませ、少額ではございますが何かの補足にはなりませう。

大鹽　さうか、有難う……皆に代つて禮を云ひます……併

し、これは一々小金に代へねば平等に配つてやる事は難かしい……小金の兩替は、家ではチヨツと出來かねるかも知れぬ。

白井　ア、では斯うしませう、天滿橋を渡ると、私の知つた小兩替屋がありますから、あそこへ行つてくづさせませう。此の上、皆の衆を此方に待たせて置くのは又お邪魔になりますから、私等が一緒に連れて出かけては何うでございませう？

瀨田　それはよろしからう。

庄司　さうしませう。

近藤　では徐々出かけませうか？……皆の衆もそれ〴〵おむすびを貰つたら、私等と一緒に、そこまで出かけて行かう？

窮民甲　この上、又お施しを戴くのでおますか？　何うも有難う。

同　皆、助かりやす。有難うおます。

瀨田　有難うは何卒止めて貰はう……止めてくれ：善い氣持はせぬ。

橋本　では皆、おむすびは濟みましたな、出かけませうか？

白井　では先生、失禮いたします。（起上る）

大鹽　ア、白井君、君の處の肥松を伐つたり、あれを寄越してくれる約束だつたが、まだあのまゝ斧を入れんのか？

白井　は、あれは四五日前に、木挽を入れて切り倒させたまゝ、庭の中に轉がせてあります、先生はあれで木筒をお拵へになるといふのでございましたな？

大鹽　明春、堺七堂ヶ濱で催ほす丁打の稽古の時に用ふつもりだ、何しろ、この頃の武家は皆武道の修業を怠つて居るし、今のやうな世間の有樣がこのまゝ續いて行けばいつ何時、騷動が起らんとも限らんからな。

白井　左樣でございますとも……では早速。人夫を傭ひまして、明日にも御屆けさせませう。

大鹽　何卒、然う願ひたい。

白井　畏りました。

（大鹽に一禮して、皆々起上る、渡邊村の窮民等もソレ〴〵挨拶して、後から蹤いて行く、後には大鹽とおゆう、おみねが殘る。）

おゆう　（窮民等の後姿を見送つて、淚ぐんだ聲で）眞に可愛さうでございます。

おみね　おむすびを見ると、いきなり私の手から引奪（ひつた）くつて宛で食ひ附くやうにするのでございますもの、餘程お腹がすいてたと見えまする。

大鹽　……さう思ふとお扶持米のお宛飼を受けて、衣るにも食べるにも一通り不自由せぬ私等はまア果報者かのハ

、、、。（と淋しい苦笑）

おゆう　勿體ないやうな氣がします。

おみね　眞實に左樣でございます……でも播州の百姓一揆のやうな騷動が、市中に起りでもしたら、私等もこのまゝ安閑としては居られないやうな氣がします……尤もこの與力町へまで一揆が入り込むやうな事があつては、それこそ大變でございますが……。

大鹽　イヤ、このまゝ行けば、さうした騷動が起るまいものでもない、果報者だの、勿體ないのだと云つては濟まされん事にならう、一體自分さへ善ければ、……さう思ふと私は、この儘では起つても居てもゐられぬやうな疚しい氣持のする時がある、寧そ一思ひに、この身を殺して、今の間違ひ切つた政道の筋道を附けかへる犧牲になるか、それとも、うるさい世の中を見捨てゝ何處か山林の中へでも逃げ込むか、何方かにせねば、この胸が苦しくて仕方がなくなつて來る、汝等も斯うして何時までも御扶持米で安閑と食べて行けるものだと思つてくれるな

おゆう　私は假令何んな事になりましても、何處までも旦那樣の御供をさせて戴きます。

おみね　假令何うならうと、格之助樣は矢ツ張、父上と何處までも御一緒でございませうから、私も素より一つ覺悟でございます。

大鹽（顏色を和らげて）イヤ、これは今迄の處、私丈の考へだ、さう先くゞりして心配せんでも善い……格之助が奉行所から何ういふ返答を持つて歸るか？　他事ではないから存外、私の思ふ通りに埒が明くかも知れん……おみねは臨月も近い體を、あゝして働かせた上に、又むだな氣遣ひをさせてはお腹の子に障る、今私の云つた事を氣にかけてくれるな……それにしても、格之助ももう歸る筈だが……、

おゆう　さういへば、後の御飯が早く出來れば善いが……さぞお腹をすかしてお歸りでせう。

大鹽（小耳を傾けて）……ア、誰か歸つたやうだ、玄關で熟生が何か云つて居る……乾度格之助だらう。

格之助（二十六七歲の青年、役所通ひの服裝で、禮儀正しく下座へ手をつかへて）父上、只今歸りました。

大鹽　オヽ、嘸ぞ疲れたであらう。

（おゆう、おみねそこへ迎ひに來る。）

大鹽　何うだ、奉行の返答は聞いて來たであらうの？

格之助　は、伺つては參りましたが、……（云ひ淀む）

大鹽　急に顏色を曇らせ）……フム、又相不變か？

格之助　矢ツ張、例の通り、お役人根性で物を云つて居られるので、私も齒痒くてなりませぬ。

大鹽　（苦り切つて）フーム……おゆう、おみね、彼方へ下つて居れ、……格之助はずつと此方へ來い。

おゆう　では大作さま、御飯の仕度をしますから。（二人は退く）

格之助　只今、天滿橋際で、白井、橋本其の他の諸君と出逢ひました、あれは渡邊村の窮民ださうにございますな、あのみじめな姿を見ると私も足元がすくんで了ひまして、善い返答を父上の處へ持返る事の出來ない自分が、如何にも腑甲斐なく思へました。

大鹽　（少し焦き込んで）で、奉行は何う云つた?

格之助　あれから御城代へ伺ふには伺はれたさうでございますが、明年の春、御代替りで西の丸樣が將軍家にお立ちなさる御大典があるに就いては、その準備の御用金の充當（ひきあて）にしてあるお上の米倉には一切手を附ける事はならんといふ内意だとの事にございます、そこで私は押返して申ますと、與力の分際で出過ぎた口上だと、嚴しく叱り付けられましてございます、その上、東組の與力は増長し切つて居る、この儘には捨て置かれぬと云つて、今に組がへをするやうな口氣（くちぶり）なので私は齒を喰縛つて退がりました。

大鹽　（怒れる顔色）何に組がへをするやうな口氣（くちぶり）だと? イヤそれよりも與力の分際でと申し居つたか?……出過ぎた口上だと? ア、、先の奉行高井山城守なら、それ程、道理の分らぬ事は云はれまい、矢部駿州でも、私の意見と云へば、二度でも三度でも折返して、城代へかけ合はれて、何んとか善いやうに取計はれるに定まつてゐる……與力の分際?……イヤ、與力の隱居の分際でと申したであらう、（次第に興奮して）……私は與力の隱居の分際で云ふのではない、大鹽中齋の意見だ、天下の大鹽の意見だ、世が世なら私は廟堂に立つて民百姓を濟ふ政治を行つて見せる、新井白石などに分（ひけ）は取らぬ私だ、町奉行づれの分際で、無禮極まつた事を申し居るツ。

格之助　（殘念さうに）父上の御怒りは御尤でございます、私もいかにも無念には思ひましたが、上役の言葉で、强ひて押返して云ふ事も出來ませず、涙を呑んで歸りましたのでございます。

大鹽　將軍家御代替りの儀式も大切ではあらうが、民百姓あつての將軍家だ、米倉に手も附けんで、この大飢饉がそのまゝ治まれば善いが、さうは行かぬ、一日の安を偸んで愚圖々々してゐる中に、百姓一揆が起つたら米倉などは木ツ葉微塵だ……イヤ、天明七年にも現に然うであつた、天保四年の隣國播州の騷動も、皆知つてる筈だ、今に見ろ、屹度大仕掛な百姓一揆が起らうぞ……屹度起る、そこに氣が附かぬとは情けない奉行だ、よし、私が

云つて、膝詰談判をする。（起上る）

格之助　父上、……父上……暫く御待ち下さいませ、父上がこの際、奉行に御目にかゝられたら、何のやうなことが起るかも知れませぬ、何しろ身分許り云つてゐる、役人根性の型に嵌つたお人でございますから、何んな無禮な事を口走られるか知れたものではございませぬ、父上の御氣象では、默つて引下りはなされますまい、それが心配でございますから。

大鹽（苦笑）何アに、その心配は無用だ、私は町奉行に逢ひに行くのではない、良智の眠んでゐる、人の人間に、聖賢の道を說き聽かせて、天地の理を悟らせてやるまでだ。

格之助　それが一朝一夕に分るやうな御人ではございません、上役の御城代の內命といふ事を何處々々までも守つて行かねば、自分の役儀が立たぬと一生懸命に信じてゐて、云はゞ役人根性にそのまゝ眼鼻を附けたやうな柄に出來上つて居ますから、お逢ひになるのは無駄骨折でございます。

大鹽　でもこのまゝにして打捨てゝ置ける事ではない……跡部山城守といふのは一體何んな顏をした男だ、私はまだ一度も逢つた事はないが、氣の小さい癖に威張りたがる小役人の型に出來上つた奴だな？

格之助（嘲り顏で）仰る通りでございます、何事も因循姑息で、その日、その日を胡魔化して無事に濟めばそれで善いといふ風な人でございます、聖賢の道なんかは、唯書物の中に丈あるものと心得て居られるのでございませう。

大鹽（大きく頷いて）フム、然うだらう、聖賢の道にこそ眞實の生きた血が通つてゐるのだとは夢にも思つて居らんのだらう、民百姓の苦み惱みなどは、御代替りの儀式の前には何んでもない事だと考へて居るのだらう、此の前の町奉行は、儒者としての中齋の意見を聽きに來た、今度の町奉行は、唯の與力の隱居だと思つて居る……そんな人間の前へ、私は膝を屈めて出るのは厭だ……ウム、私は行くまい……假令、來てくれと云つても行くまい。

（眼を瞑つて默考する）

格之助　父上は矢張お逢ひなされぬ方が善うございませう。

大鹽（目を瞬いて）でもこのまゝ窮民を見殺しには出來ん……それは出來ん……心が濟まぬ……良智が許さぬ………（急に小首を傾けて）併し、そのやうな奉行に强つて逢ひに行つて、若し私を輕しめたら、私はその場で何のやうな事をするかも知れん、私は稍不變癇癪持だからの。

格之助　奉行一人を懲らしめても、それが窮民の救ひの補足にはなりますまい。

大鹽　それは分つて居る……それ位な事が分らんで何うする……イヤ、町奉行づれを憎んでも仕方がない、高の知れた小役人を憎む程中齋もまだ耄碌はせんつもりだ……では格之助、御苦勞だが、も一度行つて、私の云ひたい事を取次いでくれ、臨機の處置をなさらぬと 今に百姓一揆が起りますぞ、そしたら米倉丈では濟みますまいから、今一應御考へ直しをなされるやう、私が強つて云つたと、押返してさう云うてくれ その上の事だ。

格之助　では明日、さう申して見ませう。

大鹽　イヤ、御苦勞だが、此から直ぐ役所へ引返して、も一度よく云うて見てくれ。

格之助　は……畏りました。

おゆう　（廊下から）御免下さいませ……あの御飯の御支度が直ぐ出來ますが、何處かへ御出かけでございませうか？

大鹽　格之助は、も一度、奉行所へ行つて來る、時刻が遲れては悪いから直ぐ引返して行つてくれるのだ。

格之助　では行つて參ります……。（と出て行く）

大鹽　（見送りながら）よくそこを云うてくれ…　他に奉行所の祕密も握つてはゐるが、それは？　まア後の事だ、兎に角、私の意見をあの儘聞捨てにされては、大變な事が起ると、そこを篤と、腹へ入るやうにな。

おゆう　又奉行所へ御出かけになつたのでございますか？お腹がすいて居ませうに。

大鹽　大勢の者が、お腹をすかして居るのに、此方等丈が温い飯をつめ込んでは罰が當る、……（獨言するやうに）氣の小さい奴といふから百姓一揆には屹と脅されつたら う……イヤ、このまゝにしたら百姓一揆は屹度起る……御代替りの儀式處ぢやアない。

おゆう　いろ〳〵御心配でございますこと。

大鹽　（しきりに思案しながら）でも何うも氣がゝりだ……若輩の格之助の口辯では、そんな頑固な男子が折れて來さうにも思へん……矢ツ張私が行かう……私が後から蹤けて行かう。

おゆう　エ、何うなさるのでございます？

大鹽　外出の袴と羽織とを持つて來い。

おゆう　旦那樣も御出かけでございますか？

大鹽　あの袴と羽織とを持つて來い、ヂッとしてゐる時ではない。

おゆう　はツ……。（入る、後に大鹽平八郎はしきりに考へながら室内を歩き廻る）

おゆう　（袴、羽織を持つて來る）では矢張、お出かけでございますか？

大鹽　（吐き出すやうに）膝を屈めて小人の奴に、小役人

の前に……矢ッ張止めにせう……行くまい、中齋の見識にかゝる。

おゆう　では御飯になされますか？

大鹽　御飯が欲しくはない……イヤ、何うしても、ヂッとしちやゐられん……窮民等の爲めには儒者の見識も何も云つてはゐられん……大勢の者が饑に泣いて居るのだ、生死の目に逢つて居るのだ……私は唯、本讀みの儒者であつてはならぬ、私は自分の父母兄弟が井戸に陥つて泣き叫んで居るのにそれを傍見しては居られん。（袴をはきかへる、おゆう手傳ふ）

大鹽　家に氣を附けい、私は皆の爲めに行つて來る、皆を救ひに行つて來る。

（二二）　跡部山城守邸書院

庭前の木々には淡雪がかゝつてゐるが、空はもう晴れてゐる、下手の塀外には早、暮れかゝつた大阪市中の人家が大きな黒い塊のやうになつてゐる中を一筋白く光つて流れる幅廣い淀川の上に、架け渡された天満橋が見下ろされる、書院の床の間には家康の遺訓を寫した一軸、銀燭に蠟燭の光が煌めいてゐる、跡部山城守は四十前後の年配、上役らしい氣取り方で、脇息に凭れて上座に控へ、大鹽格之助は下手に坐つて、亢奮した顔色である、大分論じ合つた末らしい。

格之助　ではお奉行には、何うあつても川崎のお米倉に、手は附けられぬと仰るのでございますか？　攝河泉三國の人民共が、眼前に饑死にしてバタ／＼倒れて居ても、明春の將軍家御儀式の御費用調進の爲めには見殺しになさる御覺悟でございますか？　イヤ、一寸の虫にも五分の魂と申します、窮民の數は幾千、幾萬か知れませぬ、この上、彼等も坐して饑死するのを待つては居りますまい、先年の飢饉にも、現に播州に百姓一揆が起つて、近郷近在の大動亂となつたのは御存知でございませう、今にこの大阪市中に一揆が起つたら何うなさるおつもりでございますか？　このまゝにして置いたら、乾度一揆が起ります、その時に、お米倉は矢張無事で濟むものとお考へなされますか？

跡部（叱るやうに）コリヤ、格之助、言葉を愼め……市中に一揆が起るなどと苟且にもそのやうな不祥事を口にして濟むと思ふか？　與力の職に在る身が今に一揆が起るなどと云ひ觸らせて歩いたら、却つて人民共を煽てて彼等の愚かな心に火を附けるも同然だ、それこそ飛んだ騒動の持上る基にならぬとも限らん、二度と口にするな、乾度申附けたぞ、奉行は上將軍家から仰せ附かつた重い役目だ、將軍家御代替りの大切な御儀式に、千萬手

落のないやうに御奉公するのが役人の表だ、人民共を見殺しにするとは云はぬか、それは追つて何んとか處置するつもりで居る、汝等が強ひてさし出口を聞くには及ばん事だ。

格之助　さし出口と仰せられては誠に困りますが、饑ゑ凍えて野垂死するものは、市中丈でも毎日、何十人といふ數でございます、眉毛に火の附いたやうなさし迫つた場合で、追つて御處置なされて間に合ふやうな悠長な事態ではございませぬ、何も私は一揆が起るの、何のと云ひふらせて歩いては居ませんが、窮すれば亂するのが世間竝の人間の常でございます、萬一さうした不祥事が起つた節には憚りながらお奉公のお落度にも成りかねますまい、今一應考へ直しを願ひたい。

跡部　（嚇として）何に、私の落度？……上役に向つて無作法な口を利くと、その儘にはさし置かんぞ、假令何事が起らうとも、一切の責は奉行職たる私の一身に在る、私の判斷で、私がすべき事と、してはならぬ事とを定めるのだ、汝等の知つた事ではない、もう云分は分つたから、この上云ふな、私も聞かぬ、もう退つたが善い。

格之助　（悲痛な顔色で）……でもこれは私一存で申すのではございませぬ、父中齋から差し上げた意見書に、お奉行の最後の御返答を承はつて來いと堅く申されましたので、折返して伺ひに出たのでございますから。

跡部　もうくどい……平八郎も隱居の身分で奉行職の私に意見書などさし出すといふのは僭越至極だ、むげに却ぞけるのも氣の毒だと思つて、此方が參酌してやれば圖に乘つて、斯うまで押附けがましく出て來ると最早容赦はせんぞ……儒者は矢張大人しく、書齋で書物を讀んでゐればそれで善い、政道といふものは、几の上で考へるやうに、さう一本筋には行かぬものだ。

格之助　（興奮した口調）でも父、中齋は唯の本讀みの儒者ではございませぬ、高井山城守樣の折にも、又矢部駿河守樣の折にもそれぞれ政道の上に一條の意見を立てまして、それが一々行はれたので、大阪近郷の人民は今も猶名奉行の御政治と慕ひ切つて居ります。

跡部　（顏色をかへ）私は平八郎などにあやつられて、名奉行に成り度くはない、跡部には跡部の政治の仕方がある、もう退れ……退れといふに。

格之助　（一禮）は……では左樣、父に申聞けませう……仰つた通りを……。（退場）

跡部　（後を見送りながら）小うるさい奴だ……身の程を知らぬ奴だ。

用人　（大川平馬、出て來る）お客さまはお歸りのやうでございますな。

跡部　（苦笑）ハヽヽヽとんだお客さまだ、成る程、東組の與力は増長し切つてるといふ事だつたが、斯うなつては手も附けられない、此れも平八郎なんかといふ儒者風を吹かせて、お高く止まつてゐる者が居るから、皆が自然それを見習ふものと見える、イヤ、あの矢部駿河守さへ、私に大阪奉行の職務の心得方を尋ねたら、與力の隱居平八郎の扱ひ方が肝心だ、悍馬のやうな男だから、うまく乘りこなさねば騎手が大負傷をするなどと、たわいもない事を教へてくれたので、聞く程にもない存外な人だと私は呆れた位だ、高が與力の隱居が何んだ？

用人　左樣でございますとも、お奉行が與力の隱居の機嫌など取つて居られては、それこそ世間の物笑ひになりませう。

跡部　（頷いて）ウム、……それに、あの格之助なんかと來ては、奉行職たる私の前をも憚らず、父の意見、父の意見と宛で御老中方の差圖でも受けて來たやうな口吻だ、不屆な男ではないか？　あの男には親父の平八が怖いかも知れぬが、私の眼には木偶も同然だ、矢部の云ひ草ではないが、悍馬なら猶更此方に用は無い、筋違ひにさし出した意見書を一應取上げてやつた丈でも、有難く思ふが善いのだ、馬鹿々々しいツ。

用人　御尤でございます共、殿樣が頭から劍ね附けもなさらんで、風に柳と善い加減にあしらつておやりなさると、向ふは圖に乘つて、附け上るのでございます、あゝして一度御叱りなさつたら、もう大抵懲りるに相違ございませぬ。

跡部　（憂しげな顏色）イヤ、一度ではない、もう二三度、叱り附けてやつたが、それで性懲りもなく、あゝして押強く、出て來るのだから堪らない、揚句には、今に大阪市中に一揆が起るなどと、私を脅かすやうな事まで口へ出した、そんな脅かしに乘る私ではない……（不安さうに）……な、平馬、汝はマサカ、市中に一揆が起るやうな事があらうとは思ふまい？　萬一、そんな事があつては大變だから與力同心に堅く云ひ附けて、隅々まで嚴しい取締をさせねばならぬが、マサカ、そんな不屆な馬鹿者も出まい……假令饑死はしても、自分の手で自分の首を縊る奴は、めつたにないものだからの。

用人　は、かねて仰る通り、この大饑饉は全く天災でございますから、下々の者がお上を怨む譯はございません、假令一揆など起しましても、それは宛で水責めに逢ふのが苦しいから、火の中へでも飛び込まうとするやうなもので、そんな向不見の馬鹿げた眞似の出來る筈のものではございません、時に殿樣、大米屋がまた彼方で待つて居りますが、如何いたしたものでございませう？

跡部　オヽ、用談半ばの處へ、格之助がやつて來たので、中座して氣の毒だつた、此方へ呼んでくれ、まだ話のつづきがある筈だ。

用人　は、畏りました……それから大米屋がこれは恐れながら、ほんのお土産の印と申しまして　何か包物を出す）……私から、そつと御目にかけてくれといふ事でございます。

跡部（一寸と苦い顏をして）何か知らんが、時節柄でもあるし、そんな物を度々持つて來てくれては却つて迷惑する。

用人　イヤ、何も御介意なさるやうな品ではないさうでございます……手ぶらで伺うては、自分の氣が濟まぬと、斯樣に申して居ります……如何計らうたらよろしいでございませうか？

跡部　さうか……では萬事汝に任せて置かう、私は一切、知らん體にする、それはよく心得ておけ……格之助は慥かに歸つたであらうの？

用人　はい、お玄關を出て行くのを確かに見屆けましてございます……では大米屋をこれへ連れて參ります……もう此方へ御出かな、さア、何卒御遠慮なく御通りさない、……私はこれにて引下りますから。

大米屋平右衞門（五十歳位の、如才なく、腰の低い何處か下品な商人風の男、低頭して、座敷へ入る）

跡部（笑顏で）平右衞門、とんだ邪魔が入つて、途中で話の緒が切れて了つて、氣の毒であつたな。

平右衞門（ぺこ／＼頭を下げて）イヤ、何う仕りまして、……私のは別に筋の立つたお話でもございません、唯何んとなく世の中が物騷になりましたので、愈お政府の米倉の扉が開くか知ら？　在方から市中へ買ひ米に出た者はお召取りになるといふあの嚴しいお布令が御廢止になるのか知ら、そんならそれで、私共のやうな米商人には、前以て心構へて置きたい事もございますので、直々御內意を伺ふといふ譯には參りませんか、生來損得にかけては犬ほど鼻が利きますから、ホンの匂ひ丈でも嗅いで廻らうといふ了見で、御臺所口から伺つたやうな次第でございます、商人といふ奴は、相場の上り下りには夜の目も寢られぬ苦勞がございます、考へて見ますと因果なものでございまして、へ、、、。

跡部（苦笑）イヤ、何分にもこのまゝでは米相場も上る一方だらうな……世間にはその爲めに難儀して居る者も隨分多勢だから、私も何んとかして相場の下るやうな手段を工夫して居るが、矢ッ張人力では天災に打勝つ事は出來かねるので困つて居る、まアこゝ暫く手を叉ぬいてチッと成行を見て居るより外に、仕方もなからうかと思

つて居るのだ……併し、これは日頃懇意づくから、私の愚痴だと聞き流して貰ひたいのだが……

平右衛門　（しきりに叩頭して）　ヘイ〳〵、それはもうよく承知いたして居ります、今年も西國のお大名方へ御用立てました金は、仲間内を聞合せましても相變らず莫大な高に上りましたやうで、自然、入津米もバッタリ止まりますし、この上お國米が出ないとなつたら、米一升に金一升といふ高い目が今に出る事になりませう、イヤ、斯様に申しては、いかにも殺生なやうに聞えませうが、商人は金儲が生命でございますから、へ、、、、。

跡部　だがあまり慾張ると、今に市中に一揆が起らうも知れぬ、氣を附けるが善いぞ。

平右衛門　（顏色を動かして）　ヘッ、そんな恐ろしい企みをするものがございますか？　そんな事がお耳へ入りましたか？

跡部　（輕く笑ひ）　イヤ、まださう顏色を變へて騷ぐ程の事でもないが、世の中は廣いから、さういふ不祥事を云ひ觸らせて歩く者も居るらしい……商人は儲けるも善からうが、あまり儲け過すと皆から怨まれるからな、まア何分目立たぬやうにやる事だ、それがつまり身の爲めといふものだ。

平右衛門　ヘイ、御尤千萬でございます……併し一揆が起るの何んのと、とんでもない事を云ひ觸らせて歩くものは時節柄人騷がせな、見附かつたら乾度御召捕になるのでございませうな？

跡部　私もマサカ、そんな事を眞に受けはせぬ……そんな不祥事があつて堪るものか？　だがそれを云ひ觸らせて歩く人間は見當が附いて居るから、場合によつては乾度糾明するかも知れぬ、併し、まア今の中は大目に見て置くつもりだ。

平右衛門　マサカとは思ひますが、チヨツと薄氣味が惡うございますな。

用人　（忙しくかけ出て）　御殿様、御殿様、大變なものが參りました、大鹽の隱居がとう〳〵押かけて參りました。

跡部　（ハッとしたやうに）　何に、大鹽の隱居……平八郎が來たといふのか？

用人　は、玄關へ押かけて參りまして、是非御殿様に御目に懸りたいと申します、いろ〳〵宥めつ賺かしついたしましたが、何うしても動きませぬ、私共の手にあひ兼ねますが、如何取計ひませう？

跡部　夜中に推參するとは無禮ではないか？……斷つて了へ。

用人　はい、いろ〳〵に申して斷りましたが、天下の一大

事だ、一大事だと申張りますので、私共の手に抑へかねます。
跡部　もう休んで居ろと云へば善いではないか？
用人　左様にも申しましたが、耳にもかけません、お玄關先に立蹯かつて居りますので……。
跡部　まだ逢つた事はないが、何んな樣子の男だ？　逆上した顏色でもして居るか？
用人　何んだか眼の詰い、顏色の蒼白めた、一癖ありげな人體に見えまする。
跡部　（ツヂと嘲笑つて）悍馬が戸迷ひをして、こゝへあばれ込んだらしい、ハヽヽそんなものに怯ける私ではない。
平右衞門　お殿樣、お逢ひなさらぬがよろしうございませう。
跡部　（落着いて見せて）何んでも餘つ程の肝積持ださうな、矢部駿州の邸で、金頭魚の頭から尾まで一口にべりべりと食つて了つたといふ狂ひめいた男と聞いて居る。
平右衞門　そんな狂人は、追ひ返してお了ひなされませ。
跡部　イヤ、假令悍馬であらうと、狂人であらうと、私は決して恐れはせぬ、……よし、逢つて見てやる。意見がましい事を申したら、手嚴しく叱り付けて、懲しめてやらう。

平右衞門　ではお逢ひなされますか？……御氣を附け遊ばせ、……私はこれで御暇申上げます……裏口から御免蒙ります。
跡部　何あに介意ふ事はない、もつとゆつくりして行け……彼方で待つて居ては何うだ？
平右衞門　（しきりに低頭して）イヤ、有難うございますが、いづれ又その中に……今晩はこれで御免蒙ります。
跡部　さうか、では又來るが善い、この庭下駄を履いてあちらへ廻つて行け……平馬、では平八郎を此れへ呼べ、逢つてやる。（平右衞門に先立つて庭へ下り立ち）雲は降り止んで月が出た……何んだかもの凄い、殺氣を帶びたやうな寒月だな、身柱がゾッとするが、時候のせゐだらう……市中はひつそりしてゐる、一揆なんか起るものか、……あの火は？　ア淀川を遡る船の火だハヽヽ。
（平右衞門へ話かけつゝ、暫時影が消える）
（この間に、大鹽平八郎、入來つて下座に待構へる。）
跡部　（座に蹲つて來て、傲慢な態度）ア、大鹽の隱居平八郎とは汝か？
大鹽　（一禮）ハ、平八郎でございます、初めて御目通りいたします。
跡部　（冷かに）何の用事か知らんが、夜中に推參するとは人騷がせだぞ。

大鹽（愍懃に）無禮は幾重にも御詫び申上げますが、一刻も打捨てゝは置かれぬ天下の一大事でございますから、推して伺つた次第でございます。

跡部　何の格之助からさし出した意見書の一件だらう、それなら先刻も重ねて返答はして置いた、誰が來ようと、あれより他に返答の仕樣はないから、一つ事を何度も繰返して、くど〳〵とは聞かぬものだ、奉行には奉行の考へがある。

大鹽（ムッとしたやうに、暫く跡部の顔を見据ゑてゐたが、力めて落着いた調子で、）ではお奉行には申上げまい、御一人の跡部山城守樣に伺ひますが、山城守樣も妻子は可愛いに相違ございますまい、又親兄弟は御大切になされませう？　その父母、妻子、兄弟が、今、飢ゑ凍えて死ぬか、生きるか、二つに一つの、切羽詰つた場合であるに、御城內の米倉には現に米俵が山と積まれて居るのを眼前に見せながら、これは預り物だからと云うて、一切、手を附けさせず、そのまゝ、一家族枕を列べて餓死させなされますか？　それとも一家族を見殺しにするのはいかにも忍びない、先づ米倉を開いてこの急場を救ひ、後で預け主に對して一身の責を負ひ、その爲めには一命をも抛つ覺悟をなされませうか？　勿論、その預り米は、預け主の一家の大切な儀式の充當（ひきあて）にしてあるものではあらうが、貴い人命に代へられる儀式はない筈でございます、又預けたと云うても、元々、預け主が自分で働いて作つたものではなく、働いて作つた本人等は却つて餓死しかゝつて居るのだとしたら、何う取計ふのが、人の道にも背かず、又天の意にも悖らぬ最善の處置か、心あるものには、直に分かる事だと思ひますが、如何でございませう？

跡部（冷笑して）さうした講釋なら又春長に聞かうではないか？　一家の私事と、公儀の重い役目と一つ口に云へるものではない、この山城守は高井や矢部とはチト流儀が違つて居るから、與力の隱居風情の指圖は受けぬぞ、左樣心得い。

大鹽（不思、ギロリと眼を光らせたが、自制して、半ば瞑目し）イヤ、御指圖は致しませぬ、而し、四海困窮する時は天祿永く絶えんと聖賢の誡めもございます、この四五年來打續く大飢饉に、畏くも天子御在所の京都では十萬といふ人數が減り、この大阪市中にも已に數千人の餓死して、千日前にその死體を燒く煙は一日も絶えませぬ、私は隱居の身分で世上の事には可成、耳をふさいで、唯、一圖に聖賢の道を講じて居たい考へでございますが、民の病を自分の病とし、民の苦みを自分の苦みとするのが、眞の仁で、これが聖賢の道の極意だと思へば思ふ程、一

刻も落付いて居られませぬ、そこに自分と他人との區別は附けやうがない、又公と私との二つはない、公儀の重い役人たるお奉行は、民の父母たる御心がけがあつてこそ、眞實にその役目を盡される譯で、明春にさし迫つた將軍家の御大禮が重ければ、眼前の民の病、民の苦みは一層重く見えねばならぬ筈と思ひます、民あつての將軍家で、將軍家あつての民ではございますまい、この場合、思ひ切つてお圍ひ米を出され、先づ仁政を行はれたら、時節柄も辨へず、ありあまる富に誇つて贅澤三昧に遊び暮らして居る船場邊りの町人共も、御諭達一つで否とは云へぬ義理で金穀を出し吝しみも致しますまい、この非常の時、非常の道をお取りなさるのが眞實の御奉行でございます、平八郎無禮を顧みず、萬民に代つてお願ひ申上げます。

跡部 (多少は感動されながら、却つて一層冷淡な態度で) 私は奉行として自分のすべき丈の事はして居る、自分の手の屆かぬ事が出來る筈のものではない、聖賢の道と政治の道とは又筋の違つた處がある、それは實地にその局に當つて見なければ分らんのだ、併し平八郎、民あつての將軍家などと怪しからん事を云つたやうだが、あれは何かの云ひ違ひであらうの、今夜は聞捨にするが、二度と口へ出すな……もう退れ。

大鹽 (目が鋭く光つて來る、體が慄へる、語氣荒く) すべき事はして居るとは云はせませんぞ、天下の御臺所であるこの大阪の市中へ、米を圍ふといふ口實で、恐れ多くも天子御在所の京都へは定めの外、一石も送る事を禁制しながら、江戸表にはドシ〱廻米させ、剩へ西組與力、内山彦次郎を密かに兵庫へ出張させて、土地の商人と計つて米を買占め、それをも江戸へ送り附けてゐられる事もこの平八郎祕かに承知して居りますぞ、又この大阪市内にも奸商共が、淀だの、灘だのと云ふ名義で倉庫に米俵を圍ひ、高い上に高い値段に糶り上げられるのを待つてゐるのか、大目に見られて居るのも公然の祕密でございます。それにも手をつけず、又お圍米にも手を附けず、それでお奉行はすべき事をして居ると申されますか？　平八郎、與力の隱居としては申さぬ、聖賢の道を修業する天下の儒者として、道に外づれた政治を御糺ししますぞ。

跡部 (少し周章て氣味で) 何者がそのやうな事を汝に申した？……イヤ、嘘だ、間違ひだ、私は已に一度窮民へ施米もして居る、堂島の相場もやかましく云つて居る……無禮を申すと勘辨せんぞ、奉行職の權限は知つて居らう？

大鹽 (叱るやうに) 僅かの人數を限つて、一合一度限り

の施米が何の補足になりました？　金を持つた遊民共には遠慮して、彼等がありあまる金穀を乏しい者に分け與へさせる手段も取らず、唯堂島の相場いぢりが何になります？

跡部　（怒に慄へながら）　愈々無禮な口を利き居る……私を何んと思ひ居るか？

大鹽　（沈痛な口調で）……最早、この上は何も申さぬ、お奉行が民を見殺しにされるとあつては、中齋は唯の隱居ではゐられぬ、書物を講じてはゐられぬ……私の知つて居る事を行はう。

跡部　（不安さうに）　平八郎、一揆が起るなどと、市中に云ひふらせて歩く事は相成らんぞ、若し左樣の事を云ひふらせたら乾度處置するから左樣思へッゝ

大鹽　（自分の膝を見つめ）　イヤ、そんな騷動の起らぬやうに、私こそ心配して居る……心からそれを氣遣つて居るのは私一人た、これは廣言ではない……併しこのまゝ何事も行はれなかつたら、乾度天の警めがある……乾度ある。

跡部　（薄氣味惡さうに大鹽の樣子を眺め）　天の警めなどと沙汰をして歩く事も禁制だぞ。

大鹽　（暫く瞑目して、獨語する如く）　この年頃の大風雨も、大洪水も、大飢饉も、皆、天の警めだ、それでも百官有司の心は眠つて居る、良知を嚮かうともせぬ、人の口は塞いでも、起る事は乾度起る、今に政府の米倉の扉も毀たれよう、不義に富んだ町人共の家倉も潰されよう、そして大阪市中が、燃に燃え上つて黑土にならうも知れぬ……何んだかそんな幻が私の眼前にちらつく、ア、斯うしては居られぬ次の策を考へよう。

跡部　（恐怖の顏色）　コレ、何を申す？……退れッ、退れッ。

大鹽　（活と目を瞬いて、奉行を見据ゑる、跡部は萎縮する）……では御免。（つゝと退がる）

跡部　（後を見送つて、ホッと一息つき）　始めは存外、大人しく出て來たやうだが、次第に本性を現しよつた、彼奴は氣狂ひだ、……やつぱり氣狂ひだ、……大阪が黑土になると、奉行たる私の前で云ひよつた、氣狂ひに相違ない、氣狂ひ儒者……氣狂ひ隱居……キ印、ハ、、、、。

用人　（出て來て）　いかにもキ印でございます、お奉行の前へ出て、あのやうな口の利き方をするのは、全く狂人でなければ出來ませぬ。

跡部　終ひには、自分で獨り言を云つて居た……何んだか薄氣味が惡くなつたぞ。

用人　左樣でございます、薄氣味惡いキ印でございますな……書物を讀み過ぎてあんなになつたものと見えます、

可愛さうなもので。

跡部　（急に聞耳立て）何か、外が騷々しいではないか？……何處かで罵り喚いてるやうだが……（庭口へ下りる）

用人　へ、左様でございますか？……お耳が敏くてゐらつしやいます。

跡部　（庭へ下りて、高手から市街の方を見下ろす、用人手燭をかゝげて行く）

跡部　（不意に）何者だ？　何者だ？

用人　へツ……何か曲者が？

跡部　イヤ……影法師だつた……自分の影法師だつた。（とホツと吐息）だが、外で何か騷いで居る……當番を呼べ……當番に聞いて見い。

用人　はツ……（と馳入る）

（かすかに、ガヤ／＼罵り喚く聲が聞える、跡部聞耳立てゝゐる。）

用人　（歸つて來て）御安心なされませ、橋ぐいへ船が引かゝつて、騷いでゐるのださうでございます、船頭が大分醉ひ食つて居ますさうで。

跡部　左様か？……天滿橋の下の橋ぐいだな……四邊が靜かだから、物音が手に取るやうに聞える……マア、マア、それでよかつたが、人騷がせな奴等だな。

（端唄が遠くかすかに起る）

跡部　（ニツコリ笑ひ）はゝア、もう何か唄つてゐる、醉つ拂つて居ると見える……人民共は困つてる、困つてると云ふが、アヽして醉拂つて鼻唄を唄ふ者も居る……これぢや矢つ張、天下は太平だ、……平八郎は慥かにキ印だのう。

用人　キ印に相違ございませんとも。

跡部　（歩き廻り）キ印だ、さうだ、キ印に相違ない、平八郎めは悍馬のキ印だハヽヽヽヽ。

——幕——

第二幕

鶴池屋奥座敷

上手、正面は大床、唐木の螺鈿卓の上に古い由緒附らしい青銅の香爐、横の違ひ棚には金蒔繪の文臺に、緋流蘇で飾つた源氏五十四帖の繪卷物、古びた木彫りの福祿壽の像、青貝摺りの菓子、その他、寂びの附いたいろ／＼な骨董品が、手際よく置かれてある、座の一方に爐を切つて、釜がかゝつてゐる、下手の壁際は丸窓、それに隣つた障子を開けると、庭石、植込のこんもりした配合が奥ゆかしく、錦井戸の轆轤も見える、主人善右衛門は五十左右の年配、福相な顏色で鼈甲縁の眼

鏡をかけて十徳を着てゐる、十六七歳の丁稚長松を指圖しながら、三幅對の不動尊の佛畫を床の間にかけ替へさせてゐる、丁稚長松は中振袖を着て角前髪の髷をくつていたづらといふものを鳥の翼のやうに髷の後ろの左右から出して異様の風俗をして、踏臺に乘つてゐる。

善右衛門　それはチトかけ方が歪んで居るな、も少し右を上げてくれ、然う、然う……それで善い、それで善い（惚惚と眺めて）矢つ張名畫は違つて居る、家の寶物が一つ殖えた。

丁稚長松　旦那様、他に御用はおまへんか？……お客様方を此方へ御案内しまへうか？

善右衛門　イヤ、さし當つて用事はない、お客様方の案内は私がする、……ア、日足がさして來たやうだ、縁側の障子を開けい。

大番頭徳兵衛　（小足早に驅けて來て）旦那様、何うした事でございませう、今、大鹽平八郎様がぶらりと店先へ御越しなされまして、旦那様に是非、御目に蒐りたいと申して居られますが？

善右衛門　（チヨツと當惑顔にて）何に、大鹽平八郎様が？……何御用か知らんが、今、來客中でもあるし、困つたなア、私が住宅だと云つたのかい？

徳兵衛　否、御在宅だとは申しませんが、唯あいまいな御返答をして置きましたが、何うしても至急御目に蒐つてお話がしたい、若し御不在なら御出先を聞かせてくれと、斯う仰るので、兎に角、一應、奥を見て参りますからと、言葉尻を濁して御都合を伺ひに出ましてござります。

善右衛門　フーン、……さうか……何御用か知らんが兎に角、學者で名高い大鹽先生が、わざわざ御訪ね下さつて、左様まで云はれるのならマサカ居留守も使へまい、今日のお客様方は皆閑人だから暫く彼方で待つて居て貰うて、兎に角、大鹽先生に御目に蒐らう、此方へお通してくれ……ア、一寸待つた、ヱ、と、このやうな價の高い掛軸を手に入れて、氣樂さうに遊んで居る處を、中齋先生のやうな鋭い眼力で聞えたお方に見られるのはチト氣持が悪い……だが彼方の座敷も塞がつて居るし、……よし、長松、これをあの熊澤先生の書幅とかけかへてくれ。

長松　ヘイ……では平常のとかけかへますのやな？

善右衛門　然う……早くしてくれ、徳兵衛も手傳うてやれ、私はお客様方に一寸と斷りを云うて來る、その間に、大鹽様を此方へ御案内するんだぞ。（ト入る）

徳兵衛　（長松に手傳うて、軸をかけ替へ）斯うして置けばこれで善からう、では私が大鹽様へ、然う申上げるから、こつちの用意をしといておくんな。

丁稚長松　ヘイ、よろしうおます。（と桐胴の火鉢を運び、座蒲團など敷いて用意する）

（大鹽平八郎、一刀を提げて、番頭德兵衛の案内につれて入來り、上手の座に直る。）

德兵衛　（丁寧に）唯今、主人御目に蒐るでございませう、暫く御待ちを願ひます、……長松どん、御茶は善えかな。

大鹽　（鷹揚に）イヤ、御構ひなく……。（と云つて、座敷の模様をヂロ〱眺めてゐる、長松は抹茶を運んで、一禮して下る）

善右衛門　（黒紬の紋附羽織に、袴を着けて出て來り、慇懃な挨拶）これは大鹽先生で居らせられますか？　お初にお目に蒐ります、私は當家の主人善右衛門、以後御見知り置き下さいませ、今日は又善うこそ御立寄り下されました。

大鹽　（打解けた態度で）イヤ、突然、御訪ねしたので實は何うかと思つたが、氣易く御目にかゝれて、私も本懷だ、以後よろしく。

善右衛門　恐れ入ります、私こそよろしく御願ひ申上ます、エー、今年も大分押詰まつて參りましたが、時候柄とはいへ怪しからん寒氣も嚴しうございまして……それに當年は春匆々からしけつゞきで、米價は途法もなく騰貴いたしまするし、隨つて世の中は不景氣千萬で、皆もう氣を腐らせ切つて居るやうにございます、明年は酉に當りますが、何卒まア、縁喜よく宜しい歳をとりたいものでございます。

大鹽　（眉をピクリと動かせ）御言葉の通り、世の中はもう不景氣といふ處は疾に通り越して、大抵の民百姓は、皆餓鬼道の苦みに陷ち入つて居ります、今も御當家へ參る途中浪花橋の上で、餓死した靑ぶくれの死體に、菰を冠せて千日前の燒場へ運んで行くのを見て、この胸を抉られるやうに思ひました、だが斯うして此方の何から何まで結構づくめの御座敷に坐つてゐると、唯つた今、この眼で見たあの慘らしい死ざまは、ありや惡い夢ではなかつたか知らと、つい不思議な氣持がしますよ。

善右衛門　（云ひ澁りながら）この頃、難澁してゐる人の多いといふ噂は、聞いて知つて居ります、いかにも氣の毒千萬でございますな。

大鹽　貴公も然う思はれますかな？　イヤ、誰しも惻隱の心は持つてゐる筈だ、實は、正直を申すと金持ちの町人の貴公に、私は頭を下げたくはないが、貴公も人間に變りはないと思うて、やつて來たら、矢張然うらしい、他人の疼痛は三年でも堪へるといふのは、コリヤ人間の道を辨へた者に出來た業ではない、今の祿盜人の役人共より、矢ツ張貴公方が話せさうだ、實はそれでチト折入つ

ての御相談だか。（膝を進める）

善右衛門　へ、ー、それは又如何様な御相談でございますか？

大鹽　（落付いた態度て）　この數年來、凶作許り續いたが、今年は先づ未曾有と申さねばなるまい、定めて貴公にも御存じであらうが、一升の米の價が二百文といふ高値に上つたのは、是までの年代記には嘗つて無い事で、この天保元年の頃に、あの瑞軒山……俗に天保山といふが、あの山を築く時に、砂持をした事がありますな、記憶てお居でかな？

善右衛門　ヘイ、ヘイ、記憶えて居りますとも、餘つ程賑かな事でございました。

大鹽　あの砂持には男も女も大勢出かけたものだが、その者等が謡うた俗謠に「お臺場の土運び、向ふで飯食うて二百と五十、有難い〳〵米が百に三升ぢやわい……」などと申したもので、僅か七八年以前には三升の米の買へた百文で、今では五合も賣つてくれぬとは打續く凶作のせゐもあらうが、一體に世の中があまり悪くなり過ぎたと申さうより外はない……、かゝる時節柄に、民の父母たるべき役人共は、唯、自分の一家の爲めに祿を盗む事は知つて居ても、民ある事を知つて居らん、江戸の將軍家の爲めは計つても、京都に畏くも天子在す事を忘れて居る、このまゝでは今に、天の怒りと人の怨みとが一つになつて、何んな恐ろしい事が持上るか分らぬ、イヤ、少くともこの大阪の市中は今に一焦げの黒土になつて了ふに相違ない。（次第に興奮して來る）

善右衛門　……イヤ、先生がそれ程までに、萬人の難儀を御心にかけて居られるのには私、感服いたしました、御奉行所でも素より知らぬ顔で打過して居られる譯でもありますまいが、何しろ天災の事で、御手の屆かぬ處も多いに相違ございませぬ、さればと申しまして、此の儘では、眞實に何んな騒動が起るか知れませぬ、そこで先生に何か善い御思案がありますれば、一つ、伺うて置きたいものでございますが？

大鹽　（熱した顔色で）　この平八郎は素より與力の隱居の身分で、好んで天下の政道に喙を容れ度はない、又さうした地位にも居らん、靜かに書齋へ閉籠つて、聖賢の道を講じて居ればそれで善い、又、一生然うしてゐたい望でもあつたが、天地萬物一體の仁を知れば知る程世の難儀、萬民の苦みを唯、見過しては居られぬ、知つた事は行へと聖賢の聲がヒシ〳〵この胸に響いて來て、何うもぢつとして居耐れぬので、奉行所へ意見書を出して、最後には自分で奉行にも逢つて見た、處が奉行は存外の小人で、唯、お上の米倉の番人をして居たら、それで自分の職務

は済むものと思つてるらしい、そこで私は見切をつけて、色々考へた揚句、御相談をかける氣になつた次第だ、私は誠心で云ふのだから、何卒誠心で聽いて貰ひた。

善右衛門　私共は賤の町人で、先生の御相談相手になれる様なものではございませんが、先生も仰やる通り、自分さへ善ければ、他人は見殺しにしてもよいといふ沒義道な考へを持つては居りませんから、身に適ふ事なら、出來る丈の事は致したいと思ひます、マアお話を聞かせて下さいませ。

大鹽　では聞いて下さい、今の奉行は相手にならぬ奴から、私は自分で、この危急の場合を救ふ策を立てゝ見た、その第一箇條は貴公始め船場の金持の町人衆から、年々諸大名へ信用で貸附けて居られる金高を今後グツと引締めて貰うて、自然、諸國の廻米をこの大阪の津へ吸ひ寄せるやうに取計らひたい、何を申しても米の拂底が飢饉の大原因に相違ないから、廻米の石高を増す工夫が根本の第一策だと思ふ。併しそれ許りではこの焦眉の急は救はれんから、貴公始め屈指の富豪の方々から、さし當り金子六萬兩を借受け、これを救濟の資金に充て、向三箇年間に償却する事に致したい、素より空手で貴公等の懷を搾らうとは申さぬ、微禄ながらこの平八郎の家祿貳百石を始め、門下、同志の面々の知行、家財を不殘、右の抵當として差出す事に、當方では内相談を極めて來て居ます、假令我々丈の微力で、萬民を救ふ事は出來なくとも一片の誠心が天に通ずれば全國に自ら仁義の道が動きませう、是非共御同意が願ひたい、猶、委細は、この書面を覽て下さつたらよく御會得が行きませう。

善右衛門　（大鹽のさし出した書面を擴げて見ながら）……成る程……成程……いかにも行屆いた御考案でございますな、……（急に小首を傾け）だが、私一存ではこの大名方へ信用貸の金高を制限するといふのは、チト六づかしい御註文かと思ひます、それも廻米の爲めには一つの妙策に相違ありませんが、さうしたら、これまでの嵩の高んだ貸銀が自然、貸倒れになる恐れがありますので、町人としては、我が手で首を縊れと云はれるやうな誠に辛らい難題でございます……如何でございませうな？　この第二の御策なら、私は異存ございませんが、……私から天王寺屋、加島屋、内田屋その他の方々へ御相談して見てもよろしいと思ひますが？　幸、今日、皆様と顏を合せる機會がありますから。

大鹽　（暫く考へ込んでゐたが）……實は、この第一の策が大切なんだが、町人として辛いと云はれるのも餘り氣の無い話だらう、では、よろしい、今は一刻も猶豫する場合でないから、この第二の策……六萬兩御融通の件を至

急御取計下さるやうに御願ひする、今日、他の方々と逢はれる機會があるといふのは勿怪の幸ひだ、貴公からよく御說き下さつて、成るべき明日にでも御返答を聞かせて貰へば、この上なく悅はしう思ひますが？

善右衞門　明日とも、御請合は出來かねますが、成るべく早く御返答を申上ませう。

大鹽（ホッと吐息）では何卒、さうして下さい……イヤ、貴公は善く御分りになつて居るやうだが、他の方々の中にはまだよく分らん人も居りませう、それで一言云つて置き度い、我々知行取りも實は民百姓の膏血を絞つて生きて居るのだが、その絞り取つた膏血に、利に利を產ませてお庇で榮耀榮華に遊び暮らしてゐるのがこの船場邊りに軒を並べて居る百萬長者だ、お互に天の冥罰を恐れたい、せめて斯うした時に、民百姓へ日頃の恩返しするのが罪亡しにもなるといふ事を、皆が自分で心附かれるやう、篤とお話が願ひたい。

善右衞門　は、委細、承知いたしました…… 皆樣へ、御趣意をよく申傳へませう……時にもう御晝飯時分になりますから、何もございませんが一つ御召上り下さいますまいか？

大鹽　イヤ、その御心配は御無用になさつて下さい。

善右衞門　でも今から天滿まで御歸りなさるのは、大分道程もございますから。

大鹽　では、折角の事だから、菜を御馳走下さい、實は辨當はこゝに用意して居ます。（懷から小さい袱紗包を取出す）

善右衞門　（呆れ顏に）でございますか……では臺所で菜汁を煮て居たやうでございますから、それなとさし上げては如何でせうか？

大鹽　菜汁か……折角の御厚意だから、それ丈は頂戴せう。

善右衞門　は、では早速……（手を拍ハ、長松出て來る、耳語く、頷いて退く）

大鹽　（袱紗から竹皮包を取出して）せめて梅干におむすびでも皆の口へ入るやうになつてくれゝば結構だが……何卒、貴公方の御盡力で、一日も早く然うなるやうに仕度いものだ、それまでは三度の御飯を數々度に、何んだか氣が咎めるやうでな。

善右衞門　（感に打たれたやうに）イヤ、出來る丈の事は致さなければなりませぬ、……先生のやうに、他人の事を我が身の事のやうに、御心痛なさつてゐる方があるのに、此方も安閑としては居られませぬ。

（膳に菜汁の椀をつけて、長松持來る。）

大鹽　何分にも願ひますぞ、……イヤ、これは御馳走……では御免蒙つて頂戴する。（むすびを喰ふ）

善右衛門　私も御接伴をする筈でございますが、來客があつて先刻、一緒に濟ませましたので……。

大鹽　イヤ、お交際は御無用だ……時に此方へは篠崎小竹先生が、四書の講義に出られるやうに聞いて居たが、近頃も左樣かな？

善右衛門　ハイ、相不變、御越下さいますが、私共は論語讀の論語不知で、お恥かしい次第でございます。

大鹽　(むすびを食し、汁を吸ひ了つて)……あの床の間の熊澤蕃山先生の論語の一節はよく選まれましたな、不義而富且貴者於我如浮雲……善い誡だ、唯周圍のお立派な骨董品とは少々不釣合な樣だが……。(云つて、ヂロ／＼と見廻はしてゐる)

善右衛門　ヘイ……あの、あれは何んでございまして。(額の冷汗を拭いてゐる)

大鹽　イヤ、これで失禮せう……何分にも今の一件をよろしく御依賴する、一兩日の中に、善い返答を聞かせて安心させて下さい。(急に不安な顏色で)萬一……萬一、この策が破れたら絶體絶命だ、……後は何んな事になるか？　何うしたら善いか、私にも分らん、世の中の成行も恐ろしい、私自身の心も恐ろしい……世の中の人を救ふといふより、この私を救うて貰ひたい、……この平八郎を救うて貰ひたい、私は奉行にはこんな事は云はなかつたが、貴公には打ちあけて云ふ、イヤ、改めてお願ひする。(思入つた樣子で低頭する)

善右衛門　何卒もう、……何卒もう……出來る丈の事は致します。

大鹽　(興奮した口調で)では何分にも……兩三日の中に善い御返答を……失禮。(起上る)

(善右衛門は送つて行く。)

(丁稚、長松は床の間の蕃山の軸を取除けて、前のとかけ替にかゝる、病氣揚りの、窶れて青白い顏の、十七八歳の當家の娘お利江が、影の樣にそこへ入つて來て、床の間を眺めてゐる。)

お利江　(獨語するやうに)　お父さまといふ人は、私には分らへん、日頃大さう慈悲深いやうな事を仰るかと思ふと、商賣にかけては隨分酷い仕打もなさるさうだ、大鹽先生へあんな事を仰つたのは御本心だか、何うだか？……長松、汝は何う思ふかい？

丁稚長松　へェ、私はよく聞いてゐまへんので旦那樣が何を仰つたか分りまへんが、商賣は商賣、慈悲は慈悲、別別のものではおまへんか、大阪商人はそこが豪いのでおませう、それは兎に角、あの大鹽先生といふのは又けつたいな人でおますな、御富家へ辨當御持參で來た方は、あの先生が始めてゞおませう。

お利江　大鹽先生のやうな、立派な學者の眼には町人の家なんか嘸ぞ卑しく見えるのだらうよ、こゝの御飯を上がるのも、穢らはしいとお思ひなさつたかも分らへん。

丁稚長松　マサカ、そんな事はおまへん、孃様はあんまりお氣を廻し過ぎなさるよつて、年中、御病身で、あきまへんがな。

（善右衞門、浮かぬ顔で、思案しながら入つて來る。）

丁稚長松　旦那様、軸をかけかへました。

善右衞門　然うか？……オ、、お利江、床からぬけ出して來たのか？　頭痛は何うだ？

お利江　お父さま、私、一寸お話がおますが？

善右衞門　改まつて何の話だ？　長松、暫くしたらお客様方をこちらへ御案內せい。

（丁稚長松は退場。）

お利江　お父様が、大鹽先生にあゝ仰つたのは、あれは御本心からでおますか？……私は次の室で皆聞いて居ました。

善右衞門　汝はそんな事に氣を揉まんでも善い。

お利江　（哀訴するやうに）でもお父様、何卒、大鹽先生にお請合なされた事を本氣でして上げて下さいませ、でなけりや大變な事になるかも知れまへん、私は昨夜、眞實に恐ろしい夢を見ました。

善右衞門　何んな夢だ？

お利江　不動さまか、家のお座敷へ飛び込みなされたかと思ふと、見る中に、そこら一面か火になつて、この家も倉庫も皆凄まじい焰の中に燒落ちて了ひました、そして私の衣服へも火が燃え附いて、體が焦げて苦しいから、アツと叫ぶと目がさめました、もう汗びつしよりになつて居ました、そこへ今日、大鹽先生がお越なされたと聞いて、不思議な氣がしてなりまへん。

善右衞門　（無雜作に）夢なんか氣にする馬鹿があるか？　併し私も大鹽先生に逢うてから、何んだか變な氣持がして居る、世間は飢饉で困つて居るのに、斯うして何不自由なく暮して居るのは、冥利に盡きはせぬかと、そんな事を考へて居る。

お利江　（嬉しげに）エ、、お父様、……では何卒、難儀して居る人等の爲めになるやうに、盡力して上げて下さい、賴みますわ……一生のお願ひでおます。

善右衞門　汝が云はんでもお父さまにはお父さま丈の了見がある、今、番頭達にも、一寸と相談したら相當の出金をする事に皆賛成はして居る、今日は幸ひ、手に入つた軸を皆さんに見て貰ふので、あゝしてお招きしてあるから、序にこの相談を持出したら、贅澤が却つて贅澤にはならん、マ、マ、汝は入らん心配はするな。

お利江　眞實に、皆さまに御相談して、何うかして上げて下さいな、お願ひしますわ。

丁稚長松　お客さま方を、こちらへ御案内しました。

善右衛門　ウム、よし、よし、……お利江は彼方へ。

お利江　お父さま、眞實にお願ひしますわ。（と入る）

（十德姿の篠崎小竹を先頭に、天王寺屋五兵衛、加島屋久右衛門、内田屋惣兵衛、大米屋平右衛門等が揃うて座敷へ入つて來る、懐石料理の後で皆が多少、酒氣を帶びてゐる。）

善右衛門（挨拶）折角、皆さまをお招きしながら突然、來客があつて、肝心の處で中座して甚だ相濟みませんでした。

篠崎（丁寧に）イヤ、何う致しまして……何から何まで御念の入つた、結構つくめの御懐石で、私はつい常時の酒量を過しました、對州の海丹と來ては大好物でなハ、ハ、ハ。

天王寺屋　あの出雲ののし若布が又珍らしい物でございますな、あれは雲州の日の御崎より他では取れんといふ由緒付だそうで、それを聞いた丈でも風味が異つて來ますよ、御馳走さまでした。

大米屋　私には、あの北海道の鮭のはらゝ子が至極氣に入りましたな、器物も皆、極め付の、古物だといふ事で、篠崎先生のお講釋を聞きましたが、その方は御存じの通り私は皆目、盲目だから分りませんや、これから追々修業しませうハ、ハ、ハ。

篠崎　何、晩學でも構はん、心がけさへがあれば道は自ら通ずるものだからハ、ハ、ハ。

善右衛門（釜の前で薄茶を立てゝゐる、丁稚長松がそれを運び了ると）皆さま、この軸が、今度、手に入れた物の中でも眼貫でございますが、何卒御鑑定を願ひます。

加島屋　イヤ、先刻からもう見惚れて居ります。

内田屋　不動尊が宛で活きてゐられるやうにございますな、何んだか拜み度くなります。（合掌する）

大米屋　内田屋さんはなか／＼信心家だ、……併し不動尊を信心すると、金が儲かると云ひますから、私も負けずに一つ拜みませう。（合掌する）

篠崎　は、ア、成程な……筆勢と云ひ、繪の具の色と云ひ、圖柄と云ひ、批の打ち所はありませんな、兆殿司といへば矢張兆殿司に相違ありますまい、何處か京都の公卿さんのお拂ひ物のやうに聞きましたが、これは又大した寶物が御手に入つた、御富家は御目出度い。

大米屋　公卿さんなどはこの節、一番困つて居さうから、背に腹はかへられんで、いかな寶物でも投賣りしてお米代にして居ませうな、チト無法な聞樣かも知れませんが、

如何程お出しなされました？

善右衛門（苦笑）サア、一つ云ひ當てゝ戴きませうか？

火米屋　二百金は出ますまい。

内田屋　何んぼ何んでも、二百金といふ事はありますまい、御當家の事ではあり、いかほど掛値にお見つもりなさつても、三百金以上はお出しでございませうな？

善右衛門　實は如何程でも、金高に係はらぬといふ先方様の御申出ではございましたが、足許を見ると思はれても後護うございますから、他の二三の雜品とこみで思切つて一千金奮發しました、……これ一つでもそれ程の値打はあるやうに思ひますが、ちと高買ひでしたかな？

加島屋（頷いて）イヤ、決して高買ひとは申されませぬ、至當の所でございませうな。

天王寺屋　これが御當家に納まれば、その十倍の價が出ますよハヽヽヽ。

篠崎　御尤た……斯うした書畫骨董には、定つた價のないのが本當だから。

火米屋　然う聞けば、成程然うでございますな。

善右衛門　イヤ、茶でも飲んで、こんなお話許りして居ますと、天下は至極太平でございますな、實は皆さまと、今日一日、その太平樂を極め込むつもりで、御呼立てしましたが、餘儀ない羽目で、チョツト眞面目な御相談をせんければならぬ事が出來しました、篠崎先生は御迷惑でもマア聞役の一人になつてゐて下さいませ。

篠崎（坐り直す）ハア、何事でございますかな？

善右衛門（改まつて）實は、先刻、大鹽中齋先生が突然、お越しになつていろ／＼お話のあつた末、かういふ書面を置いてお歸りなされました、マア、天王寺屋さんから一巡、廻して御覧下さい。

篠崎　ハア、お客といふのは大鹽だつたか？……私も暫く逢はんが、噂によると、近頃は學問を鼻にかけて、高慢に成り切つて居るといふ事だ、それが日頃、縁もゆかりもない御當家へ尋ねて來るといふのは可笑いな……別に、樣子に變な處は見えませなんだか？

善右衛門　イヤ、然うした御樣子は更に見えません、大鹽先生の名はかねてから聞いて居ましたが、御目にかゝりますと、矢張その名に負かぬ有德の御人で、今日飢饉に苦んで居る民百姓の氣の毒な境涯を、我身の事のやうに氣にかけて居られる御樣子が傍で見る目にもお傷はしい程で、聞いて居る私の胸までがつい熱くなりました、その御書面の第一ヶ條は、町人としてはチト困る旨を私がキッパリ申しましたら、ではその第二ヶ條を何卒承知してくれとの御依頼でした、私は此の場合、相當の金を投げ出す腹を定めました、皆さま、如何でございませう？

天王寺屋　（頷いて）成る程、一通りこの書面を見ても尤もの次第でございますな、大鹽様が家祿まで抵當にすると云はれるのは感心いたします、貴方が御出しなさる腹なら、私も及ばずながら、工面いたして見ませう。

加島屋　往來は一筋隔つて居ても、隣同士の天王寺屋さんが御出金なさるのに、私が默つて引込んで居るのは世間體にもかゝりますから、無論相當の出金はいたしますが、併し鴻ノ池さん、御富家では如何程御奮發なされますか？

善右衞門　左様でございます。先刻、番頭等とも一寸と相談しましたが、何しろ昨今、貧民の困窮は目も當てられぬ様子ださうに聞きますから、私共は少くとも五千兩は投げ出す決心で居ります、併し皆様がそれ以上御出金なさるおつもりなら、私共も決して吝みはしませぬ、七千でも八千でも場合に依ては一萬兩でも御附合いたします。

天王寺屋　へヱ、一萬兩でも？……是は目の子算用でもゆきませんから何しろ、チョッと十露盤を拝借しませうか？

（丁稚長松が算盤を取りに行く。）

加島屋　天王寺屋さんが一萬兩、御奮發なさるなら私も劣けては居られませんな。

內田屋　私も出來る丈の工面はしたいと思ひます。

天王寺屋　マア待つて下さい。（とパチ〳〵算盤をはじく、加島屋、內田屋もそこへ寄つて、算盤の珠を鳴らしながら相談する）

善右衞門　金高は兎に角、早速、皆様が快く御同意下さつたので、私も頼まれ甲斐があると申す者で有難うございます、この調子で、三井、炭彥、辰見屋その他の方々に說いて廻りましたら、六萬兩位の金は容易に纏まりが附きませう、大鹽先生は素より、篠崎先生までも御悅び下さるでございませうな……オヤ、大米屋さん、貴方は默つて何か思案なさつてお在のやうだが、此の出金の一條に無論、御同意は下さるでせうな？

大米屋　（冷淡に）イヤ、實はその書面も讀んで見ました、皆様が御奮發の様子も先刻から聞いては居ますが、あの大鹽といふ先生は、何んでも狂人だといふではありませんか、兎に角、奉行所での評判は至つて善くありませんぜ、一體窮民に施をするなどといふのは、これは御城代様か町奉行のなさるべき事で、大鹽様が名高い儒者だと云うても、高が組與力衆の御隱居だ？　その上、與力衆や同心衆の知行を抵當に取るといふやうな馬鹿々々しい眞似が本氣で出來ますもんか？　これは大鹽様が町奉行所で叱り附けられたので、癇癪を起して、意地になつて此方へ駈け込んだものと見えます、此方こそとんだ迷惑

た話、これが旨く行けば、大鹽様は空ツ手で、唯漸け歩いて名聞を賣られる譯だが、お互はその爲めに腹を痛めてお金を吐出さんければなりませんぜ、チト割が惡いぢやありませんかな。

篠崎　（頷いて）フム、賣名の爲めか？……大鹽といふ男は、それ位な事はやりかねないて。

大米屋　（調子に乘つて）それにも一つ、私が心配でなりませんのは、今日の時節柄、公儀からいつ何時、御用金を仰付られるか知れませんでな、與力の隱居の依頼で五千兩とか一萬兩とかの大金を用立てゝ置いたら、若し御奉行から五萬、十萬の御用金を仰付かつても否とは申せますまい、尤も一揆騷かなど起つて店を毀して廻られてはこれも災難だから、僅かの金位出した方が結局得分に附きませう、それは又仲間内で相談してもよございまさア、一體、厄介なのは虱と貧乏人でこれは何時の世にでも附いて廻りますよ、畢竟意氣地なしの、働きもなければ、智慧才覺もない、辛抱氣もない、何もない奴が、一生うだつが上らんで貧乏して居るのだから自業自得、誰を怨まう樣もありませんや、お互樣は幸と、智慧も授かる、福運も授かつて産れて來た上に根氣よく辛抱しつゞけたお庇で、今日の身上を作つたんだから、天災や飢饉位には屁古垂れません、イヤさうした時にも拔目なく働いて、却つて金儲の出來る腕を持つて居ますから人間の型が一體違つてゐますよ、何アに人種は盡きぬから、餓死する奴は勝手に餓死したつて構ふ事はありませんや。

篠崎　コレは大分お手酷しいな……併しあの大鹽の唱へてゐる陽明學といふのは、履き違へると危險な學問でな、私等から見ると兎角邪道に入り易いものだて、一體、儒者の本分は、世俗の日常の事に關係すべきではない、唯、千古不易の道を傍目もふらずに講究して行けば、自ら聖賢の志が分つて來るものだ、根氣よく落ちて居れば雨だれが大磐石に穴をあける、これを氣忙はしく血眼になつて、握拳で叩き廻つた處で徒らに手が傷く許りで、愚かな事さハヽヽヽヽ。

天王寺屋　成る程……大米屋さんの御説も、篠崎先生のお話もコリヤ一理ありますな。

加島屋　その邊の事には一向、心附きませんでした。

善右衛門　（小首を捻つて）さう仰れば左樣した理由もありますな……併し、今更大鹽先生へ膠なく御斷りする事も出來ませんし……何うも困りましたな。

大米屋　それでも皆樣が、強つて御出金なさるお覺悟なら、私一人、仲間を外づれるとは申しませんが、兎に角、一應此の事を内々で御奉行の跡部樣へ御伺ひ申して、隨意にしろと仰つたら大鹽樣の顔を立てゝ上げる事にしては何

うでございませうな?

篠崎　兎に角、大事を取るが善いでせうな。

善右衞門（頷いて）では矢つ張、お奉行所へ内々伺うてからの事としませう?その方が安心でございますな。

天王寺屋　その上の事としませう……それに限ります。

加島屋始め一同　然うしませう。私も同意します。

善右衞門　ではそれと定めませう。

（忽ち次の室に、女のワツと泣出す聲、善右衞門、驚いて襖をあけるとお利江は座敷へ泣倒れる。）

お利江　お父樣……お父樣……あんまり酷い……あんまり酷い……私、何うしませう、何うしませう。（ヒステリカルにワーツと叫ぶ）

第　三　幕

大鹽家書齋

床の間に王陽明の書像、その左右は書棚、和漢の書物が一ぱいに積んである、前は廻り緣、下手の廊下を隔てゝ一棟の土藏の扉が見えてゐる、庭には松の古木の幹が立ち、寒椿の赤い花が咲いてゐる、上手に泉水の一部、下手の向ふは黑板塀を廻らせて、そこに裏門がある、塀越しに、隣の建國寺の東照廟の屋根が見える。

○

大鹽平八郎が先に立ち、次いで妾おゆう、格之助の妻おみねは宮詣りの産衣を着せた赤兒の弓太郎を抱いて入つて來る、平八郎は書像の前に置かれた屠蘇の酒瓶を三寶に載せたまゝ自分で持つて來て、そこに据ゑる。

大鹽　フム、天滿宮もそんなに寂びれて居るか?　然うだらうな、でも宮詣りは赤兒の身祝ひだからな、それに今日の七草が、弓太郎の三十三夜に當るのも、まづ／＼目出度い、……（嬉しさうに赤兒の顏をのぞき込んで）ハヽ、金時のやうな顏をして居るな、……私は實子を持たなかつたが、おみねの手柄で格之助には實子が生れたから私には實の孫が出來たも同前だ、とう／＼祖父さまになつた。

おゆう（笑顏で）お庇で、私も祖母さまに成りましたホヽ、。

大鹽（おゆうの顏を見て）イヤ、祖母さまといふより、つく／＼見ると汝はお婆婆になつたな、隨分皺が寄つたぞ。

おゆう（忌な顏をして）女は老け易うございますから……でもさう仰る旦那樣も、お歲が寄りましたよ。

大鹽（苦笑）私は人と違うて、心に歲は老らぬからの。

おみね（笑つて）ホヽヽ、お父樣の御戲談を聞くのは

珍らしうございます。

大鹽　孫の顏を見ると、私までつい陽氣になるらしい。（又しても赤兒の顏を覗き込んで）何卒この弓太郎まで王陽明先生のやうに、聖賢にして豪傑の士にあやからせたい、訓詁註釋で碎い一生を空しく了る文字の儒には構へてなるなよ、仁義を辨へんで唯氣を負ふ市井の游侠の徒に伍してもならぬ、この祖父の志が若し半ばで遂せられなかつたら、孫の汝がそれを受繼いで仕遂げてくれい、大鹽の先祖今川家の家名を揚る事を忘れてくれるな、おゆう、サア酌げ。（屠蘇の盃を受けて）弓太郎にも戴かせてやる。（赤兒の口に當てる眞似する）ハヽヽヽヽ、眼をキヨト〳〵させてゐる、可愛いもんだな……無邪氣なもんだな……赤子の心とは善く云つたものだハヽヽヽ。

おゆう　眞實に無邪氣なものでございます、神樣のやうなものでございます、口元は格之助さんそつくりだが、眼元や鼻筋は祖父さまに肖てゐるやうに見えますから不思議ではございませんか？　ホホホヽヽヽアラ、笑つて居ますよ、初笑をしました、……バア、バア、バア、ホヽヽヽヽヽ。

大鹽　ウム笑つたか？…………お祖父さまに肖て居ても些つとも不思議ではないよ、それが當り前だ、胎教といふことがある、みねが懷胎中、私が折々聖賢の人と成りを話して聞かせたり、講堂での講義を襖越しにでも聞くやうに云ひ附けたのもその爲めだ、……オヽ、汝等もお屠蘇を飮め。

おみね　ハイ、難有うございます……お父上があゝ仰り附けて居られましたから、分らぬながら、私さへまあれば本を讀みまして、臺所の仕事などお母樣にいろ〳〵御忙がしい目を見せました……それでも、お父樣のお講義の私に吞込めません處は、後でお母樣に聽くと、よく解るやうに敎へて下さつたりして、私も大きう嬉しうございました、お母樣も立派な學者でゐらつしやいます。

おゆう　ホヽヽヽヽ、とんだ所でお世辭を云ひます事、でも門前の小僧、習はずして經を讀むで、馬鹿には出來ますまい。

大鹽　（笑顏で）習はずおやない、私が日頃、やかましく云うて敎へてやつても、おゆうはあまり覺えがよくなかつたのだ、おみねの方がまだ見込がある。

おゆう　アラおみねさんの屠許りお持ちなさる、弓太郎を產んだお手柄で、おみねさんはスツカリ、旦那樣のお氣に入つて了ひました……子を產まんのは矢張、女の一生の損だ……でも可愛いもの、一寸私に貸して御覽……私にも可愛い孫だもの。（と抱き取る）

大鹽　おゆうも一つ、屠蘇を飮め、今日は弓太郎の身祝ひ

だ。
おみね　母樣お酌をしませう……まだ尿は出て居ませんか知ら。
おゆう　大丈夫……赤い顔をして、まる／＼肥つて……眞の少し酌いで下さい。
大鹽　ドレ、こん度は祖父さまが一寸と抱いてやらう……おゆう、こちらへ貸せ。
おゆう　いつものやうに、不恰好にお抱きなさると、折角機嫌の善い兒が泣き出すかも知れませぬ。
大鹽　何に、この頃は汝よりか私の方が抱き上手になつた……此方へ貸せ……貸せといふに。
おゆう　大きな聲をなさるから、むつかり出しました。
大鹽　（優しく）サア來い、來た……イヤ、泣くなやアない、善い子、善い子、泣きはせぬな……ホーラ高い、高い……ホーラ高い、高い……見い、笑ひ出した……笑つて居るハ、、、、、、。
おゆう　矢ツ張、男の子は腕白だから喜んで居ますよ……おみねさんも一つ戴きなさい。
大鹽　オヽ、酌いでやれ。
おみね　有難うございます……もう澤山、醉うて了ひますから……善い事、坊は祖父さまに抱いて戴いて……。
おゆう　お孫さんの產れたおかげで、この家には春風が吹きます、お祖父さまのアヽして嬉しさうな笑顔をなさるのは、これまで何年もお傍に居た私がつひぞ見ない事だもの、弓太郎さんは天から授つた寶物と云うても善い。
大鹽　（あやしながら）ウム、天から授かつた寶物に相違ないよ……何物にも替へ難き活き寶だ……斯うして、皆で揃うて、弓太郎の無事に育つて行くのさへ見て居れば、他には慾も得もなくなる、大鹽一家は幸福だな……眞實に幸福だ……
おゆう　幸福だと仰つて、泣いてゐらつしやるではございませんか？　ソレ御覽なさい、あまり酷くお抱きなさるから、坊が泣き出しました……善い子、善い子、今度は、お乳でなければいけますまい。
大鹽　オヽ、お乳をやつてくれ……こん度は手に合ひさうもない。
おみね　サア、お母さまが抱いてやりませう。
大鹽　乳房へ吸付くとすぐ泣止めた、現金な奴だハヽ、、ハ。

（おゆうおみねも笑ひ出す、次いで一寸と沈默。）

（泉水の鯉が跳ね上つて、地上に轉び出る。）

おみね　ア、鯉が跳び出しました……跳ねて居ります、水が腐りかけたのでせうか？
おゆう　成程……可哀さうに……（起ちかゝる）

大鹽 （興を損じたやうに） 打やつておけ、打やつておけ、……折角、一家團欒して幸福に醉うて居るのに、氣の利かない奴だ、（興を醒さうとする。

おゆう でも打やつておけば、死ませう。

大鹽 苦しさうに悶えて居る……矢ッ張見殺しには出來ぬ（庭へ下りて、魚を泉水に放つ）……生き返つたと思うて、嬉しげに狂ひ廻つてゐる、……（足重げに、座に歸る、腕叉いて考へ込む）

おゆう 急にお沈みなさつて… 何うかなされきしたか？

大鹽 （沈鬱に） イヤ、人間といふものはとかく勝手なものだ、自分等が少し許り幸福だと、他人の不幸なんかは忘れてゐる、イヤ、他人が不幸だとそれに見くらべてまで自分等の幸福を一倍大きく思ひたがる、淺ましい事……。

おゆう 鶴ノ池樣からの、はつきりした返答はまだ來ませんでございませう？

大鹽 今日は來る筈だ……何分纏つた金高だから……大節季前には話が附きかねると云うて來たので、折返して催促した揚句、埒の取れぬ日までに確かりした返答をする事になつて居る……今日は何とか云うて來るだらう……大抵善い返答をしてくれる事と思ふが、聞くまでは氣かかりだ、あれで鶴ノ池の主人は存外分つた男子らしいから、萬更寢打返りはしまいと信じて居るが……兎に角返答の延びたのはチト訝しい。（考へ込む）

おゆう 當家を始め、皆樣の知行を抵當に入れるといふ事でございませう、……抵當まであるのにマサカ否と云へた義理ではございますまい、……尤も先方では、お金を出すにしても、微祿な與力同心等から抵當を取るとまでは云ひ惡いかも知れませんが……。

大鹽 （不興げに） 汝は私等が知行を抵當にすると云ふのを唯目先丈の、體の善い云ひ草のやうに思つて居るのか？……何んだか私の耳にはさう聞える。

おゆう アラマア、……決してさうしたつもりで申したのではございません……唯、大勢の方々の中には、先生が仰るので忌とも云へず、義理づき合ひの方はないか知らと思つては見ましたが、何しろかけ替のない知行の事でございますから。

大鹽 （叱るやうに） 洗心洞の門下にはそんな言と行と表裏したものは唯の一人も居らん筈だ……イヤ、知行の抵當を氣にかけてゐるのは、汝位だらう、汝は慥かに然うらしい。

おみね （ハラ／＼して） あの、弓太郎がむづかり出しました……祖父さまにあやして戴きませうか？

おゆう （涙ぐんだ聲） 私は知行の事なんか何んとも思つちや居ませんが、唯弓太郎の行末の事を案じて居る許り

でございます。

大鹽　(ため息を吐いて)……弓太郎は心から可愛い……併し、そのために天下萬民の苦しみを忘れてはならぬ……それでは私は聖賢の道に背く……良知の學に聾になるのだ……三十有餘年の長い修養をして、今更凡愚の情には返られぬ……オヽ、三年前に吟じた詩がある、あれを汝等に讀んで聞かさう自分の心にも聞かせてやる……(几の抽函から一冊の詩稿を取り出して、繰りひろげる)オヽ、これだ、これだ……

新衣着得祝新年　羹餅味濃易下咽

忽思城中多菜色　一身温飽耻于天

……一身温飽耻于天……大鹽一家の幸福に耽り溺れるのは、天に耻づかしい……天に耻づかしい。(瞑目する)

(おゆうも、おみねも沈默する)

大井　(廊下から)　先生、鶴ノ湊屋から使者が參りましてございます。

大鹽　(活と眼を睜いて)　然うか？　待つてゐた、座敷へ通しておけ。

大井　徳兵衛とかいふ番頭で、何んでも主人の手紙を持參したとか云うて居りました。

大鹽　(眉を顰め)　何、手紙を？……兎に角通しておけ。

大井　は、畏りました。(退場)

大鹽　(不安さうに……手紙とはチト可笑しい……マア逢つて見よう、

おみね　お祖父さまの方をパッチリした眼で見て居ます。

おゆう　アラ、マア、眞實に、ヂット見て居る。

大鹽　(弓太郎の方をチラと見たが、急にむづかしい顔をして、何んな返答か知ら？……(首を傾けながら入つて行く)

(土藏裏の方から、鋸の響、鎚の音などが騷々しく響いて來る)

おゆう　もう午後の仕事が始まつたさうだ……昨日までに本砲が三挺許り出來上つたさうなが、丁打をなさるのは何日頃か、まだ日は定まらんのか知ら？　おみねさんは格之助さんからなにか聞きましたか？

おみね　否え、格之助さまは、何んにも私には仰りません、唯この春、堺の七堂ヶ濱で丁打の稽古をする仕度だと云ふ事丈は聞かせて下さりましたが……。

おゆう　(不安さうな顔色)　何んでも棒火矢だの、焙烙玉だの、いろんな物が出來るのださうだが、お正月も休み無しで、毎日、毎日、あのやうな細工物の音許り聞いて居ると、氣が變になつて來さうなの……そは／＼して、落付いて居られんやうな心持がして……

おみね　丁打の稽古があるのなら何卒一日も早く濟んでく

れた方がようございます、眞實に、あの騒々しい音が聞えると、人の家だか、我が家だか分らなくなりますもの……又、乳首に吸ひ附きました……チト眠れば善うございますが……。

大鹽　（焼け残る、憤激の色、眼付の凄ましい、擲げたまゝ手にした手紙を又讀み返して、ズタ／＼に引裂く）素町人め……人を欺きよつた：　イヤ天をも欺かうとする憎い奴…　今に思ひ知らせてやる。（體中が慄へてゐる）

おゆう　（氣遣はしげに）　何んな返事でございましたか？

大鹽　（吐き出すやうに）　今日まで引張つて置いて、支障の儀があつて斷るとは、よくも云へたもんだ……恥不知……情不知……汝、このまゝで濟むと思ふか？　天罰を恐れんか？

おゆう　では斷つて參りましたのか？……（おみねと顏を見合せてゐる）

大鹽　（空を睨んで）…　巧言令色仁鮮しとはこれだ、口先では人間並に氣の毒がつた事を云うて、腹では赤い舌を出して居る、さて／＼金持の遊民共は利慾に渇く、外に義理も人情も知らぬ……彼等は人間の面を被つた利慾の蛆蟲だ、同胞が眼前で餓死して、バタ／＼仆れて居るのをよくも見ぬ振して、こんなしら／＼しい口が利けたもんだ……こんな返事が書けたものだ：　誰の前にも下げぬ頭を、彼奴等の前に下げに行つたかと思ふと、それ一つでも殘念で堪らぬ……汝ッ、これで門をされる中甞たと思ふと、了見が違ふぞッ。（次第に聲高になる）

おゆう　（宥めるやうに）　マア、貴方…　旦那樣、何卒落着いてお考へ遊ばせ、御一徹な氣象でゐらつしやるから、御立腹は御尤でございますが、かうした時に、いつもの靜坐をなさるがよろしうございませう。

おみね　（眼を瞬いて）　唯つた今、あんなに幸福だと仰つて喜んでゐらつしやつたのに、……お父樣、マア氣を落着けて、よく御思案なさつて下さいませ。

大鹽　（うるさげに）　彼方へ行け…　皆下つて居れッ。

おゆう　ハイ……何卒マアゆつくり御思案なさつて。

大鹽　（一喝）　うるさい……早く彼方へ行け……みねも一緒に。

おゆう　（媚びるやうに）　弓太郎は莞爾々々して居りますよ。

おみね　お祖父さまに一寸と顏を見せて載きませう。

大鹽　エ、うるさい、下れといふに。

（二人はおど／＼して退場。）

（大鹽沈默して暫く考へ込んでゐる、折々嵐のやうなため息を吐く、鍋の響、鎚の音がしきりに聞えてゐる、嗾られるやうに起上つて、庭へ下り、土藏の裏手の方

（近寄る。）

大鹽　木砲は三挺出來たと云つたな？

作兵衞　（姿は見えず）へイ、今、こゝに四挺目に取かゝりましたのや、矢張百匁銃でおましたな？

大鹽　然うだ、模樣變はすまい、百匁の銃口にしておいてくれ。

作兵衞　（土藏の後ろから出て來る）旦那樣、火矢は皆三尺の長さに切つて善うおますかいな？

大鹽　（頷いて）ア、然うしといてくれ、何本位切れたか？

作兵衞　もう百本許り出來とります、丁打のお稽古は、來月の末頃といふことでおましたな？

大鹽　大抵その頃になるだらう……支度丈は、成るべく急いでおいてくれ。

作兵衞　へエ、よう心得ております、皆、精出してやつとりますさかい、早う仕上りまへう、何しろこの頃は、他へ行つても仕事がありまへんで、斯うして此方樣で使うて下さるのを皆難有がりましてな一生懸命になつとりますんや。

大鹽　（沈欝な表情）然うか……然うだらう……マア、よろしく頼んだぞ……。

大井　（廊下から）先生、小泉、瀬田、庄司、近藤の諸君がお揃ひで見えました。

大鹽　然うか……こちらへ通せ。

大井　はつ　（退場）

（大鹽は座に戻り、瞑目端坐して待つてゐる。）

（四人入來つて一禮。）

大鹽　これはお揃ひだな。

小泉　は……返答が來たさうでございますな。

大鹽　來るには來た。

小泉　唯今、大井君に聞きましたが、斷り狀ださうでございますな、不義とも不仁とも、沙汰の限りでございます。

瀬田　（興奮した口調で）最早斯うなつては、他に取るべき途はございませぬ、實は、町人等の斷り狀も矢張り奉行の内々の指圖だといふ事が知れました、小人は小人でもこれ程情ない、無法な男とまでは思はなかつたが、内幕を探れば探る程言語道斷でございます、委細は庄司君が善く聞いて來ました。

庄司　（熱した口調）實は先生、この一兩日前、鴻の池屋始め船場の連中から、奉行所へ内々の伺ひを出して居るといふ事がふと耳へ入つたので、探りを入れて見ますと、それは舊冬、先生から御依頼になつた例の金策の一件に就いて、奉行の内意を聞きに出たのだといふ事が分りました、處が奉行はかねて先生の名聲を嫉んで居ますし、この上、先生の一手で金策が出來て窮民救助が見事に行

はれたら、自分の鼻を明かされるのだと女の腐つたやうな狹い了見から一圖に癖んで居るのでございませう、高か與力の隱居に……確か然う云つたさうでございます……與力の隱居に、それ程の大金を貸す程なら後日公儀から御用金を申附つた時に、毛頭、否とは云はさぬぞと、頭から町人共を威し附けたので町人共は慄へ上つたさうでございます、斷り狀を寄越したのはその爲めだと思ひますが、他の事とは違つてこの非常の場合、折角町人共が忌々ながら義理に詰つて財布の口をあけかけたのに、當路の役人が横合から邪魔を入れるとは何んといふ逆事でございませう？　イヤこれでは宛で役人の手で、窮民の咽を締めてゐるも同前だ、あゝした道も理も知らん者の下に、最早一日も立つては居られません……御奉公は出來ませぬ。

近藤　町人等の中でも大米屋平右衛門といふ男が日頃、奉行に執入つて居りましたので、今度もその男の入智慧で、伺ひを出したといふ事まで分つて居ます、町人等も誠心といふものを微塵も持つて居るのではございませぬ、窮民の慘狀は日に增し酷くなつて來ますし、疫病まで流行り出しました、もう坐つて見ては居られませぬ、この上は萬事、先生のお指圖を待ちます。

大鹽　（呻くやうに）　ウム……然うか？　……然うだつたか？　イヤ、それで萬事吞込めた……權勢に媚び諂ふ素町人輩も憎いが、權勢を弄して天理に悖く事を恐れぬ奉行も憎い……（沈痛な調子で）　この世には、曲つた政道を正しくする天道は無いと思つて居るのか？　人慾が縱まゝに蔓つて、天理は何時迄も昏まされたまゝであるものと侮つて居るのか？

大井　（熱狂的に）　先生、我々は皆、先生の御指圖を待つて居ります……道の爲めに一命を先生に捧げます

瀨田　（強い語氣で）　先生の日常の御教を私共は身命にかけて實行する覺悟でございます、今日の場合民を救ひ、世を警める手段はこれより外にございますまい。（と刀の柄をたゝく）

庄司　（熱した顏色で）　我々は皆、同心一體になつて居ます、イヤ、今日迄、先生の知行合一の御教へが、この胸と血と一緒に高い動悸を打つてゐない事はございませぬ、……實はまだ申遺しましたが、東組の與力同心を西組へ組替へになるのも、近々だといふ噂も立つて居ります、高井山城守樣以來の舊慣故例も一切廢止になつて、何も彼も改革ださうでございます、さうした恥辱一つでも私等はこのまゝおめ〳〵と生きては居られませぬ。

小泉　あの典例（しきたり）も、大體は皆、先生が作つて置いて下さつたのだ、それを理由（わけ）もなく一々ひつくり返さうとは何處

までも意地の悪い、物の分らぬ仕打ではございませんか？ 私共はそれ丈でもこの儘御奉公する氣は無くなつて居ます。

大鹽 (腸の底から出るやうな長い太息を吐いて) フーム……あの男ならそれ位な事はやるだらう……諸君の心底は察して居る……それを一つ聞いた丈でも、私の胸が煮えかへるやうだ……。

瀬田 (少し落着いた態度で) 勿論組替やら、改革沙汰やらの不平は、云はゞ我々の私事とでも云へませう、唯天下の窮民を救ふ爲めに此の際潔く一命を捨てゝかゝるのが、聖賢の道を學んだ我々の義務かと思ひますが先生如何でございませう？

小泉 先生、何卒御指圖をなすつて下さい……それともまだ他に何か御考へがございますか？

大井 (血氣に燃えて) 先生……刀鋸前に在り、鼎鑊後に在るも我々は恐れて尻込するやうな腰抜ではございませんぞ……何んとか仰つて下さい。

大鹽 (苦悶に滿ちた顏色で、下唇を噛んで、目を瞑つてヂッと考へてゐたが、ホッと息苦しげに) 唯つた一つ、まだ取るべき途があつた……素町人が……イヤ、遊民等が財寶を蓄んで居るのを罵りながら、私はまだ私の財寶を蓄んで居た……思切つて藏書一切を賣拂うて了はう、五萬卷の藏書を賣拂つたら五六百金は出來る、それを窮民に施して世間の眠つてゐる義勇の心を醒まして見よう……奉行への面當にもなる。

庄司 藏書一切を……(小首を傾け) 儒者には魂のやうに大切な聖賢の書物一切を御賣拂なさつて、それから後は何うなさる御覺悟でございますか？

大鹽 (凛とした口調で) 後は兎も角も、聖賢の書物は民の苦めるもの、惱めるものを救へと教へて居る、今私の心は……良知は、聖賢の書を讀破つてその教を實行せいと教へて居る……こゝらの書物は皆讀んで了つて、心の糧にしたのだから、いつまでもそれを積んで置くのは守錢奴が金庫の番をして居るのも同前だ……大井、御苦勞だが早速、河内屋喜兵衛の店へ行つて、藏書を賣る事にしたから即刻來てくれるやうに云つてくれ。

大井 (拍子拔のした態で) へエ……では、藏書を皆御賣拂ひなさるのでございますか？

大鹽 然うだ……早速行つて來い……主人に直ぐ來てくれるやうに云つてくれ……。

大井 へエ……畏りました。(退場)

瀬田 先生、失禮ながら、書物を賣拂つて施をなさつた處で、焼石に水で、唯の御氣安めにしかならんではございませんか？

庄司　私にも先生の御本心が分らない……マサカ藏書を無くして山林へ隱遁なさる御覺悟でもありますまいな、……生を求めて仁を害する勿れといふ御教へは、何ういふ意味でございましたでせう？

大鹽　（熱苦しいため息）私には勿論、諸君の心底はよく分つて居る、私と生死を共にして悔いない深い決心が諸君の顏に現はれて居る、私に嬉しいとも、悲しいとも何んとも云へない氣持だ、實は私の身も心も烈火で燒かれてゐるやうで、今にも狂ひ出しさうだ……併し私には、可哀相だと思ふ窮民等の姿形がハッキリ見えんで、憎いと思ふあの奉行や、游民共の顏許りがマザ／＼と眼前に見え過ぎる、憎うて、憎うて、骨の髓まで憎くなる……（反省的に）これが果して私の無い大虚の憤りか？……天の雷電の怒りか？……ふと自分で自分を疑ひ出して居るのだ。

瀬田　今更、躊躇なさるとは、先生にも似合ひませぬ、惡を憎むのが大意でなくて何處に大意がございまするか？驀然に一本道を進まれる日頃の御氣象は何うなさいました？

庄司　（顏を覗くやうにしつゝ）私共が、組替への不平を口にしたのを、若しや御氣にかけられたのではございませんか？

大鹽　（凛とした調子で）イヤ、それ許りではない……實は諸君も知つて居られる通り、私は先年近江の小川村に中江藤樹先生の墓を訪うた歸り途に、琵琶湖の上で恐ろしい難船に逢つた、今にも深い淵の底に葬られるかと思つた時は、悔みもし、憂ひもして、身も心も顚倒したが、ふと、人事を盡して唯、天命を待てと良知の聲を聞いて靜坐瞑目すると、方寸の大虚は忽ち天の大虚に通じて、主一無適、我も無ければ人も無く、況して荒れ狂ふ波や吹きすさぶ風などは最早念頭から消えて了つた、人間は何時も深い淵に臨んだ氣持で生きてゐなければならんが、今一足といふ際どい所で踏留まつて、チッと考へて見る事を忘れてはならぬ、……そこで良知の聲を聞かなければならぬ。

（一同沈默する、鍔の響や、鎚の音が一きり聞える）

瀬田　ではあの、丁打の稽古の御用意は、矢ッ張唯の丁打の稽古をなさるのでございましたか？

大鹽　市中に一揆騷などの起りさうな場合、與力同心にはかねてその用意があると思つての事だ。

庄司　では矢ッ張、唯それ丈の事でございましたか？

近藤　かねて先の／＼事までお考へ拔きなさる先生の事だから、これは屹度斯うした場合に御役に立てなさるのだと許り思つて居ました。

大鹽　併し、斯うまで押詰つて來ては一揆の起らぬのが寧ろ不思議だが、窮民にはもうそれ丈の氣力も無くなつたのかな？

庄司　若し窮民が一揆を起した場合には、先生は窮民をお打ちなされますか？

大鹽（苦笑）馬鹿な事を聞くものではない、武藝の稽古は武士の心掛けだ……今は唯、それ丈だ。

瀬田（不平さうに）窮民等は唯、手を拱いて死を待つ許りでございませうな……天は矢つ張、無情なものだ。

格之助（廊下先から）父上、唯今、歸りましてございます。

大鹽　オヽ、今退けたか？　諸君がお揃ひで見えてゐる……酷く血色が悪いやうだが、何うかしたか？

格之助（一同會釋）皆さま、善うこそ。（座敷へ入つて焦込んだ語氣で）イヤ、何うも怪しからん事でございます、鶴ノ池屋始め船場の町人共が奉行へ内意を伺うて、當方の申出を斷つたさうにございます、もうその使者は參りましたか？

大鹽（苦悶の色）オヽ、慥かに斷つて來た。

格之助　何んとも殘念至極でございます。……それ許りではございません、もつと怪しからんことがございます。（と膝を進める）

大鹽（眉を動かせ）何、まだ怪しからん事があるッ？

格之助（無念さうな口調）奉行は今日、私を呼付けてこんな怪しからん事を申しました、隱居の身分で、いろいろ差出がましい事をして、金持の家へ押借に出かけたりすると、最早捨置けぬ、強訴の罪を以て屹度糺明するとまで語氣荒らく申渡しました、私は殘念で殘念で胸が煮え返りました、人もあらうに父上を罪人扱ひにするとは、あまりと云へばあまりではございませんか？　その上、手先から聞けば、鶴ノ池屋は大節季前に七萬石の米を買占めたと申します、これでは宛で理も非もなく、世の中は暗黒だ、父上、もうこのまゝでは居られますまい、皆樣は何う思はれますか？

大鹽（聞く中に、滿面朱を濺ぎ、體中怒に慄へて一喝）もうこの上は堪忍ならぬ……私を強訴の罪に落さうとする位だから、窮民などは塵芥とも思つて居らんのだ、かゝる奴輩に天罰を加へんければ、天を恐れるものは一人も無くならう。

格之助　私の心は素より父上の心と一つでございます、理も非も知らぬ彼等と倶に天を戴いては居られませぬ。

大鹽　奸吏も奸吏だが、游民も游民だ、頭の抑へ手が無ければこの上、利慾に渇いて何んな無法を働くか知れぬ、この腐れ切つた世の中は一度打碎いて、烈火にかけて鑄

直さねばならんのだ……。

格之助　御尤も至極でございます。

大鹽　……小人國を治れば菑害並び到るとは正にこれだ、……畢竟、京都の天子の德を尊び奉るのが王道の源である事を忘れて、江戸の將軍家の權勢に媚び諂ふ覇道が世を誤つてゐるから、門閥格式一つで奸佞邪智の徒が上に立ち、德あり、才あつても布衣の人は下に虐げられる、……お互も窮民だつた……よし、この覇道を滅して王道を立てる爲めに一身一家を抛たう、諸君の生命を貰はう、今こそ一足踏出さずには居られぬ……心大虛に歸すれば非常の事も亦道である。

庄司　（勇氣づいて）先生、では御決心が附きましたか？
一命は勿論、抛げ出して居ります。

小泉　これで、私もホッとしました。

瀬田　先生が一度、蹶起なさつたら、時も時だ、近畿は瞬く間に靡きませう。

大鹽　（沈痛な調子で）最早成敗利鈍は云つて居られぬ、……束の間に滅ぶ生命を惜んで、萬古不滅の仁を害してはならんのだ、……諸君も素より一命を惜まぬ覺悟であらうが、それ許りではない、一族滅ぶとも決して悔いられはすまいな？

格之助　今更、その御念には及びますまい、それは却つて諸君を辱かしめるやうなものでございます。

大鹽　（頷いて）よし、では血をすゝつて誓はう……彼方の座敷へ。（猶然刀を取つて起上る、一同蹤いて行く）

大井　（河内屋喜兵衛を連れて歸り來る）先生……先生……河内屋喜兵衛さんが參りましてございます……先生は何處へ行かれたか知ら？

河内屋　（五十左右の世慣れた男）先生、今日は……ナ、御書齋にはゐらつしやりませんな？

大井　イヤ、塾の方へ行かれたかも知れぬ、一寸と行つて見て來るから、暫く待つてゐてくれ給へ。（行きかける）

格之助　（出で來る）河喜さんが見えたか？……それは何うも御苦勞さま、大井君も御足勞だつたな。

大井　先生は彼方にゐらつしやいますか？

格之助　一寸來客と御用談中だ……委細は私が父上から云ひ附かつて來て居る、書籍を調べた目錄は貴公も見られた筈だが。（と、手にした目錄を渡し……）すべて六萬卷ある、去年は、五百兩で引取るといふ話だつたな、その後一層の不景氣で、價値も又下つたか知らんが、餘儀ない仔細で、父上が折角御祕藏のものを賣拂はれるのだから、貴公もそこを酌んで、前の云ひ價で引取つて貰へば父上もお喜びだらうが、何うだらう？

河内屋　へイ、もう委細心得て居ります、打あけた事を申

上ますと、この不景氣で、書物などはもう二束三文で、馬鹿々々しいお値段でございますが、外ならぬ此方樣の事でございますから、五百兩で戴いて置きます。

格之助　それは何うも有難う……では大井君、河喜さんに立會つて上げてくれ給へ、そこの一切經の入つた土藏の鍵はこゝにある筈だ。（卓の抽函から、鍵を拾ひ上げて、大井に手渡する）講堂の方に積んであるのも、この書齋にあるのも、一切渡すんだ……河喜さんは車力でも持つて來ましたか？

河内屋　ヘイ、實は大八車を三臺、お裏門の方へ廻して、人夫に待つて居るやうに云ひ附けてあります……若し殘つたら、又明日でも改めに出ますが、旦那樣恐れ入りますが、あのお裏門をお明け下さいますまいか？

格之助　ア、大井君、明けて上げてくれ給へ、……鍵は家内が持つて居ませう、それから岩城にも手傳ふやうに、萬事、差圖を頼みます。

大井　は、承知しました。（鍵を取りに行つてそれから裏門をあける、立ン坊のやうな人夫が三四人入つて來る）

人夫甲、乙、丙　今日は……、ヘイ、今日は……。

河内屋　（格之助に）では一寸御免蒙ります……オイ、汝等、この御倉庫の中の本箱を皆持出して、車へ積んでくれ……大井君、お倉庫へ御案内を願ひます。

大井　さア、此方へ來給へ……。（土藏の扉をガラ／＼と明けて、二人で先へ入る、中で函數を讀む聲が聞えて來る、人夫等はそこから本箱を擔ぎ出して、しきりに裏門を出入する）

おゆう　（出て來る、小聲で）　格之助さん、では愈々書物を皆賣拂ひなさるの？

格之助　左樣でございます、思切つて河喜さんへ賣拂ふ事になさいました。

おゆう　……折角永年かゝつて、苦心してお集めなさつたんだに……先生の身になつたら、親兄弟に別れるより、辛い事かも知れません。

（人夫等の本箱を運び出すのを見て、眼を拭いてゐる。）

格之助　イヤ、父上も今日までは手放しなさるのが辛かつたやうで、いろ／＼お迷ひなさつた樣だが、一旦賣拂ふとお決めなされたら、思切りはよございますよ。

おゆう　でも學者が祕藏の書物を賣拂ふのは、武士が刀を捨るやうなものではありませんか？　先生が自分で出てゐらつしやらないで貴方を代理に立たせなさつたのは、御自分では見て居られないからではありますまいか？　さう思ふと、私はこの胸が痛くなる。

格之助　イヤ、父上は今、大切な御用談があつて、手が引

かれませんので…。

岩藏 （庭先へ現れ） ヘイ、旦那樣、何か御用で…。

格之助 オヽ岩藏か、河喜さんに、藏書一切を賣拂ふ事になつたから、あの講堂に積んである書物を運び出して、車力へ乘せて上げてくれ。

岩藏 ヘイ… あそこの書物を皆でございますか？

格之助 然うだ… 不殘だ、

岩藏 ヘイ、大變な事になりましたたな。

格之助 早くせい… 塾生に手傳はせても善い。

岩藏 ヘイ、畏りました、……だが、今日一日では片附きますまい、何しろ何萬つて本でございますから。

格之助 殘つたら又明日の事にするんだ。

（岩藏は入つて行く。）

（土藏の中から、人夫等はしきりに木箱を擔ぎ出してゐる、河内屋喜兵衛と大井とは、何か聲高に話合つてゐるのが聞える。）

おみね （そつと出て來る） あの御本を皆、お賣拂なさるのでございますか？

おゆう 然うださうな……何んだか此の家から魂が一つづつ拔け出して行くやうな氣がします。

格之助 （笑つて） 馬鹿を仰つちやいけません、世間の儒者は書物の中にしか、魂が無いと思つて居る輩許りだが、父上始め我々は胸に萬卷を積んで居ます、書物なんか一度讀んで了つたら魂の拔け殼だと思へば間違ひありません。

（人夫等はかけ群をなして、大きな木箱をヨイショ／＼と運び出す、岩藏等も木箱を抱へて裏門の外へ持込んで行く。）

おみね でも先刻、父上は、あの弓太郎も學者になつて、祖父さまの後を繼げと仰つてたのでございますに……斯う急に書物をお賣になるといふのは、何んだか情無うございます。（涙を拭いてゐる）

おゆう （眼尻を小擦り／＼） お父樣が、生命から二番目のものを惜氣もなく賣つてお了ひなさるのは、よく／＼の事だもの、私等も思案しなけりやなりますまいよ。

おみね 眞實に然うでございますとも。

（この間も木箱はしきりに運び出されて居る。）

大鹽 格之助……格之助（呼びつゝ出て來る）… オヽ相談は調つたと見えるの、河喜は？ ウム、倉庫の中か？ こゝは善いから、汝は彼方へ行つて居てくれ。

格之助 は、では御免を。（入る）

（おゆう、おみねもそこ／＼に入る。）

（大鹽は木箱の一つ／＼裏門の外へ持出されるのを、ザツと見て緣先へ立つてゐる。）

若藏　（庭先から）先生、平山助次郎さまがお見えになりました。
大鹽　然うか、恰度善い處だつた、こちらへ通せ。
若藏　ヘイ、……ではお庭口から廻つて戴きませうか。
大鹽　（頷づく）フム……然うしてくれ。
平山　（そこへ出て來る）先生、今日は……御本を御賣拂ださうにございますな、長年の御苦心も水の泡になりました……これもあの某町人等の貪慾のお庇でございますな。
大鹽　（憂鬱に笑つて）イヤ、水の泡ではない、これが窮民の命の糧になるのだと思へば、決して惜むには足らぬ、却つて聖賢の心を滿足させるに違ひない……彼方の奥の座敷に格之助が居る、其の他の諸君も集つて居る、君にも是非相談したい事がある、彼處へ行つて下さい、私は後から行く。
平山　左様でございますか？　では失禮します。（と通る）
（大鹽はやがて書齋の書棚に積んだ書物を片つ端から緣先へ投げ出し始める。）
河内屋　（出て來て）先生、今日は……御本を頂戴して參る事にいたしました。
大鹽　ア、いろ／＼御心配かけて忝い……こゝの書物も皆緣へ出して置く、一度に片附けて了つたらサツパリするからな、こゝには別に大した珍本はない、サア大極圖説……程子語錄……易傳・宋志・通鑑綱目……陸象山全集……王陽明全集……この傳習錄は長年私の手澤のついたものだ。（パラ／＼とくりひろげて見て）誰か心讀する者の手に渡つて欲しい……ア、日本外史……これは山陽が贈つてくれたのだ。（懐しさうに繙いて見る）
河内屋　ヘエ、山陽先生から、先生へ御寄贈なされたのでございますか？
大鹽　フム……私の無二の知己であつたが、彼も死んだ……私も死ぬだらう……人間は否でも應でも一度は死ぬ、ハヽヽヽ。（淋しい笑ひ）
河内屋　先生、緣起でもない事を仰います。
大鹽　イヤ、私は胸の病で二度も三度も死損れたのだから、今頃、生きて居るのが不思議な位なもんだ……でもこれ丈は友人の紀念に殘して置かうか？……イヤ、この期になつて未練がましい、皆河内屋さんに引取つて貰はう。
河内屋　イヤ、先生の御入用の書物なら、御遠慮には及びませぬ。
大鹽　イヤ、賣拂ふ以上は、一切引取つて貰はう……一物も私しては相濟まぬ。
河内屋　私の方では一向構ひませぬから、何卒善いやうになさつて下さいませ……エ、、失禮でございますか、こ

こに五百兩持參いたしました。（財布から小判の包を取出す）

大鹽　然うか……實は、この金を大阪三郷三十三箇村の窮民に施してやりたいのだ、それで、この上御手數だが、貴公引受けて、一人一朱づつ一萬人の手に渡るやうに膽煎しては貰へまいか？　それには先づ施行の引札を配つて、本屋の會所か何處かで、それと引かへに金を渡せばよからうと思ふが、面倒ながら引受けてやつて貰へまいか？

河内屋　（感じ入つた體）　へエ、左樣でございますか？何うも恐れ入りました……よろしうございます　…引札の文案でも戴けませうか？

大鹽　何に、夫れは然るべくやつて貰へば善い、貴公にお任せする。

河内屋　へエ、畏りました、……では私も、もう百五十兩奮發いたしませう。

大鹽　（滿足さうに）　それは何うも重々、忝い。

河内屋　イヤ、もう、先生には恐れ入りました、皆が何んなに喜ぶか知れませぬ……私まで嬉しくて、涙がこぼれます。

大鹽　イヤ、私は自分の力の足らんのが、恥かしい位だ……感心されては冷汗が出るよ。

大井　（出て來る）　先生、倉庫の中は大抵片附ましてございます。

大鹽　それは御苦勞、では君は一寸あちらの座敷へ行つてくれ給へ、安田圖書が居るなら、彼も一緒に連れて行くが善い、あちらでは格之助始め、諸君が集まつて相談中だ。

大井　は……では御免蒙ります。（入る）

河内屋　何うも御苦勞さまでございました……（人夫に）汝等、こゝの書物も車へ積んでくれ、傷まぬやうに、布呂敷へ包んでな。

人夫　へイ〳〵……これも皆持つて行くんだすか？

河内屋　然うだ、皆持つて行つてくれ……では先生、私は徐々御免蒙ります、講堂の方のは、今日一日では片附ませんで、又明日でも伺ひます。

大鹽　然うか……では今のをよろしく頼んだぞ。

河内屋　へイ、委細畏りました……岩藏さん、何うもいろいろ御世話さま……では左樣なら……お裏門から歸らせて戴きます。

（人夫等を指圖しながら裏門口から出て行く、岩藏は後から門の戸を鎖す、掛け聲をして車を引出す音、車輪が重さうに軋む。）

（大鹽はその車輪の音の遠ざかるのをヂッと耳を澄ま

して聞いてゐる。)

(格之助始め一同出て來る。)

格之助　……ア、父上、書物が無くなつてガランとしましたな。(淋しげに書齋の樣子を見入る)

大鹽　オヽ、これで私も無一物だ……だがまだ妻子の累は殘つて居る、これも一と思ひに斷ち切らねばならぬ、……さう云へば皆が大抵妻子を持つて居られるな、小泉君には花のやうな許嫁があると聞いて居るが?

小泉　……まだ約束許りだから、斯うした際には結句、氣安うございます。

格之助　平山君には七十餘歳の老母が一人居られるさうでございます。

大鹽　それでも決心なされたか?

平山　(一寸と頭を下げ)　ハイ……皆さまに後れは取られませぬ、母一人、子一人で、不孝だとは思ひますが……。

瀬田　そこは辛い處だが親への不孝は小さい事だ……(大鹽の方を見て)　天道への孝行こそ大孝でございます。

庄司　私も年老つた、而も義理ある親爺持だが、致方がありません、大義親を滅する覺悟は、先生門下一同が日頃からの堅い信念でございますから。

大井　(無頓着に)　律義一遍で、馬鹿正直な家の親爺なんかチト度膽を拔いてやらなけやいけません。

大鹽　(窘めるやうに)　又しても血氣に逸つてはならぬ、血が衰へれば衰へるのは血氣だ、死んでも腐らぬ浩然の氣で、大事に當るのだといふ事を寸刻も忘れて貰ひたくない。

大井　は……それはよく心得て居ます。

庄司　我々はこれから手分をして、同志の者を說きに參ります、宮脇志摩樣は先生の御緣邊でもあり、御異存のない事とは思ひますが、充分大事は取りまする、橋本忠兵衞、白井孝右衞門の兩君は先生と一心同體だから勿論、この義擧に御加はりの事と思ひます。

瀬田　私は竹上萬太郎の處へこれから參ります。

近藤　渡邊良左衞門も勿論異存は申しますまい。

庄司　それにしても、丁打の稽古の御準備が今度の役に立つのも何んだか因緣事のやうで、幸先よく思はれます…併し御思慮の深い先生の事だから、私は矢ツ張、先生御自分の御心底では秘かに今日あるを豫期されての事のやうに考へられてなりませぬ。

大鹽　(微笑)　始めからその心があつたのではないが、武器の出來るのを見るにつけて、折々はさうした氣がムラムラと頭を持上げて來んではなかつた、で、人夫は凡て足留をして外へは出さぬ事にしてある、心が物を動かしたり物が心を動かしたりするのは此の世の常だ、書物の

賣拂もそれだ、始めはたゞ賣拂つて施す氣であつたが、今はその施しが人氣を集める軍略の一つにもなつて來た、イヤ、今に市中に騷動が起ると、獨で氣遣つた私が、何時の間にかその騷動に口火を附ける當人となつたのも同じく皆、天の命ずる處だ。

瀨田　では始めから人夫は皆足留をなさつたのでございますか？……さすが先生、御手ぬかりはありませんな？

庄司　大丈夫、こん度の事も旨く行く……では私共は御免蒙ります。

平山　私は母が待つて居りますから、これで失禮します。

大鹽　ア、、平山君は日附役だから、同志を說きに行くのは控へたがよからう、イヤ諸君何うも御苦勞でした、……よろしく賴みますぞ、御見送せう。

（一同退場。）

（おゆうとおみね、女中おりつに手傳はせて布呂敷包をそこへ持込む、ほどいて、紫縮緬や、黑羽二重やお召などの晴衣をいぢりながら。）

おゆう　私のはもう古びて了ひました、紫の色もさめました、これでも調て戴いた時には、目のさめるやうな濃紫で、眞實に勿體ないほど綺麗だつたので、嬉しくて嬉しくて、一日に何度も〳〵、簞笥から出して袖へ手を通して見たり、いぢつたりして見ました、あの頃は私も若かつたが、月日の立つのは眞實に早いもの……でもおみねさんはまだ今が花盛りだし、嫁入の晴衣裳を手放すのはさぞ惜しいでせう、察して居ます。

おみね　……でも、そんな事を云つては居られませぬ、お父様があゝして思切つて御本を皆お賣りなさるのでございますもの。

おゆう　斯うなつては私等も默つては居られませんから、お互に潔く諦めませう……でもこの節は何程のお金にもなるまいが、それもマア致方がありません。

おみね　志だけ通れば、善いとして置かねばなりますまいから……。

おゆう　でもこれ丈あれば、捨賣にしても、三兩や五兩にはなりませう。（ひろげて見てゐる）

（大鹽父子、歸り來る。）

大鹽　オ、折角呼ばうと思つたが、それは何うしたのだ？

おゆう　實はおみねさんとも相談しまして、私共の晴衣を賣拂うて、それを旦那様等の今度のお施しの金の中に、加へて戴かうと思立ちましたので、そのお許しを受けに出たのでございます、金目にはなりますまいが、旦那様が、大切な書物を殘らずお手放しなさるのに、私共も傍で默つて見て居るのは、氣が咎めてなりませんから、さし出がましうはございますが、私共の願を御聞入れ下さ

いませ。
おみね　斯うした時節に、當分身に着ける事も出來ますまいし、簞笥の底で朽ちさせるのも勿體なうございますから、何卒善いやうになさつて下さいませ。
大鹽　（頷いて）然うか……その志は嬉しい、小さい善でもせぬよりは優だ、賣拂ふとせう。
格之助　これで大鹽一家は皆父上と、一心同體の證が立つて、私も滿足に存じます。
大鹽　髮飾りまで揃へてあるな。（云ひながら、紙包を取上げて見て）……だが、おゆう、あの瑇瑁の櫛笄は何うした？　私が買うてやつたあれは？
おゆう　（少し、周章てながら）ハイ……あれは紀念の品でございますから……思出すのも恥かしうございますが、私が不念で、出入の商人に瑇瑁の櫛を貰ひましたのを旦那樣に見咎められて、賄賂を取るなといふ誡を破つたと御叱りを受け、その爲めにこの髮毛を切つた時は死ぬよりも辛うございました、やつと御許しが出て、今度は旦那樣から改めて新らしく買うて戴いたので、私は生命よりも大切に藏つて居ります。
大鹽　髮飾まで賣拂うて、施をする氣ならその櫛笄も出して了へ。
おゆう　でもこれ許りは……一生持つて居度うございます。
大鹽　私も一生持つて居たい祕藏の書物を悉皆手放した、大鹽一家が眞實に私と一心同體なら、おゆうはその祕藏の櫛笄も賣拂はねばならんぞ。
おゆう　（未練げに）では何うあつても、持つてゐる事は出來ませぬか？
大鹽　汝の良知に問うて見い。
おゆう　（懷から瑇瑁の櫛笄を出して）私が惡うございました……御免遊ばせ。（云ひつゝ淚を拭いてゐる）
おみね　（懷から紙包を出し）私も、お嫁入の時、頭髮に挿した平打の銀簪と、それから珊瑚珠の根掛とをこゝに隱して居りました……惡うございました……何卒御免遊ばせ。
大鹽　（頷いて）ウム、然うか……ではこれは皆一緒に賣拂はせて屹度施の金に加へよう。
おゆう、おみね　有難うございます。
大鹽　格之助、一寸と橋本へ宛てゝ一筆書け。（と眼配する）
格之助　は……。（と几に倚り、手紙を書始める）
大鹽　改めて二人に云ひ聞かせる事がある。丁打の稽古の日も段々近づいて來たし、人の出入も繁くなつて自然この家はうるさくなる一方だし、それに今一つ厄介な事が

出來た、それは今度の奉行が私の施をするのが何うも氣に入らぬらしい。場合に依れば、私を罪に行ふ下心もある樣子で、何時引立てに來るかも知れぬ、汝等二人共とかく病身でもあるし、弓太郞の事も氣がかりだから、當分、般若寺村の橋本の家へあの子を連れて引越して居てくれい、手廻りの荷物その他は後から屆けさせる、もう日暮れだから人目にも立たぬ、今から早速行け。

おゆう　（驚いて）へヱ、……般若寺村へ……今から行けと仰るのでございますか？

大鹽　然うだ、直ぐ行け、一刻も早いが善い。

おゆう　何うした譯で、足元から鳥が立つやうに、然うした事を仰り出したのでございませう？

大鹽　譯は今云ひ聞かせた通りだ。（岩藏、提灯を持つて、廊下傳ひに入つて來る）……岩藏か、この二人をこれからおみねの里方へ……般若寺村の橋本の家へ送つて行つてくれ。

岩藏　へイ……畏りました。

大鹽　では皆、身仕度をしたら善からう、女中もつれて行け。

（岩藏、入る、おゆうおみねはウヂ〳〵する。）

大鹽　（促し立て）刻か遷つて、弓太郞を夜露に逢はせては惡い……あれは何うした、寢て居るのか？

おみね　ハイ……・寢かせてあります。

大鹽　然うか……行く前に一寸顏を見せてくれい。

おみね　ハイ……（悄々起つて行く）

おゆう　……旦那樣、これは唯事ではござりますまい……私も元はといへば、曾根崎の大黒屋風情の娘には違れましたが、永年お傍に居ましたお庇で、武士の道も儒の道も、少しは耳に入つたつもりでございます……何卒何も彼も打明けて云つて下さいませ、よく得心させてからの事になさつて下さいませ、お願ひ申ます。

大鹽　何も隱立てはせぬ、云うて善い事は云つて聞かせたではないか？

おゆう　（怨めしげに）否え……女だと思うて打明けて下さらんのでございませう……旦那樣の仰り付なら、この生命一つを惜みはいたしませぬ……イヤ、水臭い別け隔てをされるより寧そお手にかゝつて、潔く死度うございます。

大鹽　（低い力強い口調で）殺して善い時は殺してやる：…今はそんな時では無い、般若寺村へ行つて居れと云ひ附けたら、素直に行け。

格之助　（手紙をさし出して）これでよろしうございませうか？

大鹽　（見て）ウム……これで善い……おゆう、この手紙

を持つて行くのだ……默つて私の云ふ事に從へば善い、人目に立たぬやう裏門から出い。

（おゆうは泣いてゐる。）

おみれ　（弓太郎を抱いて來る）　スヤ〳〵と善う眠つて居ります……神さまのやうに眠つて居ます……お母さま、何うなさつたのでございます？

大鹽　オヽ、善う眠つて居る。（顏を覗いて）……も一度抱いてやらう。（抱いて、ヂット見入る）

（一同沈默。）

大鹽　（弓太郎が泣出すのでハット心附いた體）　何時までも抱いて居度いが、さうもなるまい……マア、氣を附けてやれ、寢冷さすなよ……大切にしてやれ。

おゆう　（眼を拭き〳〵）　では、私共は參りませう……おみねさん、支度は出來ましたか？

おみれ　この子の着替や、おしめは包みました……手荷物は岩藏に持たせ、子供はおりつに脊負せて參りませう。

おゆう　では兎に角行きませう……私共も寢卷丈は持つて行く事にしませう。（二人奥へ入る）

（大鹽父子は顏を見合せて、ホット息を吐いてゐる。）

岩藏　（提灯をさげて、庭先へ出て來る）　晝間はお天氣が善かつたのに、何んだか又寒い風が吹き出しました……四邊は暗うなりましたが寒椿の花丈が眞赤に見えます、善う咲きましたな？

格之助　オヽ、成程、花丈は明るく見えるの……路を善う氣を附けて行つてくれ。

岩藏　ハイ……よろしうございます。

（おゆう、おみれ、女中おりつに弓太郎を脊負はせて、庭先へ出て來る。）

おゆう　では行つて參ります……。（ヂッと大鹽の顏を見る）

大鹽　オヽ、氣を附けて行け……おみね、弓太郎に風を引かすな。

おみれ　ハイ……氣を附けます。（云つて、平八郎と格之助とを見つめて、二人とも立つてゐる）

大鹽　……遲くならぬ中に、行けッ。

おゆう　ハイ……。（云つて、眼を拭いてゐる、おみれも忍泣して動かない）

大鹽　何うしたのだ？……早く行けといふに。

（格之助も眼を瞬いて、二人を見てゐる。）

（おゆう、おみれは漸く徐々に動き出す、裏門近くなると。）

大鹽　（急に起上つて、庭に下立ち）　も一度、弓太郎を見て置かう、格之助も來い。（小足早に追ひすがる）

おゆう　（立戻つて）　何か仰る事でも？

大鹽　弓太郎を、も一度見てやらう……岩藏、提灯をこちらへ……矢張眠つて居る……たわいなく眠つて居る……。

格之助　眞實に……無心に眠つて居りますな。

大鹽　（獨語くやうに）……赤子の心……フム、赤子の心……罪は無い……尊いものだ。（不覺眼を拭く）

（おみねは沈默つて泣いてゐる。）

大鹽　もう行け……もう行け。

（おゆう、おみね、無言に禮して、後ろ髪引かれるやうに裏門を出て行く。）

（大鹽は裏門の外まで見送つて出る、格之助もついて行く、隣寺から暮六つの鐘がひゞく。）

格之助　もう角を曲りましたな？

大鹽　裏門を〆いこ

格之助　は……。

大鹽　（空を見上げて）破軍星が、建國寺の屋根の上で光つてゐる……あれが東照宮の廟の棟だな……あそこに覇道の魔王の惡魔がこもつて居る、先づあそこから淨めの火をかけねばならん、この庭の泉水も埋め立てよう、中の魚も生埋めだ……格之助、何はさて置きこれから殺文を書かう。

格之助　は……それが第一に手を着けねばならん大切な仕事でございます。

大鹽　中齋が血を以て書く文章だ……天地を感應させずには置かぬぞ。

――幕――

第四幕

（一）洗心洞講室

上手には祭壇を設け、燈火を捧げ、供物を供へて、孔子の像を祀つてある、正面下手の壁間には

以二天地萬物一爲二一體一　此是孔孟學術

使天下萬物各得二其所一　此是堯舜事功

と大書した揭示がある、室の周圍には取去られた書物棚の代りに、槍、長刀、胡簶などがもの〳〵しく飾り立てられてある。

○

祭服を着て篳篥を奏してゐるのは安田圖書である、平八郎を始め、格之助、橋本忠兵衞、白井孝右衞門、東組與力渡邊良左衞門、同心庄司義左衞門、同心悴近藤梶五郎、大井正一郞、般若寺村百姓柏岡源右衞門、悴傳七、河內門眞三番村百姓茨田郡次などがそれ〴〵禮拜をする、式が了つて、安田圖書も祭服を脫いで一座に加はる。

大鹽（一座を見廻し）これで今宵集つた我々同志の禮拜の儀式は一應濟ませる、いづれ明日、皆が寄つてから本式の釋典の禮を行はう……安田、何うも御苦勞だつた、伊勢の御師の家に育つた丈矢張本物らしいぞ……ア油掛町の美吉屋五郎兵衛が來てゐるといふ事だつたな、大井、此方へ呼んでくれ。

（大井起つて行く、程なく、美吉屋五郎兵衛を連れて入る。）

大井　待たせて氣の毒だつた……註文の品は出來たであらうな？

美吉屋（五十歳餘りの、律儀さうな職人の親方らしい風采の男、丁寧に叩頭しながら布呂敷包を解いて、旗の卷布をそこへ出す）ヘイ……ヘイ……こゝに持つて參りましたが、何卒御覽下さいませ。

大鹽（滿足さうに）それは何うも御手數だつた。（旗を擴げて見ながら頷いてゐる、一同の眼もそこへ寄つて行く）

美吉屋　何分にも、昨日、一昨日、あのやうに雨が降りましたので、乾きが惡うて、酷く氣を揉みましたが、幸と、今朝からからりと晴れ上りまして、何うか彼うかお間に合せる事が出來ました、人手にはかけられませんし、急場の間に合せ仕事でございますから、御氣に入りますか何うか分りませんが、何卒マア御納め下さいませ。

大鹽（旗を捲き收めて）イヤ、何うもいろ／＼心配をかけたな、……上出來、上出來……格之助、代金を取らせてやれ。

格之助　は……。（と起かゝる）

美吉屋（手を掉つて）イヤ、それは何卒御無用になさつて下さいませ、長い間御贔屓に預つて居りますし、眞の私の御禮心の御奉公でございますから、始めから代金など戴かうとはみぢんも思つては居りませぬ……代金を戴いてする仕事とは違ひます。

大鹽（頷いて）然うか？……では五郎兵衛、貴公の志は忝く受けて置きますぞ。

美吉屋　イヤ、何ういたしまして、これしきの事で、先生から然う改まつて御禮を仰られては脊中に汗が出ます、染物屋風情ではこれ位の仕事より他に、先生のお役に立つ事も出來ませんで……。

大鹽　イヤ、然う思つてゐてくれる丈でも、私には過分だ……おかみは達者かな？　おゆうも御無沙汰許りして、氣にかゝるやうな事を云つてはゐた、マア隨分皆、體を大切にするが善い。

美吉屋　ハイ、有難うございます、……聞けばおゆう樣始め、皆樣は般若寺村の方へお引越でございますさうな、

その中お常をお伺ひにやりませう……何卒何事も首尾よく參りますやう、私は神佛を念じて居りませう、イヤ、神佛といふものが眞實にお居でなさるなら、御恵深い先生のなさる事は何んでも成就するに相違ござりません、先般本屋の會所での先生のお施しで、市中ではもう先生の事を宛で神樣のやうに申して居ります、それに奉行所では、あのお施しにまでケチを附けて、叱言を申したとか云ふ事ではございませんか？　私共にも役人方の御了見が知れません。

大鹽　ウム、自分の家財を賣拂うて施しをしても、前以て役所のお許しを受けねば曲事になると云ふのださうな、一體當節の役人共は江戸の將軍家や、金持の游民ともの爲めに世話さへ燒いて居れば、京都の天子が何う遊はさうと、下々の人民が何んなに困窮せうと、知らん顏をして居ても務まるものと見える、眼の前の役人共かこの有樣では、眼に見えぬ神佛も當世はあまり便りにならぬかも知れん、……だが五郎兵衞、氣を落さんでも善い、天道といふものがある、私等か皆の爲めにその天道を見せてやる、平たく云へば自分でその神佛になつてやらうといふのだハ、、、。

美吉屋　何分にも首尾善う行きますやう祈ります……では私はこれで御免蒙ります、皆樣、失禮いたします。

大鹽　オ、、御苦勞であつたな。

一同　何うも御苦勞さま。

（五郎兵衞、退場。）

橋本　五郎兵衞さんはなか〳〵義理堅い人でございますな。

白井　さすが、先生の見込まれた丈あつて男氣がありますな。

庄司　イヤ、斯う云つては可笑う聞えませうが、假令兩刀は挿されんでも、橋本氏、白井氏始め一味の中には至極賴もしい方々が居られます、それに比べると武士が一旦誓ひをしながら、一兩日前、河内へ落ちて行つたらしい河合鄕左衞門のやうな腰拔か居るのは恥かしい。

渡邊　あの男は病身な子供に引かされて、唯默つて大阪を逃げたのだから裏切とも云へぬが、平山助次郎が今朝から顏を見せぬのはチト可笑しい、目附役だから猶更心がかりでならん。

格之助　實は寄の口に若黨の岩藏を遣つて、平山の邸の樣子を窺はせて見たが、長門か締まつて叩いても誰も返答するものがない、ひつそり閑として無人らしかつたといふので、少し變だとは思つて居ます。

大鹽　（皆の間に、稍や不安の氣の動くのを見て、無頓着な調子で）イヤ、平山がマサカ裏切もしまい、彼も長年、

仁義の道を修業して居るし、それに今度の、奉行の組かへの目論見を聞いて、酷く怨んで居たから、さうした氣遣もあるまい、萬一、裏切者が出たにしろ、大事は明日に迫つて居る、この一夜が無事に明けたらもう凡ては此方の方寸の中にある、幸ひ、役所の方には小泉、瀬田の兩人が宿直番に當つて居るし、內も外も手ぬかり無く網は張り渡してある、大丈夫だ。

白井　先生の仰る通り、この期になつて氣遣ふ事も臆する事もございませぬ、それにしても明十九日が恰度釋典の日に當つて、門下塾生一同が此方へ驅け集るには誠に都合の善い日に出來て居ます、その日を又撰りに撰つて、東町奉行山城守が新任の西町奉行伊賀守同道で、市中巡見の序、この前の與力朝岡の家へ休憩に立寄るといふのは眞實に誂へ向ではございませんか？　何んだか天命といふものゝ嚴かな事をつく〴〵敎へられるやうな氣がします。

大井　（痛快さうに）　天命は矢張我々の味方だ、上に諂ひ、下を虐げて、飢渴に惱む人民を見殺しにして居た祿盜人共の頭を明日は屹度粉碎してやります、その次には、あの慈悲も情も知らぬ、己一人が唯膏粱の美味に喰ひ飽き、紂王長夜の酒盛りに現つを拔かして、それで一生安穩に濟むと思うて居るらしい金持の游民共を片ッ端から誅戮するのだ、そして天罰の恐ろしさを思ひ知らせてやるのは、骨の疼くやうな痛快な事ではありませんか。

庄司　天罰も素より思ひ知らせてやるべきだが、折角、金持の游民共の穴藏から金銀を取上げ、又御藏屋敷の倉庫から米穀を引出しても、それを窮民等に分け與へる手筈が旨く行くやうに、餘ッ程、心を引締めてかゝらねばなりますまい。

大鹽　（頷いて）　討つべき者を討つと共に救ふべきものを救ふのが、今度の事件の二大眼目であるから、そこは飽くまでお互が念頭にかけて居なければならぬ、イヤ、唯討つが爲めに討つのではない、救ふが爲めに討つのだ、討つべきものを討たねば救ふべきものが救はれぬからの非常の道だ、彼の惡王、戰を好むの心は人欲中の最も不仁なるものである、それは唯、己の一身を肥して、獨り樂まうとする盜賊の心だ、我々の心とは天地の相違がある、だが斯うした騷動の時に四方八方から驅集まる群集の中に、さうした盜賊の心が湧いて來んとも限らぬ、それをも豫め防ぐ事が出來れば防ぎたいものだ。

橋本　イヤ、あゝして近郷の村々へまいた檄文には伊勢大神宮のお守札を貼り附けて、天より下され候ものとしてありますし、又あの文句を讀んだら立派な趣意が呑み込めませうから、さうした御心配も要りますまい、取越苦

勢をしたら限りがありません。

白井　先生の御氣象では、ア、仰るのも御尤千萬だが、それよりも私は天滿の火事と聞いて驅附けるものが一人でも多いやうにと祈つて居ります、折角の金や米が、火事の灰になつては堪りませんでな。

渡邊　（贊同して）それは全く御說の通りだ、檄文にもあるやうに、折角無道の敵を討つて、鹿臺の財を發いても、窮民がそれを拾うてくれねば、結局、我々が天下の寶を空しく烟にした無道者になつて了ひますからな。

安田　萬一然うなつては無駄骨折り許りではない、それこそ眞實の馬鹿者と云はれませう、イヤ、正銘の狂人にせられるかも知れませんな、何に、道の爲めに狂人呼ばはりされるのは少しも厭ひませんが、その行までが唯の狂人で終つて了うては、死んでも死切れませぬでな。

格之助　それは父上も心配して居られぬではない、だからお互に氣を附けて可成大勢の者の手へ、米や金が行渡るやうに取計らひませう。

近藤　何に、大丈夫、民百姓は屹度雲霞のやうに寄集つて來るに相違ありません、あの檄文を讀んだ者は、今に烟が上るか／＼と、この天滿の空の方を毎日、見張つて居るでございませう。

庄司　慥かに然うだ、窮民共はお救ひの狼烟の上るのは何時か／＼と待兼ねて居ませう。

大鹽　（力强い調子で）フウ……天下の人心は慥かに亂を思うて居る……ア、何千、何萬といふ窮民が慈母を慕ふ赤子のやうに手を伸べ、聲を上げて、私等の方へ押寄せて來る幻がこの眼前にちらついて居る、日頃惠みをかけてやつた渡邊村の者などは取分け眞先に驅附けるに相違ない、私等と彼等とは矢張一體だ、身を殺して仁を爲すといふのは、眞實に恐ろしい覺悟だが、又眞實に尊い覺悟だ、これには人心が感動する、天も感應せずには居られまい、よし、俗吏を殺し、奸商を屠つた勢で、一氣に大阪城を乘取つて京畿の死命を制し、天子と人民との爲めに仁義を天下に唱へたら、神武中興の世を恢復する途も自ら眼前に開けて來よう、萬一武運拙くて敗れたらかねて手筈の通り、退いて六甲山に楯籠らう。いづれにもせよ、我々は人事を盡して唯天命を聽けば善いのだ、尙一般の方略は、諸君も已に御承知の筈だが、小泉、瀨田、その他の諸君の顏が揃うてから改めて布令を出さう、それまでは無禮講でくつろいでゆつくり飮まれたが善い。

（大井と安田と、柏岡傳七郞が起つて、廊下の方から酒肴を運び入れる、一座が急に燥やいで來る、早く獻酬が始まる。）

大井　（手酌で、ぐい／＼やりながら）今夜は先生の御許

しが出たから、底の拔ける程飮まうではないか？　諸君、先生の前だが、死後名不若生前一杯酒だよ。

庄司（杯を噛みながら笑つて）だが大井君、醉潰れてそのまゝ倒れでもしたら、酒の醒めた頃にはもう火葬になつて居るかも知れんぞ、はめは外すな。

大井　大丈夫、大切な場合だ、何升飮んでも魂まで醉へるものか？

（一座顏を見合せて淋しく笑ふ。）

岩藏（廊下から）宇津木樣が御歸りなさいましてございます。

大鹽　然うか？……あの供の書生も一緒か？

岩藏　へイ、左樣でございます……國への御土產と云うて何か澤山、買物をして戾られた樣でございます。

庄司（意外な顏色）へヱ、宇津木矩之允君が當方へ見えて居りますか？　私はまだ聞きませなんだが……

格之助　昨日、九州路の旅からの歸り途に、ふいと立寄られましてな。

近藤　で、先生、宇津木君には、此の度の事はまだお話なさらんのでございますか？

大鹽（思案顏で）まだ話はせぬ……うつかり話は出來んからの。

庄司　でも宇津木君は先生門下の高足で、かねてからの御祕藏弟子ではございませんか？

近藤　萬卒は得易く、一將は得難しではございませんか？　宇津木君が此の場へ來合せたのも因緣だ、是非共一黨に加はつて貰ひませう、我々も餘ッ程心强く思ひます。

安田　それは然うだ、何うあつても加盟して戴きませう。

大井　先生の大學剳目に註をした位の人物だから、勿論、先生と生死を共にする覺悟は日頃から出來て居るだらう、こゝへ呼んで來ませうか？

大鹽　ウム……何れにしても除外物扱ひには出來まい……岩藏、宇津木を此處へ呼べッ。

岩藏　へイ、實はそちらへ行つても善いか、先生に伺うて見てくれといふ事でございました。

大鹽　然うか、何も遠慮には及ばぬ、ズン／＼入つて來れば善いにな。

岩藏　左樣申しませう、ア、門はもう締めさせてもよございますか？（大鹽の頷くのを見て、退場）

（一座少しく居ずまひを直して待つてゐる、宇津木矩之允、二十七歲、眉目涼しい凛とした男振り、悠々と座に入つて來つて、一禮する。）

大鹽　君の來た事は今まで諸君にも話さなかつた、諸君は君がまだ九州を漫遊してゐる最中だと思つてゐたらしい、思掛ない珍客だと云つて皆喜んで居るのだ。

宇津木（微笑）左様でございましたか、諸君にも久しぶりで御目にかゝりますな、又よくお揃ひで……何方も御健勝で何よりに存じます。（互ひに挨拶する）

庄司（懐かしげに）九州表の方では何か面白い御見學でもせられましたか？長崎あたりは何うでございました？

宇津木　左様でございますな、一番善い學問をしたと思うたのは、矢張長崎での見聞でございませうな、長崎の港では小城のやうな異國船が、波の上を自由自在に走つて居るのを見て、少し度膽を拔かれました、この頃蝦夷松前の邊りを脅かしに來るといふオロシヤの事なども考へ合せて、太平の世が何時まで續いて行くか知らと、つい妙な、心細い氣持もいたしました。

大井（少し醉つた元氣で）この饑饉つゞきで太平の世もないもんぢやアありませんか？　オロシヤが來なくても、こんな世の中は、今にひつくり返つて了ひますよ。

大鹽（改まつた口調で）宇津木、君と私とは師弟の中でも格別の間柄だか、假令幾年逢はずに居ようとお互の心持に變りはあるまいな？

宇津木（怪訝さうに）これは又先生のお言葉とも覺えませぬ、私は昔ながらの宇津木共甫でございますから、先生こそ聊かも隔意などお持ち下さらぬやうに願ひます、實は御差支かなくば一旦郷里彦根へ立歸りました上で、再び當地へ參り、先年の通り、塾の御厄介に相成度い考へでございますが、唯今のお言葉と云ひ、何か斯う御取込みの事でも……？

大鹽（嚴しい調子で）イヤ、君の心底が以前も今も少しも異らぬといふのが實證なら、打明けて話す事がある、就いては先づこの連判狀へ記名して、血判をして貰ひたいが何うだ？（と懐から連判狀を取出して、さし附ける）

宇津木（ギョッとして、連判狀には手もかけない）……連判狀に署名して、血判をしろと仰るのは、これは何んでも容易ならん事かと心得まする、如何に師弟の中とは申せ事情の何んたるをも承はらず、善惡の辨へもなく、盲同然な御同意は仕り兼まする、先づその仔細からくはしく承はつての上と致しませう。

大鹽（頷いて）フウ、それは尤の云ひ分だ、格之助……。

（と眼配する、格之助は、起つて、祭壇の上の黃色い袋包を取上げ、その中から檄文を抽き出して。）

格之助　宇津木君、この檄文を一覽されたら事の仔細は分りませう、昨年以來、民百姓の困窮を救ひたさの一念で、寢食を忘れて奔走なされた父上が、俗吏には妨げられる、游民等には欺かれる、萬策全く盡き果て今は他に取るべき手段もないので、志を同うする一門一黨の者が最後の一擧に生死を賭けて蹶起する事となりました、非常の道

を道とするのも、萬止むを得ざる次第だから宇津木君にも是非、御一味を願ひたい。

大井　(迫るやうに) 勿論御異存はございますまいな?

庄司　先生の爲めに死んで下さい。

大鹽　(沈痛な調子で) イヤ天地萬物一體の仁を行ふために、我々は身を殺すのだ、……知行合一の教を活かす爲めに皆潔く死なうといふ誓を立てたのだ、……矩之允何うだ?

(宇津木は默然として、暫くヂッと檄文を見てゐたが、靜かに卷き收めて。)

宇津木　御趣意に大體、見當が附ました、……併しザット一通り眼を通した丈ではこの檄文の中に、まだ私の腑に落ち兼る廉もございます、勿論先生の御氣象として、今日の窮民の慘狀を見て見ぬ振して、御隱居して居られる事が出來ぬのも萬々推察いたしますが、併し矩之允には又矩之允の考へがございますから、一應部屋へ下つて、繰返して熟讀した上改めて御確答を申上げます、それまで暫時、御猶豫を願ひます。

大井　(血眼になつて) 何故卽座に返答をせられない、……逃げようとて逃がしはせぬぞ?

大鹽　(制して) イヤ、矩之允は逃隱れする腰拔武士では無い筈だ、部屋へ下つて、更に熟讀した上で返答をするといふのなら、それも善からう、しかし事は最早切迫して居る、今夜の中に何方か確答せい。

宇津木　は、畏りました……では皆樣、御免蒙ります。(と退場)

大井　先生、彼奴を逃がしてはなりませんぞ。

渡邊　寧そ打放して了うては何うでございます。

大鹽　(落着いた態度で) イヤ、假令逃げようとしても逃げられはせぬ、邸の隅々にまで見張は附けてある……併し、彼は自殺する氣だらう……惜い男子だが致方もない。

(と、憂色が浮んで來る)

(門の戶をたゝく音。)

大鹽　表門の戶を叩いて居るのではないか?

(一同耳を澄ましてゐる。)

格之助　(不安さうに) 慥かに表門でございます、今頃誰がやつて來たのか?

大井　この夜深に何者でございませう? 行つて見屆けて來ます。(追取刀で立かける)

(戶をたゝく音が焦立たしげに聞える。)

大鹽　騷ぐには及ばぬ、三平が門番に附いて居る……音が止んだ、戶をあけたらしい……兎に角、行つて見屆けてくれ。

(大井正一郎が走つて行く。)

近藤　大井君一人では何んだか安心がなりません、私も行つて見て來ませう。(起つて行く)

(一座は暫し沈默、不安な空氣が動いてゐる。)

(ガヤ〳〵話聲がして、大井と近藤とに支へられながら瀨田濟之助が跛足を引きつゝ晒手拭で額を繃帶した顏を出す、一座は驚きの眼で迎へる。)

大鹽　瀨田君か？　何うしたんだ？

庄司　何うして負傷をしたんだ？

瀨田　(ベッタリ、坐つて、息を喘ませながら)　裏切者が出ました、油斷はなりませんぞ。

大鹽　(ハッとした體)　フム……では矢ッ張平山だな。

瀨田　(頷きながら)　慥かに彼奴に相違ありません……まだ他(ほか)にもあるかも知れませんぞ……小泉はやられました……。

大鹽　何に、小泉がやられた？

瀨田　可哀さうに、奉行所で斬られました。

庄司　(悲憤の調子)　殘念な事をしたなツ。

(一座暫時沈默。)

大鹽　瀨田に藥をやれッ、餘つ程疲れて居るらしい。

安田　は……(と起上る)

近藤　額のはホンのカスリ傷らしいが、他に何處もやられはせんか、瀨田君？

瀨田　(元氣よげに)　何アに、私は別に負傷はして居らぬ、唯走つたから少し息切れがした丈だ、心配はいらぬ。

(安田が、氣附藥を持つて來て、瀨田に飲ませる。)

大鹽　(膝をのり出して)　兎に角仔細を聞かう。

瀨田　(興奮した調子で)　私と小泉と二人で宿直部屋で話て居りますと、急に奉行から呼ばれました、丑刻は疾くに過ぎてゐるのに、何んだか可笑しいと思ひながら、私は途中で厠へ入りますと、一足先へ出かけた小泉が、疊廊下の邊まで行つたかと思ふ頃、急に何んだかバタ〳〵騷がしい音がして、「斬棄い」といふ奉行の聲がハッキリ聞えました、私はハッとして、厠から素足で庭へ飛出して、捕手の者等をあしらひながら、あの片隅の梅の古木を足場に奉行所の北側の塀を乘越しました、そして一目さんに天滿橋を渡つて、此方へ驅附けたのでございます、私は危い所を遁れましたが、小泉は可哀さうな事をしました……斯うなつたら今に此方へも手入があるかも知れませぬ、もう一刻も猶豫はなりませんぞ。

庄司　(口惜しうに)　先生、今一息といふ處で、殘念でございますな。

瀨田　兩奉行の巡見は無論中止(やめ)にしませう、向ひの朝岡の宅へ來た處を擊取るといふ計略の手筈はスッカリ狂ひました。

大井　（憤慨して）　裏切をするとは憎い奴ッ、最初に平山の首を斬つて血祭に上げたい。

近藤　これまで旨く運んで來たものを、殘念至極だ。（と切齒する）

橋本　先生、この上、後手に出て、おめ〳〵召捕られてはつまりませんぞ。

瀨田　我々がこれから奉行所へ斬込みませうか？　その間に、先生は同志の人數を集める手段を廻らされては如何でございませう？

大鹽　（動じない、凛とした調子で）　イヤ、決して周章てるには及ばぬ、斯うなつたら、唯第一段の兩奉行を討取る方略を後手に廻して直に第二段の船場へ押寄せる計畫を先づ實行するまでだ、同志が此處へ集まる時刻が狂うて來たから柏岡傳右衞門父子と茨田郡次君はこれから手分をして、直に守口村渡邊村を始め近郷近在を驅廻つて、人數を寄せる役を引受けて貰はう、その途々も檄文を蒔散らして行かれい、橋本、白井兩君は、泉水埋立てに雇入れたまゝ邸內へ泊めてある人夫等の指揮役に廻つて貰はう、愈々打立つてからの作戰は、かねて御承知の筈だが、念の爲めに、格之助その覺書を。（と指圖）

格之助　は（と、懷から、書附を取出し）　先づ隊を三軍に分つて先手の大將として大鹽格之助、大井正一郎、庄司儀左衞門、これには木砲一挺、大筒二挺、第二軍……中備として大將大鹽平八郎、渡邊良左衞門、宮脇志摩、近藤梶五郎、白井孝右衞門、橋本忠兵衞、安田圖書が大將分、これには木砲一挺、人夫五十名、第三軍は瀨田濟之助を將として、小泉淵次郎……。（語尾曇る）

大鹽　（勵ますやうに）　淵次郎は魂魄となつても出陣するぞ……。

格之助　慥かに左樣でございます……此所にはまだ見えぬが竹上萬太郎、横山文哉、その他約二百人に木砲一挺、鐵砲支配役として獵師金助が加はる手筈である。

大鹽　（一座を見廻して）　云ふまでもないが、無辜を殺すな、併し火を消しに驅附けるものは斬殺すとも構はぬ、金銀米穀は取るに隨つて窮民に分け與へ、村々では、第一年貢にかゝはる記錄類を引破り、燒棄てさせる、すべてかねて申合せの通りに行はう、善いかな？

一同　委細、御命令通りに行ひます。（柏岡父子、茨田等は退場）（鷄鳴く）

大鹽　一番鷄か……銘々、打立つ身仕度をせられいッ。

格之助　宇津木は如何いたしましたか？

大井　先生、まだ決斷し兼ねて居りますなら逃げる覺悟でございませう、斬つて門出の血祭にしましては？

（廊下で書生、岡田良之進の聲）　宇津木先生……宇津

木先生…（宇津木の聲）イヤ、君は此方へ來てはいけん、早く今の事を……それでなければ、私は死後の證が立たぬ。

大井　（障子をあけて）　宇津木君？　何うしたんだ？

（宇津木の聲）　今、そちらへ行きます……良之進、君はあちらへ行けと云ふに。（振切つて、そこの廊下へ現はれる、後から岡田が袖を控へる）

宇津木　君は飽くまで私に背く氣か？（と叱る、書生岡田は悄々と廊下傳ひに退く）

宇津木　お騷がせしました。（と入つて來る）

格之助　何うしました？

宇津木　（蒼白めた顔に微笑）　供の書生が、强つて此方へ來たいと云ひ張りますので、叱り付けたのでございます。

大鹽　ウム、君はまだ生きて居たのか？　では私等と事を共にする決心が付いたのか？

宇津木　（落着いた態度で）　實は今、その御答へに上つたのでございます。（と檄文をそこへ出して）　檄文の趣意はよく反覆熟讀いたしました、成る程、近年の打續いた天災で、天下飢饉に困んでは居りますが、これは政道の得手勝手を天から罰せられて居るのだとは心得ませぬ、天は元より至大至高にして言はず、行はず、悠々たるものでございます、霖雨や暴風つゞきて、時候の調はぬのは、唯廻り合せが悪いのだと申す外はありませぬ、勿論俗吏や金持の町人共が多くの生民の困みを我身の痛ひと感ずる心が無く、手を叉いて見殺同前にして居るのは惜むべき暴擧に相違ございませんが、それを正すのは天下自ら法がございます、上、幕閣の首班に立つ者が、當然その責を果すべき時が來ると存じます、そこを御思慮なさらず、中齋ともあらう御方が、暴を以て暴に代へ、可惜聖賢の道を血で汚されようとはあまりにお情けない、道は唯、眼前の一日の事を善くする爲めに存するものではない、萬古不滅の生命を目がけて行くこそ眞の道ではございませんか？　矩之允は弟子として恩師のかゝる大それた不義の企てを默つて見ては居られませぬ、御諫め申します。

大鹽　（鋭い調子で）　何に、不義の企てとは何んだ？……矩之允善く聞けッ……京都の天子は王道の大本であり、民百姓は我國の根源であるぞ、然るに覇道で起つた將軍家が莫大な八百萬石を私して居るのに、畏くも天子御料は僅か八萬石、それさへ米不足を口實に、碌々、御送りもせず、又定めの外は京都への廻米を一切禁じて居る、其の上、五合一升の買米に出て來る近郷の民百姓を縛つて處刑する、其の傍らで游民共は酒色に耽り、私曲を行

うて何の咎めも受けない、それが天下の大法と云へるか？　人を殺すに梃を以てすると刄を以てすると異なる筈がない、又刄を以てすると政を以てすると異なる筈がない、民の父母となつて政を行ふべき者が、政を以て民を殺して居るのが今の時勢だ、臺閣の首班も、市井の俗吏も罪は一つでその間に差別はない、聖賢の道は一日を百年とし、百年を一日とする、眼前の一日を善くする力がなくて、百年の後の爲めに盡すといふのは畢竟、卑怯な文字の儒者共の逋口上だ、孔夫子は何故に少正卯を誅せられたか？　陽明先生は何故に宸濠を討たれたか？　イヤ湯王の夏を伐ち、武王の殷を滅されたのは、聖人も德とする處ではないか？　中齋が血族の禍を犯し、刀鋸を恐れず、鼎鑊を避けず、同志と共に血を啜つて起つたのはこの聖賢の心を以て敢て豪傑の道を行はんとするからだ、かくすべきものと知りながら、利害を慮り成敗を氣にかけて、それを行はんのは自分の良知に恥づるからだ、一番、私を理解して居る筈の汝が、一番、私を理解せぬらしいのが、殘念で堪らぬ。

宇津木　矩之允、押して申まする、先生の止むに止まれぬ御胸中は素より察して居りますが、その先生が血族の禍を犯してまで刑戮を加へられようとする俗吏は、高が町奉行ではございませんか？　游民等は唯利慾の外、何物も知らぬ斗屑の輩に過ぎませぬ、それ等の者を相手にして、藤樹先生以後陽明學の柱石たる先生が、世にも尊い御生命を贄にせられようとは、可惜天下の珍寶を贋札と取代へるよりも、もつと愚かな擧動かと心得ます、その上、金銀米穀を街上に蒔き散らした處で、それを拾うた者が唯一時の飢渴を癒やす丈で、窮民は何時までも此の世の中に絶える事ではございますまい、剩へ放火の爲めに燒かれるのが、游民の家丈に限れるものならまだしも、無辜の民家まで類燒の厄にかゝつて火災が大阪の全市中に廣がりでもしたら、それこそ一層窮民の數を殖やす事にも成兼ねませう。善と知つて行ひ、不善と知つては行はぬが、眞の知行合一ではございませんか？　私は寧そ自殺を御勸め申します。

大鹽（稍嘲笑的に）それこそ私に犬死を勸めるのだ……宇津木は矢張私の利害を考へ、まだ天の大理を知らぬ、町奉行や游民等は素より取るに足らざる斗屑の輩だが、彼等は天の大虚と仁義の大道との相通する中間の途を梗ぐ障礙だ、此の障礙を除き去るのは、唯一身の死を恨まず、心の死をのみ恨む事を知つて居る者が自ら行はねば誰が行ふ？　成る程火事は或は全市中に擴がらうも知れぬ、玉も石も共に焚かれる惧がないと云へぬ、併し天の雷霆の怒つて大地を撃つ時、善人も或は災にかゝる、而も其

の災を怖れて、惡人共の増長するが儘に任せたら、天は死物だ、此の度の一擧が民の生前の地獄を救ひ、眼の前に極樂を見せてやる方策となる許りではなく、霸道の幕府の礎を覆へして、仁義の王道の新しい曉を告知らせる一番鷄の聲となるなら、あらゆる贄は少しも惜むに足らぬ、胸の病の爲めに一度ならず、死にかけた死損ひの中齋、今度こそ笑つて獄門臺に首をさらすぞ。

矩之允　（熱した顏色で）　先生の太虚の教へは勿論至誠の御心より出て居る事は疑ひませぬ、併し先生の今度の御企ては、至極無遠慮に申し上ぐれば先生の日頃の不平鬱憤……イヤ、天晴、天下の政道に盡される丈の材器德望を持たれながら、門閥無くして用ゐられるに途無く驥馬空しく櫪に伏する心中のお嘆きが、不知不識の中に充じ、充じて、此の度の機會に破裂したのでございます、良知の學問がその不平鬱忿を煽り立て、先生の一徹の御氣象が手綱を放れた悍馬のやうに狂ひ出したのかと思はれます、されば矢張一つの私念からではございませんか？先生程の人物が、それを御反省なされぬのは、矩之允、殘念千萬でございます、……せめて、今の中に御自殺なさいませ、お諫め申ます。

大井　（怒りを抑へかねた樣に）　無禮者……斬つて捨てませうか？　（と起かゝる）

大鹽　（制して）　待てッ！……何を隱さう此の中齋にも、功名の心はあつた、一時は燃ゆる樣な野心もあつた、それは新井白石の樣に、廟堂の上に立つて民を濟ふ政道を行うて見たいといふ一念からだ、併し良知の學を深く修めれば修める程内に求める志が篤うなつて、劄記を富士山頂の石室に埋めた時には功名の心をも一緒に葬つて了つたのだ、だがあの默々として聳え立つ一萬丈の富士山も、地の底深くには今も猶炎々たる火焔が燃えて居よう、何時再び破裂せぬとも限らぬ、一度埋めた私の功名の心が今再び火焔を噴出したと云はれても構はぬ、私は窮民の頭だ、窮民の頭は生きて廟堂の上に立つて一身の顯榮は貪れぬ、唯窮民の爲に魁けて死なうといふ丈だ、そして霸道の幕府が滅んで、天下と人民との爲めに王道の起つて來る火口にさへなれば、それで私は滿足だ、聊かも悔まぬぞ。

宇津木　先生は何處までも幕府をお呪ひなさるか、矩之允はそれを聞くさへ空恐ろしく思ひます、イヤ、三百年の德川幕府が、龍車に向ふ螳螂の斧で、ビクともする筈はございませぬ、その上、私は、幕府とは切つても切れぬ彥根藩の家臣に當る者でございます、君父への孝行を盡すのを聖賢の教の第一と心得る者がかゝる暴擧に加擔出來よう筈はございませぬ、……併し、此の場合に長年の

師の恩に背く事も情に於ては忍びませぬ、……(涙ぐんだ聲で)情に於てはいかにも忍びませぬが、さればと云つて自分の信ずる處は枉げられませぬから、この上は何卒、御存分になさつて下さい、唯一言申遺しますが、聖賢の道は決して彼の憑婦、臂を上げて車を下る時には行はれませぬ、旱天に田川の水爭ひする仲間の外に立つて、靜かに井戸水を乾田に酌み入れてやり、その仁の潤ひが自然に爭ひを止めさせるやうに仕向けるのが、聖賢の眞の志で、廻りくどい無駄骨折のやうに見えても、それが眞實に德の最後の勝利の道たと信じます、それ丈は先生始め諸君に聞いて置いて貰ひたい、これが宇津木の遺言でございます。

大鹽　(嚴肅に)　君が然う信ずるのを私は笑ひはせぬ、だが、孔夫子死後三千年、夫子の道の世に行はれぬのは、徒らに温良恭儉讓の陰德を尊んで、剛毅の陽德を學ぶ事を知らぬ文字の儒者の數許りが殖えて來たからだ、イヤ、文字の儒者ならまだしも、一體、今の儒者共は皆腐れ儒者だ、善と知つても行ふ事は知らぬ、一身の利害許り考へて、是非は考へぬ、私は腐れ儒者と共に此の世に生きて居たくは無い、知つた事は生命にかけて必ず行つて見せる、君父への孝よりも天子への孝、民への孝が眞の大孝である事を身を以て天下に敎へたら一時の成敗利鈍は云ふに足らぬ、狂と笑ふ者は笑へ、愚と謗る者は謗れ、不義の俗吏を誅戮し、不正の游民を打懲らして天下の財寶を天下の民に分け與へよう、幕府の天下を天子の天下に返す途案内に立たう、今こそ私は天の奉行だ……一同、用意せいッ!

宇津木　(端座して覺悟の體)　その不義を懲らす戰の門出に孔夫子の聖像の前で、無辜の私を殺されい。

大鹽　オヽ、善い覺悟だ、何か家郷へ云ひ遺す事は無いか?

宇津木　書生の良之進に、家郷への遺書を渡して置きました、……サア殺されい。

大鹽　大軍の門出の血祭だ、矩之允を殺せッ?

(一同躊躇する。)

大鹽　(眼配せ)　ソレ、大井!

大井　は……(槍を取つて起上る、突きかけて躊躇する)

大鹽　(一喝)　突けッ!

(大井一突きする、矩之允倒れる)(二番鷄鳴く。)

大鹽　(起上り)　戸障子を蹴倒して、この館に火をかけい、一同打立つ身支度をせいッ!

(矩之允の屍體は庭へ運ばれる、大鹽父子を始め一同それを見送つて入る、邸内俄に騷々しく戸障子を打碎く音が聞え始める、庭の向には東雲の光がほのかにさして來る。)

（大鹽平八郎は着込の上に白小袖と黒羽二重の紋付を重ね、銀もふるの野袴を履き、黒羅紗の陣羽織に鍬形打つた二十四間の白星の甲を着、手に赤い采配、格之助は着込、野袴、緋羅紗の陣羽織、白木綿鉢巻を締め、その他も着込、帯刀で、大抵手槍を持つて出て來る「救民」と書いた四半の旗、中に天照大神宮、右に湯武兩聖王、左に八幡大菩薩と書いた旗、七五の桐に二つ引の旗が翻へる、そこへ忙しく駆けつけて來る者もある中に江州浪人、梅田源右衛門もゐる。）

梅田　大鹽先生、梅田源右衛門でございます、途で茨田に出逢うて、様子を聞くと直ぐさま駆けつけました、義擧に加はります。

大鹽　（満足さうに）ア、よくこそ來られた、早速大砲方の部署に就いて貰はう。

梅田　は……畏りました。

大鹽　先づ建國寺の東照宮の廟へ一發見舞へッ。

（梅田は庭の方へかけ出す、程なく大砲の音が轟然と響く、がら／＼と瓦、柱のくづれ飛ぶ音。）

ワーッ。（と喊聲が上る）

大鹽　打立て！（と采配を揮る）

（二）　北船場附近

鴻ノ池屋の店先には古びた格子戸がはまり、處々に非常用水盤が据ゑてある、出入口は廣い土間で、それが奥の母屋へ通抜けになつてゐる、店では多勢の番頭手代が忙しさうに、帳簿を附けたり、算盤を弾いたりしてゐるのが、格子戸の隙から見える、下手には白壁塗りの倉庫の棟がいくつも建列んでゐる。

〇

幕開いて暫くの間、小僧等は箒を持つて表の道を掃除してゐる、水を打つのもゐる、その中に遠くの方で鐵砲を打つやうな音がする。

小僧甲　けつたいな音がするな、何んやらう？

同乙　鐵砲を打つやうな音やな、お城の方か知ら？

同甲　……アレ、何處かで半鐘が鳴つてゐるやないか？

同乙　さう／＼火事だつせ、朝早くから、火事を出したりして、何處のあほかいな？

大番頭徳兵衛　（店先から顔を出す）　火事は何處だ？

小僧甲　こゝからは烟も何も見やしまへん、浪花橋まで行つたら大抵分りますやろ、見て來まへうか？

徳兵衛　何アに、近所でなけりや騒ぐ事アないんだ、だが今朝は大分風があるやうだな？

小僧甲　ヘヱ、なか／＼吹いてまつせ。

（その中に通りが騒がしくなつて、大八車に荷物を積

んだ者、蒲團を擔いだ者、簞笥を棒で擔つた者行燈を抱へたりお鉢を持つたりした者も交つて、いろ〳〵な狂態の男女の避難者が罵り喚きながら周章たゞしく前を驅通る。）

小僧乙　火事は何處だす？

避難者甲　火事どこやおまへん、天滿は大騷動だつせ？

同乙　もう浪花橋の向ふまで來てまんがな、えらい事つちや、えらい事つちや。

（云ひ〳〵逃げ出す。）

（その中に、大砲の音が聞えて來る、さま〴〵の形をした避難者の群集が、泣いたり叫んだりして、驅け通る。）

小僧甲　ア、黑煙が見えてまんのや……一寸行つて見て來まつせ。（走り行く）

德兵衞　（往來へかけ出し）成る程、こりや大火事だ。

（店の番頭手代はゾロ〳〵戶口へ出る。）

番頭の一　大砲を打つやうな音がするやないか？　一體コリヤ何うしたんやろ。

同の二　何んでも唯事やおまへんぜ。

（避難者はゾロ〳〵通る、混雜は一層激しくなる。）

番頭甲　火元は何處だす？　一體何うしましたんや？

避難者の一人　何うも斯うもありやしまへん、天滿に一揆が起りましたんや、大家は片ッ端から皆、打毀されまつせ。（云ひ〳〵走り行く）

德兵衞　エ、一揆？　こりや大變だ、早く大旦那樣へ申上げよう。

小僧甲　（慄へながら走り歸る）一揆が浪花橋の向ふまでやつて來たて云ひまつせ、今に、こゝへも毀しに來るさかい、用心せいていふ事つておまつせ。

番頭の一　ヤ、どえらい事が出來たもんや、コリヤ、かうしちやゐられやへん。

（一同周章てゝ奧の方へ驅込む。大砲の響、鐵砲の音が次第に近く聞える、前を通る避難者の數は次第に多くなつて愈々亂調子になる。）

善右衞門　（店頭へ出て來て、往來の樣子を伺ひ）成る程コリヤ、どえらい騷だ……店の者は周章てるな、大切なものは早く倉庫へ入れて、そして持てる丈の物を持出して、島の內の下屋敷の方へ引上げる事にせう、唯の火事と違うて、一揆が起つたのなら愚圖々々しちや生命にかかる、直ぐに支度せい。

德兵衞　大旦那があゝ仰るから皆も早う片附けて、早うお店を引上げたが善い……エ、皆、何をうろ〳〵して居る……周章てるない、阿呆め。

（泡喰つて店を片附るのもある、帳簿を抱へて逸早く

逃出すのもある、倉庫へ物を運ぶのもある、右往左往の大混亂である。)

善右衛門 (店の者を差圖しながら) 家内の者は皆、非常口から出て行くやうに云ひ附けたが、もう行つたか知ら?

德兵衞 (奥からかけ來つて) 旦那様、お孃樣には困ります… 何うしても立退かぬと仰りましてな。

善右衛門 何、お利江が?……何うしたんだ?(と駈入る)

(店は相不變混亂してゐる、往來は避難者がつゞく。)

善右衛門 (娘を扶けて出て來る) 汝一人、何うしたといふんだ。

お利江 (泣呃りながら) だから私があの時お父さまにあれ丈お願ひしたのぢやありませんか? 今日は傾寳の不動樣が、たうとう此の家へ飛込みなさるんだから、もう逃げようたて、逃げられやしまへん、私は火の中で燃死ぬのが、私の運だとあきらめますわ。

善右衛門 (叱りつ宥めて) お前は何うかして居るんだ? 愚圖々々してたら、何んな目に逢ふか知れぬ、早く逃げるんだといふに。

お利江 (愈々ヒステリカルな調子で) お罰が當つたのでおます、誰か一人お罰に當つて死ぬ者が無けりや、皆が皆死ぬ事になるかも知れまへん、私はこのまゝ一人、此の家に殘つて居りますわ。

善右衛門 この場合に、そんな事を云うて困らすもんぢやアない……オイ、皆で、お利江をかついでこゝを連出してくれ。

德兵衞 ヘイ……皆手をかしてくれ。

お利江 (身悶えして) 否え、私は何うあつてもこゝで皆の爲めに死にますわ、身代りになつて死にますわ、私の體に觸つてくれるな。

善右衛門 (焦々して) エ、親の氣も知らんで……サア、早く、連れて行け。

德兵衞 サア、お孃さま……。

(お利江が泣き喚いて反抗するのを、番頭手代が四五人、寄つて、手を取り、足を取り、肩車へかけて連れて行く。)

善右衛門 皆も片附いたらソロソロ引揚げるのだ……ヤ、大砲の音が直ぐ傍で聞える、陣太鼓の音もして居る……(往來へ出て、向ふを窺ひ)……ア、旗を立てゝ……來たぞ、一揆が來たらしいぞ、皆、逃げい、逃げい、生命が大切だ。(と自分が先へ逃出す、一同も周章てゝ逃出す、後は暫時空虚)

(救民と大書した旗を立て、大砲を人足に引かせ、大鹽平八郎が先頭で、大鹽格之助、庄司儀左衛門、梅田

源右衛門等小筒を持ち、次いで中央に天照皇太神と書した旗、大筒、大鹽平八郎は手槍を持ち、白井孝右衛門、橋本忠兵衛、近藤梶五郎、渡邊良左衛門、その他、竹槍の百姓や、棒切を手にした町民等大勢が隨うてゐる、後陣に瀬田濟之助等がつゞいて出て來る。）

大鹽　（聲を勵まして）　ソレ一同打入つて、金庫を毀ち倉庫の扉を破り、長年民百姓の手から掠め取つたものを今日直に民百姓の手へ取返せ、不義に積んだ財を淨めて、仁義の寶に通用させい。

格之助　かゝれッ！

（庄司始め、一同吶と叫んで店先から駈入る、襖を蹴倒す音、障子を押破る響、バタ／＼と奥深く闖入する氣分、暫くすると金箱や米俵を手に／＼道路へ運び出す。）

大鹽　その金は片ツ端から往來へ蒔散らせッ。

一同　ハッ……（と二朱金、一分金をバラ／＼蒔く）

大鹽　さア、貧しい者は遠慮なく取りに來い……窮民は拾ひに來い……金も米もこんなにあり餘つて居るのに、皆が餓死する道理はない、取りに來るのが天理だ、拾ふのが天理だ、サア來い、來ぬか。（と左右を顧みて呼びかける、誰も來ない）

大鹽　（焦々した調子）　拾はねば燒捨てるぞ……早く來ぬか？　何故來ぬ？

（この間にも金箱と米俵を一同はセッ／＼と店頭へ運んで來る。）

大鹽　（格之助等と、槍の鏃で、金箱をこぢ明けながら）恐れる事は少しもないぞ、盗むのではない、汝等の手に返すのだ、妨げるものは打取つてやる、……サア來い、早く來ねば火をかけるぞ。

（棒切れや、短刀などを持つた十五六人の一群が、そこへ寄つて、金を拾ひにかゝる。）

格之助　（ヂッと見て）　ア、汝等は、橋向ひでも金銀を拾うて居た者等ではないか？　汝等の外に大勢の貧民がゐるだらう、何故貧民は來ぬか？　窮民は來ぬか？

甲の男　皆恐れて寄り附きませんぜ、何、私等の手から又分けてやりますさア。

乙の男　私等が皆に代つて拾つときますさア。

大鹽　（大喝）　不屆者め、汝等は眞實の貧民ではない、破戸漢だらう、手甲の鯨が見えぬと思ふか？……盗む心でついて來てるに相違ない。承知せぬぞッ。（と、槍先を突出す）

甲の男　（逃腰になつて）　意氣地無しの貧乏人は近寄れと云うても近寄りまへんや、皆生命が惜しいと云うてますでな。

乙の男　私等が折角、拾うて上げるのに、殺されちや勘定に逢ひまへんや、御免蒙らう／＼。（バラ／＼と逃散る）

（奥の方では、炮烙玉の破裂する音、掛物や道具類などまで運び出されて來る。）

大鹽　（悲痛な表情で）　貧民等は……　窮民等は大勢居る筈だ、何故寄らぬ、我等が志が分らぬのか？……我等のする事を思違へて居るのだらう？

格之助　（慰めるやうに）　父上、我々が通つて行つた後で、今に大勢拾ひに來るでございませう。

庄司　（かけ來り）　目ぼしいものは出來る丈持出しました、これから直ぐにあの憎い大米屋を襲ひましては？

大鹽　（頷いて）　陣太鼓を打て！

（引揚げの相圖の太鼓を鳴らす、一同ドヤ／＼と奥から出て來る。）

格之助　（一同に向ひ）　これから今橋筋と高麗橋筋と二手に分れて、大米屋を目あてに進むのだ。

一同　ハッ……（と勢揃して又駈出す）

（舞臺半廻し）

○

兩側は民家、向ふに島町の坂が見える、黑煙は半空を蔽うてゐる。

大井　（向ふを見て）　や、奸賊山城守が來ました、あそこに奉行の馬簾が見えますぞ。

大鹽　（號令）　ソレ、殘賊を打果せッ。

（一同勢込んで殺倒する、暫く大筒小筒の音が黑煙の中で響き合うてゐる。）

（三）　八軒屋河岸

下手には燒落ちた土藏がまだくすぶつて居る、天神橋のかゝつてゐる淀川の向岸には火と黑煙が空に立ち騰つて、その凄まじい光景が水面に映つてゐる、河岸には半ば燒け焦げた楊柳が二三木、淋しげに立つてゐる、もう日は暮れてゐる。

避難民の甲　どえらい大火事になつたもんやな、天滿も燒ける、船場も燒ける、内平野町も燒け出したよつて、御城へも火が附くやろ云つてまんのや、斯うなつちや何處へ逃げて善いや分らしまへんがな。

同乙　眞實にコリヤ大阪が丸燒になりますやろ、何んでも與力の大鹽樣がこの一揆の發頭人やいふ噂でおまつせ。

同丙　大鹽樣といふのは、この間貧乏人に一朱づゝ施しをしやはつた先生樣やろ、何んでも餘つ程慈悲深い、感心な學者やていふ事だが、お奉行のなされ方が癪に障つて、こんな大騷動を起しなはつたと云ふ評判やがな、つまりはお奉行の方が善くないんだつせ。

同甲　お奉行も善うないか知らんが、船場邊の金持もあんまり强慾過ぎるよつて、こんな騷動になりましたんや、私等は日稼同樣の小商人で、何も知らん事つたし、家は燒かれたつて借家やさかい、大事ないが、店の品物を無くしましたんで、えらい損や。

同丙　フム、とんだ側杖や、割に合ひまへんな。

同丁　でも、偶にやこんな事も善えわい、强慾過ぎる奴の見せしめになるよつてな。

同甲　風向が何うやら變つたやうだつせ、火がだん〳〵此方へ燃えて來る。

同丙　成る程コリヤ、又逃げ出さんと何うもならへん、皆來なはれや。

（避難民は妻子を連れてそこから又逃出して行く、後暫時、人影も無い。）

（大鹽平八郎父子、白井、橋本、渡邊、庄司、瀨田、大井、植岡、若藏、三平、大工作兵衛等離れ〳〵に、二三人づゝこの川岸まで落ちて來る、まだ槍を持つたり、鐵砲を持つたりしてゐる者もある、庄司は負傷して、片腕を吊つてゐる、大鹽は悲痛な顏色で默然として川岸に立つて、眞赤な空と水とを眺め入つてゐる、皆も暫くは言葉もなく、凄壯な夜の光景を見てゐる。）

（貧民らしい、疲れ果てた男が二三人、そこを通る。）

庄司（傍へ寄つて行き）見かける處、困窮して居る人らしい、これは我等の寸志だ。（懷から小金を掴み出して、つき付ける）

貧民甲　ヘイ……これをやらうと仰るので？

庄司　然うだ、遠慮なく取つて行つてくれ。

貧民乙（うさんさうにヂロ〳〵見て）ヘエ……有難うはおますが……。

大井（傍から）取つて行き給へ、君等は隨分困つて居るだらう。

貧民甲　ヘエ、何しろ貴方樣、大飢饉の上に又この大火事と來て居ますんで、さん〴〵な目に逢ひやしたが……。

（貧民、丙、二人の袂を引張り、そつと注意する。）

同乙　御志は誠に有難うおますが、マアこれは戴いた體にしておきやす。（と後退する）

大井　何うして取らんのだ。

貧民乙（慄へ聲）か丶り合ひになりますと、えらう難儀がか丶りますでな。

庄司（苦笑）そんな心配は要らぬ、天から君等への授かり物だ。

貧民甲　お上が怖うおますよつてな。（慄へながら一さんに走り出す）

同乙　御法度が怖うおますさかい。（云ひ〳〵此れも逃げ

て了ふ）

大井（嘲つて）馬鹿め、貧乏人はもう骨まで拔かれて居るんだ。

庄司（悲憤の調子）張合のない奴等だ。（金を地上に拋つ）

大鹽（それをヂッと見てゐたが）諸君、もうこれまでだ、連判狀は燒捨てゝ了はう（と懷から一卷を取出して、土藏のくづれ跡の火の燃えてゐる中へ投ずる）皆、武器を投げ捨てい。（自ら槍を川中へ投込む、庄司は鐵砲を杖にしてゐるので離さない、他は一同大鹽に倣ふ）堺筋で、大砲方の梅田がやられたのが、我等の運の盡きだつた、それに日頃眼をかけてやつた渡邊村の者が、一人も馳附けなかつたのも手筈を狂はせた、……人外者は矢張人外者だつた、……彼や是やで脆く敗れたのは殘念だが、今更人を咎める事はない、又天を怨む事もない、唯親戚故舊、友人門下たる諸君にはいかにも氣の毒だ……誠に氣の毒千萬だ。

瀨田　先生からそんなお言葉を聞き度くはございませぬ、私等は少つとも悔んでは居りませぬ。

大井　悔んで居て堪るものか……私等の一念でこんなに空も水も眞赤になる程市中が燃え上つたのを見ると、胸の鬱忿が晴れる、奸賊も游民も少しは思知つたであらう。

庄司　何んにせよ、初一念通り行つたのでございますから、遺憾には思ひませぬ。

大鹽（悲痛な調子で）イヤ、もつと何うにか成る筈だつた、大勢の窮民がもつとあの金や米を拾うてくれたら善かつたのだ……鹿臺の財が徒らに燒けるかと思ふと殘念だが……併し、天の警めにはならう……度膽を冷して慄へて居る奴も大勢居るに違ひない……だが折角こゝまで逃げて來て見つかつてもつまらぬ、諸君、こゝで解散する、それ〴〵所決してくれ給へ……橋本君はおゆうやおみねの處へ逃げ歸つて潔く自害するやうに勸めて貰ひたい。

橋本　何處迄も、先生と御一緒にと思ひましたが、では兎に角一應村へ歸る事にしませう。

大鹽（切なげに）何卒萬事よろしく。

作兵衞　先生、私は何處までもお供をさせておくんなさい、無理から引張り込まれたやうなもんやが、先生の御心底に感心してしまひやした、死ぬまで一緒に行かしておくんなはい。

大鹽　濟まなかつたな……併しそんな事を云はんで落ちてくれ。

作兵衞　イヤ、何處までもお供をして行きまッせ。

大井　オ、、船が來る……あれへ乘りませう、兎に角早く。

庄司　オーイ、船頭……一寸と此方へ附けてくれ。
船頭　ヘイ……（と漕ぎ寄せる）直ぐに行きまッせ。
大鹽　（火事を眺めながら）まだ盛んに燃えて居る……容易に消えさうもない……游民等の家は竈の下の灰まで燃えい……我々が救はうと思うた貧乏人も、あれ丈骨が拔けて居るのなら、魂がないのなら、……イヤ中には恩義も知らぬ渡邊村の窮民のやうに、心まで腐つて居るのなら、皆、一度に滅びて了へ、燒け盡して了へ……大阪市中が燒野原になれ、イヤ、國中が燒野原になれ……そして全く新しい芽が生えい。
格之助　人をも天をも怨むまいとは思ひますが、私も何んだか殘念で堪りませぬ。
大鹽　（反省的に）だが貧民等がそれ程まで氣力が無くなつたのは、誰の罪か？……さう思へば一倍可愛さうにもなる。
庄司　先生、兎に角、船へ乘りませう……船へ乘つて相談いたしませう……ア、何者か近寄つて來ます。
瀨田　先生、早く。
（大鹽父子を促して、匆々に船へ乘込む。）
與力、同心　（二三人、火事裝束で駈附ける）その船待て、コレ船頭待たんか？
庄司　（の聲）船頭早くやれ、やらねば斬るぞッ。
（船から鐵砲が鳴る、與力同心は身を地上に伏せて、呼び子笛を吹く、艫を漕ぐ音。）

第五幕

美吉屋離座敷

油懸町美吉屋五郎兵衞の離座敷、上手は壁、高い小窓が附いてゐる、柱の釘には鼠色の法衣がかけてある、下手に一間の床の間、山水を描いた小幅が懸り、樂燒の小瓶に椿の花が活けてある、その隣は襖、正面は障子そこを明けると緣側で、雨戸が締めてある、座の一隅の火鉢に土瓶をかけ、茶器もある、布巾をかけた膳が片寄せてある。

○

幕開く時、寢床が二つ列んで、坊主頭の男子が二人寢てゐる、火の用心の拍子木を打つて戸外を通る、遠くの方で犬の鳴聲が聞える、一方の蒲團がムク／＼動いてゐたが、やがて刎ね起き床の上へ坐つて、溜息を吐いてゐる、それは格之助である。
格之助　ア、……一度目が醒めたら、何うも寢附かれぬ……もう何時（なんどき）か知ら……（云ひ／＼手探に枕元の煙草盆の火を硫黃木に移して、行燈に灯を入れ隣の床をのぞい

て見て）父上は善う眠つて居られるやうだ。

大鹽　……何うしたんだ？……夢でも見たのか？

格之助　ア、矢ッ張……お目がさめて居ましたか？

大鹽　イヤ、今ふいと目がさめたのだ、そしたら汝が起上つて行燈に火を附けて居るから、何うしたのかと思つた？

格之助　（疲れたやうな口調で）私はこの頃、何うも夜おちおち寢られませんので、弱つて居ます……それでも、父上は何の御屈托もなさゝうに、毎晩よく眠つて居られるやうで、羨ましくなりました。

大鹽　（諭すやうに）今更、悔んだり、懼れたりしても仕方がないではないか？　イヤ、私等は今こそ眞實に深淵の上に臨んで居るのだ、地獄の口に立つて居るのだ、斯うした時に自分の魂の落ち附きどころが、ハッキリ見えて來ようといふもんだ（云ひ〳〵床の上に起直つて）でも斯うして居るのも、もう長い間ではあるまいぞ。

格之助　（ギョッとしたやうに）エ？……では何うなるのでございますか？

大鹽　何うなると云つて、大抵汝にも分つてるだらう。

格之助　（顏をのぞいて）生きられる丈け生きてゐて、世の成行を見ようといふのが、父上の御考へではございませんか？

大鹽　（輕く頷き）ウム、私も無論然うしたい、出來る事なら支那へでも高飛したい氣では居たが、何うも駄目らしい……こゝへ隱れてから一月餘りになるが、いかに野呂間な今の役人でも、もうソロ〳〵氣が附く頃だ、お互に覺悟をして居らねばならぬ、死遲れて生恥を晒らすまいぞ。

格之助　……勿論……私もそれは覺悟して居らぬではありませんが、今まで運善く見顯はされずに濟みましたから、探す方でも持あぐんで、ソロ〳〵油斷する頃かと思ひます。

大鹽　イヤ、この間から、五郎兵衞がチョイ〳〵會所へ呼び出されて居るらしい、私等も元の職掌柄覺えのあることだ……もう長くはない……これも天命だ。

格之助　（溜息を吐いて）でも私はまだ、この儘、死に度うはありません……もつと生きて居て、澤山仕たい事がございます、……それを仕遂げなければ……。

大鹽　（低い、力ある口調で）コレ……今更未練がましい、汝は何の爲めに學問をした？……大切な場合に凡愚の情に返るのでは學問も附燒刄同前ではないか？　イヤ、汝はそんな男ではない筈た……私は汝を見損なうたとは思はぬ……（苦悶の表情）……然う思ひたくない、何卒もうそんな女々しい事は二度と再び云うてくれるな、私も聽

き度うない。
格之助（暗涙を抑へて）濟みませぬ……でも私は……。
（雨戸をコツ／＼叩く音。）
大鹽　シッ（と、輕く格之助を制し）誰か來た樣だ……家の人か？　行つて見て來い……だが、油斷はするな。（と脇指を引寄せる）
格之助（脇差を手にし）ハッ……（小聲で云つて、起つて行く）
（大鹽平八郎は耳を澄まして、身構をして居る。）
（雨戸が滑つて、やがて格之助と美吉屋五郎兵衞とが、囁き合ひながら室内へ來る。）
大鹽（顏色が和ぐ）オ、五郎兵衞か？……この夜更に何うしたんだ？
五郎兵衞（靜かに、そこへ坐つて）今日も又、會所へ呼び出されましてな、嚴しいお尋ねがございました……私はいろ／＼云ひ拔けはしましたが、事が何うもむづかしいやうに思はれます、與力の内山彥十郎といふ方が調べ方で、それが又先生に怨がありますのか、酷い惡口雜言を申すのを默つて聞くのが何うも辛うて堪りませんでした……兎に角、斯うしてやつと返されはしましたが、いつ何時又連れに來られるやら、役人衆に踏込まれるやら分りませんで、御油斷はなりませんせ。

大鹽（頷いて）然うか……内山彥十郎なら、昔から私の敵役に廻つた西組の與力だ、彼等風情に附覗はれるとは、所謂蛟龍が猿猴の嘲りに逢ふのだ（苦笑）……併し、あの男にしてはよく嗅ぎ附けたな。
五郎兵衞　イヤ、實は家に居た女中めが、この三月の出代りに平野郷へ歸りましてな、この米の高い時節に、美吉屋では米が毎日五合宛、消えて無くなる、不思議だといふやうな事をつい喋舌りまして、それが元で手をつけ始めたらしうございます、壁に耳とは善う云うたもんでございますな。
大鹽（ホッと溜息）然うか？　フム……これも私が武運の盡きだ、誰を怨まうやうもない……イヤ、怨むどこではない、五郎兵衞、汝には重々容易ならん厄介をかけた……厄介の上に、とんだ迷惑をかけて如何にも氣の毒に思つて居る……何卒赦して貰ひたい。
五郎兵衞（手を掉つて）イヤ、もう先生、今更そんな事を仰らんでも私はかねてから腹はきめて居りました、先生とはあゝして因緣もありますし、此の度の事だつて、先生に一點の私慾も無いのは人が善う存じて居ります、皆世間の爲めを思うて生命がけでなされた事でございますもの、それが證據にはあれ程の大火事に逢うて燒出された市中の者が皆、先生の事を樣附にして呼んで居るので

も分ります、これが何よりの證據でございますよ。

大鹽　（感に打たれたやうに）……私の志を知つた者の居るのは嬉しい、併し、世の中の模様は其の後變りはないかの？

五郎兵衞　ヘイ／＼、道頓堀の芝居小屋がお救ひ小屋になつて、何千といふ貧乏人があそこへ入りました事はもうお耳へ入れましたな、お圍米も大分外へ出ましたやうだし、金持も奮發して寄附をやり出しましたし、それに貴方近い中にお上の補助金で米を安く賣る事にもなりますさうで、それもこれも皆先生のお庇でございますよ。

大鹽　だが、米價は又一段と騰つたといふではないか？……困る者は一層困る許りだの。

五郎兵衞　何に、前より惡くなる氣遣ひはございません、いかなお奉行でも、金持でも、目がさめぬ筈はございませんから……さう云へば、東西の兩奉行ともあの騷動の時に揃うて落馬せられたといふのが專ら市中の大評判になりましてな、寄るとさはると笑草にして居ります……それから貴方、あの時の城方のあわて方も大變なもので、鎧櫃の中から鍋釜が出たといふ噂まで一々傳はつて居ります、御武家様方ももうあんまり威張れん事になりました。

大鹽　フム……武士どもの腐り果てゝ居る事は皆の目の前に曝らされたゞらう、二百年の太平で彼等は皆魂を無くしたのだ、鎧櫃の中へ鍋釜を入れて世間體を胡麿化して居たのだ、之からは其の胡麿化しももう利かん事になつたな。

五郎兵衞　もう誰も武家方を恐れる者はありません、イヤ斯う云うては何んでございますが、内々は馬鹿にし拔いて居ります。

大鹽　（沈痛な調子で）それにしても、私と一緒に事を舉げたのは皆眞實の武士許りだつた、……仁義の道を知つた武士許りだつたが、ア、した末路を遂げさせたのはいかにも殘念だ……渡邊も死ぬ、瀬田も死ぬ、大井も庄司も捕まつたといふのだな。（考へ込む）

五郎兵衞　ア、先生まだ申上げなんだがお氣の毒な事には、おゆうさまやおみねさまが京都でお召捕になつたといふ噂でございます。

大鹽　ア、然うか……では矢ッ張死遲れたか？……弓太郎まで勿論召捕られたであらうな。

五郎兵衞　（涙含んだ聲で）ヘイ……左様ださうにございます。

大鹽　（暫時沈默……悲痛な表情で）それも天命だ、今更、悔む事もない。

五郎兵衞　兎に角、皆様のお行末をお耳に入れませんでは、

先生も御氣懸りであらうと思ひまして、こんな不吉な事も申上げました……情ない事でございます。（涙を拭く）

大鹽　イヤ、これで却つて心殘りも無いといふものだ……併し長い間、貴公には飛んだ御厄介をかけたり御迷惑をかけたりして濟まなかつた、何度禮を云うても云ひ足らんが……。

五郎兵衛　イヤ、もう決して、其麼事は御心配なされますな。

大鹽（少し調子を更へ淋しい微笑さへ浮べて）だが、父子が坊主姿で、夜に紛れてこの家の戸口から入つた時は嘸ぞ驚いたゞらうな。

五郎兵衛　ヘイ……イヤもう全く驚くには驚きましたが、一旦河内路へお落なされてから、又この大阪の市中へ御引返しなされた先生の大膽さに私はもう口が利けませんでした……あの夜の事を思ひ出すと、夢に夢を見て居るやうな氣がいたします。

大鹽　何にしろ、おゆうにつながる緣で、貴公も無理に卷添を食つた譯た、天災たと思うてあきらめて貰ふ外はない。

五郎兵衛　先生のやうに、唯、默つて書物を讀んでさへお出なされば、樂隱居樣で濟む立派な御方が、世間の難儀を見過しに出來んで自分で火の中へ飛込なされたのでございますもの、染物屋風情の私が、さうした男氣の先生を二十日でも、三十日でも、おかくまひしたかと思ふと自分でも何んだか少しは男になつたやうな氣がします、又いつ何時、呼出しが來るかも知れません、ではこれでお暇いたします……御油斷はなされますな。

大鹽（ヂット見入つて）……では左樣なら。

五郎兵衛　若先生……貴方は御氣分でもお惡いのではございませんか？

格之助　否や、氣分が惡くはない……長々御厄介かけました。

五郎兵衛　……御暇乞いたします。

（五郎兵衛は心殘しながら出て行く。）

大鹽（後影を見送つて）氣の毒な男だ……致方もないが。

（格之助は默つて、床の間の方を見て居る。）

大鹽　何を一心に見つめて居るんだ？

格之助　あの椿の花が、いかにも美しく咲いて居るではありませんか。

大鹽　フム……あれもこの家の者の心盡しだ……薄暗い火影で、赤い花を眺めるのも何んだか妙な趣があるものだのう。

格之助（憧憬的に）世間は春になりましたでせう……櫻の宮の櫻ももう散つて居りませうな？

大鹽　（冷やかに）櫻など咲いても見に行く者はあるまい、この饑饉年に、花に浮かれる暇のあらう筈はない……だが格之助、汝は何うかしたのではないか、先刻から默つて考へて許り居るやうだが？

格之助　（感傷的に）ハイ……私は正直な事を申ますが、何うもこゝでこのまゝ捕つて死ぬのが殘念で堪りません……出來る事なら……一應こゝを逃出したいと思うて居ります。

大鹽　（顏色をかへ）何うしてそんな馬鹿なことを云ひ出したんだ？　平常の汝にも似合はない……人間大切な場合に臨んで、心の落着を失うては十年の修業が何の役にも立たぬぞ、一歩戸外へ踏出したら直に縛られる位の事は、疾くに分つて居る筈ではないか？……イヤ、踏出すまでも待たぬ、五郎兵衛が暇乞に來たのは覺悟してくれといふ謎だ、今に與力同心が踏込んで來るだらう、その時には遲れを取らず父子立派に自殺して見せて、死際の恥を曝さぬ覺悟をして居ねばならぬ、今更、こんな事を云ふにも當らぬ筈ではないか？

格之助　（キョト／＼四邊を見廻はして）その與力同心の踏込まぬ中に、私は逃げ出したいと思ひます、手を叉いて死を待つのは、私には堪らない……遁はぬまでも逃げられる處まで逃げて見たいのでございます。

大鹽　（白眼に見て）汝は急に臆病神に取憑かれたのか？……イヤ、正氣で云うて居るのとも思へない……（情なさゝうに）……今日まで私の云ふ事に何一つ忤はず、義理の父子でも肉親の父子以上に、親み合つて居た汝が、この期になつて父たる私に言葉を返すとは、あまりに思ひがけない事だ、……汝は正氣ではないのだらう？

格之助　（反抗的に）父上、私は今日まで何一つ、父上の仰る事に忤ひはいたしませんでした、……父上の仰る事は凡て間違がない、父上の行ひにはすべて誤りは無い、一言一行、皆父上に習うて、今日まで蹤いて參りましたが、あの騷動を起して以後、私は今までの私に疑念が生じて來ました、……愈々、死ぬ間際が近寄つたかと思ふと、この儘死ぬのは如何にも殘惜しい、今一度、改めて自分の思ふ通りの生き方をして見度いと、その一念が矢も楯も堪らずこの胸の中にうづき上つて來るのでございます。

大鹽　（悲痛の表情で）何に？　私の教にも行にも、疑念が生じたと？……今まで私に言葉一つ返した事もない汝が、急に打つて變つて、そのやうな事を云ひ出すとは私は何うも汝が正氣で云ふのだとは思へない！……汝は血迷うて居るのに相違ない……氣を落着けい、死際になつて人に笑はれるな。

格之助　イヤ、血迷うては居りませぬ、父上の御言葉通り傀儡のやうに動いてゐた今までの私こそ血迷うて居たのではないかと思ひます、……實はあの天滿の屋敷で殺された宇津木の言葉が、私の耳の底にこびり附いてまだ離れません、父上は自分の本心から今度の事を企てられたのではなく、一時の不平鬱憤から良知の學問に引ずられて、學問の罠にかゝられたのに相違ございません、そして私は又私の本心から今度の企てに同意したのではなく、父上に引ずられて、同じ罠にかゝつたのでございます、……可惜一生を無駄にしたのか、殘念で堪りませぬ……。

大鹽　（格之助な憐むやうに）今更、馬鹿な事を云ひ出したもんだな、私の本心と良知の學問とは一つであつて二つでない、王道の根の衰へを慨いて、覇道の幹に斧を加へようとしたのが私の本心だ、俗吏を誅し、游民を滅して、天下の民百姓の饑渇を救はうとするのは私の良知だ、私は引ずられはせぬ、引張られもせぬ、凡てはこの心の本然の赴くまゝに知つた事を行うた丈だ、……不幸にして事は敗れた……だがこれは唯、一時の勝敗で、悠久の天は必ず私の志を行はれずには置かぬと堅く信じて居る、……汝は眼先の事許に見る人間だとは思はなかつたに、此の期になつてそんな情けない事を云うて、この上私の憂ひを增させてくれるな、

格之助　（焦々した調子で）併し父上は、あの八軒屋河岸で、燃えさかる市中の火事を見て何んと仰いました？　民は骨まで腐つて居る、折角救ひの手を出しても刎ねのけるといふやうな事を仰いました、そして、今まで生命をかけて庇つて居られた筈の窮民等に、呪ひの言葉をさへお吐きかけなされたではございませんか？　後で云ひ消しはなされたやうだが、あの時、私はハッと思ひました、成る程取返しの附かぬ無駄骨折だつた、殘念だと思ひました、矢張、私等は眞實に民百姓を勞るといふより、良知の學問に引ずられて、こんな危い場所まで誘ひ出されたのだ、……確かに然うだ、そしてその良知といふのも、私の怨や高慢な任俠などゝいふものゝ混り物ぢやないか知ら、イヤ、矢ッ張、一つの私念だ、我意だと心附くと胸板を貫かれたやうな氣がしました、……現にこの度の騷動が世間を惡くはしても、善くはせなかつたではございませんか？　そして私等はこんな狹い處に日蔭者になつて屈んで居て、同志の者は召捕られたり、自殺したり、その上、最愛の妻子にまで難儀をかけ、何の得る處がありましたか？

大鹽　（額には深い悲痛の皺が刻まれてゐるが、落着いた調子で）成る程、八軒屋河岸で、私が一時、悔んだり、失

望したりしたのは眞實た、民の腑甲斐なさを憤つた事も善く憶えて居る、今でもあゝまで脆く敗れたのを殘念だとは思うて居る……殊に奉行を殺さなかつたのが、一番心殘りだ……併し、考へて見れば假令井戸の中へ陥つた者を救ふために、自ら井戸へ飛込んでそのまゝ救ひも出來ず、自分も溺れ死んだ處が少しも悔む事はない、良知の命ずるまゝに行うたといふ事が體を殺しても心を生かすからだ……又假令私怨たの、高慢たの、任侠たのといふものがその中に混つて居ても、イヤ、凡てが一つの私念にもせよ、我意にもせよ、それは矢張純金の本體を包む荒鑛だ、私は天が純金を露出したまゝ野天に放つては置かぬ、何時も荒鑛に包んで居る理を此の頃明に悟つて來た、天の私念た、天の我意だ！　私は今然う悟つて、心の底から深い慰を得て居るのに、汝は却つて、私を疑ひ天を疑ふ樣な事を口にする、汝は靜かに考へて良知を磨いて死ね。

格之助　(父の顏を見つめて)　では父上は、今度の事で眞實に失望はなさらんのでございますか？　世の中が前より悪うなつても、何んとかお思ひなさらんのでせうか？

大鹽　物事は考へ樣だ、役人は僅かに天を恐れ始めて居る、游民等も僅かに目を醒ましかけて居る、始めから相當の金を融通して救民の策を立てた方が、今度の騷動に逢ふよりも十露盤の珠に合ふ事にも氣が附いて來たに相違ない、それ丈でも天の警めに當つてゐる、イヤそれ許りではない、武家の腐れ加減が、萬民の目の前に曝されたといふではないか？　皆が馬鹿にし切つて居るといふではないか？　今に見い幕府覇道の世は必ず滅びる、滅ぶのが天意だ、そして王道の天子の世が始まる、神武中興の昔に返るのはもう遠くはないと私は信じて居る、……この大鹽は關中に入る事は出來なかつた、だが陳勝吳廣の役目は果して居る、若し私のこの信念が誤つて居たら、大虛にも久遠の生命は無かつたのだ、唯、枯寂の虛無に過ぎなかつたのだ……併し私の心は決して虛無には陥らぬ、飽くまで大虛の久遠の生命を信ずるぞ、王と民との前途を信ずるぞ。

格之助　(感に打たれたやうに)　父上は成る程、天命を知つて居るお方のやうだ……(嘆息して)　けれども私は、まだ三十歲にもなりませぬ、さうした氣持にはなりかねます……他のために盡さうとて、親身の者を蹂んじたのは眞實の仕方だらうか？　イヤ親身の者を苦め拔いて何の仁がありますか？　せめて牢屋までゞも行つて、おみねや弓太郎に一目逢つてから死に度い……せめて、それ丈の事でも出來ねばあまり情けない、あんまりみぢめな一生だ、……父上は、さうは思ひなされませんか？

大鹽（沈默、唯、瞑目する）
格之助　父上は、可愛い弓太郎の顏を、もう一度見たいとは思ひなされませぬか？
大鹽（沈默、答へない、顏には痙攣的な表情が動く）
格之助　……ア、窓が白うなつて來た……。
（雨戸をトン／＼と叩く。）
（大鹽、脇差片手に起つて行く、やがてこの家の女房おつれは入來る。）
おつれ（四十歳餘りの、何處か垢ぬけた女）あれから又、五郎兵衞は會所へ呼出されて行きました……時刻はまだ早うございますが、暖い御飯を焚きましたから持つて參じました、何卒お召上り下さいませ。
大鹽　それは／＼……いろ／＼御手厚い世話になつたな。
おつれ　否え、……さぞ、御窮屈な事だらうと思ひましてな。
大鹽　イヤ、今日まで、御夫婦の心配は容易ならん事だつたと御察して居る……御禮を云ひ置きますぞ。
おつれ　めつさうもない、……さう云へば、おゆうさんも、とう／＼京都で捕まりましたさうで……眞實に御氣の毒でございます。（眸を拭ふ）
大鹽　彼女も、汝とは義姉妹の仲だつたが、……こんな目に逢せるのも因縁事と思ふより仕方がない。

おつれ　若先生……何うかなされましたか？　御血色が大そうよくないやうでございますが？
大鹽（淋しい微笑）今更、妻子に逢ひ度いなど丶女々しい事を云ひ足すので叱つたのだ。
おつれ（ポロ／＼涙をこぼし）でも、それが眞實の人情でございますよ……お察し申上げます。
格之助（ふと耳を澄ませ）何んだか、そこらに人の足音がするやうだ。（不安さうに、耳を疊へすり附けて氣配を窺ふ）
大鹽（も耳を澄まし）フム……忍び／＼に、人の足音がして居る。
おつれ　エツ……（と顏色青ざめ、慄へ聲で）では、私は母家の方へ歸りますから。（アタ、フタ、出て行く）
大鹽は行燈の燈を吹消す、小窓丈が明るい。
（雨戸をトン／＼と叩く音。）
おつれの聲　もし、もし。
大鹽（脇差を取つて、そつと、そこへ行く、直ぐ引返して凛とした口調）格之助……覺悟はよいか？
格之助　エ……ではやつて來たので厶いますか？　脇差を取る。
大鹽　こゝらの障子襖を雨戸際に立てかけよう、そして用意の火藥を仕掛けるぞ。

（障子襖を外づし、雨戸の處へ運ぶ、そして火をかける。）

（外から「もし／＼」としきりに雨戸を叩く。）

大鹽　今行くぞ……サア格之助、覺悟せい、介錯はする。

（格之助は、そこへ坐つて動かない。）

大鹽（聲を勵まし）サア、早く自殺せい、躊躇すると繩目の恥を見るぞ。

格之助（反抗的な口調）父上、私は自殺出來ません。

大鹽（焦立つて）この期に及んで何を云ふツ？……早く自殺せぬか？

格之助（端然として）これまで父上の仰る事は何一つ忤はなかつたが、今この死際になつて、せめて唯つた一度でも、父上に忤ひます……飽迄忤ひます。

大鹽　何ツ？

格之助　サア、父上、自殺はしませぬから、貴方の御存分になさつて下さい。

大鹽（思はず躊躇する）オ、あの時の、宇津木の素振そのまゝだ……最愛の弟子を殺し、今又恩愛の子まで手にかけて殺さねばならんのか？

格之助（刺す樣な調子で）これが聖賢の道でございますか？

大鹽（一喝）不覺な奴。（と拔打に切る、格之助、ドウと後に倒る、火は早盛んに燃え上る）

（外からは雨戸を叩き破らんとする氣配。）

與力同心の聲　大鹽平八郎、卑怯々々。

同　サア、出て來い、出て來んか。

（「御用だ」「御用だ」と罵り立てゝ雨戸を打破る、その時、火は仕掛けた火藥に移つて白い煙が立上る、與力同心は、火と煙に隔てられて近寄れない。）

大鹽　今こそ平八郎は身も心も大虚に歸つて、天の淨玻璃の眼で世の行末を見て居よう。（喉を一突き、刀を與力同心等の方に投げつける、火煙は室内にひろがる。）

―幕―

（一九二一・五、二八）

剃刀（一幕）

登場人物

木村爲吉　理髪師
お鹿　內緣の妻
佐藤敬一　小學校々長
野口早太　村役場書記
岡田秀作　代議士、參事官
勘七　富豪伊勢屋の息子

場所
東京附近の小村驛

時
現代

〇

舞臺は片田舍の理髪店の內部、上手三分は疊を敷いて茶の間全帶が、來客の待合處になつてゐる、古びた長火鉢を据ゑ、粗末な茶器などがそこ等に轉がつてゐる突當りは割の障子が二枚、その左手に紗撚ひの簾が裏座敷への出入口に懸けてある、右手の壁には曆入の彩色のけば〳〵しい廣告繪や、石版刷の戰爭畫などがベタ〳〵貼附けてある、理髪床の正面上手寄りには、出入口の玻璃戸が二枚、それから下手へ寄つて、緣の剝げた姿見鏡が二つ、棚の上にはブラッシ、香水瓶、剃刀掛、シャボン函、檜扇の花の赤いのが小鏡に映つてゐる。花瓶などゴタ〳〵と列び、下手の壁際には洗面臺が立つてゐる、椅子も三臺、小汚いのが配置されて、何んだか荒んだやうな、塵埃臭い空氣がそこらに漂うてゐる。

白い仕事着を被つた爲吉は、神經質らしい眼を光らせながら、一人の男の顏を剃つてゐる、火鉢際には二十七八の蝶々髷の髮が亂れて青白い顏をした、眼元に愛嬌のある、お鹿が長煙管で煙草を吹かしてゐる、二十四五の棘栗頭の、ニッケル緣の眼鏡を掛け、小倉の袴を着けた村役場の書記野口早太は、上り框に腰を卸して新聞を覗き〳〵話してゐる。

野口　今日は午後から淨福寺で政談演說があつて、それから夜にかけて懇親會があるんだ、何しろ代議士で今度の內閣で參事官に任命されたんだし、新聞にもこんなに書立てゝある位だから、此の邊の評判は大したものだ、幸、日曜日でもあるしするから近村からも隨分有志者が

集つて來るだらう、岡田さんのやうな人物が出たのは此の村の名譽だね。

お鹿　まだ若い方なんでせう、夫と同年配位なもんでせうねえ。

野口　何んでも三十代だらう、四十になつたら縣知事か局長、五十になつたら大臣だらうね。

お鹿　ヘエ、そんなに豪い人ですかねえ、何んな顏をしてる方でせう、一寸見たいわ。

野口　（笑つて）　別に俳優のやうな顏をした色男でもないサ、だが眉の太い、口元の引締つた、一寸見ても貫目のある人だね、殊に眼の光の鋭さと云つたら、一目で他人のお腹の中まで見破らうといふやうな處があるよ。

爲吉　（冷やかに笑つて）　千里眼つていふ奴の親類見たいだな。

野口　イヤ戲談ぢやアない、昨日、村役場へ訪えて村税の事なんかいろ／＼聽いて行かれたが、後で村長も收入役も、「あの眼が恐い、一物ある」つて云ひ合つてたんだ、それに第一、氣輕に村役場へテク／＼歩いて來るなんて、平民主義の人だつて、皆も感心してゐたんだよ。

爲吉　平民主義か……勝手な時には然うなんだらう。

お鹿　宅ぢやア昨日、ワザ／＼御機嫌伺ひに行つたのに來客があるつて、面も出さないのは不都合だつて、ブリブリ怒つてるんですよ、けれども身分が違ぢやア仕方がないぢやアありませんかねえ。

野口　そりや然うサ、己だつて、顏は見たが、まだ口を利いた事はないんだからな。

爲吉　（ブラシを掛けながら）　村のお役人樣と、政府のお役人とは、そりや資格が違はアな、けれども己と秀作さんとは、そんな筈はねえんだ。

お鹿　村の小學校で、同じ級だつたし、卒業する時も宅のが一番で、あの方が二番だつたからつて、今でも矢張昔の友達の樣な事を云つてるんですが、世間は然うは行きませんわ、あんまりそんな事を人樣に云つちやア笑はれるつて、私が氣を揉んでるんですよ。

爲吉　フン、何方が笑はれるんだい？

野口　昔は昔、今は今サ、村役場の書記と政府の參事官と資格が違つてりやア、田舍のぢいさんは小使さんと、高等官二等とは尙更縁もゆかりも無ささうだ、爲吉君の舊友も、ちと桁が外れ過ぎてゐるやうだよ、氣候の加減かも知れないな。（と新聞を取り上げる）

お鹿　眞實ですよ、この頃は妙に氣六つかしくなつて、昨日なんか記事の出てゐる新聞をべり／＼引裂いたりなんかするんですもの、宛で氣狂ひだつて笑つたんですよ。

爲吉　貴樣こそ、餘計なお喋舌をするな。（叱り付ける、ヲ

ッと睨み、それから客を洗面臺の處へ連れて行く）

野口　今日の新聞は二段埋めてあるな「錦を故郷に飾れる岡田參事官」つて、二號標題だから豪いよ……何しろ、善かれ、惡かれ人間も新聞に出されるやうにならないと駄目だな、生きてろか、死んでるか分らないやうな事をして、愚圖々々、その日暮らしをやつてゐるんぢやア全く生甲斐がない。

お鹿（苦笑して）私だつて、これで新聞に載つた事もあるんですがねえ。

野口　然う、然う、例の無理心中の一件かね……お鹿さんも兎に角あの頃は若かつたよ。

お鹿　今はもうこんな婆さんになつちまつたわねえ。

野口　イヤ、然ういふ譯ぢやないよ……今でも矢張り美しいには美しいがね、（少し周章てながら）あの相手は監獄に入つたんだつたね、でもまあ、お鹿さんが負傷しなかつたのが何より幸福だつたよ。

お鹿　お庇で生き延びて、今ぢやアざんばつ床のお女房さんかね、斯うなつちや新聞へも出ないわねえ。

野口　イヤ、我々が新聞へ出るのは碌な事ぢやないよ、まア、出ない方が増しとして置くんだな。

（爲吉は伊勢屋の息子勘七の散髮を了へて、上り框へ腰を卸ろし、煙草を一服する。客は大島の單衣に鼠色の縮緬の帶をしめ直し、卷煙草を吹かし始める。）

お鹿　若旦那、まアお掛けなさいませな。

勘七　有難う。（腰を卸ろす）

野口　伊勢屋さん、まア遊んでお在なさい、今に這般の將棋の仇打ちをやりますよ、ちよつと一つ、頭髮を濟まして貰つてからね。（早く椅子へ倚る）

勘七（お鹿の顏と爲吉の顏とを等分に見ながら）　お忙しいでせう!?

お鹿　イエ、別に貴方……まアお上んなさいましな、お茶を一つ入れませう、番茶ですけれども。

勘七　お構ひなさらんで下さいよ。

お鹿　何んにも貴方……まア此方へお上んなすつたら善いぢやアありませんか。

勘七（爲吉の方を氣にしながら）　お邪魔ぢやありませんか？　（云ひ／＼片足づゝ膝行り上る）

お鹿　此頃は、奧さんの御病氣はおよろしい方ですか？

勘七　否え、病氣保養に里へ遣つてあります、あんなものはもう歸つて來ないが宜いんです、病人を抱へ込んぢやア一生のお荷物ですからねえ。

お鹿　でも可哀さうぢやありませんか？

勘七　仕方がありませんよ。

野口（笑つて）勘七さんが自分の病氣を傳染して置い

て、それを打捨るなんて随分ぢやアないか？　かういふ人の細君になつたものは随分悲慘だよ。

お鹿　眞實ね、一體、男子つていふものが得手勝手なんだわ、若旦那に限つた事ぢやない。

野口　此處の親方なんか、女房孝行つて評判だが、でも矢つ張お鹿さんの方には怨があるんだね。

お鹿　ありますともさ……。

（爲吉は默つて勘七の方をジロリ／＼尻目にかけてゐる。）

野口　時に親方、煙草が濟んだら、チヨツト遣つて貰はうぢやないか？　午後からお寺の方へ行つて、會場の整理を見屆けて來なけりやアならんから、これでナカ／＼忙しいんだ。

爲吉　でも將棋の仇打だなんて、吞氣さうな事を云つてたぢやアないかね？　まアもう二三服遣つてからだ、己だつて元來人の頭髮を刈る爲に生れて來た人間ぢやアないんだからな。

野口　だつて商賣となりやア、そんな變痴奇論は止す事だよ、ざんばつ屋で飯を食つてる以上、お客樣の云ふ事を聽くのが當然だ。

爲吉　八錢のお客樣のお庇で、飯を食はせて貰つてるんだな、難有い事だ。

お鹿　汝さん、そんな馬鹿な事を云はないで、早くして上げたら宜いぢやアないかね、野口さんだからこそそんな無遠慮な口を利いても判つてなさらうが、商賣に障るよ。

爲吉　己やもうつく／″＼忌になつた。寧そ廢業したい位だ。

野口　親方、串談云つちやア困るぜ、此村には此處一軒ぢやないか？　廢業されちやア隣村迄行かなけやアならない、皆が困るよ。

お鹿　この頃は急にあんな事許り云ひ出して來て、私も一人で困らせられてゐるんですよ……若旦那も些つと云つて聽かせてやつて下さいな。

勘七　兎に角、稼がなけりや仕方がないでせう。（茶を呑み／＼云ふ）

爲吉　己等は稼がなけやア仕方がなくて、若旦那は遊ばなけやア仕方がないんだらう、尊く出來てゐますぜ。

お鹿　そんな事をツケ／＼云ふもんぢやないよ……若旦那の家は澤山とお金がおありなさるから、稼ぐ方は店の者が大勢引受けてしてゐるんだし、若旦那は唯遊んで居なされば、それで濟んで行くんですわねえ、此方等とは運命が違つてゐるんだからね。

爲吉　フン汝もその運命が惡かつたんだね、お氣の毒さま

だ。

お鹿　惡緣つていふんだらうね。（笑ふ）

爲吉　あの時汝も若旦那に請出されてゐたら、今ぢや伊勢屋の若奥様で、ざんぱつ屋さんなんかとは口も利かない身分になれたんだらうが、馬鹿だつたね、尤も越前屋の酌婦にや、今の身分が分相應だと思つて諦めるんだ。

お鹿　（勃とした顔色）若旦那を前へ置いて、下らん事をお云ひでないよ、馬鹿々々しいツ。

爲吉　（鼻であしらつて）若旦那も昔忘れずに、よくチョク〳〵來て下さるんだから、お禮を云つたが宜いんだ。

勘七　……もう失禮します……ぢやア、これを……。（ト銀貨を出す

お鹿　難有う……二十錢でございますか？　お剩錢を！（起上る）

勘七　いやお剩錢はよろしいんです。（と下へ降りる）

爲吉　お剩錢を持つてお出で……十二錢！

勘七　イヤ……それはもう要りませんから……。

爲吉　要らん事はありません……餘計に貰ふ道理がないから。

（お鹿が渡すのを爲吉は受取つて、客の鼻先へ突出し。）

爲吉　難有う……。

（客は匇々に立出て、戸口の玻璃戸をガタリと軋らせて出て行く。）

野口　親分も隨分ぶつきら棒だな。

爲吉　畜生めツ、（怒つた顔色で、後を睨めながら）まだ何んとか思つてやがるんだから仕末に了ねえ。

お鹿　あゝ一酷ぢやア段々お客が寄り附かなくなる一方だよ、大切な旦那様ぢやアないかえ。

爲吉　ヘン、貴樣の爲めにや然うかも知れないが、己の爲めには油斷のならない贅鳶だ、ざんぱつ屋をだるま屋と間違えてやがるんだらう、生つ白い面をしやがつて、女の尻を追驅け廻る外に能がないんだから箸にも棒にも懸つたもんぢやアない、あんな家潰しでも、富豪の息子だといふので、村の奴らはへい〳〵してやがる、笑はせやがらアな。

野口　（眞面目になつて）そりやア全く親方の云ふ通りだ、あんなのが不良少年つていふんだな……（四邊を見廻して）大きな聲では云へないが……。

お鹿　（口元で笑つて）だつて野口さんも折々、若旦那のお取卷きで料理屋へ上つて行きなさるつて評判がありますよ。

野口　（周章てたやうに）それは一度や二度お交際に行つた事もあるが、幇間のやうな眞似はしないよ、これでも

大望のある身分だから。

お鹿　東京へ行つて勉強するつて云ふ貴方のお話も隨分長いやうですが、愈々何時頃御出發なさるんですか？

野口　講義錄の方はもう卒業したから、これで一二年勉強したら、辯護士か、高等文官の試驗は受けられますよ、一生、村役場の書記ぢやア情ないからね、何時でも上役に頭を仰へ付けられ通して、威張れる時と云つたら、まア滯納稅の處分に行つた時位のものだね。

お鹿　ホ、、、然うでしたつけね、この春、此處へ滯納稅の取立に入らしつて茶碗や膳まで差押へるつて切口上で云ひなすつた時は、チヨツと怖うございましたつけ、平常の野口さんとは人間が變つてゐたやうでしたよ。

野口　（眞面目になつて）職務の執行となつたら、そりやア止むを得ないんです、あゝいふ時は自分が自分でない、國家の法律の力が、自分の身體に宿つて來るんだね、それで、氣の毒だとか、慘酷だとか云ふ感は、何處か腹の隅の方へ押し込められて了ふんです、そして他人の柔脈を押へたやうな氣がして、苦しむのを見てゐるのが、一寸愉快ですよ、後からは氣の毒になつて、關を蹐ぐのが極りが惡いけれども。（と頭を搔いてわざとらしく笑ふ）

爲吉　（冷やかに笑つて）柔脈を抑へるつて云やア私は每日それをやつてるんだね、柔脈つて云ふよりは私のは急所だ、私は每日、剃刀を握つて、人の喉首を剃つてるんだからね、奴先を一つグイと突いたら人間の息の音を止めて了へるんだ、それを思ふと、お客つて皆馬鹿正直なもんだ、此方が何んた恐ろしい事を考へてるかも知らないで、平氣で、首を此方の手へ任せて、髯を溜した奴物で自由自在に生身へ觸らせるんだからね、何んな凄さうな顏をしてゐる人でも、何んな善い身分だと云つて威張つてる奴でも、此方の腕へ首を抱かせたら最後、もう活さうが殺さうが指先一本の働きにあるんだからね、それで私は無事に剃つてやつた後では人間一匹助けてやつたと思つて、腹の中では笑つてるんだ。

お鹿　まあ汝さん、そんな氣狂めいた事を云つたり、考へたりしちやアいけないぢアないか？……汝さん何うも變だよ、お醫者に診て貰つたらいゝわ。

野口　親方は剃刀を使ふ時、そんな事を考へてるんかね、薄氣味が惡くなつて來るよ。

爲吉　イヤ、それも始めの中は、お客の顏へかすり傷一つ附けないやうにと思つて、後生大事にビク〳〵やつてゐたもんだが、段々馴れて來ると、段々倦怠が來て、終ひには繰り返し〳〵一つ事を每日やつてるのが癪に障つて、寧そ客の喉首でもぐいとやつたら、この商賣を廢められるかと云ふ氣になつて、それからは始終、そんな考

へが頭の中に纏を喰つたやうに附いて廻つてゐるんだ、現に、今の、伊勢屋の若僧を剃つてやる時も、グイと喉笛へ突込まうかと思つたんだ。

お鹿　オヤ、マア……眞實に此人は何うかしてるんだよ、野口さん、困りましたねえ。

野口　これぢやウッカリ髯も剃つて貰へない、ざんぱつ屋で死んだんでは、私も浮ばれない、これでまだナカ〳〵大望を持つてゐるんだから。（向ふの椅子へ逃げる）

爲吉　（嘲るやうに笑つて）　マサカ、村のお役人の喉笛を抉るやうな氣まぐれもやりませんよ、何しろ考へて見ると、自分の生命と掛替へだからね、あの伊勢屋の若僧位なものと取替へるのもつまらなくなつて來ますさア、そりやア、若し彼奴が、家の娘を何うかしたといふ事件でもあつた日にや、今日だつて、生かしてこの戸口を出しやしなかつたかも知れないけれども……。

野口　（吐息をして）　ぢやア怨みがなければ、そんな眞似も出來ないといふんだね。

爲吉　イヤ、怨みがあれば、それ位な事は當り前たアね、誰の喉へ剃刀を當てゝる時でも、シュッ〳〵と刄先が髯を擦つて皮膚の上を滑つてゆくのを見つめてゐると、何だか不思議な氣持がして、も少しの事でこの皮膚が切れて、凹くなつてゐる骨が切れて、眞赤な血がパッと吹き出すんだが、何うして剃刀は何時も上ばかり滑つてやがるんだらう、ハヽア己の手は器械になつたんだ、剃刀へ附着いて了つたんだ、さうすると己の體全體は人の髯を剃つたり、髮を刈つたりする器械に化つて了ひやがつた、忌々しい、己は生きてゐるぞ、生きてる證據に・一つ剃刀を外らかしてグイとやれといふ氣持になるんだね、だがさう思ふとふと氣が附いたやうに、生命と掛替だぞと自分が自分の耳で獨語を云つてるんだね。

お鹿　野口さん、まア何うしてあんな事を云ひ出したんでせう。

野口　少し逆上(かみ)に附いてるやうだね、親方チト休んだら善いぢやアないか？

爲吉　イヤ、自分の生命が惜しいッと思ふ位だからまだ大丈夫、そりやアこれでも相手に依つちやア、取替へたつて構やしないサ、何うせ己もこんな下らない商賣をして、腰の曲るまで生きてゐたつて始まらないからな、たが是迄まだ不足のない相手には出逢さない、村長や、郡長や、三等郵便局長なんかの喉笛を抉つてやつたつてつまらないからな……尤も一月前に、この村へ演習の下見物に來た何とか少佐の奴は、田舍の剃刀は切れないとかぬかしやがつて、あんまり威張くさつた口を利くから、髯が切れなくても、骨は切れるのを見せてやらうかと思

つて、已にグイ〳〵とやる處だつたが、つい馬鹿々々しくなつて止して了つたんだ。

野口　幵奴ア危險だつたな、でもまあ無事に濟んで村役場で騒がんでも宜かつたのは大助かりだ。

お鹿　（溜息をして）　實際に宅はこの頃、何うかしてるんだよ、野口さん、何卒こんな事を世間へ仰しやらないで下さいよ、商賣が上りますから。

爲吉　商賣が上りやア結局幸福だ、此れで已にも又別の考へがあらア、何アに、こんな田舍にばかり日が照つてるんぢやアあるまいし、世間は廣いんだ。

お鹿　（窘めるやうに）　世間か廣くたつて、私等の生活の立つ道はもう極り切つてゐるんですよ、今更何う足掻いて見たつて、仕樣がありやしないんだからね。

野口　然う云へばまアそんなものかも知れないな。（考へ込む）

（表の戸を開けて、半白の髮と髯とに包まれた五十前後の老人、時勢遲れの、短いフロツクコートに、銀鎖をジヤケツトの扣鈕に絡ませながら入つて來る、彼は小學校々長佐藤敬一である。）

佐藤校長　今日は……やア野口さんか、此れからですな？

野口　（丁寧に會釋）　イヤ私はその、後からでもよろしいんです……何卒先生から……。

（爲吉は默禮する。）

お鹿　先生樣、ようこそ、何卒まア此方へ。

佐藤校長　（口早な調子で、）難有う……難有う……野口さん、まア先口から……何卒御遠慮は要らない事です。

野口　イヤ、私はその……何卒先生から……。

爲吉　まアお掛けなさいませ。

佐藤校長　難有う……何うだね、相不變忙しいかな。

爲吉　へエ……。と口重たげな調子）

佐藤校長　野口さんは歡迎會や何彼でいろ〳〵御用事がありませうな。

野口　ハイ……否え……午後、一寸お寺まで行つて下檢分をしたら別に用事はありません……掛の方が大分居られますから。

佐藤校長　然うですかな……何しろ今日は愉快な事だね、この村の名譽でもあるし、又我が小學校の名譽だからね。

野口　然うですね、昨年は先生の二十五年勤續祝賀會がありますし、今年は又、先生の御弟子の中からア、して出世なされた方があるし、重ね〴〵御目出度い事ですね。

佐藤校長　大きに然うだね、お互樣に喜ばしい事だ……岡田君は相不變平民主義で、昨夜はワザ〳〵私の陋屋を訪ねて來てくれてね、昔談も出たんだよ、今日は一つ揃で

も剃つてから、御挨拶に出かけようと思ふ處だ、もう明晩は東京へ歸るのださうだから、ナカ〳〵忙しい事だて。

野口　何しろ中央政府の高官ですから、一日でも半日でも時間が大切なんでせう。

佐藤校長　大きに然うだらう、行く〳〵は大臣だらうね、矢ッ張、豪物は小學校時代から何處か違つた處があるよ、一番か、二番か始終外づした事はなかつたからな。

野口　矢ッ張、小學校時代の薫陶の如何に依りますね、佐藤先生のお手柄もあるのに相違ありません。

佐藤校長　難有う……難有う…　何しろ自分の教へた生徒の中から、天下の人材が出てくれると、自分の肩身も廣くたつて來るやうに思はれるね、其處が天職の難有さだ。

爲吉　野口さん、此方へお掛けなさい、やりませう。

野口　イヤ、先生から先へ、……私は何時でも宜い。

佐藤校長　イヤ、まア野口さんから……先口は先口だ。

野口　私は後でよろしいんですから……何卒先生から。

佐藤校長　イヤ、そりやアいけない、私は後から來たんだから。

爲吉　何方でも、早く片附けませう。

野口　サア、先生、何卒。

佐藤校長　イヤ、でも禮儀は禮儀だから。

爲吉　（剃刀を研ぎながら）ぢやア野口さんから先へ息の根を留めて上げようか？

野口　串談云つちやアいけねえ、私は今日でなくても宜いよ、さう髮が延びてる譯でもないんだから。

爲吉　ぢやア先生から先へ片附けませう。

（佐藤校長、中央の椅子へかける。）

佐藤校長　でも爲吉君も近頃は大さう精が出るね、何しろ結構だ。

爲吉　イヤ、結構でもありませんよ、さんぱつ屋なんて、隨分下らないもんです。

佐藤校長　イヤ、職業に高下はないんだから、忠實に勉強すれば宜いんだ。

野口　然うですとも、爲吉君も此迄辛抱して來たんですから、もう一息ズッと遣り通すんですね。

爲吉（刃先を眺めながら）何を遣り通すんでせう。（高笑する）

佐藤校長　それ〴〵人間には天職があるんだから、それを一生懸命に遣り通すんだね。

爲吉　二十年前に先生がそんな事を仰しやつて下さつたんだね、それからズッと遣り通したんですが、つく〴〵下らないといふ事が分つて來ました。

佐藤校長　フン、君が小學校を卒業後、東京へ苦學に行くつていふ話だつたのを、君の親父が心配して、父の家業を繼ぐやうに說諭してくれといふ事だつたので、私はそれに賛成したんだが、まア〳〵斯うしてやつて行けりやア結構ぢやアないか？

爲吉　でも秀作さんには、親の家業の農業をやれつて、說諭はなさらなかつたんですね。

佐藤校長　岡田には學資金があるんだから、遊學させるといふのに賛成したよ、それが今日、秀作君の出世の基になつた譯ぢやアないか。

爲吉　ぢやア學資金がありやア、私もこんなさんはつ屋なんかやつてるんぢやアなかつたんだね、つまり金が豪いんだハ、、、、。

野口　結局そんなもんだらう。

佐藤校長　そりやア爲吉君も小學校は善く出來たんだから惜しい物だとは思つたが、何しろ無茶苦茶に東京へ踏み出して、迷ひ途に入つちやアいけないと思つてな。

爲吉　でもその後、二三度、東京へ逃げ出しちやア、力づくで親爺に連れ戻されたりなんかしてたんですからね、それから道樂もやりました。女房も二三度取更へました、諦めようと思つても、諦められるものぢやアありませんよ。（云ひ〳〵揉剃に取かゝる）

（野口は、座敷の上り框へ戻つて。）

野口　（小聲に）お鹿さん、氣を附けないといけないよ。

お鹿　御賛ですわ。（上り框へ乘り出して來て、仕事の樣子を見守つてゐる）

（爲吉は折々、溜息をしてはゴリ〳〵剃刀を使つてゐる。）

佐藤校長　少し暑くるしいから、頰鬚は薄く剃つて貰はうか?!

爲吉　宜うございます……。

佐藤校長　段々白髪が多くなるやうだな。

爲吉　お年齡には敵ひませんね……併し先生、あんまり口をお利きになると剃刀が滑つて、何處を切るか知れたもんぢやアありませんよ。

佐藤校長　然う〳〵、毎度、汝に叱られゐた、刄物が汝の手にあるんだから斯うなつちやア、汝の命令通りにする外はないね。

爲吉　もうお默んなさらんと、剃刀が使へません。

佐藤校長　ハイ〳〵。

（爲吉は今、喉の邊りへ剃刀を動かしてゐる。）

野口　（相不變、小聲に）何んだか冷汗が出るやうだよ、あれで指先へグイと力を入れたら、それ限りだから、人間つて脆いもんだな。

お鹿（振返つて）聞えますよ、家のが變な氣持でも起しちやア大變ですからね。

野口（コロリと昼へ寢轉んで）併し考へると忌になるね、立身だの、出世だの、やれ名譽だの、財産だのつて、血眼になつて騷ぎ立てゝ見た處で、あの指先一つでグイとやつたら、後はもう何んにも無くなるんだからね、人間つて奴の總勘定が附いて了ふんだからね、三十近くにもなつて、これから東京なんか出て苦勞するのも馬鹿かた、ア、ア、。

お鹿 急に心細い事を云ひ出して來たのね、野口さんは？

野口（輿奮的口調で）併し失張り、金だ、世の中は金がなけやア駄目だ。

お鹿 つまりは其處へ落込んで行くんだわね！

野口 金があつて見給へ、あの人だつて、參事官位になれたかも知れないよ、そりやア實際分らないよ。

お鹿 さうすると私が參事官の夫人さんだね、惜しい運を取逃がしたよ。

野口 女は何んな出世でも出來るさ、女の資本は容貌とそれから肉體だアね。

お鹿 然う云やア男だつて腕一つぢアないかね？

野口 腕があつても金が無けやア當節は駄目だ、時勢が然うなつて來てるんだから何うも致方がない……オヤ、もう濟みさうだな、エ、と、私は一寸出て來よう。

お鹿 頭髮は何うなるの？

野口 後にせう……一寸用事があるから……先生御免蒙ります……。（スタ〳〵と出て行く）

佐藤校長（洗面臺から歸つて）ハ、ア、大分若くなつたやうだな。

お鹿 先生は何時も御元氣が宜くゐらつしやいますよ。

佐藤校長 まだナカ〳〵此世にする仕事が殘つてゐるからな、もつと元氣が宜くないと何うもならんのだよ……序に香水を一つ願はうかな。

（爲吉、香水を吹き掛け了つて、座敷へ上る、お鹿はお茶を入れる。

佐藤校長 野口さんは何うして歸つたのかな、私が先へ濟まして何うも氣の毒だつたな。

お鹿 イヤ、又お歸りになるでございませうよ。

佐藤校長 然うかな。（頬を撫で廻して）イヤ、スツカリ善い氣持になつた、髯が延び過ぎるとモシヤ〳〵して他人の顏だか、自分の顏だか分らなくなるが、お庇でサツパリした。

お鹿 まアお茶を一つ召上りませ。

佐藤校長 難有う……難有う……ちやアこゝに御禮を置きますよ……左様なら。

お鹿　先生お剰錢を……。

佐藤校長　否……要りません……左樣なら。

お鹿　難有うございます。（送り出して）爲さん、「難有う」位云つたら善いぢやないかね、あんまり無愛相だよ。

爲吉　（煙草を吹かしながら）難有くもねえよ：何んだい老耄めが……秀作さんが小學校時代から違つてりやア己だつて違つてらアな、己の方が卒業する時は一番だつたぞ、天職だなんて、二十五年も一つ處の小學校々長に噛り付いてやりやア譯は無いやね、善く倦きもしないでやつて來られたもんだ、馬鹿根氣丈は感心するよ。

お鹿　でも二十五ヶ年も辛抱が出來たから、知事さんから御褒美が出たんぢやないかね！

爲吉　ぢやア己れも今に二十五ヶ年勤續のざんぱつ屋さんだつて、郡長から御褒美の出るのでも目的に働かうかな……糞でも喰へだッ。

お鹿　今更焦々したつて仕方がないぢやアないかね。

爲吉　己はもうこんな生活に倦怠み切つたから、焦々するのも當前だ、第一、あの姿見鏡から癪に障るよ、あの緣の剝げたのは、親父の代からあの通りだ、そして鏡の中を見ると椅子へ掛けた人間の顔は毎日幾度でも變つて行くが、傍へ立つて白い上着を着てる奴の面は一向變つて行かない、何時も同じ男子だ、三百六十五日、同じ男子が同じ手つきをして、同じ狹い場所を往つたり來たりして、恥しげもなく同じ事を繰返してやつてゐるがね、あの鏡は硝璃張の檻だよ、その檻の中から一生出られない男子が一匹ゐるんだ、氣の毒にもなつて來るし、可哀さうにもなつて來る、而もそれが己なんだ、この己なんだ、さう思ふと堪らないッ。（頭髮を搔る）

お鹿　それがサ、今の運命だよ、もう斯うなつちやア三度のお飯が戴いて行けりやアそれで結構だとしとかなけりやならないんサ、何うしようたつて、何うしようもありやアしないからね、氣分を取直してお稼ぎよ。

爲吉　フン、稼いだつて何うなるんだい、己が斯うして一生稼いで、汝を養つてやりやアそれで善いんかい？　それが己の一生の目的なんだらうか、馬鹿々々しいッ……貴樣アそれで善くつても己は忌だッ。

お鹿　ぢやア他に何うする途があるつて云ふの？　私たつて何も、汝さんに養つて貰へばそれで善いと云ふんぢやアないよ、一生此處で燻ぶつてゐて、それで他に思ひ殘す事はないと云ふんぢやないサ。

爲吉　（冷笑）然うだらう、汝が店番をしてゐるのを見ると、御退屈樣つて折々云つてやり度いやうな氣がするよ。

お鹿　お察しが善いわ、眞實に私だつてお退屈樣に相違な

いんだよ、汝さんの處へは、取替へ、引替へ、御客樣が見えるんだが、私のお客さんつて、今ぢや汝さん一人限りなんだからね。

爲吉（怪訝さうな眼色）己は貴樣のお客さんかい？

お鹿（笑顏）今ぢやア御亭主と定つた人か、私のお客さんぢアないか、昔は然うぢアなかつたよ。

爲吉（吐出すやうな調子で）フン、だるま屋ぢやア毎晩、御亭主が變つてゐたんだからな、この頃はお客さんの顏が定り切つて了つたから、それで御退屈だと仰るんだな。

お鹿 汝さんか、今、あんな事をお云ひだつたから……鏡の中に、何時も同じ顏をした男子のゐるのが怖ろしいつて云つたもんだから、私も何だか自分の胸に思當つて來たんサ。

爲吉 何んな事を思ひ當つたんだい。

お鹿 怒つちやいけないよ、何も浮氣で云ふんぢやないが、私も汝のやうな事を折々考へてゐないんぢやアないんだよ。

爲吉 何をサ？

お鹿（半ば笑つて）夜中なんかに、偶と目が醒めると、何時も同じ顏の男子が、私の傍に眠つてるんだもの、何んだか不思議なやうな、怖ろしいやうな氣持のする事もあつたんだよ。

（爲吉はヂッとお鹿の顏を見据ゑてゐる。）

お鹿 ホヽヽ、何もそんな怖い顏をして見なくつても善いぢアないか？ 汝さんが忌になつたつて譯ぢやア更々ないんだよ。

爲吉（頽然となつて）アヽヽ、人間つて奴は些とも依賴にやアならねえんだ。

お鹿 そんなに解つておくれでないよ、汝さんが鏡の話をするんだから、私だつて同じ事だ、誰にだつて皆辛抱氣がなけやア駄目だつて云ふんサ。

爲吉（少し慄へた口調で）貴樣がそんなに浮氣つぽい奴だから、伊勢屋の野良息子なんかゞ、ちよい〳〵爪を出しに出入してやがるんだ、イヤ、あの野口だつて油斷はなりやしない、何の客も、何の客も油斷がなりやしない。それ丈でもこんな商賣は忌だ、忌だ、あの鏡を叩き壞してやらう。（駈下りる、お鹿は追駈けて肱へ取り付く）

お鹿 短氣な事をおしでないよ、商賣道具を叩き壞したら明日の日を何うするんだね、早速困るのは眼に見えてゐるぢやないか。

爲吉 放しやがれッ……幾何困つたつて死んだらそれでお了ひだい、放しやがれッ。

お鹿（堅く抱き緊めて）私はまだ死ぬのは忌だよ……今

死ぬ程なら、もつと前に死んでるわね。
爲吉　誰と死んでるんだ？（振返つて顏を見詰る）
お鹿　誰とでもお相手は構やしないサ。
爲吉　貴女めツ、（と煙管を叩いて、ガタリとそこの椅子へ腰を落し）惚れたの腫れたのつて、貴様は皆己を欺してやがつたんだな。
お鹿　（嘲るやうに）椅子に毀るが善いよ。
爲吉　（無念さうに切歯しつゝ）こんな奴にまで馬鹿にされてたんか？　己はこんな下らない男子だつたのか……。
お鹿　何うせ汝も私も下らないサ。似たもの夫婦だよ、今更怒つたつて、泣いたつて、仕方があるもんか。
（爲吉は額を押へて呻吟いてゐる。）
（突然、戸口から絹帽子に、フロックコート、胸間に金時計の鎖を光らせた、代議士參事官、岡田秀作入つて來る、手にはシガーの紫烟ゆるく立上つてゐる。）
岡田　御免……今日は！（笑顏で會釋する）
お鹿　（周章てゝ丁寧に叩頭をしながら）入らつしやいまし。
（爲吉立上つて呆然と見てゐる。）
岡田　（笑を浮べて）私だ、岡田だ……何うも久し振だつたね、昨夜は折角訪ねて貰つたさうだが、來客が立込んでゐて何うもとんだ失禮を……。

爲吉　（顏色を和げて）ア、岡田樣でしたか？　善うこそまア……。（會釋する）
お鹿　（アタフタと、座敷の方へ行つて、そこらを取片附け、極り悪さうに座蒲團を出しながら）旦那樣、まア何卒此方へ……汚くろしうございますが、まア何卒……。
爲吉　何卒まア……。
岡田　（鷹揚に歩み寄つて腰を卸し）お介意なく……一寸挨拶に出かけました。
爲吉　（上着を脱ぎながら座敷へ上つて、小く正坐（すわ）つて）こんな汚さくろしい處へ善うこそ入らしつて下さいました、今度は何うも御目出度うございます。（丁寧な叩頭をする）
岡田　イヤ、難有う……爲吉さんとは大分暫らく逢はないな、御健康で、稼業に御精が出て何よりだ。
爲吉　一向、詰りません……、御目に逸るのもお恥かしい次第でございますよ。
岡田　イヤ、國民が各自（めいめい）々々、その職業を忠實に勉強して貰へば、それで結構だ、役人になるのが、別に大した名譽でもないからね。（云ひ／＼シガーを燻らしてゐる）
爲吉　（苦笑して）何しろ貴方は結構な身分におなりなさいましたが、私はこんな事で、いつかうだつが上りません、もうつく／″＼忌になつたから、廢業せうかつて、思つた矢

先なんです。

岡田　それは職談だらう、今更商賣替をして見たつて、別に面白い事がある譯のものでもないんだからね、まアまア辛抱が第一だね。

お鹿　全く旦那樣の仰有る通りでございますよ。

岡田　ア、まだしみ〴〵御挨拶もしなかつたが、爲吉君の御家内ですな。

お鹿　ハイ……（耳の根を赤くして挨拶しながら）爲吉から御噂も聞いて居るのでございます、昔をお忘れなさらないで善うこそお出で下さいました。

岡田　爲吉君とは小學校時代の惡戯仲間だつたんで……矢ツ張り折々は思出すんだね。

お鹿　それにしても、善うこそ、ワザ〳〵御越し下さいまして恐れ入りますでございます。

岡田　イヤ、別にワザ〳〵と云ふ譯でもないんだがね、この先の有志者の家へ廻つて、この前へ來かゝるとつい顏を一つ剃つて貰はうかと思つてな。

（爲吉は眼をジロリと光らせる。）

お鹿　オヤ、左樣で入らつしやいましたか、ぢやア一つお顏を……爲吉さん……。

岡田　別に急かんでも善い、午後までは用事がないんだから……今小學校の門の前を通つて見ると、黒かつた校舍は、ペンキ塗に變つてゐるが椎樹なんか昔のまゝに茂つてるな。

爲吉　（冷淡に）然うですな、昔のまゝの者もゐりやア、變つた者も居りまさア。

お鹿　（愛嬌笑）ホヽヽ、旦那樣なんか、一番善くお變りなすつたんでございますね。

岡田　（得意げに微笑）まだ〳〵變り樣が足りないんだ、これから又、二度も三度も繭を破らないと、目的地へ飛んで行けないんだ。

お鹿　（媚びた調子で）何れ大臣におなりなさるんでございませうね。

岡田　（聲高に笑ひ）ハツハツハツハツ、ナカ〳〵お世辭が善いね、……併し大臣なんか何んでもない者だよ、蜜柑の皮を投げ付けて當つた人を大臣にしろつて、云つてる者もある位だからね。

お鹿　ヘエ……。（相返答に困つてゐる）

爲吉　（冷笑的口調で）蜜柑の皮ぢやアない、金だアね、金さへありア代議士にでも、何にでもなれる、金の無い奴がざんばつ屋なんかになるんだ。

岡田　（眞面目に）爲吉君は大さうこの稼業が厭になつたやうな口吻だな。

爲吉　厭も絲瓜もありませんよ、成らう事なら私も富豪の

家へ離れて、もう一度學校から遣り直し度い……でも小學校に居る時分にや、富豪も貧乏人もありやアしない、強い奴が大將になる、弱い奴が草履持になる、出來る者が一番で、怠ける者がビリと極つてたんだから苦情も不平も無かつたんだね、……誰の樹と云やア、秀作さんを踏臺にして、私がその背中へ乘つて、誰の實を取つた事もあつたつけな、月の出る晩方に……。

岡田　（追懐的に）然う〳〵、一度、樹の洞穴から蝙蝠が澤山飛んで出て、爲吉君が吃驚して、飛び下りたので、私も膝を潰して逃げ出さうとするはずみに、樹根に轉んで大きな鼻血を出した事をよく記憶えてゐるよ、今日もその事が頭に浮んで來たのだ、何しろ無邪氣だつたね。

お鹿　オヤ、まア、そんな事があつたのでございますか？

岡田　子供の時の事を思出すと、隨分面白いな。

爲吉　（溜息して）私は苦しくなつて來る、岡田さんにはこれから前途があるか、私の眼先は眞闇だ、方角が立たない、もう手も足も縛られてゐるんだ。

岡田　何うしてそんな自棄を云ひ出すんだね、斯うして稼いでりやア、それで澤山ぢやアないか！

お鹿　人にはそれ〴〵分相應つて云ふ事がございますからね。

岡田　大きに然うだ、女房子が養つて行けりやア、それで人間は一人前だ、何處へ行つても恥かしい事はない。

爲吉　（自ら嘲るやうに笑つて）一人前の人間つて奴にはもう倦々した、圖拔けて豪くなるか、圖拔けて馬鹿になるか、世の中の相場を狂はすやうな事をやらなけりや生き甲斐はねえ、毎日、毎日、活版で捺したやうな事を繰返してやつてるのが恥かしくないやうな奴は生きてるんぢやアない、器械になつてるんだ、己だつて、バリカンを使つてるのか、バリカンに使はれてるのか分らなくなつて來る時がある、何しろ情ない話だ。

野口　（戸口から聲をかけて）頭髮を刈つて貰はうか、髯は自分で剃つて來た。

（岡田を見ると、周章てゝ禮をする。）

爲吉　頭髮丈だな。

野口　イヤ、然う急がんでも。

爲吉　でも、貴方が先口だから、先へ片附けよう……（仕事着を着けて下り立つ）ぢやア一寸失禮します。

岡田　サア、何卒……。

野口　イヤ、岡田閣下から何卒……私なんか何時でも善い……意外な處で御目に懸ります。（ペコ〳〵する）

岡田　何卒お先へ……私は別に急がないから。

爲吉　野口さんは朝から來て待つてゐたんだから先へ、やらう……髯を自分で剃つたゝア可笑しいな、（冷笑して）誰

れが汝さんの……。（唾を吐出すやうな口調）

お鹿　岡田の旦那樣から先へしてお上げなさいよ。

岡田　イヤ、私は何うでも善いんだ、まア家内さんと世間話でもして待つてゐませう。

お鹿　何んならお邸へ伺はせませうか？

岡田　イヤ、イヤ、そんな事には及はない、私も洋行中の習慣が附いて、毎朝、自分で剃つてゐたんだが、家内を貰つてからは、家内に剃らせてゐた、その剃刀が丸刄になつたので、磨がせにやつたまゝ此方へ來たんだ、もう二日剃刀を當てないのでザラ／＼して氣持が善くないんでね！

（この間に、野口は隅の椅子へ小さくなつて倚りかゝる、爲吉は剪刀を使ひ出す。）

お鹿　オヤ、奧さまに、（莞爾して）左樣でございますか？

岡田　（ジロ／＼お鹿の顏を見て）貴方は何處かで見たやうな氣がするよ、東京に居た事があるんぢやアないかね？

お鹿　ハイ、十年許り前には居た事もございますが、旦那樣に御目に懸つた事はないやうでございますよ。

岡田　東京の何處に居たんだね？

お鹿　ハイ……あの……片隅の方に……一寸との間でございますから、よく覺えても居りません。

岡田　然うかなア、ぢやア、私の思違ひかも知れんな……空肖つていふんだらうねハヽヽヽ。（ト快活に笑ふ）

お鹿　でも東京は善うございますね、十年の間に大さう變つたでございませうね。

岡田　そりやアもう日々變つて行くね、何を云つても日本ぢやア東京だ、自分の產れ故鄕の惡口を云ふぢやアないが、こんな田舍へ歸つて來ると、何んだか鼻を突くやうな氣がしてな。

お鹿　そりやア然うでございませうとも、私等も同じ苦勞するなら矢ツ張り東京邊へ出て、苦勞したうございますね、此處ぢやア窮屈して了ひます。

岡田　（打解けた調子で）東京へ出なさい、それが善い、私なんか一週間此處に靜としてゐると、窮屈で堪らないね、親の家があるし、選擧區でもあるしするから、そんな事を云つてられない場合もあるがね。

お鹿　左樣でございませうとも……（笑靨を見せて）何んなら御邸へ、御奉公にでも上げて戴きませうか知ら?!

岡田　ハヽヽヽ、それは結構だ、貴方が獨身者だと明日でも連れて歸るんだが、然うも行かないしサ。

（爲吉は又しても二人の談話の方に耳を傾けてゐる。）

野口　アイタヽヽ、耳を切つちや困るよ、親方しつかり賴む。

爲吉　ちよつと剪刀の尖か當つたんだ、何んでもねえや……
……。
（その方には眼も遣らないで、岡田は興が乘つたやう
に、片膝を深く疊の上へ滑らし込む。）
お鹿　否え、私なんか何うなつたつて構はない體でござい
ますから、眞實に御奉公口があれば、もう一度東京へ出て
見度いと思ひます、御戯談になさらないで旦那樣に一つ
お世話をお願ひしませうか？
岡田　否、眞實に、家妻が兎角病身だから、仲働を一人入
れたいと思つてゐ處だがね、心當りがあつたら御周旋を
お願ひせうか、これは戯談にしないで氣にかけてゐて貰
ひ度いね。
お鹿　オヤ、眞實でございますか？……奥樣が御病身で入
らつしやるんでございますか？
岡田　婦人病でもう一年許りぶら〳〵してゐて、病院へ出
たり、入つたりなんだから、弱つて了ふんだ、矢張婦人
は體格が善くないといけないよ、貴方は健康さうだな。
（と肉附を見てゐる）
お鹿　ハイ、貧乏するお庇で病ひもしませんが、心は弱い
のでございますよ。
岡田　でもよく肥つてゐられるやうぢやないか？
お鹿　（微笑）脂肪質肥つて云ふのださうでございます…
……色澤が悪うございましてね。
岡田　下地が白いんだらう……イヤ、美人に色の黒いのは
あまりないやうだねハヽヽ。
お鹿　（嬌な作つて）旦那樣もお人が悪うございますよ、
そんな事を仰しやつて、お戯ひなさるものぢやアありま
せん、若い娘ならウッカリ善い氣になつて、旦那樣の後
から追駈けて行くやうな事になりますよ……（低聲で）眞
實に、私仲働に使つて戴けませうか？
岡田　（稍や序つて）でも夫婦連れの御奉公はちと當方に
困るよ、心當があつたら賴みます。
お鹿　心當かありますよ、（媚るやうに見て）オヤ、旦那樣
御襟に煙草の灰が。（云ひ〳〵膝行り寄つて胸を輕くたゝ
く）
岡田　難有う、（仕事場を顧みながら）また時間が取れさう
だね、午後は大分忙しくなるから、何なら貴方に一つ剃
つて貰へまいか？
お鹿　お顏を……私はまだ慣れませんけれども……爲吉さ
んの顏しか剃つた事はないんですけれども……。
岡田　傷を付ける心配もないでせう、一つ願はうかな。
お鹿　よろしうございます……、何うせ奥樣のやうには參
りますまいけれども。
岡田　（笑つて）處が一年許り、その奥樣が顏を剃つて…

れないんだからね……此方の椅子へ掛けようか？（とそこへ立つて行く）

（爲吉はしきりに尻目にかけながら、白囊に剪刀を鳴らしてゐる。）

お鹿　（庭へ下り立つて、白い巾を岡田の首へ卷いてやりながら）お急ぎなさる樣子だから、私が剃つて上げますよ、旦那樣の御注文でもあるしね。（云ひ／＼剃刀を研いでゐる）

爲吉　（突慳貪に）もう直濟むんだ。

岡田　御家内に御苦勞をかける事にした、昔の友人に髯を剃つて貰ふのも氣が刺すからな。

（爲吉は忌な顏をして彼方へ向く。）

お鹿　旦那樣は明日、東京へお立ちになるのでございますか？

岡田　明日の午後から立つ積だ、これでナカ／＼用事の多い體だからな。

お鹿　左樣でございませうとも、お越になつても、お歸りになつても眞實にお大抵ぢやアございませんね、今日は此から演說會に、歡迎會とかゞあるんでございませう、嘸お疲れなさいませう。

岡田　何しろ、皆の衆の厚意だから疲れるも何も云つちや居られないんだね。

お鹿　新聞へ毎日、旦那樣の事が出て居るのでございますね。宅と二人で引張り合で讀んで居ります。

岡田　ハヽヽ、いろ／＼お負を書き足すので困るよ、東京の新聞には又、官費で黨勢擴張に出かけたなんて悪口が叩いてあつた、下らん事を問題にするもんだ。

お鹿　お歸りになつたら、東京でも歡迎會とかゞあるんでございませうね？

岡田　マサカ……ハヽヽヽ、今度は歡迎會でなくて、停車場で新聞屋連中の囚になるんだ、それは實にうるさいよ、又、尾に鰭を附けて、いろんな事を書立てるのだらう、殊に反對黨の新聞と來たら、思ひ切つた猛烈な捏造記事を出すんだからホト／＼閉口するね。

お鹿　（剃刀を當て始めて）とても奧樣のやうには參りませんよ、新參者でございますから……。

岡田　結構々々……。

（お鹿は微笑して、岡田の顏へしきりに指先を觸て、それから又鏡をのぞいて見ては莞爾する。）

（爲吉は小ッ酷く、野口の頭髮を引掻き廻しながら、一方を尻目でチラ／＼睨んでゐる。）

お鹿　旦那樣のお髯は隨分濃くてゐらつしやいますね。

（爲吉は野口を洗面臺の處へ引張つて行く。）

お鹿　お髮も艶々して、眞實にお羨しいやうでございます

ね。

岡田　…………。

（爲吉は焦々して野口の頭髮へ香水を吹きかける。）

お鹿　お襟足の長くてゐらつしやる事、女に欲しうございますわ。

岡田　…………。

（野口は座敷の上り口へ戻り際に、鏡の中の岡田に默禮する。）

爲吉　（急に剃刀を研ぎ始める、眼色が變つてゐる）お鹿、退くんだ、私が剃る。

お鹿　（吃驚した眼色で見返つて）宜いんだよ、もう直ぐだから……（小聲に）加之に氣持宜さゝうに、ウト〳〵してゐらつしやるだ樣からね。

野口　お鹿さん、剃つてお了ひよ、何うも親方は亂暴だからいけないよ、私は耳へ傷をした。

お鹿　但賞にいけないわね、何うかしてるんだから。

野口　剪刀だつて、危險だよ、私は冷々した。

お鹿　（輕く笑つて）野口さんは一體氣が小さいんだからね。

爲吉　（研ぎ濟ました剃刀の刃先を見つめて凄い笑を洩らし）己は剃刀を使ふんだぞ、剃刀に使はれる人間ぢやアないんだ。

お鹿　宜いよ、私が剃つて了ふんだから、もう喉だけだよ。

爲吉　退けツ。（と睨む）

お鹿　宜いてばねえ……、（小聲で）ウト〳〵してゐらつしやるんだから。

爲吉　退けツ。（肱を摑んで向へ突き退ける）

お鹿　酷い人……眼をお醒しなさるんだよ。

（爲吉代つて、岡田の喉を摩する。）

岡田　ア、爲吉君か、善い氣持で、ウト〳〵夢を見かけた處た。

爲吉　（冷やかに）定めて御立身なすつた夢でも見てゐらつしやつたんでせう。

岡田　何んでも急に電報がかゝつて東京へ歸ると、何處か大きな廣間へ召し出された處だつた、壁が金色で、緋天鵞絨の帷幕なんか掛つてゐて、足の下には辨慶縞のやうに、黒と白との大理石が敷き詰めてあつてな……何處か外國で見た宮殿のやうだつた。

爲吉　ヘエー、私なんか夢にも見られやアしませんや……。

岡田　（獨語するやうに）そして向ふの三重になつた蛇紋の大理石の一番上の臺には、ゴブラン織の絨氈を敷いて、玉座が出來てゐる、……その玉座に、金の[illegible]をした紫色の長い絹の裾を曳いた女王がゐられる……その女

王が可笑しいんだ。
爲吉　へエ……何んなに可笑しいんですかな？（と冷嘲する口調）
岡田　（笑つて）それが可笑しいんだ……それが君の御家内の顔そつくりだつた……ア、、こんな面白い夢は近頃見た事がない、惜しい處で目を醒まされたよ。
（お鹿は、莞爾して、鏡の中の岡田を見る。）
爲吉　へエ……その女王があの嬶の面に見えたんですか？コリア笑はせ物だ。（云ひ／＼剃刀を當て始める）
お鹿　汝さん、氣を附けてお剃りよ、大切な方だからね。
爲吉　（振向いて）何が大切なんだい、素面めツ。
お鹿　旦那は大切なお體だと云ふんだよ、野口さんのやうに、粗末な眞似をおしでないと云ふんだよ。
爲吉　やかましいツ……喋舌るなツ。（云ひ／＼ふと鏡の中を見て）やつてやがる、相不變あの男が檻の中で働いてやがる、白い衣服を着た囚徒だな、彼奴は……。（と見入つてゐる）
岡田　君何を云つてるんだね？
爲吉　イヤ、鏡に映つてる自分の影法師を見ると、つくづく情なくなつて來やがると云ふ事サ。
岡田　何うしたと云ふんだね。
爲吉　秀作さんは夢を見てられるんだ、人の嬶に紫の衣服(きもの)とやらを着せて贅澤な眞似をする夢を見てられるんだ、その傍に己は立つて、一生ア、して人の髯を剃つたり、頭髮の臭氣を嗅いだりして暮さなけやならない、堪らない、堪らないツ。
岡田　少し逆上せてゐるやうだね。
爲吉　今こそ、二人の影法師がア、して鏡へ映つてるが、秀作さんが立つて了つたら、後には己一人になる、己一人が何時迄もこの檻の中で過さなけやならない、罪だいツ。
お鹿　（歩み寄つて）汝、又何を云ひ出したんだね、仕事を早くサツ／＼と片附けたら善いぢやないかね、旦那樣もお忙しいんだから。
爲吉　貴女めツ、その旦那樣に蹤いて行き度いつて、云つてやがつたな。
お鹿　（苦笑、戯談を眞に受けるものがあるかね、お坊ちやんねえ、汝も……。
岡田　早く片附けてくれぢやア何うだ？
爲吉　（興奮した口調）片附けるとも……己は斯うして剃刀を片手に握つてる……此の手では首を押へてゐるんだ、斯うしてる時や、此の世界に誰も恐ろしい者はない、……馬鹿め、己はまだ生きてるんだぞ、今日こそ剃刀を使つてやるんだ……。

（剃刀が急に閉く、岡田は一叫して椅子と共に倒れる。）

お鹿　アッ……汝さんまア何うしたんだね。（と叫ぶ）

野口　たうノ＼遣附けたんだ、（慄へた口調で）演説會も歡迎會もこれで滅茶々々だ。

爲吉　（瞳を据ゑて）オヤ、オヤ、已の眼前に已の死骸が倒れてやがらア……（狂的な笑）さまア見やがれ。

（青白く慄へて立つ。）

――カーテン――

（一九一四年七月）

飯（一幕）

登場人物

幸作　土方
お市　妻
お松　連れ子
病める子　同
藤吉　馬肉屋
源吉　隣家の老人
お勢　その娘
外、長屋の男女

場所

東京巣鴨附近の場末

時

現代

○

舞臺は蜂巣長屋の一角の内部、正面の下手、三分の二は破れ煤けた障子で仕劃つて、外の緣側に、襤褸々々の襁褓や腰卷などの、繩に吊して乾してあるのが顯はに見え透いてゐる、上手、正面の壁際には朽ちた流臺が据ゑられ、そこらにバケツや、缺け火鉢や、土鍋や、小棚に乘つた皿、茶碗など、ゴタ／＼してゐる、上手の壁際には、垢で萎えた古シヤツが釘に懸けてあつて、その下は押し潰されたやうな柳行李が轉がしてある、その蔭に、襤褸か何か投出したやうに、病兒が橫に臥せてある。

下手の前寄には戸口、それにつゞいて二枚障子が立ててある、疊の中央に、素燒の火鉢が一つ据ゑてある、貧しさから來る壓迫が舞臺全體を支配する。

○

世帶窶れのした、髮はイボ尻卷の、眼の腫れぼつたいお市は、一貫張の白く剝げた食臺の上で、セツ／＼と狀袋を貼つてゐる、擴がつた紙片はそこらに取散らけてある、神經質さうな瘦せ形の娘お松は、障子の薄明りで讀本を浚つてゐる、お市のさし向には、印絆天を着た、額の禿げ上つた、胡麻鹽頭の藤吉が胡坐をかいて、ニヤ／＼笑ひながら「朝日」を吹かしてゐる。

お市（手を動かし止めない）うるさいからもう歸つておくれよ、仕事の邪魔になるぢやアないか？　此方等は一刻でも手を遊ばせて、ノラクラ串談口を利いてられるや

うた結構な身分ぢやアないよ、汝さんの相手なんかしてた日にや日が乾上つて了はアな。

藤吉　（眞面目になつて）　イヤ、串談ぢやねえよ、幸作が己の店で、馬肉を食つちや大酒を飲倒し〳〵した勘定の形が附かないので、己は質に入つてる汝さんを引取りに來たんだよ、日錢が無くて誰かその日暮らしの、空つ尻の土方人足なんかに、かけで飲ましてやる奴があるもんかい、そんな好人物は、此節は極樂を探したつて見附りやしねえやな。

お市　（鼻先で嘲笑つて）　ヘン、いくら私が馬鹿だつて、酒代の質草なんかに入れられて堪るもんかね、馬肉の切賣なら、汝さんのお手の物だらうが、人間の切賣なんか、今時は流行らないよ、一體、空つ尻の土方人足なんかに飲ましたり、食はせたりする方が間違つてるんだ、何んでも宜いから、もうサッサと歸つておくれよ、十枚貼り遲れると三分宛損が立たアな、汝それを償つてくれる氣かい？

藤吉　（笑顔で）　汝が己の處へさへ來てくれりやアそんなケチな眞似はさせやアしねえよ、己の店も仕合と近頃メツキリ繁昌し出して、小僧一人ぢやア手が廻らない事もある、今に何處からか女の子の一人も抱へて來て、隣の明家までも借り入れようかつて、算段をしてるとこだから、汝が己の女房になつてくれりやア、さしづめ、女將とか何んとか云つて、皆に立てられようぢやアねえか、幸福な身分になれるんだぜ？

お市　（慳貪に）　馬鹿々々しい、之でも亭主のある女だよ、何處か餘所他の明家を探して見るが善いさ、先だつ間の馬肉屋の爺が何んだい、死んだ犬や、猫の肉まで一緒くたに叩込んで、金儲けをしてるつて云ふぢやアないか？　こんなにうるさくやつて來る事を皆に云告けたら、汝さん、頭の鉢を破られて了ふんだよ、歸つてお了ひてば！

藤吉　（ニヤ〳〵笑つて）　己は今日こそ幸作の野郎が歸つて來るのを待つてるんだ、それで店は忙しいのに小僧に任せて出て來たんだよ、あの野郎に錢の無いのを知つてるから、度々斷りを云つても「嬶アを質に入れるから飲ましてくれ」つて、たうとう六度迄、拜み倒されて了つたんだ、己も此間、女房に逃げられてから不自由はしてゐるし、それにお市さんの女房振の善い處がチョッと氣に入つてるからな、引受けても善いてい、ふ下心があつて、あの野郎の云ふ通りにしてやつてたんだ、今日は愈々その總勘定を取りに來たんだから、話の形の附くまで歸れつて云つても歸りやしねえんだ。

お市　（冷嘲すやうな調子）　私も此迄に隨分いろんな目に

逢つて來たけれどもね、また馬肉や、酒代の質に入れられた事丈は無いよ、一度性悪な亭主の爲めに、賭博の抵當に取られた事はあるが、幸作さんはそんな男とは人間が違つてるよ、氣象は荒つぽいが、あれでナカ〱優しい處があるんだからね、汝さんは串談を眞に受けてるんだよ、お氣の毒さまね。

藤吉（再び眞面目になつて）お市さん、汝さん、馬肉や酒が無代で食つたり、飲んだりされるものと思つてるんかい、己等は串談に商賣してるんぢやアねえよ、此方等の仲間では、男子と男子とが一旦、口へ出して云つた事は、手形よりも堅いもんだ、又、それでなけや、その日暮らしの貧乏人同志が、相對づくで貸したり、借りたりされるもんぢやアねえやな、己は何うしても汝さんを貰つて行くよ。

お市（始めて手を休止めて）私は汝さんなんか眞ツ平だよ、何處かの白首ぢやアあるまいし、金銭で自由にされる體ぢやア無いサ、私の亭主は、幸作さんの他にはないやね。

藤吉　その御亭主が質に入れたのなら、何うも仕方が無えぢやアねえか？　イヤ、己は幸作の野郎なんかより、ウンと汝を可愛がつてやるよ、（眼尻を下げて）己を亭主に持つと、汝、眞實に幸福するよ、飯の心配はさせやしないし、子供にだつて不自由な目は見せないや、彼處に寢てる兒は病氣で死にかゝつてるとか云ふぢやアねえか、三歳や四歳で氣の毒だなア、醫師にも診せないんだらう。

お市（その方を見遣つて、急に悄然て愁はしげな眼色）昨日、慈善病院へ藥を貰ひに行つたのだけども、役場の證明が要るなんて云つて、七面倒臭いからそのまゝ連れて歸つて來たんだよ、幸作さんの實子なら何とか無理も云へるんだが、義理ある仲だから然うもならないしさ。

お松（讀本を持つて、此方へ寄つて來る、片足は痛々しく跛を引いてゐる）ねお母、私が明日、脊負して病院へ連れて行つてやるわ、可哀さうだものね、もう一週間も何んにも食べないで、弱り込んでゐるんだからね。

お市　汝、そんな足でとても脊負なんかして行けやしないよ、何アに、この狀袋が明日の午迄に二千枚貼れたら八錢になるんだから、それで買藥でもしてやるよ、貧乏の證明迄して貰つて御厄介にならなくても善いサ、私の產んだ小兒は、殺したつて死なゝいやうな者許りなのに、汝と、あの子丈は不思議に脾弱く產れ附いたんだね、病氣なんかになつて助からん者なら、寧そ早く死んだ方がお互の幸福だアね。

藤吉　可哀さうだなア、己が引受けたら何うかしてやるん

だがな……一體お市さんには子供が何人あるんだね？

お市　（又、狀袋を貼り出して）　皆で七人と……それから後、半分かね。

藤吉　七人と半分？

お市　今、一人、お腹に出來かけてゐるんだからね。

藤吉　ハア、道理で……少しお腹が膨れてゐるやうに思つたな、もう五月位かね。

お市　（吐息を吐いて）　幸作さんと夫婦になると、直に見る者も見ないやうになつたんだよ、私のお腹中は子を孕む袋のやうに出來てると見えるんだね、何かの譬つて云ふんだらうサ。

藤吉　（苦笑して）　七人半たア、隨分肥の利いた畑だなア、それで何かい、種は幾通りあるんだね、一人やニ人ぢやアないんだらう？

お市　當前サ、父親は一人、一人異つてゐるよ、何しろ私は亭主運が惡くて、始めてお互に思合つた仲だつた小學校の敎員には直と死別れて了ふし、それから紡績の職工と夫婦になると、間もなく其奴は他に情婦を拵へやがつて子供は私に推付けて逃げ出して了つたんだよ、母子で餓死しさうになつて、もう相手を云つちや居られない、誰でも飯を食はせてくれる男子の女房になつたんだね、すると一人、一人、子供が殖えて來て、それが荷厄介になるもんだから男の方では暫らくすると行衞を晦ましたり、愛想つかしをしたりするんだね、その中には電車の車掌もあるし、藥賣もあるしさ、それから私を賭博の抵當に入れた性惡男の手にも渡されたんだアね、けれともまだ一度も白首のやうな眞似はした事が無いんだか
ら、人樣に後指をさゝれるやうな覺えは無いんだよ、それ丈は私の自慢だアね。

藤吉　フーン、ぢや、今迄に亭主が七人異つたんだね、それでも滿足に飯を食はせて貰つてゐた間は、チヤンと一人の亭主を大切に守つてゐたと云ふんだらう、そこは大きに賴もしいよ、私も汝の其堅氣な處に惚れ込んでるんだアね。

お市　（鯔高な調子で）　ぢやア汝さん質に取るの何んのと、失禮な事を串談にも云つておくれでないよ、幸作さんが私等に飯を食べさせてくれてゐる間は、私は誰が何んな事を云つて來ても、見向もしやしないよ、何んな金持の御隱居であらうと、假令、何んな好い男子だらうと、私の眼には木佛、金佛同前だアね。

藤吉　ぢやア、別に幸作に惚れ込んでるといふ譯ぢやないんだな。

お市　惚れるの、腫れるのつて、そんな事は十四五年前の小娘の頃の夢だアね、今ぢやア亭主と思つてゐる男子とは

唯、離れられないのだよ、體が斯う附着いて了つてるやうな氣がするんだよ、是迄の亭主にも飯の切れ目が緣の切れ目になつた度に、それは〳〵心細い、忌な氣持がしたつけ、それでゐて、後の亭主の方が段々善くなるんだよ、不思議なものサね。

藤吉　そんなものかなア。（失望したやうに）それで子供の事は思はないんだね、飯さへ宛飼つてくれゝば、子供よりも亭主の方が大切になると云ふのかい？

お市　イヤ、私は又、人一倍子煩惱なんだよ、可哀さうに、父親は一人、一人、何處かへ行衞を晦ましたり、愛想づかしして逃げて行つたりするんだから、七人の子供の親は結局私一人なんだものね、でもそれ〳〵成長くなつて、總領は丁稚奉公に行つてゐるし、次男は田舍の百姓家へ行く、三男は蹄業師の子にやつてあるが、あの娘の妹と、弟とは、何うしたものか手癖が惡くて、それに私に馴染まないので、養育院へ入れて貰つてるんだが、隙さへあると彼等の身上が氣に懸つて、立つても居てもゐられない事があるんだよ、けれども私がいくら悶えたつて、あがいたつて、仕方がないんだからマア〳〵皆が飯が食へて、生きてさへ居れば善いわと、思直すんだね。

藤吉　親の身になりや然うだらうね、でも汝に子供を産ませちや、片ッ端から逃げて行く男子もあんまり身勝手だアな、己ならそんな眞似はしねえ、夫婦親子と緣が繋がりや一緒に餓死しても離れつこはねえだよ。

お市　（淋しさうに笑つて）私も一度や二度はそんなに、思詰めた氣にもなつたんだよ、けれども餓死したつて誰も褒めてくれるぢやア無し、第一頑是のない子供を心中のお供に連れて行くなんざ可哀さうだものね、今ぢやもうもうそんな事は馬鹿々々しくて、何うでも善いから、その日、その日がゆがみ形にでも暮せてさへ行けりや、泣かうとも喚かうとも思はなくなつたのサ、此方等の夫婦の緣といふのは、飯の食ひはぐれのない間丈の事なんだよ、とてももう汝達母子が養つて行けないから、別れてくれと云ふ男子の云分も、考へて見ると無理は無いサ、そりやア子供が一人殖えてると、此方は困るには困るけれども、その子供を脊負つて行けつて、男子に云ふのも此方が無理のやうだし、一體、男子つてものは、自分の身が立たないのに、子供迄連れて行かうといふ程、子を可愛がる氣もないんだね、私は女だから、そんな心持にはなれないんだよ、父親は無くても、母親さへあれば、子は育つて行くやうに出來てるんでもあらうけどもね。

藤吉　だつて子供を拋り放しにして行かれちや、その當座は隨分困つたゞらう、まだ身に染みる程苦しいと思つた

事もないんだな。

お市　そりやア早速、自分が食へなくなるから、苦しいには違ひないが、お庇と直ぐに他の亭主が出來るんだからね、白首のやうな眞似は一度もした事がないんだよ。

藤吉　（苦笑）ハヽヽ、お市さんのやうな女房振りだと、男子が明店にして置かないんだよ、オイ、己と一緒に行きねえ、幸作の野郎なんか、今に汝を抛り出すんだよ、現に汝を質に入れて、己の處で食つたり飲んだりしてたんだからな。

お市　（ツンとして尻を向け）またそんな事を云出すと、もう口も利いてやらないよ。

藤吉　マア、然う怒るもんぢやアないよ、……何しろ己等の仲間ぢやア、やれ婚禮だの、籍だのと、七面倒臭い手間隙はかゝられねえんだから、そこは普通の人間よりは結句重寶に出來てるんだな、まア此方へお向きよ、……あの娘は大そう本を勉強してるやうだが、感心だな、あれが小學校の教員の子でゞもあるのかい。

お市　（少し向き直つて）イヤ、あの娘の父親は電氣會社の釜焚きだつたが、それが水力になつて、食ひはぐれたもんだから、悪い仲間と賭博なんか打出して、私はひどい目に逢つたんだよ、元來人間は善かつたんだが、定つた仕事がなくなると誰でもあんなにくづれて行くんだらうね、そりやア恐ろしいやうに變つて行つたんだよ。

藤吉　それが汝を抵當に入れたつていふ男かい？

お市　然うサ、お庇で私は屠牛者の女房にされて、あんな脾弱い、赤兒を生まされたんだよ、けれどもあの娘は感心に學校が好きで、本を能く讀むさうだ、先生から襃められるさうだよ。

藤吉　（大袈裟に）そりや感心だな……何んとか云つたつけ、ウム、お松坊か、お松坊はそんなに勉強して、今に紫の袴でも穿いた女學生さんになる氣かい、こんな裏店から女の學者が出りやア豪いやなハヽヽ。

お松　（膝行り寄つて）叔父さん、この字を忘れて何うしても思ひ出せないの、敎へておくれよ。（本をさし出す）

藤吉　（當惑さうに）私は鳥目の方で、夕方はそんなものは讀めないんだよ、店の帳面も小僧に任せてある位だからな。

お松　ぢやア朝になつたら讀めるの？

藤吉　一本參つたな。（頭を掻いて）叔父さんはそんな字なんか讀むと、商賣の方がお留守になるんだから、子供の時から些とも見ない癖を附けてたんだよ、でもお松坊は感心だ、學校ではいろんな事を敎へて貰ふのだらうな。

お市　そりやアもう、私等の知らない事を澤山覺えて來るんだよ、宿ぢや何處か工女にでも出せつてやかましく云

つてるけれども、ア、して足は悪いし、それに本好きだもんだから、夜業も手傳はせて、晝間は學校へ上げてあるんサ、月謝が要るんぢやアなし、習うた丈、習ひ得だからね。

藤吉　そりやア善い事だな、己の處へ連れて來たら、女學校まで上げてやるんだが、惜しいもんだな。

お松　女學校まで行けると善いんだがね、私、いろんな事が教はりたいんだもの……然う〳〵、叔父さん、今日、修身の先生が、袈裟御前のお話をして下すつたの、袈裟御前つて、叔父さん、何年前に居た人なんでせう？

藤吉　袈裟御前……ア、、浪花節にある、あれか……然う然う然ういふ人があるよ。

お市　何んな面白い話だつたかい？

お松（母の顔を窺むやうに見て）袈裟御前はね、遠藤盛遠に殺されたのよ、自分の夫の身代りになつてね。

藤吉　然う〳〵、遠藤武者所が五條橋で見染めるんだな…………あの浪花節は面白いよ。

お市　亭主の身代になるつて……そんなことを先生が教へるのかい。（と考へ込む）

お松　先生が大さう、それを褒めてよ。

お市　何うして褒めてるんだらうね……私には合點が行かないよ、藤吉さん、何ういふ譯だらうね？

藤吉　そりやア身代になつて、死んだ處が貞女だアね、浪花節でもあそこは、ホロリとするよ、汝さんは聞いた事がないかい。

お市　浪花節なんか、人が唄つて歩いてるのを聞いた丈だよ、そんなものを聞きに行くお錢なんかありやアしないんだ。（と又セツ〳〵と状袋を貼つてゐる）

藤吉　己が一度連れて行かうよ、この表通りを七八軒行つたら、柳亭つていふ處で何時もやつてるよ。

お市　別に聞き度くもないよ、何うせ昔の事だらう、今の話ぢやアないんだらう。

お松　叔父さん、何年位前にあつた事なの？

藤吉　己もそこはよく知らんよ、何うせ徳川様の頃の事だらうな。

お市　その女は、飯に不自由した事なんかないだらうね？

藤吉　何うせ昔だから米は廉いやね、それに武士の娘なら、家ぢやア知行つてものを取つてゐたたらうしな。

お市（元氣づいた調子で）そりやアそれに違ひないよ。

藤吉　學校つて、いろんな事を教へるんだな、成程子供が早く物識になる筈だ、ハ、、、、、。

（戸口へ幸作の姿がぬつと現はれる、色の褪せ果てゝ、泥土のついた縫れ〳〵の法被に、裂け目の入つた、汗と垢との染込んだズボン下を着けてゐる。）

幸作　暗いぢやアねえか……誰か來てるんかい？
藤吉　（俄かに、調子を張つて）ア、己だよ、今日は質草を引取りに來たんだよ。
（幸作は下駄を手にして、出て行く。）
お市　お松や、お父ツんアにお錢を貰つて、石油を買つて來な、それから例の通りお米を取つてくるんだよ……今夜食べるものはまだあつたつけね。
お松　お晝の裏粥がまだ殘つてるよ……でもお父ツアんは働いて來たんだから、お腹が空いてるだらうね、お米を買つて來て磨ぎませうか？
お市　イヤ、それは母さんがするよ、日が暮れて了つたんだ、早く豆ランプに油を買つて來ておくれ、井戸端へ行つて、お父ツアんにお錢を貰つてな。
（お松は豆ランプを取り出して、戸口から出て行く。）
藤吉　夕方になると、イヤに寒いな。
お市　もう冬だものな、井戸端の柳なんか、もうすつかり散つて、裸坊主になつた、人間も袷一つぢやア遣り切れなくなるんだよ。
幸作　（足を拭きながら上つて來て）今日は生憎と錢の片なんか一文も無えや、油が買へなけや暗い中に坐つてるんだ、生命に別條のない事だから大丈夫だよ。
お市　（癇高な聲て）汝何うしたんだね、何處か途中で遣つて了つたかい、近所の馬肉屋に借が出來たんで、今度ア何處か河岸を變へて、現金で飲んでゞも來たのかい。
幸作　（勃とした調子）飲んでるか、飲んでないか、この口を嗅いで見ろ、馬鹿め、この節の不景氣に、そんな氣樂な眞似が出來ると思つてるのかい、それ處の騷ぢやねえや、家へ歸つたらもつと優しい言葉をかけるもんだ、己は一日外で生死の目に逢つて來てるんだよ。
お市　ぢやア何うして貰ふべき筈のものが、今日に限つて貰へないんだね、汗水流して、無錢で稼いで來る譯はないやね。
幸作　（自棄に坐つて）處が今日は、血の汗を流して無錢で稼いで來てやつたんだ、己だつて男一匹だい、四十錢や五十錢の端た金で、然う〳〵男子の面を踏潰されて默つてすつ込んでゐられるものかい。
お市　エ……ぢやア何事かあつたのかい？
藤吉　何うしたんだい？　喧嘩でもやつて來たのか？
幸作　生きてる人間だアな、喧嘩もやりや、人殺もやり兼ねないさ、不思議はねえよ。
お市　（氣遣はしげに）一體何事が起つたんだね、早く云つて聞かせておくれな……然う云へば顏色が變つてるる、眼が血走つてる樣ぢやアないか？
お松　（戸口から影の如く入つて來て）向ふぢやア魚を煮

てる匂ひがプン〳〵してるの、私は嗅いで來たの……お
父ツアん何うしたのよ？

幸作　腕がヅキン〳〵痛みやがる、（捲つて見て）少し血が
出るやうだ。（濡れ手拭で堅く縛る）

お市　（傍へ寄つて、手傳ひながら）まア、負傷をしたん
だね、困つた人ね、……お松、早く行つて石油を買つて
來な、こゝに二錢銅貨が一つあるからね。（袂から紙に包
んだのを出してやつて）早く行つて來な、他所の食物の
臭なんか嗅いでるぢやアないよ。

お松　ハイ……お米は？

お市　善いよ、早く石油を買つて來な。

（お松は急いで出て行く。）

藤吉　何か仲間と取組合でもやつたんだな、何うせ酒の上
だらう。

お市　嘘だア私等の事も考へておくれだ、私の體も唯の體
ぢやアないんだからね。

幸作　何も好き好んで荒つぽい事をやる己ぢやアねえよ、
皆、お互の身上を思ふから起つた事サ、醉拂つてやる喧
嘩なら高が知れてらアね、今日は素面だ、素面だから、
やらなけやならねえ喧嘩をやつて來たんだ、生命がけの
喧嘩をやつて來たんだ。

お市　誰を相手にして、そんな事をして來たんだねえ？

幸作　（吐出すやうに）相手は監督の野郎だ、向脛をたゝ
き折つた丈で、息の根を止めて來なかつたんが殘念だ
よ。

藤吉　（嘲るやうに）土方が監督を手込にしたとなりや
ア、何んな云分があつても、もう口は上つたりだ、向にや
ア、シヤベルや鶴嘴より、もつと恐ろしい獲物を持つた
者が附いてるんだからな、空元氣を出したもんサ、明日
の朝から何うするつもりだい？

幸作　何うする目的もありやアしねえよ、飯が食へなけや
監獄で養つて貰らふんだ、その方が結句呑氣だアな。

藤吉　汝はそれで善からうが、後に殘つた者は何うするん
だい？　お市さん、見ねえ、こんな男子が倚頼になるも
んぢやアねえ、早速己の處へ來ると定めときよ、幸作も
もう云分はあるめえ、六度分の、馬肉と酒代の質草を己
は今日受取に來たんだ、汝が、然ういふ落目になつたとす
りや何うせ明日から食ふ物もなくなるんだから、後の始
末にも困るだらう、己がこれからお市さんを引取つてや
るよ。

幸作　フム、汝は、己の嬶に氣があつて、それで來てやが
つたんだな、折角、善い都合だと云つてやり度いが、汝
は己の蟲が好かれえ、善い年をしやがつて此方等の長屋
の嬶や、娘の尻許り追駈廻つてるやうな奴にや、己の大

切がつたお市をオイソレと譲つてやる氣にやなれねえや、お市のお腹には己の子供も入つてるんだからな。

藤吉　（熱心に）　お市さんを引取るからにや、何うせ子供まで一切合財、引取つて行くよ、お腹の中にゐるのは飯を食はねえから猶更厄介にはならねえや、汝は質に入れるつて、男子の口で己に云つたんだから、今更覺が無いとは云はせねえや。

幸作　（鼻先であしらつて）　汝がお市を質に入れりやア飲ませてやるつて、うるさく云ふもんだから、己やウンウンと云つてた丈だよ、燗ざましの腐れ酒や、雪駄の皮のやうに靱(こは)い馬肉なんかと、可愛い娘と取替へるトンチキだと己を思つてるのかい、面を洗つて出直して來るが善いや。

お市　（莞爾して）　然うだらうともサ、マサカ汝がそんな事を本氣で云ふ人だとは思はなかつたよ、おやアこの爺が、自分の方からこんな事を云出したんだね、忌らしい、誰が行くもんか、幸作さん、仕事の口が外れたら、明朝から又探してお歩きよ、殘飯を食つてたつて、私や待つてるからね。

幸作　ノム、斯うなりや、意地になつても、この排々爺なんかに、汝の體を自由にさせやしないやな。

お市　私も三日や四日飢ゑたつて、こんな爺の世話なんかになるもんかね、忌らしいたらありやしない。

（藤吉、眼を光らせて、口をモガ／＼させてゐる、お松が歸つて來てやがて豆ランプは、このほの暗い室の中を照らし始める。）

お松　もう夜業(よなべ)する時間ね。（状袋を貼りかゝる）

お市　御飯を食べてからにおしよ。

お松　私はもう善いわ、お父ツアんがお腹が空いてるだらうからね。

幸作　食物か、殘つてるかい、おやア何んでも善いから早く出しな。

藤吉　（慄へた尖り聲て）　體己の方の始末は何う附けてくれるんだい？

幸作　ある時拂ひサ、無い者ア逆さに振つたつて出やしねえや、何うせ無宿者や立ん坊相手に商賣してる汝ぢやアねえか、然う因業な口を利くもんぢやアねえよ。

藤吉　（開き直つて）　無宿者や立ん坊でも、借倒したり、飲倒したりしやしねえよ、握つて來た現金(ナマ)を眼前へぶち蒔けて置くか、法被や帽子を抵當にしてからでなけりや飲ましてくれいと云やアしねえんだ、屋根の下に居るからと思つて、此方や汝に貸してやつたんぢやアねえか？

幸作　（冷笑の口調）　おやアお市を連れて行くと云ふのか

い？　本人が行くと云ふなら連れて行くも善いだらうよ、だが爺さん、この前も汝はそんな手で何處からか若い女を引張つて來て、お庇で一月も經たない中に、店の賣溜をすつかり持逃されたと云ふぢやアねえか？　そんなに女が欲しけりや何處か蔑恰好の婆さんでもそこらで拾つて來るが善いやな、惡い事は云はねえよ。

藤吉　大きにお世話だよ、彼の女は自分ぢやア長く辛抱する氣でゐたんだが、傍の者が嫉きやがつていろんな惡智慧を附けたからあんな眞似を仕來したんだ、何アに、白首に引懸つたよりやア安く附いてらアな。

幸作　フン、汝はそんなに勘定高いから小錢も拵へたんだらうな、喰へない爺だ。

藤吉　お世辭は要らねえから、談の形を附けてくれろ、店を明けて來てるんだよ。

幸作　（勃として）何う附けるんだい。

藤吉　お市を寄越せつて云ふんだ。

お市　（慳貪に）誰が行くもんかい、汝の處なんかへ行くよりやア寧そ餓死した方が增だよ、人を馬鹿にしやがる。

藤吉　お市さんは餓死なんか忌だつて云つてたぢやアないか？　幸作が生意氣に監督を擲り附けたりなんかしたらもう飯の喰ひ上げだ、この不景氣な時節に、土方の仕事が然う道傍に轉がつてる氣遣は無えよ、いゝ加減に思切つて己の處へ蹤いて來るが善いぢやアねえか？　焚き立ての溫い飯に、飛切上等の柔かい馬肉を副へてたらふく食べさせてやるよ、酒もあるしさ、それから浪花節も聞かせてやらアな。

お市　（誘惑を恐るゝやうに兩手で耳に蓋をして）そんな事は聞くのも忌だよ、……ねえ、幸作さん、明日は朝早くから仕事の口を見附けてお歩きよ、私は狀袋をセッセッと貼るよ、幾何かの補足にはならアね。

幸作　（頷いて）大丈夫だ、案じる事はねえや、天道人を殺さずつて云ふから、今迄の仕事を無くしても、又明日は明日の風が吹かアな、愈々行けなけりやア人間を止めたら善いんだ。

藤吉　ヘン、人を欺して、飲んだり食つたりしてる奴は、もう疾に人間を止めてるんだい。犬や猫も同前だ。（激しく罵り立てる）

幸作　何んだと？　（哮り立つて片手で突飛し）出て失せやがれ、默つて聞いてりやア圖に乘つて、云度い放題な事を云ひやがる、撲殺しても構はねえ奴だが生命丈は助けてやらア、出て失せやがれ。

お市　眞實に失敬な爺だ、出つ了へ、歸ちまひやがれ。

藤吉　亂暴な事をするな。

幸作　（飛び蒐つて）出て失せろつて云ふに、此處は、己の家だい。（力づくて戸口から外へ突放す）
藤吉　（首丈出して）覺えてやがれ、交番へ屆けてやるぞ、畜生め。（捨辭を殘して消える）
幸作　馬鹿野郎奴ッ……今度閾をい跨だら足も腰も立たねえやうにしてくれるぞ……ア、腹が空いてゐる……クウクウ鳴つてやがる。
お市　（労るやうに）釜の殘りがあるよ、私等は何うでも善いから汝お上りよ。
お松　お父ッアん、持つて來ませうね、もう冷くなつてるけれどもね……。
幸作　（焦々して）何んでもお腹へ詰込みさへすりやア善いんだ。
お市　詰込むつて程も殘つてやしなからうけども。（食臺の上を片附けて中央に置き直す）
お松　（土鍋や箸、茶碗を運んで來て）さア、お父ッアん、お上んなさい。
幸作　（土鍋の中を覗いて見て）皆、茶碗を出すが善い、分け合つて食べようよ……。（ふと氣が附いたやうに）小兒は何うしたんだ、何んにも食けねえのか？
お市　（溜息を吐いて）もう死んでるんだか、生きてるんだか、分りやアしない、眠て許りゐるよ、あれッ限り參つちまふんだらうサ。
幸作　困つたもんだなア、此方も何うする事も出來ねえんだから。（云ひ／＼箸を附けて口へ入れる、やがて杓子で掬つては、ガッ／＼掻き込むやうにする、土鍋の底が白くなる）
お松　（堪らなく欲しくなつたやうに）私にも少し……。
幸作　オヽ、今にやるよ。（しきりに、杓子の先を舐めてゐる）
お松　（鼻聲で）少しおくれよう、お腹が空いて來た。
お市　（本能的に）私も何んだか欲しくなつたよ。
（お松は、土鍋の中へ、指を突込んで、それを嘗める、三人は忽ち土鍋一つを奪ひ合ひして、手摑にした僅少の糧に喉を鳴してゐる、その後でお市は、土瓶の水を土鍋の中へ注いで、掻廻して啜り込む。）
幸作　（泣笑して）違ひねえ、あの爺が云つたやうに、犬か猫のやうな眞似をしてるんだなア。
お市　（口を拭いて）寧そ犬か猫なら掃溜を啄き歩いても食つて行けるんだよ、人間の皮を着てる丈情無い氣がするんだアね。
幸作　（淋しい調子で）然うサな、足が二本少ない丈で、餘計な苦勞があるんだなア、ハッハッ。
お市　（ズッと幸作の顏を見据ゑて）一體、汝さんは何う

して監督と喧嘩なんかしたんだねえ、何か餘ッ程癪に障る事でも云つたのかね。

幸作　（不安さうな顔色で）　何アに、癪に障る位な事なら何時もの通、あの馬肉屋の老爺を弄つて、一杯引つかけて腹の蟲を抑へて歸りやそれで濟むんだが、今日のはそれ處ぢやアねえ、仕事の仕振が横着た、手を拔いて許りゐるなんて、云ひがかりを拵へやがつて、此方等を五六人程、首にするつて吐すんだ、その實はもう線路の工事も先が見えて來たから、會社の方で人減をするつていふ噂が内々耳に入つてたんだが、一時に然うすると一騷動だと思ひやがつて、何か難癖を附けちや少し宛、頭數を減して行く算段だよ、内兜を見透かしたから腹に据ゑ兼ねて、皆が嚇となつて監督の野郎を袋叩に逢はせたんだ、彼奴も災難だが、日頃あんまり思遣が無えから罰が當つたんだ。（喫ひ殘りの卷煙草にランプの火を點けながら）　途で拾つて來たんだ、敷島だよ、世間には半分吸つて捨てる贅澤な人間もゐるんだ、お庇で此方はお情に有附くんだよハヽヽヽ。

お市　それで汝さんの今日の給金も寄越さないつて云ふのかい？

幸作　（唇を鳴らして、煙を吸ひながら）　給金を取りに行きやア、その場でフン縛られるんだ、何うせ出る處へ出なけやならねえにしても、些と一度は歸つて見度いから逃げて來たんだよ、仲間の三四人は擧げられて行つたやうだが、己も何んだか斯うヂッとしちやゐられねえやうな氣持がするよ。

（急に起上つて、戸口を覗いたり、彼方此方と歩き廻つたりする。）

お市　（眼を瞬つて）　エ、……ぢやア汝、此から自訴でもしようて云ふ氣なの。

幸作　サア、何うしたものかなア、（力なげに坐つて）己も男子だから、仲間の者に引を取つちやアならねえしさ。

お市　そんな事よりも、私達を餓ゑさせないやうにしておくれよう、明日の米代が一番先にかゝるぢやアないかね？

幸作　（苦笑）　それも然うだな、男子だなんて空威張して見たつて、女房子を餓ゑさせちや犬猫よりも働きがねえ譯だなア。

お市　（周章して）　警察から手が廻るのなら、一緒に何處かへ逃げようぢやアないかね、早くサ。

幸作　逃げたつて、捕まるものなら何うせ捕まるんだよ、政府でも然ういふ方には拔目が無えんだからな。

お市　人を減らしたりすりや、土方をする位の者が明日の日食へなくなるのは知れ切つた話ぢやアないかね、云は

ばそれも人殺したよ、然ういふ事をする奴をフン縛つて貰ふ事は出來ないんだらうかねえ？　口惜しいつたらありやアしない。

幸作　此方に云はすりやア然うするのが政府の人助たアな、此方も亂暴したくてするんぢやアねえ、鬼の最期見をこくんだからよう。

お市　(悶々として)　何うすりや善いんだらう。

幸作　己も何うしたらいゝか譯が分らねえ。(腕組をして、考へ込む)

お松　(茫然、話を聞いてたのか)　お父ッアん、喧嘩するのが一番悪いつて、先生が云つて、聞かせて下さるのよ。

幸作　フム、相手が、己等に飯を食はせねえつて云ふんだから、此より悪い事はねえよ。

お松　悪い奴ね、お父ッアんに一日働かせといて、お錢を寄越さないなんて……お母、明朝、學校へはお辨當を持つて行けないの？　私、何うせう。

お市　斯うなつちや學校處の騒ぢやアないよ。

お松　でも私、休むのは忌よ。

お市　(空笑ひして)　汝は飯を食へないでも、本を讀んでりやア善いんだね、そんな氣になつて見度いねえ。

お松　私だつて、飯を食べなけりやお腹が空くわ。

幸作　(焦々しく起上つて、室中を歩き廻り)　ア、堪らなくなつて來らア、飯……飯……腹つて云はれたと、己ア何んだか眉間へ磨澄した出刃庖丁でも突附けられてるやうで、恐いやうな、悲いやうな、何んとも云へねえ氣持がして、ヂッとしちやゐられねえ、明日の日から、あ何うするんだい　あの組へ行つても、この組へ行つても、オイソレつて、仕事が手を明けて待つてる氣遣ひはねえ、何處も彼處も人減しをやつてる矢先だから、割込まうにも割込まりやしねえ、爭そ立ン坊にでもなるか………然うまで身を落し度くもねえや、……併し目的が無えぞ、一向、當には無えぞ、己ア口一つ養つて行けさうな處も無えや、女房子の身上ぢやア無え、己のこの口一つ、何うすりや善いんだい。

お市　(ハラ／＼して)　汝、そんな心細い、情無い事を云出してくれちやア困つて了ふぢやアないかね。

(白髪の蓬々とした、痩せこけた老人が、洗ひ晒らしの、ツギハギの單衣の下に[illegible]を重ね、[illegible]影法師の如く入つて來る。)

お市　誰だね？……オヤ、隣の老父さんか……。

お松　今晩は……、と丁寧に叩頭す)

老人は、淋しさうに笑つて、叩頭する。

幸作　(漸く坐つて)　源吉さん、入つしやい……汝さんの處に何時も景氣が好くて、結構だねえ、此[illegible]

いもんだよ。

源吉　（忌な顔をして、弱々しい聲で）　景氣が善い處の騒ぎぢやア無いよ、己は身の置き場所に困つて、斯うしてふら〱此家へ迷うて來たのサ。

お市　だつて汝さん處の龜さんは、瓦斯會社の職工の中でも、善い顔だつて云ふぢやアないか？　それにお勢さんはお勢さんで、火藥庫へ通つてるんだし、若夫婦が揃つて稼いでるから、安心してられるぢやアないか、汝さんは樂隱居だつて、長屋中でも評判してるよ。

幸作　（思ひ當つたやうに）　矢ッ張、腕に鍛へ込んだ職があると干乾にやならねえんだ、褌一本の素裸を資本にしてる人間が一番危いんだよ、一つ躓いたら、石の上へ仮臥つて頭を打割られるんだからな。

源吉　イヤ、若い中は、二度や三度、仮臥つて頭を割つたからつて直にキヨロリとして起上がつて了はアな、己のやうに、もう七十の峠を越しちや、傍の者の躓く餘波を一つ食つても地上へ投出されて了ふんだ、そしたらもうそれッ限り、鼻血を出して死ばるんだよ。

お市　汝さんまで何んだか、イヤに心細い事を云出すんぢやアないかね、何時も元氣の善い老爺さんだのに……。

源吉　（淋しく笑つて）　何時も元氣の善いのは空元氣だよ、何うせ人間も斯う落つこちて了つちやア、泣いても笑つても浮ぶ瀬はありやしねえんだから、同じ事なら串談口でも利いて、面白可笑しく暮らして行かなけや損だと思つて來たんだよ、けれどももう〱そんな芝居を打つてる隙も無くなつちやつた、滿足に生き延びても、何うせ先は知れてらアな、己アもう此處で娑婆に見切を附けた方が悧巧らしいんだよ。

幸作　イヤに又、濕つぽい事を云出して來たんだな、何か内輪喧嘩でもおッ始めたんかな？

お市　汝さん處のは、娘は實子だし、龜公もナカ〱心掛が善くて、親を大切にするつて、評判者ぢやアないかね！

源吉　イヤ、皆、善くしてくれるよ、眞實に善くしてくれるよ、（センチメンタルな涙を呑んで）……だから己も斯うして、何時迄も厄介をかけちやア居られねえんだよ。

幸作　そんな事を云出したつて、今更養育院へも行かれやすめえし、若い者が善くしてくれりや幸福ぢアねえか？　そんな贅澤な愚痴を云ふと罰が當らアな、己は汝さんが羨ましいよ。

源吉　（力の無い空笑をして）　ハヽヽヽ、己は汝さんのやうな若い者が羨ましいんだ、己ももうせめて十年若けりやア、自分で働いて自分で食つて行かアな、婿や娘の荷厄介にやならねえつもりだが、今ぢやアもう、物の一

町も歩くと息切がするからな、紙屑も拾つて歩けねえんだよ。

お市　そんな眞似をして歩かなくても、若い者が働いて食はせてくれりやア文句は無いぢやアないか？

源吉　イヤ、それがもう然う行かなくなつたんだ、瓦斯會社も經濟が立たないとか云つて、職工の給金が一統に減らされたんだよ、龜吉も今迄六十錢宛取つてゐたのが一時に二十錢減らされたんだ、孫も五人ゐるし、働き盛の若い者に飯を減らさせちやア體が續かなくなるしさ、つまり己の食扶持丈奪上げられて了つたやうなものだよ、「敷島」一函丈の代だ、（苦笑）己の生命の代がそれなんだつて家内でも笑つて來たんだ。

幸作　ハヽヽ「敷島」二函か、違ひねえ、己等の生命の値打はそれ位のものだなア。（考へ込む）

お市　老父さんの處でも給金が減つたのかなア、世間は餘ッ程不景氣だと見えるんだね。

源吉　不景氣には違ひなからうが、それでもこの裏長屋の溝渠から二町程の、表通の、角まで出て見ると、世界は違つてるよ、電車も通つてりや、電氣燈や瓦斯燈もお祭のやうに點いてらアな、別に腹の空いた顏をして歩いてる人間も見附からない、あんな明味へ出ると此方等は急に影法師が薄くなつて來て、他の人の眼には見えなからうといふやうな氣がするんだ、そりやア何う世浮世だから、それ〴〵屈託はあるには相違ないが、その日、その日の飯の心配をする程悲慘な者はありやアしないよ、生きるか、死ぬかの眞劍勝負だからな、一日に三度宛、眞劍勝負をやるんぢやア他の事は何んにも考へられやしないよ。

お市　そりや全く老爺さんの云ふ通りだよ。

幸作　違ひねえ。（不安さうに起上つて）……然う云やア己も斯うして愚圖々々しちや居られねえ……又今に禿頭めが屋根代をがみ〳〵云つて來るだらうし……ヂッとしちや居られねえ。

お市　汝さん、何處へ行くの？

幸作　（身支度をして）一寸と出て來るんだ。

お松　お父ツアん、何處へ行くの？

幸作　一寸と出て、直ぐと歸つて來るよ。

源吉　まアもつと話相手になつてゐておくれよ、己も此家へ邪魔に出るのは、もう今夜限り位のものだらうからな。

幸作　イヤ、汝さんの話で、己もうつかりしちやゐられなくなつたんだ、仕事の口を見附けるか、それとも警察へ自訴するか、早く決めて了はなけりやならねえんだよ。

源吉　何事かあつたのかい？

お市　宅のも今までの仕事の口が外れて了つたんだよ、それで喧嘩をして來たんサ、（ソツ／＼する幸作を見て）でも汝さん自訴する丈は見合せておくれよ、それぢや明日の日が何うにも斯うにもならなくなるよ。
お松　お父ッアん、家に居ておくれよう。
幸作　何アに、自訴すりやそれで己も當分食はせて貰へるしさ、後に殘つた汝等は又引取人が出來らアな。
お市　私や忌だよ、汝、出て來るのなら仕事の口を見附けて來る事におしよ。
幸作　見附かつたら見附けに來ようよ。（柳行李の蓋を明けて見て、舌打）何んにも殘つてやがらねえんだな……一寸と行つて來らア、あばよ。
お市　直ぐと歸つておくれだらうね、……又屋根代を取りに來て、ガミ／＼云ふ事だらう。
お松　父ッアん、早く歸つて來ておくれよう。
幸作　歸れたら直ぐに歸るよ。
お市　そんな頼無い事を云つておくれでないよ……オヤもう行つて了つた。
お松　私、後を蹤いて行つて見よう。（下り立つ）
源吉　何んだか素振が可笑いな……もう歸つて來ないのかも知れねえよ。
お市　（顏色を變へ）眞實に然うでせうか……ぢやア追驅けて連れて歸つてやらう、一寸と待つてゝおくれ。（おたふたと飛び出して行く）
源吉　（ぢつと眼を瞑つて、考へてゐたが）何か食べ殘りの者でも貰はうか。（云ひ／＼膝行り寄つて、そこらの土鍋を取上げて見て）オヤ、底まで奇麗に掃除したやうになつてゐる、飯粒一つ殘つちやゐない。（今度は起つて、ゴトゴト臺所の方など探し始める）成る程、此家は宅よりも貧乏だ、鹽氣一つ殘つちやゐない、まア水でも貰つて飲むかな、これ位默つて御馳走になつたつて、誰も苦情は云やアしまい、泥棒たア云はれまい。
お勢　（戸口から顏を出して）お父さん……。
源吉　（周章て、正坐(かしこ)まる）誰だい？
お勢　お父さん、お飯の支度が出來たからお歸りよ。
源吉　何んだ、汝かい、己は喫驚したよ。
お勢　何うも遲くなりました、さぞ御腹が空いたでせう。
源吉　夕飯かい……でも今日から三合減らして炊いたのだらう、己はもう善いから孫等に腹一ぱい食べさせて遣つてくれ、それに汝等は一日中強(きつ)い働をして歸つたんだから、早く食べてくれ、己はまだ食べ度くもねえんだから。
お勢　でもお父さんが上らなけや、皆も食べられませんから、お歸んなさいな、直ぐに、……オヤ、貴方一人なの？

源吉　一寸と皆出て行つたから、己が留守番をしてゐるんだ、まアノヽ先へ還つてくれ、己は後から行くよ。

お勢　皆何處へ行つたんです、呑氣だわ、貴方に留守番を賴んだり何んかして。

源吉　何アに、直ぐと歸るだらう、そしたら己も行くよ……

……己に介はんで皆早く片附けてくれ、若い者は健康で長生をしてくれなけやいけねえ、己なんか生きてゝも死んでも同じ事だ、何うせもう掃き殘された此世の屑見てえなもんだからなハヽヽヽ。

お勢　そんな事を云つちやア困るわ、爺さんもお父さんが心配なさるつて、それ許り氣にしてるんだからね。

源吉　ア、分つてるよ、分つてるから早く歸つて、片附けておくれ。

お勢　ぢや直ぐとね……。(月光の青くさしかゝつてゐる障子の上に、影法師が搖れながら歸つて行く)

(源吉は腕ぐみして、深く考へ込んでゐる、出稼するおでん屋の鈴の音が遠く消えて行く。)

(バタノヽと草履の音がして、お市は歸つて來る、眼尻は釣つてゐる。お松はしくノヽ泣いて蹤いて來る。)

お市　(息の詰つたやうな聲で)　逃げやがつたんだ、矢ツ張逃げやがつたんだよ。

源吉　何うしたんだ？

お市　後姿が見えたから、聲をかけると驅出すんぢやアないか、やつと法被の裾へ手をかけたら、突轉ばしにおいて、横丁の闇がりの中へ逃げちまつたんだよ、イヤといふ程肱を打つたんだ。(擦りノヽする)

お松　(鼻聲で)　私も轉んで、膝を打つちやつたの。

お市　あの野郎許りは、あんな人間ぢやアないと思つてたのに、矢ツ張、皆が皆、薄情なんだ。

源吉　それぢやア矢ツ張、自訴に出る氣なんだらう……仕事の口だつて、然う今日の明日のつていふやうに見附りツこはねえよ、薄情たの何んだのつて、そんな愚痴は此處邊で通用しやしない……何アに汝はまだ若くて、女房振りが善いから、引受ける者は出て來るよ、心配にあたやアしないサ。

お市　(擽つたいやうに)　私だつて、然うノヽ流れ渡りするのは忌だよ、いくら食べる爲めたつて……アヽ何とか手職でも覺えて置けば善かつた、火藥庫にでも口は無いか知ら。

源吉　火藥庫にだつて、然うオイソレと云つて口は無えよ、それに仕事も覺えてからでなけや、幾何にもなりやアしねえ、娘は長年通つてゐるが何時負傷をするかも知れないし、負傷處ぢやアねえ、惡くすると生命を亡くするんだ、己は毎晩彼女の顏を見る迄は安心しねえんだよ、

そんな危險な仕事よりは、汝さんのやつて來たやうにそれからそれと、人の女房になつて生活して行くのが一番呑氣ぢやアねえか！

お市　あんまり呑氣でもないよ……情ないと思ふ事もあるサ。

源吉　そんな人並の考へを出すんぢやアねえよ、人並の考へを出すと此處邊の者は餓死しなけりやアならねえ、已も昔は貞女だの、何んだのていふものに感心したもんだが、こんな落目になつちやア そんな事は下らないと思つて來たんだ、ソレ、この表通の角の、小ザツパリしたしもた屋の若未亡人は、貞女だと云つて新聞にも出たつて云ふが、あれは戰で死んだ陸軍士官の配偶で、大分、遺族扶助料つていふのが下るんださうだ、飯の心配が無けや汝さんだつて、それ位の貞女にはなれようサ、此方等とは世界が違つてるんだよ。

お市　然うサ、一度でも善いからそんな氣樂な身分になつて見度いもんだね。

源吉　生れ變つてゞも來なけやそんな希望は無えよ。（嘆息を吐いて）……已も此年迄、いろんな苦しい目にも逢つて來たが、昨日今日程の辛い思をしたのは始めてだよ、婿の日給が減つて、買米を三合減らしたので、孫等にも飯を控へ目にしろと、娘が云つて聞かせると十歳を頭に五人の孫奴が、已の箸を持つのを白い眼で、八方からヂロヂロ見つめるんだよ、あれ迄懷いてた奴らが、急に祖父さんを邪魔ものだと思ひ出したやうに見えるんだ、已もゾツとしたな、ア、〳〵あんまり長く生き過ぎたんだよ。

お市　そりや老人の癖つて云ふもんだらうよ。（お松を指して）そりやアこの娘だつて普通は溫和しくても、飯時には人が變つたやうになる事もあるけどもね。

お松　（状袋を揃へながら）嘘よ、私はそんな事はありやアしない。

お市　無い事もないよ、學校では何か敎はつて來るらしいが、矢張、實地には然うも行かないさ。

お松　親は大切にせよと本に書いてあるんだもの。

源吉　（空笑）ハヽヽヽ、いくら、本には書いてあつても此處邊ぢやア然うは行かねえよ……何アに已はあんまり長く生き過ぎたんだから、もうこゝらで娑婆にお暇乞をしても心殘りはねえさ、老先の長い孫等や、働盛の婿や娘は、空腹じくない程食べなけやならねえ、誰れか人身御供に上らなけや家内の者が助からねえとなりやア、死損つた老人が取られて行くのが當り前だアな。

お市　そんな事を云出されると、私なんかも死んで了ひ度くなつちまふよ。

お松　お母ア、そんな事を云つちや私、悲しくなるわ。(しく／＼すゝり泣く)

源吉　お市さんが死度けや恰度善い、寧そ己と心中せうかハヽヽヽ、イヤ、汝はまだ若いわな、死なうたつて死切れるもんぢやねえよ、生きて行つたつて別に花實も咲かないか知れねえか、まア生きられる丈は生きたけや損だよ、己だつて好き好んで死度かアねえんだからな。

お松　老爺さん、もうそんな事を云ふの はお止しなさいな。

お市　(沈んだ聲で)　眞實に、私も何だか襟髮でも取つて、淵の中へ引すり込んで行かれるやうな氣がするからね。

源吉　(相不變、勢のない笑ひ方で)　ぢやア心中せうか。

お市　馬鹿々々しい事をお云ひでないよ。

源吉　ハヽヽヽ、然うだらう、まだ汝には 脈があるんだよ、己が汝さんでもまだ死にやしない、死なねえでも濟むんだからな……けれども己も若い時は、眞實に心中せうかと思つた事もあるよ、相手は綺麗な花魁だつたからな、寧そあの時、一思ひに遣附けてゐたら、美しい世間だと思つて眼が瞑られたんだらうが、今ぢや泥鼠の死様とあんまり違つちやゐねえんだ。

お市　汝さんも、若い時はいろんな面白い目を見て來たんだつてね。

源吉　これでも汝、淺草の富豪の家に生まれた若旦那だつたものな、湯水のやうに金を使つて遊んだ事もあるんだよ、三味線鼓の亂調子で騷ぎ通して、夜明をやつた事も珍らしくはねえんだ、あの頃は金は何處からか湧くものと思つてたんだよ、地道に稼いでる者の面が持、馬鹿に見えたんだよ。けれども一體、徳川幕府の時代には、世間が一統に生活が樂で、大名のやうな金持もザラにゐるなけりや、明日の米が心配になるて程の、貧乏人も澤山とは見附からなかつたんだね。

お市　(淋しく笑つて)　ぢやア老爺さんには、その若い時の罰が、今、當つて來たんだね。

源吉　然う云やアまアそんなものだらうよ、けれども己もこんなに落こちて、その日、その日の米代に追驅けられる樣になつてから、始めて生活を立てゝ行くといふ事の有難さが身に染みて來たな、餓死しちやならねえ、大地にかぢり附いても生きて行かなけやならねえといふ氣になつて、夜露に打たれておでん屋臺を引張つて歩いたり、紙屑をつゝいて歩き廻つたりして、苦しみ拔いて漸つと人間の味が分つたやうに思ふんだよ、極樂トンボで、ふは／＼飛んで歩いてたときの己は、宛るで眼を明いて夢を見てたんだな、まア一度は落ちるところ迄落ちて見ねえと、人間の眞實の正體は知れつこはありやしねんだ

よ。

お市　此方等はもうその落ちる處迄、落ちたんだよ、身動も出來やしないんだ……ア忌、忌、これぢや唯、呼吸をしてる許りサ。

源吉　呼吸をしてる許りでも善い、己は生きてたいな。(ぐつたりとなつて)まア、善いわ、己も此上、慾は渇くまいよ、若い中には、美しい夢も見たし、仕度三昧もしたし、年老つては食ふ事に許り追駈け廻はされてたんだから、これで人間の修業も略方濟んだんだらうよ、もう泣いて見ようたつて、涙も出やしねえさハ、、、、。(引釣るやうに笑ふ

お市　ぢやア汝さん、何うして死なうつて云ふんだね?

源吉　己の命は、この豆ランプのやうに、もう八分は消えかゝつてるのだから、外へ吐く息を二つ三つ内へ引いたら片は附くんだよ、暗闇になつた方が善い、婿や娘の心配する顔も見えなくなるしさ、あの孫等の白い眼をするのも見えなくなるしさ。

お市　苦が無くなるのが、私等には樂つて云ふもんだねえ。

源吉　まアそんなものサ……それでもお松坊は感心に善く仕事を勉強するな、若い者はさア生きられる丈、生きるが善いよ。

お松　私、セツ〱と貼れると面白いんだものね。

源吉　然うだらうなア……然ういふ氣になつて見度い。

(障子の外の、青白い月光の中を、お勢の影法師が動いて、やがて戸口から聲をかける。)

お勢　父さん、早くお歸りよ、もう皆濟んで貴方の丈殘してありますよ……オヤ、お市さん、お歸りだね。

お市　まアお上んなさいな。

お勢　難有う……お父さん、直ぐに歸つて下さい。

源吉　ア、今に歸るよ、己のを殘してなんか置かなくも善い、己は此處で御馳走になつたんだ、なアお市さん。

お市　生憎、何んにも上げるものがなくつてねえ。

お勢　イヤお父さんのは、チヤンと取つて置いてあるんですよ。

源吉　今に歸る、先へ行つて居れ、少し話が殘つてゐるんだからな。

お勢　でもお腹が空いてるでせう、直ぐにお歸んなさいな。

源吉　よし〱、今に行くよ、今に……汝等は己に遠慮しないで、體に力の附くやうに食べておくれ、健康にしてくれいよう、孫等にも氣を附けておやりよ。

お勢　そんな事を改めて云はなくても善いぢやアないかね?

源吉　こちとら老人は取越苦勞だからな、サア歸つておくれ。

お勢　ぢやア直にね、……お市さん、お邪魔しました、お松ちやんは善く稼ぐのね。（歸つて行く）

お市　ぢやア左樣なら。

源吉　あんなに心配させるなと、猶更濟まねえよ、婿は眞實に善い心掛の男子でな、善く稼いてゐて、それで給金は渡されて、可哀さうだよ、まア恰度難船に逢つたやうな者だな、己は老人だから、助からうと思つて、力つくで喧嘩しても見ても、板子から海ン中へ突き落される人間に極まつてゐるが、それをア、して、出來る丈助けようとしてくれる、その爲めに、結局には皆が顚覆へつて、一同、心中するやうな事になるんだ、いけねえ、いけねえ。

お市　汝さん、何んだか氣が變になつてるやうだよ、早く歸つてお休みよ。

源吉　ア、歸らう、（蹣跚起上つて）……ぢやアまア、健康にしてお出……ハイ左樣なら、お松坊、左樣なら、お休みよ。

お松　お休みなさい。

源吉　己はお先へ休むんだよ、ハイ、左樣なら……ハイだ、ハ、、、（泣笑ひ）ハイだ……ハ、、、（影法師の如く出て行く）

お市　（後を見送つて）何んだか、氣がクサ〳〵して來た……死神が舞込んだやうな氣がするよ。

お松　でもあの老爺さんは、人が善いのね、私、好きよ。

お市　ア、、私はスッカリ、氣が滅入つて了つた……（急に叫ぶやうに）ア、幸作さんは何うしたんだらう……警察へ自訴したのか知ら……私はこれから警察へ行つて見ようか知ら。

お松　お父ツアんは、何處の警察へ行つたのでせう？

お市　何處の警察だかそれも知れないんだね……あんたに邪樫に、人を突飛したりなんかして、監出されないでも善ささうなものだのに、眞實にあんまり酷いよ。

お松　私、あの時は、怖かつたわ、眞實の親ぢやないんだものね。

お市　ア、、明日から何うしたら善いんだらう。

お松　お母ア、私、馬肉に、米の御飯が食べ度くなつたわ。

お市　あの馬肉屋の親爺が然う云つたけな……ア、私も口の中へ斯う唾が湧いて來たよ、夕飯は足りなかつたしな……ア、、眼前に赤い色をしてブツブツ煮えてる馬肉が見えて來たよ、そして、湯氣の立つホヤ〳〵の米の飯が……暖かい米の飯が……。

お松　私も然うよ。

（障子の外では突然、叫び立つる聲。）

お勢の聲　ア、お父さんが大變……大變……早く來て下さ

いよ、早く來て下ろして下さいよ、早く來て……。（涙に消える）

（忽ちバタ／＼と長屋の誰彼が大勢、障子に影法師な映して走つて行く。）

（「何事だい？」……「何うしたんだい」……「ヤ首釣りか」「老爺さんだ、龜公處の老爺さんだ」がや／＼と喧騒する。）

お市　（怯として）　首釣り？……ぢやア隣の老爺さんが……首を釣つたんだ……まあ……。（息を詰らせて慄へてゐる）

お松　ヱ……あの、老爺さんが……今迄、此處で話してたあの老爺さんが？……。

お市　暇乞に來たんだらうね……ア、氣味が惡いッ。

お松　お母ア幽靈になつて來やしまいかねえ……恐いわ、恐いわ……。

（お市にすがり附く。）

お市　（暫らく沈默して後）　行かう、お松や馬肉屋の老爺さんの處へ行かう、此から直ぐとね……汝お父さんて云ふのよ。

お松　又お父さんが變るのね、これで四度よ、……構やアしないわ、行きませうよ。（と仕事を片附ける）

お市　仕方が無いサ……私等は老爺さんのやうに死ねやしないからね、何んな事をしたつて、生きられる丈は生き度いんだもの。

お松　ぢやア直ぐ行きませう、私、氣味が惡いんだもの。

お市　サア、支度をおしよ、愚圖々々してると、又屋根代を取立てに來るんだ、うるさいからねえ、……オヽ、あの兒の事をスッかり忘れてゐた、（走り寄つて、鼻に手をあてゝ）まだ呼吸丈はあるやうだよ、お腹の子の事も氣にかゝるし、何うも私はまだ死ぬには早いんだからね。

お松　この行李を持つて行きませう。

お市　（笑つて）　空つぽで、もう何んにもありやしないが、そこらの襤褸なんか仕舞ひ込んで行かうよ、土鍋や何んか、あの人に取りに來て貰はう、屹度深切だよ、さあ、この子を背負させておくれよ。

お松　ハイ。（手傳つて、背に負はす、それから、そこらのものを取片附けて、行李の中に仕舞込む）

お市　さあ行きませう、行つて馬肉の飛切り上等のおいしい處を鍋でグツ／＼煮て、米の飯を腹一ぱい食べませう。

お松　私、嬉しいわ、今度のお父さんは屹度可愛がつてくれるよ。

お市　ウム、屹度然うだよ、汝、先へ出ておいで、私、ランプの火を消して持つて行くよ……。（一寸考へて）……

構やアしない、構やアしない、生きられる丈生きなけや損だもの。(豆ランプの火を吹消す、室内暗黒、月光は鮮やかに障子に映つて、路次の共同井戸や、柳の木影が墨絵の如くハツキリ浮んで來る、路次を通る母子の影法師が障子の上を動いて消える)

――カーテン――

(一九一五年一月)

帽子ピン（一幕）

登場人物

堀田吾市
二木登美枝　その許婚の妻
金井たけ　その情婦
諸岡虎吉　湯屋（バス）の主人
浦中鍬三　學生
及宿屋の主婦

場所

米國カリホルニヤ州、オークランド市に於ける日本人旅館の客間

時

現代

○

景はオークランド市のA街の日本旅館の客間、正面には四つ許り、窓が明いて護謨樹、椰子などの茂つた、別莊風の隣家の庭が、乾いた夏の日光の下に、カン／＼照らされてゐるのが見える、下手は暖爐に隣つて出入口、上手は中劃の黒い大きな、二枚扉、室の中央には安物の派手な、クロスの下に蔽はれた圓卓、脚の萎えかゝつたり、塗の剝げたりした椅子が數脚、その周圍に置かれて、窓に寄つた片隅には、白金巾のカヴアーの座に染んだ安樂椅子、有合物の石版畫の掛額、輸出向に出來た色刷の日本の武者畫の版畫などが、處々の壁間に掲つてゐる。

○

堀田吾市は、歲より五つ六つ若く、三十歲前後に見える男子、縞の襯衣の上に背廣を引かけ、頭髪を綺麗に刈つて黒く光らせ、髯を剃り立てた頤がすべ／＼してゐるが、眼中は何だか暗い、不安な影を帶びて、椅子に腰を卸し、シガーをすぱ／＼と吹かせてゐる、一方の安樂椅子の片端に、浦中鍬三は腰をかけて「日本新聞」を片手に持ち、讀むでもなく、讀まぬでもない樣子である、日本仕込の何處か不恰好な洋服をキチンと着て、頤髯を剃つた跡にはまだ手慣れぬ、薄い創痕などの見える、渡米後まだ月日の淺さうな二十三四歲の色の蒼黒い青年である、隣家から響いて來るピアノの音に談話の一時、途切れてゐたが、堀田は又思ひ出したやうに口を切る。

堀田　悪い事を云つちや聞かせない、歸朝した方が寧ろ君

の前途の爲めになるよ、アメリカは學問をしに來る處ぢやないさ。

浦中　（煮え切らぬ調子で）それやァ然うでせうか、でも東部へ行つたら立派な大學もあるし、有名な教授も揃つてゐるんだから、行つて見度くもあるんですよ。

堀田　（冷かに笑つて）太平洋沿岸へ來る日本の苦學生は、始めは皆然ういふ目的を持つてゐるんだが、家内勞働で金なんか溜まるもんぢやアないし、食つて行くのが關の山さ、それで終了にはずる〳〵べつたりその方が本職になつて十年も十五年も、この界隈でゴロ〳〵して暮らすのが落なんだよ、現に君のゐる青年會なんかにも、隨分そんな連中が澤山あるだらう、實は僕だつて、當初はその意氣込だつたのが、何時の間にかとんだ横道へ外れちやつたんだよ。

浦中　（少し躊躇して）實は僕もそれで、少々忌氣がさして來たんです、それに昨日初めて窓拭きに行つて、高い五階の窓口に上つて、下の方を見ると眩暈がして、クラクラしさうになつたのでこれぢやア生命掛だと思つて、金も何も要らなくなつて、中途から逃て歸つて來ました。夫人が後から追驅けてブツ〳〵云つてゐましたよ。（頭を掻きながら）これぢや、この先、苦學なんか覺束ないものです、故國へ云つてやつたら、學資の五十弗や、百弗贈つて寄越さない事もないんですが、苦學して成功するつて、親父に堅く云ひ切つて來たんですから、また二月も經たぬ中に、急にそんな弱音を吹くのも少し極りが惡いので、迷つてるんです、一體この加州の氣候がそぐわないのか、……體の工合もあんまり善くないので、永く居たい氣持はしないんですがね!?

堀田　（擽つたさうに笑つて）東部へ行つたら君、氣候は尚更酷いんだよ、大布呂敷か何か引かぶせるやうで、暑いと云つたら百度以上、寒くなつたら髯まで凍るつていふんだからね。その點にかけちや加州なんか樂なもんさ、年中、春見たいなもんで香橘は賣るし、花は絶えないし、合服一着で通されるんだものね。

浦中　然うだつて云ふ事ですね、でも東部ぢやア、ジャップなんかつて、兒童に石塊を投げ附けられる心配もないでせう、婦人と交際も出來るつて話ですから。

堀田　そりやア、然うかも知れない、金は權也つて奴さ。ぢやア君は矢ッ張り學資を送つてくれるやうに、親父さんへ云つてやつたら善いだらう。

浦中　それで貴方に御頼みがあるんですがね。

堀田　（不審さうに）何んだね？

浦中　貴方から家へ手紙を一つ遣つて戴けますまいか？

堀田　（苦笑して）僕が手紙なんか遣つたら却つてぶち毀

しだよ、第一、僕は君の父を知らないんだからね。

浦中　イヤ、貴方は加州沿岸の成功者だつて事が、縣下で評判になつてるんだから、父も信用してくれますよ。

堀田　（苦笑）ハツハ、僕が成功者だつて?!

浦中　（眞面目に）實際です。貴方がサクラメントで、砂糖大根を作つて、大さう成功してられるつて事が、故國の方では大分、評判になつてるんです。

堀田　（辯解的に）成功?……然うさ、成功したと云へば、そんな時代もあつただらうね、併し今日ぢやア、こんな宿屋にゴロ〳〵してゐる仕末だからね。

浦中　でも、是非手紙をお願ひしたいんですが?

堀田　それは御斷りするよ、僕は今、他人の事に關係つてられる身分ぢやアないんだからね。

浦中　何か御面倒が起つたといふ事を、聞くには聞きましたが……

堀田　（少し周章てた口調で）もう彼是噂をしてるんだらうね…　だがまだ新聞には書きやがらんな。（てれ隠しに笑つて）イヤ斯うしてアメリカ三界へまで出かけて來て女で苦勞するやうになつちや人間も駄目だね、君なんかもケチの付かない中に、サツサと日本へ歸つて、立派な花嫁御でも貰つた方が善いさ、チツとしてゝも食べて行くに不足のない御大家ぢやアないかね、君の家なんかは?

浦中　（頭を掻いて）イヤ、實は僕には許婚があるんですが、その女が氣に喰はないんです、而もそれが父の親戚の娘で、僕は養子でせう、忌だとも云へないし、だからつて急に結婚するのも尚更困るから、少し勉強して來るつて、此方へ出かけた譯ですよ、これで日本へ歸つたら、否應無しにその方の始末を付けさせられるんだから、それが一寸閉口するんです。

堀田　（同情的な口調で）許嫁なんかつて奴は困るね、實際…　併し、アメリカ流の自由結婚だつて、後悔する時が來ないとも限らないから、何方が善いか分つたもんぢやない、何うせ人間の知惠つてものは底が知れてるんだよ、女にかゝつて手を燒かない男子は、まア、世界中に一人もあるまいね。

浦中　（微笑を鼻先に浮せて）然う云へばこの新聞にも、墮落した女の寫眞が出てゐますね、捕まへるか、密と所在を知らせてくれたものには、舌弟の懸賞金を出すつてありますよ、御覽でしたか?

堀田　（嘲るやうに頷いて）そんな人三化七でも、アメリカへ渡つて來ると女と名が付くから有難いぢやアないか?　善い氣になつて付上つて、馬鹿な眞似をやり出すんだよ、手に了へないな!

浦中　（新聞を覗いて）サンノゼとありますが、この男子は何商賣をしてるんでせう？　隨分鼻下長と見えますね？

堀田　何うせ農園の人夫頭位の處だらう、尤も女の數が少いから、逃げられたら惜しいんだよ、女旱がする國ぢやア男子もから意氣地がないな。

浦中　何うせ例の寫眞結婚か何かで、夫婦になつたてんでせうね。

堀田　まアそれ位の處だらう、併しその寫眞の面ぢやア、男子の撰好みなんかせられる柄ぢやアないさ。隨分圖々しいもんだね。

浦中　僕なんか金を付けて貰つても、御免蒙りますね。

堀田　（苦々しく笑つて）然うさなア……併し當の男子の身になつて見ると、一生懸命なんだらう。

浦中　捜し出して殺さうとでも、思つてるんでせうか？

堀田　ハヽヽヽ、殺す處か、舐めてやる方の口だらうな。

（入口の扉をノックする）

堀田　お入り！

諸岡　（白髪交りの、丸く太つた赤ら顔をつき出して）ハーロー、ミスター、お客さまか？

堀田　ハーロー、構はない、入り給へ。

浦中　（起上つて）僕は失禮します、いづれ又伺ひます。

諸岡　（入つて來て）御免なさい、御用談ぢやアありませんか？

堀田　君、僕が紹介しよう、この方はミスター浦中、僕の郷里の富豪の息子さんだ、二月程前に渡米したんさ……これは王府浴の主人ミストル諸岡、布哇から、加州かけて彼是三十年近くも居られる元老組の一人だ。

諸岡　（頭を掻いて）元老組はアメリカぢやあんまり幅が利きませんよ、何卒御懇意に……

浦中　何卒よろしく……ぢやア僕はこれで失敬します。

堀田　然うですか？　ぢや又お遊びにゐらつしやい。

諸岡　チト、私の處へも來て下さい。直、この近所だから。

堀田　私の處か？　相不變、布哇癖が出るね。

諸岡　ハヽヽヽ、それは仕方が無いさ。

浦中　ぢや左樣なら！　（出て行く）

堀田　グッド、バイ。

諸岡　グッド、バイ。

堀田　（椅子へかけ直つて）處で、話は何うなつたね？

諸岡　（向き合つた椅子へ腰を落付けて、腕叉をして）何うも困つたね。

堀田　（眉を顰めて）矢ッ張同じ事を繰返してゐるのか？　全で赤兒だからね。

諸岡　（弄ふやうに）君も色男だ、何うしても思ひ切れねえつて云ふぜ、私もスッカリ同情して了つたよ。

堀田　下らないツ、君までが戯談にもそんな事を云つてくれちや心細くなつ了ふぢやアないか。（吐出すやうに云つて、シガーの火を附かへて）第一、君はお竹から頼まれて、引受けてくれたんだらう。

諸岡　ウム、そりや引受けはしたんだがね、段々逢つて聞いて見ると、登美枝さんが少々可哀さうになつて來たよ、向ふぢや三年前から許婚した仲で、ア、して遙々太平洋を渡つて來ると、十二指腸蟲で、二週間も天使島へ引留められてさ、漸つとの思ひで上陸が叶つて、それから教會で儀式まで濟ませたんだらう、ヤレ嬉しやと思ふと、直に離縁の宣告と來ちや、夢やら何やらサツパリ分らないつて云ふのも尤さ。

堀田　（不機嫌さうに）そんな事を君に、聽きに行つて貰たんぢやアないよ。

諸岡　そりやア分つてるさ、だが然ういふ事情で、向ふぢやア何處までも君の妻だから、五年でも十年でも一緒になれる迄待つと云ふんだからね、そりやナカ〳〵確りした覺悟を持つてるんだ、今時、感心な女ぢやアねえか。

堀田　基督教信者だからあんな馬鹿堅い事を云つてるんさ若い女が五年の、十年のつて、此加州で獨身生活がつゞけて行けるもんぢやアない、第一、周圍が然うさせて置きやアしないよ。

諸岡　それもいろ〳〵云つて聞かせたんだよ、嚇したり、賺したりもして見たんだが、耳にもかけねえんだ、揚句には、結婚式を擧げた晩に、君から離縁の宣告をされた時の、悲しさやら、情なさやら、しみ〳〵話して涙をバラ〳〵こぼすんだもの、さすがの私も弱つて了つたよ、殺生だからな。

堀田　（暗い眼色をして）だつて僕の方は正直に、自分の罪を告白したんぢやアないか？　他の女と汚れた關係のある體だから、汝のやうな無垢な女と夫婦になる希望はないつて、此方は下手に出てるんだ、一體あの女が渡米するつて云つて來た時から、見合せてくれつていふ手紙も度々出してあるんだ。

諸岡　向ふぢや、お竹と君と手が切れて、君が正道な人間になるやうにせずには置かぬといふ意氣込みなんだ、あんな若い娘が殊勝な心掛けぢやアないか？　さすがの私も何んだか小ツ恥かしいやうな氣持がしたよ、人間つて妙なもんだな。

堀田　そりや可哀さうでない事もないさ……併し、今更お竹を何うする事も出來ないだらう、一通りや二通りの關係ぢやアないからな、そりやア君が百も承知ぢやアないか？

諸岡　（頷いて）ウム、そりや、お竹も君の爲めに、容易

だいぶ苦勞してるさ。亭主まであつた女が、あれ程の眞似をして、君に入れ揚げて來たんだからな。それを知り抜いてる私が、お竹を何うしろと君に言へた義理ぢやアねえさ。お竹にしても私とは長い間の知り合だから、彼奴の不爲めになるやうな取計らひも出來ねえんだ。何うもとんだ安請合をやつて、これぢやア私も氣が附かねえ、後悔してるよ。

堀田　（嘆息を吐いて）　君が當惑してるより以上に、實は己が當惑し切つてるんだ。サクラメント溪谷の己の事業も、元はお竹があゝして酌婦稼ぎの血のやうな金を注ぎ込んでくれたのが手がゝりになつて、一時はチヨツと當つたのだが、それが去年のやうに失敗すると、善い所には信用がないから融通が利かない、己も氣まぐれだから、つい飲んだり、博つたりの揚句にさ、たうとう無一文になつて逃げ歸つてる矢先だらう、今度といふ今度は考へない事もないんだよ、己の從前踏んでた途は間違つてやしなかつたかな？　何時迄斯うしてぐづ／＼してゐちや、それ、あの、シーラネバダの沙漠の、死の谷にでも突當つた旅人のやうに、悶え死に死ぬんぢやアないのか知らとな、心細い氣がちよい／＼この頭の隅から飛び出して來るんだ。

諸岡　（思當るやうに）　ウム、然う云やア私だつて同じ事さ、旨く行つたらもう今頃は百萬分限（ミリオネーア）になつて、自動車の五つや、六つ抱へ込んでる筈だつたのが、五十幾つといふいゝ歳をして、風呂屋の亭主で人樣の汗や、垢を食つて生きてるやうな始末だからな。これぢやア日本へ歸つて、百姓でもやつてた方が氣が利いてるんだが、歸ると云へばあの娘の愛嬌種めが、頭を擡げよる、あんな庭婢（メード）の鼻曲りの、何處が善いつて、私は惚れたのかいな、罰當（ゴッデム）だよ。

堀田　眞實に罰當（ゴッデム）たな……己も今から日本へ歸るつて譯にも行かないし……だからと云つて、このまゝぢやア何うしても眼前に死の谷（ヴァレー・オブ・デッス）が見えて來る、出發點（スタート）を變へんけりやならない、出發點を變へる時機が來たのかも知れない

（起上つて悶々しく歩き廻る）

諸岡　出發點（スタート）を何う變へるんだね？

堀田　お竹と斷然、手を切つて了はうかと思ふんだ。

諸岡　然うすりやア登美枝さんは何んなに喜ぶだらう、そりやアもう躍り上つて喜ぶよ、あの娘を世話してる教會の平牧師もさぞ滿足するだらう……　（云つて、稍々考へて）　だが君、お竹の失望する事を思ふと……私は何んとも云へなくなるな……私には手を引かせてくれ、一切關係無い事にしたいな、彼女とは昨今の商關係でいゝ仲ではなしさ。

堀田　（嘲笑）　ハヽ、十年前に、布哇で君と關係してたといふ事も、聞かないではないさ。

諸岡　（周章てた顏色）　エ、そんな事を喋舌つたのか……（苦しい笑顏になつて）　それやア昔話さ……もう一昔前の話さ、今ぢやア夢にも見た事はないんだ、お竹だつてこんな皺くちや爺を何んとも思つてやしない、イヤ、親父さんだつて云つてる位だからな、實際、君がそんな事を思つてるんぢやア私は甚だ困るよ、登美枝さんが心から氣の毒になつて、あんな事を云出した丈だからな、事實、この胸を割つてゞも見せたいよ。

堀田　（手を掉つて）　ドン、ケヤーだ……そんなつもりで云つたんぢやアないさ、君も年を老つて、大分人間が善くなつて來たよ。（口元で笑ふ）

諸岡　（苦笑）　實際、年は老りたくないな、これで昔なら君、登美枝さんを此つと何うかしてやらう位の謀反氣を起しかねやしなかつたんだからな、からもう意氣地がなくなつちやつたよ。

堀田　（戯談らしく）　然う云はれると、何んだか危險だな。

諸岡　イヤ、此方で手を出さうとしたつて、あゝ堅い一方の處女氣ぢやア、機會がつかねえよ、何しろ君に限るつて云ふ逆上方だからな、君も罪造りだ。

堀田　そんなのが一人限りだと、僕も身が固まるんだがな。

諸岡　（苦笑）　何うもとんだ處で惚けられるんだな……併し君、お竹も可哀さうだ、私は何うも彼女に、こんな相談は持出せないよ。

堀田　君が云つてくれなけや、僕の口からは何うもね。

諸岡　（頭を抑へて）　困つたなア……一體、私は折々疑る氣が起るんだよ、一夫一婦なんて窮屈な事を人間は何うして、始めたんだらうな、誰がそんな厄介な法律を造り出したんだらう？

堀田　（沈鬱な口調で）　誰が造り出したつて譯もないんだらう。

諸岡　造り出したにや違ひねえよ、現に君、鹽湖の方へ行けやア、モルモン宗の御本山があつて、彼處ぢやア何人女房を持つたつて差支無いつて云ふぜ、何んでもあの宗旨の開山様は一時に、何十人つて妻があつて、それでいざこざ無しに治まつてたていふんだから、世の中は可笑なもんぢやアねえか？

堀田　（輕く笑つて）　ブリガム、ヤングか！　二十四人の妻を持つて、それに百何十人つて子供を生ませたお庇で鹽湖の沙漠が人間の住む國になつたつて、後の世からも救世主だの、開山様だのつて、崇められてるんだね、然う云やア己等が、二人女房を持つ事が出來ねえていふのは、窮屈な世間になつたもんだな、眞實……

諸岡　（氣輕に）寧そモルモン宗にでも入らうか？　お互ひさまに……

堀田　（眞面目に）今ぢやァそのモルモン宗も一夫一婦つて、世間並にならないぢやァ、周圍が承知しないつて云ふんだからな、第一、女の方で治まらないから仕方がないさ。

諸岡　女に段々、惡智慧が附いて來やがつたんだな、お庇で、世の中が治まり難くなつたんだよ。

堀田　それも然うだ。（思案して）だが、二人の女を一時に愛するつて事も難かしいぜ、隨分苦しいもんだよ、地獄の責苦だと思ふ事もあるよ。

諸岡　（ニヤ／＼笑つて）又、惚けるのかい、とんだ閑役だな……だが君、男つて奴は、一時に女の二人や三人、可愛がつて行かれないて事はねえよ、ソレ、今の、モルモン宗の開山樣のやうに、二十四人の妻(ワイフ)で治まつて行く非凡のがゐるんだからな、處が女つて奴は然うは行かねえ、唯つた一人の男子しか心から可愛がる氣にはなれねえんだよ、それ丈、馬鹿正直に出來てるんだからな、可哀さうなもんさ。

堀田　そりや女つて奴は、まア偶像信者に産まれ附いてゐるんだね、信仰し始めたら一人の男子を偶像にし切つて、崇め奉らなけや置かないんだ、偶像にされた男子の方から云やア、信者が五人出來ようが、十人あらうが、御利益(ごりやく)を授けてやるに差別は無い筈だが、矢ッ張、人間の心つてものは、何處か、もろく出來てるんだよ、さすがの己も此度許りは弱り込んでるんだからな。（肩から出るやうな嘆息をする）

諸岡　（屈托さうな吐息をして）斯うなつちやア登美枝さんも捨てられねえし、お竹とも切れられねえ、私なら兩手に花つて奴だが君は何方か一人に定めつちまはなけりや氣が濟まねえていふのなら、まアそこは君の考へ通りにするより外、仕方がねえな。

堀田　（哀願的に）此場合、君に逃げを張られちやア困るぢやアないか？　何うかしてくれ給へ、云はゞ僕の一身の浮沈の極まる處だ。

諸岡　（當惑し切つたやうな顏色）そんな事を云つて私の首つ玉へかぢり附いて、深淵のドン底へまき込まうとするのかい、もう善い加減な處で堪忍してくれい。

（扉をノックする音）

堀田　（怯としやうに）誰れだ？(フウ、アール、ユー)

（扉の外で）私！(アイ、アム)

諸岡　（低聲に）お竹だ！　とう／＼やつて來やがつた。

堀田　お入り！(カムイン)

お竹　（扉を明けて、輕い夏衣裳(サンマー、ドレッス)に、孔雀の羽毛の附いた帽

子を着て、金齒を見せて、莞爾笑つて入つて來る）ハーロー、デヰヤー！……（つか〳〵と堀田の傍へ寄つて、いきなり握手して、膝の上へ重りかゝるやうに坐る）ハーロー、ミスター、諸岡……（握手する）

諸岡　ハーロー…　えらくめかして來るもんだから、何處の貴婦人かと思つたよ。

お竹　貴婦人には極つてるぢやアないかね？（調子を變へて、甘えるやうに）親父さん、何うしたのよ？　あの娘の始末はもう附けて了つてくれて？

諸岡　（首を掉つて）處がナカ〳〵然うお手輕にや行かないや、難物だよ、向ふはこの色男に首つ丈なんだからな。

お竹　（わざとらしく笑つて）ぢやア寧そ私の方から引下つてやらうか？　この罪造りめ。（堀田の頰を抓る）

堀田　痛いツ、止せよ。

お竹　何んだね　そんな邪慳な眼色をしてさ……一體、何んな面をして結婚式なんかやつたんだらう、見度かつたわ、その娘つて何んな子？　親父さん、可愛い子なの？一度、拜んでやり度いわ、第一私より歲が若いつてから癪だわ、それに敎育もあるつてんだらう、男子つて浮氣だから油斷も隙もなりやしない、私はもう氣が氣でないんだよ、察しておくれなね。

諸岡　私に突かゝつたて仕樣がねえぢやねえか、そこの御本尊樣の御心持次第のもんだからな。

お竹　そりやア然うさ、結婚式なんかやる程の了見だから、この男子もその娘に些いと氣があるんだよ、イエ、些いとどころぢアない、大ありだ位の事はチヤンと察してらアね、私はそれが分らぬ程なお馬鹿さんでもないさ。（やけに紙卷烟草を吹かし始める）

堀田　然う汝のやうに、頭からガミ〳〵嚙み付くんぢやア、相手にも何にもなれないぢやアないか？　結婚式を上げたつて、それは眞の氣安めの儀式丈だつて云つてるぢやアないか？　邪推が酷過るよ。

お竹　氣安めの儀式丈なら、この私と一番先に、それをしてくれても善い筈だつたよ、人を踏付にしてるんだ。

堀田　汝とぢやア、結婚許可證が取れないぢやアないか？分つてる癖に、今更、人を虐めるもんぢやアない。

お竹　（泣目立つて）二口目には結婚許可證だ？　ハイ、私は何うせ日蔭者の酌婦の分際ですからね。

堀田　（困つた顏色で）まア落付いて話をしたら善いぢやアないか？

諸岡　眞實だ、お竹さん、まア然う一酷に物を云つちやいけねえよ、堀田君の今度の事情も汝には善く云つて聞かせてあるんぢやアねえか？　許婚つてのも大阪にゐる堀田君の叔父さんが、故郷の母等と相談して、無理押付に

取極めて了つたやうなもんだから、此の男子に罪がある
つて譯ぢやアねえよ、堀田君の身にもなつて考へてやる
が善いんだ。
堀田　もつと理解（アンダースタンド）してくれなけやア、僕は全くやり切れな
いよ。
諸岡　（嚇すやうな口調）私（こゝ）まで斯うして奔走してるのも
皆汝（ユー）のためになるやうにと、思つての事だよ、汝（ユー）に頼ま
れたから、忙しい時間（タイム）も潰してる譯ぢやアねえか？
堀田　實際、君（ユー）には濟まないよ。
お竹　（絹の帛（シルクハンカチーフ）で涙を拭いて）御免なさい……私はこれ
が病氣なのよ、汝さんがあんまり不氣な顏をしてるもん
だから、つい、ムカ〳〵と腹が立つちやつたの……そり
やアまアお腹の中ぢアいろ〳〵心配してるんだらうね。
堀田　心配してる處の騷ぎぢやアないさ。
諸岡　堀田君も眞實、氣の毒だよ、私（こゝ）は何うも判斷が附き
兼ねる…　彼方も此方も皆、氣の毒だらけだからな。
お竹　（探るやうな眼色で）　親爺さんは、あの娘（ガール）の處へ行
つてまで泣付かれて來たと見えるね、汝さんも節の加減
で氣が弛んだんだらう、眞實に此と確かりしておくれ、
依頼（たより）無いよ。
諸岡　（頭を搔いて）　今度は私を叱るのかい、何アに、泣
付かれた位でぐらつくやうな佛性の私（こゝ）でもねえが、人間

苦勞をし過ぎると、僅かに意氣地は無くなるよ、まア二人
でゆつくり話し合つて見な、私（こゝ）は一寸と歸つて、湯加減
を檢（み）て來ようよ、娘が又、ガミ〳〵云ふと、うるさいか
らな。
堀田　（困つた顏色）　君が歸つちやアいけない、まア少し
ゐてくれ給へ、賴むよ。
お竹　（笑顏を見せて）　もう怒りやアしないからも少しゐ
て下さい、それから肝心な汝さんの話も、まだ善く聞か
せて貰はないぢやアないかね？
諸岡　（浮腰で）　それぢやもう堀田君によく話してあるから
聞いてくれ給へな、何しろ一寸と歸つて來る、別に手間
は取らない、直と又やつて來るよ、左樣なら（グツドバイ）。（匆々に立
つて出て行く）
お竹　（後を見送つて、靜かに元の椅子に立戻り）　一體、
何うしたつていふの？……相不變、乳臭い事許り云つて
るんだね？
堀田　（深い溜息を吐いて）　世間不見で育つて來たお孃さ
んだから、弱つて了ふよ。
お竹　（顏色を讀むやうな眼色で）　汝さんの心持次第ぢや
アないかね……一旦離緣するつて言渡したらもうそれ限
のものさ、承知せうが、しまいが、それは向ふの勝手ぢや
アないか、高が日本から渡り立ての新米の小娘だもの、

生意氣な事を云へた義理ぢやアないわよ。

堀田　(沈んだ調子で)　兎に角、式まで擧げたんだから、事が面倒になつて了つたんだよ、向ふにや後楯に牧師なんかゞ附いてるんだからな。

お竹　(發作的に眉をビクリと動かせ)　私をうまく欺して置いて、そんな式なんか擧げたのが悪いんだ……いや、汝さんは口先ぢやア善い加減な事を云つてるけれども、胸の底ぢやアもう私に忌氣がさしてるんだよ、それでなけや戯談にも今度のやうな眞似をする氣遣ひは無いさ。

堀田　(不快さうに)　お定り文句だ、もう耳胼が出來てるよ。

お竹　(險しい眼色になつて)　それなら然うと男子らしく乾張云つてお了ひよ。汝さんに引かゝつたお庇で、私は何れ程酷い目に逢つてゐるか知れやしないよ、そりやア悪名なんか附けるのは世間の勝手だが、私は年中、眞赤裸で、身の皮まで剝がれ通しぢやアないか？　今でも弗箱を積まうてお客の二人や三人ないぢやアないんだが、皆、首を揮つて、相不變の酌婦風情で通して來てゐるのも、誰の爲だと思つてるんだね、その苦勞が少しも酬めないやうな汝なら、私だつて又考へ直さないぢやアないさ。

堀田　(侮辱されたやうに感じて、ビク／＼眉毛を動かし)　然う云はれりやア、已はいかにも意氣地無しだ、汝にこれまでさん／＼借錢をして、サクラメント谿谷で砂糖大根やら野菜やら少し大仕掛な仕事をしかけちやア、到頭ア、いふ襤褸を出して了つたんだから、顏向も出來ない始末さ、已よりずつと後から渡つて來た男子で、もう千英町の、二千英町のつて、土地を借り込んで、相當の事業家になつてる者もゐるのに、已のは宛で賽の河原の石ころ見たいに、積んだり、崩したり、積んだり、崩したりよ、そこで今度は已も考へ出したんだ。(腕叉をする)

お竹　(不安さうに、相手の顏を見て)　何を考へ出したんだれ？

堀田　イヤ、こりやア眞面目な相談だから汝にも善く考へて見て貰ひ度いんだ、善いかね、此際の事だから廻り氣なんか出さないで、心身になつて私の云ふ事を聞いて貰ひたいんだよ。

お竹　(鼻先で笑つて)　フン切れてくれつて云ふのか？

堀田　(自棄的な口調)　然う先くゞりをしちやア、話も何も出來やアしないさ。

お竹　ぢやアまア云つて御覧……何アに、忌になつたて云ふのなら、切れてやらんものでもないよ。

堀田　(不快な顏色で)　然う喧嘩腰で來られちやア、已アもう一句も出ないさ。

お竹　何んだか、まア云つて御覧つてば？

堀田　又、今度の機會にせうよ。
お竹　そんな逃腰にならないでさ、云ひ度い事を云つて見たら善いぢやアないか？
堀田　今は云はない。
お竹　（笑顔を作つて）　云はないつてやア尚更聞き度くならアね、さア構はず云つて頂戴……何を云つても怒りやしないからさ。
堀田　（少し和らいだ口調で）　怒らないで聞きや云ふさ。
お竹　大丈夫だよ……怒りやしない、切れてくれつて云出したからつて、めつたに怒りやしないさ。
堀田　（駄目を押すやうに）　眞實か？
お竹　これで世間不見のお孃さんなんかと一緒に見られちやア忌だよ、馬鹿念を押す隙に、サッサと云つて御覧よ。
堀田　（眞面目になつて）　實はな、私もいろ〳〵思案もして見たんだが、結局、二人がこの儘、ずる〳〵べつたりで遣つて行くんぢやア、今に蒂まで腐つて、地上で潰れて了ふのが落だらうと思ふんだよ
お竹　（强ひて自制して）　それで一體、何うすれば善いつて云ふの？
堀田　汝にだつて、先の亭主もあるし、子供の二人も持つてゐるんぢやアないか？　それをあゝして日本へ追歸して打捨つて置くのは、隨分罪が深いたア思はないかね、寢覺が惡くはないかね、私は今までこんな氣の弱い事は夢にも思はなかつたが、何うしたものか、この頃はそれ許りでも、胸に支へ出して來たんだよ。
お竹　（嘲けるやうに）　そんな事を云つてた日には、此のアメリカ三界へ來て、女の細腕でやつていけるもんかね？　もう後は云はんでも皆分つてるよ、人を馬鹿にしでない。
堀田　イヤ、私はお互の爲めに、これから後の事を篤と相談して置かうて云ふんだよ、汝が然うして稼いでゐたつて、人間の若さが何時迄續くもんぢやアなしさ、先は知れてらアな。
お竹　その若い間丈、さんざつぱら汝に御奉公して上げたんだから、これから先もう用はないつていふんだらう、善い了見だ。
堀田　（蒼白めた顏で）　まあ然うブリ〳〵しないで聞いてたら善いぢやアないか？　私は唯、汝が氣の毒になつて來たんだよ、もうあれ丈注ぎ込んでくれたんだから、普通なら眼鼻が附いても善い時節だのに、己が相不變このざまぢやア、とても行末見込が立たないぢやアないか？　自分で自分に愛想が盡きて了つたんだよ。
お竹　私は何も、汝を然う甲斐性のある男だと思つて惚れたんぢやアないよ、あの日本へ追歸した亭主野郎には、

酒と賭博でサン／＼泣かされたので、終了(しまひ)には顔を見ても、蟲唾が走る程忌だつたが、汝が同じやうな道樂をするのは、私は知つてゝも叱言一つ云つた覺はないぢやアないか？　それ程、私は汝といふ人に夢中になつてるんだよ、仕事なんか、何うせ運賦天賦(うんぷてんぷ)だから、何うならうと、愚痴をこぼした事なんかありやアしない、それを今日に限つて、汝の方から何の彼のと云ひ出すのを見ると、私と切れてあの娘(ガール)と夫婦にならうて下心に相違ないさ、然うだらう、眞直に云つてお了ひよ。

堀田　イヤ、勘違してくれちア困るが、汝が私のやうな無欲者(むよくもの)に、何時迄も引かゝつてるのが全く可哀さうで堪らなくなつたんだ、もう此邊で日本へ歸つて、亭主と一緒になるとか、何うとかして、出發點(スタート)をやり變へる方が眞實に汝の爲めぢやアないだらうか？　私にしても、あんた押付嫁同前なものを貰ふのは氣に喰はないが、此も新らしい出發點(スタート)を切るんだと思つて、此から眞面目な、清い生涯を始めて見ようかといふ氣にもなつたんだよ、何卒汝もそこを潔よく承知して貰ひたいんだが、どうだらう？

お竹　（見る／＼血走つた眼色になつて）この畜生めッ！　何處迄人を甘く見てるんだい、そんな手に乗る私と思つてるかい？　さア白狀しろ、白狀し了へッ。（いきなり、カラーに掴みかゝる）

堀田　（その手を振り放して）酷い眞似をするな、私はお互の行末を考へて云つてるんだぞ。

お竹　何が行末の爲だ、分つてるよ、もう分つてるよ、その娘(ガール)も娘だし、汝も汝だ、よくも私を踏付にしやがつたな。（怒に慄へて再び掴みかゝらうとする）

堀田　（體を反して）何を云つてるんだい、汝は直ぐに半狂になつて了ふから、云ひ度い事も聞き度い事も、口へは出せなくなつて了ふぢやアないか？

お竹　（せい／＼息を喘ませて）白ッぱくれても駄目だよ、汝はその阿魔と密通(くつゝ)きやがつたんだ、それを隠してるんが業腹ぢやアないか？

堀田　私が密通いた？（輕く笑つて）馬鹿な事を云つちやアいけない、唯、儀式丈擧げたんだ、形式丈の結婚ぢやないか、そんな眞似が出來るもんか？

お竹　またそんな嘘を平氣で云つてるんか？　儀式を濟ましたらもう夫婦つて云ふので、汝も、相手の阿魔も、善い氣になつて密通いたに相違ない、それはチヤンと分つてるよ、それでなけやその阿魔が、五年でも十年でも待つてるて云ふもんか？　向ふぢやア一旦然うなつたから、汝のやうな無慾男でも、一生、亭主だと思ひ込んで了つたんだ、今時の女學生なんて、大抵そんなものだ。

堀田　そんな邪推深い事を云ふもんぢやアない、相手は基督教の固い信者なんだ、そんな間違があつて堪るもんか。

お竹　信者だから然うなんだよ、儀式さへ濟みや愛があつてもなくつても、そんな事をして善いと思つてるんだ、汝は私といふ者があるのに、よくまアそんな巫山戲た眞似をしたんだね、阿魔も阿魔た、私がくつ付いてる事を知つてながら、闘々しいつたらありやアしない、汝ッ、何うしてくれよう？

堀田　（抑へ付けるやうな調子で）オイ、あんまり大きな聲をして怒鳴るんぢやアない、汝がそんな事を云へた身分ぢやアないぢやないか？

お竹　何うして云へないんだね？

堀田　（鼻であしらつて）考へたら分らう？

お竹　また先の亭主の事を云ふの？　汝がそんな事を云へた義理か？　もう分つたよ、新しい女が出來たからつて、私を振捨てる氣だ、薄情者、人非人……私を何と思つてるんだい、サクラメント溪谷で、金歯のお竹さんて云つたら誰にでも顔を知られてたんだよ、それが汝の爲に何も彼も形無しにされて、今更、新米の小娘なんかに見返られて堪るもんか、覺悟をおし……（云ひさま帽子ピンを抜き取つて逆手に持ち、喉を目蒐けて突いてかゝる）

堀田　（周章て飛退き）まア待て、そんな短氣な事をするもんぢやアない。

お竹　汝も男の端くれなら、尋常に生命をおくれ、汝を刺し殺して置いて、私も死んで了ふんだ。（追駈けて突きかゝる）

堀田　（逃げながら、有合ふ椅子を取つて防いで）お竹……まア……待てといふに。

お竹　（凄い顔色で）生命が惜いのか？　この無情男、人非人……

堀田　（蒼白めた顔色、口調も慄へながら）まア氣を落付けてくれ、私の云つた事が癪に障つたら、私は詫まるよ。

お竹　口先で詫つたつて、何んになるものか、そんな心變りする男子なんか生けちやア置けない、私ももうやぶれかぶれだ。（又激しく突いてかゝる）

堀田　（防ぎつゝ、逃げ廻りながら）お竹……お竹……まアチヨツと待つてくれ……私が惡かつた、今まで云つた事は私の誤だ、取消しても何うでもするよ。

お竹　そのざまは何だ、慄へてるぢやアないか、私と一緒に死ぬ事も出來ないのかい？　眞實に、思つたよりもまだ意氣地無しだよ。

堀田　（宥めるやうに）この場で死ぬ程なら、何時迄も二人一緒で行つて行かう、然うせうよ、何うせもう地獄の道連れだアな、己もう觀念した。

お竹（釘付にされたやうに凝立して、堀田の顔を眺めてゐる、眉の上が神經的にピリ／＼攣つてゐる）

堀田（額の冷汗を拭いて、恐る／＼近づいて）エ、もうそれで善いぢやアないか、然ういふ覺悟をしたら善いぢやアないか？　その帽子ピンなんか打捨つてお了ひ、危いよ、眞實に。

お竹（帽子ピンを傍の卓上に投げ出してぐつたり椅子に腰を卸し、吐息ばかり吐いてゐる）

堀田（對座の椅子へ腰をかけ）酷く汝を怒らせて了つたな、私が惡かつたよ、堪忍しておくれ、それ程、汝が氣にするなら、あの女なんか、離婚の手續をして、日本へ送り返すやうに、早速取計らつて了ふとせうよ、もう機嫌を直しておくれ、考へて見ると、お互ひ二人の仲は、然うお手輕に別れられるやうなんぢやアないさ。

お竹（眼に溜る涙を拭いて）そんな事を口先で云つてゝも、汝のお腹の中が見え透くやうだよ。

堀田　もう忌味なんか云はんでも善いぢやアないか、私も實は、一寸迷つたよ、お互の出發點を切りかへる方が善くはないかと思つたんだ……だが併し、己の生命はもう汝に預けてあるやうなもんだつたな、己の自由には出來ないんだ。

お竹　私に預けてあるのなら、殺されたつて善い筈ぢやアないか？　あの怯々した樣子は何んだね？　愛想も小そも盡きて了ふよ。

堀田（苦笑して）イヤ、あんまり不意に脅かされちや誰だつて面喰らつ了まふよ、それに汝、アメリカへ逃來て、心中するにも及はないぢやアないか？　まだ二人が行詰つてあがきが附かないつて場合でもあるまいしさ。

お竹　でも私は振り捨てられて、あの小娘に見更へられようつて云ふ生死の境目だよ。

堀田（笑顔を見せて）私は唯、相談を持出した丈ぢやアないか？　何も汝が不承知なのを、強ひて何うせい、彼アせいつて云つた譯ぢやアないんだ、勘違ひからとんだ騷ぎになつたもんだ、眞實に危險だつたよ。

お竹　汝さんだつて、生きてゐたつて、この先、別に花も實も咲くまいに、それ程生命が大切なのかい、考へると可笑しくなつ了ふよ、あの怯々した樣子がさ……

堀田（頭を掻いて、苦笑）然う馬鹿にしたもんでもない、私もまだ若いんだからな、男子盛りはこれからだよ、加之將來何一つ仕出かさなくつても、斯うして日光を見て、息をしてる丈でも幸福でないとは云へないさ、それは兎に角、愈々然うと覺悟を定めたら、これから先の事を話し合つて置かうぢやアないか？

お竹　何んの事だね？

堀田　あの娘を離縁する手續を頼んで置いて、私は又、サクラメントへ出かけて行くのさ、然うした方が面倒が無くつて善いからさ。

お竹　（滿足したやうな調子で）　私は始めからそのつもりで、此處にお金も持つて來てるんだよ。

堀田　然うか？　それは濟まなかつたな。

お竹　濟まなかつたもよく云へたもんだ（財布を取出して）さア、こゝに百弗あるよ、これを受取つてお置き。（卓上へガチヤリと置く）

堀田　（お竹の手を握つて）　難有（サンキユー）……難有（サンキユー）……

お竹　まア檢めて見るが善いよ。

堀田　オーライ……　（金貨を卓上で數へてゝ）　何うも有難（サンキユー・ヴエリ・マツチ）う？

お竹　カリホルニヤのお金だつて、路傍（サイドウオーク）に轉がつちやゐない、皆、血の汗の塊りだよ、よく記憶えて御置き。

堀田　そりやア分つてるさ、白銅（ニツケル）一つだつて、粗末にしやしないよ。

お竹　何うだか？……何より先に、あの娘（ガール）の方の始末（かた）を附けてお了ひな。

堀田　早速然ういふ事にせうよ。

お竹　（わざとらしい笑顏で）　序に白狀してお了ひ、結婚式が濟んで、それから汝、あの女を自由にしたんだらう、然うだらう、男子つて皆意地の汚いもんだからさ。

堀田　（苦笑）　もうそんな事は聞かないで置いて貰はうぢやアないか？　話が後戻りするよ。

お竹　白狀して了つたら善いぢやアないか？

堀田　とんだ邪推だよ、處女（ヴアジン）だもの、堅いからね。

お竹　處女（ヴアジン）だから、氣に入つたつて云ふんだらう。

堀田　もう何卒止しておくれ、そんな事を？

お竹　分つてるよ、チヤンと分つてるよ。

（扉をノックする音）

堀田　お入（カムイン）り？

宿の主婦　（顳顬に頭痛膏を貼つて、だらしなく日本服を着てゐる）　御免（エキスキユース・ミー）なさい、私は頭痛がするのでこんなざまでゐますよ……あのね、今二木孃（ミス・にき）つて方が、堀田君（ミスター・ホツタ）に逢ひ度いつて、訪（み）えましたが？

堀田　（どぎまぎした樣子）　二木孃（ミス・にき）……尋ねて來ましたつて？

お竹　遣つて來たの？

堀田　何うせう？

お竹　好い機會だから、逢つて今の事をキッパリ云つておやりよ。

主婦　お通ししますか？

お竹　些つと待つて頂戴……今、私が行きますわ。

主婦　ぢやア待たせて置きませう。（入る）
お竹　（惡意的な笑顏で）私は隣の室(ルーム)へ行つて聞いてゝやるわ、明いてるだらうね、隣室は？……イヤ、あの扉(ドアー)の鍵穴(キーホール)から覗いてやるから、汝、話して御覧。
堀田　隣は寢室(ベツドルーム)だから、今誰も居ないだらう。
お竹　（急に思案し更へたやうに）イヤ、私は歸らう、時間(タイム)も無いんだし、加之(それに)もう汝を疑るでもないわね……だがその娘(ガール)の顏が一寸見たいわ、私が宿の婢(メイド)になつて、戸口で逢つてやらう、グッド、バイ、確かりおやりよ。
堀田　大丈夫だよ。
お竹　善いかね、又明日來るわ、グッド、バイ。（入つて行く）
堀田　（扉口まで見送つて、立戻り）ア、、困つ了ふな。
（椅子へぐつたりと倚りかゝる）
（隣の家からピアノの音が響いて來る、男女の若い聲の樂しさうな合唱が聞える、堀田は悶々として、胸を抱いて室内を俯げに歩き廻る。）
（扉をノックする。）
堀田　（緊張した氣持で）お入り(カムイン)？
登美枝　（眼元に憂を含んだ、髮の濃黑い廿歳許りの若い女まだ着こなされない洋裝で、片手に小さい花束、片手にスーツ、ケースを提げて入つて來る）御免なさい、私です。
堀田　（相手の顏を見ると、柔和な調子で）さア、何卒、此方へ……（傍の椅子を指さし）何うして突如(だしぬけ)に訪ねて來たんだね……スーツ、ケースなんか提げて、何うしたと云ふの？
登美枝　（淋しい笑顏で）私は此から旅行するんです、それでお暇乞に來ましたの……あの、是を何卒。（小さい紅い花束をさし）
堀田　（手に取つて）難有う……カリホルニヤ、ポピーだね。（ボタン穴に差さうとして、急に卓上に置き）旅行するつて？　何處へ？
登美枝　牧師さんの友人(フレンド)の、英國人の紳士(ゼントルマン)の家へ此から働きに行くんです、ダイヤモンド、ハイツの傍ですつて……それで桑港から渡(フェリー)を越えると、つい途寄がして見たくなつたんです。
堀田　働きに行くて？　おやア下婢奉公たね。
登美枝　（確りした口調で）然うです、一向に慣れない事ですから先樣のお氣に入るか、何うか分りませんけれども、一生懸命やるつもりでゐます。
堀田　（憐むやうに）登美枝さんには始めての經驗だらうから、隨分辛いよ。
登美枝　（涙ぐんだ聲で）ハイ……それはもう覺悟してゐ

ます……貴方、善いでせうね、私は何んな辛い事でも辛棒して、五年でも十年でも待つてゐますから、その間に貴方は一方の婦人と綺麗に手を斷つて、私と樂しい家庭を作るやうにして下さいよ、私はその日の一日も早く來るやうに、神樣に祈つてゐますよ。

堀田　（一種の感に打たれたやうに）　……汝さんのその素直な心がけは忘れやしないよ、だがね、登美枝さん、私は、折角、も一度汝さんに逢つて話さうと思つてたんだが、一旦、死の谷へ迷ひ込んだものは、もがいたつて、あがいたつて、唯、苦を大きくする丈のものだ、とても人間の住んでる里へ出られやアしないよ、唯このまゝぢつとして、不思議な、恐ろしい風光でも見てる內に、火の消えるやうに死んで行けや善いのさ、私はもう腹を据ゑて了つたんだ、綺麗サッパリ諦めておくれ、私はもう此世に居無い者だと思つてくれ、汝さんのやうな素直な、信仰の固い人は、これから先、何んな立派な生涯でも送つて行けるぢやないか？　私の事なんか忘れて了つておくれ、その方が私も呑氣で善いんだ、何卒、然うして了はうぢやアないか？

登美枝　（首を掉つて）　貴方は又そんな事を云出すんですか？　もう〳〵そんな弱い事は、私、耳にも入れませんわ、私は貴方の妻です、神樣の前で、立派に結婚式まで上げたんぢやアありませんか？　私は何んな事があつても、貴方を今の境遇から救ひ出さなけやおきませんわ、私の祈りと、涙と丈でも、この一念は乾度通らさずには居無いと堅く信じて居ます、貴方も自棄なんか起さないで、何卒早く今の汚れの中から脫け出して下さい、それ許りが私の一生の希望です。

堀田　（苦悶の色）　イヤ、實は私も出發を切り更へようと思つて餘つ程苦んだのだが、もう遲いと分つて來ましたよ、それでスッカリ諦めたのです、何アに、善くつても、惡くつても、短い一生だ、私のはもうこの儘にして置いて了ひませう、汝さんに手を引張られて、一度は人間の通る途へ出て見たいとも思つたが、考へて見ると、悟るのが眞實やら、迷ふのが眞實やら、譯は分らないんだからね、私の事なんかもう心配しないで、唯汝さんの身の振り方を考へるんだね。

登美枝　（眼尻に涙を浮べて）　そんな情無い事を云ふのは何卒止して下さい、何度でも繰返しますが、私は貴方の妻です……貴方の妻だからア、いふ關係にもなつたのぢやアありませんか？　貴方は始めから私を汚すつもりでは無かつたでせう、まさか、それ程の惡人でもないでせう？

堀田　（そんざいな調子で）　そりアあの時は、汝さんを欺

すつもりでも、汚すつもりでもなかつたのだが、一方が愈々面倒臭くなつて來たんだから、此場合、汝さんと緣を切るより外に仕方がないんだ、何アに、一旦儀式も濟んでるんだから、それが汝さんの罪になるつて譯のものでもないさ、私よりは、もつと立派な人格の男子で、汝さんの夫(ハズバンド)になる者はいくらでもあるから、心配しなさんなよ。

登美枝（凄い眼色で）否え、一旦、貴方に許した以上は、私は決して他人の妻になんかはなりません……貴方が私を汚す氣で、あゝいふ事をなすつたのなら、私は寧そ死んで了ひます、身を投げてゞも死んで了ひます。（泣阨りする）

堀田（宥めるやうに）そんな一端な事を云ふもんぢやアない……私は欺さうて氣なんか微塵も持つてた譯ぢやアないんだからね……眞實、私が出發點(スタート)を新しくせうと思つての事だつたからね。

登美枝（涙を拭いて）それぢあア私は待つてゐます、幾年でも……何んな辛い事でも辛棒します、そして始終、貴方の爲めに祈つてゐます、世の中に一人、貴方の爲めに眞心から祈つてゐるものがあるつて事を、貴方も記憶えてゝ下さい、善いでせうね……ではこれでお暇します、何うも濟みませんでした。（悄々として、重たげにスーツ、ケースを持上げて、立去らうとする）

堀田（默つて、ヂツト見てゐたが、急に感情に激したやうに）まアチヨツとお待ちよ……そのかよわい姿で、庖廚(キッチン)奉公も出來なさゝうだ

登美枝（悲しさうな笑顏で振向いて）希望さへありや何んでもありませんよ。

堀田（小聲に）チヨツとお待ち……（次室の間隔の大扉をソツと明けて見て、吐息をして立戻り、感激的な調子で）汝さんの心の底が分つた、私も嬉しい、こんな嬉しい事はない、私は汝さんに救はれたやうなものだ。汝さんの愛情の力で、死の谷の出口が見附かつた樣なものだ、さア私と一緒に行かう、東部(イースト)へ行かう。

登美枝（怪訝な顏色で）エ、……東部(イースト)へ……何うしたといふんです?

堀田（周章てた口調で）あの女の手から逃げるには東部(イースト)へ高飛びする外は無いんだ、金もチヤンとこゝにあるよ（財布を見せて、獨語的に）何アに、何うせ人の血を絞つたんだから構やアしない……心配なんか要らない。

登美枝（半信半疑に）エ、眞實に……私と一緒に?……

堀田　こゝらで加州の泥足を洗つて、東部(イースト)で二人これから新しい新しい生涯を始めようよ、私も最初渡米した時は、仕事師になるつもりぢやア更々ない、矢ッ張學校へでも

上る目的だつた、東部(イースト)へ行つて、二人で働きながら勉強でもやらうか？

登美枝　(嬉しさに堪へざるものゝ如く)　眞實ですか？……まあ嬉しい、私は救はれたんです。

堀田　イヤ、汝よりか、私が救はれたんだ、これも皆汝のお庇だよ。

(二人、相抱擁して、熱い接吻する

(扉が明いて、諸岡がぬつと顔を出す)

諸岡　御免(エキスキユース)……仲直りが出來たのかね、そりやアまア御目出度い。

(二人は急に離れて、もぢ／＼してゐる。)

諸岡　私は今、娘めと喧嘩をして、飛び出して來たんだ、併し此方ぢやア、お仲直りが出來て羨ましい、世間はさまざまなものだ。

堀田　(極り惡さうに)　ア、君、實は二人これから東部(イースト)へ行かうと思ひ立つたのだ、併しあの女には內證にしてくれ給へ、知らん顔をしてゐてくれ給へ。

登美枝　(赤い顔をして、會釋し)　今朝は桑港までわざ／＼御出で下さいまして、有難うございました、お庇で二人は幸福になりました。

堀田　何うも君には容易ならぬ心配をかけたね。

諸岡　(少し呆氣に取られて)　東部(イースト)へ、二人で……これは宛で水道栓から火事が出たよりも驚かされるよ、本氣かい？

堀田　(力ある語氣で)　本氣にも何にも……　此から直ぐに出發(スタート)せうと思つてる處だ。

諸岡　(眼を圓うして)　然うかい、あんまり急過ぎるな。

堀田　愚圖々々しちやアゐられないんだよ。

諸岡　然うかい？……　(嘆息を洩らして)　ぢやアお竹はとう／＼振り捨てられたんか、ヤレ／＼可哀さうに。

堀田　でも君、何うも仕方がないぢやアないか？　二人の關係は始めから間違つてたんだから。

諸岡　だがあの女も君故にいろ／＼苦勞したんだから、せめて妾位にはして置いてやつても善ささうなもんだな、登美枝さんを本妻にするのはよいが、彼女にもせめてそれ位な仕向けはしてやらねえぢや罪だぜ。

堀田　(眞面で)　戲談は止し給へ。

登美枝　妾なんて、それこそあの女を侮辱するんですわ。

諸岡　(眉を寄せて)　このまゝぢやア治まるまいよ……矢ツ張、例のモルモン宗に限るんだな、女同士では旨く話が附かねえのかな、斯うなつて見りやお竹が一番氣の毒だよ。

堀田　(晴れやかな顔で)　お竹なんか弗箱を積まうつて客が、二人も三人もあると云ふから餘計な心配は要らない

よ、眞に何、二人丈でも斯うして救はれりや善いぢやアないか？

（突然、次の室の區劃の大扉が左右に開いて、髪は亂れ、眼尻は逆釣つたお竹が、すつくと立現れる。）

お竹（凄い、慄へ聲で）皆、聞いてやつたぞ、床の下へもぐり込んでゝ、何も彼も皆聞いてやつたぞ、二人丈救はれりやア善いんだつて……こんな人情の無い男子とは知らなんだ、汝ッ、そのまゝに置くもんか。（やにはに飛びかゝつて、堀田の喉首を掴む、片手には帽子ピンが光つてゐる）

美登枝（進み寄つて）私の夫を何うするんだ？　惡魔？

お竹（睨み附けて）ヘン、何方が惡魔だ？　小娘の癖に大膽な、人の男を寢取りやがつて、それで救ふも救はれぬもあるものかい、恥を知るが善いッ。

諸岡（周章てゝ）コレ〳〵何うするのだ？

宿の主婦（駈け入つて）まあ何うするんだね、お竹さん、危險いからそんな眞似はお止しよ。

堀田（身をもがきつゝ）コレ……コレ……私を何うせうて云ふんだ？

お竹　私が血の汗を流した金は、二人の旅費にしろと云つた覺えはないぞ、この性悪男め、二人で行くなら行く處が違ふんだ、さあ此方へ來い、此方へ來い、二人で一しに行つてやる。（逆手に持つた帽子ピンを、男の喉首に擬しながら、堀田を引ずるやうにして、次の寢室へ連れ込む）

（忽ち、堀田の「アッ……」と絶叫して、倒るゝ音が聞える。）

主婦（怯々しい、覗いて見て）大變です！　大變です！　來て下さい……來て下さい……

（お竹の「アッ……」と叫ぶ聲がする）

主婦（慄へ聲で）帽子ピンで、堀田さんが心臟の處を刺されましたよ、お竹さんまで同じ處を刺して……大變です……大變です、來て下さい。

登美枝（白臘のやうに青ざめた顏色、小さい慄へ聲で）あ、神さま……何卒、私の罪をお許し下さいまし……

諸岡（登美枝の倒れんとするのを支へて）氣を確かりお持ちよ……併し、死んだ二人は可哀さうだな。

登美枝　あ、私も殺して下さい……私も……（譫語のやうに云つて、身悶えする）

――カーテン――

（一九一七年七月）

獅子に喰はれる女

（A Neo melodrama）

登場人物

富田男爵
稗澤
曲馬團長
その妻
花子
出方頭
少年三吉
道化者
その他、踊り子、子供、出方、見物、職工等
大勢

景

別莊の露臺、曲馬團の樂屋及演藝場

時

現代

（一）

幕上る。

クラリオネットとドラムとの、曲馬團の合奏樂。

舞臺暗黑、忽ち下手の小高いところに、ポスターの畫面がポカリと明るく照らし出される、——鬣の長い獅子が一匹うづくまつてゐる、獅子の肩に白い片足をかけ、あとの片足で力強く大地を踏みつけ、振りかざした右手には紅白だんだら巻きの鞭が握られ、つき出した左の手には金色の環が光る、斷髮の額にも、同じ金色のかつら巻をして、牡丹色のジャケットに、白い、厚ぼつたい花びらのやうなひだを取つた短いスカートを着けた、獅子つかひの花子の、肉體にみなぎる野性的な、美しい姿のまぼろしが、活人畫模樣で、そこに浮上る。

數秒の後、その活人畫模樣のまぼろしが消える。

舞臺が次第に明るくなると、その活人畫模樣の出た位置に、略々同じ畫面の、刷り物のポスターが、巨大な護謨樹の幹の中どころに揭げてあるのが見られる、東洋大曲馬團と赤地に白く浮かした興行の廣告ビラも、それに貼り附けてある。

上手には、常綠樹のこんもり茂つた垣の上に、簡素でガッシリした、別莊の露臺が現れる、そこらには狐や狸の皮がやたらにかけてある、大きな熊の皮もひろげ

てある。

この別莊の主人、富田男爵、安樂椅子に倚りかゝり、日向ぼつこをしてウト〳〵居眠つてゐる、血色の善いはち切れさうな精力がまだ身内で途迷ひしてゐるやうな、でつぷり肥つた、頬ひげのもじや〳〵した五十前後の男子である。

○男爵！……男爵！

（聲をかけながら、扉口から露臺へ現れて來たのは、執事でもなく、友人でもなく、兩方を兼ねたやうに、始終こゝへ出入してゐる稗澤と名乘る四十男で支那浪人の經驗もあり、近ごろまで中央の大新聞の記者もやつてゐたといふ履歷がある、背廣服にロイド眼鏡をかけ、頭髮は薄く禿げてゐる、返事がないのに、心安げに近づいて、男爵の居眠りを見るとニヤ〳〵笑ひながら。）

稗澤　男爵、男爵……お疲れと見えますね？

男爵　（ハッと眼をさまして）ア、日向ぼつこをして、ついウト〳〵した……（ポスターの方をヂッと見て）やつぱり縮看板だハヽヽヽヽ。

稗澤　（ポスターの方を見ながら）おやアあれを眺めてらつしやる中に、いゝお氣持になられて、ウト、ウト、なすつたんですね？

男爵　（苦笑）……まアそんな事は何うでも善いぢやアないか、君はやつぱり、新聞で飯を食つてたおかげで、一々ほじくり立てるくせがあつて困るな、尤もその鬪々しいところに賴もしさもあるんだが……。

稗澤　（チョッと頭かいて）イヤ、御言葉恐れ入ります、……何しろあの女には、男爵も大分御熱心のやうに見受けますから、この椅子と、あのポスターとの間に、ちよいと對角線を引張つて見たゞけですよ。

男爵　（相不變、苦笑）ハヽヽ、何アに、大して熱心といふのでもない、一寸、好奇心を持つたゞけさ、もつと雪でも降つてくれなけりや獵にも氣が乘らないし、ぶらぶらやつてるのは死ぬほどたいくつだからな。

稗澤　イヤ、御尤です。（狡さうな笑顏で）獅子つかひの女を射留めようていふんですから、これは熊狩りなんかよりもつと胸のワク〳〵する冒險ですね、しかし同じ狩りでも、鉛や鐵の彈丸と違つて、金や銀の彈丸さへウンとつめこんだら、相手は間違ひなく打倒されるのですから、何んと云つても猛獸より人間の方が始末がいゝんですね。

男爵　（チョッとてれかくしに）イヤ、私も萬更、唯のなぐさみものにしようといふ氣でもないんだ、出來る事ならあの女も救つてやりたいくらゐに思つてるんさ、……

それに、あの四つ、五つの小兒たちに、危い藝當をさせるなんか、實に慘酷で見てゐてもハラ／＼するし、氣持がわるくなるよ、ついでに何うかならないもんかなア？

稗澤　（苦笑）　ハ、、ぢやア、孤兒院でもお建てなさい、そしてあの女を男爵夫人に祀り上げるんですな、こいつは新聞の材料には持つて來いだ、しかし男爵もチと氣が多過ぎて困りますな、護謨や製糖や、熊狩り、女狩り、それから獨身主義者で、こん度は人道主義者ですかな。

男爵　君の口にかゝつちやかなはない、だがこれでまだなかなか老い込みやせんつもりだ、相變らずの氣まぐれさ。

稗澤　勿論さうでせうとも、熊の皮を背負込むのは結構ですが、あんな女や餓鬼どもを背負込んだら、それこそあとで始末が附きません、あれたちはまアあゝして、生きて行かせるんですね、我々の目から見たらみじめにも慘酷にも思へますが、彼等は又、あの中に生甲斐を感じてゐるのでせう、まアそんな事は何うでも善い、あの女さへ射留めたらそれで本望を遂げた事になさるんですね。

男爵　（笑つて頷きながら）　ところで、あれは受取つたかね？

稗澤　エ、エ、もう、團長始め、こんな光榮な事はないと云つて、押いたゞきました、今に御禮に伺ふでせう、それから花子の事も謎をかけて見ました。

男爵　フム、何うだつたね？　（シガーを燻らしながら）……一たい、いくら出せばいゝんだ？

稗澤　イヤ、さう店で買物をするやうに、お手輕なわけにもゆきませんよ。

男爵　（苦笑）　又イヤに勿體を附け出したね。

稗澤　あれでサーカスにも又サーカスの見榮とか體面とかいふものがあるらしいので、同じ持かけるにしても、そこを酌んでやらなけや、折角モノになるものも、意地ツ張りで、ついモノにならずじまひです。

男爵　（頷いて）　フム、そこらはやはり、君のやうな世間通でなけやダメだ、だが私は廻りくどい事が、きらひな性分だからな。

稗澤　それはよく存じて居ります、たか銃を持つて山林へかけ込むやうに無雜作には行きません、相手が人間の事ですから。

男爵　でも猛獸より人間の方が始末が善いつて、君はたツた今、云つてたぢやアないか？

稗澤　つまりこちらが喰ひ殺される心配がないからです、尤もこれも深入りしちやいけんのんです、獅子まで手玉に取る女ですから、男一匹ぐらゐ何んとも思はないでせう。

男爵　（含み笑）　手玉に取られて見たいなへ、、、、、たゞの女にや飽き／＼しちやつたよ、生ぬるくつていけない。

稗澤　でございませうとも、、、、、、ところで私は、一興行いくらで賣るかつて聞いてやりました、つまり日五千兩だつていふんです。

男爵　ソム、安くもないな。

稗澤　それも一日分ぢやアダメです、少くも三日か五日かいつぺいふんぱつしてやらなけやね。

男爵　（眼を瞠つて）そいつアちつと法外ぢやアないか、安藝者なら身請が出來るよ。

稗澤　男爵、あなたは今、金の捨て場處に困つてらしやるんぢやありませんか？　高いの安いのて、貧乏人のいふ事です、我々は百圓の金で、切羽つまつて罪人にもなりかねないが、男爵の眼から見たらそれはタカが一錢落したくらゐにも當りますまい、あの曲馬團も大分金で苦しんでゐるらしいから、まア慈善道樂だと思つたらいゝでせう。

男爵　ハ、、、慈善道樂か、こいつは兩爲めだが、しかし金つて奴アありあまつて邪魔だと思つても、イザ捨てるとなると、惜しいもんだよ。

稗澤　それやさうでございませう、……ぢやアいつそあの女を身ぐるみ買ひ取つてやんなさるか？

男爵　さうぶつ附かつて來られると、チヨツト返答に困るな。

（鈴（ベル）が鳴る。）

稗澤　（耳傾け）やつて來たんですよ、私がお取次に出ませう。（入る）

男爵　（指を折つて、勘定しながら、向ふのポスターを見入つて、ニコ〳〵する）

（稗澤が、シールのマントを着て、毛皮の襟卷を手にした三十歳前後の、色の白い女をつれて、露臺へ入つて來る。）

稗澤　（改まつて）閣下、團長の細君が御禮に上りました。

男爵　（氣輕に）さうか、構はず、ズツと寄つてくれ給へ……イヤ、そのまゝ、そのまゝ……。

團長の妻　（もぢ〳〵しながら、マントを脱いで、叩頭）無作法者でございますから、御じぎの仕樣も分りませんで……。

男爵　イヤ、こつちも至つて無作法者で、御じぎなんか面倒ぐさい方だ、さア、かけ給へ。

稗澤　（傍から）閣下は華族ぶらない、らいらくなお方だから、君ゃ構はず無遠慮にやり給へ。

男爵　（笑顔）華族だか、バゾクだか分らない無鐵砲な男ださうだ、何處かの新聞屋さんが書いてたなハ、、、。

團長の妻　（媚びるやうに笑つて）まアほんとうに、お氣輕な殿樣でゐらつしやいますわ、實は團長が、御禮に伺

ふ筈でございますが、小舍內の事が忙がしくて、私が代つて參つたのでございます、毎度ヒイキに預ります上に、今日は又、莫大な御祝儀をいたゞきまして千萬忝うございます。

男爵　イヤ、わざ〳〵禮に來なくつてもよかつたんだ、毎日のやうに、こちらから出張してるんだからなハ、、、ハ。

稗澤　男爵は男壯活潑な事がお好きなんで、君等の曲馬團がひどくお氣に召してるんだ、女々しい舊芝居なんか、女子供の見るものだつて、てんで見向きもなさらんでな。

團長の妻　（口上めいた調子で）　何うも有難い仕合にございます、この上とも何分おヒイキにお願ひ申上げます。

稗澤　ところで、君にもチヨツと耳打をした通り、御ヒイキの中でも、御ヒイキなのはあの花子さ、若い女の身で獸王獅子を手玉に取るところが、何んとも云へず痛快で膽がムヅムヅするつて仰るんだ。

男爵　魔法でも使つてるやうに思はれるんだよ、尤も女つて奴は皆魔法使ひだがなハ、、、。

團長の妻　（呟くやうに）　慣れツこになりやあんな事は何んでもございませんよ、それにあれは子飼ひの獅子ですから、牙も爪も拔いてありますわ。

稗澤　それにしても、あの大きな前肢で一つガンとくらはされたら骨ぐらゐ、みぢんになるだらう。

男爵　何しろムキになつて飛び附いて來られたら一たまりもないさ。

稗澤　そりや猛獸には限りませんな、女がムキになつて飛び附いたら何んな男でも一たまりもありませんな。

團長の妻　（ニヤ〳〵笑つて）　そりや若い女の子に限りますわ、こんなお婆さんになつちや何んなに汗みづくになつて曲藝をやつて御覽に入れましても、あんまりお手も鳴らないのですから、かはいさうでございますわ。

稗澤　イヤ、君の水藝や足藝はなか〳〵うまいものだよ、僕は感じ入つて、手を打つのも忘れたくらゐさ。

團長の妻　アラ、ほんとうに、お口がうまいんですね、ホホ、、、。

男爵　（目くばせ）　ところでだ。

稗澤　ところでだ。

男爵　（小聲で）　私はこの場を外づさうか？

稗澤　まア、しばらく……。（團長の妻に）實はたゞ今もいふ通り、あの花子が大さう閣下の御氣に入つてるんだ。

男爵　あの若い女の子に、これから一生、猛獸の相手をさせておくのも、何んだか慘酷なやうな氣もするんだ、そこまで考へてるんだよ。

稗澤　イヤ閣下御待ちなさい、……どちらが果して猛獸で

どちらが果して慘酷だかそんな事は分りません、だから一生の事ぢやアない、タダの三日で善いんだ、三日の間ホテルや自動車で、花子にしたい三昧のぜいたくをさせてやりたい、と仰るんだが何うだらう？

園長の妻　(頷いて)　よろしうございますわ、……私がお請合申します。

稗澤　や、分りが早いな、さすが一座の女將軍だ。

男爵　君の命令通りに動くのかい？

園長の妻　さうも參りませんわ、……妙な女でしてね、鼻ツ張が強いかと思ふと、ヘンに臆病なところもありますしね、何しろムラ氣なんですよ、一筋繩ぢや行きますまい。(考へ込む)

男爵　(頷いて)　フム、さうだらう、手ごはい奴を射留めるんでなくちやおもしろくないね、……ア、君、そこにウヰスキーがあつたらう。

稗澤　前祝ですかね。(室内へ入つて、ウヰスキーを持つて來る)

男爵　さアまア、一つやり給へ、いけるんだらう。

園長の妻　イヤ、あまりいける口でもございませんが、……まア一つ頂戴しませうか。(ウヰスキーをそれぞれ、グラスに注いで自分も一口あほり)　いつそ何も彼も云つちまひませう、恥を申すやうですが、實はあの園長がこの頃花子にヘンな素振を見せますので、私、氣苦勞でならないんですよ、私たちは今日、夫婦だと云つても、風の吹廻しで、明日は何うなるか分らないんですから、はかないもんでございますわね、そりや私だつて負けちやゐません、男が突き放さうとすりや、胸倉へとび込んで行つてかぢり附いてやるんですが、私ももう歳を喰ふはつかりだし、それに水藝や足藝ぢや何んだか肩身が狹く思はれて來ましてね、つい氣が引けちまふんですよ、尤も花子の方ぢや何だか逃げてゐる樣子ですが、油斷もスキもあつたもんぢやございませんわ、曲馬團なんて猛獸のかみ合やら、人間のかみ合やら、表藝も裏藝もあるんでございます、愛想がつきますでせうホ、、、、

稗澤　フム、成程な、それで園長がヘンな挨拶をしたんだな。

男爵　(ため息)　相手が園長ぢや、事は面倒だな。

稗澤　いつそ、曲馬團を買潰しますかね？

男爵　己がもつと若かつたらやるだらう。

園長の妻　あの女を……花子を身ぐるみ買ひ取つて下さりや、私、ほんとうに助かりますわ、ちやうど一座に借錢が出來て、園長もあがいてる矢先ですから、少し奮發して下されば、何うにかならん事はありません、私も內から緣を引ッ張りますさアね。

男爵　フーム、さうか　…今更、手を引くのも意氣地がないしなア。

稗澤　それこそ熊狩の殿様が、獅子に出逢つたら一逃りもなく尻ツぽをまいたといふ噂が立ちますよ……ところでだ、君の見込では…… 閣下、チヨッと失禮します。

男爵　ア、己れは一寸と書齋まで行つて、シガーを取つて來よう。（と扉口へ入る

園長の妻　（だんだんぞんざいな調子で）男爵閣下もずるぶん物數寄でゐらつしやるのね？

稗澤　當り前の女ぢや興がのらないんださうだ、少し變態だよ。

園長の妻　花子つて女も、感じがあるのかないのか分らないやうなヘン物ですね。

稗澤　ハヽヽヽ、コリヤ善い、ところで取引たが、これは二人の間で、祕密にやりたいんだ、……（そつと指を二本だし）これで何うだ？

園長の妻　身柄を引取るんですか？

稗澤　イヤ、それや別問題だ。

園長の妻　それにしても（指を三本出して）これ位出なけりや園長がウンと云ひますまいよ

稗澤　そりや少し高い…… ぢやア斯うしよう、これくらゐで折合はうよ。（と、こゝそこそ馬喰式に指を握り合ふ）

園長の妻　まア一應歸つて聞いて見ますが大ていよろしいでせう…… 何しろ私も一たんお請合したんですからね。

男爵　（内から、咳をしながら）いゝかい？

稗澤　さア何卒……。

男爵　（默つてシガーをつき出す、稗澤受取つてふかし始める）

園長の妻　では殿様、私はこれで御免蒙ります、そしていづれ花子にも一應御挨拶に伺はせます……、キッと伺はせます、木戸のあくのはまた時間がありますから。

男爵　さうか……いづれ今日お見物に行くよ。

園長の妻　何卒……御待ち申上げます、では失禮を……。

（稗澤が彼女を扉口まで見送る。）

男爵　何うだつたね

稗澤　（チヨッと指を出し）斯ういふのです、…身柄を引取つてもらへば、尚善いさうですが？

男爵　身柄を引取るにしては高くはないが、タダの慈善道樂ぢやアお笑ひぐさだらう。

稗澤　こんな事に秤を持出すのは野暮ですよ、富田男爵ともあらうお方が……。

男爵　何んだかバカバカしい氣がするよ。

稗澤　何うせ人間つてバカバカしいもんですよ。

男爵　何んだか下らない氣がするよ。

稗澤　何うせ人間つて下らないんですよ。
男爵　だが（ポスターを見る）あの獅子を弄ぶ女の事を思ふと、體中の血が沸き立つて來るよ、目先がぐら／＼するよ。
稗澤　あれが目の毒ですよ。
男爵　さうだ、たしかに目の毒だ（急ぎ足に扉口へ入つて、やがてピストルを片手に持つて出て、ポスターをねらひ打する、ポスターは縫目を切られて、ヒラ／＼と地に落ちる）これで善い、思ひ切らう…何んだか面倒くさい、……何んだか慘酷だ、……何んだか恥かしくもある……。
稗澤　實は金銀の彈丸が惜しくなつたんでせう。
男爵　馬鹿ッ…何も彼もうるさくなつたんだ、あんな者にかゝり合ひたくない……だがこの心の底が…何んだかヘンに疼くやうだ。
稗澤　（冷笑的に）やつぱり戀に心が疼くのでせう。
（鈴鳴る、稗澤が駈入る。）
（男爵は、ぼんやり護謨樹の幹を見つめる、忽扉口から、花子がヴェールをかけて出る、ヴェールをふり落すと、大體ポスターの中の、扮裝をした姿が現れる。）
花子　（一寸と跪つき）男爵閣下、今日は難有うございました、園長が御禮に伺へといふので、押して參りました。
男爵　（眼をみはり、護謨樹の幹と、花子とを見くらべてる）君、負傷はしなかつたね？
花子　いゝえ、…何うしまして？
男爵　（悦れしさうな笑顔）さうか…よく來た、よく來てくれた。（いきなり花子を抱いて、接吻しようとする）
（花子は力をこめて突き返す。）
（男爵の足元よろける、こん度は、猛獸に向ふやうに、いきなり飛びかゝつて、抱きすくめる。）
花子　アレー。
道化方　（ピエロの服裝をして手に旗を持つてゐる、木立の蔭かげからひよつこり露臺へ飛び出して）男爵閣下、今日は……。
男爵　（手を放して）何うした…何處から來た？
道化方　輕業をやつて、首尾よく生垣からはひ上りましてございます、キヤ、キヤ、キヤ、キヤ。（猿の物まね）
（扉口から、桃色のスカートの踊り子の群が、飛んだり、はねたりして現れて來て、男爵を取卷く。）
踊り子甲　閣下、今日は難有うございました。
同乙　閣下、今日は難有うございました。
同丙　閣下、今日は難有うございました。
（ガヤ／＼さわぎ立てる、四五歳の子供の群も後から飛んで出て、男爵の前に一々禮をする。）
男爵　ヤ、ヤ、…たくさんのお客さんだな。

道化方（キョロ〳〵見廻し）まア、たくさんの狐の皮やら、狸の皮やら、熊の皮まで出しておいて下さいました、これはお惠み深い、らいらくな男爵閣下が私共へ下さらうといふ御趣向でございませうな、御遠慮なしに頂戴してよろしいでございませう。（男爵が輕く頷くのを見て）さアノ〳〵熊の皮は花形の花子ちやん、もらつておいでよ。（と押へつける）

踊り子「私たちも頂戴するわ」「頂戴するわ」

（我がちに爭うて取る。）

道化方　ア、己れのがなくならア。（と、奪ひ合ふ、それぞれ首へまきつける）花ちやんも禮を云つておくれよ、何うも難有うございました、さア閣下、これから曲馬團へお越し下されませ、花ちやんはじめ、皆が御迎でございます、さア、手を組んだ、手を組んだ……花ちやん、音頭取をたのみまッせ。（と旗を花子に渡す、花子號令をかける、一同手輿をくんで男爵をかきのせ、露臺を練り廻る、露臺の下から曲馬團の合奏樂）

稗澤（扉口へ現れ、あきれた顏）何うもチと陽氣がヘンだわい。

（カーテン）

（二）

曲馬團の樂屋裏、中間（なかほど）は板敷の空地、上手と下手とに蚊帳型のテントが張つてある、テントの出入口は引幕のやうに開閉（あけたて）が出來る、背景は一面、曲藝場に張り渡された大テントが裏向になつてゐる、賑やかな合奏が聞えてゐる。

○

綠色の上衣に、半ズボン、赤地に、東洋大曲馬團の白字を染拔いた布片を綬の如く纏ひ、緋の土耳古帽を冠つた十五六歳の美少年三吉、邊を窺ひながらものかげからそつと出て來て、下手のテントの隙間をのぞいて見る、そしてこん度は、テントの裾からはひ込まうとする、白髮頭に士官帽を冠つた法被（はつぴ）姿の出方頭、キヨロ〳〵眼で出て來て、三吉の足を取つて引ずり出す。

出方頭　このチビ、ふざけた眞似をしやがると承知しねえぞツ。

三吉（ヘンな顏をしながら）何をするんだい、いらんおせつかいだ。

出方頭　てめえ、乳ッ臭い小僧のくせにしやがつて、花子さんにからかはうたつてダメだい、團長に見附かつたら、革の鞭で、脊骨が飛び出すほど引つぱたかれるんだぞ、一たいてめえは生意氣たい、チッと氣を附けろ、もう出になるんぢやアねえか、早く行けッ。（小づき廻す）

三吉　年老のくせに、何んて邪慳な爺だ、團長にばかりへイコラして、傍の者はけだもの扱ひにしてやがらア、今に見ろ、ロクな事はねえから。

出方頭　まだ生意氣な口利いてやがるか？　タヾぢやおかねえぞッ。（追つかける

三吉（巧みに逃げ廻つて、ピーだ、（口をつき出してからかひ、テントのかげへ驅込む）

出方頭　ほんとうに、仕樣のねえ小僧だ、覺えてやがれ、今にひどい目に逢はせてやるから……花子さんは一たい何をしてるんだらう。（隙間からのぞく　肱を枕に白河夜舟とござい……あのふつくらした、白い腕のくの字形と來ちや堪らないなア、若い奴らがからかひたがる筈だて。

（上手の、テントの出入口があいて、藤色の衣裳に、緋の袴をつけた團長の妻と、後から乘馬服に、長靴、革の鞭を手にした團長が現れる。）

團長の妻　まア……何してるの？

出方頭（びつくらして）ア、へ、、、、（笑ひながら近づいて來る）實はあの三吉のチビめが、又くゞり込まうとしやがつたので、取つちめたところですよ、へ、、、へ。

團長　性懲りもない小僧だな、給金のさいそくなんかで、皆を煽てゝるのも彼奴が發頭らしい……花子は何うしてる？

出方頭（手まね）これでさア。

團長の妻　出になつたら知らせておくれ。

出方頭　へイ〳〵、もう御支度はチヤンと出來ましたな、今日はどんたくでなか〳〵の景氣でございますよ、職工さん方の、總見がありあしてな。（入つて行く）

團長の妻　……汝さん……汝さんの口から云ひにくけりや私から花子にさう云つてもよござんすよ、何しろ、私は手附の金も預つて來てるんだし、一座も何んとかしなけりや、あがきが附かなくなつてる矢先ぢやないかね？　いつまでも煮え切らん事を云つちやゐられない場合なんだわ。

團長（焦々して）七くどく云はんでも分つてる、金は欲しいが、あの花子は今この一座の花形ぢやアないか？　そいつを賣物に出すつていふのは、團長としていかにも辛いんだ……それにあの女がなか〳〵承知しやすまい。

團長の妻（嘲るやうに）あの女が承知する、しないより、汝さんが、やきもちをやいてるんだ、あの女に氣があるもんだから。ちやんと知つてますよ。

團長　馬鹿ッ、又してもそんないやがらせをいひやがる、……ブンなぐつてやるぞ。（おどかしに革の鞭を鳴らす）

團長の妻（突かゝるやうに）なぐりたけりや存分になく

つてくれ……いつそなぐり殺しておくれ、私のやうな邪魔物アさぞなぐり殺したいだらうよ。

團長　（叱つて）氣ちがひ、貴樣ア近ごろ何うかしてやがる。

團長の妻　フン、汝さんこそ何うかしてるんだ、前の請元から立替の事をあんなにやかましく云つて來てるし、今に荷物や道具を差押へられたら一座のものは干死するかチリ〴〵バラ〳〵で夜逃でもせなけりやをさまりは附かないだらう、こん度がチッと位いゝからつてとても切抜けや出來ないんだよ。

團長　そりや分つてる、その事ぢや貴樣より己の方がもつと胸をいためてるんだ。

團長の妻　だから今の話をまとめたら、何んでもないぢやアないか、男爵だか、ヒシヤクだか知らないが、あんないゝ鳥がひつかゝつたんだからさ。

團長　（苦笑）近ごろは汝の方が、己より上手になりやがつた。

團長の妻　何アに、この頃の汝さんは弱氣がいぶつたんでボヤ〳〵してるんだよ、ずゐぶん悪黨のくせに。

團長　（白い眼）叉してもイヤ味を云ひやがる。

團長の妻　汝さんが何うしてもイヤだといふなら私が先樣にキッパリ斷わつて來るよ、手附も戻すさ、いゝかね？

團長　脅かしやがるな、

團長の妻　脅かしぢやアない、マサカ詐欺もやれまいかられ。

出方頭　（顏を出し）もう出でございますよ。

團長の妻　ハ、御苦勞。

出方頭　今日は又、お化粧がバカによく出來ましたね、十を歳ばかり若く見えらア。

團長の妻　あア、イヤだよ、お世辭だか、皮肉だか分りやしないわ。（入る）

出方頭　イヤ、ほんとうの事でさアへ、、、、。（入る）

（團長、腕叉、思案顏で、そこらをうろ〳〵する、曲藝場の方では、相圖の笛がピリ〳〵鳴る、拍手が起るこ

（下手のテントの出入口があいて、花子が半裸體にマントを引つかけゝ現れる。）

花子　（のびをしながら）ア、つい眠つちやつた、……疲れん氣でも疲れるんだわ。

團長　オ、花子、　折角、話したい事がある。（近づいて行く

花子　（テントの出入口に、立ちはだかつて）話したい事つて、何アに？

團長　己れは何うしても、あの女がイヤなんだ、ダン〳〵增長しやがつて、この頃のやうに、團長のおかみさん面

を何處でも彼處でもやたらにふり廻されちや堪らないんだ。

花子 （笑つて）ア、分つてるわ……その話ならもう何度聞かされてるか知れないわ。

團長 （力まかせに花子の手を引張るやうにして）おやア何んとかキツパリした返事を聞かせてくれ、己は團長だ、汝はこの一座の花形だ、これが夫婦になつて、一致してやつて行けや、この一座もキツと盛返して、今に朝日の昇るやうな勢が出るにきまつてゐる、名まへも、花子曲馬團とつけかへてさ。

花子 以前から、名まへもつけかへるへつて、チツともさうしないぢやないか？ 欺すのは、イヤだよ。

團長 それは汝が、私のいふ事を聞かないからさ、こつちの云分は通さないで、自分勝手な事ばかり考へてちやいけねえ。

花子 （茶目らしい笑顔）團長はおかみさんが二人欲しいの。

團長 戲談云ふな、あの女は自分で追ン出て行くだらう？ それとも行き場所がないから平藝人で使つてくれと、お願すりや使つてやる。

花子 そんな事を聞いたら、あのおかみさん、何んなにあばれ出すか知れないよ。

團長 （革の鞭をピウと鳴らして）そんな事を恐れる己れかい？

花子 （小首をちゞめ）男子つて、恐いものね？

團長 イヤな女には恐がられようが、好な奴にはやさしいよ。（片手で抱きにかゝる）

花子 （スルリと脱けて、相手の顏をヂツと見る）アラ、團長の口ひげには白髮が交つてるわ……おぢいさんね。

團長 （口ひげを觸つて見て）馬鹿にするな、今朝ぬくのを忘れたんだ、……これでもまだ歳は取つてないつもりだ。

花子 頭は禿げてるけども、髮の毛は黑いのね、染めてるんぢやアなくて？

團長 よけいな心配はするな。（片拳で胸を打つて）今が男盛りだい、それに汝のやうな若いのを女房にすりや、ダンノ＼若返つて來るんだ、そしてもう一稼ぎ、ウンと稼がなけりややり切れない。

花子 若返るつて、私は毛生え藥ぢやないわ。

團長 （侮辱を感じて）いつでも、戲談にしやがる、今日はその手ぢやいかんよ、己らアしんけんだ、イヤならイヤだと、キツパリ云つちまへツ……その代り、たゞぢやおかんからさう思つとくれ。

花子 おやア何うするの？ ひまをくれるんなら、私、今

からでも出て行くわ。

團長　見物を前にひかへて、己らを脅かさうていふんか？馬鹿にするないッ、いつそ獅子に喰はれて死ンじまひやがれッ。

花子　（憂鬱に）私も折々忌氣がさして、そんな事も考へるんだけども、生憎獅子が喰つてくれないんだよ。

團長　誰のお庇で、それ丈の腕になれたと思つてるんだ？

花子　私は何もあんな藝を覺えたくもなかつたんさ、ヒツぱたかれて無理やり仕込まれたんだ？　つぶしの利かない商賣だよ。

團長　（焦れて）ア、云やア斯う云ふ、この天ン若め！

花子　だが一生、こんな眞似して、人さまの見世物になつてるのも何んだかつまらないぢやアないか？　團長はそう思はないの？

團長　身すぎ、世すぎつてものは、何んでもこんなもんだ……だが汝、己の女房になるのもイヤ、つぶしの利かない商賣もイヤだつていふなら、もつと他の善い事を教へてやろ。

花子　何んな事……何か面白い事があつて？

團長　（圖太い調子で）お客さんを取るんだ。

花子　多勢のお客さんが來てるのも、私のせゐぢやアなくつて？

團長　とぼけやがるな、五十錢や一圓のお客さんぢやアらちがあかねえ、もつと氣の利いたお客さんが付いたんだよ、今夜藝がすんだら、すなほにそのお客さんの處へ行つて來い。

花子　（硬張つた表情）……眞ッ平だよ。何處のお客さんだか知らないが、私は男子が恐いのだから。

團長　（冷笑）フ、ン、生娘のやうな顔をしやがる、あの長崎で、首をくゝつてお死んだ黒ン坊の奴ア、貴様の情郎だつたてえ事は誰でも知つてらア。

花子　（睨み附けて）ウソだよ、……あの黒ン坊は、私が肱鐵砲を食はせてやつたら、氣がへンになつて死ばつたんだ。

團長　フ、ン……まアそんな事は何うでも善いが、己の云ふ事を聞かなけやお客取をするんだ。

花子　（ツンとして）イヤな事つた、我儘者の男の機嫌なんか取つてるより獅子の機嫌でも取つてる方が、まだましだよ。

團長　（調子をかへて）汝にかゝつちや敵はない、……己らアもう兜を脱いでお願ひすらア、汝も薄々知つてようがこの一座や去年からの不景氣で、行詰つてるんだ、ここで三千と五千の、纏まつた金が出來なけりやチリ〴〵バラ〴〵に夜逃げでもせんけりや追ッ附かねえ……花子

助けてくれんか、己れ、皆も恩に着らア、……拜むよ。

花子　（動かされたやうに）そんなに泣附かれちや私も何んにも云へなくならア。

團長　難有いッ……お客つていふのは、實はあの男爵だ、汝もイヤだらうが、チョッとの辛棒だ、たのむよ……己の爲めだ、皆のためだ。

花子　あの男爵……やつぱりお爺さんだね。

團長　金でも出さうて奴は、大てい歳喰らひにきまつてらア、……小僧ッ子はすぐに色戀が出來ると思つてやがるんだ、ぜいたくだよ。

花子　あの男爵さんは、隨分荒つぽい爺さんだよ……恐いわ。

團長　何アに、女には甘いんだよ。

花子　（好奇心的に）男爵さんて、やつぱり人間は人間だわね……からかつてやるのも、チョッと面白くもあるわ。

團長　（苦笑）こいつめッ、物好な奴だ。（と革鞭の先で輕くくすぐる。曲藝場では拍手が起る）

稗澤の聲　お危なうございますよ、階子がギシ／＼して……。

男爵の聲　何アに大丈夫だ。

（二人がテントのかげから現れる。）

團長　（走迎へて）こんなむさくるしい處へ、何うも恐れ入ります。

男爵　（ジロ／＼見廻して）イヤ……樂屋までテント張りだね、これは一風變つてゐる。

稗澤　閣下はすべて風變りなものが御好きなんだよ、平凡なものは下らない、あき／＼したと仰るんでね。

團長　てまへなんか何時もテント張の中で寢起きしてるので、あき／＼してるのでございまさアへ、、、、。

男爵　何んな珍らしいものでも、慣れたらみんな平凡になつて了ふんだ、人間つて奴はお互に折々生活を取りかへつこして見なけりや、誰も彼もたいくつするんだね、私ばかりぢやないらしい……だが、花子は何時見てもきれいだね。

稗澤　人生の沙漠の中の、テントの蔭に咲く美しき花ですかねハ、、、。

花子　珍らしい中は、きれいだと仰るんでせうホ、、、。

男爵　なか／＼口先もするどいねハ、、、、。

稗澤　何しろあの猛獸を猫の子のやうにあしらつてるんですから、こつちらは敵ひませんよ。

花子　何うしまして……私は獅子よりも人間の方が恐いんですよ…… 殊に男子の方が……。

團長　ア、見えても全く生娘でございますよ。

男爵　さうかなアハ、、、、、。

稗澤　さういへば、男子だつて猛獸よりも女の方が恐いかも知れないね、まア五分五分だハヽヽヽヽ。

園長　まアそんなものでせうへヽヽヽヽ。

花子　男爵さまは、熊狩がお上手ですつてね、ア、あの熊の皮有難うございました、……こゝへ敷いてさし上げませう。（テントへ入る）

園長　（椅子を持出しながら）殿様のやうな何御不足のない御身分柄で、何うしてそんな生命がけの遊びをなさるのでございませう？

（花子は熊の皮を持出す、その上に椅子を据ゑる）

稗澤　それよりも男爵閣下から見ると、商賣も多いのに、君方が生命がけの商賣をしてる氣が知れないと仰るだらう。

男爵　イヤ、そこに行くと遊びも商賣もないんだ、たゞ生命がけといふところが堪らなく面白いんだね。

花子　人間つて、テコヘンなもんですわね。

稗澤　君だつてさう思ふかな？ハヽヽ。

男爵　だがこつち等のやる猛獸狩つて奴は唯擊殺す丈で善いんだから、手間はかゝらないが、生きたまゝのを馴らすていふのは大へんだ、チヨツと人間業ぢやないやうだね。

園長　ところがやはり餌でございますね、餓じがらせて置けや何んな猛獸でも云ふ事を聞きますか滿腹すると動きませんし、こちらで檻の中へ入つたら、ダツと眞に全力を入れて、睨み附けるのでございます、チヨツと眼を離したら、かみ附きますからね、ふだんから人間には勝てないていふやうに、脅かし附けておくのが何よりかんじんでございまさア。

稗澤　おやアこゝらの工場で職工を使ふのも同じですね、あまり金をやり過しちやいけない、餓じがらせて置くとイヤでも働く、が何時も睨み附けてなけや、なまけるつて支配人が云つてました。

男爵　ハヽヽヽ、でも人間相手ぢや、そした睨みもダンダン利かなくなつて來るらしいぜ、やつぱり猛獸相手の方がまだ無事かな、こいつも油斷すりやかみ附かれるんだか……。

花子　かみ附かれたら何んな氣持がするでせう……燒け附くやうでせうか、チヨツとやつて見たいわ。

男爵　生命にかけがへがありやそんな事もやつて見たいもんだね、疊の上でくたばるのも平凡過る……だが、花子に今、そんな馬鹿な眞似をやられちや困るよ。

園長　この子は折々、とんでもない事を云ひ出して、人をおどかすので弱ります、殿様からチとお叱り下さい。

稗澤　（園長に目くばせ）時に、園長。

團長　ハイ……。
　（相闘で、二人は上手のテントの中へ入つて行く。）
男爵　（馴々しく）ね、花子、話は分つたんだね？
花子　何んなお話でせう？
男爵　イヤ何うも……さうお手玉に取つてくれちや困る。
花子　（自棄な調子）よくは分らないんですよ、殿樣の口から云つてちやうだい。
男爵　（迫るやうに、近づいて）イヤハヤ、美しい眼に全力を入れてグッと睨み附けてるんだね、……ダン、ダン身動きが出來なくなる。
花子　私、ほんとうはね、男の人に、指一つ當てられても身慄ひが出るんですよ、病氣なんでせう。
男爵　（苦笑）戯談は止すんだ。……（いきなり飛びかゝつて）ハヽヽ、こんな美しい牝獅子を手取りにした、もうメッタに離さないぞ。
花子　獅子よりも力が強いわ、離して下さい、……息がつまる。
男爵　かうして手の中で、もみくちやにしてやらなけやたんのう出來ない。
花子　そしてちり紙のやうに投げ捨てるんですね。
男爵　イヤ、さうぢやアない、私は何んだか戯談にしてゐられなくなつたんだ、汝のやうな不思議な女にはもう逢へまい、私はいつそ汝に喰ひ殺してもらひたいんだ、……この心をチツとでも酌んでくれ、汝のためには何んな事でもしてやる。
花子　（浮つ調子で）御深切ね、何んだかお父さんにでも出逢つたやうだわ、私、みなし子ですのよ。
男爵　（ショックを感じながら手離して）フム、さうか……さうだらうな。
稗澤　（出て來る）男爵、萬事すみました。
男爵　さうか！
團長　（丁寧に）只今は、この一座に御同情を下しおかれまして、莫大の御融通をいたゞき、誠に難有い仕合に存じ奉ります、團長より御禮申上ます。
男爵　大分しかつめらしいなハヽヽ。
團長　花子、汝からも御禮申上るんだよ。
花子　（一寸膝を折つて、默禮）ソロ〳〵身支度にかゝりますから御免蒙ります。（下手のテントへ入る）
稗澤　では一應席へ歸りませう。
男爵　フム、さうしよう、ぢやア又。（テントのかげへ入る）
團長　隋子がお危うございます、お氣をつけなさつて。
　（見送つて立返り、ふと思入、忽ち下のテントの中へ駈け込む、曲藝場の方ではピリ〳〵笛が鳴る、手拍子

が聞える。）

花子の叫び聲（テントの中で）イヤだ、イヤだ……いけないツ……いけないつてば……何をするの、何をするの……。

團長の聲（テントの中で）靜かにしろ……。

花子の叫び聲（テントの中で）いけない……何するんだ……このだゝいめ……アッ……。

（下手のテントのかげに、團長の妻の姿が現れる。）

團長の妻　團長……何處にゐるんですか？……出ですよ、出ですよ。

團長（下手のテントから忙しく出て來る）さうか？……（云つて、電光の如く走つて入る）

（團長の妻、嶮はしい眼で見送つて、下手のテントへ近づいて行く。）

花子　仕様のないけだものだ。（髪の亂れを直しながら、興奮し切つた顏色で、テントの出入口へ現れる）

團長の妻（疳高い調子で）何をしてたんだね？

花子（刺すやうな口調で）自分の御亭主にチッと氣をお附けよ。

團長の妻（怒(いき)り立つて）何んだつて？　ふざけたまねをすると承知せんぞ。

花子　誰かそんなまねをしましたのかねえ。

團長の妻　その髪のざまは何んだ、鏡を見ろ、このけだものめ。（いきなり摑みかゝる）

花子　何をするんだ。（抵抗する）

團長の妻　こらしめてやるんだ。（とむしやぶり附いて、もろ倒れになる）

花子（相手をなぐり返しながら）夫婦とも揃つた亂暴者だ、まけるもんか？

團長の妻　汝れッ、殺してやるぞ。（組んづほぐれつ轉がり合ふ）

出方頭（出て來る）まア／＼、これは何うなすつたんです。

團長の妻　人の亭主を寢取りやがつて。

花子　誰があんな爺を、……馬鹿にするなツ。

出方頭　まア、まア……お止しなさい、お止しなさい……おかみさん、汝さんとんだ勘違ひしてるんだよ。（漸く引分ける）

團長の妻（せい／＼太息ついて）何が勘違ひだ、……汝なんかに分るものか……。

花子　自分こそ勝手に氣を廻してるんだ、畜生、泣面かゝしてやるぞ。

出方頭　まア／＼、お二人ともさうムヤミに怒つちやいけねえ、……おかみさん、花子さんはね、この一座のため

に、お客さんを取る事を承知してくれたんだよ、今團長から聞きやした。

團長の妻　（氣拔けしたやうに）ほんとうかい？

出方頭　エ、もう萬事チャンと約束がすんだんださうでさア……な、花子さん、汝さんは一座の恩人だ、皆恩に着なけりや罰が當る、……おかみさんにも似合はないとんだヘマをやつたもんだな、まア／＼、詫まるんだね。

團長の妻　だつて、何んだか樣子がヘンだつたからな。

出方頭　そりや團長がチョッとからかつて見たんでせう、男子つて、意地が汚ねえからさ。

花子　（口惜しさうに）そんなにふみつけにされて堪るもんか……。

出方頭　そりやよくねえ、全くよくねえ、……だが花子さん、何も彼も水に流して、一座の者を助けてやつておくれよ、おかみさん、汝えも詫まんなさいよ。

花子　なぐられたり、打たれたりして引合ふもんか、もうイヤだ。

團長の妻　ア……私とんだ事をしちまつた……惡かつた…何卒堪忍しておくれ、これだ……これだ。（と低頭する）

花子　（青ざめた顏色）手のひらを返すやうに、そのざまア何んだね、恥をお知りよ。

團長の妻　何んと云はれたつて、私が惡かつた……花子さん、賴むよ、賴みますよ、ね、ね、堪忍しておくれな。

花子　フーンだ……あさましくなつちまふわ。

團長の妻　ね、汝さんが堪へてくれなけりや私は死んでゝもしまはなければ團長に申譯が立たない。

出方頭　花子さん、ほんとうに水に流して上げておくれ、勘違ひつて誰にもある事だ、それにおかみさんも、前からいろ／＼氣をもんでたんだからね。

團長の妻　（泣きながら）これも男の惡性からだよ。

出方頭　まアさう云や、そんなもんでさアね。

花子　考へて見りや私ア皆の爲に、生きながら引裂いて喰はれるやうなもんだねえ、バカ／＼しいや、一座の花形もくそもあるもんか。

出方頭　さう云つちや實もフタもありやしねえ、何うせ世の中は共喰ひだよ、それで一生は成しくづしになるのさ。

團長の妻　私は何度でもあやまるよ、斯うして頭を板敷にくつゝけてあやまるよ、堪忍しておくれな。

出方頭　イヤもう花子さんもそれ程分らずやぢやねえ、おかみ、衣裳が汚れらア、着かへなさい、何んなら手傳つて上げまさア。

花子　（頰を撫で）顏がヒリ／＼する、引ッ搔かれた瑕か附いてやしないの？

出方頭　イヤそんな事はありませんよ。

團長の妻　マサカそんなに引掻きやしなかつたよ、私こそ肩の骨がいたい。

花子　化粧も仕直さなけやならないわ。

（下手のテントへ入る。）

團長の妻（舌をペロリと吐いて）とんだ大しくじりね。

出方頭　まアノ＼いろんなお話がありまさア。

（二人、上手のテントへ入る。

（此時パッと、電燈がつく。）

道化方（現れる）さサノ＼、みんな、支度は善いかい？

踊り子の一群ゾロノ＼出て來る、「いゝわ」「いゝわよ……」

道化方　頭かずは揃つてゐるかな？「一匹、二匹、三匹、四匹、……五人、六匹……。

「まアイヤだ」「バカおやぢ……」「バカおやぢ……」

道化方（叱る）……静かにいし……七匹、八匹、九匹、十匹……。

「五番目が御ヒイキだつてよホ、、、、」

五番目の踊り子　まアイヤだ。

踊り子の群　さア傍へ行くがいゝよ、行くがいゝわ。（五番目の踊り子を道化方の傍に突き出して列ばせる）

道化方　エヘン、何うだい、似合ふか？

踊り子の群「似合ふわ」「似合ふわホ、、、、」……。

（相圖の笛ピリノ＼と鳴る。）

道化方　さア全隊すゝめ！

（テントのかげへ入る。）

三吉（そつと忍んで來て、下手のテントへ入り、花子の手を引張るやうにして出て來る）いつそ逃げようよ、こんな處にグヅノ＼してるのはつまらない、この間に逃げ出さうよ。

花子　まア、だしぬけに、何を云ふの？

三吉　一足ふみ出しや廣い世間があらア、飛出さう、ね、そしたらお互に助からア、私は何んな事をしても、花子姉さんのためになつて上げるんだ。

花子　私は廣い世間なんて、そんな知らない處は、こゝよりも、もつと恐いんだよ、大きな口は利いても、幼い時からこのテントの下で野育に育つたんだものね、汝もそんな事はお止しよ。

三吉（熱情的に）イヤ、このテントの中でけだものゝ仲間になつて暮らすよりか、廣い世間の方が何んなに善いか知れないんだよ、恐がらなくも善い、私につかまつて來なさい。

花子（宥める調子）汝さんもそんな無謀な考を出さないで、もつとこゝに落着いて居ておくれ、私は汝さんがかはいゝんだよ、汝さんがこゝに居てくれると、私の荒つ

ぽい氣象もしづまるんだ。
三吉　私は何うしても、こゝから救ひ出して上げたいんだ、自身の體ぐらゐ、何うなつても構はないから……日も暮れかゝつたし、今が善い時だよ、裏口からそつと脫け出しやわけはない。
花子　ホヽヽ、のん氣ね、外は眞ッ暗ぢやアないか？
三吉　少し步いたら明るい町があるよ。（花子の手を引張る）
出方頭　（見附けて、小足早にやつて來る）何んだい、チビめ又花子さんにからかつてやがるぢやねえか、こゝらは汝なんかの寄つくところぢやねえ、あッちへ行つとれ、舞臺にアナでもあけたらひどい目に逢はしてやるぞ。
三吉　用事があるから來たんだ、脅かすないッ。
出方頭　うそを吐けッ、隙さへありやこゝへくつついてばかり居やがる、早く下りんのか？
三吉　汝の邪魔にはならないや。
出方頭　生意氣をぬかすないッ、己は團長から云附かつた目附役だ、己のいふ事に逆らやア承知せんぞ。
花子　（庇つて）さア、汝、あつちへ行つておいでよ。
三吉　ぢやア行かア……姉さん、今の事を考へといておくれよ。
出方頭　早く行かんか？　もう出ぢやアねえか？

（三吉は、眼を光らして下りて行く。）
出方頭　一たい、彼奴ア何うしたんだね、花子さんがなぶりものにしてるのかね？
花子　ませた子だよ……だがあんなのが罪がなくていゝよ。
出方頭　却つて油斷がならないんだよ、小僧の色氣ついたのは向不見で、何をしでかすか分らないんだ、氣をお附け。
團長　（入來る）今日はなか／＼景氣が善い、やつぱりどんたくだな。
出方頭　あれからとんだ事がオッ始まつてたな。
團長の妻　（上手のテントから出て來る）私が勘違ひで、（と、團長をチョイと睨み）……花子さんとけんくわをしたのさ……汝さんのお庇で、私は大しくじり……花子さん、堪へておくれ。
團長　（てれかくしに）又やきもちをやき損ねたんか……面白くもねえ。
團長の妻　フン、汝さんの面の皮は千枚張だよ。
出方頭　花子さんこそとんだ災難でね、いろ／＼、あやまつたんですよ。
團長　私からもあやまるんだ、ね、花子、堪へてくれ。
團長の妻　ザマア見るが善い。

團長　何云つてるんだ、間抜けめッ。

（花子は默つて、下手のテントへ入る。）

團長　機嫌を損じちや、困るんだ、何しろ氣がかはり安い女だからな。

團長の妻　フン、汝さんこそ、馬鹿なまねをしたんぢやアないか？

出方頭　まア、まア、御夫婦のかけ合ひは後になさい、あの三吉の野郎、何うもいけませんぜ、……思ひ切り、ひどい目に逢はせてやりませうか？

團長　何うするんだ？

出方頭　この次は、私が竿を肩に立てゝ、その上で、あいつが宙返りの藝當をやる番でさアね……。

團長　（頷いて）ウム……何うでもしてくれ、任せらア……。

出方頭　心得やした、……一座のためにならん野郎ですよ見せしめになりまさア……。（入る）

團長の妻　汝さん、金をもらつてるかね？

團長　ア、汝が居なかつたから、兎に角己が預る事にしてこゝに持つてらア。

團長の妻　いくら？……エ……端數は可笑しいね。

團長　ウム、さう云やア、ヘンだな、……中でコンミッションでも引かれたのかな？

團長の妻　さうかもしれない、あの男は喰へないんだよ……私が勘定して見よう。

團長　ウム、さうしてくれ。

團長の妻　ちッと氣をお附けなね。（摑る、……連れ立つて上手のテントへ入る）

（曲藝場の方に、叫び聲が起る。）

（道化方、忙しくかけ上る、後から踊り子の群が亂れて入來る。）

道化方　大へんだ、大へんだ、三ちやんが竿の上から逆ご落しで、頭アわつた。

踊り子の群　大ヘンだ、大ヘンだ……團長、大へんよ。

團長　（テントより出て來る）何に……三吉が落つこつたつて……あの小僧、一たい生意氣だからな。

團長の妻　（後から）汝たちも氣を附けたよ。　二人下りて行く）

道化方　何しろあぶない世わたりだなア。

踊り子の群　「イヤになつちまふよ」「イヤだねえ」「かはいさうだよ」

花子　（忙しく出て來る）何うしたんだつて？

道化方　御ヒイキの三ちやん、千丈の谷へ獅子の子落しとございい……イヤ、戲談ぢやねえ、助かるまいよ。

花子　エ。

踊り子の群 「見てゐられなかつたのよ、頭から血綿が出て」「氣味がわるかつたよ」

花子 ……けがだつたのか知ら。

道化方 あの出方頭の爺の事だから、何をしたんだか知れないんだ。

踊り子の群 「ほんとうに、かはいさうだわ」「きれいな男だつたのにね」

花子 (怯えた調子で) 行つて見よう。

道化方 (曲藝場の方をのぞいて) もうかついで行く〳〵。

男爵 (上つて來る) とんだけが人が出來たもんだ、花子、汝の事がヘンに氣になつて上つて來た。

花子 (興奮した調子) 私は行つて見舞つてやる、……三ちやんがかはいさうだ……。

男爵 (止めて) イヤ、もう病院へかつぎ込んだ……助かるかなア……。

花子 エ……傷は重いのか知ら?

男爵 汝も、今日の獅子つかひは止めてくれ、ひどく氣になつて來た、見物の方は何うにでもなる、私が引受けた。

花子 へ……御深切ねえ。

男爵 私に任せてくれ。

花子 でも、大勢のお客様方を前にひかへて、藝人にそんな勝手なまねは出來ませんよ。

男爵 何より生命が大切だ。

花子 (冷淡に) さうでせうか? けれども生命なんて烟のやうなものぢやなくて? 直ぐ消えるわ。

男爵 そんなヤケを云つちやいけない。

花子 自分でいくら大切にしたつて、ハタで粗末に扱やア仕方がないわ。

男爵 だから私が大切に扱つてやる。

花子 ヘン……殿樣は自分で暇つぶしの、獵銃のお手入は念入になさるでせう、私も、なぐさまれる爲めの御深切にあづかるんですかね。

男爵 (熱心に) もうそんな事は云つてくれるな、己は妙に汝にひき附けられて來たんだ、ダン〳〵心から可愛くなつて來る……ほんとうだ……決してごまかしではない汝の爲めには何んな事でもする……笑つてくれるな……

花子 私やダン〳〵憎くなるんだ、三ちやんの落つこちたのも、殿樣のお指圖ぢやアないの?

男爵 馬鹿な……。

出方頭 (現れる)

花子 (突かゝるやうに) ア、汝、三ちやんをワザとふり落したんだらう?

出方頭 そりやひどい……全くあの子の仕損じでさア、たかかはいさうな事をしちやつた……かはいさうな事を…

……。

花子　とぼけないで、泥を吐いておしまひッ。

出方頭　イヤ、全くあの子の不運だよ、かはいさうな事をしちやつた。

花子　（慄へながら　この人殺しめ、仇を打つてやりたい。

出方頭　今にお調べを受けりや分つて來らア、だが、花子さんになら勝手になつてやらア、何うでもしてくれ。

花子　（なぐる）この大惡黨め、この大惡黨め……。

出方頭　花ちやんになぐられると、いゝ氣持にならア。

花子　もつとひどくなぐつてやりたい（這入つてテントの中から紅白だんだら卷の鞭を持來り）この大惡黨め、……これでもか……この大惡黨め……この大惡黨め……こんな事ぢや腹が癒えない、くやしいッ。（と地だゝらふむ）

男爵　腹が癒えなけや己もなぐつてくれい。（とそこに坐る）

花子　（血眼になつて）汝さんが差圖したんだな、仇の同類だ、この惡黨め……人殺しめ。（と狂的に鞭ちつゞける）

出方頭　殿樣ア勿體ない、もつと己をなぐんな。

花子　この大惡黨め。（鞭つ）

男爵　己をなぐつてくれ。

花子　この人殺しめッ。（鞭つ）

（興奮し切つて、花子はワーッと泣叫び、熊の皮の上にころげ手足をバタ／＼させる。

（二人は起上つて、左右から、花子の狂態を見てゐたが、出方頭はニタ／＼冷酷な笑ひ顔、男爵は稍青ざめてため息する。）

（曲馬團の合奏の樂音、相圖の呼子笛。）

（舞臺廻る）

（三）

曲馬團の大テントの內部、丸太組、上下兩側に高棧敷がかゝつてゐる、中央には圓い置舞臺、カバーのかゝつた獅子檻が引出されてある、正面は樂屋出入口の黑の大揚幕に「東洋大曲馬團」と刺繡した長い彩旗が飾つてある、樂隊の賑やかな合奏。兩の高棧敷の下手にはハッピ着や詰襟の、職工や人夫が數十人ギッシリ詰つて見物してゐる、中に頭らしいのも見える。上手の高棧敷には、家族づれの見物が、一ぱい詰まつてゐる、その前寄りに、椅子に腰をかけて、列んでゐるのは男爵と稗澤とである。

大揚幕の傍には、出方頭や出方が五六人、控へてゐる。

（

（舞臺の上には、道化方が指揮の小旗をふつて、踊り子の群四五歳の小兒の群に、正面向に、列を作らせてゐる。）

道化方　引上げた、引上げた、さア列んだ、列んだ……オイ三番、もつと後へ。

（あべこべに前へ出る。）

道化方　コラ、前後が分らんか、トンマな女郎だ。

（四番が後へ下る。）

道化方　ソレは後ぢやアない、前へ出るんだ。

（五番が前へ出る……混亂……）

道化方　仕方のねえバカ娘どもだなア、お飯は何處へ食べるんか？

（皆、鼻をさす。）

道化方　足は何處に附いてるんだ？

（皆、頭をさす。）

道化方　ありやてんでキ印だ、道理で、親たちが、こゝへ御厄介願つたんだな。

出方頭　汝さんは、そのキ印の大隊長だよ。

道化方　さうか、大隊長なら威張れらア、キ印でも、マ印でも構ふ事アねえや……オイ、しつかりしろ、右へ向け右。

（小旗を打振りつゝ退場、見物席ざわつく、相圖の呼子笛。）

團長（進み出る）御富地皆さま方の御ヒイキにあづかりまして、かく連日の大入、誠に忝く座中一同に代りたゞたゞ、御禮申上ます、さていよ／＼これから當一座の花形ジヤグラー花子が百獸の王たる猛獅子を相手に、神變不思議の藝當を演じまして、皆さま方の御高覽に供します、何しろ相手が、猛獸でございますから、油斷もスキもならない、いゝいゝしんけん生命がけの、血の出る藝當はこれでございます、首尾よく參りますれば春の日ざしに舞ひ出た胡蝶が、牡丹に眠る唐獅子をなぶる一曲とも御目にうつりませう、その節は御手拍子の程願ひ上げます。

（相圖の呼子笛。）

揚幕をわつて、肋骨のついた服を着込んだ花子が靜かに入つて來る、兩棧敷に喝采が起る。）

（團長の妻は、紋附着て、男爵の傍へ行つて挨拶する）

（花子は、見物に一禮し、右手に紅白だんだらの鞭をくる／＼振廻しながら舞臺を一周して、カバーを取拂はれた檻へ近づき行く、檻の鐵格子の間から獅子が毛むくぢやの肢をつき出す、花子はそれにからかひながら、檻を一周する、獅子もくる／＼附いて廻つてゐる。）

（花子は再び正面に直り、こん度はハッと兩手をひろげ、後向に檻へ近づいて反身になつて白い額を鐵格子

のところへ押しつける、獅子は長い舌を出してペロペロと白い額をなめる。）

男爵　（ヂッと見つめてゐたが、俄に起上つて）今日はもうそれで善い檻の中へ飛込むのは止めろ……止めてくれッ……。

（下手の桟敷から、頭らしい一人の男が起つ。）

「何云つてるんだい？　己れ等は木戸錢を拂つて入つてるんだ、貴樣に何ぜそんな權利があるんだ？」

職工の一人　馬鹿にするないッ、あほうめ。

「ありやア男爵だ〳〵」（とつぶやく聲もする）

「男爵でもヒシヤクでも、こゝに入つちやタヾの見物だい、何云つてやがるんだ」

男爵　（興奮した調子）それはよく分つてゐるが、諸君、見給へ、花子の足取がいつもと違つてよつぽどふら〳〵してゐる、それに眼の色もヘンに沈んでゐる、病氣らしい、こんな時にあの檻の中へ飛込んだら、猛獸の餌食になるばかりだ、諸君、見世物も善いが、生命まで取られちや可哀さうぢやアないか？　慘酷ぢやないか、勿論木戸錢は一切、私がお拂戻しする……。

若い職工　木戸錢なんか拂戻さんでも善い、折角日のたのしみに來てるんだよ、己れたちのどんたくは今日許りだ。

醉ッ拂ひの職工　でも、一たいこんなに人間をよ……それもあんた年の若い、美人をよ、猛獸と取ッ組ませて、なぐさみに見てるなんて間違つてる事は、間違つてるぜ。

中年の職工　己れたちだつてまアこの女見た樣なもんさ。

同じ年輩の職工　イヤ、己れたちより、もつと慘澹だよ。

男爵　（叫ぶやうに）花子、今日は汝は何うかしてる……樂屋でもさうだつた、やつぱり調子が狂つてるんだ、止めてくれい、構はん……止めてくれいッ。

園長の妻　御前、大丈夫ですよ、見物衆がわきますから、お止しなさいませッ。

稗澤　男爵、取越苦勞です、さう心配なさる事はありませんよ。

（下手桟敷から、ドッと笑ふ聲が爆發する。）

「さうかい、花子つて、御前さまの思ひものになつてゐんかい、さうかい――」

「毎日お通ひださうだ、お金が有餘つて御閑だからな」

「御全盛、おうらやましいなア」

「チエーだ」

「お茶屋と間違へてやがる」

「やらせろ、やらせろ、藝をやらせろ！」

花子　（舞臺の前へ進み出て）藝人は藝が生命でございます。こゝへ立ちましたら、何方が何んと仰つても、私は藝をやります、一人の御ヒイキ樣よりも、千人の御ヒイ

キ様が、心から有難いのでございます。

（下手棧敷から「えらいぞ――」と大喝采。）

園長（進み出る）藝當中斷して相すみません、あの通り本人は至極しつかりして居りますから御ヒイキ様方、決して御心配なさらぬ樣願ひ上げます、さア始めた／＼。

（喝采、起る。）

（花子、會釋、勇敢に檻の右手の段をかけ上り、サツと口をあけて、飛び込み、ポーズを作る。）

（獅子は暫らく、猫の子の如くぢやれかゝる、鞭を上げ、金の環をさし出して、あちこちとくゞらせる、喝采。）

男爵。（雙眼鏡をあしらひながら）もうそれ位でいゝ……もういゝ、出て來いツ／＼。

園長の妻　大丈夫、圖々しい女ですもの。御心配なさらなくつても……。

稗澤　おかみ、大金がかけてあるんだよ、けがでもさせちや大へンぢやアないか？

園長の妻（小聲で、鋭く）あなた、コンミツションまで取つたんでせう、ひどい人ね？

稗澤（てれながら）バカア云つちや困るよ……失敬な………何しろ、こいつア新聞のいゝ材料だ……いゝ材料だ………。

男爵（焦々して）もうそれ位で善い、藝當はすんだ、立派にすんだ、それから先は危險だ、こつちの生命がちゞみさうだ、檻の中から出て來いツ／＼。

（下手棧敷「又やり出したよ」「バカ野郎――」「ノロマ男爵」。）

（花子は今、檻中に仰臥、獅子はしきりにその上を跨げ廻つてざれてゐる。）

園長　獅子は餌食にざれつく、眞似をして居るのでございます、御目とめて御覽下さい。

（檻中に電氣照明が投げられる。）

男爵（雙眼鏡を當てたり、放したり）ア、花子は小指をかんでゐる、ヘンだ、何うしたんだらう？

園長の妻　エ、一寸と借して下さいませ……ア、ヘンな事をしますね。

園長（腕叉をしながら）いつもと違つてる、何うかしたのかな？

（下手棧敷の方から）「花ちやん／＼、えれえよ」

「膽つ玉の太い女だ」

「ソヨツと恐れ入りましたね」

男爵（叫ぶ）花子、何うしたんだ？　何うしたんだ？　早く出て來んか。（舞臺へかけ出る）

（下手棧敷、ワツ、ワツとどよめく。）

花子（片手を獅子の口に入れたまゝ、顔をピタリと正面の鐵格子に押附け）私はもう息のある中にこゝを出やしませんよ、おまへさんに喰はれるほどなら、獅子に喰はれた方がよつぽどましだ、おまへさんはお金の出し損ね、チョッといゝ氣味だよ。

男爵（頭をかきむしりながら）何んだつて？……汝はやつぱり誤解してゐる、私の氣持はもう異つて來てゐるんだ、心から汝が可愛くなつてゐるんだ……出て來てくれッ、たのむ、出て來てくれ――。

園長の妻（も檻に近づいて）花子、汝は氣が狂つたんだね？

稗澤（手帳を取り出しながら）いゝ材料だ、通信してやらう……いゝ材料だ……。

（園長も檻へ近寄る、出方頭も近寄る。）

（下手桟敷「何うしたんだ／＼……」。）

園長（ハッとして）ヤ、大へん、小指をくひ切つて、血をなめさせてる。

出方頭 コリヤ大ヘンだ、人間の生血を吸つたらあの獅子は本性をむき出しにすらア、コリヤ、大ヘンだ。

花子（悲痛な笑顔）園長、おかみさん、皆の衆左様なら……獅子よりも、私は人間が恐ろしいのよ、この體は大てい汝たちにしやぶられたから、骨丈はなじみの獅子にくれてやるのさホゝゝゝ。

（獅子は、ぱくりと花子の片腕にかみ附く。）

園長 大ヘンだ、……大ヘンだ……。

出方頭（ウロ／＼して）この獅子め、人を喰ひやがつた、大ヘンだ……大ヘンだ。

（場中總立ちになつてワッ／＼騒ぐ、女子供の見物に逃出す。）

道化方（火焔の棒をふり廻しながら、獅子檻に近づく）こん畜生太い奴だ。

（花子、唸る、道化方はひよろ／＼して、尻餅つく。）

男爵（石の如く立つてゐたが）しまつた、獅子を打つならピストルを持つてくるんだつた……喰はれたのはあの女ぢやアない、何んだか己れの心臓のきれはしのやうだぞ、しまつた……。

園長の妻（泣きわめいて）かはいさうに、助からんかいな……。

（暫時、恐ろしい沈默。）

職工の聲一 何うかならんかなア。

職工の聲二 相手が獅子ぢやア仕方がねえや。

職工の聲三 人間つて、つまらんもんぢやなアー。

花子（パッタリと檻中に倒れる、うは言のやうに）汝になら喜んで喰はれてやるよ……汝になら……。

男爵　己は獅子に負けた。
團長　何うもとんだ損害だ。
團長の妻　（ヒステリカルに）何うかならないものかねえ、憎い女でもあんな死ざまをさせちや可はいさうだ、可はいさうだ……。
稗澤　（近づいて）とんだ悲劇になつたもんだ、しかしいい新聞種だ。
出方頭　あの獅子もバラされよう、之で何も彼もお了ひだ。
（電燈が一齊に消える、出方が手に／＼火焔の棒をふつて、檻の周圍を廻ろ、獅子の高い唸り聲……。）
（カーテン）

星亨

第一場

時　明治六年

場所　橫濱稅關

人物　星亨、神鞭知常、栩公使、稅關吏、受附、屬官、其他

○

稅關長室、正面の壁には時計、その左右に大きなガラス窓が明いてゐて、そこには青々とした海の水平線が劃されてゐる、下手には扉、上手の壁には海圖などがかかつて居り、一角に露臺へ通ずるガラス戶がある、露臺の橫には稅關倉庫の赤ぬりの三角形の大屋根が突き出してゐる、その大屋根と稅關の建物との空間には、棕櫚の木の梢が高く聳えて、海の背景を二分してゐる。

○

室內の上手寄には、關長用の卓と椅子、下手の一隅にはやゝ粗末な卓と椅子。

○

幕開くと、二十四歲の稅關長星亨、恰腹のいゝ體に關長の制服、金ぶちの眼鏡、葉卷をくゆらしながら行儀わるく椅子に倚りかゝつて、英書をひろげてゐる、やゝ離れて下手の卓には、略同年配に見える神鞭知常が書類を取りひろげて卷煙草を吹かしてゐる。

神鞭　領事先生、やかましく云つて來てるぢやアないか？一たい、クヰーンていふ字は、女皇か、女王か、どちらが正しい譯語なんだね？

星　（ヂロリと見て）　女王だ……女王でたくさんだよ。

神鞭　公文書に女王と譯されちや世界の大國の權威にかゝはるとでもいふんだね、どちらだつて善ささうなもんだが、毛唐の外交官と來ちやイヤにお高くとまりやがるんだね、……君の氣象ぢやア何處までもこのまゝで押通したいだらう、日ごろ威張りくさつてる奴の頭を折々蹴飛ばしてやるのは、痛快だが、しかし肝腎のあちらの外務省の腰がふら〳〵してるんだから、後が面倒ぢやないだらうか？

星　（薄ら笑ひ）　外務省の腰が齒痒い程ふら〳〵してやがるから、己が代つてガン張つてやるんだ、さういつまで

も毛唐に嘗められちやつてたまるもんかい。

神鞭　そりや僕だつて大賛成だが、しかしあれ丈骨を折つて君を此地位に推薦してくれた人に迷惑をかけるやうな事になりやしないかナ。

星　陸奥にかい、めいわくどころか、あいつも旋毛曲りだからキツと喜ぶだらうよ……一たい、己が斷わるのをあいつ、ムリヤリ勸めるから、イヤ〳〵ながら膝を屈して役人なんかになつてやつたやうなもんだよ、薩長の藩閥出身以外のものは役人になつたつて出世は出來ん、何うせ先きが知れてらア。（葉卷の烟をぷーツと吹く）

神鞭　ウム、それは全くさうだね……德川幕府を倒して、その代りに薩長幕府を立てるなんて實に怪しからんよ、これぢや明治維新も看板倒れだ、お互にこのまゝヂツとして見ちやゐられない、何んとかする責任を痛感するね。

星　（冷靜に）今日はインヂアン號が上海から入つて來る日だよ……もう追々着くだらう。

神鞭　さうだ……あの船こそ脫稅の札附きだ、こん度こそ取ツちめてやるかね？

星　（大きく頷いて）ウム、己は待つてたんだ、……今日こそ思切りやつゝけてやらう。

神鞭　よし、……そいつア愉快だ、……唯、例の外務省が何處までも事勿れ主義のヘナ〳〵腰と來てるから、毛唐の公使なんかに怒鳴り込まれると、一ぺんにペチヤンコだ、折角こゝで骨を折つて上げたやつを有耶無耶に、もみ消すかも知れんぜ、さうなつちや力み損だ、こりや出來る丈問題を大きくして、輿論を呼び起す手段を取るに限るな。

星　ウム、出來る丈大けさにやつつけようよ、古い條約で定めてある海關稅すら碌すつぽ取れないで脫稅品は見逃がしの方針と來ちや、なつちやゐない、毛唐が圖に乘る筈だよ……。

神鞭　こん度こそ日本男子つてものが何んな者だか、毛唐に知らせてやるんだね。

星　（葉卷の烟を吹きながら）ウム、日本だつて無人島ぢやアない、やつぱり稅關があるつて事を知らせてやらうよ。

受付　（扉をノツクして現れる）ハツ……關長に申上ます、唯今、柳公使の屬官の方がお見えになりまして、公使が午後一時出帆のオセアニア號へお乘込なさるについて、急いで小船を出してくれるやうにとの事でございますが……？

星　（冷靜に）それが何うしたといふんだ？

受付　エエ、いつも斯うした場合には、稅關で世話をやいてくれるのが慣例になつてゐると申されまして……。

星　今でも稅關でそんな餘計な事をやつてたんだな？

受付　ハッ……（躊躇しながら）……實は……あの……外國へお行になる政府の高位、高官の御方にはいつも左樣計らつてゐたやうでございますが……。

星　さうか、そんなムダな事務をやつちやゐられんな、斷ツちまへ。

受付（困つたやうな顔色で）　ヘッ……相手は今度イギリスへお行なさる柳公使でございますが……？

星　稅關を新宿と間違へたんだらうから、新宿を敎へて上げろと、關長が云つたと、さう云へッ……。

受付　ハッ。（當惑しながら退場）

神樂　ハ、、屬官の奴、目を白黑させやがるだらう。

星（チョット苦笑）　さうかも知れん、あゝいふ連中は、何うも頭が悪い、至極當り前の事が分つてないんだからな。

神樂　公使閣下もキッと蒸汽釜のやうに頭から湯氣を噴き出すよ。

星　ついでにそいつで航海すりや恰度善いハ、、、。

神星　例のインギアン號の方の手筈は何うするかね？　何時かも話したやうに生ぬるい事をやつちや脫稅品は押へられないし、さればと云つて警察力まで借りちや、アベコベに難癖を附けられるかも知れない。

星　何アに、向ふが白晝公然、悪事を働くんだから、こつちは何んな事をやつたつて正義だよ、目的のためには手段なんか撰ばんでも善い。

神樂　そいつを撰んだ日には、百年經つても彼奴等の悪事は押へられやしない、そりや何んな手段でも構やしないが……。

星　警察力を借りるのはチとまづいかな、他にも思ひ寄はあるのだが、一たいこれは、貴樣が引受けて何か名案を考へておく筈だつたぢやないか？　もう時間も迫つて來るぜ？　あんまり用事もないのに、貴樣をこゝへ傭ひ込んで、月給を當がつてやるのも、こんな時のお役に立たせるためだよ。

神樂（苦笑）　ひどい事を云やがる、……だが飛離れた名案といふやうなものも浮ばないよ、まア何時か話し合つたやうな事をやるんだなア。

（扉をたゝく音、受附に案內されて、容體ぶつた屬官が入つて來る。）

受附　關長の仰る通り申傳へましたところ、何かの間違ひであらう、自分で直接、御目にかゝつて、お話がなされたいさうでございますから。（一禮して退場）

星（默つて屬官へ見る）

屬官（氣取つた咳拂ひ、徐々に進み出て）　貴方が長官で

すか？
星　はア……何か御用ですか？
屬官　もう御承知の筈ですが、何なら改めて申ませう。このたび、柳公使が畏くも大命を蒙つて、イギリスへ御越しなされるので、今日午後一時出帆のオセアニア號へ御乘込みの爲めに、こちらへお見えになつて唯今御休憩中です、それで、こゝから本船まで小船を出す用意をするやうに御申附です、早速、左様に取計らつて下さい。
星　あなた、間違へてるんだ、それなら船宿を教へるやうに、受附の者に云つて置いたから、行つて聞いたら善いでせう。
屬官　（ムツとして）これは怪しからん……こんな場合に、これ位な事は今まで稅關でズツとやつて來てゐます、……まして外ならぬ柳公使が畏くも大命を蒙つて、イギリスへ……。
星　（言葉を遮つて）はア、分つてゐます、分つてゐます、まことに御苦勞です、……それで小舟の御用意なら船宿へ御案内させようていふんです。
屬官　（焦々した口調）君は、何うかしてるんですか？　その用意は、稅關でやるのがこれまでの仕來りです、一たい、君は何時頃からこゝへ來たんですか？　失禮な事を云つちやタメになりませんぞツ。
星　仕來りならそれが間違つてたんだ……稅關の仕事はあり過ぎる程あるんだから、船宿の營業なんかよけいな事をやるのは、今後改めさせなけやいけないんでね……。
屬官　柳公使ですぞ……柳公使ですぞ……君はこの御方の高貴な御身分を知らないんですか？　小船一つ出すぐらゐ何んでもないぢやないか？
星　（平氣な調子で）どなたでも同んなじだ。
屬官　（愈々焦れて）そんな失禮な事を云つて、この職務が勤まると思ふんですか？　今の一言をそのまゝ公使閣下へ復命したら何んな結果になるか分つてゐますか？
星　（葉卷を手にしたまゝ）さう云つて復命したら善いでせう……それとも船宿へ行くなと、御隨意に。
屬官　（ぶる／＼唇を慄はせ）失禮な……失禮千萬な……覺えて居るが善いツ……（プリ／＼して扉をパタリとしめて退場）
神鞭　（吹き出しさうになつて、口を押へ）この富樫にかかつちやかなはないね、これぢや、判官もカタ無しだハハ、、。
星　そりや何の洒落だい？
神鞭　謠曲の一くさりぐらゐ習つちや何うだ？
星　そんな閑があつたら英書を讀まア、お互にノンキな時代ぢやないぜ。

紳士　だが君のやうに、あんまり一本調子でも困るよ、已は啃みに謡曲をポツ〳〵始めてゐる、仲々愉快だよ。

星　止せよ、近頃は、用の無い公卿さんや、沒落しかゝつた士族仲間で大分流行つてるらしいがありや正に亡國の聲だよ……、我々はこの國家を興す爲めに、死身になつてやらなけやならん仕事が澤山あるんだ、オヽ、インヂアン號がもうやつて來るぜ。

紳士　先刻、云ひかけて、邪魔が入つたが、いつか話した例の非常手段を取つちや何うだらう。（起上つて傍らに寄り小聲でさゝやく）

星　ウム……ウム……あれか……ウム……（領いてゐる）

（扉にノックの音、受附、周章しく入つて來る。）

受付　柳公使閣下が、御自身でお越しになりました。

星　さうか？（輕く領づく）

（柳公使、先きの屬官を始め四五人の從者を連れて、昂然として入つて來る。）

屬官　公使閣下が御自分で御越しになつた、出帆の時刻もダン〳〵詰つて來たから、彼是云はず卽刻、小舟を出したら善からう。

星　（默つて、立つて一禮する）

柳　君が稅關長か？

星　はア……何か御用ですか？

柳　（ピリヽと顏面神經を緊張させる）用事は分つてる筈だ……オセアニア號へ乘込まれるやうに手筈をしてくれ、もう時間が無くなる。

屬官　早くしてくれ給へ、閣下も御心せきだ。

從者　すぐ出す事にせんけりや乘おくれたらそれこそ大へんだ、……オヽもう半時間しかない……（ガヤ〳〵つぶやく）

星　（冷靜に）こゝは稅關ですから、そんな御世話は出來ません……度々斷つた事ですから御承知の筈ですが……。

柳　（壓し附けるやうに）これまでいつもこの稅關でやつてた事だ、君は心得てゐなかつたんだらう、何しろ急ぐんだから、小艀を出せッ。

星　稅關でそんな仕事をするのは間違つてゐます。外務省でも間違つた仕事をさせちやいけない筈です。

屬官　まだグヅ〳〵理窟を云つてるんか？　この火急の場合に不埒ぢやないか。

柳　君は默つて居れッ……出帆時間がもう迫つて來るんぢや、早くしてくれ、……僞が命令する。

星　そんな命令は船宿でなさつたが善いでせう……その方へ御案内させませう。

柳　（興奮した顏色）これ丈云つても汝には分らんのか？僞は苟くも大命を稟つて、イギリス國へ赴任するんぢや、

萬一、この船に乘遲れでもしたら、相濟まん事になる、即刻、小船の用意をせいッ。
星 （冷靜に） 閣下は大命を受けてゐられませうが、本官へは閣下をオセアニア號へ送り屆けろといふ大命が別に下つてはゐませんから、稅關で、閣下の命令を受けるわけにはまゐりません、お氣の毒ですが致し方がないのです。
柳 （沈默、相手を睨んでゐる）
星 （沈默）
屬官 （ウロ〳〵して） 公使閣下の御命令をきかんのか？
（沖合でボーと汽笛が鳴る、大時計の振錘の音が耳立つ。）
柳 （窓の方をのぞき込んで） コリヤグヅ〳〵しちや居れん……君、たのむよ。（弱つた調子て） 便宜を計つてくれ給へ、乘り外づしちや大へんだ……君、賴むよ。
星 お賴みなんですか？ さうですか？
柳 （額の汗を拭いて） ア、何卒、便宜を計つてくれ給へ……賴むよ。
星 （氣輕な調子） お賴みなら何んとかしませう。……オイ、君、直ぐに誰か呼んでくれ。
神鞭 ハッ……（と扉をあけて） 關長がお呼びだ、誰でも早く來てくれッ。

（稅關吏が二三人バタ〳〵と驅けて來て、顏をならべる） 御用ですか？……。
星 （口早な調子て） ア、早舟を一つ、直ぐ出すんだ、直ぐ……公使閣下がオセアニア號へお乘込みだ……いゝか？ 直ぐだぜ。
稅關吏 はッ……。
星 大急ぎだ、大急ぎだ、間に合はせんといかんぞ……。
（稅關吏、忙しくかけて行く。）
星 何卒、直ぐあちらへ入らして下さい……大丈夫、間に合はないやうなヘマはやらせませんから……。
柳 何うも御心配かけたな。
星 イヤ、何うしまして。（と一行を送つて行く）
神鞭 （雙眼鏡を持出しながら） 大急ぎだ、大急ぎだはよかつたなア、星つて奴はまるで小兒のやうな大人だ……イヤ大人のやうな小兒かな……（この時、又汽笛が太い、長い音をひゞかせる、神鞭は、雙眼鏡を持つて露臺へ出て、沖の方を眺める）
星 （入つて來て、苦笑しながら卓によりかゝる）
神鞭 （改まつた調子て、ガラス戸越しに） 關長、インヂアン號が入つて來たらしいです。
星 （露臺へ出て來る） さうか……（雙眼鏡を取る）
神鞭 あの防波堤のずつと向ふに、黑い烟の見えるのがそ

れらしい。

星　ウム……たしかにさうだ……はゝア、こちらには公使一行がやつて行きよるぜ、みんなすました面をしてやがる。

神鞭　大分手きびしかつたね、何うなる事かと思つたが、向ふが折れて出たんで、うまくケリがついてよかつたよ。

星　頼まれや越後からでも来つきに来るつていふからなハ、、、、。

神鞭　公使閣下もチヨツト青くなつたやうだぜ……。

星　自由平等の實地教訓だ……ア、こん度はインヂアン號の番だぜ……今日こそ免すもんか？

神鞭　でね……。（と小聲でさゝやく）

星　ウム、よからう……チツと村芝居じみるが……よろしい、早速、家の書生を呼ばう……。

神鞭　我々は知らん顔をしてるんだよ。

星　ウム……そりや勿論さ。（頷く）

（汽笛が一しきり鳴り出す、遠くで「柳公使萬歳」の聲。）

（廻り舞臺、又は暗轉）

第　二　場

場　所

横濱波止場の一角

人　物

波止場人足、菓子賣の支那人ボーイ、書生、税關吏、その他大勢。

（一）

棧橋にかゝつた蒸汽船の黒と赤に塗り分けられた船腹の一部が見えてゐる、一方には積荷がある、棧橋につづく廣場に、波止場人足が群れてゐる、ザンギリ頭や、チヨン髷や、拾つて來たやうな古帽子を阿彌陀に冠つたのもある。中には馬の腹掛の洗つたのを着てゐたり、糠袋で睾丸を包んだのも交つてゐるが、大てい三人、五人が思ひ／＼に塊り合つて、土の上で手なぐさみをやつてゐる。船へ物賣りに行つた支那人ボーイが、箱をかゝへて棧橋を通りかゝる。

波止場人足の一。オイちやんころ、何か菓子あるか、見せな？

波止場人足の二　もう午過だらうな？　オイ、肉まんぢゆうか何かあるかい？

支那ボーイ　ない、ない。（首をふる）

波止場人足の三　コラ、ちよいと來いつていふに、……いふ事を聽かねえか？

支那ボーイ　もう皆賣れた、ない、ない……。

波止場人足の四　嘘を吐くとひどいぞ、賣殘りがある筈だ。

波止場人足の一　汝も商賣ぢやねえか、見せろて云ふやア見せろ。

支那ボーイ　汝たち、錢ない、品物たゞ取りする、ペケペケ。（と逃げかける）

波止場人足等　何んだと？……このちやんころめツ？（パラ〳〵と惣立ちにかゝつて、支那人ボーイを毆る、蹴る、菓子箱はひつくり返され、無數の黑い手が、奪ひ合する、支那人ボーイは悲鳴を上げる）

（一人の書生が來かゝつて、叱り附けるやうな大聲を出す。）

書生　オイ、コラ……何をするツ？

支那ボーイ　旦那、助けてくれ……こゝの人足、いつもよくない事をする……泥棒ある。

（波止場人足等は狼狽へて、ちり〳〵になる。）

書生　何に、泥棒だ？　日本人を泥棒呼ばゝりするのはケシからんぞ。

支那ボーイ　菓子たゞ取る、錢くれん、泥棒ある。

書生　菓子をいくら取つたんだい？

支那ボーイ　賣殘りの菓子、皆取つて行つた。

書生　（銀貨を箱へ投入れ）あア菓子代だ、それでいゝだらう。

支那ボーイ　難有う、難有う、……私助かる、難有う……

（叩頭しつゝ、小足早にかけ去る）

書生　（苦笑、人足等を手招ぎする、一人二人、寄つて來る）君たちは、チト惡戲がひど過ぎるよ……こゝらに頭はゐないのか？

波止場人足の一　（進み出で）へイ……何處の旦那だか知らねえが、只今はお庇で御馳走さまに成りまして、難有うござえます、……實はおあしは、これから稼いで賃金が手に入つてから拂うてやるつもりでござえましたんで……。

波止場人足の二　何うも相すみません、……警察の旦那なら、何卒この度だけは御見のがしをお願ひ申します、これからはキツと皆、氣を附けます。

書生　イヤ、僕はそんなものぢやアない、チト君たちに賴みたい事があつて、頭に逢ひたいのだ。

波止場人足の一　へヱ、左樣でござえますか？　役割は今こゝに居りませんが、手前がその代りをやつて居ります、何んな御用事でござえませう？

書生　君等の仲間に、何時この波止場を逃げ出しても構はんやうな獨身者がゐるだらう、それも成るべく腕ツ節の強い、頑丈に出來てる奴が善いんだ。

波止場人足の一　へヱ……そんな奴はいくらでも居るには

居りますが、それを何うなさらうていふんです？

書生　そんなものを二十人許り集めてくれ、用事はそれから頼むんだ、儲け仕事だよ。

波止場人足の一　へヱ、儲かりますかな、ぢやア善うがす、早速集めませう。

書生　そして、あそこの積荷の蔭へ連れて來てくれ。（自分で、その方角へ動いて行つて、しやがんでゐる。）

（波止場人足の一は、あちら、こちらで仲間の者とひそひそさゝやき合ひ、やがて人數を集めて書生の傍へ寄つてゆく。）

波止場人足の一　へイ、旦那こいつ等アみんな宿無しでござえます、御用の筋を仰つて下せえ。

書生　ア、御苦勞だつた、實は内密の頼みだが（云ひ〳〵財布からザラ〳〵と銀貨をぶちまけて）さア、これを一頭へ一兩づゝ分けてやつてくれい、手附けだ。

波止場人足の一　へイ……これを分けるんですか？（躊躇してゐると、あちこちからウヨ〳〵黒い手が出るので、怒鳴り附けてないて、分配する）

書生　外でもないが、先刻インヂアン號が上海から入つて來たな、今に荷揚げをやるだらうが、あれは何時も寶石類だの、貴金屬だの、毛織物にしても價の高い上等の品物ばかり積込んで來ちや公然に脱税をやつてゐる、君等もそれを手傳つてるだらう？

波止場人足一　ハイ……何しろ此方もそこが附け目で、仲間の奴等も情女がやつて來るやうにあの船を待ちこがれてるのでごぜえますよ、ふだんは一日働いて、なか〳〵天保十枚か十五枚、一晝夜ブッ通しが、やつと二十五枚くらゐにしか附きやせんからやり切れません。ところが脱税品と來りやその二倍にも、三倍にもなるんで、皆助かりまさア。

波止場人足の二　全くでござえますよ、偶には、あんなうまい事に有附かなけや、ぢごくも買へませんでねへ、、、。

書生　ところが、その脱税品が、つもりつもつて見ると、國の爲に年々何十萬、何百萬つて莫大な損害になつてるんだ、第一、日本をバカにして、條約なんかてんで踏附けてるんだからこの國の面目も何もメチヤ〳〵なんだ、君等も口惜しいとは思はないか？

波止場人足の一　（苦笑）へ、、さう仰りやまアそんなものでござえますが、こちとらは何しろ、其日ぐらしの、しがない人足でござえますでな。

波止場人足の二　百でも、賃銀の餘計な方が難有いんでさア。

人足大勢　……全くだよ……。

書生　ウム、君等の身になつちや、さう考へるのも萬更無

理とは云へないが、まアこの場合だ、一つ國の爲めに働いてくれんか？　六ツかしい事ぢやアない、君等が脫稅品を商館の倉庫へ運び込むのを、今日はチヨツと方角をかへて、稅關の倉庫へドン／＼持込んでくれりや善いんだ、今の一兩は手附けだ、うまく行きや又三兩や五兩は出せる、その上、當分こゝを逃出しても直ぐに困らんやうな處置は附けて貰つてやる、何うだ？　やつてくれるか？

波止場人足の一　何うだ？　兄弟？……。

同の二　さうさなア、さう一時にどつさりお金を數くのは、難有いには難有いが、何んだか後がこはいなア。

同の三　ウム、チツと話がうま過ぎるぜ。

波止場人足の一　旦那は稅關から云附かつて來たんだね？

書生　さうだ、これは極々內分だから、決して他言しちやならんが、こん度の稅關長がなか／＼やかましい人で、斯うした思切つた事をやつゝけようていふんだ、で、若し君等が素直に云ふ事を聽かなけりや、その一兩は取上げるし、脫稅品屋の合棒と認めて、早速この波止場から追ツ拂はれるんだが、それでも善いかね？

波止場人足の一　そいつア困りまさア……何うだ、兄弟思切つてやつゝけようか。

波止場人足の二　エ、エ、やつつけようよ……かうしてピカピカする一兩の顏を見ちや頭は振られねえやな。

同の三　さうだ／＼、國の爲めだつて云やア猶更だ。

同の四　己れたちだつて日本男子だぜ。

同の五　ウム、見すぼらしいが、これでも日本男子だハヽ、ヽ。

書生　（滿足さうに）ウム、皆、思切つてやつてくれい。

波止場人足の一　だが旦那、荷物を運ぶ時は、毛唐の番頭めらが、碧い眼玉を光らして、附切つてゐますぜ。

書生　そんな奴は、ぶんなぐつて了へツ。

波止場人足の二　後で別條ありませんか？

書生　何アに、構ふもんか、泥棒仲間だからな、邪魔すりや、海ン中へたゝき込んでやれ、だが成るべく負傷はさせたくないな、殺しちや愈々面倒だから、そこらは手加減をしてやつてくれ。

波止場人足等　さうしたお許しが出たら喜んでやつゝけますよ。

同上　喧嘩なら皆ヒケは取りませんや。

書生　だが、手筈をちがへて、ヘマな事をするなよ。

波止場人足の一　それは手前が心得てゐまさア、……棒の先へ赤い小ぎれを附けて、ふり廻はすのを合圖に、やつつけませう、……兄弟、いゝかい？

（波止場人足等、領き合ふ。）

書生　よし、話はきまつた、仕事がすんだら稅關の倉庫の、

裏手の小屋へそーッと集まつてくれ……僕はそこで待つてよう……ぢやア頼んだぜ。（ト立去る）

（波止場人足等は、後影を見送つて、さゝやく。）

○　面白い仕事が舞ひ込んだな。

○　（銀貨をいぢりながら）化かされたんぢやアあるめえな……こんなものは始めて握つて見た。

波止場人足の一　あそこで旗を振つて番頭さんが相圖をしてらア、棧橋へ行かうよ。（ゾロ／＼出かける）

（沖合で汽笛が鳴る。）

（棧橋の上を、日本人、西洋人、支那人のさま／＼な風俗をした乘客の群が入り亂れて通る、その間を縫つて忙しく手荷物が運ばれる。）

（棧橋の人通りが稀れになつた頃、先刻の波止場人足等が、そこにかゝつてゐる汽船の蔭から一つ、一つ、荷物を運び上げて、上手へ行きかけ、急に方角をかへて、下手へ向く、西洋人番頭Aが飛び出し「シー、シー」と上手をさす、知らぬ風をして行きかける、番頭は大股に走りかゝつて、いきなり人足の腰を蹴る、つゞいて、他の人足も、荷物を下手へ運びかける、番頭が飛びかゝつて、突き飛ばす。）

（波止場人足の一が、合圖の棒の赤い小切れをふる、手あきの人足が、番頭等になぐりかゝる、亂鬪が始まる、その中に人足等は番頭たちを棧橋から海へ投込んで、一さんに荷物を下手へ運び、そのまゝ姿を消して了ふ。稅關のボートが、づぶ濡れになつた番頭等を救ひ上げ、棧橋へ押し上げる。）

稅關吏甲　お負傷はなかつたですか？

番頭A　有難う、有難う……危いところでした、おかげ—命助かりました。

稅關吏乙　とんだ災難でしたな。

番頭B　有難う、有難う……亂暴者、困ります……大切な荷物、何うしましたか。

稅關吏甲　それは稅關の方に預つてあるでせうから、一緒に行きませう。

番頭A　有難う、有難う……。

稅關吏乙　さア、君も一しよに行きませう。

番頭B　何うも難有う……難有う……。

（連れ行く。）

第三場

場所

再び稅關々長室

人物

星亨、西洋人番頭A、B、バーク公使、A國領

事、B國領事、その他、第一場の人物大勢

○

神鞭知常は、雙眼鏡を手にして露臺に立ち、沖合を眺めてゐる、星亨は室内に、稅關吏甲、乙と對座してゐる。

稅關吏甲　脫稅品はすつかり運び込ませまして、何處が出先で何處々々の商館へ入るのか、一々調べ上げました。この通りでございます。（手帳を出す）

星（見て）フム……これでよし……御苦勞。

稅關吏乙　向ふは、一々荷物と引合せてすぐ渡してもらへるものと蟲のいゝ事を考へたのでせう、こちらの問ふのを待ちかねたやうに、何も彼も、ベラ〱と喋舌つて了ひました、スッカリ泥を吐いたわけです。

星（微笑）はア、さうか……づう〱しい奴等だ……オイ、神鞭……。

神鞭（入つて來る）用事かね？　荷揚はもうスッカリ濟んだやうだ、他に胡散臭いのは見當らない。

稅關吏甲　こん度はうまく行きました。

星　考へ通りに行つたやうだ、……神鞭君、早速脫稅品の目錄を書き上げて、沒收公賣の處分に附する旨の掲示をやつてくれ。

神鞭　はア……愉快だ……。

稅關吏甲　番頭どもは何うしませう？　沒收公賣の處分の事を申渡しませうか。

星　こゝへ連れて來い。

（稅關吏、甲乙、退場。）

神鞭（文案を書きながら）こいつを見たら領事どもが眼を逆さに吊つて、怒鳴り込むだらう、彼奴等に取つちや、波止場に海嘯が立つたやうな出來事だからな。

星　ウフ、、、、。

神鞭　外務省もやつぱり海嘯をかぶつたやうな大騷をするだらう、寺山先生、眼を廻はして、引ツくりかへらなけや善いが……。

星　ウフ、、、、、。

（扉あいて、稅關吏甲乙に導かれ西洋人番頭、A、Bが入つて來る、チョッと叩頭する。）

星（葉卷の烟を吹きながら）ア、君たちは濡鼠だね、風邪を引きやしないか？

番頭A　かまひません……荷物の事片附いたらすぐ歸つて着かへします、何卒早く引渡す手つゞきして下さい。

同B　ひどい目にあひました……海の水呑みました、鹽辛い……鹽辛い……。

星　お氣の毒だつた……でもまア助かつて善かつた……。

神鞭　折りよく稅關の船が廻合せてゐたもんだ、君たちも

命拾ひをした。

税關吏甲　運が善かつたのです。

番頭A　有難う……有難う……御禮は何度云つても云ひ足りません……。

同B　お蔭で命助かりました……それは私たち忘れません。

星　負傷(けが)もなかつたんだね？

番頭A　ハイ、負傷しません、たゞ少し肱を摩りむきました、棧橋へ這ひ上らうとしましたんで……。

同B　私、腕の筋が少し痛みますが、大した事ありません。

星　まア善かつた……善かつた。

番頭A　あの荷物直ぐ引渡してくれますか。

同B　人夫傭うて、引取つてよろしいですね？

星　荷物？　ア、あれか……あれは税關の鑑査を受けない脫税品たから、あのまゝ引渡す事はならん、君等は歸してやる。

番頭A　エ……脫税品？

同B　それ困ります……税金出しますから引渡して下さい。

番頭A　これまでこゝの税關、そんなムチヤな事、しません……。

星　（冷笑）これまで税關が脫税品を見て見ぬふりをしたのが間違つてるんだ、吾輩は條約の文面通りビシ／＼處置するからさう心得てもらはう。

番頭A　それ困ります……貴方そんな事するなら領事へ訴へます。

同B　領事からかけ合うたら、タヾですみません、何かヘンです、税關の役人、キツと波止場人足けしかけました。

星　（相不變葉卷をくゆらせながら）そんな馬鹿な事はない、……領事でも何でもやつて來るが善い、吾輩がよく云つて聞かせる事があるから……。

番頭A　（急に哀願的に）あなた、こん度だけ許して下さい。

同B　高い金出して、仕入れた品物許りであります……税金いくらでも拂ひますから……。

星　いけない、今更税金を拂ふなんて云出したところで仕方がない。高い品物なら始めから鑑査を受ければ善いんだ、以後よく氣を附ける事だ。

番頭A　以後氣を附けます、この度だけ何卒見のがして下さい、お願ひします。

同B　お願ひします。

星　いけないツ、……もう歸ツたら善いだらう。

税關吏甲　さア歸れ、歸れツ。

同乙　歸れ、歸れッ。

（番頭A、B、怨めしさうな表情で、稅關吏甲乙に脊から押されながらスゴ〱と退場。）

神鞭　ハヽヽ、これで何年ぶりかの鬱忿が晴れた……ア、早速掲示させて來よう。（と出て行く）

（星亭は、葉卷の烟を輪に吹きつゝ、愉快さうに室内を歩き廻る。）

稅關吏甲　（入つて來る）　階下でブツ〱云つてゐましたが、たうとう追歸してやりました、皆が同謀でやつた事だから、領事から手きびしく掛合せて、今に一匹々々東洋の黄猿の面の皮を引ンむいてやるなんて、ひどい惡たいを吐いて行きました、よつ程口惜しかつたのでせう。

星　（苦笑）　東洋の黄猿だつて？……フーン？

稅關吏甲　一たい今まで稅關のやり口があんまり手ぬるくつて、毛唐て云やア始めから一目も二目もおいてかゝつたのだから、彼奴等を增長させ切つたのですよ、こん度こそ胸がすーつとしました。

星　面の黄ろい猿だつて、面の白い猿より智慧が足らんとは限らない、今にもつと懲りさせてやるからさう思へッ。

稅關吏甲　もうこれからはメツタに脫稅なんかやらせません、この手でドシ〱やつゝけてやります。

星　身分に高下はあつても、人間の本當の値打は、割り當てられた職務を正當に行つてゐるか、何うかできまるんだよ、條約を反古にされても、毛唐を怖がつて默りこくつてる大臣なんかより、脫稅品なんかドシ〱取つちめる稅關吏の方がよつ程えらいんだ、これからは勉强するんだね。

稅關吏甲　ハイ、御指圖を受けて大いにやります、皆もさう云つてるんです、こん度の稅關長は、お年は若いが實にキビ〱して氣持が善い、こんな長官の下で働くのは働甲斐があるつて……お世辭ではございません。

星　さうかい……さうだらう。

神鞭　（扉をあけて）　領事がお揃ひでやつて來た……。

星　ハ、ア、やつて來たか？　通してくれ。

稅關吏甲　はッ……。（退場）

神鞭　先生方、血相をかへてゐるよ。

星　白猿が赤猿になつて來たのだらうハヽヽヽ。

（A國領事とB國領事とが連れ立つて入つて來る、近づいて手をさし出す、星、握手する。）

星　まアお掛けなさい。

A國領事　難有う……實はバーク公使があなたにお談したい事があつて、今にこゝへ見えますが、よろしく云つてくれと云はれました。

星　さうですか？　バーク公使が？

B國領事　私たちが來たのは外の用事です……今日、上海から入つたインヂアン號の荷物の件です……わたしたちの國の商人、皆、困つてゐますから何卒返してやつて下さい。

A國領事　バーク公使も大へん心配してをられました、これが國と國との表向きのかけ合ひになると至極面倒くさい事になる、日本のためにもよろしくないから、此度は默つて引渡す事にして下さい、その方がお互によろしいでせう。

B國領事　何卒さう計らうて下さい、勿論相當の稅金は拂はせます。

星　ア、あれですか、あれなら前の揭示場を見て下さい、條約の文面通り沒收處分に附して公賣する公告が出てゐます。

A國領事　エ……沒收……公賣……それはひどいです……無法です……早速取消して下さい。

B國領事　商人たちが惡意あつてやつたのではありません、全く不注意だつたのですから、沒收はやめて下さい、……罰金を納めさせます。

星　いけません、脫稅をやつて、見顯はされた後で、稅金を納めるからと云つても、許される筈はないでせう、國を換へて御覽なさい、日本人があなた方の國へ行つて脫稅をやつた場合、後で稅金を納めたら稅關でその荷物を滿足に引渡してくれますか？

B國領事　それ理窟です……あの商人たちが見す／＼大損するのが氣の毒ですから、私、あなたに察していたゞきたいのです。

A國領事　こんな事件、度々起ると、貿易商館は片ッ端から破產します、皆逃げて歸ります、この港もさびしい昔の田舍の漁師町になります、日本のためにもよくない事です。

星　（苦笑）商人たちが大損する前に、日本は今日までの脫稅でいくら大損させられてるか分りません、關稅を納めないで密輸入をやつてるやうな不正な商人は、一人不殘追ッ拂つてやりたいくらゐです。

A國領事　（ムッとして）あなたが脫稅品を押へるなら、正當な手續で押へたがよろしい、あの無賴漢人足あなたが云附けたに違ひない。

B國領事　この事、外務省へ談判します、あなた、それでよろしいか？

星　吾輩は知らない、何うなと勝手にしたがよからう、沒收した物品は明日までに公賣する……たゞそれ丈けです。

A國領事　あなた頑固です。

B國領事　あなた強情です。
星　何んと云つてもダメです、もうお歸んなさい。
A國領事　失敬です。
B國領事　禮儀知りません。
受附　（扉口(ドアから)に現れ）バーク公使が、お目にかゝりたいと云つてゐられます……それから領事さんを一寸呼んでくれと仰います……。
A國領事　さうか……。
星　サア、サア、こゝへ通してくれ。
（受附、領事二人は退場。）
星　バカヤローハ、、、。
神鞭　こん度はバーク公使と來たか、チョッと手ごはいぜ、今のバカヤローどもたア違ふだらう。
星　ウン……こん度は大バカヤローだ。
神鞭　さうかも知れないハ、、、、。
（扉、ノックされる、神鞭、迎へに出て、バーク公使を招じ入れる、公使は鼻眼鏡を光らせ、傲慢な態度でノソノソ入つて來る、神鞭はそのまゝ退場。）
バーク公使　（手をさし出し）今日は……。
星　（握手）今日は……。
バーク公使　私、今日、柳公使お見送りしました、ついでに思ひ出してこゝへ立寄りました、外の用事ではありません、あのクキーンの譯語の間違ひです、あれ直して、更めて出して下さい。
星　ア、あれですか？　間違つてはゐません。
バーク公使　イヤ、女王といふ譯語間違ひです、女皇です、……女の皇帝ですから、女皇が正しいのです、でなければ不敬に當ります。
星　エンプレスなら女皇ですが、クキーンに女皇といふ譯語はありません、女王で善いのです、あなたが考へ違ひなさつてるんです。
バーク公使　イヤ、女の天子ですからやつぱり女皇です。
星　あなたは日本語がよく分つてゐないのです、勿論英語ならあなたは間違つた事を云ひますまいが、日本語の事は、日本人の吾輩があなたなんかよりずつとよく知つてゐます、日本語に譯した文字の事をあなたからかれこれ云はれる道理はありません。
バーク公使　（ダンダン興奮した調子になる）でも、女王は、女皇より一段、位が下るのです、私よく知つてゐます。
星　ではクキーンといふ文字を使はないで、エンプレスに改めるやう、本國へお掛合ひになつたら何うですか？
バーク公使　いらぬ御世話です。
星　おやア譯語の事もいらぬ御世話です。

バーク公使（顏色をかへ卓をドンとたゝく）ケシからん……我國の王室に對する不敬だ。

星　不敬ぢやアない、あたり前の事を云つてるんだ。

バーク公使　……君ぢや分らんから、外務省へ直接談判するッ。

星　御隨意に……

バーク公使（憤々して起上つたが、又立戻つて……）ア……話は別だが、領事から聞けば、今日、インヂアン號の貨物を陸揚する時、稅關では無賴漢人足を手先に使つて、番頭へ喧嘩を吹きかけ、打つ、なぐる、しまひには海へ投げ込んだり、ひどい、ひどい事をやつた、その隙に、貨物を稅關へ持込ませて、脫稅品でもないものを、脫稅だとケチつけて、沒收したといふ事だが、不都合千萬ではないですか？　重大な國際問題を起さぬ中に、早速返したら何うです、今なら默つて居る事にしませう。

星　その事なら當方に手落はありません。

バーク公使　脫稅品なら、何故、あなたは正當の手續で差押へなかつたのですか？

星　正當の手續をしてゐます、不正な手續をやつちやゐません。

バーク公使　イヤ、違ひます、何故、無賴漢人足に亂暴を働かせましたか？　泥棒、强盜見たやうな眞似をさせましたか？

星（葉卷の烟を吹いて）そんな事は一向知りません、荷主と、人足とひどい喧嘩をやつたといふ事は聞きましたが、それは每日のやうにやつてるんだから、珍らしくもないんです……尤も海へ投込まれた者は折よく稅關のボートが行合せて、助けたさうで、生命に別狀がなかつたのを何より悅んでゐるんです。

バーク公使（睨み付けて）あなたが何と云つても、私、稅關の役人がやつた事と認めます。

星　では、何んといふ役人がやつたのか、姓名を云つて下さい、稅關の役人は制服を着けてゐます、裸體で荷運びはやつてゐないから、役人は役人、人足は人足と見分がつく筈ですが……。

バーク公使（焦慮つて）稅關役人と人足と相談してやりました、分つてゐます。

星　では何處で相談してやつたか、あなた御存じですか？

バーク公使（怒氣を含んだ口調）もう〳〵、あなたとかけ合ひしません、クヰーンの譯語でも我國を馬鹿にしました、こん度もあなた、我國を馬鹿にした……もう相手に出來ない、外務省へ行つて、嚴重に談判する……。

星　御勝手になさるがよろしい。

バーク公使　あの貨物は、それまで處分する事出來ません。

星　明日、公賣してしまひます。

バーク公使　（哮る如く）日本役人泥棒だ……大泥棒……。

星　（棒となる）何んだ……も一度云つて見ろ。

バーク公使　日本役人、大泥棒……。

星　無禮な事を云ふかッ。（横面をなぐり附ける

（扉があいて、神鞭始め五六人の稅關吏がドヤ／＼入つて來る。）

バーク公使　なぐりました？　承知出來ん……。

神鞭　まア／＼怒つちやいけません。

（押し返し、もみ返し、公使はそこへ引倒される、皆でなぐつたり蹴たりする。）

バーク公使　……何するあります……何するあります。

（領事等がかけ込んで、バーク公使を助け出さうとして、又なぐり合ひが始まる。）

星　（傍に立つて見ながら）けがをさせちやいかんよ……これで己も役人のやめ時かハヽヽヽヽヽ。

（混亂の中にカーテン）

第四場

時　明治十七年九月

場所　新潟、西堀通、不動院、……自由黨北陸大會

人物　星亨、加藤平次郎、その他辯士、幹事、有志者、壯士、警部、巡査

傍聽者は、舞臺の上にも、又觀客席の一隅にも陣取る。

○

內外の拍手の音につれて幕開く、正面は本堂內陣の黑光りする大柱から大柱の間を縫うて幕が張通してある、一方には、辯士の稻垣示、廣瀨鎭三、南磯一郞、野崎榮太郞、寺島正節、小塚義太郞、安東和風、鱸信行、杉山重儀、森山信一、山際八司、高岡忠郷、大竹貫次、加藤平次郎等の名前の上に、それ／＼演題を書出した細長い紙が、旗のやうに列べて貼つてある、そして最後のところに「政治の界限……バリストル、星亨」と揭げてある。

一段高い演壇の、赤の布片をかけた卓の背後には、古びた二枚折の銀屏風が立てゝある。

幹事　（演壇の下手に立つて）……エ、これからこの度北越七州大會の爲めに、東京の自由黨本部から特派されて來られましたバリストル、星亨先生の御演說があります、星亨先生は諸君、御承知の如く、長らく英國に留學されまして歸朝後、司法省代言人の職務に從事せられ、その

學識と辯舌とを以て、嘖々たる名聲を天下に轟かせてゐられますが、自由黨に加盟せられて以來、萬事を抛つて非常に熱心に黨のため又國家の前途のために盡力してゐられるのは、我々一同感謝に堪へないところであります、これから御演說がありますから御謹聽を願ひます。

（拍手、大喝采、星亭萬歲の聲のどよめきの中に、金緣の眼鏡、便々たる太鼓腹の目立つフロックコート姿で星亭が悠々と演壇に現れる。）

（臨監の警部、數名の巡査は、上手の椅子に倚りかゝり、手帳をひろげて筆記の用意をしてゐる、席上の、辯士、有志者、壯士たちも息を呑んで耳傾ける。）

星　諸君、我輩の演題はこゝに掲げてある通り「政治の限界」といふのである、簡單にいへばあらゆる物事には限界――限りがあるもので、政治もやはりその通りに限界――限りがある、決して限りなく萬能なものではない、イヤ、誤つて萬能だなどと妄想して、何にも彼にも手出をし、いらぬお節介をやき過ぎると、それこそ拔差ならぬ、とんだ事になるのである、尤もこれは今日の日本の話ではない、もつと廣い世界の話であるが、先づ例をロシヤと獨逸の政府に取らう、諸君も知らるゝ通り、獨逸の如きは已に國會は開けてゐるが、その國會は唯、紙の上に書かれた國會であつて實際は何の役にも立たぬのである、加之、ロシヤの如きは、まだ國會の開設さへなく、政府の政治萬能であるから、吾輩の演說に例を引くには、持つて來いの國である……道理上からいへば、政府の務めは二つより外にあるべき筈はない、第一は外國からの侵略に豫め備へる事であり、第二は國内の安寧秩序を維持する事である、卽この内憂外患を防ぐ爲めには、内務外務、兵務の三つ丈があれば事足るのであつて、その外は必要がない、イヤ全く無用の長物である、そして、その兵を募るについても、國々で各々その方法が異つてゐる、或は國民何十歲以上の者は義務として悉く兵隊に出ろと云つて募る國もある、或は最初から志願兵丈で軍隊を組織してゐる國もあるが、吾輩の例に引くロシヤや獨逸では、否でも應でも、兵役は國民の義務だと云つて、首ッ玉へ繩を附けてゞも引ずり出すといふ強制制度である、兵隊は成るべく不足させて置く方が善い、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、然るに彼のロシヤや獨逸は、今日、益々兵備の擴張に汲々として務めてゐる、兵備を限りなく擴張すれば、勢、外國侵略の戰爭なんかついオッ始めねばならん事になつて、その結果は却つて自ら滅亡するやうな、とんだハメに陥るかも知れないのである。

警部　辯士、注意ッ……。

傍聽者　默れッ！……バカヤロー……。

警部　（起上つて）何んだ？……といつた！

星　（苦笑）これは獨逸の話である、注意して聞いて貰はなけや困る……彼の獨逸、ロシヤの二國では、又鐵道を官設にする、電話や、郵便にまで政府が一々手を出して干渉する、こんな事は、我國幕府時代には、人民がやつてゐたもので政府のお世話に預かつてはゐなかつたのである。その頃は、例の三度飛脚とか何んとかいふものがあつて、敢て差支がなかつたのである、然るに、政府が一々、手を出してこれに干渉し、人民の膏血を絞つた稅金を濫費して、損をしてゐるのは甚だ悪い事である、その上、彼の國では、宗教や教育上の事にまで、いらざる世話をやいて、舊俳優や講談師にまでヤレ教正だの、講義だの、と、コケ威かしの役名をクッ附けさせたり、かと思ふと一方では或は、自由主義の本は讀んではならんとか、或は過激な思想の研究は禁止するとか、更に限りなく干渉するのを善い事のやうに思つてやつてゐる、我國幕府時代にこんな事まで一々、政府のお世話には預らなかつたが、無學文盲な者ばかりがゐたわけでもないのである。果して然らば、これも全く、餘計なお世話であり、いらざるお節介である……。

警部　辯士！　注意なさいッ！

傍聽者　それこそ、……よけいなお世話だ、……默れッ、よく聽けッ……。

星　……そして、又彼の國には、人間に等級があつて、その等級は卽、政府が規則を以て、これは大貴族とか、これは小貴族とか、何んとか彼んとか云つて階級を造つて置くのである、これも甚だ悪い事である、（傍聽者の中からヒヤ〳〵と呼ぶ）……何んとなれば、人間といふものは元來斯の如く貴賤の差別のあるものではない、貴いからと云つて、目が三つあるのではない、やはり我々と同じく目は二つしかない、加之、彼の國で貴族など云はれてゐる者は、却つて一般の人民よりは何も知らぬ者が多いのである、試に見られよ、我國の幕府時代の貴族――卽、彼の公卿とか、大名とかいふ者にもずゐぶん無智な者があつた、所謂お芋の煮えたも御存じない連中がナカナカ多かつたのであるといふ事を聞いてゐる、果して然らば、これは貴族、彼は平民と、身體に驗しの附いてゐない者を、特に、政府が規則を以て、その等級を造るといふのは、徒らに政治萬能の妄想に憑かれ、實際の政治の限界を越えて、よけいな事をしてゐるのである、のみならず、甚だ國に害があるのである……。

警部　（起上つて、卓をたゝき）辯士……中止ッ……。

（聽衆、鬨の聲を上げ、警官引込めッ。……謹聽しろ

……よけいな世話をやくな……。政治の限界を知らんか？……と喧躁する。）

星　（警部の方を顧み）よろしい、分つた……諸君、人間の等級は天爵、即、自然から授かつたものゝ多いか少いか、高いか低いかに依つて區別しなければならないのである……あの演題の辯士の名前の上にバリストルなんて誰かゞ餘計な肩書をかいたが、バリストルは代言人の商賣用の看板であろ、辯士をエラク見せかけるために、書くべきものではない、これも誰かゞいらざる世話をやいたものである。（拍手喝采）

警部　（つか〳〵と歩寄り、フロックコートの裾をとらへ）中止すると云つてるのが、分らんですか？

星　分つてるから、今までの演説は中止して、更に外の演説をやるのだ……日本の事ではない、吾輩が若しロシヤの政治を取るとすれば、すべてこんな餘計な、害のある事は斷然止めて了ふ。若し我國の太政大臣になつたとしたら、斯うした事は決してやらないのである。

警部　（演壇に上つて行き）お止めなさい……お止めなさいッ……貴下の演説は治安に妨害があると認めますから、中止解散を命じます…… 速に演壇をお下んなさいッ。

星　何？　治安妨害だから中止解散？　一たい何處が治安に妨害があるのか？

警部　それは說明の限りではありません、たつて聞きたくば、警察署へ御出なさい。

星　吾輩は警察へ行きたくて聞いてゐるのぢやない、君が中止したから、何處が治安に妨害があるか、聞いてゐるのだ？　たとへ吾輩が默つて、一人で承知してもこゝに集まつてゐる二千人の傍聽者が承知しなかつたら解散とこそか、大騷動が起るだらう、君等がそれを好むならそれでも善いが、苟も、穩かに解散をやらうとするなら說明する義務がある、何處が惡いか、聞かせてもらはうぢやアないか？

警部　（一寸と沈默――漸く口を開いて）演說全體が惡いと認めます。

星　これは可笑しい……君は全體が惡いと認めると云ふが、吾輩はまだ半分もやつてゐない、これからソロ〳〵本題に入らうとするところだ、それに全體が惡いといふのは何うして分る？

警部　ハッ……それは？

星　まだこの腹にたゝみ込んである事が、君に分る道理はないぢやらう、一たい、君は法律を知つてゐるのか？

警部　（躊躇）……ハッ……それは、職務上、必要な事丈は知つてゐます。

星　では尋ねるが、集會條例によつて見ると、演說會を開

くとか、閉ぢるとかは、最初屆出た會主又は發起人が全責任を負うてやる筈で、辯士は唯、自分のやつた演說に責任を持つだけだ、然るに、君は會主でもなく、又發起人でもない辯士の吾輩に對して、中止解散を命ずるといふのは、法律に違反してゐる、條文にも、中止又は解散を命ずる事あるべしと書いてある、中止したから必ず解散せなければならない筈はない、君は果して法律を知つてゐるのか？

警部 （一寸と沈默）……こゝで法律論はしません、本官は職權を以て中止し、又解散するだけです。

星 それは、君が誤解してゐるといふのだ、辯士に對して解散を命ずるのは、法律違反である、隨つて效力が無いのだ。

警部 （激した調子）でも本官は職權を以てこれを遂行します。忌なら警察へお出なさい。

（辯士仲間や有志者たちがバラ／＼とかけて來て星をなだめる。）

幹事 （起上つて） 諸君、只今御承知の如く、中止解散を命ぜられましたから、甚だ遺憾ながら演說會はこれ切りといたします……尤も演說會は止めましたが、これから豫定通り、懇親會を開く事にいたしますから、有志の御方は、何卒自由に、御參加を希望します、お席はそのまゝで傍聽、イヤ傍觀なすつて下さつても構ひません……。

（拍手）

警部、巡查 皆歸り給へ、歸り給へ、……解散だ……解散だ……。

（有志者が總立になつて抗辯する、……最早、演說會ではない、懇親會だ……、貴下こそ退場して下さいッ。）

（橫暴だ……壓制極る……なぐつちまへッ……歸れ歸れ……、場內はガヤ／＼喧躁する。）

警部 （力んだ調子で） これで演說會は中止解散したから本官等も一應署へ引上げる……しかし名を懇親會に藉つて、猥りに民衆を煽動する言論をやる者があつたら決して、容赦しない、……適宜に取締の手配りをするからさう心得てもらはう。

傍聽者 ……もう用事はない……。邪魔をするなッ……歸れ／＼。

（警部は巡查に命じて、演題の紙を引剝がさせろ、演壇や銀屛風を片付けさせ、幕を取外させにかゝる。）

幹事 佛前に怖れがありますから幕はそのまゝにして下さい、……こちらで形附けます。

警部 黨員丈殘つて、傍聽者は歸さんといかん…… 皆歸つた……歸つた……。

幹事 大てい、皆懇親會の會費を拂つてゐます、唯、傍聽

丈に來たのではありませんから、あまり壓制をやるととんだ大騷ぎが持上りますよ、……まア萬事、發起人に任せて下さい。

警部　フム……では君等が全責任を持てやつてくれ……善いか？

（警部、巡査退場。）

幹事　諸君、これから懇親會に移ります、折詰と酒は今配らせますから出來るなら、こちらへ上つて下さい。

（一部、觀客席から舞臺へ上る。）

加藤　さア諸君、……星君を圍んで圓く座を作らう……くつろいで大に論じようよ……。

幹事　（觀客席に向ひ）そちらの諸君への折詰と酒は、あまり御多人數なので、チヨツと手が廻りかねて、今二三十分かゝりますが、何分にも幹事の不行屆を御容赦下さつて何卒暫らくお待ち下さるやう願ひます。

（舞臺では星亭を圍んで圓座がつくられ、酒、折詰が配られ獻酬が始まる、燭臺が持込まれる、談笑がはずむ。）

幹事　星先生の法律づくめでは、奴さんたち、チヨツと弱らされたやうですな？

加藤　ハヽヽ、星君の屁理窟は有名なもんだ……だが、大ていの相手が、ギウ／＼云はされるよ。

星　馬鹿ア云へッ、相手が屁理窟でやつて來るから、こちらはクソ理窟で閉口させてやるんだハヽヽヽヽ。

有志者の一　（微醉口調で）獅子、兎を撃つに全力を用ふつて云ふのが、先生の戰術だね……。

加藤　兎の後に、藩閥つて大魔法使ひがクツ附いてるんだから適はないよハヽヽヽ。

有志者の二　ロシヤや獨逸の實例は善かつたね、チク／＼刺されるやうだつたらう。

星　（見廻して）政治の界隈ぢやないが、かうして見ると幕を張廻したのは、何んだか窮屈だよ、取つちや何うだ。

幹事　御本尊が見えるのですが……取りませうか……。

（二三人、起つて行つて、幕を取る、護摩壇の彼方に、等身の不動尊の立像が、煌く蠟燭の光輪の中に儼然と現れる、護摩の烟もや／＼と立上つてゐる。）

星　はア、成る程こゝは不動院で、あれが御本尊か？……ウム、威勢がいゝなア、……降魔の利劍を引掴んで、猛烈な火炎の中に突立つてゐるのが、我黨の士だと云ひたいなア……。

幹事　例の運慶か誰かの古い名作だといふ評判の御本尊です。

星　（起つて近寄り）ウム、こいつア氣に入つたよ……。

（ぢつと不動尊を仰ぎ見る）

有志者の三　さういへば、星先生も、この不動尊に似てゐられるぢやアないか?

幹事　ウム、成る程……。

（星亨がこちらへ向くと、……星先生萬歳……不動尊萬歳の聲、一齊に起る。）

星　（苦笑）ウム、我々は、この不動尊のやうに身體も、又心も火炎になつて燃えながら手には降魔の利劍を揮つて飽くまで戰つて戰ひぬく覺悟でなけや、彼の藩閥の金城鐵壁を打倒す事は出來ないんだ。

幹事　先生は不動尊だ……今の政界の不動尊だ……。

有志者　……不動尊萬歳……星先生萬歳……胴上げにしろ……胴上げにしろ……不動尊と脊くらべさせろ……やれやれッ……

（大勢寄つて集つて、星亨を胴上げにし、不動尊の前に立たせる……ワッと鬨の聲上る、杯を八方からさしつけて、立つたまゝ酒をのませる、醉興に護摩を焚くものもゐる、鉦を打つものもゐる。）

（この時、警部が下手へ現れ、幹事を呼び附けて、何かさゝやく。）

幹事　（何時の間にか座に返つた星のところへ行く）先生、先刻の警部が又やつて來ました、チヨッと御目にかゝりたいと申しますが……。

星　（少し醉つた口調で）フム、酒でも飲みに來たのだらう、呼んでやれ。

幹事　イヤ、戲談ぢやアありません、警察の用事だと云ひます、……先刻の用事だと云ひます、……先刻の演說の事かも知れません。

星　こつちへ來いと云つたら何うだ。

幹事　（警部のところへ行き、直ぐに返つて來て）……チヨッと廊下までと、云つてゐます。

星　さうか……とにかく行かう。（氣輕に起つて、警部のところへ行く）……何か用かね?

（警部、默つて、拘引狀をさし附ける。）

星　（ヂッと見て）さうか、分つた……君に返さう。

警部　（ムッとして）返さうではありません、署名捺印して下さい。

星　（冷靜に）そんな事はせんでも善いよ。

警部　本官を侮辱するんですか?

星　この拘引狀には、官吏侮辱罪に依て拘引するとあるが、果してさうかね?

警部　さうです。

星　それなら何かの間違ひだらう、もう一應よく相談して來るが善いだらう。

警部　（きつい調子で）失禮仰有るなッ、間違ひはありま

せん。

星　さうか、……間違ひではないかね？

警部　何の間違ひがありますもんか？

星　さうか？　しかし、苟も位階のある者は、直に拘引する事は出來ない筈だ、宮内省へその手續がいるだらう。

警部　勿論、さうですが、この場合に、そんな餘計な事を云ふ必要はないんです。

星　餘計な事ではない、吾輩には位階がある。

警部（不審さうに）え、……何うしてそんな事が？

星　從六位だ。

加藤（傍から）ウム、星君は十年前に税關長をやつてた事があるぞ。

警部（表情を變へ）……ハツ……さうでしたか？　これは失禮……いづれ又……（匆々退場）

幹事　イヤ奴さん、又しくじりましたね。

一同　痛快々々。（拍手する）

星　吾輩は、位階なんか、厄介あつかひにしてたんだが、こんな時には毒を以て毒を制する事になるかなアハ、、、、、、。

第五場

時　明治二十年四月

場所　玉鳴館假裝舞踏會

人物　假裝した日本人及西洋人男女大勢、黒裝束の假裝の群、金ボタン、制服の男大勢、その他

〇

管絃合奏樂で開幕。

西洋風の廣間、緋の絨毯が敷つめてある中央には廊下へ通ずる大扉口、上手に螺旋形の階段、思ひ〳〵な假裝の日本人、西洋人の男女の群が入り亂れて舞踏の渦卷を起してゐる。

高い天井裏に花瓦斯の燈がパツと入る、道化役者に扮したのや、緋絨の鎧を着たのや、ヴェニスの貴族風俗、丁髷のかつらに、裃姿の假裝などが殊更に目に附く、一方には太田道灌と、山吹娘もあれば、六段目の猪もゐる、普通の燕尾服に、黒の目かくしだけしたのも交つてゐる、ルイ王朝時代の服裝に典雅なスタイルを誇る假面美人も人目に立つ、ワルツ、ポルカ、フオツクストロツトと曲の移るにつれて舞踏群の熱狂は高まつて行く。

螺旋形階段の上にも、さうした奇怪な假裝男女の群が

折れ重つて、休憩しながら赤い、青い酒のグラスをあふつて、はしやいだり、高笑ひしたり、手をたゝいたり、大陽氣である。
舞踏は本場で鍛へた技の冴えを見せて、巧みなのもあり、まごついて滑稽なのもあり、すべてが統一の中に混亂を見せ、雜音の底で階音をひゞかせてゐる。
一くさり、音樂止んで、舞踏群がくづれると、假裝の男女はそれ〲、あちこちに塊り合ひ、小扇をつかつたり、眼と眼と見合せてほゝ笑んだり、樂しげにさゝやき合つたり、キッスを交はしたりする、脊の高い、西洋人らしい黑假面の燕尾服の男が、山吹娘の後を追つかけ廻すと、太田道灌が又その後から蹤いて行く、道化役者がルイ王朝時代の假裝美人につきまとうてうるさがられたり、かくれんぼうのやうな戀の遊戯がつゞく、一方では緋縅の鎧が、大身の槍を杖つきながら、甲冑のローマ武士と談笑して步き廻り、六段目の猪が、誰彼となく、婦人に惡ふざけしたり、ちよん髷のかつらが新流行の洋裝の假面美人の腕を力づくで引張つて廻つたり、奇々怪々なシーンが現出する、すべてはパントマイムである。
廊下の奧の方で「お飮みものゝ用意が出來ましてございます、殿樣方、姬樣方お庭園へ御出で遊ばしませ」

メカホンか何かで叫ぶ、假裝男女の群れはゾロ〱と廊下を流れ込んで行く。
廣間がガランとすると、螺旋形の階段の蔭から、黑假面のヴェニス貴族が黑假面のルイ王朝美人の手をぐつと引張つて出て來る、女の方はしきりにすね廻る、男の方は、手先をギュウと握りしめたり、耳邊へ口を寄せたり哀願したりする態度である、女の方は隙を見てギヤロップの足取りで逃げかける、男の方は、飛びかかつて抱きすくめ、力づくで接吻せうとする、女の方は「アレーッ！」と叫び聲を立てながら激しく抵抗して、相手の假面をむしり取る、戎顏の、ホクロのある男の顏が露はになる、金ボタンの番人が二三人、バタバタと駈け附ける、男は手を上げる、番人は呆氣に取られて敬禮する、男はかへり見がちに、スタ〲廊下を入る、自分で假面を取つた女は、荒い息づかひしながら何か云つて、嘲笑ひ、階段を上つて行く。
（再び音樂が始まる、假裝男女の組々が舞踏しながら廊下を練つて再び廣間へ流れ込んで來る、忽ち、下手の奧から高らかな詩吟の聲がひゞく。）

爭取銖錙費如塵
絃歌湧出蒲城春
煌々金殿夜明晝
不照寒村菜色人

（劍を手にした覆面黒裝束の男の群が、亂舞しながら黒旋風のやうに下手からサッと突入する、假裝の女たちは驚いて悲鳴をあげる、假裝の男たちは狼狽へながら叱咤する、それにかまはず黒裝束の群はぎらつく白刄を揮り廻し、流行の自由の歌を歌ひながら、狂へる如く亂舞する、舞踏組はなだれを打つて逃げかくれる。）

○

天には自由の鬼となり
地には自由の人たらん
自由よ自由、やよ自由
なんぢとわれとその仲は
天地自然の約束ぞ

千代も八千代も末かけて
この世のあらん限りまで
ふたりが仲の約束を
いかにぞ仇に破るべき

いかにぞ仇に破るべき

（黒裝束の劍舞と歌とが暫らく廣間を占領する、やがてワーッと凱歌をあげて、彼等の群は又黒旋風の如く戸口に去り行く。）

（緋縅の鎧の男、假面をぬいで、痩せた、尖り顏の、眼をギョロ／＼光らせ、大身の槍を振りしごき／＼現れて來る、ヴェニス貴族も道化役者も、ちよん髷かつらも、猪も、皆素顏で集つて、給仕に椅子を持出させ、急な會議が開かれる。）

道化役者　（破裂したやうな癇癪聲で）　何うもけしからん奴ぢや……けしからん奴ぢや、すぐにふん縛つてしまへッ……。

猪の男　部下の者に早速、こゝへ集まつて來るやうに、命令は傳へました。

緋縅の鎧の男　今の奴等はありや手先だ、後であやつつてゐる奴等をつかまへて嚴重に處分せんけやダメだ、それにつけて總理、この間からより／＼會議にかけてゐるあの條例を早速實施する事にしたら何うだらう、今夜の中にでも好い、兵は神速を貴ぶんだ……。

ちよん髷かつらの男　ウム、よか、よか、おいどんも贊成するけん……。

ヴエニスの貴族　ウム……斯うなりや外に手段がない、思切つて保安條例實行に取かゝるか？　この帝都から三里以外の地に皆追ッ拂つて了つたら、當分は手も出ないだらう、何しろあいつ等は山嶽黨だ、こちらで先手を打たんけりや立遲れると、こつちがひどい目に逢はされるからな。

道化役者　ウム、ぐづ〳〵しちやダメだ、今夜中にやつて了へツ、第一條約改正の妨害になる……。

ヴエニスの貴族　ウム、今夜のお客の外國の紳士、淑女たちに對して、實に恥かしい、あの野蠻な奴等は根こそぎ始末せんと國辱だが、條例發布には、勅裁を經ろ手つゞきがいる、實行の手配りだけ今夜中に着けて置くか？

緋縅の鎧の男　ウム、さうした方が好い、もう外に策はないよ。

ちよん髷かつらの男　ウン……さうだ、さうだ、外になか……？

猪の男　ぢやアあの保安條例を愈々御實行なさるのですか？

道化役者　ウム……君ならやれるだらう……思切つてやれツ……。

猪の男　だが、あの退去命令を素直に受取らなかつたら、何んな騷動が始るかも知れません、部下の者丈では不安心です。

緋縅の鎧の男　エ、……あの人民共に鬼のやうに怖がられた君が、急にそんな弱音を吹くのか？　何うしたといふんだ？

猪の男　何んな事になるか、こん度許りはチヨツと見當が着きかねます。

緋縅の鎧の男　手が足りなけや、治安維持のためなら構ふ事アない、軍隊をくり出すんだ。

ちよん髷かつらの男　おいどんもさう思つちよる……。

道化役者　ウム、彼奴等は、亂臣賊子も同前だからな、縛り上るのは愚か、抵抗したら打殺したつて構はん。

ヴエニスの貴族　いよ〳〵となりや、ソラ、何んな手段を取つても構はんぢや。

猪の男　さうですか？　ぢやア誓つてやつつけます、身命を賭してやつつけます。

（猪の男は、猪の皮をぬぎ捨てる、金ボタン附の制服になる、相圖の笛を鳴らし立てる、金ボタン制服の一群が、劔鞘をつかんで跣足でくり込んで來て、整列、敬禮。）

猪の皮をぬいだ男　（威嚴を見せて）　諸君御苦勞だつた……。

道化役者　これで心丈夫だ……我々は、一應引揚げて、改

めて會議を開く必要があるだらう……後はこの樂に任せたら何うだ？

ヴェニスの貴族　我々が中座しては、折角御招待した外國の紳士淑女たちに濟まん、條約改正が氣かかりだ、まア、まア餘裕を見せる事も必要ぢやぞ。

緋縅の鎧の男　それもさうぢや、今の事はあの男に任せたらいゝだらう。（云つて、猪の皮をぬいだ男にさゝやく、そして彼を殘して連れ立つて奥へ入る）

猪の皮をぬいだ男　（室内に列を作つた金ボタン、制服の一群に向ひ）先日來、諸君に調査を命じた危險至極な注意人物どもの住宅は一軒、一軒即刻手配して、嚴重に監視しろ、明日は皇城三里以外の土地へ片ッ端から追放する事にならう、強ひて抵抗すれば、縛り上るんだ、手ごはい奴は、打殺したつて構はん、善いか……それから又先刻白刃を揮つてこの館に亂入した奴等も追跡させて引しぼつて了へッ、直ぐ出動せいッ。

（一同敬禮、忽ち散つて行く、ヴェニス貴族、緋縅の鎧、道化役者、ちよん髷かつら、それ〴〵相手と腕叉して出て來る、太田道灌は山吹娘をつれて現れる、又音樂聞えて、舞踏が始まる、假裝男女が再び廣間になだれ込む……。

猪の皮をぬいだ金ボタン、制服の男は、傍に立つてヂッとこの亂舞を見つめてゐる。

（カーテン）

第六場

時

明治二十二年二月十一日憲法發布大祝日

場所

石川島禁獄舍、典獄面會所

人物

星亭、片岡圓吉、加藤平次郎、井上榮一郎、熊谷三平、石山眞澄、細川芳正、荒川高義、天本彥一、その他

典獄、監守、押丁等

○

下手は板部に鐵格子の窓があいてゐる、上手も同じ板部、その一隅に出入の扉口、正面のガラス戸寄りの處は一段高くなつて、卓、椅子などが置かれ、低い方の板敷には一二脚のベンチが竝べてある、ガラス戸越しに、灰色の壁に沿うて長廊下の通じてゐるのが見える。監守、押丁が、澁柿色の服の囚人等を導いてこゝへ入つて來る、監長片岡圓吉が先頭で、細川、荒川、井上、熊谷、加藤、石山、天本、その他の人々がつゞく、星

亭も交つてゐる。

監守（高い所から）只今、典獄が皆に申渡される事があるから、靜かにして待つてゝ下さい。

片岡　謹直に、ハツ……。

荒川（小聲で）己たちはやつと地獄の釜の蓋があいて、何うやら娑婆へ出られさうになつたが、たつた一日違ひで、こゝで死んだ奴アかはいさうだなア……。

細川（涙ぐんで）ウム……それを云はれると己は放免されるのがイヤだよ、……キツとこの前には大勢出迎へに來て、待つてるだらう、上野の女房や子供も、あいつの無事な顏が見られるんだと思つて、胸をワク〳〵させてその中に交つてゐるだらうからな、……面を合せるのが辛いよ。

星　ウム、上野の奴か……？（腕叉して考込む）

（あちこちで、ガヤ〳〵話聲が高まる、鼻をすゝるものもある。）

監守　皆、話をせんで、靜かにして待つてゝ下さい。

片岡（見廻して）諸君、我々はまだ正式に放免を申渡されたのではないから、自由な體になつてはゐないのだ……今少しの辛棒だ……靜かにしてゐよう。

（暫時、沈默。）

（一隅で又話聲が聞え出す、調子がダン〳〵昂ぶつて來る……。）

井上　……でも、ずゐぶん長い間、ひどい目に逢はされたもんだ……横暴極まる閥族政治を攻撃するのが何んで罪になるんだ。あの保安條例なんて、天下の惡法を一夜作りに作りやがつてさ、己たち、罪のないものを無理やりに、こんな暗い處へようも打ち込んで置きやがつた、……今頃は寢ざめが惡からうぜ、國會が開けたらもうこつちのもんだぞ、汝、今に見ろツ……。

熊谷　ウム、こん度はあべこべに、あいつ等を引縛つて、こゝへぶち込んでやる……イヤ何處かへ島流しにでもしてやらなけやこの腹の蟲が納まらんよ。

片岡（ヂロ〳〵見て）諸君、まあ靜かにしてくれ給へ。

石山　折角、放免されかゝつて又ぞろ官吏侮辱なんかに引つかゝつちや間尺に合はんぜ、氣を附けろツ。

天木　ウム、口は禍の門だ、當分謹めツ……。

皆（ハヽヽと輕く、低い笑聲）

監守　シーツ。

（暫時沈默。）

細川（低聲で、星に話してゐる）……あいつも覺悟はしてたらしい……元來、脾弱かつたのに、こゝでは底から冷え上るんだから、何んでも腎臟へ來たらしいんだ、僕が面會に行くと、いきなりこの腕をギウと握りしめて、涙

をボロ／＼流しやがる、もう口が利けないのかと思ふと、さうではない、ハツキリした聲を出してね…　「己はもう死ぬが、諸君は再び明るい世の中へ出て力限り根限り戰つてくれ、戰つて戰ひぬいて彼奴等を地べたに打倒してくれ、その地ひゞきが聞えたら己も冥途で凱歌を上げて目をねむるよ」つてね……。

星　ウム…ウム…彼奴は血性男子だつたからな…。

（と頷づく）

細川　…（かすれ聲で）氣の弱い事をぬかすな、貴樣も一緒にこゝを出て、我々同志と共に第一線に立つて戰ふんだ、何アにもう一足ふん張りや勝利はこつちのものだつて……勵ましてやつたんだが、「氣休めは云ふな、己は死ぬ事なんか少とも怖れちやゐないぞ、我々同志は無法に虐げられてこんな處へ打ち込まれたんだから、こゝで一人くらゐは死んだ方が善いのだ、己の屍體の重さだけでも、貴樣等の復讐戰の責任が重くなる筈ぢやアないかつて」……却つてこつちを勵ますんだから、尙更、この胸先をかきむしられるやうでね……。

星　……ウム、男子らしい奴だなア……。

荒川　貴樣アそれでも、夜通し、傍に附き切つて介抱してやつたんだから、まだあきらめが附くが、己等はあいつの死目にも逢へなかつたし屍體もそのまゝ放りぱなしでこゝを出て行くんぢや、何んだか友達甲斐がないやうな氣がするな。

細川　（ため息をついて）だから、己れは放免されたくもないんだよ……。

星　ウム……尊い戰友の屍をこのまゝ敵中に殘しては置けない……。イヤ、何うにかならう……何うにかするよ。

細川　何うにかすると云つても、娑婆たア違つて、こゝぢや當り前の義理も人情も通らないんだからねえ、そんなものはあの鐵の扉一枚で、彈ねッ返してゐんだからな……。

星　（自信を持て）さうとも限るまい、こりや外の事たア違ふんだから、こつちが誠心でぶつつかつて行きや、何鐵の扉だつて、あくまいもんでもないよ。

片岡　……靜かにして下さい……監長たる吾輩の責任ですから……。

監守　何卒、靜かにして……。

（典獄、式服で、看守を從へて入つて來る、一同禮。）

典獄　……ヱ、……今日は目出度い紀元節で、その上、畏くも宮中に置かれては、前古未曾有の憲法發布の大典を執り行はせられる當日であるから、一視同仁の有難い聖慮に依つて、特に大赦令が下り、お庇で皆の罪も赦されて今日、唯今から放免される事になつた、この天地日月の如き廣大な御聖德に浴した事はめい／＼の胸底に深く

鑄り附けて、いつまでも忘れないやうに、今後、陛下の忠良なる臣民として、よく法律の命令に從ひ、社會の秩序を守り、過激な言論や行動を謹んで、着實にそれ〲自己の業務に勉强し、國家社會のためにその本分を盡される事を希望する、……長らくの間、さぞ苦しい事であつたらうが、本官は只忠實に職務を執行しただけであるから、それはよろしく諒として貰ひたい……ヱ、、これから皆、更衣所へ行つて衣服をあらため、それ〲所持品を調べて、それを持つてこゝを出て行くのだ……ヱ、憲法發布のお庇で、今日、只今から、諸君は皆、青天白日の身である、お喜び申す……。

片岡 （起上る） 只今の御訓示、唯々難有く拜聽いたしました。憲法發布の大典に當つて廣大無比なる聖恩が、微微たる我々身の上にまで下りました事は、一同感泣するより他に、云ふべき言葉をも存じません… 尙、在獄中いろ〱に手厚い御もてなしを受け、何彼と御親切に預つた事をも、典獄始め職員諸君に、御禮申上ます。

（一同、禮。）

典獄 （碎けた口調で） イヤ、皆さん、隨分辛かつたでせうが、今日からは自由に、羽根を伸して飛んで行かれますよ、外は少し雪が降つてゐるが、大した事はない……さア、さア、早速着替をして、引取んなさい。

（引返しかける。）

星 （進み出る） 一寸と待つて下さいッ。

典獄 （面喰つて） ヱ、何んですか？

星 外でもない、同志の上野富左右が、昨夜、到頭病死して、屍骸はそのまゝ轉がつてゐるが、生きてゐる我々丈が大赦に逢つて獄舍を出て行く、死んだ者は後に殘されるといふのは、情に於ていかにも忍びない。

典獄 實にお氣の毒でした……たつた一日違ひの事でした。

星 ついては、あの屍體を我々同志に下げ渡してもらひたい、我々同志で持ち抱へて、一緒にこゝを出たいから……。

典獄 （一寸と考へ）……ヱ……友達仲間の情愛としては、御尤のやうですが、放免されて行く者が、こゝから屍體をかつぎ出すといふやうな例はこれまでに嘗つてない事だから取り計らひは出來ません。

星 例があるないを、聞いてゐるのではない、……我々生きてゐる者にはまだ刑期も盡きないのに、畏くも大赦令によつて從來の罪は赦してやるといふ有難い聖旨が下つたのです。ところが、死んだ者は、罪も刑罰も一しよに消えるのであるから、まして一視同仁の大赦令が下つたら我々よりも先きに、こゝを出て行くのが當然です。尤

も、あいつは屍體になつても、我々より先きへ出たくはないでせう、我々が守つて、一しよに出た方が、滿足だらうから、引渡して下さいと云ふのです。

典獄　（一寸と默つたが）……ア、然うですか……とにかく一應主務省へ伺うて見ますから、都合によると時間がかかるかも知れない……諸君の出獄が遲れてもいゝですか？

星　そんな事は一向構ひません……。

細川　いけなかつたら、我々も出獄しなくてもいゝです。

典獄　では待つて下さい……こゝにももう、電話がありますから……（退場監守等もついて入る）

天本　オイ〳〵さう時間がかゝつちや困るぢやないか？

石山　何時までも待つてるなんて、よけいな事を云ふなッ。

星　何が餘計だ、當然の事ぢやないか？

片岡　まア、まア……、星君のいふ通り同志の屍體を獄舍に打捨つておいて、生殘つた我々丈が大手を振つてこゝを出て行くといふのは、何んだか疚ましい氣持がするぢやアないか、我々に代つて戰死したも同樣な彼の屍體を我我同志が護つて出て行かれゝばこれに越した滿足はないよ。

（遠く音樂が起る。）

井上　（窓からのぞいて見て）ア、、堤防の向ふを高い旗を押立てゝ樂隊入りでやつて來よる、我々を迎ひに來たのぢやアないかな……。

加藤　憲法發布の祝ひのダシでも引いて來たのだらうよ……。

熊谷　イヤ、キッと同志が我々を出迎へるんだらう……死んだ上野の妻君や子供も來てるだらうよ、可哀さうに、まだ何にも知らないんだからな、生きた人に逢へるとばかり思つてるのにいきなり屍體をつき附けられちや氣絶するかも知れないよ……チヨッと堪らないなア。

星　……（しんみりした調子）だが、我々も、上野のやうに、いつ何處で屍體になつて歸るか分らないんだぜ……國會が開けたつて、決して油斷はならん、我々の敵は何處にでも陷穽を掘つてるんだからな。

片岡　ウム、そりや星君のいふ通りだ……。

典獄　（入り來る、監守もついて來る）ア……主務省から指令がありました……この際だから、特にさう計らつてよろしいといふことです。

星　（感激的に）有難う……ぢやア上野のとこへ行かう……そして彼奴の屍體を先頭に立てゝ、我々は新らしい戰場へ突進するんだ。（細川、荒川、熊谷等と、星が先立つて行く）

片岡　我々も、佛に告別をして來よう。(と立つて行く)

天木　赤い衣物も、イザ脱捨てるとなりや何だか殘惜しくもなるなアハヽヽヽ。

石山　ウム、人間つて奴ア勝手氣儘なもんだよ……しかし死んだ者は損だな。

(云ひ〳〵、皆出て行く、音樂がつゞく、獅子舞の笛、太鼓の囃子も賑かに聞えて來る。)

監守甲　(窓からのぞく)

監守乙　(入つて來て)外は景氣がいゝなア。

監守甲　(ふり向いて)ウム、何しろ憲法發布だよ、來年はいよ〳〵國會が開ける、人民はこれから税金が安くなる、何んでも云ひたい事は云ひ放題だ、世がかはるつて、大はしやぎよ。我々もチと月給が上ればいゝがなア。

監守乙　しかし、税金が安くなりや月給も安くなるかも知れんぜ。

監守甲　戯談云ふなツ、それぢやいよ〳〵やり切れんぞ。

監守乙　我々も一層國會議員にでも出るか？

監守甲　直接國税十五圓つていふぢやアないか？

監守乙　そりや選擧權だ、規則ぢや何んな貧乏人だつて、國會議員に出られるつていふぜ。

監守甲　ところが出してくれる人がないよ、ハヽヽヽヽ

監守乙　お互に貧乏くじか、ハヽヽヽ。

監守甲　だがあの放免になつた連中はこん度の國會議員になるだらう、理窟はうまいし、口は立つし、やり手が揃つてるからな。

監守乙　ウム、それで今の政府に睨まれて、皆、こゝへ打込まれたんだよ、しかし、あの連中は獄舍へ入つても、平氣な顏をして、威張りくさつてゐるから、扱ひにくゝて困る、早く出てくれて、我々も重荷を下ろしたやうだよ。

監守甲　そりやさうだが、何んだか、動物園の檻をあけて獅子だの、豹だの、虎だの、熊だのを世間へ向けてオツ放してやるやうな氣もするな。

監守乙　ウム、噛みつかれる奴はとんだ災難だなハヽヽハ。

(この時、廊下を、服裝をかへた星等が、白布をかけた屍體を擔架にのせて先頭に運び、一同後につゞいて、粛々と列を作つて通る、典獄が嚴粛に見送る、外では音樂、監守甲乙もそれを見て、謹ましく立禮する。)

(カーテン)

第七場

時

明治二十六年十二月

場所　第五議會

人物

星亭、青井品三、杉松謙三、岡勇造、田中忠造、稲田鼎、神鞭友常、山田喜一、山村七蔵、立川仙平、その他、代議士、書記官、守衛、大勢

（舞臺には議長席、演壇、政府委員席、議席（斜面に装置、天井に電氣照明、議席は半分丈見える。）

幕開く。

青井（老人、議席へ、へうきんな上方なまりで喋舌つてゐる）……杉松氏の只今の演説は、議員の資格でやられたのですか？　過日は政府委員として演説をやり、今日は又議員としてやる、これぢや弾き語りで甚だ聴きにくい……（笑聲起る）……三味線をひくとか、語るとか、どちらか一方にしてもらひたい、杉松君に、一方になる事は出來ぬかといふ事を伺ひたい。

杉松（議席で）只今のに答へませうか、杉松謙三は議員なり、又政府委員なりであります、これは諸君が、政黨内閣、責任内閣といふ事を眞に望んでゐられるなら、お分りの筈たと思ひます、然し青井さんが立派な政府の大臣にお成りになつた時は、議員のまゝに政府委員であつて、一人で兩方の椅子に坐つて政治をやり、同時に人民を導くといふ御心になられる事と思ひます。私はそれ丈の事を申します。

星議長　採決いたします、只今問題になつてゐた所の非常準備金法は、二讀會を開くや否やといふ決を取ります、二讀會に贊成の方は起立を願ひます。

（起立者少數。）

星議長　少數と認めます、本案は二讀會を開かぬといふ事にきまりました。

岡　一八〇番……緊急動議でござります。

星議長　一八〇番……。

岡（演壇に上る）諸君、本員は衆議院議員星亭君の不信任決議上奏案を提出いたします。被告の名を呼んで立ち、被告を後にして演説するといふのは、ずゐぶん辛い話でございますが、これも今日の場合、實に止むを得ないのであります、星亭君は已に諸君御承知の如く、身、衆議院議長の榮職に在りながら大阪の米穀取引所の瀆職などやつてゐるといふ事が、黄金の冠に糞土を塗つてゐるも同前でありますが、更にその悪因縁から、彼地の商人輩と築地邊りの待合で密會した事實があり、又近頃、瀆職罪の嫌疑の雲に包まれてゐる古藤農商務大臣や、例の金時計事件の佐藤次官とも如何はしい關係があるといふ事

は現に新聞紙上でもやかましく書立てられて居り、社會輿論の攻撃の的となつてゐるのであります、かゝる議長に、我々は信任を置く事が出來ません。そこで最初に、我々は潔く辭職してくれといふ決議をやつた、星亭君が、苟くも院議の重んずべき事を知られるならば、直ちに辭職せられるべき筈である。

「ヒヤ／＼、……さうだ、さうだ、……なぜ辭職せんッ！（の聲喧ましく起る）

然るに、星亭君は、辭職せんどころではない、翌日、平然としてノコ／＼議席へ入り、づう／＼しくも議長席につきました、かゝる恥を知らざる議長の指揮の許に、我々が議事を進行させる理由はないから、直に休會を決議して、更に星亭君の反省を求めました、然るに何事であるか？今日又ぞろ、づう／＼しく議長席について、平氣で議事を司つてゐる、これ一度ならず二度ならず院議を侮辱し、我々議員の顏に、泥をなすり附けたものである。

田中馬だ／＼、人間ぢやない……

○鐵面皮漢ッ！

○默れ／＼ッ。

○貴様等の顏は泥より汚いぞ。

「バカ……、退場させろ……退場させろッ」

（喧躁。）

星議長　何卒靜肅に願ひます。

岡　元來、私は星亭君に對して、何等の怨恨はありませぬ、（噓を吐くな……、僞善者……默れッ、……）星亭君が議長として議場整理のこれまでの手腕に對しては私は實に衷心から賞讃もし又ひそかに感謝もしてゐるのである、殊に此議場が非常に混亂に陷つて、割れるが如き大騷をしました時に、よく己を捨てゝその職責を盡された事をいつも記憶して常に忘れ得ないのである。苟も議員に、退場を命ずる際には、それが改進黨であると、又自己の屬する自由黨であるとに差別なく、親疎遠近を問はずビシ／＼斷行された。（そんな餘計な事は云はんでも好い……、不信任決議を忘れるなッ……。モウロクしたか……、默つて聽け）……又星亭君の發議によつて、我々は議場を靜肅に保つといふ祕密の誓約までした、斯の如く星亭君は此議場を重んじ、その整理に全力を傾け盡して來たのである、議長、その人の職務は法律に依て此議院を支配する以上に、德義的に秩序を保つといふ事の更に、更に必要なる事を我々も認めてゐる、又星亭君もそれを認めたればこそ、祕密の誓約をさせたくらゐである、我議會の體面と品位と威信との爲めに、涙ぐましいほどのかゝる配慮をされた星亭君を我々は心から尊敬すると同樣に、イヤ、それより遙か遙か以上に、この議會を尊

敬し、その體面と、その品位と、その威信を重んずるものであります。

（ヒヤ／＼、拍手大喝采。）

かるが故に、星亭君は當然、この議會の不信任決議案に服從して潔く辭職さるべき筈である、あれ程、この議會を愛し、又これを重んじた星亭君としては、一も二もなく辭職せなければならないのである、然るに、何事ぞ、星亭君はこの決議を不當と認め、自分には守る責任がないなどと放言して、今日まで何處を風が吹くかといふ顏をしてノコ／＼、出席する、晴れ衣を着飾つてゐる大勢の人込みの中へ泥まみれ、垢まみれの、ボロ姿で、平氣で飛び込んで來るのは乞食ぐらゐなものである、乞食ならまだよろしい、これが議員であり、議長であるとは何といふ恥不知でありませうか？　何といふ不德義さでありませうか？　何といふ無責任でありませうか？　この上は最早いたし方がないから、この不信任決議を更に上奏案として、當人に深く恐懼改心せしめたいのであります、議案は朗讀してもらひます。

星議長　よろしい。

書記官　本院は、議長星亭に信任を置く能はず、故にその職に在るを欲せざるを決議す、臣等は、曩に議員法第三條に依り、星亭を薦奏し、勅任を辱うす、之臣等不明の致す所、誤つて天聽を汚瀆す、惶恐の至りに堪へず、謹んで奏す。

星議長　これを緊急動議となすべきや如何といふ事を討論を用ゐずして決を取ります、緊急動議となす事に同意の諸君は起立……。

（起立多數。）

星議長　多數と認めます、直にこれを議題といたしますが、その前に一言、御注意申上げる、已にこの前の決議案の際にも申しました通り、凡て他人の行動の中にかくされた内心の機密を察しないで、唯、上ッ面から輕々しく是非善惡の判斷を下すのは越權であり、不法である、諸君の言動は徒らに吾輩個人を陷れんとするもので憲法の精神に反した、不當の決議と認むるから、吾輩はこれを守る責任を感じない、それは憲法に惡例を殘すからである、從つて決議案であらうが、上奏案であらうが、非立憲的なものは何處までも非立憲的であるから、かゝる事のために、星亭は決して自ら處決はしない、中心少しも疚しい處がないからである、それ丈申上げる。

田中　（眞ッ赧になつて起上る）何んだ、何んだ　…また懲りもせんで、そんな亂暴な口を利くかッ……上奏案まで出すとはよく／＼の事だぞ、涙を揮つてやるんだぞ、天を恐れんか？　この不忠者ッ……。

星議長　勝手に發言してはいけませぬ、注意なさいッ。

田中（怒鳴る）な、な、何を云ふんだッ、君こそ議長席を下りなさい、サツ〳〵と議長席を下りて、副議長と代んなさいッ。

星議長（冷靜に）勝手に發言してはいけないと云ふんです。議長の命令をお守なさらんと、止むを得ないから退場を命じますぞッ……。

田中　何んだッ！（哮り立てるのを、傍の者がやつと制する）

○　一〇五番。

星議長　一〇五番。

稻田（議席から）議長の唯今の言葉は甚だ不穩當であつて、諸君の言動が非立憲的であるとか、憲法に惡例をのこすなどとはそれこそ臭い者、身不知である、內心の機密が何うだとか、上つ面の判斷が何うだとかいふやうな事は、どちらにでも云へるのでそれを口にするのは已に後ぐらい處があるからである。この場合の問題は苟も議院が不信任決議案で、その意志を現はしたら、議員たる者はその意志を重んじ、直に自分の進退を決せねばならない事で、それが憲法の精神である、この議院の不信任決議が若しその效力を失ふ事になつたら、內閣の鼎の輕重を問ふ力あるものが、議長一個人の叛逆的行動によつて、全く效力のないものになる、諸君、火藥を拔かれた彈丸が何の役に立ちますか、硬度を喪うた刄では紙も切れますまい、然るに、議長は、彈丸から火藥を拔き、刄をなまくらにしてこの議院に、自殺的行爲を遂げしめようとしてゐるのである、この場合速に上奏案を可決して、議長の處決を迫る外はない、尙星亭一身に關する問題であるから議長は當然議席に就いて、後を副議長に讓るべきである。

○　ヒヤ〳〵……副議長と代れ〳〵ッ。

○　それが當然だ……當然だッ……。

○　代れ〳〵……下りろッ〳〵。（喧躁）

星議長　御注意までに申上げる……前回の不信任決議の時は、直に副議長と代つたのであるが、案の大體の主旨が明らかになつてゐる今日では、自分は少しも疚しい事がないのであるから、このまゝ議長席について、議事を進行させる、さう心得て下さいッ。

（「何んだ〳〵？　づう〳〵しい……、下りろッ……下りろッ……」と一隅で喧躁。）

○　一一〇番。

星議長　一一〇番。

山田（議席で）法律上はそれで好いかも知れないが、德義上いけない事である、議長は副議長と代られたい。

星議長　議長に於ては、これを德義的な問題と認めないから、從つて德義的に退席する必要を認めない、議長に、この席を退けといふのは、議員に向つて、議場から退けといふのと同じである、議員は議長に向つて、議場から退けと命令する事は出來ない。

（一隅でガヤ／＼喧騷する。）

さア議事を進行させませう。

○　二八九番。

議長　二八九番。

神鞭（演壇に上る）自分は星亨君とは黨派を異にするが、この議案には反對である（スッコメ……、謹聽しろ……）成る程、星亨君が、米穀取引所の顧問をやつたり、商人と待合で會つたりしたといふのは、あまり讃められた事だと思はない。（ヒヤ／＼……ノー／＼……）併し代言人を業務としてゐる議員は、銀行、會社の顧問になつてゐる人は、相當に多いさうである、それも議員なら構はぬが議長がやつてはいけないといふのですか？（拍手、……ヒヤ／＼……、ノー／＼……）又、商人に會合するのは、星亨君に限らない、現にこの上奏案の贊成署名者である安部君も山村君も、亦緊急動議を出された岡君も、先日、私と一しよに、帝國ホテルで生絲商人等に會合したではありませんか？　その中には、待合にまで行かれたお方もある（それは違ふぞッ……。けしからん事を云ふなッ……僞善者、恥を知れッ……）勿論、この問題は、保護奬勵金の下附といふのが、それッ切になりましたが、議長だから商人に會つてはいけない、議員なら構はないといふのは可笑しいではありませんか？（ノー／＼、……ヒヤヒヤ……）かゝる、風潮はいづれにしても好い事とは云へない。政府の役人もやはり待合入りをやる、そして藝妓がゐなくては酒が飲めないといふ風になつてゐるらしい、商人たちと來ては、國家の事を相談しても、まア國家などは何うでもよろしうございます、何分私共は錢儲けが目的でございますからと平氣で云つてゐる、かういふ時勢がつゞくと、今に何んな事になるか、先が恐しくなるが、星亨君などの考へでは、恐らくこの商人たちを手なづけて、同じ金儲け仕事をやるにしても、國家社會の公利公益と結び附けさせ、同時に、彼等に政治的の眼を瞠（みひら）かせて、自分等の味方につけ、云はゞ政黨政治の地盤を堅めるコンクリート材料に使ふ、そして今猶、その頑強な根を殘してゐる藩閥政府を何處迄も枯れ絶やしにせうといふ、遠き慮（おもんぱかり）から來てゐるのではないかと思はれるふしがないではありません（詭辯だ／＼……止せ／＼……、星は賄賂を取つたのだ……、失禮な事を云ふナッ、

貴様ぢやあるまいし……）星亭君は素より聖人、君子ではありますまい、がしかしタカの知れた賄賂などに目がくらんで、商人輩と待合入りをやるやうな、そんなケチくさい人間だと思ふのは、眼が節穴になつてる輩のいふ事だ。（ヒヤ／＼……ノー／＼……、問題外だ、……辯護は止せツ）……殊に、この上奏案の文句に、三百の議員は不明を謝するとある、即ち我々は馬鹿者であつて、何の譯も分らない人間だといふ事を、恐れ多くも陛下に上奏するとは恥を知らざるも甚しいツ、こんな事が、我々の口から外へ出せますか？（ヒヤ／＼、ノー／＼）速に否決されん事を希望します。

○ 二三六番。

○ 一〇四番。

議長 二三六番。

山村 （議席で） 本員は神鞭君に對して質問しますが、臣等の不明を謝するといふのが何故悪いですか、我々は議院法に依りて三人の議長候補者を選んで薦奏したわけであるが、折角、我々の信任に依つて勅任を辱うした星亭君が、かゝる不義不徳漢であつて……。

星議長 言葉をお謹みなさい。

山村 ……（昂奮した調子）院議を侮辱して恬としてその職に在るばかりでなく（……恬としてその職に在るばかりでなく……と口眞似をする者がある）……馬鹿ツ……。

星議長 よけいな事を云つちやいけません、さア一四〇番……。

田中 自分はかゝる横暴なる議長の下に、議事を進行させるのは不愉快千萬である、まアあのづう／＼しい面を見るがいゝ、三百人の者を一人で相手にして、バカにしてかゝつてゐる樣子は何んだい？（ヒヤ／＼……、忠造暴言を吐くなッ）

星議長 （苦笑） あまり昂奮しちやあいけません。

田中 ……今のまゝでは、こゝは帝國議會ではなくて一個のが星亭一人藝をやつてゐる見世物小舍である、我々は議員ではなくて、見物人である……これで上、陛下に對し、下國民に對して、我々は職責を果してゐると云へようか？ 云へる筈はない、この見世物小舍を一刻も早く、ほんとうの帝國議會に立返らせる爲めには、上奏案でも、何んでも構はない、天意も速に、議會を廓淸する事を嘉納あらせられる事と恐察する、滿場一致、可決されん事を熱望する。（ヒヤ／＼、（拍手）……、キ印し……）

○ 一二六番。

星議長 一二六番。

立川 （演壇に上る） 本員は大反對である、憲法論としてもかゝる上奏案を陛下がいかに處理あらせられるか、凡

そ見當が附く筈である、陛下が直接に、議長を免職にし給ふやうな事があり得ると考へられるか?……殊に大權の發動を促さうとするのは累を上御一人に及ぼし奉るものであつて、立憲政治の常道すら辨へざるものである、結局、これに依つて、議長を自決させんとする苦肉の策ではあらうが、議長にその意志がない以上は、諸君は、一個の星亭を如何ともする事が出來ないではないか?(默れッ、……引込めッ、バカヤロー……)又たとへ議長を取かへて見たところで、その候補者としての岡君はあの御用新聞で、何處からか金をせしめてゐるといふ噂のある札附であるし。(失禮千萬なッ、……取消せッ……)又山村君にしても、信州の山林で大い金儲け仕事をやつてゐるし(出たらめをいふなッ……)又角田君にしても、取引所の顧問代言だ……星亭君が潔白だといへないならこれ等の諸君は一層、不潔白であるイヤ不潔である。(バカモノ、……提灯持ち、よけいな事をいふな……引ずり下ろせ)のみならず、改進黨や國民協會の諸君が、星亭君イヂメをやる内々の理由は、星亭君が、江藤や陸奥と妥協したのを根に持つてゐるのである、イヤその實、妥協、妥協と見せかけて、いつの間にか、自由黨がまんまと政府を乘取つてくれては困る、先に油揚をさらはれるといふ恐怖心と、嫉妬心とが、一氣に爆發したのである。(何を云ひやがる……引ずり下ろせッ、……我黨を侮辱しよる、……不埒千萬だ……)

(大喧躁……一群バタ/\演壇にかけ寄る、あちこちで罵り合が始まる、亂鬪が起る。)

星議長　靜肅になさい……山井、小田、大山三君に退場を命じます。

(守衛が三人を退場させる。)

田中　(議長席に迫り)君こそ退席し給へッ、

星議長　みだりに議席を離れては不都合である。

田中　(怒號)君は一體、良心はあるのか?

星議長　君等よりチットばかり餘計附いてる丈だ。

田中　バカッ。(と躍りかゝる)

(守衛が遮る。)

星議長　田中忠造君に退場を命ずる。

(守衛が寄つてかゝつて、罵りたける田中をつれて行く。)

○　除名だ、除名だ……。

○　議長を除名しろ……星を除名しろッ。

○　卑劣だ……陰險だ……バカヤロー。

(亂鬪が各所に起る。)

(演壇の上では、立川を中に、各派の議員がもみ合つての大亂鬪。)

星議長　休憩いたします……。（振鈴）

第　八　場

時

明治三十四年六月二十一日

場　所

星　亭　邸　宅

人　物

星亨、夫人つね子、明、女中つる、神鞭知常、
書生三木、吉山、勝木、書生等

○

幕開く、

舞臺は黒幕、薄ら明の中に白い影、それがやがて骸骨に見えて來る、この骸骨の四肢がリヅミカルに動き出して、バラ〱に上下、左右に離れたり又一つにくツ附いたりして、暫らくの間、へうきんさと、薄氣味惡さとをゴツチヤにしたダンスをやつてゐる。（あやつり應用。）

それがかき消されて、急に明るい、朝の光の中に、上手に城壁のやうな書棚に圍まれた書齋、下手には唐木の卓を中央に据ゑた座敷が現れる、そこの床の間には「日蓮上人」の畫像がかけられ、燕子花が活けてある。

書齋には、和服姿の星亨が、書卓に寄りかゝり、書籍をひろげたまゝウト〱してゐる、肱傍(ひぢばた)に積みかされた數册の書籍がバタ〱と床に落ちる、ハツと目ざめて、四邊を見廻す。

星亨　ア……つい徹夜したかな……バカ〱しいツ……

（云つて、ページをくりかへし再び讀書に耽る）

（神鞭友常、モーニング姿で、色の小白い、品位の備つた星夫人つね子、と一緒に座敷へ入つて來る。）

神鞭　ハア、先生相不變讀書狂ひですか？……昨夜から書齋に入つたきりですつて？……ヘヱ……驚いたもんですなア。

つね子　近頃は又ひどく凝り出したやうで、體に障りはすまいかと心配してゐます。

神鞭　でもまあ藝妓狂ひや妾狂ひとは違つてるから、さうやきもきせんでもいゝでせうハヽヽヽ。

つね子　ハイ、それはもう……。

神鞭　オイ、星君、何うした？（と、書齋の扉をあける、つね子は座敷に正坐(かしこま)つて、様子を伺うてゐる。）

（星は見向もせず、讀書してゐる。）

神鞭　オイ、君、大抵にしとき給へ、蟲が出るぜ。（相不變、見向きもしないので、ツカ〱と側へ寄つて）……オイ君、もう朝だよ……夜が明けたんだよ。

（星、相不變、ページの上に、目かとめてゐる。）

神鞭　（ドンと足音をさせて）オイ、星君！

星　シーツ……。

神鞭　何かシーツだ……オイ、僕が來たんだよ……。（いきなり書籍を引つたくる）

星　（始めて、ジロリと見て）勉强の邪魔アするな。

神鞭　用事があつて來たんだ。

星　また讀書の時間だ。

神鞭　それを承知でやつて來たんだ、まア此方へ向き給へ。

星　この書齋へ、つか／＼入つて來ちやいかんよ……まア貴樣でゞもなけやこんな眞似をやる奴もゐないだらうが……。

神鞭　ウム、又貴樣でゞもなけやそんな挨拶をする奴もゐないだらう。

星　一たい、今時分何しに來たんだ？

神鞭　何しに來たつて、やつぱり貴樣の事が心配だからやつて來たんだよ。

星　何を云つてやがる？　吾輩はこの通りピン／＼してらア、少つとも心配なんかないぢやアないか？

神鞭　ウム、そりやさうだらう、貴樣の氣象ぢやたゝかれりやたゝかれる程、はね上る、ヘコまされりやヘコまされる程ふくれ出す、何處かの新聞屋が云つてたやうに、鋼鐵とゴムで出來上つた人形だからなア、、、、、、人形はひどいよ、これでも人間なみの魂は持つてるぜツ。

星　ハ、、、人形はひどいよ、これでも人間なみの魂は持つてるぜツ。

神鞭　ウム、持ち過ぎてるんだよ、……とにかく顔でも洗つて、飯を食つちや何うだ！

つれ子　（のぞいて）あなた、こちらへ御越しなさつては？

星　ウム……。

（座敷へ入つて來る。）

神鞭　この「日蓮上人」は何處から、持込んだんだ？

つれ子　（星が默つて、笑つてゐるので）このあひだ、池上の本門寺へ、亡母様の御墓參をしました時に借りて來たのでございますよ。

神鞭　さうですか？……貴樣は近頃、栽山和尙にも逢つたつていふぢやアないか？　發心でもしたのかい？

星　（葉卷を燻らせながら）ウム、逢ふには逢つたよ、……チヨツと面白い事を云ふ坊主だが、己れ丈、安樂を得て滿足するのが小乘で、世人にも安樂を與へる心がけで、自利、利他するのが大乘だなと云つたので、それぢやア己は自利、利他一致だと信じて萬事やつてゐるから、大乘に達したわけだつて、笑つたのさ。

神鞭　ウム、貴樣はさう信じてやつてるに違ひないが、世

聞つて奴は、とかく、間バ拔けた働きをする者を目ざはりにする、そしてアラをさがしたり、ケチをつけたがつたりする内はまだ好いが、暗討ちでもくらはせかねないんだから困るよ。

つれ子　……私はあの、コーヒーでもわかして參りませう。（退場）

星　（葉卷の烟を吐いて）　この頃の新聞の攻撃か？　ダンダンひどくなつて來るやうだな、しかしあんなものを一一、氣にかけちや、何んにも出來やしないよ。

神鞭　そりやさうだ、君の眞價の氣持が分つてないんだ、泥まみれになつて基礎工事をやつてる奴に、裸體を咎めたり姿振を嘲笑つたりして、自分は高見の見物をやつてるのが、世間では聖人、君子で通つてるのだから情ないよ、中には尾に鰭つけて、舞文曲筆をやつてる奴もある、我々から見れば猿の尻笑ひだが、あれをあのまゝ眞實だと信じ込む譯が多いのだから恐しいよ。

星　信ずる奴には信じさせておくさ、一々辯解して廻るわけにも行かんよ。

神鞭　だが、去年の蹶もやつぱりさうだよ、我々は薩長幕府を打倒すといふ理想の爲めに多年の間戰つて來たんだ、その理想の一端がやつと現れかゝつて、折角、君は臺閣に立つて、遞信大臣の椅子につきながら、直ぐにそれをオッ抛りださなけりやならなかつたのは殘念ぢやないか。

星　ウム、あれは自分の力で、自分がひつくり返つたやうなもんだ、まだ先は長いよ。

神鞭　だからこゝらで少し明哲、身を保つといふ方針を取つちや何うだ？　市會議長なんか止せよ、一たいあの市會の建物は白砂糖か黑砂糖の塊りで出來上つてゐるらしい、とかく利權あさりの蟻がウヨウヨつきたがるさうだ、そんな處からは、キレイに足を拔いた方が、後日の爲めだらうぢやないか？——

星　だがね、己は例に依つて東洋流の勿れ主義、引込思案が大きらひなんだ、生きてる内は一日でも積極的に動くのが人間の本分だ、イヤ動いて動き廻つてこの社會にいつも新らしい血液を循環させるのが、卽ち生きた人間だ、生活だといふ信條は變へないんだ、何アに利權あさりだつて、タカが知れたもんだよ、それで仕事がドンドン運びヤア、決算では市民が餘つ程得をするだらう。

神鞭　だが、所謂賄賂つて奴を、訴訟事件の手數料だぐらゐに輕くあしらつて右から左へ筒拔させて了ふやうな君たア違つて、利權常習者つて奴は、質が惡いからな、結局は君一人で背負込む事になるんだ。

星　ウム、それは己だつて氣が附かんでもない、自利ばか

り計る輩がだん／＼多くなるのは困つたもんだとは思つてるよ……己等が血まみれになつて薩長幕府と戰ひつゞけたあの地獄の苦しみや、負けじ魂などは彼等には少しも分つてないんだ、外面ばかり眞似やがる……何しろ己等の敵には權力といふ武器がある、その上政商をあやつるし……政治の機密を利用して相場をやるし……國庫金にまで手をつけかねないから、莫大な軍用金の用意はいつでも出來てゐる、そいつを向ふに廻してこちらは素ツ裸で戰つて來たんだからな、そしてやつと、こゝまで追ツ詰めたんだからな、手傷も受けてる筈だよハ、、、、、ハ。

（寂しい笑）

神鞭　ウム、相手が手段を撰ばんのだから、こつちだつて手段を撰んぢやゐられない、善いも惡いもあるかい、だが時代も大分變りかけた、さすがに薩長のタガもゆるんでるよ、我々にももう山は見えて來たからソロ／＼身をかはす時機だらうぜ。

星　ウム、そりや己にだつて分つてるよ。

（つれ子、入來る。）

つれ子　あなたあの、お手水は？

星　ウム……。（退場）

つれ子　神鞭さん、私一人で胸をいためてるのでございますよ、何とかならないものでせうか？

神鞭　傍の忠告なんか聞くやうな人間に出來てゐないんだからね……尤も忠告する方の人間が、役者が二三枚下だから困るんです、……あれでも、自分で氣が附くと、コロリと態度がかはるんですが……。

つれ子　家の者には、誰にでも親切で、よく氣を附けてくれますがね、世間へ出ると何うしてあんなに強い一方でせうね？

神鞭　家庭で猫のやうなのは、奧さんのお腕がえらいのですよ、外へ飛出しや虎か、豹かの本性が出るんですハ、、、。

つれ子　私なんか腕も何もあるもんですか？

神鞭　イヤ、これは戲談です、唯、奧さんの淑德が高いからといふのですよ。

つれ子　まア……イヤですよ。

星　（小學生の服を着た明をつれて入つて來る）神鞭の伯父さんに御あいさつを……。

（明、チヨツト挨拶。）

神鞭　ウム、明君、お早う……學校か、今日は何曜日だつた？

明　明日が、土曜日だから、金曜日です。

神鞭　金曜日だつたかなア？

星　こいつ、なか／＼頭がよさゝうだよ。

神鞭　ウム、しつかり勉強しろツ……。

明　書物がどつさりあるからいくらでも勉強せうと思つたら勉強出來るんだ、ね、お父さん。

星　ウム……お父さんの書物は坊にはまだ六ツかしいよハヽヽ。（つれ子、女中のつるを指揮してコーヒー皿など卓上に運ぶ）

星　（パンとコーヒーを取りながら）これは己れの朝飯だ……。

（明が、傍に坐つて、せがんでゐる。）

つれ子　明さんはもうすんだでせう、お父さんのまで飲んではいけませんよ。

星　……飲みたがりや飲ませるさ、いけませんよはいかんよ……うちの奥さんはいゝ奥さんだが、唯あれはいけません、これはいけませんが出て困る、子供がいぢけるからなア、勿れ主義は家庭でもやめようぜ。

つれ子　でもあなたのやうに、甘やかすと、又このあひだのやうに下痢をします、さうするとあなた、醫師々々つて、眼の色をかへて御心配なさるぢやアありませんか？

神鞭　ハヽア、こいつは大將、一本參つたな。

神神　なアに參るもんか？　己が心配して見せなけりや皆が油斷するからな。

神鞭　ハヽヽヽ、君の逆手にはかなはんよ。

星　（考へ込んだやうな調子で）だが人間つて不思議なもんだなア、……この皮を剝ぐと肉がある……肉を剝ぐと骨がある……つまり骸骨だからな、骸骨が躍り廻つてるんだからな。

神鞭　妙な事を云出したなア？　君たつて死なんて事を考へるのかね？

星　（苦笑）フヽヽ、死なんて事をいくら考へたつて、何うにも仕樣がないと考へてるんだ、尤も誰だつて死んだら自由平等になるが、そいつはつまらん、生きてる內の自由平等でなけりやね、だから、生きてる內は己はそのために一分でも働く、働くのが人間だといふのだ、己たちの生れる前にも、人間はウヨ／＼ゐたし、死んで後にも人間はウヨ／＼ゐる、つまり働くといふ事を人間は前の代から後の代へ傳へて行くもんだ、それが骸骨の踊り見たやうなものだつて構ふもんか、それで善い、惡くつても他に仕方がならう。

つれ子　まアこんな御話をなさるのは私、始めて聞きましたよ。

神鞭　何うせ誰しも死ぬにきまつてるから考へて見るのも善いが、しかし、君のやうな考へ方おやはかな過ぎるよ。

星　はかな過ぎたつて事實だから仕方がないさ、理窟は閑人がクツ附けるもんだ……だが己が死んでも別に金は溜

めてないから、あの書物を賣喰にすりや善い、あれでも二萬圓や三萬圓がものはあるだらう、さうせい、この子の教育費位出る。
つれ子　イヤですよ、だしぬけにそんな事を。
星　己も年が寄つたのだらうハヽヽヽ。
神鞭　横濱でバーク公使をなぐつ時は、お互に若かつたな。
星　ウム、若かつたな、しかしこれでもまだ〳〵元氣は衰へてゐないよ。
神鞭　イヤ、元氣がよ過ぎるぐらゐだ。
書生二木　（次の室から）いつもの連中が見えましたが。
星　ウム、あちらで待たせておけ。
つれ子　明さん、もう學校でせう？
明　ハ……お父さん、お母さん、行つて參ります。
神鞭　己も歸ろ、明君、そこまで一緒に行かう……市會議長丈は止めたがいゝなア、考へておけ。
星　ウム……ぢやア又來いッ。
つれ子　何うも失禮いたしました。
（送つて行く、星は直ぐ五六人の壯士をつれて座に返る。）
星　ウム、皆よく來た……横山もゐたぢやないか？
（薩摩絣の書生、一行の後から入つて來て、末座で挨拶する。）

星　明後日が日曜だぜ、運動會は何うしたい？
壯士の一　運動會どころぢやアありません。（玄關から抱へて來た新聞紙をドッサリ投出して）……實に失禮千萬ぢやアありませんか？　今朝のを見ちや、何うにも斯うにも我慢がならないんです、……公瑩の自鮭を確れとは何たる事つてせう、いかに政敵とはいへ、苟くも先生に對してこんな極端な侮辱を加へるなんて、今田つて奴、頭が狂つてるとしか思へません……。
壯士の二　我々も、相當の覺悟をしてよい時だと云ひ合つてゐるのです、先生も御油斷なすつちやいけません、新聞なんかの煽動に乘つて、バカを働く奴が飛出すかも知れませんから。
星　（ヂッと見てゐたが）新聞の煽動に乘つて、一番先きにバカを働かうてのは、貴樣等ぢやアないのか？　止せ止せ。
壯士の一　……エ、……先生に決して御迷惑はかけませんよ。
星　あんなボロ新聞社をたゝき壞したつて何になる？　…………書きたい丈書かせて置け、今に書きくたびれるよ、それよりか君等は、君等の前途の事を考へたが善い、皆若いんだぜ、イヤでも膽でも今にその肩にそれ〳〵重い責任がのしかゝつて來る筈だ、これからの日本はなか〳〵

容易ぢやないからな。

壯士の二　ですから先生の地位はいよ〱重大です、それを嫉んで叩き落さうとかゝつてる奴等は、存分に懲しめてやるのが正義です。

壯士の三　先生は平氣でゐられても、あんな無責任な惡口を許して置くと社會は先生を誤解します……我々は堪らないんです。

星　まア落着いて聞け、こんな機會だから話してやるが、惡口を云はれる、損をする、生命が危い、この三つの災難は、人情上、誰でも好きはしないさ、だが心から國事に盡さうとする者は、この三つの災難を、自分の一身に引受けて立上る覺悟でなけやダメだ、だから己は少つともへコたれやせん、イヤ、いよ〱鬪うて行く勇氣が出て來るんぢや、貴樣等もバカな眞似なんかせんで、運動會でもやれ……そして英氣を養ふんだ……。

（壯士等は、沈默……すゝり泣く者もゐる。）

（この時、玄關の方で、ガヤ〱高い聲が聞える。）

壯士の二　何んだ?……亂暴者でもやつて來たのぢやアないか。（起ちかゝる）

星　何に二木が怒鳴つてるんだよ……物もらひだらう。（葉卷の烟を吹いてゐる）

二木　（顔を出す）先生、ヘンな奴がやつて來ました、社會民主黨の者だが、先生にぜひお目にかゝりたい、御承知の筈だつて、玄關にすわり込んでゐますが?

壯士等　我々が追拂つてやりませう。

星　イヤ、待て、待て……このあひだ發會式を上げて、直ぐに解散を喰つたあの可部や幸田の手先だらう、成程いつか電話をかけて來てたよ、會つてやらう、賓客だ、……汝等は應接室の方へ行つて居れよ。

壯士の一　先生、大丈夫ですか?

星　……ウム心配ないよ。

（壯士等退場、二木に案内されて、二人の見すぼらしい洋服姿の神經質らしい青年が入つて來る。）

星　まア坐り給へ……あの黨は直ぐに解散を喰つたつてね、今の時勢ぢやまア仕方がなからう。

洋服青年の一　壓へ附けられりや壓へ附けられる程我々は地の下へ潜り込んで、ドン底の方へドン底の方へと、根を張つて行く覺悟です。その中には太陽に照らされる芽生え時が來るといふ希望は決して捨てませんが……。

洋服青年の二　壓迫なんかにはヘコたれません。

星　ウム、いつまでもその元氣でやれッ。

洋服青年の一　で我々は、此際、リーフレットを出す考で、その方面に奔走して居ります。

星　フム、祕密出版かい?

洋服青年の一　今度も又壓迫されりやそんな方法を取るかも知れません。

同二　それで創刊號に、先生の月旦をやるつもりです……で、一應、先生に伺ひたいのは、例の問題になつた横濱の埋立事件や、最近では市街鐵道を公有にしないで、田宮一派の、資本家連中にやらせなすつた動機ですね？

洋服青年の一　先生の立場からの御意見を聞いて參考材料にしたいのですが……？

星（葉卷の煙を吹かしながら）　ハヽヽ、そりや君等の考へで、勝手に評論するさ。

洋服青年の一　でせうが、あの電車などは市でやるのが今日の時勢では、當然な事だと思ふのですが？

洋服青年の二　あの當時の板木伯の意見などはよく時勢を見越してゐはしないでせうか？

星　……役人根性の奴に任せ切りぢやまだ〱持てあますよ、……　政治つてものは、理想を見失つちやいけないが、より以上、現實にしがみ附いてゐなけや、足が宙にぶらさがるんだ。

洋服青年の一　先生はあゝした事件で……その……多額のコンミツシヨンを取られたといふ噂ですが……？

同二　勿論、先生の周圍の子分たちが、先生の名を利用したのも多いさうですが・…？

星　君等の方が、吾輩よりはよく知つてるやうだハヽヽハ。

洋服青年の一　何にしても今の資本主義的政治はあらゆる方面に腐敗をひろげて行くばかりです、社會主義の上にすべての基礎を立直さなければ、もう破滅だと思ひます。

洋服青年の二　何も彼も金で汚れつくしてゐるのが現代ですから。

星（頷いて）　ウム、そりや同感だよ、プールドンつて男がうまい事を云つてる、すべての財産は盜賊也つてな。

洋服青年の一（チヨツト面喰つて）　ヘー、先生はプールドンを御研究ですか？

星（微笑）　讀むには讀んでるよ、商賣人、月給取、利子取、賭博、富くじ、皆スリや泥棒と同じだつていふんだらう、金に對しては、今の世はすべて罪惡だ、その灰汁(あく)を拔くのは、マア君等の主張する社會主義くらゐのもんだらう。

洋服青年の二　ヘエ、先生は我々の主張には御贊成ですか？

星　ハヽ、君等のやうに若かつたらな、……だが吾輩は今日の仕事を受持つてるんだ、君等のは明日の仕事さ……

洋服青年二人　はッ……。（と頭をかく）

星　（つれ子を呼ぶ）財布は？

つれ子　ハイ……。（懐から出して渡す）

星　（紙幣をつまみ出して冷靜に）……さア、盜賊のわけ前だ……、持つて行けッ。

（洋服青年二人、顏を見合せて、もぢ〳〵する。）

星　又話しに來るが善い、だが何んでも死身でやらなけやダメだぜッ……（獨語的に）すべてを失ふものはすべてを得る也さ……ハヽヽ。

洋服青年二人　はッ……ぢやア頂戴します。

（叩頭して退場。）

壯士の一　（立現れ）先生、あんな奴に何うして金なんかやんなさるんです。

壯士の二　社會主義つて、國賊ぢやありませんか？

星　吾等も、國賊あつかひされて來たんだ、今でもさうらしいぜ……ところで君等の運動會へも、寄附してやるよ。

壯士の三　でも我々はそんな呑氣な事か……？

星　だが運動會を名にして、放蕩はいかんよ、汽車賃と宿料と小遣ひだけ計算して奧さんから貰へ、さア……。（と財布を抛り出す）

つれ子　ぢやア、こちらへ入らつしやい。（退場）

（壯士等立ちかける。）

星　オイ、横山は、チョイと用がある……皆はあつちへ行けッ。

（横山、一人居殘つて、隅の方へ小さく坐る。）

星　もつとこつちへ來いッ……貴樣ア何うした。

横山　つい、御無沙汰許りいたしまして？

星　そんな事を聽ちやゐないッ、貴樣は不埒だぞ。

横山　エ……何うしまして。

星　とぼけるなッ……家の女中を……おつるを孕せたのは貴樣だ、貴樣に違ひない、眞直に云へッ。

横山　（どぎまぎしながら）イエ、決して僕では……。

星　二木に塗り附けようたつてダメだ、代言人試驗に合格したからつて、此家を出たのは、ゴマ化す爲めだつたんだ……おつるがすつかり白狀した。

横山　でも私は……。

星　何が私はだ……あの女は今、こゝに歸つて來てゐる、貴樣が覺えがないといふなら對決させようか？

横山　あの女が何と云つても、私は知りません。

星　强情張るなッ……貴樣の子が、あの女の腹にゐるんだ、貴樣はあの腹の子の父親だ、この事實が動かせるもんか？

横山　そいつア何うも誰の子だか……。

星　（熱した口調で）グヅ〳〵云ふな、貴樣はあの女と結婚しろッ。

横山　でも先生、それはあんまり押附けです。
星　何が押附けだ。
横山　いかに何んでも……誰が見てもつり合ひません。
星（鋭い調子で）何んでつり合はん？……横須賀の漁師の娘がいけないといふのか？
横山（強い語氣で）ハイ……あんまり素性が卑しいのですから……。
星（かみつくやうに）馬鹿ッ……己の母親も横須賀の漁師の娘だつたぞ、世間でいふ素性の卑しい者の子に強か（したゝか）者が出る、貴族や富豪の、生ッ白い娘の腹からは弱蟲か、絛蟲（さなだむし）しか生れやしない、この己は漁師の娘の子だッ……。
横山　でも先生は別ですが？
星　別だとは何だ……あそこを見い、あのお上人も安房の漁師の子だぞッ。
横山　……先生のためなら、僕生命でも投出すのは厭ひませんが、あんな無教育な女と一緒になるの丈は何卒許して下さい。
星　この頓馬野郎、生命でも投出すと云ひながらあの女と一緒になるのが忌とは、何の口で云つた、よし、忌なら斯うしてやる。
（云ひさま、飛びかゝつて、横山をなぐり附ける。）
つれ子（入つて來て）まア、何うなすつたのです？　そんな手荒な事はお止しなさいませ。（宥める）
星　つるを連れて來いッ、何うしてもこいつと夫婦にしてやる。
（つれ子退場。）
星……何うだ、貴様？　結婚するか？
つれ子　構はず、ズッとお入り。（おつるを連れて來る）
星　つる、汝（おまへ）の腹の子を私生兒にしちや可哀さうだ……一生日かげ者ぢや誰だつて堪らないからな、横山と結婚しろ、己が世話をしてやる。
つる　ハイ……。（泣いてゐる）
つれ子　横山さん、つるは一旦、親の家へ歸つたのだが、身重が知れて、さん〴〵に叱られたので、泣く〳〵又こゝへたよつて來たのですよ、あんまり可哀さうだから私等も默つてそのまゝ世話をしてゐるのです、義理の分つた人なら先生の仰る事に逆らうてはなりますまいよ……貴方、手を放しておやんなさい。
星　つるは、こんな薄情な奴に愛情（あいそ）をつかしちやアゐまいな？
つる……私はもう……御恩は一生忘れません。
星　ウム、よし、さア横山、何うだ？
つれ子　手をお放しなさらなきや、横山さん、口が利けないのぢやないですか？

横山 (苦しさうに) こればかりは……。
星 何んだ? まだ剛情張るか? たゝき殺すぞツ。
つね子 あなた、あんまり亂暴です……先生がこんなにお怒りになつたのは、始めてゞすよ、横山さん、先生におあやまんなさい。
星 さア返事をしろッ。
(壯士等が次の室から頭を出す。)
壯士の一 先生、何うなすつたのです。
壯士の二 横山が先生に無禮を働いたのですか?
星 イヤ、此奴が間違を仕出したから一應見せしめに懲してやるんだ、……しかし皆安心せい、此奴も女を弄んで逃げ出すやうな輕薄男兒ではないんだ、横山とつるとは近い内に結婚するよ。
横山 (泣きながら) 先生、……私が悪うございました……。
星 (手を放し) ウム、當り前だ、始めから分つてる事だ。
(一座、沈默。)
二木 (かけ來る) 政友會本部から電話がかゝりました……。
星 (冷靜に) さうか…今日は市參事會へも廻らなけやならない、ソロ〱出かけよう。
つる お召物は?

星 今日は久しぶりに背廣にせうよ。
―― 廻舞臺又は暗轉 ――

第九場

時
前場と同日

場所
市參事會議室、上手はガラス窓、正面板壁、一隅に扉口、下手にも扉口、中央に黑の大卓を圍んで椅子數脚

人物
星亨、參事會員數名、助役、書記、伊葉正太郎神鞭友常、星夫人つね子、江藤總裁、原啓、板木伯、その他、幹事、豫審判事、醫師、壯士、給仕、市吏員等大勢

○

幕開くと、鼠色背廣服の星亨を始め參事會員數名、大卓を圍んで、議事をしてゐる、助役、書記も雜つてゐる。
參事會員の一 今申しましたやうなわけで、この伊豆の石山の購入は、價格も至當といふよりは、格安に附いて居ますし、市の道路、橋梁、築港、建築その他の工事上、

必要な材料を手に入れるのでありますから、假契約人の名義が手違ひであるなら、それを變更させて、速かに契約したらよろしからうと思ひます、委員會の報告にかねて意見を申上げておきます。

星　この石山は船着からよつ程奧へ入り込んで、甚だ不便た處だと云ふぢやアないか？　格安だ、格安だと觸れ廻つても、運賃その他でとんだ高いものに附く勘定だぜ、それぢや市民に迷惑をかける事になる、それに假契約人のやり口が氣に喰はない、他人の所有を、自分の名義で賣込まうとしたのか曲者だ、こんな惡ブローカーが持込んだのぢや、今更名義を取かへたつてダメだよ、又例のイヤな金錢問題——私腹を肥やすといふやうな問題がとかくくつ附いて廻る、吾輩は絕對反對だ。

（參事會員一度に星の顏を見る。）

參事會員の一　エ……絕對反對ですつて？

星　（頷いて）ウム……さうだ……。

參事會員の二　星さんが絕對反對と來ちや、誰も文句は云へますまいな？

（暫らく沈默。）

參事會員の三　（未練がましく）別にヘンな問題は絡んぢやアゐないのですが……！

星　……いろ／＼聞込んだ事もある、一たい、市の當局者が不埒だ、もつと責任を明かにしなけやいけない……こんな問題は直に撤囘させよう……。

參事會員の四　ぢやアさうしますか！

參事會員の五　さうするより外に、いたし方がないでせう。

助役　それに御異議はありませんな……ぢやア撤囘といたします……これでチョッと休憩いたしませう。

星　ウム、それがよからう……まだ飯は來ないな……オイ君（參事會員二三を呼ぶ）この間に一番もんでやらう。さア盤を持つて來いッ。（と葉卷の煙を吹かしながらくつろいで、聲をかける）

參事會員の三　……（隅の方から將棋盤を持出して）返討に會はんやうに用心し給へ。（コマをならべ始める）

參事會員の六　一たい、どちらが強いんだらう……。

（一方では、ひそ／＼さゝやき合ふ者もゐる。）

星　（コマをならべながら）今日は君、政友會本部で、原啓の奴を二番とも立つゞけに叩きつけてやつて來たんだ、あいつ、口惜がりやがつたよ……サア、來いッ……。

參事會員の三　（さしながら）……サア、どちらがまけたのか！　あやしいもんだ……。

星　角道をあけやがつたのか？

參事會員の三　……飛車が詰まんやうに用心する事だ……。

參事會員の六　（のぞき込んで）王より飛車を大切がるて

んだね。

………………………　…………………

星　いけないッ……。

參事會員の三　そーら、飛車が動けなくなつたぢやアない
か？……待つてか？

星（首をふり）待つてぢやアないッ……。

參事會員の三　ぢやア取つちまひますぜ。

星　馬鹿ア云ふな、これは、此方の手がちがつたんだ。

參事會員の三　ぢやア待つてだな……よし待つてやる。

星　馬鹿ア云へッ、待つてぢやアない、この駒の動き方が
ちがつたんだ。

參事會員の三　……さう二手も三手も前からやり直しぢや
いけないよ。

星　やり直しぢやアない、置き方が違つた丈だ……。

參事會の六　ハ、、、、星亭——押し通るか。

給仕（名刺を持來る）星先生、この方が御面會ですが……
……。

星（見向もせず）何アニ……今、大切なところだ……さ
ア斯う行けば何んでもないだらう。

參事會員の三　人の手を見てからそんな行方をするのはヒ
ドイや。

星　チツともヒドクはない……當り前だ。

給仕　四ッ谷の教育會の委員伊葉正太郎といふ方が、先生
の教育會で仰有つた御意見について御話が聞きたいとか
いふ事ですが。

星（夢中で）教育上……イヤ、今、そんなノンキなとこ
ろぢやアない……さア何うだ？

參事會員の三　桂取りと來たか、……そんなものは惜しく
もないね。

星　もらつてやらア……ソロ／＼王が逃げ腰か？……。

參事會員の三　バカな……。

給仕　先生、何ういたしませう。

星　今はいかん／＼。（給仕、退場）

參事會員の六　フム、東が形勢が悪いッ。

星　弱い奴が負けるにきまつてる、助言はいかんぞ。

（給仕がそれ／＼午飯を運んで來る、參事會員はあち
こちに散つて、食事する。）

參事會員の三　腹が空つては、戰が出來んか？

星　早く片附けてやらう……さア何うだ？

參事會員の三　王手飛車か？……卑怯たな……まア待つて
……。

星　待つてはないよ……堂々たる戰をやれ。

參事會員の三　何處までも勝手な大將だ……こいつはやり
直し……。

星　（苦笑）負けたか？……ぢやア許してやる。
參事會員の三　負けたんぢやアない。
星　負け惜みを云ふなツ……。
（相手が駒を投げ出す。）
星　何うだいハ、、、。（快笑）
給仕　洋食がまゐりました。
星　さうか……（匙を取り）今日は朝から土附かずだ。
參事會員の三　今にギユー／＼云はせるから。
星　君などとは、何うも段違ひだ。
參事會員の三　直ぐ自惚れだから困る。
參事會員の一　もう一つ鼠買上げの問題が出てゐる、あれも早く片附けてしまはなけや……。
參事會員の四　ウム、星君が見えてゐるからサツサとやつて了ふんだね。
星　ウム、あれかい……さうさ……一氣に片附けたが善いだらう。
參事會員の二　ペストも、もう止んだかと思ふと、又とび出して來る、夏向だから實に厄介な問題だ。
參事會員の一　何處まで菌がひろがつてるか分らないから、始末に了へないね。
參事會員の三　惡口を云ふ奴は、我々がペストまで種にして、自腹を肥やすなんて、觸れ廻るのだから癪に障るよ。
參事會員の五　我々までペスト扱ひにするんぢや、やり切れないなハ、、、、。
星　（匙を動かしながら）己はこれから又他へ廻るから、構はず始めかけてくれ。
參事會員の一　ぢやアボツ／＼始めますか？　給仕、助役さんにさう云つてくれ。
（一同再び大卓を圍む、助役、書記も入つて來る。）
助役　ぢやア始めます……議案にもあります通り、捕鼠買上は二十二日即ち、明日限り中止する筈でございましたところが又々、大學で有菌鼠を發見しましたので、まだ油斷がなりませんから、市は更に二萬五千圓の豫算を出して買上を持續せんとの案であります、昨今、市費濫費などいふ謂れない攻撃もある際でございますから、如何かとも思ひますが、何しろ市民衛生上の大問題でありますから是非決行いたしたいので、御計らひする次第でございます。
參事會員の一　謂れない攻撃くらゐ氣にして、このペスト菌を東京全市に撒き散らかすやうな大事が出來したら、それこそ取り返しが附かない、原案に贊意を表します、捕鼠買上續行を然るべき事と思ひます。
參事會員の二　贊成？
參事會員の三　黑死病にあばれ放題あばれられちやかなは

ない、異論はないでせうな。
星　（起上る）吾輩は不賛成だ、……ペスト菌の原因だつて、醫者は何んだ、彼んだ云つてるが眞實の事はまだ分つてゐないらしい、のみならず、これまで市から莫大な金を支出して買上げた捕鼠鼷鼠の中から、まだ一疋の有菌鼠も發見しないぢやないか？　ひどいのになると、鼠を市外の土地から買ひあつめて、商賣にしてる奴もあるていふ事だ、こんな頭の黒い有菌鼠こそ見つかり次第撲殺する必要がある、市の費用も嵩んでゐる折柄だからもうこんな事は止めた方が善い、もしペスト菌が、大學から續々出るとすれば、有菌鼠發見の附近の建物丈構ふことはない、火を附けて燒拂つて終ふんだ、その方がサッパリする。
參事會員の一　エ、燒拂ふんですつて？
星　根こそぎ、燒いちまやア善いんだ。
（參事會員等は額をあつめて、コソ〳〵論じ合つてゐる。）
（この時、五十歳位の、鼻筋の通つた、色の白い、羽織袴着の伊葉正太郎、正面一隅の扉か排して、ツカ〳〵と星の傍にすゝみ寄る。）
伊葉　（額をよせて談話口調で）このあひだ、市の教育會の演說で、孔孟道德は夘れ主義だと罵倒しましたね、舊い道德なんか構はない、何んでもやれ、彼んでも爲せッ、て、君は云ひましたな。
星　君は誰だ？
伊葉　（急に叫ぶ）己は伊葉正太郎、この國賊を倒しに來た。（忽ち白刃閃く）
星　下れッ。
（バタ〳〵と挌鬪が始まる、一同、それと氣附いてさわぎ立つ、椅子で打ちかゝるもあり、中には椅子に倚つたまゝひつくり返るもあり、逃げ出すのもあり、助役始め數人、のしかゝつて伊葉か取押へる、星は倒れてゐる。）
伊葉　ア、仕留めた……國賊を誅した……愉快だ……逃げかくれはせん……。
（ドタバタと吏員や給仕や多人數が出入して混亂する。）
伊葉　（引かれ行きながら）思ひ知つたか？……斬奸狀は懷にあるぞ……。
（扉口に消える。）
（星の倒れた周圍に、人の黒山が築かれる、巡査や醫師が駈けつける、やがて豫審判事、檢事の一行がくり込んで檢屍、證人しらべの混雜が一しきり――それはすべて、人の黒山の蔭で進行する――）

(やがて、雪の如き白布に包まれた星亭の屍體は、大卓の上に安置される、鉢植のバラがその枕頭に置かれる。)

(星夫人のつれ子が、人々に導かれて、靑ざめた顏色で、悄然として入つて來る。)

助役　何うもとんだ事になりまして……。

參事會員等　何とも、申上やうもございません……。

(夫人は、目禮して、靜かに屍體の方に歩み寄り、默拜したまゝぢつと立つてゐる――沈默。)

神鞭　(飛ぶやうに入つて來る)　ダメかい……ダメかい、(いきなり、屍體の傍へ飛んで行き)　殘念な事をしたなアッ……。

助役　……咄嗟の出來事でございました……まるで夢のやうで……。

神鞭　……ア……奥さん……殘念ですなッ……。

つれ子　(落着いた、しんみりした調子で)　こんな事にならうとは思ひもかけませんでした……。

神鞭　兇漢は取押へたんだつて……何者が唆かしたのか？

助役　唯の無頼漢とは思へませんが、今、取調べ最中でせう。

參事會員の一　斬奸狀だとか、何だとかいつてゐましたから、淺はかな考からこんな事を仕出したのだと思ひます。

神鞭　(罵る口調)　大馬鹿めッ……とんだ事をしやがつた……急所をやつたんだな？

醫師　ハイ、眞先に左の肺部をつき通したのが致命傷です、それから二三刀斬りつけてゐます、手口が唯の素人ではありますまい。

神鞭　(嘆息)　得難い人物を殺しやがつた……人民のために戰つてる總大將を暗打にしやがつた……星は手段を撰ばなかつたが、こんな卑怯な手段は、手段の中に勘定してなかつたんだぞッ……、ア今朝、會つたばかりだのになア。(屍體に取附いて男泣する)

助役　……市のためにいろ〳〵大きな仕事を計劃されてゐたのですが、何も彼もダメになりました……。

神鞭　市の爲めばかりぢやアないよ……己に云はせりや今に、日本の大黑柱になる男だつた、あんまりもろい折れ方をしたなア……。

參事會員等　江藤總裁が見えました。

江藤　(憂愁に滿ちた顏色で、肅然と入つて來る、原啓がついて來る)……電話を聞いて嘘かと思つたが、何うも驚いた事が出來たもんだのう、さういへば今日は金曜日で、シーザーの刺された日だ……、(屍體を默拜)……殘念だツ……何といふ野蠻な眞似をやるんだらう、また封建時

代の人間が、殘つてる……。

神鞭　侯爵、あなた方もあんまり封建時代の夢を見過ぎてゐて藩閥に長くこびりついてゐられたので、星君もあんな苦戰惡鬪をやりつゞけて來たんです……あなた方の目をさまして上げた男はこんな死態です。

江藤　ウム、さう云はれゝば、さうかも知れん……オ、奧さん、何うも何ともいへない事で。

つれ子　（氣丈に）ハイ、生前いろ／＼御世話になりました……あの、去年の大病で死んだよりも、まだこの方が……さう思つて私……あきらめます。

（沈默。）

原　（長い默拜を了つて）どうも夢のやうな事だ、午前、本部で二人が將棋をさしたばかりだつたのに……何うも夢としか想へん。

參事會員等　ア、板木伯が見えました。

板木　（皆に目禮）イヤ、電話で驚いて了つた……惜しい人物を無くした……（默拜）……奧さん、とんだ事になつたもんだね……。

神鞭　原君、君も剛情だが、星にはかなはなかつたらう、しかし斯うなつちや、星の志のつげるのは、政友會ぢや、まア君くらゐなもんだぜ。

原　ウム、己も大抵の奴には負けないつもりだが、星には一目おいたよ……あの後繼は容易ぢやアない、だがあの氣象ぢや疊の上で死ねなかつたのも、不思議でないやうな氣がするよ。

江藤　（淋しい笑）さういふ君も疊の上で死ねるか、何うか、あぶないもんだ、まア氣をつけろ事だ。

原　總裁も老いて益々御壯んだから何んな死ざまをなさるか、分りませんよ。

板木　（そこへ近づいて）……先に立つて行く者は、皆犧牲になる覺悟がゐるだらう……尤も吾輩は、運がわるくて、殺され損つた方だらうが！　（淋しい笑）

（黨員、壯士が數十人黒く群れて扉口から肅然と入つて來る、屍體の前に半圓形に列座して合掌默拜する。）

（ガラス窓には、赤い夕の陽の光り、つれ子夫人、江藤總裁始め、立ちながら嚴肅に、默拜。）

大沈默の中に　カーテン

島村抱月篇

清盛と佛御前（二幕）

第一幕

治承四年三月、西八條の邸、午後の景。幕あくと、法師琵琶を彈き止む。

清盛　やあ、御苦勞〳〵、御坊は鼓も上手と聞いたが、なかなか管絃のたしなみが深いと見える、

法師甲　お恥かしい手すさびでございます、もつとも此ごろ叡山の法師仲間には琵琶や鼓を弄ぶことが流行でござります。

清盛　結構ぢや、私も管絃の遊びはすきぢやが、併し御坊、管絃が面白いといふのは、あれはみんな聞く人の心からぢやなう、自分の身がおもしろければ、聞く言葉もおもしろい、自分の身が悲しければ、聞く音樂も悲しい、此の世は天晴淨海が世ぢやと思ふと、其の心をしらべて奥れるから管絃の音までが浮立つて面白く聞かれる、御坊などは、いつも菩薩や天女と往來して居るから自然と管絃の音が極樂淨土の音樂に聞えるであらうな。

法師乙　はゝ、はゝ、それ程でもござりませぬ、斯うして三法に身を捧げては居りまするが、やはり肉身の息は通うて居ります、極樂淨土の音樂よりも、此の世の女菩薩方の爪音の方が眞身にこたへて有りがたいと思ふ時もござります。

清盛　はゝ、はゝ、御坊も腥坊主の方ぢやな。

法師乙　是れは恐れ入りました、入道さまのお仕込で段々臭い人息が通うて參ります、しかし入道さま、常節の法師つれは、昔と違ひまして、みな元氣のものばかりでござります、口でこそやれ淨土ぢや穢土ぢや極樂ぢやと申しますが、内心では未來の淨土よりも、此の世の穢土の方が大すきな手合ばかりでござります、殊にかうして美しい女菩薩方のお酌で一こん頂いて、よい心持になつてまゐると、なか〳〵此の世の執着は斷たれませぬな、あゝ、世は末になりました、末世王法なげかはしい次第でござりますな。

清盛　やあ、御坊は大分まゐつたやうぢやな。

法師甲　此の者は酩酊いたしますと無作法な事ばかり申して恐れ入ります、あまり長座をいたして、無禮をはたらいてはなりませぬから私どもはこのまゝ御免を蒙りたうござります。

法師乙　これ朋輩、そのやうな事は言はぬものぢや、たと

ひ酩酊いたさうがいたすまいが、この順念、思うたこと
は屹度言ふ、今時の法師どもは、あれはみんな大盗人ぢ
やが。

法師甲　これ〳〵順念、何をお言ひなさる、そのやうなた
はけた事を言ふものではない、殊にこゝは入道様の御前
ではないか、氣をおつけなさい。

法師乙　御身こそ何をお言ひなさる、此の順念決してたは
けた事は申さぬ、山法師どもが近年の騒は何ぢや、何か
と言へば、やれ法皇さまへお味方をする、いや上皇さま
へお味方をすると、山の輿を擔ぎ廻つて暴れ散らす、つ
まりは俗人原の喧嘩口論、切取強盗と何が違ひますか、
荒法師どもが法衣の袖をまくつて戰をする、殺生戒も女
犯戒もあつたものかい、此の順念はまだ殺生戒は犯さぬ、
人をあやめた覺えはない。

清盛　女犯戒はどうぢや、女子をあやめた覺えはないかな。

法師乙　いやあ入道さま、之はきつい事を仰せられます、
此の順念五十になりまするが、いまだ曾て女子に手をか
けた事はござりませぬ、たゞ斯う遠くから女菩薩たちの
御來迎を拝んで居ればそれで結構なのでござります。

法師甲　さあ〳〵、もうよいからお暇を申し上げなさい、
立ちませう〳〵。

法師乙　まだ言ひ居るか、入道さまからの許しの出ぬ内に
立つのは無禮ぢや、これからお山へ歸つたら、またあの
やかましい騒ぎの仲間入りをせねばなるまいがな、もう
當分お山へは歸るまいよ。

清盛　叡山の騒ぎといふのは何ぢや。

法師甲　いえ、なに、些細な事でござります。

法師乙　些細でもあるまいぞ、入道様、それは斯うでござ
ります。

法師甲　これ〳〵お止めなさい、あのやうな内輪事を申し
上げて、折角の御酒興を殺いではなりませぬ。

法師乙　いや内輪事ではない、入道様、實はこのたび嚴島
へのお行幸につきましてな、山のものどもに不服がござ
りまして。

清盛　その事なら、私が疾くと叱つて置いたから、もう騒
ぐことは無い筈ぢや。

法師甲　さやうでござります、入道様のお聲がかりでもう
鎭まつた跡ぢや、順念は何をお言ひなさる。

法師乙　いゝや、まだ鎭まりませぬ、尊公はさうした僞り
を言ふからいけぬ、成程上部は一旦鎭まりましたが、ま
ことの不服はまだなか〳〵治まりませず、より〳〵不
穏の事などを言ひ觸らす儕が多うござります、拙僧それ
がうるさうて、斯うしてお山にも居りませぬやうな次
第で、なに尊公とても同じ思惑ぢやといふではないか、何

も入道様の前ぢやからと言うて、取りつくらうて嘘をいふことはない、嘘をいふことは無い。

法師甲　併し其の騷ぎは打ちすてゝ置けば自然と治まります、一旦入道様のお聲がかりで、鎮まつたものを内輪の不服など申し上げるのは、入道様の御威光に傷をつけるといふものぢや、さあ／＼其の話はもうお止めなさい。

清盛　いや分つた／＼、その事なら今一度私が叱つてやる、さうしたら皆も落ち着くであらう、さあ、今一めぐり酒を流行らせい。（侍女酒をついで廻る、清盛立つ、祇王をつれて來る）祇王、そちも何か歌はぬか、そちはいつも便りなささうに默つて沈んでゐる女子ぢやな、そちは今に尼法師にでもなるのぢやらう。

祇王　でも上様にも、此の節は管絃を聞いてお騷ぎ遊ばすことがございます、私はあれが氣がかりでなりませぬ。

清盛　ふむ、そちもそれに心づいたか、私もな、此の頃は時々氣が弱くなつてな……ま、やめい／＼、今の私が身の上に騷ぎの種はない筈ぢや、いま日本の天下は私が威光で光つて居る、なう祇王、そちとても私が寵愛してやればこそ、それ程美しく見えるのであらうが。

法師乙　順念はもう酩酊いたしました、こゝらでちよつと御免を蒙りまして。

（座をすべつて緣端に出て柱によりかゝつて、うつらうつらとして居る）

祇王　それは上様の御威光でございますもの、その前に出ましたら、どんな者でも消押されて了ひます、それでも祇王には、また祇王のよい所が……幾らかあるとは思し召しませぬか、ほゝ、上様如何でございますか。

清盛　いやさうでない／＼、私の物ぢやと思ふから、それで美しいのぢや、さう思ふと、咲き盛つたあの櫻よりも、暖いその肌の色が遙に美しいぞ、もつとも、よい女子だけは、他のものぢやと思ふと尚ほよく見えることがある、えゝ？　祇王なども、若い仇し男を見て、さうした心を起すことがあらうな。

祇王　私は、たゞもう上様の大きな光に包まれて、外のものは何も目に這入りませぬ、斯うしてぢつとお惠みに身を任せて居りますれば、此の上欲しいと思ふ願ひは一つも起りませぬ、たゞ此のやうな、身に餘る榮華がいつまで續きますかと、それが氣がかりでございます。

清盛　そちはいつも心元なささうな奴ぢやな、ちやうどあの花のやうな奴ぢや、見事は見事ぢやが、今にも散りさうで手が離されぬ、私までが、どうかすると釣り込まれて一緒に心元ない思ひをする、さうかと思ふと、時々はもう、そちが側にゐても私には何の手ごたへもない心地がする、そちの居ることを忘れて了ふことがある。

祇王　さうして私は、段々と上樣に棄てられて行くのでございませう、心元なうございます。

清盛　はゝ、はゝ、今私が言うたのは、そちを疎略にするといふのではない、そちがあんまり弱いからぢや、もつと強うなれ、強うなれ、さ、もつと近う寄つて一つ飲め、私はな、そち達のやうに、ちよつとすると、もう直く此の世の事にあきらめをつけて、此の上望みは無いなどと、ちゞこまつて了ふことは嫌ひぢや、そち達も私の側にさへ居れば、少しも氣づかふ事はない、平家の運勢は千萬年ぢや、なう資成。

資成　あの櫻を見るにつけましても、誠に世は平家の天下でござります。

法師乙　併しあの櫻は、今が眞盛りと見えますから、やがてもう、散るかも知れませぬ。

資成　（目で制しながら）これ〳〵、何で其のやうな不祥な事をおつしやる、寢ぼけてでもおゐでなさるか。

法師乙　いや、御當家の御代はさうではござりますまいと申すので。

清盛　なう御坊たち、考へても見い、保元平治このかた、此の入道は隨分身を棄てゝ上へ奉公をして居る、さればこそ、跡の月には新御門もいよ〳〵御卽位で、當家は准三后の宣旨を蒙つた、鹿ケ谷の一類、法皇の御謀叛でさへ、此の淨海には讓はぬではないか、法皇さまの鳥羽においでなはすのを、世間は何かと言ふさうぢや、淨海の身にもなつて見て呉れい、あれほど長いお間柄でありながら、つまらぬ奴等の口車に乘つて、當家を亡さうとされる、それもお上へなら此の淨海が首一つ差し上げて、少しも惜しいとは思はぬが、お上といふのは上部のこと、裏には當家の繁昌を嫉む輩が牙を磨いて待つて居る、當家が亡びればそれらのものゝ天下になるのぢや、なう御坊、それでも私は負けて居らねばならぬぢやらうか。

法師甲　御もつともと存じます、たゞ天下を味方になされて、佛法王法の惜しみをお受けなされぬ御用心が（此の時法師乙緣端に音を立てゝ眠りこける）肝要と存じます。

清盛　やめい〳〵、此の淨海が生きて居る限りは、日本國中、當家に指を差すものは一人も居らぬ。

（此の時取り次の侍士出で來る。）

取次　先程から白拍子の佛と申すものがお車寄に參つて居りますが、是非一度お上へお目通りが願ひたいと申し張つて、何と叱つても歸りませぬ、いかゞいたしませうか。

季貞　これ〳〵御前へさやうな推參な事を申し上げるとは何うしたのぢや、それは乾度狂人であらうから、早く引き出すがよい。

侍士　（立ちかゝる）私共が參つて引き立てませう。

取次　いや、引き立てますなら、世話はございませぬ、私共が引き立てますから、どうか其まゝにお出で下さい。

祇王　まあ、待つて下さい、上樣、あの、佛と申しますのは、此の頃洛中に名高い舞の名人でございませう。上樣のお氣晴しに、どうかお呼び入れ下さいませ、それに白拍子と申せば、私とても元は同じ身の上でございます、折角尋ねて參つたものを、すげなくお歸しなさるのが本意でもございますまい、呼び入れておやりなさいませ。

清盛　いや、ならぬ／＼、そちが居る西八條へ、何うしてさやうなものが推しかけて參つたか、不埓ぢや、神と言はうか佛と言はうが、祇王の居る所へ足踏みもかなはぬと、早くさう言へ。

祇王　いえ／＼、私への義理をお立て下さるのは嬉しうございますが、お願ひでございます、どうか呼んでやつて下さいませ、佛御前とやらを、私も見たうございます。

清盛　はゝゝ、遠慮をするな、そちに義理を立てるのではない、私がそちより外の女子は見たうないからぢや、追ひ歸せ／＼。

取次　はッ。（立つて行く）

祇王　女子の身を追ひ立てゝ、恥をおかゝせなさるのはむごうございます、召し返して、せめて御對面ばかりでもしてやつて下さいませ、祇王がゐて歸したと申されては、私の女子が立ちませぬ、資成どの、どうぞ止めて下さいませ。

資成　ごもつともではございますが……

（立ちかけてもぢ／＼する。）

清盛　よし／＼、それ程に言ふなら呼び返してやれ、資成行つて連れて來い。

資成　かしこまりました。

（急ぎ足に出で行く、一座動搖する。）

清盛　さあ、祇王、もつと近う寄れ、斯う並んでゐて佛とやらを見てやらう、どのやうな女子であらうな。（祇王の手を取る）

祇王　でも上樣、佛御前が私よりも美しい女子でございましたら、上樣はどうなさいます。

清盛　そちより美しい女子が、日本國はおろか唐にも天竺にも居る筈はない、安心して居れ。

祇王　まあ、上樣のお口のよい事、でも上樣はもう私などはお忘れなさるのでございませう？

清盛　そちを忘れるとは？

祇王　先程さうおつしやつたではございませぬか。

清盛　あゝ、またあの事を言ひ出したか、あれはな、そちばかりを忘れるといふのではない、そちが側にゐること

を忘れるときには、私は京の町まで忘れてゐる、そして何處かもつと／＼華やかな所を心の中に描いて樂しんで居るのぢや、そちもよく、京はいやぢやと言ふではないか。

祇王　私は京を離れて、極樂淨土のやうな處へ行きたいと思うて居ります。

法師甲　極樂淨土の御誓願は御奇特でござります。

法師乙（獨言のやうに）南無阿彌陀／＼。

（此の時資成佛をつれて登場、佛、下手に平伏する。）

資成　車に乘つて歸りかけました所を、呼び戻して召しつれましてござります。

清盛　あゝ、さうか、佛とやら、よく聞けよ、私はな、そち等がやうな推參者に會ふ筈ではなかつたが、こゝに居る祇王が達てと申すから會うてやるのぢや、顏を上げて見せい、そして祇王に禮を言へ。

佛御前（顏を上げ大膽にぢつと清盛を見て）はいありがたうございます、冥加でございます、どうぞお見知り置き遊ばして……

清盛ぢつと佛の顏を凝視して其の美貌に驚き、覺えず祇王の手を取り落とす、祇王もはつとして身を退く。）

清盛　おゝ、そちが佛か、私はどうやらそちを見たことがあるやうに思ふが、まあ近う寄れ、もつと近う進め、そちは一體どこの者ぢや。

佛御前　はい、私は以前福原に居りましてございます。

清盛　ふむ、では福原でそちに會うたかな、私は少しもおぼえて居らぬが、とにかくそちの顏は、私にはどうも初對面のやうには思はれぬ、昔馴染にめぐり逢うたやうな氣がする。

祇王　では佛御前は、上樣と福原以來のお馴染でございますか。

佛御前　祇王さま、御免遊ばせ、私も志願の筋がございまして福原には居りましたが、ぢき／＼上樣にお目通りいたした事は一度もございませぬ、ましてお馴染などとは、思ひもよらぬ事でございます、上樣がおたはむれをおつしやるのでございます。

妓王　さやうでございますか、上樣。

清盛　いや、たはむれではないが、ぢき／＼會うた事もないやうぢや、たゞ不思議とこの女子の顏が私には昔馴染のやうに思はれるといふまでぢや、氣にかけるな／＼。

佛御前　かやうなお席へ推參いたしまして、祇王さまへ申譯がございませぬ。

祇王　いゝえ、少しも御遠慮には及びませぬ。

清盛　遠慮するには及ばぬ、それで、そちが今日まゐつた

のは何か願ひの筋でもあつてか。

佛御前　お願ひと申しますのは、たゞ斯うして一度上様にお目通りさへかなひますれば、それでよいのでございます、私も是まで名ある方さまへお目通りのかなうた數は多うございますが、たつた一つ、今日本で一の位におゐで遊ばす上様に、お目通りがかなはぬ許りに、私は生甲斐のない思ひをいたして今日までこの西八條の御殿を夢現に慕うてゐました。

清盛　それ程ならさうと早く申し出でればよいのに、つまらぬ所に氣を兼ねたものぢやな、さ、そちに一つ酌をして貰はうか、（侍女銚子を渡す、佛取つて酒をつぐ、其の間）そこでそちは、私に會うてどう思ふか、これで滿足したと思ふか。

佛御前　お目通りして、優しいお言葉まで受けました上は、私はもう故郷に歸つて、一生藪草(やぶくさ)の中に埋もれましても、殘り惜しいとは思ひませぬ、今日のお目見得を、一生の思ひ出でにいたします。

祇王　藪草の中とやらにお歸りには及びますまい、一そこのまゝ上様のお側にでもお出で遊はせ、上様も屹度その方が御滿足でございませう、なう、資成どの。

資成　（當惑して）はゝ、はゝ、佛どの、もうそろ〳〵御退きなされてはいかゞでございますか。

清盛　いや、まだよい、まだよい、祇王にも酌をしてやれ。

祇王　いゝえ上様、私はもうたんと頂きました、どうぞお構ひなさいますな。

佛御前　祇王さまにも、お目通りのかなひましたのを、身に餘る面目と存じて居ります。

祇王　いゝえ、私などは物の數でもございませぬ、却つてお邪魔であらうとお笑止に思うて居ります、それとも、何か此の祇王にも上様と同じくお氣に召した所がございますか。

佛御前　ほゝ、それはもう、上様のやうなお方に是れ程思はれてお出で遊はす、日本一の果報なお方にお目にかゝるのでございますもの、女子冥加と思うて、嬉しく存じて居ります。

清盛　なう祇王、佛は思うたよりも賢い女子ぢや、そちが妹と思うて召し使うてやらぬか。

祇王　私には、今居ります妹一人で澤山でございます、御所望なら上様御自身でお召し遊ばせ。

法師甲　資成どの、季貞どの、一旦この席をおひらきなされて、上様を奧へ御案内したらどうぢやな。

資成　季貞。それがよろしうございませう、一度席をお改め遊ばして。

清盛　いや、まだよい〳〵、大分興が湧いて來たぞ、此の

尊い春の日を、さう心忙しくするものではない。心ない雑人原ともぢやな、そち達も今少し酒を過ごせ。（侍女酒をつぐ）

（皆々どよめく。）

佛御前　どうぞ一つお聞かせ下さいませ

清盛　いや、そちにさう言はれると二の句は出ぬわい、そち一つ歌うて聞かせい、舞うて見せい、なう、祇王、おもしろからうぞ。

祇王　どうぞお聞かせ下さい。

佛御前　音にきこえた祇王御前のお目通りで何で私風情が歌どころでございませう、おなぶり遊ばしますな。

清盛　いや〱遠慮は無用ぢや、私が所望する、辭退するには及ばぬ、さ、早く歌うて聞かせい、舞うて見せい。

佛御前　今はこのやうな身なりでございますから、のちほどまた舞の裝束で御目通りが願ひたうございます。

清盛　烏帽子水干の支度なら、次の間でせい、私は是非今そちの舞が見たいのぢや、さ、これをあちらへ案内して舞の裝束をいたしてやれ。

（侍女一人佛を案内して次へ行きかゝる。）

佛御前　（ちらと祇王を見る、祇王臆して俯く、清盛の方へ媚を寄せて）ではしばらく御免遊ばしませ。

清盛　おゝ、早く行つて支度をせい、それから皆のものは廊へ出い、（清盛立ち上る皆立つて席を改める。）おゝ、御坊は鼓が上手ぢやといふから、一つ舞に合せて打つて下さい、これ誰れか鼓の用意をせい。

（侍士一人次へ鼓を取りに行く。）

法師甲　いや、私どもの鼓はとてもこの席で打つやうなものではございませぬ、平に御辭退申上げます、愚僧どもはもう御免を蒙つた方がよろしうございます、これ順念順念目をおさましなさい、もうお暇まを申上げよう。

（法師乙、目をさまし縁に坐つたまゝ不思議さうに一座の光景を見廻してゐる。）

清盛　いや、ならぬ〱、是非に打つて貰はう、佛はどうした待たせ居るな、遲いぞ〱。

（立つて次の間の方へ行かうとする、途端に佛、水干を着、舞の姿で出で來る、從ふ侍士鼓を持つて來て法師甲に渡す。）

（此の間祇王は忘れられたやうに、手持無沙汰で片隅に悄然として坐つてゐる。）

やあ、佛か、美しいぞ〱、まあそちらを向いて見せい、目がさめるやうぢや、祇王よりも美しいぞ。

法師乙　南無阿彌陀佛〱。

清盛　さあ舞へ、さあ舞へ。

（清盛座に就く、佛。席の中央に身構して。）

佛御前　（檜扇をかざし、今様を坐つたまゝ歌ひ、後起つて歌ひながら舞ふ）

「君をはじめて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、お前の池なる龜岡に、鶴こそ群れてあそびあへれ」

德是北辰　椿葉影再改　尊猶南面　松花色十廻

（貰歌、亂舞。）

「よしさらば、心のまゝにつらかれよ、さなきは人の忘れがたきに」

清盛　（昂奮して）やあ〱、そちは舞も歌も上手ぢやな、祇王にも劣らぬよい聲ぢや、殊に私が上を歌うた歌が氣に入つた、かはいゝ奴ぢや、私も入道の身ぢやから、今日からは、さつぱりと佛の御弟子にならうぞ。こつちへ來いこつちへ來い。

（清盛歡喜極まつて昂奮した體で佛の方へ立つて行き、手を取つて奧へ連れて入らうとする。）

佛御前　まあ上樣、何事でございます、お放し遊ばせ、お放し遊ばせ。

清盛　いや〱放さぬ〱、私はそちに相談がある、まあ奧へ來い。

（二人奧手へ這入る、侍女等ついて這入る、祇王覺えず立ち上り、奧手を見込みて立つ。）

法師乙　とろ〱と居眠をして居るあひだに、世の中が逆さまになつたやうぢやな。

資成　飛んだ事になつたものぢや。

季貞　祇王さまもお氣の毒な……

（皆々祇王の方へ氣をかねる。）

法師甲　あゝ、さま〴〵の世の中ぢや、私等は有爲轉變の教を目の前に見てゐるのぢやな、では皆さま、愚僧どもは一足お先へ失禮いたします。

法師乙　またあの嵯峨の庵で一休みして行かうか、どれどれ。

資成　我々も兎に角下つて居らう。

季貞　それがよからう、お次へ下つて居りませう。

（皆々行きかける。）

侍女　大夫判官さま、お召しでございます。

季貞　あ、また何か御用があつたかな、何御用であらう？

（考へながら一人奧へ行く）

（皆々退場。）

祇王　（泣き伏して、やがて顏を上ぐ）えゝ口惜しい、斯うしては居られぬ、あまりと言へば非道なお仕打、私も

奥へ行つて上樣の存分にして貰ふまでぢや。
（血相をかへて立ち上らうとする時、奥から季貞出て
來る。）
季貞　祇王さま、何うなさいます、おかはいさうではございますが、唯今入道さまからお暇まが出ました、あなた樣お出での限りは佛御前が御遠慮なさるとかで、早々此のお屋敷をお立ち退きなされいとの事でございますぞ。
祇王　えゝ？　大夫判官さま、それは何事でございます、あなたはまあ何をおつしやるか。
季貞　祇王さまに、上樣からお暇まが出たと申すのでございます。
祇王　まあ、それはまことでございますか、私は夢を見て居るのではございますまいか。
季貞　夢でも何でもございませぬ、急いでお立ちのきの用意をなさい。
祇王　それにしても、あんまり淺ましいではございませぬか、人の心がさうまで〳〵と變るものとは、私はどうしても思はれませぬ。
季貞　そこが入道さまのお氣質とお諦めなさる外はありますまい、今日は一旦お引き取りなされて、入道さまのお心の解ける日をお待ちなさい、茲で何うなされうとしてもすべはございませぬ。
祇王　では、せめて佛御前に一目會うて、言ひたい事がございます。
季貞　お恨みは御もつともでも、今おあひなされてはお爲になりませぬ、ま、ま、茲は一旦素直にお立ちなさい。
祇王　いえ〳〵、恨みは申しませぬ、たゞ一言言つて置きたい事がございます、お願ひでございます。
季貞　いけませぬ〳〵、お氣の毒でも、今日は是非このままにお下りなさい、兎も角お次へなりとも下つて、それからの御思案になさいませ、さ、さ。
（手を執つて引き立て退場す。）

――幕――

第二幕

舞臺面、前と同じ夜の景。

清盛　これ〳〵、まてといふに、なぜそのやうにあわたゞしう逃げて行くのぢや、佛、佛！
佛御前　（衣裳をかへやゝしどけない樣子で檜扇を持つたまゝ早足に出て來る、そして振りかへつて輕く扇で手拍子を取つて）はゝ、はゝ、お歳のせゐで、お足元があぶなうございますよ、さ、こゝまでお出で遊ばせ、早くつかまへて御覧遊ばせ。

（清盛わざと足をゆるめて出て來る、つゞいて侍女一人あかしを持つて出て前面にすゑる。）

清盛　何事ぢや、けたゝましい騒ぎをするではないか。

佛御前　でも上樣があんまり御無理をおつしやいますもの。（二人並んで前の方へ出る）

清盛　嘘を言へ、私が無理を言つたのではない、そちが何かひどく物におびえたではないか。

佛御前　ほゝ、上樣、お氣がつきましたか、では教へて差しあげませう、上樣のお頭の影がそれ／＼、あの障子にも映つて居ります、大きな入道さまではございませんか。

清盛　はゝ／＼、大入道ぢやな、あゝいふのがまことに出て來たら、そちはどうする？（佛、清盛に寄り添うてかしこまる）それ見い。そちもやつぱり弱蟲ぢや、祇王めがよく物おぢして、陰氣な事を言ひ居つたが、そちも似たものぢやな、祇王の事ばかり悪くは言はれぬぞ。

佛御前　はい／＼、どうせ私風情が祇王御前の事など、とやかう申してはすみませぬ、御免遊ばせ。

清盛　祇王が物におびえると、屹度この京の都を私と一緒に出たいと言つて居つたが、ではこゝを出て何處とあては無いといふ馬鹿な奴であつた、あいつはいつも宛の無い愚痴ばかりこぼす女であつたよ。そちは祇王よりもしつかり者ぢやと思うたに、案外弱い奴ぢやな。

佛御前　實を申せば上樣、先程は全く恐ろしうございました、あの細殿を御覽遊ばせ、あの暗い中を祇王御前が恐ろしい眼でこちらを睨んで、魔物のやうに飛んで行きました。

清盛　たはけを言ふな、祇王は疾くに追ひ返したではないか、それぢやから女子といふものは對手にならぬ、そちだけは男のやうにすつきりした事を言ふと思うたに、やつぱり駄目ぢやな。

佛御前　でも上樣がこの都をお出で遊ばすことがございましたら、私がよい所へ御案内申しませう、私はたんと／＼よい所を存じて居ります。

清盛　おゝそれは何ういふ處ぢや、私も實はもう此の都に飽きて來たから、そちの案内する所へなら行かぬ事もない、どこがよいのぢや。

佛御前　それは、もつと／＼明るいよい處でございます、この京の都は、思うたよりも日影が薄くて、上樣の御榮昌にも似ず、何處か淋しい所があるではございませぬか、日脚のさゝぬ隅々が多うございます。

清盛　私もこの頃さう思ふことがある、そちと私とは心が通ふと見える、そちに案内を頼んだら定めてそちの顏のやうに華やかな美しい處に連れて行くであらう、私はそちの跡にならゝ何處へでもついて行く、そちは私の案内

者ぢや。

佛御前　乾度ついておいで遊ばしますか。

清盛　おゝ、ついて行く、そのよい處といふのは何處ぢや、一體そちは何處で生れて、何處に育つた女ぢや、今までに何んな男と連れ添うたか、白狀せい。

佛御前　お聞かせ申しませうか。

清盛　おゝ言へ〳〵、早く聞かせい。

佛御前　でも聞いた上でお腹立ち遊ばすやうな事がございましたら。

清盛　構はぬ〳〵。

佛御前　おやき遊ばしますなよ。（侍女の居るのを見て躊躇して）

清盛　やかぬ〳〵、あちらで其の話を殘らず聞かう、隱さず物語らぬと承知せぬぞ、さ、奥へ行かう。

佛御前　いえ〳〵こゝがおもしろうございます、さ、あなた樣もこゝへお出で遊ばせ。

（清盛を引きよせ椽端へ並んで立つ、侍女褥を取りに行かうとする、途端に風が吹き入つて燈（あかし）を消す。）

侍女　御免遊ばしませ、すぐに燈を持つて參ります。

佛御前　いえ〳〵燈には及びませぬ、燈の無いのが却つて風情でございませう？　上樣。

清盛　暗いな、そちは淋しうはないか、私は暗い處が大きらひぢや。

（此の間侍女褥をすゝめる、二人は猶ほ立ちながら。）

佛御前　でも、まあ御覽遊ばせ、あの淋しい景色を惜しいとも思召しませぬか、（風また吹き入る）おゝ冷たい風──髪の毛が總毛立つやうでございます、（清盛に寄り添ひながら、ふと傍を見て）あの濱邊の邊の暗うござりますこと、若しや先程のがまことの祇王御前であつたら……

清盛　引つとらへてそちが思ひのまゝにしてやるまでぢや。さあ、約束した話を早く聞かせぬか。

佛御前　まあちよつと、あの月を御覽遊ばせ、風に吹きさらされて、白けて居りますこと、それにまあ花吹雪の散りますこと、淋しい中に賑かな、不思議な景色ではございませぬか。

清盛　これ佛、そちは私をじらして居るな。

佛御前　でも、これ程の景色を仇にお過し遊ばす上樣なら、私は嫌ひでございます、人に情の厚いものなら、月夜にもやはり情が無くてはなりませぬ、上樣は月夜の眺めには少しも情をおかけなさいませぬか。

清盛　むつかしい事を言ひ居るな、なるほど之はよい景色ぢや、あわたゞしい花の散り方をする、さあ、そこでそちの話はどうぢや、そちが見て來たよい處といふのは何

處ぢや、其の男といふのは何ものぢや。

佛御前　まあお待ち遊ばせ、上樣が若し花なら、此のやうにあわたゞしい中で散りますのと、おつとりした暮合の空に一ひらづつ散つて行きますのと、どちらがお好きでございますか。

清盛　また妙な事を言ひ出したな、それは靜かに散つて行かれるものなら、其の方がよさゝうに思ふが併しわしにはそれは出來ぬ、私の體にはいつも風が吹いて居る、これ、この胸に手をあてゝ見い、この通り胸には大波が打つてをる、それから此の手、それしつかりと握つて見い、熱いであらう、燒けつくやうであらう、それから此の頭、頭の中はいつも此の風が立つてをる、散るならあわたゞしく散るのが私の本性ぢや。

佛御前　ほんたうに上樣のお手の熱いこと、それからお胸の動悸も高う御座いますこと、私は今はじめて上樣のほんたうのお心を聞いたやうな氣がいたします、私も上樣と御一緒にあわたゞしう散つて見たう御座います。

清盛　あゝまたつまらぬ事を言はせをる、私は散際の相談なぞは嫌ひぢや、さあ〳〵今度こそそちの話の番ぢや、其の男は何ものぢや、今生きて居るか死んで居るか。

佛御前　二人は殺され一人は生死の程も分りませぬ。

清盛　なに、二人も三人も男がゐたといふか、それは一體どうした譯ぢや、どれ〳〵私が手を引いてやるからあの花の中をあるきながら、精しい話を聞かせい、私はもう我慢がならぬぞ、さあ來い來い、（侍女履物なすゝめる、其の方を向いて）そちは次へ下つて居れ、それで其の最初の男といふのは何者ぢや。

佛御前　在所の濱邊にわびしい住居をしてゐた若い男でございます。

（話しながら二人つれ立ち庭に降り花の散る中に姿を沒する、引きかへに祇王硯箱をかゝへて忍びやかに入り來り襖の前に立つて二人の姿を見送り襖に歌を書く終つて立ち上り庭の方を見る途端に出て來る佛御前と顏を見合はす。）

佛御前　おゝ、あそこに祇王御前か……

（清盛にすがりつく。）

清盛　えゝ、また騷ぐか、何事ぢや、そちには祇王が祟つてゐると見えるな。（こちらを見て）おゝ、あれは祇王ぢや、おのれ邪魔をしようと思つて來居つたか、憎つくい奴め。

（驅け上り捉らへようとする、祇王すり拔けて逃げる、清盛茫然と見送る、佛も庭に立つたまゝ見送つてゐる、やがて清盛心づいて振りかへり、緣端へ出て。）

これ佛、こちらへ上らぬか、祇王はもう逃げて了うたぞ、

さあ〱、上つて來い。

佛御前　でも不思議ではございませぬか、衣の音も立てず飛ぶやうに逃げて行きました。

清盛　はゝ、祇王は身の輕い奴ぢやからな、今に呼び寄せて糺明してやる。

佛御前　（上りながら襖をすかし見て）おゝ、上樣、あれは何でございます、お障子に大きな文字が見えます。

清盛　え、障子に文字が？（不審さうに一足すさつて透し見る）うむ、成程文字が書いてある、今まで何も無かつた筈ぢやが不思議なな、（次の間の口へ行つて）これ誰れか居らぬか、早く燈を持て來い、燈を。

侍女　（次の間から）はい、只今。

（燭臺を持つて出てすぐ引下る。）

清盛　（燭臺を襖の前に引きよせ斜に面して立つたまゝ）「萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草」

佛御前　（横向きに膝をついて坐つて）「何れか秋にあはで果つべき」（讀み了つてしばらく間を置き顏を上げて）はゝ、はゝ、是れは何でございます上樣、萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか秋にあはで果つべき、早い遲いはあつても、草といふ草はみんな今に枯れて了ふぞ見てをれと申すのでございませう。

清盛　是れはたしかに祇王が手ぢや、重ね〴〵不埒な奴め平家の榮華を呪ひ居つたな。

佛御前　（笑つて）いゝえ、上樣此の歌は私の身の上を呪うた歌でございます、此の佛も今に祇王御前と同じやうに、秋風たてば棄てられて、枯れ果てゝ了ふといふ謎でございます。

清盛　それなら愈々けしからぬ事ぢや、此の淨海が寵愛するそちの身に不祥の事を言ふとは以ての外ぢや、今まであれ程大事にしてやつた私に、恩を怨みで返し居る憎つくい奴め、呼び寄せて成敗してやる。

佛御前　まあ、お待ち遊ばせ、私が秋に逢ひますも逢ひませぬも、みんな上樣のお心一つではございませぬか、祇王御前をお咎め遊ばす前に、まあ上樣のお心から聽きたうございます、私もあの祇王御前と同じやうにまた誰れかに見かへられるのでございませう、あゝ、あゝ、さうした上樣の水性と知つたら、こゝまで慕うて參るのではございませんでした。

清盛　馬鹿を言へ、私の心はな疾くからそちのやうな女子を慕うてゐたのぢや、あの祇王などはあれはほんの當座の口取に過ぎんのぢや、私はあのやうな弱い女は嫌ひぢや、美しうて強い、そちのやうな女子でなくては私の心には手ごたへが無い、何んで私がそちを棄てるものか、そちの身にだけは、平家の天下の續くかぎり夢にも秋風

は聞かせぬぞ。

佛御前　上樣はそれをお誓ひ下さいますか。

清盛　おゝ誓ふとも、上は梵天も照覽あれ私の眞實は變らぬ、私は一目そちを見た刹那から不思議と魂をひきよせられて了うた、そちは私の生命ぢや。

佛御前　上樣、それは神もつて誠でございますか、私が上樣のお生命になつてもよろしうございますか。

清盛　おゝよいともそちの好きなことなら私は何でもするそちの行きたい處へは私もついて行く、そちは私が生命の案內者ぢや、併し佛、私にばかりこれほどの誓ひを立てさせて、そちは少しも誓ひを立てぬではないか、そちから先に私を棄てたらどうするか。

佛御前　ほゝ此の天が下は上樣のものではございませぬか私が若し上樣を棄てましたら上樣は草をわけ土を篩つても私をお捕へなさることが出來ませう、そのやうな御懸念は御無用でございます。

清盛　いやさうでない、そちの體は捕へることが出來てもそちの心は捕へられぬ。そちの心に秋風が立つたら私はどうなるのぢや。

佛御前　はゝ、上樣には日本國中の男女がみんな心を寄せて居ります、私風情のものがよし一人や二人心を背けたとて上樣は少しもお困り遊ばす事はございませぬ、却つてよい厄拂ひをしたと思召すでございませう。

清盛　またたはけた事を言ふ、私はなるほど上部にこそ日本國中を味方にも持つて居るが心はいつも一人ぼつちぢや。私はいかにも強い男ぢやと思ふが、心はいつも淋しいぞ、私の後にはいつも暗い懸念のやうなものが附きまとうて居る、それぢやからこそ、私は強いものが好きぢや、美しいものが好きぢや、暗いじめ／＼したものが大嫌ひぢや、私を淋しい男と思うてくれ。

佛御前　上樣、私は必ず／＼一生上樣のお傍は離れませぬ。

清盛　おゝ佛。

佛御前　けれども上樣、若しや私の體に自然と秋の衰へが來ましたら、其のとき私はどうなるでございませう、私もやつぱり祇王の跡を追ふのではございますまいか？

清盛　またそのやうに心細げなことを言ふか、そちが衰へるまでには私が先きに衰へて了ふ、ぢやからそちが先に立つて私にいつまでも力を添へてくれといふのぢや、もうさうした鬱した話はやめい、先のことは分からぬとして置け、未來といふものはまだ紐を解かぬ經卷のやうなものぢや、何が書いてあるか知れたものではない、それよりも先程の前栽で聞いたそちが男の話の續きを聞かせい、でその濱邊に住んだ男はどうしたのぢや。

佛御前　それが私の十六の初戀でございます、そして其の

男と二年ばかり、あの福原近くの松原と苫屋の蔭で二人は身も世も無いほどの戀をしつゞけました。

清盛　これ佛、少し遠慮して物を言はぬか、清盛がこゝで聞いて居るのぢや。

佛御前　はゝ、御免遊ばせ、ではもう其の話は申しますまい。

清盛　いや、いかぬ〳〵、其の後が聞きたいのぢや、たゞ少し手柔かに話せといふのぢや。

佛御前　春の宵にはあの濱邊に絹を搖るやうな漣が寄せて砂子が銀のやうに月に照つて暖い風が沖から吹いて來ます、私はいつも松並木の黒い影の中に木の幹に寄りかゝつて、その男の來るのを待つてゐますと、男は遠くから横笛を吹いて近づいて來ます、そしてあたりに人氣の無いのを見すましてはそつと出會うて一夜を千代の思ひで契りかはしました。

清盛　そこはもうそれでよい〳〵、それからどうした。終りを言へ終りを言へ。

佛御前　それがいつか笛の逢瀨といふ浮名になつて、さる人に引き分けられて了ひました。

清盛　それは何者ぢや、引き分けてそちをどうしたといふのぢや。

佛御前　庄司の房遠といふものが庄司の威光で其の男を殺して了ひ、私はいつか房遠の心に從ふやうになりました。

清盛　ふむ〳〵房遠はけしからぬ奴ぢやな、そしてそちはどうして房遠と別れたか、房遠との仲はどうであつたか？

佛御前　房遠も男でございました。さる隱れ家でされ唄を作り私がそれに合はせて舞ひました。

清盛　ふむ、そちが舞うたのか、その舞ひは見たかつたな。

佛御前　今もよく覺えて居ります、舞うてお目にかけませうか？

清盛　おう舞うて見せい〳〵。

佛御前　（扇をかざして歌ひながら舞ふ）

唄「さても女子は濱松原に、笛の逢瀨を松風々々、
私も君ゆゑ戀松原に、房遠男を斬つて棄てけり、
あとには涙も引きしほの、月は冴えたり小松原」

清盛　やあ〳〵、いや〳〵房遠はけしからぬ奴ぢや、そのやうな歌は忘れて了へ。

佛御前　けれど房遠との逢瀨も半年ばかりで、房遠もまた私故に亡ぼされて了ひました、そして私は其の房遠よりも強い男に身をまかせて一年が程をすごしましたが、其の男もいつかは其の房遠と同じ身の果てになるかと思ふ

と、もうそのまゝには居られませず、强いもの勝ちの世の中に私が思ひのまゝに身を任す男は日本國中で一番强い男でなうてはならぬと、其の時私は心を定めてひとりで福原へ拔け出しました、そしてたうとう此の京にまでさすらひ出たのでございます。

清盛　そしてたうとう此の清盛を探しあてたといふのか。

佛御前　福原で上樣と祇王御前の噂を聞きました時は、羨ましうございました、それで私も白拍子となつて、見事この世に力と頼む一の人にまみえて見せようと決心したのでございます。

清盛　よし／＼私が其の一の人になつてやる、斯うして私とそちとが同じ時代(ときよ)に生れ合うて、互に慕ひ求めて居るものに出會ふといふのは宿縁ぢや、必ず私の傍を離れるなよ。

佛御前　私は離れませぬが上樣こそお離れ遊ばしますな、いつどのやうなものが出て參つて二人の仲に立ちませうとも。

（此の間賛成登場。）

賛成　申し上げます、前の右大將さまがたゞ今これへお見えでございます。

清盛　なに宗盛が來たと？　今時分に何用があつて來たのぢや、（座に就く、佛從ふ、賛成席を整へて引退くと、ちがへて宗盛衣冠にて登場）おゝ、宗盛か、夜中に何事が起つたのぢや、何か急用か、さあ、そこへ／＼。

宗盛　（會釋をして座に就き、佛を尻目に見て）父上、おはなしが密談にわたりますがお差支がございませぬか？

清盛　うむ、遠慮には及ばぬ、それに居るのはな、何さあの、それ、佛というてな近う召し使うて居るものぢや、大事ない／＼。

佛御前　私は暫くお次へ下つて居りませうか。

宗盛　いや、父上がお許しの上は差支ありませぬ、そのまゝにしてお出でなさい、それにしても祇王御前はどうか致しましたか父上。

清盛　うゝ、あれはな、無禮を働いたから先程暇をやつた、之を見い、斯ういふ事を書き殘して出て行つたわい。

（二人ふりかへり襖の文字を見る、佛、燭を秉つて差し照し、ぢつと宗盛の顏を見る。）

宗盛　「萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草　何れか秋にあはで果つべき」是れは何とした歌でございますか、父上。

清盛　そこに居る女子を恨んだものともいふが、私は當家を恨んだ心と見た。

宗盛　祇王御前は、なぜにまた當家を恨みましたか、あれ程父上の寵愛を受けてゐた女子ではございませぬか。

清盛　さあ、それが私を恨んだのぢやから、不埒であらう

がな。
宗盛　私には合點が參りませぬ。
佛御前　差し出がましうございますが、其わけは私がよく存じて居ります、御免遊ばせ右大將さま。
宗盛　はあ。
佛御前　私は佛と申して、京の町に舞ひと歌とを商うてゐた下賤のもの、今日上樣にお目通りがかなひまして、お側にお仕へ申す身になりましてございます、どうぞお見知り置き下さいませ。
宗盛　して祇王御前との仲は？
佛御前　上樣のお情が私の身に移りましてから、舊きは衰へるならはしで、自然と祇王御前の御寵愛が衰へました。それが祇王御前のお恨みでございます。
清盛　おとなしくさへして居れば、また何とかしてやる法もあるのに、あのやうな無禮な眞似をして居る、憎い奴ぢや。
宗盛　それでは祇王御前も不憫なもの、佛御前とやらもなぜ身をへりくだつて、情を讓つては、おやりなさらぬ、祇王御前が恨むのも道理と思はれます。
佛御前　祇王御前のお恨みも、もつともとは存じますが、それかと申して私が身を引くのもいやでございます。情の戰に、私が勝てば、負けた祇王御前が身を引かれるのも、是非ない成行と存じます。
宗盛　併し佛御前、勝ち誇るばかりが道でもありますまい、たまには負けておやりなさい。
佛御前　右大將さま、それが私には出來ませぬ、日々かりそめの仁義なら、それもよろしうございませうが、人一代の運さだめに、敵を立てゝみづから亡びるのが眞の道とは存じませぬ、強いものが勝ち榮えてまゐるのは是非ないことではございませぬか。
宗盛　いや、勝つものは久しからず、因果應報の道理は恐ろしいと、お思ひなさい、祇王とのが此の歌を書き遺して置いたのも、偶然とは思はれませぬ。
佛御前　でも右大將さま、そのやうな歌は此の節日本の流行文句でございます、唐や天竺には、五百年も千年も前から、實ですくふ程あると申すではございませぬか、それでも世の中は次ぎ〳〵に榮えてまゐります。
宗盛　盛者必滅は尊い佛法の教であるのに、此の歌の心が佛御前には分らぬと見える、それともお身は、佛法の法に背かうと言はれるか。
佛御前　大將さまは、その法師づれが言ふやうな、殊勝らしい口眞似ををかしいとは思し召しませぬか、盛るものも衰へ、盛らぬものも衰へるのが定なら、なぜせめて、衰へぬ間に、盛りの色のありたけを誇つて置けとは教へ

ぬのでございませう、暗い行末ばかり眺めてゐる、陰に籠つた世の中に、私はあの大日輪のやうな上樣を慕うてまゐりました、（清盛の方へ）緋葵(ひあふひ)の花が日に向いて赤い息を吹くやうに、天に上樣、地に私と面を見合せて、大笑の魔法にかゝつてゐる世の中を、大笑ひに笑つてやらうではございませぬか。

清盛　なる程そちの言ふことは面白い、併し佛法の道もな世を治めるには大切のものぢや、法師等が私の言ふ事をきゝさへすれば、あれで人の心をおだやかにする役に立つ、つまりは清盛が手足にしてはたらかすのぢや、あれも方便ぢや道具ぢや。

宗盛　父上、だん／＼と世のなりゆきを見ますにつけ、當家の一門に集つた世上の恨みは、おもひのほかに深う御座います。

清盛　またそれを言ふか、その話はもうやめい／＼、此の淨海もよく承知してをる。

宗盛　それを父上は恐ろしいとは思召しませぬか。

清盛　はゝはゝ、そちはそれ程世上の恨みが恐ろしいか、弱い男ぢやな、亡くなつた小松内府が遺言とやらで、さやうた弱い事を言ふのであらう、内府を見い、餘り氣が小さかつたために、早死をした、此の淨海は死なぬぞ、人の恨みなぞといふものは何時の代にもある、負けたものは何時でも勝つたものを恨むのが常ぢや、先方(さき)で恨むなら、此方でもそれだけの事をしてやる、向ふが勝つか、此方が勝つか、二つ一つのほか世をわたる道はない筈ぢや、それともそちは先程佛御前が言うたやうに一か八かの瀬戸際に負けてのきたいか、えゝ、馬鹿な事よ、なう佛、酒でも持つて來て、賑かにせい、宗盛をもてなしてやれ。

宗盛　いやそれはお待ち下さい、まだ申し上げる一大事が御座います。

清盛　そち達はむやみと後を見廻はすから、それで無氣味になるのぢや、世の中は闇夜の獨り道と思うて後を向くと己が足音まで物の怪のやうに聞えて、ありげ无がぞつとする、後(うしろ)にはいつまでも暗い影がついて來る。

宗盛　其の暗い影を父上もお氣附でございますか。

清盛　知つて居るとも、世の中に勝つたもの、強いものには皆その影がついて居る、が私はそち達のやうに其の影に怖ぢ恐れて逃げ廻はることは嫌ひぢや、なう佛。

佛御前　でも上樣まで、お肩の凝るやうな強がりやうをなさいますこと、斯うしてお話の席にまで、のび／＼した息は迴ひませぬ、右大將さまお庭にでもお降り遊ばして少しくおくつろぎなさいませぬか。

宗盛　いや今宵はそれ程悠長な此の身でもありませぬ。

清盛　してほかの用事といふのは何事ぢや。

宗盛　實は私、今日上皇さまから鳥羽殿の法皇さまへお使ひに立ちました。

清盛（屹となつて）なに、法皇さまへお使ひに？

宗盛　はい、お使ひに參りました、そしてあの鳥羽殿のわびしいお住居をつく／＼見て參りました、それにつけ私は、どうも當家の繁昌のうしろに、暗い不思議な物の影が覆ひかゝつて居るやうで、不安でなりませぬ。

清盛　おろかな事を言ふな、たとひ法皇さまのお力でも、今この平家をどうなさろ事が出來よう、して、其のお使と云ふのは何事ぢや。

宗盛　たゞの御消息で、久々打たえておなつかしいから、近々にお出でなされて御對面なされたい。

清盛　そちはそれを唯の御消息とばかり聞いて來たか。

宗盛　私とても、それほどの事に心づかぬおろか者でもございませぬ。第一、ことさらに此の宗盛をお使ひにお立てなされた、上皇さまのお心からして、淺い御計略とは存じませぬ、併しいち早くそれにお氣のつく父上は……

清盛（いら／＼として）あゝ、もうよいわ、言ふな／＼、さうした沈んだ話を聞くと、此の淨海までが勇氣を挫く、今淨海が弱い心を起したら、平家の一門は瓦解ぢや、たとへ山を移し海を干しても、入道が一存は立てずには居られぬ、これ佛、酒を持てこい、酒を。

（清盛、縁へ立ち出でようとしてよろめく、佛走りよつて支へ、縁境の柱に立つたまゝ寄りかゝらせ、顔を見あはせる、此ころから月が雲に隠れた爲、舞臺やゝ暗くなる。）

佛御前　私のまゐるまで、こゝをお動きなさいますな、獨りでお動きなさいますとあぶなうございます。（清盛うなづく、佛、次の間の方へ行く）

宗盛　それから鳥羽の御所では、この頃夜な／＼怪しい物の笑ひ狂ふ聲が聞えますとかで、世上のものが寄ると觸ると耳口を寄せて取り沙汰いたします、何か大事の起る前兆に相違ないと言ひ囃して居ります、總じて此の頃の世のさまが、上都の靜かさに引きかへて何か動亂の兆を孕んで居るやうで、私には心がかりでなりませぬ、例へば三位入道などが近頃の擧動にも不審な噂がございます。

清盛　不審な噂がある？

宗盛　はい、油斷なりませぬ。

清盛（益々いら／＼として立つてゐるにたへぬ如く體を搖かし、柱の根に坐る）はゝ、源三位などに何が出來よう。

宗盛　そればかりではございませぬ、此の度の嚴島行幸で山法師どもの動搖が今以て收まりませぬ。

清盛　あれは、もう私の聲がかりで鎭まつた筈ぢや。

宗盛　いや、まだ鎭まるどころではございませぬ、益々廣まつて行く樣でございます。

清盛　いや、さういふ筈はない、私を差し措いて法師等が騷ぐ譯はない。

宗盛　たしかに此のたびの騷ぎは、たゞ事とは思はれませぬ。

清盛　たしかにさうか？

宗盛　はい。

清盛　憎つくい法師めら、此の淨海を何と心得て居るか、今に見て居れ、山門も佛法も一揉みに揉みつぶしてやる、酒、酒、酒を持て來ぬか。

（侍女等酒肴を運び、清盛に褥をすゝめ二人に酒をつぐ。）

宗盛　併し佛法の力は人の力でどうすることも出來ませぬ山法師を敵にして平家の天下がいつまで續くと思し召しますか、せめて佛法の前には弱くおなりなされて……

清盛　なに、弱くなれと？

宗盛　はい、佛法の前には弱くおなりなされて、末の安泰をお祈りなさるやう、お願ひに出ました。

清盛　弱くなるとは、どうすればよいのぢや。

宗盛　先づ法師等をおなだめなされて……

清盛　うるさい奴等ぢやな、この清盛が山法師どもの前に降服するのか、此のわしに弱くなれといふのか。

（しきりに酒杯をかさねてゐたが、座に堪へぬやうに立ち上り、緣の邊をあるき廻る。）

宗盛　法皇さまへもお詫びの心で……

清盛　あゝ、うるさい事ぢやな、この私に弱くなれといふのか、私にはとてもそれは出來ぬ、達て私にそのやうな事をせいといふなら、私はもう此の京には居らぬぞ。

（此の時また月光が舞臺を明るくする、庭の奥にあたつて、佛の聲が聞える。）

佛御前　上樣、私は今宵の月で、またあの福原の住居を思ひ出しました。

清盛　（聲のする方を見込みながら）おゝ、佛か、そちも福原にゐたと言うたな。

佛御前　（庭先へ出て來て）上樣は席をお動きなさいましたな、あぶないお足元ではございませぬか。

清盛　そちを待つてゐた、さあ、こゝへかけい、そちは今、福原と言うたな。

佛御前　（緣に腰かけて）はい、あの南の海の、明るい〳〵福原の御殿を、上樣はお忘れなさいましたか、福原はよい所とは思し召しませぬか。

清盛　おゝ、そちも福原が好きぢやといふか、福原はよい

處ぢやな。

佛御前　上樣と御一緒で、今一度福原に住みたうございます、此のやうな月の晩にはあの松原かけて夢を見てゐるやうな景色が、まあどんなでござりませう。

清盛　私もさう思ふ、福原がなつかしうなつた、さうぢや、私は福原へ行かう、もう此の京の都がうるさくなつた。

佛御前　ではあの福原に新しい都をお立て遊ばすおつもりでございますか。

清盛　さうぢや、こゝに居ればこそ、やれ山法師、やれ謀叛と噂が絶えぬ、あの福原は後が山で、前に海を控へて山法師等も容易に降りては來ぬ、うるさい嗷訴沙汰や爭亂の沙汰も自然と遠のくであらう、さうぢや、一思ひに京を福原へ移して見よう、私はどうして今まで福原を忘れてゐたか、佛そちも福原の都へ來いよ。

佛御前　では、乾度あの福原に都をお遷しなさいますか、福原を京に見かへて御覽遊ばしますか上樣。

清盛　おゝ、明日とも言はず、すぐに遷して見せるぞ。

佛御前　さうしたら上樣と私との新しい日も明日からさし初めるのでございませう、上樣福原へは私が御案内に立ちます、氣を丈夫にお持ち遊ばして日本國中に新しい日の目を見せておやり遊ばせ、茲ばかりが都ではございませぬ。

清盛　さうぢや／＼。

宗盛　父上、それは御酒興でございますか、桓武このかた四百年の都を、さう輕々と遷されるものではございますまい、強ひてさやうな事をなされて、此の上にまた世上の恨みを重ねなされば、福原は安泰の都とはならないで却つて平家の運の果場となります。

清盛　うるさい／＼、もうそち等が說法は聞かぬぞ、私の心は定まつた、四百年の都が何ぢや、大極殿も紫宸殿も此の淨海が指一本の差圖で移して見せる、佛、そちだけは、いつまでも私の傍を離れるな、私は淋しい男ぢやからな。

佛御前　私は上樣の生命ではございませぬか、福原へは私が御案内に立ちます、そして新しい都へ、新しい都へ！

宗盛　（氣色ばんで）これ佛御前！

佛御前　（緣へ上り、清盛の手を取つて）さあ、上樣、奧へ參りませう。

清盛　おゝ奧でまた一さし舞うて、平家の繁昌を祝へ、福原の天下は萬々年ぢや。（侍女に）資盛を呼べ、宴の用意をさせい。

侍女　かしこまりました。

（一人次へ行く。）

清盛　(佛の肩にすがり、奥へ行きかける、侍女一人從ふ)
明日はいよ／＼福原ぢやな、そちも奥で舞の仕度をせい、今日の今様は何とか言うたな、さう／＼「君を初めて見る時は千代も經ぬべし姫小松……」

(半ば歌ひながら這入らうとする途端に。)

宗盛　佛御前！　お待ちなさい！

佛御前　(初めて立ち留つて清盛の手を取り、後へ足離れて正面へ出て)　何でございますか右大將さま、お呼びとめ遊ばしたのは。

(此の言葉のあひだ、侍女清盛を扶けて奥へ入る。)

宗盛　あなたはなぜ父上を外道に引き入れようとなさるかそれは天魔外道の仕業といふものぢや。

佛御前　私はたゞ上様のお爲を思ふばかりでございます。都をお遷し遊ばすのも腐つた水は流して御覧遊ばせ、古い住居はかへて御覧遊ばせ、それが此の世に榮えるおきてかと私は存じます。

宗盛　それは教に背く外道といふものぢや。

佛御前　私から申せばあなたのお教が外道かも知れませぬ。

宗盛　これ佛御前。

佛御前　はい。

宗盛　あなたは死んで貰ひたい。

(短刀の欛に手をかけ立ち上る。一足早く資成出で來り宗盛を押し止める、佛は一足さがつたまゝぢつと見て)

佛御前　ほゝ、私はまだ死にませぬ、生きて榮えて行かねばなりませぬ、御免遊ばせ右大將さま。

(言ひすてゝすた／＼と奥へ入る、宗盛、資成に止められて立膝の儘默然として跡を見る、外は風全く止んで月がます／＼冴えてゐる。)

――幕――

赤と黄の夕暮（一幕）

大和の或る山寺の別庵、庵室は山の麓にあつて、その前は一面の菜畠、季節は春で、菜種の花が盛りである。遠見に山の中腹の鐘樓が見える。時刻は夕方。

尼　女　十五六歳、法衣は緋色）
若　僧　（十六七歳、法衣は黒色）
老　僧　（法衣は朽葉色）

若僧　（菜畠の中から出て來る、後を振り向いて）さあ、早く〳〵。こゝなら大丈夫です、もうすこしで、また和尚さんに見つかる所だつたのね。
尼女　こはかつたわね、私、またあの、骨ばかりの和尚さまの手で障られることかと思つてちゞみ上つてゐたの。
若僧　こら、こんなに法衣に泥がついちやつた、はたいて上げませう、隠れるはずみに、きつと菜畠をめちや〳〵にしちまひましたよ。
尼女　むりやり菜種の花の中にしやがんで動かないでゐると、しまひには蝶々までがお馬鹿にして、私の頭や法衣にとまるのよ。
若僧　蝶々にだつて、その顔を曝らしちやだめよ、しみがつくと大變だもの。どこへ止まつたの？　唇に？
尼女　いゝえ。
若僧　ぢや、額に止まつたの？
尼女　いゝえ。
若僧　頬つぺたに止まつたの？
尼女　えゝ、頬つぺたに、こゝの所に。
（指で自分の頬を差す。）
若僧　きつと吸つて行つたんだよ、拭いてあげませう。
（法衣の袖で尼女の頬を柔らかに拭く。）
あなたの顔はほんとに綺麗ね、白くて透き通るやうだ、こんな汚ない色をした法衣で拭くと、曇りがつきさうね。
尼女　ねえ、綺麗でせう？　私、子供の時からさう言はれてよ、透き通るやうだつて。でも私には仕合せですわ、みんなさう言つて褒めて呉れるから。
若僧　私はあなたを見ると、なぜこんなに自分が見つともないんだらうと思つて、悲しくなります。
尼女　でも、あなたも綺麗よ、私が今まで見た男の中でも、一番綺麗よ。

若僧　あなた、ほんとうにさう思つて呉れて？

尼女　えゝ、ほんとうに、だから私、あなたが好きですわ。

若僧　ぢやあ、ねえ、私、お願ひがあるが、かなへて呉れて？

尼女　なあに？

若僧　私ね、もしか何所かへ行くやうだつたら、あなたも一緒に行つて呉れない？

尼女　行くつて何處へ？

若僧　何處へでもさ、私の行くところへ。

尼女　だつて、何所だか分からないぢやありませんか？

若僧　分からなきや、行つて呉れない？

尼女　それや行くけれど、でも何所だか言つて御覧なさいよ、遠いところ？

若僧　遠いところなの。

尼女　何時行くの？

若僧　いつだか知らないけれど……。

尼女　なぜさ？　行かなくちやならないの？

若僧　えゝ、行かなくちやならないの、私、行きたかないんだけれど……。

尼女　誰れが行けと言ふの？　和尚さまが？

若僧　えゝ、和尚さんが。私、さう言ひ渡されちやつたの。

尼女　いつ歸つて來るの。

若僧　歸つちや來ないんです、丹波の國分寺といふお寺へ、修行に行くんですつて。

尼女　まあ、お修行に？

若僧　だから、もう此のお山には居なくなるのです。

尼女　(聲をうるませて)　なせ和尚さまはそんな事をなさるんでせうね？　あなたをそんな遠い所へやるなんて、ひどいわ。

若僧　でも和尚さんは、それがお慈悲だと言つてるのです。

尼女　お修行が出來るから？

若僧　何だか知らないけれど……。

尼女　いくらお修行だつて、そんな所へ行つちやつまらないわ、ね、和尚さまにさう言つておよしなさいよ。

若僧　よすつたつて、和尚さんが聽いて下さらないんだもの。私ね、ゆうべは其の事を考へて一晩中眠らなかつたものだから、今朝になつて寢忘れちやつて、そら、あの、鐘を撞くことを後れちやつたの。あわてゝ驅けて行つたけれど、いつもよりか餘程後れましたよ、あなた氣かついて？

尼女　えゝ、そのためだつたのね、私、いつもあの頃には、ちやんと目をさましてゐてよ、そしてあの鐘は、あなたが撞くのだと思つて聞いてゐると、お堂の上であなたが法衣の袖をこんな風にまくつて撞いてる所が見えて來る

のよ。

若僧　あの鐘も、今夜が撞き納めなのかも知れない。

尼女　一たい、いつ行くといふの？

若僧　明日かも知れません。

尼女　まあそんなに急なの？

若僧　だからあなた、私と一緒に行つて與れなくて？

尼女　行つてどうするの？

若僧　どうするつて、それは私もまだ考へつかないけれど、丹波のお寺へなんか行かなくてもいゝのです、二人で何所かへ逃げて行くの。

尼女　逃げるんですつて？　そんな事をしたら大變だわ。和尚さまに叱られますわ。

若僧　和尚さんは、どうせ私たちを善く思つてゐないんです、私たちが斯んなに仲よくしてゐるのが悪いつて、それで私を、他所へやることにしたのですもの。

尼女　ぢや、昨日和尚さまがあんなに恐い顔をなすつたのはほんとうに怒つてらつしやつたのか知ら？

若僧　さうさ、だから、あなたと私とを別々にしなくちや、爲にならないつて。

尼女　なぜでせうねえ？　こんなに仲よくなつてるものを、別々にするなんて、和尚さまもひどいわ、私たち、そんな事をされる譯はなくてよ。

若僧　……。

尼女　ねえ、そんな事をされる譯はないわねえ。

若僧　それは、二人がもし思ひ合つてゐたら、悪いか知れないけれど……。

尼女　思ひ合つて、どうするの……。

若僧　……。

尼女　あなたを好きだと思ふのが悪い……。

若僧　悪かないけれど……和尚さんが悪いと言ふの。

尼女　だつて、ほんとうに好きだと思ふのなら、いゝぢやないの？　思つちやいけなくて？

若僧　いゝの、いゝの、さう思つてちやうだい、ほんとにさう思つてちやうだい。よ、いゝでせう？

（手を取る程度の表情。）

尼女　えゝ、好きだわ。

若僧　私も好きなの、私もあなたが好きなの、和尚さんが何と言つたつて搆ふものか。私、たゞ、あなたと斯うして思ひ合つてゐるの。

（抱く程度の表情。）

尼女　ぢや、和尚さまにさう言つて、あなたを遠くへ行かせないやうにして貰ひませうよ。ね、さうしませうよ。

若僧　和尚さんは、もう、あゝ言ひ出したら聞かないんだから、だめ。

尼女　ぢや、どうすればいゝの？　二人で逃げ出すの？

若僧　えゝ逃げてちやうだい、何所か和尚さんの知らない所へ行つて、二人で一生仲よくしてゐませうよ、ね、さうしてちやうだい。

尼女　だつて逃げ出して行くところが無いぢやないの？

若僧　何所かへ行くの、私の家だつて、あなたの家だつてあるぢやないか？

尼女　家へ歸つたら、また和尚さまのやうに叱りやしないでせうか？

若僧　叱つたら、また何所かへ行けばいゝ、何所へでも、叱るものゝ居ない所へ行きませうよ、ね、だから私と一緒に行つてちやうだい、いゝでせう？

尼女　……。

若僧　いや？　いや？

尼女　……。

若僧　ぢや、いやなんだね？　私と一緒に行くのはいやなんだね？　私を好きだといふのは嘘ですね？　嘘をついたのね？

尼女　嘘ぢやないのよ、嘘ぢやないのよ。

（すがる程度の表情。）

若僧　ぢや、なぜ一緒に行つて呉れない？

尼女　行くのよ、行くのよ、私、どこへでも一緒に行きますわ。

若僧　行つて呉れて？　ほんとう？　ほんとう？

尼女　ほんとうに！

若僧　うれしい！

（抱き合ふ程度の表情。）

老僧　（奥から聲ばかり聞こえて）浄圓！　浄圓！

（二人驚いて飛びのく、老僧出て來る。）

老僧　浄圓、もうそろ／＼お山へ上つて行かないと、また晩の鐘に間に合はなくなるよ、早く行け、早く行け。

若僧　はい。

（尼女と竊に顔を見合はせ、しを／＼と他方へ出て行く。）

尼女　（老僧の傍へ寄り）和尚さま、どうぞ浄圓さんを叱らないで下さい。

老僧　（尼女の肩を撫で）あゝ、あゝ、叱りはしない、けれどもあれはな、修行のために丹波の方へ行くことになりました、それと言ふのも、みんな當人のためだから、思ひ違ひをしてはならん、悟道のためとあらば、どんな山奥邊鄙でも、喜んで行くのがまことの修行といふものだからな。

尼女　では和尚さま、私も一緒に行かして下さいませ。

老僧　一緒に？

尼女　はい。

老僧　そりいかん、一緒に行かすくらゐたら、浄圓を丹波へは、やりはしない。

尼女　でも、私、浄圓さんがゐなくなると淋しいんですもの。

老僧　はゝ、それは、あんなに仲よくしてゐたのだから今急に浄圓がゐなくなつたら淋しからうが、それも少しの間だ、辛抱しておいで、佛に仕へる身はな、其の仲のよい友達にも別れて、淋しい所を辛抱するのが修行だ、其のうちには、自然と淋しくなくなります、佛をお友達にすれば、少しも淋しくなくなる。他の友達は、今よくても直に飽きる時が來る。たかゞつゞいても、五十年の生涯だ、御佛を友達にすれば、五十年は愚か、未來永劫捨てられるやうな事はない。分かつたかね。

尼女　さうでせうか？

老僧　あゝ、あゝ、さうとも、そのところをよく得心して置かなくてはいけない。あなたがお腰元衆に連れられて、はじめて此のお山へ這入つて、柔かに延びた髪の毛を落としたのは、あれはちやうど三年前の十二の時だつたな。

尼女　えゝ、ですけど：　。

老僧　あの時私が言つて聞かせた言葉は、もう忘れたらうねえ？

尼女　なあに？

老僧　あなたが、淋しい〳〵と言つて泣いてゐるから、御堂の阿彌陀様の前に連れて行つて、これがあなたの一生のお友達だと思つてお話をしかけて御覧と言つたらう？　そしてあなたさへ眞心でお話すれば、乾度如來様があの慈悲深い眼元で笑つて、お話相手になつて下さると、さう言つて聞かせたぢやないか？　覺えてゐるかい？

尼女　えゝ、ですから私、淋しくてしやうのない時は、いつでも獨りであのお像の前へ行つて、いろんな事をお話ししましたわ、でも、お像だから、口はきかないけれど、何度も〳〵さうしてる內に、しまひにはあの眼をあいて、口元で笑つて下さるやうになりましたの。

老僧　ふん〳〵、ね、それがあなたの信心の通じたといふものだ。

尼女　だけど一年二年たつ內には、やつぱりだめになりましたわ、私、たゞ笑つて下さるだけぢや物足りないの、もつと生きた人のやうでなくちやお友達にしても張合がないの、やつぱり淋しいんですもの。

老僧　……。

尼女　ね、私、もうあのお像ぢやお友達にならなくなつたのですよ。

老僧　そこを辛抱して飛び越して行くと、また淋しくなくなる、まことの道といふものは、さういふ所をいくつもいくつも通り越さなくちやならない。
尼女　でも、あの淨圓さんがいらしてから、私、淋しくなくなりましたわ、あれがほんとうの、私のお友達だつたのですよ。
老僧　いや、それもやつぱり、一時の假りの友達だ、それに迷つてはなりません。
尼女　だけど、私、淨圓さんと別なお山にゐるのはいやですよ、若し淨圓さんが丹波へ行くなら、私も一緒に行かして下さい、ね、和尙さま、お願ひでございますわ。
老僧　それはならん。
尼女　なあぜ？
老僧　…………。
尼女　おや、私たち二人で、どこか他の所へ行きたいわ。
老僧　何所へ？
尼女　何所へでも。
老僧　…………。
（此の時鐘樓から晩鐘の音が響く。）
尼女　あゝ、淨圓さん……。
（二人は同時に鐘樓の方を見上げて、ぢつと眺めてゐる、つゞいて一つ二つと鐘の音の傳はる中に日影が次第に黝づんで來る。）

―幕―

運命の丘（一幕）

人物

ナポレオン（四十四歳）
ダリユー（五十歳）
ミユラー（四十二歳）
モルチエール（四十五歳）
アンドレー（三十歳）
韃靼人二人
將校下士從卒其他

場所

モスクワ市外

時代

千八百十二年九月十四日の午後

第一場

モスクワ市の西南、雀が丘の一部、丘の頂を舞臺の前面に現はして、背後は一面にモスクワの市街を見下ろした景色、秋日和の午後二時過ぎの日光が強くモスクワ河に反射してゐる。市内すべて本文にある通りの景。軍服のナポレオン、馬を麓に乗り捨てた氣持で、數步先きに立ち、つか〳〵と小急ぎに下手から丘の頂に現はれる。續いてダリユー、モルチエール、アンドレー及び三四の將校從卒等登場。

ナポレオン　モスコウの市街を見るや否。

ナポレオン　モスクワ！　モスクワ！

（叫んで尙ほ熱心に向ふを見てゐる。）

ダリユー　モスクワだ！　モスクワだ！

（他の人々も之に和して、競うて市街の方を見る。）

ダリユー　そら見給へ、あれがモスクワ河だ、其の向ふがクレムリンさ、丸の內だ、綺麗ぢやないか。

モルチエール　なる程、こりや綺麗だ、まるで古い繪本が抜け出したやうな町だな。

ダリユー　あの建物を見給へ、木造だらう、塗つた屋根や壁の色も違つてるね。東洋的ぢやないか。其の前を、まるで灰色の熊が馬に乗つたやうなコザークめが、大槍を横たへて通る所は似合つてるな。配合がいゝぢやないか。

アンドレー　北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでる。たしかに神聖な町といふ感じがしますね。

モルチエール　眩しいやうだ。金の十字架が、まるで星を

散らしたやうに光つてるぢやないか。あれが皆んな寺だらうか、寺の多い處だな。外郭も、內郭も見給へ、町の半分は寺だが、尖塔がまるで雜木林のやうに并んでる。其の一本々々に金の星がかゝつてゐるのだ。

アンドレー　寺院ばかしが三百近いでせう。それから處々新月の徽章も光つてゐます。マホメタンの寺でせう、斯うなると壯觀ですね。十字の星と新月が此の古い空に撒いたやうに浮んでる。これだけでも胸が躍りますね。あれが此の町の命なのだ。命のサンボルが、あゝして光つてゐるのだ、平和ですね。つい、そこいらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空氣が、茲へ來ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。其の中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてる所は、成ほど女性的ですね。ロシア人は此の町をおッ母さんと言ふさうだが、私等には美しい尼さんといふ感じですね。

モルチエール　處々隨分大きな庭がある、人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな處だ、何うしても繪本だ、是れが本當にモスクワなのかなあ。夢のやうだ。

（飽かず市街を見てゐたナポレオンは此の時初めてこちらを向き、近くに立つて居るモルチエールの肩を輕く叩いて。）

ナポレオン　おい！

モルチエール　はッ！

（皆一齊に其の方を向く。）

ナポレオン　モスクワへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチエール　陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレオン　夢ぢやない。本當のモスクワへ來たのだ。到頭來たのだよ。

ダリユー　夢が事實になつたのですね。

ナポレオン　お前にも似合はん事を言ふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。俺がパリーでセギユール伯に言つて聞かせたのはそこさ。俺には初めからモスクワは目に見えて居た、必ず來られるものといふ確信があつたのだ、確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリユー　陛下の其の筆法によりますと、モスクワは陛下の運命でございますね。

ナポレオン　運命だ。全く運命だ。俺には是非とも一度此のザールの城へ來なくちやならん運命があつたと思ふ、モスクワは私の戀人だ、古い／＼前世からの戀人であつたのだ。先つき一目見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懷しい戀人を人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

（振りかへつて復た市街の方を見る。）

ダリユー　前世からの戀人ですね、約束されたる土地ですね、人生には確かにさうしたものがあります。

アンドレー　併し閣下、前世からの戀人といふやうな者は、こんな北の暗い國へ來てこそ道理と思ひますが、フランスには、少なくとも女にさういふものはございますまいね。明るい國の人間は淺い戀をします。其の代り急です。底まで透き徹つた小川の瀨のやうに、急な思ひをするのが、フランス人の習ひでございませう。

モルチエール　此處で女の話なんか怪しからんな。

ダリユー　フランスの男は戰をしながら戀を論ずるさ。

モルチエール　戀を論ずるもいゝが、早く陛下をクレムリンへ御供したいものだな。

アンドレー　ミロラドヴヰッチ少將が歸つてから、彼れ是れ二時間近くなりませう。もう、町の使節が來てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい、今やつと敵軍の後衞が町を出はづれました、あの森の蔭に續いてるのがそれです。あれでクツーゾフ元帥の率ゐて居られる九萬がすつかり退却した譯です。

ダリユー　やあ、ミユラー將軍が市街の入口で盛に歡迎せられてゐるぞ。貧民どもが珍らしさうに集つて來るぢやないか、まるで觀せ物扱ひだ。

ナポレオン　クレムリン！　響のいゝ言葉だ、あの邊が宮城だらうな、おい！　地圖を見せないか。

（アンドレー、市街の地圖を披いて捧げる、ナポレオン手に取つて見て。）

ふむ。

（顏を上げ、また市街を見入つて。）

あれだ、クレムリン、クレムリン、俺はあの宮中の間を見た事がある。あの大きなサロンには、さう〳〵、イタリヤから曳かせて來た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后とが竝んで腰をかけて居た。あのアレキサンドルの神經質らしい顏は、決して憎い顏ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりたいと思つた。

（直立して凝視してゐた將校等互に顏を見合はせる。）

ナポレオン顧みて。）

ねえ、さうだらう？　全くルッスは憎くない國民だと思はないか、俺は好きだよ、俺は。

モルチエール　全く憎さげの無い國民でございますな、のろつとして居て、素直で、勇敢で。

ダリユー　いや、我々の脈管に流れてゐる血が同じセルトの源だから……。

アンドレー　それもさうでせうが、一方から言ふと寧ろ違つてるから相惹くのかも知れません。異性相惹く道理ですね。永い間冷たい外部の壓迫で、反抗的に沸いた彼等

の血は、永久に熱いのです、所が自然が温めて吳れた我我の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が西南の人であるといふ理由で、此の東北の神祕な國民を慕ひたいと思ひます。

モルチエール　はゝ、君の言ふことは、あんまり感に入り過ぎて可かんよ。第一我々は征服者だぜ。强きものが弱きものを愛する關係だぜ、忘れちやあ可かん。

アンドレー　ですが、愛は强い弱いの關係ではありません。

モルチエール　はゝ、生意氣を言ふなよ。

ダリユー　まあいゝさ、若いからなあ、戰をしながら戀を論ずる筆法だらう、ねえ、君。

（ナポレオンは地圖を卷いて手に持つたまゝ、そこらを大股に往つたり來たりして居たが、寄つて來て。）

ナポレオン　まだ來ないか、遲いぢやないか。

モルチエール　もう來さうなものでございますな。おい君、一つ偵察にやつて吳れ。

アンドレー　は。

（下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る。）

ダリユー　陛下はお疲れであらうから、そこらへ假りに何したら何うだらう。

ナポレオン　要らん〳〵、俺の顏に疲れが見えるか。

ダリユー　いや、お顏色は却つて益々活氣を帶びて參るやうでございますが、何にしても一週間以來のお疲れでございますから。

ナポレオン　俺には疲勞といふ事は無い。此の眼の續くのは、それ、運命が眼の前に來たからさ。此の晴れた空に、此の壯麗な景色を見て、昂奮せずに居られるか。ダリユーなぞも顏色が違つて來たぜ。つい先つきまで君等の顏にはボロデイノの影が粘りついてゐた。死の影がついてゐた。それが今ぢやモスクワの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍つて居る。今にクレムリンの城へ這入つたら、君等は一番かけに何をするだらう、モルチエールは何が欲しいか。

モルチエール　久しぶりで善い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンドレー　私は先づ靜かな部屋に引つ込んで、この昂奮の心の褪せない內に日記をつけたいものでございます。

ダリユー　私もそれに贊成。

ナポレオン　さう〳〵、ダリユーは歷史家で詩人だつたな。

ダリユー　「だつたな」は恐れ入りました。

ナポレオン　忘れて居たのだよ。

ダリユー　忘れられて少しも恨みはございませんな、私なぞは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうな

ものですから。

ナポレオン　はゝ、悟つたね。

ダリユー　却つて此のアンドレー君などが十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

ナポレオン　ふん、若い者の時代か。俺なんぞはダリユー、どちらの組か、若い方か古い方か。

ダリユー　さやう……陛下は勿論私なぞよりも若くて入らせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレオン　其の譯は？

ダリユー　さやう　…十八世紀の纖弱な冷たい文明に對して強い熱力の要求が陛下のお體に權化したと申したら、如何でせうか。

ナポレオン　ふむ。併し其の力は何處から來るだらう。私に言はすれば運命だ、運命！　力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つて貰ひたい。

アンドレー　（進み出てて）　陛下、陛下、私は唯今の瞬間に於いて、陛下に神仙の如き高風を感じます、運命の權化！何といふ深いお言葉でございませう、手が此の通り感興に顫へて居ります。何うか握手を願ひたうございます。

ナポレオン　よし／＼。

（微笑しながら固く握手する。其の途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆々愕然として其の方を向く。ナポレオン俄に正氣づいたやうに屹となる。）

モルチエール　あれだ／＼、外郭に接した東の處に煙が上つてゐる。何事だらう？　うむ、騎兵が這入つて行くやうだから、今に分るだらう。是りや長く斯うして居るのは危險かも知れんよ。使節は何うしたのだらう？　何うして遲いんだらう？

（一同無言で、待ち遠しい樣子に市街の方を見る。ナポレオンこちらを向いて。）

ナポレオン　今に來る、屹度來るよ、先つきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドレー　は。

（再び下手へ行つて命を傳へる。）

ダリユー　町が段々靜かになつて來るやうに感ずるが、嘘かねえ。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな感じがする。見給へ、馬鹿に森として來たぢやないか。河の瀨の音が聞える。

モルチエール　はゝ、生の町がまた死の町になつたかな。

モスクワがボロデイノになるのかな。

ナポレオン　（モルチエールの方へ鋭い一瞥を投げて）　馬鹿ツ！

モルチエール（姿勢を正してナポレオンの方へ向き）陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戰地といふことを忘れたくないと思ひます、モスクワに何時敵軍が現はれても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以てまだ確實にモスクワを占領したとは思つて居りません。

（ナポレオン無言のまゝ往つたり來たりしてゐる。皆皆無言 一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして。）

ナポレオン 分つたよ、分かつたよ、併し私はもう確實にモスクワを占領したつもりで居るね。先つきからクレムリンの宮殿で、大夜會を開く手筈まで考へて居る。二百九十五寺といふ夥しい寺の坊主どもを集めて諭してやらうと、其の演說の腹案まで拵へた。寺の建物には、殘らず大きな字で Maison de ma mère と彫りつけさせてやらうと考へた。此のモスクワには、お前等のうち誰を總督にしようかとそんな事まで考へてゐる。モスクワ占領！ もう動かん事實た、夢ぢやない。

（言つてぢつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。此のとき一同の胸に一種の不安が萌す心持。やがてナポレオンはそこらを步きはじめる。）

ダリュー もう何時だらう？ 日があんな方へ行つたね。何うだらう、兵をやつてロストプチン總督を連れて來させては。

モルチエール 何うもそれがよくは無いかな、暗くなると面倒だぞ、先つきの爆聲が何か意味があるのぢやなからうか。

（ナポレオンはまた市街の方を見て沈默してゐる、日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黑んで來る、間を置いて。）

アンドレー あゝ、來た／＼！ 報告を持つて來た。

（騎兵一人飛び下りて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて。）

アンドレー あゝ、是れは先つきの爆聲に關聯した事です。（急いで讀む內に顏の色がかはる）是れは怪しからん、大事件でございます。

（皆々驚いて聞耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる。）

ロストプチン總督が囚徒を悉く解放した樣子で、其の一人が先程の爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場處はドロゴミロフの門に近い市街の空家で、爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で擧動不審な一人の韃靼人を捕縛したのださうでございます。

モルチエール　其の雜輯人を調べて見たのか。
アンドレー　取り調べたが更に口を開かないとあります。
モルチエール　そりや容易ならん事だ。すぐ市街を殲滅しなくちや行くまい。
アンドレー　勿論やつてるやうです。
モルチエール　それから其の捕縛した雜輯人は連れて來たのか。居るならすぐ此處へ連れて來いつて、通譯を附けてな。
ナポレオン　なあに心配するには及はない、大勢はもう極まつてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追つ放してやれ。
モルチエール　でございますが、此の際注意しませんと……
……。
ナポレオン　いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらうよ、偶然の事だ、恐るゝに足らん。
（立つてゐる騎兵に向いて。）
さう言つて行け。
（騎兵敬禮なして引きかへす。）
それよりか、一方の樣子は何うだ、一向に報告が來んぢやないか、誰れか此の內で行つて見い。
アンドレー　私が參りませう。
（敬禮なして行かうとする時第二の傳令來る。）

アンドレー　おゝ、報告か。
（下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛び下りた士官、あわてた樣子で、聲を潛めて話す、アンドレーの顏色また〱變る。他の二人も寄つて來て報告を聞き、顏を見合はす。ちよつと密語なして、ナポレオンの方を振り向くと、立つて鋭く皆の方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわてゝ他を向く、同時にアンドレーおつか〱と座を離れて進み寄り顫へた聲で。）
アンドレー　陛下！　モスクワは空虛でございます！
ナポレオン　えゝ？　モスクワが空虛？
アンドレー　はい、空虛でございます。
（ナポレオンは聞くと同時にアンドレーの上に投げた鋭い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のまゝぢつと見てゐる、顏の色變る。アンドレー其の他皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顏を見つめて、身動きせず、しばらくの間、森として聲無き氣持。）
ナポレオン　馬車を持つて來い。
（士官の一人走り去ると、跡からナポレオン大股につかつかと丘を下手に降りる。皆々沈默のまゝ續いて降り去る、丘の上に夕日が淋しく薄れて殘る。）

—— 幕 ——

第二場

モスクワ市の一方の入口たるドロゴミロフの見附が夕日を負うて遠見に立つてゐる。路傍の土手上の景。髮も髯も蓬々と伸び、垢まびれの顏の蒼白く窶れた韃靼人二人、土手に腰をかけ、下の路からかけて向ふの方を眺めてゐる體で幕上がる。

甲　一體どうしたと言ふんだ、馬鹿に騷ぎ出したぢやないか。

乙　町へ這入つて來ると言ふんだらうよ。

甲　それにしてもお前をよく放免しやがつたなあ、よつぽと言ひ拔けがうまかつたと見えるな。

乙　俺は言ひ拔けたんかしやしねえ、たゞ言葉は一切韃靼語のほかは分りませんといふ風をして默つて居ただけさ、なあに、俺の體はどうせもう、持てあましてる體だあな。殺さうが活さうが、悲しくもなけりや、嬉しくも無え。總督さんに頼まれたから、火だけはつけてやるが、つけねえかも知れねえ。どつちだつてい〻事だ。

甲　だつてお前、同んなじロシア人だな。頼まれた以上は……。

（向ふを見て。）

あ〻、通る〳〵、あれがナポレオンだらう、來れえ〳〵、行つて見ようよ。

（甲が乙を引つ張るやうにして後へ降りる。）

（舞臺廻る。）

第三場

ドロゴミロフの見附前、夕暮の光景、門の兩側に數人の衞兵が立つてゐる、路を離れて前場の韃靼人二人及び貧民體のもの三四人まばらに立つて見てゐる。

ナポレオンは馬車を降り、徒歩で第一場の人々を從へ、ミユラーに先導せられて門の前まで來る。

ミユラ！　是れがドロゴミロフの見附でございます、御命令で兵は總べて一足先に市街に入れておきました。

（ナポレオンは見附の入口でぱつたりと歩を止め、首門を見上げて立つてゐる。皆々一樣に立ち止る。しばらく無言。）

ナポレオン　もう是れでい〻。此の門さへ見れば私は滿足だ、今夜は私は引きかへして此の村へ泊らう。ミユラー市街の方を氣をつけい。

（言つてすた〳〵と跡へ歸らうとする、皆々驚く、ミユラー急いで其の前に立ちふさがる。）

ミユラー　陛下、それはまたどうした譯でございます、ここまでお出でになつて、引つかへすと仰しやるのは意を

得ません、縦へ市民は逃走しても、市街と宮殿とは殘つて居ります。陛下、是れが此の大戰爭の目的地たるモスクワの町でございます。是非お這入りを願ひます。申すまでもなく危險は少しもございません、ミユラーが身を以つてお守り申して居ります、危險をお恐れになる陛下ではない。此處からお引つかへしになるといふ法は、斷じてございません。

（ナポレオン再び門の方を向いて、見上げたまゝ、默して答へず。）

モルチエール　ちよつとでも、クレムリンの宮殿へ陛下がお這入りになれば、一般の士氣が振ひます。

アンドレー　陛下はモスクワの町に這入るのが運命だとお仰せられたではございませんか。其の通りになつて參つたのです。躊躇なさる理由はございません。

（熱心に進み寄つて。）

運命！　運命！　陛下、運命の門はこゝに開いて居ります。たゞ一足です。クレムリンの門も開いて居ります。我等、フランス人の手で明けて待つて居ります。あれ程待ち焦れてお出でになつたモスクワへ來たのでございませんか。陛下は運命の權化だと仰しやつた、あの豫言が今一足で充されます。よしロシア人は一人も居なからうが、フランス人のモスクワで結構でございませんか。何うかお這入り下さい。陛下我々がお手を取りませうか。馬車にお召しなさいますか。

ナポレオン　（ぢつとアンドレーの顏を見て、やゝ涙ぐみ）

運命！　運命！　運命の門！

（アンドレーの肩に兩手をかけ。）

空虛なモスクワ！　空虛なクレムリン！　はゝ、はゝ。

（絕望的に笑ひすてゝ、すた／＼と門の中に這入る、皆々驚いてついて這入る。跡に衞兵も見物人も居なくなると、先程の雜役人二人門の前に進み出で、人々の這入つた跡を見送つて。）

乙　運命の門だとよ。

甲　這入つて行つちやつた。

乙　は、は

（乙が氣の無い笑ひを一聲したまゝ、二人とも口を明き窪んだ眼を一杯に見ひらいて、無意味に門を見て居る、日が暮れて行く。）

――幕――

モスコウはフランス人にはモスクワであらうし、クレムリンはロシア人にはクレムリだそうである、又ダリユーは實際は此の時四十六歲であつた、是等は

舞臺上の發音や筋の便宜で詩的特權の自由を用ひた。

秋田雨雀篇

埋れた春（二幕）

人

藤之助　藥種屋の子（十二歳）
きみ子　税務署長の娘（十四歳）
賣藥行商人
其他町家に屬する男女四名

所

東北地方のある小都市の出來事

時

現代、春

第一幕

舞臺は藥種商と署長との裏地の一部。
二軒の家はある小都市の郊外近くに竝んで立つてゐる。藥種商は土着の人、署長は南方からの移住者である。
先づ舞臺の左手にやゝ大きな白壁の土藏が立つてゐる。土藏から左手寄りに井戸があり、井戸と土藏との間に大きな木が立つて、赤い花が暗緑色な葉の間に開いてゐる。右手イボタの垣根に桃の花が二三本咲いてゐる。然し土藏と桃と椿とを背景として雪を頂いた山脈が見えなければならない。
土藏の扉は閉ぢてゐる。其側面に大きな梯が裏返へしに倚かけてある。
午後の太陽はこの二軒の裏地を照してゐる。
二名の男がシャベルを以て土藏側面にある雪を投げてゐる。
雪の塊が、裏地を流れてゐる小川の中に落ちて、輕い音を立てる。時々何處からともなく子守歌が聞えて來る。

第一の男　（シャベルをついて、腰を伸す）腰あ痛くなつた。
第二の男　己らもよ。
第一の男　一服やるべいや。
第二の男　も少し待て。今、ぢきだ。
第一の男　大分あるなあ。これ皆夏までかこつて置けば、雪賣になれるんな。
第二の男　然んだとも、夜宮（よみや）さでも持つてけば、怖しい金持になるべいてば。
第一の男　はゝゝ、稲荷樣の鳥居の側さ、俵詰（つめ）にしてなあ。

第二の男　（仕事をやめて）　雪あ〳〵つて、呼れゝばよ、いゝ童やど、ぞろ〳〵と集つて来るだ。

第一の男　（冷笑して）　お前んた男にいゝ女童にや、まけてやるべい。困つた雪嚢だな！

第二の男　それだはで、氣前のいゝ男あちがつたもんだてば。

第一の男　氣前が、いゝたつて、女童さばかりが。

第二の男　女童さ氣前見せねで、誰さ氣前見せるべ？（二人は同時に笑ふ。思ひ出したやうに再び仕事に取りかゝる。短い沈默がつゞく。）

第一の男　（凍つた雪の塊を砕きながら）　桃の花まで咲いてる中に、何んぼ固い雪だば！

第二の男　ほんとに固い雪だな！

第一の男　お晴屋の前だつて、もうなかべい。あこは、まるで日お当らねい。

第二の男　然んでも、もうなかべい。

第一の男　もう、なかべいよ。（雪を刻みながら）　あこの崖の下さ行けば、芹あ、有るけいな。

第二の男　そんだ。芹あ、どつさりあるで（懐想的に）　己らとお前と、あこさ行つて、芹とつたことあ、あるけいな。

第一の男　然んだ。能く行つたもんだなあ。あの頃の女童あど、皆な、何處さ行つたかさな？

第二の男　何處さ行つたかさなあ！

第一の男　いゝ女童あどは、皆な他處さゆぐしな、あゝ、つまらねいな、かうしてだつて！

第二の男　ほんとだ。いゝ女童あど、誰だの、はやだあと同しで、さつさと逃げてしまふな。

第一の男　そんでも、皆な色氣のある目付いしてよ、さあてば、皆なお晴屋の金翅雀だけやうに、あつちの樹さ来んだり、こつちの樹さやすんだり。

第二の男　（シャベルを絶望的に突いて）　はゝゝゝ、来んだ色男あ、竿を以つて青空見上げるばかりだ。

第一の男　（山の方を遠く眺めて）　あれ見ろ。

第二の男　（同じく其方へ見上げる）　何んだば？

第一の男　あこの崖林のとこ行ぐのあ、家の兄さでねいが？

第二の男　そんだ、藤ちやだ、藤ちや、あこで何にしてるんだべな？

第一の男　はあ、本讀んでらあ。

第二の男　そんだ、本を讀んでらあ、兄さは本ばかり好きでな、何になるつもりだべな。

第一の男　何になるか知らねが、醫者になるべいよ。

第二の男　何んでも、家の旦那あよ、「兄子の名をいへば、己ら方の町が解るし、己ら方の町の名いへば兄子の名が

解るやうにして見せる」つて言つてゐたけいな。
第一の男　うむ、それ位の者にやなるべいよ。
第二の男　あの人あ、中學の試驗さ行つたず話だがまだ解られいがな？
第一の男　己ら知らねいけど、大丈夫及第だべい、旦那もおそろしく心配してる風だな。
第二の男　然んだべつて、（眞面目になつて）ところがよ。己らこの間、表町の仁助からいゝ事聞いたぞ。
第一の男　いゝ事つて何うした事だい？
第二の男　（眞面目に頭を曲げて考へる）それが、己らには何うも飲込ねいんだよ。隣の場長の娘あ、兄さと一緒れ、汽車さ乗つて行つたず話だ。
第一の男　（愚かなる驚きの表情を以つて）はあれ、まあ！何處さよ？
第二の男　港さ行つたず話だ。
第一の男　港さ？　何しに？
第二の男　あの童も生意氣たな。女學校さ試驗受けるね、行ぐんだつてよ。
第一の男　（敵對の表情を以つて）あの乞食野郎の童まで！
第二の男　あの狐の化物の童と一緒に汽車さ乗るたんて、家の兄もよつぽど呆れた者だ、己ら、それ聞いて口惜くてくならなかつた！
第一の男　それ誰が見だがな？
第二の男　仁助あ見だ、（冷笑するやうな表情で）何んでも二人、同じ窓から首出して居だずでは呆れだものだ！
第一の男　あの乞食野郎の童ど！
第二の男　あの化物の童ど！
第一の男　（嘆息す）己ら、眞にされねい。
第二の男　己らも眞にされねい。
（この時左手垣根の方で女供の呼ぶ聲がする。二人は急に會話をやめて其方に注意する。）
第二の男　見ろ、あの化物の家の牝かす供、此方對いで何が言つてる！
第一の男　（挑戰的に、野蠻な表情を以つて）うむ、何が言つてゐる。聞けねい。
（二人はロシヤ人に對するやうな憎惡の表情で、其方に耳を傾ける。）
第一の女　（やゝ近く）雪を垣根の方へ投げちやいけませんよ！
第一の男　何んだ、垣根の方さ投げちやならねい！（第二の男に對ひ）雪、垣根の方さ投げるなだつてよ。
第二の男　一體誰れや、垣根の方さ雪投げた？　言つて見ろ、この牝かすども、眼あ、あつたら見ろ！

第一の女　まあ、ひどい人達だこと。御覧なさい、こんなに垣根に雪がのつかつてるぢやありませんか？
第二の女　その人達にや、目がないんだよ。皆な盲目だ。
第一の男　何んだ盲目だ。お前だぢあ、女乞食だ。何處から來たか知れたものでねい。猿の化物の飯食つてる者あ、皆な化物だ。
第二の男　何んだ、そんな顔さ白粉べた／＼塗つて、法界節にでもなる氣たべい。
第一の女　まあ、ひどい奴ばかりだこと！　お前達のやうな田舎者と物を言ふのは口の穢だよ。何でもいゝから、家の垣根の方へ雪を投げるのだけは廢してお呉れ。
第二の男　家の垣根？　そこあな、校長様の屋敷だよ。威張たこと言ふな！
第二の女　（議論の弱點を押へたと言ふやうに冷笑する）ふむ、誰れの屋敷たつて、借りてゐる間は自分の屋敷と同じ事だ。
第一の男　（論鋒を引受けるやうに）それに「口の穢」つすのあ何んだ。お前達もお前達の猿も、あの猿の童も、皆な田舎者のお蔭で飯食つてるだべい。それごとよ、年始にも來ねいし御辭儀一つもしねいのあ、上方者か？　呆れたもんだ！
第二の男　それさ、あの女童の生意氣野郎も碌な者でねい。あんたら女童あ、裏町の茶屋さ賣つてやれば一番いゝ。
第一の女　（第二の女に）お嬢さんの悪口を言つてるんたよ。何を言ふんだか、ちつとも分らない。
第二の女　お嬢さんの悪口を言ふと旦那に皆な言付けてやるからいゝよ。
第一の男　あんたら旦那何んだば！　あの猿の化物たつけ何も怖くねい。
第二の男　お前のとこの乞食野郎な、盜賊だ！
第一の女　盜賊？　いつ盜賊した、言つて御覧。
第一の男　言へねいど、思つてるか？
第二の女　そんなら言つて見ろ。
第二の男　言ふとも。大盜賊だ。
第一の女　だから、家の旦那が何處で、何を盜んだか言つて御覧よ。
第二の男　あれや、盜賊でなくて、誰や盜賊た　…己ら言ふぞ、いゝが……仰天するな！
第一の女　早く言つて御覧。
第二の男　言へねいで何うする、あのな……あの校長様ところの林檎盜んだのあれや誰た？　その林檎を、小包にして郵便局さ持つて行つたのあれや誰た？　それこそ、言つて見ろ！
第一の女　まあ！　呆されて物が言へないよ。校長様の林

檎を盗んだのが誰だつて、林檎の番人ぢやあるまいし、何うしてそんな事が解るものかね。

第二の男　番人にや解らなうても、盗賊にや解るべい。盗んだ林檎さ、何の某ど札つけで、郵便局さ持つて行ぐ者あ田舍者にや出來ねい藝當だ！

第二の女　（冷笑して）お前達に言つて置くがね、家で盗つた小包の林檎に、盗んだ林檎がたゞの一つだつてありやしないよ。

第一の女　皆な立派に金を拂つてゐるんだよ。それが僞たと思ふなら校長様に聞いて見るがいゝやね。そんな事言ふ位ならお前達の旦那こそ大盗賊だ。大盗賊だ！

第一の男　何んだ、己らの旦那盗賊だ。何を何處で盗んだ？

第一の女　雪圍の木を盗んだよ。家の旦那様が、この垣根のところへ雪圍ひを拵へたんだよ、それをお前さん方の旦那が自分の雪圍ひの木の中へ入れて持つて行つてしまつたぢやないか？

第二の女　盗賊だ、大盗賊だ！

第一の男　そんだらな……そんだらな……己らの家の非さ紅がら入れたのあ誰だ？　飯の中さ紅あついで、赤くなる、御茶飲むべどもつてお茶つげば、御茶赤くなる、お前の家の嬶あ人殺しだ！

第一の女　（第二の女と垣根際に進み出る）何んだと、お前達の非へ紅入れた。そんなら、去年の御盆の時、家の御玄關へ地藏さんを竝べて行つたのあ誰の仕業だか家では皆な知つてゐるよ。

第二の男　そんだらな……そんだらな、家の旦那の箱橇の金ぶつぱいで、鍛冶屋さ賣つたなあ、誰だか知つてるぞ。

第二の女　家の旦那様を人殺しだつて言ふけれども、お前達の旦那こそ人殺しだ。利きもしない藥を人に賣付けて金をとるぢやないか。

第一の女　お前達の家あ、千金丹賣だ！

第一の男　まいないいい取りの嬶あ、玄法（女郎）受出したぞ！

第二の男　今の嬶の娘だつて、玄法だか草餅だか知れたものぢやねい。

第一の女　奥様が玄法だつて、家の奥さんはな。立派な裁判官のお家から御嫁にいらしつたんだ。

第二の女　然うよ。一體なら、お前達なんかには拜みたいつたつて拜めない方だよ。こんな田舍へなんかおいでになる方ぢやないんだよ。

第一の男　はあ、はあ、これや面白いな。ほんたら、なして田舍の飯食つてるんだ？　田舍あ、嫌ひだら田舍に居ねばいゝ。まいないい取つて飯食つてる嬶の馬鹿野郞なんだ！

第一の女　お前達のやうな物の解らない奴等と話してると

日が暮れてしまふ。旦那様がお歸りになつたら皆な言付けてやるから覺えておいで。

第二の女（第一の女の耳に口をあてゝ私語する）お前達の店では印紙を貼らない藥を賣つてるだらう。家の旦那の若一つで、お前達の家で商賣が出來なくなるんだよ。そしたら何うだ？

第一の女　店がなくなれば、お前達はお揃箱だ。

第一の男　何んだと、お前達の親が、角の酒屋から、犬の子貰つた、犬の子貰つた時、金も貰つた。

第一の女（去りかけながら）もう〳〵何とでも言ふがいいや、私達は知らない。

第二の女　馬鹿者と物を言つてゐる暇なんかないんだよ。

第一の女　いくら藥屋でも馬鹿につける藥はないと見える。

（二人の女急いて去る。）

第一の男（憤然として女の方を見送つてゐる）今に見れ、何うするか！

第二の男（手頃の小石を手に持つて立上る）あの牝（めん）かすども、待で！

（二人は發砲後の兵士のやうに緊張した表情で右手に目を注いでゐる。此短い沈默を、極めて唐突に、ガラスの烈しい音が破る、二人の男はやゝ意外に驚いたと言ふ風にシャベルを捨てゝ藏の後の方へ逃げる。）

（間）

（藤之助は小川を飛び越えて、正面から出て來る。彼は十二歳の少年としてはやゝ老（ま）せた表情をしてゐる。蒼白い顔には怜悧と早熟との神經が弱々しく波打つてゐる。彼はヨオロッパの多くのメエルヒェンの中に見える子供と同じやうな感じを與へるやうなタイプの兒である。彼は現實の雰圍に對して侮蔑を以つてゐるやうに、靜かな微笑を浮べてゐる。土藏の側を靜かに歩いて、椿の樹の下の邊に立つ。然し、決して日本の演劇の多くの中に表はれてゐる、子役のセンチメントを持つてゐるのではない。）

行商人（右手垣根の蔭から靜かに出る。旅に疲れたやうな一人の老人である。紺の風呂敷を重さうに背負つてゐる。つゝましげな目付きではあるが、經驗から得た諦念的な洞察の力が潜んでゐるやうに見える）御免くださいまし。へい此邊に丸藤と申します藥種屋が御座いませんか？

藤之助（少し驚いたやうな表情で、柔かな目を老人に投げる）丸藤？　己らの家あ丸藤だ。

行商人（目を輝して）へい、お前さまは丸藤の身内の方でございますか？

藤之助　然うだ、何か用あるの？
行商人　（左手に指示して）へい、それでは、此方が丸藤さまの御家でございますか？
藤之助　然うだ。お翁さま何處から來たんだ。
行商人　手前はへい、北越の方から旅をして參りました。
藤之助　ふむ、そんぢやお翁さん藥賣が？
行商人　左様で。ダラスキイとウルユスと千金丹でございます。
藤之助　ダラスキイ？　ダラスキイはお前さんの本舗が？
行商人　勿論手前共が本舗でございますが、へい當節では贋物がたんとございますで、その贋物の方が却つて本舗だなどと觸れ歩いて居りますで、誠にへい困ります。
藤之助　（興味を以て）うむ、己ら家にあるダラスキイあお翁さんのダラスキイだかな？
行商人　勿論でございます。此方さまはへい、四十年來のお得意様ですで、へいもう外他のダラスキイの參ります譯がございません。
藤之助　それでも、時々違つたものも、あるよだよ。
行商人　中々持ちまして、勿論格恰の異ひますのも、あるでございますが、品が皆な同じ事でございます。貳拾錢、拾錢、五錢とから三通りになつて居ります。御存じの通り、（懐から淺黄染の手拭を出し、其中から大小三個の袋を出して見せる。藤之助は輕いエモオションを以つて手拭の中を覗く）これが手前共の製劑でございまして、これが皆口に啣みますと、バリ〳〵といふ音を立てまして碎けるのでございます。そこへ參りますと、他店の贋物には砂とか其他有害なものが混じて居りますで、ざりざりいたします。御存じの通り、手前共では御上からいただきました定紋を一々捺してございます、この定紋が大事なのでございます。へい。
藤之助　（不思議な興味を以つて、進み出で）ふむ、その定紋は何といふ紋だ？
行商人　この御紋でございますか。これは、それ近衞様の御紋で「牡丹の丸」といふのでございます。皆な斯うして金箔で捺してあるのでございます。
藤之助　（ぢつとして、行商人の手拭を見詰めてゐる。眩暈を覺えるやうな見詰方をする）
行商人　（皺の多い手で手拭を疊みながら）それは然うと、丸藤さまのお宅は以前から此方でございましたかな。何んだか容子が異ひますやうでございますが。
藤之助　（夢から醒めたやうに）己らの家か？　元からこごた、だとも、大分造り變へたんだよ。御翁さん、己らの家さ來たことあるの？
行商人　へい、十二三年前にはちよい〳〵伺ひましたこと

がございますが、その折とは、何處から何處まで、すつかり變つて居りますな。その時分には此方の家もございませんでしたし。(右手署長の家の方を指示して) この方は一體の野原でございましてな、汽車の通るのが見られた位でございましたよ。

藤之助　それぢや己らの生れぬ先きだな？

行商人　(藤之助の顔を見て) 左樣、その頃丸藤さんには御子さんが、一人ありました。何んでもそれは女のお子さんのやうでな。(再び藤之助を見詰る) それでは、その子供衆は女の御子ぢやなかつたかも知れませんな。お前さんは丸藤さんの坊ちやんかな？

藤之助　己ら、然うだよ。だども、お爺さんの知つてるのあ、己らぢやないよだよ。己らの姉さだらう。

行商人　左樣。へいもう古い事なので、能う記憶えて居りませんが、坊ちやんの姉さんかも知れませんですな。して、その姉さんはお幾つでいらつしやいますな？

藤之助　(淋しい表情、然し輕く言ふ) 己らの姉さ死んだ。

行商人　(別に驚きもしない。心持目を大きく開いて何物かも見つむるやうな表情) へい。その姉さんが失くなられたかな、そしてそれが何時頃の事で？

藤之助　四年ばかり前だ。

行商人　四年ばかり前に。それぢや、丸藤さんも、さぞ御力落しだらう。坊ちやんも、淋しうございませう。

藤之助　淋しいよ。でも己らの姉さ、何處かにゐるよな氣がするよ。

行商人　(微笑する) 姉さんが、何處かにゐなさる！　はあ、全くな。坊ちやんの姉さんが何處かにゐなさる。これや全くだ。(話頭を變へて) 時に丸藤さまはお宅でございますか？

藤之助　居るよ。お爺さん、己らの父さに用あるの？

行商人　へい此度手前、北海道へ參りましたで、へいもう旦那にも暫く御目にかゝりませんし、ちよつくら御逢ひ申したいと思ひましてな。

藤之助　そうか。御爺さんの事、己らも見たことあるよに思ふよ。

行商人　(左手の方へ歩みながら) 左樣で……それでは、表通りの方から參りませう。(土藏の前に立ち) いや不思議なもので、こゝへ參りましたら、初めて宅の勝手が解りました、この藏の蔭が池になりますな……池のところに小さな稻荷樣のお堂がございませう……。

藤之助　(行商人を見送るやうに) 然うだ、危いよ。眞直に行けば、酒屋の勝手だよ。

行商人　(つゝましげな容子で左手に去る、然し聲のみが聞えてゐる) おゝ、雪がまだ大分殘つて居りますな。

藤之助　御爺さん、其處から左へ出るんだ。

（藤之助は土藏の扉の前に立つて其方へ目を投げてゐる。）

（子守歌の聲の中に靜かに幕を下す。）

第二幕

前幕と殆ど同じ光景、但し土藏の扉が開かれてゐる。椿の花の位置が幾らか異つてゐる。土藏の側の雪は皆な取り除かれ、桃の花が一層盛んになつて、垣根の上に質朴な色を盛てゐる。

翌日の午後の出來事である。午後の日が舞臺の後方を射てゐる。

藤之助は藏の石段に腰かけてゐる。其の傍、開いた右の扉の前に十四歳位の女の子が立つてゐる。女は下髮で、美しい被布を着てゐる。細面で、美しい目、然し藤之助に比しては幾らか現實的な感じのする子である。

きみ子（姉のやうな樣子をしてゐる）私の方、まだ判らないの。あなたの方はもう判つて？

藤之助　己らの方もまだ判りへん、きつと落第だと思ひし。

きみ子　そんな事なくつてよ。私こそきつと落第よ。だつて地理の問題大變むづかしかつたんですもの。藤ちやん、ウエリングトンといふところを知つてゝ？

藤之助　ウエリングトン。

きみ子　それでも、マニラなら知つてたわ。

藤之助　フイリツピン群島の港で、煙草の出るとこだし、ウエリングトン何處だかしら？

きみ子　それが何うしても思ひ出せなかつたの。私口惜くて口惜しくて泣き出したかつたわ。

藤之助　それでも、何んだか聞いたことのあるよな名だがな。地理あ何題下りたのし？

きみ子　五題の内三題だけ書くといゝんですつて。私三題書いたけれども、ウエリングトン知らなかつたから餘程點を引かれるでせう。

藤之助　そしたら、他のを書けば宜かつたのを。

きみ子　だつて他のは、みんな物産や面積で、もつと判らないんですもの。

藤之助　己らの方あ、明日判るんだ。己ら待遠しくて待遠しくてなりへん。

きみ子　然う、明日判るの、羨しいわね、及第なら藤ちやん、すぐ港へ行つてしまふでせう。

藤之助　えゝ、港さ行かなければならないし……それでも、己らだつけ、落第にきまつてるんだもの……きみ子さんきつと及第だよ。

きみ子　いえ、私落第よ。あなたが金釦鈕の洋服を着て港の町を歩いてるとこを見たいわね。
藤之助　(顔を赤めてゐる) 己ら洋服だつけ着ない。
きみ子　だつて制服を着なければ先生に叱られてよ。今に御覧なさい、新しい徽章のついた帽子を冠つて威張て來るにきまつてよ。
藤之助　そした事己ら知らないよ。
きみ子　だつて、然うよ。そして此方の學校の事なんか忘れてしまふわ。
藤之助　あした事云つて、此方の事忘れるのあ、己らでなくてきみ子さんだ。
きみ子　あら、あんな事、私決して忘れないことよ。もしかして、藤ちやん此方にゐて、私彼方へ行く位なら、私港へなんか行きやしないことよ。
藤之助　そした事言つても、皆な僞だ。きみ子さん赤い袴穿いで、町で己らと逢つても、知らない振して行くでせう。ほらなあ赤い顔をしてらあ。
きみ子　(反抗的に) あら、いやだこと、藤ちやんにはいい人があるんですもの、私の事なんか直き忘れてしまふわ。
藤之助　いゝ人つて、何んだかさ?
きみ子　あら、いゝ人よ。好きな人よ。

藤之助　(はにかみながら) 己らだつけに、そんな人は一人もない。
きみ子　でも、停車場にゐた人があつたでせう。あの人、マアガレットに結つてたわね。あの人、だあれ?
藤之助　(眞面目に) あれ? あれや、伯父の家の娘でいし。あした女何んだつて……。
きみ子　あの方何ていふの?
藤之助　つゆ子。
きみ子　つゆ子さん。いゝ名だわね!
藤之助　名ばかり好くても、ざつぱ娘だし。
きみ子　でも、あなた好きでせう?
藤之助　あゝした娘、己ら大嫌ひ!
きみ子　そんなら、藤ちやん、誰が一番好き?
藤之助　ふむ、ふむ……己らには好きな人ないんだもの。
きみ子　然う……そんなら、藤ちやん、この世の中の人皆嫌ひ?
藤之助　然うでもないども……。
きみ子　そんなら、好きな人嫌ひな人とあるわね。
藤之助　それや、然うだし……だども……。
きみ子　(子供らしいエモオシヨンを持つて) そんなら、誰が一番好き?
藤之助　校長先生!

きみ子　あら、然うぢやないのよ！　他の人よ……男ぢや
　なくよ……。
藤之助　(半ばからかふやうに)そんだら、己らのお母さ！
きみ子　あら、藤ちやん、ずるい事よ。いゝ人が、どつさ
　りあるから、そんな事云ふんだわ。言はなければ云はな
　くてもいゝわ……みんなに言ひつけてやるからよ。
藤之助　ほんだら、言ふかな……言ふかな……よさうや…
　……。
きみ子　さあ、言つてごらんなさい……おつゆさん？
藤之助　いゝえ。
きみ子　校長先生のおみのさん？
藤之助　いゝえ。
きみ子　酒屋のおみねさん？
藤之助　いゝえ。
きみ子　(考へるやうな容子をして)あゝ、判つた……當
　てゝ見ませうか？　から行つて、お廟座の前の學校の横
　の……ねね、あの人でせう？
藤之助　(少し笑ひながら)誰の事でいし……。
きみ子　ゆ、ゆ、ゆ、解つて？
藤之助　ゆ、ゆ、ゆ、だつて、己らに、は判らないんだも
　の誰の事でいし？
きみ子　おきぬさん、然うでせう？　然うにきまつたわ。

藤之助　郵便局のあの童(わらし)だつけ、己ら大嫌ひです。
きみ子　然う。そんなら誰でせう？
藤之助　何んぼ、そしても當りへん……それだつて、そし
　た遠くの人でないんだもの……もつと近くの人。
きみ子　近くの人……誰でせう？
藤之助　ほんだら……ほんだら言ふかな……だはつて、己
　ら、きまりが悪いんだもの！
きみ子　きまりの悪いことないぢやありませんか、よ、言
　つてごらんなさいよ。
藤之助　(指示して)己の大好きな人、このゆびの先きに
　ゐるんだ……。
きみ子　(突然顏を赤くする)あら、いやだこと……僞よ、
　僞よ、僞よ……藤ちやん僞言(うそ)つき者ね！
藤之助　己ら、僞言(うそ)はねいの……。
きみ子　……それでも藤ちやん、戲談でせう……きつと然
　うだわ。
藤之助　いゝえ。戲談でないんだし……ほんとうだら、き
　み子さん怒るの？
きみ子　いゝえ、怒りはしないわ。でも、なんだか藤ちや
　んの言ふこと、ほんとうにはされないもの
藤之助　ほんだら、己らの持つてるもの、何んでもやらあ！
　お父さから貰つた時計でもなんでもやる。

きみ子　（藤之助の肩へ手をかけて）　私そんなもの、何んにも欲しくないの……藤ちやん、ほんとうに私を好きなの？

藤之助　（きみ子の顔を見あげる）　あゝ、一番好きだ。そうだといけないの？

きみ子　いけない事ないわ……それではね、藤さん私の好きな人を敎へてあげませうか、私の大好きな人……この人よ。（人示指で、藤之助の鼻をつく、藤之助笑ふ）　ね、判つたでせう？

藤之助　それこそ、僞だ！

きみ子　そんなら、藤ちやんだつて僞よ。

藤之助　いゝえ、己の言ふのあ、ほんとだとも、きみ子さんの言ふのあ僞だと思ふし。

きみ子　私の言ふのが僞ならあんたののも僞だ……。

藤之助　それだばつて、己らのはほんとうだもの。

きみ子　それなら私のもほんとうだ……二人の言ふのあ、ほんとうなことにしませうよ……いや？

藤之助　いやでないの。己らきみ子さんを先から好きであつたのだし。

きみ子　私も……私も……（きみ子は幼いエモオションを以て、藤之助の手を握らうとする）

藤之助　（急に身體を退いて）　あれ、誰か呼んでる！

きみ子　（對象を失つたやうな失望の表情を以つて）　誰でせう？

藤之助　誰だか、きみ子さんの名を呼んでる。

きみ子　私には些とも聞えないわ。

（二人は右手署長の家の方を見る。）

（やゝ間を置いて、一人の女中が垣根越しに、きみ子の名を呼ぶ。）

きみ子　（やゝ快活に）　何に？

女中　（藤之助の方へ蔑すむやうな目を投げて）　奥樣呼んでいらつしやいますよ。

きみ子　何か用があるつて？

女中　いかゞですか。すぐにおいでなさるやうにお仰有いました。それに……そんなところへいらつしやるとお父さまが御怒りなさいますよ。

きみ子　なぜ？

女中　なぜつて、あなた、そこが藥屋さんの、お宅でせう。

きみ子　それが、何うしたと云ふの？

女中　でも、あなた、藥屋さんとは……お交際しないことになつて居りますもの。

きみ子　それは私だつて知つてるよ……だつていゝぢやないか、私は藤之助さんとは學校の友達だもの。

女中　それは、然うでございますけれども……。

きみ子　お前、よけいな事言つたんだらう。
女中　いえ、私は何にも申しはいたしません。
きみ子　私は遊んでゐるよ……。
女中　それでは、私が困りますから。
きみ子　（煩さうに）そんなら、直き歸るからつて言つてお呉れ。
女中　お孃さま、何うぞお父さまのお歸り遊ばさない前に、きつとお歸りなさいませ。
きみ子　あゝ、いゝよ。
（女中は無智な憎惡の目を藤之助に投げながら去る。）
（藤之助ときみ子は、淡い悲しみの内に立つ。短い沈默がつゞく。）
きみ子　藤ちやん、あなた怒つたの？
藤之助　なして？
きみ子　女中があんな馬鹿なことを言ふんですもの。あんた、きつと怒つてゐるわ。
藤之助　いゝえ、己ら何ともないの。だばつて、きみ子さんの家と己らの家と仲の惡いのあ能く知つてるんだもの。
きみ子　然う……では、やつぱり私の事を憎いと思ふことがあるでせう？
藤之助　（エモオションを以つて）何して、そんな事思ふんだつて、己ら誰のことも憎いとも思ふことないんだもの……己らにあ何うしても人、憎むこと出來ないんだし。
きみ子　私だつて、あなたの家の人を一遍も憎いと思つたことないわ。何うして、大人といふものは、あゝ喧嘩ばかりするものでせうね？
藤之助　己らも然う思ふんだし、それにつまらないことばかりで、喧嘩するんだもの。昨日も、己ら家の男あ、きみ子さんの家の女中と喧嘩してガラスを壞した。
きみ子　えゝ、然うよ。私その時居なかつたけれども、内へ歸つたら大騷ぎよ。あの時校長先生がおいでにならなかつたら、もつとひどい喧嘩になるところだつたの。
藤之助　然う。校長先生行つたの。校長先生何う考へでるがしら？
きみ子　（大人びた調子）星が惡いんですつて。
藤之助　星つて何の星？
きみ子　私も好く知らないの……なんでも、家のお父さんもあなたのお父さんも相手を殺す星ですつて……まあ、そんなことがあるでせうか？（考へる）失くなつた家のお婆さんも、よく星々つて言つてたものよ、……私そんなこと考へたくはないわ、あなたは、そんなことを信じて？
藤之助　然うね、己ら信じるんでもないども……第一、そしたこと考へたこともないんだもの……したども、世の

中にあ何んぼも不思議なことあると思へば、星といふものあるかとも思ふんだし、支那の本にあ、大のお星さま、みんな人の魂だつて書いてある……。

きみ子　（淋しげに）然うね、そんなことあるかも知れないわね。でも私の家で初めて此町へ來たころは何處のお家とも仲好くしてゐたわ。その頃は藤ちやんのお父さんも、家へ來てお酒をあかつたことあるのね。藤ちやんもよく私の家へ來たものでせう。それでは、あの頃は星が好くて、段々星が惡くなつたのかも知れないわね。

藤之助　己ら星あ惡くなるんでなく、星あ表はれて來るんだと思ひいし……だども、そしたこと考へるのはいやだ……己らこれから學校さ入つて、いろ〳〵な本を讀んで見たい……本の中にあ、何んでも書いてあるんだもの。

きみ子　然うね、藤ちやん學者になるんだわね。然うなつたら、藤ちやん私の事なんか忘れてしまふでせうね。

藤之助　忘れない、いつまでたつても忘れない。

きみ子　ほんとう？　でも、そんなに本ばかり讀んでゐたら、段々私の事なんかいやになるわ。

藤之助　いゝえ、だばつて、二人して本讀むもの、段々仲が好くなるばかりだあし……己らそればかり樂しみにして學校さ行くんだ……。

きみ子　（發動期に近い女の感覺を以つて）家のお婆さんが言つたわ……仲のいゝのは合星（あひぼし）だつて……合星いゝ名だわね……（藤之助に近寄り、藤之助の膝の上に力なく垂れた右の手の上に自分の手を重ねる）まあ、藤ちやんの手はすべ〳〵してるわね……私の手こんなに大きいのよ……あら、あんたの手の冷いこと……かうして溫めてあげるわ……まるで懷中時計でも持つてるやうよ……ぴく〳〵して、何だか音がしてゐるの……。

（此間藤之助は、息苦しい壓迫を感じながら、木彫の小さな佛像のやうな表情をしてゐる、間もなく土藏と弁の間から、前の賣藥行商人が靜に出て來る。行商人は借着らしい袷を着て、兩手を腰の後で、老人らしく組んでゐる。）

行商人　御免くださいまし。坊ちやん、こちらにおいでございますか？　手前はとうと、昨晚此方の御厄介になりました。へいもう旦那も大喜びでな、昨晚は二人で、とうと飮みあかしましたよ。坊ちやんの隣室には燈火がついてゐましたつけが坊ちやんなか〳〵勉强なさいますな。

藤之助　（立ち上り行商人の方へ進む。きみ子は少し離れて立つ）然うが、お爺さん留つてたのがな。そしていつまでゐるの？

行商人　左樣、手前は、今日立たうと思ひましたが、旦那

が、是非もう二三日もゐるやうにとお仰有いますしな、それに手前もこんな老人の事で、もう二度と此方へは參れますまいと思ひますでな、もう二三日御厄介にならうと存じます。
藤之助　その方あいゝよ。お爺さん幾つになるんだ？
行商人　手前はへいもう、一になりますよ。
藤之助　一つて、六十一か？
行商人　中々あなた、七十一でございますよ。
藤之助（目を丸くして老人の顏を見る）ほう、そんなになるがな。己らには六十位ねしか見えないな。
行商人　ありがたうございます。然し手前どものやうに年が年中旅で暮しますものは、自分の年には一向おかまひなしで、いつでも若い心持で居りますよ（きみ子の方を見て）それはさうと。この娘さんは、何方の娘さんでございますな？
藤之助（きみ子の方を見返へり、署長の家の方を指示しながら）この人が？この人あこの家の人だ。
行商人　はあ、それでは、御役人のお孃さんでございますな。御父さんは何方へ勤めておいでゞすな？
藤之助　この人の御父さ稅務署の署長さんだし。
行商人（思ひ當る事のあるやうな表情で）はあ、署長樣の御孃さんかな。ふむ、ふむ、そして、お孃さんのお家では何時此方へいらつしやいましたな？
きみ子（怖しさうに、行商人を見て）五年ばかり前に來たの。
行商人　はあ、五年前に。ふむ、そしてお國は何方で？
きみ子　埼玉縣ですつて。でも私埼玉にゐたことないの、色々なとこにゐたわ。
行商人　ふむ〳〵。色々なところにな。御役人は、へいへう、みんな然うして諸々方々歩きなさるのだ、その間にみんな出世をなさるので。いゝお孃さんだ。（きみ子の顏を見つめて）お幾つかな？
きみ子　十四。
行商人　十四におなんなさるかな。（藤之助に對ひ）坊ちやんの姉さんが、生きてゐなさると、お幾つだつたかな？
藤之助　やつぱし十四だし。
行商人　ふむ、十四、いゝお子さんでな、手前の顏を見るとよく泣きなすつたものだが、どうも手前にはあのお子さんが失くなられたとは、何うしても思はれませんな。だが坊ちやんはいゝ御友達をもつてゐなさるでお幸福だ。お前さま方は仲好くしてゐなさるがいゝ。（左手へ步む）
（藤之助ときみ子は行商人を見送る。）
はあ、これは不思議だ。（行商人立止る）私がこの藏の前

に來ると、赤子の泣聲が聞える。何んだかこの藏の中のやうでもあれば、池の方から聞えて來るやうにも思はれる。

藤之助　(好奇心を以て)　え、お爺さん何に言つてるんだ?

行商人　(首ばかりを藤之助の方へ對けて)　いや、坊ちやん御心配なさいますな。これは老人の空耳(からみゝ)といふものでございませう。手前は昨日この藏の前を通りますと、急に赤子の泣聲のやうなものが聞えて來るやうに思ひましたが、只今もやつぱりそれが聞えて參りましたで、いや、これは、坊ちやんのお母さんが、こゝで赤ちやんをあやしてゐなされたのを思ひ出したのでございませう。

藤之助　(益々好奇心に刺激されて)　ほんぢや、家の母さ、姉さを藏の前であやしてゐたの?

行商人　(身體を半ば振り向けて)　へい、この藏の前へ蓆を敷いて、其れへ坐つて、お乳をあげなされましたよ。はれ、やつはり赤子の聲だ。だが、これは年寄にはよくあることで何んにも不思議ではないのでございますよ。御免くださいまし。

(行商人は靜かに去る。)

きみ子　あれは、何に?　妙な翁さんね!

藤之助　何んでもない。富山の方から來る藥賣だし。

きみ子　あの人藥を賣りに來たの?

藤之助　あ、北海道の方さ行つて來たんだつて、あの人己らの生れない先きに來たことあるんだつて言ひし。だつて、己らの姉さのことよく知つてゐる。

きみ子　おつねさん赤ちやんの時來たんだつて言つたわね。そして、あの人は妙なことを言つたわ……赤子の聲が聞えるつて……何うしたんでせう?　あの人氣狂だわ、さうよ、氣狂に違ひないわ……。

藤之助　あゝ、己らも然う思ふ……赤子の聲が聞えるなんて、可笑しいな!　あれ、狐つきかも知れないねし。

きみ子　(土藏の扉の前に立つて中を覗くやうにして)　藏の中から聞えて來るなんて、何も聞えやしないわね。

藤之助　(きみ子と竝んで中を覗く)　あゝ、己らにも何にも聞えないの。

きみ子　中が暗いこと……私いつか藤ちやんと、この中へ入つたことあるは……二十日鼠の子を捕へたこともあつてよ……二十日鼠の子はこんなにちつぽけで可愛いかつたわ……。

藤之助　(下駄を脱いで石段の上にあがり、やはり中を覗く)　あゝ、そしたことあつた。

きみ子　おつねさん箪笥をあけて、本を出して、藤ちやんのお母さんに叱られたでせう……おつねさん泣いたわ…

…私達もみんな泣いたわ……。

藤之助　己らのお母さ、あろほど怒つた事ないし……本出して見て叱られたこと、一遍だつてないはで、己ら不思議ね思つたし……あれ何の本だかさ？

きみ子　何んの本でせうね……何んでも子供には解らない本かも知れないわ。

藤之助　ほんだや、薬の本かも知れない。薬の本は己らにはちよつとも解らないもの。（反省力のない好奇心に刺戟されて）己ら、入つて見るかな……。

（網戸をあける。黒い幕を重ねて垂れたやうな闇の中に西日を受けた正面の窓が、覗目鏡のやうに赤く見られる。）

きみ子　（同じく石段の上にあがる）あら、あんなに窓に日があたつてゐるわ……何んだかお寺の中へでも入るやうだわ……でもいゝ香ひがすること……。

藤之助　カンフルの香だ……麝香の香もする……。

きみ子　あら、妙なもの天井から下つてるわ、總房のやうなものあれ何んでせう？

藤之助　あれ罌粟の實だし。

きみ子　罌粟の實、何にするの？

藤之助　己ら、知らないし……きみ子さん默としてゐへ！

きみ子　（藤之助の見つめてゐる同じ方へ目をむける）なあに？

藤之助　默として！

きみ子　なあに？

藤之助　にがり壺の上に雀の子あゐる…　あればたく〳〵して飛んでる……己らとらうよ……あら鳴いでる……。

きみ子　（藤之助を押へるやうにして）にがり壺の上なら、およしなさいよ……壺へ落ちるといけない……雀の子なんかいやしないわ……藤さんおよしなさい……。

藤之助　（藏の中へ突進する）雀の子、澤山ゐるし……己らとらう、おらとらう……。

きみ子　（夢遊病者の看護者のやうに同じく藏の中に入る）およしなさい……およしなさい……。

（二人は全く姿を隱す。）

（空虚な舞臺は其儘にすぎる。たゞ椿の花が目立たぬやうに落ちる。然し決してドラマティックではない。）

きみ子　（中から突然叫ぶ）あ、あ、あ、あら藤ちやん：：たれかきて……藤ちやん……落ちた……藤ちやん壺の中へおちた……。

（この聲と共に一度戸口の方へ出て、再び引返へす、その時突然高く積重ねたものゝ床なうつやうな音が觀客の耳に響く。）

きみ子　（柔かなものゝ重いものに壓迫されるやうな音の

中に、極く短い呼聲を發する）あッ……あッ……あッ……。

（人間の社會は如何に不注意であるかを示すため私達は、この空虛な舞臺を數分間其儘にして置かなければならない、二足の下駄が夕日に照されてゐるが、誰も來ない。）

極めて靜かに　幕

國境の夜（四節）

人物

大野三四郎　開墾者
覆面者　主人の影
アンリシカ　アイヌ
大野ゆき　大野の妻
みどり　長女
二郎　次男
五郎　三男
其他旅行者、其妻及び幼兒

場所

北海道、十勝平原の一部

舞臺左手は、雪に蔽はれた原野の一部。遠く雪に包まれた國境の連山が見える。幾條かの橇道が國境の方へ光つてひかれてゐる。右手は大野家農園家屋の内部、正面及び左手に小さなガラス窓がついてゐる。正面の左手に表に出る戸がついてゐる、右手に戸があつて、他の室へ通ずる、室の構造は粗末であるが、頑丈さうである。正面及び左手のガラス窓からは太い氷柱が劍の樣に垂れてゐる。

室の中央には大きな圍爐裡があつて、火が盛んに燃えて、鍵にかゝつた大きな鐵罐には、湯が盛んに沸騰してゐる。正面の窓に近くテイブルと椅子があり、それに近く大きなランプが吊されてゐる。テイブルの上には帳簿が三四册載つてゐる。右手の戸の傍に小形の金庫が置かれてゐる。すべて第一期の北海道成功者の生活を想ひ出させる。

第一節

（幕の上つた瞬間に、主人を除く他の四人は、圍爐裡を圍んで葛湯を飲んでゐる。主人はテーブルに向つて書き物をしてゐる。年にしては若々しい顏の主人の妻は、三人の子供達に葛湯を拵へてやつてゐる。）

娘　（葛湯のコップを持つたまゝ）お母さん、外はひどい嵐ですね！　それに雪も降つてると見えて、ガラス戸にあんなに雪が……。

母　（葛湯を拵へながら一寸顏を上げて）まあ！　この分ぢや、また網走線が不通になるかも知れないね。私は二十年も其餘も北海道にゐるけれども、今年のやうな雪は一度も見たことがないよ。

娘　でも、お父さん昨日歸つて來てよかつたのね。今夜のやうな晩だつたら何んなに心配するでせうね。

母　あゝ、ほんとにいゝことをしたね。二郎にあげようか？　五郎さんはもうお止めにするんですよ。

三男　うむ、あたいにもう一杯！

母　然うか、それぢや、二郎さん、五郎に半分だけおあけ。

次男　己らいやだ……五郎にも拵へてやればいゝんだよ。お母さん。

母　いやな子だね、お前はもう一杯飲んでしまつたんぢやないか、五郎には半分しきややらないんだから、お前の半分だけやつたらいゝぢやないの、いゝ子だから。

次男　己らいやだ、姉さんのを分けてやればいゝんだ。

長女　（笑ひながら）いやな子！　それぢや五郎には姉さんのをあげようね。さあ、コップをお出し。さうら、これでいゝだらう？

（三男は默つてコップを受取つて甘さうに啜る。）

母　（次男に新しく出來た葛湯を渡す）さあ、これを飲んだら、みんな溫和しく寢るんですよ。（主人に）あなたも一杯あがりませんか？　葛湯を飲むと身體が溫まりますよ、こんな晩は早く寢てしまはうぢやありませんか？

主人　（テイブルに對つたまゝ）うむ、ひどい風だな。私は昨日歸つていゝことをした。子供等を早く寢かした方がいゝ。私はもう少し書き物がある。湯をどん／＼沸かして置いて吳れ。

母　書き物は明日の朝になすつたつて、いゝぢやありませんか、こんな寒い晩になさらなくたつて。

主人　然うしてはゐられないんだ。お天氣になつたら、明日にもまた札幌へ行つて來なければならない。

娘　お父さん、また道廳へいらつしやるの？　この間の用がまだ濟まないんですか？

主人　あゝ、まだ濟まない。然し、もう直きだ、何しろ相手は無敎育な奴等ばかりだから話にならんのだ。

母　でも、餘り面倒なことには關係なさらない方が好うございますよ。相手が解らない人間ほど怖いぢやありませんか？

娘　お母さん、ほんとうよ、あの人達、停車場で私に逢ふと、いつでも、高い聲で惡口なんか言ふんですもの、私ほんとにいやになつてしまふわ！

主人　（怒氣を含んで）あいつ等は、そんなことでもしなければ私に對抗が出來ないんだ……何しろ裁判には敗けてゐるし、登記ももう濟んでゐるのだから、亂暴でもするより他に仕樣がないのだ。

母　でもそんな人間を相手にいつまでもごた／＼するのはほんとにいやぢやありませんか？　錢金には代へられま

せんからね。私もこんないやな思ひをして、いつまでもこんな寒いところにゐるのはいやですよ。人に怨みを受けるのは一郞やみどりの出世の妨げにもなるぢやありませんか？

主人　（辯解らしく）お前達には解らないんだ。今に何も彼も解決するのだ。この事件が解決さへすれば、私もこの農園を管理人に任せて、札幌か東京で暮すつもりだ。然うなれば、みどりにも充分勉强させるし、一郞とも每日逢へるのだ。

娘　お父さんは、いつでも然んなことばかり仰有つて、一度も實行したことがないんだもの。私お父さんを信用しないわ。

主人　（笑ひながら）信用出來なかつたら信用しないでもいゝさ。今にお父さんが何んなことをするか見てゐるがいゝ。お父さんは、お前達の生れない前から此方へ來て、それからといふものは寢る眼も寢ずに働いて來たのだ。お父さんの此方へ來た時は、この邊は一面の大森林で、山手に少しばかりアイヌの部落があつたきりだ。お父さんと、お父さんと一緖に來た人達が、土地を拂下げて森を切拂つてその後に豆を蒔いたのだ。一番最初に豆の收穫のあつた時の喜びは今でも忘れられない。あの土佐の百姓達の來たのはそれからずつと後の事さ。その頃お父さん達は、馬鈴薯と豆だけを食べて暮したもんだ、その頃の事を考へるとまるで夢のやうだ。

二郞　（突然に）お父さん、其頃熊がゐた？

主人　あゝ、ゐたとも、家の牧場の入口のポプラのあるところに、大きな楡の樹があつたが、お父さんはあの邊で熊に逢つたことがある、いゝ鹽梅にお父さんはあのアンリシカと一緖にゐたので、アンリシカはその熊と取組みあつて、マキリで殺してしまつた。それからアンリシカはお父さんの家へ來るやうになつたのだ。

二郞　お父さん、アンリシカは幾つになるの？

主人　さあ、幾つになるかお父さんにも解らない。アイヌは自分の年を忘れてしまふものだから。

母　ほんとにあのアイヌはいつでも同じやうな顏をしてゐますね。私が初めてこゝへ來た時も、やつぱりあんなやうな髯むしやな顏をしてゐましたね。

娘　然う、お母さん？　アイヌは一寸見ると怖さうだけれども、みんな溫和しいものね。

主人　然うだ、アイヌ人は內地人よりもずつと溫和しい。そしてみんな恩を知つてゐる（ある連想から）あの土佐人のやうな恩知らずは一人もゐない。お父さんは土佐人の村のことで何れだけ骨を折つてやつたか知れない。それをみんな忘れてしまつて、お父さんの開墾した土地を

自分達のものだと言ひ張るのだ、（辯解らしく）それや、土佐人の掛下げた土地もあつたにはあつたが、途中でやりきれないで、全部引揚つて內地へ歸つたのだ。そこでお父さんは正式の手續きを踏んで、莫大の資金を下してその土地を開墾したのだ。開墾が出來て收穫のある頃になつたらまた歸つて來て、お父さんの土地を自分達のものだと言ひ張るのだ。幾ら道理を分けて聞かしてやつても納得しないのだ。お父さんは若い時から他人に恩を賣らない代りには、他人の世話にもならないで暮して來たのだ。それはお父さんの哲學で、同時にお父さんの道德なのだ。つまりお父さんは他人の生活に立入らない代りには、他人に、お父さんの生活に一歩も立入らせないのだ。

三男　（突然）お母さん、眠い！

主人　寢かしておやり、二郎ももう眠いだらう。早く寢かしておやり。

母　え。さあ、みんな寢よう。二郎も一緒にお休み。

二郎　お母さんまだ寢ないの？

母　お母さんも寢るよ。さあ、寢かしてあげよう。

主人　よく溫まつて寢ろよ。風邪を引かせないやうにした方がいゝ。みんなもう一遍火に當つて寢ろ。

（二人の子供は兩手を開いて圍爐裡にあたる。子供等の顏は赤く輝いて、滿足と幸福を表はしてゐる。家族の間に溫い沈默がつゞく。）

主人　さあ、二人とも此方へ來い。頰片が溫まつたかな。（主人は、髯の濃い顏を二人の子供等の顏に觸れて見る）おゝ、よし／＼、これなら朝まで溫かいぞ、さあ、寢ろ。

（二人の子供は主人に對つて御辭儀をする。）

主人　おやすみ！　溫かにして寢かしておやり。

（二人は母につれられて、右手の戶から隣室に行く。主人は再びテイブルに對つて仕事を初める、娘は爐に木をついだり、鐵鍋の湯を見たりしてゐる。）

娘　お父さん葛湯を一杯あげませうか？

主人　うむ、一杯もらはうか？　お父さんのは極く濃くしてお吳れ。今年の葛はよく出來たから、兄さんのところへも送つてやらうね。

娘　（葛湯を造りながら）え、お父さん、兄さんのところからお音信があつて？

主人　先月の初めに一回あつた。來年の春になつたら、お前をよこして吳れと言つて來た。

娘　（喜ばしげに）然う、ほんとう、お父さん！　お父さん、來年はきつと私を出してくださるでせう。

主人　あゝ、いゝとも、お父さんも來年の夏までには東京へ出るつもりだ、お父さんはこれから東京へ出てほんと

うに働くつもりだ。

娘　然う、お父さんまだ働くの？

主人　働くとも、人間は死ぬまで働くべきものだ。お父さんも最初はこんなところで働くつもりぢやなかつたのだ。お父さんも一郎のやうに東京で學問をするつもりだつた。然しお父さんには一郎のやうに金をつゞけて與れる人がなかつた。お父さんは子供の頃、人間といふものは正直に働きさへすれば、幸福が一人手で來るものだとばかり信じてゐた。然し正直はいつでも金のあるものゝために敗ける、金のあるものは學問や力を買ふことが出來る。だが正直は何も買ふことが出來ない。そこでお父さんは金のないお前達のお祖父さんを怨めしく思つた、そしてお父さんは東京を飛び出したのだ。もしお父さんが、こゝで働かなかつたら、一郎やお前に學問をさせることも出來なかつたし、お前達とかうして暮すことも出來なかつたのだ。

娘　（葛湯を主人のテイブルのところへ持つて行つてやる）ですけれども、お父さん金といふものは、そんなに尊いものでせうか？

主人　（葛湯を喫る）それやお父さんだつて、唯だ金を儲けるのが目的で働いて來たのぢやない、お父さんはお父さんを苦しめた世間に復讐するために働いて來たのだ。

娘　然しお父さん、然んな生活はお父さんにとつて、ほんとうに樂しい生活でしたか？　お父さんのやうな生活は、苦しいいやな生活ぢやありませんか？

主人　それは勿論、樂しい生活ぢやなかつたかも知れない、然しお父さんにとつては仕方のない生活だつたのだ、第一樂しいか、樂しくないか、お父さんには考へる餘裕もなかつたのだから。

娘　それぢやつまらないわ、人間は何んなに苦しんでゐても、自分の生活を考へて生きて行けさへすればやつぱり幸福ぢやないでせう？

主人　それはお前達から考へることで、お父さんにとつては斯うして生きて來るより仕方がなかつたんだ。お前にはまだ解らないことだ。

娘　然し、お父さん、お父さんに意味のある生活でも、私達につまらない生活であることもあるでせう？

主人　（眞面目に）それはあるかも知れない、然し私は今までお前達の幸福を考へないで生きて來たことは一度だつてないつもりだ。私は私の生活のためにお前達を苦しめたことは一度もないつもりだ。お前達の幸福のためにお父さんは働いて來たのだ。

（この瞬間に遠く犬の吠える聲がする、主人と娘は暫く沈默のまゝでゐる。）

母（戸を靜かに開けて入る）大變犬が吠えてゐますね、この寒さは何うです！　みいさんも、もうお休み、（主人に）あなたも、お休みになつたらいかゞです？

主人（帳簿を閉ぢる）あゝ、さうしよう、手がかぢかんで仕様がない、（立つて爐の傍に來る、坐つて兩手を火の上に翳す）未だ吹いてるやうだな。いつまで吹くつもりだらう？

母　やつぱり犬が吠えてる。戸締りをさせませう、みいさんもよくあたつてお休み。

主人　私は表の方を締めるから、お前は裏の方を締めて呉れ。

（主人は表の戸を開けて見る。吹雪が顏を打つので、顏をしかめながら強く戸を閉めて鍵をかふ。）

ひどい吹雪だ！　明日は道がなくなつてしまふかも知れない。さあ、早く締めて寢よう。

（母は主人から鍵を受取つて右手の戸から入る。娘は室の整理を初める。コップを棚の上に載せたりする。主人は火箸で火を叩く。火花が散る。）

娘（神經質に）お父さん、誰か來たんぢやありませんか？　人の足音のやうよ。

主人（耳を澄して）然んなことないだらう、こんな吹雪の夜、誰が歩いてるもんかね？

娘　いえ、お父さん、ほんとうよ……何んだか人の呼吸づかひもするやうよ、ほら話聲がするぢやありませんか？

主人（無頓着に）こんな晩に旅をするなんて、隨分亂暴な人間もあつたものだ……さあ、よくあたつておいで。

（主人は再びテイブルに向ふ。）

第二節

（やがて二人の旅行者が全身雪に包まれて左手から現はれる。夫婦らしく女の方は四五歳の子供を脊負つてゐる。女は家の壁に觸はると同時に、そのまゝ力なく壁にもたれ蹲んでしまふ。）

男（戸を叩く）もし／＼、一寸お頼み申します……。

娘（鋭敏に）お父さん、誰か戸を叩いてゐますよ：開けてあげませうか？

主人（本能的に）默つておいで！

男（戸を叩く）もし／＼、一寸お頼み申します……。

娘　大變疲れてゐるやうですよ、もし入れてやらなかつたら、凍え死んでしまふかも知れませんよ……ね、お父さん、元氣のない聲ぢやありませんか……お父さん開けてやりませうよ。

男（戸を叩く、もし／＼お頼み申します……一寸でよろしいのですから……。

母　（戸を開けて入る）あなた、誰か戸を叩いてるぢやありませんか……何とか言つてるやうですよ……。

主人　（以前よりもつと冷靜に）こんな晩に出歩いてる奴かあるものか……ぢつとしておいで。開けなかつたら何處かへ行くだらう。

母　それぢやあんまり可哀相です……開けてやりませうよ。

主人　餘計なことをするものぢやない！　何んな人間だか知れたもんぢやない。いゝからお前達は寢ておいで、

女　（ひよろ〳〵と立上り、壁に顔をぴつたりつけて震へながら）もし〳〵、こゝを一寸開けてくださいませんか……吹雪で難澁してゐるものです……つかれて、お腹がすいて……それに子供が、子供が……。

母　（無意識的に壁の方へ寄つて、女の言葉を聽く）つかれて、お腹がすいてゐるんですつて……。

娘　お母さん、子供をつれてるんでせうか？　さあ、開けてあげませうよ。

主人　（次第に病的な冷酷さを増す）餘計なことをするもんぢやない！　お前達は寢てしまへ、聲をたてないやうにしておいで！

男　私達は何んにも怪しいものぢやありません……今朝帶廣から來たのですが、途中で雪に降られて死にさうになつてるんです……二里ばかり先方からお宅の燈火ばかりをあてにして來たものです……他に一軒も家がないのですから……こゝを開けてくださらなければ凍えて死んでしまふばかりです……。

母　……二里ばかり先方から家の燈火をあてにして來たんですつて。

主人　聲を立てるなといふのに。

男　（戸を指で觸りながら）何うか何んとか言つてくださいませんか……あなた方の一言で私達親子三人の生命が助かるんですから……こゝからあなた方の立つてゐるところがよく見えるんです……奧さま、何うかその明るいところへ一寸でもいゝから入れて下さいませんか……お孃さん、何うかお父さんにお願ひして、こゝを開けていただくやうにしてくださいませんか……。

（主人は本能的にランプを消す。）

女　（男の言葉に勇氣を得て、立上りながら）ほんの一寸でようございますから……この子供の雪を解かしてやるだけでいゝですから……この子はもう呼吸を引きとりさうになつてゐるのです……何うせ死ぬものにしても溫い火の傍で死なせたいと思ひます……その溫い圍爐裡の傍へ一寸でも置いてくだされば、そのまゝ眼を落してもあきらめがつきます……。

娘　お父さん……お父さん……お父さんはなぜ燈火を消してしまつたんです……。

（主人は沈默をつゞける。）

母　あなた、何うしたのです……この人達はあなたの敵なのでせうか？　平生のあなたとは何うしても思へません……あなたはあの人達の言ふことが聞えないんですか……。

（主人は身動もしない。）

男　あなた方のお話なさる聲だけははつきり聞えてゐます……あゝ懐かしい聲です……私達は一日人間の聲を聞かなかつたのです……その聲を聞くだけでも私達の身體が温ります……もうこゝの鍵を外してくだすつたのでせうか？

（二人の男女は戸の方へ寄つて力を併せて戸を押してゐる。）

（家の中で娘の泣聲がする、主人は石のやうに默してゐる。）

男　（指で戸を引掻く）やつぱり鍵がかゝつてゐる……何うしてこゝを開けてくださらないのでせう……こゝをただ一尺ほど開けてくださりさへすればいゝのです……私達は明日の朝、皆樣のお眼覺めにならない内にこゝを立つてしまふのです……少しもご迷惑をおかけしないつもりです……。

女　私共を入れてくださるのが然んなに厄介でございましたら、この子供だけでよろしうございます……私共はこの軒で眠つてゐてもよろしいのです……何うか、この子供の顔を見てやつてください……。

（家の中は暗く冷い、そして娘のすゝり泣のほか何の答へもない。）

仕方がありません、こゝを立つて行きませう　こゝにかうしてゐる間によつぽど歩けるでせう……さあ、行きませう　…

男　（力のない聲で）あゝ、仕方がない、また歩くことにしよう……（急に思ひ返へして）然しもう一遍、お願ひして見よう、あんまり殘念だ……あんなに温い火が燃えてゐるんだ……もし〳〵あんまり未練らしくて、自分に自分で腹が立つやうな氣持もいたしますが、この子供に死なれてしまへば、私共は死んだも同樣です……明日から私達は何にが樂しみで生きて行きませう……何うかこゝを開けて、この子を温めてやつてください……もし、いよ〳〵こゝを開けてくださらないなら其譯を一寸聞かしてください……さうしてくださりさへすれば、私達は喜んで歸つて行きませう……何とかたつた一言云つてください……。

女　何うか奥さま、奥さまにもお子さんがおありのやうで
す…　子供の可愛いことはよく御存じの筈です…　奥さ
ま、何うか一言何とか仰有つてください…　さあ、これ
がお別れです……。

（室の中で娘が戸の方へ突進する氣配がする、然し主
人はそれを制止する、誰も何とも言はない。）

男（全く絶望して）ぢや、仕方がありません……この子
供のために元氣を出して歩くことにしませう。

女　一寸でも軒下へ置いていたゞいた御禮を申上げます…
…もし私共親子の死骸がお眼にとまるやうなことでもあ
りましたら、犬に喰はれないやうなところへ埋めて置い
てくださいまし……。

男（歩きながら）馬鹿なことを言ふもんぢやない……然
んなことは何んのたしになるものか……さあ、行かう…
……。

（二人は殆んど雪の中に埋もれるやうな姿で、家の後
の方に去る。）

（家の中の人は長い間沈默をつゞけてゐる。）

母（ランプに火を點ずる）とう／＼行つてしまつた！

（主人は二度と笑ふことの出來ないほどの緊縮した表
情をしてテイブルに腰をかけてゐる。）

（娘は戸に近く兩手を眼にあてゝ立つてゐる。）

（三人とも顏を合せることが出來ない。）

（外は益々荒れてゐる。）

主人（嚴格に）みんな寢てしまへ、私はこれから仕事を
しなければならない。お前達はいつでも他人の生活のた
めに苦しめられてゐる。私は他人の生活を妨げない代り
には、他人のために自分の生活を妨げられるのもいや
だ！

娘（突然）お父さん！　これがお父さんの哲學なの！（半
ば泣きながら）つまらない、ほんとにつまらない哲學で
す……獸でももつといゝ哲學を持つてゐます……お父さ
んの哲學は石ころの哲學です……。

母（娘の傍へ行く）これ、お前はお父さんに何を言ふの
です？　お前は何うかしたの？

主人（強ひて笑ひながら）その子は少し昂奮してゐるや
うだ。氣を落ちつけさせて寢かしてやらなくちやいけな
い。

母　みいさん、さあ、寢よう、お前は今晩何うかしてゐる
よ。氣を落ちつけなくちやいけませんよ。さあ、お母さ
んと一緒に寢ようね。

（母は娘を賺しながら右手の戸から去る。主人は二人
の去つた後、爐に木をついだり、鐵罎に水をさしたり
して再びテイブルに對ふ。）

アンリシカ（戸の外から）ニシパ、ニシパ寢たか？

主人（仕事をしながら）アンリシカ？

アンリシカ う、う、そんだてや、ニシパ寢たか？

主人 今寢るところだ。お前は今時分何處へ行つて來たのだ？

アンリシア 餘り寒いて、己ら内から溫まるべいて思つて。ニシパ、寒い晩でないか？ アイヌはお神酒ないと死んでしまふてや。

主人 お前幾ら飲むつもりだ？ 先刻飲んで行つたはかりぢやないか？ 朝になつてから、また飲んだ方がいゝだらう？

アンリシカ 然んでないてや……たつた一杯呉れろよ……ニシパ可哀相でないか、今シヤモ二人死んでゐたこや、ニシパ知つてるか？

主人（無意識的に立上る）死んだ？ 誰が何處で？

アンリシカ あの橋のとこで、こゝから見えてや……シヤモのメノコ子供を脊負つてゐたてや。不憫でないか？ 何してこゝさ入らないかさ？ シヤモ賢しくても、やつぱり馬鹿だてや！

主人（無言のまゝ戸を開いて）さあ、お入り、アンリシカ、それはほんとうか？

アンリシカ（アツシの上に雪が一寸ほども積つてゐる。手に德利を持つてゐる）アイヌは僞を言はないてや……ニシパ御神酒一杯呉れろ！

主人（無言のまゝアイヌの顏を見てゐる）死んだのはいつの話だ？

アンリシカ 今のことだてや、たつた今の話だてや……ニシパ御神酒一杯呉れろ！

（主人は無言のまゝ、アイヌから德利を受け取り、爐傍の樽から酒を注いでやる。アイヌはそれを嬉しさうに眺めてゐる。）

アシリシカ（幾度も御辭儀をしながら）ニシパ、難有いてや、難有いてや……ニシパ、おやすみ、また朝に來るてや。

主人 もう行くのか？ さやうなら、おやすみ？

（主人はアイヌの去つた後、不安さうに戸を締める、鍵をかい、それから爐の火をいけ、ランプを消して右手に去る、舞臺全く暗くなる。）

第三節

（舞臺が再び明くなつた時、覆面した一人の男が、鑛山などに用ひるガラスランプのやうなものを携へて室の眞中に立つてゐる。覆面者の眼が異樣に光つてゐる。主人は右の戸を開いて室に入つて來る、二人は短い間

沈默のまゝで相對してゐる。）

主人　（鋭い聲で）　お前は誰だ？

覆面者　（太い力ある聲で）　お前は誰だ？

主人　己はこゝの家の主人だ、お前は一體誰の許可を受けて己れの家へ入つて來たのだ？

覆面者　誰の許可も受けはしない、己れは己れの衝動で入つて來たのだ！

主人　一體何しに己れの家へ入つて來たのだ？

覆面者　何しに入つて來たか、己れによく解らないのだ。然し己れのこれからやる仕事で大抵見當がつくだらう。

主人　（怒りを無理に壓へて）　他人の家へ無斷で入つて來て、妙な事を言ふ奴だ……一體お前は何だ？

覆面者　己れは盜賊だ！

主人　（怖れと怒りの入り亂れた語調で）　盜賊？……よし、盜賊が己れの家へ何しに來たのだ？

覆面者　盜賊は何しに他人の家へ入つて來るか、大抵想像がつきさうなものだ、盜賊に入られたら、盜賊に入られた時の覺悟をするがいゝ。

主人　お前は一體何が欲しいんだ？

覆面者　己れは己れにないものは何んでも欲しい。自分になくて、他人の持つてゐるものほど餘計に欲しいのだ。それはお前の方がよつほど好く知つてる筈だ！

主人　妙なことをいふ奴だ。己れは盜賊なぞを怖れる人間ぢやない。己れは若い時から身體を鍛へて來てゐる。盜賊の一人や二人は何んとも思つてゐない。

覆面者　なるほど、いゝ度胸だ。それ位の度胸がなければ盜賊は出來ない筈だ。

主人　（怒りを含んだ聲で）　盜賊？　己れはいつ盜賊をした？

覆面者　然んなことは自分に聞いて見るがいゝ。夜が更ける、仕事が晩くなる、問答は後廻はしにしよう、（語調を變へる）さあ、お前の持つてゐる有つたけの金を出せ！一文でも隱すと承知しないぞ。

主人　お前は己れを金持だと思つてゐるのか？　己れにも幾らかの金はあるが、それは皆な己れの事業に使ふ金で銀行に預けてあるのだ。己れは己れの事業で百人以上の人間を食べさせて行かなければならない。折角だが手元には金が一文もない。

覆面者　然んなことで欺されろ己れぢやない。己れが盜賊に入る時はちやんと目星をつけて置くのだ。

主人　幾ら何んと言はれても、ないものは仕方がない。見ればお前は多少教育のある人間らしいが、覆面して、夜夜中人の家へ押入り强盜に入らないでも、幾らでも話の仕樣もあらうといふもんぢやないか？

覆面者　生意氣なことを言ふな！　話の仕様があるやうなら、盗賊には入らない。已れはお前に說法されるやうな盗賊ぢやない。お前はこの前の火曜日に銀行預金を二千圓引き出してある筈だ。それから昨日お前は札幌から郵便貯金を三百圓持つて來た筈だ。さあその金を一文も殘さず已れに渡して吳れ。

主人　（覆面者の顏を凝視して）なるほど、然ういはれると、然うに違ひはない。然しあの金は已れの使ふ金ぢやない、この月末に肥料會社へ拂はなければならない金だ、あれを持つて行かれては已れは困つてしまふ、何うかそれだけは免して吳れ。

覆面者　然んなら改めて金を引出して來たらいゝぢやないか、けちなことを言ふ奴だ。

主人　（力なく）けちなことを言ふんぢやない、已れは正直なことを言つてゐるのだ。

覆面者　然しそんなことは已れの知つたことぢやない。そんなことを一々聞いてゐた日には盗賊は出來やしない。ぐづぐづ言はないで、二千三百圓の金を綺麗にこゝへ並べて出すがいゝ。

主人　今も言ふ通り、それでは已れも困つてしまふのだ。その代り、其內幾らかはお前にあげよう。何うかそれで溫和しく歸つて吳れ。

覆面者　已れはお前に金を借りに來たんぢやない、盗賊に來たのだ。さあ、渡さなければこれだぞ？　例へお前達のやうなものでも、金より生命の尊いことは知つてゐたらう。さあ、綺麗さつぱりと渡すがいゝ！

（覆面者は主人の眼の前にピストルを突きつける、主人の顏は次第に蒼白くなる。）

何うだ？　これでも人間の生命より金が大事か？　お前の返事一つでこの指が動くんだぞ、この指を御覽！

主人　（顏をピストルから背けて）お前に然ういはれると一言もない。已れは若い時から色々不幸な生活をして來た人間だ、そしてこの四五年になつて、やうやう人間らしい氣持になつたところだ。何うか已れを嚇すのだけは止して吳れ。

覆面者　然んなら、金を渡すか？

主人　さあ！

覆面者　（ピストルを延べて）渡さなければこれだぞ！

主人　（淚を流して）よし、已れも男だ。未練らしいことはしない。金は確かにこの金庫に入つてゐる。ピストルを延べるのはよして吳れ。已れも年をとつたら弱くなつた。決して抵抗しないから其處で待つて吳れ。

覆面者　よし、それなら、ピストルを向けるのだけはよしてやらう。さあ早く出せ。

（主人は手をぶる〳〵震はせながら金庫を開いて金を引き出す。）

主人　さあ、これを全部お前に與れてやる。妻や子供が知つたら何んなに悲しむか知れない。餘り騒がないやうに温和しく歸つて與れ。

覆面者　それは己れの勝手だ。己れはお前のところへ金を貰ひに來たのぢやない、取りに來たのだ。

主人　それはよく解つてゐる。兎に角己れはこんなことを家族の者に知らせたくないのだ。己れは今まで他人のために自分の生活を搔き亂されないで暮して來た。それは己れのたつた一つの誇りであつた。

覆面者　ふむ。お前は自分の生活を搔き亂されないために、何十人、何百人の生活を搔き亂してゐるか知れない。そんなことはお前だつて知つてる筈だ。

主人　己れは他人の生活を搔き亂したことはない……己れは他人の生活を搔き亂すことを大きな罪惡だと思つてゐる。

覆面者　それは當前の話だ。然んなことは、お前が犬猫同樣に使つてゐる作男の方がよつぽどよく知つてゐる、そしてちやんと實行してゐる。お前の知つてるのは理窟だけだ、そしてお前の生活はいつでも其反對だ。

主人　（自分を忘れて）何んだと、お前は己れの哲學をひつくり返へさうといふのだな？　己れの哲學は理窟から生れて來たものぢやない。己れの哲學は五十年間の實行から生れて來たのだ。己れの血と汗から生れて來たものだ。お前のやうな盜賊に破られるやうなものぢやない。

覆面者　破られるか破られないか、見てゐるがいゝ、ポッケットから一筋の麻繩を出して主人に示す）こゝに一筋の繩がある、己れは今この繩をお前に渡すから、己れの言ふ通りにするのだ。もし己れの言ふ通りにしなければ、己れはすぐお前を射殺してしまふ。さあ、この繩を受取れ！

主人　（躊躇しながら）繩を持つて何うするのだ！

覆面者　兎に角繩を持てばいゝのだ、そして己れの言ふ通りにするんだ。

主人　（澁々繩を受取る）いやな氣持の繩だ……いやなべたべたしたものがついてゐる。

覆面者　血が着いてゐるんだ。

主人　（繩を投げ出す）血？

覆面者　（ピストルを向ける）繩を持たないか！

主人　（震へながら、再び繩を手に持つ）早く命令して與れ……時間のかゝるほど己は苦しむばかりだ。

覆面者　蟲のいゝことを言ふな。盜人猛々しいとはお前のやうな奴のことを言ふのだ。

主人　何方が盗賊だ？

覆面者　何方が盗賊だか、考へて見るがいゝ。

主人　已れは氣狂になりさうだ、お前は已れに何んの怨みがあつてこんなことをするのだ？　已れは今までこんな侮辱を受けたことがない。一體已は何うすればいゝのだ？

覆面者　騒ぐな！　さあ、繩でお前の子供達の首を締めるのだ、（右手の戸を指示す）あすこでお前の子供達はいい心持で眠つてゐる。眠つてゐる内に締めるのだけは免してやる。盗賊にも情けのあることを知るがいゝ。

主人　（がた／＼震へて來る）耻しい話しだが、已れはもう元氣がなくなつてしまつた。已れは今立つてゐることも出來ないほどだ。そんな無理なことは言はないで、溫和しく歸つて呉れ。

覆面者　お前はがた／＼震へてゐる。お前の顔をお前に見せてやりたい……さあ、何んの彼のと時が經つ、早く其繩でお前の子供達の首を絞めろ！

主人　何うか、それだけは免して呉れ……已れはこの一本の繩を持つことさへやう／＼のことなのだ……何うして已の子供の首が締められるものか？

覆面者　いつまで、ぐづ／＼してゐるのだ、さあ早くしないか？

主人　何うかそれだけは免して呉れ。已は今まで他人に頭を下げて免しを請うたことのない人間だ……もし必要ならば、已れは已れの持つてゐるものは何んでもお前にやる……子供等を締め殺すなんてことはてんで考へもされないことだ……どうか、それだけは免して呉れ！

覆面者　然うだらう。殺せないのは當然だ、それぢや、お前はこの燈火を持つて戸口に立つてゐろ。もし一歩でも動くと承知しないぞ！

主人　お前は已の子供を殺すつもりか？……已れは何うしてそれを見てゐられよう……どうか免して呉れ！

覆面者　さあ、燈火を持たないか？　此方へ來い！　歩かないと射殺すぞ！　しつかり持て、そんな顔をして已れを見るな！　この戸の蔭にお前の妻とお前の子供が眠つてゐるのだ。溫い臥床の中で眠りながら死ぬ子供は何れだけ幸福か知れない。

（主人は、夢遊病者のやうに覆面者のピストルに導かれて、右手の戸の前に立つ。主人は殆んど知覺を失なつた人のやうにぼんやり立つてゐる。）

（覆面者は靜かに戸を開いて室の中に入る。戸は開いたまゝである。）

（やがて、子供等の悲鳴を上げる聲と床をうつ音がする。）

娘の聲　……あれい……お父さん……早く來て……人殺し
……あ、あ、……あ、あ――あ……。
（母の聲と子供の聲が入亂れて聞える。物を打つ音、壓迫する音。物の摺合ふ音。器物の破れる音。）
主人　待て！　お父さんは今直ぐに行く！
覆面者の聲　そこを一歩でも動くと承知しないぞ！
主人　（燈火を投げ捨てる）撃つなら撃て！
（主人は燈火を投げ捨てゝ隣室に突進する。）
（ピストルの音。）
（主人の呻く聲。）
（舞臺は全く暗い。）
（長い間。）

第　四　節

（舞臺が少し明くなつた時、表の戸を打つ音がする。）
（正面と左手のガラス戸から朝日が射し込む。）
アンリシカ　ニシパ、いつまで寢てるんだべい？　ニシパの家さお日樣晩く照らすだか？
主人　（荒々しく戸を開く、そして怖さうに周圍を見廻す）やつぱり、もとのまゝだ……（戸に手をかけたまゝ隣室の方を見廻はす）やつぱり、みんな生きてゐる……あゝ何んて夜だつたんだ！
アンリシカ　（戸を叩く）ニシパ、何してるんだべ？　ここ開けて呉れろてや。ニシパの家、お日樣笑つてるべいてや。
主人　（戸を開いてやる。日光が明るく差し込む）アンリシカ？　よく來て呉れた。（アンリシカの手を堅く握る）
アンリシカ　（主人の顔を凝視して）ニシパ今日何うしたか？　青い顔をしてるてや。
主人　アンリシカ、火があるか見て呉れ。
アンリシカ　（爐の火を掻き廻しながら）火うんとあるてや。
主人　然うか、火をどつさり燃して呉れ。
（アンリシカは圍爐裡に木をつぐ。やがて火が燃え上る。）
主人　アンリシカ、よく火にあたつて、己れと一緒に行つて呉れないか？
アンリシカ　ニシパ、何處さ行くんだべいや？
主人　己れと一緒に昨夜死人のあつたところへ行くんだ。あの人達は新しい雪の下になつて死んでるだらう……よく溫まつて呉れ。
アンリシカ　ニシパ、今日何うかしたか？「シヤモの心は二つある」つてほんとだてや。アイヌの心はいつでも一つだ。駄目だてや。駄目だてや！

主人　（アイヌの毛深い手を堅く握る）　アンリシカ、お前は幸福な人間だ！　お前こそほんとの人間なのだ！

（主人はアイヌをだきかゝへるやうにしていつまでも離さない。）

――幕――

手投彈

――追憶か――
――凝視か――
――戰闘か――この何れに屬するかで藝術家の立場が決定する。すべてが其上で……日記――

主人
娘
隣人
其他

北國夜

主人　何も幸福ぢやありませんよ……。
隣人　…幸福があなたの手の中にあるからでせう……。
娘　湯がよく沸いてゐます、お父さん……。
主人　私は何もないが一番幸福だと思ひますよ……。
隣人　ほんたうです……然し私は持つてゐたのを奪られてしまつたのです……あなたには私の淋しさはお解りになりますまい……私は死んだ子供のことを考へないやうにしてゐます……あなたのことを考へると、あなたの子供のことを考へると、私はあれの事が考へ出されてなりません……あれは大きな熊手の形をした機械の下で、その機械のかつさらつて來た何十貫目といふ石に壓しつぶされて死んだんです……何んといふ機械でしたつけ、こんな形をした、いやな機械でした……なせ人間はあんな機械を發明したのでせう……まさか私のたつた一人の子供を殺すために發明されたものぢやありますまい……。
娘　小父さん、そのお話はおよしなさいな……さあ、お茶が出來ましたからお茶でも上つて、ゆつくり面白いお話でもしませうよ。
主人　お茶を持つておいで……私はいつでもお氣の毒だと思つてゐます……然し私のやうに子供の多いものゝ不安は恐らくあなたにはお解りにならないでせう……こゝにも一人ゐますが、可笑しい話ですけれども、これが私の世話をやいて與れてゐるのを後から見てゐると、いつこんな子供が生れたのだらうと考へて見たりすることがありますよ……。
外の聲　寒い晩だ……。
外の聲　寒い……降らなければいゝが……。
外の聲　雪だぞ……。

外の聲　雲だ……今年は少し遲れたから降つたら多いぞ…
……。
外の聲　それでも星がちらほらのぞいてる……晴れて吳れ
るといゝが……。
外の聲　曇つても晴れてもおいらには同じ事だ……。
外の聲　そうだ、おいら早く內地へ歸りたくなつた……。
外の聲　內地へ歸つたつて何うにもなりやしねえ……。
外の聲　でも、おいらは溫い日の光を見てえんだ……。
外の聲　溫い日の光なんか何處にもありやしねえ……溫い
日の光が一體何處にあるんだ……そんなものがありさへ
すれや、こんなところへは來やしねえや……。
隣人　こんな形をしてゐましたつけ……あの機械の話は子
供の友達からよく聞かされましたが……あなた子供はあ
の機械の持つて來た石の下になつて死んだのです……子
供の兩の眼玉が飛び出してゐました……あの機械は何ん
といふ機械でしたつけ、こんな形をした……。
娘　後生ですから、小父さん、そのお話はよしてください
な！
主人　いゝよ、お前は彼方へ行つておいで、お話して慰め
になるのなら、お話していたゞかうよ……お前は勉強し
ておいで……
隣人　子供はその前の日曜日に遊びに來てゐましてね、夕
方元氣で歸つて行つたのです……それがあなた一週間と
經たない土曜の朝です、あれの死んだのは、私に別れを
告げに來たのでしたらう……あれはちやんと解つてゐた
のでした……。
主人　私は若い頃に生れたばかりの子供に死なれた事があ
るきりで、その他の子供は皆な丈夫すぎるほど丈夫です
ので、あなたの心持はお察しするだけです……ほんとに
お氣の毒なことでしたな……。
隣人　築港のところに淡紅色の山茶花が咲いてゐまして
ね、子供はその山茶花の根株のところへ頭を載せるやう
にして寢かされてゐましたが、私は頭を持ちあげると、
私の頭の上のところに大きい髯を生やした所長の顏と、
あの大きな鐵の何とか機械が立つてゐました、あの機械
は何といふ機械でしたつけ、こんな形をした……私はあ
の機械のことを考へると、あの所長の顏が眼についてな
りません……。
主人　然しあの所長はもう廢めましたね……。
隣人　廢めるのは當然です……私の子供の死んだ日に廢め
て吳れたらよかつたのです……廢めるだけでは足りませ
ん……あの日から築港の仕事なんか全部よしてもらひた
かつたのです……それがあなた、あの日の午後からあの
機械がまた平生のやうに動いてゐました……何んて薄情

な機械でせう？　いや機械が薄情なのぢやありません…
…人間です！　あの人間が廢めた時、私はあの機械も一緒に何處かへ行つてしまふだらうと思ひましたが、あの機械はやつぱり動いてゐます……今もやつぱり動いてゐます。

主人　そんなに昂奮なすつちやいけません……さあ熱いお茶をあげませう……。

娘　だから、お父さんはいけないんですよ……。

隣人　私の話を取合つて吳れません……有難う……あの坑夫の唄を知つておいでゝせう……瓦斯がドンと出れやチヨイト二百兩……私は子供の生命を二百圓で會社に賣つたやうなものです……私は二百圓で賣り飛ばすために子供は産まないつもりです……それにあれの眼玉が、あれの眼玉があの腐つた鰯の眼玉のやうに、こんなに……。

娘　小父さん、後生ですから……。

主人　息子さんはお幾つでしたつけ？

隣人　二十六でした……溫和しい子でした……。

主人　二十六……。

娘　二十六……。

主人　後厄ですな……。

隣人　やつぱりそうでせう……。

娘　お父さん、そんなことか……。

主人　私はそんなことは信じやしない……。

隣人　もし厄年が惡いものなら子供と同じ年の人間が皆な不幸でありさうなものですが……あれと一緒に會社に勤めてゐた人間はみんな元氣で働いてゐますから……。

主人　……。

娘　お父さん、兄さんは？　中の兄さんは……。

主人　……。

隣人　あの何とかいふ機械は子供の機械だつたのです……二年間も同じところで働いてゐたんです　…機械だつてもう少し遠慮してもよささうなものぢやありませんか……
……。

主人　……。

娘　そんなことないわ……。

主人　……。

隣人　然かも、あなた、その午後からあの機械がまた動き出してゐたんです……誰かが私の子供の機械を動かしたんでせう……あの何んとかいふ機械、こんな形の……。

主人　……。

娘　小父さん、何うぞよしてください……。

主人　……。

隣人　私は二百圓のお金はお返しするから、子供をもとの身體にして返して吳れと言ひますとあの太い鬚の所長は

あの大きな腹をゆすぶつて笑ひました……會社の醫者は私の眼瞼を開いて見たつきりで私を何とかいふ氣狂ひにしてしまひました、……ハ、、、、……。

外の聲　お上さんお休み……。

外の聲　お休み……。

外の聲　湯ざめのしない内に早くお休みよ……。

外の聲　明日はまた早いよ……。

外の聲　お母さん、寒いよ……。

外の聲　だから早くお歩きつて言つたぢやないか……。

隣人　ハ、、、……一體あなた何方か氣狂ひですか……私はかうして聞いていたゞくのが何よりの慰めなのです……築港々々つて騒いでゐて、一體いつになつたら築港が出來るんですか……一體私といふ人間は變な人間でせう……いや變になるのが當然です……また築港が出來て一體誰かそれを使ふのです……私のたつた一人の子供が死んでしまつたのです……私もやがて死んでしまひませう……それぢや、私達のために築港か一體何んな關係かありますか？

主人　もつともです……あなたがそうお思ひになるのが無理はありません……だが一體世の中のことを自分のものだと思ふのが既に間違つた考へだと私は思ひます……私はあなたに較べたら幸福な人間かも知れません、然し私は子供のことを自分のものだと一度も考へたことはありません……子供なんてものは草や木の生えるやうにひとり手に生えて、そして一人手に枯れて死んでしまふのです……私は子供のことで人に羨ましがられた事は度々ですが、一度も子供のことを自分のものだと思つたことはありません……悪いかも知れませんが……それだけ私ものです……私は死ぬまで一人で生きたいと思つてゐます……子供も私のことを考へてゐなさうです……苦しいのです……考へてもらひたくないのです……それだけです……。

娘　お父さんはいつでもあんなことばつかり……。

主人　私は子供のことを自分のものだと考へてゐるのでしたら、私はかうしてゐないのです……私は子供達は子供達で自分の世界を開いて行くものだと考へてゐます……それでいいんだと信じてゐます……長男もそうしてやつて來ました……女の子達もそうやつて來ました……多分次男も三男もそうやつて行くでせう……私の家は私の地方では古い家です……いはゞ相當の格式を持つた家ださうです……古い家か何んです、格式か何んです……やつぱりめい〳〵生きて行くより仕方がないのです……よしんば途中で倒れたつて仕方がありません……それだけの話です……。

隣人　だが、あなたには希望があるからです……子供さん達から時々お便りがありませう？……。

主人　私と子供達とは餘り便りをしないやうにして居ります……子供等から便りのある時はきつといゝ時ぢやありません……誰でも自分の生活を持つてゐる時は便りをしたがらないものです……それがほんたうです……何か不幸のある時……不平のある時……誤解のある時……人間は自分だけで澤山です……。

娘　お父さん、それだからいけないのよ……中の兄さんはお父さんのことをエゴイストだつていつたわ……。

主人　何といはれてもいゝ……私はかうして生きて來たし、死ぬまでかうして行くつもりだ……。

隣人　あなたはそれで生きて行けるからえらい……私には勇氣がない……子供は私にたつた一つの武器でした……子供はたつた一つの家でした……その家も武器も失くなつてしまつたのです……。

娘　小父さん、ほんとにお氣の毒ですわ……お父さん、あなただつて、小父さんのやうなお身上でしたら、きつともつと子供を他賴りになさると思ふわ……それが自然ですもの……。

主人　それは私には解らない……私は自分の生活を土臺にして話をするより仕方がない……。

娘　餘り現實すぎるわ……。

隣人　初めから私に子供がなかつたらそんな心持にはならなかつたでせう……一層あの子がもつと小さい時に死んで吳れたらよかつたのでせう……私は希望と一緒に記憶をも失くしたかも知れません……私は今では記憶の方が一層捨てがたいのです……二十六年間私は毎日あの子の顏を見て暮したのです……希望は捨てられますが……この心持は誰も解つて吳れません……誰も……私は今朝もあの子の母と話したのです、あの子に逢へるなら、二人で行脚をして歩いてもいゝつて……いや行脚をして途中で野垂死をしてもよいのです、あの子に逢へるといふ希望さへあるなら……。

主人　私にはとても解らない……私は餘りに幸福すぎたかも知れない……。

娘　お父さん誰か戸を叩いてゐるやうですね……。

主人　誰れだらう？

娘　郵便屋さんだわ。

主人　郵便？……こんなに遲く……持つておいで……。

娘　ご苦勞樣……お父さん兄さんからよ……中の兄さん………。

主人　お前のところへか？……。

娘　いゝえ、お父さんのところへ、大變厚い手紙よ……あ

げませうか？……。

主人　いゝ、テーブルの上へ載せてお置き……あんな筆無精の男が……。

娘　何んだか急ぎの用事らしいのよ……早く開けてご覧なさいな……。

主人　いゝよ……あれの手紙はいつもむつかしい樣に書いても書かないでもいゝやうな手紙ばかりだ……。

娘　でも、何んだか心配だわ……封筒も大變眞面目くさつて書いてあるわ……。

主人　いゝ〳〵……そこへ載せてお置き……。

隣人　何の方からです？

主人　何、中の男の子からです……これは少し變者でしてね……一年に一度位しか手紙をよこしません……もつともこの男は他の家を繼ぐことになつてゐますもんですから……この男は他家へやつたせゐか、私にも何となく氣になります……この男は子供の頃から不思議な子供でした……自分の考へを發表しないで、それをすぐ行動に表はす男です……。

娘　お父さん、早く開いてご覧なさい……。

隣人　他家へおやりになるなんて、よくあなたに然んなことがお出來になりますな……お幾つになります？……。

主人　さう……二十六だつたと思ひますが……。

隣人　二十六？

娘　お父さん、早く開いてご覧なさい……。

隣人　私はこれで失禮いたしませう……あなたは幸福です……もうストオヴが欲しくなりました……お孃さん、さよなら……。

主人　まだ早いおやありませんか……さうですか……私が附けてお歸りなさい……。

娘　さやうなら小父さん、また明晩おいで下さい……

隣人　おゝ、星がすつかり隱れてしまつた……さやうなら……。

主人　さやうなら……。

娘　さやうなら……。

主人　戸をお締め……雪になりさうだ……明日からストオヴを焚かう……。

娘　兄さんは今頃何うしてゐるでせう？　何んな手紙ですか？

主人　……。

娘　まあ、そんなに細かに……結婚の話？

主人　……。

娘　いゝお孃さんですつてね……それにお母さんはやさしい方ですつて……兄さん、きつと幸福よ……。

主人　……。

娘　お父さん、何うなすつたの？　何か心配なことでも書いてあるんですか？　さあ、讀んできかしてください……私がきいていけないこと？……。

主人　あれは苦しんでゐる……あれの言ひさうでないことが書いてある……。

娘　……。

主人　あれは決して苦痛を人に訴へる男ぢやない……私には解らない……。

娘　……。

主人　あれは今光明を求めてゐる……たつた一つの光明……自分は今たつた一つの光明だけを見つめてゐる……その光明の消えた時には、怖ろしい暗黒が自分に襲つて來さうだ……例へ何んな不幸が自分に來てもそれの責任がお父さんや兄さん達にあるのではない……それはたゞ人間その者が太古から恐らく無終までも持續けるやうな一つの性質がさせるのだ……。

娘　何んのことでせう？……お父さん……。

主人　親と子を大事な關係だと思つて來たのは人類の抑もの誤謬の初りだ……兄弟といつても同じことだ……子供を生まうといふ意志をもつてゐる親が一人もない……ただ子供が生れるだらう生れた子供は養はなければならないといふことを知つてゐなければならないといふことを知つてゐるだけだ……お父さん、それだけの事なら犬や猫でもなし遂げてゐることです……人間が自分を犬猫以上のものだと自惚れた時に進化といふものが生れました……そしてその進化は實に不合理でそして殘酷なものです……私はその進化を過信しすぎたのです……私はその進化を最上のものだと信じ切つてゐました……愛……人格……美……節度……調和……正義……それ等は皆な人間の殘酷性と不合理とを塗りつぶす塗料に過ぎないのです、私はこの前の手紙で、私の將來や希望や抱負を述べましたが……私は何處までお人善しだつたのでせう、私は何處まで自惚家でしたらう……あれを考へるだけでも恥しくなります……何うか、この手紙が屆き次第あれは燒きすてゝください……大學教授……そんなこと考へるだけで私は身慄ひがします……私のこの苦しみ……誰に私は救ひを求めませう？……誰も解つてゐないのです……。

娘　お父さん……。

主人　泣くな……私には泣く勇氣もない……私は人間の生活を芝居のやうにして眺めてゐた……僅か十分ほど先きまで……然しあれは決して無謀なことはしない……お父さん……私は然し最後まで勇氣は失はないつもりです……私はこの光明を何處までも見つめて行きます……然し

殘念ですが光明はだん〳〵小さく幽かになつて行きます……私の希望は今怒りに變つて行きかけます……それは美や節度の古い假面を冠つた殘酷なものが私の前に現はれて來たからです……私は今自分を怖れてゐます、自分を充分警戒してゐます……私は自分を醜だと思ひ切ることが出來ません……然し然う思へば思ふほど私の中から醜いものが頭を出して來ます……私は今救ひを求めたいのです……然しそれはお父さんや、兄さんから得られさうにはありません……またその責任もお父さんや兄さんにあるのではありません……お父さんや兄さんは今の私には全く路傍の人です……。

娘　お父さん……。

主人　……私はお父さんにたつた一つのお願ひがある……あなたの子供だと思ふ考へを……親が子のすることに責任を持つたり、恥かしがつたり……世間、私には今では何等の係りもない世間に氣兼ねをしたり顏を隱したりするそんな馬鹿な考へを一日も早く捨てゝもらひたいといふことです……もしそうしてくださりさへすれば私はたつた一人になつて戰つて行きませう……戰つて死ぬことを自分の生命として昔の武士のやうに……勇しく戰ひませう……もし、もし、もし……。

娘　もし……。

主人　……もし私は何んな行爲をしても、私は例へ――馬鹿な、あれは決して然んなことはしない、あれは立派に道を見つけて行く……そんな馬鹿な人間ぢやない、だが、私はもう讀む氣にはなれない……。

娘　お父さん、私にかして――もし私は明日路傍で死んでも……。

主人　馬鹿な……讀むな……あれは氣が狂つてゐるのだ……そんな手紙を讀むな……。

娘　お父さん、でも兄さんは大變苦しんでゐらつしやるわ……中の兄さんがこんなことを言つてよこす位だから容易なことぢやないわ……何うしませう……何うしませう……何うしませう……。

父　……。

娘　お父さん、兄さんは死にますよ……。

父　……。

娘　何とか兄さんに言つてあげたいものです……電報を打たせてください……たつた一言で兄さんは氣持を變へるかも知れません……お父さん……お父さん……。

父　……もう遲い……私達の言ふことで動かされるやうな男ぢやない……あれは長い間苦しみ抜いてゐたのだ……私はあれのすることは全部承認する……あれは今頃何方か一つの道を選んでゐるに相違ない……もう遲い……。

娘　……お父さん……。

青　年
少　女
通行人

闇黒　門　街路――夜――交錯する二三の交線

青年　己れは今闇の中に立つてゐる……呼びかけるものがない……世間――父――兄――教師――書籍……そんなものでは今では己れにとつて何んでもない……己れは今全く闇の中に立つてゐる：己れは勢ひ込んで驅けて來た……己れは自分の骨ばかりで歩いて來たやうな氣がする……何かに當るとばら〳〵に崩れさうだ……が髓の中に、ある冷たい力が流れてゐる……油汗が己れの頬の上を流れてゐる……この闇は何處までつゞく闇だらう……己れは一つの目的の爲めに突進して來た……己れは今まで自分を幸福な人間だと信じ切つてゐた……世の中の惡と不幸と戰はうと考へたのも、自分を惡と不幸の外にゐるといふ誤りからだつた……己れはブルジョア社會の辯護者である、多くの倫理學者を侮蔑した……然し己れは何れだけその外にゐたか……己れは……今、たつた今大から墮された……己れはマリアの姿を見ながら下界に帽子を落したパン・フアドスウスキイだ……やせた骨ばかりのパン・フアドスウスキイだ……。

――小さな二つの光線――

己れの前に厚い鐵の壁が立つてゐる……小さな光はその中に吸ひ込まれて行く……何といふ冷い堅い壁だ……道德、宗教、人格、調和、平明、節度：己れは彼等を憎む……神、國家、家庭……何といふ冷い暴力だ．壁には何千年來の血痕がついてゐる：お前等があるが爲めに人類は如何に苦しみ、如何に惱んだか：幾十萬幾百萬の人類がお前達のため滅されたか……。

――一つの光遠ざかる――

おゝ小さな魂よ、
お前はなぜ、
そんなに逃げて行くのだ。
門を開け、
門が動いてゐる。
お前は自分を知らない、
自分の中に自分の力が、
流れ溢れてゐるのを知らない。
おゝ小さな魂よ！

少女　私には力がありません：私は、もがけばもがくほ

と、あなたから遠ざかつて行きます‥私には力がないのです……私は私を命ずるものゝ力に動かされてゐます……。

青年　嘘だ‥…嘘だ……嘘をいふな‥小さな魂よ……お前に意志がないのだ…… 意志のあるところにはきつと力が生れて来る筈だ……お前に力のないのは意志がないからだ……お前達の仲間は皆な意志をもちかけてゐる、そして門を開かうとしてゐる……ある者はそれをもうちやんと開いてゐる……。

門を開け、
門が動いてゐる。
門を開け、
門が動いてゐる。
お前に自分を知らない
自分の中に自分の力が
流れ溢れてゐるのを知らない。
おゝ小さな魂よ！

少女　あなたの聲がだん〱遠くなつて行きます……門の傍には人が立つてゐる…… 門はだん〱固く締められて行く……こゝです……こゝです……。

青年　おゝ、確かにお前はそこにゐる……だがお前の光はだん〱弱つて行く……壁は倒れさうもない……。

……マスク、
大きな鐵のマスク、
冷い冷いマスク、
お前は何といふマスクだ？
……マスク、
大きな鐵のマスク、
小さな魂よ、
マスクの下に何がある？
小さな魂よ、己れはお前が欲しいのぢやない……お前のゐる牢獄を破りたいのだ……それさへ破ればお前は小鳥のやうに飛んで行つていゝのだ……もう一度力を出して見せて見れ……もう一つの魂を失くしたくないのなら‥

少女　駄目です‥駄目です……錠が下ろされました……。

青年　錠……。

少女　あなたと私とは別な世界にゐます……。

青年　別な世界とは何んだ……私達こそ同じ世界にゐなければならないのだ……お前は今何處にゐるのか、自分で知らないのだ……お前は今敵の家にゐるのだ……私達こそ味方なのだ……。

少女　いえ、私は今柔かな力に抱かれてゐます‥温い容氣が私の氣持の中に入り込んで行きます‥おゝ、お母

さん、お父さん、私は一體何處へ行かうとしたのでせう……私をしつかり抱いてください……私はもう何處へも行きません……。

青年　もう何もかも暗い……光は一つも見えない……音も聞えない……幸福な人間だと、今の今まで信じてゐた自分の姿……おゝ憐むべき自惚家の最後……敵を罵りながら敵の宴會の御馳走にありつかうとした裏切者……私は自分の哲學を疑ひ初めて來た……私はもう一度あの番人に頭を下げて見よう……地に這へといつたら地に這はう……靴の底をなめろと言はれたならなめよう……。

（去る。）

通行人　……もし〱大審院判事さんのお宅は何處でせう？……。

通行人　大審院判事……そんなものは知りません……。

通行人　この邊では古いお宅ですが、ご存じありませんか……。

通行人　知りませんよ……私は遠方のものだから……。

通行人　何んだ馬鹿々々しい……もし〱この邊に大審院判事さんのお宅がございませんか？

通行人　あゝSさんですか……あすこに女學校の寄宿舍が見えませう……あの四つ角を眞直ぐに左側の鐵柵のある屋敷です……。

通行人　ありがたうございます……私はこの荷物を持つて先刻から二時間もその餘もこの邊をうろついて居りました……ありがたうございます……。

通行人　それはお氣の毒でした……何んですかそれは……大變重さうなものですが……。

通行人　なに新式のポンプです……。

通行人　なるほど金ですな……これぢや重いでせう……おや、あの音は何んでせう……大變な音ですね……おや……。

――重い音の後に人の叫び聲――

通行人　電氣かひどく搖れてゐますね……まだ人の聲がしてゐます……いやな聲ですな……。

通行人　喧嘩でもしたのでせう……この邊は學生さんが多いから……。

通行人　めつきり寒くなりました……さやうなら……ありがたうございました……。

通行人　いえ、何ういたしまして……。

精神病學者
醫　　師
署　　長

警　官
官　吏
學　生
隣　人

夜遲い――門――ガスの青白色の光――自動車

署長　……驚くべき事件です……慘酷極まる殺人です……。
精神病學者　……サヂスムスです……文明病の一つです……都會……神經力の持續的緊張……腦髓質の消耗……神經力の困憊から來るのです……。
醫師　遺書のやうなものもなかつたといふお話でしたね……。
署長　さやう、そんなものを持つてゐないやうでした……K博士御繁忙中恐入りました……何しろ知識階級には珍しい事件でございました……加害者の平素の素行からしてもこんな事件を惹起しさうにも思はれません、全く病的發作と見るより他はありますまい……最も本人は多少過激な思想の持主のやうにも言はれて居りますが、別に行動の上では……。
精神病學者　ふむ……そして遺傳の方は？　私はこの事件には可なり興味を持つてゐるんです……この男の遺傳の方面が解ると大變面白いのですが……。
學生　……そんなことに興味をもたれちや困りますね……。
巡査　こら〳〵靜かにしないか……こゝは見世物ぢやない……君等は、何か用事があるのですか？
署長　實は私も加害者の顏を見るのが今晩初めてゞ、そして……たゞ本人は多少色彩のある人間でして……。
精神病學者　これは面白い……色彩？……何んな？
署長　なに、その色彩と申しましても……。
學生　色彩がいゝね……。
巡査　君等は一體何んな用事があるんですか……退け〳〵つて何遍も言つてるぢやありませんか……。
學生　君、いゝぢやありませんか、別に騷ぐ譯ぢやなし……人間には好奇心といふ奴があるんだから……。
巡査　君等は教育のある人間だ……人間の不幸を好奇心で見たいのかね……。
醫師　何うも體質上から見ますと、強度の神經衰弱性のやうでございます……色情異常の結果かとも思はれます……。
精神病學者　さうでせう、さうでせう……そして兇器は當人が携帶したものでせう？
署長　さやうです……當人が携帶して來たものに相違ありません……。
精神病學者　色情倒錯の一種です……この年配の青年には

少女刺殺症なぞといふ不思議な症狀があります……そしてそれは槪して遺傳性のものが多いやうです……この青年の遺傳が解ると面白いのですが……。

醫師　何しろ、餘りに突發的な事件で、この青年の精神狀態、遺傳發作といふことに就いては何事も解つて居りません……。

署長　たゞ戀愛の拒否といふことが兇行の近因になつてゐるやうです……然し被害者兩人は人格者として尊敬されてゐる人間で、青年に對する態度も必ずしも高壓的であつたとは言へません……。

精神病學者　さうでせう……然し非常に神經過敏になつてゐますから、一寸した刺戟でも怖るべき結果を生むことがあります……。

署長　戀愛や結婚拒否が兇行の原因になる場合が多いのですが……今晩の事件は餘程普通とはちがつてゐるやうでございます……第一加害者は非常に知識的で冷靜な性格の男でございます……被害者兩名は平生人に怨みを受けるやうな人物でもありませんし……。

精神病學者　かういふ犯罪は私は寧ろ知識階級に特有のものだと思ひますよ……少くとも神經過敏性のものに限られてゐます……教育制度は腦の重荷、刺戟の過重を與へます……自制能力の疑ひ……意志の痲痺……身體の軟化……加害者は何ういふ學科を修得して居りますか？

署長　倫理學の學生ですからね……一體最近の倫理學の傾向は何うなつてゐるものでせうか？

精神病學者　ふむ、面白いですね……倫理學……。

學生　おや〳〵倫理學の傾向だつてさ……。

學生　己れ達よりもあの連中は餘程のんきだぜ……盜賊を捕へて繩をなふやうなもんだ……博士しつかり頼みますぜ……。

巡査　こら〳〵……。

精神病學者　もしかしたら、倫理觀の相違が兇行の有力な原因になつてゐやしませんか……例へば人生觀……社會觀……戀愛結婚、家庭に關する……これは必ずしも日本ばかりの現象ではないが……個人的から社會的……家庭から人類的といふやうな新しい觀念の因襲が軟弱な青年の頭腦を病的にして、思想のために、社會のために自己を犧牲にするといふやうな誤つた觀念を養ひ、觀念の批判力の缺乏から喜んで人を殺害したり、自己を滅ぼしたりするものが多いのです……。

署長　なるほどお說によつて啓發される點が多うございました……つまり文明過剩といふ奴ですな……。

學生　文明過剩か……。

學生　はゝゝゝゝ。

労働者　おい／＼、少し退いて呉れ／＼……馬だ、馬だ……。

隣人　書生さん、一寸見せてくださいな……お二人ともいい方でしたのに何うしてまた……私は奥さんがお可愛いさうでなりません、それはおやさしい方でした……。

學生　お上さんそんなに押しちやいけないよ……覗いたつて見えやしないよ……。

労働者　皆な死んでしまつたのかえ……誰か一人生きてゐたらいゝんだがな……。

隣人　お嬢さんが生きておいでになるんですつて……お可哀さうぢやありませんか……私はあの方が一番お可哀さうです……失くなつた方達は何もご存じないからいゝやうなもの……。

労働者　それや當然だよ……死んだ人は何んにも解らないのは……だけれども、一體何が不足で人を殺したりしやがるんだらう……一體書生が生意氣だよ……大學まで入れてもらつて學問をさせてもらつて、女一人を手に入れられないつて人を殺して自分も死んぢまふなんて意久地ねえぢやねえか……。

労働者　静かにしろよ……お巡査が來た……。

女學生　あの方お可哀いさうね……あの方はまだ何んにもご存じないんですつて……。

女學生　そう?……お父さんやお母さんの失くなられたのをご存じないんでせうか?　それぢや勿論あの人の死んだといふこともご存じないのね……。

學生　女は何にも知らない……女は自分が、自分の仲間が何んな狀態に置かれてゐるか知らないんで……知らないのを誇りとしてゐる……。

女學生　知らうとしても知らせられないのよ……女は牢獄に入れられてゐるのよ……。

學生　知らうとしないからだ……出ようとしないからだ……。

學生　男は女を攻撃する權利がないよ……なせつて、男は女を征服してゐるからだよ……征服心理を變へない内は男は女を攻撃したり、女に要求したりすることが出來ないよ……。

女學生　ほんたうに……私はあの方に贊成だわ……女の犯罪はすべて男の犯罪よ……女の無智はすべて男の臆病よ……なせつて、女には少しの權利も與へられてゐないんですもの……。

女學生　然うよ……女には義務だけしか與へられてゐないのよ……子供を生むこと、お裁縫をすること、お料理をすること、臥床を伸べること、そして子供を殺されてしまふことよ……。

學生　馬鹿!　その責任の大部分は君達女性にあるんぢや

ないか……そんな理窟をいふ君達に限つて喜んで金持のお嫁さんにならうとしてるぢやないか……。
女學生　嘘よ！　あなた方こそ昇格運動をしたり、月給を多く取りたがつたり、お金持からお嫁さんをもらひたがつたりしてるぢやないの？……。
學生　生意氣な奴だ……フェミニストがくだらないことをいふからだよ……。
學生　撲つてしまへ……撲つてしまへ……。
女學生　あなた方には、それ位の程度しか頭がないのよ……あなた方の大事に持つてゐるものは古臭いヒロイズムだけよ……あなた方には科學的精神がないのよ……藝術的訓練がないのよ……。
學生　なに、科學的精神だ……藝術的訓練だ……。
巡査　こら〳〵、靜かにしないか……檢束するよ……。
勞働者　一體あすこに立つてる男はあれは何だえ？
學生　あれは精神病學者だ……。
勞働者　あれは精神病かえ？
——突發的な笑ひ——
學生　精神病ぢやないよ……精神病學者だよ……。
勞働者　精神病學者……まあ似たやうなものだ……それであんな氣狂ひ見たやうな顏をしてるのかえ？……。
隣人　書生さん、私にもう一遍見せてください……私はお孃さんがお可哀さうでなりません……。
學生　お上さん、お孃さんはこゝにゐないよ……。
隣人　私は度々お裁縫をお屆けに伺つたことがありますが、みなさん、いゝ方でしてね……おやあすこに寢てゐらつしやるのが奧樣ですね……つい夕方まで元氣にお話しておいでになつたのを……まあお可哀さうに……南無阿彌陀佛……。
巡査　こら〳〵退いた〳〵、……退かないか……退かないか……。
署長　K博士、車を呼びませうか……。
精神病學者　いや、宅がすぐ傍ですから……。
勞働者　精神病が來た……退け〳〵危い……。
——短い笑ひ——
女學生　シューマンよ……。
女學生　シューマンのトロイメライ……。
學生　何がシューマンだえ……。
學生　あれが君達の仲間だよ……覺えて置き給へ。
女學生　S判事のお宅よ……何もご存じないのよ……。
學生　ご存じないもないものだ……すぐ近所にこれだけの大事件のあるのも知らないでピアノを彈いてるなんて……然も自分の仲間によつて起つた事件ぢやないか……。
女學生　然うです……ですけれどもあれを誰がさせるんで

せう……誰かあれを樂しむんでせう……あれは私達女性の牢獄です……男の造つて呉れた牢獄です……なぜつて女には牢獄を造る權利さへないんですもの……。

學生　チエッ……。

——シューマンの曲、一層烈しく陽氣に——

——幕——

喜劇　アスパラガス

人　　物

主　　人（四十四五歳）
夫　　人（四　十　歳）
同　居　人（二十四五歳）
山　村　京　子（二　十　歳）
其他家具屋等

舞臺は貧困な藝術家の居間を兼ねた書齋。正面のガラス戸には裂けたカーテン、室の左右には大きな本棚があり、雙方とも古い更紗の布で掩はれてゐるが、内容の充實してゐないことが解る。ガラス戸の左右の壁に二三の油繪が亂雜に懸けられてゐる。室の中央に大きなテーブル、その周圍に色のあせた椅子が四脚ほど、テーブルの上には鼻の缺けた石膏の彫像が一つ立つてゐる。夜。

（舞臺裝置も俳優の動作も、決して寫實である必要がない。）

主人（瘠せた丈の高い男、桃色の美しいレターペーパーを手にしてゐる）「先生、私は先生にこのお手紙を書きながら非常な昂奮を感じてゐます、……この昂奮は恐らく先生のやうな方にはお解りにはならないか知れません、……いえ、先生は決してそんな方ぢやありません、先生は、決して世間の先生のご年輩の方達のやうな、そんな道學者ではない筈です……先生は若い處女の情熱が何んなに純粹で、直情的なものかよくご存じの筈です……私は先生の人格者であることが、この處女の純粹さを理解することを障げるものではないことをちやんと知つて居りました……先生私は先生の最も忠實な讀者でございました、そして將來も亦さうでありたいと願つて居ります、いえ、さうさせていたゞかなければなりません…… 先生は、この下手な手紙を御覽になつて、さぞ吃驚りなさることでございませう… 私はこの心持を先生にお打開けしようと何遍決心したか知れません……然し私は臆病者でした……私はいつでも先生の前へ出るとぶる〳〵ふるへて居りました……私は先生の前に一個の祕密を持つて居りました……そして其祕密をそつと胸に抱いてゐるのが悲しくもあり、懷しくもありました……」己れの眼が何うかしてゐるのかしら、いや確かにあれの手だ、誤字が澤山にある……インキも確かにあれの平生使つてゐるものに相違な

い……いや、そんな筈がない……己れは何うかしてゐるのだ……（レターペーパーを下に置いて兩手で頭を二三度叩いて見る、深呼吸をする、再び取り上げる）「私はこの心持を先生にお打開けしようと何遍決心したか知れません……然し私は臆病者でした……私はいつでも先生の前へ出るとぶる／＼ふるへて居りました……そしてその祕密をぢつと胸に抱いてゐるのが悲しくも……懷しくもありました……」悲しくも……懷しくもありました……いや、確かにあれの手紙だ、あれの言ひさうな文句だ……だが待てよ、己れは睡眠不足ぢやないかな……己れは一昨日から一睡もしなかつた……神經衰弱かも知れない……いや、己れはこゝにゐる……こゝに己れのテーブルがある……己れはテーブルの上に原稿紙をひろげてゐる……原稿紙は一昨日の晩から一枚も黑くならない……だが己れの書かうと思ふことは頭の中にきちんと整頓してゐる……己れは神經衰弱ぢやない……よし、もう少し讀んで見よう己れの胸の鼓動が恐しく打つてゐるぞ……氣を靜めなくちや……先生、人を戀ひすることは罪惡でせうか……先生のお口からこのお答がきゝたいのです……先生のお答一つで私は救はれるのです……私は先生の、理解ある先生の御胸の中に飛んで參ります、あの小鳥のやうに」……これは、いよ／＼考へざるを得なくなつたぞ……己れは、家庭論を度々書いたことがあつたが、正直なことをいへば、西洋人の口眞似か、でなければ、自分だけを拔きにした過渡な空論に過ぎなかつた……これはいよ／＼眞面目な問題になつて來たぞ……「先生、人を戀することは……先生のお口から……私は先生の、理解ある先生の御胸に……あの小鳥のやうに……」

同居人　（ノックする）

主人　女性の解放……戀愛の自由……性の爭鬪……主婦關係……離婚の自由……。

同居人　（烈しくノックする）

主人　だが、己れはあんな娘のために、二十年の家庭生活を破壞されようとは、今の今まで夢想もしなかつた……己れは、今まで多くの女性に接したが、一度も性的方面で問題を釀したことはなかつた……そしてそれは自分の誇りでもあつた……だがそれは自分が他人より道德的な爲めぢやなかつた……つまり臆病な爲めだつた……己れは今晩初めて女性の強さを見た……女性は強い……女性は……。

同居人　先生、書いておいでゝすか……入(はい)つちやいけませんか？

主人　（急いで書簡を袂に入れる）小村君か……僕は今少し考へてゐるんだ、何か用ですか？

同居人（戸の外で）大分お書きになりましたか？
主人　何を？
同居人　何をぢやありませんよ……奥樣は先生の原稿の出來上るのを待つてゐらつしやるんぢやありませんか……僕奥さんが可哀想でなりません……。
主人　いや、君にさういはれると……まあ、開けて入り給へ……。
同居人（髮を長くした蒼白な顏の青年）先生寒いですね。僕は先刻から何度もこの室へ入らうとしたんですけれども、先生のお仕事の邪魔になりはしないかと思つて遠慮してゐたんです。ですけれども奥樣が……。
主人　まあ、いゝからかけ給へ。僕も妻には同情してゐるんだけれど、何しろ寒いんでね。寒いと考へることも書くのもいやになつてしまふよ。
同居人　僕も經驗があります、一體寒い時は物を考へたり、書いたりするのは不自然な生活なんですね。
主人　さうだよ、君はよく其處に氣がついたね。君は筋肉勞働の經驗ある人だが、こんな寒い時に、火の氣のない室で、ぶる／＼ふるへてゐるよりは、筋肉勞働をしてゐた方が何んなにいゝかも知れないね。第一身體が溫まつて、汗をかくだけ得をするやうな氣がするよ。
同居人（笑ふ）汗をかく。先生こんな寒い時汗をかくほど仕事をするのは容易なこつちやありませんよ。だけれど、正直な話をすると、先生達の生活はもう少し樂なものだと思つてゐました。少くとも僕はそう思つてゐましたよ。
主人　さうだらう。然しこんな時ばかりぢやないよ。今に私も大きなものを書いてどつさり御馳走してあげる。僕を信じて呉れ給へ。
同居人　あり難うございます……先生、今白石さんの前を通つたら、大變でしたよ。大きな千圓もするほどのピアノを人夫五人がゝりで家の中へ搬んでゐました、大した景氣ですな。「孫子」が當つたといふのはほんとうらしいですね。
主人　……。
同居人　先生も一つ孟子か莊子にでも手をおつけになつたらいかゞですか？　此節は他人の機先を制するに限りますからね？
主人　……。
同居人　おやりになれば、材料を集めたり筆記位はお手傳ひします。何うですか、一つ決心しておやりになつたら？
主人　それよりも小村君、君にお願ひしたいことがあるんだがね……。
同居人　何んですか？　僕は先生のためなら何んでもやり

ませう。本屋の交渉でも、原稿料の前借りでも何んでも僕はやります。たゞ先生さへ決心してくだされば。

主人　私は熱いお茶を一杯飲みたいんだ。一つ君の手腕で、この火鉢に火を起して、お湯を沸かすやうにして與れ給へ。

同居人　先生、それは駄目です。僕先刻炭屋の爺と喧嘩をして來ましたから……。

主人　さうか、なぜまた喧嘩なんかしたんだらうね。あの人達は可哀想なもんだよ。君はいつでもヒロイズムを發揮するからいけないよ。

同居人　だけれども、あんまり生意氣なことを言ふもんですから、つい短氣を起してしまつたんです。僕だつてあゝいふ商人が何んな生活をしてるか知つてゐますけれども……。

主人　なるだけ喧嘩をしない方がいゝよ……第一喧嘩の相手が違ふのだからね。

同居人　それは僕だつて知つてゐます……先生、僕もお茶を飲みたいんです。僕等はお茶が欲しいんです、それだのにお茶が飲めないんです。

主人　そんなにセンチメンタルになつたつて仕方がないよ。なければ飲まないまでの事ぢやないか？

同居人　先生はそんな呑氣なことを言つてゐますけれども、これがお茶だからいゝやうなものゝ、もしも僕等の生活を支持するところの米だつたら何うしますか、まさかなければ食はないまでだと言つてすましてゐられないでせう？

主人　だから私は一生懸命に仕事をしてゐるんぢやないか？

同居人　さうです。だから僕等は先生のお仕事の完成するのを待つてゐるのです。

主人　ところがその仕事はなかなか捗らないんだ。君の所謂生活を支持するといふ觀念が、僕を責めれば責めるほど、仕事が捗らないんだ。

同居人　一昨日の晩からでしたね。一體何れ位お書けになりました。（主人の前にある原稿を覗く）おや、これは別な方ですか？

主人　ところが君、まだ一枚も書いてゐないんだ。

同居人　一枚も？

主人　さうだ。

同居人　一昨日の晩から何にもお出來にならないんですか？

主人　さうだ。何にも出來てゐないんだ。

同居人　ちつとも？

主人　確かにさうだ。

同居人　(嘆息する)　一體先生は一昨日の晩から何をしておいでになりました？　先生は一體アイデアリスト過ぎますよ。
主人　私はアイデアリストぢやない、私はレアリストだ。
同居人　いえ、確かにアイデアリストです。
主人　アイデアリストぢやない、レアリストだ。
同居人　何んといつても、先生はアイデアリストです。
主人　何んといつても私はアイデアリストぢやないレアリストだ。
同居人　アイデアリストです。
主人　レアリストだつたら。
同居人　先生、氣に觸つたらご免ください。僕は先生が好きなんです、誰が何といつても好きなんですから。ところで現在の場合、我々は我々の生活に最も緊要な事柄に就いて、冷靜に考察しなければならないのです。つまり我々は唯物史觀の上に立たなければならないんです。我我の環境が我々の生活の全部を支配してゐるのです。そこで、先生が先生を維持するためには、先生の生活を環境に適合させて行かなければならないんです。もしそれが出來なければ先生は生活力を失ふことになるんです……。
主人　だから私は仕事をしなければならないといふんだらう。
同居人　さうです。確かにさうです。
主人　確かに私も仕事をしようとしてゐるのだ。仕事をしようとしてゐるが出來ないから仕事がない。何遍言つても同じ事だ。
同居人　さうです。何遍言つても同じ事です。一體先生は何ういふものをお書きになるお積りでした、小說ですか戯曲ですか？
主人　私は小說でも戯曲でも、詩でもないやうな新しい形式を發見しようとしてゐるんだ。今度書くものはその形式で現はして見ようとしたんだが、とても出來さうもない。
同居人　ですけれども、小說でも戯曲でも詩でもないやうな文學が出來るでせうか？
主人　確かに出來る。君、今は新しい形式の生れてゐる時代だよ。新しい形式の生れない時代には新しい思想が生れてゐないんだよ。
同居人　それはほんとうです。新しい酒は古い革嚢には盛れませんからね。先生のお書きになる作物のプロットは？
主人　プロット？　さう、何んと言つていゝか、途方もなく夢幻的なものなんだよ。先づ題は「地上神曲」といふ

のだ……つまり死んだ人間が蘇生つて來て舞踊をしたり、御馳走を食べたりするといふ筋で、そのまた給仕人はその死人達を殺した、大臣や裁判官や死刑執行人などだから面白いよ……御馳走を食べるお客様の中には、君の知つてゐるあの板橋といふ畫家もゐるんだ……。

同居人　あの凍死した……。

主人　あゝ。あれには私は澤山御馳走して、ストオヴにあてゝやらうと思ふんだ……そして歸る時にはカステーラか何か持たせてね……。

同居人　だけれども、先生、芝居でそんなことが出來ますか？

主人　芝居だから出來るんだよ。私達は實際の生活で、人に御馳走するなんて贅澤な眞似が出來さうもないからね……それから君、オーケストラは大したもんだよ、何しろ五百人の團體だからね……その奏樂につれて死人達が一人づゝ舞臺の前に進んで來て簡單に自分の經歴を說べ、最後に音樂につれて新しい舞踊ををどるんだ……そのまた舞踊は千變萬化で……とても……。

夫人　（ノックする）ちよいと、入つてもようございますか？

主人　入つてもいゝ。

夫人　（二人の顏を見て）あなた方は何をしてゐらつしやるの？

主人　何もしてゐない。今一寸小村君と話をしてゐるところだ。さう、皆なに入つて來られちや困るな……。

夫人　でも私は今朝から初めてゞすよ。小村さんに原稿を取りに來ていたゞくと、呑氣に二人で話し込んでるんですもの、私ほんとうに困つてしまひますよ。一體今日は何日だとお思ひになつて？　暮の二十八日ですよ。暮の二十八日は何んな日だか、何んぼあなた方だつて知つておいでゞせう。いえ、男はそれでいゝでせう、然し女はさうは行きませんよ。何しろ一年の決算日ですものね。一々お知らせはしませんけれども、朝から借金の言譯で、私は頭の下げ通しですよ。第一子供も大きくなつてゐますから、あんまり見つともない樣を見せたくもありませんしね、（急に語調を變へて）原稿はもういゝんですか、もう出來て？

主人　（無言のまゝ原稿を押してやる）

夫人　おや、これは何うしたんです？　一行も一字も書いてないぢやありませんか？　それで私を今まで待たして置いたんですか……まあ、あなたは隨分な人ですね？

同居人　奥樣、然んなに仰有つたつて仕方がありませんよ。先生だつて一生懸命なんですから。一昨夜から徹夜でおやりになつても出來なかつたんです。物を書く人にはよ

くある事ですよ。

夫人　小村さん、それや私だつて出來ない時は出來ないものだといふことはよく知つてゐるんですけれども、それならそれと打明けて吳れたらいゝぢやありませんか、私は朝から何時間待ちました？　朝の八時からですから十四五時間も待つてゐたんですよ、その間十枚、十五枚は書けさうなもんぢやありませんか……。

同居人　さう思はれるのは無理もありませんけれども、書けない時は書けないものですよ。

夫人　小村さんまで、傍で然んなことを仰有るから尙ほいけないんですよ、その原稿が出來なかつたら、何うするおつもりですか？　酒屋も炭屋も來なくなつてしまひましたし、他の店ぢや現金でなくちや埃つぱ一つだつて渡して吳れやしませんよ。

主人　然し、何うにかなるよ。

夫人　何うにかなるつて、何うにもなりやしませんよ。

主人　いや、何うにかなる。

夫人　なりませんよ。

同居人　先生、それぢや、もう一度寶文書院へ行つて見ませう。もう主人公も歸つて來てゐる頃でせうから。

主人　さうか、君は行つて吳れますか？　折角君にゐてもらつて、こんな苦勞をかけるのはすまないね。君は自分で働いて食べてゐた方が餘程樂だつたらうね。

同居人　何、僕は慣れこですから平氣です。先生、寶文書院の方が間に合はなくとも僕は空手ぢや歸らない積りです。

主人　空手で歸らないつて、借金でもして來るつもりか？

同居人　先生、僕は何處かに金が落こつてゐるやうな氣がしてならないんです、僕の友達はこの間自働電話の中で百圓の札束を拾つて二十圓の謝禮をもらつたさうです。

夫人　まあ？　何うしてまた自働電話の中なぞへ百圓も落したもんでせうね？

同居人　落主は女で、電話をかけてゐる時、オペラパックから落したんださうです。その女はほんの小遣錢を落したのだといつて笑つてゐたさうです。勿體ない話ぢやありませんか？

主人　オペラパックから落したやうな金は、屆ける必要はなさゝうだね。

同居人　さうでせうか？

主人　そのやうな氣がするね、實際屆けなくたつて困らないんだからね。然し屆けなければ罪人になるのも受合ひだがね。

同居人　先生、それぢや僕急いで行つて來ませう。

主人　君、ご苦勞だね。主人に宜しく言つて吳れ給へ。

夫人　小村さん無理にお金を拵へようとしたりしちやいけませんよ。

同居人　奥さん、大丈夫です。おや行つて參ります。

夫人　寒くないやうにして行つていらつしやい。いゝ人ですね。初めは一寸變でしたけれども、何んでも正直にぱつ〱言つてしまふ人ですのね。

主人　子供の時分から隨分苦勞をしてゐる人間ださうだが、根性が曲つてゐないでいゝ。

夫人　ですけれども、あなた裁文書院の方が出來なかつたら、何うしませうね。私心配になつて來ましたわ。あなた、もう少し家庭といふことを考へてくださらなければ困りますね。

主人　（センチメンタルに）考へてるんだが、何うも仕方がないんだよ。私は何うも今日の家庭といふものが不合理なものに思はれて仕方がないんだ……何處かに根本的な不合理があるやうな氣がするんだ……。

夫人　あなた、なぜそんなことを仰有るんですか？　家庭が合理でも不合理でも私達は二十年間その家庭の中で生活して來てるんです、今更ら何うしようもないぢやありませんか……。

主人　（一層センチメンタルに）然しこの生活はほんとうの生活ぢやないやうだよ？

夫人　あなた、そんなら何んな生活をなさりたいんですか？

主人　それは言へない……私は苦しんでゐる……然しいつか一度は言はなければならないことなんだが……私は今大きな問題に打つかつてるんだ……私は煩悶してるんだ……。

夫人　（心配さうに）大きな問題つて何んな問題ですの？　さあお話してください、私ほんとうに心配になつて來ました……何うか無理なことなさらないで何んでも私に打明けてください……。

主人　（兩手で頭を壓へる）あゝ、私は駄目だ……私はもう何も解らなくなつた……。

夫人　あなた……あなた……あなた……。

主人　いゝ、私にかまはないで吳れ……何かお前に言はれると一層苦しい、何から何まで腹が立つ……頭がぎんぎんする……。

夫人　（心配さうに主人の顏を覗いて）あなた……あなた……お腹が空いたんぢやありませんか？

主人　さうだ、お腹も空いた……早く何か食べるものを持つて來て吳れ……。

夫人　はい〱、今直ぐ持つて來ますから安心してゐらつしやい……しつかりしてね！

主人　それから熱いお茶を一杯欲しい……。

夫人　お茶は家にありませんけれども、左官屋のお上さんから貰つて來ませう……しつかりしてね！

（主人は小學生のやうにテーブルの上に打臥せになつてゐる。屋外では自動車のラッパの音。自轉車のベルの音などがしつきりなしに聞える。やがて夫人は皿の上にパンを載せ、左手にお茶のコップを大事さうに持つて來る。）

夫人　さあ、パンとお茶を持つて來ました。バタはありませんけれども……。

主人　（打臥になつたまゝ）バタなぞ要らない…　早く早く……。

夫人　しつかりしてくださいよ！　あなたは今大事な時ですよ。元氣を出して仕事をしてくださらなければ私達は死んでしまはなければなりませんよ。昔のやうな明い元氣な氣持になつてくださいよ。

主人　あゝ、昔から立派な藝術家は皆なかうして苦しんで來たんだね……このパンの味は何とも言へない……イブセン……ゴーリキ……大雅堂……人生がだん／＼明くなつて來たぞ……。

夫人　もう大丈夫ですか？　おゝ冷汗をびつしより！（夫人はハンケチを出して主人の顏を拭いてやる）あなたは餘り物に凝りすぎるからいけないんですよ。皆さんも、さういつてゐますわ。あなたはもつと思ふ通りのことをどん／＼と發表なすつた方がいゝつて。餘り深く物を考へすぎると書けなくなるものだつてよくいふぢやありませんか…　。

主人　然し私には世間の人のやうな眞似は出來ない……私に世間の人のやうな眞似をさせようといふのは一人の藝術家に自殺を強ひるやうなものだ……殊に私を理解して呉れてゐるお前にさういはれるのは心外だ……。

夫人　いえ、決して、決して私はあなたのためならばどんな貧乏でも我慢をしますから、氣を落ちつけてください……。

主人　……。

夫人　ほんとうに、あなたのためなら、私は何んな苦痛でも忍びますわ。あなたの爲めなら、あなたが命じさへすれば私は勞働でも何んでもしますわ。私はタイピストでも、活版職工でも電話交換手でも何んでもやりますわ……ですけれど私、たゞあなたと、あなたと……。

主人　いゝ解つた／＼……私は今初めて家庭の喜びを感じた。お前がどれだけ私を理解してゐて呉れてゐるかよく解つた……私はお前に比べると隨分濁つた人間だ……お前は純一な愛に生きてゐたが、この私は色々なものゝた

めに生きてゐた。恥かしい。どうかゆるして與れ。

夫人　まあ、あなたは何を仰有るの、私は今まであなたを苦しめてばかり居りました。私は利己主義で、功利主義者で世間人で、見え坊です。あなたは詩人で、哲學者で、豫言者です。

主人　いや、お前は永遠の女性だ。マリアだ、ナイテンゲールだ、ヘレンケラーだ、コロンタイ夫人だ、レニン夫人だ……。（主人夫人の前に跪く）

家具屋　（ノックする）今晩は……今晩は……。

主人　誰だらう？

夫人　誰でせう？

家具屋　今晩は……今晩は……。

主人　お入んなさい。

家具屋　（毀れかけたロッキングチエーアを重さうに持つて室に入る）どうもお待遠うさまでした。

夫人　あなた、それはなんですか？

主人　（もぢ〱しながら）ご苦勞様、今晩でなくともよかつたんだが……。

家具屋　いえ、何に大して重いものではありませんから………。

夫人　あなた、一體これは何うなすつたんですか？

主人　いゝよ〱、一寸欲しかつたもんだから……。

夫人　欲しかつたつて、あなた、時があるぢやありませんか、もう少し自分の生活のことを考へてくださらなければ困りますわ。

主人　いゝよ〱後で後で……。

夫人　いえ、後ぢやありませんよ……今です……そしてあなた、代は拂つてあるんですか？

主人　まだ〱……。

夫人　それぢや何うなさるお積りですか？　何處からその代をお出しなさる積りですか？

家具屋　旦那、これは何處へお置きしませうか？

主人　（おど〱して）何處でもいゝ……君寒かつたらうね……。

家具屋　お寒うございますね。この邊はお靜で結構です。

主人　まあ、ゆつくり休んで行き給へ……。

家具屋　いえ、さういたしては居られません……私はすぐ失禮いたします…　それぢや椅子のお代を……。

主人　君、甚だすまないけれども椅子を置いて行つて與れませんか……代は明日の朝お屆けしますから……。

家具屋　それは困りましたな、何うかさう仰有らないで今晩頂く譯には參りませんでせうか？

夫人　椅子屋さん、一體これは幾らなんですの？

家具屋　奥様、大變お安くお願ひいたしたのでございます

……足が一寸痛んでゐるもんですから……。
夫人　足が痛んでゐても使へますか？
家具屋　え、大丈夫ですとも。釘を二三本この横の方から打ちつけますと、立派なものです……それにお代も安いのですから多少は……。
夫人　幾らなんですか？
家具屋　壹圓貳拾錢でございます。奧様まるで値段ぢやございません……。
主人　（小聲で）ちつともないか？
夫人　（少し高い聲で）あるもんですか？
主人　明日は何んなに早くともお屆けするから、椅子を置いて行つて呉れ給へ、ね、さうしてください……。
家具屋　少しばかりのところですから、さう仰有らないでいたゞかしてくださいませんでせうか？
主人　ところが、君、今晩は大變いそがしいんでね……。
家具屋　へい、手前共も大變にいそがしいところを、態々持つて上つたやうな始末でございますので……。
主人　要するに、正直に言ふと金がないんですよ……解つたでせう……。
家具屋　御戯談ばつかり……お宅様あたりにお金がないなんて、仰有つても、誰もほんとうにするものはございません……何うかさう仰有らずに……。
主人　それぢや、甚だすまないけれども今晩はぞれを持つて歸つていたゞかう。金が出來たら取りに行くから。
家具屋　それぢや、私困つてしまひます……何しろこの重いものをまた持つて歸るなんて大變でございます、それに道が惡くて……。
主人　よし、それぢや私が持つて行かう。私は一昨日の晩から外の空氣を吸はないから、どつさり空氣を吸つて來よう。（椅子を持上げようとする）
家具屋　（眞面目に考へた後）旦那、それぢや餘り恐れ入ります。こゝのところは私は旦那の人格を信用して、一旦引き取ることにいたしませう……ぐづ／＼してゐると商賣が出來なくなります……ご存じの通り、今日は暮の二十八日でございますからね……。
夫人　さうですよ、暮の二十八日ですよ。
主人　金はきつと明日お屆けしますからね。
家具屋　（戸を開きながら）えゝ、いつでもお序での時でよろしうございますよ。さやうなら、お邪魔いたしました。
主人　さやうなら。
夫人　（家具屋の後に戸から出ろ）
主人　（毀れかけたロッキングチエーアに腰かけて身體を前後に搖かす）精力の勞費……生活……家庭……藝術…

……戀愛……性の解放……自由戀愛……家庭の解放……三角關係……人生がだん〱明くなつて來たぞ……（袂の中からもみくちやになつたレターペーパーを出して指で皺をのしながら）……「然し私は臆病者でした……私はいつでも先生の前へ出るとぶる〱ふるへて居りました……そしてその祕密をぢつと胸に抱いてゐるのが悲しくも……懷しくもありました……」女は强い、これだけ苦しんでゐるのに、そのそぶりさへ見せなかつた……「先生、人を戀することは罪惡でせうか……先生のお口からこのお答がきゝたいのです……私は先生の、理解ある先生の御胸の中に飛んで參ります、あの小鳥のやうに……」……小鳥のやうに、あれはほんとうに小鳥のやうな女だ……だが已れはあの女を一度も戀人として、異性愛の對稱として見たことはなかつた……あれは美しかつた、然し妹としての美しさだつた……その女が已れの生活の精髓の中に飛び込んで來たんだ……バチルスのやうに……それがいゝことか惡いことか私には解らない……いや、善惡はもう存在しない……人間はすべてから解放されなければならない……。

京子　（ノックする）　先生……先生……。

主人　（椅子にかけたまゝ）　お入んなさい。

京子　（美しいショール、外行らしい服裝、手に小さな花束を持つてゐる）　先生今晩は。

主人　（椅子を立つて戸の方へ行く）　今晩は。

京子　お讀みくだすつて？

主人　え、讀みました。

京子　まあ、私何うしませう……私、先生に顏を見られるのがきまりが惡いわ……あれお終ひまで讀んでくだすつて？

主人　まだ全部は讀まないけれども、あなたの心持はよく解りました……さあお懸けなさい……。

京子　でも、先生、私は今晩大變いそがしいもんですから、長くはお邪魔は出來ませんの……（懸ける）先生、私は生活が一變してしまひましたの……先生、ほんとうに私を免してくださるでせうね？

主人　免すも免さないもない……そこは道德的批判は許されないんだから……あなたも私も苦しんで行くばかりです……。

京子　いえ、先生には決してご迷惑はおかけしません……たゞ私は怖いやうな氣がして仕方がないんですの……。

主人　（昂奮して）　さうでせう、私も怖ろしいんです……。

京子　いえ、先生はたゞ私を今までのやうに愛してゐてくださりさへすればいゝんですの……私はたゞ先生に愛想をつかされはしないかとそればかりを心配して居りまし

た。
主人　私もかうなつて見ればこの儘ではゐられないでせう……然し何事も出來たことは何うすることも出來ません。
京子　先生はよく解つてくださいました。先生にさへ理解していたゞけば、私は誰に何んといはれても平氣ですわ。先生、私は先生の一番忠實なお弟子です、私は先生の人格を信じて生きて行きます、何うか、私を、私達を見捨てないでください。
主人　それは言ふまでもないことです……私達の生活が將來何んな風にならうとも、私達の理解と熱情は決して衰へもしなければ、失くなりもしないでせう。
京子　（手を拍つて）先生、私嬉しいわ……嬉しいわ、私は私達の理解と熱情のためにこの花束を上げませう……こゝにアスパラガスがあるでせう？　私はアスパラガスが大好きですの、私がいつか病氣をして入院をしてゐた時、あの人がアスパラガスの鉢をおみやげに持つて來て呉れましたの……。
主人　あの人？（娘の顏を見る）あなたが入院をした時に……。
京子　先生、私きまりが惡いわ……私の顏をぢつと見てゐらつしやるんですもの……。
主人　あの人？
京子　まあ、いやな先生……私は先生が好きなんですの……私をからかつちやいやです……私は先生の前へ出ると何も言へなくなつてしまふんですもの……先生、あなたはアスパラガスがお好き？
主人　アスパラガス……。
京子　先生、隨分ひどいわ……ぼんやりした顏をしてゐらつしやるんですもの……私の胸が何んなに燃えてゐるか、よくご存じの癖に……私は先生のお許しさへ得れば、私達二人は死んでもいゝとさへ思ひ込んだんですの……この若い娘の情熱はある人達にはセンチメンタルに見えるかも知れませんけれど……先生だけは決してそんな批判を與へてくださらないと、私は確く信じてゐましたの……私達の若い戀の情熱の理解者に、この花束を上げたいんです……先生何うか笑つてこれを受取つてくださいい……私は、私達二人はあなたの永遠の弟子です……。
主人　アスパラガス……。
京子　私は每日々々病院の窓のアスパラガスの細い葉を眺めて暮しました……私は淋しかつたんです……私には希望も光明もなくなつたんです……ちやうど其の時にアスパラガスのあの細い葉の間から一つの希望が現はれて來ました……。

主人　アスパラガス……。

京子　先生、先生、私達にとつてはたつた一つの祭壇です……私達はその祭壇の前に額いてゐる二人の巡禮にすぎないんです……私達は沙漠の中を旅する二人の小さな旅行者です……私達はまた明星を他頼りに道を探して行くより他ないのです……先生は宵の明星です……曉の明星です……。

主人　(怒氣を含んで)　アスパラガスが何うしたんです？　祭壇が何うしたんです？　巡禮が何うしたんです？　沙漠が何うしたんです？　旅行者が何うしたんです？　宵の明星が何うしたんです？　曉の明星が何うしたんです？

京子　(ぶる／＼ふるへてゐる)　先生、何うか私を誤解しないでください……先生に誤解されると私は何うしていいか解らなくなつてしまひます……。

主人　一體何うしたといふんです？　あなたの生活が、一體全體私に何ういふ關係があるといふんです？

京子　先生は怒つてゐらつしやるわ……私何うしたらいゝだらう……。

主人　あなたは、ある男を愛してゐるといふのでせう？　それならばあなたは勝手に愛したらいゝでせう、それが私に何ういふ關係があるのです？

京子　(泣く)　先生、私は何にも言へなくなつてしまひました……先生は何も解つてくださらないんですもの……私は先生にお眼にかゝるのを樂しみに來たんですのに……あゝ、私何うしていゝか解らなくなつてしまひました……私、これで失禮しますわ……。

主人　さうですか？　また來たくなつたらいつでもいらつしやい……。

京子　先生、私は當分先生のお宅へ伺ひません……さやうなら……。

主人　(花束を手にして)　アスパラガス、アスパラガス、アスパラガス……。

(主人は花束を荒々しくテイブルの上に投げて再びロツキングチエアーの方へ來て腰をかける。)

(身體を前後に搖かす。)

感情の浪費……生活……生活不能力者……性の幻滅……家庭牢獄……センチメンタリズム……人生がまた暗くなつて來たぞ……。

同居人　(突然戸を開く)　先生たゞ今。

主人　何うした？　金がおちてゐなかつたか？

同居人　金は落ちてはゐませんでしたけれども、確かに出來ました。

主人　出來たか？　嬉しいな／＼。

(主人は毀れかけたロツキングチエーアを兩手に持上

げて、テーブルの周圍を廻つて歩く。)

妻を呼べ……妻を呼べ……。

同居人　先生、氣を落ちつけてください。今山村と太田が車に乘つて停車場の方へ行きましたが家へ來たのぢやありませんか?

主人　太田と一緒に?　山村は來たが太田は來なかつた……馬鹿な奴等だな……それより、早く模樣をきかせて吳れ……。

同居人　寶文書院の主人は笑つてゐましたつけ……先生、僕ね盜賊に逢ひやしないかと思つて、お金を襟卷に包んで胴に卷きつけて來ました……一寸待つてください……。

主人　君からどろぼうしようといふやうな盜賊は、よつぽど間の拔けた盜賊だよ。

同居人　先生そんなものぢやありませんよ、何しろ暮の二十八日ですからね、僕だつて金が手に入らなかつたら、盜賊でもしようといふ腹で家を出たんですから……。

主人　(包を取り上げて叫ぶ)　さあ、みんなご馳走するぞ……シヤンパン、ウオツカ、ウイスキイ、エム・シイ・シイ、カフエ・ロシア、カフエ・ウーロン、カフエ・ライオン、カフエ・ユニオン、カフエ・アメリカ、カフエ・グランド、カフエ・オザワ、神樂おでん……ハウプトマン全集、ロマン・ローラン全集、クロポトキンの佛蘭西革命史……何んでも持つて來い……。

夫人　(笑ひながら、戸から覗く)

同居人　奧樣、早くお湯を沸しませう。

夫人　さうね、お湯を沸しませう。

主人　さうだ、早く熱いお茶を一杯!

――幕――

骸骨の舞跳

人物

青年
老人
看護婦
醫長
、、人
自警團員（後に骸骨）
貴婦人
避難民男女
其他

場所

救護班のテント內

（立體派風の舞臺裝置を可とする。所謂マヴオ式の試みも面白いであらう。）

老人　もし／＼……。
青年　僕ですか？
老人　え……寢てゐて失禮ですけれども一體こゝは何處でせう？
青年　（首を擧げて老人の方をすかして見ながら）こゝはM驛です。あなたは何處へ行くんですか？
老人　私は北海道へ行くつもりで來たんですが、やつぱりM驛でしたか……今何時頃でせう？
青年　もう二時過ぎでせう。
老人　ぢき夜が明けませうか？
青年　夜の明けるまでは、まだ二時間もありませう。
老人　さうですか……あゝ何んてことでせうね……こんな年になつてこんな目に逢ふなんて……あれは何んの音でせう？
青年　何んでもありません、汽車の音です。あなたは何時こゝへ降りたんですか？
老人　昨夜です……昨夜晩くです……一體何んて話でせうね……こんな馬鹿な話があるものでせうか？
青年　東京でやつぱりひどい眼にお逢ひでしたか？　お互に飛んでもない眼に逢ひましたね。
老人　ひどい眼位ぢやありません……私は娘と孫に死なれてしまひました……それに私は病身でして、こんな事をして旅なぞ出來る身體ぢやないんですけれども……。
青年　然うですか、お氣毒ですね……そして娘さん達や孫さん達は何處で失くなつたんですか？　本所ですか？

老人　いゝえ、向島です……私共は三十年來向島に住んでゐましたから……何んでも近所の人の話では娘は孫をつれて土堤に逃げてゐたのを、人に押されて大川へ落つこつてしまつたんださうです……。

青年　それはお氣の毒なことをしましたね。あすこでは隨分そんな人があつたさうですね。あなたは、それでもよく逃げられましたね……。

老人　一層死んだ方がよかつたんでせう……娘や孫に死なれて何が樂しみで生きて行かれますか？

青年　さうお思ひになるのも無理はありません……でも世の中は生きてゐさへすれば、また何とかなりませう……いや實は僕自身も今のところ何んの光明もないんですが……然し生きてゐる間は生きてゐなければならないんです……。

老人　私の傍に誰か寢てゐますか？　私の右の腕の上に誰か寢てるやうですが………すみませんが一寸見てくださいませんか？

青年　あゝ寢てゐます………あなたは、右腕は動かないんですか……。

老人　右腕が三年前からきかなくなつてるんです……。

青年　何うしてまたそんな身體でこゝまで來ました……東京にゐたらよかつたのに……もしく一寸頭を除けてくれませんか、君は病人の腕の上へ頭をのつけてゐますから、一寸除けてください。

ある男　（頭を上げ、眼を開いて二人を見て、何か云ひたさうにしてゐたが、淋しい微笑だけを殘して位置を變へて、また元のまゝ仰向けに寢てしまふ。この時テントの奧の方に寢てゐた二三人の男は一寸頭をあげてその方を見る）

老人　（呼吸を長くして）何うもすみません……おかげで樂になりました……あなたはお眠かつたでせう……私も朝まで一眠りしませう……おや、何んだか大變騷々しい音がしてゐますね……火事ぢやありませんか？

青年　（笑ひながら）火事ぢやありません、汽關車の音ですよ。こゝは東京から百五十里も離れたところです。地震も火事もやつて來やしませんよ。

老人　さうでせうか？……でも、、、、、、、といふ噂ぢやありませんか……ほんとに怖ろしいことですね……。

青年　（語氣を強めて）あなたもそんなことを信じてゐるんですか？　僕等はもう少し自信を持ちませう。僕は出來るだけの事を調べて來てゐるんです。

老人　さうですか？……でも噓にしては大變な噓をこしらへたものですね……、、眞實でせうか？

青年　それは眞實です。僕は昨日から色々な事を見せられ

て來ました……僕は日本人がつくぐ〵嫌やになりました。もう少し落ちついた人間らしい國民だと思ひました。それが今度のことですつかり裏切られてしまひました。この絶望は可なり深いものです。

（この會話の間に奥にゐた一人の男が顔を上げて、二人の方を視つめてゐる。眼を異様に輝かしてゐる。）

老人　私は何にも知りませんけれども、、、、が何もしないのだとすると可憐いさうですね……何うしてまたそんなに亂暴なことをするんでせうね？

青年　あの人達には自信がないんです。他人の着せた衣服を大事に着てゐるだけです。僕は國民として日本人には失望しましたが、人間としての日本人には失望してゐません。何處の國民でも、人間としてはみんな善良な無邪氣なものです。

老人　でも……私は日本人ですから、やつぱり日本人はいい人間だと思つてゐます……。

青年　さうです、僕もさう思ひたいんですけれども、昨日から日本人のしたことを見てゐると、これが同じ同胞のやることゝは何うしても思へなかつたんです……あんなところを見た人でなければ、とても僕のこの氣持は解らないでせう。

老人　何しろいやな世の中になつたものですな……あなたはこれから何處へいらつしやるんですか？

青年　僕は青森の方へ歸ります。青森には兄妹達がゐるんですから……。

老人　さうですか……あなたは、失禮ですけれども何ういふ御職業ですか？

青年　（笑ひながら）僕ですか……まあ書生ですね……。

老人　さうですか？　御勉強中ですか……結構ですね……。

青年　あなたは何をなさつておいででした？

老人　私？……私は何につまらない職業です……鑄金の方をやつてゐました……。

青年　鑄金？　鑄金てのはあの彫刻の方のでせう？

老人　え……鑄金といひましても……ほんの職人上りですから、お話しになりやしませんよ……。

青年　僕も彫刻をやつてゐる男を大分知つてゐます。一年一杯勳章や大黒様をこさへてゐて、自分は始終貧乏ばかりしてゐるYといふ男がありましたが、あれも向島邊に住んでゐた筈です。

老人　Yさん、何んだか聞いたことがあるやうです……おや、また何んだか音がしてゐるやうです。私は火事から耳が遠くなつたやうな氣がします……。

青年　（耳を澄して）何んでもありません、あなたはひどく昂奮してゐるやうです。氣を落ちつけなくちやいけま

せんよ。
看護婦　（救護班員に）西村さん、本部へ行つて脱脂綿を少しもらつて來て置いてくださいな。
救護班員　（無言で左手に去る）
看護婦　氣分の惡い方はありませんか？
避難者　看護婦さん、先生を呼んでくださいな……お腹が痛んで仕方がないんです……。
避難者　看護婦さん、私に水を一杯ください……。
避難者　看護婦さん、私はこの身體で船に乘れませうか？……。
避難者　看護婦さん、この切符で只で船へ乘れませうか？
看護婦　皆さん靜かにしてください。さう一度におつしやつちや何うすることも出來ません……（老人に）あなたは今夜船にお乘りになれますか？
老人　私はそれをあなたにお質ねしたいんです……もう少しこゝへ置いていたゞく譯に行かないでせうか？……何うも身體が痛んで仕方がないんです……。
看護婦　さうですか？　今先生がいらつしやいますから診察していたゞいたらよろしいでせう。
避難者　私に水を一杯ください……身體がまるで燒けつくやうです……。
看護婦　（大きなバケツからコップに湯を汲んで渡す）　さあ、おあがりなさい。
避難者　看護婦さん、私にも……。
避難者　私にも……。
看護婦　さう一度にはあげられませんよ……。
避難者　意地の惡い人だこと……。
避難者　いやな看護婦ですね……つんと濟ましてゐやがつて……。
避難者　私こゝへ降りなければよかつた……こんなに不親切なとこつて初めてよ……。
避難者　然うね、O驛なんかあんなに親切でしたのにね……自分達が燒けないと思つていゝ氣になつてゐやがるんだ……。
避難者　看護婦さん、繃帶とつていたゞいたら一層ひどく痛んで來ました……あゝ痛い……あゝ痛い……。
看護婦　そんな筈はないんですがね。一寸は痛んでも今に樂におなりになりますよ。
避難者　あゝ、痛い……あゝ痛い……こんなとこにゐる位ゐなら一層死んだ方がよかつたんだ……。
避難者　あなた靜かにしてくださいな……子供が死にさうになつてゐるんですから……。

看護婦　ほんとに皆さん靜かにしてください……危篤の方があるんですから……。
避難者　あの婆、默れ……お前なんかくたばつたつていゝんだ……死にさうな子供があるんぢやねえか……苦しいのはお互のこつた……。
看護婦　まあ、解つたんですから、あなたも靜かにしてください……。
貴婦人　（バスケツトに色々なものを入れてゐる。テントに入ろ）今晩は、お疲れでいらつしやいませう。
看護婦　今晩は、奧樣よくいらつしやいました。何うしてまたこんなに晩くまで？
貴婦人　長官の奧樣方と昨夜から本部で徹夜いたしましたの。まあ、あなた長官の奧樣まで徹夜なすつたんでございますのよ。
看護婦　さうですか？　よくいらつしやいました。
貴婦人　（テントの中を鷹揚に見渡して）大分お立ちになりましたのね。これは本部からの御寄附ですの。
看護婦　さうですか？　ありがたうございます。皆さんもお喜びになりませう。
青年　あなたは、やすみませんか？
老人　これぢや、とても眠れさうもありませんね……私は何んにも要らない……ゆつくり寢て見たいんです……でも娘や孫達のことを考へると……。
避難者　あの女は何んだえ？
避難者　あいつ、何か持つて來やがつたぞ……豪氣な指輪をはめてゐやがるぢやないか……その指輪をくださいつて言つてやらうか……。
避難者　白襟紋付つてのね……すてきだわね……一寸玄人らしい顏をしてゐるね……。
貴婦人　皆さん、お疲れでいらつしやいませう……ご不自由なことは何んでも遠慮なくおつしやつてください。
看護婦　皆さん、市長の奧樣ですのよ……震災では大變にお骨折りになつてゐらつしやるお方で……。
貴婦人　（若々しい笑ひ方をする）まあ、いやな方！　貧乏な町ですから行屆かないことばかりでお耻かしゆう御座います。でも私共の力で出來ますことなら何んでもお世話申上げるつもりでございますから、ほんとにおつしやつてくださいよ。
避難者　（口の中で）おつしやるまでもなく不自由だらけだ……。
貴婦人　お腹の空いた方はありませんか？
避難者　私はお腹は空きませんけれども、咽喉が渇いて仕方がありません……。
貴婦人　さうですか、それぢやサイダをあげませう。

避難者　奥様、私も咽喉が渇いて咽喉が渇いて……。

貴婦人　サイダは五本しかありませんから、みんなであがつてください。

（避難者は乞食のやうに貴婦人の周圍に集つて、サイダーの壜を奪ひ取らうとする。貴婦人は赤い顔をしてそれを取られまいとする。避難民は貴婦人をぐん〳〵押して行く。）

看護婦　奥様、私いたしませう……お危うございます……皆さんおとなしくしてゐてください。おとなしくしないと頂いたのを皆返へしてしまひますからようござんすか？

避難者　みんな靜かにしろよ……己らサイダなんか要らないや……サイダは女達にやつてしまはう……。

避難者　さうだ、女達にやつてしまへ……。

看護婦　（貴婦人からバスケットを受取つて）ほんとにさうしてくださいよ。その代りあなた方には林檎をあげますからね。

（女にサイダを、男達には林檎を配けてやる。避難民は手を伸してそれを受取る。）

貴婦人　配給はほんとに骨が折れますのね。私初めてあなた方の御苦勞が解りましたのよ。

看護婦　馴れると何んでもありませんの、奥様。ほんとにありがたうございました。皆さんはまるで子供のやうですの、でも無理はないと思ひますわ。

青年　あなたはお腹が空きませんか？

老人　いえ、ちつとも……それに食べたいとも思ひません……。

青年　物を貰ふのもいやなものですけれども、物を呉れる人の心持も醜いものですね。

貴婦人　それでは私はこれで失禮いたします。皆さんを何うぞ大事にしてあげてくださいまし。

看護婦　さうですか？　どうもありがたうございました。本部の方達によろしくおつしやつてくださいませ。

貴婦人　（空虚になつたバスケットを提げてテントを出ながら）明日もまたお天氣のやうでございますよ。

看護婦　然うですか？　さやうなら、奥様！

救護班員　（脱脂綿を入れた箱を持つてテントの中へ入る）山田さん、大變ですよ。、、、、、、、……。

看護婦　その、、、は何かしたんですか？

救護班員　何んでも、、、が大勢で師團へ押し寄せて來るといふ噂です。

避難者　（殆んど全部の男は一齊に立上る）、、、！

避難者　やつぱり、、、がやつて來たんだ！

避難者　、、、、、、、！

看護婦　何うか靜かにしてください……醫長が今參りますから……何んでもないんです・…。
避難者　何んでもなかない……、、、、、、、、、、、、、、……、、、、、……。
看護婦　西村さん、いそいで醫長を呼んで來てください。皆さん、私は皆さんをお預りしてゐるのですから、醫長の見えるまでは靜かにしてください。
避難者　醫長の來られるまで待たう……。
避難者　さうだ〳〵、それがいゝ、それがいゝ……。
避難者　看護婦さん、私達は何うしたらいゝでせう?　、、、、、、、、、……家は燒かれてしまふし……こゝでまたこんな眼に逢ふなんて……あゝ何うしたらいゝでせう……。
老人　あなた、、、が押し寄せて來るつてのは眞實(ほんとう)でせうか?
青年　(笑ひながら)何うしてそんなこと考へられませう。第一、師團を襲擊するなんて可笑(をか)しな話ぢやありませんか?　、、、は武器一つ持つてないんです。武器も與へられてゐない民族にそんな大膽な事が出來ますか?　私は昨日汽車でU師團の參謀大尉に會ひましたが、、、、、、、、、、、、。
老人　さうでせうか……でも何うしてそんな噂が立つんでせうね……。
青年　日本人に自信がないからです!
避難者　あいつは何んだへ?
避難者　、、、、、、、、、
避難者　、、、、……、、、、……。
避難者　、、、、、、〳〵!
老人　(身體を半ば起して)皆さん飛んでもないことを言ふもんぢやありません……この際、人を、、、だなぞといふのは飛んでもない間違ひのもとですよ……あなた何んとか言つてやつたらいかゞです……。
青年　いえ、それにも及ばないでせう……時が經てば皆な解るんですから。
避難者　何が解るんだえ……何が解るんだえ?
看護婦　靜かにしてください。醫長が參りましたから。
醫長　(軍醫の服裝をしてゐる)何うしたのですか?
看護婦　、、、の噂で皆さんが騷ぎ出したんですの。
醫長　、、。、、、、、、、、、、、、?　、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、諸君は帝國の勇敢なる軍隊の威力を疑ふのですか?　諸君安心し給へ、當市には一個師團の軍隊が出動の命令を待つてゐるのだ……。
避難者　一個師團だ……一個師團だ……。

避難者　出動の命令を待つてゐるのだ……。

醫長　諸君が國家を愛するの至情は私にもよく解つとる……然し諸君は忠良なる兵士を軍隊に送つてゐるんだ……諸君は安心してゐられるがい丶……帝國の軍隊は、諸君には指一本もさ丶せん……諸君は、このテントに避難されてゐる以上は、私の命令に服從して呉れなければいかん……。

避難者　さうだ〱。軍隊がゐるんだ〱。

醫長　諸君はよく解つて呉れた。（看護婦に）患者に異狀はありませんか？

看護婦　え、あの人が繃帶後大變痛むといつて居りますが……。

醫長　ふむ、痛むほどい丶のだ。療治後痛まんやうでは癒らん……他に……。

看護婦　それから、あの子供の人の容體が餘りよろしくないやうでございますの……。

醫長　ふむ、あれはいかん……朝になつたら本部へ移してもらはう……あんな子供をつれて汽車に乘るなんて非常識極まる……。

看護婦　何か應急手當でも……。

醫長　もう駄目ぢや……（避難民の泣聲が聞える）まだ朝までは間がある、諸君は安心して寢て給へ……決して騷いではいかん……。

看護婦　さあ、皆さん、落ちついてやすみなさい……あなた泣いちやいけません……そのお子さんは大丈夫です……朝になると病院の方へお連れしますから……さあ朝まで安心しておやすみなさい……さあ皆さんもやすんでください……。

（避難民は元の位置について寢る。）

（テントの風にあふられる音がする。）

（犬の吠える聲が遠く。）

（兵士の列を組んで歩む音。）

醫長　私は本部にゐます。用事があつたら何時でも知らせてください。患者に不安の觀念を與へちやいかん……患者を我儘にさせちやいかん……い丶ですか？

看護婦　はい、畏まりました。

（醫長は劍の音をさせながらテントを出て行く。）

（看護婦は無言のま丶避難民の間を歩いてゐる。）

（救護班員はテントの奥の方で居眠りを初める。）

（二三度犬の吠える聲。）

――や丶長い間――

（その時一團の自警團員がテントの中に入り込んで來る。甲冑を着て拔刀をした者に統率され、在郷軍人の服裝をした者、陣羽織を着た者、鉢卷をした者、學生

服を着た者、各々手に槍刀劍類を携へてゐる。）
甲冑　（テントの中を見廻はす）　此處かえ？
陣羽織　此處だ……此處だ……皆な這入らねえか……。
甲冑　提灯を出しな、提灯を出しな……。
鉢巻　（提灯を持つてテントの中へ入る）　何處にゐるんだへ？
學生　氣をつけろ、爆彈を持つてゐるかも知れないぞ。
在郷軍人　爆彈の一つや二つにおぢけてたまるもんけえ………。
甲冑　靜かにしろ……今晩は看護婦さん……。
看護婦　何んですか？……こゝへ這入つて來ちやいけません……一體何うしたんですか？
甲冑　看護婦さん……實は探し物があるんですが、一寸テントの中へ入れていたゞきます……。
看護婦　そんなに這入つて來ちや困りますね。患者が寢てゐるんです……。
鉢巻　一々斷る必要はねいぢやねいか……さあ勝手に這入つて探さう……。
看護婦　（肩をふるはせて）　いけません……這入つちやいけません……。
甲冑　看護婦さん、實はこのテントの中に、、、、、、、、、、、、、、……現に汽車から降りるのを見た男がゐます……、、、、、、、、、、、、、、……。
陣羽織　ゝゝゝゝゝゝ……市民の安寧のためです……。
在郷軍人　さうだ、市民の安寧のためだ……。
鉢巻　ぐづ／＼言つてないで早く探さう……何んでもやつつけちまへ……。
（自警團員は提灯を振り廻はして避難民の中を歩き廻はる。看護婦は蒼白な顔をして一團の後を追うて行く。）
（自警團員の一人は、老人と青年の背後に小犬のやうに蹲んでゐる一人の男の周圍に立つ。）
鉢巻　こいつだ！……こいつだ！……提灯を出せ……皆なこの顔付を見ろよ……。
ある男　（二十四五歳の勞働者風の男）　僕は何もしないんです……。
學生　（眞似をする）　僕は何もしないんです……。
陣羽織　やつゝけちまへ……やつゝけちまへ！
甲冑　亂暴なことをするな……己れが今調べて見るからな……おい、、、、、、、、、、？　嘘を言つちや爲にならねいぞ……。
ある男　僕は日本人です……皆さんは何をするんです？
學生　「ぼくは日本人です」……そんな日本人があるかえ？

甲冑　靜かにしな……お前の名は何んてんだえ？
ある男　僕は北村吉雄つて言ふんです……。
（自警團員は笑ふ。）
甲冑　ふむ。北村吉雄か……年は幾つだえ？
ある男　僕二十四歳です……。
甲冑　ふむ、何年生れだえ？
ある男　（非常に苦しむ）僕……僕……僕……。
（自警團員一齊に笑ふ。）
青年　（急に立上つて）よし給へ！　君達に何の權利があつてそんなことを聞くんですか？　そんな權利を何處から持つて來たんです？
老人　（はら〳〵して）およしなさい……およしなさい……。
甲冑　（青年を見て）君は一體何んだえ？
青年　（靜かに）僕は人間です……。
甲冑　それや人間にきまつてらあ……人間か獸かつて聞いてるんぢやない、何ういふ人間かといふことを聞いてるんだよ・…。
（自警團員等は提灯を青年の鼻先に突きつけて囁き合ひなぞする。）
青年　僕は書生です……一體君達は何だつて夜晩く避難民のテントの中なぞへ這入り込んで亂暴なことをするんです。
甲冑　亂暴？　己れ達はいつ亂暴をした？
青年　それが亂暴でなくて、何が亂暴です？　避難民を救護してゐるテントの中へ入り込んで、安眠を障げたり身元調べをしたり、一體諸君に他人の身元調べをする權利がありますか？
陣羽織　權利？
甲冑　さうだ、權利があるんだ……。
青年　その權利は何處から得て來たんですか？……僕の知つてるところでは、軍人と警察官の他そんな權利はない筈ですが……。
老人　あなた、後生ですから默つてゐてください……後でお話しすれば解ることですから……。
在鄕軍人　君は生意氣なことを言ふが、僕等は確實なところからその權利を得てゐるんですよ。縣警察部だつて立派にその權利を容認してゐるんだ……。
甲冑　それに、僕等は單に法律の條文なぞに拘束されて行動してゐるんぢやねいんだ……僕等は要するに國家に對する赤誠で働いてるんだ……。
青年　（笑ひながら）、、、、、、、、、、？　、、、、、、、、、、、、、、、、、？……面白いですね、、、、、、、、、、、、、、、、？

鉢巻　こいつ生意氣な奴だ……君は餘計なことを言ふ必要はない……默つてゐ給へ……ぐづ〳〵いふと承知しねいぞ！（槍を突つける）

青年　餘計な事を言ふんぢやない、
君達こそ餘計なことをしてゐるのだ！
軍隊や警察があるのに、
そのざまは何んだ？
甲冑、陣羽織、柔道着……。
君達には一體着る衣服がないのか？
（青年はある男を見て。）
君、起ちたまへ、
さあ、しつかり起ちたまへ、
君達のいふやうに、
、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、。
日本人、日本人、日本人、
、、、、、、、、、、、、、、、？
、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。
そんな簡單な事實が諸君には解つてゐないのか？
（青年は、、、の手を取り抱きかゝへるやうにして。）
この人を見て呉れ給へ

この人は一個の人間だ。
この顔を見て呉れ給へ
この人が罪のない人を殺したり、
井に毒を投げ入れたりするだらうか？
この人にも敵はあるだらう、
然しそれは君達ぢやないんだ。
君達には解つてゐない。
何も知らない。
何にも知らされてゐない。
また何も知らうと思つてゐない。
君達の仲間は、この人の友達を
罪もない武器もない、
一枚の葉のやうに從順で無邪氣な人達を、
、、、、、、、、、、、、、、、、、。
この人を見て呉れ給へ、
この人の今持つてるものは、
自然から貰ひ受けた、たつた一つの、
生命（いのち）だけだ。
この人こそほんとうの人間だ！
君達は一體何んだ？
君達の持つてゐるものは、
黴の生えた死んだ道德だけだ。

甲冑や陣羽織は骨董品として、
價値があるだらう。
然し生きた人間に何にならう？
もし諸君の心臓の中に血が流れてゐるならば、
諸君は諸君自身の着物が要る筈だ。
その甲冑を脱いで見給へ、
その陣羽織を脱いで見給へ、
諸君は生命のない操人形だ！
死蠟だ！
木乃伊だ！
骸骨だ！

鉢巻　不逞日本人だ……。

陣羽織　主義者だ……。

學生　危險人物だ……。

甲冑　二人をやつゝけろ！

老人　何うか皆さん、私に免じて、そんなことをなさらないでください……あなたも何うか皆さんに謝罪つてください……飛んでもないことになりました……。

（避難民はテントの中を逃げ廻ろ。女の避難民は泣き叫ぶ。）

看護婦　（避難民に向つて）皆さん、このテントを一刻も早く出てください。負傷をしてはいけません……。

青年　（ゝゝゝに）
さあ、君僕の手を握つて吳れ、
君がやられるやうだつたら、僕も死なう！
死！
何百人、何千人が、何百年何千年前から、
自分の愛する民衆のために、
殺されたか？
私達は馬鹿な民衆に媚びるため、
生れたのぢやない、
戰つて死ぬために生れたのだ！
正義と友情のために死んで、
行くのだ……。

（この時自警團員は激動を初める。武器を揃へて二人の周圍に肉迫して來る。甲冑は太刀を振上げ青年に對ひ陣羽織はゝゝゝに對ひ、その左右に他の自警團員が進んで行く。）

青年　（ヒロイズムの概念と混同してはいけない。靜かに力強く。）
新しい神祕よ！
力と友情との、
新しい人類の結合のために、
生れ出づる神祕よ！

沸上つて
この魂のない醜い潜在の黴を拂ひ落せ！
卑劣なる祖先崇拜の虚僞と
英雄主義と、
民族主義と
の假面をはぎとつて、
醜い骸骨の舞跳ををどらせよ。
オ、ケストラよ、
暫く待つて呉れ、
化石しろ、
醜い骸骨！
化石しろ、
醜い骸骨！
化石しろ、
醜い骸骨！

甲冑　――（太刀を振上げたまゝ化石する。）

陣羽織　――（同じく太刀を振上げたまゝ化石する。）

鉢卷　――（槍を伸べたまゝ化石する。）

學生　――（竹槍を持つたまゝ化石する。）

（其他の自警團員は全部化石する。その瞬間テントに入りかけた醫長も化石する。）

青年　骸骨よ、跳り出せ！

（光線一變してテント中暗黒となる。燐光色の光線がテントの中を照した時、十人の骸骨が自警團と同じ姿勢で立つてゐる……）（注意、骸骨は別に扮裝された十人の俳優によつて演ぜられてもいい。）

青年　オ、ケストラよ……骸骨のためにワルツを一つ……。

（十人の骸骨がワルツを跳る。青年と、、、と老人は立つて骸骨の舞跳を見てる。）

青年　罪なくして死んで行つた人々の幸福のために「死の幻想曲」を……。

（十人の骸骨は幻想曲を跳る。二三の骸骨はだん／＼弱つて行く……）

青年　（この時突然舞臺の左右から鋭い笑聲が起る。）
死んだ人々よ
よく笑つて呉れた！
オ、ケストラよ、
最後に別れの輪舞曲を……。
醜い骸骨共よ、
跳りながら消え失せよ！

（骸骨は烈しい輪舞曲を跳り最後に列を亂して各關節から身體をへし折つて地上に倒れてしまふ。鋭い笑聲。光線一變する。一旦暗黒となつて次第に明くなつた時

には光線がテントの中をほの明く照してゐる。避難民の女のすゝり泣く聲。）

看護婦　（靜かに顏を擧げて）　お氣の毒でした……でもやつぱり……。

――幕――

坪内士行篇

ムッソリーニ（三幕二場）

第一幕　第一場　アヴアンチ新聞社の一室
　　　　第二場　戰時病院內
第二幕　第一場　ミラノの街の或る酒場
　　　　第二場　ミラノ市廳前
第三幕　第一場　ヒリハッツイの谷近いベルチヤ
　　　　第二場　マテオチ夫人の居間
　　　　第三場　カルソ山上の大集會

（演出について特に指定したきは舞臺裝置は總て暗示的なる事と、動作もそれにつれて純寫實を避けたき事）

第一幕

第一場　アヴアンチ新聞社の一室

新聞社の貧弱な主筆の室を暗示する一室、窓にブラインドが垂れてなり、中央には大テーブル、その左方隅にタイピストの椅子、書籍、電話器、外套掛、長椅子等。

幕が上ると暫くは空舞臺。下の方でハーモニカでベルリン作曲の「青空の曲」を奏してゐるのが聞える。やがて下手のドアを鍵で開けて、ムッソリーニが入る。急がしげに机の引出しを開け、紙を散亂させた後、一つの原稿を取出して讀み、直ぐに電話器を鳴らす。

ムッソ　中央の二千百一番。（間）あ、印刷所だね。有つたぞ原稿が。未だ印刷に掛つちやゐまい。こいつを今日の第二面へ追加して貰ふから、誰かよこしてくれ。いや俺が自分で持つて行く。ウム？　すぐ行く。

（電話を切り、ドアへ行きかける、掃除の女がはいるのと行合ふ。）

女　まあ〳〵相變らずお早い事。御機嫌さん、ムッソリーニ。

ム　うむ。

女　おや、又、あんたはこんなに散らかしたね。仕樣の無い。片付けるのが一通りの事ぢやないよ。

ム　まあ〳〵賴む、俺は急ぐんだから。な、いゝ子だ、いい子だ。

（去る。）

女　（持つてゐるバケツや、箒を置いて、紙片を片付け乍ら）手の付けられない散らかし屋だよ、あの人は。（ハーモニカの音の方へ）おい誰だい、朝つぱらからハーモニカな

んか鳴らしやがつて。やかましい、やめつちまへ。（ハーモニカ一段と高く鳴る）やめつちまへと言ふに、こん畜生、頭から水をぶつ掛けるよ。（尙鳴ること ようし、やめないな、くそつたれめ。

（バケツを持つて出て行く。水の音。物音。ハーモニカ止む。直ぐ女は他の稍年の若い、牛乳瓶を持つた女を連れて戻る。）

女　御免よく、バケツが當つたんだね痛かつたらう、すまないね、許してお吳れよ。なにね、クドミロの奴が朝つぱらからハーモニカなんか鳴らしやがつて、八釜しくつて仕樣がないから、やめろつてのに尙ほと鳴らしやがるんでね、頭からバケツの水を浴びせ樣として今の始末さ。ハ、、、痛かつたらう、勘忍しておくれ、まあお掛けよ、お前さんとこの病人はどうなんだい。

女二　どうもいけない。此の冬はどうにか越したけれどあゝ弱り切つちやもう駄目だよ、第一手遲れなんだからね。

女　折角もう五月にもなつて、段々暖くなるのにね。それにしても、金持なんてものは、本當に不人情なものだね。

女二　今さらそんな事を云つても始まりやしないさ、何しろ兩手を切られた片輪者なんだもの、會社だつて持てあます筈さ。

女　そりやさうだけれど、何もこれが、遊び半分、面白半分で切つた兩手ぢやあるまいし。

女二　駄目々々、そんな事はもう誰も彼も言ひ古した事だよ。何にしたつて負けるが損、勝てば得と相場は定つてる。

女　此處の主筆さんや仲間の人達は お前さん方の 味方だし、今でも少しは貢いで吳れるのだらう？

女二　ムツソリーニさんかい？

女　あゝ。

女二　あの人やあの仲間の人はそりや親切さ。けれ共、御覧な、名前丈けはアヷアンチ新聞なんて、大きな名でも、その主筆さんの部屋がこれぢやないか。五階建の新聞社ならいゝけれど、その貧乏高屋の三階の二部屋だけなんて、貧乏新聞、ゆすり新聞、惡口新聞と言はれたつて仕樣がないだらう。

女　だつて、貧乏人と金持とをならして、誰も貧乏人でもなく、金持でもないつてことにするのが、あの人の議論だらう。

女二　そりや理窟さ。理窟はそれがいゝにきまつてゐるけれど、さうするにや貧乏人が金持を困らせなけりやならない。

女　困らせたらいゝぢやないか。

女二　さうすりや金持だつてだまつちやゐない。

女　やつけるまでさ、金持々々と威張たつて、こちとらの樣に緣の下の力持でウン／＼呻つて働く者がなかつたら、世の中は闇さ。

女二　働いたつて、お金をくれる人がなかつたらやつぱり駄目さ。

女　おや、お前さんは妙に金持の贔屓をするね、何かい、御前さんは工場に働いてる中に、亭主が片輪になつて、それに碌すつぽの手當もしてくれなくつても、その金持を贔屓するのかい、へえ大したものだ。

女二　さうぢやない、だけれどね、力のない者はやつぱり駄目さ。私やフランスの方へ出稼ぎに行かうかと思つてゐるのさ。

女　フランスへ？　あの戰爭場へ？

女二　あゝ、かう不景氣になつちや、國に居たつて生きてく道がないもの。

女　あの、兵隊相手の商賣をしようつてのかい。お前さん、本氣なの？

女二　あゝ。

女　あゝ分つた。お前さん、亭主の長わづらひで、一寸淋しくなつて來たんだね、それも無理はない、當世だからね。

女二　何が？

女　不人情なのがね。

女二　何んとでも言ふがいゝ、勝てば得する、負ければ損する、ま、精々お働き。

（去る。）

女　ちえッ、薄情者、何が勝てば得をするだ。そんな心得で天國へ行けると思つてるのか、異教徒め。

（一寸祈禱して、掃除にかゝる。往來でかしましい人聲、物音。）

街の演說　……であるから、我々は起つべきである。我々の信ずる處のローマン・キヤソリツクの宗義は我々に平和を教へる。然し乍ら、我々は先づ第一に國家を考へなければならないではないか。凡そ物には總て順序がある。人類愛を說き、博愛を說くのはいゝ。然し乍ら、世界一切の中心は何處に在るかを考へて見よ。それは卽ち我である、自分である。自己あつて始めて家庭あり、社會あり、國家あり、而して最後に世界がある。最後であるべき世界の平和、到底競爭は止むべからざる昨今の狀態に於ける此の地球上に於て、世界の平和を基本として論を立てる事は順序顚倒である。これやがて國家を危ふくする事でなくて何であらう。國家空しければ家庭空しく、家庭空しければ自己亦空しい。自己の存在を危ふくして尙且世界の平和を主張すべきか、吾人は斷じてこれに反對する。自己を重んずる者は、先づ國家の存在を强固な

らしめよ、伊太利の國威を先づ發揮せよ。ガルバルヂの血は今我々の體内にも流れてゐる。起て、伊太利人！千古未曾有の此の歐洲大戰に參加して、國家の威勢を……。

（後の言葉は喧騷の中に消える。これより先きに、入口から編輯員のギオバルヂが駈けて入る。）

ギオ　や、叔母さん、えらい事になるぞ。

女　何が？

ギオ　何がぢやない。伊太利は戰爭に參加しさうだぞ。

女　へえ、戰爭に？　おや／＼、いやな事。さうでなくつてさへ不景氣だのに、戰爭になんかなられて堪るものか。

ギオ　馬鹿言へ、戰爭の仲間入りをすりや景氣がよくなるんだ。いや景氣をよくする爲めに參加するんだ。堪らんぞ。

女　お前さんや此處の主筆さんは、戰爭に反對の人ぢやないか。

ギオ　今迄はさうさ。が、今は違つた。主筆が街で演説してゐるのが聞えないのか。

女　おやまあ、あれは主筆さんかい。道理で似た樣な聲だと思つてたが。そして全體どつちの味方をするの？　獨逸？　佛蘭西？

ギオ　馬鹿だなお前は、無論佛蘭西方さ。

女　だつて伊太利は、佛蘭西には度々いぢめられてるよ。

ギオ　お前なんかと議論してたつて始まらない。兎に角俺は胸がわく／＼してならない。

女　お調子もんだね、お前さんは。

（ギオバルヂは舞臺を歩き廻る。タイピストのアルダが入る。）

アルダ　お早う、叔母さん。今朝はなんて遲いの。ちつとも掃除が出來てないぢやないの。タイプライターの上の此の塵！

女　私のおそいのより、お前さんはどうしたんだい、昨夜お樂しみでもあつたのかい。

アルダ　馬鹿におしでないよ。私はおそかありやしない。御覽な、あの勉強屋の主筆さんだつて未だぢやないか。

女　へッ、何が未だだ、主筆さんは一時間も前にとうに御出勤だよ。本當にあの人位精の出る人はありやしない、よくあれで身體が續くね。

ギオ　全くだ、あの人は俺達とは身體のこしらへが違ふ。不死身だねあれは、鐵砲の玉でもあの人にはこたへんかもしれん。未だやつと三十一だと言ふのに、あの調子ぢやどんなものになるか見當がつかん。ガルバルヂ以上の男だぞ、あいつは。

アルダ　さう言ふお前さんは？　ギオバルヂ？

ギオ　おれはギオバルヂさ、ガルバルヂと名だけは似た樣

なものさ、ハ、、。
（この間に女はバケツに水を汲みに行く。）
（街の喚聲激しくなり、やがて拔劍したムッソリーニの兩腕をつかんで、三人の男現はれる。アメンドラとニコラとマテオチである、ムッソリーニは「放せ〳〵」と叫ぶ。三人は彼を室内に入れると共に、突き倒し、顏見合せて去らうとする。ムッソリーニ起直つて叫ぶ。）
ム　待て！
三人　何！
ム　待て、言ふ事がある。貴樣達は俺を變節漢と言つたな。
アメン　勿論言つた。我々は今迄貴樣を我黨内でも屈指の鬪士と信じたればこそ、貴樣に重大な機關新聞アヴアンチの主筆の役を勤めさせて來たのだ。今になつて、我々の主義と正反對の意見を發表し、群集に向つて演說をするとは何だ、裏切り者！
ニコ　叩つ切つても飽き足りない奴だが、今迄のよしみを思つて、もう一度熟考の餘地を與へてやる。部屋に引こもつてよく考へて見ろ。
ム　馬鹿！
三人　何！
ム　今更俺に何を考へろと言ふのだ。俺は大戰に參加して、英佛軍側の味方をするのが國是と信ずるから、參戰論を唱へるのだ。俺には俺の信ずる所があるのだ。
アメン　未だぬかすか！
ム　いくらでも言ふ。伊太利は大戰に參加する事によつて莫大な利益を得るのだ。その利益に反對する奴は伊太利人ぢやないのだ。國賊だ。
ニコ　落付け、ムッソリーニ。今日迄貴樣は此の新聞の主筆としてどう言ふ事を書いて來たか知つてるか。伊太利共和國を建設せよ、元老院の廢止、爵位の廢止、思想、信仰、組合、出版の自由。中にも軍需品の製造を絕對に禁止すべしと言ふ一條は、我々も貴樣も、最も力を盡して呼號して來た事だぞ。我々黨員が一國家を本位とせずして、世界的の共產、世界的の平和幸福を目ざして努力してゐるのは百も承知の貴樣ぢやないか。よくものめ〳〵と參戰論が唱へられたものだ。變節漢と罵られ、裏切者と言はれても一言もない筈だ。
ム　變節漢と國賊と何れが非だ？
三人　何！
ム　貴樣達は國家を超越した世界的平和だなどと、熱病患者のたは言を言つてゐるのだ。世界的と言つても貴樣達は世界人ぢやないぞ。貴樣達は伊太利人なのだ。いゝか。世界人顏する貴樣達は殘念だらうが、貴樣達は黑ん坊でもなければ、黃色人種でもない。佛蘭西人でも西班牙人

でもない。我々は伊太利人なのだ。世界の平和、勿論いい。世界の統一、勿論賛成だ。然しそれは我々伊太利人によつてなされなければならん。我々にはそれに相當する意氣と力とが備はつてゐる。たゞ惜しむらくは國家としての統一と、內容充實が出來てゐない。それを成就するのは今だ。この大戰に參加する事こそ伊太利勃興の唯一の機會である。見よ、我が伊太利の國際的勢力たらんとしてゐるのを、絕えず壓迫し續けてゐる國は何か？それはオーストリーではないか。アドリヤ海の主權を握り、かのマシモ・ダゼグリロが言つた「伊太利國は成つた、今や伊太利人を造らざるべからず」に一歩を進めて「イタリヤ人の住む土地はイタリヤ領ならざるべからず」の理想に達するの機は、今を失しては永久に來ない。先づ戰爭に參加してオーストリーを倒し、トリエストとフユーメを手に入れんとする我黨の主張は、伊太利に住み、伊太利に育ち、伊太利の國家を思ふ市民として、一點非難を受くべき節はない正々堂々たるものである。

（この間にマテオチは默つて上衣を脫ぎ、此の句の終る時、突如ムツソリーニの頭に一擊を與へる。ムツソリーニは己の辯舌に醉つた夢からさめたかの樣に、猛然マテオチに向つて闘ふ。マテオチ倒される、と、アメンドラとニコラとが左右から一時にムツソリーニにかゝる。亂鬪の後、ムツソリーニー傷を受けて倒れる。アメンドラとニコラとはマテオチを助け起し、戶口に行きかけ振返る。）

アメン　政府に買收された變節漢。我々は貴樣を我黨の裏切者として除名する黨議を決する。呼出されるのを樂しんで待つてゐろ。

ニコラ　昨日の味方も今日の敵だ。精々賣名に智慧をしぼれ。我々は飽く迄貴樣を苦しめてやるぞ。

マテオ　（蒼白く笑つて）ムツソリーニ、流石貴樣の手並は確かなものだ。が、俺もサンデイカリストの一人として、伊太利に名を知られたマテオチだ。いづれ改めてお手並拜見と出かける。覺えてゐろ。

（三人は去る。これまで震へながら見てゐた編輯員、タイピスト及び掃除女は、ムツソリーニを助け起す。）

ム　大丈夫々々々、騷がんでもいゝ、たゞ水を一杯くれ。

（女はバケツと水を持ち出す。）

アルダ　あら、それはバケツの水、汚いぢやないの。

（ギオバルダ、コツプへ水をつぎ、先づ己一杯のんでさてムツソリーニへ持つて來る。電話が鳴る。アルダ受けてムツソリーニへ取次ぐ。）

ム　ウム、さうか、よし！

（電話を置く。街の遠くから次第に近まるざわめきの

音、伊太利國歌を唄ふ者も交る。女二人は窓へ行つて見下ろす。）

ム　（立上り、ギオバルヂの肩を叩き）　おい、ギオバルヂ、俺達も出かけよう。

ギオ　へ、何處へ？

ム　戰爭に。

ギオ　戰爭！　ぢや伊太利はいよ〳〵參加したんですか？

ム　參加した。俺達も行かう。

ギオ　愉快々々。

ム　貴樣も俺も一兵卒として軍隊に加はるのだ。用意しろ、男子すべからく機運に乘じて事をなすべし、昨日までの共産黨員、今日は戰線に立つ一兵卒。そしてやがては……。

（ぢつと前方を見詰める兩眼に野望燃える。街のざわめき一段と騷がしくなる、女等窓から兩手を振る。）

ギオ　戰線へ！　戰線へ！

（暗　轉）

第二場　野戰病院

トレルトの戰時病院として使用される寺院を暗示する舞臺面。

ベッド三つ。

隻脚の者、手押車に乘る者、すべて十名ばかりの兵士、看護婦三四交る。

オルガンの音。

兵一　誰だ、オルガンなんか彈く奴は？　やめさせろ、いん氣臭い、俺達はまだ亡者にやならねえぞ。

兵二　威張るな〳〵、あんまり此の世の人間らしい面つきでもないぞ。

兵一　何を、こん畜生。

（立上つて二に組み付く。看護婦一、二、とめる。）

看一　又喧嘩ですか。氣が立つてるので困つちまひます、伍長さんにいつけますよ。

兵一　（看護婦一に）　氣が立つてないでどうする、吾々はたゞの兵卒とはわけが違ふんだ。アルディチ隊だ、決死隊だ。八寸兩双の短刀一本、手投げ爆彈を引つさげて、眞しぐらに敵の眞中に突進する決死隊だ。遠くから鐵砲かついで、お一イ二の三ポン〳〵と言ふ連中たあ譯が違ふんだ。氣が立つてるのがどうした。

看護婦二　おゝ、こは。

兵二　決死隊々々と自分一人の事のやうに言ひやがる。餘程決死隊ぶりたいと見えて、生き乍らもう青い顏をしてけつかる。

兵一　こいつまだそんな減らず口をきくな。顏の青いのは榮養不良のせゐだ、俺の樣に國に居る時贅澤してた者に

や、こんな軍隊での飯は食へたもんぢやない。青い顔にならざるを得んぞ。
兵三　國での贅澤をトレルトの山ん中へ來て自慢するのは可笑しいな。しかも吾々決死隊の中でよ。
兵一　それ程の男が、かうして決死隊の仲間に這入つたのは、なほさら尊い愛國心の發露だと言ふ事を貴様等に分らせたいのだ。俺と貴様等凡俗な貧民共とはわけが違ふんだ。
兵四　貴様等凡俗の貧民とこきあがつたな。ちやんちやら可笑しいぞ。その凡俗な貧民に「助けてくれ」と言ひ乍ら、岩の蔭からフラ〳〵と出て來た奴は誰だつけな。
兵一　叱！　それを言ふな、それを。
兵四　諸君、こいつはね……。
兵一　默れと言ふに。あれはあの場合止むを得ぬ事で、木の根につまづき岩蔭に暫く休んで居たんぢやないか。何も敢て「助けてくれ」と言はんでもいゝし、助けて貰はんでもよかつたのだが……。
兵四　未だあんな負惜しみを言つてやがる。貴様の疵が鐵砲疵や刀疵でないのが第一の證據ぢやないか。逃げるはずみに岩につまづきやがつて、傷病兵が聞いてあきれる。くたばつちまへ、貴様なんざあ。
兵一　何を、この野郎。

（紐打ちを始める。オルガン此頃止む。）
ベッドの甲　おい、少し靜かにしてくれないか、頭へガンガン響いてやり切れない。
看護婦二　本當ですよ、可哀想に、あなた方は輕傷者だから呑氣にしてられるけれど、重い人の事を考へて、少しは同情するものですよ。
兵一　何も俺だつて無理に騒がうてんぢやない、こいつ等が……。
兵四、三　こいつ等とは何だ！
兵一　こいつ等だからこいつ等と言つたんだ。默りやどうともしろ。
兵三　生意氣言ふな、逃げ損なひのくたばり損なひ！
兵一　何を！
ベッドの甲　馬鹿！　やめろ！　俺が分らないのか俺が。俺はこんなに弱つてる、俺は戰ひに飽きはてた。早く故郷へ歸りたい。あゝ、俺は故郷がなつかしいのだ、あの靜かな平和な村の景色がなつかしいのだ。
兵五　情けない聲を出すな。今にも死にさうな聲ぢやないか、しつかりしろよ。
看護婦一　本當にしつかりなさいよ、あなたは段々よくなつて行つてるのですよ。
兵一　さうだ、しつかりしろ。何だ、たかゞ横つ腹へ玉が

一つ入つた位の事ぢやないか、儲けもんだと思つて元氣を出せ。

兵二　この足くじき先生が大きな事を言ふせ、人の事だと思つて。

兵一　何を！

兵三　（兵一に）もう止めろよ、（甲に）しかしな、おい、貴樣も可成ひどくやられたんだから苦しいだらうが、あのムツソリーニの事を考へて、少し元氣を出せ。

兵四　さうだ、全くあのムツソリーニは無茶な奴だな。あいつは大砲のかけらが、三十二も身體の中に飛込んだつて言ふな。手術はしても七つ丈はどうしても出せないんださうだ。

兵二　七つ？　ほう俺は三つと聞いたが。

兵一　あいつ、隨分人をくつた奴だが、玉のかけらまで食つてるとはよつ程食ひ辛棒な男だ。

兵五　無理はない、育ちが鍛冶屋と來てるからな。

一同　ハヽヽ。

兵二　（節を付けて言ふ）　鍛冶屋々々の素丁稚が、十五の年に家出して、あつち行つちやごろ〳〵、こつち行つちやごろ〳〵、ごろ付き廻つて惡る三昧、活字拾ひが出世して、主筆になつて威張り出し、仲間と衝突、戰爭開始、命知らずのあぶれ者。

（この間に看護婦三に押された寢臺車に乘つたムツソリーニが、本を讀み乍ら出、兵二の傍を通る時、片足でけ倒して過ぎる。）

兵二　あ痛、誰だ〳〵？

（起き上り、探す。兵も看護婦も笑ふ。ムツソリーニは寢臺車から己のベツドへとゴロリと寢代る。）

兵五　おい、やめとけ〳〵、本尊さんが聞いてたんだ。

兵二　誰が〳〵？

（兵四彼を引張つてムツソリーニの方を教へる。兵二頭を掻いて默す。）

兵一　（近づいて）おい、ムツソリーニ、氣分は何うだ。新鮮な空氣に觸れて、身體の中の金がうなり始めやしないかい？

（ムツソリーニ、平手で兵一の横面をなぐり、本を讀み續ける。）

看護婦三　まあ、亂暴な。

兵一　痛い〳〵、畜生。やい、ムツソリーニ、貴樣は病人の癖に、何てひでえ事をしやがる。御機嫌如何と聞いたが何で惡い？

ム　やかましい。身體の中の金がうなるかとは、何て聞き方だ、身體の中の金よりも、俺はこの胸が鳴つて堪らないのだ。

看護婦三　まあ、そんなに氣をいら〳〵なさるなよ。皆さん、ムツソリーニさんは未だ大變熱が有るのです。
兵一　はゝあ、熱にうかされてゐるのか、いつも乍らにね。
看護婦三　いえ、本當です。今も計つたら四十度二分もありました。
一同　四十度二分！
看護婦三　軍醫さんも驚いてゞしたわ。四十度二分の高熱であり乍ら、引つ切りなしに書いたり讀んだりなさるなんて、人間業とは思へないつて。
兵二　おい、君は何を書いてるんだい？
看護婦三　國への通信ですつて。
兵三　はゝあ、奴さん、ポポロ・デイタリヤ新聞記者だからね、病中乍ら金儲け、てんだらう。
兵四　讀んでるのは？
看護婦三　知りません。
兵四　おい、ムツソリニー、君は一生懸命に何を讀んでるんだ？
ム　ロシヤ語。
兵四　え、ロシヤ語！　おつそろしい、むつかしいものをやつてるんだな。君あ、さう言つちや失敬だが、小學校四年迄しか行かなかつたのだらう、それにロシヤ語なんか讀めるのか？

ム　讀めないから習つてるんだ。
兵四　こいつあ御挨拶だ。然し、何も病氣で、しかも大熱でウン〳〵うなつてゐる最中に、語學の勉強をするにや及ぶまい、語學の中でも一番難かしいロシヤ語を。
ム　おい、貴樣あ今を何う言ふ時だと思つてゐる！　俺達は伊太利人だぞ。俺達が生れ、俺達が育つて來た伊太利の現狀は何うなつてると思ふ。總理大臣ニッチのあの不徹底な外交振りは何うだ。又國內に於ける共産黨員の無分別な、非國家的の跋扈橫行は何うだ。我々は伊太利の國威を發揮して、世界に於ける我が國の使命を果さんが爲めに戰場の第一線に立ち、或は命を失ひ、或は四肢を失ひ、輕い者でも足に傷位は負つてゐる。即ち、殆ど傷付かざる者無き迄に惡戰苦鬪してゐる。しかるに本國の有樣は何うだ。君達は恐らく何んにも知らんのだらう。本國で今我々出征軍人は何う言ふ眼で見てゐられると思ふか。開戰論に反對した連中、共産主義を唱へた連中、彼等は無智な勞働者を煽動し、徒らに伊太利の秩序を亂し、國家を否定して、暗々裡に我等の愛する國を擧げて他の強大なる國へ捧げんとしてゐる。俺は居ても立つても居られない。俺は寸時も早く國へ歸りたい。一分の時間も惜しいのだ。俺は君達の樣に遊んでは居られない。自己の教養の爲め、自己の充實の爲め、俺は死に物狂ひで勉

強をしてゐる。四十度の熱がなんだ。男子の意氣を見よ、男子の意氣を！　俺は死なゝい、俺は死なゝい、斷じて死なゝい！　俺は戰場に立つて敵に向ふ時、未だ嘗て恐ろしいと感じた事はなかつた。彼等を倒すのは卽ち國を建てる所以だと、信じたからだ。然し、今は敵は戰線の向ふにばかりは居ない事が判然とした。戰ひは先づ內に向つて進められなければならん。そしてそれを成し遂げ得る者は俺だ。伊太利の國家を救ふ者は俺だ。この俺なのだ。俺が死んだら伊太利は亡びる。俺は死ねない、斷じて死ねない！

（昂奮の極、彼は遂に倒れる。看護婦等は馳寄つて彼をベッドにかつぎ入れ、介抱する。）

兵一　こいつは恐ろしい夢想家だ、おそらくダヌンチオ以上の夢想家だ。

兵二　いや、こいつの言ふ事には信念がある。信ずる處金鐵も亦貫くべしだ。こいつはきつとすばらしい事をするに違ひない。

兵一　いや、あいつは恐る可き野心家だ。

兵三　いや、あいつは最も熱心な愛國家だ。

兵四　兎に角、恐るべき精力家である事は事實だ。見ろ四十度の熱のある最中、新聞への報道を書いたり、ロシヤ語の勉強をすると言ふ事が、普通の人間で出來ると思ふか、俺は其點丈でも、あいつに尊敬を拂ふ。古往今來、一代に秀でた人間は殆どことごとくが精力家である。天才は二の次だ、瞬間弛ゆまず、うまず、一つの目的、一つの理想に向つて邁進する、その努力は結局何物をも征服し盡すのだ。俺はムッソリーニの成功を信ずる。俺は彼の成功を祈るよ。

ベッドの甲　さうしてさう言ふ貴樣は何うだ？

兵四　やい〳〵誰だ、ベットの中からムニャ〳〵と寢言を言ふのは、こゝの事だぞ、貴樣の心得べきは。ちつとやそつとの傷で、あゝ頭が痛い、故鄕が戀しい、と言ふなあ誰だ。死んぢまへ、意氣地なし！

甲　默れ〳〵、貴樣は何うだ、貴樣は。暇さへあればカルタをしてゐる碌でなし。實際祖國の爲めを思ふなら、口先ばかりでなく實際奮然として立て。

兵四　こいつ生意氣な事を言ふな。ベッドから引ずり下ろすぞ。

甲　何を小癪な、俺たつて伊太利人だ、貴樣如きの手ごめに逢つて堪るものか、喧嘩なら來い。

（ベッドから出て立ち向ふ、看護婦等又止める、ギォバルデが決死隊の制服で、新聞や手紙、小包等を持つて出る。）

ギオ　皆んな、郵便だ。

（一同喚聲を擧げて集まる。）

兵等　小包は俺だ、俺の手紙をよこせ、こいつは貴樣のだ。や、看護婦さん、俺の女の寫眞を見て吳れよ。

ギオ　おい、ムツソリーニ、貴樣へ澤山新聞が來てるぞ。

看護婦三　ギオバルヂさん、新聞は後にして下さい。今疲れて寢た處ですから。

ム　いや寢ちやゐない、よこせ、新聞を。

看三　まあ、そんな無理をしてはいけません。

ム　やかましい、おい、ギオバルヂ、よこせ、新聞を。

ギオ　さ。

（ギオバルヂは新聞數枚を渡す。ムツソリーニむさぼり讀む。）

兵三　おい／＼、俺への小包を見ろ、こいつは素敵だ、菓子がは入つとるぞ、菓子が。

兵等　どれ／＼。

（奪ひ合ひ始まる、ギオバルヂ後ろからそれを喰ふ可笑味。）

兵三　やい、貴樣は傷病兵でもない癖にのこ／＼と此處へやつて來るさへあるに、俺の菓子を盜んで食ふとは何事だ、戾せその菓子を。

ギオ　もう食つちまつた。のど元三寸下り終つた。ゆるせゆるせ。

兵三　何を、こいつめ、はき出しても戾せ。

ギオ　はき出して戾せ？

兵三　さうよ、はき出しても戾せ。

ギオ　ひどい事を言ふ奴だ。よし、俺も伊太利男子だ、はき出して返してやる。

兵三　よし、美事はき出して戾せ。

（ギオバルヂ滑稽の振り。）

ギオ　あゝ、つら、一寸どうも具合よう戾りおらん。

兵三　戾せ／＼、この掠奪者！

（この時看護婦の一人叫ぶ。）

看三　あ、皆さん、ムツソリーニが！

一同　何だ／＼？

看三　又卒倒しましたよ、水、水！

（一同介抱する。）

兵一　仕樣もない、よく昂奮する奴だな、何うしたんだ？

ギオ　此新聞だ。

兵二　久しく國の新聞なんてものは見ないが、何が書いてあるのだ。

（一同讀む。）

兵三　これ／＼この論文だ、あいつの讀んでたのは、標題からして刺戟的だぞ、えゝと「何の爲めの戰爭參加ぞ」いゝか讀むぞ。「笑ふべくも憎むべき開戰論者は、今にし

て始めて己等の盲目を悟つたであらう。吾等が嘗て極力反對したに拘らず、時の愚昧なる政府當局は、愚昧なる賤民を煽動して、遂に伊太利の大戰參加を決行したるも、見よ、その一年二年に亙る吾等伊太利國民の刻々の苦心の、如何に無慘に甲斐なくも蹂躙されつゝあるかを。英佛の二强國は、吾等を誘ふに巧みなる好餌を持つてした。曰くトレントの提供、曰くトリエステの提供、曰くダルマチア地方一帶の提供、而してその欲する所は、單にオーストリヤの背後に兵を集めてこれを牽制せん事のみと。然るに見よ、彼等狐狸の如き老大國のなす所を。戰は數年に亙つて勝負分たず、貧弱伊太利國は、今や將に國を擧げて渦中に投ぜられんとす。誠にこれ虎狼の爭ひの前に捧げらるゝ、あはれむべき羊にさも似たり。カポレツトに於ける伊太利の敗戰は、我國未曾有の最大恥辱たるを記憶せよ、斯くの如くんば、むしろ如かず、最初より國を擧げて敵國と稱する國々に捧げんには。伊太利をして斯くの如くならしめたる罪は何人にありや? 我等は斯の如き現在の寒心すべき事實を前にして、改めて聲高く呼號す、戰爭に災ひあれ、主戰論者よ死ね、否、戰ひに從ふ者ことごとくに呪ひあれよと!

（一同顏を見合す。）

兵二　ひでえ事を書きやがるな。國に居て呑氣にしてる奴はこれだから厭になつちまわあ。

兵五　隨分思切つた反對論だな。

兵四　こんな調子ぢや、もう戰爭する氣になりやしない。

兵一　だから俺は始めつから戰爭は好かなかつたんだ。

ギオ　君達は今更そんな事を言つてるが、本國での騷ぎはもつとひどさうだよ。

一同　何うだ〳〵?

ギオ　近頃は、うつかり本國へ歸るとひどい目に逢ふさうだ。戰爭に行つた者は國を亡ぼす者だと言ふ議論で。

バツドの甲　おい〳〵、それは本當か?

ギオ　俺も歸つて來たのぢやないから、事實は何うか知らないが、近頃本國では、食糧は益々不足する、石炭は缺乏する、爲替相場は下落する、勞働者の生活標準は急激に底下する。さうした危機をはらんで來たのは、つまり此の戰爭の結果だと言ふのだ。戰爭に參加しなかつたらよかつた、戰爭に行く奴がなかつたらよかつたと言ふ議論になる。

兵五　それぢや俺達の立場は何うなる?

ギオ　無くなる。

兵四　無くなるとは無茶だ。

ギオ　無茶だ。

兵三　俺はいやだ、俺はいやだ、誰が好き好んで戰爭に出

ゐ者がある、國の爲めと思へばこそ出て來たのだ。艱難辛苦して、おまけに脚を失くし、手を失くし、何萬と言ふ者は命迄も無くしてゐる。それで立場迄無くして堪まるものか。俺は承知せん。

ギオ　承知せんでも、國へ歸つたらひどい目に逢ふ。

兵三　そりや無茶だ、無法だ！

ム　無茶だ〳〵。我々はそれに對抗しなければならん！

（ムソリーニ起直る、一同そちらへ向く。オルガン又鳴り始める。）

ム　俺が斷じて死なんと言つたのは此處の事だ。俺達は國家の爲めに働いて來たのだ。或奴は俺を野心家だと言ふ。或奴は俺は熱に浮かされてゐるのだと言ふ。俺は、野心の爲めや、一時的の熱に浮かされて戰爭に出たのぢやない。俺は、戰爭が國家の爲めにいゝと確信したから軍隊に投じたのだ。一兵卒となつて（ギオバルドを指し）こんな手合と同列になつて、戰線へ出たのだ。そして三十幾つかの彈丸の破片を身に負つて、四十度の高熱に惱まされた。然し、俺を惱ましたものは砲丸の破片でもなければ四十度の熱でもない。瞬時も忘れぬ本國の有様だ、俺は毎日何枚かの新聞を見てゐる。そして、刻々に本國の社會が極左に傾いて行く有様を手に取る様に知つてゐる。俺は堪らないのだ、あいつ等は理論の爲めに實際を忘れてゐる、頭が進み過ぎて實行が伴はない、頭でつかち程、不安な、危險なものはない。俺は伊太利の將來を思ふ時、寸分時も安心してゐられないのだ。諸君。諸君は、國家の爲めに汗を流し、血を流し、命を失はんとしてゐる、然るに本國の社會主義者連は、我々が戰ふが故に伊太利は不利益を蒙つてゐるとして、歸り行く吾々軍人にあらゆる恥辱と虐待を加へんとしてゐる。戰爭が非か是か、その議論は絶對的のものではあり得ない。少くとも今伊太利が不利益な立場に陷入りつゝあるのは、吾吾出征軍人の罪では斷じてない。祖國を思つて戰ふ者に罪があつて堪るものか。伊太利が昨今の窮境に陷入つたのは、畢竟政府の要路に立つ者の罪であり、又吾々出征軍人を非難してやまぬ彼等非愛國的な主義者輩の盲目的な攻擊の結果である。罪は彼等にある、我等にはない。我々は此の社會主義者連と戰ふのだ。我等は結束して立たねばならぬ。一つの束になるのだ、一つのファッシオを形造るのだ！

一同　（聲低く、然し、力強く）ファッシオ！

ム　俺は共産主義を信じない。俺は平等主義を奉じない。俺はすでに三つの信條を考へついてゐる。いゝか、一つは「我等の精神は祖國本分規律に在り、國と共に榮える事だ。」第二は、我等は義務あつて權利なし、但し己の義

務を遂行する事を主張しうる權利あるのみ。」第三は「我等は實行あつて議論なし。」此の三つの約束を掲げて、俺は身體の自由になり次第本國へ歸る、そして、此の從軍中に習得した所に從つて、軍隊式の絶體服從の規律を設けて、同志の士を募り、一致團結、一つのフアッシオとなつて、もつて彼等社會主義者に對抗して行くのだ。君等贊成ならば俺に從へ、反對ならば議論は無用、直ぐ様劍を取つて俺に向へ。決闘は俺のお手のものだ！

ギオ　（極度に昂奮して）ムッソリーニ、俺はお前に贊成だ！　こゝに居るみんなもきつと贊成だ、なあ、みんな。

一同　勿論だ！

ベッドの乙　（繃帶だらけの顔を出して）俺も贊成。

ム　面白い、これでフアッシスモの第一歩は形造られた。看護婦さん、俺はもう國へ歸る。洋服を持つて來て呉れ。

看護三　いけません、いけません、あなたはまだ〳〵此處を出られません。軍醫さんがお許しになりはしません。

ム　あんなへつぽこ醫者の言ふ事なんか構はん、俺は歸る。

看三　いけません、伍長さんに叱られます。

ム　歸る〳〵。

（一同ざわめく、伍長出る。）

伍長　（いきなりムッソリーニをなぐる）こら、ムッソリーニ、貴様ア看護婦の言ふ事を聞かんで我儘ばかりしとるさうだ。怪しからんぞ！

ギオ　伍長殿、ムッソリーニは病人です。それをなぐるとは少しひどいではありませんか。

伍長　（ギオバルヂも一つ喰らはし）やかましい、上官に向つて何を言ふか。

ギオ　何！

ム　（ギオバルヂを止めて）こらギオバルヂ、吾々は未だ一兵卒だ。上官の命令には絶對に服從せい。

ギオ　（敬禮して）はつ、どちらにも絶對に服從するであります。

（伍長は他の者等に小言を言ひ廻る、ムッソリーニはベッドに戻る、オルガンの音續く。）

第二幕

第一場　ミラノ町の或酒場

陰鬱な地下室の酒場。

老いた酒場の主人と、その娘ベアタとの二人。かすかに喚聲、唄聲。

主人　ベアタ、店の掃除はいゝ加減にしときな。どうせ今日あたりは又騒ぎが續いて、碌な事はありやしないから

な。

ベアタ　未だ騒ぎが續くの？　私、こはくて仕方がないわ。

主人　我慢した、我慢したな。時世時節で是非がない。こんな騒ぎが續くのも、みんな此の伊太利が貧乏なからだ。今の世の中は、何につけ、かにつけ、金が第一。情ない事だが、金さへあれば何うにでもなる世の中だが、わし達の國は貧乏で苦しみぬいてゐるのだ。人間誰にしても、心から底からの惡人なんてありやしない。あゝのかうのと議論をしたり爭つたりするのも、總ては金を自由にしようと言ふのがもとの爭ひだよ。情けないこつちや、情ない事つちや。

ベアタ　だつて、內の兄さんは伊太利をお金持ちにしようと云ふので戰爭に行つたんでせう。戰爭がすめば伊太利もお金持ちになつていゝわけぢやないの。もう內輪喧嘩なんか無くなるでせう？

主人　處がさうぢや無いのだ。お前には分るまいが、今日此頃の町の騒ぎはみんな其の戰爭のおかげだ。

ベアタ　どうして？　でも戰爭はもうすんで、伊太利は勝つた方の組みなんでせう？

主人　それはさうだ、戰爭は濟んだ、伊太利は勝つた方の組だ。然しな、お前達には分らないが、人間はみんな身勝手な者だから、いざとなると少しの事でも、得のいく様に喧嘩を始める。みんなさうだ、みんなさうだ。戰爭が濟んでも、伊太利に得をさせまいとするのが、英吉利や佛蘭西の腹だし、考へた通りの利益がなかつたからと言つて、ロシアの連中と調子を合せて、伊太利中を引つくり返してしまはうと言ふ社會主義の腹も、つまりは少しでも得がとりたいからだ。何にも持つてゐない人は、少しでも持つてる人を倒さうとする、少し持つてる人は、もつと持たうとしてあせる。そこで何かにつけて爭ひは絶えないものだ。情ないのが、此の人間の世の中だよ。昔々イエス・キリスト樣が御苦勞なすつて、有難い教へを說いて下すつたが、それからもう二千年近くになつても、人間の心の淺ましさはちつとも變りやしない。變つてるのは智惠が進んだのと、機械が多くなつただけの事。キリスト樣の御苦勞の甲斐もない事ぢや。伊太利には世界のカソリツクの大本山がゐらつしやるのだが、その方さへも今は何のお力もない。定めし御心配してゐらつしやる事だらう。（十字を切る）

ベアタ　お父さんは此頃急に心細い事許り言ふ様になつたのね。世間は世間、私達は私達でせう。正直に情け深くして行けば、きつとよくなるにきまつてるわ、もつと元氣を出して頂戴ね。第一、そら、今日は兄さんが軍隊から歸つて來る日でせう。內ん中が急に賑かになるわ、

私、今朝から嬉しくつて嬉しくつて仕様がないの。お父さんだつて嬉しいでせう。

主人　さあ、嬉しいには嬉しいが、何か不幸な事が起り相な氣がしてならない。

ベアタ　いやなお父さん、それが取越苦勞と言ふものよ。兄さんが居ない間、あんまり一人で心配したからよ。さ、お父さん、一杯飲んで、元氣良くやつて頂戴。私も飲んでよ。伊太利萬歳、兄さん萬歳！

主人　兄さん萬歳か、ハ、、、。

（二人飲む。勞働者三人議論しながら入る。）

甲　箆棒め、そんな事を他の奴の居る處で言つて見ろ、叩つ殺されるぞ。俺達はみんな結束して資本家と戰つてる最中ぢやないか。俺達は敵を倒すか倒されるかの境目にゐるんだ。戰爭によつて暴利をえた資本家、さうさせた政府、その道具に使はれた軍人、こいつ等を正面の敵として戰つてる俺達に、貴様の云ふやうな温和な道德やへつたくれがあつてたまるものか。俺達は死物狂ひなんだ。勝てばいゝのだ。

乙　こいつの言ふ通りだ、まあ一杯飲んで元氣をつけろ。おい、姉さん、強い奴を三つ。

甲　（ベアタに）相變らず別嬪だな、お前は。ハ、、、。

乙　そんなにこはがらずに、しつかりつげよ。俺達は何もおめつちに亂暴はしやしねえからな、お前達は可愛がつてやるよ。（手を取る）

ベアタ　あれ！（逃げる）

甲乙ハ、、。さ、飲まう。おい、一緒に飲め。

（三人飲む。）

（かすかに喚聲。唄聲。銃の音。）

甲　はゝあ、やつてやがる。こけおどしの鐵砲をうつちや喜んでやがる罪のない奴さ。それも無理やない、みんな大分退屈して來たからな。

丙　俺はな、決してお前等と行動を共にしないと言ふのぢやないぜ。然し、俺はお前等と違つて、女房子があるんだ。此のミラノの町を俺達社會黨員で左右して、金屬工業勞働組合の一手で、工場を占領してから二週間にもなる。それでも俺達にや一向いゝ芽は出相にないぢやないか。

乙　二週間位でへこたれて何うする。工場は俺達が占領してゐる、俺達が運轉して行くのだ。

丙　然し、資本家達も結束して、化學工場の生產を低め、外國からの原料を止めてるぢやないか。いかに我々の幹部達が頭をひねつたつて、あの手合は工場經營には素人だ。現に俺達の賃金さへ碌々拂つて呉れないぢやないか。俺は前の方がまだしもよかつたと言ふのだ。

甲　默れ。それがすでに裏切りの第一歩だ。今は受難の時だぞ。二週間や三週間賃金が減る位が何だ。

丙　俺には一番の苦痛だ。

乙　誰にしたつて苦痛だ。然し、來るべき樂園の前には地獄を通過しなけりやならん。

丙　さう言ふ事を俺達は戰爭中に政府から約束された。いや、誰しも伊太利は戰爭によつて樂園を造り上げるものの樣に考へさせられた。それだから社會主義者も幾分鉾ををさめて樣子を見てゐたのだ。それがヴエルサイユ條約の結果、まるで逆轉して、我が國が非常な不利に陷入るとなると、我々の不平は一時に勃發して、遂に工場占領まで斷行したんだ。然し、俺の恐れるのは、此の我々の過激な運動の結果だ。我々は又新たな樂園を目ざして行動してゐるが、その目ざす樂園が永久に來ないで、丁度戰爭によつて樂園をえられると望んだと全く同樣の失望狀態に陷入りはしないかと言ふ事を恐れてゐるのだ。俺は君等を裏切らうとは思つてゐない。たゞ我々を率ゐる幹部の手腕を疑ひ、此の運動の結果を疑ふのだ。我々の幹部は言論の雄であつても、實行の手腕家ぢやない。我々の運動も、畢竟は彼等の野心を滿足させるために過ぎないのだ。俺は實生活を第一にしたい、議論は何うでもいゝ。

甲　當り前だ。俺達は生活を第一にして議論するのだ。生活のために戰つてゐるのだ。

丙　生活に餘裕のある者に爭ひはない、醜い罪惡は行はれても。

乙　あらゆる人々を餘裕ある生活者たらしめんが爲めに我我は爭つてゐるのだ。

丙　それは議論だ、事實に於て爲し得ない事だ。誰かゞ勝つ、誰かゞ從ふ。誰かゞ富む、誰かゞ困しむ。世界はいつ迄戰つても同じ爭ひを續けて行く。

甲　貴樣は俺く迄俺達の運動を否定して、舊制度を讃美しようと言ふのか？

乙　こいつは近頃はやりのムツソリーニのフアツシズムにかぶれてやがるんだ。丁度あいつが社會主義を裏切つたと同樣に、こいつも俺達を裏切つて愛國かぶれをし始めたんだ。

甲　さうか、貴樣はさうなのか？

（爭ひの中に、マントに身を覆つた一人の男が、す早くスタンドの方へ行く。ベアタは早く見つける。）

ベアタ　おゝ、兄さん、兄さん、よくお歸り。お父さん、兄さんが歸つて來てよ、兄さんが軍隊から。

主人　おゝ、ヴイヴアアーノ、歸つて來た、たうとう歸つて來た。

（三人喜ぶ。勞働者三人は爭ひを止めて見やる。）

ヴイヴア　やつと歸つて來ましたよ。何だか馬鹿に長い間留守にした樣な氣がします。二人とも達者で結構だな。

ベアタ　兄さん、私今日はよつぽど店をしめてもお迎ひに行きたかつたのよ。けれ共、お父さんが、近頃は街が物騷だから、年寄や子供がウロ／＼出掛けて行くのはやめろつて、出して下さらなかつたのよ。

主人　又恨みを言ひ出したな、ハヽヽ。

ヴイヴア　そりやお父さんの仰しやる通りだ。軍隊にゐて。噂は聞いてゐましたが、こんなだとは思ひませんでした。全く無秩序ですね。

甲　生意氣を言ふな、生意氣を。

ヴイヴア　君は誰ですか？

甲　誰でもいゝ。俺は貴樣が軍人であつた事を憎むのだ。

ヴイヴア　何故ですか？

ベアタ　兄さん、兄さん。

主人　もし／＼、お客樣、これは私の一人息子で御座います。どうかお氣に觸つた事が御座いましたら、許してやつて下さいまし、はい。

ヴイヴア　お父さん、何も詫る事はないぢやありませんか。私は國家のために、又、エムマヌエル陛下のために、忠實に一國民としての義務を盡して來た男子です。我々軍人を見て罵る、あの辻々に群がつてゐる無秩序な連中、あの手合こそ其の非を詫びなければならない。政府が國家のために……。

乙　默れ。政府は我々の正面の敵だ。今の伊太利國家は我我にとつては牢獄た。それを破壞する目的のために立つてゐる我が黨にとつては、貴樣等は八つ裂きにしても飽き足らぬ蟲だ、害蟲だ。

ヴイヴア　無茶な事を言ふな。命を的に外敵と戰つて來た我々を害蟲とは何だ。

甲　貴樣等が戰つたゝめに我々はどう云ふ利益をえた。貴樣等は戰時成金の資本家連の犬だ。

ヴイヴア　なに！

乙　無氣力な、國を外國に賣らうとする政府の傀儡だ。安かゝしめ、この劒が何だ。

甲　この勳章は何だ。

ヴイヴア　うぬ！　無頼漢！

ベアタ　兄さん！

主人　倅や、ヴイヴアアーノや、相手が惡い、相手が惡い。

丙　おい、君等、此の男に何の罪もありやしないぢやないか。殺生な事はするなよ。

甲　貴樣は出て行け。貴樣とは後で議論する。

乙　出て行け。フアツシズムにかぶれてるなら、行つて、

ムッソリーニの靴のかゝとでもなめろ。出て行け。
（甲乙は丙を突き出し、戸を内から閉める。）

甲　やい、若僧、貴樣は今俺達を無賴漢とぬかしたな。來い、此の野郎。

乙　伊太利つ子は氣が早いぞ。どうだ此の手は！
（打つ。）

ヴイヴア　畜生！
（支へる父娘を振拂つて向ふ。激しい格鬪。とゞヴイヴアアーノは倒される。此の時入口の戸があいて、黑シヤツ黨の一人が現れ、ピストルを放つて甲を倒す。乙が驚く暇に、他の黑シヤツ黨員二人飛んではいつて乙の兩手を取る。丙戸口に立つ。）

黑二　やつたな。

黑一　やつた。あの男から聞いたが、大分手ごは相な奴だから、思ひ切つてやつた。

黑三　こいつはどうする？

黑一　例の療法をやつゝけろ。

黑二　よし來た。
（二人は乙にマンガネンロをはませ、瓶からの藥を飮ませる。喚聲。銃聲。）

黑一　外でもやつてるな。

丙　（戸口で外を見て）たうとう負けた。

主人　外では何が始まつてるのです？

黑一　ムッソリーニ殿の指揮の下に、俺達は今あの金屬工場の占領を打ち破つて來たのだ。俺達たつた五十餘名の同志で、政府がやり得なかつた事をやつて見せたのだ。
（丙の肩を叩いて）どうだい、俺達に仲間入りするか？

丙　する。

黑一　よし、握手だ。

ヴイヴア　（二、三に）君達は此の男に何をするのだ？
（二、三、顏を見合せて笑ふ。）

黑一　（ヴイヴアアーノに）見てゐろ、面白いから。
（二、三は乙の手を離す。乙はやゝ暫く苦しんだが、忽ち叫ぶ。）

乙　たまらん、腹が鳴る。おい、便所は何處だ、便所は、便所は？

黑一二三　ハ、、、。

主人　便所はこちらです。
（主人案内する。それを押しのける樣にして、乙、向ふへ去る。）

丙　何うしたんだ、あの男を？

黑二　ひまし油を飮ませたのだよ、我黨新案の懲罰法よ。

丙とヴイヴアとベアタ　ひまし油！

黑二　奴さん、此處暫くは便所から出られまい。強烈な下

劑をいやと言ふ程飲ませたのだからな。然し命に別條ない丈儲け物よ。

黑一　おい、こいつを置きつぱなしは此の店が迷惑だらう。外へ放り出さう、手をかせ。

黑二　よし來た。

（一と二、それに内も手傳つて、甲を戸外へ運び去る。）

黑三　孃さん、若いの、もう心配するなよ。俺達は伊太利に下劑をかけてやるんだ。ノーセンプレ、プロンチ「仕度は出來たぞ、さあ來い、何時でも」それが俺達フアッシオ黨の意氣込みだ。道をさへぎる奴は誰でも倒す、手輕い奴はあのひまし油だ。（思出して笑ふ）ハヽヽ、可笑かつたぜ、こなひだは裏切者が一人出たが、そいつは麥粉の袋へ叩つ込んだよ、一杯馬の糞を入れてね。ハヽヽ、本當の糞詰りよ、ハヽヽ。

主人（戻つて）何うしたのだらう、今の人は大變苦しさうに呻つてる、便所の中で。

黑三（いよ〳〵笑つて）ハヽヽ、こいつはいゝ、こいつは又獲つたれと來てけつかる。（ベアタに馬鹿叮嚀に辭儀して）いや、失禮、貴婦人の前で相濟みません、御免下さい。

（黑の二戻る。）

黑二　おい、早く來い、ミラノの市廳舍をダヌンチオが占領したとよ。

黑三　ダヌンチオが？　痛快々々。あの人は愛國的の世界詩人だ。

黑二　それで、ムッソリーニ殿が單身會見に行かれるさうだ。黨員は全部工場内に集つて報知を待てと言ふ命令だ。來い。

黑三　よし、行く。（ヴイヴアアーノに）君も今にやつて來い、待つてるぞ。

黑二（ヴイヴアアーノの肩を叩いて）きつと來いよ、我我は一つの東だ、フアッシオだ。

黑三　アノオイ、我々がやつて見せる、伊太利の復活を！

（二人はフアッシスト流の挨拶をして、す早く去る。）

主人（ヴイヴアアーノを左から抱へて）よかつたなあ！

ベアタ（左から縋つて）兄さん、嬉しいわ！

（ヴイヴアアーノは無言で二人を左右にかゝへる。やがて三人とも靜かに膝まづき、祈る。教會の鐘の音。）

（暗　轉）

第二場　ミラノ市廳前

ミラノ市廳前を暗示する舞臺面。（特に必要なのは、二階のバルコニーである。）

伊太利國歌の吹奏の中に舞臺明るくなる。

中央にダヌンチオ、その左右に五名づゝの何れも武装した士官。いづれも後ろ向きに立ち、バルコニーの方に向つて敬禮してゐる。バルコニーには、一人の兵の手によつて、伊太利三色國旗が上げられつゝある。國歌終ると、ダヌンチオは、つか／＼と、バルコニーの方へ進む。下手から同志の連中大勢出て整列する。）

ダヌ（バルコニーに現はれてやゝ誇張した演説をする）諸君、我が最も親愛なる、國を憂へ、義に勇み、若き血潮に燃えたつ戰士諸君よ。指かぞふれば八年の昔、我が伊太利は前古未曾有の大戰に參加して、爾來星霜を經る事四ケ年間、遂に今より四年前、千九百十八年十一月の休戰條約に至る迄、惡戰苦鬪、しば／＼退敗の憂き目をさへ忍びつゝ、同じ年の夏、我が軍がオーストリヤに進出するに及んで、一瀉千里、同盟側は聯合側に屈服し終つたのである。此の恐ろべくも悲しむべき大戰の掉尾の一大打擊、閉幕のゴングを鳴らしたものは、實に我が伊太利國である、おゝ榮えある我が麗はしき南歐の戰勝國！ 我等は如何に斯の狂暴なる同盟側を膺懲した事ぞ。窮餘の極とは言へ、潜航艇によつての亂暴狼藉、當時中立國たりし米國のルシタニヤ號を擊沈するの狂態を演じ出したのみならず、我が國無辜の民草に謂はれもなき爆彈を投下して、これを倒したる如き數々の罪惡は、慈愛廣量海に等しき神も亦誓つて許し給はざるものである。思へ、さんぬる十八年七月、墺國の飛行機は翼を揃へてヴェニスを襲ひ、數百の爆彈を投下して、人を殺す事數十、家を倒す事數百に及んだ。誰か復讐の念に燃えざるべき、何人か行つて彼等を寸斷せんと願はざるべき！不肖ダヌンチオ、當時ヴェニスに在つて、セレニッシナ飛行隊長として國を守る。敵の悪虐なる行動を聞いて、憤滿耐ふる能はざるものあつたが故に、卽、陸機數十、翼をつらね、プロペラーを轟ろかせて、ウヰーンの上空目がけて逆襲した。あゝ實にその時は千九百十八年の眞夏九日、しかも堂々金色の光りを雙翼に浴びる晝も眞盛りの頃、雲寂寞として大海の如く、ゆらめき昇る水蒸氣は天津日に捧ぐる香かとも見え、鏡なす白川は蜘蛛手に流れる野、又山、追手の風に勢ひを得て、我等は遠く邪惡の都へまつしぐらに突き進んだ。我等の飛行機數十臺はヴヰーンの空を眞黒に覆うた。おゝ、我れにしても惡鬼の心ありしならば、數千の爆彈を投下して、一擧にかの都を塵土と化さんも意の儘であつたのである。しかも、我等はそれをしなかつた。否、我等が敵の都に投下したものは、愛すべき我等の國旗である、此處に見る、此の綠と白と赤との三色に色採られた、世にもなつかしい此の國旗である。各機に積込んだ小旗を何萬となく、ウヰ

ーンの町と言ふ町、小路と言ふ小路、屋根と言はず棟と言はず、投げ下ろし投げ下ろし、我等に力あり乍ら無益の殺生を避くる眞意を知らせ、敵の心膽を寒からしめた事である。此處に掲げた此の國旗、よく見給へ、點々として鮮血にまみれてゐるを！　これこそ其の當時敵砲の爲に射落されて、無慘の最期を遂げた我等のセレニッシナ隊員の空しき屍を包み歸つた其の尊い國旗である。不肖ダヌンチオ、何が故に此の鮮血にまみれた國旗を此のミラノ市廳に掲げるか、諸君に今更説明すべき要はない。たゞ我等愛國の志士が、眞に粉骨碎身、涙と汗と血とを以てあがなひ歸つた戰勝の榮譽は、あはれ、國内不良の徒の爲に、散々に蹂躙せられ、かの恐るべきボルシェヴイストによつて左右される社會黨員は、我等軍人を侮蔑し、自負心を傷付け、甚しきは、手足を失つた廢兵をさへも慘忍に罵り恥かしめる。しかも政府は之等社會黨を極度に恐れ、事勿れ主義をとつて、彼等の跋扈に任せ、ストライキは繰返され、騷擾は到る所に行はれ、土地は農業勞働者に占領せられ、工場は賃銀勞働者によつて占領せらるゝに至つた。ダヌンチオ不肖なりと雖も、彼等勞働者の窮狀に目盲ひてゐる者ではない。然し乍ら、彼等が我等軍人を當面の敵とし、資本家を敵とし、國家を敵とするに至つては、斷じて默し能はざるものである。月桂樹の薫立ち罩めるロンバルヂヤに詩想を練りつゝあつた此のダヌンチオ、七十一歳の體軀を引つさげ、奮然此のミラノに馳けつけたは、伊太利第一の商工都市たる此のミラノが、二年に亙つて赤化され、あらゆる暴虐が行はれ乍ら、しかも何人も未だこれを鎭壓し能はざる不甲斐なさを憤つたが爲に外ならぬ。おゝ、我が愛すべき志士諸君、諸君は國家の爲めに立たねばならぬ。此の國旗に塗られた鮮血の如く、最後の血潮の一滴迄も我が愛すべき祖國の爲めに捧げねばならぬ。立て、若人よ、國家の爲め、祖國の爲めに！

（群集の中に聲あり、「アノオイ」と叫び、直ぐムッソリーニ現れる。ギャバルド從ふ。）

ム　愛國心の權化、稀代の詩聖ダヌンチオ、謹んで膝まづいて、我が衷心よりの敬意を表す。

ダヌ　足下は誰だ？

ム　ファッショ・デイ・バッタンテイの一員ムッソリーニ、久し振りの御對面です。

ダヌ　おゝ、我等の勇士ムッソリーニ！　諸君、此處にこそ、此處にこそ將來の伊太利を統ぶべき英傑がある。ムッソリーニ、僕は滿腔の誠意をこめて、君の健康を祈る君の若さの上に榮光の華咲かん事を心から祈る。若人よ、君の爲すべき事は多く、且重い。此の三色旗をもつて世

界の空を覆ふと否とは、一重に君の爲す所如何にかゝつてゐる。勵めよ、力めよ。

ム　有難う、我等の畏敬すべき先達。僕等は僕等の使命をよく知つてゐます。僕等は先づ何よりも愛國の精神を第一に高唱します。從つて、祖國の發展、及び世界の平和の爲めに戰死した伊太利の子弟、癈兵、傷者等に敬意と感謝とを表し、其等の生活の安定、經濟的獨立に極力運動すると同時に、曾て參戰に反對し、又現在我等の運動に反對する者には全力を擧げて戰ひます。

（群集の中に聲がある。）

ニコラ　ムツソリーニ萬歲！

ム　萬歲の祝辭は未だ當らぬ。

（ニコラ進み出る。）

ニコラ　ムツソリーニ、此の祝ひを受けて見ろ！

（ニコラ短刀でムツソリーニにつきかゝる。後者危くこれを外す。一同騷然、ニコラ押へられる。）

ム　貴樣はニコラだな。

ニコラ　でも忘れずに居たな。節を變じ、友を賣り、己一個の野望を逞ましくして、時代に逆行する暴君とは貴樣の事だ！

（ムツソリーニ、あちらへ連れて行けと指圖する。）

ニコラ　ムツソリーニ、俺は再度貴樣に負けた。が、俺達の精神は死なぬぞ。一時の勝利に誇つても、今に見ろ、貴樣の地位はでんぐり返る。今に貴樣はあらゆる嘲笑と罵倒の的となり、ボンチ繪に書かれて町にさらされるぞ！

ム　ハヽヽ、馬鹿者め。宗教家ならいざ知らず、あらゆる古今の英傑は悉くポンチ化されてゐる。ネロを見よ、シーザーを見よ、近くは佛のナポレオンを見よ。英傑は凡夫の嫉妬の的となる。及び難きを知つて、せめてもポンチ化に自瀆の滿足を味ふあはれむべき燕雀の群れ。貴樣もその一人たるをまぬがれないのだ。俺は俺の是と信ずる處に全力を盡して勝つて見せる。俺の道を遮る者は倒す。どうだ、貴樣は敢て遮ると言ふか？

ニコラ　無論だ、無反省の野獸め！

（飛び掛らうとする。大勢が押へる。）

ム　連れて行け。

（大勢はニコラを連れて行く。見てゐたギオバルザ、兩手を上げて叫ぶ。）

ギオ　痛快々々、昔俺の頰つぺたをなぐりやがつたニコラめ、たうとうやられやがるぞ、ハヽヽ。

（ピストルの音して、ギオバルザ倒れる。ムツソリーニ振返り樣、一人を見付け、ピストルで倒す。大勢引返して來てその男を引起す、ムツソリーニ近寄つて見る。）

ム　むゝ、アメンドラと言ふ男だ。此の男も連れて行け。

(ダヌンチオに) 大分手荒い療治をしなければなりません。

ダヌ　やむを得ない、これも國家の爲めだ。そこで、すでに君が指揮をする以上、僕は故郷に歸る積りだが、君の今後の方針は?

ム　僕の目ざす處はローマです、首府ローマへの進軍です。同志を募り、やがて機至るをまつてローマへ乘込み、そこで政府とヂカ談判を試みて、伊太利回生の大手術を行ふのが僕の目下の最大の目的です。

ダヌ　ローマへの進軍、あゝ、面白い、聞くさへも心勇む。君にすでに其の意氣あらば僕亦何をか言はう。

ム　有難う。(兩人握手)

ダヌ　(大勢に) 友よ、去らう。

(大勢、ダヌンチオをかつぐ。)

ダヌ　(ムツソリーニに) 成功を祈る、若き愛國者!

ム　健康を祈る、情熱の詩聖!

ダヌ　アデユウ、アデユウ。

(一同去る。)

ム　ローマへ進軍……。おゝ、近づきつゝあるローマよ!

(序幕第一場と略ぼ似た姿勢で前方を見つめる。)

――幕――

第三幕

第一場　ヒリハツツィの谷近いベルチヤ

林の中に屯する數千の人々の影。炬火。舞臺にはムツソリーニ一人立つ。ファツシスタの唄「ジョビネツツア」聞える。

ム　勝負は明日に迫つた。すべては明日が解決してくれる。天、我れを助けるか、天、我れを碎き倒すか。眞に乾坤一擲! ハヽヽ。思へば己の一生も面白いぞ。社會黨を鼓吹した宿屋の貧弱な息子として生れ、當年正に三十八歲、決鬪に危地を脫したこと實に九回に及んでゐる。共產黨を脫して以來、あの煽動詩人ダヌンチオの高唱した古ローマ復古主義、ラテイン民族主義の旗印を眞向にかざして、光榮ある新ローマ帝國の夢へと人々を導いて來た。軍人、王黨、大學生、資本家、絕望の反動勞働者等を糾合して、大ファツシオ黨を組織した。結黨以來僅に四五年の間に、あらゆる社會黨系の都市の役所、機關新聞社、勞働組合事務所、有力者の住宅は當るに任せてこれを破つた。ハヽヽ。さて、明日だ。今月十九日、ナポリにファツショ大會を開いて、ローマ進出決行を演說してから一週間、明日はいよ〳〵都を乘取る運命の日だ。ローマ

を目前におく此のヒルハツツイの谷近いベルチヤ迄乘り込んだ今、流石に俺も胸の躍るのを禁じ得ない。全國より寄り來つたフアシスタ三萬五千の同勢をかつて、政府を倒すか否かは明日が定める。鐵腕を揮して進め、ムツソリーニ！　敵にローマをモスコーとする智者があるとも、味方にカスカ、ブルータス、ありとも、此のムツソリーニは倒れないのだ。力、力、力、俺は力の權化だ！（間）ナニ、野心？　フヽヽ、野心でもいゝ、野心の權化と言はゞ言へ、俺は國の爲に盡してゐるのだ！

（一人の男急いで出る。）

一　報告。

ム　何だ？

一　總理大臣フアクタは辭職しました。

ム　知つてゐる。

一　他の內閣諸大臣も連袂辭職しました。

ム　そんな事はとつくに知つてゐる。辭職後の樣子は何うだ？

一　後繼內閣の首相として、ヂオリチ、サランドラ、オルランドーの三人の名が上つてゐると言ふ事であります。

ム　馬鹿！　そんな老いぼれ共を首相にしようとしてゐればこそ、俺は此の三萬五千の黨員を率ゐて、一擧にローマへ乘込まうとしてゐるのだ。サランドラ如き者の下に閣員となつてたまるものか。そんな事は何うでもよい、其の後のローマの樣子を言へ。

一　はツ、其の後政府では、我々に對抗の決心を定めて、全國に亙つて戒嚴令を布かうとしてゐると聞きました。

ム　フヽン、愈々戒嚴令と來るか。然しそれは陛下の御允許がなければ發せられぬ命令だ。陛下の御意志一つだが……。

一　政府は我々を革命黨と認め、すでに內々其の手筈を整へてゐます。北はアルプスの山麓から、南はシリア島の端迄及ぼさうとし、現にローマ市中は目下鼎の湧くやうな大騷ぎであります。ボルタ・ド・ポヽロ、ポルタ・サラリアの辻々は、機關銃、速射砲の一隊で守られる筈であります。

ム　よし、分つた、次の報告を得て來い。

一　は。

（一去る、入代つてバルボーが三四の黨員と共に出る。）

バルボ　閣下、ピアンキーが同志二十一名と共に裏切らうとしたのを發見したので、監禁して置きました。何う處分しませうか？

ム　裏切りの理由は？

バルボ　あまりに專橫な獨裁主義を呪ふと言ふのです。

ム　馬鹿者め。政府乘取りの成就する迄監禁して置け。

バルボ　中々頑强に反抗します。
ム　抵抗する者は射殺しろ。
バルボ　大分の犧牲ですな。
ム　大事を爲す前には鐵の如き心が無ければならぬ。犧牲はやむを得ない。
（バルボー、部下に命ずる。部[illegible]る。[illegible]人交へて又一人出る。）
二　閣下、バリイの同志が約百名、只今參加しました。
ム　よし、後で代表者に逢ふと言つておけ。
二　は。
（二去る。）
ム　二十人を失ひ、百人をえる。（バルボーに）バルボー君、戒嚴令の報を何う思ふ?
バルボ　ファクタも餘程狼狽したと見えますな。すでに陛下に内閣辭職を願ひ出て置き乍ら、それを取消すのみか、戒嚴令施行の御裁可を願ひ出る等とは、沙汰の限りです。
ム　ハヽヽ。
バルボ　我等のエムマヌエル陛下の事です、萬々御裁可の議はなからうと思ひますが、これが御裁可になつたら面白いですな。
ム　うむ、面白い。
バルボ　我々に對して、實力もない武裝で威嚇を試みるのは滑稽千萬ですが、我々を目して革命黨扱ひにし、陛下に弓引く者の如くに言ひふらすのは言語道斷です。
ム　さうでもしなけりや持ちこたへられんからさ。奴等がさう言ふ事を宣傳する事が見えすいてゐればこそ、俺は十九日の大會席上で、特に國王、國家に對しての忠誠を宣誓したのだ。物の成功、不成功は機を見るに敏なると否とにかゝる。一歩を讓れば十歩を退くのだ、一歩を踏込めば十歩を進みうる。いかに聰明な奴でも躊躇逡巡してる奴は役にや立たんよ。
（黨員又一人出る。）
三　閣下、政府は愈々軍隊に出動準備の命令を與へたさうであります。
ム　よし。
（黨員去る。）
ム　バルボー君、例の諸君を呼んで與れ給へ、最後の打合せをしよう。
バルボ　承知しました。
（二人は語り乍ら上手へ去る。）
（あちらに「ジョビネッツァ」の合唱。）
（二人、又、三人と黨員舞臺に集る。）
一　戒嚴令が出るとなれば、可成り手ごたへがあるな。
二　然し、同じ國民同志の戰ひはあんまり褒めたものぢや

ない。

三　相手が分らず屋だ、仕方がない。

四　軍隊は我々に好意を持つてゐるわけだらう。

五　さうよ。第一我々の仲間にや軍人のお古や、除隊兵が澤山交つてゐるのだからな。

六　おや何う言ふ事になるのだ、妥協か？

七　うんにや、ムッソリーニ閣下が妥協をするものか。サランドラを總理大臣にして、その內閣の一員に招かうとしたつて、一言の下にはねつけた閣下だ。

八　隨分痛快な要求をしたもんだな、誰の下に立つのも否、內閣全部を俺の手に明け渡せと言ふのだからた。

九　武裝の部下を率ゐて、堂々ローマへ出動致すべく候、なんかは嬉しいぞ。

十　あの雄子猫そつくりのファクタ大臣、何うにか何うにかで夜を明かすつもりだらう。

一同　ハヽヽ。

一　おい、あんまり油斷して、こつちが何うにかされたらつまらんぞ。彈丸の用意は怠るな。

二　その點心配無用。ノーセンブレ、プロンチ！

一同　ノーセンブレ、プロンチ！

（ムッソリーニ、バルボー、其他三人出る。）

バル　諸君、氣を付け。明日出動の準備について、各隊夫夫に訓示がある。諸君は急いで各々の部署について隊長の命を待て。

（黨員は急ぎ各方面へ散り去る。）

（一人が駈けて入る。）

甲　報告。

ム　何だ？

甲　エムマヌエル陛下には、戒嚴令布告の願ひを却下されました。（去る）

（五人顏を見合せる。又一人駈入る。）

乙　報告。

バル　何だ。

乙　ファクタ內閣總辭職につき、陛下より、後任內閣の組織をムッソリーニ閣下に御命令あるべき內示を渡されました。（去る）

ム　本部の室へ行かう。

（一同行きかける。第三の者入る。）

丙　報告、閣下への使者が只今ローマを出發しました。

（去る。）

ム　君等は一同に明日の出動準備についての訓示を與へて呉れ給へ、勿論依然武裝してだ。（三人去る。バルボーに）君には使者を出迎へる手傳ひをして貰はう。

バル　（ムッソリーニと握手し）ムッソリーニ閣下、天下

は取れた。

ム　有難う。が、本當の煉獄はこれからだ。

（暗　轉）

第二場　マテオチ邸内

マテオチ夫人が窓の處に縫物をしてゐる。乳母ビアンカが搖籃の中の兒をあやし乍ら歌を唄ふ。

ビアン「彌生ついたち、はつ燕
海のあなたの靜けき國の
便もてきぬ、うれしき文を
春のはつ花、にほひをとむる
あゝ、よろこびのつばくらめ
黑と白との染分縞は
春の心の舞姿」（上田博士譯歌）
さあ〳〵、ねんねこ、ねんねこよ。
「海のあなたの遙けき國へ
いつも夢路の波枕
波の枕のなくなくぞ
こがれ、あこがれ、わたるかな
海のあなたの遙けき國へ」（同前）

ビアン　奧樣、たうとうおやすみになりましたわ。坊ちやんの寢顏は本當にお可愛らしくつてゐらつしやいますわね。

（夫人は縫物をやめ、ぢつと兒の方へ目をやつてゐたが、急に近寄り、のぞいて見て、泣伏す。）

ビアン　奧樣々々、又、お泣きなさいます、困りますわね。しつかりなさいませ、奧樣。

夫人　（顏を上げ）もういゝ〳〵、大丈夫、もう泣きやしないよ。でもね、ビアンカ、お前は本當に呑氣で羨ましい、歌を唄つて兒共をあやす事が出來るのだからね。

ビアン　でも奧樣、私まで陰氣にしてゐたら、なほと奧樣のお心が沈みましよ。私、これでも一生懸命なので御座いますわ。

夫人　分つてます、分つてます。お前の親切はよく分つてます。たゞ私は此の子の顏を見る度に、旦那樣は何うしてゐらつしやるのかと、つひそればかり思ひ浮べて、胸が一ぱいになつて、泣かずにはゐられない。

ビア　旦那樣は今に御無事で御歸りになりますわ。さう氣をお落しになつては駄目で御座いますよ。

夫人　でもビアンカ、行衞がお分りにならなくなつてから二タ月にもなるぢやないの。私はきつとムッソリーニの手下がどうにかしたに違ひないと思つてます。そんな感

じがしてならない。

ピア　萬一そんな事でしたら、ムツソリーニの天下もお仕舞で御座いますわ。いゝえ、私は旦那様はそつと外國へ姿をお隱しになつたのだと思ひます。ほとぼりがさめるか、ムツソリーニが總理大臣でなくなる時まで。

夫人　お前は心にも無い事を言つて、私を慰めてくれようとするのね。けれども駄目だよ。萬一外國へお逃げになつたとしたら、それこそもうとうにおたよりがある筈だし、よしんば通信を見合せてゐらつしやるとしても、假りにも社會黨で一二の人物と目せられてゐらしつたマテオチです。風のたよりにも何か少しの噂は傳はつて來さうなもの。それが、あの御演説のあつたその日から行衞不明と言ふのだもの。私はもうあきらめてゐます。

ピア　あの時の御演説は、私共が伺つてさへも痛快な御演説で御座いますね。

夫人　さうとも。大體ムツソリーニと言ふ男は、卑怯で圖圖しくて野蠻た男です。その時の調子、その時の風向き次第で、どうにでも説を變へ、口うらをかへす事が上手なのは卑怯な證據。又、政府が辭職したり軍隊の手薄な時に、三萬も四萬もの暴力團を連れてローマへ乘込むと威嚇して、まるで腕づくで內閣を作り上げたやり方の圖圖しさ、あれが此の文明の世の中のやり方だらうか。あいつが總理大臣になつてからのやり方の一つ〳〵、野蠻と亂暴のとめ度がない。氣違ひ沙汰とも言へるぢやないか。出版は禁止續き、同盟罷業は絕對にやらさない。

ピア　工場では今では十時間十二時間の勞働なさうで御座いますね。

夫人　自分の體力が強いからと言つて、人を毛物か機械のやうに扱はうとしてゐるのだ。總理大臣が一人で、外務大臣、內務大臣、陸軍大臣、海軍大臣、鐵道大臣、大藏大臣を兼ねるなんて、馬鹿げた事が今のどの世界にあるだらう。忠君愛國の權化のやうな顏をして、あいつは野心の塊りだ、惡魔の生れ代りだ。何でも彼でも、自分の我を押し通さうとする野蠻人だ。昔からの友人さへ殺さうとして外國へ逃がしてしまつた畜生たもの、私の夫を殺す位は犬の子を殺す程にも思つちやゐまい。

ピア　でも、旦那様の御味方も多い事で御座います、萬一の事がありましても、味方の人達がだまつてはゐらつしやりますまい。

夫人　駄目々々、人盛んな時には天に克つのだ。私は、私のマテオチに萬一の事があつたと確かになつたら、その時は、その時は……。

ピア　奥様！

夫人　いゝの〳〵。お前は、いつ〳〵までも此の子を大事

に育て上げておくれよ。
ビア　奥樣、あなたは何か大變な事でも考へてゐらつしやるのぢや御座いませんの？
夫人　（淋しく笑つて）大變な事？　ホヽヽ、わたし見たいな弱い女が、何を考へたつて始まりやしない。それが情けなくて泣きたくなる。
ビア　奥樣、萬々一の事が御座いましても、何うか奥樣、氣をしつかりと、輕はずみな事をして下さいますな。
夫人　有難うよ。お前は本當にいゝ人だね。私はね、マテオチが行衞不明となつてから、いゝえ、あの議會での、ムツソリーニやフアツショ黨を滅茶々々に攻撃なすつた大演說をなすつたと言ふ嬉しい報知を聞いたその時から、これはきつと何か起るに相違ないと、覺悟はしてゐたのよ。けれどもね、やはり私も女だ。もしや／＼と思ふと、たよりなさに淚が先きに立つて仕方がない。
ビア　本當にね！
夫人　しかし、いくら私が女でも、いざとなれば伊太利ツ子の氣性は持つてゐます。
ビア　それは勿論で御座います。けれども、何と言つても相手はムツソリーニで御座いますし、先程奥樣も仰しやいました通り、大勢の社會黨さへ、手も足も出せない位力づくで威張つてゐますフアツショ黨の天下の時で御座います。どうか、何事も運命とおあきらめなさいましね。
夫人　さうね、本當にさうね、運命にはかてないわね。（又淋しく笑つて）運命！　さう、ムツソリーニでも運命にはかてない時が來るだらう。
ビア　奥樣、さう申しては何で御座いますが、私は近頃つく／＼と負ける者貧乏の道理を悟りました。本當になさけないのは人間の世界で御座いますね。勝ちさへしたらよいので御座います。負けたが最後、どんなえらい器量の方でも、恩をかけた人でも、正義にかつた方でも、みじめなもので御座いますわね。ムツソリーニの樣な奴でも、力づくで、運づくで、勝てば世界の英雄になりますし、旦那樣のやうな、味方の爲めを思ひ、心から底から自分の事を犧牲にしてまでお國のためにお働きの方でも、お負けになれば（淚聲で）殊におたつねに來る奴さへ御座いません。是が伊太利根性で御座いませうか、私は、私は……。
夫人　あれまあ、ビアンカ、今度はお前が泣く番なの、ホホヽ。
ビア　ホヽヽ、私もたうとう泣蟲になつて了ひました。御免下さい。旦那樣がお負けになつたと決まりも致しませんのにね。ホヽヽ。さ御一緒に、お好きなデスデモナの歌でも歌ひませう。

「あはれ娘はシカモアの蔭に
歌ふ柳、青やぎに」
合唱「胸にや手を當て、膝には頭
歌ふ柳、青やぎ
はたの小川も共音にないて
柳、柳、青やぎ
落す涙にや石さへなごむ」

（カミナーテ入る。）

ピア　あら、カミナーテ樣、隨分とお久し振りで御座います事。
カミ　マテオチ夫人、御無沙汰を致しました。
夫人　カミナーテ樣、何か主人の事でお聞及びの事でも御座いましたか？
カミ　はい。
夫人　あゝ、お顏を見るなり、さう言ふ樣な氣がしました。で、その便りと申しますのは？
ピア　早く仰つて下さいまし、カミナーテ樣。奥樣は旦那樣がお亡くなりになつたとばかり思ひ詰めてゐらつしやいますから。さ、早くカミナーテ樣。

（カミナーテ無言。）

夫人　あゝ、やつぱり私の思つた通り、主人はもう此の世にない人で御座いますね。
カミ　（泣いて）マテオチ夫人、殘、殘念です。
夫人とピアンカ　あゝ！
カミ　御主人の死骸はラ・カーテレラの墓地に埋葬されてゐましたのを、今日始めて發見致しました。
夫人　おゝ。
ピア　まあ、カーテレラの墓地に！
カミ　死後二ケ月を經た死體です。何者の仕業にもせよ、無殘と言はうか、殘忍と言はうか、もう誰に發見の見分けさへも容易でない迄にうみたゞれた死體を、むき出しのまゝ、あの墓地に……。（泣く）

（女二人は聲をのむ。街路にグリンド・オルガンの音聞える。）

カミ　議會で堂々と所信を述べるのは、代議士として國家に盡すべき正當の義務であり・權利です。よしんば國家に盡す其の方法や主義に於て相容れない點があるにもせよ、自分の思ふ通りにならぬからと言つて、反對說を述べた者を暗殺し、しかもその死體を二ケ月も隱蔽して、世論ごう／＼として湧き立つに及んで、墓地に潛葬するなどと言ふ非人道的なやり方は……。
夫人　では、やはりムッソリーニの指圖ですか？

カミ　いや、それは分りません。そんな證據をつかまれる彼奴ではありません。併し、これがファッショ黨員の誰かの仕業である事は明白過ぎる程明白です。こんな事で世人の耳を覆ひ、天下の目をあざむき得ると思ふのは、猿智慧と言はうか、愚の極と言はうか……。

夫人　私は兎に角、その死骸に逢ひに行きます。

ピア　まあ、奥樣！

カミ　奥さん、さう亢奮されてはいけません。

ピア　あなたゞつて亢奮してゞす、どうか奥樣も氣を落付けて下さい。

夫人　でも私は……。

カミ　御遺骸は既に柩にをさめて、こちらへ運ばせる樣に手筈を調へて來ました。あ、あれがさうでせう。

（夫人は戸口へ突進する。街頭のグリンド・オルガンの音段々賑はしく、高まる。）

（舞臺では沈痛な空氣の漂ふ中を、五六の者に護られて柩が擔ひ入れられる。）

カミ　そこへ置き給へ。

（柩は置かれる。婦人二人は近寄り、蓋を取つてこれを見る。夫人卒倒しかける。ピアンカとカミナーテ介抱する。）

夫人　復讐！　復讐！

ピア　奥樣、奥樣、お氣を確かにお持ち下さい。

夫人　此の疵、此の疵は何です、此の疵は？

ピア　ほんにまあ！

夫人　カミナーテ樣、主人は何う言ふ殺され方をしたのです、分つてゐますか、分つてゐますか？

カミ　粗やすりで胸部をつき刺されなすつたと言ふ判斷です。

（夫人再び卒倒しかける。皆々介抱する。柩の蓋は閉ざゝれ、附添つて來た者は靜に退去する。）

夫人　マテオチ、マテオチ、おゝ、あなたは、あなたは！　おゝ、神樣！

ピア　奥樣々々

夫人　復讐！

（夫人は物狂はしげに戸口へ向ふ、ピアンカとカミナーテは抱止める。）

カミ　奥さん、奥さん、落着いてらつしやい、奥さん。

ピア　奥樣、御尤もですけれども、まあ／＼氣を落着けて御相談をなさいまし。

夫人　私はマテオチの妻だ、伊太利に名を知られたマテオチの妻だ、こんな無殘な、こんな人でなしの殺され方を見て、默つてゐる事は出來ない。復讐だ、復讐だ！

ピア　御尤もです、御尤もです。けれども奥樣、まあさう

おせきなさらずと、兎も角もカミナーテ樣や皆樣とも御相談をなさいまし、奥樣。

カミ　ビアンカさんの言はれる通りです。自分の命令には邪が非でも從はせる絶對服從主義のムツソリーニです。生中の抗議や訴へは、謂はゞ油に火を注ぐ樣なもの、それこそ一家眷族に迄累を及ぼさんとも限りません。復讐するとしても、輕々しくは出來ません。まあ、落着いてゐらつしやい。

夫人（柩の前に泣き伏して）おゝ、神樣！

（傍の二人も默然として祈禱する。グリンド・オルガンの音が高い。）

第三場　カルソ山の集會

バルボー、ロツシー、ビアンチ、フアリナ、其他集つてゐる。

ロツシ　大丈夫、今日の大會の事は充分承知してゐるのだから、あの大將の事だ、間違ひなくやつて來るよ。

バル　併しロツシー、開會の時間はもう刻々に迫つてゐる、時間の正確さを違へると、規律嚴守を破る事になつて面倒だぞ。

ビアンチ　全くだ、今日の大會は、ムツソリーニ閣下が總理となられてから最初の全國フアツショ大會だから、いつもより一層手きぱきとやりたいな。

フアリ　さつきも問合はさせたが、一向汽車に乘られた樣子はないぜ。可笑しいな。昨夜の最終列車で來られると丁度いゝわけなのだが、何か事件が起つたのぢやないか。

ロツシ　俺は、大將が今朝五時にたつた一人で自動車で出かけた所までの報道は得てゐるのだ。相變らず大將らしい事さ。昨夜は私宅へ歸つてからも、祕書官の、それ、ジョワニな、あいつが氣にして、「閣下明日はカルソ山でのフアツショ大會當日で御座います、列車の御用意は如何致しませう。」と聞いたさうだ、すると先生、書類を片つぱしから整理し乍ら、「知つとる、俺は忙しいんだ、默つとれ。」と劍つくを喰らはしたさうだ。それで祕書官沈默さ。ところが、暫くするとヴアイオリンを彈き出したと言ふぜ。柄にもなく大將ヴアイオリンはお得意だからな。何でも寢たのは夜中の一時頃だつたさうだ。それに今朝は五時に起きて、パンと牛乳とで朝飯を濟ますと、直ぐ自動車を引つぱり出して、一人で飛出したと言ふ報道さ。相變らず奴さんの精力の強いには驚くぜ。到底今の人間並みぢやないな。

バル　自動車で停車場へ驅けつけたつて、もう汽車ぢや遲いぜ。

ビアン　全くだ、さうかと言つて、自動車で飛ばしても間に合やせんかな。

ファリ　どうも何か起つたのぢやないかいな。

ロツシ　ファリナ、まあ、さう心配するなつて事よ。むゝ、さうだ、ビアンチ、何か起つたと言へば、フイレンチの虐殺は、君は知つてゐるのか？

ビア　フヽヽ、あれは今迄の中でも可成り手きびしい鎮壓振りだつたな。

ロツシ　話して呉れ。

ビア　うむ、何れゆつくり話さう。

バル　僕も薄々聞いたが、閣下の彈壓振りは益々出でゝ益益猛烈になるな。

ロツシ　はあ、ぢやバルボー君もあの事件は聞いてゐるのか？

バル　いや、聞いてゐると言ふ程委しくは知らないが、何でも随分徹底的にやつゝけたさうだ、ロツシー君が知らんとは妙だね。

ロツシ　いや、一向知らなかつた。大將の鎮壓振りも絶對服從もいゝが、一切の報道、一切の通信がことごとく大將の手で發表を差止められるので、國民同志が國内の出來事を知らないばかりぢやない、同じ閣僚仲間で居乍ら、大將が何をやつてるのか知らずにゐるやうになるのは閉口だ、これだけだよ、俺が大將に抗議を申込みたいのは。

バル　愚圖々々言ふと、これ、ですよ。

ロツシ　そいつはお互ひにね、ハヽヽ。

一同　ハヽヽ。

（プロペラーの音遙に聞える。）

バル　や、飛行機が來るぞ。

ビア　可笑しいな、今日の大會には、祝賀飛行機参加の件はなかつたらう。

ファ　誰か有志が來たのかも知れませんな、こつちへ來ますね。

ロツシ　あ、分つた、諸君、ムツソリーニは飛行機で來たんだ。

一同　え、飛行機で？

ロツシ　うん、飛行機で。

ノア　まさか、そんな亂暴な事はなさりやしますまい。昔のムツソリニー閣下と今の閣下とは違ひますからね。伊太利のムツソリーニか、ムツソリーの伊太利かと言はれる重大責任のある我等の閣下です、そんな輕はずみな事をなさるわけがない。

ロツシ　君見たいに取越苦勞をする男も少いぞ。我等のムツソリーニなればこそ、それ位の事はしかねないのだ、見給へ、あの飛行機が降りる頃にきつとムツソリーニ到

着の花火が揚るから。

パル　ぢや、閣下が御到着あるとして、あつちへ行つて見ようぢやありませんか。

ビア　よからう、行つて見ませう。

（四人は上手へ去る。）

（ファショの黒シャツ服に身をやつしたマデオチ夫人が現れ、四邊の樣子を窺ふ。）

（花火が揚る、喚聲、夫人下手に身をひそめる。ファッショ黨員大勢、捨白で下手から上手へ通る。夫人もその群に交り、上手へ去る。）

（暫くしてムッソリーニを先に、大勢出る。次の長い白の間に、自然にムッソリーニは中央の高所に立ち、言葉も自ら演説口調に移る。）

ム　馬鹿を言へ、危險が何だ、冒險が何だ。第一、俺は腕に覺えがあつてやつた事だ。總理大臣がたつた一人で飛行機で飛んで來たと言つて驚く奴は、總理大臣はお馬車か自動車に召して、しづ／＼と現れ給ふものと思つてる腰拔け共だぞ。ファリナ、君はもつと腰つきをしつかりしとかにや駄目だぞ。俺はやらうと思つたら何でもやる。飛行機操縦の腕だつて、ダヌンチオ位にや負けやせんよ。ハヽヽ、諸君、俺の大嫌ひな言葉を教へてやらうか、大嫌ひな言葉だぞ、いゝか、そいつは米國製の「セーフチー、ファースト」と言ふ奴だ。「安全第一」と云ふ言葉だ。こいつを聞くと、俺は胸糞が悪くなる。現代人の、惰弱な、腐敗した、引つ込み根性の、猫つかぶり式を巧みにも現はした唾棄すべき言葉だ。何がセーフチー、ファーストだ。「人間須く危險に生きよ。」俺はかう高々と叫びたい、「人間須く危險に生きよ！」と。煉獄を通つて始めて天國へ行けるのだ。生きろ、そして動け。働け、戰へ、倒せ、こゝに人間の……少くとも男子の生きるに甲斐ある一生はある、文句を言ふな、働け。これでいゝのだ。理窟を言ふな、實行せよ。これでいゝのだ。俺は此の主義でやつて來た、これからもやつて行く、ノーセンプレ、プロンチ。「仕度が出來た、さあ、來い、何時でも。」此の覺悟はあらゆるファッショ黨員の常に忘るべからざる覺悟である。アノオイ「我々に任せろ、我々がやつて見せる。」これは俺が黨員の一人々々が必らず帶してゐねばならぬ意氣である。この覺悟、この意氣をもつて立つ、何者が來ても寸毫も動ずる所はない。現代の腐敗人、口に議論に、巧妙な遁辭を設けて、或は義務ある所に權利ありとし、責任ある所必らず報酬伴ふべしなどゝ言ふ、その言や尊く、その心根や、醜劣極る。「我等は義務あつて權利なし、但し己の義務を遂行する事を主張し得るのみ。」とは、俺がファッショ黨憲法の第二條に

明示するところである。力無きに報酬をのみ望み、腕無きに平等共産を求める彼等社會黨の主義の、如何に貧弱、無法なる事よ、我等は各人こと〴〵が不平等な事實に基いて、階級制度、資本主義、差別待遇を至當と認めるが故に、まづ絶對の權利を握る統一者の下に、一糸亂れざる結束をなして、祖國のために、我々の本分を盡し規律を守らんとするのである。安惰をむさぼらんとする者はむしろ死ね。國と共に榮えんためには水火をも辭するな、「人間須く危險に生きよ！」」

（群集立上つて一齊に叫ぶ「アノオイー」此時上手に現れたマテオチ夫人叫ぶ。）

夫人　國賊ムツソリーニ、自己主義の暴君ムツソリーニ、美事危險に生きるか！

（ピストルをうつ、ムツソリーニの帽子飛ぶ。）

（群集騷然。夫人又一發放つが、忽ち捕へられる。）

ロッシ　貴樣は何者だ？

（夫人の帽子取れて、長髮亂れる。）

一同　や、女だ、女だ！

フア　や、これはマテオチの夫人だ！

一同　マテオチ夫人！

バルボ　閣下、御怪我は御座いませんか？

ビアン　閣下、大丈夫ですか？

ム　大丈夫だ。ハヽヽ、帽子が落ちただけだ。誰か拾つて吳れ。おい貴樣はマテオチの夫人か。俺は美事危險に生きたぞ。これで俺も暗殺の洗禮を三度受けた。これから尙々ふえるだらう、いよ〳〵面白い。

夫人　國賊々々！

ム　俺が國賊か？　ハヽヽ、俺は今迄の何んな總理大臣よりも、最も伊太利國の爲めに盡し、國威を外國に輝して來た男だ。御婦人の御配慮には及ばんよ。おい、このお優しい方が、おだやかに、永久にお眠り遊ばす樣においたはり申せ。

（夫人は引つ立てられて去る。）

（群集はムツソリーニを取卷く。）

ロッシ　諸君、ではこれから、あちらの會場へ出向かう、我黨將來の發展其他については、あちらで改めて閣下の御訓示を仰がう。

（群集「ムツソリーニ萬歲！」を唱へる、ムツソリーニは帽子を見て、淋しい思入れ、やがてそれを頂いて、やゝ劇的な形で段上に立つ。群集は「ジョビネッツア」の歌を唄つて一周する。）

――幕――

川霧

所は攝津の國、生田川のほとり。
時はむかしとばかり、物事すべて夢の如くに淡く清い頃。
右に白く低い家、正面には霞む山々。
左右は柳。
悠揚たる前奏一くさりあつて、次の歌を聞かす。

合唱　〽霞立つ
　長き春日に
　照りはえて、
　はれ渡る世も
　さゞなみや、
　底にうれひの
　絶えぬ心よ。」

（幕あくと、神代めかしい服裝の大勢の男女や子供が踊つてゐる。）

合唱　〽逢ひ合うて、やよや。
　たゞ二人、やよや。
　人交らへで、語らまし。
　　やんよゝ、やんれ。
　君見ては、やよや。
　胸をどり、やよや。
　たゞひたむきの、戀心。
　　やんよゝ、やんれ。
　玉葛、やよや。
　實ならぬは、やよや。
　神ぞつくとふ樹にしあれ。
　やんよゝ、やんれ。
　古に、やよや。
　戀ふ鳥は、やよや。
　わが思ひ知る時鳥。
　　やんよゝ、やんれ。

（第二歌詞がすんで、第三に移る頃、家の後から白布を持つた娘と母親とが出る。群集の二三はそれを見つけ、無理に手をとつて踊りの群の中に加へ、一同踊り續ける。）

（踊り終ると、娘を中央へ連出し、「などれ〳〵、など

め、所望々々」と打ち囃す、音樂次第に高まる。）

娘獨唱〽葎這ふ、賤しき宿も
　布張りて、
　淸く住む身は
　白妙にしもあれ。

（婆が出てからむ。）

娘、婆合唱〽あまざかる
　鄙としられど
　そこ此處も、

一同合唱〽春は花咲く、
　若葉も芽ぐむ。
　紅の赤裳の裾に
　春雨の
　匂ひゝづちて
　通ふなれ。

（一同立つて又群舞。）

〽咲けりとも、やよや。
　知らぬ君、やよや。
　此の山吹の、色見ずや、
　　やんよゝ、やんれ。

（此の群集の中、下手から菟原壯男が土產を持つて出る。と、殆ど同時に、上手から旅姿の茅渟壯男がやはり土產を持つて出る。二人とも群舞の終るのを待つ。それが終ると、二人は靜かに近寄つて左右から土產を出す。娘はとらず、婆が代つて取る。群集はヒソヒソ物語りながら、次第に去る。男二人は立つて舞ふ。）

男二人合唱〽劒太刀
　身に佩き添ふる丈夫も、

陰合唱〽戀てふものを
　忍びかね、
　日每にわれは
　君の門とふ。
　われも亦
　遠き和泉路
　たどり來て、
　逢ひまくほりす
　らうたけき君。

（ト間奏になり、二人は娘を中心に激しく爭ふ振り。
とゞ娘は二人を靜め、胸をおさへて唱ふ。）

娘合唱〽春花の
　にほひ榮えて、
　秋の葉の
　匂ひに照れる
　此の身にしあれど、
　菟原壯男、
　茅渟壯男、
　まさりおとりなき
　日毎のなさけ。
　いづれによらん。
　わかつべきすべもなし。

（ト間奏になり、煩悶の振り。とゞ白布に顏を覆うて
家の中へ行く。男二人、その後を追はんとして爭ふ。
この以前老婆は弓矢二つをひ持つて來て、とめる。）

婆獨唱〽待ちね、丈夫
陰合唱〽幾歲月のその間、
　雨の降る日も
　雪の日も、
　娘慕うてお越しやれど、
　氣立ても身なりも
　物云ひも、
　瓜を二つの
　男は二人。
　娘一人に定めかね
　迷ひ疲れて
　瘦せもしよう。
　それ〳〵〳〵此の弓矢。
　生田の川の水の上に
　ヒヨツコリ〳〵ツーイ〳〵
　パツと立つてチヨイと浮く
　白鳥射つて、
　これ、運だめし。
　射當てたら、
　これ、婿がね。

二人合唱　〽おゝ。

（二人の壯夫は弓矢を取り、勇み立ち、壯快な間奏に
つれ跳躍の舞踊一としきり。とゞ婆は二人を案内して
向ふへ去る。）

（暗　轉）

岸の森。すべて布に書き込んだ立木を一面に垂れ、その間から遠く湖のやうに廣い靜かな生田川の流れを見せる。川霧が立つてゐる。所々に綺のやうな小岩二三。その小岩の一つに前の娘が思ひに沈んでゐる。

のどかな、然し深い愁ひのこもつた音樂。と音もなく、白鳥のやうな白衣の女數人現れ、森の木々を縫つて舞ふ。娘は立ち上り、悶えの振り。白鳥はそれをさそふが如くに舞ふ。娘もやがて舞ふ。と、その衣裳が脫げて他の白鳥と同じ姿になり、寄りつ離れつして、暫くの間踊り、次第々々に奧の川面の方へ行き、とゞ一同消える。

音樂が勇壯な調子に變り、以前の男二人、弓矢を持つたまゝ跳躍して現れ、激しい舞踊、と向ふに白鳥を認める思入れ。二人は同時に弓に矢をつがへ、同時に切つて離す、射當てた思ひ入れ。再び亂舞しながら、先を爭つて去る。舞臺暫く空虛、月の光り。やがて二人はよろめき〳〵歸り來る。あへぎ恐れる舞ひ。とゞ倒れる。と傷負つた娘が物悲しげに舞ひながら出、二人を憐れみ見る振り。以前の白鳥の群れも出て悲哀の群舞。

娘獨唱へ住みわびぬ
　此の身消してん
　名のみなる
　生田の川の
　霧もろともに。

（歌ひ終り、又舞ひつゝ、とゞ正面の岩から音もなく身を沒める。白鳥一同も消える。）

（男二人は漸く正氣に返り、やがて面影を追ふ狂舞。手を取り合ひ目眩く如くに舞つたかと思ふと突如、岩から身を沒める。今度は水音高く鳴つて、水煙り立つ。舞臺又暫く空虛、婆が出る。森の中をあちこちと探す、フト娘の衣裳に氣がついて取り上げ、驚き、いよ〳〵探し廻る。今度は弓矢を見つける。岩の上に上つて見て、仰天して後へ倒れる。岩の下にある櫛を取り上げ、悲しみの振り。中央に坐り、拜むが如くに天を仰いで唱ふ。）

婆獨唱へあがをとめ
　後のしるしと
　つげをぐし
　生ひ更り生えて

靡きけらしも。

（淋しい音樂の中に。）

――幕――

女郎蜘蛛

ストラウスか、チヤイコウスキーの曲を連想する樣な、物凄い、神秘な短い前奏があつて、幕が上ると、そこにはもう一つ淺黄幕が垂れてある。その幕の外へ、錫杖をつき、白頭巾、高下駄の高僧が現れて、靜に唱ふ。

僧獨唱へあはれ、人の世、
迷ひ　重ねて、
ゆくて　見わかず、
歩む　長旅(ながたび)。
そこに　まつはる
不思議　數あり。
名譽、黄金、
をみな、飲酒(おんしゆ)。
さては　目に見ぬ
奇しき　運命。
からみ　まつはり、
やがて　倒さる。

あはれ　人の世、
奇しき　さだめの
蜘蛛は　網して、
今日も、明日も、
一人、も一人、
なほも　一人と、
あかず　犠牲(いけにへ)
來るを　待てるぞ。
やよや　危ふし。
見えぬ　白糸、
墮落　おちあな、
氣づけ　人々。

（悵然として唄ひ終り、やゝ歩を移さんとする時、向ふから來る武士に出逢ふ。武士はまだ年若く美しく、旅出立の姿がりゝしい。彼は僧に出逢つたが、一寸思入れをしたのみで、そのまゝ一心にかなたへと急ぎ去る。僧は後を見送つて息をつく。鐘の音。風の音。僧は靜に去る。淺黄幕上がる。

舞臺上手奥に、風流な數寄屋。正面は遠山。中央に高さ一間半ばかりの高臺。下手は、杉松等の大木。一本は目立つて大きい櫻、花は盛りである。遙かに麓を見

下ろす心。數寄屋の中には一人の美しい姫が曲椽にもたれて夢見てゐる。その傍に一人の侍女が琴を彈く。その他大勢の侍女がそこゝに秩序なく居並び、高臺の上にも一人の侍女、それは彫像の如く、手をかざしたまゝ身動きもせず麓の方を見守つてゐる。）

琴唄合唱へ梟松桂の傍に
なきつれ、
蘭菊の
花にかくるゝ
野狐のふしど。
虫の聲さへ
分ちなく、
萩吹きおくる
夜あらしに、
いと物すごき
けしきかな。

（琴唄が一としきりすむ頃、次第にオーケストラの曲となる。それは、例へばタンホイザーの第一幕を連想させるやうな、然しもつと纖細で、もつと物うげな曲である。）

侍女合唱へ仇し野の
夢ならなくに
うつゝなき、
日も夜も續く
歡樂の森
喜びあきて、
あゝ、うたて。
人もや來たる。
賓客や來る。

（怪しげな、低い齊唱につれ、侍女がおもむろに立ち上り、振りある。と、高臺の侍女叫ぶ。）

高臺の侍女獨唱へおゝ、かしこ、
麓のはつれに
一人の武士
彳み迷ふ。
姫君。
われ等が餌
こゝに得つ。
人々。
とう、いざなひ來よ。

とく／＼。

（やゝ急速な音樂につれ、侍女數人立つて入る。姫も、琴の女、見張りの女も、皆身づくろひして待つ。と、音樂につれ、侍女等を先きに、迷ひ、疲れ、茫然たる武士出る。）

琴の侍女獨唱へおゝ、若人。
　よくぞ來ませし。

見張の女獨唱へよくぞ來ませし、
　若人よ。
　われ等
　君を待つ、
　時久し。

（武士はなほ茫然と、見廻しながら唱ふ。）

武士獨唱へこゝはそも
　いづち。
　山の中に
　迷ふと見しに、
　あな、

　うるはしの
　此の住ひ。
　人の世か。
　夢の世か。

姫獨唱へげにそれよ、
　こゝこそは、
　人の樂しみ
　集めたる
　常久の春の里。
　わがめでしをの
　住むべき地。

武士獨唱へなに、わがめでしをの
　住むべき地とは。

侍女合唱へおゝ、めでしをの
　住むべき地。

（これより、侍女等立つて、武士を眞中に踊る。）

侍女合唱へそよ風わたる森の中、
　櫻花散る丘のかげ、
　棚引く霞ほの紅う、
　空は遂に緑なす。

悦樂の國、今こゝに、
　魂とかん香りあり。

（姫と武士と相並ぶ、侍女等酒肴を運び來り、姫の艶色いよ／＼濃い。）

武士獨唱〽あな、樂しの境。
　ひねもすに
　辿り歩みて、
　山の頂き
　極めて其處に
　たをやめの
　すゝめにすごす
　歡樂の酒。

（武士と姫は酒宴をつゞける。侍女等立つて踊り興ずる。）

侍女合唱〽しととんとんと
　降る雨に、
　さつさ、散つた／＼
　柳も花も。
　ハンラ、ハラ／＼
　ハラ／＼／＼。
　風に乘せられ
　ヒラ／＼／＼。
　水に浮かされ
　フワ／＼／＼。
　ヒラリ、／＼
　フーワフワ。
　廻つて沈んで
　すつとんとん。

（滑稽な侍女の踊りがすむと、姫と武士と踊る。）

姫獨唱〽わが背子(せこ)が
　來べき宵ぞと
　待つかげに、

武士獨唱〽あら、うつゝなき
　春の月

（ト二人の合舞になる。）

侍女合唱〽瑠璃の御空(みそら)の

金砂子。（きんすなご）
數限りなき
星のごと、
思ひかされて
くづをるゝ
亂れ姿の影黒み
沈默の帳、（しじま）（とばり）
垂れこめて濃や。

（二人は高臺の上に登り、四邊を眺め、又酒杯を上げる。遂に武士は姫の膝に醉ひ伏す。音樂絶え、一同物凄い思入れ。姫は武士を抱き、勝利を誇る高笑ひする。と、舞臺漸く暗くなり、今まで見えた數寄屋、遠山、高臺も共に黒幕に覆はれて見えず、風の音のみ物凄く響く。舞臺はやがて一面の白い蜘蛛の巣に覆はれた。その巣の眞中に、最前と同じ姿の姫と武士の姿のみが見える。）

（風の音又一層と凄くなると、姫は再び笑つた。武士はフト目をさまし、起き上らんとするが、自由がきかない。苦しみもがき、刀をぬいて姫を切らんとする。姫は立ち上つた。そのとたんに、今までの美しい衣裳はぬげて、銀糸の縫の蜘蛛の巣の衣裳となつて、すつと立ち、武士をハッタと足蹴にする。武士はもんどりうつて舞臺へ落ちた。）

（それをきつかけに、左右から黒裝束の蜘蛛の形の物が無數に現れ、武士を目がけてからみかゝる、武士は死に身になつた。忽ち起る大音樂と共に、彼は刀を振つて四方八方、縱横無盡に切つて廻る。蜘蛛の子は敵しかねて四方に散つた。が、依然自若としてゐるのは中央の女郎蜘蛛である。武士はけなげにも自ら網をたどつて姫に切りかゝるが、かへつて彼女の術中に陷り、自由自在に翻弄され大亂鬪の末に、とゞ武士は目に見えぬ糸に十重二十重とからめられた。そして遂に息の根を止められる。と、以前の黒衣の蜘蛛が多く出て、姫に向つて祝ひの意を表し、彼女が一度脱ぎすてた衣裳を着せる。着終つて、彼女は悠々と歩む。）

（と、黒幕は上つて、又前の數寄屋や遠山や高臺が現れる。）

（姫は數寄屋の曲椽に戻る、黒い蜘蛛が武士を床の下に引込んで消えると、美しい侍女等は左から右から現れて、一人は琴を彈く。一人は高臺に薦を見守る。そのすべての模樣は、今しも一人のいたましい武士が犧牲となつて倒れた事件の跡形もない程、幕開きの時の模樣そのまゝである。）

（遙か麓に當つて彼の僧らしい聲の歌がかすかに聞えて來る。）

僧獨唱〽あはれ、人の世、
　迷ひ　かされて、
　行手　見わかず、
　歩む　長旅。
　そこに　まつはる
　不思議　數あり。

（この獨唱綿々として續く中に、幕は夢の終りの如くに下る。）

山法師

白河法皇の時代

大きな木の下に、山法師五人が、小さい、おもちやにも似た神輿を圍んで、酒を飲んでゐる。夜の事で、篝がたかれてある。

一 どうだ、もつと勢ひよく飲まないか。

二 いや、俺はチビリ〳〵とゆつくりやるのが好きだ。

一 おい、お前はどうだ、さつきから空ばかり睨んでゐるが、何か天變地變の前兆でも見つけたか。

三 馬鹿を云へ。俺はそんなアテもない事を考へるものか。

四 おや何を考へてゐる？

三 俺は、あの星のキラ〳〵光るのを見ながら、おれにあれだけの金があつたら、七條のあいつを靡かせる事が出來るのになア、と考へてる。

一同 ハヽヽ。

一 アテもない事は考へないと云ふから、どんなアテのある事かと思つたら、その方がよつぽどアテが無いぞ。

五 そいつもアテにならないが、ねえ、みんな、こんな小さな手製の神輿をかつぎ込んで、これで金になるアテがあるのかい。おれは頗る頼りないと思ふが。

二 意氣地なし。お前は一番意氣地なしだよ。アテがあるのないのつて、人間何でもやればアテが出來て來るものだ。もつと酒でも飲んで元氣をつけろよ。

三 いやア、酒を飲んでもあんまり足しにやならないぜ。俺は七條へ出かける時にや、いつもウント飲んで出かけるが、一向役に立たない。いつもアテ外れだからな。

一 お前のは腕つぷし自慢だけで、智慧が足りないから駄目なんだ。俺の樣に頭を働かせろよ、頭を。

五 だつて、こんなおもちやのやうな神輿をかついで、たつた五人で出かける所は、あんまり智惠でもないぜ。

一 意氣地なし、だまつてゐろ。お前は時勢と云ふものを知らないから引つこみ根性になるのだ。もつと目を開いて世の中を見てゐろ。いゝか、人間と云ふ者は、いつでも一つの勢ひには押されるものだ。理窟に外れても、情にそむいても、世間がわい〳〵云ふと、いつの間にかそれに引つこまれて行くものだ。さう云ふ機先を制して、さう云ふわい〳〵氣運を作つて行つて得をするのも一つの方法だが、さう云ふ氣運に乘じて、うまくそれを利用して得を作るのも一つの方法だ。前のやつには努力がいる。後

の方は人の力を利用して得が出來る。どつちを取るのが利口かと云へば、無論後者さ。それで俺は、お前達に利益を與へようと思へばこそ、かうやつて誘ひ出したのだ。

四　だつて、どうも五人位ぢや覺束ないよ。

一　お前までが臆病風か。よく聞けよ。なるほど神輿は小さい、人數も少ない。然し、我々の背景になつてゐる神輿と云ふものは大きく、力強い。昨今の有樣を見ろ、何處へ行つたつて、例へば藤原一家であらうと、源平であらうと、我々僧侶の力に敵するものが一つだつてあらうか。我々の學力如何、實力如何の問題よりも、今はたゞ單に山法師である事その事が何よりの強味なのだ。我々が神輿をかついで怒鳴り込めば、泣く子もとまり、鴨河の水も逆に流れかねないぢやないか。

二　全くだ。關白賴通だつてへこたれたのだ。

三　日吉神社の神輿に敵するものはないのだ。

一　さう云ふ背景を後にしてゐると云ふ事が千人力だ。そこを俺はうまく利用しようと云ふのだ。

四　だつて今までだつて隨分利用したぢやないか。

五　こなひだは利忠の家へ行つて多田の莊園を讓らせる事にした。

四　その前には、地頭の所へ捕へられて行つた圓正坊を無理に放免させに行つた。

五　段々俺達の要求は大きくなる一方だぜ。

一　そりや當然だ。大きくならないでゐると思ふか。

四　だつて、もと／＼俺達は、云はゞ一文なしの貧乏法師なんだ、いゝ加減でやめた方が安全だぜ。

二　俺は反對だ。人間は段々慾を出し、段々富んで行くのが當然で、いゝ加減でやめるなんて卑怯な主張には反對する。

三　俺も贊成だ。どん／＼大きく強くなるのが俺の主義だ。

一　そら見ろ、三人迄が同意見だ。三對二だから、輿論から云つてもお前達の方が負けだぞ。

四　然し、俺達が強訴に行く時には、よく「俺達は何の財產もない裸一貫のものだ、それをいぢめるのは間違つてゐる。お前達の物をよこせ、でなくば、どうして此の正義の表象たる神輿に顏むけが出來る。」と云つて威張るぢやないか、俺達が段々大きく強くなつたら、その時はどうする？

二　そりや分らない。まださうなつて見ないのだから。

五　藤原一家の者だつて、もと／＼は俺達と似たり寄つたりの力なしだつたのが、段々押し上つて今見たいになつたのだと考へて見ると、つまり人間は友喰ひしてゐるやうなものだな。

三　さうぢやない、正義と平等を主張して、横暴なる老勢

力を倒すのだ。
四 そして、俺達がやがてその橫暴なる老勢力となつて倒されるのだらう。
三 茶々を入れるな、茶々を。
一 意氣地なしの反對派は去れ。
五 まアさう云ふな、更に今日のお前の智恵の働きをとつくり説明して貰はう。
一 よし。俺は今夜藤原忠光の所へ行つて、あれの邸と、娘達を手に入れるつもりだ。
一同 え!
一 何をそんなに驚く。
五 だつて、そいつはあんまり押が強すぎるぜ。
四 あの男は可成り公平な、理解のある男だよ。
五 いつも俺達を厚くもてなしたぢやないか。
一 そこだ、理解があり、俺達を厚くもてなす位の男だつたら、俺達の要求をいれて、俺の云ふやうにする義務がある。
四、五 どうして?
一 わけのわからない奴なら別問題だが、世の中が公平であり、富豪は貧しい者を助けなければならぬと云ふ理窟の分つてゐる奴なら、當然自分の邸園を開放して俺達に與へ、獨身の我々にその多くの美女を與へるのは當然ぢやないか。
四 然し、それは向ふの心持ですべきことで、我々が強ひる事ぢやないだらう。
一 強ひてもいゝ權利がある。
五 そりや無茶だ。
一 無茶で通すのが弱者の權利だ。
四 通しおへたら、その人は強者になるだらう。
一 人間は誰しも強者たらん事を望む本能がある。
四 何だかお前の理窟はちつとも分らない。たゞ俺は、あんまり弱者だとか、權利があるとか云ひながら、俺達が段々神輿の力を振り廻し過ぎて、迷信家の恐怖に乘じて、一つ手にすりや又一つと、つけ上り過ぎて來るやうな氣がしてならない。
二 俺がさつきから不審に思つてるのはどうしてお前に今日こんな小さな神輿をこしらへて、俺達五人だけをさそつたかと云ふ事だ。いつもの通りなぜ大勢で行かないで?
一 そこだ。いつもの通り大勢で行けば、俺の自由にならない。俺より勢力があり、智恵のある奴が澤山交るからな。それから大勢で行くと、どうしても分け前が少くなる。そこで、こつそりと、手製の神輿で、少人數で出かけて來たのだ。どうだ、みんな有難いだらう。

三　こいつアうまい考へだ。手製でも小さくても、神輿と云つたゞけで、きつと、みんな頭を下げる當世だからな。

四　何にしろ、俺は御免蒙るよ、あんまりアテにならない話だから。

五　俺も引きさがるよ。そんなに慾ばらないでもいゝから。

一　いかんよ一度誓に加はつたからは許さんぞ。此の神輿の威德にも恐れろ。

四　俺達の仲間に神輿の威德を云つたつてきくものか。對外的の時に使へよ、そんな文句は。

一　何を！

二　（向ふを見て）　おい〳〵、向ふから公卿らしいのがやつて來るぞ。

三　どれ〳〵、成程、や、女らしいのもゐるぞ。

四も五も一も　女か？　どれ〳〵。

四　來た〳〵、女だ〳〵。

五　おや、もう少し此處にゐて樣子を見よう。

（一同靜まる。一人の公卿が一人の上﨟の手を引いて出る。山法師五人バラ〳〵と出て取り圍む。）

一　何者だ！

二　名を云へ！

三　女の人の名は何と云ふ？

公卿　（震へながら）　そちたちこそ何者ぢや。無禮をすると許さぬぞ。

一　別段無禮はしない。名を云へ。

公卿　それが無禮ぢや、みだりに道行く者を引止めて、名を名乘れとは無禮であらう。

二　當時都物騷の折から、俺達は自ら進んで往來を衛る者だ。

三　いやしくも延暦寺の山法師、この神輿が目につかぬか。

（と云ふ、四と五とが神輿をかついで篝の前へ突き出す。公卿も女もへタ〳〵と坐る。）

公卿　許してたもれ、知らなんだ。麿は又物取りかと思うたが、神輿を守る尊い法師とあれは、などて名前を包むべき。麿は藤原の長吉。

上﨟　妾は葛橋。無事に此處を通してたも。

三　おつと、さうはなりませぬ。でもあでやかなお上﨟、何にも無理は申しません、丁度今酒盛り最中、一寸酌だけ頼みます。

上﨟　ぢやと云うて、この妾が。

公卿　はて、よい〳〵、何事も時世時節に從ふが德ぢや、法師達のお氣に入るやう、お酌をして上げたがよい。

上﨟　それでは皆樣、不束ながらお酌致すで御座りませう。

四　やあ、これ〳〵、これでこそ殘つて待つた甲斐がある。さア、俺に一杯。

五　俺にも。

一同　俺にも。

（と、宜しく一同酒を飲む。上﨟酌をする。その中公卿は靜に立上り、一度入る。今度出て來る時には四五人の武士がその後ろに從つてゐる。）

武士の一　野盗に等しい山法師、覺悟しろ。

（武士等切つてかゝる。山法師等うろたへながら長刀をとつて身構へる。）

一　挨拶もなく飛込んで、酒宴の邪魔をする無禮者、勿體なくも日吉神社の神輿を守護する我々に、ちつとでも觸つて見ろ、忽ち足が縮むぞよ。

武士の二　何を云つてやがる、そんなコケ嚇しに驚く俺達ぢやない。俺達は源義親公の家臣だ。文句を云はず腕で來い。

二　面白い、腕も女もえてものだ。さあ來い。

一同　さあ來い。

（此處で山法師と武士との激しい立廻りがある。勿論その間に公卿と上﨟とは逃げてしまふ。戰ひの結果は山法師の一、二、三が舞臺のかしこ此處に薄手を負つたり、逃げたり、隱れたりして居殘り、四五は武士に追はれて去つてしまふ。神輿は倒された上に壞れてゐる。）

（やがて漸く三人は這ひ出て集る。）

一　おい。

二　おい。

三　おい。

一　お前は無事だつたか？

二　俺は一寸向ふ脛をやられて、あつと思ふ中に倒れたまま人事不省だつた。

一　お前はどうだ。

三　俺はあの木の蔭にかくれたから無事だつた。

一　まあ、目出度い。俺も一寸立廻つたが、あんな我無者羅な連中が出て來たら手に負へない。ひどい奴が飛出して來出したなア。田舍出の野武士だらう。あの源氏の連中は。

二　さうだ〳〵、田舍者揃ひだから盲目滅法にやりやあがる。

三　あ、見ろ、手製の神輿が散々だ。ひどい事をしやあがる。

一　どうも學問もなく、しつけもなく、その上地位も財産もない奴は、命知らずの無責任だから一番こはいな。

二　他の二人はどうした？

三　あの二人は追つかけられてあつちへ一目散に逃げて行つたよ。俺は木の蔭から見てゐた。

二　殺されやしないだらうな。

三　大丈夫々々、あざやかな逃げつぷりだつたもの。

一　それにしてもあいつ等は怪しからん。神輿をこんなにしおつて。

二　本物だつたらかうもろく壞されまいにな。

三　全體どうする。人數は減るし、神輿は壞されるし、それに第一もうそろ／＼夜が明けかゝつて、一寸凄味が薄らいで來たぜ。

一　待て／＼。此處が考へ所だ。俺は手段を一變して見よう。

二、三　どう？

一　此の神輿はなるほど手製だらう。然し、兎に角神輿には違ひない、どんな神輿でもそれは誰かの手製である事に違ひはないのだから、いやしくも神輿の形を備へたこれをないがしろにして、土足にかけた上に壞したと云ふ事は、實に許すべからざる大罪でなくて何であらう。俺は此の不慮の災難を利用して、一層大きい儲けを考へた。

二　どう？

一　今の公卿は藤原の長吉と云つたな。

三　さうだ。

一　長吉と云ふのはあんまり聞かない名だが、いつれ關白の頼通の緣續きには相違あるまい。ところで頼通は、こなひだ我々三千人の大勢で押しかけて行つて、いやと云ふほど油を絞つてあるから、我々の威力に恐れをのゝいてゐるに相違ない。そこで、いつそ我々此の三人だけで彼に強迫狀を送るのだ。うんと名文で、うんと此の事件を誇張して、堂々と彼の一門の長吉なるもの、無禮、及びその護衞の源氏武士の瀆神の罪を責めるのだ。さうしたら、彼は忽ち使者をよこして我々に詫びるだらう。そして素晴らしい賜物をよこすだらう。おそらく三千人で押寄せてやつと手にしたと同樣位の償ひが、我々たつた三人の手にえられるだらう。どうだ、兩君の考へは？

二　大贊成。

三　非常にいゝ思ひつきだ。

一　ぢや早速その文案を考へよう。紙や筆はあるか。

二　紙はないが筆はある。

三　（板切れをとつて）文案だけならこれへ書いて見るがいゝ。

一　よし。

（書き始める。）

一　書き出しは何とする。

二　建白書、とするか。

三　そんな弱いのぢや駄目だ。詰問書がいゝ。

一　彈劾文はどうだ。

二　詰問書、彈劾文、かうつと、彈劾文の方がよささうだな。
三　誰を彈劾するのだ、賴通をか、長吉をか、源氏の武士をか。目的が分らないな。
二　みんなに當てはまるやうに書くさ。
一　まアそれは文の內容に立入つた時の事として、文章の眞先きは、何かかう力強い句で起さないとまづいな。
二　どうも俺は學問の方は不得手だから、こんな時に困るよ。
三　これからは學問が必要だな。源氏の武士のやうな腕づくで俺達以上の者が出て來ると、辯論や文章の力が何につけても必要になつて來る。第一その方が上品らしい中に實力のある事を今悟つたよ。
一　考へてゐたが、こんな風ぢやどうだ。「上は梵天帝釋より、下は堅牢地神、稻荷、祇園、加茂、春日……」
二　何だ、洗ひざらひみんな書くのか？
一　その方が力がある。
三　それよりも「つら／＼時勢を惟れば……」と最初から議論してかゝつた方がいゝだらう。
一　さあ、これは一寸名文が浮ばないな。
二　持ち合せがないんだから無理もない。
三　やつぱり不斷勉強しておく事だなあ。

一　三人寄つてもいゝ智惠がないかなあ。
二　全體どう云ふ事を書かうと云ふのだ。
一　要領はつまり、お前の一族の長吉がこれ／＼しか／＼で、日吉神社の御神體を土足にかけた。
二　だつて、此の神輿にはもと／＼御神體は入れてなかつたぜ。
一　今まで誰だつて、御神體の有無まで調べた者があるか。神輿だけで澤山ぢやないか。神輿の在る所神體ありと思つてゐたら、神輿卽神體だ。で、その神體を汚した罪まさに死に相當する。我々はその守護者として、いかに此の罪を天下に謝すべきか、延曆寺の役僧に申込んで是非曲直を正して貰へば我々の責任はすむが、それでは又、いかなる災難と危險が御身の上にふりかゝるかも知れない。その大不幸を穩便にすましたいので、我々は徹宵此處に壞れたる神輿の傍に坐して然るべき挨拶の來るのを待つてゐる。と、まあ、かう云ふ文面にしたいのだからなあ。
三　よからう、その內容は大いにいゝね。早速書かうぢやないか。
二　困つたなあ、俺にも出來ない。
三　俺にも出來ない。

二　ぢや、かうしたらどうだ。寺で相應名文家と云はれてゐる觀心坊、あの男の所へ行つて賴んで來よう。

三　あゝ、そいつはいゝ考へだ。

一　然し愚圖々々してたら氣が拔けるぜ。

二　大丈夫、あいつは文章を書く事は早くて上手なもんだ。實にいゝ文句を書くよ。時々自分でさう云つてらあ、俺は實に名文家だ。書き上げて我れながら感心する事がある。時々どんな內容を書いてゐたのかを忘れる事があるほどだつて。

一　ぢや丁度いゝ。賴んで來給へ。

二　おつとよしきた。大急ぎで行つて來る。

（二は駈けて去る。）

三　あゝあ、昨夕からいろんな事に出つ喰はしたので、今になつて馬鹿に眠くなつた。

一　俺も眠くなつた。どうだ眠氣ざましに又一杯やらないか。

三　だつてもう無いだらう。

一　いや、まだ少しある。

三　篝がなくなつたな。もつと焚かうか。

一　さあ、そろ／＼東が白みかけたが、まあ、もう少し焚かうか。

三　焚くものがない。あ、この壞れた神輿を焚かう。

一　待て／＼、それは證據物件として置いとかなくちやならん。

三　さうか、困つたな。然し少しならいゝだらう。壞れた狀態を損じない程度に保存しておいたら。

一　さあ、そんならいゝだらう。

（三は焚火する。一はそれで燗をつける。）

三　二人きりになつたら妙に淋しいな。

一　うむ、淋しいな。まあ一杯いかう。

三　飲まう。

（二人默々として飲む。）

一　眠いな。

三　眠い。まあ、飲め。

一　飲まう。

（又飲む。）

三　退屈だな。

一　退屈だな。

三　相撲でも取らうか。

一　取らう。

（二人立上る。二人とも物うげな樣子である。）

三　さあ來い。

一　さあ來い。

（二人は相撲、がどちらも一向力がはいつてゐない。）

三　暫くブラ〳〵と動いてゐるが、やがてやめる。）
一　やめよう。
三　あいつはまだ歸つて來ないな。遲いな。
一　さう早く歸つて來るものか。
三　どんな名文をたづさへて歸つて來るかな。
一　俺は眠いから、一寸寢るよ。
三　おい〳〵、今寢たら俺一人でなほ淋しくなるぢやないか。あいつの歸つて來るまで起きてろよ。
一　あいつが歸つて來たら又先に立つて働くよ。それまで寢るよ。
三　おい〳〵、困つた男だなあ、もうすぐすてきな名文が出來て、すてきな金儲けになるんぢやないか、起きてろよ、起きてろよ。おい〳〵。あ、とう〳〵寢てしまやがつた。何か人が大勢寄つてると、わあ〳〵眞先きに立つて大將顏で騒ぐ癖に、一寸靜かになると忽ち聲をひそめてしまふ。をかしな人間もあつたものだな。仕方がない、獨酌でやれ。
（一人で飲む。東が漸く白む。）
三　（あくびをする）あゝあ、眠い。滅法眠い。おや、とうとう夜が明けかゝつた。天氣はいゝな、日本晴れだ、さあ、これからしこたま儲けられるぞ。大きい聲して叫びたくなつた。黎明は來る、幸運よ來れ！
（向ふを見て。）
三　おや、あいつが歸つて來たぞ、（一に）おい〳〵、起きろ〳〵。あいつが歸つて來たぜ、おい。おや、一人ぢやない、大勢一緒に來た。あいつはいやにしよげてるな。（一に）おい〳〵、起きろ〳〵。
（一はまだ起きない。二を先に、役僧達や武士大勢が出る。）
役僧　（二に）あの者等か。
二　左樣で御座います。
役僧　（三に）お前は延暦寺所屬の者だな。
三　左樣で御座います。
役僧　お前方は徒らに當山の神輿と稱して、玩具に等しいものを持ち廻り、かへつて當山の尊嚴を傷け佛德を汚した罪によつて、延暦寺の僧籍をはぶかれ、都お構ひの身となつたのだ。とく僧服をといて退去しろ。
三　（二に）おい〳〵、こりや全體どうしたのだ。
二　いやはやとんでもないこつた。さつき此の武士達に追はれて逃げた連中が、とう〳〵つかまつて何もかもしやべつてしまつた所へ、此の俺が名文を頼みに行つたので、あの二人も勿論追放、俺はわざ〳〵此處まで案内させられて來たのだ。

三　何て間抜けな事だ。（一を起す）おい〳〵、起きろ〳〵。

役僧　愚圖々々してゐてはならん。早く僧服を脱げ。（人々に）お手數ですが、彼等の服をはいで下さい。

一同　ハツ。

（と立ちかゝる。）

二、三　待つて下さい、脱ぎますよ〳〵。そんなに急がないでも脱ぎますよ。（脱ぎながらも一を起す）おい、起きろ〳〵。

一　（漸く起きたが半夢中である）やかましい、何だ。

二、三　着物を脱ぐんだ。

一　着物を？　どうして？　湯にでもはいるのか？

二　馬鹿！　貴樣のおかげで煮え湯を呑まされてゐるわい。

一　俺は冷たい水が欲しい、（と云ふ中に着物を脱がせられる）何をする何をする。目が舞ふからよせよ。

役僧　このおもちやのやうな壞れたものをかついで行け。

二、三　え、これを？

一同　かつがぬか？

二、三　かつぎます〳〵。

二　（一に）おい、これをかつぐのだとよ。

一　はゝあ、いよ〳〵首尾よく嚇しがきいたな。

三　馬鹿！　俺達三人とも裸だぞ。

一　面白い、裸結構、赤裸々になつて天下の立て直しをしてやる。

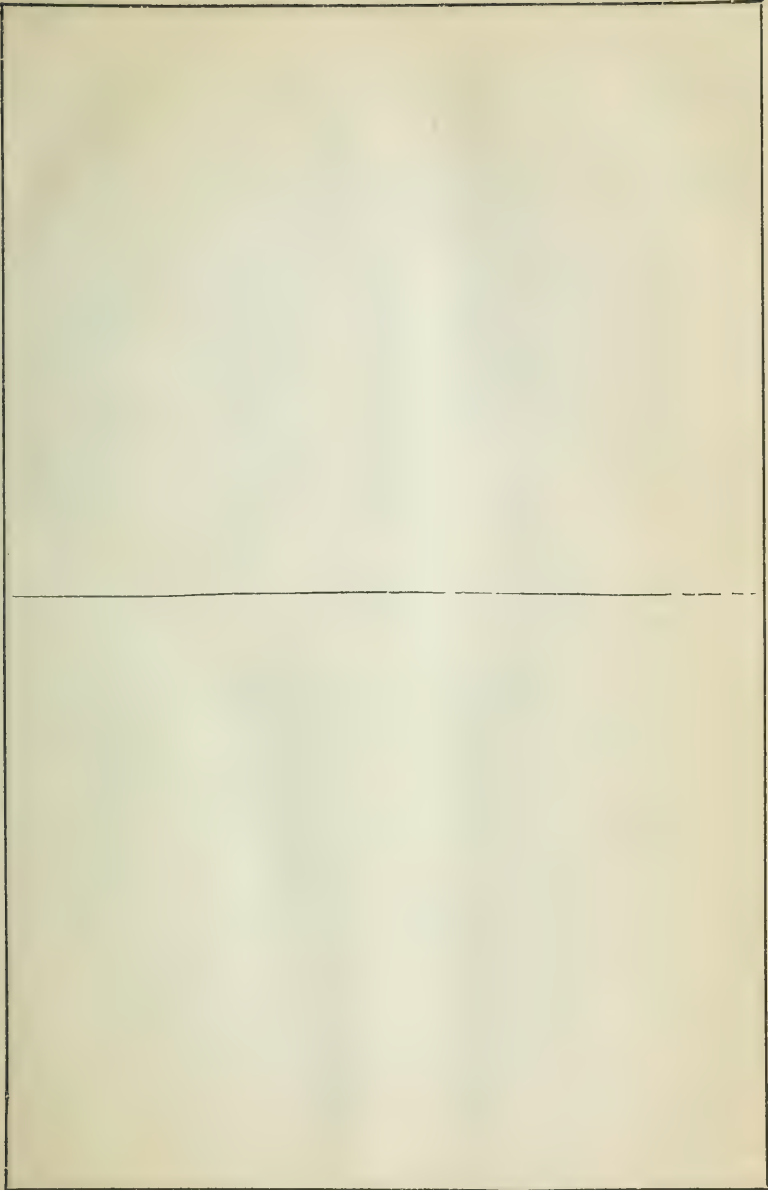
役僧　たは言を言はずと早く去れ。

一同　さ、行け〳〵。

二、三　へい〳〵。

一　赤裸々にして天下を取る。面白い。さ神輿をかついで行かう〳〵。

（と、一同畫面のミエ、ほの〳〵と空のあけ行く景色の中に。）

――幕――

島村民藏篇

足利尊氏の惱み（三幕）

人物

足利左兵衛督尊氏（三十二歳）將軍家又は大御所と呼ばる
室　登子の方（二十四五歳）
弟　左馬頭直義（二十九歳）頭殿又は下御所と呼ばる
上杉伊豆守重能（四十歳前後）
赤松入道圓心（六十一歳）
息　律師則祐（二十六七歳）
少貳筑後守頼尚（二十六七歳）
細川兵部少輔顯氏（二十五六歳）
仁木右馬助義長（二十七八歳）
道　謙　法　師（二十四五歳）
局　衣　笠（二十二三歳）
同　左　近（三十歳前後）
太刀持の小姓
足利の郎黨　大窪五郎兵衛（五十代）
同　田部孫四郎（三十代）
同　堤田　六郎（三十代）
那珂太郎武重（四十代）
船頭　孫　七（五十代）
熱田攝津守昌能（三十六七歳）
夢　窓　國　師（六十二歳）
文章博士中原貞房息女花子（十七八歳）衣笠の妹
乳母　小　冬（四十五六歳）
其他足利方の大名、郎黨、警固の武士、喝食、遊女、船頭、商人等

時代

建武三年五月、八月（陽暦六月、七月、八月）

第一幕

第一場　尾道淨土寺多寶塔前

建武三年五月八日（陽暦六月二十五日）の午後。曇り日。

備後尾道淨土寺の境内、多寶塔前。上手の前寄に瓦葺、白壁、柱扉朱塗の多寶塔が、一方の側面全部と背面の小部分とを二重の庇まで見せて、斜めに立つて居る。

低い欄杆を廻らした側面の縁の中央に石段がある。正面の奥から下手の奥へかけて崖に臨んだ高臺の心。展望を妨げない程度に松の樹や石燈籠が處々に立つて居る。下手の前寄に二引兩の紋を附けた幕が張つてある。遠景には、正面一體に狹い海峽を越して、彼方に向島(むかふじま)が長く横はつて居り、下手に寄つて松永灣の山影と曲浦、及びそこからこの海峽に出入する多くの船が參差して見渡される。なほ海峽の中には、足利尊氏の麾下に屬する夥しい數の兵船が各々旗を立て列ね幕を張り渡し、宏壯な樓船をもその間に交へて、密集碇泊して居るのが見える。

出船の知らせの法螺貝の音が遠くの方から聞えて來る。

足利左兵衛督尊氏(三十二歳)と室登子(なりこ)の方(二十四五歳)とが、參籠を終へて金堂(上手の奥)から退つて來た體で、何れも念珠を手にして、崖の縁に佇んで遠景を眺めて居る。尊氏は烏帽子をつけ、直衣、指貫を着て居る。眼の大きい、頬の豐かな、上髭の濃い、明るい感じのする大顔である。膽勇、濶達、氣品、及び鷹揚、この四つの要素のよく調和の取れた擧動や態度が人の心を惹き付ける。登子の方は下げ髮、小袿てある。東國の女性らしい氣高なところが見える、夫妻の上手に少し後へ下つて烏帽子直垂の上杉伊豆守重能(四十歳前後)と、下げ髮、小袿の局左近(三十歳前後)とが控へて居る。その後に稚兒輪、一重衣、奴袴の喝食(かつしき)(寺院の侍童)が二人、圓座を持つて立つて居る。

尊氏　(稍あつて登子の方を顧み)　この邊りで内海を心ゆくばかり眺めようではないか?

登子の方　はい、それがよろしうございます、(喝食達に)ではこの多寶塔のお縁先へ!

喝食達　かしこまりました。

(喝食達塔の階段の上のところに圓座を敷く。尊氏夫妻腰を掛ける。左近夫妻から念珠を受取る。)

尊氏　一切衆生の大父母たる觀世音菩薩の、普門示現の力を說きたる御經を、聲張り上げて讀んだ後の心のすがすがしさ。天地清淨の氣に打たれて、參籠の疲れもとんと忘れたやうぢや。

重能　世に有難き御信心は、われ〳〵如き不道心者にも膽に銘じますれば、菩薩はさぞ御納受ましますことでございませう。

尊氏　武家の意氣と力、公卿の學問と氣品、その上僧侶の道心をも併せ、かくして公、武、僧の三つの力を、身に蒐めるこそ、わしの居常念願とする圓滿具足の生であるのぢや。然るに近來武家と公卿とが兎角啀み合つてはか

り居るのは残念であるなう……。

（この時重能が伺候するので、左近と喝食達とは上手に入る。）

重能（少し進み出て）時に、お伺ひいたします。

尊氏　なんぢや？

重能　御参籠も滞りなくお済まし遊ばされました上は、今日にも御出立のお觸れ出しがございましても、よろしいかと存じますが？　實は先刻頭殿、高殿兄弟をお召し連れで、兵船お見廻りのため湊へお出向きの節、上様のお再考を折り入つてお願ひ申上げるやうにと、懇々仰せがございました。

尊氏（急に顔色を曇らせて）又その話か？　毎度申す通り、わしはもはや天下も當家も弟直義に譲つた隠居の身ぢや、政道などは一向知らぬ。それについて一切口入をせぬ。只々蟄して身を愼んで居るばかりぢや。

重能　仰せではございますが、全軍の安危に係はる一大事ゆゑ、押して御出馬をお願ひいたせとの、頭殿の御諚でございます。

尊氏　うむ、だが出所進退だけはわしの所存に任せて貰ふぞ。……山を負ひ海に臨むこの淨土寺のたゝずまひは、何となく鎌倉の淨光明寺を思はせる。昨年の秋あの寺に蟄して居つたやうに、こゝにいつまでもぢつと引き籠つて居たいわ、……直義を名實共に總大將として軍を進めてくれい！……（重能の様子を見て）それとも弟では不足ぢやと申すのか？

重能　いえ、決して左様な次第では……、政道の要諦が成敗にありといたしますれば、そのためには頭殿は、裁斷流るゝが如き明敏なる御天稟をお備へ遊ばします。それに就きまして何人が不足など申しませうや？　併しながら、軍には大將軍御自身の御出馬が大切でございます。幾千幾萬の虎狼の如き武夫を御し給ふのも、御名が雷霆の如く六十餘州に轟き渡つて、天下の武家を御麾下に吸ひ寄せ給ふのも、または、味方の旗色が衰へ掛けました時、御自身陣頭に立つて、沸き立つ湯のやうに勢を盛り返させ給ふのも、すべてこれ大將軍の御威勢でございます。

登子の方　その大將軍が獨りこゝにお留まり遊ばして、家來ばかりが出立いたしますのは、手足が頭をなくして、體が魂から離れると同じことかと存じます。

重能　御前、公卿方は所詮烏合の勢でございます。大將の威令陣中に行はれず。諸將或は指揮に背き、或は先陣を爭ひその上高水練の長袖や坊主共が事毎に足手纏ひになると聞きます。併しながら、大將軍と申す魂を味方が一旦失ひましたなら、かゝる軍勢をさへ侮るどころか、却つ

て恐れねばなりませぬ。……御前が御猶豫遊ばせば遊ばす程、外樣大名の信服は薄らぐばかりでございます。新田勢は既に目睫の間に迫り來たり、この界隈にも頻りに間者を放つて居ります。味方に不利な噂が立ち初めますと、直に切り崩しに取り掛かり、事情止むを得ずお味方して居るやからは早速寢返りを打ちます。小貳、大友、赤松、厚東以下、外樣の大身達も樣々の口實を構へて後から後と逃げ出すでございませう。……只々御前お一人によつて、武家の興廢、士民の安危は支へられて居りますゆゑ、この際御前に捧げる味方の信頼を動搖させ給はぬやう、平にお願ひいたします。

登子の方　關東の押へとしていとけなき身で只ひとり鎌倉に居ります、千壽王に代つてわたくしからもお願ひいたします。

尊氏　（内面的爭鬪の後漸く目を開く）　嘲る者は嘲るがよい！　こゝまで捲土重來して、いざ敵に見ゆるといふ矢先に今更躊躇する愚かさは、自らもよく辨へて居る。……しかし、わしはどうしてもこの僞都の地を踏む氣にはなれぬ。舊冬鎌倉を打ち立つて遮二無二都に攻め上つたのは、直義の急を救ふ一心からであつた。新田憎しの一念からであつた。新田はおのが家が源氏の嫡流でありながら、弟筋の足利がひとり世に時めくのを豫々遺憾に思ひ、元弘建武の變亂に乘じて、家運を興さうとして遂に意を果たさず、積憤の餘り利害を共にする公卿と結託して、われらに取つて代らうとするのぢや。

登子の方　それでございますから、御前は決して御本心からお上にお背き遊ばすのではございませぬ。

尊氏　うむ。私情の上では如何にも御臺の申す通りぢや。神佛も照覽あれ、君を慕ひ奉る心の強さでは、堂上家や楠木新田にも決しておくれはとらぬ。……だが、政道の上では殘念ながらわしは何處までも謀叛人ぢや。天下の武士を累世の朝敵と憎み、楠木新田の輩達さへ白眼に見る公卿原、權勢一に藤原に歸し、公卿にあらざるものは人にあらず士民の如きは畜類土芥に等しかつた延喜天暦の御代に、今の世を再び復さうと苦心する堂上家が、宮中の御信任を擅ひ、朝廷に重きをなす限り、公卿政治の倒滅を圖り、その爪牙たる新田やその與同の仁と兵を爭ふわれ／＼は、當然叛逆者の汚名を着ねばならぬのぢや。

重能　お言葉ではございますが、御當家が既に持明院殿の院宣を戴きました上は、順逆おのづから明かと存じます。

尊氏　（鋭く遮つて）　いや、名分は兎もあれ、わしの心がそれでは濟まぬといふのぢや。……おのれを僞つて何になる？　わしの行ひは明かに人臣の道に外れて居るのぢや。……わしは譜代弓箭の家に生れながら、北條の治下

にあつて家を汚し名を辱しめて居つたのに、幸運にも龍顔に咫尺し、優渥なる御諚といひ、有難き御知遇といひ、いつの世いつの時なりともこの君恩を忘れ參らせることが出來よう？　當家が公卿や新田その他の武家と隙を釀すに至つた一端は、朝恩を誇る新田、脇屋、名和その他の武士の多い中に、お上がわしを二もなき者に思召され、忝くも御諱の一字を賜はるばかりか、和歌御會やお歌合せにわれら兄弟を召され、あまつさへ、君寵を專らにし給へるお局の御贔屓が加はつたからぢや。君の鴻恩を戴いてこれを忘れるのは人たるものゝせざるところぢや。……それがこのやうな羽目にならうとは！　……。

重能　（迫るやうに）　御前！　口に王政廢幕を唱へ、その實藤氏專橫の時代を夢みる堂上家の秕政のために、苦しむ民百姓の難儀をお忘れ遊ばしますな！……天下の武家の目は、いや、無力無能の公卿を見限り、武家を憑んで身命財寶の安さを計らうとする、幾百萬の士民凡下の目は、實に御前を仰ぎ見て居るに相違ございませぬ。

登子の方　（一層肉薄するやうに）　御前のお體は御前お一人のものではございませぬ。天下のために御身をお棄て遊ばすのは、御前にふさはしいことではございませぬか？

尊氏　廷臣の失政を彈劾し、政道を廓淸するために、身をいとふわしではない。……とはいへ、善を善とし惡を惡とする本來の心を、そのために棄てようとは思ひも寄らぬわ。……斯樣した拔き差しならぬ羽目に陷り、逆賊よ、不忠の臣よと世の人に譏られると、おのれが日の本の國に生れた身であることを染々悟るなう。……畏きことながら、犯し難い御稜威のうちに言ふべからざる御溫情の籠り、咫尺し奉る者皆聖德に心醉せざるはない程の、不世出の英主にまします大君の宸襟を惱まし奉るのは、臣下としてこの上もない重罪ぢや。

（尊氏つと立ち上り、二人を避けるやうに崖の緣に行き、そこに佇む。後に殘された二人は暫し言葉もなく、力なく顏を見合はせて居たが、やがてしづかに彼の傍に行く。）

重能　さう嚴しく仰せられましては取り着く島もございませぬ。併しながら、御前、こゝに聊かお覺えをお繰り返し願はねばならぬことがございます。この二月、少貳入道妙惠殿は老軀を提げて筑前內山の城に立て籠り、君を御代に附け奉らんと、治承の昔右幕下旗揚の折の三浦介義明にさも似たる、壯烈なる最期を遂げられました。

登子の方　またこの正月、御前の伯父君、重能殿の父君たる上杉憲房殿は、洛外糺の河原の合戰の時、御前を四國に落し參らせうと命を捨てゝ防ぎ戰ひ、甥の殿を天下殿

になし參らせよと言ひ差して、息をお引き取りになつたと伺つて居ります。……それから身内のことではございますが、兄守時は北條の執權代赤橋相模守といはれる身でありながら御前の御大望を夙から見拔き、北條殿に代つて天が下を治める武家は足利殿の他にないと申して、千早攻めに御出立の後、人質となりましたこの身や千壽王を蔭ながら力を添へて落してくれました。そして鎌倉打入の時北條殿へお詫びのため、兄は眞先に由比ヶ濱邊で自害いたしました。……（哀願するやうに）御前のお心一つで、この人達も犬死とならずに濟むでございませう？

尊氏　（背を向けて潤み聲で）故人の話は止せ！　いひ出されると堪らなく悲しくなるからの。……（やがて眼を抑へてこちらへ向き直り）おぬし達の氣持は尊氏よく承知して居る。……だが、わしの心の中には絶えず鬪ひがある。……地藏尊かわれら兄弟の武運を導き給ふと夢見るかと思へば、お上の御前に面縛して引き据ゑられ、冷汗背を潤ほして眼を覺ます。この矛盾をわし自身どうしようもない。まして、他人のおぬし達が……、何度申しても詮ないことぢや。この上諄く申すな！

重能　さやうでございますか？　ではそれがし共にはこれ以上申上げる術（すべ）もございませぬ。たとひ味方が殘らず御前を離れることがございませうとも、それがしは飽迄御せに從ひます。不本意千萬ながら、頭殿の御伴して上洛いたすでございませう。この地に留まつて便々と自滅を待つよりは結句增しかも存じませぬ。

登子の方　（重能を宥め、尊氏を慰め）　いえ／＼、重能殿、それでは御前の御行末が危ぶまれるので、その決心は如何かと思ひます。御前もどうぞお思ひ返し下さいませ。この樣な土地にお殘りを願つたのでは、重能殿も心置きなく敵に向へますまい。それに、御前の御性分には、賴み合ふ同志の人達や、生き／＼とした笑ひ聲などに取り圍まれた、華やかな、せはしない都のお暮らしこそ合ひますものゝ、浮世離れた寺籠りなどがこの先續いては、それこそお體が案じられて參ります。……またたとひ御前が、御自分は中途で挫けるのを我慢なさらうと、わたくしには到底忍べませぬ。……赤橋累代の莫大な所領の半分、百何十箇莊を、あらうことか、龜才とやらいふ下賤な、媚を賣る白拍子などが拜領するやうな、その樣な亂脈な公卿方の政道に齒軋りするだけで手出しも出來ず、その上新田一族の下風に立つ程なら、一層あの世へ參る方が本望でございます。

（登子の方泣く。重能氣拙い思ひで目を瞬んで居る）

（稍あつて、突然遠方から喧騒の音が聞えて來て、次

第に高くなる。やがて崖の下の方にも人々の叫び、馬の嘶き、武具の音など聞え出す。）

重能　（愕然として）時ならぬあの物音は何事であらう？（崖下を通る者に向つて）こりや〳〵、そち達はどこへ參る？　何事が出來したのぢや？（耳を傾けて）なに、楠木勢が船で攻め寄せて參つた？　どこへ？　（耳を傾けて）鞆の方から？　先陣が由波の磯に着いた？　よし、わかつた！　行け！（こちらへ向いて）お聞きの通りでございますが、どうもまことゝは思はれませぬ。

（下手奥で蹄の音がして、間もなく左馬頭直義（二十九歳）が、烏帽子、直衣、指貫、下腹卷で鞭を持つて急ぎ足に出て來る。慓悍の氣眉宇に現はれる細面、懷疑的に神經的にきらめく眼、活氣横溢の餘り寧ろ豪邁不羈に近い言動。彼はつと立ち止まつて後を振り返り、長卷や弓矢を携へて跟いて來た警固の武士の一隊を叱りつける。）

直義　あわて者め！　將軍家の警固には及ばぬぞ！　楠木判官など來るものか！　退れ〳〵！　えい、退れと申すに！（警固の武士達退く、重能の方へ來て、）空騒ぎにも程がある、呆れて物が言へぬ。師直兄弟と手分けして兵船の見廻りをして居ると、向島の外れから二引兩の幕を張つた船が隊をなして漕ぎ現はれた。すると楠木判官の計略で味方と僞つて押寄せて來たと言ひ觸らすものがあつて、忽ち湊は鼎の湧き返るやうな騒ぎとなつた。ところが近寄つて見れば何の事、阿波の細川一族、土岐伯耆六郎、伊豫の河野一族、その他の國人五百餘艘が味方に參つたのぢや。

重能　さりとは粗忽千萬でございますな。楠木判官は大方今頃、畠水練の公卿原の軍評定などに列なつて、にがい顏して居るでございませうに。

直義　（笑ひ出し）それをあのやうなあわて方するから業が煮える。わしらに怒鳴りつけられて漸く我に返り、少しは鎭まつたが、大事取りの師直兄弟は未だに船を乘り廻して鎭撫に汗を流して居る。おぬしは街の中を制し廻つてくれ！

重能　畏りました。

（この時尊氏夫妻は兩人より離れて崖の縁に立ち、遠景を眺めて囁き合つて居る。）

直義　（尊氏の方へ思入をして）まだ決心は付きなさらぬやうだな？

重能　（殘念さうに）申譯ございませぬ。御臺樣の御諫言の尾につき、百方諫願いたしたのでございますが……。

直義　（嘆息して）世話を燒かせなさるなう！　兄上は日頃は實に頼みになる人だが、ふさぎの蟲につかれたが最

後、天下の事もわれ〳〵の事もとんと忘れてしまひなさる。……だがもうこの上躊躇はして居られぬぞ。風聲鶴唳にあわて騒ぐのも、詰り皆が不安危懼の念に驅られて居るからぢや。急いで行け！

重能　では御免下され。

（重能下手に入る。直義兄夫妻の傍へ歩み寄る。）

第二場　淨土寺門前海岸

五月九日（陽暦六月廿六日）の午後。尾道淨土寺門前の海岸。

正面中央は一面に低い石垣。その前方は内海の心。石垣の上は街道になつてゐて、處々に捨石がある。上手の前寄に常夜燈。石垣の近くに磯馴松。遠景には、下手寄の石段の上の大門から、金堂、阿彌陀堂、多寶塔の頂に上手へと、崖の上の淨土寺の建物が殘らず見渡される。

街道には烏帽子賣、女酒賣、梨賣が並んで荷を下ろして居る。諸國の大名の郎黨達がそれを取り巻き、通りの農夫や漁師も中に混つて見て居る。

烏帽子賣　さあ〳〵、皆様！　源氏一統の御時勢でございます。源氏の烏帽子をお召しなされ！　左折の烏帽子をお召しなされ！

女酒賣　御酒を召し上りませ！　御酒を召し上りませ！　諸白のよい御酒でございます。惡くば代を戴きませぬ。御酒を召し上りませ！

梨賣　梨はいかゞ？　梨はいかゞ？　眞桑瓜もございます。梨はいかゞ？　どちらも頤の離れる程甘うございます。

（足利譜代の郎黨大高五郎兵衛（五十代）が烏帽子、腹卷で、諸國の武士が尊氏の軍門に馳せ參じて差出した着到狀十數通を、海龍寺（上手の奧）から淨土寺書院へ取り次ぐために上手から出て來、同時に同じく郎黨岡部孫四郎（三十代）が同じ裝束で、係りの者の檢分の濟んだ着到狀を同じ位持つて、下手から出て來て上手へ行かうとして、雙方途中で行き合ふ。）

孫四郎　また着到か？　これでは取り次ぎも樂ではないな。海龍寺から淨土寺の書院迄、毎日かうして何遍往き來することやら。

五郎兵衛　おのしのやうな若者が愚痴を零すのは間違つて居る。御重役のお骨折こそ並大抵ぢやあるまいぞ。後から後からと屆く着到狀を、一々披見なさる「承了（うけたまはる）」と奧書をなさる。その下に書き判をなさる。それからかうしてお返しなさるのぢやからなう。朝から暑さに蒸し、皆様額に汗をにじませてお出でぢやないか？

（上手から郎黨堤田六郎（三十代）が着到狀を十通程持

つて出て來る。)

孫四郎　やあ、これは〳〵！　よく來るなう。楠の首を挽くやうぢや。

六郎　海龍寺の玄關は今着到でごつた返して居るわ。國々の侍が名乘を揚げるのを聞くと、もう中國一圓御當家の御威勢に靡き伏したやうぢや。

五郎兵衞　中國どころか、(着到狀の束を見せて)この中には攝津の國の住人が二人もあるわ。

孫四郎　それどころか、(着到狀の束を見せて)この中には和泉の國の住人もある。和泉といへば楠木判官の領國で、公卿方の巢窟ぢやないか？

六郎　うむ、さうか。ほんに大名は草の靡きぢや。戰が味方に不利だと見ると、陣を捨て旗を卷いて、我れ先にと落ちて行くのも大名なら、勢ひが味方につくと聞くと、弓を弛し冑を脫いで、先を爭つて降人に出るのも大名ぢや。

五郎兵衞　この二月御當家が九州へお下りの節は、附き隨ふ兵といつては宗徒の面々四五百人足らずで、全く心細かつたなう。

六郎　思へばよく之迄に盛り返したものぢや。僅々一二箇月の間に九州一圓を御平定とは、賴朝公のお生れ變りならでは出來ぬ業ぢや。

五郎兵衞　賴朝公のお生れ變りといへば、兩御所の御誕生には不思議な奇瑞があつたよ。大御所尊氏公が産湯をお召しの時にはの、何處からともなく二羽の山鳩が飛んで來て、一羽は左の御肩先に、一羽は柄杓の柄にとまつたのぢや。それから下御所直義公の産湯の時にも、やつぱり鳩が飛んで來ての、柄杓の柄と湯桶の縁にとまつたものぢや。わしの兄者人はお湯を掬む役だつたが、それを見て八幡大菩薩の御加護の有難さに涙を零したさうな。

孫四郎　(一心になつて聽いてゐたが)おい、おのしら・今度こそ上樣が天下殿にならつしやるぞ！　海陸を壓する御威勢を見た上、五郎兵衞殿の昔話を聞いては、さう思はずには居られぬわい。

(この時下手から一艘の小舟が現はれて、上手に通り拔ける。舟の上には遊女友君が下げ髮、小袿、袴で膝の上に鼓を乘せ、女二人附き添ふ。その一人は友君に日傘を差し掛け、他の一人は櫓を押す。友君孫四郎と六郎とを見て微笑む。)

五郎兵衞　あでやかな女子ぢやなう。おのしらを見て笑つて行き居つたぞ。

六郎　あれは友君といつて、この尾道の湊で名うての遊女ぢや。

孫四郎　二三度頭殿の御座船から岸へ送り屆けてやつたので顏馴染なのぢや。

六郎　また大名方の船へ呼ばれに行くのだらう。（興奮して）孫四郎、今の世の中は戰次第ぢや。精々手柄を立てゝ出世をしようなう。

孫四郎　さうとも、六郎。一日も早く成出者になることぢや。上様は乾度わしらをぐん／＼と引き上げて下さるわ。

六郎　天下一統の御宿意をお果しなされたなら、必ず味方の者の御奉公に充分な御褒美を下さるぞ。

孫四郎　それが今から樂しみぢや。上様は御心の廣大な少しも物惜しみをなさらぬお方だもの。

六郎　さうとも／＼。いつも鷹揚なお心をお見せなされて、下々に手一杯のお惠みを掛けて下さるお方だからなう。

五郎兵衛　（むか／＼して來て）さもしいことをいふな！　おのしらはそれでも足利殿の御家人か？　御褒美なんぞ大名達にくれてやるがえゝ！　餓鬼が食を漁るやうに土地を欲しがるのが大名達ぢやもの。彼奴等は土地のために敵ともなり味方ともなる。戰ふのも討死するのも土地のためぢや、不義、内通、寢返り、日和見、二股膏藥……何も彼もみな土地のためぢや。そこで彼奴等が成り上つて大身面をしても、了簡のさもしさは袖乞と差別がないわい。……ところがわしらは生粹の坂東武者ぢや。親代々の源氏の御家人ぢや。足利殿譜代の郎黨ぢや。敵が寄せて來れば、鉄を投げ棄てゝ物具を打懸け、君のお馬の轡をとり、二引兩の御旗に跟いて、敵を追つ掛け追ひ捲くる。その氣持のよさに比べては御褒美なんぞなんぢや？　えゝ、氣色の惡い！

孫四郎　まあ、さうむきになつても仕方がないわ。勇ましい一騎打の勝負は昔の事です。

六郎　今は名より得をとれといふ了簡で居る、大名方の向背一つで事が決まるのだからな。

五郎兵衛　へツ、忌々しい時勢になつたものぢやなう。

（五郎兵衛腹を立てゝ足早に下手に入る。この時突然酒賣の店の前で侍達の間に喧嘩が起る。商人達はあわてゝ荷を片付けて逃げ去り、群衆は喧嘩して居る侍達を取り圍んで下手に入る。孫四郎と六郎との姿も群衆の中に隱れて見えなくなる。鐘の音。少し間を置いて、下手から局衣笠（二十二三歳）と同左近とが、何れも下げ髪、小袿で話をしながら出て來る。衣笠は憂ひに滿ちた様子をして居る。

左近　衣笠殿、それでは今朝程着いたお父上の御消息にさうあつたのでございますか？　あの、お妹御が……。

衣笠　はい。花子が取り亂したことを申すやうになりましたと。

左近　まあ、何かの間違ひであればようございますが……。

衣笠　わたくしも一時は夢かと思ひました。仁科とやらい

ふ公卿方の大名の若殿が妹を垣間見て、親の權勢を笠に着て無理往生に申受けやうとしたのださうでございます。

左近　まあ、無體な！　それでは左馬頭樣と花子殿とのお間柄を知らぬと見えますね？

衣笠　いえ、知らぬどころか、朝敵を聟に持つのは、味も同前だなどと父を脅しまして、返答次第では、禁裡へ改補のお執成もすると利を以て誘ひましたが、年は取つても父は文章博士中原貞房でございます。はじめからその樣なものを相手にいたしませぬ。ところが若殿は執念く、夜毎父の隱れ家に押し掛けて來て、しまひには手込めにもし兼ねぬ劍幕を見せましたので……（涙組んで）根が内氣な花子は左馬頭樣のお情を思ひ、父の身を案じ、身も世もあらぬ思ひをして、取り逆せてあらぬことを口走るやうになりましたとやら。

左近　花子殿のお心は健氣とも何とも申しやうがございませぬ。

衣笠　わたくしのお部屋へ參つた妹の姿が、ゆくりなくも直義樣のお目に留まりましたのが御縁のはじまりで、妹は他所目にもいぢらしいほど、身も心も捧げてお慕ひ申して居りましたのに。

左近　ほんに御器量はいふも更なり、お生れもよし、お育ちもよし、行く〳〵は必ず左馬頭樣の北の御方と、わたくしたちも蔭ながらお噂して居りましたのに、打續く戰のために久しく別れ〳〵におなりなされた末、この樣な仕儀ではほんにお可哀さうでございますなあ。どれほど憎んでも飽き足りないのは、その横戀慕の若殿でございます。

衣笠　有難うございます。戀しいお方のことを一圖に思ひ詰めた妹の心中を考へますと、涙が出るやうでございます。（顏に袖を當てる）

左近　さうでございませうとも。衣笠殿、まあ、なんといふ情けない御時勢でございませう！　公卿方も、武家方も、お寺も、お社も、國中の上から下まで二派に分れて、水火の爭ひをいたしますとは！

衣笠　でも殿方はまだしも、今日は公卿方、明日は武家方と、御自由にお變りになれますが、女子はさうは參りませぬ、それを強ひられましたなら、妹のやうに氣が狂はなければなりませぬ。狂つた揚句髮を下ろさなければなりませぬ。

左近　え、花子殿が髮をお下ろしなさる？　尼御前におなりなさる？　まあ、重ね〳〵なんといふことでございませう！　あの臈たけた、白芙蓉のやうにお綺麗な方が！

衣笠　さうでもいたしましたなら、少しは氣が鎭まるであ

らうと父は申すのでございます。

左近　左馬頭様がお聞きになりましたならどれほどお嘆き遊ばすでせう？

衣笠　あの一本氣の御氣性ゆゑ、今からそれが思ひでなりませぬ。

（二人下手に入る。稍あつて上手から一艘の小舟が現はれて、石垣に横着けとなり、少貳筑後守頼尙（二十六七歳）赤松律師則祐（二十六七歳）細川兵部少輔顯氏（二十五六歳）仁木右馬助義長（二十七八歳）が岸にあがり、その儘下手に行きかける。足利の重臣今川駿河守頼貞の息、道謙法師（二十四五歳）が衣を着て下手から出で來て、四人の前に立ち塞がる。）

道謙　方々、どうぞお引取り下さい。……この儘お引取り下さい。

則祐　いや、どうあつても將軍家にお目通りをいたす。

頼尙　お目通りをして存分に申上げねば氣が濟みませぬ。

道謙　けれども大御所にお目通りは叶ひませぬて。

則祐　（道謙法師を睨んで）おぬしはなんでさう執拗くわれ／＼の推參を妨げなさるのぢや？

頼尙　（同じく）われ／＼を無下に追ひ返せとの上意でもござつたか？

道謙　如何にも。上様御讀經の間はお取次は無論の事（上手を指して）あの金堂の近くへ立ち寄らせても曲事であるぞと嚴しい仰せがありました。

義長　（則祐を言ひ賺すやうに、）如何さま、道謙殿の落度になつてはならぬ。また折を見て改めて參らうではござらぬか？

則祐　仁木殿、おぬしはまあ默つて見てお出でなされ！（道謙法師に）その御讀經三昧がわれ／＼には一向爲しうござらぬて。足利殿の捲土重來を唯一の頼みとして、新田の大軍を持堪へて居る父圓心が、この有様を承つたならさぞかし力を落すでござらう。

頼尙　少しも早く將軍家に御參籠の間からお出ましを願ひ、われ／＼天下の武士の浮沈が御自分の雙肩にかゝつて居ることを思ひ出して戴かねば、われ／＼の立つ瀬がござらぬわい。

則祐　われ／＼は酔興で競はいたさぬ。銘々自分達の所領を背負つて立つて居るのでござる。なう方々、さうではござらぬか？

義長　それに相違ござらぬ……。

顯氏　如何にもその通りでござる……。

頼尙　それがしとても赤松殿と御同樣で、背負つて立つた所領のうちには、われ／＼の祖先やわれ／＼が血の汗を

絞つて開發した田地や畑がござる。多くの生命を生贄にして手に入れた城や森がござる。われ〳〵が守護せねばならぬ先祖代々の墳墓がござる。われ〳〵を頼みとする一族郎黨や士民が居るのでござる。

則祐　右幕下頼朝公の御治世以來われ〳〵武士に許されて先祖代々持傳へた所領を、禁裡のお情に預つて居るのを笠に着て、時を得顔に六十余州に權威を揮ふ公卿、律僧、官女、さては恩顧の伶人、白拍子のやからのために横領されてなるものか！　父圓心、兄範資をはじめわれ〳〵赤松一族は、北條御誅伐に率先して加擔し參らせ、聊か忠を盡し奉つたにも拘らず、强悍にして功を憑んで諛はぬ父は公卿原の憎しみを買ひ、代々相傳の知行をむざ〳〵新田に奪はれました。この怨みは、骨髓に徹して未來永劫忘れることではござらぬ。

賴尙　かゝる亂脈な公卿の秕政に向つて、われ〳〵は本領一箇所たりと身命を賭して護らねばなりませぬ。一所懸命の覺悟こそ肝要でござる。

大名達　左様々々。一所懸命でござる〳〵。

顯氏　方々、また遺憾なことがござるぞ！　諸國の御家人の名は頼朝公以來年久しくわれらの誇りといたすところ、然るに、一度公卿の天下となるやこの名は直に停止せられ、大名地頭をはじめ、われ〳〵武家一統が、下賤な凡下(ぼんげ)士民と等し並に扱はれることになつたではござらぬか？

義長　しかも同じ武家でありながら、一方には、「着つけぬ冠、上の衣、持ちも習はぬ笏持ちて、内裡交はり珍らしや」と落首にうたはれるほど、傍若無人に朝恩を誇る成(なり)出者(でもの)もござるのぢや。

顯氏　その上、畠水練の公卿大將や、利慾名聞に趁る佞僧共が、大國數箇國、闕所數十箇所を拜領し、皇恩身に餘り、奢侈僭上の沙汰目に餘るものがござる。

義長　かゝる成出者が時を得顔に天下に羽振りを利かせ、門地家格の高い御當家や少貳赤松兩家の如き御舊家が、屈辱を忍んでその下風に立たねばならぬとは、なんと無念至極ではござらぬか？

賴尙　如何にも仰せの通りでござる。しかしそれにもまして堪へ難いのは苛刻な課税でござる。世未だ安からず、人民疲弊の折柄に、地頭の知行の得分から二十分一を徴せられ、百姓から百分一をかけ召されるとは、下情に通ぜぬにも程がござる。堂上家はおのれの先祖が武士百姓の膏血を絞り、諸國の富を都に吸收した昔をまねぶのでござらうが、それではわれ〳〵が立ち行き申さぬ。

則祐　然るに足利殿は武家政治の再興、天下の寺社士民の所領安堵、地頭百姓共に五十分一の課税を呼號せられたのぢや。そこでわれらは大旱の雲霓を望むやうな思ひを

なして、そのためばかりに將軍家に一命を捧げて居るのでござる。

頼尙　その將軍家がこの寺に御宿泊の後は、日々おぬし達のお相手で御讀經三昧に時を過ごし給ひ、浮世を全く見棄て給ふのは、誠に賴りないではござらぬか？

道謙　これは少貳殿のお言葉とも思はれませぬ。尊氏公は將軍家ではおはしまさず、大御所でおはしますぞ！

頼尙　はて、異なことを承る。尊氏公を除いてわれらの將軍と仰ぐ武家がほかにおはさうか？

道謙　しかし、舊冬鎌倉御發向の砌、上様は一切の政務を直義公にお讓り遊はされ、それ以來は大御所とお呼び申さねば乾度御不興を受けます。

則祐　受けてもよいではござらぬか？　誰がなんと云はうと、將軍家は將軍家でござるからなう。

道謙　いや、さうは行きませぬ。大御所は飽迄大御所でござる。

則祐　大御所ではござらん。將軍家でござる。

道謙　いや、ところが、大御所なのでござる。

則祐　足利殿は決して御隱居のお身ではござらぬわい。

道謙　いゝや、夙に御隱居のお身でござる。それに……。

則祐　（抑被せて）　將軍家々々々、將軍家でござる！　れつきとした大將軍でござる！　武家の棟梁でござる！　頼朝公の御再來でござる！

大名達　左様々々、頼朝公の御再來でござる。

頼尙　もうこの上は評判無用ぢや。足利殿が御自身何と思召さうと、われ／＼がおのが手で大將軍に戴くに何の妨げがあらうぞ？

大名達　御尤もでござる／＼。

則祐　（爆發的に）　足利殿を大將軍に戴いてこそ天下は始めてわれらの天下となるのぢや！　われ／＼を夷と蔑む公卿原の前に犬のやうにへいつくばらずとも、大手を振つて世を渡れるのぢや！

大名達　その通りぢや／＼。

道謙　しかし、それでは上様の御本心にそぐはぬかと思ひます。

則祐　なに、御本心？　その御本心を動かすると曇らせるのは誰ぢや？　おぬしら親子が柔弱なことばかりお勸めするのではござらぬか？……打割つて云へば、われ／＼はおぬしらの手から將軍家を取り返しに參つたのぢや。

（この時上杉重能、烏帽子、直垂で下手から出て來る。）

重能　（微笑みながら）　方々、さう熱しては聲が高うなりますぞ。今日は君に一命を捧げられた少貳入道妙惠殿の命日に當れば、上様は只今御奉様と御一緒に、金堂の觀世音菩薩の尊前で冥福をお祈り遊ばして居られます。

頼尙　（不意をうたれて）えい、それでは父入道の供養を……？

重能　左樣でござる。

頼尙　將軍はなぜこのやうに不意と人の肺腑を刳るやうなことをなさるのでござらう？　父入道の聊かの御奉公を未だにお忘れなく、毎々鄭重な御供養を賜はる御芳志は、それがし子として感泣の他はござらぬ。……とは申すものゝ、父は果たして如何なる氣持で、かやうな御供養をお受けいたすでござらうか？　筑前內山の城を枕に自害いたす折、父は左右の者を顧みて申しました。「それがしは將軍家の御爲に命を奉る。頼尙を始めとして、一族郎黨生き殘つた者共は心を一にして忠節を盡し、今の世を足利殿の天下になし奉れ！　これをば大佛事と心得よ。その他の追善は無用なるぞ！」……この遺言を思ひ出すに付け、將軍家のお仕向は、申し憎うはござれど、有難さよりも物足りなさが先に立ちます。

重能　少貳殿の御心中はお察し申す。けれども、方々の御熱心が却つて仇となり、士卒の間に動搖を來たしてはそれこそ一大事でござらう。智謀人に勝れ給へる直義公をはじめ、經綸の才に富む高殿兄弟のお附添ひ申すことなれば、決して御案じのやうな計ひはいたし申さぬ。國々の軍勢も招かざるに集まり、攻めざるに從ひつき、思ひの外味方は增え、馬鞍、物具、弓矢、楯、兵糧米の用意も一段と整ひ、御出陣の日取は既に決着も同前ゆゑ、今日のうちにも軍評定のあることゝ御承知あつてよろしうござらう。

頼尙　いや、さう伺へばわれ／＼はもはや何も申すことはございませぬ。持前の性急から、道謙殿、思はぬ失禮いたしました。

道謙　いえ、わたくしこそ。

則祐　上杉殿、慮外ながらそのお言葉によもやお間違ひはござるまいな？

重能　われらを御信じなされ！　上樣の御運命はとりも直さずわれらの運命でござるからな。

頼尙　では御免下されい。

重能　待たれい！　方々、流言蜚語の取締りを吳々もお願ひ申す。僅か十里先の福山には、新田の先鋒江田兵部大輔が陣を構へ、味方の虛に乘ぜんとして居りますからな。

大名達　心得ました。

（重能と道謙法師下手に、大名達上手に入る。）

第二幕

第一場　淨土寺多寶塔前

五月九日(陽暦六月二十六日)の宵。淨土寺多寶塔前。
正面の中央上手寄、塔の縁に近く篝火。石燈籠に火點る。遠景は海上の兵船や漁舟が篝火を焚いて居るのが見える。
尊氏と直義とが縁に腰を掛け、直義は熱心に兄を說いて居る。登子の方は兄弟の傍から離れ、警戒するやうに四邊に眼を配り、內海を眺め、石燈籠の臺石に腰を掛けなどする。

直義　(突然激昂して立ち上り)　兄上、堂上家を憚るのももうよい加減になされ!

尊氏　なに、わしが堂上家を憚ると?

直義　一體、今の世の公卿に何の能がござる?　民百姓のために何の役に立ちます?　中興の業を誇つておのれらのみの功となし、高くとまり横柄に構へて居りながら、さて實地に當るとなんの働きをします?　公家一統以來の支離滅裂な成敗振りがそのよい證據ではござらぬか?　記錄所決斷所を置かれて理否曲直を斷ずるとは名目ばかり。朝に給ふものは夕に召され、昨日下される所は今日改められ、一郡一莊に三人四人の主がついて、國國に小ぜり合ひの絕間がない。兄上、これが一國の政でござらうか?　これが天下を治める法でござらうか?

尊氏　それはさうだが、公卿にもよいところはある。例へば幾百年の星霜を以て洗ひ上げた典雅、品格、さては學問など……、まあ妨げにならねばその儘にして置いてもよいものぢや。

直義　ところが出娑張つて妨げになります。公卿はおのれらのみ勢力を振はうとして、朝廷の特恩を私して、われわれ武家を朝敵呼ばはりなし、果てはわれ〳〵を押さへ付けて、根も葉も枯らさうと、時勢を知らぬ向ふ見ずの非謀を企みます。鎌倉殿以來、源氏三代、北條九代打ち續いて世を治めた後は、六十餘州の武士が勢ひを張り威を擅にした。その地頭や家人がなんで今、功も力もない人々の下に手を束ね膝を屈めて、被官となり家隷となるに堪へられるでござらう?　武家が四海の權を執る世の中にまたなれかしと念ずるのも尤もではござらぬか?

尊氏　わしはまのあたり公卿政治の紊亂腐敗を見た。長袖者流の無力無能は到底國家の秩序、士民の安寧を支へられぬのを見た。……この亂世を治める手段は一にも力、二にも力ぢや。武によつて救ふより外はないのぢや。

直義　それならば、なぜ自ら進んで賴朝卿の再來たる所以をお示しなさらぬ?　千萬人の目は兄上を右幕下の生れ變りと見て居ります。北條討滅の後、當家が京六波羅に逸早く奉行所を開き洛中洛外の鎭撫に努めると、兄上が一朝にして朝野の人望を博し、諸國の武士の信服を蒐め

たのも、また、兄上が一度兵を擧げると、九州の少貳、大友もために動き、新田の一族なる桃井、山名の面々も踵を繼いで來たり投じたのも、偏に武家政治をよろこび、兄上を武家の棟梁と見るからではござらぬか？　わが一族一門は謀叛の罪狀によつて訴へられ、討手を承つた新田勢は眼の前に押寄せて來て居りますぞ。……兄上、どうぞわしらの申すこともお聞きなされ！　兄上が劍を棄てなさると破滅でござるぞ。武家政治を斷念なさると滅亡でござるぞ。部下の薦める將軍の職を退けなさると、やがてこの世から退けられることになりますぞ。わしらの前には公卿や新田の與同の仁が首斬刀を振りかざして待ち構へ、わしらのうしろには表裏者が內通の時機を窺つて居りますぞ。六條河原の晒し首か、部下の暗殺か、躊躇の揚句行き着くところは只この二つでござるぞ。つまり兄上の後にはもう道が絶えて居るのでござる。

尊氏　うむ。動いても破滅、動かいでも破滅ぢや。

直義　兄上、こなたが出馬なさるとなさらぬとは、天下の武士の安危の分れ目でござるぞ。當今の公卿や武家の心底を割つて見れば、知行、知行、たゞ知行でござる。公武の爭ひも詮ずる處、土の爭ひから起つたことではござらぬか？　されば實力ある武家が無力無能の公卿の前に跪かねばならぬか、それとも武夫の矜持(ほこり)や身分を保てるかの境目でござるぞ。……之程申してもまだ兄上は、一つ出馬してやらうといふ氣になれませぬか？　無祿の人が地頭となり、地頭が守護となり、守護が數國の守護とならうとする下剋上(げこくじやう)の望に道をつけてやらうといふ氣になれませぬか？　御自分の力で天下の武家を公卿の秕政から救つてやらうといふ氣になれませぬか？

尊氏　……（默つて考へて居る）

直義　久安の昔、當家の源流義國公は大炊御門卿の侍隨身から恥辱をお受けなされた。それを郎黨共が憤つて卿の邸を燒き拂つたので、公は勅勘の身となり足利の莊に下つて籠居なされたではござらぬか？　天下の武士を再び義國公となさる御了簡でござるか？

尊氏　（獨語のやうに）さうぢや。足利一族は義國公の御無念を代々受け繼いで來た……。

直義　御遠祖八幡太郎義家公の御置文(おきぶみ)には、われは七代の末孫に生れ變つて天下を取るであらうとありました。しかし、七代目に當る祖父家時公の御代には、北條家の勢威未だ衰へぬため、なほその時機でないと思召して、わが命を縮め三代にて天下を取らしめ給へと、八幡大菩薩に祈願を籠めて自害せられたではござらぬか？

尊氏　その話を初めてわしらにして下さつた母上の勵ましのお言葉が未だ耳につく。尊氏、そなたは觀世音菩薩の

申し子ぢや。首尾よう天下がそなたのものとなつたなら、粉川寺の觀世音菩薩へお禮に何ぞ納めたいものぢやと。……母上はさぞかし鎌倉でその日を待つてお出でなさるであらう……。（考へ込む）

直義　（氣を引き立てるやうに）　兄上はそこでぢいつと考へ込んでしまひなさるから困ります。……心の底からの願ひ、眞當な望み、斯樣なものを爲し遂げるこそ、人の人たる道でござらう？　さすれば、奮起すべき時に逡巡し、爲し遂ぐべき時に手を下さぬのは大きな罪でござる……。

尊氏　（鷹揚にほゝゑみ）　待て、直義！　それしきのことをおぬしに教はらずともぢや。先頃夢窓國師が門人に與へなされた訓言を讀んで痛く感じたことがある。その中に、我に三等の弟子あり。猛烈に諸緣を放下し、專一に己が事を窮明す。これ上等となす。修行不純にして、駁雜學を好む。これを中等と謂ふ、自ら己の靈の光輝を昧まし、只佛祖の涎唾を嗜む。これ下等と名づく、といふ言葉があつた。これはさながら政道の上にも言へることぢや。徒らに武家政治の肝要を大聲疾呼して、右幕下の涎唾を嗜むに終るか。公武二つの政道に踏み迷うて不純の譏りを受けるか。或はまた百難を排して武家政治を再興し、自己本來の面目を明かにするか。その何れに出るが正しいかは自らよく辨へて居るのぢや。……とは言ふものゝ、亂臣賊子と呼ばれるのは辛いなう……。（ぢつと考へ込む）

直義　（腹に据ゑ兼ねた樣子で）　では何でござつた、兄上は御自分一人を淸くすれば、わしらの身はどうならうと係はぬと言はれるのでござるな？　身後の名は夫程惜しみたいものでござるか？

尊氏　（少し色を作して）　それは誰に申す言葉ぢや？　わしがこゝに蟄居しようといふのは、敵を恐れ、世を憚るためではないぞ。惡名をわが身一つに負ひ、苛責の鞭をわが頭一つに受けるためぢや。おぬしをはじめ、師直兄弟、上杉親子、その他一味徒黨の惡名。また、如何に敵に迫はれて狼狽えたとは言へ、勿體なくもやんごとなき御方に不敬の振舞のあつたおぬしの郞黨の大罪。これを悉く一人で背負つて地獄へ墮ちる覺悟は、潛冬是衲竹の下へ、官軍の手からおぬしを救ひ出しに行く時、夙につけて居るぞ。ちと言葉が過ぎはせぬか？

直義　（思はず頭をさげ）　これは惡うござつた。過言を赦して下され。なに、兄上を一人地獄へ遣るものか！　わしも一緒に參る。

登子の方　（この時兄弟の傍へ來て居たが）　その時はわたくしにもお伴をお許し下さいませ。

直義　（悲痛な笑ひを顏に浮べて）わしらは罪障の多い武士と生れたので、來世の果報も覺束なうござる。さすれば、せめては地獄へ墮ちるだけの果報なりと望まうではござらぬか？…（…尊氏を仰ぎ見て）では御出立は……？

登子の方　明日でございますか？

尊氏　（決し兼れた樣子で）いや、さういふ譯では……。

直義　（啞然として）えゝ？

登子の方　（同じく）それではどう遊ばしますので……？

直義　（ぢり／＼して來て）厄體もない！　この上問答は無益ぢや、（不快想に崖の緣に行き、四邊を見渡して獨語のやうに）この高處から眼に入るかぎりの諸國の武士達は、今日か明日かと御出立の日を待ち兼ねて居るのになう！……（腕を撫して）あゝ、腕が鳴る／＼！……この腕の遣り場に困るかして、（遠景を見て）あそこでは松明を振りながら鞍に跨つて畑を踏み荒して居る、……あそこでは兵船を一處でぐる／＼と漕ぎ廻して居る。……あそこでは醉ひ痴れて街の中で叩き合つて居る。……（不圖思ひ付いて戻つて來て、塔の緣に立つた尊氏に下から話し掛ける）したが、兄上、餘事は兎もあれ、この願ひだけは是非聞き入れて下され！　兄上の御決心の如何に拘らず、明日、全軍を海陸の二手に分つて、尾道を出立することに決します。それで後刻この寺の書院で軍評定を開きます。如何でござらう？

尊氏　おぬしの一存で計らふがよいわ。

直義　そこでその席に列なつて下さらうな？

尊氏　……。（苦しさうな表情をする）

直義　大名達を安堵させるために、ほんのお顏を見せて下さるだけで結構でござる。

尊氏　……。（いよ／＼苦しさうな表情をする）

直義　（遂に尊氏の眼中に必ずしも否定ならざる色を認めて）それではようござるな？　御免。

（直義足早に下手に入る。蹄の音。鞭を鳴らす音。長い間。尊氏は不圖下手の方を見て、その表情が急に生氣を帶びたものに變る。）

尊氏　こりや／＼！

（下手から郎黨大窪五郎兵衛、着到狀を數通持つて出て來る。）

五郎兵衛　お召しでございましたか？

尊氏　（失望して）道謙かと思ふたら、なんぢや、ぢいか？
それは着到狀だな？

五郎兵衛　御意にございます。

尊氏　用はない。（五郎兵衛退らうとする）いや、待て！
それは何處の武家ぢや？　そこで讀み上げて見い！

五郎兵衛　畏りました。（着到狀を讀む）「將軍家筑紫より

御上洛により、御迎のため一族馳せ參じ候、備後の御家人高野彌八郎秀氏、同弟孫九郎安氏、右着到狀如件……」

尊氏　うむ。次は？

五郎兵衞　（讀む）「安藝の國の住人由良左近入道良覺、御方に馳せ參じ候、此旨を以て御披露有るべく候……」

尊氏　うむ、次は？

五郎兵衞　（讀む）「備中の國の御家人板倉掃部助朝時、今日御方に馳せ參じ候也……」

尊氏　うむ。次は？

五郎兵衞　（讀む）「着到。備後の國三坂の莊の地頭、江田源八泰氏。……」

尊氏　（うるさくなつて來て）もうよい。大儀であつた。ぢいや、鎧を勢はれよ！

五郎兵衞　有難う存じます、では御免下さいませ。

（五郎兵衞下手に入る。尊氏地上へ降りて來る。）

尊氏　なう御臺、あのやうな着到狀の文言を聞いて、お身はどう思ひなさる？　わしにはあれを差出した武士の拜むやうな眼が見えてならぬ。足利殿、お身を賴りにするものが大勢ありますぞと、その眼が言ふのぢや。

登子の方　今の世の人々のみか、八幡太郎義家公この方の御先祖の眼も、御前の遊ばすことをぢつと見て居るでございませう？

尊氏　さても／＼、そのやうな眼で見られるこの身の煩はしいことよ！……（考へて）はて、なるやうになるがよいわ。これがわしの運命ぢやもの。打ち克ち難い強い力が絶えずわしを前へ／＼と押出す。一度押出されたならもう立ち止まることは出來ない。そして踉蹌たるわしの歩みの後には、常に誹謗と復讐とがひた／＼と跟いて來る、……（考へて）だが、この運命も、それに應じて外に躍り出るやうなものが、わが內心にあればこそ實に運命なのぢや。わしをこの苦しい羽目に陷れたのは、先祖でも、弟でもある。天下の武士でも、今の時勢でもある。とはいへ、根本は、民意に副はざる公卿の政道を廢して、武を以て天下を治めんとするわが本心、わが宿意、わが大望ぢや。さすれば誰を怨むこともないわ。……（淋しくほほゑみ）とは言ふものゝ、御臺、お身一人の前では弱い音も吐きたくなるなう。味方はこの身を賴朝卿の再來と信じ、敵は將門の生れ變りと譏るやうだが、この二人はわしに比べれば幸運であつたと言へる。何故ならば、賴朝公は現にわしがその爲に逆臣と罵られることを行ひながら、却つて忠臣と褒めそやされたから。また將門は渺たる僻境の一角を天地としたため、朝廷と天下の武士との間に板挾みとならずに濟んだから。……あゝ、わしもせめて三代か四代早く足利の正嫡と生れたなら、斯様ま

で苦しい思ひをしないであらうに！　われながら廻り合せの悪い人間ぢやなう！

登子の方　（慰めるやうに）その御述懐を少しも御無理とは思ひませぬ。世の人はまだ御前をお知り申さないのでございます。わたくしに御前といふお方が分りますやうに、公卿方の人々にも分りましたなら、御前に向つて之程僻みや、憎しみや、怖れの念を抱きはせぬでございませう。

尊氏　（しづかに身を離して）誰か参つたやうぢや。

（下手から道謙法師、續觀世音經偈三十三首和歌の巻物を持つて出て來る。）

尊氏　（喜色満面に溢れ）おゝ、待ち兼ねた！　大儀々々。

道謙　お歌合せのお巻物が漸く出來いたしましてございます。どうぞ御覧下さいませ。

尊氏　早うこゝへ、早う！（巻物を受取つて披いて見）筆蹟といひ装潢といひ見事な出來榮えぢや、菩薩も定めし御納受ましますであらう。（讀む）「續觀世音經偈三十三首和歌。世尊妙相具。道謙法師。比ひなく妙なる法の相こそ浮世を照すしるべなりけれ。……弘誓深如海。左兵衛督源尊氏。わだつ海の深き誓の普さに頼みをかくる法の船かな、……（以下飛び飛びに讀んで行く）聞名及見身。藤原有範、名を聞くも見るも御法の燈火を暗き闇路のしるべにやせむ。……火坑變成池、源直義朝臣、定まれる相の物に無き故に易くや火をも水となすらむ、……還著於本人、左兵衛督源尊氏。よし思へ咎無き我は嘆かれず怨は人の身にや還らむ。……觀音妙智力。桂芳法師。その際もあらじとぞ思ふ大悲者の人をはごくむ深き心は……能救世間苦。源直義朝臣、身を捨てゝ人を救はゞ世に住むも佛の道に變りやはせむ。……身を捨てゝ人を救はゞ世に住むも佛の道に變りやはせむ。」……（染々とした調子で繰り返しながら塔の縁に上つて行き稍あつて振返つて道謙を見）道謙、そちは仕合せぢやなう。

道謙　あの、わたくしが……？

尊氏　うむ。弓馬の家に生れてよくも出家の望が果たされたものぢやな。

道謙　お言葉で恐入ります。君の御恩顧により、名もない田舎侍の父頼貞が、守護國司と出世して榮華を極めますのを見るにつけ、天道は盈を虧きて謙に益すとの誡めに鑑み、一族になり代つてわたくしが出家を遂げましたのでございます。當時都に權門第一と呼ばれ、綺羅の行粧目を驚かす名和伯耆守の、最愛の子息が先頃俄に高野に上りましたのも、矢張盈滿の咎を恐れての出家ぢやと申すことでございます。

尊氏　一夕の感慨に生涯を擲つて、しづかに月花を眺めて

暮せる身分に、一日たりとなりたいものぢやなう。（巻物を道謙に返す）

道謙　と仰せられますのは？

尊氏　道謙、御臺とそちと三人で、この寺に籠つて讀經三昧に耽らうといふ念願も、どうやら水の泡になりさうぢや。

道謙　では如何いたしても御出立遊ばすのでございますか？

尊氏　不本意だが、或は、そちに御臺や女達を護つてこゝに殘つてゐて貰ふかも知れぬ。

道謙　承知いたしました。天下のためにそれも餘儀ないことゝ存じます。さりながら、わたくしには如何にも殘念でなりませぬ。

尊氏　（冷靜に）自在に變幻ましまして救世に力を盡し給ふ、觀世音菩薩の大慈悲を思ふ時、塵程のわれらが念願など顧みて居られようか？

（下手から松明持の郎黨數人を先に、直義、上杉重能、少貳頼尚、赤松則祐、細川顯氏、仁木義長の他、譜代外樣の大名、老壯數十人、烏帽子又は圓頂、直垂又は腹卷で出て來る。）

直義　（尊氏の顏をちつと見上げて）兄上、これから軍評定を開きます。どうぞ書院へお渡りを願ひます。

（尊氏運命遂に免れ難しと觀じた樣子を次第に強く顏に現はし、靜かに椽から地上に降り立つ。尊氏の眼と直義や大名達の眼自から合ふ。緊張した長い間。）

尊氏　（決心の體で）參れ！

（足早に塔の後に入る。直義をはじめ大名達續いて入る。）

（登子の方と道謙法師佇んでこれを見送る。）

第二場　室津湊尊氏御座船

五月二十三日（陽暦七月十日）の暮近く。

播磨室津の湊に碇泊した足利尊氏搭乘の樓船の階上。舞臺の四方に欄杆をめぐらし、その隅々に太い角柱。下手奥寄に階段の降り口。屋根は軒先だけ見える、下手の端に船首が高く突き出て居る。いづれも白木作り。四方の軒先に二引兩の紋を白く染め拔いた紫の幕を張る。上手の欄杆の前に臺を置き、八幡大菩薩としるし、特に八の字を二羽の鳩の相對する形に書いた足利家の軍旗、尊氏所用の重籐の弓、箙などを飾る。その傍に唐綾縅の鎧兜を載せた鎧櫃を置く。

上手下手の端には、舳と艫との舷側に立て列れた二引兩の手長の旗が見える。

遠景には、正面上手下手とも、足利勢の兵船が密集碇

泊した港内の有様が見渡される。

上手軍旗の傍に、足利尊氏、烏帽子、赤地の錦の直垂、籠手脛當で床几に腰をかけ、その後に太刀持の小姓。その上手の前寄に弟直義、赤地の錦の直垂、紫縅の鎧で床几に腰をかけ、その後に兜を持つた近習。更に尊氏の下手寄に上杉重能、細川顯氏、仁木義長、直義の上手寄に少貳頼尚、何れも烏帽子、直垂、鎧で床几に腰をかけて居る。

階段の降り口のところに尊氏の郎黨、上手ずつと前寄に尊氏兄弟の近習が烏帽子、直垂、鎧で控へて居る。下手の前寄に赤松入道圓心(六十一歳)圓頂、直垂、鎧息律師則祐、圓頂、素絹、腹卷、葛袴、何れも床几に腰をかけ、數人の郎黨を差圖して、前に積み上げた手長の旗を一旒々々披いて、その定紋を尊氏に見せて居る。

圓心　(一々の定紋について名を呼び上げる)……堀口美濃守……大館左京大夫……烏山修理亮……一井兵部大輔……堤宮内卿律師……。

尊氏　(圓心が呼び上げるのに一々頷いて居たが) 待たれい、赤松殿！　新田一族の精英をすぐりたる、かほどの多勢を相手に籠城して、數箇月の間支へなされた御苦心を、尊氏心底より忝く存じ申すぞ。

圓心　お言葉で恐縮でござる。さしも勢ひ込んだる新田勢が、俄に潮の引くやうに圍みを解きましたのも、偏に頭殿のお働きでござる。敵の先鋒江田兵部大輔を福山から追ひ捲り、破竹の勢で諸城を攻め落されたので、新田左中將も旗を卷いて兵庫をさして引き退いた次第でござる。

則祐　敵沒落の折、白旗城の攻口(せめぐち)に捨て置いた旗百餘旒を、父入道が持參いたしましたのも、決して寸功を誇る所存ではございませぬ。旗の定紋の上に現はれました武家の向背を、聊か御覽に入れたいと存じたからでございます。

尊氏　御兩所の本意はわれらよく分り申した。

直義　それではその先をお見せなされ。

圓心　畏つてござる、(郎黨に旗を擴げさせて) 額田掃部助……江田兵部大輔……兒島三郎……伊東大和守(大名近習達顏を見合はせて冷笑する)……紀伊常陸守……長九郎左衞門……(大名近習達くす〱笑ふ) 町野民部大夫……頓宮(はやみ)六郎……本間四郎左衞門尉(大名近習達の間に冷笑嘲笑起る)……岩松民部大夫……熱田大宮司……武田式部大輔……(大名近習達の間に冷笑嘲笑哄笑起る)……里見大膳亮……高梨左近大夫……佐々木鹽冶判官(尊氏を除き一同哄笑する)……仁科信濃守……舩田長門守……宇都宮治部大夫。(尊氏を除き一同どつと笑ふ)

則祐　（宇都宮の旗を高く掲げて）當代武士の龜鑑宇都宮公綱の旗でござる。

（尊氏を除き一同笑ひ崩れる。）

直義　（笑ひながら）二股武士の旗をこゝへ揃へて出せ！

（赤松の郎黨達伊東、長、本間、武田、佐々木、宇都宮の旗を直義の前に揃へて置く。）

直義　（立ち上り）この二月當家が西國へ下向の折、薄情にもわれらを振り棄てゝ新田に降つたのは此奴等ぢや。あの時わしが都へ取つて返して討死しようとまで思ひ詰めたのも、志を一偏に決せず、表裏反覆常ならぬ此奴等の仕打を憤つての餘りぢや。おのれ、二股武士め、思ひ知れ！（旗を踏み躙る）

重能　中にも宇都宮武田に至つては、足利新田兩家の旗色を見比べては、彼方に靡き此方に附き、あまたゝび敵味方に降參して、その都度臆面もなく笠符を變へる恥知らず。まことに武士の風上にも置けぬ者共でござる。

賴尙　西國には親子兄弟が謀し合せ、公卿方武家方の二手に分れて忠勤を勵むお利口者の大名はござるが、之程恩義を忘れ名を惜まぬ武士は餘り聞きませぬ。

顯氏　湊川の一戰で新田滅亡の上は、定めし又味方に降るでござらう。

義長　のめ〳〵とした腰拔武士の顏が見たうござるな。

則祐　度々のこと故さぞ面皮が厚くなつて居るでござらう。

直義　如何樣たう。

（尊氏を除き一同どつと笑ふ。）

尊氏　（やをら立ち上り）赤松殿のお心入にてこゝに集められた旗を見るに、新田、脇屋、江田、菊地のやうな、當足利家の根本敵は是非なしとするも、（伊東、長、本間の旗を取り上げ）この伊東、長、本間の三士は、丹波篠村の旗揚の節眞先に馳せ參じ、六波羅攻めに手痛く戰つたのをはじめとし、鎌倉、箱根、矢矧の戰にも度々軍忠があつたのぢや、……（武田の旗を取上げ）また武田民部大輔は關東の荒夷、他人の定めた窮屈な掟などには從はぬが、氣が向けば隨分われらの爲にもなつたのぢや、……（佐々木の旗を取上げ）この鹽冶判官高貞はわれらには忘れられぬ仁ぢや、この仁と大友左近將監とが味方に附かなんだら、竹の下の合戰には勝つたにしても餘程難儀であつたであらう、……（宇都宮の旗を取上げ）この宇都宮治部大夫に至つては坂東一の弓矢取、敵として恐しく味方として賴もしい剛の者ぢや。味方の陣頭に立つて阿修羅のやうな働きしたことを思ひ出すがよい。……頭を廻して見るに、この面々は皆嘗て味方のために戰功があつたのぢや。それが暫しの危急を免れるために、新田

に附き隨うた心中は、寧ろ不便ではないか？　節を變へるも義に反くも、大方は士のため、所領のため、眷族郎黨のためぢやと思へば、これを憐れめばとて、憎むには當らぬわい。相剋する二つの力が國中に渦を卷く今の時勢に、親のものを子が持ち傳へて行くには、そこに並々ならぬ心遣ひが要るからなう。……（旗を抱き締めながらさも心持よげに）やがて必定、この面々も味方に參るであらう。この旗の紋所も味方の陣を飾るであらう。（座に復る）

（大名近習達の間に動搖起る。賴尙、直義と頷き合ひ、降り口のところに控へた郎黨達に眴せをする。郎黨達階段を降りて間もなく、降人の武士那珂太郎武重（四十代）を警固して上つて來る。武重は降人の作法により鎧太刀を剝ぎ取られた體で烏帽子、直垂ばかりで降り口の處に平伏する。）

賴尙　（執成すやうに）　申上げます、あれに控へましたは、それがしを賴り、遙々九州より馳せ參じました筑前の住人……。

尊氏　待たれい！　あの仁には見覺えがある。（武重に）　これ、おぬしの氏名は那珂と申すのであらう？　生れはたしか山口の鄕ではなかつたか？

武重　はッ、仰せの通り、筑前山口の鄕の出生、那珂太郎武重でございます。

尊氏　この春三月、九州多々羅が濱の合戰で、菊地の大勢に取り圍まれた時、逐つても拂つても執念深く最後迄、わしに打つて掛つたのはおぬしであつたな？

武重　その無禮を御宥免下さいますやう。

尊氏　それに、おぬしには弟があつた筈ぢや、今何處に居る？

武重　（聲を落して）　肥後八代の城攻めの折、仁木殿の郎黨に頭を渡しました。

尊氏　（思ひ遣り深く）　力は強いが美しい若衆であつたに、無慚なことをした。

武重　（感動して）　忝う存じます。

尊氏　遠路をよく來てくれた。禮を申すぞ、おぬしのやうな勇將は容易に得難いのぢや。

武重　（益々感激して）　恐入ります、お許しあらば、只今より身命を擲つて御奉公仕ります。

尊氏　（重能に）　御座船警固の役人は今誰であつたな？

重能　備前の兒島より北方は、秋山新藏人でございます。

尊氏　あれに少し休息さすがよい、さうしてこの仁に代つて貰へ。

武重　（歡喜して）　えッ！　それがしに御座船の警固役を？　有難う存じます。

尊氏（直義に）さう吩咐るやうに！

直義（重能に）兄上の申される通りにいたせ！

重能　畏りました。

大名達（思はず知らず）憚りながら、それは餘り……。

尊氏　大膽だといふのか？　人間は所詮運命の傀儡ぢや。たとひおぬしら宗徒の面々が、この船を十重二十重に圍んで護つたとて、わしが武運拙なければ夫迄ではないか？　それに、あの仁體を見い！　人の信賴を裏切るやうな風ではないわ。（武重感激して平伏する）……就いては、左馬頭をはじめ、面々に心得迄に申して置くことがある。右幕下頼朝卿の政道を傳へ聞くに、賞罰はいみじく分明であつたが、しかし、罰の辛い方が多かつたやうぢや。そこで同胞一族をはじめとし、疑心暗鬼に驅られるものが多く、さしたる過意もないに誅罰を受けるものが夥しいのは遺憾であつた。わしの本意とするところは、人に歎きをかけずして天下を治めることぢや。さればわれらに刄向ふものも一切その罪を問はず、本領を安堵せしめ、功を立てる向きには、殊更莫大な賞を行ふ所存ぢや。面面、この意を體してわれらを輔佐してくれるやうに！

圓心　聞きしにまさる御大量には、それがし只々恐れ入るばかりでござる。夢窓國師が或る時御談義の序に、將軍家の御德を讃へ申されたのを、それがし親しく聽聞いたしましたが、君は先づ、御精勇にして合戰の砌、死生の巷に出入し給ふこと度々に及べども、笑を含みて恐怖の色がおはしまさぬ。次に、御天性慈悲の心に富ませられ、人を憎むことを知り給はず、多くの怨敵を御寛宥あること、親の子に對するが如くにておはします。最後に、御心廣大にして物惜しみの念少しもおはしまさず。財寶を視ること土芥の如しと。その一つ／＼をまのあたり拜見いたし、國師のお言葉の僞りならぬを承知いたしてござる。

尊氏（苦笑して）はてさて、何をいはれる？　父と敬ふ御老體に左程申されては、尊氏汗顏に堪へませぬ。それがしの今日あるは偏に夢窓國師の御教化の賜物。國師のそのお言葉は、いはゞ、おのれの撓めし枝振りを橐駝師が自賛いたすやうなものでござる。はゝゝゝ。（直義に）時に直義、時刻も移れば、陸手の軍勢は、われ／＼船手に先立つて、こゝを打ち立つがよいぞ。

直義　ではこれでお暇いたさう。

圓心　兵庫の濱で重ねてお目通りいたします。

尊氏　御苦勞でござるな。御老體をお厭ひなされ。さらば。

直義　おさらばでござる。

一同　御免下さいませう。

（尊氏、重能、太刀持の小姓、少數の近習を除き、直

義以下一同階段を降りて行く。尊氏と重能上手前寄の欄杆の側に立ち、船を去り行く直義達を見送る。）

尊氏　（稍あつて感慨に堪へぬやうに）わしは今何とはなしに心が躍る。それは人々の群れの大きな流の中に居るからぢや。

重能　味方の者共はこの流に浚はれて我を忘れて居ります。こゝに集ひ居ります軍勢は、何れも四方から風に吹き寄せられたも同然でありながら、大友も細川も厚東も決して差別（けじめ）が立たぬ程、丁度一つの鑄型から出て參つたやうに、舳先を揃へて敵に向はうとして居ります。

尊氏　まことにわれらは、何ものをも漂はして押流して行く、大きな流に取り圍まれて居るのぢやなう。堂上家の或る人々のやうに、××××を眞向に振り翳して、この奔流を堰き止めるのが、果たして策を得たものであらうか？　天下の大勢に逆行して、頽瀾を既倒に回さんとするものは、自ら溺れるのみか、國の上下をも擧げて怒濤の中に投ずるのぢや。

重能　雲の上人は下情に通せず、偶々この流をまのあたり見る藤房卿のやうな人物がございましても、只時勢を慨して山野に身を隱すに過ぎませぬ。

尊氏　では最上の策は？

重能　身を挺して流に躍り入ることでございます。

尊氏　（會心の笑を洩らし）うむ。流に身を委ねることぢや。今にして思へば、わしは絶えずそれとは知らずにこの流に誘はれて、東に西に、京に鎌倉に、西國に中國に、漂泊して居つたのぢや。

重能　北條討滅の成就に有頂天となりました公卿が、施政宜しきを得ず、事毎に民意に背き、忽ち武家百姓の間に人望を失ひましたのも、偏にこの流をよく導く人物のない故でございます。

尊氏　如何にもその通りぢや。政道に携はるものは、須くこの流に從つて棹をさし、國家といふ船の覆らぬやう操つて行かねばならぬ。こゝに於てわしは賴朝卿の偉勳を思はずに居られぬ。卿こそ時勢を會得し、民心の歸趨を達觀して、この流をいみじく導いた賢相であり名將であつたのぢや。

（この間に西風が吹き出して、幕や旗をひら〳〵と吹き動かす。顯氏、義長、近習達、孫七以下船頭數人、階段を上つて來る。）

重能　（船頭達に）風が出て參つたな？　纜を解いてはどうぢや。

船頭一　申上げます、この風は順風には相違ございませぬが、月の出汐になりますと、どう吹き替りますやら見當がつき兼ねます。

船頭二　思ひ掛けない方角から吹き出されでもいたしましたなら、どんな難儀になるかわかりませぬ。

他の船頭達　どうぞお見合せを願ひたうございます。

重能　さうか、(孫七の様子を見て)こりや、孫七、そちはひとり口を噤んで居るな。よい考があるなら遠慮なく申上げい。

孫七　それでは申上げますが、この風は以ての外お目出度い順風と存じます。なぜかと申しますに、見受けます處、風と一緒に雨が降り出して參つたやうでございますが、それも月の出汐には止むでございませう。すこしは荒れませうがたしかに順風でございます。

尊氏　では、この風は天の與ふるものだな。よし、早く纜を解け！

義長　恐れながら、多くの船頭共がお見合せ願ひ居りまするを聞召されずして、一人が申すをお許しあるは如何かと存じます。

顯氏　彼の源九郎判官が播州渡邊かり怒濤を冒して渡海いたしました、その危き目を再び遊ばしますな。

尊氏　かまはん、船を出せ！　こりや、船頭、追手に帆を掛けたなら、兵庫の濱へは何日(いつ)着くな？

孫七　はッ、明日の暮れ方には、播磨大藏谷の沖に差しかかるでございませう。

尊氏　では明後日の朝まだき着くな？

孫七　御意にございます。

尊氏　うむ、(重能に)短冊を渡してやれ！

重能　はッ、(近習より短冊を受取り)船頭達、よく承れ！この杉原の短冊には、一枚々々御直筆にて觀世音菩薩と認めてある。これを帆柱に貼りつけて、船を急ぐがよいぞ。

船頭達　畏つてございます。

重能　今朝程、上様がこの御座船でうつ〳〵とし給うた處、お夢の中に、南の方から光明赫奕たる觀世音菩薩が飛び來たつて、舳に立ち給うたかと思ふと、眷屬の二十八部衆が弓箭兵仗を帶してこれを擁護し給ふのを御覽せられて、不思議に思召して目をお覺まし遊ばすと、山鳩が一羽この船に居つたのぢや。この奇瑞は必ずや菩薩が勝軍を豫想せられる御夢想であらう。謹んで頂戴いたし、他の船へも分けて遣はせ！　(船頭達に短冊を渡す)

船頭達　それでは頂戴いたします、御免下さいませう。

(船頭達階段を降りて行く。風強くなる。)

尊氏　わしは今絶壁を攀ぢ登つて居るのぢや。首尾よく頂上に達するか？　千仭の谷へと足を辷らせるか？　登るも落ちるも今ぢや。後を振り返るな！　只前を見るのぢや。夢窓國師の詠まれたやうに、「雲よりも高きところに

出でゝ見よ何とて月に隔てやはある」ぢや。先祖や一門眷屬がわしをそれに當てはめて生かし切らうとした、その的を見詰めて驀地に突き進むのぢや。

（風愈々強く吹く、出船を知らせる法螺貝の音遠近に起る。）

第三幕　京都清水寺本堂

八月十七日（陽暦九月三十日）の午前。

京都清水寺の本堂。

上手前方から下手奥へかけて、斜めに本堂の外陣の柱が竝んで居る、その奥にある内陣には、本尊十一面四十手觀世音の廚子をはじめ、脇立の諸佛その他が蠟燭の光の中にほのかに見える。

外陣の前は一段低く舞臺になつて居る。下手の端は外陣の床と同じ高さの廂が前方に突き出て居る。廂の欄杆を越して、京阪地方の丘陵が見える。

舞臺には床几が二つ置いてある。

登子の方は局衣笠、左近、侍女達、清水寺の役僧達附き添ひ、本尊に禮拜し居たが、やがて舞臺に降りて來る。

登子の方（獨白的に）あゝ、このやうなことならば都へ上つて來るのではなかつた。いつまでも淨土寺に殘つて居ればよかつた。此頃我が夫(つま)尊氏殿が欝いでばかりお出でなさるのを、傍で見てゐるのは本當に辛い。折角長年の望が遂げられても、お悦びなさるどころか、毎日あゝして考へ込んで御自分をお責めなされては、遂げられたといふことが却つて辛い、悲しいものになるではないか？　斯樣なると、わたしには武家政治も要らない。征夷大將軍の職も欲しうない。我が夫の御機嫌のよい元氣なお顏、只そればかりが見たうてならぬ……。

（この時上手から、文章博士中原貞房の息女花子（十七八歲）が剃髮して衣を着、放心の體で駈け出て、その儘下手へと舞臺を通り拔けようとする。後から乳母小冬（四十五六歲）が追ひ駈けて出て來る。）

小冬　花子樣！　花子樣！　どちらへお出でなさいます？お待ちなさいませ！……。

（花子の姉に當る衣笠、この體を見て驚き、人々と共に花子を取り押へる。）

衣笠　これ、そなたは妹ではないか？　何處へ行きなさる？御臺樣の御前ぢやぞよ。

小冬　おゝ、これは衣笠樣。誰方樣も御免遊ばして下さいませ。いかい失禮申上げました。

登子の方　衣笠、それではこれがあの、そなたの妹の花子

かえ？

衣笠　はい、お恥しい姿をお目に掛けましてございます。

登子の方　變り果てた姿ぢやなう。仔細は直義殿から聞きました。これではあの方が心をお落しなさるも無理はない。まあ可哀さうに！　可哀さうに！

左近　よもやこれ程とは存じませなんだが、この御樣子を見ますとわたくしはもう涙が先に立ちます。

衣笠　有難うございます。どうやら少しは氣が鎭まつたやうでございます。（花子に）これ、よくお聞き！　これにお出で遊ばすのは御臺樣ぢや。直義樣のお姉上樣ぢや。お分りだらうねえ？　（花子頷くやうな恰好をする）

登子の方　それがお分りならば、そなたに渡すものがあります。（懷から短册を取り出して）　これはそなたへ下さる貞義殿のお歌ぢや。音羽の瀧へ日參すると聞いて、そなたに遇へたなら渡さうと思つて持つて來ました、（讀む）袖の色の變ると聞けば旅衣立ち歸りても猶ぞ露けき。（衣笠に渡す）

衣笠　（短册を受取つて）　袖の色の變ると聞けば旅衣立ち歸りても猶ぞ露けき。有難う存じます。（花子に）妹、お聞き！　そなたはほんに果報者、左馬頭樣がそなたのやうなものをこれ程までに思つて下さるよ。勿體ないと思うたなら、精々養生して、一日も早く元の花子に歸つておくれ。ね、よいかえ？

花子　（短册を突退けて屹となり）　汚はしい！

衣笠　えゝ？

花子　主あるものに戀歌などお送りなさるとは！　そのやうなものわたくしは知りませぬ！　いゝえ、知りませぬ。いゝえ知りませぬ……！

（四邊の人を突き退けて下手の廂の奥に驅けて入る。）

小冬　あれ、たはいもないことを！　花子樣！　花子樣！

（後を追つて入る）

衣笠　（登子の方に）　何とも申譯ございませぬ。穴があれば這入りたうございます。

登子の方　いや〳〵、わたしはあの人が一層いぢらしくなりました。夢中でどこへ驅けて行つたのやら？　後を追うて樣子を見てやりませう。

（登子の方以下一同下手の廂の奥に入る。間。）

（上手から足利尊氏、烏帽子、直衣、指貫で中啓を持ち、道謙法師を從へて出て來る。憂鬱さうに四邊を見廻し、下手の廂の方へ行つて欄杆に凭つて下を見下ろしなどする。）

尊氏　（稍あつて沈んだ調子で）　わしは到頭また都へ來た。清水寺へ來た、恐しい力に後から押されてこゝまで辿り着いた。……あゝ、わしはこれまでおのれの體がおのれ

のものでなかつたのぢや！

道謙　（尊氏の氣を引き立てるやうに）御前、武士は遂に勝ちましてございます。武家の政道は再び興りましてございます。天下はまた源氏の天下に立ち還りましてございます。道謙心から御恐悦申上げます。

尊氏　うむ。わしの大願は成就した。足利家祖先傳來の大望は果たされた。越し方を顧るに全く不思議なやうぢや。

「渡り來て身は安くとも浮橋の……

道謙　危き道をいかで忘れむ。」

尊氏　天下の武家にとつては、いや、武家を頼つて生きようとする百姓庶民にとつては、武家政治の再興は確かに大きな悦びぢや。直義をはじめ高上杉以下宗徒の面々は、今大願成就の悦びに醉うて居る。……だが、わし一人は醉ふことが出來ない。わしは今、眼に見えぬ敵に責められて居るのぢや。……公卿政治を倒したのを責められるのではない。わしが兵を起して鎌倉を打ち立つてから、只管逢つて憤りを散じようと念じて居つた、その新田を打ち挫いたのを責められるのではない。重ね〲叡慮を惱まし奉つたのを責められるのぢや。……戰場で強敵と鎬を削るのはまだしも氣が樂ぢや。このやうに眼に見えぬ心の中の敵と戰ふよりは。なぜならば……。

（この時、下手廂の奥の方から、熱田攝津守昌能（三十六七歲）が直垂て、細川顯氏、仁木義長以下近習十數人に取り卷かれて出て來、尊氏の前に引き据ゑられる。）

義長　申上げます、我が君を狙ひ奉らんと當境内を徘徊いたし居りました、怪しい男を取押へましてございます。

顯氏　こりや、汝は何者ぢや？　名乘れ！

昌能　逆徒に向つて名乘るも汚はしいが、われは熱田の大宮司、攝津守昌能ぢや。おのれ、亂臣賊子！　汝が大逆無道の甚しく、罪惡の累積せること、遙に高時入道を凌ぎ居るぞ！　汝が昨今犯した極惡非道の罪を數へるなら、まづ去る五月には、私に兵を起して九州より大擧襲來し、湊川の一戰に官軍の御大將新田殿を走らせ、勝に乘じて輦轂の下を犯し、爾來官軍に抗すること三月餘り、矢竭き刀折れた新田勢の再起し難いのを見、不埒千萬にも遂に一昨十五日、賊徒宿願の幕府を開き、官にあらずして政を行ふ非道を敢てし居つた。汝の所業は正しく民、國を傾ける惡逆、臣、君を蔑する無道ぢや。承久以來關東征伐を思ひ立たせ給うたのは、偏に武家政治を廢せられるためぢや。然るを汝傲慢不敵な野心を抱き、啗はすに利を以てして、貪婪飽くことなき武士を煽動し、公論を藉りて私利を圖り、公卿政治の討滅、武家政治の再興を名として、國家の精華、皇家の藩屛たる公卿諸公を貶け、

政兵の大權を私して、臣下にあるまじい不義僭上の榮華に耽らうとなし居る。比ひなき君恩を戴き、しかもその君恩を忘れ奉る汝は、それでも人間か？　さ、尊氏、返答はどうぢや？

尊氏　（家來達の動搖を制して）騒ぐな！　抗辯は一切ならぬぞ！　この仁の言葉は一理あるからな。（家來達がなほいきり立つのを抑へて）はて、控へいと申すに！　顯氏、義長この仁を寺の門前まで送つて參れ！

顯氏義長　はツ、畏りました。

昌能　（突立ち上つて）言句に詰まつてわしを追ひ拂ふ氣だな？　卑怯者奴！　今のうちに前非を悔悟せぬと、今に見い！　天罰汝が頭に下るぞ。我が國は神國ぢや。不軌を圖るものは必ず踵を旋さずして殄滅するぞ。汝は惡い種子を蒔き居つた。惡行は絶えず惡行を生まずには居らぬぞ。賴朝の再來と自負する汝は、今に血で血を洗ふ爭ひを繰り返すぞ。弟が兄に弓を引き、子は親殺しの矢を射掛けるぞ。大名達を自在に飜弄した汝は、やがて大名達から飜弄されるぞ。尊氏、また逢はう、戰場で！

（顯氏尊氏以下近習達、昌能を護つて下手に入る。）

尊氏　（後を見送つて）あの武士はこの胸に棘を殘して行き居つた。ほんにさうぢや。惡行は惡行を生むであらう。怨靈の祟りや、亡靈の惡夢がこの身をおびやかすであらう。……（不吉な考を振り拂ふやうな調子で）さうぢや、願文を讀まう、願文を！　道謙、そちは遠慮いたせ！

道謙　はゝあ。

（道謙上手に入る。尊氏外陣に入り、本尊に禮拜して、懷から願文を取り出して讀み上げる。）

尊氏　「この世は夢の如くに候、尊氏に道心給ばせ給候て、後世助けさせおはしまし候べく候、なほ〳〵とく遁世したく候、道心給ばせ給候べく候、今生の果報に替へて、後生助けさせ給候べく候、今生の果報をば、直義に給ばせ給候て、直義安穩に護らせ給候べく候。建武三年八月十七日　尊氏　清水寺」

（願文を尊前に供へ、額いて祈念を凝らし、やがて拜臺に降りて來る。）

尊氏　わしの現在の所業には決して未來の善果は望まれぬ。それで遁世を希ふのぢや。その上、神佛も憚らず、怨靈も恐れず、心の苛責をも知らず、只念願の一路を猛進する直義の猪突豨勇には、未來の程も案ぜられる。おのが果報の幾分を割いて、直義にせめて今世でなりと果報を受けさせてやりたい。それで遁世を希ふのぢや。……あゝ、この安からぬ胸のうち！　これが多年の宿願を果たしたものゝ心持なのか？…君は今叡山にましますし、公卿方の重なる敗北にさぞかし叡慮を惱まし給ふことで

あらう、考へるだに恐れ多い。……（堪へ切れずそこに跪きた手叡山の方を仰ぎ見て）臣尊氏謹んで遙に奏聞仕ります。一天萬乘の大君に對し奉り、違勅背叛の大逆を重ね參らせました不臣の罪を、心底より幾重にも御詫び申し奉ります。

（平伏した儘暫し身じろぎもしない。この時下手の廊の奥から夢窓國師（六十二歲）が袈裟、衣で現はれ、靜かに尊氏の後に近寄り、同じやうに叡山の方を向いて平伏合掌する。國師は濃く一文字に引いた眉、飽迄澄んだ眼、意志の强さうな引き締まつた口許などには、禪林の高僧らしい威嚴や機鋒が閃くが、全體の表情態度の上には圓滿寬厚の風が備はつて居て、一種言ふべからざるなごやかな感じを與へる。）

尊氏　（喟然として身を起し）いや〳〵、今更御詫び申上げたところで、それが何になる？　武家政治の再興は決して私のためではござらぬ、偏に天下のためでござると言ひ開き申上げたところで、それが何になる？　御信任はもう到底取り返せはしない。順逆を過ち、臣下として踏み越すべからざる境を踏み越した落度は、もう到底償はれはしない。……あゝ、何も彼もすべておのが不明のいたすところぢや。鎌倉の淨光明寺で、尾道の淨土寺で、わしは不明に不明を重ねて來たのぢや……。

夢窓　（靜かに）將軍家！　將軍家！

尊氏　（心付いて）おゝ、これは夢窓國師殿！　御坊でおはしましたか？

夢窓　將軍家、ようこそ御詫び申上げなされたなう。愚僧も只今御一緒に、この日頃何とはなしに心苦しく、お召しの都度拜辭する自儘の罪を謝し奉りましたのぢや。將軍家の御胸中、疎石よくお察し申しますぞ。

尊氏　憚りながら、それがしも御坊の御苦衷を……。

夢窓　（嘆息して）今日の忠臣は明日の朝敵となり、朝の仇は夕の友となる、元弘以來のあわたゞしい世の移り變りは、ほんに夢のやうでござるなう！

尊氏　御意の通りでござる。（暫し黯然として夢窓國師と顏を見合せて居たが）こゝで思ひ掛けなくお目に掛りましたのは、觀世音菩薩のお引き合せでございませうか？　相變らず御壯健の體を拜し、尊氏、一入お懽しう存じます。

夢窓　お懽しうござるの。

尊氏　（床几を直して）御坊、さ、これへお掛け下され。

夢窓　（床几に腰掛けて）今日は眼が覺めるから將軍家にお目に掛りたうござつて、御宿泊所の東寺へ伺つたところ、こちらへ御參詣とのことで、お後を慕うて參じましたのぢや。

尊氏　（床几に腰を掛け）それは〳〵、ようこそ。

夢窓　（尊氏の顔をぢつと見詰めて）　成程、御臺所の御案じも尤もぢや。將軍家には何事か痛く氣に病んでお出でのやうでござるの？

尊氏　仰せの通りでございます。

夢窓　（ずばりとした調子で）　それ程寢覺めの惡いものでござるかの？

尊氏　（ぎくりとして）　えゝ？……はい。

夢窓　（前と同じ調子で）　それ程呵責の鬼に責められるものでござるかの？

尊氏　はあ。昨夜は終に一睡もいたさず、今朝程早速觀世音菩薩に願文を奉りました。

夢窓　ほう、願文を？　（慰めるやうに）　それは〱、よくせきのことゝ見えますなう。……將軍家、懺悔をなされ！懺悔をなさるがようござるぞ。

尊氏　では改めてお尋ねいたしますが、懺悔とは抑々如何なることを申しますか？

夢窓　されば、一度絶たば永く再び續かず、一度懺へば永く再び造らず、これわが佛の懺悔の意なりと申す。また、極惡の行をなすとも、過を悔ゆれば轉た微弱なり、日に悔いて懈怠なければ、罪業永く拔くべしと申す。愚案するに、信心深く、前に作りし罪過をあらはして後悔すれば、心に咎がござらぬ。これを懺悔と申すのでござる。

尊氏　忝う存じます。それでは業報因果とは何事でございますか？

夢窓　凡そ世間の樂とは、財寶豐かにして、衣食乏しからず、酒宴歡喜し、人に仰がれることを申す。しかしながら、これは一旦の興を催し、心を養ふは樂でござれど、終には輪廻の業となつて、冥より闇に入る罪業の因でござる。これに引き替へ、この世に命長く、人に用ゐられて、よろづ乏しからぬ果報は、過ぎし世に物の命を殺さず、人を憎み嫉んせず、物を施し、柔和であつた因縁でござる。喩へて申せば、春より種子を造へて、よく生ひ立つやうに土を振り、そして種を蒔く因があれば、秋にはその實がよく熟する果があるやうなものでござる。

尊氏　然らば、春は過去、秋は現在に當るのでございますな？

夢窓　御意の通りでござる。されば、この世によしない妄念がござつて、執着が多く、信心もなく、たゞこの世のことにのみ心を碎いて、後の世を思はねば、地獄餓鬼畜生道に墮ちるのでござる……。

尊氏　（不安さうに）　直義！……直義……弟の未來はどうなるのぢや？……。

夢窓　（やをら立上り）　この度將軍家には年來の御素志を遂げさせられ、祝着至極の儀でござる。しかしながら、

なほも世の中に敵對申す人も居るのでござる。元弘以來の御罪業と、その中の御善根とを比べますと、何れを多しとも申されませぬ。この間に怨敵とて亡ぼされた人幾許でござらうか？ その後に殘り留まつて浪々たる身の、妻子眷屬の思ひは何處へ掛かりませうぞ？ 怨敵ばかりではござらぬ。味方について戰死いたしたのも、皆御罪業となるでござらう。その子の死して父の殘り、その父の死して子の存へるもござる。左樣な歎きのあるもの數を知りませぬ。せめてその忠勤によつて恩賞を行はれたなら慰む方もござれど、その身大名にもあらず、權勢ある緣故も持たぬ人をばお耳に入れるものもござらぬ。從つて下の訴訟も達せず、その面々の恨みも避け難うござる。この度頻りに大慶の儀の重なると承るは、やがて怨敵の多く亡びて、罪業の重なることでござる。……（尊氏座に堪へず下手の廂の方へ行くのを追つて行き、欄杆の彼方を指さして）あれを御覽なされ！ 兵火のために焦土となつた、都大路の荒涼たる有樣を！ 思へば、元弘以來打續く戰亂のために、都鄙の間に神社佛寺人家の、或は破損し或は燒亡いたしたもの幾許でござらうか？ 社寺の所領は横領せられ兵粮にとられて、祭禮も行はれず勤行も廢つてござる。武家ならぬ人は所領はあれど、知行すること叶はず、宿所さへ押し取られて、立ち寄る方もない人も多いと聞き及びます。仁義の德政は未だ行はれず、貴賤の愁歎は愈々重なります。世上の靜謐せぬは偏にこれがためでござる。……將軍家、懺悔をなされ！ 懺悔をなされて、然る後慈悲の大願をお發しなされ！ 衆生をして歡喜(くわんぎ)を生ぜしむるものは、則ち一切如來をして歡喜せしむるなりと申す。

尊氏　御懇篤なる御教化に預り、尊氏はじめて暗夜に燈火を得たる思ひをいたしました。それでは、何によつて慈悲の大願を果たせばよろしうございませうか？

夢窓　それでござる、それこそ愚僧がこの日頃お勸めいたさうと念じて居つたところでござる。

尊氏　はて、どのやうなことでございますか？

夢窓　餘の儀でもござらぬ。六十餘州に普く、一國一基の塔婆を建立し、東寺の佛舍利を奏請して安置し、これを利生塔と稱し、元弘以來戰場に屍を晒した敵味方の武士乃至、罪なくして變亂の生贄となつた老若男女の菩提を葬ふことでござる。

尊氏　その功德によつて、怨靈も菩提の道に入り、それがしの罪業も消滅いたすと仰せられますか？

夢窓　如何にも、その上、古への國分寺に倣ひ、一國に一寺を建立し、これを安國寺と號して、利生塔を護らせましたなら、怨靈納受は言ふも更なり、佛法もために興隆

し、慈悲の大願はその趣意愈々揚焉となるでござらう。

尊氏　安國寺利生塔！　安國寺利生塔！　何といふ力ある名であらう！　さうぢや。敵味方の別ちなく殉難者一切の菩提を葬はう。これに如く懺悔はない。これにまさる功德はない。これに上越す慈悲はない。……御坊、御安心下され。安國寺利生塔の建立をば、尊氏畢生の業といたし、必ず爲し遂げてお目にかけます。

夢窓　ようこそ御決心なさいましたの。疎石この上もない滿足でござる。蒼々落慶の日を今から樂しんで居りますぞ。一切疑惧の念を滅却し、安心立命して、天下の政道にいそしみ、士民を愍んで、よつて以て過去の御罪過を光被なされよ。

尊氏　（希望に滿ちた調子で）　御坊、どうぞお目をそれがしの過去からお離し下され。そして行く手を御覽下され。それがしの前に展けた明るい道を御覽下され。……（ふと上手の上方に眼を遣つてたじろぎ）とは申すものゝ、……お上に對し奉つては、……それがしはそれでも矢張り逆臣でござる。……不忠の臣でござる。……御坊、それがしは一切を呪ひたうございます。先祖の置文を、母の激勵を、弟の鞭撻を、家來共の忠勤を、天下の武士の信頼を！　そしておのが大望を！　この身を今のやうな呼吸苦しい高いところへ押し上げた、すべてのものを呪ひたうございます。御坊、お笑ひ下され！　それがしは今日まで世の流を導いて參つた了簡で居りましたが、實はこの流のために弄ばれて居つたのでございます。

夢窓　（相手の傷を哀んでやるやうな調子で）　この惡緣に因つて翻つて善願をお發しなされ！　懺悔をなされ！　功德をなされ！　慈悲をなされ！　これにまさる善根はござらぬのぢや。

（上手奥に騒がしい物音、女の泣き聲聞える。間もなく上手から登子の方、道謙法師に伴はれて急ぎ足に出て來る。）

道謙　申上げます。中原貞房殿の息女花子殿、只今御境內に於て非業の最期を遂げられましてございます。

尊氏　なに、非業の最期を？

夢窓　さてはまた狂はしうなりましたの？

登子の方　はい。直義殿のお姿をこの邊りでお見掛けしたとやら申して、幻を追うて御境內を狂ひ廻つて居りましたが遮り止める人達の手を摺り拔け、奥の院の舞臺に走り出て、一聲高く笑つたかと思ひますと、崖下目掛けてひらりと飛び降りたのでございます。

夢窓　（嘆息して）　やれ、無慚な！　將軍家、ではまた增えましたなう、戰亂の生贄が。

尊氏　（觀念の體で）　そしてそれがしの罪業も。

（尊氏夢窓國師をぢつと見る。國師憐むやうに見返す。登子の方と道譲法師、すこし離れて尊氏の樣子を見守つて居る。）

後　記

○この戲曲「足利尊氏の惱み」はその後に續く「尊氏と直義」と併せて、二部曲となる豫定である。○尊氏とその一族を從來と違つた解釋で書く興味や決心を私に起させてくれたのは、辻善之助博士の獨創的な研究「足利尊氏の信仰」であるが、私は特に尊氏を群衆の力によつて意識的又は無意識的に行爲を左右せられ、從つてそれ自身多くの矛盾や内面的の葛藤を有する人物と見做して、その生活の惱みを出來るだけ正史に忠實に描かうとした。この態度の是非については、江湖の嚴正な批判を仰ぎたいと思ふ。○史實は大日本史料六篇の一、二、三、梅松論、後鑑、增鏡、神皇正統記によつた。○特に尊氏兄弟については、大日本史料六篇の一六、二一、足利尊氏の信仰、安國寺利生塔考（日本教佛史の研究・辻氏）足利尊氏（山路氏）、北朝武將の德義（武士道發達史・足立氏）、中世に於ける怨靈思想（歷史と地理・魚澄氏）、等。新田足利兩氏の關係については、新田氏と足利氏（新田氏郷土史論・三浦氏）、新田氏の盛衰（同上・岡部氏）、新田氏研究（藤田氏）、鎌倉時代に於ける新田氏と足利氏（鎌倉時代通俗史談・大森氏）等。尊氏兄弟と夢窓國師との關係については、夢窓國師年譜、同上語錄、夢中問答、夢窓國師御詠、大日本史料六篇の一七、夢窓國師（日本佛教史の研究・辻氏）、賢俊僧正と夢窓國師（歷史と人物・三浦氏）、鎌倉武士と禪（鷲尾氏）等によつた。○太平記、續本朝通鑑、讀史餘論等は細部的に參照した。久米、田中、中村三氏の南北朝時代史、渡邊、魚澄兩氏の室町時代史からも多くを學んだ。○國史上の社會問題（三浦氏）、日本社會史（本庄氏）、日本經濟史第一卷第二卷（竹越氏）、文學に現れたる我が國民思想の研究・武家文學の時代（津田氏）、成上り者（歷史と人物・三浦氏）、武家時代に於ける皇室の絕對的地位（新しき愛國論・中村氏）、等には、特に當時の社會的風潮について啓發されるところ多大であつた。○直義の挿話は新千載集雜の部に、「建武の頃思の外の事によつて筑紫へ下り侍りけるが、程なく歸りのぼりて侍りけるに、都に殘し置きて侍りける女のさまかへ侍りける由聞きてよみて遺しける。「袖の色の變ると聞けば旅衣立ち歸りても猶ぞ露けき」とあるのに基いた。○淨土寺多寶塔の建立の年は、建武三年以前と以後との兩說があるが、同寺當事者の意見

を尊重し、且つ舞臺面の都合もあつて、前説に從つて置いた。○月日は三正綜覽によつて太陽暦に換算して見た。

城（一幕）

人物

廣瀬浩三　農學博士、工業會社々長（四十八歳）
雪枝　その後妻（三十三歳）
弘子　先妻の生んだ娘（十七歳）
服部進　法學士、官吏（二十七歳）
金澤倉太郎　廣瀬家の自動車運轉手（三十四五歳）
お粂　同家の小間使（二十四五歳）

時代

大正の初期

場所

東京郊外にある廣瀬博士の邸

女性的趣味より出立して優美と温味とを主眼として設備裝飾された居間。正面中央に玄關へ通ふ扉がある。それを開けると廣い廊下が見える。扉に向つて右は書棚、左は簞笥。右手の壁の中央に廣い窓がある。庭が見渡される。ごく近くに滿開の丁字が一株見える。窓の下にソフア、クツションが一つ載つて居る。右手のずつと前に植木臺。左手の奥へ寄つて扉がある。他の居間より臺所へと通ずる。扉の右手の植木臺に盆栽が載せてある。左手のずつと前に暖爐を華かな刺繡の對立で隱して、前に安樂椅子が置いてある。その前にテーブル掛をかけた圓卓、新聞雜誌煙草盆などが載せてある。卓を圍んで椅子三脚。壁間に和洋畫の額が懸けてある。書棚の上に大型の置時計。床に絨毯が敷いてある。初秋の土曜日の午後二時頃。自動車運轉手金澤倉太郎、洋服を着た容貌の醜い三十四五の逞しい男。圓卓の上へ九官鳥の籠と小さな擂鉢とを置いて、鳥に餌を遣つて居る。

倉太郎（小聲で鳥に）おい、いつて見な。奥さま……奥さま……おい、奥さまだよ。あれほど教へたのにもう忘れちまつたのか。さあ團子を大きくして遣るから一ついつて見な。奥さま……奥さま……焦れつてえな、おい、お孃さまだつて。うゝんさうぢやない。一ことでいゝから奥さまといつてくれ。よ、いゝか。奥さま……。

（左手の扉そろ／＼と開き小間使お粂、二十四五、顔をさし入れて金澤の言葉を聞き付け、にや／＼笑ひながらはいつて來る。）

お糸　ちよいと倉さん、ぢやあお前さんだね、九官鳥に「奥さま」を教へたのは。
倉太郎（すこし狼狽して）わたしだつたらどうだといふんだ。
お糸　誰が教へたのだいと、けさも奥さまがお訊きなすつたよ。
倉太郎（眼を輝かして）で、お前なんといつた。
お糸　自然と覺えましたのでせうつて申上げたわ。（金澤の顔に失望の色があらはれる。小聲になつて）するとね後がどうだらう。奥さまは北叟笑んで、服部さんぢやなからうかとさ。
倉太郎（憤慨して）あいつは色魔だ。
お糸（冷笑して）色魔だつて。さういふお前さんの方がよつぽど色魔ぢやないか。九官鳥は度々手掛けて居りますとかなんとか、お爲めごかしにお守り役を引き受けて、九官鳥に取持役を勤めさせるなんぞはねえ。
倉太郎（拳で脅して）こいつを見ろ。こいつを見ろ。
お糸　なんだよ。そんなにむきにならなくつたつていゝよ。服部さんが繁く來るのはお前さん、旦那さまにも奥さまにも用があるんぢやないやね。それを奥さまが……。
倉太郎　もう分つたよ。うるせえな。
（金澤は餌を奥へ終つて籠を右手の植木臺へ移して、鳥の擧動を注意して見る。お糸その方へ行き、袂より二つに折れた中差しを出して彼に見せる。）
お糸　御覧よ。また拜領さ。
倉太郎　どれ見せな。（手に取つて）貝入りだな。こりや廉く買へないや。一寸接げばいゝ。旨いことをしたな。（一寸匂を嗅いでにやりとして返す）
お糸　なにね、今奥さまがおぐしをお上げなすつたらね、どうだらうお前さん、白髪が二筋三筋梳櫛に掛かつたんだよ。
倉太郎（顔を曇らせて）いくら器量自慢でも、もう三十越してるからな。
お糸　それでね。止せばいゝのに髪結さんが、まあ御覧遊ばせとかなんとかいつて、白髪を目の先へ突き付けたから堪らない。なんだ、お前さんはわたしを馬鹿にするのかつて、すつかり怒つておしまひなすつてね。けだもの、畜生の連發でまだ足りなくつて、傍にあるものを手當次第に抛り付ける、毟り毀すといふ騒動が始まつたんだよ。
倉太郎　そこでそいつも名譽の負傷をしたといふ譯なんだな。
お糸　さうなの。でもね元々あの人の腕のいゝことはよく承知してらつしやるし、これから來なくでもなからうもんならお前さん、お自慢の大一番を格好よく頭へ載つける

ことが出來なくなるでせう。だからすこし氣が鎮まつて來ると、奥さまは急に今度は髪結さんの御機嫌を取りはじめて……本當に傍で見てゐて噴き出したい位だつたわ。（間を置いて）だけど奥さまは どうして あゝいつもいらいらしてばかりいらつしやるんだらう。奉公人は骨次だわ。

倉太郎　でもお前なんざいゝ株ぢやないか。（流行唄の調子で）「おこるたんびに得をする。」（お兼むつとしてつれる）あいて。

お兼　このお邸はまるで動物園か花屋敷見たいだね。

倉太郎　どうして。

お兼　だつて朝から晩まで、畜生、けだもの、とのべつに遣られるんだもの。

倉太郎　いゝやな。鈴を振るやうな聲で、畜生、なんて浴びせ掛けられるのも惡くはないぜ。

お兼　だつてあんまりぢやないの。あたしあんなこはい奥さまはじめてよ。

倉太郎　それから「あんなお綺麗な」といひ足しても損は行くまいぜ。もう一遍見せな。（中差しな手に取つてひねくつてゐたが、突然）おい今度も買ふぜ、上値によ。

お兼　（にやりとして）お株が始まつたよ。あれ、いけないよ。ハンケチや手袋とは譯がちがふんだからさ。（取り返さうとあせる）

倉太郎　（係はず中差しな衣兜に入れて上から抑へ、片手に搖鉢を持つて正面の扉へ大股で行き掛ける）まあ、いゝやな。まあいゝやな。部屋へ一緒に來な。すぐと拂つて遣らあ。

お兼　（泣聲出して）いやだつてばさ。よう、いけないよ。

（倉太郎正面へ急いで入る。お兼後を追ふ。短き間、左手より廣瀨の妻雪枝入り來たる。背のすらりとした美婦人。實際は三十三歳であるが思切つた若作りのため、二十五六としか見えない。流行の粹を凝らした服裝。）

雪枝　（結ひ立ての丸髷の鬢に手を當てながら椅子へ腰を下ろさうとして）おや。いゝ匂がすること。（窓の方を見て）丁字が咲いたよ。どおれで。（窓へ行つて開け）まあ、いゝ匂だこと。（目を細くして香を嗅ぐ。短き間。恍惚として空中へ呼び掛けるやうに小聲で）服部さん……服部さん……。（突然我に返る）

（廊下で笑ひ聲がして、すぐ農學博士廣瀨浩三と法學士服部進とが正面より入り來たる。浩三は四十六歳、づんぐり太つた體格。禿げ掛かつた頭。目尻の垂れた赭ら顏。眼鏡を掛ける。流行の洋服。學者よりも寧ろ實業家らしい快活な如才ない態度。仕方話をする癖が

ある。進は二十七歳。色白の痩形で丈は高い方。鼻下の髭の芽生を除いてはすべて子供々々した顔立ち。言動は明確に書生風より紳士風に推移しつゝある過渡期を示す。才子肌であるが流石に貴族風の鷹揚なところとお坊ちやん風の初心らしさとを失はない。洋服。）

浩三　（笑ひながら服部を顧みて）　すると君は完人を欲してゐる譯だね。

進　（熱心に）　さうでございます。なぜ、人は一部の專門に跼蹐しなければならんのでせう。僕にはそれがどうしてもわかりません。

雪枝　服部さん、どうも失禮をいたしました。

進　どういたしまして。今までお書齋で先生から色々お話を伺つて居りました。

浩三　（冗談らしく）　お話を伺つたのは吾輩ぢやなかつたかしらん、（雪枝に）　服部君一人流の完人論をすつかり聞かされちやつた。

雪枝　完人。完き人でございますの。

浩三　さうだよ。手つ取り早く云へば、理想的人物は一人で法醫文理農工の六分科の博士を兼ねなければならんといふ議論なんだ。

雪枝　（輕く笑ひ）　まあ大變ですこと。

進　（眞面目で）　ですけれど先生、それが不可能だといふ反證の舉がらない限り、可能であると僕は信じて居ります。しかし僕には出來さうもありません。それがなにより殘念でございます。（子供らしく悄氣る）

浩三　（慰めるやうに）　まあ〳〵、議論はこの位にして置いて。（雪枝に）紅茶でも入れないか。（安樂椅子に掛ける。進も卓に就く）

雪枝　はい。お菓子でも附けて參りませう。（行き掛ける）

お兼　（正面より名刺受を捧げて出て來て、雪枝の前に立つておづ〳〵と）　奥さま、斯様いふ方が……。

雪枝　（名刺を見て）　あら、また。新聞記者や雜誌記者には一切會はないと、あれ程いつて置いたぢやないか。それだのになぜ取次ぎなんぞするんだい。

お兼　（困惑の體で）　はい、それはあの……さう申したのでございますが……なにせえ……どうしても取り次いで……。

雪枝　なにいつてゐるんだよ。早く歸しておしまひな。（お兼の躊躇するを見て赫となつて）　馬鹿だね、お前は。

（お兼戰慄して逃げるやうに去る。）

浩三　（眉を顰めて）　なぜさういつも口汚くいふんだな。

雪枝　（投げ付けるやうに）　これがわたしの病氣なんですから、仕方がございませんよ。（ぷいと左手へ入る）

浩三　（雪枝を目送して忌々しさうに舌打したが、向き直つ

て笑顏を作り）君の議論の當否よりも、むしろ君がそんな議論を吐くといふこと、そのことがわたしには興味があるね。（やゝ誇張した身振をして）新法學士。恩賜の時計。生れて始めて手に取つた官廳の辭令書。新調の背廣。無理もない、無理もない。わたしも一度現に君が抱いて居るやうな思想を經驗したことがあるよ。無論々旨も言葉も違ふがね。なんでもその時分は、君一人に讀んで貰ふために書いたのだからといつて、送つて寄越された書物の頁を、ペーパー・ナイフで一枚々々截つて行くといつたやうな晴れがましい胸の躍るやうな氣持で、世間とか事業とかいふものを考へてみたものだつたよ。十五年前のわたし。さうだ……君をそばへ引き付けてゐると、なんだか斯樣自分の若さを再び取り返したやうな氣がするよ。（笑ふ）

進　（物案じ顏に）　さうでせうか。先生、つかんことを伺ひますが、先の奧さまと御結婚なすつたときはおいくつでした。

浩三　丁度君の年配だつたよ。その翌年弘子が生れたのだ……。（立上つてあちこち歩く）

（お兼左手より紅茶と菓子とを運んで來て卓に載せて退がる。）

浩三　（間を置いて）　どうしてそれを聞くのだね。

進　（躊躇して）　先生、僕は家を持たうかと思ひます。

浩三　（立止つて）　なに、家を持つ。

進　（辯解するやうに）　僕が官吏になりましたもので國の母が……。

浩三　（進の側へ坐つて）　それは不思議な暗合だ。今日君を呼んだのも、實はその話なのさ。君に一つ細君を世話しようと思つてゐる。（紅茶を）　さあ、遣りたまへ。

進　はあ、有難うございます。（呑む）　折角でございますがそれはお斷りいたします。

浩三　おや家を持つといつたのは。

進　（切な氣に）　先日も局長さんから仲人して遣らうといはれましたが、きつぱりお斷りしました。

浩三　では國許に許嫁とでもいふものが……。今までついぞそんな話は聞かなかつたが……。

進　許嫁なんぞありはいたしません。ですがお世話は堅くお斷りいたします。

浩三　君のいふことは腑に落ちないが……お世話（椅子の背を叩いて）成程。（傍白のやうに）　ちと切り出し方がまづかつたかな。（向き直つて）　外でもないが君……。

（正面より娘弘子入り來たる。十七歲。小造りで丸ぽちやの愛くるしい顏付。束髮であるがゴム櫛を差した他、何の裝飾も付けて居ない。毛繻子のガウンを着て

包を抱へて居る。）

弘子　（左手の戸口へ行かうとして両人に氣付いて間の惡るさうに赧くなる。浩三に）お父さん、只今。（進に口の中で）いらつしやいまし。

（進立上つて無言で挨拶する。浩三は娘の姿を見るなり澁面作つて立上り、背中を向けて不愉快さうに強く舌打する。）

浩三　（振向かずに）早く着換へて紅茶の仲間入りをおし。

弘子　はあ、只今。（左手へ入る）

浩三　（あちこち歩きながら）君は實際許嫁もなにもないのか。それから他に心にかけた婦人といふやうなものも……。

進　（やゝ僞善的に語氣を強めて）決してそんなものはございません。

浩三　（頷いて）そんならよろしい。

倉太郎　（正面より入り來たり）旦那、日清製糖の小寺さんがお出でになりました。

浩三　客間へ通せ。

倉太郎　は。（入る）

浩三　晝間は兎角人が來て落着いて話が出來ん。ぢや一寸失敬する。

進　さあ、どうぞ。

（浩三正面へ入る。進立上つて目送し再び腰を下ろして、雜誌を繙き頰杖を突いてぢつと見る。左手より弘子コーヒーを運んで出て卓に置く。彼女より十歲も年上のものに相應しいやうな地味な服裝をして居る。）

弘子　（見廻して）おや。お父さまはどこへいらしつて。

進　應接間でお客に會つてお出でゝす。

弘子　（無邪氣に）さうですの。（紅茶の茶碗を左手の戸口まで運んで、外に居るものに渡して卓に戻り）コーヒーに代へましてよ。あなた紅茶よりコーヒーの方がお好きでしたわねえ。召し上れな。

進　（嬉しさうに）はあ、有難うございます。（呑みながら）土曜日でも晝切りではないのですか。

弘子　（進より離れて腰掛けて呑みながら）えゝ。來月學校でバザーを遣りますので、その賣品をこしらへるために、今週から毎日一時間か二時間位殘ることになりましたの。

進　それはなか／＼お忙しいですね。

弘子　さういへば、今年は變つたことがありますのよ。いつもバザーと一緒に遣る演奏會ね。あれで今年はわたしの級の鶴岡さんといふ方がノヴリスといふ人の詩を朗吟なさるの。うちの學校では今まで英語や佛蘭西語の詩な

ら隨分遣つた方がありますが、獨逸語の詩ははじめてなんですよ。ですからもう今から學校中の大評判ですの。ノヷリスつて獨逸人。どうした人ですの。

進　(沈鬱に)　さうです、獨逸人です。十五で亡くなつた戀人を一生忘れ得なかつた熱狂詩人です。(溜息をついて)ノヷリス……ノヷリス……。(ぢつと考へ込む)

弘子　あら、どうなすつて。

進　(突然)　弘子さん、早いものですねえ。先生やあなたに僕がはじめてお目に掛かつてから、今年でもう足掛五年になりますよ。

弘子　まあそんなに。さうですわねえ。あのときわたし十三でしたもの。

進　僕は二十三でした。獨法の一回の試驗を終へてからすぐと伊香保へ行つたのでした。

弘子　あのときは本當に御厄介になりましたわねえ。

進　そりや僕のいふことですよ。僕は本當に樂しかつたと思ひます。よく御一緒に散歩しましたね。一度物聞山へ登つて花を摘みながら、うか〱二ッ嶽の麓まで行つてしまつて、歸りにあなたが歩けなくなつて、僕におぶさつてお歸りなすつたことなんぞありましたね。

弘子　本當にそんなことがありましたわねえ。あの時ですわ。わたしが芒で頰を切つたのでおばあさまに大變叱られて、あなたがお詫びして下すつたのは。

進　(笑ひながら快活に)　さう〱。「服部さん、女の子には顔が一番の寶なのを御存知ありませんか。」とおつしやられたときには全く閉口しましたよ。おばあさまは本當にあなたのことを思つていらつしやいますねえ。

弘子　えゝもうそれは……わたしが十の時に先のお母さまが亡くなつて、翌々年、丁度あなたにお目に掛かつた前の年に、今のお母さまが入らしつても……わたしなんだかお姉さまのやうに思はれて、ちつともお母さまの氣がしませんでね……おばあさまをお母さまだと思つてゐますもので餘計……おばあさまはねわたしがこんなに大きくなつてもやつぱり、五日とわたしの顔を御覧なさらないとそれはそれは心配なさるのよ。でどうかすると御殿山の伯父さまのとこから電話が掛かつて、おばあさまが弘子にすぐ會ひたいとおつしやるから、急いで來るやうにつていふので、何事が起つたかと思つて大あわてゞ自動車で駈け付けて見ますと、あゝ達者だね、もういゝからお歸りつていはれて、拍子拔けがしてすぐと歸つて來ることなんぞありますの。

進　さうですか。お年寄といふものはみんなさうしたものですよ。あゝ、それからね、赤城山はまだ赤く夕日に照らされてゐるのに、もう薄暗くなつた宿の廊下で、あな

たはよく「人形の歌」や「浦島太郎」を歌つておいでゝしたね。（咏嘆的に）艶々した黒髪をお垂げにして、大好きな色だとおつしやつた勝色の縞のはいつた、夏のリボンを大きく涼しさうに結んで、やはり勝色の矢絣に似た柄のちゞみを着て、黄色い兵兒帯を締めて立つた後姿は、未だにあり〳〵と眼の前にあらはれるやうですよ。

弘子　（驚き呆れて）　まあ。よく覺えてらつしやることねえ。

進　（力を入れて）　覺えてゐなくてどうします。あの時分は本當にあなたは活潑でしたねえ。よく僕が廊下に立つてゐますと、あなたが燕のやうにひらりと飛んで來ては、ちよいと抓つて逃げていらしつた。甚しいときにはさう遣つて、日に二十度も抓られたことがありましたよ。それでゐてあなたはなか〳〵すばしこくつて捉まらなかつたものです。（愉快さうに笑ふ）

弘子　（赧くなつて）　まあ。そんなことまで覺えてらしつて……、わたしどうしたらいゝでせう……。（顏を伏せる）

進　（女をぢつと見ながら）　えゝ、一生忘れませんよ。どうして〳〵忘れるもんですか。

弘子　なんでも覺えてらつしるんですもの……恥しくてなりませんわ。

進　（いら〳〵して立上り一寸歩き廻つて卓の側に立ち）　弘子さん、お聞きなさい。かういふ珍しい話がありますよ。有名な獨逸のビスマルクが露西亞のペテルスブルグに滞在してゐた時の出來事なんですが、或る日露國の皇帝と連れ立つて宮城の御苑を散歩してゐるうちに、とある芝生のところへ出ました。見るとその眞中に番兵が儼然として立つてゐます。そこでビスマルクがあの番兵はなんのために立つて居るかと尋ねたところ、皇帝も皇帝のお附きの人達も返答が出來ません。そこで立つて居る番兵に尋ねると、「御命令でございます。」と答へるばかりなのです。すこしも要領を得ないので、お附きの人達は今度は士官に尋ねました。聯隊長に尋ねました。旅團長に尋ねました。師團長に尋ねました。ですが誰を尋ねて見ても版行で捺したやうに、「御命令でございます。」の一點張なのです。

弘子　（好奇心を挑發されて）　まあどうしたんでせう。不思議ですわねえ。

進　（絶えず女の態度に注目しながら）　そこで書類を調べましたが一向わかりません。……しかし番兵は依然として立つて居ます。さうしてゐるうちに到頭、こちらでいへば舍人とでもいふやうな役を勤める老人が、矢張り同役をしてゐたその親父から以前に聞いたことがあると

いひ出したので、やつといはれがわかつたのです。それはかうなのです。（一句々々に力を入れて）その時から三十年ほど前に亡くなつたカタリーナといふ有名な女王が、そのところで早咲きのスノードロップを見付けて、摘まれないやうに氣を付けておくれと、何氣なくいはれたのです。そこで番兵を立たせてその花を護衞したのが、到頭そのときまで續いたといふ譯なのです。

弘子　まあ、露西亞人は辛抱强いんですことねえ。

進　辛抱强いばかりでなく、どこかいぢらしいところがあるぢやありませんか。

弘子　ですけどをかしいわ。その女王といふ人は自分が何氣なくいつた言葉が、家來達にどういふ風にとられたか、又そのために家來達がどれほど騒ぎをしたか、生きてゐるうちに氣が付きさうなものぢやありませんか。

進　女王などといふものは大抵思ひ遣りのないものですからね。大方自分のいつたことをすぐ忘れてしまつたか、それとも知つてゐながら平氣でゐたのでせうよ。（戲談らしく）あなたがその女王でしたらどうか知りませんが……。

弘子　わたしがその女王でしたら、とおつしやるの。

進　（息を跳ませて）さうです、さうしたら……あなたはどうなさる。

弘子　（困惑の體で）どうつて……あなたのおつしやることはわたしにはちつともわかりませんわ。（耳許まで赧くなつて口の中で）御免遊ばせ。（立つて逃げるやうに小走りに窓へ行きカーテンをいぢる）

進　（一寸女の後姿を見詰めて躊躇の體であつたが、徐かにその方へ行き）僕がなんでこんな話をしましたか、あなたは全くおわかりになりませんか。

弘子　えゝ。いゝえ……すこしはわかつて來ましたやうですけど……。

進　それで……。

弘子　けれどなんと御返事していゝやらわたし……。

進　（歡喜して）えつ。そんなら……。（擦り寄らうとする）

弘子　（ふと窓の彼方を見て駭いて）あれ、お母さまが……、（卓へ走つて行つてコーヒー茶碗を片付けながら、獨語のやうに）お母さまはこはいわ。

（進いら〳〵してあちこち歩く。正面より雪枝入り來たり兩人をじろ〳〵見る。）

雪枝　あの、弘さん、おばあさまからお前さんにすぐお出でなさいつて、電話が掛つて來たから、手廻して支度をなさいよ。

弘子　（母の眼を避けながら）はい。

浩三　（正面より入り來たり）　自動車を用意させた。弘子、すぐ行くがいゝ。（笑ひながら）また例の、もういゝからお歸りかも知れないか。

弘子　（笑ひながら）　えゝ。またさうかも知れませんわ。

（コーヒー茶碗を運んで雪枝と一緒に左手へ入る）

浩三　君、退屈したらう。

進　いゝえ、お孃さまとお話して居りましたから……。

浩三　君はあれをどう思ふ。

進　どうといつて別に……。

浩三　非難すべき點があつたら……つまり處女としてだね。遠慮なくいつてくれたまへ。

進　ある筈はございません。ですがたつた一つ腑に落ちないことがございます。それは……こんなことを申してはなんですが……お孃さまはどうしてお年相應のなりをなさらないのでせう。どうして奧さまよりも老けた作りをしていらつしやるのでせう。たしか十四五まではあゝではなかつたと思ひますが……。

浩三　それ〳〵。だれが君、年頃の娘がすき好んであんな質黑けな婆さん染みた着物を着るものかね。あれはみんな雪枝の計ひなのさ。（溜息吐く）

進　どうしてそんなことを奧さまが……。

浩三　（反語的に）　高等教育の結果さ。雪枝はこの家へ來るまで西洋人の家へ預けられて、尼のやうな取扱を受けてゐたもので、自分の受けた待遇が即ち少女の當然受けるべき待遇だと堅く信じてゐるのだ。

進　なるほど。それでわかりました。ですがお若い身空ではどんなにかつらいことでせうなあ。

（左手より雪枝、その後より弘子以前のガウンを着て入り來る。）

浩三　（澁面作つて）　またその服か。

雪枝　（挑戰的に）　生徒が學校の制服を着るに不思議がございますか。

浩三　おばあさまが會ひたいとおつしやるのは自分の可愛い孫だ、英蘭女學校の生徒ぢやないぜ。だからせめてリボン位……。

雪枝　（言葉を遮つて）　あなた何をおつしやるの。弘さんのことは一切お前に任せる、この上は一言も嘴を容れないとおつしやつたぢやありませんか。それですからわたしはあの學校へ上げたんでございますよ。女學生の風俗が年々華美に流れるのを心配して、質素に質素にと心掛けるあすこの遣り方が氣に入つたからですわ。通學の際、外出の際には必ず制服を着けること、簪やリボンは一切つけてならないこと、といふ規則が第一に氣に入つたからですわ。あなたは學校の規則を家庭でぶちこはせとお

つしやるんですか。事情の許す限りなるべく家庭でも制服を着せて下さるやうにと校長さんがおつしやつたのにあなたは大反對をなさいましたね。

浩三　（苦々し氣に）　さうさ。この家は尼寺ぢやないからな。

進　（思はず釣込まれて）　さうでございますとも。

雪枝　（服部に）　なんですつて、ぢやああなたもやつぱり、リボンをひら／＼させて友禪でも着たのを見たいのですか。男といふものはなぜから揃ひも揃つてうはべのことばかり考へるのでせう。無理もないわね。あなたなぞはお酌から縮緬書を貰つて喜んでゐる年配ですからね。（進赧くなる）あら、お怒りなすつちやいけませんよ。冗談ですよ。（作り笑をして弘子を促して）さ、弘さん。

弘子　（浩三に）　では行つて參ります。

浩三　行つてお出で。お父さんは明晩伺ひますといつておくれ。

弘子　はい。（服部に）御免遊ばせ。

進　いつてらつしやい。

（雪枝弘子正面へ入る。）

進　（不安に）　先生、奥さまは僕に對して感情を害していらつしやるんでせうか。

浩三　（鋭く笑つて）　そんなことがあるもんか。あゝいふ風にするのがあれの常用手段なのだ。動物學者の所謂警戒色なのだ。女といふ弱い動物が、男といふ強い動物に對する嚇かしなのだ。おれに觸るとからい目を見せるぞと、朝から晩まで家中のものを威嚇して歩く。といふのは元々自分が弱者だといふことを意識してゐるからだよ。思へば滑稽のやうないぢらしいものさ。いゝかね君、これからもあれが何をいはうと決して氣にしちやいかんよ。一々氣にしてゐた日には半日と一緒にゐられるものぢやない。

（この間に自動車の出て行く響次第に遠ざかつて雪枝歸り來たる。）

雪枝　金澤は本當に馬鹿ですね。奥さまもいらつしやらないのですかつて。わたしが御殿山へ行つたつて始まらないぢやありませんか。

浩三　（不興氣に）　どうして始まらない。

雪枝　だつてわたしがこちらへ參るに就いて、第一に反對なすつたのはおばあさまだといふぢやございませんか。

浩三　なんだつて急にそんなことをいひ出すのだ。

雪枝　でも今自動車の出て行くのを見てゐますと、弘さんはもう二度とわたしのところへ歸つて來ないやうな氣がしたものですから……、いえ／＼、確かに弘さんは遠いところへ遠いところへと段々逃げて行つてしまひます。

むかふにゐてお出で〳〵をする人があるからですよ。

浩三　おばあさんのことをいふのだな。

雪枝　いえ、おばあさまばかりぢやございません。（調子を緩へて）おばあさまは先の奥さまが大のお氣に入りだつたさうですね。

浩三　（激して）何を譯の解らんことをいつてるのだ。おばあさんとお前が一緒にゐたのが伊香保の一夏切りだつたといふのも、新らしい頭と舊い頭がそぐはぬからとい へばいふものゝ、詰りはお前の仕向けが惡いから起つたことなんだぞ。

雪枝　どういふ仕向けが惡かつたのでございます。

浩三　お前はあまり我儘だ。自分の思ひ通りになにからなにまでてきぱき遣らうとする。それに一番惡いことには、年寄を尊敬することを一向知らん。

雪枝　年寄と病人はわたし大嫌ひなんでございますよ。

浩三　（激して）又そんなことを。實にお前は手前勝手な思ひ遣りのない女だな。おばあさんのこともさうだが、弘子のこともさうだ。飾りたい盛りに娘に尼見たいな服装をさせて、それでお前は可哀想ともなんとも思はないのか。

雪枝　弘子々々つて、このうちは弘子よりほかに人がゐないのではありますまいし。そんなにお氣になさるのなら弘さんをあなたのお好きなやうになさいましな。農學博士の娘かお前や深實婦と間違られようとどうしようと、わたしはもう一切係ひますまい。えゝ〳〵、さうでせうとも、わたしのやうなばばあより、若い娘のお世話がよつぽどし榮えがあるといふものです。おまけに弘さんは死んだあの子のお母さまに生寫しださうですから、尚更ですわ。

浩三　（赫となつて）黙れ。黙らんと承知せんぞ。服部君も見てゐるところで、そんな……怪しからん……實にどうも……。

進　（もぢ〳〵しながら）先生、御免下さい。（行き掛ける）

浩三　あゝ君、晩までゐてくれなくちや困るよ。

進　（正面の戸口で）いえ、一寸……あの、電話を拜借いたすのです。（入る）

浩三　あゝ、さう、（雪枝に）なぜお前は人の前でそんなことをつけ〳〵いふんだ。まあ、こゝへ來なさい。（雪枝の肩を掴んでソファの方へ推し遣る）

雪枝　（ヒステリカルに）あれ。なにをなさるんですよ。離して下さい。

浩三　まあいゝ〳〵。（雪枝をソファへ押据ゑてその側へかけ、諭すやうに）どうしたんだ一體。落着いてわしの

いふことを聞け。お前それではわたしに濟むまいぜ。わたしはこれまでお前をどれほど愛してゐたか知れないぞ。廣瀨の家は女天下だと新聞に書き立てられるほど、お前のいふことならなんでも通して來たのに、それでもまだお前は不足なのか。お前が一步でも東京を離れるのは厭だといふから、九州農工銀行の頭取の椅子も、鮮滿拓殖會社の社長の椅子も、自分の前に据ゑられたのをみす〳〵人に讓つてしまつたぢやないか。これに就いては世間の義理も缺いたよ。自分の功名心も抑へ付けたよ。それぱかりぢやない。第一お前のためにわたしは衣食住……生活方法をがらりと變へたぢやないか。この家を西洋館にするに就いては、お母さまからも兄貴からも反對を受けたが、わたしは係はず斷行したぞ。誰のために斷行したのだい。おまけにお前のいふなり次第に設計させたぞ。元來わたしはしたの三分の二を客間にして、二階には踊り場と、それから片付ければ寢室になる玉突場を取る案を立てたのだが、それをお前は一言の下にぶちこはしてしまつたな。さうしてなんといつたか覺えてゐるか。

雪枝　えゝ覺えてゐますわ。「あなたはおうちでわたし以外の女が踊るのを御覽になりたいのですか。」とかういひましたわ。

浩三　それを聞いて強いところのある女だと實は感服したので、わたしが一步讓ると、得たり賢しとお前は持論を持ち込んで來たな。「家は城なり。」といふ持論をさ。

雪枝　（興奮して）さうです。家は城です。家は城です。公園でも劇場でもありません。妻の化粧室を本丸にした城です。たつた一人の城主がたつた一人の賓客を迎へる城です。あなたが賓客でわたしが城主なのです。ですから壁紙一枚でもわたし自身でえらんで城を建てませうといつたのです。

浩三　誰もお前をこゝの城主でないとはいはんさ。だけどお前が城主だからといつて、弘子が召使扱ひされなけりやならんといふ理窟はなからう。

雪枝　いつ召使扱ひいたしました。

浩三　（激しく）弘子のなりはありやなんだ。お前のと比べると確かに城主と召使ほどの相違があるぞ。どうだ貴はないかと自慢して見せられる風をしてゐるか。先刻もあの尼さん染みた毛繻子の制服を見たので、服部に切り出す勇氣が失くなつてしまつたぢやないか。

雪枝　ぢや、あなたは、弘さんを服部さんへ上げようとおつしやるんですか。

浩三　なにをいつてるんだ。あれほど承知しましたといつて置きながら。

雪枝　それは申しました。ですが昨晩はあなた御酒を召し上つていらしつたぢやありませんか。ですからはい〳〵と逆らはずにゐましたのですよ。實のところわたしは不承知なのでございます。

浩三　そんならその理由を云へ。二人共氣が合つてゐると夙から見て置いた。殊に服部の方で乘氣になつてゐるのは確かな事實ぢやないか。

雪枝　ですが服部さんは浮氣者らしうございますわ。もしものことがあらうものなら、弘さんが可哀さうですわ。

浩三　そんなことがあつて耐まるものか。服部が家へ遊びに來るやうなつてから足掛五年といふもの、わたしはよく〳〵注意して見て居た。堅い男だ。意志の強い男だ。眞面目な男だ。どうかこの眼を信用してくれ。

雪枝　おやあ服部さんが堅いとして置いて、弘さんをお出しなすつてから後はどうなさるお積り。

浩三　後はどうなさるとは。

雪枝　弘さんがよそへ行つてしまつたら、この家はだれが嗣ぐのでございます。

浩三　（立上つて）誰が嗣ぐ。きまつてらね、子供かさ。

雪枝　養子をするのですか

浩三　（雪枝の身體をぢつと見据ゑながら）さあ、養子の必要があるかな。

雪枝　養子をする位なら、一層のことうるさい子供などもたないで暮した方が増しですわ。

浩三　むつかしいことをいはずに、後嗣ぎをお前の腹から出せばいゝぢやないか。

雪枝　お生憎さま、わたしの身體は子供が持てないやうに出來て居りますわ。

浩三　（嘲笑つて）なにをいつてるんだ。お前が姙娠したのをまだわたしが知らないと思つてるのか。（正面より出て行く）

（雪枝切齒して懊惱する。長き間。進左手の扉をそろそろ開けて内を覗ひそれからはいつて來る。）

進　先生はどこかへいらつしやいましたか。

雪枝　（振向かずに投げ付けるやうに）弘さんはまだ戻りませんよ。

進　お孃さまぢやございません、先生はどちらですかお尋ねするのです。

雪枝　（以前と同樣に）ですから弘さんはまだ戻りませんと申してゐるぢやございませんか。

進　（むつとして）ではこれで失禮いたします。どうか先生によろしく。（急いで正面の戸口へ行く）

雪枝　（彼は馳け寄つて）あれ、お歸んなすつちやいけませんよ。また癇癪にわたしが叱られますから。ね、お願

ひしますからもつといらしつて下さい。なぜさうお怒んなさるの。

進　なんぼなんでもあんまり御嘲弄が過ぎるといふものです。

雪枝　（歎願するやうに）わたしが悪うございました。勘忍して下さいな。むしやくしやしてゐたすのですからつい……ね、本當に勘忍して下さいましな……。

進　どうせ僕は小僧ッ子學士ですから……。

雪枝　まあそんなことをおつしやらないでね。機嫌を直して下さいよ。ね、わたし何度でもお詫びしますわ。ね。わたし獨りでゐるとくさ／＼して死にさうなんですよ。お願ひしますからすこしの間こゝにゐて、わたしの相手になつて下さいましな。ね、ね、いゝでせう。こちらへいらつしやいよ。

進　（不承不性にソフアへかけて）僕はいつまで怒つてゐやしませんが……。

雪枝　（傍へかけて）さうですわ。あなたは優しい方ですもの。（間を置いて）服部さん、人間はなぜ年を取るのでせう。

進　（機嫌を直して）さあ、僕にも分かりませんな。ですが奥さま、あなたなどはそんなことをお訊きになる資格はない方ですよ。いつ拜見してもお若いぢやありませんか。

雪枝　伊香保でお目に掛つてからこの方、わたし随分お婆さんになりましたでせう。

進　いえ、どうして、段々お若くおなりのやうですよ。

雪枝　（小娘の如き蓮葉な大膽な表情をして）まあ。なんといふ憎らしいお口でせう。そんならいくつに見えまして。

進　（微笑みながら）さあ。二十五、六といふところでせうか。

雪枝　（以前と同様に）あら。嘘ばつかり。

進　（眞面目に）いえ、實際ですよ。

雪枝　（徐かに）でもいくら若く見えてもぢきに年を取りますわ。髪の毛が抜け落ちたり、白髪が生えたり、腭の肉が落ちて尖つて來たり、額に皺が寄つて來たり、肌の肉が硬ばつたりするやうになりますわ。ねえ服部さん、あなたもわたしもこの世に産れて來る時に、さぞ母親に年を取らせたことでせうね。（頭を垂れて考へ込む）

進　どうなさいました。大層沈んでゐらつしやいますね。

雪枝　（顔を擧げてなかば獨言のやうに）いえ／＼。年を取りたくない。この儘しぼんでしまひたくない。いつまでも／＼活々としてゐたい。ねえ服部さん、それが本當でせう。ですからわたしの知つてゐる奥さまの中には、遊

藝だの手藝だのに凝つてお年を忘れようとなさる方がありますが、わたしにはそんな面倒臭い眞似は出來ませんわ。わたしはあなたのやうな若い方とお話してゐますと、いつまでも十七八の娘のやうな氣でゐられて、なんともいへず樂しうございますの。（擦り寄る）

進　（すこし脇へ退いて）人間はいつまでも若々しく、樂しく生きる權利を持つて居ります。奥さまなぞはこの權利を思ふ存分、御使用の出來る幸福な地位に立つて居られるのですよ。

雪枝　なんでさうなものですか。わたしが本當に幸福なら、こんなに苦しい思ひはしませんわ。

進　御心配なことでもおありなさるのですか。

雪枝　服部さん、後生ですから聞いて下さい。何も彼もお話しますから聞いて下さい。これはまだ廣瀨にも話さないことですよ。話してもてんで頭から茶化されてしまひますもの。服部さん、わたしには自分といふものがまるでありませんのよ。

進　飛んでもない話です。奥さまのお口からそんなことを伺はうとは……。

雪枝　いゝえ、ありはいたしませんのよ。わたし一人ばかりでなく、一體女に自分といふものがありませうか。こんなことを考へるといつもあれを思ひ出しますの。（鳥籠を指差す）

進　九官鳥がどうしましたか。

雪枝　あの九官鳥はもう一年餘りも飼つて居りますが、ついぞ自分の聲を聞かせたことがございませんの。その代りに人に敎はつたことはそりやよく饒舌りますわ。あの鳥には自分の聲がないのです。詰り自分といふものがないのです。ですから眞似ばかりして居ります。そつくりわたしですわ。わたしを手一つで踊ッ子のやうに育てゝくれた父。わたしに尼さんのやうな生活を強ひた牧師。わたしを旋毛の曲つた老孃から只の女に戻してくれた廣瀨。かうした人達からわたしは思想だの感情だのをそつくり受けて來ましたのよ。丁度こんな工合に、（九官鳥に物を云ひ掛けて鳥がそれに應ずる調子を眞似て）武士道。武士道。……貞操。貞操。……家は城。家は城。……家政。家政。……自由。自由。……まあこんな工合に吹き込まれて來ましたの。それでゐてこれがみんな自分の聲だと己惚れてゐましたの。わたしなんといふ馬鹿なのでせう。

進　（慰めるやうに）それは男だつて同樣ですよ。自我の發展とか自己擴張とか騷ぎ立てる連中に、本當に自分といふものがあつた例はないものです。勿論僕はさうは思ひませんが、假にあなたに自分といふものがおありなさ

らないとしてゞすね、今まであると思つてゐたが實際はないのではあるまいか、と疑ひ始めたその刹那に、自我が覺醒したのではないでせうか。疑ふ……だれが疑ふのです。自分ではありませんか。ですから「我疑ふ、故に我あり。」と云つた哲學者がありますよ。

雪枝　それはさうでせうけれど、それは理窟ですわ。理窟は慰めですわ。飢ゑて居るものには千萬言の慰めよりも一粒のお米の方が嬉しいのですわ。自分といふものをしつかり胸に抱いて居るといふ信念がなければ、心細くつて情なくつて頼りなくつて、ゐても立つてもゐられなくなりましたので、附燒刄でもいゝから自分といふものを造へて見ようといふ氣になりましたの。そこでまづわたしの思ひ通りに家を造へて貰ひました。それからわたしの思ひ通りの奉公人を置いて、思ひ通りのなりをさせました。それからわたしの思ひ通りに弘さんを世話しました。それから廣瀬にも、家では一から十まで、わたしの思ひ通りになつてくれるやうに頼みましたの。

進　（微笑みながら）つまり奥さまは專制君主におなりなすつたんですね。

雪枝　（會心の笑を洩らして）えゝ、さうなんですよ。さうして自分の城を築きましたのよ。

進　なるほど、それで弘子さんはその城の人柱にお立ちなすつた譯ですね。

雪枝　おや、妙なことをおつしやるのね。弘さんを犧牲にするどころか、あの子を嚴格に教育するために反つてわたしの方がなりました位ですわ。

進　その嚴格に教育なさりながら、あなたは無意識のうちにお孃さまを人柱にしてしまはれたのです。あなたはなんでございませう、御自分のお受けなすつた禁慾的教育を、一般の少女が受けるべき正當の教育だと思つてゐらつしやるのでせう。

雪枝　（怪しみ）だれがそんなことをあなたに申しまして。まあ、馬鹿らしいぢやありませんか。わたしは自分の青春時代を、花も實もないものにしてしまひました牧師先生を、未だに恨んで居るのですよ。

進　では先程英蘭女學校の質素な校風が氣に入つたから、弘子さんを上げたとおつしやつたのはどうしましたのです。

雪枝　（可笑しさに堪へぬ如く）まあ、厭ですこと。そんなこと本氣になすつて。ちよいと女教師の口眞似をして見たゞけですわ。あの鴉見たいな制服なんぞわたし見るのも厭ですわ。

進　（詰問するやうに）そんならどうして御自分の嫌ひなものを、弘子さんに强ひられたのですか。

雪枝　（鋭く）服部さん、この城の主はわたしですよ。ここへ迎へられる賓客も只の一人なら、それを迎へる城主も只の一人なのですよ。後は殘らず奴隷なのです。あの學校の制服は奴隷に着せるのに都合がよかつたからですよ。
進　（感動して）奥さま、あなたと弘子さんとは親と子ではありませんか。
雪枝　ところがこの城の賓客……廣瀨はわたし達を親子とは見ません。姉妹とも見ません。二人の女としてわたし達を見て居るのですもの。（間）
進　（肉薄するやうに）奥さま、あなたは御卑怯ですね。
雪枝　なぜですの。
進　なぜ率直におつしやらないのです。弘子さんを恐れてゐらつしやるんでせう。
雪枝　まあ、わたしがですか。
進　さうでございます。
雪枝　いゝしと、だれがあんな小娘を。（聲を潜めて）わたしが恐れてゐるのはね、あの子にあれほどの器量をのこして行つた人なんですよ……。（聲高に）いえ〳〵、嘘ですよ。そんなことがあるもんですか。疾の昔墓へはいつてしまつた人なんぞ、だれが恐がるもんですか。嘘ですよ嘘ですよ。こんなことどなたにもおつしやつちやいけませんよ。
進　いふなとおつしやるなら、決して申しませんから御安心なさいまし。さういへば奥さまはこゝは自分の城だとおつしやいましたね。（室内を見廻して）如何にもその通りですなあ。一度こちらへ上つたものは、誰でもどこの隅に立つても、奥さま、あなたの呼吸を感ぜずにはゐられませんよ。この部屋だつてさうです。すこし眼のあるものなら敷居を跨ぐや否やすぐと、奥さまの御設計になつたことを氣附くでせう。現に僕などは停留場を下りて、遠くに緑の中に聳え立つたお邸の西洋館を眺めますと、なんだか斯様煉瓦の一本々々にも、奥さまの血が通つて居るやうに思はれてなりませんよ。
雪枝　（喜色を見せて）それは本當ですか。時にもさういつて下さると嬉しうございますわ。（興奮して）さうです。この家は自分の城です。自分です……。（不安さうに）ですが堅固な城ほど内から崩れるといひますわね……。ひよつとして奴隷が城主に取つて代つたら……。
進　もうそんなお話は止めにして、何か外のお話をしませう。さう〳〵、先刻弘子さんと伊香保の話が始まつて面白うございました。弘子さんがおばあさまに叱られた話なぞも出て大笑ひしました。
雪枝　（微笑んで）さうですか。さういへばあの時分、弘

さんはあなたを眼の敵にして、逢ひさへすればぶつたり抓つたりしてゐましたわねえ。あなた覺えてゐらしつて。

進　（笑ひ）覺えてゐますよ。痛かつたですもの。なんでも多い時には日に二十何度も抓られたことがありますよ。本當にあの時分は弘子さんは無邪氣でゐらつしやいましたねえ。

雪枝　（くす〳〵笑つて）十二三の無邪氣な子供が、そんなことを自分からするでせうか。誰かに唆かされでもしなければ、どこの子がそんな眞似をするものですか。

進　（愕然として）ではだれか弘子さんを唆かしたものがあるとおつしやるんですか。

雪枝　（戲談らしく）まあねえ……。（立上り卓の方へ行きながら色目を使つて）それぢやあまるで張り合ひがないといふものですわ。

進　奧さま……。（深く恥ぢた樣子であわたゞしく立上つて）御免下さい。（正面の戸口へ行き掛ける）

雪枝　（彼に馳け寄り）どこへいらつしやるんですよ。

進　（しどろもどろになり）僕は官吏です……法學士です……。僕には未來があるのです……。そんな……そんなお話はもうこの上御免蒙ります……。

雪枝　（茶化すやうに）なんですね。女の子に抓られたつていゝぢやありませんか。履歴書へ書いて出しさへしなければお役所へは知れやしませんよ。

進　いいえ、お離し下さい。

雪枝　こんなことでお怒りなすつちやいけませんよ。わたしがなにをするものですか。びく〳〵なさらないで、まあこちらへいらつしやいよ。（ソファへ行つて手招きする）

進　（反抗的に）なにもびく〳〵しやしません。（ソファへ掛けて）これでも僕には未來があるのですよ。廉恥心があるのですよ。

雪枝　ですからどうもいたしはしませんよ。たゞねから還つてあなたと一つところで呼吸をしてゐたいばかりなのですよ。斯樣して居るとわたしはもう一遍若くなれます。もう一遍十代の心持に歸られます。わたしはどうあつてももう一遍若くならなければならないんですよ。（進が戸外の音響に耳を傾けて居るを見て躍鬼となつて）あれは宅の自動車ぢやありませんよ。（進の指を見て）まあ、中指をどうなすつたの。

進　これですか、ペンだこです。

雪枝　（中指を弄つて）まあ、固いこと。ですが外の指はなんて柔いんでせう。まるで女の手のやうですわ。（手を握る。玄關へ自動車の着いた響）お隣りへ着いたんですよ。

(進、雪枝に手を預けたまゝぢつと正面の戸口を見詰める。)

弘子の聲　(廊下で)　わたしきまりが悪いわ。お父さま、いやですわ。

浩三の聲　(同じく)　さあ、おはいり、おはいり。

(正面の扉が勢ひよく開けられて弘子推し入れられる。幅の廣いリボンを結んで、友禪の振袖を着てゐる。後に浩三立つ。進眼を瞬つて雪枝の手を振り放して立上る。雪枝悄然として獨りソフアにのこる。)

浩三　(上機嫌で)　似合ふぞ／＼。おばあさんは本當にお見立が上手だな。雪枝見なさい。おばさんが弘子にこんな綺麗な着物をこしらへて下すつたよ。それから帶もリボンも何も彼も。おい見ろ／＼。

雪枝　(冷靜を裝つて立上り)　おばあさまも餘計なことをなさるぢやありませんか。(左手の戸口へ行く)

浩三　(立腹して)　餘計なことゝはなんだ。(雪枝答へず入る)　怪しからんことをいふ奴だ。(すぐ機嫌を直して)　服部君、見て遣つてくれ給へ。いゝ柄だね。よく似合ふだらう。

弘子　(きまりを悪がつて)　いやですつてば、お父さま。

進　本當によく似合ひますね。ガウンをお着なすつた時とは、まるで別人のやうにちがひますね。

浩三　さうとも。もう二度とあんなものを着るな。これをいつも着てゐな。母さんが何をいはうとかまつたことか。この着物を脱いぢやおばあさんに濟まないぞ。

弘子　えゝ……でもさう御覽なすつちや……きまりが悪くつて……。

浩三　(進の肩を叩いて)　服部君、氣に入つたかい。

進　(狼狽して)　えゝ……。

浩三　君、わたしが世話しようといつたのは弘子なのさ。(間を置いて)　どうだね。貰つてくれるかね。

進　(強く)　はい。

浩三　それで安心した。(戯れるやうに)　どうだ君、この邸に新たに降臨ましました女王殿下の御健康を祝さうぢやないか。さうして女王殿下と御一緒に、おばあさんに對して感謝の盃を擧げようぢやないか。さあ食堂へ行かう、食堂へ行かう。

進　大贊成でございます。

弘子　あら、わたしいやですわ。

浩三　(笑ひながら)　いゝから來い／＼。

(浩三弘子の手を引き、進その後に隨いて左手へ入る。長き間。)

雪枝　(正面の戸口にあらはれ廊下へ向いて)　なぜお前は自分の一了簡で雜誌記者を歸したの。まあこつちへおは

いり。おはいりつてば。

お兼（おづ／＼入り來たり）あのう……雜誌記者や新聞記者は一切取り次いではならないと、さきほどおつしやいましたので……。

雪枝　嘘おつき。わたしそんなことといつた覺えはないよ。いゝかい。これからもあることだからいつて置くが、雜誌記者や新聞記者が來たらすぐ取り次ぐのだよ。

お兼　はあ、畏りました。

雪枝　それから慈善の切符を賣りに來たら、今迄のやうに斷つちやいけないよ。五枚出したら十枚お取り、十枚だつたら二十枚におし。いゝかい。わかつたかい。

お兼　はあ、わかりましてございます。

雪枝　わかつたら金澤を呼んで來ておくれ。

お兼　はい。（入る）

雪枝　もうだれがこんな崩れ掛かつた城にくすぶつてゐるものか……。あんな鼻ツ垂らしの小僧がなんだ。……（物案じ顏で）なんでもお母さまと廣瀨がぐるになつて、わたしに鼻をあかさせようとしたに相違ないよ……。

倉太郎（正面より入り來たる。落着かぬ樣子で）奥さまなんぞ御用でございますか。

雪枝　呼び立てゝ濟まないが、金澤、お前わたしのいふことならなんでも聞いておくれだらうねえ。

（ぢつと倉太郎の顏を見る。）

倉太郎（射伏せられたやうに顏を伏せたがしつかりと）はい、何なりといたします。

雪枝　ぢやお前本當のことをいつておくれよ。お前この頃旦那さまのお供をして三越か高島屋へ行きはしないかい。御殿山の御隱居さまが御一緒かなんかで……。

倉太郎（考へて）さやうでございますなあ……。

雪枝　先月の末御殿山へいらしつたことがあつたねえ、あの時……おやまあ、お前の顏は汗だらけだよ。お拭きな。

倉太郎　どうも相濟みません。エンジンの手入れをいたして居りましたものですから……。（慌てゝ衣兜よりハンカチを摑み出して顏を拭く。そのとき紙に包んだ中差しが床の上へ落ちる）

雪枝（中差しに眼を着けて鋭く）なんだい、そりや。お兼に遣つた中差しぢやないか。お前そんなものを持つて……。

倉太郎（仰天して顏色土のやうになり、跪いて哀願するやうに）奥さま……。

雪枝（涙を押し堪へて手を振りながら）あつちへお出で……あつちへお出で……。

（倉太郎力なく立上り、中差しを拾つて悄然として正面より出て行く。雪枝はよろ／＼とソファの方へ行き

投げるやうに腰を掛ける。)

雪枝　もうあんな男でなければ……わたしを構つてくれないのかしら……。(ソファの背に顏を當てゝ烈しくむせび泣く)

——幕——

阿修羅

人物

江崎愼一　中學教師（二十八歳）

麗子　その妻（二十三歳）

奥村鶴之助　愼一の從弟、大學生（二十五歳）

はつ　江崎の下女（二十歳）

時代

現代、初夏

場所

東京山の手

家屋は粗末であるが庭を廣くとつた江崎愼一の住居。縁側を折り廻した八疊の間。正面に襖、その左にまだ新しい箪笥。左手は押入、床の間。縁側に籐の寢椅子を置く。

初夏の夜。愼一は寢椅子の上に横になり、鶴之助は縁側の柱の側に坐つて居る。鶴之助の表情や態度にはちぐはぐなところが見える。

愼一　（寢椅子から身を起して）どうしたんだ。なんだかそは〳〵してゐるぢやないか。

鶴之助　もう失敬しよう。（腰を上げようとする）

愼一　久振りで來たかと思ふと、すぐ歸るなんて、どうしたんだ。

鶴之助　また來るよ。

麗子の聲　（奥にて）鶴之助さん、わたくしすぐそちらへ參りますわ。

愼一　（押被せるやうに）まあ腰を落ち着けたまへ。麗子も風呂から上つたから、三人でゆつくり話さうよ。さう逃げなくともいゝぢやないか。

鶴之助　（辯解するやうに）なにも逃げる譯ぢやないがね。（不決斷らしく元の座に歸る）

愼一　今夜は大に結婚生活の經驗を話さうと思ふ。僕等は一緒になつてから漸く三月になる。君の前だが、男も女も結婚して見なければ、生活の味は本當にわからないね。君も來年は卒業だから、今から細君の當りをつけて置くことだ。

鶴之助　僕は男女關係といふものに、美しいイリユージヨンを感じなくなかつたから、駄目だよ。

愼一　といふと、感じてゐた時代があつたやうに考へられるな。（思出したやうに）はゝあ、例の四谷見附でよく

出會つたといふ女學生などに對しては、大にイリユージヨンを感じてゐたのだらう。

鶴之助　（見る／＼樣子が變つて、哀願するやうに）　もうその話は止してくれたまへ。

愼一　（相手の態度を見て思ひ當ることがある樣子を見せたが、やがて何氣なく）古疵に觸はられるのはいやかい。

鶴之助　（相手の眼を避けるやうにして）　さうだ。

愼一　（努めて話頭を轉じて）　麗子も平凡に育つて來た方だが、あれでも相當にローマンスがあるから面白いよ。

鶴之助　（大膽に）　麗さんのことだもの、ローマンスは澤山あるだらう。

愼一　麗子の話を聞くと、なんでも娘時代には誘惑が多くて、本當にうつかり外へも出られないやうな有樣だつたさうだ。手を握られるとか、後を追つかけられるとか、ラヴレターを送られるとか、なにか異性から手出しをされずに處女時代を送つた女は、先づ例外だといつていゝらしい。兎に角僕等は夫婦として、レトロスペクチーヴとでもいはうか、お互に過去を知り會ふ時期に到達したのさ。今迄は型のやうに「夢の如く」暮らしたが、眞劍になるのは愈これからだ。よく小說などにある通り細君が日記を見て夫の祕密を知つたり、細君の娘時代の不品行が露見したりするのはこれからだ。つまり夫婦がお互に前身を洗ひ合つて見る時代にはいつたのだね。ところが情けないことには、僕には麗子の女學生時代がちつとも見當がつかないのだよ。

鶴之助　（釣り込まれて）　僕にはすこしは見當がつくやうな氣がする。

愼一　（すかさず追究して）　ぢや話して見たまへ。さあ………。

（鶴之助狼狽して口をつぐむ。愼一その顏をぢつと見る。不安な沈默が續く。愼一の妻麗子、派手な手絡をかけた丸髷、湯上りの厚化粧で襖を開けて出て來る。）

麗子　（鶴之助に挨拶して）　どうも失禮いたしました。いらつしやいまし。この頃はちつともお見えになりませんでしたわね。

鶴之助　試驗が濟む迄は落ち着かないものですから……。

麗子　俊ちやんがお惡いさうでございますね。

鶴之助　十二指腸ですが、もう大分よくなりました。

麗子　お大事になさいましよ。

鶴之助　有難う。さういへば先日は母があがつて御馳走樣になりました。

麗子　どういたしまして。（愼一に）　またなにかわたしの惡口をいつてらつしやいましたわね。

愼一　（二人の樣子をぢつと見てゐたが、やゝ皮肉な調子

で）女學生時代の君が想像出來るかどうかと話してゐたのさ。
麗子　まあ馬鹿らしい。
愼一　鶴さんは想像がつく、さうだよ。（鶴之助拒む身振をする）いゝぢやないか。麗子の前でそれを話したまへ。
麗子　（毫も成心のない態度で）前にどこかでお目にかゝつたことがあるのぢやございますまいか。
鶴之助　（眼を逸らせながら）まさか。
麗子　（愼一に）水菓子をとつて參りませうか。
愼一　（放心の體で）梨がいゝ。
麗子　（さも可笑しさうに）梨なんかまだ出やしませんわ。苺のいゝのを見て參りますわ。
（麗子笑ひながら去る。座は元の不安な沈默に歸る。電燈の球がゆるんで二つ三つ瞬いた後、ふつと消える。）
鶴之助　停電かた。
愼一　いや、電燈の球がゆるんだのだ。暗いところで話すのも面白いね。
鶴之助　今何時だらう。
愼一　いやに歸り仕度をするぢやないか。麗子が歸る迄待つてゐなけりやいけないよ。（間）君はさつき女學生時代の麗子にすこし想像がつくといつたね。どう想像がつくのか、それを一通り話して見たまへ。
鶴之助　冗談にいつたのだよ。
愼一　なんでもいゝから話して見たまへ。こんなことをいふと笑はれるかも知れないが、僕と麗子とは夫婦なのだが、お互に過去のことはすこしも知らないのだよ。例へば電車の中で男に手を握られたといふ話を、麗子から聞くとするね。さうするとその男はすぐ大體の見當がつく。けれど麗子の方は、たゞぼんやりと、女學生とか若い女とかいふものは浮かんで來るが、麗子といふ特殊の女が出て來ない。じれつたい位だ。僕は麗子の生活を殘らず知りたいのだ。知りつくした上で、その智識の光りを通して完全に愛してやりたいのだ。
鶴之助　なるほど。
愼一　併し追々未知の世界は狹くなつて行く。現に、麗子が後にも先にもたつた一度送られたといふラヴレターの送り主も漸く突き留めることが出來た。
鶴之助　（ぎくりとした樣子で）麗子さんはその男のことを未だに覺えてゐるのかしら。
愼一　なあに、あの女のことだからすつかり忘れてしまつてゐる。今眼の前へその男が現はれてもわからない位だ。
鶴之助　（大膽に）不思議だな、それでゐて男の見當がつくとは。
愼一　（徐かに）落着いて譯を聞けば不思議でもなんでも

ないさ。その男は今僕の前に坐つてゐる。

鶴之助　えゝ。（本能的に身を動かす）

慎一　（威壓するやうに）麗子の顏を見るために、毎朝廻り道をして四谷見附で待つてゐた學生は君だ。後から追ひ越す振りをして、麗子の袂へラヴレターを抛り込んだ學生は君だ。君に違ひなからう。

鶴之助　（虚勢を張つて）そ、そんなことは……。

慎一　まあ聞きたまへ。麗子の話と、僕が獨身時代に散々君に聞かされた話と、ぴつたり符合するのだ。書簡箋に鈴蘭の花の模様がついてゐたことまで、そつくり合つてゐた。

鶴之助　（惡びれない樣子で）それ迄麗子さんが話したのか。ぢやあ隱しても仕方がない。恥しい話だが、その學生といふのは僕だよ。

慎一　（溜息ついて）さうか。君だつたのか。

鶴之助　今だから話すが、婚禮の席で麗子さんの顏を見た時には、本當にびつくりしたよ。名前を知らなかつたからね。

慎一　君に手紙をつけられてから、親達がひどく警戒して、違つた道を俥で送り迎へさせることにしたさうだ。

鶴之助　兎に角その後ぱつたり出會はなくなつた。（間）斯様事がわかつて見ると、極まりが惡くつて二度とこの家へ來られないやうな氣がするね。

慎一　（儼然と）君のいふ通りだ。まあこれからは來るのは遠慮して貰はう。

鶴之助　（びつくりして）おやおや慎さんは僕を憎んでゐるんだ。

慎一　（假借せぬ調子で）憎んでゐる。どうして憎まずにゐられるものか。この先君に、何事もなかつたやうな顏をして樂々來られたりすると、僕は勢ひオセローにならざるを得ない。夫である以上は誰でもオセローの要素をもつてゐるのだ。麗子は或はデステモーナ以上に貞淑な女かも知れない。併し僕はオセロー以上に確實な證據を握つてゐるのだからね。

鶴之助　僕をそんな風に責めるのはすこし無理ぢやないか。

慎一　どうして無理だ。麗子に對する君の感情を、全然過去の世界へ葬り去ることが出來るか。

鶴之助　…………。

慎一　出來るか。出來ないか。

鶴之助　…………。

慎一　お互の顏は見えないのだ。さあ、はつきり返事したまへ。

鶴之助　（低く、併し強く）そんなことはだれにだつて返事が出來るものか。

愼一　それ見たまへ。君を憎むといつた僕の氣持は、君にはわかり過ぎる程わかつてゐるのだ。一人の女を二人の男が想つて、その二人の仲が融和して行くやうなら、それは虛僞の生活だ。君と僕とは血のまじり合つた從兄弟同志だが、併し從兄弟だからといつて、お互に假面を被つて交際しなければならぬといふ約束はない。雙方人間らしい本音を吹くことにしようぢやないか。人間は誰でも惡魔的分子を多分に備へてゐる。掠奪者や殺人者の要素を澤山もつてゐる。君もさうだ。僕もさうだ。男の中へ美しい女を抛り込んで見たまへ。恐ろしい程その事實がはつきりする。今君と僕とは靜かに闇の中に坐つてゐる。けれどもお互の心の中にはいつて考へて見ると、ここは阿修羅の地獄だ。鬪ひや呪ひの絕え間のない怕怖無極の惡魔の世界だ。

鶴之助　そんな恐ろしいことをいはなくてもいゝぢやないか。

愼一　僕が封建時代の殿さまなら、君を一刀の下に斬り棄てるよ。

鶴之助　冗談いつちやいけないよ。

愼一　君を殺さないにしても、君の眼を二つ共潰してやりたい位だ。なぜ君の眼は、僕の眼よりも先に麗子を見たのだ。君は……しかももつとも惡いことには掠奪者の圖々しさを以て……精神的にユス・プリメ・ノクチス、卽ち初夜の權利を享樂した。僕は一生君のことは忘れられないだらう。

鶴之助　そんな勝手なことをいつて。あの時は麗子さんは君の細君ぢやなかつたぜ。

愼一　そんなことは問題ぢやない。僕にとつては、麗子の耳に愛を囁いたものが、僕の前にあつたことが我慢出來ないのだ。たまらなく苦しいのだ。君が麗子を見て慾望を起しさへしなければ、僕はこんなに苦しめられはしない。さう思ふと、寧ろ君の存在そのものが呪はしくなつて來るよ。

鶴之助　（憤然として）　さうかい。それまで聞けば澤山だ。

愼一　（强く）　もう止さう。お互ひの本當の氣持が完全にいひ表はせるものでない。寧ろ默つてゐよう。その方が氣が鎭まるだらう。

（呼吸苦しい沈默が續く。不意に鶴之助が身を動かす。麗子とはつとが歸つて來た氣配がする。間もなく麗子が襖を開けて一步中へ踏み込む。）

麗子　（思はず叫んで）　あら、いやだ。暗いところで何してらつしやるの。

愼一　（落ち着いた調子で）　電燈の球がゆるんで消えてしまつたから、その儘にして置いた。

麗子　(屈託なささうに)　まあ、呑氣な方ね。(闇を透して電燈に近寄つて球を堅く卷く。室内蘇生したやうに明るくなる)　眞暗の中で、又議論してらつしつたのね。

(麗子は笑つたが、愼一と鶴之助との間に緊張した沈默が横はつてゐるのに、忽ち心付いて、立ち竦んで二人の顏を見る。)

鶴之助　(突然に)　僕歸ります。さよなら。(立ち上る)

麗子　(びつくりして)　あれ、もうお歸んなさるの。あなたは今夜……。

愼一　(咎めるやうに麗子の言葉を遮る)　麗子。(鶴之助に冷かに)　それでは叔母さんによろしく。

(愼一は鶴之助を送つて襖の後へ入る。麗子も續いて入らうとして愼一に睨みつけられて、その儘そこへ止まる。玄關を出て行く物音。すぐ愼一が歸つて來る。)

麗子　(夫の胸に飛びつくやうにして)　あなた、どうなすつたの。喧嘩でもなすつたの。

(愼一は返答せず、麗子から身をはなして、その顏をぢつと見る、下女はつが金魚を入れた小さな硝子の鉢を運んで出て來る。)

はつ　(手柄顏に)　あの、奧さま、これをお上げなさるのではございませんでしたか。

麗子　あゝ。さう／＼。鶴之助さんが出し拔けに歸るなんていふものだから、すつかり忘れてしまつたわ。お前、あとから呼び止めて渡しておくれ。

はつ　はい。

愼一　はつ、止せ。金魚鉢をこつちへお寄越し。(金魚鉢を受取つて眺める)

麗子　(夫の意を迎へるやうに)　さうね。あした屆けても濟むわね。(夫に寄添ふて)　俊ちやんへお見舞に上げませうと思つて買つて來ましたの。出目金よ。可愛いでせう。

愼一　(險しい顏をして)　麗子。君は鶴之助の妹となんの關係がある。餘計なことをするな。(庭先へ金魚鉢を投げつける)

麗子　(憤激して)　何をなさるの。まあ、亂暴ねえ。あらあら、可哀さうに。金魚が地面ではねてゐるわ。(はつに)　お前、早く行つて手洗鉢へ入れておやり。

(はつ庭へ驅け下りようとする。)

愼一　(激しく)　はつ、あつちへ行け、行けといふに。(はつ驚いて去る。庭上を見詰めて)　死ね／＼。みんなしんでしまへ。

麗子　(憎らしさうに)　殘酷な方ねえ、あなたは。

愼一　男は女のためには暴君にもなる。金魚の命をとるなどなんでもない。

麗子（泣辭出して）あゝ、到頭みんな死んでしまつたわ。（愼一に）なぜ鶴之助さんのお家へ物を上げてはいけませんの。喧嘩したからですか。

愼一（間を置いて）君にラヴレターを送つた奴か、やつとわかつたのだよ。

麗子　まあ、どうして。

愼一　鶴之助が告白した。あいつだつた。

麗子　まあ。いやな人。（悄然となる）

愼一　思ひ出すことはないかい。

麗子　覺えがある位なら、わたし平氣で會つてゐませんわ。

愼一（肉薄するやうに）君は本當にあの男のことをなんとも思つてゐないのかい。

麗子　また、そんなことをおつしやつて、いぢめなさるのね。

愼一（投げ出すやうに）鶴之助のやうな奴が、五人も六人もあつたやうな氣がしてならないよ。

麗子（途方に暮れた樣子で）あたしどうしたらいゝでせう。知りませんわ。（背を向けて顔に袖を當てる）

愼一（寢椅子に腰掛けて頭を抱へながら）麗子、君は泣いてゐるね。だが僕は泣くにも泣けないやうな思ひだよ。君の娘時代のことを思ふと。

麗子（夫の傍へ來て膝を突いて）あなた、後生ですから、そんなことおつしやらないで頂戴。こちらへ來る迄は兄弟以外に、親しい口を利いた若い男の人は、本當に一人もなかつたのですから。誓ひますわ。誓つていひますわ。どうぞわたしを信じて下さい。信じて下さい。

愼一（麗子の手をとつて）なにも君の處女性を疑ふ譯ぢやないがね。君の處女時代の美しさを考へると、たまらなくいら／＼して來るのだよ。君の心を石盤に譬へると、その上へちよい／＼と悪戯書きをした奴がありはしなかつたかと、どうもそれが氣になつてならないのだ。（間）止さう／＼。今更過去のことをいつてもどう仕樣もない。だがこれだけはなんといつても事實なのだ。僕には君がなくてはならないものになつてゐるし、君には僕がなくてはならないものになつてゐる。この心持をいつまでも持ち續けて行かう。僕等は夫婦だからねえ。

麗子（甘えるやうに）えゝ、さうよ。だから可愛いがるのよ。もう決して今見たいなことといつていぢめないのよ。よくつて。

愼一（默つて肯いて見せたが、苦しさうに）たつた二三十分ばかりの間だつたが、險しい峠を乘り越したやうな氣疲れがする。あゝ、ひどく頭が重い。今夜はもう調べ物をする氣にもなれない。寢るとしよう。

麗子　えゝ、さうなさいませ。（いそ／＼と立上つて聲高

に）はつ、門をしめて頂戴。

（はつ奥で返事をする。障子せか〳〵と座敷を片付ける。門を締める音。）

――幕――

藤井眞澄篇

妖怪時代（一幕）

上と右左から黒幕を垂れて、狭くせまくした舞臺。そこ一ぱいに、工場町貧民家の内部。正面上手に入口、そこから左手前方へかけて土間。座敷の正面は右に格子窓、其左に押入。下手は荒壁と破れ障子とで、別に仕切られた一室。

幕開く。關元造（三十二三）左隅の方に寢そべつてゐ、妻靜子（二十七八）その右の方で毛絲編をやつてゐる。

靜子　あなた、ちつとは御氣分がハツキリしましたか？

關　……。（むにや／＼）

靜子　みはるちやんは、今日も歸つて來ませんが、どうしたんでせうね。

關　（何時も力のない聲だ）色男でも出來たんだらうさ。

靜子　そんな事ないと思ひますわ。竹山さんといふ人があるんですからね。

關　（ポツネンと起きて胡坐をかき）竹山君も久しく來ないやうだね。

靜子　さう／＼、あなた、朝日商會は今もめてるんですつて。

關　さーら、軍縮た、解職だ。そこで致方なく、おつかなびつくりの勞働爭議か。

靜子　竹山さん乾度それで忙しいんでせう。

關　なあに、あのカツフエーへ行つて、みはるちやんと會つてるんだらう。そしてビール・テーブルの革命家を氣取つてるんだらう。

（默——間。）

靜子　あなた、今晩お米代さへないんですよ。

關　困つたなア……その編物はどうなんだ？

靜子　半ダースは出來てるんですけど、持つて行くのには、電車賃が入りますからね。

關　……。

靜子　あんな處まで歩いて行つて、時間をむだにしてはつまりませんからね。

關　困つたなア。

靜子　あなたの「困つたなア」は、ほんとにいやですよ。いくらなんだつて、もうやめて下さらない。

關　病的に——口癖になつたんだ。

靜子　私共は兎に角、なんとか工夫して下さらなくては、第一をぢさんが氣の毒ぢやありませんか。今恰度よくなりかけで、ほんとに大事な時ですよ。

闘　さうだな……。

（默――間。）

静子　……またお髭のいじくり廻しが始まりましたね。

闘　うん。

静子　私もう見てゐてもたまりませんわ。汚らしさつたら、イラ／＼しさつたら。

闘　さうだらうな。

静子　咽喉から始まつて顎へ行き、そら、もう睫毛へ行つてる。

闘　なほさうたつて直されないんだ……。

静子　本當に直さうとなんていふ、決心がないんでせう。あなたの事は、なんだつて皆んなさうですよ。

闘　この癖はな、動物園の熊が檻の中でブラ／＼やつてる、あれと同じやつさ。熊癖といふやつさ。

静子　まあいやな。

闘　運動不足か慢性胃腸病になり、あゝいふ癖を生むんだな。

静子　ぢや、あの熊を外の廣い處へ出してやつたら、どうでせう、直るでせうか。

闘　さア、へたをすると、却つて死なして了ふかも知れないな。

静子　元住んでゐた、野か山へ連れてつても？

闘　さア、どうだかな。だがまア其心配にや及ぶめえ。人間様はそんな損な事しやしまいから。

静子　損なことですつて？

闘　さうさ、折角大金をかけて生捕つたものをさ。若し山か野へ放して見ろ、その時、人間よりや熊公の方が、御主人にならないものでもなからうぢやないか。熊公の御主人様は、人間の御主人様よりや、ちつとは荒つぽからうて。アハ、、、、、（淋しい笑）

静子　あなたさういふ屁理窟になると、いくらか元氣が出ますのね。

闘　それもわしの惡い癖だ。

静子　惡い癖だ、惡い癖だと云つて、それでどうなさるつもりですか？

闘　それが一切分からないのでね……。

静子　分からないと云つて、それで放つておけますか？

闘　無論放つてはおけまいさ。だが、どうも仕方がないのでね……。

静子　わたしもうトテモ辛抱出來ませんよ、ほんとに。

闘　いやもう許してくれ。

静子　だつてさ！

闘　また同じ文句を、ケリ返さうと云ふのかい

静子　同じ文句おなじ文句と云はれますが、まアわたしは

一體、どう云つたらいゝのでせう、何うしたらいゝのでせう？

關　それがまた同じ文句さ。それもつまりお前の態癖だな。

（下手の障子から病氣に窶れた内村（四十五六）がヒヨロ／＼と出て來る。）

靜子　をぢさん、今日はいかゞですか？

内村　（腰をかけ乍ら）お蔭樣でな、だいぶよくなりましたよ。コン／＼／＼。關さん、私は病氣でもつて却つて頭がよくなつたやうな氣がしますよ。その爲めか、懸案になつてゐたあの發明も、いよ／＼うまく行くやうになりました。今も久しぶりに電氣をかけて見ますとな、なか／＼面白い事になりましたぢや。

關　あの電波器がね。

内村　確かにあの光が生れますぢや。

靜子　をぢさん今そんな事なさるのは、まだ早うございますよ。もう少しぢつとしてゐなくちやいけません。

内村　さうでせうかな。だが奧さん、身體の利けないだけそれだけ、腦の働きがよく利けるやうに思ひますでな。

（立つてヒヨロ／＼する）

靜子　それ危い。（下りて助け乍ら）云はないことぢやありませんよ。お便所でせう。

内村　へい／＼、相濟みません。（靜子の肩によりかゝつて入口の方へ行き乍ら）みはるは今日も歸つて來ませんかな。

靜子　晩までには見えるでせうよ。（兩人退場）

（少時――靜子先きに立ち職工の渡邊（三十）と加藤（四十）を案内して來る。）

靜子　あなた、渡邊さんと加藤さん、それに竹山さんもいらつしやいましたよ。

（關忘儀さうに向き直る。靜子お茶の用意をする。）

加藤　久しく御無沙汰して申譯ありません。どこかおわるいさうで、いかゞですか？

關　……。

渡邊　この前、あゝいふ不義理な事をしておいて、今更らヅー／＼しくやつて來ますのは、實に恥かしい次第です。然し仲間一同の要求なので、其代表としてうかゞつたやうなわけです。どうか今日までの事は許して貰ひたいと思ひます。

（此時分、内村は職工竹山（二十四五）に助けられ乍ら、内へ入つて來て元の障子の中へ入る。）

關　（頻りと頭をかき乍ら）なあに、わしは前の事なんか何んとも思つてやしない。だが、わしはお見かけの通りスツカリ滅入つてゐるんだから、君達の話を聞いても仕方も何もありやしないよ。

加藤　どうかさうおつしやらないで、お聞きを願ひます。

竹山　兄い、今度こそ兄いの自由な腕を振ふ時だ。仲間は皆んな組合にはいつたぞ。しつかり團結して、大いに戰はうていんだ。

渡邊　（腰をかけ乍ら）詳しくはいづれ後で聞いて貰ふが、會社は今度軍備縮少の影響を受けてね、バルブ部がだめになつちまつたもんだから、鑄物工を全部やめさせようといふのだ。

竹山　頸切り手アテ曰く、日給わづか一週間分だ。

渡邊　それで鑄物工は云ふまでもなく、殘る筈の旋盤工の僕等も、この加藤君等の仕上工も、皆んな一所になつてね、其解職手當を半ケ年、卽ち百八十日分にしろと談判したんだ。すると先方は工場閉鎖と、おどして來やがるんだ。

竹山　そこへまた例の國粹團が這入つて來てね、奴等の番犬となりやがる。こつちには、鐵工組合の本部から助けが來る、といふ有樣だ。

加藤　（腰をかけ乍ら）　斯ういふ誠にセツパ詰つた場合になりましたので、一同初めて目が醒めましてな、貴方の日頃から云つてゐられた道理が、身につくづくとしみたやうなわけです。誰れ云ひ出すとなく、貴方には今まで本當に相濟まない事をしてゐた、今後に大いに盡力してお貰ひ申したい、といふ決議が全場一致に出來上つたのです。で、早速我々三人の者が、各部から選ばれまして、參つたやうな次第です。

竹山　兄い、さサ仲間の處へやつて來てくれ。そして大いに腕を盡くしてくれ。兄いさへやつて來てくれりや、皆んどんなに、勇氣を振ひ起すか知れやしねえ。兄いの云ふ事なら乾度皆んな聞いて、どういふ仕事でもやり遂げるに違ひねえんだ。

渡邊　どうか賴みます。

加藤　是非お願ひいたします。

靜子　（茶を配ばつた後編物をし乍ら）　あなた、なんとかお返事をなさらなくては……あんなに皆さんが云つてゐらつしやるのぢやありませんか。

闘　（頭をかき乍ら矢張り弱い聲で）　返事と云つてもな……さサ、なんと返事をしていゝか、返事をする氣力さ、ないんだ。皆んなが目を醒まして喧嘩をやるちうのも、惡い事でもあるまいが、わしは、その、そのトテモだめなんだよ。

渡邊　さうまア云はないでさ！

闘　昔のわしぢやないんだ、意地も張りもない、魂のぬけた、ぬけがらのわしなんだよ。

竹山　なにを馬鹿云ふんだ。仲間が今までのやうに眠つて

るていなら、兄いもあいそがつきて悲觀もしようが、巳に目が醒めて大いに戰はうてい以上は……さア「うん」と云つてくんな。さア、ザックバランに「ウン」と云つてくんな。

關　それや困るなア。

渡邊　ぢや君は、まだ昔の事を根にもつてるんだな？

關　昔の事を根にでも有つやうなら、わしもまだちつとは人間並の意地があるんだがな。自分乍ら呆れてるんだ。自分で自分をモテあましてゐるんだ。

竹山　それはまアなんていこつた。弱つてる事はウス〱氣付いてゐたがそれやソレヤあんまりだぞ！

關　まあさうフンがるな。亡びるものをして亡びしめよ、榮えるものをして榮えしめよた。それが自然の運命だ。事實、わし共が何うジタバタしたつて、ビクともする此の世の中ぢやない。貧乏ゆるぎもする、此自然の運命ぢやないよ。

竹山　なんだなんだ、なーんだ！　これぢや呆れてものが云へねえ、怒りも出來ねえや。こんな腰拔けの馬鹿野郎を相手にしてゐた日にや、何時までたつても埒はあかねえ、うつちやつといて早く行かうよ！

加藤　まアさ……。

竹山　（靜子に）奥さん、あなたは斯ういふ意氣地なしを、そんなにまで稼いで、よくまア養つてゐられることだね！

靜子　おつしやる通りですわ。でもね……。

竹山　俺は奥さんがお可哀さうでならねえ。斯ういふ風ぢや、あなたも考へなくちやなりませんせ。

加藤　まア竹山君！

竹山　なにを馬鹿な！　實に馬鹿々々しいこつた！　實に呆れはてたこつた！　（プン〱と行つて了ふ）

加藤　あなたに先頭に立つて、口をきいて下さいとまでは申しません。せめて相談にだけでものつてくれませんか。大勢の仲間の生死の問題です。

渡邊　皆んなは君を非常に慕つて、それで我々をよこしたんだよ。昔の仲間のよしみを思つて、どうか立つてくれ。

關　こんなもう死相の表はれた、緣氣の惡いわしの顏を出したら、それこそ皆んなが元氣をなくして了ふだらう。勝てる喧嘩も敗けるだらう。腰拔けの馬鹿野郎關元造は、今晩にもじめ〱とくされじにをするのだ、そんな生存の不適者だ、弱蟲だ――とさう皆んなへ云つてくれたらよからう。（とゴロリと横になる）

渡邊　斯うまで云つても、君は！　（立つ）

加藤　いや〱兎に角、考へておいて下さい、考へなほしておいて下さい。

渡邊　歸らう。
靜子　御覽の通りでございますから、どうか一應お引取りを願ひます。
渡邊　奥樣、ほんたうにお氣の毒ですな。
靜子　すつかり人間が變つて了つたのですよ。
渡邊　さうですかな。ではどうかお大事に。
靜子　皆樣によろしくおつしやつて下さい。
加藤　では關さん、一應引取りまして、仲間の者と相談いたしませう。どうも失禮しました。
靜子　御苦勞さまでした。
（兩人退場。障子を開けて內村が顏を覗ける。）
內村　關さん、うまく行きますよ。早く來て見て下さい。
（關ヒョロ／＼立つて隣りの障子に入る。入口から內村の娘でカツフエーの女給をしてゐる美春（二十二三）が出て來る。）
みはる　兄さん、ほんとに相濟みませんでした。
靜子　おや美春さん、お歸りなさい。皆んな心配してゐましたのよ。
みはる　歸りたい／＼と思つてゐたのですけど、人手が足りなかつたものですからね、兄いさんは？
靜子　あなたのお父さんのとこへ今行つてゐますの。お父さんもだいぶよくなられてね、もうあの器械を工夫してゐられるやうですよ。それはさうと美春さん、あの持合せはなくつて？
みはる　え、ありますわ。（財布を出し）稼いだおかげでね。
靜子　（受取つて中を見）澤山ね、大きいはうだけ貰つておきますよ。
みはる　もつと取つて下さいな。行きの電車賃さへあれば、私もう十分なの。
靜子　（財布を返し乍ら）これに私の編物代を加へれば、いくらかお拂ひも出來るし、一週間位は何うにかやつて行けます。美春さん今日はユツクリゐられるのですか？
みはる　え、宿つて行きますわ。
靜子　さう、では恰度いゝ。わたしちよつと之を持つて行つてきますから、お留守をして下さいね。（編物を包む）
みはる　はい。行つてらつしやい。
（關、障子から出て來る。）
關　みはる先生歸つてるね。
みはる　兄さんこんちは。
靜子　わたし電車賃が出來ましたから、之を持つて買物かたがた、行つて來ますよ。
（靜子出て行く、みはる入口まで見送る。）
みはる　おや、あの人が！（急いで歸つて）兄さん何處か

隠れる處はなくつて？
關　なんのことだ？
みはる　（下駄を持つて上にあがり）會ひたくない人が今そこへ來てゐますの。あゝこゝがいゝ。（押入の中へ入り乍ら）默つてゐてね。（唐紙を閉める）
（入口から壯士柴田（四十）がやつて來る。）
柴田　關さん、如何ですね？　弱つてゐらつしやるといふ話でしたから、御見舞に上がりました。
關　君は、朝日商會の騷ぎで忙しいんだらう。
柴田　實はその用事もあつて來たのです。さつき職工の委員連がこゝへ來たやうでしたね？　あなたの事ですから、素直に申上げますが、どういふ話でしたらうか？　御加勢でもなさるやうになりましたか？
關　加勢もクソもありやしねえ。わしの腑甲斐なさを、腹をたてゝ歸つて行つたよ。
柴田　それで安心しました。實際、今度の騷ぎに御關係なさるのは御損ですからね。
關　死にかゝつてゐるわしには、なんの損も得もありやしない。
柴田　ひどく弱つてゐられますな。さう悲觀的でも困りましたね。さういふ事なら、失禮ですが、私の會でも一つ御助力いたしませう。受けて下さいませうね？
關　何か呉れるといふなら、早く貰ひたいな。晩の米代がないので、山の神がブツ〳〵云つてゐるところだ。
柴田　それほど窮迫してゐられるのですか。よろしい。早速運びをつけませう。（腰をかけ煙草をすひ乍ら）關さん、要するにこの人生は力の問題ですね。力が一さいの幸福であり、勝利ですね。そして今日の世では、その力は主として富といふものになつてゐる、金といふものになつてゐる――と斯う思ひます。
關　さうさ。
柴田　いかにも勞働者は、今日のこの社會を持上げてゐる力の源でせう。が、遺憾乍ら彼等は十分その道理を知つてゐません。勞働者が眞の社會の土臺であるといふ事を知つてゐるのは、却つて資本家階級だけです。それを本當に知つてゐるからこそ、巧みに資本家は勞働者を利用するのですな。
關　君も近頃はなか〳〵頭がよくなつたらしい。
柴田　ひやかしてはいけませんよ。私でも、最近私自身の力の哲學といふやつを、デツチ上げてゐますよ。この邊ぢや一人だつて、それを分つてくれる者はありません。あなたは屹度理解して下さると思つて喋べるのですがね、事實勞働者は次第に自覺しつゝあるのでせう。が、その數だつて極くわづかではあり、その自覺の内容たつ

て、トテモ資本家側にやかなひませんや。そこで必然に、此社會の力は、その自覺をより多くより深く有つてゐる、資本家に獨占されるといふわけとはなりませう。

關　感心……感心。そこで君達の國柱團は、其資本家を更らに利用する、といふわけだな。

柴田　まあさういふ結論なんです。これは私の經濟問題としての立場ですが、更らに人種問題としてこゝに氣付かなくてはならぬ事があります。それは日本人種は今、肉體として、健康體として、亡びつゝあるといふ問題です。國民全體が遊蕩浮華、腐敗墮落……それは云ふまでもありません。勞働者は血をウンとシボリとられた上に酒色にふけつて、其體格は骨と皮ぢやありませんか。先づ猿ですな。資本家は血を飲み過ぎて病的に肥つてゐます。先づ豚ですな。

關　古いしやれだな。

柴田　まア詳しい事は今晩でもユツクリお話しますが、要するに、斯ういふ有様ではたとへ理想的な世界が出來たとしましても、その時、日本だけは人種として亡んでやしないかといふのです。折角の理想世界も、肉體のない日本人にや、役に立たなからうではないかといふのです。

關　成程。それで其肉體を作らうといふので、君の會ではあんなに武術を奬勵するといふのだな。

柴田　さうですとも。それがつまり國柱團があの道場を開いた、第一の理由なんです。

關　わしはな、その亡びつゝある日本人種の、最もいゝモデルだて。

柴田　あなたに限りませんよ。このまゝ亡ぶのが、恐らく日本人種全體の宿命なんです。が、その宿命を破つて生きかへるやうに努力するのが、私共の使命なんです。あなたもどうか、國柱團へ入つて下さいませんか。それがあなたの健康を、日本人の健康をトリ返す、唯一無上のてだてですよ。

關　まあ、その先きへ金がほしいな。

柴田　ぢや早く持つて來るやうにします。（立つて）それはさうと電氣技師だつた內村さんは、まだ亡びませんかね？

關　亡びそこなつたらしいよ。

柴田　あなたもとんだ者をせおひ込んだものですな。もうそんな古い慈悲善行なんか、うつちやつてはどうです。（隣の障子を開けて覗き）內村さん、如何ですか？　默つて何を熱心にやつてゐるのですか？　美春さんは、今日は踊つてゐないのですか？（障子を閉めて關に）いつたい何をやつてゐるのでせう？

關　新しい力の源でも、拵へるつもりなんだらうよ。

柴田　お邪魔しました。では後程……。（出て行く）

みはる　（押入れから出て）兄さん、なぜウンとやつつけこやらなかつたの！　あいつお馬鹿ちやんの癖に、あんな屁理窟云つてゐたのをさ。

關　ぢや君が出て來て、やつつけてやればいゝのに。

みはる　え、わたし中で聞いてゐて、ギリ〳〵腹が立つたのですよ。けど、あいつは店の主人と友達でせう。あいつが口を利いてくれたらこそ、あの前借も出來たんですからね。

關　さうだつたかな。

みはる　あいつそれを恩にきせやがつてね、わたしの尻を追つてばかしゐるのさ。ひどく〳〵はねつけてやりたいのですが、さうするとあの店もいけなくなり、前借の證文もをかしくなり、お父さんやそれから兄いさんにまで……。

關　それから竹山君に來た。

みはる　え、どんな仇をするか知れやしませんからね。

關　アッ！　アッ！

みはる　どうなすつて？

關　て、て、手がひきつるんだ……。

みはる　それはいけませんね。（後ろからあんまをしてやる）こゝですか？　こゝですか？

關　左の手だ、それで手枕してゐたもんだからな。

みはる　兄さんの身體、ほんとに固いんですね。

關　これでも學生時代は、運動のチヤンピオンだつたんだからな。

みはる　ほんと？

關　柔道二段だ、劒術も免狀を取つたものさ。

みはる　まあ兄さんが！

關　その時代に鍛へた筋肉が役に立つたので、文筆生活から筋肉生活へ入つても、無事に務められたんだよ。

みはる　わたし兄さんのチヤンピオン姿が見たいわ。

關　もういゝよ。

みはる　もう少しもんであげませう。（あんまを續ける）

關　昔威張つてゐた筋肉の奴め、今、メリ〳〵と泣いてやがる。强かつた筋肉の怪物が、わし自身の弱い人間性に反抗しようとしてるんだ。が、もう仕方はないぞ。さあ早く化石して、全身をきかなくしてしまへ……。

みはる　おつかないこと！

關　グヅ〳〵と腐つて行くよりや、カチ〳〵と化石するはうが、死んだ後もきれいだらう。

みはる　いやなことばかし。さあ、わたしのあんまで、それを柔かくしてあげますわ。わたし上手でせう、お父さんのをよくやりつけてゐるから。

關　上手……上手。

みはる　兄さん、わたし近頃女優になりたいと思つてますの。それをどう思つて？

鬪　名女優にならうと思へば、總見を引張り出す腕さへありやいゝよ。だが、みはるちやんの背景は、こゝの貧民窟の御連中だから、あまり振ふまいて。

みはる　もう總見時代は過ぎましてよ。

鬪　さアね……。

みはる　それはさうと、わたし、兄さんの昔の事をお聞きしたいわ。兄さんは、これでも大學を出たんでせう。そして學士なんでせう。大きな會社の顧問になれたこともあるさうですが、本當ですか？

鬪　うそでもないね。

みはる　それをまア、なんだつて職工生活に？

鬪　ばかな夢に浮かされたんだな。

みはる　眞面目に話して下さいな。

鬪　わしは元來土百姓なんだ。一寸の土地さへ持たない小作人の息子なんだ。それがね、小學校の成績がよかつたといふので、大地主の家内のおやぢが、つまり惚れ込んだんだな。村の名譽だといふので、中學に入れてくれ、たうとう大學まで出してくれたんだ。

みはる　まア、はじめて聞いた。あゝそれで大學を卒業すると直ぐ、奥さんとスヰート・ホームね！

鬪　で、その地主様が死んで、俺が御主人になるといふと、その財產をな、全部忽ちのうちにすつて了つたと思ひなさい。

みはる　それから職工生活へ入つたんでせう。

鬪　さうさ。土百姓の子は土百姓の子として死ぬのが本當だ。がらにもない紳士閥の生活をしたのが過まちさ。今、プロレタリアとして、押し殺されかゝつてゐるのだが、先祖代々皆んな斯んな風に死んだと思へば、却つて面白いやうな、可笑しいやうな氣がするよ。

みはる　そんなヘンな事ばかし考へてゐるなんて、ほんとにお氣の毒ね。

鬪　（ふと美春の腕を取つて）こんな若い女の可愛い腕を握つて見ると、今押殺されるのも、少々惜しくなるな。「わたしや未練が出るわいな」だ。アハ、、、、。（淋しい笑）

（少し前から竹山入口から覗いて、ドキ／＼してゐたが、この時、思はず中へ飛び込み、怒りに全身をふるはして立ちすくむ。）

みはる　おや竹山さん、どうしたの？

竹山　て、て、てめえよくも俺に恥をかゝせたな！

みはる　だつて、店が忙しかつたんだもの。三晩ばかり歸らなかつたといふので、グツ／＼云ふのかい。わたしは

お前さんなんかに、どうから云はれる義理はありませんよ。
竹山　い、い、今の、そのざまなんだ。あつちから見てると、二人で、いゝ氣になつてゐちやついてやがる！
みはる　それやなんのことだい。
竹山　めすもめすなら、をすもをすだ。
みはる　兄さんの事を云つてるのかい。
闘　おや／＼、わしの事をやいてゐるのかい。
竹山　ご、ご、ごまかしたつて承知しねえぞ！（匕首をサッと出す）これで朝日商會のやつを、やつつけようと思つてゐるのだが、門途の血祭に、お前達をやつつけてやるのだ。
（猛然と切つてかゝる。闘本能的に身をかはし、ポンとつき飛ばす。竹山一度土間にへたばつたが、再び起きて突進しようとする。入口から靜子が出て來て、これを抱き止める。）
靜子　竹山さん、竹山さん！
竹山　奥さん！　美春の奴、兄いと、ク、クツつきやがつたんだ！
（この一言で、上の男女と下の男女の間に、サツと戰ひが開かれたかたちとなる。竹山、靜子の手をはなして再び飛びかゝる。闘、巧みに其手頸を叩いて匕首を落さし、組みついて來るのを、半ば起き乍ら取つて投げる。竹山は土間で腰をうつたらしく、なか／＼起き上がれない。靜子之を介抱してやる。闘は自分の腕力を示した事を、氣付かないものゝやうに、ポカンとしてゐる。）
みはる　（匕首を手早くひろつて）ばか／＼しいつたらない！　なんていやな人だ、卑しい感情の人だ。こんな下品な人だとは、今まで思はなかつた！
竹山　（半ば起きて）俺を馬鹿だと云つたな！
みはる　それがどうしたといふの！　弱蟲！
竹山　それぢや……いよ／＼お前は！　あゝ！（兩手で顏をおほうて大泣き）
靜子　（徐かに上へあがつて闘の前へ坐り乍ら）もう斯うまでなつた上は、私も最後の結末を着けなくてはなりません。
みはる　奥さん、あなたまでも！
靜子　お前さんには後で云ふ事があります。それまで默つてゐて下さい。（闘に）あなた、なんとかお云ひになる事がありませう？
闘　わしにはなにがなんだか……だが、結局なるやうにしかなりやしないよ。
靜子　さうですとも。私はこれまで、云はう／＼と思つて

ゐたのですが、今こそ、云はなくてはなりません。あなたは、理想の爲めだ、主義の爲めだと云つて、國家の財産をなくしてお了ひになつたが、それが第一うそです。理想の爲めでも主義の爲めでも、決してありやしません。私は無智でしたから、さういふ美しい言葉にだまされて、つりこまれてゐたのです。その上あなたを崇拜までさへしてゐました。ところが、今日といふ今日、それがまるでうそッパチである事が、ハッキリと分かりました。

みはる　おや奥さんは、それはなんだとお云ひになりたいのですか？

靜子　それは、男が意氣地がないのを、隱す言葉に過ぎないんです。自分の働きがないのを、ごまかすものに過ぎないんです。

みはる　それは間違ひです。

靜子　いや、間違つてゐません。それから勞働が神聖だと云つて、わざと筋肉勞働の生活へ這入つたのも、うその事です。あなたのやうな無能な男には、實際、上品な紳士生活が出來なかつたまでゞす。

みはる　いいえ。筋肉勞働は神聖です！

靜子　苦勞するのが、どうして神聖です？　貧するのが、何うして正義です？　それは人間の生活よりも、牛や馬のはうがいゝといふやうな、むちやな話ですよ。

竹山　（ヒヨロ／＼と起き上がつて美春の前へ行き）みはるさん、俺がわるかつたのだ。どうか許してくれ。俺は何うしてもお前さんが思ひきれないんだ。俺はもうスッカリお前に惚込んでゐるんだ……。

みはる　いやなこと！

竹山　俺は何うなつてもかまはねえ！　腹が立つたら、タタキ殺してくれてもいゝ。

みはる　いやだつたらいやだ！　お前さんは丈夫な大男でありながら、今のざまはなんです。病氣の兄さんにまるでかなはないぢやないか。子供のやうに、犬か猫のやうに、投げつけられたぢやないか。

竹山　俺はもう、子供や犬のやうな弱蟲なんだ。どうか憫んでくれ……。（拜むやうにする）

靜子　（關に）あなたは、私といふものを私の親族皆んなから、無理にヒキ放して了つたぢやありませんか。あなたは、私の財産も地位も名譽も、皆んななくして了つたぢやありませんか。お父さんやお母さんが早く死んだのも、皆んなそれを苦にしてからです。そして何うするのかといふと、こんな汚ない苦しい地獄のやうな貧民窟へ、ヒキずり込んで了つたぢやありませんか。その上、ヅーヅーしくも私の內職で、自分を養はせてゐるぢやありませんか。

闘　（いくらか元氣な聲で）成程――それでわしにも分かつて來た。

靜子　いや／＼まだ云ふ事があります。あなたは自分は女房の内職で養つて貰ひ乍ら、其スキをねらつてこんな小娘と關係するなんて……。

みはる　奥さん！

靜子　淫賣女にクッつくなんて……。

みはる　淫賣女ですつて！

靜子　なんといふひどい人でせう。あなたは泥棒です！　人殺です！　惡魔です！

闘　（今までにないハッキリした強い大聲を出す）さうだ！　成程さうだ！　わしは泥棒だ！　人殺しだ！　惡魔だ！（三人ともびつくりして彼を見詰める）わしは今までそれをよく氣付かなかつたのだが、今こそ、ハッキリと知る事が出來た。わしは代々の土百姓だ。お前は代々の地主だ。わしの先祖は代々お前の家の田畑を作つて、やつと生きてゐたのだ。お前の家は代々の俺の家の勞働によつて、榮耀榮華を極めてゐたのだ。わし達小作人は、お前達地主によつて、どの位永い間生血をしぼられたと思ふ。わしはわしのおぢいさんが、小作米が出來ないのを苦にして腦をいため、たうとう狂ひ死をしたのを知つてゐる。わしはわしのお母さんが、お前とこへお祭りの手傳ひに行つて、米を盗んで來たのがばれて、それが元であの大槇で頸をくゝつて死んだのを知つてゐる。わしの心の奥底には、未だに其時の怨みがこびりついてゐるやうだ！　わしのおやぢは小利口者だつたので、お前のおやぢにおべつかを頻りにやつて、信用させたものだ。わしのおやぢはつまり小作人皆んなに取つては、スパイの役を務めたんだ。そのおかげで、このわしは、たうとうお前の亭主にまで成上がつたのだ。さアどうだ！　時は誰れも知らない間に、本人のわしさへ知らない間に、たうとうやつて來たのだ。わしの家の先祖代々がかうむつた恥辱を、いや、天下の小作人階級全體が受けてゐた永い間の怨恨を、たうとうはらす時が來たのだ。それをやつたのが、このわしだ。それをやられたのがそのお前だ。永い間のかたきうちの最後のギリ／＼結着まで、わしは今こそやり遂げたのだ。さア、今こそよく分からう――これこそ、わしの表面意識が知らないうちに、その意識が惱んでゐるうちに、潜在意識の働きによつて、本能的にやり遂げて了つたのだ。わしは泥棒だ！　わしは人殺だ！　わしは惡魔だ！　そして最後の勝利者だ！　ウハッ、、、（全部を驚殺する大笑ひ）わしは第一の勝利者だ、個人的復讐に成功したのだ。もうわしには、個人として不滿であるべき何物もないのだ。この上は、第二第

三の勝利者とならなくてはならねえ。わしの屬する貧乏階級――小作人と工場勞働者の爲めに、わしは戰ひをひろげるのだ。それが第二の戰ひだ。第三の戰ひは、わしの屬する日本民族を堅くかためて、他の有らゆる民族を征服するのだ。日本民族主義の理想による世界統一だ！　全人類統一だ！　あゝ――わしは生きかへつた、本當にわしは生きかへつたのだ。（兩手を延ばし胸を張る――勇氣リン〳〵として立上がる）

（入口から柴田が出て來る。）

柴田　關さん、お待ちどほさま――職工のうじ蟲等が騷ぎをはじめやがつたので、それで遲くなりました。ちつとばかりですが、どうか受取つて下さい。

關　（默つて受取つて巧みに算へる）なアんだ百兩か――が、ないよりましだ。（懷中に入れ）さア、これで軍用金も出來たといふものだ。

柴田　なんですつて？

關　さアこれから、我々日本勞働階級の爲めに、先づ資本家の幇間である君達いかさま國柱團を、ブツ潰しにかゝるのだ。

柴田　それや話が違ひますよ。

關　敵の金を使つて、敵をブツ潰すなんて、いよ〳〵さいさきがいゝぞ。

みはる　（手を打つて）すてき！　すてき！

柴田　お前さんまでも？

みはる　すてきだと云つたのですよ。

柴田　もう一邊云つて見ろ！

竹山　それがどうしたといふのだ！（前に出る）

柴田　おや、竹山も來てゐるな。む……。（關に）ぢや今の金は渡されませんよ。返して下さい。

竹山　返してたまるものかい。

柴田　その金は朝日商會から、今取つて來たばかりの金ですから……。

竹山　だから、いよ〳〵返されねえのだ。グツ〳〵してると、オツぽり出すぞ！

柴田　む……。よし、分かつた！　うまく騙しやがつたな。我輩を、この我輩を、よくもひつかけやがつたな。

みはる　さうさ。わしは泥棒だ！　わしは人殺しだ！　わしは惡魔だ！

柴田　どうするか、ウヌ……見てゐろ！（尻をまくつて出て行く）

竹山　ざまア見ろ！

みはる　あゝいゝ氣味つたら！

靜子　……。（ハリ詰めた元氣が急に折れたやうに、ヒステリツクに泣き倒れる）

竹山　奥さん、奥さん！
闘　わし共の間の問題は、後廻しにしよう。今は個人的な問題を、かれこれ爭ふ時ぢやねえ。日本の貧乏人は皆んなヒトカタマリになつて、助け合つて、戰はなくちやならん時だ。靜子、お前ももう貧乏人ぢやないか。さア一所に……。
みはる　奥さん、奥さん！
闘　日本人の大部分である貧乏人の爲めに戰ふ事は、取りも直さず全日本民族の爲めに戰ふことだ。これこそ、本當にしがひのある仕事ぢやないか。靜子、お前が今までに堪へ忍んで來た苦しみは、つまり新しい日本民族の爲めの、苦難だと思つてくれ。修行だ訓練だと思つてくれ。その時、お前の今までの苦勞は、新しい光明によつて輝くのだ。
靜子　（顔を上げて）私はまるで狐にでもだまされてゐる樣な氣持です。まだ夢でも見てゐるやうな……あなたの云はれた事が本當か、私の云つた事が嘘か、それさへ判斷がつきません。此上ともあなたに騙されてゐるのかも知れません。またさうでないのかも分かりません。私は一人で考へたいのです。私自身の眼で私自身の頭で、この人生といふものが、この世の中といふものが、この日本といふものが本當によく理解出來るまで、一人で考へたいと思ひます。
闘　よからう。
竹山　兄い、これやかうしちやゐられねえよ。柴田の奴、今に屹度闘員を連れてやつて來るにきまつてるから。
闘　さうさ。
竹山　俺は皆んなの處へ知らして來る。兄いを柴田につかまへさしちやならねえからな。（下りて行かうとする）
靜子　竹山さん、わたしも連れて行つて下さい。
竹山　よろしい。奥さんは兎に角俺のうちへ來てゐて下さい、ね、兄い？
闘　よからう。
（竹山と靜子急いで出て行く。夕暮……。）
闘　みはるちやんも、早くお父さんを連れて、出て行かなくちや。
みはる　私はこゝにゐます。どういふ事になるか、私は見てゐたいのです。
闘　だが、お父さんの身體とあの發明だけは、きずをつけたくないんだがな。
みはる　私には、兄いさんの身體と主義のはうこそ！
闘　いや、お父さんの發明は、新しい日本民族の新しい科學になるものなんだよ。だからナカ〳〵大切なんだ。
みはる　だつて兄さん！（と闘の兩手を取る）

（この時突然！　格子を破つてかなりな大石が投げ込まれる。夕陽輝く。）

關　やつて來たな。格子が見事に碎けた。熊の檻が破れたんだ！

みはる　熊の檻ですつて？

關　わしは家畜として亡ぼされかゝつてゐたのだ。今、わしは猛獸になるんだ。わしは弱い人間として死にさうになつてゐたのだ。今、わしは怪物として生きかへるのだ。今の世の求める者は、家畜でなくて猛獸だ！　人間でなくて怪物だ！（外へ向つて叫ぶ）さア皆んな這入つて來るがいゝ。

（武器を持つた國柱團員數人、柴田に率ゐられて乘込む。）

柴田　念の爲め、もう一度おたづねする。さア關さん、こつちの味方をするか、それとも先方の味方をするか、ハツキリ返事をして下さい。

關　わしはたゞ君達いかさま國柱團をブッ潰す――といふ事を云ふよりほか、なんの言葉もないのだ。

柴田　飛んで火に入る夏の蟲だな。

關　わしはもう決心して了つたのだ。もう何うすることも出來やしない。君達をブッ潰すのだ――それだけだ。

柴田　それッ！

（團員一人「覺悟しろ」と組みついて來る。關ポンとハヂキ飛ばす。三四人一度にかゝる、皆んな投げ飛ばされる。）

柴田　仕方がない。可哀さうだが、たゝき斬るんだ！　拔劍！

（團員めい／＼拔劍して、關をめがけて斬つて行く。チヤン／＼バラ／＼。關は何時の間にか、相手の武器を奪つて居る。美春は前の匕首を持つて要心し乍ら見物する。結局、團員はサン／＼に追ひまくられて退き、外から入口をかためる）

關　みはるちやん、この間にお父さんを、さア！

みはる　（障子の中に入り）お父さん、お父さん。

内村の聲　オ、みはるか！　よろこんでくれ。たうとうお父さんの一生の目的が達しられたぞ。發明が成就したのだ！

（此時入口も窓も、外から荒板を持つて閉ぢて了ふ。）

關　トヂこめやがつたな、小僧ッ子め等！

みはる　（出て來て）とてもお父さんは出て來ませんよ。

關　ぢやわしが行つて……。

（と、家全體ユラ／＼とゆらぐ。）

みはる　あら地震！（思はず關にすがりつく）

關　地震ぢやねえ。奴等がこの家をブッ倒さうとしてゐるん

だ。

（大音響！　家屋倒壞！　その瞬間、上と左右の黑幕パッと失はれ、舞臺全部が露出する！　そこには潰れた家を眞中にして、ゴタ〳〵と押し合ひへし合つた、貧民家屋の限りなきカタマリが表はれ、其遙か向ふに朝日商會の巨大な工場が、夕燒の空を貫いて、恰かも龍宮城のやうに嚴然と聳えてゐる。團員數人左右から、潰れた板家根の上にかけあがる、あがつたかと思ふと、皆々「アッ」と叫んで、ハヂかれたやうに馳け下りる。と其板家根の一角がモク〳〵モク〳〵と持上がる。柴田一人ツカ〳〵と上がつて、長刀を持つて其持上がつた頂點を斬る。其切口パッと開き、こんじきの光明、サンランとしてほとばしり出づ！　柴田其他「おーッ」と恐れてしりごみをする。光明間もなく消え、其後から眞紅の怪物、セリ上がつて出現！　それは額の刀傷から流れる血液で、全身をひたした鬪元造の姿である。彼れはトンと棟木の上に立つて、四方を見渡す。ついで其後から箱を抱へた内村を助け乍ら、みはるがセリ上がつて來る。團員四方から押進まうとする。と、「ウローッー」といふ八方から起る鬨聲と共に、貧民家の至る處の間から、或は花道から見物席の中から、限りなき貧民の老若男女――日本大衆が涌き出し飛出して來る。）

――幕――

孤獨の底の日蓮（一幕）

「……十月二十八日に佐渡の國へ着きぬ。十一月一日に六郎左衞門が家のうしろ、塚原と申ス山野の中に洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨ッる所に、一間四面なる堂の佛もなし、上はいたまあはず四壁はあばらに、雪ふりつもりて消ユる事なし。かかる所に所持し奉る釋迦佛を立てまゐらせ、しきものなければばしき皮打チしき、蓑うちきて夜をあかし日をくらす、夜は雪雹ひまなし、晝は日の光りもさゝせ給はず、心細かるべきすまゐなり……」
（種々振舞書）

時

鎌倉時代、文永八年十二月末日

處

佐渡島塚原

登場者

日蓮　（五十歳）
日朗　（二十三歳）
島の乙女二人
其他無數の菩薩及び天童天女

（日朗の聲は總て細く鋭く美しく感情的である。日蓮の聲は其反對に太く深く強く、理智的意志的であると云ふよりも寧ろ生命的である。）

吹雪の音と共に開幕。
舞臺前方に黒幕が下りて居る。
右手から嵐の叫びに其聲を合はすやうに、いた〳〵しい佐渡節が次第々々に聞えて來る。

佐渡節の聲　泣いてくれるな出船のあとで
　　泣いちやかくれた甲斐がない

（其聲の持主である島の乙女が二人出て來る。竹皮の笠、藁の蓑、雪靴をつけて居り、手に太い棒を持つてゐる。）

島の女（合唱）　びんぎよ（便宜）しますよ事つげします
　　泣いてあろぞとゆてたもれ

（中程まで來た時、彼女等はハッと立止まり、笠を傾けて左手を見透かす。）

島の女一　あれや、なんぢやらう？

島の女二　お、お、狼ぢや！

島の女一　（思はず後へ退がつて）　狼！

島の女二　いや、違がふ。狼にしてはでつかいやうぢや。く、く、熊かも知れんわい！　熊かも知れんわい！

島の女一　ひどく馳つてる！　轉ぶやうに馳つてる！

島の女二　あッ！　こつちへ來る！

島の女一　こつちへ向つて來る！　何うしよう？　何うしよう？

島の女二　こ、こ、この棒さ喰はしてやるべい！

島の女一　ぢやて、お前！

島の女二　ぢやて、仕方がない！　逃げる處もねい、隱れる暇もねい、さッ、棒ぢや！　わしさこの棒をかますべい、お前さ其棒で額のまん中ウンとぶつだよ、ウンとぶつだよ、額のまん中をよ！

（二は先きに立つて棒をかまへ、一は後から棒をフリ上げる。左手から泥まみれの怪物が轉ぶやうに出て來て、バッタリと倒れる。二と一思はず後へタヂ／＼と退く。）

島の女一　熊ではねい！

島の女二　人のやうだ！

（倒れた者は無理彌理に起き上がる。それは竹皮の笠をかぶり、黒い衣を着け、素足に草鞋をはき、二つの荷物を肩に渡した青年僧日朗である。全身泥にまみれ手足に傷をしてゐる。）

日朗　（二人の乙女を見て）　一寸とお尋ねいたします。

島の女二　は、はい。

日朗　お國の御地頭、本間六郎左衞門樣の御館は何方ですか？

島の女二　お、お地頭樣は、あ、あつちぢや。（右手を指す）

日朗　有難う。で、道程はどのくらゐでせうか？

島の女一　あい、まだだいぶあるだよ。

日朗　さうですか、何うも有難う。（一禮して行き過ぎヒヨロ／＼と倒れかゝる）

島の女一　あれ！　危い！（思はず日朗を抱いて助ける）

日朗　これは何うも、重ね／＼有難うございました。（離れて立つ）

島の女二　まア、お前さ！　着物はびしよぬれ、手や足にひどう怪我をしてゐなさる！　それぢやトテモ歩けまい？

日朗　なんのこれしきに！

島の女二　それ！　その足からは血が出てゐるだ！　わしちよつくら縛ばつてやるだよ。（急いで自分の手拭を引裂いて足を縛りかける）

日朗　どうも相濟みません！

島の女一　お前さ、何處から來なさつたゞな？

日朗　はい、鎌倉から來ました。

島の女一　鎌倉ぢやと？

島の女二　（足を縛り乍ら）あれ！　お前さ、御出家でないかい？

日朗　はい、私は出家です。

島の女一　まア御出家さかい！　そんならわしども二人で、本間様とこまで連れて行つてやるべい。

島の女二　（立ち上がつて）さうぢや、此足ぢやあすこまでに行くのは難氣ぢやでな。それにもうお日様のお入りも間もないで、道に迷つたら大變ぢやで。

日朗　いえ／＼、それには及びません。

島の女一　なんの、遠慮するこつてない。（片脇から支へる）

島の女二　（同じく片脇から助け乍ら）お出家さまは阿佛房様知つてゐなさるべい？

日朗　阿佛房？　さういふ方は知りません。

島の女二　阿佛房様を知りない？　ぢやお前さまはお念佛さまでねえだな。

島の女一　御出家さは乾度大師さまだべい。

日朗　いえ、私は念佛の淨土僧でも、又、大師の眞言僧でもありません。眞實法華僧です。

島の女二　法華僧ぢやと！　（驚いて手を放す）

島の女一　では日蓮房の方ぢやな。

日朗　はい、日蓮様は私のお師匠様なんです、それで私……。（女一突然其手を突き放したので、再びヒヨロ／＼とする）

島の女二　いやな小僧！

島の女一　サア、早く行かう！

（女二人怒つたやうに急いで左手へ入る。日朗其後を見送り合掌して後、急いで右手へと入る。）

（嵐の音――黒幕を切つて落す。）

（そこに塚原三昧堂の光景が現はれる。）

（舞臺中央前方に小高い丘があつて、其上に一間四面の小屋がある。家根も壁も正面左隅にある出入口の戸も、柴草や竹笹で拵へてある）

（丘の後ろも左右も總て荒れ果てた墓地で、幽靈のやうな石碑、髑髏のやうな卒塔婆、魂魄のやうな破れ提灯などが、物凄く群立してゐる。花道の中途には岩坂があつて、其處から舞臺へ出るまでには、其穴のやうな谷の中に、一旦其身を隱さなくてはならない。）

（この荒涼たる光景の上に、更らに嵐が狂廻つてゐる、それは物凄くも亦慘澹たる地獄の相である。）

（小屋の前面の壁は觀客の爲めに除けてあつて、今、其中に荒菰を敷き破衾を着た「孤獨の底の日蓮」が、

ザッと蹲まつてゐる姿が見える。亂髪亂髭、炯々たる眼が光つてゐる。彼れの前には石の上に奉つた立像の釋迦佛が端然としてゐる。）

（今、照明は、脚光線によつて小屋の内部を薄赤くしてゐるだけで、其他の外部は薄闇――其處を嵐と吹雪の魑魅魍魎が荒廻つてゐる。）

（少時――日蓮ふつと顏を上げ、正面を睨んで利耳を立てる。少時――勢よく立つて正面の左隅の戸を押し開ける、吹雪がバラ／＼と飛び込む、彼れはそれに向つて突進して後戸を閉ぢる、と、直ぐ彼れの姿は小屋の左手の丘の端に表はれて、花道の方をグッと望む。）

日蓮　（呼びかけるやうに大聲に唱へる）南無妙法蓮華經！

（花道の奥遙かに之に應ずる日朗の聲が聞える。）

日朗の聲　南無妙法蓮華經！

日蓮　南無妙法蓮華經！

日朗　（其聲半ばで表はれる）南無妙法蓮華經！

日蓮　筑後房か？

日朗　はい、お、お、師匠樣！（狂喜して走り花道の岩に衝突して倒れる）

日蓮　何うした？　何うした？　筑後房！（少時樣子を覗つて後急いで丘を向ふへ下りて見えなくなる）

（吹雪一と頻り――日蓮の姿花道の岩角に表はれる、透かして日朗の倒れてゐるのを見出し、急いで抱き起す。）

日蓮　日朗！　筑後房！

日朗　お――お師匠樣！

日蓮　お――わしだ！　日蓮だ！　さア氣を確かに有てッ！

日朗　はい！

日蓮　（暗示を與へるやうに）わしの三昧堂は直ぐあそこだ、もう一ト元氣出せ！

日朗　はいッ！（ガバと起きる）

日蓮　それッ！　こゝから坂を下るのだ。

（助け乍ら坂を下つて見えなくなる。嵐の音少時――小屋の戸口を開けて吹雪と共に、日蓮と日朗轉げ込むやうに這入る。日朗の頭にも髪がのびてゐる。）

日朗　（顏見合せて）お師匠樣！

日蓮　筑後房！

日朗　（廻りを見廻し乍ら最も悲痛に）こ、こゝが、お師匠樣のお住ゐでございますか？

日蓮　（打ち消すやうに）見ろ！（と釋迦佛を指して強く恭々しく）釋迦牟尼世尊がゐられる。

日朗　は、はい！（恭々しく立像に向つて合掌禮拜する）

日蓮　（底に親しみを有つて）お前の衣は濡れてゐるな。

が、こゝには火種がないのだ。

日朗　私、火打石を持つてゐます。

日蓮　それは幸ひだ。

日朗　（火打石を出し乍ら）　お師匠様、薪木がございますか？

日蓮　この小屋全部が、皆んな薪木のやうな物だ。あはツはツはツ……。（笑ひ乍ら壁から柴や笹を折り取る）

日朗　（元氣よく早く）　私の身體も薪木でございます！（ユックリと）お師匠様にお會ひしてから、火が燃えてゐるやうに、不思議に暖かになりました。

日蓮　お互の身體は、法華經の爲めの薪木だ！（日朗火打石を打つ。火燃え出す）おー久しぶりの火だ！久しぶりのお客だ！　さア、ユックリと物語らう。さて筑後房、お前の御勘氣はもう許されたのか――わしはお前がこんなに早く來てくれるとは思はなかつた。

日朗　（セカ〳〵と）　いえお師匠様、御勘氣は許れたのではございません。宿谷左衞門様のお情で、あの土牢を一寸出て來たのでございます。

日蓮　宿谷光則殿の情だと？

日朗　（稍口早やに）　それもお師匠様のお力によつてゞございます。依智から給はりました十月三日とあの九日の二通のお手紙をば、私共五人の者は、毎日々々あの土牢の中で御經と共に拜んでは、有難た淚にむせんでゐたのでございます。それに感じて法華經の有難さを信ずるやうになりましたのが、先づ獄舍の番役人でございました。續いて宿谷様も祕かに御信仰なさるやうに成りました。或日宿谷様は私共に橘の實を下さいました。私はあの黃色い橘の實を手にしますと、お師匠様がそれのお好きな事を思ひ出しました。それで其由を物語りますと、それでは之を持つて佐渡へ行つて來て下さい――とさう宿谷様がおつしやいました。（話の中に荷物を開く）さア、これが其橘でございます。（差出す。日蓮受取つて佛前へ供へる）路用から乾飯、杖草鞋に至るまで布施していたゞいて、宙を飛ぶやうに馳せ參つたのでございます。皆様からのお手紙はこれでございます。（手紙を差出す）ここに乾飯の殘りがございます、あたゝめて差上げませうか？

日蓮　いや、それでいゝ。わしは先づ橘を頂戴しよう。（佛前から取つて）お前も一つ頂戴するがいゝ。（差出す）

日朗　はい。（受取る）

（兩人橘を食べる。）

日蓮　うまい！　皆んなの眞心がこもつてゐるから、一層うまい！

日朗　（落付いて）　私もおいしゆうございます。お師匠様

の毎日の御食事は、何ういふ物でございますか？

日蓮　わしの事は後で話す、それよりも早く聞きたいのは鎌倉の様子だ。さうだ、先づこの手紙から……（以前の手紙を次ぎ／＼に開いて讀む。日朗焚火をして之を照らす）む……。先づこれで様子は解かつた。が、只一事の分明にならないのは、わしの頸が、なぜ龍ノ口で助かつたか――といふ事だ。

日朗　（セカ／＼と）それは私からお師匠様に、お尋ねいたしたいと思つてゐるところでございます。

日蓮　わし自身でやつた事は、わしには分明だ。

日朗　（熱心に）それを承はりたう存じます。

日蓮　（自由自在の雄辯）それには三段の祕法がある。先づあの日――九月十二日の夕方、平ノ左衞門が數百人の兵士どもを引きつれて押し寄せて來た時、わしは大音聲に怒鳴りつけてやつた。「あら面白ろや！　平ノ左衞門が物に狂ふを見よ、諸君！　彼は今ぞ日本國の柱を倒さうとしてゐるのだ！

日朗　（強く）私は其場にゐませんでしたが、その事は後から承はりました。

日蓮　（輕ろく）これで以て、あしこにゐた兵士共は、皆んな其膽ッ玉を抜かれて了つたのだ。「日蓮こそ御勘氣をかふむつてゐるのに、却つて寄手の方を叱りつける、これは大變な事だ！」と彼等はあわて迷つて、顔の色をサッと變へて了つた。これが第一の折伏(しやくぶく)だ。

日朗　（強く）第二は？

日蓮　平ノ左衞門は利口な男だ、グッ／＼してゐるとあつちこつちにやられると思つたので、一應の詮議もなく、時宗に相談もなく、夜中祕かに龍ノ口へ引張らうとしたのだ。そこでわしは恰ど鶴ヶ岡の宮前を通る時、馬から飛び下りて、八幡宮をハッタと睨みつけ乍ら「いかに八幡大菩薩はまことの神か。」……と怒鳴つてやつたのだ。鎌倉將軍の守護神を、頭から叱りつけることはこれたゞごとでない――と馬鹿正直な兵士共も、心の奥底から驚いたのだ。これが第二の折伏だ。

日朗　（強く）第三は？

日蓮　以上でもう十分であつたのだ。あの時若しわしが劍を取つて號令すれば、平ノ左衞門の首こそ無くなつてゐたのだ。が、わしは猶わしの運命の前に、此身を投出して見た。ところが龍ノ口で何うなつたと思ふ。

日朗　（物凄く）江ノ島の方から月のやうな光物が、表はれたさうでございますね？

日蓮　それよりも、彼等はわしを頸の座に据ゑたまゝあんまりグヅ／＼してゐるので「どうしたのだ／＼？　頸を斬りたいなら急いで斬るがいゝ。夜が明けたら見苦しい

ではないか！」……とわしは叫んだのだ、それが第三の折伏だ。

日朗　（感極まつて）なるほど……それでよつく解かりました。

日蓮　わし自身の事は斯樣に解かつてゐるが、それよりも解からないのは、あの時鎌倉將軍の殿中で屋鳴り震動とかゞあつたといふが、それは一體なんの事だ？　その爲めに信濃判官が赦免狀を書き、南條七郎がそれを持つて馬を飛ばして來たのださうなが？

日朗　あれはお師匠様、信者達が皆んな揃つて將軍御所へ押寄せ乍ら、大聲に御命乞ひの御題目を唱へたのでございます。（神祕的に）その御題目によつて、不思議な殿中の屋鳴り震動が起つたのでございます。

日蓮　成程。あゝそれで解かつた――龍ノ口でわしの頭がおちなかつた神通力の內味が。

日朗　（小聲に鋭く）南無妙法蓮華經……。

日蓮　（一つの手紙をちよつと見て）で、其時亂暴をやつた者でもあつたのか？

日朗　信者達は皆んな溫順し　生命を投出してゐましたが、それについて來た數知れない群集が、多少亂暴をしたやうでございました。

日蓮　あゝ其爲めだね――この手紙によると信者達が一百六十人も搦め捕られたといふのは？

日朗　はい、さやうでございます。

日蓮　氣の毒な事だ！

日朗　ですが何うか御安心下さい。私が出發する直ぐ前に、皆んな赦免されました。

日蓮　それはうれしい！　が、それは何ういふ譯からだ？

日朗　あれから毎晩のやうに火を放つたり、辻切をする者がありました。そして噂さでは皆んな法華信者だといふのでございました。そこで密吏を以つて夫等の犯人を捕へて見ましたところ、大抵皆んな念佛や眞言禪律に緣故を有つた無賴漢だつたさうでございます。

日蓮　（大聲）あはツはツ／＼……。さて其次ぎに尋ねたいのは、蒙古の問題だ。使者の趙良弼は其後何うしてゐるのか？

日朗　私があちらを出發します少し前、一先づ高麗の國へ歸つたさうにございます。

日蓮　幕府の考は、其後何うなつた？

日朗　西國方面へ頻りと警備の用意をしてゐる樣子でございます。先日も伊勢の大廟へ其御祈禱の使が參つたさうにございます。

日蓮　む……事は愈々迫つた！

日朗　（感傷的に）國の大本を定めないでは、いくら加持

祈禱をしましても、警備を計りましても、何んの役にも立ちますまい、まことに心細い次第でございます。（熱涙と共に）あゝ！　何時になつたらお師匠樣の御精神が、彼等に解かる事でございませうか！（涙が頬を通つて流れる）

日蓮　わしの精神は、恐らく永久に解からないであらう！

日朗（泣き乍ら）それでもお師匠樣……。

日蓮　わしの精神は解からなくとも、わしの折伏行は相當の力を示すに違ひない。彼等は寄つてたかつてわしを憎む、然しわしの折伏だけは彼等の身にこたへて、其處に或る反動作用を表はすのだ。此作用こそ彼等に取つての、又、この國に取つての、唯一無上の成佛道なんだ。折伏逆化とはこの事を云ふのだ！

日朗（涙を拂つて興奮し乍ら）あゝさうでございます！　さうでございます！　彼等はお師匠樣の「立正安國論」を見て腹を立て、伊東に房州に龍ノ口に、度々の迫害を加へました。而かも彼等はお師匠樣の御警告に從つて、西國の警備を計り、又伊勢の大廟へ使を走せました。之は眞に有難い事にございます。

日蓮　この末法の世では、大抵の事が皆んなさうなんだ。裏面と表面とは逆になるんだ。表面で佛菩薩の如く謂はれる者が、其實體は惡鬼なんだ。表面で仇敵の如く憎まれてゐる者が、本當は救主なんだ。いつさい表面上の事は駄目だと思へばよい、其反對に因果妙法の生命力によつて、潜在的に無意識的に、實行されるものゝみが如法眞實だと思へばよい。此間の甚深微妙の關係を巧妙に工夫されたものが、釋迦牟尼世尊の「法華經」なんだ、そして其折伏行なんだ。

日朗（極めて感傷的に）でもそれではあんまり私共は、不幸過ぎやしますまいか！　斯ういふ北國の寒い島で、斯んな迫害を受けるといふのは、何う思ひましても、酷どすぎるやうに存じますが……。

日蓮　それは致方がない。斯ういふ時代に生れ、斯ういふ使命を受けた、我々の當然受くべき運命なんだ、それが此時代と此國と此我々との、因果妙法なんだ！　遁がれる事の出來ない妙法蓮華なんだ！　愚痴は止めよう！　さア、久しぶりにお前と一緒に聲を合せて、御經を讀み奉らう。「勸持品」二十行の偈だ。

（兩人佛像に向つて合掌し熱烈に而して朗々と讀經する。この間焚火は消えたり燃えたりする。外では吹雪の音が之に合奏するやうである。）（此讀經は演者自身も其內容をよく理解し、夫々の感激を示さなくてはならない、觀客もそれを理解して相當の感應を現はすやうに——）

讀經（兩人合唱）　即時に諸々の菩薩、俱に同じく聲を發して、偈を說いて申さく。唯願はくば、慮ひし給ふ可からず。佛の滅度の後、恐怖惡世の中に於て、我等當に廣く說くべし。諸々の無智の人の、惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者あらん。我等皆當に忍ぶべし、惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるをこれ得たりと思ひ、我慢の心充滿せん。或は阿練若に、納衣にして空閑に在て、自ら眞の道を行ずと思つて、人間を輕賤する者有らん。利養に貪着するが故に、白衣の爲めに法を說いて、世に恭敬せらること、六通の羅漢の如くならん。この人惡心を懷き、常に世俗の事を思ひ、名を阿練若に假つて、好んで我等が過を出さん。而かも斯くの如き言葉をなさん、此の諸の比丘等は、利養を貪るを以ての故に、外道の論議を說く。自ら此經典を作つて、世間の人を誑惑す。名聞を求るを以ての故に、分別して此經を說くと。常に大衆の中に在つて、我等を毀らんと欲するが故に、國王大臣、婆羅門、居士、及び餘の比丘衆に向つて、誹謗して我が惡を說いて、これ邪見の人、外道の論議を說くと謂はん。我等佛を敬ふが故に、悉く此の諸惡を忍ばん。これに輕しめて、汝等は皆これ佛なりと言はれん。斯くの如き輕慢の言葉を、皆當に忍んで、之を受くべし。濁劫惡世の中には、多くの諸の恐怖有らん。惡鬼其身に入つて、我れを罵詈毀辱せん。我等佛を敬信して、當に忍辱の鎧を着るべし。此經を說かんが爲めの故に、此諸の難事を忍ばん。我れ身命を愛せず。たゞ無上道を惜しむ。我等來世に於て、佛の所囑を護持せん。世尊自ら當に知しめすべし。濁世の惡比丘は、佛の方便、隨宜所說の法を知らず、惡口して顰蹙し、數々擯出せられ、塔寺を遠離せん。斯くの如き等の衆惡をも、佛の告勅を思ふが故に、皆當に此事を忍ぶべし。諸の聚落城邑に、それ法を求むる者有らば、我れ皆其所に到つて、佛の所囑の法を說かん。我はこれ世尊の使なり。衆に處するに、恐るゝ所無し。我れ當によく法を說くべし。願くは佛安穩に住したまへ。我れ世尊の御前、諸の來りたまへる、十方の佛に於て、斯くの如き誓言を發す。佛自ら我が心を知しめせ。」

（此讀經が始まつて少しすると、物凄い嵐の音は次第に美しい天樂の音に變つて來、吹雪は天華と變じて廻ひ降り、周圍の石碑や卒塔婆や提灯から岩石立木に至るまで悉く菩薩摩訶薩天童天女となつて、日蓮日朗の讀經に合唱する。それ等と共に美しい天香のにほひが

たゞよつて來る——天童天女が捧持してゐる香爐の中から立ち昇ぼる煙によつて地獄の相は卽ち轉じて極樂の相を示したのである。讀經の終り頃になると、金錍臺は夜明前の光線で次第に少々明るくなり、諸菩薩や天人の姿はソロ／＼と消え失せる。然し合唱は終りまで續けられる。と、其處には大雪の積つた景色が漸次に表はれ、有らゆる物は總て淸い白雪でおほはれてゐる。そしてそれを黎明の美しき光が、ユル／＼と照し始める。）

讀經の聲（合唱）南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日蓮（寂かに）日朗！

日朗（同じく恭々しく）はい！

日蓮 見たか？

日朗 はい！

日蓮 なんと思ふ？

日朗 法華經の會座は、神力品から囑累品の說相だと、拜見いたしました。

日蓮 なるほど、大いによろしい。だが、（追想するやうに）わしにはもつと違つて見えた……。

日朗 とおつしやいますと？

日蓮（空を見詰めて）さうだ！（答へると云ふよりも自ら頷き自ら信じ自ら叫ぶやうに）今までに一度も表はれなかつた法會だ！ 全く新しい法會だ！（強く身もだえをし乍ら）あゝ！ わしの全身に新らしい力が湧いて來る！ 新しい力が迸つて來る！

日朗（心配して傍へよる）お師匠様！

日蓮（強く日朗の兩手を取つて）日朗！ わしは愈々未曾有の大事を現はさなくてはならないのだ！（手を離して）佛滅後二千二百餘年の間、一閻浮內に於て、未だ曾て無かつた大事だ！

日朗（急いで）それは今日只今でございますか？

日蓮 いや、今日ではない。

日朗（熱心に）私は是非其お芽出度い御法座に、列なりたうございます。

日蓮 だが、お前は今度は、成る可く早く鎌倉へ歸らなくてはならない。

日朗（憤然として）でもお師匠様！

日蓮 宿谷左衞門殿への義理がある！

日朗（失望して）あゝ！（思ひ當つて）さやうでございました！

日蓮 わしの魂の中に、今生れつゝある新しい大事は、恐らくお前が今度來た時分であらうと思ふ。わしは其大事を現はすまでに、用意として開かねばならぬ法門がある。

そしてそれによつてわしは、この佐渡を機として、今までのわしの生涯は爾前迹門となり、これからのわしこそ眞實本門となるの道理を、示すであらうと思ふ！（ふと我に還つて）おや、もう夜が明けた！（正面の外を覗つて）あゝ今日は晴天に相違ない！　久しぶりの天氣だ。（立ち上がり）さア、外へ出て太陽を迎へよう！

日朗　はい！

（兩人急いで外へ出て、左手の崖の上から向ふを眺める。太陽の曙光パッと射し、天地五色に輝やく。）

日朗　（太陽に向つて合掌して）南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！　南無妙法蓮華經！（この時一陣の朝風と共に三昧堂は大雪に押されてバラ／＼と見事に崩倒する）あゝ！　御堂が！

日蓮　（倒れた堂をヂッと見た後再び太陽に向ひ乍ら）日朗！　わしの本當の仕事はあの太陽のやうにこれからなんだ！

（日朗蹲み乍ら日蓮に向つて合掌する。太陽の光益々麗かに、鳥の聲頻りにして。）

――幕――

狐の嫁入り（一幕）

春の花野の二股道。一本は花道から一本は左奥から來て、恰ど舞臺で出會ひ、右手へと通じてゐる。其處に古い道祖神があり。其周圍に山櫻や椿が咲いてゐる。月の光がそれを妖艶に照らして居る。

蛙の聲一と頻り――花道から洋服を着た三十男が大きな鞄を抱き大きな蝙蝠傘をついて物思ひに沈み乍らふら〳〵と登場。同時に右手から自轉車を押し提灯を持つた和服の五十男登場。舞臺下手でパッタリと出會ふ。

五十男　やア、龜塚さん！

男　おー―石倉さんですか。

五十男　たゞ今お歸り！

男　え、貴方はどつちへ？

五十男　なにね、一寸調布まで行くんですがね、貴方は十一時の終電車でしたか？

男　え、さうでした。自轉車にはなぜ乘らないのですか？

五十男　今、そこんとこでこはして了つたんです。あの藪道はまつくらですからお氣をおつけなさいよ。それに此邊には悪い狐かゐますから――此車をこはされたのも其狐のせゐかも知れない……。

男　へえ――。

五十男　（キセルで煙草をすひ乍ら）貴方は近頃大變な御繁昌ださうで……悴の話では貴方のお作を三處の芝居でやつてゐるとか……。

男　ですが皆んなたゞ同様なんでしてな……それにどれも思つたやうにやつてはゐません。私は却つて悲觀に陷つてゐますよ。芝居といふものが、却つていやになつてゐますよ。で私は……。

五十男　いづれ其うちお尋ねします。今夜は遲いから、これで失禮。（急いで自轉車を押して花道へと出る）春の夜はいゝですな、あゝ花の香がプン〳〵してゐる……。

男　おや！　ヘンな臭ひがするツ！　人間の屍のやうな臭ひだ！

五十男　おごじようだんを！（花道に退場）

（三十男なやましげに道祖神の前の石に腰を下して考へに沈む。少時――舞臺少し暗くなる。左手の道から美しい二十女が出て來る。）

女　先生！

男　（びつくりして）おや、君何うして？

女　先生！す、濟みません。（くづれるやうに男の膝に泣

きかゝろ）私あんな下手な芝居をして、先生のお作を台なしにして了ひました。本當に相濟みません、何んとお詫びをしてい丶か……私それでハネると直ぐ後を追つかけて來たのです……立つても坐つてもゐられないものですから！（男から離れて聲をたてゝ泣き倒れる）

男　（立つて女の肩に手をかけ乍ら）なんでもない事です、泣かないで下さい！

女　（泣顔を上げて）許して下さる？

男　そ、さうですとも。

女　まア、うれしい！（女狂的に飛び上つて男の兩手を握る――少時間）先生、これから何うしませう？

男　夜があけるまで、この花の野原をさまよひ歩かうぢやありませんか！

女　（立つて）さうしませう。

（兩人手を引いたまゝ道祖神の裏の方の道のない草叢の中へと這入つて行く。少時――間。右手から錦繪なんかにあるやうな「狐の嫁入り」の行列が出て來る。皆んなチョン髷上下袴。手に〳〵赤提灯を提げてゐる。行列のまん中のお駕籠にはさつきの三十男と女が乘つてゐる。三十男の他は、皆んな本當の狐である。行列は靜かにスーッと左手へと消える。）

―― 幕 ――

超人俱樂部 （喜劇三幕）

時 現代

處 或る都會

人

織田多慶子（二十二三歲）人氣女優で「超人俱樂部」の團長
梅子（二十五六歲）女優同上團員
滿津子（二十歲前後）女優、團員
歌子（十八九歲）團員
芳枝（十七八歲）團員
お園（二十二三歲）源吉の姉——實は〇〇〇の△△
源吉（七八歲）貧民窟の子供
竹野（二十五六歲）柔道家、團員
雛波（二十三四歲）團員
內田（十八九歲）團員
水村（十五六歲）ボーイ
三宅（五十六七歲）骨董屋
小野山（三十歲前後）畫家
平藤辰造（二十五六歲）勞働者
立ちん坊二人（老年と中年）
其他群衆大勢

場面

第一幕 織田多慶子宅の應接室（或る日の午後）
第二幕 或公園の一角（前幕より七日後の夕方）
第三幕 第一幕と同場（前場と同日の夜）

第一幕

最も新しい婦人によつて、金にあかして裝飾された西洋式應接室の內部。
正面下手に扉、其の向うは玄關口。正面上手は窓、其下に机、机の上に電話。
右側中央に戸口、そこから女主人の假粧室や寢室等に通ずる。
左側前方に戸口、そこから臺所方面へ通ずる。
テーブル、腰掛、寢椅子本棚本箱等それぞ〲宜しくあり、處々に立派な花輪が置いてある。

開幕。

右手前で梅子と滿津子が芝居の稽古をしてゐる。歌子と芳枝、竹野と雛波と內田の五人が思ひ／＼の椅子によつて、その稽古を觀てゐる。

今一段終つたところとみえて拍手する。

竹野　(大聲に) うまい。うまい！

內田　うまい、大いにうまい、が然し少々下品だ。

歌子　惡口を云はないで温順しく見物してゐらつしやい。

內田　(皮肉に) へい、へい。

(右側戸口から美少年のボーイ水村が現はれる。)

水村　(直立不動の姿勢で) 梅子さん滿津子さん、先生がお呼びです。

梅子　はい。

滿津子　はい。

(兩女急いで右側へと退場、滿津子は戸口に立つてゐる水村の頰をチョイと突ッついて行く。水村は平氣の顏で歩調正しく室內を横切つて、右側前方の戸口へと退場する。)

竹野　僕さつき來がけに見たのだが、門の前に大勢若い野郎共が集つてゐたよ。あれは乾度こゝの大將の出て行くのを拜まうといふ連中だな。

雛波　え、さうですよ。

歌子　つまり多慶子先生の崇拜團でさね。

芳枝　「超人クラブの院外團」と云つた方がいゝわ。

內田　「院外團」とはうまいね！

竹野　實際團長の人氣には恐れ入らざるを得ない。流石に團長だ！　敬服のほかはない……で、今度の芝居は今日が初日ださうだが、何うだね？　又この前のやうなすばらしい大入をうつだらうか？

雛波　それや云ふまでもないでせう。大將が出さへすれば、乾度大入といふ事は、もう決まりきつたやうなものですからね。

內田　(皮肉に) 藝とか脚本とかいふものは何うでもいゝんだ、唯だ織田多慶子孃といふ人間がえらいと云ふ有樣だからね、それや大したもんさ。

歌子　(叱りつけるやうに) また皮肉を云つてる！　默つてゐらつしやい！

內田　へい／＼。

雛波　(窓から向ふを見て) おや／＼隨分大勢になつた。

(左前戸口から水村登場、歩調を取つて右方へと進む。)

芳枝　(同じく) まアね！

竹野　水村君、先生はもう御出發になるのかね？

水村　(止つて) はい、もう約二十分もたつたら、御出發

になります。今私は自動車に其用意を命じに行つて來たところです。

竹野　あゝさうか。僕も護衞かたぐ〳〵御見送りに參つてゐます――とさう云つてくれ給へ。

木村　はい、畏まりました。(右手戸口へと退場)

内田　竹野さん、近頃何か面白い事はぶら下りませんかね？

竹野　いーや、それが少しもないのでな。毎日々々欠伸ばかりしてゐるといふ慘めな始末さ。

内田　大將が舞臺の方へ凝り出したので、超人クラブの本職も一向振はない譯ですな。

竹野　全くな！(立ち上がり乍ら)あゝ……何か早くすばらしい大喧嘩でも起らないものかな！　だが(難波と内田の顏を見詰め乍ら)君達二人は近頃コソ〳〵と惡事をやりよるといふ噂だが、本當かね？

(兩人ハッとして顏色を變へる。)

歌子　え、さうなんですよ。而かも軟派不良行爲をなかなか御勉強ださうですよ。

竹野　軟派不良だと！　け、けしからん！

難波　う、う、嘘ですよ、嘘ですよ！

竹野　いや、確かにさうらしい。今二人共ハッと顏色を變へたところを見ると、圖星に當つたんだ。

内田　冗談ぢやない。それは僕等が特別神經質のせゐだからですよ。竹野さん、あの歌子さんの云ふ事なんかあてにしては困りますよ。

竹野　さうかな？

芳枝　本當ですよ。

竹野　嘘にしろ本當にしろ、兎に角、僕は今相手がほしくつて困つてゐるところだ、二人一緒に何うか僕の喧嘩の相手になつてくれ。

難波　何う致しまして……。

内田　貴方にやトテモ叶ひつこありやしません、何うか御免を……。

竹野　いや、何も本當の喧嘩ぢやないんだ、つまり稽古といふやつさ。(難波と内田の兩人の手を捕へて前方へ引張り出さうとする。)

難波　(半分泣いて)許して下さい、何うか許して下さい！

内田　(同じく)御免を、御免を！

(この時正面入口の扉を押開けて骨董屋のおやぢ三宅がバサ〳〵と出て來る。)

三宅　え、今日は。え、先生はまだ御出かけぢやありますまいな？　え、まだ御出發ぢや……。

(竹野は難波内田の兩人を放つておいて突然三宅を捕

（へて腰投にかけて倒す。）

三宅　ヒヤー。（びつくり倒れて）な、何事ですぞい？

竹野　喧嘩の稽古さ。

三宅　成程、貴方は柔術家大先生でしたな。これはたまらない。何うか御勘辨を。（起き上り乍ら）そ、それで、せ、先生はまだ御出かけぢや……。

歌子　まだ御出かけぢやありません。今奥で御衣裳をつけてゐらつしやるんですよ。

三宅　あゝ、それはよかつた。え、皆さん恰ど只今例の御肖像畫が出來上りましたのでな。

歌子　先生の御肖像！

三宅　はい、さやうぢや。今それを美術家先生と一緒に、御玄關口まで持つて來ましたのぢや。

芳枝　先生お待ちかねでしたから、乾度お悦びになりますわ。

三宅　はい〳〵。それでは急いでこれへ持つて來ませう。

（セカ〳〵と扉口より退場）

難波　先生の肖像つて、誰が描いたんだね？

芳枝　それあの方……それあの方……。

内田　「それあの方」ぢや解からない。

歌子　小野山さんですよ。

難波　うん、あいつか！

内田　あの有名な惡口屋か！

芳枝　さうですよ。

難波　あいつが先生の肖像を描くなんて。神祕不可思議なことだ？

芳枝　それには由來因緣があつてよ。

難波　さうなくては叶はんて。

内田　あいつは何時か「美術雜誌」で、ひどく先生の惡口を書いた事があるぢやないか。先生の芝居は藝術ぢやないつて。

竹野　け、けしからんやつだな！

難波　で、その由來因緣といふやつは？

芳枝　つまりそれは斯うなんさ。先生はその惡口を御覽になつてひどく御憤慨なさつてね、何うしてもその男を征服しなくては相成らんと、御決心なさつたのです、それで先づさつきの骨董屋をお使ひになつて、小野山さんの繪をいろ〳〵お買上になつたのさ。それがキツカケで奴さんたうとう先生にまゐつて了つて、今では全く奴隸同樣なのさ。

竹野　いかな豪傑でも、こゝの大將には叶はないからな。

内田　貴族出身だといふ門閥があり、金持だといふ地位があり、人氣女優だといふ實力があり、それに稀れなる美人だといふ圓滿具足の御身分だからね。

難波　ヒヤ〳〵。
竹野　全くな。で、それで以つて奴さん、先生の肖像を描き奉らうといふ譯だね？
芳枝　え、さうなんですよ。
歌子　心血を注いで、生命がけで描くといふ熱心なのさ。
芳枝　それが實際可笑しいのさ。私共の前では何時でも「俺一人藝術家様だ」と云はぬ許りにツンと澄してね、全るで虎のやうに威張つてゐるが、先生の前へ出るとね、全るで小猫かチンのやうになるからね！
歌子　しいつ！　やつて來るよ！
（扉を開けて三宅が出て來る。續いて大きい肖像畫の包を持つた汚ない二人の勞働者が現はれ、その後からそれを大切さうに監督する畫家の小野山が出て來る。勞働者は三宅の命ずるまゝに、左側の隅へ荷物を下して、ソヽクサと出て行く。）
歌子　小野山さん、御肖像が出來上つたさうですね。一寸見せて下さいな。
小野山　（キツパリと）いゝえお斷りします。
芳枝　まア何んだつて？
小野山　それは諸君にお見せする爲めに描いたのぢやないんですから。
芳枝　へーン！　だ。

竹野　（小野山の方へ進み乍ら）君は生意氣だぞ——新參のくせに！　俺達をいつたい誰だと思つてるのだ！
三宅　（あはてゝ竹野を止め乍ら）まア〳〵竹野さん、つまりその、そのつまりこの繪は、先生に獻上なさる大切なお品物だから、それで以つて先づ第一ばんに先生にお目にかけなくてはいけない——とつまりさう小野山さんはお思ひになるんでせう、ね、小野山さん？
小野山　さうですとも。
竹野　よろしい。其點は解かつた。我々は今それを强ひて見ようとは云はない。が、それは別問題として兎に角、この男には話があるんだ！（ムズッと小野山の胸倉をつかむ）
三宅　（それを猶止め乍ら）まアさ、まアさ……。
（この時右戸口から水村が出て來る。）
水村　皆様、先生には只今直く此方へお出でましになります。そして約十分間だけ皆様とお目にかゝると云つてゐられます。
（竹野急いで小野山から手を離す。皆々キチンとなつて待ち受ける。水村は室内を横切つて扉の前へと行き其處に直立する。瞬時——默。右手から此の家の主人織田多慶子（洋裝）先刻の梅子と滿津子を從へて現はれる。皆々恭々しくお辭儀をする。が、彼女はそれを

見向きもしないで、左側の包に目をつける。）

多慶子　（立腹して）それはなんです？　まアなんて汚ならしい包！　誰が持つて來たんです？

三宅　（恐縮して）へい／＼、何んとも申譯ございません……。

多慶子　おやお前かい！　ふん、また例の黴臭い古道具をカツギ込んだんですね。もうそれはお斷りと云つて置いたのぢやないの！

三宅　へい、へい、それはもう承知致してゐますが、この包は全く汚ならしうございませうが、中には其のつまり新しい綺麗な大切なお品が這入つて居りますので、はい、はい……。

多慶子　たとへ中には何が這つてゐようとも、私はあんな非藝術的な包は大嫌ひです。早くうつちやツて下さい。（この時小野山は眼に一ぱい涙を湛へてオヅ／＼と前へ出て彼女の足元へヒレ伏す）おや／＼これは又なんの眞似です？

三宅　へい、そのつまり、はやく申せば、あの包の中にはこの小野山さんが、心血を注いでお描きになりました、つまりその先生樣の御肖像畫が入つてゐるのでございます。

多慶子　（機嫌がなほる）あゝさうかい！　早くさう云へばいゝのに。さア直ぐ開けて見せて下さい。

（これで一同ホツト安心する。三宅は急いで包を開く、竹野それを手傳ふ。小野山はいけにへのやうに靜かにヒレ伏して、彼女の批評の下るを待ち受けてゐる。）

多慶子　（開かれた繪を見て）よく出來ました。私氣に入りました。（小野山うれしさに顏を上げる）今日は初日ですから少し早めに出掛けます。（起き上がる小野山に向ひ）貴方も劇場へ來て下さい。

小野山　はい、有難うございます。

多慶子　序ですから、その花輪を持つて來て下さい。

小野山　はい、畏りました。

竹野　私は護衛にお伴致したいと思つとりますが、如何でせう？

多慶子　それには及びません、それよりも留守のはうをお賴みしませうか。

竹野　はい、畏りました。それでは行つてゐらつしやい。

皆々　行つてゐらつしやいまし。

（多慶子、梅子、滿津子、其後から小野山は花輪を一つ捧げて出て行く。皆々見送る。自働車の音――間もなく「萬歲！」「織田多慶子萬歲！」など叫ぶ群衆の聲が聞える。少時――默。）

三宅　成ほどな、成程な、すばらしいお人氣ぢや。お芽出

度いことぢや……。

難波　おや！　あの音は？

三宅　えッ？

（やゝ遠方で自動車のケタヽマしい笛の音と群衆の罵り騒ぐ聲が聞える。）

芳枝　（窓から向うを見乍ら）あら／＼四ツ角の處で！

竹野　（椅子にすわつたまゝ鈍感に）何事か起つたのかい？

芳枝　何んか起つたのでせう、大變な騒ぎよ。

難波　（同じく窓から見て）喧嘩かな？

竹野　（中腰になつて）なに喧嘩だと？

芳枝　いえ、何うやら自動車の衝突らしい！

難波　いや、それとも違ふやうだ！

芳枝　あら、先生の乗つてゐらつしやる自動車か、誰か人を轢いたらしい！

難波　さうだ／＼。

竹野　よしッ！　わしが行く。（宙を飛んで扉口から走り出る）

三宅　大變だ／＼！（其後を追ふ）

（木村、内田、歌子、芳枝、難波といふ順で其後から續いて走り出る。舞臺少時無人——正面外の騒ぐ音は徐々烈しく次第々々近づいて來る。）

（突然扉を押開いて多慶子ころがり込むやうに走つて來る。そして中央で息を切らしバタリと倒れる。續いて勞働者平藤辰造（印半纏）マツカな顔をして、腰に組みついてゐる竹野を引きずるやうにして現はれる。）

辰造　逃げようたつて、ウヌ、逃がされえぞ！

竹野　えいッ、えいッ！（かけ聲をしてねぢ倒さうとする）

（辰造強力でそれを引きずつたまゝ彼女に近かようとする。其時扉を蹴開いて小野山が現はれ、死物狂ひに辰造にしがみつく。）

小野山　（必死に叫ぶ）先生早く！　此間に早く！

（多慶子元氣を出してヒヨロ／＼と起上がり、右側戸口へと逃げる。）

辰造　ウヌ、邪魔ッけだ！

（辰造一氣に竹野と小野山を拂ひ倒して、將に入らうとする多慶子の洋服の左腕をヒンづかむ——ビリッとその洋服の袖破れて、タジ／＼／＼と後へ退く。その拍子に彼女は向うの室内にころげ込み、袖の破れは彼男の手に殘る。恰どその時扉からは梅子滿津子歌子芳枝難波内田木村三宅が駈込み、正面の窓からは大勢の群衆が口々に叫び乍ら覗込む。）

辰造　（窓外の群衆を睨みつけて）彌次馬め！　見物事ぢやねえぞ！（思はずその手に持つてゐる彼女の袖の破れ

が群衆に向つて投げつけ、ツカ〳〵と右手の室に入る。

（群衆は投げつけられた袖を奪ひ合ふ。水村小野山竹野の三人右手の室へ行かうとする――その時辰造多慶子の右腕（破れない方）を捕へて、ノツソリと現はれる。皆々パツと飛び退く。辰造彼女を中央へ押し遣り、自分はその右手に剛然と屹立する。群衆歡呼の聲を上げる。皆々多慶子を左手へ連れて介抱する。そして左前方の戸口から出たり入つたりする。）

辰造　喧しいわい、やい彌次馬！（群衆の聲やゝ鎭まる）

梅子　（進み出て）なんていふ野蠻人だ！

辰造　（耳を立てゝ）何？　何んと云つたんだ？　俺は少し耳が遠いんだ。大きな聲で云つてくれ！

梅子　野蠻人！

辰造　野蠻人だと？　馬鹿な！　自動車で人間を轢き逃げしようといふのが、野蠻人でねえといふのか！　きさま等のはうこそ野蠻人ぢやねえか！

群衆　さうだ〳〵！

群衆　やれ、大いにやれ！

梅子　自動車が轢いたのぢやありません。あの婦人が飛んで來て、車の横へ倒れたんです。

辰造　婦人だと？　何を云つてるんだ！　轢かれたのは男の子だぞ！

梅子　たとへ男の子にしろ、その子も矢張り自分から車のそばへ走つて來たんです。それは自業自得です。

辰造　よし、それなら（多慶子を指し）あの女も、（竹野や小野を指し）この男等も、皆んな俺の掌の中へ飛び込んで來たから、あゝいふめに會つたといふ譯になる。また俺がこの家へ飛び込んだのでなくて、この家が俺の上へおつかぶさつたといふ譯になる。皆んな自業自得だ！

群衆　ヒヤ〳〵！

群衆　うまい〳〵！

辰造　（サツと進んで梅子を蹴飛ばし）それ！　これもお前の身體が俺の足の下へ飛び込んだのだ。自業自得だ！（大テーブルへ手をかけ乍ら）おや、俺の手の中へこんな机が飛び込みやがつた……。（テーブルめき〳〵と鳴る）さア、手前達このテーブルの下へ頭を突ッ込まれえやうにしろよ！　突ッ込んだら自業自得だ！

（皆々に守護され乍ら寢椅子に腰掛けてゐる多慶子と何か話會つてゐた三宅、この時オヅ〳〵と前へ出て來る。）

三宅　まア〳〵何らかお待ち下さい、御待ち下さい。何卒御勘辨をお願致します、何卒御勘辨をお願致します。（ペコ〳〵頭を屈める）いかにも私共が惡うございました、私共のはうが誤つてゐました。平に〳〵御勘辨をお願致

します。
辰造（テーブルから手を離して）おや、俺の手の中から、机の奴め逃げていきやがつた。命冥加の奴だ！
三宅　はい／＼有難き仕合で、で親方様、手前共では出來ます限りの辨償なりお禮なり致しますから、何うかお立腹なさいませんで、萬事穩便のお取計ひをお願致します。
辰造（三宅に向つて）おい、をぢさん、俺は少し耳がツンボーなんだから、もつと側へよつてハッキリと云つてくんな。
三宅　はい、へい。（恐ろしさうにマゴ／＼する）
辰造　お前は俺をおつかながつてるやうだな。だが、もう安心するがいゝ。お前達が野蠻人の眞似をしなきア、俺だつてそんな眞似なんかしやしねいからさ。
三宅　へい／＼。（近かよつて）重々手前共が惡うございましたで、出來ます限りの辨償なりお禮なり致したいと存じます。それで……。
辰造　よし、分つた。さうなくてはならんて。（窓の外の群衆に向つて）おい野次馬！　さつきの子供は何うしてる？　早く玆へ連れて來い！
群衆　倒れて泣いてるよ！
辰造　まだ倒れて泣いてるつて？　なんだつてお前達は、早く介抱してやらねえんだ。
群衆　おー／＼さうだつたつけ！
群衆　なんしろ、こつちの立廻りが面白いもんだから、皆んなそれに氣付かなかつたんだ。
辰造　芝居か活動でも見てるつもりでゐやがる。
群衆　まア、勘辨してくんな、今に連れて行くからさ。
（群衆次第に見えなくなる。）
辰造（見送つて）よしツ、早くしろよ、丁寧にしろよ。
三宅（椅子を進めて）何うかまアお掛けなさつて！
辰造（腰を下し乍ら）あの子供、ひどく怪我をしやしなかつたか知ら。（と一同の方を透かして見乍ら）俺は少少眼が惡いんだが、そこに運轉手はゐねえのかね。あいつが一ばんの責任者ぢやねえか。
三宅　はい、さやうでございますとも。（一同のはうを見乍ら）運轉手は何うしたんだね？　早く御挨拶に出なくてはなりませんぞ。
難波　運轉手は溝の中へおつこちたんです。そいで今身體を洗濯中です。
辰造　溝の中へ？　それはまあア何うしてだ？
難波　君があの時投げ込んだんぢやありませんか！
辰造　俺か？　そいつは氣の毒なことをした。
三宅　なにそれこそ自業自得でがすよ。が、身體の洗濯が濟み次第、早く玆へ來て、御挨拶するやうに云つて下さ

い。

（難波左側前方の戸口から出て行く。この時電話鳴る、滿津子急いで行つて之を聞く。）

滿津子　はい、はい、さうです。一寸お待ち下さい。（多慶子のはうを見て）劇場からですが、何う申しませう？

（多慶子は右側の寢椅子に腰を下し無念さうにヂッとしてゐるまゝ返事一つしない。）

三宅　（辰造に向つて）え……誠に申しかねますが、手前共主人は劇場の方へ出てゐますので、恰ど只今がその出勤時間なのでございます。で、後のところは私共はじめ一同が責任を以て御挨拶申上ますから、主人ほか二三名の者だけは、何うか失禮さして戴きたいと存じますが……。

辰造　劇場のはうも大事だらうが、人間の命も大事だからな、まア轢かれた子供を見てからにしたがよからう。

三宅　ではございませうが……。

多慶子　（ヒステリックな聲で叫ぶ）今日は出られないつて斷つておくれ！

滿津子　はい、さう申して宜しうございませうか、でも先生が若しお出場にならないと、あの劇物の幕は開きませんか……。

多慶子　斷つておくれつたら斷つておくれ！

滿津子　はい。（電話を上げて）もし、もし、何うもお待ちどうさま、先生は今日は御用事があつて急に出られなくなりましたから、何うか其おつもりで……はい……はいい……それは分かつてゐますが、何しろ、それがトテモむづかしいのでございますから……。はい、はい、一寸とお待ち下さい。（多慶子に向つて）支配人さんが先生にお電話口まで……。

多慶子　うるさいね！　默つて切つておくれ！

滿津子　でも先生！

辰造　よし、俺が返事をしてやらう。（電話をひき取り）こらッ、よく聞け！　こつちでは今人間の生死に係はる大事件が起きてゐるんだ！　芝居なんかに行かれねんだ。さアこれで分つたらう。

（この時正面から子供の泣聲が聞えて、扉が開かれ、二人の立ちん坊が一人の汚ない子供源吉（七八歳）を抱いてオヅ／＼と出て來る。辰造之を見ると電話を投げ出し急いで子供の側へ行く。この時左前から難波コツソリと登場。）

辰造　どこを怪我してるんだ？

立ちん坊一（中年）それがね、親方、どこがどこだか、ちつとも解からねえのさ。

立ちん坊二（老年）あつちから茲へ抱いて來る間、泣きず

めなんだ。何處か横ッぱらでも打つて、打ち身になつてるのかも知れねえ。

辰造　早く何處かへ寢かして見ろ。（多慶子のゐる寢椅子を見て）さうだ、あの椅子がえゝ。

（多慶子急いで立つて右手へ行き、彼等が子供をそれに寢かしてゐる間に、右手の戸口へと入る。梅子、滿津子、水村それに從つて入る。）

辰造　（子供に向つて）おい何處が痛いんだ？（子供一層大聲に泣く）手が痛いか？　それとも腹か？　さうだ足だらう？　え、足だらう？

子供　足だよう。足が痛いよう、痛いよう。（泣き叫ぶ）

辰造　泣くな、泣くな、我慢しろ、今によくしてやるからな。（三宅に向つて）おい叔父さん、早く近所の醫者を呼んでくれよ。

三宅　さうでしたな、醫者を呼ぶ事を忘れてゐましたつけ。早く呼んで來るんでしたな。

歌子　本當に皆んな頓馬だつたのね。私がかけて上げるわ。（電話をかける）　〇〇の〇〇〇〇番！　貴方は加島醫院でせう、こつちは「超人クラブですが」え、え、いや間違ひでした。「超人クラブ」ぢやありません、織田多慶子先生のお宅ですがね、只今怪我人が出來ましたから、大至急お來診下さいませんか？　はい、はい、今お留守ですつて！　それでは代診のお方は？　はい、はい、代診の方は手がひけないんですつて……それは困りましたね。

辰造　駄目だね、俺が談判してやる。（電話を引取つて）おい、おい、こつちは急病人なんだ、そつちの用なんかウツチヤつて直ぐ飛んで來い！　なに、出來ないと、馬鹿な、なに、野蠻だと、どつちが野蠻だ！　グヅ〳〵してるとお前の病院を叩き潰してやるぞ！　なに、なに、直ぐ來ると、よし、早く來い。（電話から離れる）

立ちん坊二　親方、おいら、もうお暇していゝだらう。

辰造　醫者の來るまでゐてくれよ。

立ちん坊二　でもおいら商賣があるんでな、今朝から一文も儲けちやゐないんでな。

辰造　おッさんのは何商賣だ？

立ちん坊二　お見かけの通りの立ちん坊さね。

辰造　あの坂にゐる立ちん坊かい。で、あの子供はおッさんの子かい、それとも孫かい？

立ちん坊二　いーや。さうぢやねえ。

辰造　（立ちん坊一に向つて）ぢやおッさんの内のかい？

立ちん坊一　いーや、おいら獨者だよ。

辰造　ぢやあの子は誰の子だ？

立ちん坊一　知んねえよ。

立ちん坊二　おいらも知んねえよ。
（この時右手から水村出て來て、辰造に向つて紙包の物を差出す。子供は何時となしに泣き眠つたやうてある。）
水村　先生がお手ずからお渡しになるのでございますが、只今お頭りが惡いさうで、失禮なさいます。これは甚だ僅少ではございますが、ホンの御挨拶の印に差上げます。
辰造　（受取つて開き）おや紙幣か！
立ちん坊一　ウン剛毅だな！
立ちん坊二　そのかさなら確かに百兩がものはあるだぞ。
辰造　（水村に向つて）俺は貧乏なその日暮しの勞働者さ。だが、俺が斯んな事をするのは、あの子供が可哀さうだからだ！　轢逃げをする自動車に乘る奴等が、憎いからだ！　金ずくぢやねえんだ。入らねえ金があるなら、あの子供へやつてくれ。俺は一文だつて貰はねえ。（差出す）
水村　（止めて）何うかさうおつしやらないで、お受取り下さい。
三宅　親方様、何うか心よく受取つて下さい。
辰造　入らねえツたら、入らねえんだ。（金包みを其處へ投げつける）
立ちん坊一　あら紙幣がころがつた！
立ちん坊二　そいつ勿體ねえツ！
（兩人思はず包みの方へ手を差出す。）
辰造　おい兄弟、さもしいことをするな！　湯しても盜泉の水を飮まず！　俺達勞働者は働いてこそ正當な報酬を受け取るがいゝんだ、そんなさもしいざまをしてゐるから、何時までたつても金持や貴族共に馬鹿にされるんだ。（ふと思ひ出して）おうさうだ！　俺の荷物は晩までに是非あの店まで持つて行く約束だつた。隨分と道草をくつちやつた。俺は斯うしてはゐられねえ、早く出かけなくつちや。（立ちん坊に向つて）お前達はあの坂の下の立ちん坊だから、別に約束の時間もねえんだらう？
立ちん坊一　約束なんかありやしねえよ。
辰造　おや、日當は今俺が拂つてやるから、何うか俺の代りに、醫者が來て診察するまで、茲にゐてくんな。監督のつもりでな。
立ちん坊二　日當さへくんりやの。
立ちん坊一　さうとも。
辰造　（錢を出して）今持合せが少ないから、三貫づつで勘辨してくんな。あの坂は俺しよつちゆう通るんだから、また後で何んとかしてやるからな。
立ちん坊一　なアに、これで結構さ。（受取る）
立ちん坊二　（受取つて）濟まねえな。

辰造　（三宅に）聞いた通りだ。子供には十分の手當をしてやつておくんなさいよ。
三宅　はい〳〵それはもうおつしやるまでもございません。
辰造　若し後で不都合でもあつた事が解つたら、今度こそ承知しねえからそのつもりでゐろ！
（辰造急いで扉口から退場。一同はじめてホツトする。水村金包を拾上げて右手へ入る。三宅辰造の後を見送つて後、立ちん坊を眺め、急いで上手へ入る。その時分から舞臺次第に薄暗くなる。）
歌子　（立ちん坊に）お前さん達、こゝへかけたらいゝでせう。（椅子を指す）
立ちん坊一　はい、はい。（兩人腰かける）
芳枝　（窓から辰造の後姿を見送つてゐたが此時此方へ向き直つて）あの人なんてすばらしいんでせう！
内田　すてきだつたね！
難波　ば、ば、馬鹿な！　今そんな事云つてられる時か！
（上手から三宅が出て來て、立ちん坊に向ふ。）
三宅　お前さん達、御苦勞だつたね。これはホンの印だが、二人に上げよう。で、今にお醫者樣も來なさらうし、こつちでは十分あの子の爲めを計つてやるつもりだから、お前さん達も安心して歸つたがいゝだらう。
立ちん坊一　はい、有難うございますだ。
立ちん坊二　それではあの子の事よろしく願ひますだ。
（立ちん坊二人コソ〳〵と扉口より退場。）
小野山　（三宅に）先生お頭がお惡いとか？　どんな御樣子ですか？
三宅　心配するほどぢやないでせう。
芳枝　（讃歎するやうに）ほんとうにあの人は强かつたのね！
内田　全く强かつた。
難波　流石の竹野さんも困りましたね。
竹野　（頭を頻りにかき乍ら）實際まゐつて了つた、不思議に强い男だつた、まるで天狗のやうだつた！
芳枝　天狗のやうだつて？
内田　すてきにいゝ形容詞だ―　だがまだいゝ形容詞がある。「ちよーうじーんーー」それだ！
芳枝　全くね、超人といふのはあゝいふ人の事に違ひないわ！　あの人ほんとに「超人クラブ」に入るといゝわ！
（その時右手から多慶子前のまゝの姿で登場。皆々急いで之を迎へる。）
小野山　お、お加減は如何でございます？
多慶子　（極端に皮肉に）お加減ですと？　惡いに決まつてるぢやありませんか！

小野山　あゝ！（頭を抑へて退く）
多慶子　（竹野に向つて）お前さんの柔術は何うしたんですか？　日頃御自慢のあの腰投げは？
竹野　相濟みません、相濟みません。（頻りと頭をかく）
多慶子　（内田に）お前さんのお得意の皮肉は何うしたんですか？（難波に）お前さんの十八番の如才無さは何うしたんですか？（歌子と芳枝に）お前さん達の硬派の不良振りは何うしたんですか？
（皆々頭を屈めて沈み込んで了ふ。）
梅子　皆さん、スッカリへこたれて了ひましたね。
多慶子　（梅子の方をキット見て）お前さんこそ一ばんの失敗ぢやないかね。子供がワザ〳〵自動車の下へ這入つたなんて云つてさ！
三宅　お腹立ちは御尤もです、御尤もです……。
多慶子　いやです、お前さんのおべつかなんか何んの役にたつものかね！　どいつもこいつも、皆んなやくざ者だ！　あの頓馬野郎一人にかなはないなんて！　あんな耳が遠い眼のよく見えない片輪者にやつつけられちまふなんて！　あゝ辛い！　腹が燃えるやうだわ！　泣くに泣かれない！　怒るに怒れない！　あいつめ、よくも〳〵侮辱しやがつたな！　いゝ氣になつて侮辱しやがつたな！　ひどい耻だ！　こんな大きい耻辱がまたとあるものか！　自分個人としての耻でもある、女優として藝術家としての耻でもある、「超人クラブ」全體としての耻でもある……。
小野山　（堪まらなさうに思はず叫ぶ）あゝ何うか怒らないで下さい！　さう御自分御自身を苦しめないで下さい！
多慶子　あゝいやだ！　いやだ！
（思はずテーブルの上の花瓶を取つて投げる――投げた處に恰ど肖像畫があつて、それが破けて了ふ。夕陽がやく――だいぶ暗くなつてゐた舞臺急に赤くなる。）
皆々　まア繪か！
皆々　肖像畫が！
（その時グッスリと寝込んでゐた寢椅子の子供がピックリして跳ね上がり、椅子から下へ飛び下りる。）
芳枝　おやお前！　お前の足はなんともないの？
子供　足？　足なんかなんともないよ、だが腹がへつて死にさうだ！　うわーッ……。（大聲に泣く）
（皆々呆れたやうに子供の方を見る。）

――幕――

第二幕

或公園の一角。
四方森林で圍まれた閑靜な空地。ベンチが二つある。
開幕。
或るベンチの上に平藤辰造が寢てゐる。手に厚い本を持ちそれを腹の上に載せてゐる。
小鳥の聲――少時。右手から子供源吉がノコノコと出て來る、そしてベンチに寢てゐる男をめつけ、あつちこつちと廻つて其顏を覗く。それが自分の尋ねてゐるあの男である事に氣付くと、急いで右手へ走り入る。
小鳥の聲――少時。
左手から前幕に出た立ちん坊(老年と中年)二人弱つた足どりで出て來る。

立ちん坊一(中年者)(ベンチの男を見て) おや、おいらのホテルへもう先客樣がゐるぞ!
立ちん坊二(老年) なアに、今に日が暮れたら、出て行つちまふだらうよ。一寸と晝寢といふやつさ。
立ちん坊一 (寢顏を見て) おー、これや先日(こなひだ)の豪傑だよ!
立ちん坊二 (同じく見て) 成程……違いねえ、大したお方がおいらのホテルへお降り遊ばしたといふもんだ。何か御馳走を差上げてヱもんだな……。
立ちん坊一 全くな。だが、文なしにすきッ腹ぢや仕方がねえな。
立ちん坊二 斯う腹がきたやまぢや、出さうにも唾一滴出やしねえからの。
立ちん坊一 あはつ、はつ、はつ……。
立ちん坊二 あはつ、はつ、はつ……。
(兩人聲を揃へて淋しく泣き笑する。)
立ちん坊二 何うも相濟みません、親方樣。
辰造 (半ば目を醒して) やかましいな……。
辰造 ……だ、誰だな?
立ちん坊一 え……親方、わつち共で……。
辰造 (半身を起し乍ら) 誰だつけ? (眼をこする)
立ちん坊二 牛坂下四ツ角の立ちん坊で……。
立ちん坊一 こなひだ女優さんとこで、お目にかゝつた立ちん坊ですよ。
辰造 あゝさうだつたか!
立ちん坊二 こなひだは有難うござんした。
辰造 (全身を起して) 俺はあの日から三日も續けてあの牛坂を通つたんだが、お前達は見えなかつたね。何處かほかの坂へでも出てゐたのかね?
立ちん坊二 いーや、何處へも出てやしなかつたんで……出るとすれや、あの坂しかおいらの株はねえんですが、

實は昨日まで休んでゐたんですよ。
辰造　さうか、俺はまた目を少々痛めてるで、見間違つたのかとも思つてゐたんだがね。それで會つたら尋ねたいと思つてたんだが、あの時の子供は何うしたね？
立ちん坊二　さう、さう、あの子供何うしましたつけ。
辰造　何うしましたつけ——ぢや困るな。あの時俺は、お前達二人を俺の代理としてあの家へ殘しておいたんぢやねえか。
立ちん坊二　あゝ、さうでしたかな？
辰造　とぼけるな！
立ちん坊一　親方、許しておくんなせェ、わつち共が惡うございした。
辰造　なにも俺はお前達を怒るんでも叱るんでもねえよ。たゞね、あれから子供は何うしたのか？　醫者の診察は何うだつたか？　あいつ等は子供に十分の事をしてやつたか？　さういふ事を聞きたかつたまでよ。
立ちん坊一　それがその……。
辰造　え、なんだつて？　俺チヨット耳が惡いから、もつと側へよつて云つてくんな……。あの子供の怪我は何うだつたね？　何處を打つてゐたのかね？　足の骨でもたがつてゐたのぢやねえかね？
立ちん坊二　おいら一向知りましねえだよ。
辰造　一向知らねえだと？
立ちん坊二　そんな事あの女優さんの内へ行つて聞いたらよかんべい。
辰造　あいつらの處で聞くほどなら、何もお前達に賴みやしねえよ。
立ちん坊二　（立ちん坊一に）親方はまア、何んだつておいらの口から聞きたがるんだらうな？
立ちん坊一　それやわしにも解せねえよ。
辰造　あいつ等は噓を云ふ事がうまい、あいつ等は胡麻化しが上手だ。あいつ等は其噓や胡麻化しで以つて、あゝいふ榮耀榮華の暮しをやるんだ。
立ちん坊一　さう云やさうだな。
辰造　だからあいつ等の云ふ事はあてにならねえ、信用が出來ねえ、そこでお前達から本當の事を聞きたいんだよ。
立ちん坊二　おいらは憚り乍ら噓はこれぱかしも云はねえからな。
辰造　さうさ。だからこちとらお互に貧乏なんだよ。
立ちん坊一　親方、本當の事を云ひますていと、實はおいらあの時あの内には、醫者の來るまでゐなかつたんでさ。あの三太夫のやうなおやぢがね、子供の世話は十分にしてやるから、安心して歸るがいゝと云つたもんですからね……。

立ちん坊二　それにおいらあんた綺麗な內へ、あんな立派な連中と一緒に、ツクネンとしてゐるのは、窮屈で窮屈で、トテもたまらねえもんでな……。
辰造　それやさうだ。だが、お前達はあれから昨日まで遊んでゐたとは、結構な身分だね。
立ちん坊一　遊んでゐたと云や、聞いたところはいゝが、實はあの晩から今日の朝まで、別莊へ行つてたんでさ。
辰造　別莊？
立ちん坊一　警察署の事でさ。
辰造　警察署だと！
立ちん坊二　拘留所といふ上等ホテルでさね。
辰造　おや、あいつ等が訴へたんだな！　けしからん！
立ちん坊二　いや、さうぢやねえんで。あの晩おいら醉つぱらつて、何處だか知らねえが、立派な店の中へあばれ込んで、いやはや、小間物店を列べたり……。
辰造　馬鹿なッ！
立ちん坊一　まア、叱んなさんな。おい等のやうな身分になりや、そんな事するよりほか、何も樂しみつてもんがねえんでね。
辰造　それや俺もよく知つてるよ。あゝ慘めなもんだな！
立ちん坊一　慘めなもんでさ！
立ちん坊二　クヨクヨするなよ。

立ちん坊一　クヨクヨもするよ。朝ツぱらからあの別莊を追ひ出されて、めし一粒腹へ入れてねえんだからな。
立ちん坊二　めしの事は云はねえことさ。云ふだけ腹が減つて、我慢の蟲が承知しなくなるぢやねえか。
立ちん坊一　でも減つた事は、減つた事よ。
辰造　腹が減つた減つたと頻りに云つてるが、なぜめしを食はねえんだ。
立ちん坊二　食ひていのは喉から手が出るやうだが、肝心のレコがねえんでさ。
辰造　亂暴するほど酒を飲む錢はあつても、めしを食ふ錢はねえんだな。
立ちん坊二　いや、あの時の錢は別でさ。あぶく錢といふやつで、五兩！　それも考へて見れや親方のおかげでさね。女優さんとこのあの三太夫に貰つたんですからね。
辰造　（思はず立つて）なに！　あいつに貰つたと！
立ちん坊一　まアさ、まアさ、怒らないやうにしておくんなさい。何にも惡氣で貰つた譯ぢやねえんで……。それやね、親方のやうな豪傑様なら、あの時のやうに百兩もあらうといふ大金を投げつけなさるが、こちとらのやうな平凡人は、五兩は愚か五分三分でも、呉れるとなりや有難く頂戴するんでさね。
辰造　む……。（がつかりしたやうに腰を下して考へ込む）

立ちん坊二　而かも其おかげで以て一週間の別莊行！
立ちん坊一　どつちにしたつて逃らないな！（邊りを見て）
あゝ日は暮れる……腹は減る！
立ちん坊二　また其事を云ふ、もう云ふなつてばよ！
立ちん坊一　だが、何う云つたつて、何う思つたつて、減
つた事は減つた事よ。
辰造　（懷から錢を出して）さア、これでそこいらへ行つ
て、腹をふくらかして來るがいゝ。
立ちん坊二　濟みましねえな……。（受取る）
立ちん坊一　（同じく）有難てヱ、有難てヱ。
辰造　早く行くがいゝさ――だが、酒は謹みなよ！
立ちん坊一　はい。
立ちん坊二　へい。
（兩人急いで左手へと退場。辰造その後を見送つて後
正面を向きザーッと公憤の眼を輝かす。少し前から次
第に夕暗が迫つてゐたが、この時電燈パッと光る。小
時――辰造また失望したやうに泣くやうに腰を下し、
兩手で顏をおほふて了ふ。右手から源吉姉のお園を連
れて急いで出て來る。お園は汚ない衣類をつけては居
り色も黑い娘ではあるが、顏立は整つて何處となく色
氣がある。源吉お園の袖をひいて辰造のはうを指す。
お園頷いて進む。）

お園　もし、もし、一寸お尋ね致します。
辰造　（涙を拂ふやうにして顏を上げ）俺かね？
お園　はい、あの一寸と……（源吉に向ひ）源吉や、この
お方に違ひないのかね？
源吉　あゝ、さうだよ。
辰造　（透かすやうにして）うん？　なんだと？
お園　（源吉に）それではお前、お側へ行つてよくお禮を
云ふがいゝよ。
源吉　（進み出て頗る口早やに）おぢさん、こなひだは何
うも有難うござんした。
辰造　（初めて解かり）うん！　お前かお前か！　足は何
うした？　足は？
源吉　え、もうなほつちやつたよ。（繃帶してゐる左足を見
せる）だけんど……。
（その時お園源吉を押しのけるやうにして進み出る―
―源吉は次ぎの二人の對話の間にコソ〳〵と右手へ入
る。）
お園　もしあの、私はこの子供の姉でございますが、先日
は危い處をお助け下さいまして、ほんとに〳〵有難うご
ざいました。
辰造　なアに、何んでもねえ事さ。
お園　いーえ、一方ならぬお助けを受けましたさうで、ほ

んとに命の恩人様だと、有難う存じてゐます。直ぐとお禮を申上げたいと、暇に任かしてお探してゐたのですけど、お名前も分からねばお處も知れず、誠に相濟ぬ事と存じてゐました。只今お目にかゝれまして、斯んなうれしい事はございません。

辰造　それは俺もうれしいよ、この子の無事な顔が見られての。おや、あの子は何處かへ行つたね？

お園　まア！　何時の間にか！　ほんとに相濟みません。おほかたあつちの運動場へでも行つたんでございませう。あの子つたら仕方のない……。

辰造　なに、子供のことだもの。

お園　ほんとに何んとお禮を申上げてよろしいやら。私ほんとに……。

辰造　いや〳〵、何にも俺は禮を云はれるやうな事をしたんぢやねえんだ。女優共があの子を轢いて逃げようとしたもんだから、つい腹を立てたまでさ。

お園　憎い女優ですこと。まア轢き逃げをしようとしたんですか？

辰造　あゝさうだつたよ。俺はあの時牛坂を登るのは一寸骨が折れるので、一息入れようと荷車を止めてゐたんだ。するとあの騒ぎさね。俺、もうカッとなつて、「その自動車を止めろ！」「その人殺し自動車を止めろ！」と怒鳴つたもんだ！　恰ど坂下にゐた二人の立ちん坊と、それから二三人の彌次馬が「止めろ」「止めろ」叫んだんだ。流石のやつらも坂の中途で止めたよ。俺は直ぐ荷車をおいて走つて行き、運轉手を引きずり下したところ、やつ生意氣にも刄向つて來やがるだらう、一つブン毆つて押し飛ばしてやつたところ、後で聞いて見ると、坂をゴロ〳〵轉げ落ちて、あの深い溝の中へおつこちたさうな。

お園　まアね！

辰造　俺は何んでも自動車の主人をトッ捕へなくちやならねえと思つて、自動車の戸を開けたんだ。ところが髮の長い男がゐたから、こいつだと思つて引きずり下して文句をつけると、後から三人ばかり女連が出て來て、いやはや、喋べるの喋べらないのつて、何んの事だか少しも分からねえのさ。グヅ〳〵してると山のやうな人集りになる、女連も何時の間にか見えなくなる、さては逃がして了つたと思つてると、誰だか知らねえが、彌次馬の一人が今のは何んとかいふ女優で、直ぐ坂下の家だと敎へてくれたので急いで、其後を追つかけて、その家へ乘り込んだといふ騒ぎさね。ところが奴の家には、大學生のやうな男が大勢ゐてね、俺をセキとめようとするぢやねえか、そこで力一ぱいの大立廻りさ、あはつ、はつ、はつゝゝゝ……。（豪傑笑ひ）

お園　貴方はそこで、岩見重太郎や宮本武藏のやうにあの家の人達大勢を投げつけてお了ひになつたさうですね。

辰造　岩見重太郎だと！　宮本武藏だと！　うはつ、はつ、はつゝゝゝゝ。（豪傑笑ひ）

お園　それは〳〵勇ましかつたと、私後から聞きましたわ。（その時森の梢を通ほして月の光がサッと二人の上に射す。辰造しみ〴〵とお園を眺める。お園もぢ〳〵する。）

辰造　お前さん立つてゐちや、疲れるだらう。さア、こゝへお掛け。（自分の身體を横へやる）

お園　でも私勿體なくつて……。

辰造　勿體ねえも何もあるもんかね……。

お園　それでは御免なさいな。（辰造に列んで腰をかけると其處にある本に手がかゝる）まア貴方、斯んな立派な大きな本を讀んでゐらつしやるの。まア感心な……。

辰造　本は俺の道樂でな。だが、暇がないのでへいこうさ。俺は三四年前、鐵板擔ぎをやつた事がある、その時あんまり重いやつを擔いだので、何ういふ拍子か耳の鼓膜を痛めたらしいんだ。それから少々耳が遠くなつたので、耳の遠いだけ眼を人一倍働かさうと思つてね、本を讀み始めたんだ。ところが、つまり過激な筋肉勞働をやつて歸つてから讀むのだらう、疲れてゐるから寢ころんで讀むやうになる。それやこれやで、今度は目を惡くして了つた。もうこの上は身體一つだと思つて、煙草一本、酒一杯飲まねえやうにしてるんだよ。

お園　まアね！

辰造　實際お互貧乏人は、身體一つがもとでだからな。

お園　ほんとにさうですわね！（眼をおさへてシク〳〵泣き出す）

辰造　おい、どうしたんだね？（お園屈み込んで猶泣く）なにか辛い事でもあるんぢやねえかね？　あれば遠慮なく話しておくれよ。俺出來るだけの力添へをしようぢやねえか？（肩を撫でるやうにする）

お園　（半分泣き乍ら）それではお言葉に甘えてお話いたしますわ、私さつきから貴方をなんだか兄さんのやうにお慕はしい氣がしますから……。

辰造　俺もなんとなくお前達兄弟は他人でねえやうな氣がしてるんだ……。

お園　まア貴方も……。（肩にある男の手をソッと握り乍ら）それぢや遠慮なくお話いたしますわ。實は私のお父さんも貴方のやうに耳が惡くなつて、仕舞にはツンボになつて了つたんです。

辰造　そいつは氣の毒だね！

お園　それでお父さん働きが出來なくなり、さうでなくて

さへ困つてゐた一家の暮しが、たうとう行詰つて了つたんです。（まためそ〳〵と泣き出す）

辰造　困つたね！　でそれで以つて、まア泣かねえでさ……。

お園　それで色々と質（たち）のよくない借金をして、やつと〳〵親子四人の命を過してゐましたが、一月前に父さん、たうとう死んで了つたんです。（泣く）

辰造　む……死んぢまつたか！　それでお母さんは？

お園　お母さんは前から病身でしたが、父さんが死んでからこつち、スッかり弱つて寢ついて了ひました。

辰造　それぢや今の暮らしは、お前さんが一人で立てゝゐるんだな？

お園　ほんの僅かな手仕事で……。

辰造　成るほどさういふ譯なら遣りきれねヱな。

お園　たゞ生きて行けるだけなら、なんとかなりは致しますが、借金があるもんですからね。

辰造　む……惡い質の借金といふから利を食ふだらうな？

お園　そ、さうです、利子だけでもそれは大變なんです。

辰造　さうだらうな。でそれはいくらなんだね？

お園　え、今では、元利揃へて百五拾圓ほどになつてゐます。

辰造　百五拾圓！　む……よし！　俺がそれを引受けた！

お園　まア！　でもそんな事……。

辰造　いや、俺が引受けた！

お園　いえ、いえ、それでは相濟みません。私實はそれを明朝揃へる事になつてゐるんです。

辰造　なにお前さんが明日揃へる？

お園　（恥かしさに屈み乍ら）はい……。

辰造　何うして揃へるんだ？

お園　……それが、……あの……。

辰造　え？　ハッキリ云ふがいゝ！

お園　（顏を上げて思ひきり口早やに）身賣りをするんです……。（急にうつむいて泣く）

辰造　身賣りだと――ば、ば、ばかな！（お園聲をたてゝ泣く）よしッ！　さうと聞いた以上俺は何うしても見すてゝはおかれねえ、よしッ！（決心したやうに突ッ立ち上がる）

お園　でも貴方……。

辰造　俺に任かせろ！　安心して俺に任かせろ！　明日の朝と云つたね、よしッ！　それでは今晩中に俺が其金を揃へてやるッ！

お園　貴方！

（お園狂喜して轉ぶやうに、立つてゐる辰造の膝にすがりつく。辰造それを助けるやうにしてヒシと抱く。）

月光淨く二人を照す。少時——默。）

（左手から立ちん坊一二酒に醉拂つてヒョロ〳〵と現はれる。）

立ちん坊一　ヨー〳〵親方！

立ちん坊二　色男々々！

（辰造とお園びつくりしてパッと離れる。）

——幕——

第三幕

第一幕と同場面。織田多慶子の應接間。前場の夜。

開幕。

舞臺眞暗である。正面下手扉の向うで案内を求める辰造の聲が聞える。

辰造の聲　今晩は！　今晩は！（間）御免！　御免！（間）おい！　おい！　誰もゐねえのか？　おい！　おい！

（少時——扉を開けて這入つて來る辰造の姿が玄關口より射す電燈の光でボンヤリと現はれる。）

辰造　眞暗だ！　おい！　おい！　誰もゐねえのか？　おい！　おい！

（少時利耳を立てゝゐたが何んの返事もないのでツカツカと進んで右手の戸を開ける、と其處から明るい光が射す。辰造大膽に其中へと進み入る。少時——其這入つた戸口から辰造手に何か持つて出て來て、中ほどまで進む、と、其後から叫ぶ多慶子の聲が聞える。）

多慶子の聲　待てッ！　泥棒！

（辰造ギクリとして立止まつて振返る。と其處から右手にピストルを持つた多慶子が現はれる。第一幕と同じ洋服。右手戸口から射す光線によつてその室内は朧と見える。）

多慶子　（ピストルを辰造に向け乍ら）さアピストルだ！　手をあげろ！

辰造　な、なんだと？

多慶子　ピストルだ！　溫順しく手をあげろ！

辰造　ピストルだと？

多慶子　服從しろ！　貧乏ゆるぎでもすると、早速一ぱつお前の頭へお見舞申すぞ！

辰造　おどしたつて、こはがらねえよ。

多慶子　わたしは日本婦人ピストル協會のチヤンピオンですよ。

辰造　だが一向こはくねえ。（椅子を引寄せて平氣で腰を下ろす）

多慶子　泥棒のくせにいやに落ついてゐるね。

辰造　俺は泥棒ぢやねえ。

多慶子　夜中人の家へ無斷で這入るのが泥棒でないか！
辰造　無斷で這入つたのぢやねえ、何度も聲をかけたんだが、誰も出て來なかつたのだ。
多慶子　嘘を云つたつて駄目です。
辰造　嘘ぢやねえよ。
多慶子　誰がその證人になる？
辰造　む……。
多慶子　そら、其手に持つてゐるのはなんだ？
辰造　む……。こ、こ、これや……、
多慶子　泥棒！　泥棒！　泥棒でなくて何んだ？
辰造　實はこれは貰ふつもりだつたのだ。
多慶子　默つて貰ふのは、泥棒でなくて何だ？
辰造　む…それぢや俺が惡るかつた、いかにも俺が誤つてゐた、何うか勘辨してくんな。
多慶子　いえ、勘辨出來ません。
辰造　まアさう云はねえで、何うか一通り俺の話を聞いてくんな。斯ういふやうになつたのには深い譯があるんだから。
多慶子　自分が惡いといふ事が解かつたのなら、先づ第一に其盜んだ物を返すがいゝ。
辰造　はい／＼、それでは一應お返しするだ。（紙幣の這入つてゐる手提袋をテーブルの上に投げ出す）で、その深い譯といふのは……。
多慶子　泥棒の言譯なんか、何んのあてになるものかね！
辰造　いや、本當の話だ。さう云ひきらねえで、何うか聞いてくれ。實は俺は今日ひよつこりと、或る貧乏な氣の毒な娘に會つたのだ、父親は永い病氣の揚句、借金を殘して死ぬ、母親は大病で床の中に寢てゐる、その娘は小さい弟と二人で手仕事をやつて、やつと／＼其日々々の暮しをたてゝゐるといふのだ。ところが父親の殘した借金が、利に利を積んで百五十兩にもなり、娘はそれを拂ふ爲めに、身賣りをしなくてはならねえといふのだ！　俺はその話を聞いてほんとに泣かされたんだ……。（涙を拂ふ）
多慶子　（テーブルから離れた右手の椅子に腰を下し乍ら）お前はなか／＼お話がうまい！　泥棒するより小說家になつたらいゝ位だ！
辰造　ば、ばかな！　眞實な話なんだよ、本當の事なんだよ！　嘘だと思ふなら、一緒に來て見るがいゝ。俺はその娘を二人の仲間に守らせて、あの公園の森の中のベンチへ待たしてあるんだ。
多慶子　で、要するにお前さんは、その娘の身賣りを救ふ爲めに、それで泥棒になつたと斯う云ひたいんでせう？
辰造　全くさうなんだよ！

多慶子　その話が若し本當だとすれば、泥棒なんかしないで、お前さん自分の金で救つて上げたらいゝぢやないの？

辰造　俺にその金があれば、誰かお前なんかの物を狙ふもんかね？

多慶子　まアお前には、その位の金さへないの？

辰造　俺は其日稼ぎの勞働者だよ。何うしてさう纏まつた金があらう。それも時日があるなら、拵へられねえ事もねえが、明日に迫つた金なんだからね！

多慶子　たとへ明日に迫つたとはいへ、お前のやうな大きな身體の男が、その位の端した金を正當な方法で拵へられないなんて、全くふがひがないですね、男として恥辱ぢやないの？　耻かしいとは思はないの？

辰造　さう云はれや、全く一言もねえよ。何うか其處のところは、可哀さうな貧乏な俺達勞働者の爲めに、慈悲の心を起して勘辨してくんな。そしてそれだけの金を、決して貰はうとは云はねえ、さうだ！　三ケ月もたてば屹度返金するから、何うかそれまで借しておくんなさい、よ。

多慶子　三ケ月もたてば、返す見込があるのかね？

辰造　まア俺の身體を見てくんな、こんな丈夫な強い身體だ！　これで骨身を碎いて働けや、利子まで揃へてお返し出來るよ。さア、承知してくれたんだね！

多慶子　（テーブルに近かよつて手提袋を取り中から金包を出して辰造の方へ押しやる）この金よく見て受取れるものなら受取るがいゝさ。（元の椅子へ返る）

辰造　（急いで受取り乍ら）あ、有難う、有難う。これで助かる！　あの娘も助かる！　あの娘の一家が助かる！　俺も助かる！　（立ち上がる）

多慶子　まアよく其金を見るがいゝ。見覺えはないかね？

辰造　見覺えだと？　俺は少々目が惡いんだ、それに此部屋は薄暗いからな。

（多慶子右側の壁にあるスキッチを一つひねる——室内中央の電燈一つだけパッと點ずる。舞臺多少明るくなる。）

多慶子　さア、これでよく見えよう。

辰造　（目をショボ〳〵させて金包を見乍ら）　俺見覺えも何にもねえよ。

多慶子　嘘つき！　お前は一週間前の事を忘れた顔をするのか？

辰造　えッ！

多慶子　それはあの時の金だよ！

辰造　む……。（金包をビリ〳〵させ乍ら悶える）

多慶子　お前が「入らねつたら入らねえッ！」と怒鳴つて

投げすてた金だよ！　あの時その儘の金だよ！
辰造　む……。（益々悶える）
多慶子　お前はそれをよく知つてゐながら、わざと知らん顔をしてゐる。嘘つき！　卑怯者！
辰造　む……。（テーブルにかぢりついて苦しむ）
多慶子　あの時お前は心の底では其金が欲しくつて欲しくつて堪まらなかつたんだ！　だけど大勢人がゐたから、虚榮の爲めに、威張りたい爲めに、あんな馬鹿な大言壯語を吐いたんだ！　それから今お前は涙まで流して憫れつぽく話した可哀さうな娘の事なんか、皆んな拵へ事に相違ないんだ！　お前は全くの泥棒だ！　その上僞善者だ！　卑劣者だ！（その時辰造パッと金包を彼女の足下へ投げすてる――第一の時と同じ形）
多慶子　おや！　またお芝居か！
辰造（底に潜んだ太い聲で）いや、その金は貰はねえ！
多慶子　さうら、圖星が當つて、いよ〳〵白狀したね！
辰造　だが、あの娘は助けなくちやならねえ！　何うしても助けなくちやならねえ！　だから俺はその金をお前から奪つて行くんだ！
多慶子（びつくりして）奪、、？
辰造　斷じて貰はねえ。その代り公然と奪つて行く！　正正堂々と奪つて行く！
多慶子　强盜だ！
辰造　さうだ俺は强盜だ！　がよく聞けよ、その娘と弟といふのは、あの時お前が自動車で轢き逃げをしようとしたあの子供だよ！　そこで俺が强盜なら、お前は人殺しだ！　人殺しの金を强盜が持つて行つて、其人殺しに殺されかけてる弟と姉を助けるのだ！　俺は正々堂々たる强盜だ！　天下の義賊だ！
多慶子　よしッ！　さッ取れる物なら取つて見ろ！（ピストルで狙ふ）
辰造（タジ〳〵と退く）ま、また、ピ、ピストルだな！
多慶子　さうさ、ピストルさ！　一足でも進んで見るがいい！　ズドンだ！　お前の自慢の身體が强いか？　このピストルの彈が强いか！　さア、戰ひだ！
（兩人突ッ立ち見張つたまゝ少時――活人畫のやうに。辰造ばたりと轉ぶやうに坐はる。）
辰造　俺が敗けだ！　俺が敗けだ！（恭々しく兩手をついてお辭儀をする）
多慶子　命が惜しいんだね！
辰造　命が惜しいんだ！
多慶子　卑怯者！
辰造　さうだ！　俺は卑怯者だ！
多慶子　おほゝゝゝゝゝ。（大聲に笑ひ乍ら再び電氣のス

イッチをひねる。數個の色電燈が一時に點じられる）さア〳〵皆んな出て來て御覧よ、早く來て御覧！　おほゝほゝ。

（この聲に從つて右手から女連――梅子、滿津子、歌子、芳枝の四人、左手前方から男連――竹野、雛波、内田の三人がガヤ〳〵と出て來て拍手喝采する。辰造キョロリ〳〵と方々を見廻す。）

多慶子　さア、この金を有難く頂戴するがいゝ。（轉がつてゐる金包を足で押し遣る。辰造キョトンとして無意識的にそれを受取る）さア、今度はお禮を云つてお辭儀をするがいゝ。（辰造恰ど催眠術にでもかゝつたやうに命ぜられた通りに金包を捧げてお辭儀をする）さア、其つぎはわしをよく見るがいゝ。わしはあの時と同じ着物をつけてゐるのだ。（左腕を見せ乍ら）これはお前がヒキ破つたところだ、（右腕をまくつて）これはお前がヒツつかんで拵へた傷だ！　まだ痛んでゐるよ！　さア。お許しを願ふがいゝ。（辰造三度ばかり頭を屈める）

梅子　（讃歎するやうに）たうとう團長の目的は達しられましたね！

多慶子　いゝえ、まだあるの！　辰造には解からないやうに早く梅子を連れて右手へと退場する）

滿津子　（讃歎するやうに）これでいよ〳〵團長の仇討が出來たといふものですわね！

内田　仇討とはよかつたね！

芳枝　それよりも復讐と云つたはうが詩的だわ！

竹野　いや〳〵仇討でも復讐でもない、名譽回復だよ、名譽回復だよ。

歌子　竹野さん貴方自身の名譽回復は何うなつたの？

竹野　僕の名譽なんか何うだつていゝ、團長のさへ回復すればな。

雛波　團長の名譽回復は我々一同の名譽回復ですよ！

芳枝　ヒヤヒヤ！

歌子　要するに「超人クラブ」全體の名譽回復でさね！

竹野　さうだとも、さうだとも！

滿津子　（辰造の側へよつて）お前さんも今夜はスツカリ駄目なのね！　先日の元氣は何處へ行つたのさ？

辰造　（ポンヤリと）そ、さうだな……俺も不思議でならねえのさ……自分ながら意氣地がねえやうな、力が拔けたやうな氣がしてならねえんだ……公園の森で狐に騙されてるんぢやあるめいかな……それともまだ晝寢をして夢でも見てるんぢやあるめいかな……。

芳枝　豪傑さん、シツカリしておくれよ！　私だけはお前さんヒイキよ。（背中を一つ打つ）

辰造　む……夢でもねいらしい……（持つてゐる金包を見

乍ら）現に俺はこの金包を持つてゐるからな……む……（ハッとして）さうだ！ この金を早くあの娘に渡してやらなくちや、さぞ心配して待つてる事だらうな。（起ち上る）

芳枝 まア、ゆつくりしてゐらつしやいよ。

辰造 いや、ゆつくりしてはゐられねえ。

滿津子 お前さん、あの娘さんに心があるのぢやないの？

辰造 む……。（一寸と躊躇する）

滿津子 屹度さうだわ！

歌子 さうとも！ さうとも！ お前さんはあの娘さんの事を思つてればこそそんなに元氣が無くなつたんぢやないの？

辰造 さう云へばさうかも知らねえ！ さつきこゝの女大將と睨み合つてゐた肝心な時、俺の目の前にあの娘の顏がチラッと現はれたのだ、さうだ！ その爲めに俺の元氣はくぢけてたうとう敗けて了つたのだ。あゝあの娘の顏！

芳枝 おのろけを云つてる！ やけるわ！

辰造 ば、ばかな事を云つてる時ぢやねえ、早く持つて行つてやらなくちや……。

芳枝 まア。おまちよ！ （辰造の前へ出て止める）

辰造 何うか止めないでくれ！

芳枝 いゝえ行かせない！

（この時舞臺急に暗くなり、右手の室から合圖の笛の音が鳴る。辰造扉口へ行かうとして、マゴ〳〵する。其間に女達は右手へ、男達は左手へと退場する。間もなく右手から前場と同じお園が出て來る。）

お園 貴方！

辰造 だ、だれだ？

お園 私よ！ （走りよつて其手を握る）

辰造 おーお前か！ お前か！ さア、この金を！

お園 （受取つて） まアお金！

辰造 それで以て、早く借金のかたをつけるがいゝよ！

お園 （一寸考へて） 斯んな大金を、貴方何うしてお拵へになりましたの？

辰造 そ、その譯はユックリ話さう。

お園 今話して下さいね。

辰造 いや、今はいけねえ。

お園 （考へて） では折角でごいますが私この金をお貰ひ申す譯には參りませんわ。若しこのお金の事で貴方に御迷惑でもかゝるやうですと私申譯ありませんから。（金包を返す）

辰造 いや、それや心配には及ばねえよ。

お園 いえ、私心配いたします。

辰造　まアさう云はねえでさ。
お園　いえ、戴く事は出來ません。
辰造　あゝ困つたな！　困つたな！（悶える）
お園　貴方、それでは私のお願ひする事を聞いて下さいね、さうすれば私それを心よく戴きますから。
辰造　どういふ願だい？
お園　私實はさつきから貴方の後を追つて、このお內へ來てゐましたの。
辰造　（びつくりして）お前が！
お園　え、それで私もお內のお孃樣にお目にかゝりましたの。
辰造　さうか！　おや皆んな知つてるんだらう？
お園　いえ、詳しい事は知りません。が、私お孃さんのお話によつて、お孃さんの拵へてゐらつしやるクラブへ這入る事になりました。そして其クラブのお仕事をする前金として、そのお金を頂戴する事になりましたの。それには貴方も其クラブへ是非お這入りにならなくてはなりませんの。さうすれば其金は何の不都合もなく、正當に私が頂戴出來る譯になるのでございます。
辰造　なるほどそれはいゝことだ。それで俺も助かる……。
お園　では貴方もお這入りになりますね？
辰造　あゝ、這入るともさ！

お園　乾度ですね？
辰造　乾度だ。お前の爲なら俺どういふ處へでも這入るんだ！
お園　（ガラリと亂暴な聲を出す）あゝそれで萬事成功だ！
辰造　（びつくりして）え、なんだつて！
（この拍子に舞臺再び明るくなり、左手から例の男達右手から例の女達、ゾロ／＼と再び登場。而かも男達の後から、源吉と二人の醉つぱらひ立ちん坊がヒョロヒョロと出て來る。）
辰造　（源吉と立ちん坊を見て）おや！　お前達も！
立ちん坊一　親方お目出たいな！　げーぷ。お目出たいな！
立ちん坊二　親方、おいらも……げーぷ……「ちようちんクラブ」ていやつへ入會したところよ。
辰造　（急に大聲に怒鳴る）なんの事だ？　何んの事だ？　俺には一切合點が行かねえーぞ！　まだ夢を見てゐるのか？　それとも森の狐につまゝれてゐるのか？　えいつ、シヤクだ！
お園　さうよ、夢よ、私夢の神樣よ！　でなくば女狐よ！
（お園さう叫び乍ら自分の着物をパラリと脫ぐ、と、其處には多慶子の洋服を着た多慶子自身の正體が現は

れる。皆々拍手する――辰造呆れてそれを見詰める。）

――幕――

スター生活（二幕三場）

登場人物

有松久江　映畫女優
土屋達子　同
よし子　同
靜代　同
鈴子　同
お婆さん　久江の宿の主婦
霜山久男　撮影所長妾腹の長男
撮影監督
同助監督數人
カメラマン
カメラ助手
劍客浪人役一人
捕手役十人餘り
高雄山參詣の老人、老婆、若い女、若い男その他見物人多數

時　現代（秋）
幕　京都西郊

第一幕

有松久江下宿の客間。
二階。
正面は唐紙、その向ふは居間。
左手は障子、そこから梯子段へ通ずる。
右手は窓、道路に臨む。
靜かな奥ゆかしい裝飾。
開幕。
無人。
正面の唐紙が少し開いて居る。
窓から朝の日光が、すが〳〵しくさし込んでゐる。
左手の障子をあけて、此の家のお婆さんが一人出て來る。

お婆さん　有松はん、有松はん、あんたまた昨日のお方か、來やはりましたぞな……。
（唐紙のあきまから、返事をしながら有松久江が出て

來る。二十一二歳、質素な和服、片手に讀みさしの本を持つて居る。溫順しい賢明な顏かたち。）

久江　はい。

お婆さん　お斷りしましたんやけど、どうしてもお會ひしたいと、お云ひなはるよつてな……。

久江　どうも濟みません。では、わたし參りますわ。

（本をそこへ置いて、左手から出て行く。お婆さんも續く。）

（少時——間。）

（霜山久男が久江に案内されて出て來る。十九、典型的なモダン、ボーイ。流行のチヤツプリン式洋服。神經的によくどもる、よくせか〳〵する。子供々々した純なところがある。）

霜山　（無意識的に）い、い丶部屋だな！（久江の方に向いて）ぼ、僕、ほんとうに、そ、そ、そんなに長くお邪魔しようとは思つてゐません。ちよつと會つて下されば、そ、それで滿足なんです。

（久江うなづいて奧の間にはいる。）

霜山　（窓から外を見ながら）西山が實にあざやかだ！愛宕も見えますね。あ丶こつちからは叡山も見える……。

（久江奧の間から座蒲團を持つて出て、その後を閉める。）

久江　（座蒲團を出しながら）どうぞ、お敷きあそばせ。

霜山　あ、ありがたうございます。（坐りながら）久しぶりに京都の山を見て、晴々しました。

久江　京都の山は、溫順しうございませう。

霜山　え、さうです。（更まつて）な、な、なんども、し、失禮な手紙を差上げて、す、濟みません。け、けど、あれは皆んな、ぼ、僕の本當の心持です。ま、全く僕は、す、すつかり感服してしまつたんです。（次第に興奮して）あ、あの試寫のあつた晩なんか、僕、夜つぴて祝杯をあげました——いよ〳〵ほんとうのものが、新しいほんとうのスクリーン・アクターが生れたんだ！　さう思ふと、ぼ、僕なきたいほど嬉しくつてね……。

久江　その節は、いろ〳〵と有難うございました。それから昨夜は、失禮いたしました、疲れてやすんでゐたもんでございますから、それに結構なお土産までいたゞいて、相濟みません。

霜山　京都では、そ、そのちよつと、め、めづらしいと思つたもんですからね。じ、實は僕昨夜、驛へつくと直ぐ、こちらへお伺ひしたんです。

久江　京都へはよくゐらつしやるのでございませうね。

霜山　い丶え、近頃あまり來ません。震災の後は二年ばかり、ち、父の處にゐましたが——。ぼ、僕どうも京都の

空氣が趣味に合はないんです。表面いやにあまくつてなまぬるくて、而かも底に隨分といけ圖々しいところがあるさうで……。そ、それよりも、ち、近頃、ろくな俳優がゐないでせう！　最初の一回丈けちよつといゝかと思ふと、二回からは、がらりとおちて來る、失望させられる許りです。

久江　私も屹度そのかはでございませう。

霜山　（熱心に）ち、ち、違ひます！　斷じて、斷じて、そんな事はありません。貴女のは、もう三回目でせう。一二回とじり／＼に進んで、こゝでぐつとその力をお延ばしになつたんですから、違ひますよ、違ひますよ！　そ、それに較べて、ほかの連中と來たらどうです？　とても敷はれませんね。ですから僕、京都へは來ない事に決めてゐたんです。ところが今度、貴女のめざましい、すばらしい、出現！　僕すぐと飛んで來たかつたんですけど、事情が許さないので、今日まで我慢してゐたんです

久江　明後日の松茸狩に、ゐらつしやつたんでございませう？

霜山　え、そ、それを機會にして、やつて來たんです。

久江　東京の本社から、皆様、ゐらつしやるのでございませうね？

霜山　え、やつて來ますよ。明晩やつて來ます。僕一緒に來る事になつてゐたんですが、一日も早く貴女にお會ひしたいと思ひましてね。

久江　まアさうでございましたか。（立ちながら）あのちよつと御免下さい。（左手へ出て行く）

霜山　ぼ、僕、もう直ぐ失禮しますから……。

（少時——霜山立つて、そつと正面の唐紙をあけて中を覗き、急いで閉しめる、閉めた音に自分で驚き、障子の方を見て安心する。そして、其處にある先刻の本を取つて、元の座に戻り乍ら、無意味にその頁をバラバラとまくる。）

（久江お盆に紅茶とお菓子を持つて來る。）

久江　どうぞ、ひとつ。

霜山　あ、ありがたうございます。（紅茶を飲みながら）貴女の御生活の事は、「スター畫報」でよく拜見してゐましたが、こ、こんなに靜かなけだかいお住ひとは想像もしませんでした。さ、流石だ！　流石だ！　と、さつきから感服させられてゐます。

久江　いえ、何一つない、お恥かしい暮しでございますわ。御承知の通り、父が田舍に居るものでございますから、皆樣のやうな御立派な生活は許されないのでございます。

霜山　貴女のお父様は確か、別府へ行つてゐらつしやるんでしたね。
久江　はい、病身なものですから。
霜山　リユーマチスとかきいてゐますが、近頃いかゞですか？
久江　おかげさまで、だいぶよろしうございます。
霜山　それは結構ですね。なんでも非常に識見の高いお方だときいてゐますが――。
久江　剛情者なのでございますよ。餘まり剛情なので、それであゝいふ病氣も起るのでございます。
霜山　そ、さういふもんですかな。え――今日は、まだお出かけになるのぢやございませんか？
久江　いえ、今日はあの公休日なのでございます。
霜山　あゝさうですか！　それは恰どよかつた。ぼ、ぼ、僕、じ、實は昨夜あれから、父の處へ行つたんですが、ど、どうもよく眠られませんでした。そ、それで、今朝はこんなに早くからやつて來ました。お出かけにならないうちにと思ひましてね――。僕こんなに早く起きた事は、何年にもありません……實は……久江さん、ぼ、僕、と、とても堪へられないんです！　て、て、手紙で申上げた通り、あ、あの映畫を見てからこつち、ぼ、僕、貴女の事ばかり思はれて……お、お、思ひつめて……。
久江　あのその事は、もうおつしやらないで下さいまし。（中腰になつて）私あの失禮さしていたゞきます……。
霜山　（頗る單的に長髪をつかみ唸るやうに）つ、つ、つらい！　く、苦るしい！
久江　（中腰のまゝ同情をもつて強く）辛抱なさらなくてはいけませんよ！　ね、辛抱なさらなくては！
霜山　あ、あ、有難うございます！　ご、ご、御免下さい、では、ぼ、僕失禮いたします……。
（霜山懸命に立つて左手へ行きかけ、堪へられなくなつて、急に振り向く。と、送つて行かうとする久江の眼と眞正面にぶつかる。）
霜山　ゆ、ゆ、許して下さい！
（パッと子供のやうに久江にすがりつく。久江驚いてたじ／＼と後によりながら倒れる。霜山もそれにあまされて倒れる。この拍子に障子を開けて土屋達子があらはれる。二十八九、快活な陽氣な婦人、けば／＼しい洋風の和服。多少醉つてゐる。）
達子　（頗る早口に）久江さん御免下さい！（サッと霜山の側へ中腰になり、男の胸倉をつかみ引きずり起しながら下町の女房か壯士芝居の惡婆女のやうな口調で叫ぶ）薄情者！
霜山　あッ！

達子　い、いくじなし、も、もう許しやしねえぞ！

霜山　わ、わ、わかつてる。ぼ、ぼ、僕がわるいんだ。わ、わ、わかつてる。

達子　なにが、わ、わ、わかつてるんだ！　弱蟲め！

霜山　あ、あ、あやまる！　ど、ど、どうともしてくれ！　ど、ど、どうともなる！　が、のどが、のどが……。

達子　し、しめちまふぞ！

久江　達子さん、どうぞお靜かに……。

（此聲に達子は霜山から手を放しサッと久江の方へ向き直る。）

達子　お前さん、わたしの男を横取りする氣ですね？

久江　まアそんな……。

達子　お前さんは、わたしのパトロンを奪ひ、それからわたしの位置を取り、その上またわたしの燕を掠める！　どこまでも圖々しい人です！　どこまでわたしを苦しめるんです！

久江　（憤然として）私そんな事決して……。

達子　しないとは云はせません！　お前さんは、この京都へ來ると、直ぐあの所長を――この弱蟲のおやぢの霜山所長を、わたしから奪ひ取つたでせう……。

久江　（驚いて）ひどい事を！

達子　どつちがひどい事です……。

（この時までへこたれてゐた霜山、極度に怒つて、今度は達子の胸倉をつかむ。）

霜山　うぬ！　き、き、きさま！　お、お、おやぢと出來てやがつたんだな！　す、す、すこしも知らなかつた！　ば、ば、ばかにしてやがる！

（達子力強く霜山をはねのける。霜山一旦倒れたが、更らに起きあがり乍らつかみかゝらうとする。久江たくみに其の間にはいつて止める。）

久江　まア、お待ち下さい、お待ち下さい！　靜かにお話しませう、靜かに……。

霜山　（久江に）久江さん、す、す、濟みません！　ぼ、ぼ、僕、正直に、告白します！　この達子は、ぼ、僕のラバーなんです。（達子に向ひ）ぼ、僕、決して君を忘れたんぢやないんだよ。これから君の處へ行かうと思つてゐたところだ。が、つい、久江さんに會つて……僕が惡いんだ……。

達子　（だいぶ落ついて）意氣地なし、弱蟲！

霜山　ぼ、僕、弱蟲だ、意氣地なしだ。自分ながらもてあましてるんだ。が、この場は、僕がつい氣分にひかされて、無理に久江さんへ失戀しかけたんだ。久江さんは相手にしてくれなかつた――し、し、眞實だ！　分かつてくれ、分かつてくれ！

逹子　……。（安心する）

霜山　ぼ、僕今日まで一度でもうそを云つたことがあるか！　ぼ、僕いかにも世界一の弱蟲だ、が、う、嘘は云はないぞ！　嘘が云へる丈けの强さもない弱蟲だ！　世界一の正直者だ！　ね、その事は君もよく知つてゐてくれる筈だ……。

逹子　（案外やさしくなつて）　え、それだけは分かつてゐますわ。そりや貴方のたつた一つの取り得ですもの……。

霜山　だが、だが、君は、僕にひどい、う、う、嘘をしたぞ！　人もあらうに、ぼ、僕のおやぢと……こいつ……。

（霜山再び怒氣を起して、逹子につかみかゝる。逹子その兩手を自分の兩手で受け止め、胸に抱きしめる。）

逹子　ね、そのこと後で、後で……。

霜山　き、き、君は强い、それだけひどいうそつきだ……。

逹子　さア、こゝは早く失禮して行きませう。

霜山　さう、早く行かう。長くゐるだけ、久江さんに御迷惑をかける許りだ、お互にぼろを出す一方だ……。

逹子　（霜山から離れ極く眞面目に上品に）　久江さん、何んとも申譯ございません。私つい思ひ違ひをしてかあつとなつたもんですから、それに少々醉つてゐましたし大變な失禮をしてしまひました。どうも相濟みません。あんないやしい言葉を使つたりなんかしまして、ほんとにお恥しうございます。

霜山　き、君、まだ、あ、あの下等なせりふが直らないんだね？

逹子　（久江に――彼女獨特な普段の言葉になつて）　わたし昔、田舍廻りのどんちやう劇にゐた事がありましたの。その時分の壯士芝居せりふがじについてしまつて、淑女に出世した今日でも、興奮するとつい出て來るんです。

霜山　（ついしやれが出て）　但し、がら相應といふところだ！

逹子　にくらしい！（男をぶつ眞似をして急に眞面目に還り）久江さん相濟みません。あらためて御挨拶に參ります。今日はどうぞこのまゝ御免下さい。

久江　どうぞもう、御心配なさらないで下さい。

霜山　（久江に）　久江さん、初めてお會ひして、こんな滑稽劇を演じてしまひました、申譯ありません、どうか……。

逹子　さア、長くゐるだけ御迷惑をかけますよ。さア、早く歸りませう。

（逹子、霜山を引張るやうにして出て行く。）

（久江淋しく送る。）

―― 幕 ――

第二幕

第一場

高雄山神護寺の境内。
左手は斷崖。
正面は楓の林。
ベンチが二つ許りある。

前場より四日後の午後。
開幕。
梢風の響、溪流のせゝらぎ、小鳥の聲……。
紅葉にはまだ少し早い。
參詣らしい老人、老婆、若い女がベンチによつて居る。

老人　なるほど、これで紅葉してしまはふたら大變やな。
若い女　さうね、とてもすてきでせう。
老婆　(右手を見て)あれ！　あれやなんやろな？
若い女　まア大勢な人！
老人　人を見てもあかへん。溪の景色がえらいえゝ。清瀧川と云ふのやさうな。
(右手から若い男が走つて來る。)
若い男　早やう來て見はれ、活動を取つて居るさかいに！
若い女　なに活動を！　そらすてきだわ！
若い男　今やりかけたところや、早う來なはれ！
老婆　なに活動寫眞やて？　そやおもしろかろ。おぢいはん行つて見まほう。
老人　行かう、えゝ見物や。
(皆々急いで右手へ退場する。)
(正面林の間から、前幕の久江、それに、よし子、靜代、鈴子の三女優が出て來る。幕末劇の扮裝をして居る。久江は町娘、よし子は町家女房、靜代は藝者、鈴子は老婆などといふやうに——。)
(三人ともモダンガールであるが、よし子は悲觀的な質、靜代は陽氣な無遠慮者、鈴子は常識的で聰明な性である。)
(林の前あたりで立ち止まり、ひとしきり話をする。)
靜代　……いくらなんだつて、わたしを幕末物の藝者にするなんて、ちつとひどすぎると思ひますわ。
よし子　でも、いきに出來上つてるぢやありませんか。
靜代　こんな長いべらべら着物、わたし生れてはじめてだわ。
鈴子　わたしだつて、時代物の婆ア役は今日がはじめてゞす。でも、いくらこぼしたつて當分駄目でせう。時代部の人が皆んな出て行つてしまつたから、わたし達新劇部

が代りをするやうになつたんですからね。成績がよかつたら、ずつと續けるかも知れないと、達子さんがさう云つてゐましたよ。
よし子　まアさう。
靜代　いよ〳〵助からないね。
鈴子　男優のはうだつて、刀の持ち樣一つ知らない人もあるさうですから、そのつもりでゐないといけませんよ。
よし子　危いわね。
靜代　それこそ眞劍になつて相手をしなくつちや……（左手へ進みながら）おや！　深い溪！
久江　まアいゝ眺めですこと！
（皆々崖の上へ來て下をのぞく。）
よし子　おつかないこと！
鈴子　前へ出てはいけませんよ。さア、こゝに腰をかけて眺めながら話しませう。（ベンチにかける）
（靜代とよし子ベンチにかける。）
久江　（右手を見て）もうそろ〳〵、あつちへ歸らうぢやありませんか。
鈴子　さつき助監督に、撮す時が來たら知らせて下さいと云つておきましたから、大丈夫です、安心してゐらつしやい。
靜代　あの若林監督はとても念入りで、それにぐづだから、なか〳〵濟みませんよ。
久江　（腰をかけながら）さうですね。
よし子　このまゝあつちへ歸らなくたつていゝんでせう。わたし達この邊でうつすかも知れないぢやありませんか。
久江　さう〳〵、斷崖の上の立廻りですから、屹度この邊でせう。
鈴子　では、一層おちついてこゝで待つとしませう。
久江　それはさうと、時代劇の人が急にあの會社へ行つてしまつたのはどういふ譯なんですか？
靜代　それやあの會社に、買收されたからでせう。
鈴子　え、それもあるの、けど、一ばんの理由は、わたし達の會社の內部に祕密があつて、それがばれると潰れやしないか……さういふ懸念からではないかと思ひます。
よし子　まア潰れるんですつて？
靜代　あゝ、あの問題ですね――今度移轉するといふ噂の土地買收の？
鈴子　え、さうです。
久江　それはどういふ話ですか？　詳しく話して下さらない？
鈴子　本當のところはよく知りません。なんでもあの土地を買つた時、東京の本社側には祕密にして、京都製作所

の幹部だけで不正な事をしたとかいふんです。それがこの秋の重役會議――さう恰ど明日の會議でばれやしないか？　ばれたらそれこそおしまひで、爭ひになり結局は潰れてしまふかも知れない……さういふ噂なんです。

靜代　本社と製作所との爭ひは、つまりは社長と所長との爭ひでせう。

鈴子　え、二人の爭ひです。

よし子　おや、明日の會議は大變ですわ。潰れでもしたらわたしどうしようか知ら？

靜代　では早く相談をして、わたし達一緒に、ほかの會社へ行かうぢやありませんか。

鈴子　それは、いよ／＼の時にしませうよ。ほかの會社だつて、基礎の堅い處は一つもないんですからね。

よし子　わたしそんな話をきくと、ゾッとしますわ。ほかの會社へ移れば、またそこでも重役やら監督やらの、御機嫌を取らなくちやならないでせう。同じ御機嫌取りなら、大正藝者かウエートレスのはうが、サッパリしてゐて、わたし却つていゝと思ひますわ。

靜代　それやさうね、けど、わたし映畫が好きだから、これで辛抱が出來ますの。

鈴子　さうですとも、皆んな映畫が好きなればこそ、どんな辛い事でも、我慢してゐるんですわ。それにほかのかたぎな職業についても、わたし達が婦人である限り、やはりその事はつきまとつて來ますわ。

靜代　鈴子さん、小學校教員をしてゐらつしやつた事、おあるんでしたつけ。その時もやはり？

鈴子　え、校長や教頭や、それから視學官など……。

よし子　まアさうですか！

靜代　どうせ同じ事なら、一ばん好きな職業を選ぶに限ると思ひますわ。

よし子　わたしは違ひますの。たゞ月給が多いから、それで、もしほかにほんの少しでも多い仕事があれば、わたし何時でも喜んで行きますわ。久江さん貴女はどつちです？

久江　わたしはさうですね……映畫がすきでもあれば、お金もほしいんです。わたし一人だけでしたら、本當に自分のすきな藝術丈けに生ききつて行けますが、何にしろ、病身の父がゐますし、それに前借がありますから……。

鈴子　這入る時の借金でせう。あの金はもう、責任がなくなつてはゐないんですか？　實際あなたは、もう三つとも人氣を取つたんですから、それだけで會社は何萬圓といふ利益を占めてゐますからね。ですからあの金なんか……。

久江　まさかさういふ譯にもいきませんわ、それにわたし

新参ですから……。

靜代　久江さん、あなた所長さんとあのなにしたんではないんですか？

久江　え？

靜代　あの待合へさ？

久江　（色を變へて）まアとんでもない！

靜代　では幹部のうち、誰かと？

久江　（憤然として）絶對に！　わたしそんなこと！

靜代　へえ！　こりや奇妙ですね！

鈴子　なるほどね、久江さんはほんとうかも知れない……。

靜代　でも何かさう云つた事進められた事あるでせう？

久江　（ちつと沈んで）そ、さうおつしやれば、思ひあたることがないでもありません。

よし子　その時お斷りなさつたの？

久江　え、何處までも、頭から――。

靜代　ぢや、前借は帳消しになつてはゐませんわ。

鈴子　さう……さうでせうかね？

久江　わたし初めて氣付きました、今のお話で……そんなこと少しも知りませんでした……。（考込む）

（少時――間。）

（溪流と梢風と小鳥の唄……。）

よし子　（涙ぐましくゆつくりと）……ほんとに女に生れて來たのが不仕合ですわ……それもれつきとしたおかみさんにでもなつてゐればよかつたんでせうけど……一旦かういふ水商賣にはいつてしまつては何時までも貞操をいけにへにして生きて行かなくては……どうにもなりやしない……。

（皆々それ〴〵に考込む――自然の音……右手から土屋達子が出て來る。最新式の洋裝。）

達子　まアこゝにゐらつしやるの！

鈴子　おや、達子さん！

靜代　（一寸皮肉に）所長祕書官のおでましぢや！

達子　（その皮肉を快活に受けて）え、さうです。わたし今日こそ所長祕書官としてこゝへやつて來ました。さア、ほかの方はあつちへ行つて下さい。わたし久江さんだけに、大事な密談がありますから――。

靜代　そーら、いよ〳〵今話合つてゐた問題がやつて來た！

達子　（眞劍にしやれて――潜在意識として嫉妬があつて變態的な心持になつてゐる）差迫つた問題なのです。所長さんとしても、會社としても、そして私達お互としても、全く危急存亡の秋……。

よし子　まア大變！

達子　（益々變態的な興奮に入つて）實際大切な場合で

す！　皆さんもこれからあすこのお堂へお參りになつて、御本尊の藥師如來樣へ、わたし達の大願が成就するやうに祈つて下さい。

鈴子　（半分じやれ半分眞面目に）はい〳〵。

靜代　（同じく）わたしは文覺上人にお祈りしませう。

（靜代、よし子、鈴子といふ順に右手へ急ぎ足に入る。）

達子　……久江さん、わたしもうこなひだから、貴方の親友になつたつもりですから、なんでも無遠慮にお話しますよ。ようございますか。

久江　え……どうぞ。

達子　（ベンチに腰をおろし化粧かばんから瓶を出し乍ら）貴方これいかゞ？

久江　なんですの？

達子　ウオッカーよ！

久江　わたしお酒は一滴もだめ……。

達子　さうでしたつけ。（自分で飲みながら）わたしアルコール中毒なんです。これを飮まないと、人心地になれないんです。さう！　貴方にやいゝものがありますわ。（ポケットから出して）チヨコレートならいゝでせう。

久江　え、ありがたう。（受取つて食べながら）それで、大事な御用とおつしやつたのは？

達子　それはもう是非ともきいていたゞかなくてはなりませんの。わたし達皆んなを助けると思つて。ね、乾度きいて下さいね。

久江　まアどういふ御用ですか？

達子　あなた、今度の移轉地問題の事で何かお聞きになりませんでしたか？

久江　え、ほんのさつきちよつと。

達子　どうやら本社側が、その祕密を氣づいてゐるらしいといふのです。今までのところでは、少しもその問題は出て來ないさうですが、その知らないふりをするのが却つて怪しいので、恐らくよく知つてゐて、明日の正式會議に不意打に出すのぢやないか……といふのがこちら側の觀察なんです。もしさうすると、激しい爭ひになつて、仕舞にはこの會社も解散になるかも知れない、解散となれば何百人といふ從業員が、一度に失職の憂目を見なきやならないでせう。で、どうかして救へるものなら救ひたいと、いろ〳〵所長さん苦心してゐられたんですが、こゝにたつた一つの救濟法があるんです。それには久江さん、あなたに、盡力していたゞかなくてはならないんです。

久江　わたしなんかがどうしてまア！

達子　いゝえ、貴女でなくちやいけないんです、あなたに限るんです。

久江　そんな大きな問題に？

達子　え、さうなんです。本社側と云つても石坂社長さんさへうんと云へば、ほかの重役なんか問題ぢやないんでせう。それで差當り石坂さんを明日の會議までになんとかしなくてはならないんです。石坂さんの心持をなだめやはらげておかなくてはならない……無論これは利益勘定の問題ですが、石坂さんの關係してゐられる他の澤山な大きな事業に較べれば、この會社の經濟なんか極く僅かなもので、まアあの人の道樂仕事に過ぎないんでせう。ですからその心持さへやはらげておけば、それでいつさい無事圓滿に運ぶ譯なんですの。今までだつて度々、さういふ事はあつたんですよ。わたしも三度許りお役をつとめてゐますわ……。

久江　（思ひあたつて興奮し立ち上がり乍ら）あゝ！　わたしにそれをしろとおつしやるんですね？

達子　（眞面目に單的に）久江さんどうか助けて下さい！急場を救つて下さい！

久江　（キッパリと）お斷りします！

達子　（立つてすがりつくやうに）まア、もう少しきいて下さい。たれか、たれか他の人で濟むことならいゝんですが、あなたよりほかにはないんですの。實は昨日あの松茸狩の時、石坂さんあなたを見そめた樣子なので……。

久江　（けがらはしいものでも拂ふやうに）いゝえ、いゝえ！

達子　（懸命におつかけるやうに）でも、會社が、わたし達皆んなが、生きるか死ぬるかといふセッパ詰つた場合です！　あなたお一人がそれを……。

（この時右手から、撮影助監督のＡＢが走つて來る。Ａはレフ（反射板）を、Ｂはメガホンを持つて居る。）

Ａ　のいて下さい！　急いでそこをのいて下さい！

Ｂ　今直ぐあつちからやつて來ます！　ロ、ロング（遠景撮影）です！　ロングの移動です！

（久江急いで正面の林に入る。）

（達子ウオツカーを一口飲み、その後を追つて行く。）

Ａ　（ベンチを見て）おゝこのベンチはいかん。

Ｂ　さうだ。あの時代に斯んなベンチなんかあつてはたまらん。

Ａ　のけよう。

Ｂ　（右手に向つて手をあげメガホンを口にあて乍ら）ストップ！

（ＡＢ急いで二個のベンチを、右手前方へ運ぶ。Ａはそこに止まり、Ｂは中央へ出て前のやうにメガホンで叫ぶ。）

B　（掛聲）よろしいツ！

（B急いでAの處へ戻り、一所にレフを立てる。）

（間もなく右手から、バタ／＼と四個所（捕手）が數人走つて來る、と、その後から浪人姿の劍客が拔刀を振り、數人の四個所と戰ひながらあらはれる。）

（殺陣、混戰……次第に左手へと移る。）

（右手から移動車に載せたカメラ（撮影機）を四五人の助手が引張つて來る。その上にはカメラマン、同助手、監督の三人が乘つて居る。車の後から大勢の見物人が押し合ひへし合ひ……。）

監督　（懸命に叫ぶ）もつと續けて！　續けて！

カメラマン　左へ！　少し左へ！

監督　猛烈に！　猛烈に！　もつと猛烈に！

B　（メガホンで）がんばれ！　がんばれ！

（崖の直ぐ上でハラ／＼させる殺陣！）

（夕陽あか／＼と輝く！）

第二場

第一幕と同じ久江の客間。

前場の夜――宵の口。

電燈一つ淋しさうに點つて居る。

左手の障子を開けて、霜山久男がコソ／＼とはいつて來る。

と直ぐその後から、お婆アさんが追つて來る。

お婆さん　あんたはん、そないことしやはつたら、どもならへんがな、有松はんそれやお堅いお孃さんやで――。

霜山　そ、そ、そこを賴むんです！　お、折入つて賴むんです！

お婆さん　（手に持つた紙包を見ながら）それやもう、斯んなもん頂戴したんやさかいに、どないにかしてあげたいんやが、御婦人の方とちがうて、あんたはん若はんやで、どなにもなりまへんがな。さア、いんでおくれやす。

霜山　こ、こ、困つたな、こ、困つたな！

お婆さん　あんたはんがそないにこがれてゐやはるのは、氣の毒やと思ふのやけど、なんせ有松はん、お留守やでな。それに夜のことやさかい、この婆アえらい困るのや。さア、いんでおくれやす。

霜山　（ふいと思ひついて）お婆さん、お前さんはまだ、ぼ、ぼくの事を知らないんでしたね？

お婆さん　あんたはんの事？

霜山　ぼ、僕の身分さ？

お婆さん　あんたはんの身分？　そないなこと知るわけもおまへんしな……さアいんでおくれやす、いんでおくれやす。

霜山（名刺を取出して）じ、實は僕、か、かういふものです。だ、だからどうか安心して下さい。

お婆さん（名刺を電燈ですかし見て）まア〳〵あたはん！　霜山所長はんの若はんやて！　これやまア、これやまア。（驚いてすわりながら）ちつとも知りまへんよつて、えらい濟まん事申しました、どうぞ許しておくれやす。

霜山（安心して坐りながら）どうかそこのところは、よ、よろしくお頼みしますよ。（煙草を出してすふ）

お婆さん　早やう云うておくれやしたら、えゝもんをな！　有松はんも有松はんやて！　霜山所長はんたら、この邊一體の大將樣やでな。所長はんの會社のおかげで、皆んな暮しをたつとるさかいにな……。

（この時右手窓の下邊りで、自動車が走つて來て止る音がする。霜山急いて行き、窓の戸の隙間から外のはうを見、びつくりする。）

霜山　あツ！　これやいけない！

お婆さん（大聲に）何うどすえ？

霜山　し、し、靜かに！　ぼ、ぼ、僕、こ、この奥の間に隱れてゐる、な、內所に！　な、何事も、な、內所に！

お婆さん　へい、よう飲込んでゐますがな。

（霜山あわてゝ正面の唐紙を開け、その暗い部屋の中へはいつて閉める。お婆さんは急いて左手へ出て行く。）

（少時――間。）

（左手から有松久江と土屋逹子が出て來る。兩女とも前場と同じ服裝、よほど疲れて居る。久江奥の間へ入らうと、唐紙に手をかける。逹子急いで止める。）

逹子　どうぞそのまゝ……。

久江　でもちよつと失禮して着物を……。

逹子　いえ、それどころぢやありません、生き死にの場合です。なるべく早く、早く……。

久江　さう……。ではまア、お坐りあそばせ。（坐る）

逹子（坐りながら）とても疲れたわ。でもこれくらゐの疲れに敗けてはならない……。（ウオツカーを出して飲む）

久江　そんなに飲み續けては、からだをこはしてしまひますよ。

逹子　え、でも、わたし達皆んなのいのちが、せつぱつまつたクライマツクスでせう。からだなんか、どうなつたつていゝんです。

久江　ほかの事なら兎に角あのこと丈は御免下さいね。

逹子　まアさう云ひきらないで、一通り內情をきいて下さい、ね、そして今少し考へてみて下さい。

久江　なんどおつしやつても、わたしの考は同じことなんですが……。

達子　……もう斯うなつた上は、何にもかも皆んなぶちまけてしまひませう。祕密をのこらず——それでどんなに差迫つた事情かといふことが、あなたに理解していたゞけると思ひますわ。なんでもあの土地の買値は、十三萬圓ほどだつたんですつて、それを會社の帳簿には二十萬くらゐにつけてあるんださうでして、詳しい算盤はわたしもよく知りませんが、この違ひにまア第一の問題があるんださうです。それから、あの土地の周圍に廣い分讓地があるでせう、それを管理して居る土地會社も、その表面はほかの人ですが、その內面にはこつちの幹部達がひかへてゐて實はその資金も會社の金を廻してあるんださうです。その上その廻した金の後始末もまだついてゐないやうな譯。勿論出來るだけ帳簿の上でいろ／＼工夫をしてゐるのださうですが、向ふ側に少しでも惡意がうごけば、とうていごまかしきれるものぢやないんです。

久江　……。

達子　つまり、この事を石坂さんに知らさないやうに、またたとへ知つてゐても、知らない顏をしてゐて貰ひたい……といふのがこのストリーの主意なんです。實際かういふ大きな問題たんですから、ですから、どうしてもあなたのお力で、石坂さんをなだめて下さらなくつては、たうてい助からないんですよ。

久江　……。

達子　それも差當り、今晩は、宴會の席へ出てさへ下さればいゝと思ひますわ。たゞ明日の日の問題さへ延びればなんとか後で工夫もつきませうから……。

久江　え、わかりました。よくわかりました。

達子　では、あのきいて下さる？　まア、うれしい！　兎に角、あの席へ顏だけでも出して下されば、わたしの役目はいくらか濟むわけです。

久江　（獨白）……お父さんどうおつしやるか知ら……お父さん乾度許して下さるわ……。

達子　え、なんですつて？

久江　（ぢつと宙を見詰め張りきつた聲で）　さう……あの時さうおつしやつた——一ばん行儀のわるい日本映畫界だ……一ばん行儀をよくしてくれ……一ばん行儀のよいのは日本映畫界だ、といふやうにしてくれ！

達子　（不安に襲はれて）　久江さん、久江さん！

久江　（一層強く）　お父さん、乾度許して下さるわ！　わたしもう決心しました。

達子　（よろこんで）　あゝ、承知して下さる！　それなら一時も早く！　ほんとに皆樣お待ちかねですわ！　その、

その衣裝のまゝ、直ぐ行つて下さい。實はそれも石坂さんのお好みなので、わざ〳〵役もないのに、その扮裝をして貰つたんです。さア、早く。

久江　いえ、違ひます。（あらたまつて）なが〳〵御厄介になりましたが、私今日かぎり、映畫界からこの身をひかうと思ひます。今ハッキリと心が決まりました。

達子　あゝ……。（極度に失望して屈みついてしまふ）

久江　（靜かにゆつくりと）お氣の毒です、貴女にはほんとに御氣の毒です。けど、私どこまでも自分を保つて行きたいと思ひます。この日本で、職業婦人として獨立婦人として、貞操を守つて生きて行かう、その上相當な收入を得て生きて行かうといふ事は今日の所殆どむづかしいのではないでせうか！　わたしその收入のはうを捨てようと思ひます。お父さんも不自由を忍んで下さるでせう――この事情をおきゝになつたら、屹度不自由に堪へて下さるでせう。

（この時達子、最後の決心をしたやうに、サツと久江の側へより、左手でその胸倉を取る。久江無意識的に兩手で達子の手を握る。）

達子　（惡黨女のせりふ）ぢやもう仕方がない！　さア、お前さんの命を貰ひます！

久江　え！

（と、見ると達子の右手にピストルが握られて、その筒先が久江の心臟の上にあてられてゐる。）

達子　ピ、ピ、ピストルです！　恰どお前さんの心臟の上にあたつてゐますよ。

久江　……。

達子　五分間……五分間丈け考へる時間をあげませう。いちかばちか？　生か死か？（腕時計を見る）

久江　…（兩手をはなし觀念したやうに）うつて下さい！

達子　もう四分間！

久江　直ぐうつて下さい！

達子　考へて！　助かるやう考へて！　二分間！

（この時パッと正面の唐紙をハネ開け、叫び乍ら、霜山が勇ましく飛び出して來る。）

霜山　（不思議にどもらない鋭い聲で）待つてくれ！

達子　あッ！

（霜山、達子の驚いた隙にピストルをもぎとる。）

霜山　（強人へと性格轉換したやうに勇氣に滿ちた聲）久江さんの生命は僕が貰ひうけます！　僕はこれから父の所長とそれから石坂社長など、惡黨ども皆んなの揃つて居る處へ行つて來ます！（立ちながら）それまでこのピストルをかして下さい。大切なピストルだ。

（さう云ひすてゝ、霜山ツカ〳〵と出て行く。）

（達子は坐つたまゝ呆れたやうに、久江は立つて頼もしげに見送る。）

（少時――間。）

（久江ぢつと達子の顔を見る。達子はひとり心配さうな呆れ顔を、ほつとした太息と共に安心した表情に變へる。）

久江　……達子さん、あのピストルには彈丸がこめてなかつたのでせう？

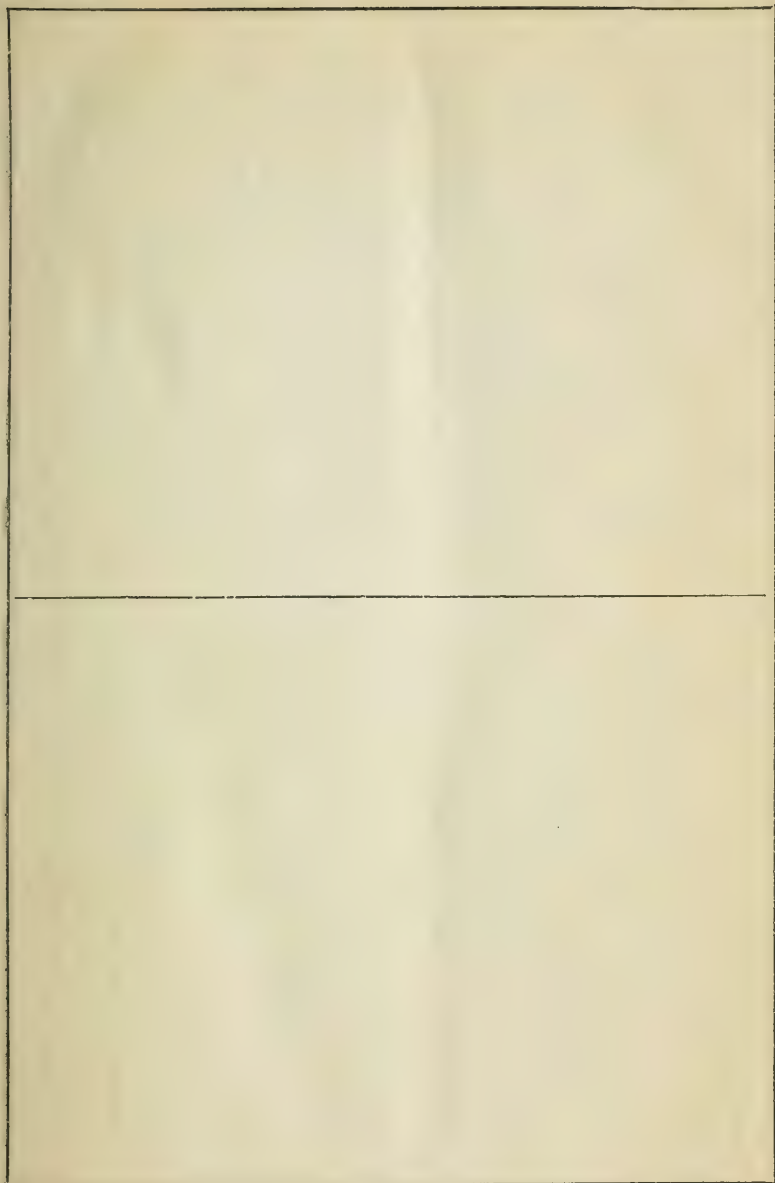
達子　（ぼんやりと）え、さうです……。

久江　でも――でもいゝと思ひますわ。（正面を見詰めて）あの人屹度この騒ぎで自己革命を仕遂げると思ひます……。

（少時――沈默。）

（自動車の響！）

――幕――

小傳及解說

中村吉藏篇

仲木貞一

小傳

中村吉藏氏は、明治十年五月十五日――丁度西南戰爭のあつた年だ――山陰道石見國津和野町小字今市三百五番地に生れた。

父は唯治、母はたみ、祖父は吉藏、氏の名は當治と云つた。然るに、明治二十四年の夏、氏苑も十五歲の折に、祖父と父親とは、僅か十日許りの間をおいて、共に病歿した。此所に於てか、若年の氏は、學業を棄てゝ家を繼ぎ、家業を繼ぎ又祖父の名迄も繼がなくてはならなくなつた。これ、商賈の家としては、當然の習慣なのであつたから。

その頃、氏は、土地の中學校を濟すや、當時中國に於ける唯一の學問地山口に出て、其所の山口學校、鴻城義塾等に學んで、專ら山口高等學校へ入學の準備勉强に餘念無つたのである。家は元餘り豐かで無つたが、小學時代の成績が優秀だつたので、祖父は當治を立身さすべく、種々の才覺をして遊學資を作つて氏の勉學を助けたものである。であるから、この祖父の死は、氏の家に取つても、亦氏の一身上に取つても、大打擊であつたのである。氏の惡戰苦鬪の生涯は實にこの時をもつて始まるのである。

家業と云ふのは、旅籠業であつた。然し、可なり賑はぬ營業振りであつたから、到底生計を立つる能はず、已なく天秤棒を擔いで、母と共に町廻りの行商をも行つた。然うした、商賈を行つてゐる間にも、勉學の志は已み難く、小學校教員たるべく受驗準備を行つたが、年齡不足の故をもつて資格を得られず、遂にそれは斷念した。然し、氏の向上心は、一層强く燃えて行く許りであつた。

十六歲の時、同鄉出身者で、靜岡市に公證役場を開いてゐる千坂彥四郎氏が、筆生を需めてゐると云ふ事を聞き、小學校の同窓靑木勝見と云ふ靑年と共に、家鄉を後に、はるばる東海道へと赴く事となつた。家業は、一切母親に委託して、專心これより學問で身を立てようと云ふのであつた。その道中は、土地の小間物商に連れられて、瀨戶內海をば汽船で大阪に出で、其所から初めて「汽車」に投じて、富嶽の麓靜岡市へと赴いたのである。千坂家の人となるや氏は法律家たらんと志し、法學院講義錄を取つて、職務の傍ら懸命に勉强をした。爲めに、胃を痛め、更に腦氣を起

し、遂に十八歲の時には、蒼白瘦身の病人となつて鄕里に歸らればならなくなつた。其所に殘つて法律學を專心學んだ靑木氏は、遂に辯護士となり、今日千葉市の市會議員の榮職に就いてゐる。

故鄕にあつて靜養これつとめた甲斐あつて、健康が舊に復するや、氏の趣味は突として文藝の方面に赴いた。まだ病弱の身體を机に寄せて、種々の小說類を耽讀してゐる間に、氏も亦筆を執つて見たくなり、創作慾は驅つて浪六張、淚香張りの小說を書かしめるに至つた。四六半紙に、蟲眼鏡でさがすやうな細字でもつて、一面に書き綴つた小說は、地方の新聞社へ送られたか、勿論それは梨のつぶてであつた。遂に意を決して、ちぬの浦浪六氏に宛てゝ一篇の長篇小說を郵送したが、これ亦同樣何等の音沙汰が無かつた。この期間は、所謂一種の田舍の文學靑年の時機を過したのである。從つて、斯る無爲徒食とも見らるべき文學に耽溺の狀態は、決して親や親戚の者の悅ぶ筈はない。忽ち非常なる指彈を受け、近所からは物笑ひの種にされ、ぐうたら視されたので、氏も遂に家に居たゝまらず、書き溜めた原稿を行李に入れて、大阪へと出掛ける事となつた。時に年二十。

大阪に赴くや、同じ下宿に投宿してゐた一稅關官吏が、氏の文學熱に同情して、田舍で書き溜めた原稿をいきなり同所の一大書店駸々堂へ持ち込んで、一言の下に素氣なくはねつけられたるをもつて、大阪に於ける氏の生活は始まる。當時氏が鄕里から携へて來た金と云ふのは、僅かに三十圓何がしであつた。下宿にうかうかしてゐては忽ち路頭に迷はなければならん事を思つて、血眼で仕事を索した。文學をもつて身を立てよう望みは、一時さつぱりと斷念したのである。で、索し當てたのは、新聞廣告に載つてゐた大阪郵便貯金管理支所の書記補募集試驗と云ふものであつた。その試驗には、首尾よく及第して月給七圓に有り附くた。生活がやゝ安定するや、忽ち文學熱が勃興して、當時博文館で發行してゐた「少年文集」に投書を始めた。それは、首尾よく採用されて、誌上を飾る事となつたが、此所に期せずして、同じ雜誌の投書家達が知合ふ事となつた。卽ち同じく郵便局の書記補を勤めてゐる高須芳次郞、後の美術社々長で現在大阪の實業家である小林政治、一時一所に寄宿してゐた大阪實業學館の西村眞次、と云ふやうな連中であつた。同じ寄書家として名を名乘り合つたのが緣となつて、此等文學靑年等は、此處に親しき友垣を作るに至り、遂に「關西靑年文學會」なる物を起し、月刊雜誌「よしあしぐさ」をば發行するに至つた。この雜誌の會員は、七、八百名に及び、當時關西に於ける唯一の文學雜誌と推されるに至つた。そして、詩人河井醉茗も寄稿家

となり、與謝野晶子女史──當時の鳳晶子──の歌も、初めてこの雜誌上で世間へ初見參をしたのであつた。

據て、高須芳次郎氏は、新聲社の佐藤橘香氏──今日の新潮社々長佐藤義亮氏──を賴つて東都に出るに及んで、氏も亦東上の念已み難く、遂に廣津柳浪氏から手紙を貰つたのを機會に、思出多き大阪を後にして東京へと出て來る事になつた。時に明治三十三年。

出京後、先づ第一番に口を需めたのは、讀賣新聞社であつた。それは、同鄕友人の緣戚關係に當る島村抱月氏が斡旋紹介の勞を取つたのだが、成功しなかつた。其所に於てか廣津柳浪氏方に寄食して、今の小說家和郞氏兄弟の家庭敎師兼玄關番と云ふ事になり、傍ら早稻田專門學校に通學するに至つた。そして、その間にこつ〳〵と小說の筆を執つて、遂に大阪每日新聞の懸賞に當選して、一躍文名を天下に馳せたのは、彼の「無花果」の長篇小說、これに依つて、當時にあつては、可なり莫大の賞金が手に入つたので早速早稻田喜久井町の喜久井館と云ふ下宿に身を轉じ、專心早稻田專門學校に於ける文學科の講義に出席勉學した。當時の早稻田の文科では、坪內逍遙、高山樗牛、三宅雪嶺、島村抱月、金子筑水等の先生が、熱心なる講義で生徒を魅惑してゐたものである。

早稻田專門學校は、優等の成績をもつて卒業した。爾來春陽堂の「新小說」誌上に專ら小說を書いてゐたが、三十六年に結婚を爲し、三十九年六月に、基督敎研究の爲めに渡米する事となつた。

この頃、氏は人生に對して深い疑惑を抱くに至つた。小說家として文壇に雄飛する事、元より男子の事業として痛快には相違ないが、最つと強く親しく人生に接近し、人間を救ふと云ふ事業、卽ち牧師としての尊き任務に大きな意義を見出し、立派な牧師たるべく神學を修めに、人格の修養に、米國にと渡つたのであつた。けれども、プリンストン大學在學中に、スチルナー及びニイチエを耽讀するに及んで、强い衝動を受けた。更に紐育に於てナヂモワ夫人の「人形の家」その他のイブセン劇を見るに及んで、かつ然として魂の眼は開いた。卽ち「劇」に於て、初めて氏の天職と使命とを悟つたのである。

斯くて、英國に渡つて、倫敦に於いて、バーナード・シヨウに會見して、種々の深い暗示を受けた。次で、大陸に赴き、伯林に於て東勝熊氏の斡旋で日本人倶樂部に寄食しつゝ、レツシング座に於ける演劇の研究に耽る事が出來た。そして、この間、大阪の小林政治氏からの補助に依つて、生活と勉學とを助けられたのである。

明治四十二年十二月、西比利亞鐵道に依つて歸朝、翌春初めて社會劇「牧師の家」を草し、これを瀧川玄耳氏の斡旋で

東京朝日新聞紙上に發表したが、當時の讀書界、思想界は、これに依つて多大のセンセーションを起したものである。尙氏は從來春雨と云ふ雅號をもつて作物を發表してゐたのが、この作以後は斷然本名を名乘る事になつた。間もなくこの劇は、東京座に於て、「新社會劇團」の手で上演された。然し、當時の劇界は、まだ〳〵在來の歌舞伎芝居と新派劇とに醉つてゐた。斯る、理窟多き白を述べる動きのない芝居を何うして歡迎しよう。文壇側及び新聞社方面から可なりの聲援あつたにもかゝはらず、平土間に二三十人しか見物の居ないと云ふ日が續いた。この芝居は見事に失敗したのである。然し、日本に於ける新劇運動史の上から、又社會劇上演史の上からは、將にエポックメーキングの最大記錄に價する事は、何人も首肯する所であつた。この芝居に於て、氏は初めて舞臺監督と云ふ仕事にたづさはり、劇壇人としての第一歩を踏み入れたのである。卽ち、この芝居が松竹合名社の手に依つて經營されたものであつたから、氏も亦松竹の人として、暫く座附作者兼舞臺監督の經驗を嘗める事となつたのである。

明治四十四年末、「文藝協會」に於て、イブセンの「人形の家」を上演するに際し、氏は右飜譯者島村抱月氏と共に、右演出に對する監督を行ひ、引續き「文藝協會」に入つて監督及び教師の任に就いた。而して、大正二年十月、同協會が分裂して「藝術座」が起るや、抱月氏を扶けて、同劇團の幹部として、同八年一月松井須磨子の自殺に依つて解散される日迄、脚本提供者として、又監督者統率者として、奮勵努力新劇普及の爲めに偉大なる功績を示した。氏は同劇團の爲めに、幾多の飜譯劇を提供したけれども、特に、氏は、內容と形式に於て全く新しい社會劇を幾多提供した事に依つて、須磨子をして縱橫に腕を揮はしめ、日本新劇壇に新生命と新しき進路とを與へ、廣く日本新劇の革命を招致したと云へる仕事を爲した。

須磨子死後は、氏の本願たる劇作家の生涯に入り、「唯劇の爲の劇ではない、「人生」と「社會」との全圓の一環としての活力に溢れた「劇」の作家たらんとする本願である。それは難しい途ではある。然し踏み甲斐のある途だと信ずる」と述べてゐるやうに、社會劇に諷刺喜劇に史劇に圓熟した筆を揮つて、各種各樣の劇を發表して、日本劇界の爲に重きを爲してゐる。尙、氏は、早稻田大學に於て、希臘劇及び近代劇の講座を持つて、氏の篤實なる學究的方面を其所に披瀝してゐる。

因に氏の戲曲の著作年表を示すと左の通りである。

牧師の家（明治四十三年四月）
世　間（同四十四年）

ストライキの後（同）
幻（同）
嘲笑（大正二年）
剃刀（同三年七月）
飯（同四年四月）
眞人間（同五年二月）
爆發（同年七月）
帽子ピン（同六年）
白隱和尚（同年三月）
小山田庄左衞門（同）
肉店（同七年）
金力（同）
淀屋辰五郎（同年四月）
職業紹介所（同）
賭（同）
假地主（同）
井伊大老の死（同九年四月）
大鹽平八郎（同十年五月）
地震（同十一年一月）
錢屋五兵衞父子（同年四月）
地下室（同十二年一月）
税（同年四月）
火（同年五月）
原始時代（同十三年一月）
牛と鬪ふ男（同年九月）
終點（同十四年一月）
無籍者（同年二月）
象使ひ（同年九月）
三人（同十五年一月）
道化役者（同年三月）
嶋のアダム（昭和元年）
支那の王女（同年十一月）
檻の中（同二年一月）
獅子に喰はれる女（同年二月）
塵芥（同年四月）
星亨（同年七月）
豫言者日蓮（同三年一月）
頭（同）
鬼ヶ嶋から來た男（同年三月）
大隈重信（同年六月）

解説

「井伊大老の死」

この作品は、氏の文化史的史劇の代表物であつて、井伊其の人の性格や心理狀態を、氏一流の見解の下に描いたと云ふ以外に、維新時代の文化史背景を可なり精細に書いてある。氏の物では、最も力を籠められた作品である。大正九年四月に「中央公論」誌上に發表され、その七月に歌舞伎座に於て、市川左團次、中村歌右衛門、市川猿之助等に依つて上演され、大成功を收めた物である。引續き澤田正二郎一派の「新國劇」が、關西に於て上演を爲し、同じく大成功を得た。

「大鹽平八郎」

德川期中のモンスターの一人たるこの人物の擧兵の動機から當時の社會狀態を細叙し、更にその失敗の經路を描いたる、矢張り一種の文化史的の史劇で、氏の傑作に屬する。大正十年五月「新小說」誌上に發表し、大正十四年九月に、澤田正二郎一派の「新國劇」が新橋演舞場で上場成功を收めた。又その後大正十五年十一月に「築地小劇場」が演出してゐる。

「剃　刀」

社會劇として鋭く心理解剖か施されてある。更に又非常に舞臺效果のある作品で、英譯されて、米國の舞臺でも上演された物である。大正三年七月に「早稻田文學」誌上に發表され、その年の九月に、帝國劇場に於て、「藝術座」の松井須磨子、田邊若男等に依つて上演され、好評を博した。

「飯」

この作品も亦社會劇として峻烈な社會批判の含まれた物、大正四年四月に「早稻田文學」に發表され、翌五月帝國劇場に於て、「藝術座」に依つて上演された。

「帽子ピン」

社會劇と云ふよりは人情劇と云つた方が可いかと思はれる程に、男女の感情の烈しき爭鬪を示した物である。大正七年十月、明治座に於て、「藝術座」に依つて上演された。

「星　亨」

明治の慧星と云はれるこの大政治家を解剖批判すると同時に、その當時の思想や政治狀態を、議會をもつて又は演說會場をもつて、頗る巧妙に描寫されてある。昭和二年七月に「改造」に發表されて、その八月に「新國劇」に依つて帝國劇場で上演され、澤田正二郎の星亨は大成功を得たのである。

「獅子に喰はれたる」

社會批判の十分加はつた作品には相違ないが、輕業師の生活を、樂屋から面白く描き出した所が、舞臺效果を非常に擧げてゐる。昭和二年二月に、帝國劇場の女優劇に於て、森律子、松本幸四郎、伊井蓉峰その他に依て上演された。

島村抱月篇

小傳

名は龍太郎、明治四年正月十日に、島根縣那賀郡久佐村に生れた。父は佐々山一平、母はちせ、その長男である。小學校を終つて、濱田町の病院又は裁判所等に働いてゐたが、濱田町の裁判所檢事島村文耕氏から學資を給せられる事になつて、明治二十三年二月に上京東京物理學校、日本英學院、商業學校等に通學した。翌年六月に、檢事島村文耕氏の養子となり、爾來島村姓を冐す事となつた。その年十月に、早稻田專門學校の文學部に入り、二十七年七月に第二回生として首席で卒業した。

　早稻田文學の記者となり、傍ら、學校から發行する講義錄文學科の講師として執筆をしてゐた。翌年いち子夫人を迎へた。三十年四月に、後藤宙外、小杉天外、伊原靑々園水谷弓彥の諸氏と「新著月刊」なる雜誌を發行して、創刊號には、小說「白あらし」を揭げた。更に翌年同誌に小說「月がさ日がさ」を載せた。

　三十一年に讀賣新聞の三面主筆記者として入社、一年間新聞紙上に筆を執つた。九月からは、早稻田專門學校文學科の講師となり、美辭學、支那文學史、美學史等を講じ、傍ら讀賣新聞の月曜附錄を主宰してゐた。翌年書肆三省堂の編輯部に入り、その翌年には、後藤、伊原の二氏と共に合著「風雲集」を出した。三十五年一月に「新美辭學」を著はし、三月には海外留學生として英獨に遊學する事となり、日本を出發十月に牛津大學に入學した。翌年十月には獨逸に渡つて、伯林大學に入つた。三十八年九月歸朝し、早稻田大學の文學科で、美學、英文學史、歐洲近世文藝史、文學概論等を講じ、傍ら東京日日新聞の月曜文壇を主宰した。翌年一月に再興された「早稻田文學」の主幹となり、初號に「囚はれたる文藝」を揭げて、當時の文壇に一大センセーションを與へた。更にその四月號には「沙翁の墓に詣づるの記」九月號には「ルイ王家の夢の跡」を發表した。短篇小說集「亂雲集」「滯歐文談」等を、四十年二月には飜案小說「其の女」を出版した。

　四十一年一月の「早稻田文學」に、「文藝上の自然主義」五月に「自然主義の價値如何」九月に「藝術と實生活の間に橫はる一線」を發表したが、何れも自然主義に對する徹底した論評又は研究であつたのである。これから、日本の文壇では、自然主義論が八釜しくなり、新生命を持つた文學が現はれる事となつた。

　四十二年二月に、「文藝協會」の指導講師となつて坪内博士の事業を助けた。四十三年一月にイブセンの「人形の家」

を飜譯して、これを、早稻田文學に掲げた。この月に肋膜炎を病んで、相州小田原に轉地した。四十四年一月に、戲曲「淸盛」を「早稻田文學」誌上に發表、續いて七月には「海濱の一幕」を、四十五年一月には「復讐」を、十月には「競爭」を、夫々「早稻田文學」に掲げた。その間は、ズーデルマンの「故鄕」メーテルリンクの「ペレアスとメリザンド」を譯出した。又四十四年五月には、文部省の文藝委員に任命された。大正二年四月に「文藝協會」を辭する事となつたが、同時に中村吉藏氏も辭任し、俳優の大部分亦脫退して、此所に「文藝協會」は崩壞を見るに至つた。

　大正二年九月に、松井須磨子を中心として「藝術座」を起し、メーテルリンクの「モンナ、ヷンナ」を譯出して、それを第一回興行に上場した。そして、早稻田大學英文學科の教務主任を辭する事となつた。「藝術座」の成立以來は、それを率ゐて、內地は愚か滿洲西比利亞朝鮮に迄も巡業をする事となつたので、脚本の創作又は飜譯は發表したが、硏究的の論文は殆ど筆にする暇が無つた。文學者としての氏の風貌を、教壇上に於て永久に見る機會を無からしむるに至つた。大正四年八月に、牛込橫寺町に「藝術倶樂部」の竣成されるや、家庭を去つて、此所に居を卜し、多くは旅に日を過す事となつた。大正七年十月末風邪に冒されたが、押して芝居の稽古を見てゐる內に、肺炎に變じ、十一月五日未明に永眠した。

　「藝術座」を率ゐて旅興行をする事に寧日なく、餘りに多忙なる日を送つた爲めに、氏の尊き硏究は中絕されたが、然し、新劇を普及せしめた功績は、實に偉大なる物であつた。

解說

「淸盛と佛御前」

明治四十四年一月に、「早稻田文學」に「淸盛」を發表したが、大正五年二月に、それを改作した物が これである。以前の物は、淸盛の人物解剖に力點を置いたが、この作に於ては、佛御前と云ふ一女性を現はして、これと淸盛とのストラグルに興味を置き、力點は寧ろ佛御前の方に來てゐるやうだ。とに角、この男女兩性の對照を種々の方面から描寫し、加ふるに、艷麗縟の如き自然描寫をもつて人間達を色彩つてゐる。大正五年三月、帝國劇場に於いて「藝術座」が演出した。

「赤と黃の夕暮」

　大正三年七月、「中央公論」誌上に發表した物、夕暮の色彩を基調として、その中に美はしき戀が描かれてゐる。一種の氣分劇であると共に、人生觀照上の氏の態度を、最も

よく示した物である。尙これが上演を遂に見る事の出來なかつた事は、女主人公が尼であることが、女優をして演出を困難ならしめたからと思ふ。

「運命の丘」

明治四十四年四月、「早稻田文學」誌上に發表、彼の大奈翁がモスクワ侵略に際して、市街を火とされ、雀が丘に於て奈翁が運命を嘆ずると云ふ歷史的の大事實を基として、英雄の心に宿る悲哀と云ふ物、奈翁の持つ藝術的才能の片鱗等と云ふ物を、細微に描寫されてゐる。舞臺效果の可なり豐かな物であるにかゝはらず、「藝術座」が敢て公演をしなかつたのは、女性が一人も此れに出場しないからで、大正九年に至つて、「先驅座」が初めてこれを試演に上場したのであつた。

秋田雨雀篇

小傳

明治十六年二月二日、青森縣南津輕郡黑石前町に生れた。父はその以前から失明の不具者であつた。家貧、困窮の間に育つた。三十一年春黑石高等小學校を終へ、青森縣第一中學校に入つて、三十六年に卒業、續いて出京早稻田大學文學科に入り、四十年に卒業した。

第一期「新思潮」の記者となつたのが、文壇に入る第一歩であつた。四十年に處女小說「同性の戀」をば「早稻田文學」誌上に發表した。四十二年に處女戲曲「記念會の前夜」を、「早稻田文學」に發表、四十四年に戲曲と小說集「幻影と夜曲」が出版された。翌四十五年には戲曲集「埋れた春」の發行を見るに至つた。「自由劇場」が「緣三の死」を上場して、氏の文壇的地位は確立されるに至つた。

「藝術座」が出來るに到つて入つて其所の文藝部委員及び舞臺監督となり、又研究生の教導等の仕事を爲した。大正三年から印度哲學に興味を覺え、特にウパニシヤツトの研究に沒頭して、それ以後の作品には、然うした思想の影響が窺はれるやうになつた。ワシリー・エロシエンコとその頃知合となり、エスペラントの研究に入つた。大正三年に女兒を失ひ、大正五年には父の入獄を見る等、氏の精神上には痛切な打擊がその頃與へられた。然し、六年に至つて、父は出獄する事が出來た。七年には戲曲集「三つの魂」が發行された。

大正八年父の死去を見たが、その頃から氏は社會運動に入るべき決心を持ち、爾來、筆に口にその方面の跳躍は目覺しき物がある。九年に戲曲集「佛陀と幼兒の死」を出し、「先驅座」なる新劇團を組織して、豫て稱道する小劇場運動の實際運動に入る事となつた。十年には「國境の夜」を、十

四年には「骸骨の舞跳」を出版した。そして、昭和三年春露國へ日本文壇の代表者として赴き、露西亞文學及び彼の地の劇界を親しく研究すると同時に、日本文學の紹介に努め、その年の六月に歸朝した。

解說

「埋れた春」

大正三年五月、有樂座に於いて「美術座」が上演した。氏の詩情が最も美はしく表現された物で頗る好評を博した。昭和三年春「築地小劇場」がそれの再演を行つた。

「國境の夜」

美しき詩趣と、社會意識との交叉した物、大正十年五月に、明治座に於て「新劇座」が上場したが、爾來各種の小劇場運動者は、爭つてこれを上演するに至つた。

「手投彈」

大正十四年二月、同志會館に於いて「新劇協會」が上演した。社會運動者としての氏の抱負を物語る物である。然し、全體の基調は何所迄も詩である。

「アスパラガス」

大正十四年二月、みつわ會館に於いて「戲曲座」が上演。矢張り社會問題を扱つた熱烈な感情の含まれた物である。

「骸骨の舞跳」

大正十二年四月、土藏劇場に於いて「先驅座」が上演。社會問題を最も痛烈に扱つた物で、氏の最近の思想や態度を、最もよく示してゐる物である。

島村民藏篇

小傳

明治二十一年七月二十二日、神田岩本町に生る。父は元淺草田原町の人であつたが、母の處に入つた者である。母家は、德川末期から神田岩本町で商業に從事してゐたが、祖父の代から毛織物商を始めたのであつた。

神田千櫻小學校に學び、開成中學校に進み、終つて早稻田大學英文科に入り、其所を終つて、帝國大學獨文科にも學んだ。

大正十年秋、最初の戲曲集「夜叉丸」を發刊、劇作家として重視されるに至つた。然し、一面には演劇の評論と研究とを怠らず、幾多の論文が發表されてゐる。

大正六年に、早稻田大學獨文科敎授となり、主として獨逸文學を講じ、傍ら演劇の講義を爲し、十三年に其所を辭して專ら創作の筆を執つたが、昭和三年春から日本大學文學科の講師となり、藝術論を講じてゐる。

大正六年頃から文學上の兩性問題に注意を拂つて、それに關する創作及び評論を發表するに至つた。又子供の藝術に對しても興味を持ち、大正十四年春には、兒童劇集「踊り熊」を發刊した。

解説

「足利尊氏の惱み」

昭和三年三月、明治座が再建築をして華々しく開場式を行つた時、この作品は、その一番目狂言として撰ばれ、左團次の尊氏で上演された。人間としての尊氏及び當時の公卿と武家との對比を、文化史的に觀察描寫したものである。

「城」

大正十年十一月、明治座に於いて、喜多村、小堀、藤村等の新派俳優に依つて上演。兩性問題を取扱つた物で、犀利なる心理描寫が施されてある。

「阿修羅」

大正十年十月に、「早稻田文學」に揭げられた物で、矢張り兩性問題に對する深き研究的態度の窺はれるものである。

藤井眞澄篇

小傳

明治二十二年二月五日に、備前國岡山町北方二里の山村内の農家に生れた。二歲の時に父を亡くし、十九歲の折母を失つた。又二十三歲の時姉をも失つた。斯く、孤兒として、可なり不幸なる生涯を前半生に送つたのである。

土地の小學校を濟ませて、岡山市の關西中學校に學び、終つて出京早稻田大學に學び、大正二年に卒業直ちに「中央公論」記者となり、三年間働いた。

氏は早くから社會意識強く、藝術至上主義に反感を持ち、民衆の爲めの藝術を唱へて、遂に民衆藝術研究會を起し、雜誌「黒煙」を獨力發行して、所謂プロレタリヤ文藝の先驅を爲した。大正十二年の震災後には、「民衆の友社」を作つて、依然その運動を續け、現在も府下の寒村に居をトして、其所で土地の青年達を藝術的に訓練する事を怠らない。日本映畫俳優學校に教鞭を執り、その校と共に一時京都に轉住したが、今は戻つてゐる。

「民本主義者」と云ふ戲曲集を出したのが最初で、引續いて「妖怪時代」「最初の奇蹟」「新魔王」等の戲曲集を出し、長篇歷史小說「超人日蓮」の著もある。又「戲曲の創作と

構想」と題する著述もある。

解　説

「妖怪時代」

氏の獨特な社會觀人生觀藝術觀の窺はれる物で、超人間的な特有な人物が縱横に跳躍する物である。

「狐の嫁入り」

これ亦社會問題を巧みに、他に寓意して、怪人物を跳躍させた物である。

「孤獨の底の日蓮」

日蓮の研究者たる氏が、日蓮を一個の社會改造者として觀察を下した物、人間としての日蓮がよく描かれてゐる物である。

「超人倶樂部」

各種各様の近代人を縱横に批評し、嘲笑した物で、好個の諷刺喜劇と云はれてゐる。

「スター生活」

映畫劇に興味を持ち、その事業に關係を持つてから、日夜見聞する映畫スター其物を、巧みに描寫すると同時に、強き社會意識を其所に含めてある。昭和二年十月「演劇改造」誌上に發表。

編輯校訂

吉田甲子太郎

佐藤十三郎

清水義政

日本戯曲全集・第四十三卷
現代篇第十一輯・第五回配本

著作權者代表者檢印

禁無斷上演

昭和三年七月十五日印刷
昭和三年七月十八日發行
（非賣品）

著作者　中村吉藏
　　　　島村抱月
　　　　秋田雨雀
　　　　坪内士行
　　　　島村民藏
　　　　藤井眞澄
發行者　和田利彦
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋六五二
振替東京一四四六一一七五

東京市本郷區眞砂町・日東印刷株式會社印刷